

少女(仮)の生活

YUKIもと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突然目を覚ました少女（仮）は自分が誰なのかも分からないまま生きようとする。

頭にある覚えの無い知識や情報に戸惑いながら行動を開始。

彼女？の生活をただ描く物語です。

大きな山も谷もなく淡々と進みます。

大きく時間が飛ぶ事があります。

細かく時間が飛ぶ事もあります。

主人公は 転 生 者 ではありません。

必須タグは念のため付けていたり、投稿前の内容に適応されている事があります。

タグは増える事があります。

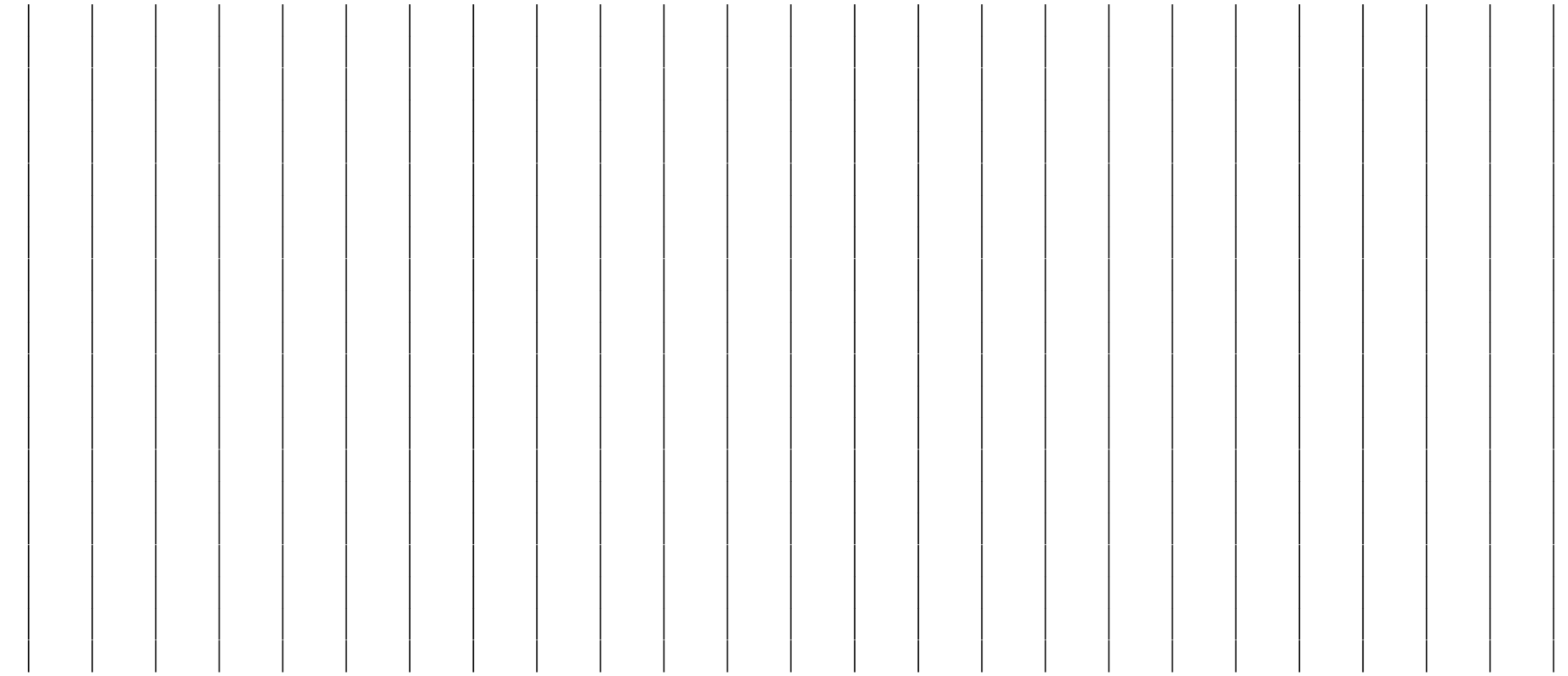
※この作品はフィクションです。実在の人物や団体などとは関係ありません。

目次

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 0 2 0 | 0 1 9 | 0 1 8 | 0 1 7 — 0 2 | 0 1 7 — 0 1 | 0 1 6 — 0 2 | 0 1 6 — 0 1 | 0 1 5 — 0 3 | 0 1 5 — 0 2 | 0 1 5 — 0 1 | 0 1 4 | 0 1 3 | 0 1 2 | 0 1 1 | 0 1 0 | 0 0 9 | 0 0 8 | 0 0 7 | 0 0 6 | 0 0 5 | 0 0 4 | 0 0 3 | 0 0 2 | 0 0 1 |
| 373 | 354 | 334 | 322 | 309 | 305 | 295 | 276 | 256 | 231 | 195 | 179 | 169 | 145 | 119 | 108 | 99 | 86 | 54 | 49 | 44 | 36 | 28 | 1 |

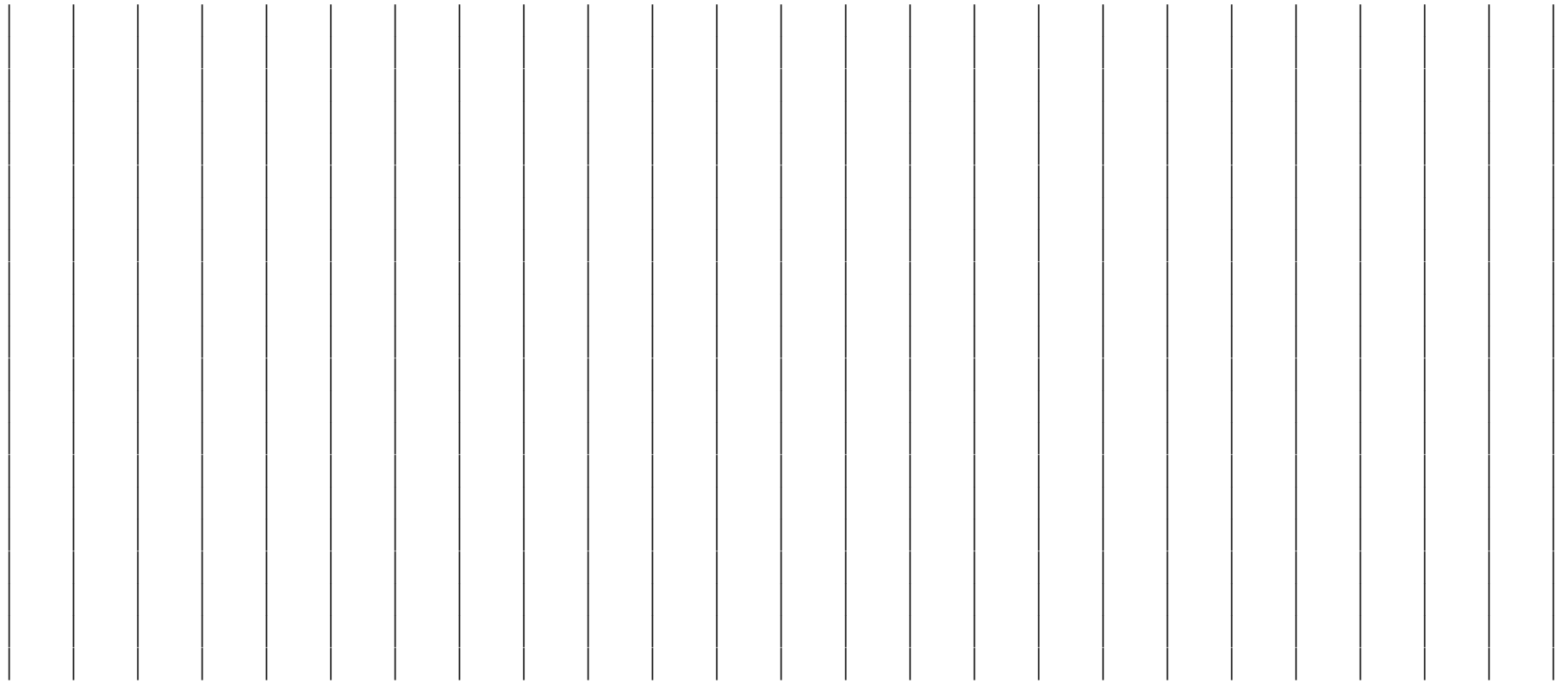
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | |
| 2 | 2 | 2 | 1 | 0 | 9 | 9 | 7 | 7 | 7 | 6 | 6 | 5 | 5 | 4 | 4 | 4 | 3 | 2 | 2 | 2 | 1 | 1 | 1 | |
| 0 | 0 | 0 | | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 3 | 2 | 1 | | | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 3 | 2 | 1 | 1 | |
| 641 | 633 | 626 | 612 | 606 | 600 | 584 | 578 | 566 | 553 | 537 | 528 | 513 | 496 | 487 | 481 | 471 | 458 | 449 | 442 | 429 | 413 | 408 | 397 | 383 |

0
5 5 5 5 5 5 5 5 5 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4
2 1 1 1 1 0 0 0 0 9 9 9 8 8 8 7 7 7 7 6 6 6 5 5
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
0
1 4 3 2 1 4 3 2 1 3 2 1 4 3 2 1 4 3 2 1 3 2 1 3 2



962 957 951 945 938 932 926 919 912 907 902 897 891 885 880 875 870 864 857 851 844 836 830 826 820

0
7 7 7 6
1 0 0 9 9 9 8 8 8 8 7 7 7 6 6 5 5 5 5 4 4 4 3 3
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
0
1 2 1 3 2 1 4 3 2 1 3 2 1 3 2 1 4 3 2 1 3 2 1 3 2

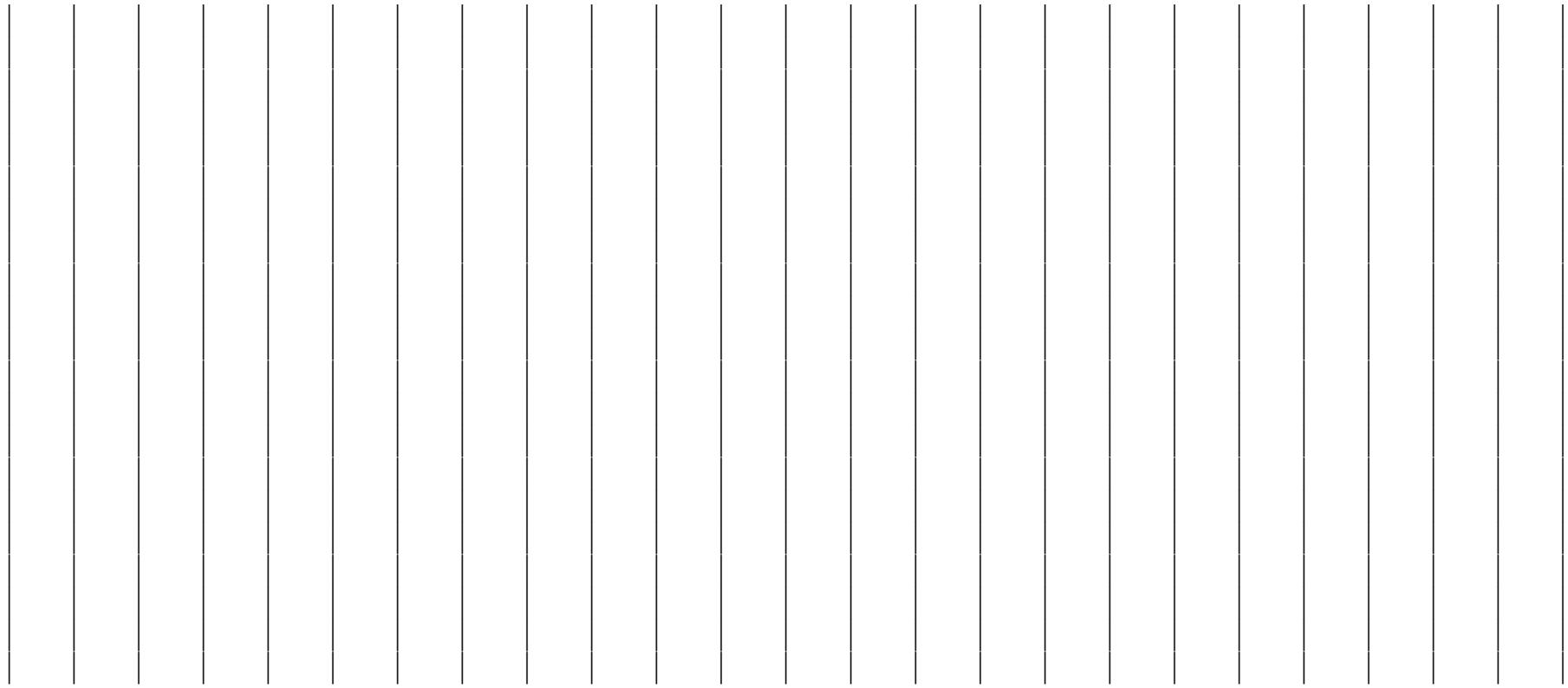


1304129812891277126912611252124512381229121812101202119411881180117311671161115311461137113111241117

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | |
| 6 | 6 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 4 | 3 | 3 | 3 | 3 | 2 | 2 | 1 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| 2 | 1 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | | 4 | 3 | 2 | 1 | 2 | 1 | 2 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

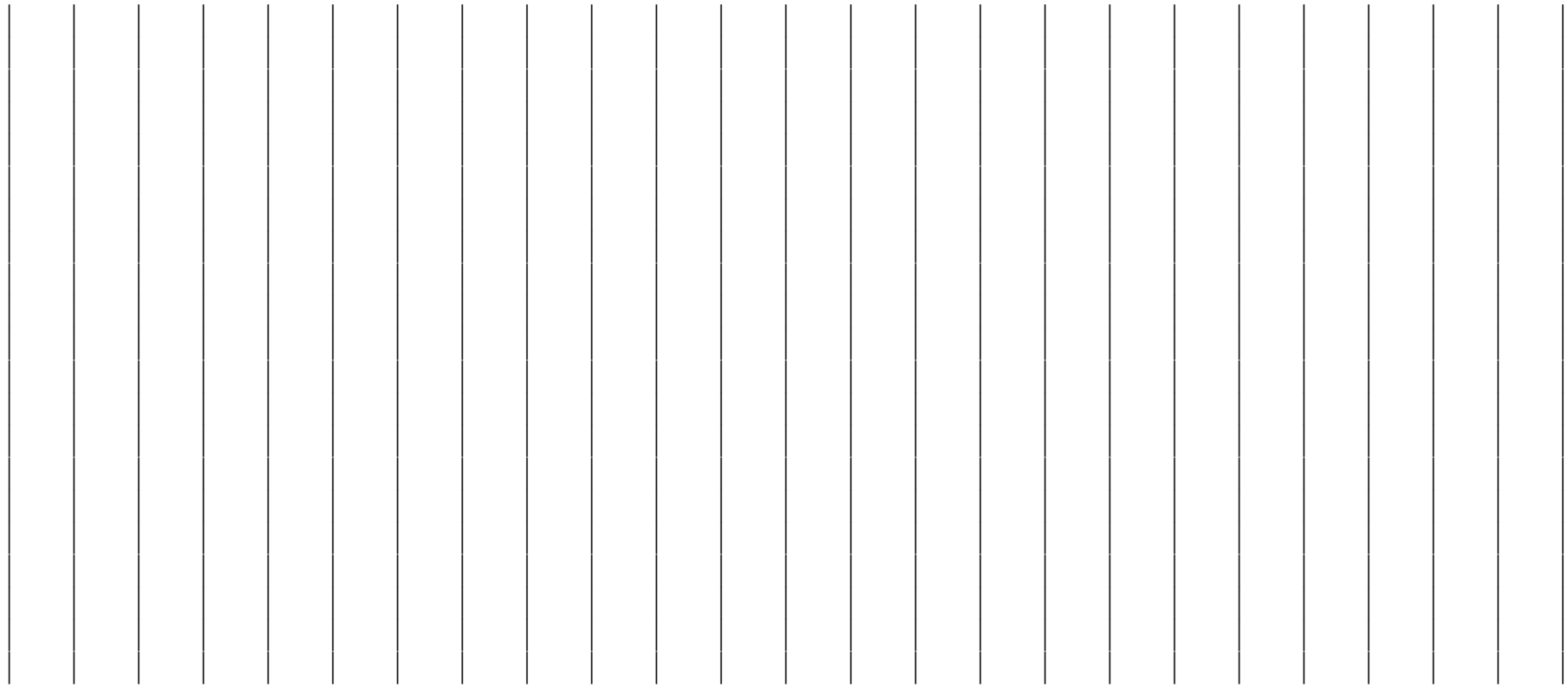
1483147514661460145514491442143414271422141514091402139513871378137013621354134713401332132513191311

0
8 8 8 8 8 8 8 8 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7
3 3 2 2 1 1 0 0 9 9 9 9 8 8 8 8 7 7 7 7 7 7 7 6
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
0
2 1 2 1 2 1 2 1 4 3 2 1 5 4 3 2 1 7 6 5 4 3 2 1 3



1671166416561650164416361628162116131606159815921585157715701564155315471534152715211513150615001490

0
8
9 9 9 8 8 8 7 7 7 7 7 7 6 6 6 6 6 5 5 5 4 4 4
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
0
3 2 1 3 2 1 7 6 5 4 3 2 1 6 5 4 3 2 1 3 2 1 2 1 3

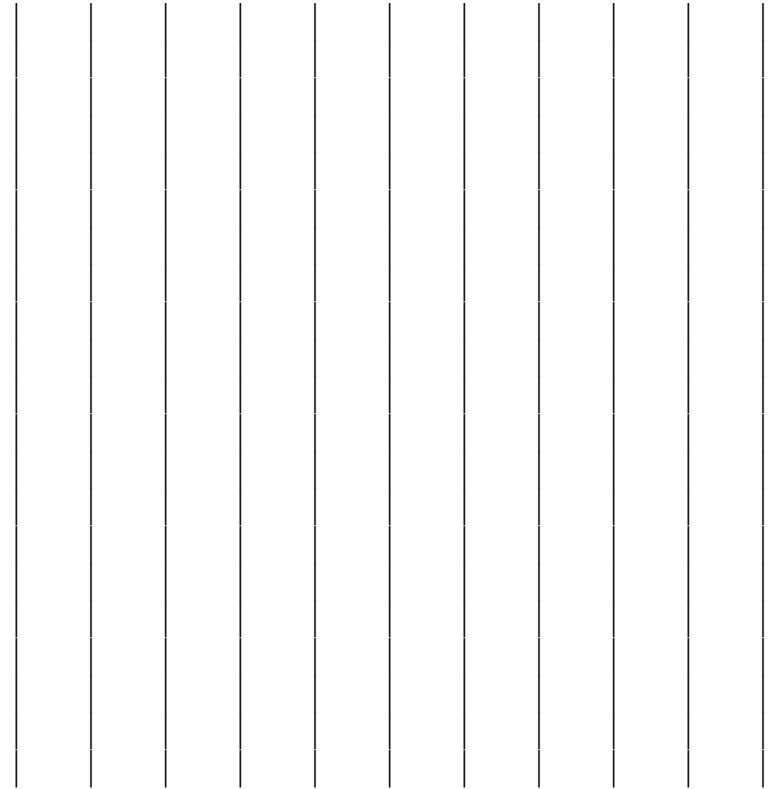


1863185618501839183118231816180817991789178117751768176317561750174017331725171817101700169216851678

0
9
3 3 3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 1 1 1 1 0 0 0 0 0 0 0 8
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
0
9 8 7 6 5 4 3 2 1 4 3 2 1 5 4 3 2 1 6 5 4 3 2 1 4

2069205820482038203120262017200820011995199019811972196119531943193619281920191419051898188718751869

0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9
4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 3
| | | | | | | | | | |
1 0 0 0 0 0 0 0 0 0 1
0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0



21582152214521372129212021102103209720862077

……？

私はどうやら仰向けに寝ているようだ、私は周りを見渡した。光が全く無いその空間は広く少し高い天井が有り、頭側に壁がある。

地面を見ると砂の地面が見える。洞窟だろうか？

……いやそれよりも。

どういう事だ？

気が付いたのがついさつきで、気が付く前の事が分からない。

どうしてここにいます？私は誰だ？なぜ頭に覚えのない知識や情報がある？

これからどうしようか……。

訳が分からず横になったまま途方に暮れる私、しかし頭にある知識から生きる為の情報を探し出す。

自分の事も頭の知識も後回しだ、生き残るには水と食べ物がある。

私は起き上がり改めてあたりを見る、相変わらず光一つ見えない暗闇だ。

あてがある訳では無いけど壁沿いに進んでみるか……。

とりあえずここにずっと居てもどうしようもない。

早く水と食べ物を見つけないければ死んでしまう。

私は壁を右側に見ながら歩き始めた。

それなりの時間歩くと砂だった地面が岩になり、左側に広がっていた空間が無くなり迷路のようになった。

道中には特に何もなかった暗闇が広がっているだけだった。

そう簡単にいかないとは思っていたけど、このまま出られないとまづい事になる。

動ける内にかしななければ……動けなくなってしまうたらも

うどうにもならない。

自分が誰なのか、ここがどこなのかも分からないうちに死にたくはない。

幸いまだ全く疲れらしきものは感じない、しかし念の為に少し休憩する事にする。

私は壁に背を預け座り込む……そうだ、知識に何か役に立つ物は無いだろうか。

頭の中を数分探り、私は役に立ちそうな知識を見つけた。

風の流れるを感じることが出来れば風上を外につながっているようだ。

取り敢えず風に注意しながら進もう、他には何か……。

風に注意しようと決めながら知識をあさっていると気になる知識を見つけた。それは「多くの生物は光一つ無い場所では物が見えない」という物だった。

……見えるな。

私には普通に周囲が見えている、暗いという事は分かるのに普通に見える。

どうやら私は多くに含まれない生物のようだ。

しかしこの状況ではありがたい。何も見えなければそれこそそのまま死ぬか、何も見えない状態で彷徨うしかなかったはずだ。

私が多少変わった存在である可能性が見えたが……出来る事が多いのは悪くはないだろうし休憩はここまでにして移動を再開しよう。

早く落ち着ける状態にまで状況を改善し、知識や私自身の事をしっかりと確認したい。

私は立ち上がり再び歩き始めた。

……おかしい。

私は大して変わり映えない洞窟を歩きながら考えた。

というのも、体感だが相当な時間をさまよっている筈だ。空腹や喉

の渇き、疲労なども知識として頭にあるが特に体に違和感はない。

知識には食事、つまり外部からエネルギーなどを得る事なく生存出来る生物は居ないとあるが……。

私の知識に私の事が無いのはどういうことなのか……私と知識は元は別の物だったりするのだろうか？

知識の中を探せば私自身の事も分かるのではないかと期待していたが、どうやら無理なようだ。

私が本格的に何者なのかわからなくなってしまった。
今まで気が付いていなかったが私は寝てもいない。

睡眠の事をすっかり忘れていた。忘れて居れば眠くならないなどという事は無いだろう、つまり私は睡眠も必要無いという事だ。

暗闇を問題にせず、食事も水も必要無く、疲れもしなければ睡眠もしない。

それは生物なんだろうか、少なくとも普通ではない事は分かる。
知識に無いだけでそういった生物もいるのかもしれない。

……どうやら私はこのままでも死ぬ事は無さそうだ。

と言う事は焦る必要は無くなった訳だ、ゆっくりと脱出しようか。
そうだ、時間に追われる事が無くなったのなら一度知識の事を確認しておくか。

こうして暗い洞窟の中、私は自分の知識を確認し始めた。

……こんな所か、すっかり時間を忘れて確認してしまった。

現時点で分かった事は……まず知識は大半が完全でない事。例えばある物の名前や用途、使い方は分かっててもその作り方や材料が分からなかったり、といった具合に知識や情報に抜けがあるようだ。

そしてこの知識がもともと私の持っていたものではない事。

これは私がその内容を知らないと言う時点で予想していた。どうして私の頭に中途半端な状態で存在するのか不明だが、これも私の為になるなら無いより有った方が良いだろう。

この知識がすべて正しいとも言えないが、試してみたい知識もあった。

それは魔法や錬金術、魔道具作成などだ。これらの知識は基礎がしつかりと存在している物と半端な物があつたが、参考にすれば使えるようになるかもしれない。

ただ……何をするにしてもこの洞窟から出なければ難しい。ここで一生を終える気はない、必ず外に出る。

本当に洞窟かも分からないからな……外なんて無くて世界全体がこんな感じだったりしないよな？

浮かんだ疑問を抱きながら私は歩き続けるのだった。

知識の確認をした時からどれほどの時間が経っただろうか。

迷路のような洞窟を歩き回り続ける道中、汗もかかない事や排泄もしないことに気が付いた。

そして恐らく私が私の知らない何かを必要としていたりしない限り、何もしなくても問題無く生活出来る事も分かった。

自分の多少おかしな特徴に支えられ、さらに歩き続けた私はわずかに流れる風を感じた。

ようやく外に出られるかもしれない。

風が流れてくる方に向かう。進むうちに迷路状だった洞窟は少いづつ一本道になりさらに進むと、わずかに光が見えた。

私は光に向かい歩みを進める。
すると少しずつ光が強くなるにしたがって周囲が暖かくなってきているのを感じた。

洞窟内はだいぶ寒かったようだ。

今まで気にならなかつた事を考えると気温の変化も私には意味がないのかもしれない。

そして私は外に出た。

外に出ると広がる青空と眼下に見える広大な森が目に入った、少し

遠くの森の中には川があるのが見える。

どうやらそれなりの高さの丘の上に出たらしい。私は丘の上に立ち世界の姿を眺めた。

……いい景色だな。

青々と茂る森。

日の光を反射しキラキラと輝く川の水面。

遠くにうっすらと見える山脈。

瞳を上げれば月が3つ見える。

大きな月が1つと、小さな月二つだ。

しばらく景色をただ眺めていた。こういったものを美しいと感じる事が出来る自分にどこか嬉しさを感じた。

十分に景色を眺めた後、これからどうするかを考えることにした。何しろ多くの生物が生命を維持するために必要な事を私は必要としていないようなので、目覚めた当初の目的である食料と水の確保は必要なくなった。

となると魔法、錬金術、道具作成辺りにさっそく手を付けてみるのも良いかもしれない。

きつと何かの役に立ってくれるだろう。

まずは見える川の傍まで移動して落ち着くことにしようか。

丘も下れない坂ではないし、一直線に川を目指すか。

私は目的の川を確認し真っ直ぐに歩き出した。

短い草や名前が分からない花などが所々に生えていてほのかに土の匂いがする。

時折暖かい風が大地を撫で、草花を揺らしている。

辺りにはさまざまな大きさの虫達が空にも地面にも無数に飛び回っている。

この虫達が私が初めて見た私以外の生物か。

特に苦も無く丘を下り平原へたどり着いた。所々に木々が生え、大きな物から小さな物まで岩がまばらに転がっている。

私の腰ほどの高さの草を踏みしめて進むと、空を鳥のような生物が群れを成して飛んでいる姿が見えた。

ほどなく平原と森の境目までやってきた。それなりに深い位置に川があつたはずだ、このまま真っ直ぐ進めばぶつかるだろう。

森に入ると木々の枝葉が光を遮り薄暗くなった。僅かな木々の隙間から日が差しこみ光の筋を作り出している。

森の中には様々な生物がいた。道中の丘や平野など比べ物にならないほど様々な種類の植物、茸、昆虫達。

さらに名前の分からない小動物達の中にリスのような小動物も見かけた。

ある程度進んだころふと気が付く。

……大型の肉食獣もいる可能性がある。

危険かもしれないが……もうかなり入り込んでしまっている。

色々と生物として必要な物がなくなっても、私自身が弱かつたらどうにもならない……殺されたらお終いだ。

大型肉食獣の知識はあつたのにここまで来てしまった。ただ……なんといえばいいのかわからないけれど、知識に様々な危険な動物の知識はあつた。しかし……どの動物を見ても何故か脅威に感じなかった、ハムスターもドラゴンも同じように感じた。

今からでも注意して進もうと考え、注意をしながら進んでいると周囲がさらに暗くなって来た……どうやら日没が近いようだ。

深くなつて行く森の中を歩き周囲が真っ暗になった頃、川の流れる音が聞こえ始めた。

それからしばらく歩くと森が途切れて視界が開けた、月明りで照らされた広場に川が流れている。

かなり暗かったと感じたのは森の中に居たからか。

この辺りが丘の上から見えた辺りのはずだ、もし違ったとしてもここで十分だ。

さて、ここで落ち着く訳なのだが……何をすればいいのか分からない。

衣食住と知識にはあるが食べ物はいらないし、寒い洞窟を延々さまよっても問題ないのだから家などいらないだろう。

服も……汗をかかないなら必要ないのではないだろうか。

まずは便利そうな魔法を使えるか練習してみるか……。

何もいらぬ事に気が付いた私は知識にある魔法の練習方法を試す事にした。

魔力がないと使えないらしいが、もし私に魔力が無いならば諦めるしかない。

川べりに座り魔力を感じる訓練を始める。さて、出来るかどうか。

川のせせらぎと虫の音だけがする時間が続き、空が明るくなり始めた頃。

体からにじみ出る魔力と周囲にある魔力を見る事が出来るようになった。

知識にある通りだからこれが魔力のはずだ。思ったより簡単に出来たが……しかしこれで魔法が使える事が分かった。

次は実際に魔法を発動させる練習だ。

おすすめは土か水の魔法らしい。扱いやすく制御を失敗しても被害が少ないようだ。

というわけでまずは土を選び、土を固める魔法の練習をしよう。

そう考えながらふと水面を見ると少女が映っていた。長い黒髪、黒い瞳、服はワンピースという物に似ている、黒いワンピースだ。

そういえば自分の姿を確認した事は無かったな。

川に近寄ってじっくりと見てみる……見た目は知識にある人間にそっくりだ。

今までの事を考えると人間にそっくりな何かだとは思おうが。

眠そうな目をしているな。寝る事はないのに、肌は色白で身長は小さいな……130cmほどしかないんじゃないか？

それに私は女だったのか。まったく気にしていなかったが自分の事を自然と私と言っていたし……声も涼しげな柔らかい声をしているしな。

……よく見ると埃が付いているか？私の体からは汚れは出なくても周りの汚れはついてしまうのか。

よし……川で体を洗ってみるか。濡れたまま過ごす事になるが気温も暖かいし、何より私の体ならば問題ないだろう。

私は流れが緩やかな所を探してワンピースを脱ぎ川に入った、自分の体を見て違和感を感じる。

……ん？なんか違和感があるな……知識にある人間とは違うような……いや、私は人間に似ているだけで違うようだし当然か？

すぐに違和感の正体に気が付いた。私の体は乳首や性器が付いていないようだ、指で確認したが肛門も無かった。

知識に似たような物があつたような……そうだ、マネキンだ。生身のマネキンとでもいうべきか、見た目は女に見えるが正確には無性なのだろうか。

どうにか出来る事ではないだろうし、早く体を洗って魔法の練習に戻ろう。

……ん？服はどこに行った？

置いたはずの場所に服が無く、黒い霧のような塊が漂っている。そしてその霧は私に吸い込まれた。

一体何なんだ……。

私の体に吸い込まれたという事は……私自身の問題なんだろうな。自分の体の事を自分で分からないのをこのままにしておく訳にはいかないか。

魔法の練習は後だな。

まずは自分に何が出来て何が出来ないのか。この体はどういったものなのか……出来る限り調べる必要があるだろう。

知識も活用して色々な事を試してみよう。

時間の余裕はある、何も必要としない体は便利だ。

私は黒いワンピース姿で広場から少し入った森にある木の前に立っていた。

……よし。

私は意識を自分の髪に集中させる、数本の髪が伸び動き出した。

「ふっー」

凄まじい速さで髪が目の中の木を横薙ぎに通じ抜ける、見た目は何も変わらない。

私は近寄って木の手に手を当てぐつと力をいれる。すると木はズレて行き、轟音を上げて地面に倒れた。

かなり使えるなこれは。

知識を使い色々試してみた結果、ある程度出来る事が分かった。

まず私の体は決まった形を意識しないと、光を通さない黒い霧状の何かの塊になる事がある。

そして体の形や強度、重量を変え、自由に動かせる。これは先ほど木を切断するために使ったものだ、髪を鋭く長くし、力を込める事で切断した。

かなり強力で、これならある程度なら敵がいても撃退出来るだろう。

更に現在は子供の姿だが大人のようにもなれる。人型以外にもなれたが、私が自然になっていたこの子供の姿が無難だろう。

後は水中でも問題無く活動出来る、もともと呼吸をしていなかったようだ。

体は温度は問題無く感じる、冷たいのか熱いのか感じる事が出来る。ただし分かるだけでそれが私に影響を及ぼす事は無さそう。

体の一部で服などの物を作れる。ただし今の所は実物か構造を知らないで作れず、あまりにも複雑な物も作れないようだ。

そして作った物は私が消そうと思わない限り離れても維持される……最初に脱いだ私の服が消えたのは私が自分の力を把握していなかった為、不安定だったのではないかと思う。

これは意味があるかは分からないが、食事もとれる。

川の水を飲んでみたがしつかり水の味を感じる。どうやらいくらでも飲めるようだ、満腹になる事はなかった。

味が分かるのなら美味しい物を食べてみたいとも思う、いくらでも食べられるのでたしなむ程度に。

意識を傾けると周囲の様々な物を感じる事が出来る。

更に集中すれば地中の虫や岩の中の鉱石なども感じる事が出来た。

これに関しては何やら物を感じ取れるのかこれからも試そうと思う。使い方を間違えなければかなり有用だろう。

今の所はこれくらいだ、今の内に試しておいてよかったと思う。やれる事が一気に増え、これからの生活に大いに役に立ちそうだ。私が人間ではなく私と言う種族である事も間違いないだろうし、そのうち意思の疎通が出来る他の生き物や私の同類を探してみよう。

私が老いる前には見つけた所だな。

さて……自分の力の確認はいつたんここまでにして、後回しにして魔法の練習に取り掛かろう。

まずは土、次に水、それから風、火の順に試してみよう。

こうしてまずは土の魔法の練習を始めてから二回目の夕方には土を思い通りに動かしたり、岩のように固めたり、打ち出したり出来るようになった。

土の魔法の練習はこの辺りで一度中断しよう。

さらに練習中に新しい事にも気が付いた。感知能力が上がり魔力が良く見えるようになったのだが、木が周囲の魔力を吸い、吐き出しているのが分かった。

その時木が吸っている周囲の魔力と、吐き出す魔力が違うのだ。

世界に満ちている魔力のほうが濃く感じる。別のように見えるのと同じ名前で呼ぶのは分かりにくい、私は勝手に周囲にあふれている物を魔素と呼ぶ事にした。

そして魔力を使うとその魔力は魔素に変わるようだ。

循環しているのかも知れない。魔素と魔力を交互に使えば一人で永久に循環出来るようだ。

いつの間にか存在していた知識は間違いなく役に立った、これならある程度は使えそうだ。

こうして私は残りの三つもそれなりの時間をかけて練習し覚えていった。

最初の内は水の魔法でずぶ濡れになったり、火の魔法で森が燃えたり、風の魔法で頭から地面に突っ込んだりしたが……少なくとも今は失敗せず出来るようになった。

そしてもう一つ成果があつた。私は魔力に変換せず、魔素を使って魔法を使えるようにもなった。やってみたら出来た……としか言えないが。

これで知識にあつた四大元素は終わった。ここからは追々改善して行く事にしよう。

一通り練習を重ね魔力と魔素の扱いも慣れた。ここからは知識にあつた便利魔法の練習に取り掛かる。

この魔法は絶対に覚えておきたい、便利だからな。

それはインベントリ、マジックボックス、アイテムボックス、無限倉庫など様々な名前が付いていた。

様々なものを収納し劣化を防ぐ空間を作る魔法だ。

よし……始めるか。

私は集中して練習を始めた。

流石に難しかった。

この一言に尽きる。

ひたすらに練習しようやく使えるようになった、念じれば好きな場所に好きな大ききさで入り口を作る事が出来る。

これで大きな物も入れる事が出来る上に、魔素か魔力を送る事でどこまでも拡張できる。

更に生物なども生きたまま閉じ込める事が出来て時間を止めて劣化を防げる。

……生きた生物の保管と時間の停止はもしも誰かに教える時は無くした方が良いかも知れないな。

知識にあるのだから出来るのは分かっていたが、時間停止の機能が予想以上に難しかった。

時間に干渉するのはかなり高度だと思つてはいたが、少々考えが甘かったようだ。

後は名前を決めるだけだが、知識から決めるか……無限倉庫は広げ

る事は出来るが無限とは言えないからやめておこう。

アイテムボックスは、入るのはアイテムだけではないからやめようか。

後はインベントリかマジックボックスだが……インベントリは言葉の意味が知識になかったのでやめておこう。

そうするとマジックボックスだな、魔法の箱と言う意味らしいしちように良いだろう。

そう言えばいったいどれだけの時間練習していたのだろうか。

ふと、かなりの時間が経っているのでは無いかと気が付いた。

……日中の気温が上がっている、おそらく夏に入っているのではないだろうか。

正確な時間は分からないが、はつきりと気温に差を感じる程度の時間は過ぎていようだ。

今思えば四大元素からマジックボックスまでずっと練習していた。

やはり疲労と言えそうな感覚はなく、洞窟で気が付いた時から体調は変わらない。

便利ではあるが熱中してしまうといつまでも続けてしまいそうだ。

これで練習は終わりにしよう。次はこれから覚えた魔法を使って家や家具を作ってみようと思う。

翌朝。

私は知識にあった家を完成させた。木を髪で切り出した木材と、固めた土と岩で作った。

リビング、キッチン、風呂場、寝室、倉庫と部屋を分けた。

初めての割には上手く作れたな。しかし知識には魔法で家を作る方法が無かったな、便利だと思うのだが。

水は川があるし、燃料にも材料にも使える森の木がある。更に土魔法のおかげで地面全体が材料のような物だ。

環境の影響を受けない私に使う機会があるかは分からないが、食事

はもちろん風呂という物にも入ってみたかったので材料が豊富なのは助かる。

とりあえずは風呂に入ってみよう……川があるが面倒なので魔法を使おうか。

魔法で作りに出した石の浴槽に魔法で水を満たし、弱い火の魔法を打ち込む。

すると盛大な音と共に風呂場に湯気が充満し、水面はぼこぼこ煮えたぎり温かそうだ。

入る前に体を洗うのだったか？

しかし……石鹸と言ったかな。そんなものはないから木をくり抜いた桶でお湯をすくい体にかけてから、浴槽に身を沈めた。

温かい……と言うか……これは熱すぎるのか？体が平気だから分りにくいな……。

おそらくこれは熱すぎだな。私以外だと何かしら問題があるかもしれない……もし他者と入る時は気を付けよう。

これはいい、用意も簡単だし時々入ろう。

目を瞑り初めての入浴を楽しむ。しばらくゆっくりした後、私は今後の事を考え始めた。

風呂は楽しんだ、風呂から出たら次は食事にしよう。肉、果物、野菜……知識だけで味は分からないがきつと美味しいだろう。

私は風呂から上がり水気を魔法で飛ばし服を作り出す。まずは肉だ、獣を狩り食べる事にする。

こういう時は気配感知を使うべきだろうか？

私は外に出て周囲の気配を探り始め、やがて手頃な大きさの獲物を見つけた。

私は獲物のいる場所まで移動する。

ある程度近づいた後、ゆつくりと見える距離まで近づいた。そこにいたのは短い二本の角が生えた鹿のような生物だった。

名前は分からないが丁度良い大きさだ、私の食事になって貰う。

音も無く髪を伸ばし、首を狙って上から素早く振り下ろす。髪は手ごたえ無く通過し、鹿のような生物は反応する事も出来ずに首を斬り

落とされその場に崩れ落ちた。

「よし」

一言呟いて死体に近づく。

すぐに髪で死体をつかみ切断面を下にして血を出す。血を抜いたほうが味がよくなるらしいからな。

解体は家の川の近くで行おうか、取り敢えずこの死体はマジックボックスを試すために入れて行こう。

そしてマジックボックスを使おうとした瞬間に私は顔の右に衝撃を受け、視界が回転した。

体に衝撃と木が折れるような音が聞こえる。何かにぶつかり感じていた浮遊感が無くなると、視界の回転も止まった。

ああ、攻撃を受けたのか。

周りに全く意識を向けていなかったのは失敗だった。

私自身の気が抜けていては感知も意味が無い、立ち上がり周りを見渡すと私の獲物の傍に赤い牙を生やした熊のような大型動物がいた。

「グルルルル……」

まだ動く私を見て、奴は低いうなり声をあげて警戒しているようだ。

私は特に気にする事なくそれに近づきながら声をかけた。

「そんなに背後からの不意打ちで殺せなかったのが意外か？」

体は何も問題無い、今までと変わらない万全の状態だ。

だが油断したのは私の失敗だ。今回は相手が格下のようだが、同格であれば私は死んでいただろう。

「勉強になったよ、ありがとう」

そう声をかけ髪を一閃すると、わずかな時間の後に熊もどきの頭が落ちた。

こいつも血抜きしてマジックボックスに入れておこうか。

獲物を収納したあと家に戻った時は夕方だった、食事は後回しに

し、浴槽に湯を張りつかる。

完全に油断していた。

食事に気を取られ、狩りの成功に喜び、警戒を忘れていた。

ずつと襲われるような事がなかった為に失念していた、大型の肉食獣がいる可能性は考えていたのに。

私は攻撃を受けた右頬を湯舟に映したが、擦り傷一つ無かった。

奴に脅威は感じなかったが、弱そうにも見えなかった。

見掛け倒しという事も無さそうだったしな……。

体の丈夫さもそうだが、不意打ちを受けたというのにいつもと変わらず落ち着いていたな。

知識で様々な危険生物を見た時と同じだった。特に脅威を感じる事は無かった。

実際に見てみれば何か感じるかもしれないと思っていたが……肉体も精神も大分強靱なようだな。

もつと強敵相手ならばと考える気持ちはあるが、殺されてしまったら意味が無い。

せめて先程殺した相手がこの森でどのあたりの強さなのか分かれればいいのだが。

出来るだけ警戒は怠らず、殺す理由が無い時は避けるか。さて、そろそろ上がって食事にしよう。

夜になってしまったが、風呂から上がり川の傍へ行き鹿のような生物を取り出す。

……解体してから風呂に入るべきだったな。だが先程はそんな気分ではなかったし……また入ればいいか。

早速解体をしようとするが……解体の仕方が分からない。

知識に解体方法はなかった、これは実践して覚えるしかないか。

髪を使い、解体方法に四苦八苦しながらも何とか肉を手に入れた。だいが無駄になってしまった気がするが、慣れるまで我慢だな。

魔法で乾燥させた木材を組んで火をつける。

肉を小さく切り木の串に刺して火に当たるように地面に刺す。星の瞬く夜に炎の揺らめきと虫の音が響く、すると肉から焼ける音と匂いが漂い始めた。

そろそろいいかな？私は串を一本手に取り、かぶりつくと咀嚼する。

……マズくはないが、何か違う気がする。

肉を次々と食べながら知識にあった塩、胡椒、砂糖などの調味料を思い浮かべた。

より美味しく食べるには必要だな。気長に探すとしよう。

そしてすべての肉を食べ終えた私は、後始末をして家に戻った。

さて、今回のような失敗をしないように対策しておくか。

私は新しい魔法を作る事にした。一定範囲に悪意を持った者が入ると反応する空間を作る魔法だ、敵意と言う難しい判断基準だが何とかしてみよう。

私は魔法作りに集中し始めた。

そして魔法は完成した。名前は警戒魔法でいいか。

さて……効果を確認しないといけないわけだが、確認するという事は敵に出会う必要がある訳だ。

狩りのついでに確認しようか。

魔法を使い森に入り、気配を感じながら進む。しばらく彷徨っていると大型の獣の気配を感じた。

私は気配へと向かう。姿を見せてこちらを獲物と判断してくれば魔法の反応を確認出来るだろう。

気配の持ち主は巨大なイノシシのような獣だった。私が姿を見せると声を上げ態勢を低くする、その瞬間魔法の反応があった。

よし、これならひとまず完成で良いだろう。後はこのイノシシのような獣を狩ろう、首を落としてしまおうか。

「私の肉になるといい」

私が獣に告げると、突然雄叫びを上げて突っ込んでくる獣。

途中で私の髪が首を落としたが、頭をなくしたまま体が突っ込んでくる。

私とその体を横に避けると、先ほどまで私が居た場所を通り過ぎた辺りで大きな音を立てて倒れ、地面を多少滑った後に停止した。

死んでも勢いは止まらないか。さて、急いで血抜きをしてからマジックボックスに保存しよう。

魔法も問題無く効果を発揮したし大きな獲物も獲れた。今日も帰ろう。

イノシシの様な獣を狩ってから時が過ぎた。私は狩りを続けて解体の技術を磨き、肉の在庫も増えた。

もう暫く狩る必要は無いだろう。

そして今日は新たな食材を狙うため、私は家のそばの川を見ている。

魚が食べてみたくなったからだ。

気配感知で魚らしきものがあるのは分かっているので、後は取るだけなのだが……どうやって取ろうか。

……髪を網目状にしてすくってみるか。

私はゆっくりと川の底に切断しない様に変化させた髪を網目状に伸ばした。感知で髪の上に反応が多めに重なったときに一気に持ち上げる。

すると名前は分からないが、15cmほどの魚がある程度取れた。私は一部を収納すると、肉を焼いた場所で残りの魚を焼いて食べる事にした。

まずは鱗を取り除くんだっただか。

私は髪を使い鱗を取り除き、串に刺して焼く。

やがて魚から油が落ち、ジュウジュウと音を立て始める。しばらくその音を聞き十分に焼き上がるのを待った。

そろそろいいだろう、これ以上は焦げてしまいそうだ。

私は十分に焼けたと感じる魚の刺さった串を取り、かぶりつくどボリボリと咀嚼する。

……このポリポリしてるのは骨か？あまり美味しくはないな……。

最初の一匹は丸ごと食べたが、残りは頭と尻尾、骨を避けて身だけを食べてみた。

うん……悪くはない。しかしやっぱり味付けが欲しい所だ。

この辺りの物を食べたら本格的に探してみようか……そう思いながら食べ続けた。

焼いた魚を食べ終えた私は家に戻り、風呂に入って一息つく。

私はいつの間にか昼間に外に出て、夜は家で食事するようになっていた。

夜は獲物が少ないという事もあって昼間は狩り、夜に食事、次の朝まで自分の能力開発や次の日の予定を考える。

この生活も悪くは無いがそろそろ調味料が欲しい、塩なら海か岩塩があれば何とかかなりそうだが……。

今の味が特別悪いという訳ではないが、味付けをした物を食べてみたいな……どうにかして海水か岩塩を見つけない。

飛んでいけば見つかるかも知れないな。

私は湯舟に浸かりながら考える。

道中も魔法で風呂には入ろう、考え事をしたりするのにいい。

早速夜が明けたら探しに行ってみようか。場合によってはかなり長く家を空ける事になりそうだが今まで誰も来た事がないし、もし留守中に誰かが住み着いていたら話し相手になるかもしれない。

空が明るくなり始めた頃、私は調味料探しに行く事にした。

私は魔法によって宙に浮かび一気に上空へ上昇した。姿を見せ始めた太陽の光が眼下の森と遠くの山肌を照らし始めている。

周囲を見回しとりあえず近くにある川の下流へ向かう。そうすれば海へ出る事が出来るはず……何の当てもなく飛ぶよりいいだろう。

岩塩がどんな所にあるのか分からないからな……まずは川の下流に向かって海を見つけよう。

明け方の冷たい上空の空気を切り裂いて、一気に川の下流へ飛ぶ。

しばらくは変わらない森だったが、進むにつれて木々はまばらになり、草が生い茂る広大な平野になった。

完全に日が昇り眼下に鳥達が飛ぶのを見かけるようになった頃、遠くに海らしき物が見えた。

海だ。これで塩が取れる。

私は海に向かって高度を下げながらも更に速度を上げ、砂浜の上空に到着すると下降した。

波の音、独特の匂い……知識で知っているのと実際に体験するのはだいぶ違う。

波打ち際に近づき海に入ると、波が引くときに足の裏に変な感触がする。

変な感じだ……。

味はどうか、手を海水につけて舐めてみる。

……これが塩の味か、これは確かに肉に合いそうだ。

この海水を塩にする訳だが……知識では魔法を使わない方法だったので魔法も使い塩を作ろうと思う。

大きい入れ物と、要らない物を取り除くためのきめ細かい布を用意

した。

さてやってみよう、まず魔法で海水を操り布で汚れを取りながら入れ物へ入れる、魔法とボックスに保管しておいた薪で水分を蒸発させる、水が減って濁ってきたらまた布で不要な物を取り除く。

再び火にかけて固まり始めたら今度は水分を取り除く、残った物を乾かして塩の完成だ。

上手くいっただろうか？

出来上がった塩を手に取りなめてみる。

「……美味しい」

私は思わずつぶやいた。海水のままでも初めての塩の味と言う事もあって美味しく感じた、だが完成した塩の味は比べ物にならないかった。

これを知ってしまったら、海水では駄目だろうな。

よし、多めに作って保存しておこう。

入れ物の大きさと数を増やしてしばらくの間滞在し、塩を作り続けた。

満足行くまで大量の塩をマジックボックスに保存し、ついでに海の魚をある程度捕まえて帰る事にした。

帰ったら早速塩を使ってみよう。

塩は楽しみだが隙を作る訳にはいかない。何がいるか分からないのだから油断はしないようにしないと……そう考えながら私は空へと舞い上がった。

道中は何もなく、我が家に戻って来た。

すぐに火の準備をして肉に塩を振り火にかけて待つ、そして焼き上がった肉を口にする。

「……美味しい」

声に出す程に美味しい。もう塩無しで肉は食べられないな……沢山作っておいたのは正解だった。

塩焼きの美味しさのあまり今まで狩った肉と魚にも塩を使い、いつもよりも多く食べてしまったがたまにはいいだろう。

塩を手に入れ食事が美味しくなった、今までが不満だった訳ではないが塩の効果は想像以上に高かったな……。

次は……果物を探そうかな。

海に向かったのは正解だった、岩塩探しをしていたらいったいどれだけ時間がかかっていたか。

現在私は風呂に入り、のんびりしながら考えていた。

早く終わったとはいえ、それなりの時間出していたのに風呂にも入らず結局ずっと塩を作って家まで戻って来てしまった。

だが塩の美味しさを知った今なら正解だったと言える、減ってきたらまた取りに行こう。

次は果物を探しに森を探索していくか……。

私は新しい目標を定めつつ、いつもよりも長く風呂を楽しんだ。

翌朝。今日からは森を探索して果物を見つける事が目標だ、じっくりと見逃さない様に探すつもりだ。

ただ、普段よく行く辺りには果物らしき物はなかったな……行つた事の無い所へ行ってみよう。

私はまだ探索をしていない方向へ向かい、果物らしき物を探す。しばらくしてこの森で手に入りそうな他の食材を思い出した。

キノコや野菜もあればいいのだが……。

しかし、野菜はともかく茸は命にかかわる毒がある物も多いらしいからな。

色々と驚かせてくれる私の体には効かない可能性もあるが、わざわざ試したいとは思わない。

かと言つてこのままでは毒のある恐れがある物を食べる事が出来な……い？

……私はまた思い至らなかつたようだ。躊躇なく食べていた今までの肉や魚が無害だと、どうして断言出来る？

実は既に毒物を食べていて、まったく効いてなかつたりするかもしれない。……判断するための方法が必要だ。

探索はまた今度だな。今更だが探索も感知を駆使すれば簡単に見つかったのではないだろうか……。

だが今は帰つて魔法開発だ。

私の力も魔法も、使い方次第で様々な事が出来そうだがうまく使いこなせていないな……そんな事を考えながら家に向かった。

分析魔法、とでもいうべきか。

家に戻つた私はすぐに魔法開発に取り掛かり、魔法を完成させた。

これは名前のまま対象の分析をして何で出来ているか、生物に有害であるかなど、様々な事が分かる魔法だ。

既に手持ちの食材にかけてみたが有毒な物があつた。私の予想が当たってしまった……ただ以前から美味しく食べていたので私には毒も効果がないようだ。

うまく機能しているようだ、これからはこの魔法も使いながら食材を探そう。

私が中途半端な時間に帰つてきたため周囲は暗くなり始めているが、もう一度探しに行こう。

再び森へやってきた感知を使えば見えない所や地中、木々の上まで、多くの食材候補があつた。

様々なキノコ、ジャガイモのような物、様々な木の実といった具合だ。

更に虫にも薬効がある物が見つかったのでそれらも採取しておいた。

見つけた虫、野菜、木の実など、全ての食材と素材に僅かな数だが有毒な物があつたな。

目標の果物が見つからない為、私はもつと先へ進む事にした。

先へ進み続け、とうとう果物らしき物を見つけた。

ぼろぼろの折れそうな樹に拳ほどの白い実がなっている、毒はないようだ。

今にも死にそうだな。

そう思いながら実を一つ取り、食べてみる。

「美味い……！」

これが果物、これが甘さか！

一気に食べた私は、残った種をしまう。増やせる可能性があるらしいからな。

そう思いながら一つ二つと食べて行く。やがて果実はほとんど無くなっていった、もともと多く生っていた訳ではなかったが……食べ過ぎた。

種は集めたが上手く行く保証はないし……食い荒らしてしまった事だし、この樹を何とか回復させたいな。

回復、回復か……。

よし、回復魔法を作ろう。

私はその場で椅子を作り出し腰掛けると、新たな魔法を作り始めた。

無事に回復魔法は完成したが、他の生物を治す魔法は今までとはまた違った感じだった。

完成はしたが、いきなりこの木にかけるのは不安が残る……と言う訳で、近場の別の樹で試してみた。

別の樹に近づき、僅かに傷をつける。そして回復魔法を使ってみる。

樹の傷はすぐに埋まった。その効果に満足した私は死にかけている樹に向かい魔法をかける。

……最初から明らかに危ない状態だったからな、念入りにかけておこう。

最初はどうしてもよかったが、美味しい果実をつけるのなら残しておきたい。

回復魔法をしばらくかけ続けると、幹は太くなり葉が生い茂り、高く背を伸ばして多くの実をつけた。

ちよつとやりすぎたかもしれないがこの樹を失いたくないからな、これで当分平気な筈だ。

増えた実をある程度マジックボックスに保存して今回は帰る事にした。

帰ってすぐ手に入れた食材は一通り食べてみた、有毒な物も味は良かったな……。

私は今、壁が崩れた我が家の前にいた。

どうしてこうなったかは単純だ。

家で風呂に入りくつろいでいたら獣がやってきた、何度か狩った獣だがいきなり魔法を使ってきたのだ。

獣は石の塊を飛ばし、リビングの壁を破壊した。

私が居ない時にも来る様だと少し困るな。

保護や保存する魔法でも作ろうか？単純に強度を上げて作ればいい気もするが……うん、決めた。

「強度を上げた物に保存と防御魔法をかけよう」

これでよし。

壊れた壁と家のすべての強度を増し、新たに作り出した維持魔法をかけた。

これは時間経過による劣化と外部からの干渉を完全に防ぎ、強固な状態を維持する、保存と防御の魔法だ。

作る過程で保存魔法と防御魔法も生まれた。保存魔法は食べ物や

本などの劣化を無くす物だ、魔法がかかっている限り長期間放置しても傷んだりしないようになる。

防御魔法は物理的な攻撃や熱、冷えなどの変化に強くする魔法。保存魔法は劣化が無くなるだけで強度は変わらないからな。

この先あるかは分からないが、魔素と魔力両方が世界から完全に失われた時には魔法が切れるだろうな。

これで獣の魔法にも耐えられるようになるだろう。

家の強化が終わり、満足した私は風呂の準備を始めるのだった。

……あの獣、今まで魔法など使ってきた事は無かった。

今までも狩っていたが魔法を使って来た事など……。

そこまで考えて思い至る。そうだ……今までは感知によって先に見つけ、何もさせずに殺していた。……見た事がないのは当然だった、今まで何もさせていなかったのだから。

つまり魔法を使える獣も多くなる可能性があるんだな。

私は新しい事実を知りつつ次の予定を考えるのだった。

私は日々を新たな食材探しと薬効成分がある素材の採取をして過ごしていた。

……が、そろそろ魔法はここまでにしようと思った。これからも魔法を作る事は止めるつもりはないが、そろそろ他の事に挑戦してみようと思う。

分析魔法によって薬効成分がある素材を見つけた時からやろうと決めていた……錬金術による薬作りだ。

そのため優先的に森で薬効のある素材を多く集めている。新たな食材もそこそこ見つかっていて、この辺りの食材は大体確認したと勝手に思っている。

さて、錬金術に手を伸ばすのは決定として。……ここでやるか、この土地で取れる素材を集めて気候の違う場所に移住し、その場所で新たな素材を探しながら始めるか……。

私はリビングの椅子に座り考え込む。

この場所は最近やや涼しくはなつて来ているが、大きく気候は変わらないようだ。

大きく気候が違えば食材も素材も違う可能性が高いはず。

私は方針を決める。

しばらくここで採取をして食材と素材をため込み、違う土地……出来れば寒い土地か暑い土地に移住して、採集と錬金術の練習に取り掛かろう。

そうと決まれば出来るだけ様々な物を多く集めて、後は……塩と果物も補充しよう。

様々な物を集め始めてからある程度の時間が過ぎた、そろそろ旅立つとしよう。

この家は……このままでいいか。

住んでいた家は残して行く事にした。誰かが使つてもいいし、魔法で保護しているのでそう無いとは思うが壊れて無くなってしまつても構わない。

誰かが来た時のために倉庫に保存魔法をかけた食料をある程度置いておいた。この家を訪れた何者かがここに住み着けば私の話し相手になるかもしれないからな。

場所も忘れないように目印魔法を作つて家に印をつけておいた、これでどこからでも探し出せる。

さて出発しよう。

道中は魔法で飛んでいくのが手っ取り早い。

次の滞在場所で錬金がある程度身に着いたら今度は徒歩で世界を回るのも良いかもしれない。

そう思いながら私は空へと舞い上がった。

向かうのは北、知識では太陽の位置から東西南北が分かるらしく、それを基に大体の方向を確認しておいた。

まあ北か南に行ければ、最終的には寒くはなるようだから当たりをつけた方向へ行ってみよう。

そして朝日が大地を照らす中、私は目指す方向へと飛び始めた。

私は新しい土地を求めてひたすらに飛び続けた。そして三回目の朝を迎えた時、遠くに何かが飛んでいるのが見えた。

……私の方へ来ている？

こちらにまっすぐ向かって来ているその生物は思ったより大きく、鋭い牙と爪を持つ大型の鳥のような生物だった。

ああ、なるほど……私を狙ってる訳か。

地上では散々狩りをしてきたが、空中は初めてだ。だが負けるつもりはない、訓練は十分にしている。

「……来い。殺しに来るなら殺されても良いんだらう？」

届く事は無い言葉を呟き、移動を止めて相手に向き直る。

「~~~~~」

遠いが声を上げているようだ。その直後、魔力反応が大きくなりこちらに魔力が飛んでくるのを感じる。

そこそこ早いな。

私はこちらに届く前にその魔力反応を躲す。

恐らく風系統の魔法だろう。やはり獣も魔法を使う者がいる、使える者と使えない者の差はなんだ？

……考えるのは後にしよう。

今は奴を殺す。奴は一直線に向かってくる、こちらが手を出せないと思っっているのだろうか。

私は魔法を発動し風の刃を発射する。色のない刃は魔力が感じられなければ躲すのは難しいが……どうかな。

躲したか。

鳥は飛んでくる不可視の刃を躲し、なおも迫って来る。

魔力を感知する事も出来るんだな。

新たな情報を手に入れた私は次の手を打つ。

私は髪を細く伸ばし私の少し離れた所に垂直に立てた。

「グアッ!？」

私に噛みつこうと真っ直ぐ突っ込んできた鳥は置いておいた髪の毛に自分からぶつかり、左右に両断されて地上に落ちて行った。

目は良くなかったのか。

とはいえかなり細くした髪の毛の刃は肉眼で見るのはかなり難しい、多
少目が良くても気が付かなかった可能性は高いか？

そうだ、あの鳥も回収しよう。

私が鳥が落ちて行った辺りに降りて、周囲を感知するとすぐに見つ
かった。

……毒は無し、これも後で食べてみよう。

私は死体をマジックボックスに保存する。

初めての空中戦だったが、魔法や髪を使うと空中も地上もあまり差
を感じないな。

そう思いながら再び空を舞い先を急ぐ、辺りはだいぶ寒くなってい
た。

鳥を落とした日の夜に雪が降り、大地が白く染まり始め。さらに二
回目の朝には大地が完全に白く染まり吹雪が襲って来た。

初めての吹雪と寒さだが問題はなさそうだ。

まずは落ち着く場所を探そう、川と森が傍にある所が良い。

拠点候補を探して辺りを空から確認していると僅かな範囲だが雪
が解けている場所を見つけた。

なぜあの辺りだけ雪が解けているんだ？

気になった私は降りて確認した、その場所は水たまりになっていて
湯気が立ち上っている。

温水？ いや、ただの温水じゃないな……色々な成分が混じっている
ようだ。

分析すると色々混ざってはいる様だが、生物にとって危険な物は
入っていないようだ。

これは温泉か……？

このような色々な成分が混じった温水の事を温泉と言うらしい。知識によると有害であったり高温であったりする場合もあるらしいが、これは有毒でも高温でもない……当たりかもしれない。

ふむ、周囲に問題ありそうな生物はいないな。

高温では無い様だが一応確かめてみよう。私は服を脱ぎ、そつと湯気の立つ温泉につま先から入る。

おお、これは中々良い温度なんじゃないか？

温度は丁度良く感じる……ここを拠点にする事に決定だな。

すっかり風呂場を作ってからじっくりと入ろうと決めた。

どうせなら浴槽は大きく作ろう……そう思いながら建築を始めるのだった。

完成だ。

森の中だったので場所を作ってからリビング、キッチン、寝室、倉庫と……以前の家と全く同じでは無いが似たような構成で家を作り上げた。

そして風呂場だ。大きな木製の浴槽を作り、周りの床も木材で整え家と繋ぎそのまま行き来出来るようにした。

温泉は常に湧き出ているので浴槽はいつも満たされている。簡単な手順とは言っても何もせずに入りたい時にすぐ入れるのは実に良い。

これが露天風呂と言うやつだな。

この家に目印を付け、完成したばかりの温泉に浸かりながら景色を見る。雪によって白く染まった森の木々が良い感じだ。

……もう少し楽しんだら素材を集めて錬金術に取り掛かろう。

それにしてもこの地域は雪が多いな。この辺りに来てからずっと降っている、悪くはないが。

寒く雪に閉ざされても生き物や素材はある物なんだな。

温泉を楽しんだ後、私は森へと素材探しに向く事にした。

雪でほとんど見分けがつかないが、感知のおかげで問題は無かった。近場を歩き回って獣や魔法を使ってくる獣……私は魔物と名付ける事にしたのだが、魔物を狩り、素材を集めて回った。

ある程度集めた後、錬金を始める為に戻って来た……のだが。

家の上に雪が山程乗っている。

……家がつぶれる事は無いだろうが何とかしたい、家自体を熱くすれば溶けるか。

しかしずっと熱いままなもの……体や体調に影響はないが風呂に入るようになって分かったことがある。平気ではあるが好ましい訳ではない……と言う事だ。

何とか手をかけずに家を暖める方法はないものか。

やりたい事が増えていく……後回しにして今は錬金に集中するか。

いずれどうにかしたいが錬金術を後回しにするほどではないからな、まずは練習に入ろう。

錬金術を甘く見ていた……。

私は内心でそう呟いた。

練習を開始してそれなりに時間が経つ。

今までで一番集中していたのではないだろうか？

錬金はかなり複雑な分野だった、素材の状態や処理のタイミング、温度、魔力の使用の有無、使用量……様々な条件で成功率や効果が変わったりとかなり複雑で大変だ。

幸い紙は作れた。書き留めながら練習しないと覚えきれないぞ……。

効果は少ない様だが数種類の薬と、紙と書き込む染料は作れた。こ

れで記録しながら練習を進め、備忘録として本にしておく。
念のため維持魔法もしっかりかける。後はひたすら実験するだけだ。

ついでに魔法知識なども別に書き残して保存しておこうか。
私は再び錬金術の練習に集中し始めた。

再び練習を始めて無心に実験を繰り返す中ふと我に返る。
温泉にでも入るか。

「……………ん？」

温泉につながるドアを開けようとしたが開かない。仕方なく取り外すと雪の壁があった、私は魔法で雪を溶かして外に出る。

……………だいぶ熱中していたようだ。

外に出て見ると家が分厚い雪に完全に埋もれていた。

少なくとも家が雪に埋もれ、自然の一部になるほどの時間が経っていたようだ……………温泉周りは平気だったがそれ以外は雪の塊だな。

まず温泉に入ろう。

その後温泉から上がった私は家を雪から解放し、リビングに戻る。

……………そろそろいいか、これ以上は少しづつ進めて行こう。

備忘録の本も随分厚くなった、これはマジックボックスに保存する。

そして練習中に作った薬もしまう。接着剤も作り、それぞれに紙を貼り付け、効果とその効果の強弱を私の感覚で書いてある。

そういえばしばらく食事もしていない……………今日は色々食べよう。

温泉のそばで料理をして入りながら食べる。

温泉、食べ物、雪景色だ。

しばらく塩焼きを頬張りながら景色を見ていた私だが、浴槽のふちに顎をのせる。

……………新しい素材が見つかったらまた複雑になっていくんだろうな。
楽しくはあるが、また家が雪に埋まるだろうな。

顎を乗せたまま湯舟に浮かび、パチャパチャと足を動かす。

素材が増えれば増えるほど組み合わせはどんどん増える、いい事ではあるが……。

他に目的が無い時に進めるようにしようか……。

今回もかなり時間が過ぎていようだしある程度には達したと思いたい。

何より今は道具作りをしてみたい。

道具を作るには素材が足りないと思う、特に金属が全く無い。

石や土は大抵どこにでもあるし魔法で作る事もできる。金属も恐らく作れるが、本物を見ておきたい。

感知でひたすら探し回れば見つかるかもしれないが……。

せっかくだから探すのは暑い土地を見つけてからが良いな。素材や食材も探せて一石二鳥だ、もう移動してもいいのだが。

錬金に熱中してしまって、あまりこの土地を楽しんでいない気がする。

特に温泉はもつと楽しみたい、もうしばらくここでのんびりするのも……。

……そうだ。持って行けば良いのか。

マジックボックスがある。入り口を流入口に開けてしばらく放置すれば大量に温泉を保存出来るだろう。

私は残りの塩焼きを食べて温泉から上がる、少しマジックボックスを改良しよう。

あれからマジックボックスに使用者の許可がない物はいれられないように改良を施し、現在温泉の採取をしている間に余計な物が入り込まないようにするのだ。

中では時間停止してしまうからな、事故は避けたい。

待っている間何をしようか……魔道具作りの真似事でもしてみる

か？部屋を暖めるような何かをちよつと作ってみよう。

私はある程度の丸石を作つて、火の魔法を込めてみた。

「む……」

突然石が真っ赤になり溶けだし、流れ落ちる。

耐えられないか……熱に強い金属なら問題無いのかも知れないな。

私は新しく丸石を作り、慎重に火の魔法を込めてみる。

温かくなって来たな。

少しづつ石が温かくなっていく。更にゆつくり魔法を込め続ける
と石がほんのり赤くなり始める……そろそろ限界かもしれない。

「部屋を暖めるのには十分かな？」

石を持ったまま家に帰り台座を作つて熱した丸石を置く。どれく
らいの時間持続出来て、部屋は暖まるのかを確かめたい。

しばらく待っていると部屋の温度が少しだけ上がったのが分かつ
た、これだけでも僅かだが効果があるようだ。

だがこの土地だとこれでは熱が足りないか？

この土地は寒い。素材を変えるか大きさを大きくするか……込め
る魔法の強さか、どうにかしてもう少し熱くしないと役には立たない
かも知れない。

こんなに上手く行くとは思わなかった。

僅かとはいえこれでも効果はあった。

普通に火を出すより魔力効率がかなり悪いが、その辺りは金属素材
が見つければ良くなると思いたい。これはこのままにしておこう。

そろそろそれなりに時間が経つて居るかな、温泉も大分集まっただ
ろう。

私は温泉に開いているマジックボックスの入り口を閉じる。

これで温泉にも入れる。もう一度素材などを集めたら今度は暑い
土地を目指して移動しよう。

数日後の明け方。素材などを集めなおし、食料や薬を倉庫にある程

度おいてから出発の準備を整えた。

色々と知識を使い考えた結果、高高度から砂漠探しをしようと思う。

私は空へ舞い上がると、明け方の薄暗い世界に一面の雪化粧が白く浮かび上がっている。

舞い散る雪を吹き散らし、私は新たな土地を目指して飛び始めた。

砂漠を探して飛ぶこと数日、高い高度から見ていると砂ばかりの土地を発見した。

本当に砂ばかりだ……僅かに植物もあるが、いままでの土地とは大きく違う。そして気温も高いようだ。

周囲が砂と岩だけになってからも更に飛び、だいぶ深くまで進んだ後家を建てる場所を探す。

だが川や森は無く、ほとんど変わり映えない風景ばかりだった。

これは探すだけ無駄だと判断し、巨大な丘の上の岩場に家を建てる事にした。

おなじみのリビング、キッチン、寝室、倉庫、そして風呂のある家だ、勿論目印も付けている。

とりあえず家はこれでいいだろう。

ここでの目的は第一に鉱石の発見、次にここで取れる食材や素材だな……同じ様に感知で見つける事は出来るだろう。発掘は魔法でどうにかなるだろうか？

さて、色々と始める前にまずは温泉に入ろう。

私は作りたての家に入りマジックボックスから温泉を浴槽に注ぎ準備する。それから服を霧散させて裸になり、湯で砂を流してから浸かった。

気温は問題無いが砂のじやりじやりとした感触は意外と気持ち悪いな。

これは何とかしたい、ひとまず風の魔法で自分を包めばいいか。

私は風呂に浸かりながら魔法を作り始めた。

私は風呂から上がった後、風の守り魔法を使ってみた。風の壁を周りに作り砂などを防ぐ魔法だ、外に出る時はかけておこう。

……家にも風の守りをかけておこう……家の中が砂まみれとかは嫌だ。

家にも魔法をかけ外に出る……うん、家の周囲に砂は来ていないよ
うだ。

これから本格的に鉱石を探そう、見つかるといいが。

現在私は砂地で鉱石を感知で探しながら歩いている。

まだ探し始めてそれほど時間は経っていないが砂漠もそれなりに
広そうだな。

そう思いながら歩いていると、私からかなり離れた砂の中に大きく
長い動く物が居るのを感じた。

生物のようだが……反応がある辺りに向かっていくとその生物が
私の方へと移動し始めた。

地面が細かく振動している。

地下からくるなら飛ぼうか。

私が空中へ飛び上がった後、地中から何かが飛び出して来た。残念
だが私はもう空中に居る。

生物の正体は知識にあるミミズの様だったのだが……。

……大きな。

知識では手に乗るほどの大きさだったが、似ているだけで同じ生物
では無いだろうからな。

この生物は森に生えていた樹よりも太い、私ぐらいならまる飲みだ
ろう。

このほとんど何も無い土地でどうやってその大きさを維持してる
んだ？

まだ私の知らない何かがあるのかもしれない……それにミミズよ
り私の方がおかしいかも知れないからな。

……美味しいのだろうか。

砂の上でうねっていた大きいミミズは届かないと分かったのか再

び砂に潜ろうとする。

逃がすつもりは無い。私の髪の毛の刃はミミズの口のある頭のような部分を斬り飛ばす。

ミミズは一瞬硬直すると砂の上に倒れ、その直後斬り飛ばした頭部が地面に落ちた。

……意外と肌触りが良いな。

すぐに死体を回収したが、肌はさらさらとしていた。

今日の食事はこいつだな。

回収を終えた私は再び鉱石を探す。道中の棘の生えた植物も回収しつつ辺りをうろつく……そして。

遂に地下に鉱石らしき反応を感じた。さほど深くはないな、土魔法で取り出せるか？

私は土魔法でどうにかしようと思魔法を使う。

埋まっていたのは鉄鉱脈だった。私は魔法で鉱脈を丸ごと引きずり出し、鉱石だけを取り出して回収する事に成功した。

これだけでかなりの量になったな……今回はこのぐらいで帰ろう、食事もしたいしな。

家に帰って温泉に入り、ミミズの肉を少し切り分けて塩を振り焼く……匂いはそこまで悪くは無い。

これは……駄目だな。

一口食べて出た感想がこれだった。

匂いは悪くないがばさばさしている上にじやりっとしている。好みによるかもしれないが私は無理だ。

生物全てが美味しい訳もないか。

今まで悪くない味の物ばかりだったがもちろん不味い物だってあるだろう、今までが上手くいっていたただけだ。

この棘のある植物はどうだろう。

これも食べてみよう。生でも食べられるだろうが、焼いてみる。

「青臭い」

思わず感想を口にした。

これは私の好みには完全に合わない。この土地ではあまり美味しい物は見つからないかもしれないな。

……鉱石でも探しに行くか。

少し残念に思いながら、魔法を使い再び外へ出た。

先程とは別な方向に進み暫く経った時、また鉱石らしき反応があった。

今度は何かな。

魔法で鉱脈を引きずり出して鉱石を取り出す。これは……銅かな？そして銅鉱石を取り出していると何か近づいてくる気配を感じた。

……今度は何だ？

しばらく待っているとサソリのような生物が姿を現した。

また大きいのか。

またしても知識の姿よりはるかに大きかった、こいつは2メートルほどありそうだ。

まあ大きくても結果は変わらないが。

髪がある程度太くまとめ、頭らしき場所を一突き。綺麗に穴が開いた大きいサソリは動きが止まった。

ん？まだ動いているな。

収納しようと近づくと、全身が細かく震えていた。警戒し完全に動きが止まってから仕舞う。

知識ではサソリは尻尾に毒があるようだが、もしこいつにもあったら取り分けておこう。

一応これも味見はしておこうか。

その後更に探し複数鉱脈を見つけたが鉄と銅だけだった、量は銅の方が少なかったな。

しかしそれでもかなりの量を手に入れたと思う。当分はこれで十分だろう、帰って魔道具作りを始めよう。

……サソリの味見もしないとな。

そう思いながら帰路についた。

家に到着した私はまずサソリを調理して食べた。

表面の殻が少し硬いが味は悪くなかった。

食事を終え魔道具作りに取り掛かろうと思うが、知識では鉱石はそのままでは使えず精錬など鉱石事に色々行う必要があるようなのだが、やり方が分からない。

見た感じ余計な物が混じっているようには感じないのだが……知識の鉄より色がやや白っぽいのが、問題無いのだろうか？

先ずは暑い家を冷やす魔道具を作ろうと思う、私は暑くても問題無いが暖める物を作るのなら冷やす物も作りたい。

しかし水では冷たさが足りない、魔法を作る所からだな。

私は新しい魔法の開発を行った。

冷却魔法と付けようか。

この魔法は冷気を生む魔法だ。これを取ってきた鉱石に込めて見るとどうなるかやってみよう。

石で試した火の魔法の時はいきなり溶けたからな、冷やすから鉱石が溶けたりはしないだろうが念の為にじっくりやろう。

鉄を手で持てる程度の大きさに魔法で丸め、冷却魔法をゆっくりと込めると表面が濡れてきた。

これは冷えたからだな、知識にあったぞ。

さて……まだ部屋の温度はあまり変わらない、もう少し込めてみようか。

……水の塊になってしまった。

次第に水滴が凍り始めて氷に覆われてしまった、しかし部屋の湿度も僅かに下がっているようだ。

室温を下げる事には成功したなしかし……。

知識にある道具達は魔法は使わず、自由に動作を止める事が出来る上に暖かくも涼しくもできるらしい。

出来る事ならそれを目指したい。

暖める事も考えたと火の魔法より安定した魔法が欲しいな。

いきなり溶ける可能性がある上にもっとは攻撃用の魔法だ。

もつと抑えた物を用意しようと私は魔法を開発し始めた。

私は加熱魔法を開発した。これは温める魔法だ、攻撃用ではない緩やかな温度上昇になるはず。

魔力の出力を間違えたらこれでも危険かもしれないが。

温度の上昇と低下を両立して更に任意に切り替え、停止もできる道具……か。

具……か。

何とか頭にある知識と新しく得た知識と魔法で上手く出来ない物か。錬金術までとはいかなそうだが時間がかかりそうだ。

金属を手に入れ、家にこもり魔道具作りに没頭した私は遂に魔道具を作る事に成功した。

名前は……温度調整器でいいか。

そのままだが分かりやすい方が良い、構造は知識にあった魔道機構に大いに頼る事になったが……。

特定の模様を物体に刻んで魔力を流す事で魔法が発動するという物だ。

多少覚えるのに時間がかかったが私の魔法も再現する事が出来た。模様を書くだけで発動する物もあるようだが魔法金属を溶かした物が必要なようで、今は用意出来なかった。

いずれ手に入る事があつたら使ってみたいな。

話がそれってしまった。まず魔力を貯めておく金属を用意する、これは魔法ではなく魔力そのものを貯める物だ、これは鉄が一番よかった。

それぞれの魔法が発動するように機構を刻んだ銅の板を用意する、球形を止めたのは重く材料が多くなる上に魔力消費と効果が釣り合わなかったから。

板の数を増やせば効果がその分上がる、もちろん魔力消費も増える。

それを細く加工した銅の紐で繋ぎ、切り替えるスイッチで制御する。

加熱、冷却のそれぞれに合わせて魔力が流れ発動する、無効に合わせる動作しない。

そして最後に送風だ、温まった、または冷えた空気を風魔法で送り出す。

別スイッチになってるので必要な時に使う、これらの機構を魔法で加工した木の箱にいられている。

……今はこの辺りが限界か。

この魔道具、効果はしっかりと出たがまだまだ魔力効率が悪く本体が大きい。マジックボックスがなかったら持ち歩けない。

基本的には家などの拠点に置けばいいのだが、移動中の使用は持ち歩く手段がなければ無理かもしれない。

取り敢えず家において冷却運転だな……。

私の魔力を込めた鉄の塊から魔力が流れ機構が作動する、送風も使うと冷気が部屋に流れる。

今はこれで満足しておこう。

新たな素材や技術を使えるようになれば効率を上げたり小さくしたり出来るかも知れない。

今まで特に気にしなかったがこうなると知識にあった魔法金属が気になる。

貴重であるとおったので簡単には見つからないだろうな。

魔法に錬金術、魔道具……いずれにしても形にした者は天才だな……努力もしたのだろうか。

温泉に浸かりながら知識にある素晴らしい技術の開拓者を思う。

最初から頭にあったこの知識達には恐らく発見者がいる事だろう。

私もずいぶん助けられた。

会う事は叶わないだろうが……同じように挑戦する者にこの先出会ったなら力になるのもいいかもな。

いつか私も何かを無から生み出せるだろうか。

温泉から上がり備忘録に全てを書き込み、考える。

これで目的だった魔法、錬金術、魔道具製作を一通り行った、知識だけでなく実際に行い失敗を経験した。

これからは自由に行動し、新しい発見や思い付きがあれば試してみよう。

まずは海だ……海辺で過ごそう、きれいな海で島がいい。

砂ばかりの土地はそろそろ飽きた、海は塩を取ったときに少しの間居ただけでその海も濁っていた。

移動する前に鉱石を集めようかと思ったがあまり減っていない、失敗しても溶かして戻せるからだろう。

温度調整器をもう一つ作って家に置いておこうか。

数日後。太陽は真上にあるが砂嵐で薄暗い。

温度調整器の片方をマジックボックスにしまい、もう一つを家に設置した。

食料と薬を倉庫にある程度置き、出発の準備を整える。

さて、海の綺麗な島を見つけようか。空に舞い上がり荒れた大地が嵐の隙間から眼下に見える……一番の脅威は砂のジャリジャリ感だったな。

まずは適当に川を見つけて海に出る、その後綺麗な海と島を見つけるのだ。

私は川を見つげるために加速した。

出発から二日目に川を見つけた。

その川を辿る事で簡単に海へとたどりつく事が出来た。

そこから更に海上を長い間飛び続け、ようやく透明度の高い海と白い砂浜を備えた島を見つけた事が出来た。

いい島だな、この島で過ごそうか。

まずは家を建てる海辺を決めないとな。

島なので一部の崖や山肌に接している場所以外は殆ど砂浜だ、その中から良さそうな場所を選ぶ。

海辺をぐるっと回った結果、遠浅で島側に適度な平地がある場所を見つけた。場所はここに決める。

気候も暑すぎず程よい暖かさだ。

家を建てながらそんな事を考える。この場所なら温度調整器は置かなくていいな。

家が完成した。恒例のリビング、キッチン、風呂場、寝室、倉庫の構成だ。

そう言えば眠りもしないのに今まで寝室を作っているな。

手本にした物そのままに部屋を決めていたからか。必要無いが……これからもこのままでいいだろう。

家を作った私は島の中を散策しようと考えた。

早速島の森の中へ分け入っていくと、生えている植物も今までとはまた違う。

苔などが多く生えていて全体的に緑色が多く目に入る、ゆつくりと過ごそうと思っているが……。

……素材集めがしたい。

結局誘惑に負け、錬金素材集めに走るのだった。

私は初めて見る素材を集めていたが、気が付けば夕方だった。

途中この島の生き物や木の実、果実などが目に入ったが特に急ぐ事も無いと錬金素材集めに集中した。

流石に脱線しすぎた、今日は家に戻るとしよう。

……こういう景色も良いものだな。

夕暮れの海辺は茜色に染まり、砂浜に何か含まれているのか夕陽を受けて細かくキラキラと輝いている。

太陽が水平線に沈み始め、大きな月と小さな月二つが現れる。

思えばのんびりと空を見た事がなかった気がする。

夜になるまで砂浜に寝ころび星を見る。

自分の事を知ろうとし、知識と技術を磨き、生き残る強さを鍛えていた私はこの様に何もせず時間を過ごす事は無かった気がする。

周囲に目を向ければ波の音が響き、月の明かりが世界を照らしている。

月明りは明るいな……。

今までやって来た事は必要な事ではあったが、それと同時に力を付ける事や物を作る事、新しい事に挑戦するのは楽しかった。

そう思い、何も考える事無くただ空を見ていると水平線が明るくなり始めていた。

……そろそろ夜明けだな。

水平線から日の光が射し始めた、夕陽とはまた違う光が暗い海を彩っていく。

明るくなったら食材を探そうか。

日中の予定を決めながら明るくなっていく世界を眺め続けた。

肉、野菜、木の実、果物。

感知を使って見た事が無い食材達を集めていく、これから毎日少しずつ味見をしていこう。

島の森は沼になっていたりところもあった、普通に踏み込んだのだが沈んで行った時の感覚は興味深かった。

飛ぶ事で簡単に脱出する事が出来たが、飛ぶ事も周りの木にも届かなかった場合どこまで沈んだのだろうか。

一番嫌だったのは泥まみれになった事だったな……思わず探索を中断して温泉に入りに戻ってしまった。

私は一つの事を始めたらそれだけを納得するまで行い続ける気がする。

これは今までの私の生活を振り返った時の感想だ。

魔法訓練、錬金術、魔道具作りなど一つの事に集中すると時間を忘れる。

今の所は特に問題無いし、改める気も無いが。

よし、今日の所は帰って食事にしよう。

たくさんの食材を手に入れた私は帰路についた。

島の探索にひとまず納得した私は海に居た遠浅の海の温度はあまり冷たくはなく、高い透明度の為に泳ぐ魚達がかなりよく見える。

海の食材と素材を集めるかな。

遠浅の海に居る貝や蟹のような生物をアイテムボックスに入れて行くがそこまで量は獲れなかった。

流石にこの辺りには大きな魚は居ないか。

そう思いながら海を見る。居るのはカラフルな小魚くらいだ。大きい魚を見つけるには深い海へ行かなくては駄目かも知れない。

どの生物もそこまで多くいる訳ではない、根こそぎ取ってしまうのはやめておこう。

ここでの食材集めは切り上げて深い海へいこうか。そう思いながら沖へ向かうと、遠浅だった砂浜が突然無くなっている。

崖になっているようだ。

丁度いい。潜ってみようか。

私は海に潜り始めた。以前塩作りの際に獲った時は海には入らず適当に髪でさらって獲ったのだが大物は居なかった。

しかしここなら見つかる可能性は高い筈。

居た……大物だ。

種類は分からないが私の身長の数倍程の魚が眼下を泳いでいる、すぐに髪を伸ばして捕まえようとしたが思いとどまった。

髪に頼ってばかりなのはどうも嫌だな。

今の所魔法と髪の攻撃で全て対応出来ているが、私は力もあるので殴る事でも殺せるだろう。

色々出来た方がいいはずだ、いつかどこかで魔法や髪が使えない状況が訪れるかもしれない。

今回は髪も魔法も使わず捕まえる。

そう決めると、魚のほうへ泳いでいった。

海では人型は泳ぐのが遅いな。近づくとすぐに魚達は逃げてしまふ……だが早いとは思わない。

私は最終的に体の能力だけで魚を超える速度を出し、追い掛け回して捕まえた。

魚との追いかっつこは結構楽しかった。

陸や空とも違う感覚だ、ただ水中を泳ぎ回るだけでも中々気持ち良い。そう考えながら歩いていると家が見えてきた。

さて、味見だな。

家の前の砂浜で海を見ながら獲った魚を調理し食べる、海の生物達の多くは美味しかった。

こうして私は長い間、海や森に出ては家で食材の味に一喜一憂したり、海辺や島の山から景色をただ眺めたり、たまに魔法や錬金、魔道具の製作の研究をしたり……という生活を満喫した。

そんな日が続いたある日、私は考えた。

意思疎通の出来る生物か私の同類を探そう……と。

のんびりした一人の生活も楽しいが誰かと会話がしたい。

もうずいぶん長い間……と言うより目が覚めてから話せる知的生命体に会った事が無い。

戦闘中、時々魔物などに話しかける事はあったが、通じる相手は今

まで居なかった。

いずれ探そうと思っていたし、そろそろ探しに行ってみよう。

思い立ったのだ、すぐに準備をしよう。海辺の家に食材と薬をある程度置き出発する準備を整える。

翌日。何度も見たこの海辺の夜明けも見納めだ。

どこへ行こうか……どこにでも可能性がある。会話出来る誰かを探しに行く、私は空へ上がると思うままの方角へ飛んだ。

海辺の家を旅立ったのが遠い昔に感じる。いや……恐らく実際にかなり昔なのだろう。

私に寿命は無いか、もしくはかなり長いようだ。はつきりとした時間は分からなくても相当な時間が経っている事は感じる。

この世界には意思疎通出来る生物は居ない。

私が長い間世界を巡って出た答えがこれだ。

少なくともこれだけ探して全く見つからないという事は居ないと
思っ間違いないと思う。

それならばこの世界を楽しみつくそうか。

世界に意思の疎通ができる生物がいない事を認めた私は昔のように
様々な場所で自由に暮らし、食べ、自らを高める事にした。

それから私は色々な場所に家を建てそれぞれの場所で暮らし、その
場所の物を集める傍ら自らを高めた。

山脈地帯、谷底、平野、更に海底にまで住居を作り暮らしと自分の
能力向上を楽しんだ。

長く暮らす内に自分の弱点も判明した。

寿命は長いというのに記憶力だけはあまり良くなかったのだ。流
石によく行う事は忘れないが物事から長く離れていると忘れていた
りする。

備忘録を作っておいてよかったと思った事実だったな。

魔法は長い時間をかけて創造魔法と言う自分の考えた効果を発揮
する魔法を作り上げた。

錬金術は大量の魔力や魔素を貯めておける魔原石や、どんな病気に
も効く……筈の万能薬などを作った。

万能薬がいまいち微妙な表現なのは魔物と野生の動物でしか試せ

ていないからだ。

さらに魔素、魔力などを使い様々な金属や魔法金属も作れるようになった。

魔道具製作は技術と知識の大幅な上昇が起きた。

錬金術よって作り出される様々な材料と質の上昇によって高性能、低燃費、小型化が進んでいる。

私自身の力も、もはや上限があるのか分からないほどに上がり続けている。

しかし私自身の内面は、どう言えばいいのか分からないが……優秀とは程遠く、忘れる事は勿論、もつと良い使い道があるのに長い間気が付かなかつたり、後回しにした事をそのまま忘れて放置したり、興味を持った物に集中し他の事を忘れたりと……得た力と知識に比べて大して成長する事は無かった。

そして、話す相手が欲しいという気持ちもまた変わる事は無かった、共に過ごす事は無くとも時折関わり言葉を交わす事が出来ればと今も思っている。

生命の進化、変化や発生は膨大な時間がかかると知識には有ったな……。

最後に作った家のリビングで考える。この調子ではいつ知的生命体に出会えるか分からない、そこで私は睡眠に目を付けたのだ。

寝ている間は長い時間でも本人にとっては僅かな時間に感じるらしい。

このままひたすら待っている事も出来なくは無いが、早く会える方法があるのなら試したい所だ。

寝なくても問題のない私だが、寝られるかどうか試した事はなかった。

もし自分から眠りに落ちる事が可能なら、知的生命体が生まれるまで寝て過ごすのも悪くない。

こうして寝る事に挑戦し始めたのだが、寝る感覚が分からないと言う事が分かる。

眠気と睡眠は知識で知っていても今まで感じた事が無い、分からない

い状態からのスタートだ。

私は横になり目を瞑る、寝るときはこうする事で眠りやすくなるらしい。

「うーむ」

私は唸る。しばらくそうしていたが全くそれらしい感覚はない、そう都合よくはいかないか……色々と試そう。

どれだけ時間がかかっても今更の事だ。

時間魔法か、創造魔法か、私自身の力、この辺りなら何とか出来そうな気もする。

知識には冷凍睡眠という物があつたが私がそんな物で凍り付く訳がない。

出来る事なら魔法ではなく私自身の能力で冬眠のような事が出来ると良いのだが……。

問題は無いだろうが、色々試してみる前に安全は確保しておかないとな。

今まで私に襲い掛かってきた魔物や獣は私に攻撃する事もほとんど出来ていない。

感知によつて私が先に気が付き先制してしまうからだ。しかし今回は私の意識が無くなる、または薄くなるはず。

流石にその状態から先手を取る事は難しそうだからな。

成功した時に問題無いようにしなければ、更に何かがあつた時に目覚める事が出来る何かを用意する事が出来ればなお良い。

周囲に何も居ない孤島を探し、私は試行錯誤をするのだった。

夜になっている？

試行錯誤した結果、私の意識の速度を落とす事で体感時間が変わる

事が分かった、戦闘時敵の動きが遅く感じる事にヒントを得た。

あれが意識の加速なら遅くも出来るかもしれないと、これは予想以上に上手く行った。

感覚としては自分は普通に感じるが、周囲が凄まじい速さで動いている感じだ、本来想定した物とだいぶ違ってしまった気がするが。

今は私の体感では僅かな時間だったが朝始めたはずが既に夜になっっていた。

完全に意識の速度を止めれば一瞬で何年だろうと経過させる事が出来る可能性が高い。

ただ問題もある。私が停止している間何が起こるか分からないという事だ。

僅かでも意識が動いていれば感知をしている間は何があっても拾ってくれるので、限界ギリギリまで速度を落とし完全停止はしないほうが無難かもしれない。

もし完全停止するのであれば何かがあった時に起きる事が出来る方法を見つけるべきか。

もう一つの懸念は、私の正確な寿命が分からない事。

時間を短く感じるだけなのでその間に寿命が来てしまったらそのまま死んでしまう。

ただこの事に関しては何となく平気なような気がしていた。

自分で選んだ事だ、途中で寿命が来て死んだとしても後悔は……：多少はあるかもしれないが……やめる気は無い。

色々試してみよう。何かあった時目覚める事が出来るようにはなっておきたい。

更に試し続け私は意識を完全停止し、あらかじめ決めた時間か私に危険が迫った時に復帰する筈の魔法を作りだした。

結局魔法の力に頼ってしまったが、可能であればこの際どうでも良いと割り切った。

季節が分かる土地で経過した時間の確認をした。

危険が迫った時に復帰する筈と表現したのは良く分からないままになってしまったからだ。

私に敵対する魔物のいる場所で使ってみたが、一度も反応しなかった。

原因は何となく分かっていた。つまりその魔物では何をしても私に危害を加えられないと判断され、反応しなかったのではないか……という事だ。

事実その獣は私に傷一つ付ける事は出来なかった、それでも私が一番強力だと思う魔物だった為、試せる相手が居ないと判断した。

何かが近づいたら反応するようにしようかとも思ったが、そうすると何かが通りかかっただけでも目覚めてしまうので諦めた。

後は長い停止休眠をするだけか……。
準備は十分したと思う。

場所は候補としてあまり他の生物が近寄らない深海か谷底、山脈のどれかの家が良いだろうと考え、最終的に海底を選択した。

「停止期間は……一万年だ」

一応知識に時間の事は存在するので何となく分かる。

生命の進化、変化や発生は膨大な時間がかかる、おそらく一万年では全く足りないだろう。

だが最初はこれで良い、後は私の寿命を信じよう。

海底の家の寝室に念の為魔法金属で箱を作りその中で停止休眠する、私は用意した箱を閉じて完全に密封した。

上手く行けば一瞬で一万年後だ……ではおやすみなさい。

私は目を閉じて意識を停止させた。

私は目を開ける。感覚としては全く時間は過ぎていないのだが上手く行っていれば……。

すぐに入っていた魔法金属の箱を開けて外に出る、何も起きていないのなら外は海底のはずだ。

……私は間違っていないかった。

そこで目にしたのは海底を埋め尽くす多種多様な生物や植物、海中にも様々な種類の魚の群れが行きかう命に溢れた海の姿だった。

陸に行こう。私はすぐに意識を地上へと切り替えた。

魔法を使い魚の群れを突っ切り海上へ向かう。すぐに明るくなり始め海上へと到達すると、陸へと向かう。

これなら知的生命体が居るかもしれない。

陸へ向かう途中にも様々な鳥が飛び交い、岩場で羽を休める群れを見かけた。

そして陸地についた時私は空にも大地にも息づき溢れる生命の音を聞いた。

「くっくくく」

思わず笑っていた。

恐らく初めてハツキリと笑ったと思う、やはりまだ生命は進化の途中だったのだ。

ようやく世界に生命が溢れた……きっと人と呼ばれるような者達も……根拠なくそう考えてしまう。

また世界を見て回って色々集めたいが、まずは知的生命体を探してみたい。

もし居るならきつと川沿いなどに居るはずだ。

何よりもまず優先すべきは意思疎通のできる相手だ、私はそのまま川を探しに飛び始めた。

……あれは村か？

川を見つつけ、それに沿って探していると明らかな人工物が集まっている。

すぐさま向かいたいが最初の接触だ、慎重にしなければならぬ。見えないように遠くに降りて徒歩で接触しよう。

遠くに誰かが数人隠れているな。

降りた所から離れた場所に何者かが居る、狩りをしているのだろうか。

行ってみるか、いきなり村に乗り込むより良いかもしれない。

私は隠れている者達に方へ歩き出した。

隠れている場所が目に入る距離になると、突然5人の人類が飛び出してきた。

知識にある人類にそっくりだ……。

私が初めての人類に喜んでいると、その中の一人が声を上げた。

「*****!?!」

「……ん？」

声を上げた彼は理解不能な言葉を叫んでいる。

「……ああ」

私は思わず声を洩らす。言語の違いの可能性を全く考えていなかった、何を言っているかわからない

「*!?!*****!?!」

彼は石の槍と思われる武器を構えながら更に声を上げている。

「あー、私は敵対するつもりはない、わかるか？」

「*****!?!*****!?!」

できるだけ刺激しないように静かに語りかけるが、その時声を上げていた男の右側に居た男が、槍で空を指しながら声を上げた。

「*****!?!」

それを聞いた途端、五人全員が槍を構えた。

「これはもしかして……空を飛んでいるのを見られたか？」

彼らは私を取り囲みじりじりと近寄ってくる。

「折角見つけた人類だ、殺したくはないな」

全員が飛びかかってきた瞬間、魔法で強風を起こし吹き飛ばす。

「***!?!」

「悪いが効かなくともわざわざ攻撃を受ける気はない、殺しはしないが大人しくしてくれ」

「***.....***!?!」

彼らは驚愕の表情を見せ何かを呟くと、突然逃げ去って行った。上手く手加減出来てよかった。

ただの強風とはいえ少し加減を失敗すると辺りの木々ごとなぎ倒す羽目になるからな。

仕方ない、近場に家を建てゆっくり馴らしてみよう。

こうして手ごろな場所に家を建てるため歩き出した。

人類との初接触の後家を建ててから数日後、村の様子を見ようと近くまで来たとき感知に数人の人の反応があった、何かを探しているような動きをしている。

狩りか? いや、数日前に私とぶつかった場所の近くだぞ.....さすがにそれは無いと思うが。

もしかして私を探しているのか? 違うかもしれないが遠くから姿を見せてみるか.....違うのならまた逃げるだろう。

「*****.....」

私が姿を現すと三人の男が地面にひれ伏し、一番前に居る他の者より装飾の多い男が何か言っている。

どうということだ?

先日襲い掛かってきた反応とのあまりの差に困惑していると、一番後方に居る少女が前に出てきた。

「*****.....」

少女は着飾り、白い髪と赤い瞳そして白い肌をしていた。

少女は何かを言う私の近くまで歩み寄り、膝立ちになり首を垂れる。

この少女……。

彼女は病気だ、恐らく長生きできないだろう。いや、それもだがもしかしてこの状況は。

生贄か？

大方あっているだろう。

数日前の出来事が原因で私を超常の何かと勘違いし、病気で体が弱い彼女を……いやそこまで理解していない可能性が高いな。

恐らく珍しい見た目の彼女と引き換えに許しを請うつもりなのではないだろうか。

どうするか。

これを断って彼女が無事でいられる保証はない、むしろ私に拒否された供物として処分されるかも知れないな。

私は話し相手が欲しい、彼女を救い傍におこう。

言葉は後で何とかすればいい。

私は暖かく穏やかな風を起こしながら、彼女の足元にマジックボックスの入り口を開けて飲み込む。

その瞬間残された男たちの体が震えた。

「確かに受け取った」

私は出来るだけ穏やかに声を上げるとゆっくりと空に浮かび、彼らから見えなくなるまで飛んだ。

まさか人類に会っていきなり崇められる羽目になるとは。

まずは彼女をどうにかしなければ、私は温泉と食事の用意をしながらこの後の事を考えるのだった。

風呂と食事の準備を終え、リビングで彼女を取り出す。

「*****!?!?」

彼女は困惑したように顔を上げた。彼女からしたら突然風景が変わったのだ、困惑するのも当然か。

「*****!?!?」

しばらく呆然としていた彼女だが、私に気が付くと床にひれ伏し何か言っている。

「大丈夫だ、殺したりはしない」

私は優しく声をかけそつと彼女を立たせる、彼女は困惑した顔をしながらも従ってくれた。

「温泉にはいろいろじゃないか」

ゆつくりと手を引き風呂場へ連れて行く、彼女は抵抗するつもりはないようであるがまだ。

風呂場に入り自分の服を霧散させ彼女の服を脱がせる、彼女は寒いか細かく震えている。

「おこい」

湯の温度は低めにしておいた。

彼女にゆつくりと湯をかける。彼女はびくりとはねた後、目を見開いて体を流れる湯を見ている。

「目を閉じないと痛いぞ」

そつと目を閉じさせて頭にも湯をかける、しっかりと彼女の汚れを落とした後に私も湯をかぶる。

「入ろうか」

どこかぼんやりしている彼女を湯舟に入れる、顔を見る限り嫌ではなさそうだ。

しっかりと温まった後魔法で体を乾燥させ、私が作り出したおそろいのワンピースと下着を出した、知識にある物だ、私も最近付け始めた。

「次は食事だ」

私は手をつないだまま声をかけると、食事の準備をしておいたりリビングに戻る。

椅子に彼女を座らせ室内で食材を焼き始める。

安全で美味しかった物だけを焼いているからどれかは口に合うだろう。

彼女を見ると私の焼いている食材を見ている、お腹はすいているらしい。

その姿に私が微笑むと、彼女はサツと視線を下に移し白い頬を赤く

染めた。

笑われたのが分かったのか？

「食べると良い」

そう言っ手本に一つかじって見せる、串を手渡すと私をまねて一口食べる。

彼女は驚いた顔をした後、一心不乱に食べ始めた。

「気に入ったようだな」

顔を赤く染めながらも食べるのを止めない彼女を見ながら、私も一口肉をかじった。

言葉が通じないからな、聞こうにも聞けないから勝手にやってしまおう。

もともと私に捧げられたんだ、健康になるなら文句は無いだらう。食事を終えた彼女は不安そうに私を見ている。

万能薬では治せないか。

薬を飲ませてみたが効果はなかった……予想はしていた。

薬の力が足りないのではない、万能薬は異常を治す薬、つまり通常に戻す薬だ。

彼女の病気は生まれつきの物。つまりこれが通常状態だ、異常だが異常ではない状態が今の彼女。

彼女の通常状態を創造魔法で本来の健康体に戻す、実際に行うのは初めてだから悪く言えば実験体だな。

数日間食事を与え薬を飲ませ、十分に睡眠をとらせて体力を回復させる。

十分に回復したと判断した私は、ベッドに座る彼女の前に立ち通じないと分かった上で話をする。

「今からお前の体を健康体に戻す。どんな影響があるか分からないがこのままではお前は長くは持たない……分かるか？」

彼女は最初の怯えが無くなった。

対応がよかったのか私を信じ切った顔をしている。
数日でのこの変わりようはおかしくないか？彼女が助かったら今後が心配だ。

「*****」

彼女は穏やかな顔で何かを話すと、柔らかに微笑んだ。

失敗はしたくない物だな。

私は彼女を眠らせベッドに寝かせる。

さて……治してみようか。

私は魔力と魔素を高めて治療に入った。

治療は終わった。

これで体は健康体になり、もう病気になる事も無い。

寿命も延びているはずだ、1000年程は生きる事が出来るだろう。

実験体になってくれたこの娘へのせめてもの報酬だ、余計な事かもしれないが。

しかし……完全な成功では無いな。

彼女の髪は私のように黒く染まり、肌も少し白さが減って瞳も黒くなっている。

生まれつき病気の彼女の本来の色は分からないが、私の魔力に侵されて変色した可能性がある。

色が白かった時は分からなかったが人懐っこい顔をしているな。

変わった色に納得すればいいが。

私は彼女の睡眠を解除する、しばらく経つと彼女は目を覚ました。

「*、*****？」

彼女は寝ぼけているのか何かをぼんやりと言っている。

私は鍊金で作った大きい全身鏡を取り出し彼女の前に置いた。

「*?!……*****？」

彼女は鏡を見て逃げ腰になったが、鏡に映る姿が自分だと気が付いたようだ。

「*****」

彼女は鏡を見ながら髪を撫で、泣き始めた。

嫌でもこの色で生きてもらうしかない。いや……変えられるかもしれないな。

自殺しそうだったらやってみようか。彼女は鏡の前で泣き崩れ、やがて泣きつかれて寝てしまった。

私の物になったんだ、勝手に死なれては困る。

実験とはいえ手間をかけて治療した訳だからな。

その結果を生きて確かめて貰わなくては、勿論彼女が幸せならなお良いが。

生贄の少女が泣きつかれ眠りに落ちてどれだけ経っただろうか。

明るかった外が暗くなった頃、彼女が起きた。

「良く寝ていたな。取り合えず風呂に入って食事にしよう」

風呂に入って食事をとれば生きる希望も湧くかもしれない、手を取り風呂場へ向かう。

「あり……がとございます」

今、少し変だが「ありがとうございます」と言っただか？

「私の言葉が分かるのか？」

「え……え!? わ、わた……なん……で」

「落ち着け。ゆっくり話してみろ」

「はー、わ、た、し……わかる……な、で」

心当たりは治療位しか無い。

何故かは今は分からないが後で調べよう。

「分かるなら手間が省けた。風呂に入って食事にするぞ、ついてこい」

「は、はい……」

私は風呂場に向かって歩き出した、彼女も困惑しながらついてくる。

体を流し二人で風呂に入る。しばらく沈黙が続くが彼女が意を決したように話しかけてくる。

「あ、あもお……あう」

「焦るな。しっかり聞いている……慣れるまでゆっくり話せ」

彼女は私の言葉を聞くとゆっくりと話し始めた。

「ききたいこと、あります……あの」

「大丈夫だ、聞きたい事は後でしっかり答えてやる。今はゆっくりしろ、気持ち良いだろう?」

「はい……きもちい、いです」

「そうか。もうしばらく私はここにいるが辛くなったら上がっていいぞ」

「おとも、いたし、ます」

「言葉を話せるようになったとたん硬いなお前は。数日前は食事を詰め込みながら顔を赤くしていたと言うのに」

「う……うう……」

彼女は温泉で火照った頬をさらに赤くして俯いた。

風呂から上がり食事をした後、リビングで話す事にした。

ちなみに彼女はいつもよりも更に大人しく食事を食べていた。

「さて、落ち着いた所でまず名前をお互い名乗ろうか。私はクレリア・アーティアと言う、クレリアでもアーティアでも好きに呼ぶといい」

「ンミナと、いいます、クレリアさま」

「様は……まあいい。ではンミナの質問に答えよう、分かる事なら答えてやる」

「……えと、なぜワタシをけんぞくにしてくださったのですか」

「眷属?」

「はい、かみとひとみ、クレリアさまとおなじ、あなたのけんぞく」
「眷属かどうかは知らんが……ンミナ、お前の体を治す時に私は魔

法を使った。その影響だと思っている」

「まほう？……からだを、なおす？」

「実際に見た方が早いか、こういうった力の事だ」

私は人差し指を立て水球を作り出した。

「ひやつ!?!」

驚いた彼女が軽く飛び上がる。

「使い方を間違えなければ危険は無い。触ってみろ、冷たいし飲む事も出来る」

「つめたい……」

恐る恐る水球に指先を触れて呟くンミナ。

「これは魔法で生み出した水だ」

「魔法の……水……」

ンミナは目の前の水を見つめている。

どうやら彼女達は魔法を知らないらしい。

「魔法は扱いを間違えなければ、非常に汎用性の高い技術だ」

彼女は目の前の水に気を取られているようで、反応が鈍い。

まだ話が残っているから水は消すか。

「お前の体の治療について言っておく事がある」

水を消し、私がそう告げると、彼女はこちらを見た。

「からだどう、なっているのですか？」

「お前の体は私が治した。お前はもう病気にならないし、長く生きる事が出来る」

「からだ、つら、くない？」

彼女は体が楽な事に気が付いたようだ。私の言葉を理解し涙を流した。

「さて続きだ、私はお前を了承も得ず一方的に治した訳だが、言いたい事はあるか？」

ンミナが泣き止んだ所で私は彼女に問いかけた。

勝手に治したのだ、言いたい事があるなら聞いておかなければ。

「ありがとうございます……クレリアさまが、おゆるしくくださる、なら。おそばに、いたい、です」

私としては関わりを持ち、稀に話し相手になってくれればよかったのだが。

この感じは一緒に住んでずっと傍に居そうだ。

嫌では無い、この娘は嫌な感じがしない。

「たまに私の話し相手になつてくれればお前にそれ以上何かを求め
るつもりは無い、帰りたければ帰っても良い。体はもう問題無いん
だ、普通に暮らせるぞ?」

「おそばに、いたい、です」

「そうか。好きにすると良い」

彼女が住むとなると多少家を改装しないとな、さっさとやってしま
おう。

ンミナが私の家に住み一か月程が経った。

彼女が住む為に部屋を増やしトイレを作り、家の周りに私が許可し
た物以外入れないように魔法をかけた。

彼女は知らないが彼女自身にも防御魔法と一定以上の危険な攻撃
を受けた時、私の元へ移動する魔法をかけた。

死なれては困るからな。

「クレリア様、温泉に入りましょう?お体をお流しいたします」
リビングで備忘録を整理している私にンミナが声をかけてくる。

彼女は何処かおかしかった言葉も問題が無くなり、普通に話せるよ
うになった。

以前の言葉も使えるので私は彼女達の言語も覚えた。

これで村の連中とも話せるだろう。

「分かった、今行く」

「はい、準備をしてお待ちしています」

ンミナと共に暮らした事で、私は今まで気にしていなかった事を気
にするようになり始めた。

正確には私に必要無かった事を気にするようになったと言うべき

か。

料理やトイレの為の魔法や魔道具、錬金と魔法を組み合わせた衣服の作成、石鹼や洗剤を作るようになった。

初めて出会った彼らが石の槍だった事を考えると私達はかなり高い生活水準のはずだ。

風呂場へ向かうとンミナが待っていた。

彼女はすっかり健康体だ、食事や睡眠もたっぷり取っているため元気が溢れている。

彼女は毎日私の世話をするため魔法の勉強や家事の練習をしている。

家事の方はもう任せられる程に上達したので任せているが、魔法の勉強はかなり苦戦している。

それでも私の補助を受けながら少しずつ上達している。

「クレリア様、こちらへどうぞ」

風呂場の椅子に座るとンミナが石鹼を手で泡立てる。

良い香りのする花や香草の匂い付きだ。

始めは見る物全てに驚くばかりであった彼女も、今ではすっかり慣れたようだ。

一か月と少しで慣れる事が早いのか遅いのかは分からないが。

「今日の夕食は赤ウサギの塩焼きとヒヨリ茸と香草のスープにフル瓜ですよ」

手で私の体を洗いながら夕食の内容を教えてくれる、本当に色々上達した物だ。

「料理が大分上手くなったな、僅かな期間でここまでになるとは思わなかった」

ンミナは慎重に私の体を洗っている。

そこまで繊細に扱わなくても良いと言った事があるが、私にそのような事は出来ないと言うので好きにさせている。

「頑張りました。それに苦痛なく自由に動く体が嬉しくて、なんでもやりたいのです」

石鹼を頭髮用に切り替えて丁寧に洗ってくれる、中々心地いい。

「そうか。お前の好きにすると良い、私も楽が出来るからな」
泡を洗い流された私は先に行く事を伝えて浴槽に向かう。

彼女は嬉しそうに返事を返し、自分を洗い始めた。

一人だった頃も十分楽しいとは思っていたが……。
浴槽につかりながら思う。

意思の疎通が出来る誰かとの生活は良い物だ。そのうちまた一人
が恋しくなりそうな気もするが、彼女が死ぬまでは此処に居よう。

「失礼いたします」

「くくつ、その硬さは今後の課題だな」

「そ、それは……いえ、頑張ります!」

「無理に直さなくても良い、それもお前の良さだ」

「あ、ありがとうございます」

私達は他愛ない話をしながらゆつくりと温まった。

「神の巫女、ンミナ様! 私達をお助けください!」

目の前でひれ伏す族長、戸惑いながら私に何うような顔を見せるン
ミナ。

また何かあったのだろうか。

彼女と共に暮らすようになって五年、彼女はそれなりの魔法を覚え
た。

二年ほど前に村と関わりを持つためにンミナに向かわせた際、彼女
が数年前に私に……つまり神に生贄に出されたンミナである事が村
人にばれた。

更に私と似た黒髪黒目になっていた事が原因で神の眷属、巫女とし
て崇められ何か有事の際に頼られるようになった。

それ以来村人にとっては遠いであろう私達の家に供物と共に使者
が訪れ、稀にこうやって何か頼み込まれる。

初めて会った五人以外に会って居ないはずだが何故か全員に私は
恐れられるため、使者と会うのはンミナだ。

私は魔法で見えないようになった上で話を聞いている。ンミナには私が何処に居るか教えてあるためこちらを見ているようだ。

『聞くだけ聞いてみよう。下らない事なら帰らせろ』

話すとバレるため、開発した念話でンミナに指示を出す。

「神の代理、巫女としてお聞きしましょう」

彼女は指示に従い話を聞く事を了承する。

正直普通に隣人として関わりたかったが、彼らの崇めっぷりが凄まじくどうにもならなかった。

力で無理やり直そうとしてもその力でまた崇められそうだしな。

洗脳は出来るだけしたくない。

そんな事を考えている間にも会話が進んでいる。

まとめてしまうと、強めの魔物が村の近くに住み着いてしまったようだ。

彼らに返事は後日と伝え帰って貰い、ンミナに問う。

「今まで同じような事があつたらどうしていたんだ？」

「戦える者全員で犠牲を出しながら殺すか追いかけていました。強すぎる場合は村を捨てて逃げる事もあつたと聞いています」

なるほど村人が滅れば村の力が衰える。滅りすぎたら全滅だ、村を捨てるのも一つの手なのか。

ならば頼れる者が居れば頼るのも当然か。

「今回は魔物が強力過ぎたから頼んできた訳か」

「恐らくは」

彼女の戦闘訓練に丁度いい、今までと同じように相手になつてもらおう。

「ンミナ、やれるか？」

「はい、お任せ下さい」

真剣な顔で答えるンミナ、私達は使者から聞いた目撃場所に飛んだ。

「見つけました」

目撃された付近の森を魔法で索敵していたンミナが声を上げた。

「今更だが炎の魔法は使いなよ」

周囲は森だ、火事になるからな。

「はい」

現場に行くと大きな虎のような魔物が歩いていた、今回はどうするか。

「今回は不意打ちは無しだ、奴の前に出てから殺せ」

常に不意打ち出来る訳ではないからな、一発勝負なら迷わず不意打ちだが。

今回は私が居る。

私が空から見守る中、ンミナが魔物の前にわざと姿を晒す。

そして互いに戦闘態勢になる。

「グウウウウ……」

低いうなり声をあげる魔物、様子を見ているようだ。

先手を打ったのはンミナだった。

「ウインドブレード」

不可視の刃を飛ばすが、魔物は見えているかのようにかわし突っ込んでくる。

「アーススパイク」

魔物の目前に土の錐が突き出す、発動が遅い訳では無いが奴のほうが早い、地面に錐が形成されるのを確認した魔物は方向を変えた。

「くっ、アイスウインド」

吹雪を手から放出する、魔物の動きが鈍り体に霜が降りて行く、油断しなければいけないな。

「いける、アーススパイクっ!？」

吹雪を止め、アーススパイクを詠唱し発動しようとした瞬間魔物が飛びかかる……さてどうする？

彼女は迷わず前に突っ込み飛びかかりを躲す。

「アーススパイク!」

突きあがった錐が魔物の胸を貫く。

「ウウウウウ」

最初は暴れていたが、徐々に魔物の声が弱っていきやがて動きを止

めた。

「上出来だ」

彼女の隣に舞い降りて声をかける

「ありが、とう、ございます」

体も魔力もそこまで消耗していない筈だが、命のやり取りは精神を削るらしいからな。

「大分強くなったな、これなら身を守るには十分だ」

「まだまだ、頑張るつもりです」

さらに強くなろうとする気持ちを持つのは良い事だ、弱いよりは強い方が良い。

「引き際は見誤るなよ。もしもの時は生き残る事だけを考えろ、私に申し訳が立たないなどと考えて無茶をするなよ」

「勿論です」

「村に殺した事を伝えて帰ろうか」

「はい、クレリア様」

「クレリア様今日の魔物の事でお話があるのですが」

村に報告し家で風呂に入っている時ンミナが私に言う。

「気になる事でもあったのか？」

「はい……あの魔物ですがあの村でどうにか出来ないような相手では無いと感じました」

「そうなのか？」

「犠牲は出るでしょう、ですがわざわざ私達に頼むほどでは無いと思います」

「私達を良いように使っている？」

「いえ、そこまで言うつもりはありませんが……このままだと少しずつ私達に頼るようになり、いずれなんでも頼みに来るのでは無いかと考えてしまいました」

「なるほどな。そうなら見捨てればいい、何もかもやってやる

気はない」

「そうですね……その時はそうしようと思います。ただ、私は彼らの気持ちも分かかってしまうので……」

「彼らの気持ち？」

「はい。犠牲が出る……誰かが一人でも死んでしまうなら自分の中に入りたくない……他の何かに頼りたいと言う気持ちが分かかってしまうのです。クレリア様に救っていただくまで私は辛く、いつ死ぬか分からない不安が付きまとう生活をしていました」

「なるほどな」

私では共感してやる事が出来ない、辛さも苦しみも死の恐怖や不安も感じた事が無いからな。

私はンミナと居るのが中々に楽しいと感じている。

村の連中にも少なくとも悪意を向けなければ酷い事をするつもりは無いが、悪意を持っていたり利用しようとする者には相応の報いを受けて貰う事になる。

「あの村は生まれつき珍しい色をした、体も弱く村の力にほとんどなれなかった私を捨てずに育ててくれました。最終的には生贄に出されましたが」

「今では神の巫女だが」

「ふふ、そうですね……生贄に選ばれた時どこかで納得しました。誰かを犠牲にすることが避けられないなら被害は少ない方が良いでしょう。あの時、私が普通であったらかつての私を選んだでしょうね」

「自分が一番大事なのは普通だろう。私だって友人や知人ならともかく、見知らぬ誰かの為に何かしてやる気はないぞ」

「クレリア様は初めて会った私を救ってくださいましたが？」

「私にも助ける理由があったただけだ。そうで無ければどうしていたかは分からない」

「助ける理由ですか……もしよろしければお聞きしたいです」

理由を知りたいというンミナ、隠す気も無いから構わないか。

「話し相手が欲しいと思っていただけだからだ。お前の病気に気が付いて実際に治す練習が出来るとも思っていた」

「私の病気を完治させてまで話し相手が欲しかったのですか？」

「私としては時折かかわる程度でも良かったのだが、お前を捧げられたからな。無理強いはする気はなかったが傍におけるのならと思つて受け取つた」

「ずっとお傍に居ますよ」

彼女は柔らかに微笑んだ、しかし気になる事がある。

「以前も言ったが、私がお前を勝手に練習台にした事に思う所は無いのか？上手く行くかも分からずあの時点で死んだり、更に酷い事になる可能性もあつたのだが……」

彼女は微笑みながら軽く首を横に振る。

「何も思うことはありません。貴女は自分勝手に命を玩具にするような方では無いと、僅かな時間を共に過ごしただけで感じました。今なら分かります……あのままでは私はもう長く持たなかつた。私の意志を確認しようにも言葉も通じない、だから貴女は私を勝手に治療した……後で恨まれても構わないと思ひながら」

瞳を閉じて思いを語る彼女。

確かにあの時は意思を確認する時間は無かつたな、意思の疎通が可能になる前に彼女の命が尽きる可能性の方が高かつた。

「クレリア様には感謝しかありません。私を健康な体に治し、素晴らしい環境と様々な知識と技術を教えて下さいました。私は一生貴女にお仕えいたします」

私の瞳を見つめ、真摯な表情で語る彼女。娘とはこのような感じだろうか？

「ありがとう、これからも共に暮らそう」

「はいー」

更に仲を深め、私達は他愛ない会話を始めるのだった。

更に仲を深めてから一年後。

手袋や靴を作り移動や作業の安全性が増した。

正直作るのを忘れていたのだが、ンミナはとても喜んでいて、村との交流も増した。

ンミナが強くなったため私の同行が必要なくなり、私の世話の合間を縫って、村人を魔物から助けたり怪我を治療しているうちに彼女は村に受け入れられた。

敬われてはいるものの以前のようにひれ伏されるような事は無く、村で声をかけられるようになったようだ。

更に彼女は私の使う言葉を村の人々に教え、その結果元々の言語はほぼ使わなくなり私の言葉が共通語になった。

頻繁に村の役に立ち始めた途端扱いが変わったのは思う所があるらしいが、彼女も喜んでいて。

そんな事ありながらも穏やかに過ごしていたある日。

「求婚された？」

「はい……」

ンミナが結婚を申し込まれたらしい。

彼女は19歳で、この村ではこの年まで結婚していないのは珍しい。

大抵は15歳前後で結婚するようだ。

しかし病気である事、13歳の頃に私に捧げられた事、更に私の巫女になってしまった事、それらが重なりそのような話は今まで無かった。

「相手は誰なんだ？」

「幼馴染です、現在は村の戦士長をしています」

詳しく話を聞くと、彼は昔から腫れ物のように扱われていた彼女に変わらず接してくれていた男性の様だ。

現在は18歳で戦士長という立場もあり、結婚を勧められていたのだが何故か頑なに断り続けていた。

どうして断るのかとンミナが尋ねた所、ンミナがずっと好きだったらしく勢いで村の真ん中で求婚されたらしい。

ンミナが病気で長くない事に苦しみ、生贄に選ばれたときは一番に反対して暴れ、巫女として戻った時は泣いて喜んだ様だ。

「なるほどな。巫女の地位のせいで今まで言えなかったが、ンミナ自身に尋ねられた事で抑えられなくなったのか？」

「私はクレリア様と共に在ります、残念ですが彼の思いには……」

「ンミナ。巫女と言うのは結婚してはいけないのか？」

「ただの巫女ならば問題なかったと思いますが、私は神の……クレリア様の力を受けた眷属ですから扱いがどうなるかは……」

「彼の事が嫌いな訳では無い訳だな？」

「それは……そうですが……昔から彼は私に良くかまってくれましたし、想いを聞いて嬉しく思います……」

ンミナも良い感じだな、男の方もずっと想い続け操を立てているのは好印象だ。

そして戦士長か、正直ンミナのほうが遥かに強いと思うが彼女より強い者など村に居ないしな。

「神として命ずる。神の使徒である巫女はお互いに想い合っている男女に限り結婚し家庭を持つ事を認める」

「ええっ!？」

大声を上げて驚くンミナ、何をそんなに驚いている。

「よろしいのですか？」

「ん？嫌なのか？」

「私はクレリア様のお傍で一生お世話を……」

「結婚しても此処に住み時々家庭に行けば良いだろう。神の使徒と結婚しようと言うんだ、嫌でも納得して貰う」

結婚は許すが私の世話から外す気はない。

納得できないなら諦めて貰う、ンミナにも男にも。

「てつきりもう私は必要無いのかと……」

ンミナは心から安心した顔で呟く。

「お前が嫌だと言わない限りそんな事はしない」
そう言うとな彼女は微笑んだ。

それからスムーズに事が進んだ。

男を呼び出し決定した事を伝えた、彼は穏やかそうな中に逞しさを感ずる男だった。

答えが出るまで待つと伝えたが彼は即座に了承した。

彼はンミナが神の眷属になった時点で独身を覚悟していたようで、彼女に理由を聞かれた時、想いだけでも伝えたかったと話した。

こうして二人は結婚し夫婦となった。途中神の眷属と結婚するなぞ許されないと騒動が起きたが、私が収めた。

こうしてンミナは時折村に戻り夫婦として生活している。

そろそろ生まれそうだな……。

妊娠したンミナが寝ている村の寝室に、私は姿を隠して待機していた。

あれから一年半が過ぎ、二十歳になった彼女は妊娠した。

後継の生産はこの村の夫婦の義務のような物だが、神の巫女であるンミナの妊娠は村にとって大きな出来事だった。

私は万が一の事が無いように妊娠が発覚してから彼女に何があってもいいように魂のような物にも干渉出来る力を身に付けた。

妊娠期間内に完成するとは私自身も思っていなかったが。

彼女の子供にはもう魂が定着している、これならもう安心だろう。

私の家で楽に産む事を勧めたが、生む辛さも母親としての試練だと断られた。

私には全く理解出来ないが、彼女が必要だと言うのなら強要はやめておこう。

まあ念のためこうして姿を隠し待機しているのだが。

本気で隠れていないから彼女も何となく気が付いているかもしれない。ないな。

……もう生まれるようだ、何もなければいいが。

彼女の子は無事に生まれた。事前に私は知っていたが女の子だ。しかし出産とは凄いな、あんなに叫ぶンミナを初めて見た。死ぬのではないかと心配したが彼女の状態は問題無かった。今は赤子を抱き安静にしている。

問題は無さそうだ。そう考え姿を消したまま部屋を出ようとする
と、背後から声が聞こえる。

「ありがとうございます……クレリア様」

やはり気が付いていたようだ。

「私は何もしていない」

姿を消したまま静かに答えて、部屋を後にした。

その後、流石に子供がいるのに私の家に居させる事は出来ないと考えた。

父親を始め村人は神として崇める私の家に滅多に近寄らない。

流石に子供から父親を奪う気は無い。

暫くは村で親子三人で暮らすように伝えた。とはいえンミナは私の世話のため頻繁に来るそうだが。

そして時々赤子の世話を手伝ったり、夫が居る事を知っていながらンミナに手を出そうとした男が私に処刑されたりした。

子供が生まれてから三年程経った頃、報告がンミナに届いた。

「複数の魔物に襲われた!？」

ンミナが声を上げた。

どうやら狩りの途中二匹の魔物に襲われ、ンミナの夫が皆を逃がすため残ったらしい。

すぐに現場に向かったのだが……。

「あなた……」

ンミナが呆然と声を上げる、彼女の夫である戦士長は二匹の魔物と

刺し違えて死んでいた。

「なぜこいつは逃げなかった？村に逃げればンミナか私が出たというのに」

「夫はいつも自分の力不足を嘆いていました。妻である私を危険に晒したくないと……」

彼を抱きしめ涙を流しながら言うンミナ。

「愚か者め。大事な者がいるのなら生きるべきだろう」

「夫は村を守る戦士の長です、家族と村を守る者なのです……」

彼女はそう言うが全く理解出来ない。どうにもならないのならまだ分かる、だが今回は死ぬ前に引いていればどうにかならなかったはずだ。

彼が死ぬ必要は無かったと思う、村に撤退すれば問題無く倒せる私達が出たのだから。

「皆で一斉に逃げてしまうと犠牲が増えます。足止めをする事で犠牲を減らそうと考えたのだと思います……」

彼女が答える、皆を確実に生かすために残ったのか。

「連れて帰ろう。お前達の好きなように弔うと良い」

その後、惜別の儀式を行ない彼の遺体を埋葬した。それからンミナと娘のアミラは私の家に住む事になり、村では新たな戦士長が任命された。

「ンミナ」

「はい」

私の家のリビングで言葉を交わす、娘は部屋で眠っている。

「私には奴の考えも大切な者を失うお前の気持ちも分からない。私はお前に何をしてやれば良いと思う？」

「抱きしめさせてください」

彼女はもう大人だ、私とは大人と子供の体格差がある。

私を後ろから包むように抱きしめるンミナ。

「暫くこのままで……」

静かなりビングに、静かに泣く彼女の声だけが響いていた。

彼女は泣き疲れて眠ってしまった。私は寝室に彼女を運び、娘と寝かせておいた。

ンミナが泣き疲れて眠るのはあの時以来だな。

以前彼女を癒した時以来だと思う。

彼女は私と暮らしている事が幸せなようだった。幸せそうな顔は見ていて悪くない気分だ。

今日の彼女は見た目はあまり変わらなかったが深く悲しんでいた。魂を始め、色々と感じる事が出来る私には分かってしまう。

ンミナにかけている防御魔法と緊急避難魔法を奴にかけていればこうはならなかっただろう。

だがンミナの夫であってもそこまでする気にならなかった。

ンミナは私を優しいというが、誰にでも味方する訳では無いし理不尽な事もする。

私は気に入ったモノ以外には何も感じない人外だ。

勿論自分に好意を向ける相手は私も無下にする気にならない。

半面、悪意を持つ相手や私の大事な物に手を出す輩には何も思う事は無く、すぐに処分するだろう。

実際以前ンミナに手を出してきた男はンミナ本人も夫も散々諦めるように話したがいつまでもまとわりついた。

最後警告も無視した為、最終的に私が処刑した。

私の事は恐れていたようだが……ならばなぜあの男はあそこまでしたのか、殺されないとでも思っていたのか？

ンミナの夫といいあの男といい、行動が分からない。

考えがそれてしまった。彼女の夫は私の事を恐れ敬っていたが、好意を持っていた訳では無かった。

それが原因かもしれない。

そう言えば今も名前さえ知らないな。

まあンミナの夫としては十分な男だったと思う、強さも心も。

外が明るくなり始めた頃ンミナの娘のアミラが起きて来た。

ンミナが泣き疲れて寝たのは深夜だったのでまだ起きてはこないだろう。

母親と同じ黒髪黒目で、村では神の血を継いだ娘と言われている。もちろんそんな事は無い。ンミナは私の実の娘ではないし私に子が出来るとも思えない。

血は継いで無いが力は継いでいるかもな。

「くれりあおねーちゃ」

私もそれなりにこの子に会っている。二番目に呼ばれ、顔を合わせたのが私だった。

父親である奴は結構ショックだったようだな。私に好意を持っていなかった原因だったりするのだろうか。

「おいでアミラ」

マジックボックスから果実水を出しながら呼ぶ、彼女はトテトテと私に近寄り膝の上に乗った。

果実水を与え、落ちないようにお腹に手を回して支えてやる。

「慌てないでゆっくり飲め」

私が作る飲み物はンミナとアミラに好評だ。美味しい上に栄養も多い。

「アミラ？」

果実水を飲んだアミラは体を私の方に向け、抱きついて眠ってしまった。

なぜこんなに懐かれているのかが分からない。

「また寝るのか……子供は良く寝るな」

アミラの頭を優しく撫でながら呟く。私は部屋でのんびりと夜が明けるのを待った。

完全に外が明るくなった頃、ンミナが起きて来た。

「アミラ、どこ？」

娘が居ない事に気が付いたンミナが探しているようだ。

「ンミナ、私の所だ」

ほっとした顔の彼女がリビングに現れた。

「明け方に起きて来てな。果実水を与えたが飲み終わったらまた寝てしまった」

「お任せしてしまい申し訳ありません。お世話をすべきなのに寝坊してしまって」

「気にするな。それに昨日の今日だから……アミラもすぐに父親がいない事に気付くだろう」

「夫の分も愛します」

「お前なら心配はいらないか。私は母親を知らないが良い母親をやっていると思う」

そう言いながらアミラをンミナにそつと渡す。

「色々と落ち着くまでは私の事は気にしなくていい。娘と自分の心を整理しろ」

「はい……お言葉に甘えさせていただきます」

それを聞いた私はンミナにも果実水を渡し、風呂に向かった。

ンミナの夫の死から一年が経ち、彼女も完全に落ち着きを取り戻して日常に戻った。

娘のアミラは父はもういないと分かったらしく、話題に挙げる事は少なくなった。

家の外で二人と共に食事をしている時、私は気になった事をンミナに聞いた。

「ンミナ。アミラはこの村でどんな扱いになる？」

名前を出されたアミラが私を見る。まだどういう事が分からないだろうが、出来れば幸せになって欲しいものだな。

「そうですね、恐らく次代の巫女になると思います」

「本人の意思に関係無くか？」

「はい、神の力を継いでいる黒髪黒目の女子です。間違いなく巫女以外の道は選べないでしょう」

「もし成長したこの娘が違う道を選んだらどうなるんだ？」

「幼いうちに巫女としての訓練と教育を始めます」

「物心つく頃には巫女としての行動が日常になっていく訳か」

私の楽しみのためにも好きな事をやって欲しいが、巫女として村にいた方が色々良い事は間違いないか……村にも望まれているようだしな。

「娘の訓練の事でクレリア様にお問い合わせがあるのですが……」

「珍しいな、どうした？」

「クレリア様から教えていただいた魔法などの技術と知識を、娘に伝える事を許可して頂きたいのです」

「構わないぞ。そうだな……はつきりと決めておくか」

アミラに教えるのは構わないが他の者に教えるつもりは無い、使用方次第では危険だという理由だな。

幼いころから危険性などをしっかり教えて扱えるようにしよう。

何が問題かと言うと、危険を危険と知らずに使う、危険であると知っていても使う事を抑えられない……といった無知、心の問題だ。

心を抑えられない、という点に関しては私も誰かの事を言えないが……やりたい事はやるからな。

それはともかく。誰もが深く考える事無く魔法を使えばいずれ人類が減ぶかもしれない。

「決めた。私がンミナに教えた技術と知識は代々巫女の候補者のみに伝える事を許し、巫女にならなかった者もその技術と知識を他者に教えるはならない。と言う事にしよう」

「教える者を限定するのですね」

「巫女になるならば力はあつたほうが良い、だから教えないという選択は無い。しかし広める事はしない」

そこで私はもう一つ付け加える。

「この力が特別では無くなった時、この決定は効果を失う事とする」

私はいずれ、魔法、錬金、魔道具は世界に広がると考えている。人が増え繁栄した時。私は技術と知識を教え、きつかけを作る気である。

そうなれば技術や知識は世界中に流れるだろう。更に言えば私が他者に伝えてはいけなないと決めたとしても、きつと破る者が現れる。私が教えなくとも、いつか人はきつとたどり着くという気もしている。

「分かりました。代々その決定を守るように伝えましょう」

「厳しくしすぎるなよ、子供は遊ぶ事も大切だ」

訓練は大事だが訓練だけの幼少期は良くない……と思う。

「はい、私もこの子を不幸にはしたくありませんから」

ンミナなら上手くやるだろう、何かあれば私が手を貸せばいい。

ンミナ母娘と暮らしていたある日、私はンミナに問いかけた。

「ンミナ、突然だがこの世界に他の種族は居るのか」

昼食後の日光浴をしながら聞く。

「他の種族ですか？」

膝の上で遊ぶアミラの頭を撫でながら返事をするンミナ。

「そうだ。お前達と少し姿が違ったり、大きく違ってても意思の疎通の出来るような者は居るか？」

「そうですね、商人が言うには複数居るようですよ？」

「ほう、どんな者が居るか教えてくれるか？」

私の膝にのっってくるアミラ、私は支えながら話を続ける。

「はい、森人、大地人、獣人、ですね」

「お前は会った事はあるのか？」

「いえ、実際に会った事はありませんが、それぞれの種族には本拠と言うべき土地があるそうです。そこから出て来た者が様々な町で混じって暮らしていると聞きました」

「町があるのか」

知らなかったな。

「はい、この村は辺境と言いますか……かなり閉鎖的でした。クレリア様が現れたこの十年程の間でようやく他の村や町と交易をするようになりました」

「いずれ他の種族にも会いに行くか」

「町には興味は無いのですか？」

「今はな、いずれ暮らしてみるのも良いだろうが」

ンミナの膝に戻っていくアミラ、元気だな。

「村の者が何と言おうと私はクレリア様について行きますよ」

「お前が生きている間は此処にいる」

ンミナがこの村から離れようとすれば必ず村の者は反対するだろう。

彼女が行きたいと言うなら何をしても連れて行くが、私が何処かに行かない限り彼女はこの村で過ごすだろう。

ンミナを見ると悩んでいるような顔をしている、何か迷っているようにも見えるな。

「ンミナ」

「はい、クレリア様」

「聞きたい事があるなら聞くと良い、私はお前に嘘は言わない」

彼女は暫く考えていたようだが、心を決めたのか口を開いた。

「クレリア様は何者なのですか？村の者が言うように神なのですか？様々な事を知り月日を経ても貴女様の姿は変わりません。昔から気になっていたので……聞く事が出来ませんでした」

まあこれだけの事をして人である訳が無いな。

気になっていたのでなら聞けばいいと思う。しかし何者か……その答えは残念ながら……。

「分からない」

「えっ？」

驚く彼女、まあ嘘は言わないと言った直後にこれでは分からなくも無い。

「落ち着け、嘘は言わないと言っただろう。ただ少なくとも神では

無いと思う」

戸惑う彼女に私は今までの事を話した。

突然気が付いた事、様々な知識を知っていた事、世界を巡り力を付けた事、一万年の眠りにつき目覚めた後にンミナに出会った事。

「と、まあこんな所だ」

彼女は必死に私が言った事を整理しているようだった、暫く待つているとようやく口を開いた。

「何と言えいいのか言葉が出ないのですが。その……クレリア様は遙か昔から存在していたのですか？」

信じていない訳では無いだろうが、人の身では信じるのは難しいか。

「そうだ。私は眠る前に世界を巡ったが、その頃は人はおろか生物も今ほどは居なかった。意思の疎通が出来る存在を欲した私はいつか現れる事に賭け眠りについた。そして賭けに勝ち、私は今ここにいる」

「それは神と言えるのではないのでしょうか……」

「違うな、私は全知全能では無いし自分勝手に我が儘だ。人が思うような神では無い、私は私という一つの存在でしかない。だから私は生きたいように生き、やりたい事をやりたい様にやるんだ」

私は好きに過ごす、いつか私が消えるまで。

「神と崇めるのも良いだろう。崇めたいのなら止めはしない……ただ崇める者達が望む事をするかは分らんが」

彼女は真剣な表情で私の話を聞いていたが、突然私に声をかけた。

「クレリア様」

「なんだ？」

「今は生きたいように生きておられますか？」

その質問に、私は僅かに微笑みながら答えた。

「ああ。私はやりたいように、お前達と生きたくて生きている」

私の答えを聞いた彼女はいつもの柔らかい微笑みを見せて呟いた。

「良かった」

アミラの寝息を聞きながら、穏やかに午後を過ごすのだった。

「クレリア様！お祖母ちゃんが！」

あれから五十年が過ぎ、ンミナも七十歳を超えたある日。
アミラの娘ミーナが飛び込んできた。

「そうか、すぐ行く」

彼女の命は尽きようとしている、魂の輝きは僅かしか感じない。
彼女の寝室に行くと彼女の親族が集まっていた。

私が姿を現すと彼女への道を空けた。

「……クレリア様」

年老いた彼女は手を伸ばした、私はその手を取る。

「そろそろか？」

「……はい」

もう限界だろう、私の一存で苦痛は無くした。

私の力で永遠に生きる事も出来たが彼女はそれを断った。

彼女は人として私の傍に居たいと言った。

理解は出来なかったが、彼女が決めた事だ。

「クレリア様に言いたい事が……あるのです」

「なんだ？」

「失礼だと思えます……ですがもう伝えられなくなる前にどうして
も」

私は黙って彼女の言葉を聞く、彼女の瞳は閉じつつある。

「貴女は私にとって命を救ってくれた恩人であり、姉であり、妹であ
り……娘でもありました」

そうか、お前は私を家族だと思ってくれていたのだな。

「お前は私にとって初めて心を許した人間であり、姉であり、妹であ
り……母親だったよ」

閉じた瞳から涙を流すンミナ、彼女は弱々しく、しかしいつもの微
笑みを浮かべる。

「もし生まれ変わる、……事が、あるのなら……また、貴女の、お傍

……に」

「ああ、また会おう……ンミナ」

私と家族に見守られ、彼女は微笑みながら静かに息を引き取った。

「此処に居たのね、クレリア姉さま」

ンミナの惜別の儀式と埋葬が終わり、昔と比べ広くなった家のリビングに座っているとアミラがやってきた。

立派な大人になった彼女は寂しそうな表情を浮かべる。

「アミラか……この家ともお別れだからな」

ンミナが死んだら私はこの村を去る事は事前に伝えてある。

だいぶ引き留められたが最終的には皆納得してくれた。

「姉さま」

アミラが抱きついてくる、そっと抱き返してやる。

「行くのね」

「ああ」

六十年以上をこの家で過ごした。楽しかったと言える時間だった、そしてこれから私は新たな種族に会いに行く。

体を離し外へ出るとミーナを始め親族の娘達が集まっていた。

男は居ない……そう言えばンミナの一族は娘しか生まれなかったな。

理由は分からないが調べる気にはならなかった。

次々に彼女達が抱き着きに来て別れを惜しむ。全員と言葉を交わし、やがて旅立つ時がやってきた。

「娘達、楽しく生きろよ」

そう告げて空へと浮かぶ。手を振る娘達に手を振り返し、私は村を後にした。

村を出て数日、向かっているのは大森林だ、移動中の商人に森人の本拠地を聞いたところ睡眠薬入りの飲み物をくれた上に、快く教えてくれた、顔が硬かったが。

私の感知でこの商人が不穏な事は分かっていた、残念だったな、教えてくれた礼に見逃してやろう。

今の私は村を出てから会話が出来るように翻訳魔法を常時使っているので言葉が通じないという事は無かった、これなら言葉が通じずに戦闘になる事は無いだろう。

ンミナが私の言葉を理解したのはこの翻訳魔法のような効果が出たのだと思う、初めての治療だったからな。

巨大な木……あそこか。

遠くからでもわかる目印だなあれば、木までたどり着くと根元に降り立ち巨大な木を見上げた。

果実が生っているな。

木の大きさに見合った大きさの果実が実っている、食べてみようかと思いつながら眺めていると、後ろから声が聞こえた。

「貴様！何者だ！どうやってここに入った！」

振り返ると長身の男が一人立っている、周囲にも五人隠れているな。

「私は旅人だ、ここへは魔法を使って空を飛び入った」

魔法と言っても分からないだろうが、正直に答える。

「魔法？なんだそれは!？」

やはり知らないか、それならば私のやる事は理解できないだろう。

「得体のしれないやつだ、拘束し危険ならば処刑する！」

余計な思考にそれしていると男が構えていた。

「相手に殺すと伝えないほうが良いな、恐らくかなりの確率で抵抗すると思うぞ」

「やれ！」

私に向かって周囲から矢が飛んでくる、当たっても問題ないが数本

の矢を手で掴み取りながら残りを躲した。

「また襲われるのか……」

初めてンミナの村の住人と出会った時を思い出す、今回は翻訳魔法も使ったというのに結果は変わらなかったな。

「何だ!? くっ、火を使え!」

「ファイア!」

複数の声が重なり今度は周囲から五つの火の玉……玉ではあるがとてつもなく小さい炎が飛んでくる、正気かこいつらは、森のど真ん中……更に言動からすると大事にしているだろう巨木の傍で。

「森で火の魔法を使うな! 馬鹿者が!」

自分を中心に水の球を打ち出し、すべてのファイアを相殺する、今まで何も問題は無かったのだろうか。

それにこれは魔法だ、拙いが魔力が流れているし間違いないだろう。

誰かが使えるようになる事は分かっていたが、名前は付いていないよ
うだ。

「くそっ! 増援を……!」

「止めなさい」

焦り増援を呼ぼうとする男の後ろから声がする。緑色の髪を肩辺りまで伸ばした真面目そうな青年が立っていた。

「長! しかしこいつを野放しにする訳には!」

「彼女は会話を選択した、攻撃したのはワシ達で更に周囲に被害を出さず防御に徹し、こうして話している今もワシらは攻撃されておらぬ、もう一度言う……攻撃を止め里に戻りなさい」

「……奴と二人だけにはできません私は残ります」

男が手を軽く振ると、周囲の気配が離れて行った、里とやりに帰ったのかな。

「里の者が失礼をいたしました、どのような用向きでいらしたので
すかな?」

攻撃を支持していた男が後ろに下がり、長と呼ばれた男が話しかけてくる。警戒はしているようだ、当たり前前だな。

「突然入り込んで悪かった、攻撃を受けた事は気にしていない、大事な場所についての間にか侵入者が居たら当然だろう」

「そう言う問わずかに警戒が緩んだ、話が通じる相手だと思ってくれたかな？」

「私はクレリア・アーティアと言う、クレリアでもアーティアでも好きに呼んでくれ、ここにやってきた目的だが、ここに住むという森人に会いに来た、可能ならばここに暫く住み交流をしたいのだが」

「後ろに待機している男が僅かに反応したが、割り込むのは問題だと思っただのか、沈黙を保っている」

「それは、難しいですな……ワシらは他種族と交流をしないという訳ではありませんが、里に他種族の者を長期間住ませた事はありません」

いきなり言っても難しいか、何か彼らの得になるような事を条件に出してみるかな。

「話は変わるが、先程私が受けた魔法、なぜ森の中なのに火の魔法を使うんだ？」

いきなり話題を変えられて少し戸惑う長だがすぐに話し始めた。

「魔法？それは火を放つ私達の技の事ですか？私たちはこれで火をおこし料理をし敵を撃退してきました、確かに森を燃やしてしまう事はありますが、ある程度燃えると自然と鎮火するのです」

「火魔法しか知らない……？しかし森に居るのになぜ火魔法が使えるようになった、他の魔法の方が身近に感じるが。」

「話したくなければ話さなくても構わないが、過去に何か火に多く関わるような事は無かったか？里に昔から伝わっている話などは？」

「火に関わる事……心当たりはありますが」

「魔法を……火を使えるものがそのあとに出始めなかったか？特にその火に関わった者達に」

「そう言うとは長は目を見開く、これは何かあるな。」

「過去に森に大火事が発生したことがあります。それまでワシらは火打石などを使って火を起こしていたのですが、それが燃え

広がり当時の里はかなりの数の犠牲者を出し、生き残った者たちが

火を使えるようになったと記されています」

「火にまかれ無意識に生き残りたいという気持ちで火を操る方向に働いた？」

私の言葉を聞き驚きの表情を浮かべる二人、火の不始末が原因で習得したとは思わないよな。

あくまで予想でしかない、真実は謎のままだな。

「思わず話し込んでしまったが、結論から言うとその技術は魔法と言う、更に魔法は火だけではない、先程使った水も魔法だぞ」

そう言いながら目の前に拳大の水を作り出す、見せるならこれが一番安全だと思う。

「おお、これが水の、魔法……？」

思わず近づくと長だが、男が止める。そして代わりに近づいてくる。

「クレリア……殿、これは安全なのか？」

男が水の前で立ち止まり聞いてくる。

「ああ安全だ、程よく冷やしているし、飲むこともできるぞ」

そう言っただけは水をすくい飲む、それを見た男は意を決したように同じようにして水を飲んだ、結構度胸があるなこの男。

「美味い……」

思わず呟く男の後ろから長がやってきて水を飲む。

「……確かにこれは美味い」

「言っておくが技術が無ければこの様にはならないぞ、濁ったり不味かったり酷いと有害だ」

出していた水を消し、説明する。

長は何か考えていたが二人の中から警戒と不審がほとんど消えている事は分かった、やがて長が口を開く。

「クレリア殿、この魔法と言う物を教えて頂きたい、もし引き受けていただけるのなら先程のお話お受けいたします」

私は、僅かに微笑んで話を進めるのだった。

住む家も決まった、後は授業の事を決めないとな。

結果的に私は受け入れられた、あの後森人が集められ私を魔法の教師として紹介した。

反対の声もあったが私が作り出した水を長とあの男……守備隊長だったのだが、その二人が飲んで見せ、皆に飲ませる事で決定した。私の家は里の外れの小さな家だった必要な物はすべてあるし何の問題もないな。

ボロボロだった家具や建物は魔法で修復した、後に私の家に呼びに来た里人が綺麗になった家と内装に驚き、魔法だと知ると話が里中に広がり、暫く名所のように人が訪れるようになった。

私は不信感をなくせるならと放置する事にした。

何時、どの程度教えるかは事前に人数を決めて決まった順番で教える事になったのだが……。

「里の者すべてが教えて貰いたいと?」

「はい」

里の全員が魔法の授業を望んでいた、里の運営は大丈夫なのか?

「里の方は平気なんだろうな?」

「クレリア殿の魔法を見て皆が習得したいと思ってるのです、ワシもその一人ですから……しかし里の運営が疎かになるのは困りますな……」

長の家の広間で一度の授業で受ける人数を聞きに来たのだが、結果はこうなったわけだ。

私が意図しなかったとはいえ、魔法の万能性を見せてしまったのも原因だな。

「全員に教えるのは構わないがやる事はやるように徹底する、するべき事をしない者には教える事は無い、これは里の事だけではない、魔法を使う為の知識や心構えを疎かにする者には教えない、その事を一度説明する」

「うーむ……確かに知識や心構えは大事ですな、ワシ等も何度となく森を燃やしていますから……一度説明して納得してもらおうしかないですな、どちらにしろこのままでは駄目だという事は皆分かっ

おるでしょう」

大人気のようで何よりだが、里の事を後回しにするのは駄目だろう。

その後説明をして、全員がまんべんなく授業を受けられるように調整をし、この問題は解決した。

森人達に魔法の授業をして一月ほどが経った、森人達は魔法の資質がかなり高かった理解してしまえば上達は皆早かった。

魔法を使う者の知識と心構えをしつかり教え込んでから魔法の実践をしているが今の所、誰一人教えられないような者は居なかった。教えを受けた後の魔法の威力で考え無しに使ったら、危険極まりないからな……変な奴には教えたくない。

それはともかく今私は里にある巨木、里に来た時最初に見た目印になる大きさの木の下に居る、この木は里の皆から神木扱いされているので無理かと思っただが、長に頼んでみると果実は食料として大切に扱われていて採っては駄目と言う訳でも無いらしく、一つだけなら取る許可をもらった、どんな味が楽しみだ。

浮かび上がり果実の高さまで移動する、大きい果実が生っているそれをもぎ取り眺める……。

「なんか見覚えがあるな」

似た果実を見た気がする、私はマジックボックスを確認してみる……あつた、昔枯れかけていた木から採った果実だ、大きさは違いうがよく似ている。

私の中である考えが浮かぶ、かつてあの木は私の回復魔法を受けて大きく太くなったが……あのまま成長を続けたら、これ位になってもおかしくは無いんじゃないか？

考えすぎか。

たとえそうであつても特に何かある訳ではないしな……ただ、もしそうであつたなら。

「間違っていたらすまないが……、元気なようで何よりだ」
木の幹に手を当てて呟く……気のせいかもしれないがこの木が喜んでいような気がした、もぎ取った果実は実に美味しかった。

神木の果実を味わってから半年ほどたったある日、授業が無い日であつた私は里の近場の森でのんびりとくつろいでいた。

「話したい事があるのなら出てきて話してみろ、聞くだけ聞いてやるぞ?」

私がそう言うのと離れた所にある木の陰から一人の青年が姿を現した。

「確か、ケイン・イヌスだったか?」

現れた青年はケイン・イヌスだった、彼は教え子の中で一番若い魔法の知識、危険性に対する知識の必要性や心構えの問題などに高い理解を示し既に里の中でもトップに近い、魔法への適性が高い森人の中でも頭一つ抜き出ている男だ。

「申し訳ありません師よ、どうしてもご相談したい事があつたのです」

「師と呼ぶのは……まあいい相談とはなんだ?」

彼は私を師と呼ぶ、出来れば先生と呼んで欲しいのだが変える事は無かつた、ンミナといい彼といい強情な奴に好かれるのかな私は。

「はい、師よ私には夢があるので魔法学校を町に作り世界に魔法の基礎を広めたいのです」

「お前は魔法の危険性をよく理解しているはずだが、そのあたりはどう考えている?」

「……師の教えを受ける前に拙いとはいえ私たちは魔法を使っていました、このまま時が経てばやがて何もしくとも魔法技術は世界に広がるでしょう」

「そうだな、私もそう考えている」

「やがて広まるのなら、何の準備もなく待つよりもこちらから正し

い知識と技術、心構えを教える環境を作りたいのです」

なるほど、先に環境を整えて魔法の才能を開花した者たちを受け入れ必要な事を教える、と。

「悪くないかもな、だがどうやって実現する？お前一人が力を尽くしても町にそれだけの施設と人員をどうやってそろえる？」

「町で少数に魔法を教え魔法の良さを教えます、地道ですが始めが肝心です、そして数を増やし小さな学校を始めるのです、他のものであったならこの方法は確実では無いと思いますが、魔法ならば知ってしまえば確実に誰もが欲するでしょう」

「悪くは無い、穴だらけだったとしてもやりたいようにやるのが一番だ……しかし」

これは伝えておかなければいけない私はそんなことはしたくないからな、いや教師の一人として目立たないように出来ればそのうちやるのも良いかな？

「私が手伝うのはお前に教える事だけだ、後はお前が教え育てろ」

「はい、もちろんです、師よ」

「あと一つ、私の事は誰にも言うな」

ケインは驚いた顔をする、有名にでもなったら動きにくくて仕方ない。

「なぜです、師よ、貴女こそが魔法の祖だというのに……」

最初からあった知識であって私が編み出したものではないのだが、彼にそこまで話す気にはならなかった。

「私はそのような者ではない、名声も地位も興味は無い、名や顔が売れ動きにくくなるだけだ」

「しかし……」

なおも食い下がるケインにはつきりと宣言する

「私の名を口外しない事、これを守れないのならお前には今後一切教える事は無い……なに、今の段階でも夢は叶えられるだろう、好きにするが良い」

「つく、師よ私はまだ……分かりました貴女がそこまで言うのなら彼は諦めたように息を吐くと私の名を出さないことを了承した。」

「お前の気持ちは嬉しく思う、だが私には必要ないんだ、少なくとも今はな……しっかりと教えてやる、後はお前次第だぞ」

「はい、これからもよろしくお願いします」

彼は跪き首を垂れる、彼の夢は叶うのか夢のまま終わるのか。

ケインの夢のために魔法をより深く教える事を決めて、しばらく経った。

彼は私が休みの日にも訪れ個人的に教えている、私の家で教えているとき、ふと気になり彼に質問を飛ばす。

「ケイン、魔法学校を作ることに対して長や、里の人間、お前の家族はどう思っているんだ？」

ケインは私の教えた魔法の教えを書いている本から顔を上げ、私に向き直る。

「全員師の教えを受けてある程度理解しているので、以前師に話した内容と同じことを伝えた所おおむね賛成してくれました、反対する者も居ましたが魔法の祖である師が許可したことを伝えると納得しました」

「お前そのために私に最初に話したな？」

「はい、皆貴女から教えを受けたのです、この技術は元々師の物です、貴女が良いと言えば他の者は反対できないと思っていました」

あれほど魔法を我先に教わろうとしていた里人がケインの事を野放しにしているのはおかしいと思っただがそれが原因か。

「そこまでしているなら夢は叶えなければな」

「必ず」

こうして再び授業に入るのだった。

ケインに魔法を教え始めて十年が過ぎた、そろそろ彼に私の知識や

何者なのかを話そう、それだけの信頼は出来た。

以前これだけの知識と技術を持つ私は何者なのかと聞いてきた事があったが、まだ教えられないと断った。

それからその事に触れなくなったが、知りたくない訳では無いだろう。

「ケイン、以前私が何者かと聞いた事があったな」

「はい、我が師よ」

「これからそれを話そうと思う」

彼の驚く顔、しかしすぐ真剣な表情に変わり姿勢を正した。

そして私はこれまでの事を語った、突然気が付いたこと、知識があったこと、世界を回り力をつけ、永い眠りにつき、人間と暮らし、ここに来たことを。

彼は黙って聞いていたが特に驚いていないようだ、かなり驚かれると思っていたのだが。

「まあ、こんなところだ私は魔法の祖では無いといった意味が分かったか？」

「確かに師がそう思ってしまうのも無理はありませんが……しかし別の可能性もあるのでは？」

「別の可能性だと？」

「気が付く以前の記憶が無いとおっしゃいましたが、その知識はすべて貴女が編み出した物で過去を忘れているために知らない知識だと勘違いしていたのでは？ 貴女程の方の事です記憶と知識や技術を分割していたという可能性もあります……それに理由がどうであれ貴女の中にある物はあなたの物です、私はそう思いますが……」

無いとは言えないが、どうしても実際に記憶がないから、ハッキリしないな。

それでも私の中に在るのだから私の物か、いい考えだな。

「しかしお前は特に驚いて居ないようだがどういうことだ？」

「師よ簡単な事です、人間よりかなり長い寿命を持つ森人があの程度の魔法しか使えていなかったのです、比べ物にならない知識と技術を持った師が普通な訳がないでしょう？ 更に言えば師は森人でない

事は確實、にもかかわらず十年以上経った今も変わらず少女のままです、そして私を知る限りそこまで寿命が長い種族は森人以外居ません、つまり師は現在知られている種族以外の存在であると言う事です……これは気が付かない方が難しいですよ？」

「確かにそれは気が付くしかないな」

「ええ、知っていたのですから驚くのは不可能です」

微笑みながら言うケイン。

「話していただいたこと、嬉しく思います……貴女が何者でも貴女は私の師です」

そう言つて跪く、良い弟子にあたったものだ。

「よし、授業を始めるぞ」

そう言うケインは立ち上がり椅子に座る。

「師よこの部分なのですが……」

「その部分はここが関係しているつまり……」

「なるほど……確かにこれなら……」

再び魔法の授業に没頭してゆく。

更に五年後彼が里を出る時がやってきた、彼が可能な魔法はすべて教えた、高度な魔法は魔力が足りないのか技術が足りないのか発動しなかった、彼はかなりがっかりしていたが自らの力不足だと割り切った、諦める気は無い様だが。

彼はこれから大きな町に移り魔法学校を作るために活動を開始する、彼は今里の出口で里人達と別れの挨拶をしている。

そしてそれを終えると私の前にやってくる。

「師よ今までのご指導感謝してもしきれません」

「私はやりたくないことはしない、なかなか楽しかったぞ」

「必ず成功させて見せます」

彼もそれなりの歳なっている、森人の特徴で青年にしか見えないが。

「お前でもどうにもならない問題が起きたら念話で知らせろ、内容によつては助けてやる」

知らないうちに町がケインごと消えていたりしたら流石に寝覚めが悪いからな、それだけ言つて家に帰る。

「師よー」

後ろから声がかかり足を止める。

「行つてまいります……我が師よ」

「行つてこい……我が弟子よ」

私は振り返らずその場を後にした。

ケインを送り出し魔法の授業は続くそんな日々の中、私は長に聞きたい事があり家を訪れた。

「クレリア殿、本日はどのような御用ですかな？」

長はにこやかに迎えてくれた、私は出された飲み物を一口飲み話を切り出した。

「種族の事を聞きたい、大地人や獣人などの本拠を知りたいんだ」

「なるほど、少々お待ち下され」

彼は部屋の隅にある本を手に取りページをめくる、数ページめくるとこちらに本を渡してきた。

「ここに載っております、移動していなければ間違いないかと思いますが」

どれどれ……大地人は森と隣接した鉱石が取れる洞窟、山岳地帯、獣人は各地を移動するのか範囲は決まっているのか。

獣人は位置がはっきりしないな、大地人に会いに行つてみるかな。

「長、そろそろ私は他の種族に会いに行こうと思う」

「そうですね、寂しくなりますの……」

「予想はしていたか？」

「そうですね元々交流のためと言っていましたのでな、ケインが里を出て一つの区切りとなりました、ですので恐らく、と」

「数日後には出発しようと思う」

「分かりました皆にも伝えましょう」

その後私が里を出ると知った里人が別れを惜しみ宴になった……
随分馴染んだものだ。

数日後私が旅立つ日が来た、皆と別れを交わした、誰もが教わった事を伝えていくと言ってくれた。

「教え子達よ機会があればまた会おう」

彼らは長寿だ機会があれば会う事もあるかもしれない。そう思いながら空に舞う、今はもうだれも驚くことは無い。

皆が手を振る中、私は大地人に会う為本に載っていた土地を目指し出発した。

森人の里を後にして大地人の住処へと飛行する、広い森を抜けて程なく荒野と山岳地帯が見えてきた、あの山岳地帯のふもとに住処の一つがあるらしい。

立ち上る煙が見える、恐らくそこが住処だろう。

次は襲われたくは無いな。

今度こそ戦闘にならないように、かなり離れた見えない場所に下りて徒歩で向かう、これならさすがにいきなり攻撃は受け無いと思う。そこそこの距離を歩き住処が見えてくると立ち上る煙と甲高い金属音が聞こえる、本には住処しか載っていないが、音からすると金属加工の技術を持っているのかな？

ぜひ見てみたいがまずは住む許可を取らないとな。

住処の入り口には明らかに金属製の武器と防具を付けた、やや背の低めながつしりとした男女が立っていた。

近寄っていくと、男の方が気が付き声をかけてくる。

「嬢ちゃんこんなところに一人でどうした？何かあったのか？」

やや警戒しながらも気遣いの言葉をかけて来る。

「始めまして、私はクレリア・アーティアと言う旅人だ、各地を回って様々な種族に会いに行っている」

そう話していると、女も近寄ってきているのが見えた。

「その歳でか？魔物も出るつてのに子供一人で各地を回ってるのか……怪しいな」

最後は小声だが聞こえているぞ……いきなり怪しまれてしまった、確かに怪しいかも知れないが本当なんだ。

「私は戦う術を持っている、子供だからと思っ言っているのなら、私はこんななりだが成人しているぞ」

成人どころか一万歳オーバーなのだが、嘘は言っていないよな？

「そうなのか？……いや、すまなかつたそれで……」

「ロドロフ、とりあえず入れてやったらどう？」

こちらにやってきた門番の女が会話に割り込んできた。

「ミシヤ、しかし素性がはつきりしない者を入れる訳にもいかないだろう?」

難色を示すロドロフと呼ばれた男、ミシヤと呼ばれた女はさらに言葉が続ける。

「見た限り武器も持ってないし、危険は……武器もなくここまで来たのかい?!」

何も持っていない私に驚く彼女……確かにおかしいな、どうするか。

「あー、ミシヤと言ったかな、私は、魔法と言う技術の使い手でな武器は必要ないし、荷物も見えない所にしまつてあるのだ」

これで納得してくれると良いが。

「そんな物聞いた事も無いよ、証明は出来るかい?」

「そうだな、私が危険な人物で無い事は森人が証明してくれると思う、連絡が取れるのなら取ってみると良い、後は魔法の証明だが……」
ここはいつものウォーターボールだな。私は手の平を上にして差し出し、水の球を作る。

「うおっ!?!」

「なんだいこれは……」

驚き飛びのき武器に手をかける二人……しつかり説明してから使うべきだったな、長く生きてても迂闊なところは直らないな……。

「驚かせてしまったがこれが魔法だ、使い方を間違えなければ便利だぞ」

「これが魔法かい? 凄いもんだねえ」

私が動かさずにいるとミシヤが近寄ってくる、ロドロフも剣から手を放す。

「焦ったぜ、やるなら先に言ってくれ」

「証明しろと言われたからやったが、確かに先に言うべきだったな、悪かった」

素直に謝る、私にはとっくに当たり前のことだが魔法を知らない二人には警戒するべき物だ、もう少し慎重になるべきだった。

「ここに住んで交流したい、住処が駄目なら近くに滞在してここに通うという形でもいいのだが……」

「すげえなこりゃ……おつと悪い、交流か……俺達が勝手に返事は出来ないな、お頭に会ってくれ」

水球を見ていたロドロフが我に返る、どうやら通してくれるようだ。

「後、住処でさつきみたいにいきなり何かするのはやめてくれ、色々不味いと思う」

「……分かってている」

釘を刺されてしまった、気を付けるとも、直せるかは分からないが。

今私はお頭と呼ばれている男の家に居る、石造りのしつかりした家だ。この家に来る途中に武防具を作る工房があった、そういった物は作った事が無い、正確な知識が無く出来なかった、実に興味を惹かれる。

「交流か」

「そうだ。知りたい事があれば教える、その代わり武防具の作り方を教えて欲しい」

腕を組み考え込むお頭、やがて口を開く。

「二つ質問したい。その魔法は鍛冶に使えるか？」

「どうだろうか？そこまでの使い手になれるなら可能だろうが……」

「そうだな……まず水の魔法は鍛冶はもちろん日常生活にも使える。安全な飲み水をその場で出せるのはかなり便利だと思う」

お頭に目を向けると彼は深くうなづく、私は更に話を続けた。

「後は、火の魔法だが……これは私なら間違いないが大地人がそこまで至れるかは分からない。個人の才能や努力はもちろん種族的に資質が無い場合もある。少なくとも日常生活に使え炉に火を入れる事が簡単になるのは間違いないが……」

「例えそうであっても魔法とやらはかなり便利だな」

「どうやら興味を持ってくれたようだ、私はもう以前のように自分から魔法を大勢に教える事に忌避感を感じていない。

ケインの魔法を広めるという考えを聞いた後、これから一気に魔法が世界に広がる事を確信した。

「私一人が苦勞して秘匿した所でもう意味は無いだろう、ンミナ達の村にもいずれそれは届くはずだ、問題は無いと思うが……それに特に見返りが無かったり親しくない者に教えるのは今も面倒だと思っている。」

「よし決めたぜ嬢ちゃん。その話受けるぜ」

「考えていたお頭が決断したようだ、良かったこれで武防具の作り方を学べるぞ。」

「私は成人していると云ったはずだが」

「先程から皆が嬢ちゃんとか呼ばないので訂正する。」

「その見た目だしな。それに成人してたって俺からすれば娘みたいなもんよ」

「まあ蔑称で無いなら構わんか……」

「私は早々に諦めた。特に嫌と言う訳でもない、ただ娘と言う年齢ではない。」

「こうして私は大地人の住処に住む事を許され、魔法の授業と装備作りに精を出す事になる。」

「大地人の住処に住んで五年、装備作りに入れ込んでしまった私は彼らに風魔法と魔道具の知識を伝え、新たな魔道具や魔法武器を作るようになり、それぞれ誰が作ったのか分かりやすいように固有の印を作品に付ける様になった。」

「嬢ちゃん剣の魔道回路の組み込み終わったぜ」

「魔法出力の調整も終わったわよ」

「魔法製品の魅力に取りつかれ、すっかり私の弟子のようになってしまったロドロフとミシヤ、しかし呼び名は相変わらずだ。」

「分かった。まずミシヤの魔道具を見る、ロドロフ達は組み込んだ回路のテストをしておいてくれ」

すぐさま指示を出す、彼らの物作りへの情熱は予想以上だった。ある日個人的に魔道具技術を使った装備を見られた後はあつという間だった、教えを請われ断るも大地人のほとんどが……お頭さえも頭を下げ頼み込んで来たのだ。

私はいつか最高だと思える武器を私に譲るという条件で教える事にした。

「分かったぜ。よしお前ら準備しろ！十分注意しろよ！」

「おう！」

仲間達の返事が重なり移動していく。

私は静かになった作業場でミシヤの調整した魔道具を確認した。

「うん……良く出来ているな。これなら使用中に暴発も無いだろう」

「良かった……随分手間取ったよ全く」

大地人の魔法資質は高くはなかった。それでいて魔法製品を極めようとしている。資質の低さを訓練と器用さで埋めている、素晴らしい。

私は細部を確認しながら、彼女に話しかける。

「ミシヤ、子は作らんのか？」

「ぶっほ！」

部屋の飲食スペースで飲み物を飲んでいたミシヤが噴出した、後で拭いておくように。

「いきなり何言ってるんだい!？」

「後継者はいらぬのか？」

折角の技術だ継ぐ者が欲しくは無いのだろうか？

「そりゃあ、そろそろ欲しいとは思うけど……私もロドロフも忙しいし」

「しかし、欲しいのなら作った方が良いのではないか？いざと言う時後継が居れば安心だろう」

「鍛冶の為って訳じゃないけどね」

後を継がせる為に作る訳では無いという事か？

「分かってている。子供は可愛いものだからな……生まれた子が違う道を行くならそれも良いではないか」

「そうね……近いうちに話してみようかしら」

気になったのでおせっかいをしたが、後は二人の問題だな。

私は代々受け継いで欲しいものだ……私がいつまでも通えるようにな。

それから更に五年後、様々な製作法を試し、僅かな量と種類だが魔法金属を大地人の力で生み出せるようになった、勿論それらの技術や製法は書物に記してあるようだ。

私もそれなりに装備品を作り見本として彼らに譲った、そんなある日。

「そうだ。獣人達にも会うつもりだった」

残っていた獣人の事を思い出した……装備の開発はこの辺りにして獣人を探すか。

「どうしたんだいお嬢？」

全く関係ない事だがお嬢ちゃんからお嬢に呼び方が変わった……特に言う事は無いな。

「ミシヤか。いやそろそろ新たな種族……獣人に会いに行こうか迷っていてな」

ミシヤは何とも言えない表情をする。

「行っちゃうのかい？ロドロフも寂しがるよ」

「済まないな。しかしもう決めた事だ」

ミシヤは困った顔をしながら答える、悪いがずっとここに居る気もない。

「行っちゃうのか……まだ最高と呼べる物は出来ていないのに」

その日の夜ロドロフ夫妻に此処を去る事を告げた、ロドロフは約束の装備が出来ていないと言うが、それに関しては考えている事があ
る。

「その事だが、また私はここにやって来るその時に渡してくれれば構わない」

「また来た時か……それでもいいなら構わないがもつと色々一緒にやりたかったぜ」

「もし私がいつまで経つても来なかったら子供か誰かに預けておいてくれ」

子供と聞いてロドロフが恥ずかしそうな顔をする、そのうち子供が出来るかもな。

「今まで過ごしていたんだ。何となく気が付いているかもしれないが……」

「お嬢が何者かって事かしら？」

ミシヤが答える、十年以上経つても私は変わらないからな、今までもそれが理由で皆察していた。

「その通りだ、私は特殊な種族なようで寿命が異常に長い。今の時点で一万年以上生きている」

「なっ!？」

「嘘でしょう?」

声を上げるロドロフと思わず確認するミシヤ、まあ普通そうなるか。

その驚き様を見ると今まで共に居た者はあつさり受け入れ過ぎだったように感じる。

「本当だ。私の力は長い研鑽の結果だ、遙か昔私も森を火の魔法で燃やしかけたり、風の魔法で地面に頭から突っ込んだりしていたんだぞ?」

そう言つて僅かに微笑む、二人はそんな私を見て少し落ち着いたのか再び話を聞く姿勢に戻ってくれた。

「だから私が受け取れない事はまず無いだろう」

「あまり時間が経つと本人か分からなくなるんじゃないのかい?」

ミシヤが疑問を口にする、確かにそんな気は無いがあまりにも受け取りに来るのが遅かった場合、引き継いだ人物が私を渡す相手だと判断できないだろう、そう思っているのとロドロフが口を開く。

「それなら何か証明する物を作ろう、それを私たちが持つておいてお嬢が来たらそれを使つてもらえばいい」

「アンタ具体的にはどうするのさ」

ミシヤが突つ込む、本人を確かめる物か……使えそうな物は……。

「そうだな……それなら魔力パターンならいけるか？」

「魔力パターン？」

疑問の声を上げるミシヤ、これは今まで特に気にしていなかったからな。

「魔法が魔力を体内に取り込み発動するが魔力を使う時一人一人パターンが違う、それを記録して本人の物と比べて確認するわけだ」

私にもパターンがあるのは知っている、ただ私は周囲の魔力や魔素を取り込まずに使える上にパターンを変えられるので、効果がないな。

「凄いなそれは……ならお嬢が旅立つ前の最後の作品だ気合入れて作るぜ！」

「いいねえ、もちろん手伝うよ！」

盛り上がる二人不正が出来ないようにしつかり作るのでしょうか。

こうして魔力パターンを使った認証システムを作り、私のパターンを記録した。

これで問題無さそうだ、破壊されても予備を作っておけばいいだけだしな。

そしてそれからしばらく経ち旅立つ日がやってきた、大地人達が鍛冶の手を休めて見送りに来てくれた。

「今まで楽しかった、これから素晴らしい物を作り続けてくれ」
頷く大地人達、私はロドロフとミシヤを見る。

「お嬢の事を話せないのは辛いな」

残念そうに言うロドロフ、二人には私の種族としての特殊性から私の事は他言無用にと頼んでおいた、そして魔法について分からなくなったら何処かの町に居るケイン・イヌスと言う森人に私の名を出し相談するように伝えた。

里の者には詳しく話さなかったが、私が名を広めて余計な事に気を使いたくないと言うと了承してくれた。

……まあもしも本気で嫌になれば隠れ住むか、まとわりついてくる者達を全て消してしまえばいいのだが。

「どんな物が出来るか楽しみになっている」

「おう任せとけ！」

「ええ、驚かせてやるわ」

私の言葉に答えを返す二人、これなら安心だな。

そう思い空に上がり大地人達に手を振ると獣人を探しに出発した。

大地人の住処を後にして森を上空から感知で探していると、人のような獣のような気配を感じる……何かに怯えている？

居た、襲われているな。

一人の耳と尻尾が生えた少女らしき姿が見える、猫科らしき魔物に狙われているようだ、獣人は高い身体能力があると書いてあったが、あの魔物はそれほどまでに強いのか？

考えるよりまず助けようか、接触するのに都合が良さそうだな。

悪い癖だな、さつさと助けてから考えよう。私は魔物の上空に移動し飛びつこうとした魔物の頭を急降下しながら踏み砕いた。

「よし……おい、大丈夫か？」

彼女の方を見ると気絶していた、目の前で頭が砕け散ることなど戦っていればある光景だろうに。

「仕方ない……介抱するか」

彼女を寝やすいように横たえて弱く回復魔法をかけると、程なく彼女は目を覚ました。

「あれ……あつ！魔物っ!？」

飛び起きて辺りを見回す彼女、近くに頭を砕かれた死体が落ちているを見て体を強張らせる。

「魔物は始末した、安心しろ」

そう言うと彼女はゆっくり私を見て、プルプルしながら話す。

「こ、殺さないで、死にたくないです……」

命乞いを始める彼女、何とも言えない気分になる私だが誤解を解かないとな。

「私は助けに来ただけだ、もし敵なら起きるのを待たず殺している」

「た、確かに……」

納得してくれたようだ、まずは名を名乗るか。

「私はクレリア・アーティアと言う、旅をして様々な種族と共に過ごしている」

「ら、ラムラン……です」

ラムランは見た所狼か……犬じゃないよな？ 獣人のようだ群れに連れて行ってもらおうかな。

「いきなりだがラムラン、お前の群れに暫く住んで交流したいのだが、連れて行ってくれないか？」

「うえっ!? ああ、すみませんその……」

混乱するラムラン、一気に言い過ぎたか。

「あー、悪かった暫く待つてるから落ち着いてくれ」

落ち着かせる為に暫く黙っている。

「あの……もう大丈夫です」

しばらく待つてしていると落ち着いたのかこちらに声をかけてくる。

「そうか、では連れて行ってくれるかな？」

「連れて行くのは構わないのですが、その恐らくリーダーに戦いで勝たないと難しいと思います、強いものが偉いので……」

悲しそうな顔をするラムラン、何となく察した……魔物を前にあれでは彼女が戦いに向いていないのは明らかだ。

「なるほど、リーダーと言う事は一番強いと言う事でもある訳だ」

「はい……」

「そのリーダーはそこで死んでいる魔物を一瞬で殺せるか？」

先程始末した魔物を指さしながら言う。

「い、いえ！ 無理だと思えます！」

「なら問題ないな連れて行ってくれ」

そう言っって彼女の手を取る、彼女は少し体が跳ねたがそのまま群れへと連れて行ってくれた。

その群れは川に近い開けた場所にあった、獣人以外が来るのが珍しいのか、リーダーの所へ向かう間に集まってきた。

「弱虫ラムランが人間連れて来たぜ」

「まさか人間に助けられたんじゃないだろうな」

「あいつならありそうだな」

ラムランに対する言葉が聞こえる、やはり弱い者はあまり良く思われていないのか……ラムランは私の手をギュッと握り、リーダーの家に案内してくれた。

「人間に助けられるたあこの恥さらしが！」

リーダーの家に着き経緯を話すとリーダーはラムランに怒鳴り始めた、二足歩行の狼と言った容姿の何というか色々荒そうな男だ。

後ろに立っている獣人も見た目は似ているが副リーダーか？

「お前でも手こずる相手だった様だが？」

「弱い人間は黙つてろ！ぶつ殺すぞ！」

口を挟むと怒鳴り返してくる。

「ラムラン！お前のような弱つちい奴は群れにはいらねえ！お前は追放だ！」

泣きそうなラムラン……何とかするか。

「リーダーよ、この群れは強さが地位を決めると聞いた、私がお前に勝ったら私を住ませ彼女を許す気は無いか？」

「ああ!?お前が勝てるわけないだろうが！」

先程から叫んでばかりだなこいつは、しかし勝負をすればすべて上手に行く。

「ほう、負けるのが嫌なわけだな」

「んだと……う？」

扱いやすすぎる……これは下に色々考えられる者が居るな。

「リーダー。簡単に相手の口車に乗るな」

後ろに立っている獣人が声をかける、馬鹿め……このタイプにそんな事を言えば……。

「うるせえ！サクツとやってやるよ！勝負だ！」

ほらこうなった、後ろの男はやってしまったと言わんばかりに頭を押さえる。

こうして、オロオロするラムランを置き去りにして話はずいたのだった。

場所は変わり恐らく模擬戦をするのだろう広い何も無い場所に連れてこられた、周囲には戦いを見ようと獣人達が集まっている。

ラムランも私の強さは何となく魔物の事で分かって居るはずだが心配そうだ。

「もう後戻りは出来ねえぜ」

「何の問題も無いな」

離れて立つ私とリーダー、さて殺さないようにしなくては……。無力化するには凍らせるか？

「始め！」

合図の声と共に突っ込んでくるリーダー、確かに中々早いな、しかし……。

「な、なんだ!?!」

一瞬にして地面とリーダーの両手足が氷でつながる、暴れて動こうとするが動けない、周囲が騒めく中私は彼の前まで進み話しかけた。

「私の勝ちだな？」

「良く分からねえもん使いやがって！拳で勝負しやがれ！」

何を言う使えるものは使う物だ、もしもそうしたいのなら事前に拳のみと言えば良かったものを……。

しかし、気が済むまでやった方があとくされが無いか。

「我が儘な奴だな、仕方ない付き合ってやろう」

魔法を解除するとリーダーは一気に私に近寄り殴りかかってくる、私はそれをするりと躲し彼のみぞおちに優しく攻撃をした。

「ガッ!?!」

彼は勢い良く吹き飛び周りで見ていた獣人達に突っ込んだ……。いかに……。やりすぎたか？死んで無いだろうな……。

騒ぐ獣人達の声を聞きながらどうしようか考えていると、リーダーが獣人の輪から出てきた。

「まだ……。ゴボッ！負けてね……。え」

そう言い残し彼は口から血を吐きながら倒れた。

すると周りの獣人達が私に立ちふさがる。

戦いで強さを競うが仲間思いではあるようだ、それはともかくあのままでは死ぬな……助けるか。

「彼を殺す気はない。そこをどけ！手遅れになるぞ！」

立ちふさがる者たちにそう言いながら倒れた彼に歩み寄ると獣人達が割れて道が出来る、私を近付けたくないが自分達では敵わないと思っっているようだ。

「即死でなくてよかった……」

生き返る魔法も魂に干渉できる私なら出来るかも知れないが、今すぐ出来るかと言われれば分からないからな。

弱い回復魔法をかけると呼吸が安定し寝息を立てるようになった、もう大丈夫だろう。

「誰か寝床に連れて行ってくれ。私は群れの外に出ている、彼が起きたら呼んでくれ」

そう言うと数人が駆け寄り連れて行った、やりすぎてしまったが……どうなるかな。

「お前の方から来たのか」

それから十分程で彼がやってきた、群れの連中も来ている、魔法が良く効いたのか彼が頑丈なのか。

彼は急に伏せると私に言った。

「参りました姉御！群れ一同姉御について行きます！」

「……んっ？」

……ああ、強い者が一番偉いんだっただ……考えれば分かる事じゃないか、とりあえず何とかしなくては。

「断る」

「そんな!?姉御!」

「私がお前達を率いる事は無い。獣人でも無いし……強者である私の決定だ、文句は無いな?代理として引き続きお前がリーダーとし

て群れを率いていけ」

「つぐー……分かりました姉御」

ここに住みたいだけだ余計な物はいらぬ。

「後その呼び方だが……」

「何でしよう姉御！」

尊敬するようなキラキラした目で見てくるリーダー、態度が違くないか？……まあいいか。

「何でもない、私はここに暫く住む皆はいつもの生活に戻ってくれ」
はい姉御！と声が重なり皆そろそろと戻って行く、そしてラムランだけが残った。

「あ、姉御」

「ラムランお前だけでも名前前で呼んでくれ」

「わ、分かりましたクレリアさん」

名前があるのに誰にも呼ばれないのはな、彼女が居てよかった。

その後家を借り、そこで暮らすことになった、魔法に興味を持つかと思つたがあまり興味が無い様だ。

追放と言われたラムランも普通に暮らして私の家に良くやつてくる。

それなりに仲良くなったと思う、そして今日もラムランが来ているので聞いてみた。

「ラムランは戦いが苦手なようだが何か得意な事はあるのか？」

そう聞く私にラムランは笑いながら答える。

「そうですね、役に立つかは分かりませんが草や食べ物危険であるか体に良いかが分かります、匂いと感覚で」

「含まれている良い成分と悪い成分を判別出来ると？」

「そうですねですかね？ただ今まで間違つた事は無いですね」

これはすごい能力なのではないか？これを生かせば錬金術師としてやっていけるのではないだろうか。

「ラムラン、錬金術を学んでみる気は無いか？」

「錬金術？」

ラムランは首をかしげる、私は彼女に錬金術の説明をする事にした。

「よろしくお願いします、師匠！」

彼女は学ぶことを選んだ、戦えない自分に何か出来る事があるならという理由だったが。

「これからそれぞれの成分の匂いと感覚を覚えろそのあとは座学と実技だ」

「はいっ！頑張ります！」

彼女の能力をフルに使い匂いと感覚でどの薬に何が使われているかおおよそ判別できるようになってもらう、効果は限定的だが良い能力だ、彼女自身が楽しいと思えば始めればどんどん伸びるだろう。

「うー……」

それから一ヶ月ち広場で彼女が伸びている、素材を集めるときに危険は付き物、苦手だとしてもある程度戦えなければ逃げる事も出来ない。

「十分訓練したら実戦も行うぞ」

「うう……怖い……でも錬金術師になるには乗り越えないと」

この一か月で彼女は錬金術の楽しさを知った、戦いに役に立たなかつた自分が能力で様々な薬を作る役に立つのが嬉しい様だ、今は私の弟子として頑張る錬金術師の卵だ。

「最悪逃げる事が出来るだけで構わない、死んでしまったらもう錬金術を学べないぞ」

彼女は臆病だ……恐怖で本来の力が出せない、能力的に劣っている

訳では無いのだ。

「……はい！やってやりますー！」

錬金術を続けたいならば自分の身は自分で守らないとな。

「所で、魔法を身に着ける気はあるか？」

「うーん、魔法ですか……」

やはり反応が悪い、便利だと思っただが。

「なぜそんなに微妙な反応をする？」

「私たちの群れだけかもしれないかもしれませんがそういった物に魅力をあまり感じないんです……肉弾戦が好きだからですかね？」

肉弾戦が好き……ね、ならば。

「群れの者達に認められたくは無いか？」

「それはそう思いますけど……」

彼女は追いだされはしなかったが未だに弱虫扱いは変わっていない、立場的には私と真逆だ。

「教えるのは身体強化魔法だ」

「身体強化魔法……」

「魔力を使い体の能力や反射神経を強化する魔法だ、より激しい肉弾戦が出来るぞ？」

「強くなれば自信もつく、だが慢心はするな……そうなたら私が叩き潰す」

「っふぁいー！」

なぜそんなに怖がる、今までの訓練が怖かったんだろうか。

「師匠課題の薬出来ました！」

あれから三年彼女は魔法も覚え錬金術師として成長を続けていた。身体強化魔法と私の適度な訓練によって戦いに対する恐怖を殆ど克服した彼女は、族長と激しい戦いを繰り広げ負けはしたが弱虫の名を払拭した。

後にリーダーに聞いたことだが、彼のラムランに対する言動は強く

なって認められるようになって欲しいと思つての事であつたようだ、まったく効果は無いどころかマイナスだった気がするが。

戦いを終えた後のリーダーは、とてもうれしそうだったのを覚えて
いる。

「うん、上手く出来ている」

製薬室で薬を分析し正しく効果が出ていることを確認する、もう基礎は十分だ、そろそろ彼女だけでやっていけるだろう。

「ラムラン、ちよつとこつちに来てくれないか」

ラムランをリビングに誘う。彼女はすぐに来てくれた。

「何です？師匠」

椅子に座り訪ねてくる彼女、これからの事を聞いておかないとな。

「ラムラン、そろそろ卒業だ、これからどうするか決めているか？」

「えっ……」

ぽかんとする彼女、だが私の言葉を理解すると寂しそうな顔を
する。

「まだ師匠と勉強したいです……」

泣きそうな顔で言うラムラン、気持ちは嬉しいがそろそろ新しい楽
しみを探したい。

「弟子は師から旅立つて行く物だ、お前はもう十分に力を付けた、錬
金術を修め精神的にも肉体的にも強くなった……後は自分でやりた
い事をやりたいようにやれ」

「分かりました師匠……でも卒業しても師匠は師匠ですからね！」

そう言つて笑う彼女、明るく元気になったな、後は彼女が何をした
いと思うかだが……。

あれから一年、卒業した彼女はこの期間考え続け錬金術の店と教師
をする事にしたようだ、きつかけは魔法を教えているときに話したケ
イン・イヌスの話をした事だ。

同じ師を持つ者の考えに影響され、何処かの町で店を持ち薬を売り

つつ弟子を育てると決めたらしい。

「もしもケインに会う事があつたら私の名を出すと良い」

「魔法の弟子だったんですよね？」

「そうだ、彼がもしお前を信用しなかつたらこう言え、私に最初に話をしたケイン、と」

彼ならきつと気が付くだろう、それでも信用しなければ念話で訪ねてくるかな？

「何ですそれ？」

ラムランは訳が分からないという顔だ、それはそうだ私と彼しか知らない事だからな。

「まあとにかくそう言ってみろ、恐らく大丈夫だ」

彼女がスムーズに教師になれるように私が出来る事はこれ位だ。

「分かりました、必要だったら言ってみますね」

「そうしろ」

そう言うのと彼女は旅立つ準備をし始めた。

それから更に一月が経ち彼女が出発する日がやってきた、私はこの期間に自分の事を彼女に教えた、驚き様が一番だったな。

彼女は私が教えたマジックボックスを確認している、容量はかなり小さいが彼女はもちろんケインもロドロフとミシヤも覚えている。

小さいサイズでしか時間停止の効果を出せなかったからな、もちろん生き物に入れられない物を教えている。

「師匠……行つてきます」

獣人達が見送りに集まっている中で言葉を交わす。

「行つてこい」

ラムランが抱き着いて来る、私はしっかりと抱き返してやる。

「私、頑張りますから」

耳元で囁く彼女、私も彼女に囁く。

「頑張つてこい、お前は……」

「自分でやりたい事をやりたいようにやれ、ですよね？」
体を離し正面から私を見つめながら言うラムラン、それを見て私は
微笑みながら言う。

「分かっているなら良い」
それを聞いた彼女は私に一礼し群れを旅立った、私も旅立つ用意を
するかな。

「行っちゃうんですね姉御」

「ああ、私は旅を続ける」

獣人達は別れを惜しみ宴を開いてくれた、上座に座り飲み物を飲ん
でいるとリーダーが話しかけてきた。

「此処は俺達に任せて下さい、群れは俺が守ります」

「任せたぞ」

こうして宴は終わりを迎え、翌日に私は獣人達に惜しまれながら出
発したのだった。

ん？空に大きな何かが飛んでるな、あんなもの昔は居なかった。草原を歩く私は不意に出来た陰に空を見上げる。

獣人の群れを離れ、今までの生活で人々と過ごす楽しみを覚えた私は新しい環境を求めるようになった。

当てもなく旅をして出会った人々に関わる、良いかも知れない。

様々な人々や土地……時には戦う事もあるかも知れないが、戦う事は好きではないが嫌いと言う訳でもない。

森の木々を眺めながら思う。

私だけなら余裕を見せるかもしれない……が、死なれては困る存在を守る時は容赦はしない、余裕を見せて守れなかったら意味がない、確実に排除する。

ただ……拷問のような意味もなく苦痛を与えるような事はしたくはないかな？私は苦痛が分からないが皆を見る限り少ない方がいい……筈だ、情報が欲しければ頭を読んだりすればいいだけだしな、滅多に使わないが。

ほう、こいつはモフモフだな。危機感が足りないのではないかこいつは。

掌サイズの毛の塊のような生物をいじりながら歩く。

私はこの頃、急いでいない時は魔法や能力をあまり使わないように始めていた、過程を楽しむと言うのか？何もかも簡単に出来てしまう、思い通りに出来る事がつまらなくなってしまった、今の私を過去の私が見たら「無駄に時間をかけるとは愚か者が」と言われそうだ、私の寿命がここまで長いとは思って無かったしな。

……今思えば魔法などの練習をしていた頃は楽しかったと言えるのではないだろうか、時間を忘れるほど熱中していた訳だしな。

誰かを育てたり誰かの夢の手伝いをするのも悪くは無かった、出来れば何か対価が欲しいが気になった技術や気に入った者、興味がわいた事には首を突っ込むのも良いかも知れない。

自分が以前と少し変わったのを感じながら、当てもなく森を歩いていると森を抜け踏み固められた道に出た、各町をつなぐ道だろうか。む、あれは……商人か旅馬車か？

遠くに三台の幌馬車が見える、商人か？そういうえば売っている物を見た事は無いな、商人なら品を見せてもらおうか。

「ん？何か用かいお嬢さん」

馬車が来るまで待つっていると馬上の男が声をかけてくる。

「この馬車は商人の物か？もしそうなら品を見たいのだが……あなたを持ち主か？」

「いや、俺達はただの護衛さ……ジャレンさんよ！客だぜ！」

男が声を上げると、幌馬車の中から穏やかそうな茶色の髪の男が出て来た。

「お待ちせしました、アルベリク商店のジャレンと申します」

ジャレンと名乗った男は軽く頭を下げる、この見た目の私にも礼を失しないか。

「突然申し訳ない、遠くからこの馬車が見えたのでな、もしよければ品を見せてもらいたいのだが」

「構いませんよ、気になる物がありましたらお見せします」

そう言って紙を渡してくる、日用品に雑貨、食料、調味料か……試しに食料の干し肉を買ってみるか。

「干し肉を一つ貰おうか」

「かしこまりました、一つ五百イェンになります」

……あつ、今まで金を使った事が無いから持ってないじゃないか。

「……すまない、金がない事を忘れていた」

「おいおい、金がないのに声をかけたのか？」

護衛の男の呆れたような声が聞こえる、反論できんな。

「おいくらなら持っているんです？」

ジャレンが声をかけてくる、答えたくないが……。

「……全く持っていない」

そう答えるとジャレンは真剣な顔になり口を開く。

「こんな所に何も持たず、お金もなく一人で？……何か事情がおありで？」

真剣に聞いてくるジャレン、本気で心配されていそうだ。

「あー、何処か私でも金が稼げる所を探しているんだが」

咄嗟に言った事だが、金が欲しいのは間違いない、買い物があったとき盗む訳にもいかない。

ジャレンは何か考え込むと私を見て言う。

「もし、よろしければ家で住み込みで働きませんか？」

突然私を雇うと言いだした、どういうことだ？

「おいおい……ジャレンさんよ、わざわざこんな訳ありそうなガキ雇う事は無いんじゃないか？」

護衛の男の一人が言う、確かに客観的に見ると怪しいな。

「このままでは野垂れ死にです、一人の娘を持つ親として知ってしまつたからには放つてはおけません」

随分お人好しなようだが……騙されそうで心配になるな、怪しいと分かりながら手を伸ばすか。

「それに娘と歳も近そうです、良い友人になれるかも知れませんが……どうでしょうか？」

店か……良いな、この話受けてみるか。

「お誘いお受けします、よろしくお願いします」
そう言つて彼に頭を下げた。

「ジャレンさんが良いならいいけどよ、じゃあさつさと乗りな、余り遅れる訳にもいかねえ」

護衛の男に促され幌馬車に乗る、人が乗るための馬車らしく座れる場所があった……周りは商品だらけだが。

「さて、これから君には家で働いてもらう訳だが……改めて挨拶しようアルベリク商店店主のジャレン・アルベリクだよ」
そう言つて手を差し出して来る。

「クレリア・アーティアとい……言います、クレリアでもアーティアでも好きに呼んでください」

握手をしながら答える、するとジャレンは笑いながら言う。

「先程までの言葉づかいで構いませんよ、歳に不相应な話し方でしたがとても自然でした」

「そうか、悪いな……後、私はこんな見た目だが既に成人している」手を放しながら言うと、ジャレンは困ったような顔をした。

「そうですね、大丈夫です……これからは何も心配はいりませんよ」何か、変な風に捉えられた気がするな、まあ信じて貰えない事も多いからな。

……これなら大人の姿で行くべきだったか？しかしこうなると思っていた訳では無いから今更だな。

「これからよろしく頼む」

「期待していますよ」

そう答えると、彼は御者席に移動して行った。

その後大人しく馬車に揺られて夕方に差し掛かると、町が見えてきた。

「あの町が私の店があるエスタラだよ」

少し前に幌馬車の中に入ってきたジャレンが私に言う、比較対象が無いから町として大きいのか小さいのか分からないな。

「町としては大きい方なのか？」

「？クレリアさんはあの町から来たのでは無いのですか？」

街道の途中で会ったからな、最寄りの町はここしかないのか？

「ああ、私のいた所は森の中だな、そこを出て来たのだ」

嘘は言っていない、居た所は森の中の獣人の群れ……そこを出て来たのだからな。

「なるほど……何があったかは聞きませんよ」

「助かる」

そんな会話をしながら夕暮れの迫る中、早足に馬車は町に向かって進むのだった。

「まずは部屋の割り当てかな、後は皆への紹介だ、その後食事をしたら今日はもう休んで、説明は明日にしよう」

到着時、外はもう暗くなり始めていた、数人の店員らしき人々が荷物を運び込んでいるのを横目に見ながらジャレンについて裏口らしき入り口から中に入る。

店舗らしき建物はあまり大きくは無いが生活する建物はそれなり大きさだった。

私の部屋は二階の角でシンプルな狭く簡単な鍵が付いている部屋だった、そして私の名前が扉に掛けられた。

「皆がそろった、降りて来てくれ」

部屋のベッドに座って足をプラプラさせていると扉の外からジャレンの声が聞こえた、外に出ると彼について行く。

「皆歓迎してくれると思う」

そう言いながらとある部屋の中について行く、視線が集まるのを感じながら彼に連れられ皆の前に立つ。

「今日から皆の仲間になる色々目をかけてやって欲しい」

「クレリア・アーティアと言う、よろしく頼む」

彼の紹介の後挨拶をする、皆「よろしく」と返してくれた。

「よろしくねクレリア！ここを自分の家だと思っていいいのよ！」

見た目には私と同じぐらいの赤い髪の少女が私の前に来て手を握ってくる、随分フレンドリーだな。

「ああ、ありがとう」

「これから私の部屋でお話ししましょう？」

答える私を引っ張る彼女、しかしそれを遮って傍に居た女性が言う。

「モニカ、今日は彼女も疲れている筈だから、休ませてあげて？」

そう言った彼女の方を見ると赤い髪をした気の強そうな女性が居た、この少女と似ている気がする。

「ごめんね、クレリアちゃん……私はアリエラ・アルベリク、ジャレンの妻でこの子、モニカの母よ」

ジャレンの妻と娘か、なるほど似ていると感じたが納得だ母親似なんだな。

「はーい」

大人しく私の手を放した。

「また今度ね！」

笑いながらそう言って離れて行った。

「さて、今日は彼女はここまでだ」

やり取りを見ていたジャレンが私を連れて部屋を出る、私の部屋へ移動中ジャレンが声をかけてくる。

「娘が失礼をしたね」

「明るく人を引っ張って行きそうな娘だな」

そう言うのと嬉しそうな顔をしながらジャレンが言う。

「妻によく似ています……それに娘は年の近い友人が居ない、きつと嬉しかったんだと思う」

商人では無く父親としての顔で言うジャレン、まあ面倒は見るさ、子供の扱いは過去に経験しているからな。

話しているうちに私の部屋の前に着いた、彼は明日の起床時間と誰かが起こしに行く事、起きたらそのままついて行くように私に伝えると戻っていった。

「店か、これから何があるか楽しみだ」

思わず笑みを浮かべる、やるからには世界一の店にしてしまおうか……などと考えつつ魔法の訓練をしながら朝までの時間を過ごした。

「それでね……！」

翌日起こしに来た店員について行きジャレンの所に着いた私が聞

いた最初の仕事はモニカと仲良くなることだった、まあ仕事というか出来れば仲良くして欲しい、というような頼み方だったが。

幸いというかモニカは同年代……に見える私が来たのが嬉しいらしく彼女の性格もあり簡単に仲良くなった、しかし良く喋る、今は気持ち上がっているからかもしれないが。

「モニカ」

話し続けるモニカを遮って声をかける。

「なーに？クレリア」

会話を止めて話を聞く彼女、こういう所が歳に合っていないような気もする、グイグイ来るが最後の一線を越えないというか、相手の気を害さない範囲を分かっているというか……人の子は皆こうなのだろうか、昔暮らしていた子供たちはそれなりに我が儘だったが。

「将来は店を継ぐのか？」

「勿論よ、何言ってるの？」

何を言っているのかという顔で言うモニカ、必ず子供が継ぐとは限らないと思うが彼女の中では当然のようだ。

「私は店を継いで誰もが知っているような店にするのよ」

真剣なしかし楽しそうな顔をして言う、ジャレン夫妻よこの子は逸材かもしれないぞ。

モニカと仲良くなり仕事も少しづつ覚え始めたある時店に損害が出た、ジャレンのお人好しで。

夫妻の話し合いが終わった後、私はアリエラに話しかけた。

「こう言った事はよくあるのか？」

「クレリアちゃん……彼はお人好しでね相手が困っていると高く買い取ってしまったたり安く売ってしまう事があるの」

「私の事も拾ったしな」

そう言うと言と苦笑するアリエラ。

「かなり不味い状態なのか？」

「いいえ、私もいるし彼もそこまででは無いわ……十分に利益も出しているけれど取り返しのつかない騙され方をしそうで……」

確かに店の権利など不味いものはある、しっかり話せばいいと思うのだが。

「でもその優しさは忘れてほしくない、私が好きになった優しさを……」

なるほどな、だが問題無いと思うぞ。

「大丈夫だと思うぞ？ ジャレンの家族や店の皆を思う気持ちは本物だ、それを壊すようなことはお人好しの彼もしないだろう」

私が言うのだ、安心すると良い……ただ、もし強引に彼女達とこの店をどうしようしようとするなら、相手はどうなるかわからんが。

「ふふ、そうね……ごめんねクレリアちゃん、子供の貴女にこんなことを話して……貴女と話していると大叔母様と話しているような気になって……こんな若い可愛らしい子に失礼ね」

申し訳なさそうな顔で言う彼女……いい勘をしている、あの子にしてこの親ありか、ジャレンももしかしたら色々感じているかもな、ただ私は大叔母様とやらの百倍以上の年齢だと思うが。

私が店で働くようになって五年が過ぎた、商売のノウハウを覚え店も順調に大きくなり町で一二を争う規模になっていた、そんなある日の事。

「鍊金薬？」

「ええ、この町のもう一つの大手の店で売り出しているみたいなの」
この五年で店の運営会議に出るようになった私は、十八になったモニカから報告を受けた。

鍊金……ラムラン？ 鍊金術を広める事が出来ているのか。

「それでそれが何か問題なのか？」

ジャレンが聞く、何か理由が無ければ今ここで言う必要は無いからな。

「それが、効果はあるらしいんだけど物凄く高くて、病気の金持ちにばかり売ってるらしいんだ」

うん？そんな高価になるような材料は使って無いぞ？効果を十分に引き出せば少ない材料でそれなりの量が作れる筈だが……。

「デイノで有名になつて来てる錬金術師のラムランの弟子つて人が作ってるらしいんだけど」

……おかしい、彼女がそんな事を良しとするとは思えない……何かあるな。

「その事は心当たりがある、少し時間が欲しい」

そう言うとは皆は納得してくれた、私は早速店に向かい薬を確かめることにした。

「いらつしやいませ」

店員が声をかけてくる。

「錬金薬を見たいのだが」

私は服を変化させいかにも金持ちの娘のような服装にした、効果はあつたようだ、奥の部屋に案内される。

「私の錬金薬をご覧になってください」

奥の部屋に居た男は少し軽そうな、だがそれ以外は普通の男だつた。

私は早速置いてある薬を手に取り分析する。

「これは最高の物か？」

「はい、私の自信作です」

自慢げに言う男……こいつはダメだ、薬の効果は僅かしか出ていない上にバランスも悪い、それ以前に意味のない成分が多すぎる……いや、この状態でわずかにでも効果が出ているのは凄いのか？とにかく話にならないことが分かった。

「そうか……また来る」

そう言つて店を後にする、男は戸惑つたようだが金持ちの娘と思つ

ている私に何か言う事は無くそのまま店を出た。

自分の部屋に戻りずつと使っていないなかつた念話を使う。

『ラムラン、聞こえるか?』

『びゃつ!?!し、師匠?!』

驚いた声が聞こえてきた、ふむ……何か変わった感じはしないな。

『時間はあるか、話したいことがある』

『……何かあつたんですか?』

有無を言わぬ感じになつてしまった、彼女が察して聞いてくる。

『今私はエスタラという町で商人の真似事をしていてな……その町でお前の弟子を名乗る者が薬を高値で金持ちにだけ売っている』

『えっ……?』

あつけにとられたような気配がする、私はさらに続けた。

『病気を盾にほとんど効果がない粗悪品を高値で売りつける事がお前の目指す物か?』

『違います! 私はそんなことを考えていません! 私は……!』

猛反発するラムラン、良かったお前は変わつてなかつたな。

『悪かつたなラムラン、少し試した』

『……止めて下さいよ師匠! まったく……』

怒るラムラン、少し遅しくなつたかな? 私に怒ることなど無かつたと言ふのに。

『で、だ……心当たりはあるか?』

『心当たりと言つても……弟子はみんな此処に居ますしそんな人は

……あつ!?!』

『心当たりがあるのか?』

『前に弟子入りしに来た人が……授業もあまり受けず私や他の弟子を口説いてばかりだったので遠慮して頂いたのですが』

決めつけは良くない、良くないが……そいつな気がするぞ。

『軽薄そうなそれ以外特に特徴がない男だったか?』

『確かにそんな感じでしたけど……』

まず間違いないと考えていいだろう、だとすると……そうだな。

『ラムラン』

『はい?』

未だに男を思い出そうとしているラムランに声をかける。

『このままだとこちらでの錬金術の印象は最悪だ、こっちに來て本物を見せてやってくれないか?』

『えっ? 師匠が居るのにですか?』

『私はそんな事をして目立つ気は無い』

『ええー?! 私が目立つじゃないですかー!』

『目立たなくてどうする、ここで錬金術の良さを伝えられれば皆が良い印象を持つてくれる、学ぼうとする者も居るかもしれない』

『た、確かに……!』

『それに私が居る商会もある、お前が作る薬を仕入れて広めてくれるかもしれないぞ? 汚い事をするような者達では無い事は私が保証しよう』

『……行きます』

よし、これでいい後は大々的に効果を見せる機会を作ってやればいい。

『私が居る町の場所は分かるのか?』

『はい大丈夫です、師匠が教えてくれたマジックボックスがあるの
ですぐ出発できますし』

『よし、着いたらアルベリク商店に來い』

『分かりました』

「では契約はこの条件でよろしいですか?」

「はい、問題ありませんよ!」

今私はジャレンとラムランの契約に同席している所だ、アリエラとモニカもいる、あの後ラムランが到着し偽錬金術の男を誘導し町の人々の前で奴の薬の酷さと値段について言及した。

ラムランが姿を見せた時の男の様子は面白かったな、そして町の人々は本物の錬金術を知ることになり、ラムランの名は町に広まっ

た、酷い薬を売っていた商会は客が一気に居なくなり商会としての形を保てなくなり自然に消滅した。

その後、その効果と値段の安さに驚いたアルベリク商店の面々に話を持ち掛け今こうして成立したわけだ。

「しかし……」

契約書大事にしまいながらジャレンが言う。

「ラムランさんとクレリアさんはどんなご関係で？」

まあそう思うな、どう言っただものか……。

「師匠は私の師匠ですよ！」

ラムラン!?

「馬鹿者……」

「えっ?!」

私とアルベリク一家が同時に声を上げる、その後静寂が部屋に訪れた。まあ、最初から成人しているとは言っているがお前の師匠であることは言っただけで欲しくなかった。

「あのー。すみません師匠その、私……」

泣きそうなラムラン、久しぶりに見たなその情けない顔は……仕方のない奴め。

「泣くなラムラン。絶対に言っただけ駄目な訳では無い、誰しもうっかりしてしまう事はある……私もな」

「ごめんなさい……師匠」

泣いているラムランを撫でてみるとジャレンが声をかけてくる、その顔は何とも言えない表情だった。

「あの、師匠と言う事は？」

「初めて会った時に行っただろう？成人していると、私はこの子の錬金術の教師を……師をしていた、恐らくこの中で私が一番年上だぞ」

彼らは一般的な年齢を想像しているだろうが、一万を超えているからな……信じられないような顔のアルベリク一家。

やはり信じていなかったな、気持ちとは分かるが。

「クレリアちゃ……さんは本当に成人していたのね……私達より年

上だなんて……今まで申し訳ありません」

すまなそうに言うアリエラ、気にしていないがな。

「今までと同じで構わない、私は悪い気はしていないからな」

「クレリアちゃん！」

そう言うのとホツとしたような嬉しそうな顔をして抱きしめてくるアリエラ。

「えーと……クレリア、さん？」

ただたどしく敬語で話しかけてくるモニカに向き直る、どうしていか分らないと言った顔をしているな。

「モニカ、私たちは友達だ……歳など関係無いぞ」

薄く微笑みながら声をかけると、嬉しそうに飛びついてきた。

「クレリアアつてすごい若作りよね！」

「放っておけ」

あつという間にモニカは元に戻ってしまった。

今回の事が終わりを迎え、ラムランは一泊する事になり部屋に案内されたがすぐに私の部屋にやってきた、卒業してからの苦労や喜びを語る中彼女はぽつりと言った。

「……こんな事が起こるなんて思いませんでした」

彼女は俯きながら手をいじっている。

「名が売れると言う事はこういう事だ。これから更にお前は有名になるだろう、様々な善意が……そしておそらくそれ以上の悪意がお前に集まってくるだろうな」

彼女はうつむいたままだ。

「師匠はそれが嫌で表に出ないようにはしているのですね……」

「どうだろうな？嫌な事は確かだが、やりたいようにやった結果そうなってしまったなら甘んじて受けるかもしれないし、全てを薙ぎ払って無かった事にするかも知れんな」

それを聞いた彼女は顔を上げて引きつらせながら言う。

「……師匠が言うのと冗談に聞こえないんですが」

「冗談では無いからな」

彼女はブルッと震える、それからは他愛のない事を話し続けた。

こうしてアルベリク商店は町一番の店となり商品にラムランの薬が並び錬金術とラムランの名が知れ渡り、私の事が少しアルベリク一家に知られた、翌日ラムランは別れを惜しみながらデイノに帰って行った。

私は今エスタラの裏路地に居る、目的はすぐそばにいる顔を隠している男だ。

「あの女、俺の誘いを断った上に邪魔しやがって……」

悪態をつきながら町の外に向かう男、ぶつぶつと何かを呟いている。

「まだ他の町がある……そこで上手くやれば一生安泰だぜ」

わかっていたが止める気は無いか……またどこかで同じ事をされては面倒だからな。

「それは困るな」

男の前に立ち塞がり声をかける。

「ああ……？てめえ！あの女と居たガキだろ！」

私に気が付いたようだが……。

「もつと前に会っているがな」

「？……あ！お前あの時店に来た！」

すぐ分かったようだ、私の見た目は目立つらしいからな、他の者が言うには美人らしい。

「丁度いい、初めて見た時に良いと思ったんだ……」

「私はお前に特に興味は無いな」

「今から俺がっ?!」

迫ってくる男の手足と口を凍らせると転倒する男。

「……?!……!!」

呻くだけの男に歩み寄りながら言う。

「私の弟子の名と錬金術を貶めた、その上まだ繰り返すのなら放つてはおけない」

私の体から黒い霧が漂い始めるがすぐに引き戻す……久しぶりにイライラしているせいで少し開放的になっているかもしれない。

男は涙を流しながら呻いているが今更許すことは無い。

「悪いが私の弟子に手を出す者は許さない」

その後、偽錬金術師だった男の行方は分からなくなったがすぐに忘れられた。

錬金術事件の後私の事はアルベリク一家だけの秘密となった。

それから更に二年後、二十歳となったモニカは無事想い人と結婚した、私から見ても問題は無さそうだが、元は護衛をしていた傭兵で長期契約で彼女を守っているうちにお互い……と言う訳だ、そんな彼女の夫から相談を持ち掛けられた。

「クレリアさん、腕のいい鍛冶屋を知らねえ……ご存じありませんか？」

私の部屋に訪れた彼が言う、傭兵から商人という職業変更をした彼は言葉使いを始め、商人修行真っ最中だが、まだまだ時間が必要なようだ。

「どうした急に」

この商会では武防具は販売していない、その内扱おうかという話としては居たが急に決める事でもない。

「傭兵仲間から聞いたんですが各地で魔物が多くなってるらしいんです」

真剣に話す彼、彼はさらに続ける。

「まあ、居ないよりは良いんですけどね、肉や素材になるので良い稼ぎになりますから」

戦いに身を置く者にとって魔物や動物は収入源らしいな、それなり

に良い値段になるらしい。

「ただ魔物になるべく安全に勝つために今の装備では不安なんです、そこで色々つてがありそうなクレリアさんが誰か良い職人を知らないかと思ひまして」

彼は私の秘密は知らないが私に色々なつてがある事を知っている。しかし……武具で思い出すのはあの夫婦しか居ない、ロドロフとミシヤだ。

「知ってるな」

そう言う顔と顔を明るくさせる彼、その時部屋がノックされる。

「開いているぞ」

そう言うどアが開きモニカがやってきた。

「あれ……あなた浮気？」

にやつきながら言うモニカ。

「勘弁してくれよ……」

苦笑いする彼、私はそんな彼を横目にしながら彼女に答える。

「魔物の数が増えてるらしい、それで装備を何とかできないかと私に心当たりを聞きに来たんだ」

モニカはにやついた顔を止めて答える。

「なるほど、優秀な鍛冶屋はいつか欲しいと思っていたけど、のんびりしていられないかもね」

「それで今知っていると答えた所だ」

「知ってるの？」

彼女はやや驚いた顔をしている、そこまで驚かないのは何となく私ならと思っていたのかもな。

「ああ、夫婦で大地人の住処に居る、移動していなければ同じ所に居るはずだ」

考え込むモニカ、しかしすぐに私を見て口を開く。

「貴女が知ってるって事は腕はいいのよね？」

「私を知る限り最高の鍛冶師だな、妻の方も魔道具作りの熟練者だ」
「本当に!？」

食いつくモニカ、魔道具は最近大地人から広まり始め、数も少なく

値も張るが欲しいがる者が後を絶たない人気商品だ。

「もしできる事なら私達の商会と取引して欲しいわね、出来ればうちの商会に住み込みで雇いたいわ、駄目なら輸送料を全てこちらで持っても良い、クレリアが認める鍛冶師と魔道具製作者よ、見逃す手は無いわ!」

そんなモニカを冷や汗を流して見る彼、彼女のやる気に火がついてしまった。

「クレリア!すぐに連絡とってせめて話だけでも聞いて貰える様には話をつけて貰えない?来てもらえるならいつでも来て良いし、何なら行くわよ!」

彼女なら悪いようにはしないだろう、彼らがどんな反応をするかは分からないがチャンスはあげたいな。

「分かった話しておく」

その答えにガッツポーズをして出て行く彼女……かと思うとすぐに戻ってきて言った。

「ご飯に誘いに来たんだった!行こー!」

私と彼は呆れた顔をしながら食事に付き合うのだった。

その日の仕事をすべて終え、部屋に戻った私は早速ロドロフとミシヤに念話を送る。

『ロドロフ、ミシヤ聞こえるか?』

……返ってこないな。

『どうした?何かあったか?』

『大丈夫だ、ちよつと上手く行かなかっただけだ』

ロドロフの声が聞こえてくる、念話が苦手なのは変わって無さそうだが……いや少し上達したかな?

『お嬢!久しぶりだね!何年経ったかしらね』

ミシヤも元気そうだ……十年?もうちよつと経っているか?気にしないからあいまいだな。

『久しぶりだな、いきなりで悪いが相談したい事があつてな』

私は今商人の元にいる事、その商會が武器と魔道具の職人を探している事とその理由、商會の者は信賴できる事を伝えた。

『なるほどなあ、そう言う事なら構わねえぜ』

『そうだね、お嬢のお墨付きなら問題も無いだろうし』

『でも条件があるんだ』

『なんだ？言ってみろ』

『材料の一部は俺達の住処から買って欲しい』

『なるほどな、伝えておこう』

『そうだ、町の場所を教えていない。』

『エスタラという町だが分かるか？』

『分かるよ、それでいつ行けばいいのさ』

『ミシヤが聞いてくる。』

『いつ来ても良いようにしているそうだ』

『よっし、じゃあ準備をしたらすぐ行くぜ』

『ラムランといい行動が早いな。』

『名前はアルベリク商會だ、待っている』

『そう伝えて念話を切った。』

ロドロフとミシヤに連絡を取った後、二人はアルベリク商會を訪れ無事に契約をした、その際にレクシドという大きな町に本店を移すとモニカから聞いた、ロドロフとミシヤの二人と契約出来たら拡大するつもりだったようだ、そういう話は先に言っただけだった。

二人が本格的に武器魔道具を作るのはレクシドに行つてからになる、それまでこれからの話をしていたのだが問題が起きた。

『値段が高すぎる？』

『仕事中にモニカが相談にやってきた。』

『ええ、性能は素晴らしいわ、だけど買うのは傭兵や兵士がメインになるでしょう、彼らにこの金額は払えないわ』

魔法金属は製作に時間と手間がかかる、そうなると値段は上がる……かと言って安くするわけにもいかない、そう思っていると彼女が言う。

「だから二人には性能を落とした装備と魔道具を作ってもらって、高性能な物はオーダーメイドにしようかと思うのよ」

そうするしかないだろうな、二人に損をさせる訳はいかない。

「一般装備は値段の割に良い物を、オーダーメイドは値段に見合った性能をつけてね」

同じ材料で同じものを作っても製作者の腕で質は大きく変わる、設計次第で少ない材料で高い強度と効果を出すこともできる、あの二人ならその点は十分だろう。

「二人は納得しているのか？」

こちらから声をかけたんだ嫌がる事はなるべく避けたいが。

「これから話してみるつもり」

「強引に話を通さないでくれよ？」

「当然よ、嫌々やっても良い物は出来ないわ」

彼女は頷くと仕事に戻って行った、後日あっさりと了承して貰えたらしい、簡単に解決してよかった。

それから、モニカがエスタラの店の人員と管理責任者などの人事を進め始め、ジャレンとアリエラとモニカの夫は新店舗の調整にレクシドに向かった、一週間程の後、私達も旧店舗を任せ新店舗へ向かうのだった。

新しい店舗は広くそれぞれの分類ごとに売り場を分けてあった、住む部屋は建物が大きくなかったが人員も増えた為エスタラのと広さは大して変わらなかった、家具は少し良くなっていたが。

「さて、これで移動は終わりましたが開店するのはもう少し後です、ロドロフ夫妻に製品の生産に入っていた数数が揃ってからになりますね」

ジャレンが言う、すでに新店舗の皆とは顔合わせをした、いつも通り私の紹介でぎわついたが成人していると伝えた。

今は中核のメンバーでの会議中だ、私、アルベリク一家の三人、ラムラン、ロドロフ夫妻、そして各方面を担当している古参の店員達だ。

「ではこれからの予定と連絡事項を伝えます」

こうして会議が始まった。

「ラムラン、お前は頻繁にこつちに来られないから何かあったら今後にしつかり話しておけよ」

会議が終わり殆どのメンバーが居なくなった会議室で私は言う。

「そうですね、行き違いが無いようにしなさいといけませんね」

二人で話していると残っていたアリエラが会話に参加してきた。

「ラムランちゃんもこつちに店を移して暮らしたらどうかしら？」

効率は良くなるな、商品を卸している商會が同じ町にあった方が仕入れも売るのも都合がいい。

「そうですね……」

そう言いながら横目で私を見るラムラン、どういう意味の視線だそれか。

「私に何かあるのか？」

ラムランは慌てた様子で胸の前で手を振りながら言う。

「何でもないですただ、し……クレリアさんが居るなら私もこつちに来るのも良いかなって思ったり」

「私を理由に決めるな」

私が居なくなったらどうするつもりだ、いつかは必ず居なくなるぞ私は。

「そう言われると思いましたが……」

「しつかり考えてお前がそうしたいならそうすれば良い」

本当にやりたい事ならやればいいさ。

「……自分のやりたい事をやりたい様にやれ」

彼女は小さくあの言葉を呟いて考え込むのだった。

結局ラムランは答えを出さず自分の住む町へ帰った、後悔しないようにしろよ。

レクシドに新店舗を出してから十年程過ぎたジャレン夫妻は引退した、モニカとその夫は店を継ぎ更に男女の子ども出来た。

ロドロフは弟子を育て魔法武具の名工として名を高め魔法武具の祖として有名になった、ミシャも同じく弟子を育て魔道具製作の祖として名を上げ子供も出来た、最初は私を差し置いてと悩んでいたようだが弟子を育て広めたのは二人であると説得した。

ラムランは結局レクシドには来なかったが錬金術の祖として有名になり結婚もし、多くの弟子に囲まれて頑張っているようだ、そしてそんな日々の中私に一報が入る。

「手紙？」

私宛だと言って渡された一枚の封筒、そこには大樹の根元に一人の少女らしき人物が佇んでいる封蝋印が押されていた。

誰だ？

差出人はケイン・イヌスと書いてあった、念話があるのになぜ手紙……どうやって私の場所を知ったんだあいつは。

仕方ない奴だ。

そう思いながら手紙を読む、その内容は大都市ウルグラードにテリア魔法技術学校を創設した事、魔法だけであつたが魔法以外の様々な事も教えられるように学科を増やしたい事、そのために現在広まりを見せている魔法武具鍛冶、魔道具、錬金術の教師を探している事が書かれていた、そして最後の一文を見る。

「……くつくつく」

思わず笑いがこぼれる、まったくお前は良く分かっているよ、私は笑いながら再びそれを見る、そこには……。

《師が関わっているのでしょうか？》

と書かれていた。

それから私は関係者を集めて話をした、ケインの手紙にはそれぞれの教師には十分な環境を用意する事、より多くの者に正しい技術と知識を教える気があるのなら、ぜひ教師として力を貸して欲しい事などが書かれていた。

ラムランは迷わずに行く事にしたようだ、薬の納品も既に弟子に任せているため自由に動ける為やりたい事をやるらしい、夫も特に反対しなかった、ラムランはケインが私の教え子だと昔から知っていたしな。

ロドロフとミシヤもケインの事は話してあるし、既に商会の仕事は弟子に任せており弟子を育てる為の学校に行く事を決めた、ただ三人共もしも弟子では難しい仕事が来た場合は学校に連絡をして仕事を優先するようにして欲しいとモニカから頼まれ、三人はそれを了承した。

「バラバラに私の教え子になった者達が今になって学校という場所に集まるとはな……」

話がまとまり皆が一息ついたとき、私は思わず呟いた。

「そういえばそうなんです、皆さん師匠のお弟子さんなんですよんね」

ラムランが言う、そこにミシヤが答えを返す。

「そうね、新しい技術に知識、魔法まで教えて貰っちゃってお嬢と会ったのは運命だったと思う事もあるわよ」

「その通りだな、俺達が此処までになれたのはお嬢のおかげだぜ」

ロドロフが相槌をうつ、皆も頷いている……そう言っ貰えるのは悪い気はしないが。

「私はきっかけを与えたただけだ、技術を身に着け、知識を蓄え、此処までにしたのはお前達自身だ……自分の努力を私のおかげなど言う言葉で否定するな」

「ありがとよ、お嬢」

ロドロフが照れ臭そうに言う、残りの二人も気恥ずかしそうな表情で笑っている。

「……本当に皆の先生なのね」

モニカが思わずといった様子で言う、今更何を言っているんだお前は。

「師匠は見た目は完全に子供ですからね！しかも美人さんです！」
ラムランが声を上げる、前々からよく言われるな。

「そんなに美人なのか私は」
そう答える私にミシヤが話しかけてくる。

「そりやもう美人だよ、今まで男に声をかけられなかったのかい？」
「特に無いな、そもそも好き好んで人前に入る事が少ないからな」
そう答える私に、ロドロフが口を開く。

「お嬢は姿も声も綺麗だが、なんつーか、その……あれだ」
言い淀むロドロフ、はつきり言え。

ロドロフが言い淀んでいるとラムランが割り込んできた。

「師匠、性格は男みたいですよね……言葉使いもこう、無駄に重々しい感じで」

ラムランがそう言った瞬間部屋が静かになった、不味い事を言ったと思っているのだろうか私に性別は無い筈だからな。

「特に誰かに性的に好かれないとは思っていない、それに私は昔からずっとこんな感じだ……これから変わるのかずつとこのままなのかは分からないが」

皆のホツとした雰囲気を感じる、その程度で怒らないぞ、自覚もしているしな。

こうして余計な事も多く話したが話はまともりケインに教師が見つかった事、その条件を書いた手紙を送った。

手紙を送ってからおよそ一月後条件を全て受け入れ教師として正

式に雇いたいという手紙が来た、三人はその一週間後ウルグラ

ードに向かい旅立っていった。

皆はウルグラードに永住するそうだが、そろそろ落ち着いて暮らす気がらしいな。

さて、商会も盤石な状態になったしまた興味を引く物を探しに行くかな。

「その前に辞める理由を考えないとな」

「どうしようか……私の事を教えて納得してもらえないかな。

流石に若作りで済むような時間は過ぎてしまったし、姿を変えなければ長くいるほど怪しまれる、個人なら問題なく付き合っても不特定多数に異常性が知られると何が起きるか分からないからな。

どうしても長い間一か所に留まるなら、その都度姿を変えて暮らせばずっと問題無く暮らせるだろう。

「クレリア。話ってなに？」

あれから半年、学校の皆も商会も順調だ。

私は大事な話があるとジャレン、アリエラ、モニカの三人を会議室に呼び出した、ジャレンとアリエラはだいぶ老けたな。

皆忙しいのに時間を作ってくれた事に感謝を述べてから話をする。

「私はそろそろ商会を辞めようと思う」

「なんで……？クレリアも楽しそうに過ごしていたじゃない」

モニカが聞いてくる、彼女は寂しそうだ。

「三人に聞いて欲しい事がある。今から話すことは本当の事だ」

そして三人に今までの事を話した、目覚めてから今に至る出来事を。

「……」

三人は黙ってしまった、いきなりこんな話をされてあっさり信じるのもおかしいからな。

「えっと……私はクレリアちゃんが人間じゃないかもって薄々分

かっていたわよ？モニカもそうよね？」

「うん、気づいてた」

全く動揺することなく会話するアリエラとモニカ、今まで私の事を知った者の中で一番驚いてないかもしれない。

「まあ、僕も成人していると聞いて、子供が生きて行くために無理な嘘をついていると思ったよ……最初はね」

ジャレンが苦笑いしながら話す……出会った時のあの反応はそう言う事か。

「私もそう思ったわ……だけどラムランちゃんが貴女が師匠だと言った、それは本当でロドロフさんとミシヤさんの事もあってあなたが本当に子供では無いと知ったわ」

「そうになると、クレリアのその姿は若作りと言うレベルを完全に超えているのよね」

アリエラ、モニカと続く。

今までの皆もだが、長い時間一緒にいるとまずそこに疑問を持つのは当然だな。

「そして今話を聞いて自然と思ったわ、やっぱりって」

モニカが胸を張りなぜかどや顔で言う。

「少数なら良い……三人や教え子達のように受け入れてくれる者も居る……だがこのまま居続ければ町の者も気が付く時が来る」

三人は納得したような顔をする。

「お前達なら分かるだろう。一定以上の集団に私の異常性を知られた時、何が起るか分からない」

これまで暮らしていた中で似たような事はあった、私達に無関係な事ではあったが……集団はどう動くか分からない、同じ様に暴走してお前達にも被害が出る可能性がある。

「でも、誰にもばれないようにすれば……」

何とかしようと声を上げるモニカ、だけどそれでは駄目なんだ。

「誰にも会わないなど不可能だ……ここで暮らす以上誰かの目に留まる、完全に閉じ籠れば可能性はあるがそんな生活、私はする気は無
いぞ」

「そうよねえ……」

私の返答を聞き椅子にもたれかかるモニカ、分かってて言ったなこいつ。

「笑って送り出してあげましょう？モニカ」

アリエラがモニカを諭す、ジャレンも頷いている。

「分かったわよ、でも私達はずっと友達よ！私の子孫たちの店にも来てよね！」

モニカが生きている間にまた訪れる可能性は低い、彼女も分かっているのか涙目に笑顔を浮かべながら言う。

「ああ、また来るよ」

微笑みながら答えるとモニカが抱き着いてくる、彼女が十三の時から姉妹の様に過ごしてきたが立派な大人になった……彼女を抱き返しながらしばしの時を過ごした。

その後私がこの家に来た当初から知っている僅かなメンバーのみでお別れ会をしてくれた、今までの苦労や思い出話に花が咲き夜遅くまで続いた……そして。

「これからも長く続く商会にしてくれよ」

「当り前よ、世界が終わっても残すわよ！」

今でも元気なモニカ。

「僕の人生で一番の友人ですよ貴女は」

年を取り更に優しく穏やかになった、ジャレン。

「クレリアちゃん元気だね」

今でもちゃん呼びで抱きしめてくるアリエラ。

そして古参の店員達。

「じゃあ、行ってくる」

「行ってらっしゃいー！」

重なる皆の声を背に私は町を出た。

商会の皆に別れを告げ徒歩で旅をする、その途中見えてきた町の様子がおかしい。

魔物が来ているな。

町の入り口で戦闘が起きている。戦っている者達は強いとは言えない動きだった、装備がもつと悪ければ死んでいると思う。

町に立ち寄るつもりだったが……あのままではそれ所では無いな。私は町に急いだ。

「おい！武器を貸せ！」

「え？子供?!」

戦闘に近づき傍にいた治療師らしき女の持っている剣を奪う。

「この程度の魔物に苦戦するとは……」

襲って来ていた魔物は犬のような魔物で大きさは人間の大人より少し小さい程度だ、警戒するように唸っている。

私の事を知らない者達の前で魔法はともかく髪や他の手段は使いたくない、奪った剣を持ち豚に近寄る。

「止せ！近寄るな！」

周りの人間が声を上げ助けようとしてこちらに向かって来ようとするが、すぐ終わるぞ？

人としての戦闘訓練をしていてよかった。明らかに人では無い戦い方をしたらどんな反応をされるか分からんからな。

私は魔物の噛みつきを流れるように避けながら首を切り落とす。

「え……?」

誰とも分らない声がある、子供だと思っていたらあっさりと魔物を殺せばこうもなるか。

「悪かったな。返すぞ」

剣を持ち主に返しながら言う、さて町に入って宿をとるか。

「待つてくださいー！」

宿を取ろうと町に向かおうとする私に声がかかる。

「何か用か？」

立ち止まり、声をかけてきた者……剣を返した女に答える。

「旅の方にこんな事をいきなりお願いするのは失礼だと分かっています。ですがお願いします私達の話聞いていただけないでしょうか？」

「ソニアさんいきなりそんな事を言っても……」

戦っていた男たちの一人が苦言を呈する、聞くだけなら聞いてみようか。

「良いぞ」

嬉しそうな顔をするソニアと呼ばれた女と驚く男、話だけなら聞きたいはする。

「ただし聞くだけだ、どうするかは内容による」

「ええ勿論です、ではこちらへどうぞ」

こうして私は町に入るのだった。

「こちらです」

案内されたのは町の入り口近くの建物だった、見た感じでは詰め所だろうか。

部屋に案内された私は彼女と男達が見守る中椅子に座った。

「先に話しておこう、私はこう見えて成人している、特に気を使う必要はない」

初めて会う相手に子ども扱いされるのは当たり前前になってしまった、この見た目だから当然だが。

「まじかよ……」

男達から声が聞こえる、その反応も良くある事だ。

「皆さん失礼ですよ」

「す、すいません」

彼女が咎め、男達が私に謝る。

「なに、気にしていない、この見た目だそんな反応は慣れている」

「申し訳ありません……それでお話なのですが……」

彼女の話の話を聞くと、魔物が増えて町に来る頻度が上がりそれをどうにかする為に自警団を作ったのは良いが、戦闘の素人しかおらず教える者が居ないとの事だった。

「貴女の戦いは見事でした……素人の私でも見とれるほどに」
人が出来る程度に抑えているからな。

「どうか暫くこの町に留まり私達に戦い方を教えていただけませんか？」

私の人を育てる楽しみがやってきた、良いだろうしつかりと教えてやろうではないか。

「良いぞ、その話受けよう」

「ありがとうございます！」

喜ぶソニア、男達も嬉しそうだ、まあ勝てなければ町が被害を受けるんだ当然か。

あるいは私が居る間は安全だとも思っているのかな。

「私はこの町の代表の様な立場におります、ソニア・ニグレットと申します」

「クレリア・アーティアだ、好きに呼べ」

お互いに自己紹介し握手をする、こうして私は彼らを鍛える事になった。

「中々良い部屋だな」

あれから私は滞在する間の宿に案内された、宿と食事の代金は町が負担するらしい、他に欲しい物は自分で買って欲しいとの事だった。

明日から早速訓練開始だ、まずは現状どの程度なのか確かめないと、今は町に出て店を覗いてみよう。

「そうだ武器を買おうか」

いままで魔法でぐまかしていたが訓練するとなれば用意しておいた方が良いな。

「いらっしやい！」

通行人に訪ねて武器屋に来た、店によって扱っている物が違うらしいが。

「長剣……ロングソードを見たいのだが」

「それならあの辺りがそうだけ」

近寄って見てみる、装飾は無いが中々良い作りをしている。

「中々良い物だな」

「当り前よ、この武器はあのロドロフの弟子の鍛冶師が作ってるんだからな」

感想を口にする私に武器屋の主人が答える……そうか彼の弟子が作っているなら納得だ。

この装備が自警団の命を守っているんだな。

私は一本手に取り周囲の安全確認をしてから軽く振ってみる。

風を切るいい音がする……重量バランスも中々良い、これにするかな、そう思っていると武器屋の主人がこちらを見ているのに気が付いた。

「どうした主人」

「いや……今まであんな鋭い音出して振れる奴いなかったもんな。あんたかなり使えるな？」

「少なくとも自分が弱いとは思って無いな」

「この町には立ち寄っただけなのか？」

そう聞いてくる主人。

「立ち寄っただけだが、やる事が出来た……この剣にあうベルトも頼む」

剣を持ちカウンターに乗せる。

「やる事？」

「この町の自警団を鍛える事になった」

金を払い剣とベルトを付ける、今の服装は黒のワンピースの腰にベルトと剣……変では無いよな？

「そいつは助かる。誰かが守らなきゃ町が危ないのは分かっているが、俺はもう年で戦えん……だが出来れば若い連中に死んで欲しくは

ねえ」

「どこまで強くなれるかは奴ら次第だな」

そう言い残して武器屋を出た。

宿への道の途中魔道具や錬金薬の店も見かける、魔法武器や魔道具は今も高価だがロドロフとミシヤの技術によって安価な物も以前より良い物になった。

錬金薬と魔法学校による魔法の普及は様々な場面で有効に使われている。

そしてそれらの技術は生活を豊かにし、今も増え続ける魔物に対抗する力にもなっている、きっとこれからも進歩を続けるだろう。

そして魔物も進化するだろうな、眠りにつく前と比べても種類も数も全く違うからな。

「どちらかが滅ぶような事にはなって欲しくないが」

魔物も進化を続ければ意思の疎通が出来る者が生まれるかもしれないからな。

やがて宿に着き、食事をし翌朝まで静かに自らを高めるのだった。

「これから皆を鍛えるクレリア・アーティアだ、好きなように呼んでくれ」

自警団の訓練場に団員が集まり私が紹介された、十人か、命を懸ける事を考えると多い方かもしれないな。

事前に私の事は話してあるようでそこまでざわつくことは無いまま挨拶は終わった。

「まずそれぞれがどれだけ動けるかを確かめる」

「こんなガキみたいな女使えるのかよ……」

……ふむ、まずはお前からだな。

「そう言う事は心で思うか聞こえないように言え」

そう言うと言った男が皆から見られる、男は怒ったように言う。

「こんな奴に頼って恥ずかしくないのか！俺達だけでやれるだろう

!？」

「私はソニアに頼まれて此処に居る。文句があるのならソニアに言え」

顔を赤くする男、私はさらに続ける。

「私は訓練を受けたい者に訓練をする。受けたくないのならさっさと帰れ」

そのまま戦っても早いうちに死にそうだからな。

「……このガキがああっ！」

男は突然私に向かって突っ込んでくる。

「私は成人している」

突っ込んできた男を軽くいなして気絶させる。

「よし。一人ずつ模擬戦用の武器でかかってこい、どの程度か確認する」

そう言いながら気絶した男を脇に放り模擬戦用の剣を取ると団員の一人が聞いてくる。

「あ、あの……アーティアさん。彼は……」

さっつき気絶させた男の事か？

「放っておけ、そのうち目が覚める」

「は、はい」

男は顔を引きつらせながら返事をした、別に殺していないぞ？手加減も上手くなったからな。

「よし、適当に順番を決めて始めるぞ」

それから暫く経った訓練場には全ての団員が死んだように転がっていた……持久力が無さすぎる。

気絶させた男が起きる前に終わってしまった。仕方ない……今日彼らの現状を確かめるだけだったしな。

「クレリアさんこれはいったい……」

ソニアを呼びに行き、訓練場を見た彼女の第一声がそれだった。

「現状を知りたくてな。全員と模擬戦をした」

「すぐに治療しなくては」

そう言って回復魔法をかけ始める。

「魔法を使えるのか」

「はい、テイリア魔法技術学校に三年在籍していたので」

ケインの学校の生徒か、初めて生徒に会ったな。

「頼りになるな」

「基礎的な物だけですけどね」

照れくさそうなソニア、魔法は使えるだけでかなり役に立つぞ。

「あら？彼は……？」

放っておいた男に気が付いたようだ。

「奴は私に鍛えられるのが嫌なようだな。向かって来たので気絶させた」

「そうですか」

奴がどうするかは知らんが真面目に訓練するなら鍛えよう。

「今日はもう終わりだ、また明日同じ時間に行う」

「分かりました」

予定を伝えると彼女は了承し治療に戻る、そう伝えておかないと。

「その男にどうするかは勝手だが邪魔をするなど伝えておいてくれ」

大人しくするならよし、余計な事をするなら残念だが出来ないようになってもらおう。

「……はい」

ソニアは目を瞑りながら返事をした、その答えを聞いた私は訓練場を後にした。

私の部屋に戻り食事も風呂も終え後は朝を待つだけとなった夜、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「ソニアか」

鍵を外し扉を開けるとソニアが立って居た。

「入っても良いでしょうか？」

「いいぞ」

ソニアを招き入れ、果実水を用意する。

「ごめんなさいクレリアさん」

「ん？なにがだ？」

突然謝るソニア、意味が解らず問い返す。

「訓練場で団員の一人が貴女に……」

「ああ、その事か」

彼女は責任を感じて詫びに来たのだろう、気分を損ねて話を無かった事にされるとでも思ったのかな。

「特に気にしていない、初めて会う者に姿で侮られるのはいつもの事だ」

「事前に話はしておいたのです……その時は特にそのような事は無かったのですが」

実際に見て想像以上に私が幼く見えたからかもしれないが。

「私は訓練を止める気は無い。奴も次から真剣に訓練を受けるのならそれで良いし、諦めても構わない」

「ありがとうございます……」

ほっとした顔をするソニア、そこまで心配だったのか。

「クレリアさんはどうしてこのお話を受けて下さったのです？」

そんなことを考えながら果実水を飲んでみるとソニアが聞いてきた、理由か……そうだな。

「最初は人を育てるのが楽しそうだったからだな」

「最初は？」

不思議そうな顔をするソニアを見ながら言葉を続ける。

「もう一つ増えた理由はソニアがティリア魔法技術学校の生徒だった事だな」

「学校……ですか」

不思議そうな顔は変わらず声を漏らすソニア。

「あの学校には少し思い入れがあつてな、生徒だった者に少し手助けしたくなっただけだ」

「初めて出会った生徒だ、多少手を貸すのも良いだろう。」

「なるほど……」

返事はするもののやはり不思議そうな顔のソニア、まあ気にするな。

そして翌日、ソニアにも来てもらい待っていると団員達はソニアの治療のおかげか多少疲れが残って見えるが全員揃った……そう、全員揃った。

「よし、今日から暫く体力を上げる訓練をする、何をするにもまずは体力をつけなければ話にならない」

そう告げると訓練場を走るように指示をすると全員走り始めた、昨日の男も。

「あの男訓練を受ける気になったのだな」

「ええ、貴女が訓練場を後にしてすぐに目を覚まして。あの惨状を見て驚く彼に貴女がやったと説明したんです」

ふむ、私の力を認めたのかな？

「元々彼も命の保証はない自警団に志願した一人です……町を、仲間を思う気持ちは確かなんです……意地を張っても仕方ないと納得したのだと思います」

このままだと勢力増し続ける魔物に町が飲み込まれるかもしれないからな。やれる事はやっておいた方が良い。

こうして時間をかけて団員の体力を上げる訓練が始まった。

「教官！準備が出来ました！」

団員の訓練を開始してから半月皆体力も付き人員も増えた、魔物が

町を襲う事もそれなりにあったが、私が付いて行きそれすらも訓練の一部とした。

そんな事をしていたら団員から教官と呼ばれ態度が変わってしまった、最初はもう少し、こう……違ったはずなのだが。

「分かったすぐ行く、お前達は装備を整え待機して居ろ」

「はっ！」

背筋を伸ばし気を付けをして返事をする団員……違ったはずなんだよな……。

訓練場に移動した私は武器を取る、模擬戦用の刃を落とした鉄の剣だ。

「全員！気を付け！」

並んでいる団員の一人が声を上げると皆、気を付けをして私の言葉を待つ。

「今日は月に一度の私との模擬戦だ。訓練の成果を全てぶつけてかかって来い」

「はい！」

団員の良い返事が重なる、以前ソニアに自警団というより軍隊に見えると言われた、その通りだな。

私が中央で武器を持ち立つ、相手の男がやって来る、彼らの武器は刃を落としていない実戦用だ。

そう思っていると団員が突然こちらに駆け寄り、中々良い剣筋で切り付けてくる。

私はそれをはじき返し、言う。

「戦闘に開始の合図など無い……良いぞ」

更に打ち込んでくる彼、それを受けいなし躲す私。

「それでは隙が出来るぞ」

「ぐっ!？」

振り抜いた攻撃の隙を縫って踏み込み柄で彼の鳩尾を打つ、それでも攻撃をしようとするがうずくまってしまった。

「中々悪くなかった、次は相手に躲された後の事を考えて見ろ」

「あり、がとう、ごさいました……」

「お話を聞いて欲しくて来ました！」
今までに何度か覚えのある状況だが。

「聞くだけなら聞いてやる」

彼の話の内容は、自分の町の様に魔物に脅かされている町や村を回って救いたいという物だった、それを行う為に自分を徹底的に鍛えて欲しいと。

「駄目だな」

俯き拳を握り締める少年、意味も無く言っているわけではない。

「まずお前はいくつだ？若すぎる。徹底的には鍛えられない……そしてお前、両親にこの事を話しているか？」

「それならそれまでに少しずつでも鍛えて下さい」

顔を上げて言ってくる少年、真剣だな。

「ふむ、それなら構わないが……両親の事に答えていないぞ」

再び顔を俯かせる少年、この感じは……。

「両親は居ません……俺がもつと小さい頃魔物に襲われて死んだと聞きました」

現在彼は十三才らしい。

「そうか」

それでこんな事を頼みに来たんだな。

「お祖母ちゃんは好きにしなさいと言ってくれました」

その言葉を言った祖母は悲しそうな顔をしていなかったか、とは聞かない事にした。

「本気なんだな？」

「はい」

両親を殺した魔物を殺して回るか、私が気にしても仕方ない事だな。

「明日の朝また来い詳しい話をしてやる」

「っ！じゃあ！」

顔を上げて聞いてくる。

「鍛えてやる、覚悟はしておけ」

「分かりました！」

動きやすい服装で来る様に言い帰宅させる、少年が帰った後ソニアにこれからの事を相談し許可をもらった、これで少年の訓練に集中できる。

「来たな」

「よろしくお願いします、先生」

翌朝、私の部屋にきた少年を連れ自警団の訓練場の一角を借りる。

「まずは訓練を開始する前に守る事を教える」

「はい」

「動きやすい服装で必ず来ること、どんなに食欲が無くても食事は食べる事、焦って自分で訓練をせず夜はしっかりと眠る事」

「これだけですか？」

気の抜けた顔で言うルランド、団員が言うには意外と大変らしいぞ、特に食事が。

「そうだ。分かったら早速始めるぞ」

「はい、先生」

こうして訓練を開始した。

少年を鍛え始めて二年、体もでき始めきつい訓練に耐えられるようになってきた。

「ふっー！」

訓練場に金属音が連続で鳴り続ける。

「良いぞ、その調子だ」

基礎訓練を終えた後は私との模擬戦だ……実戦に勝る訓練は無いと言うしな、ひたすらに様々なスタイルの私と戦い続ける。

「そこまでー！」

「っは!!……はっ、はっ、はっ!!」

その場に倒れるルランド、倒れている場合では無いぞ。

「訓練後の柔軟をしろルランド」

「は、はい……先生」

立ち上がり体をほぐす彼、最初は途中で投げ出す事も考えていたのだが、弱音は今まで吐いていない。

「育て甲斐のある教え子だ」

自然と薄く笑みを浮かべながらルランドを見ていた。

「次は魔法だぞ」

私は彼に魔法も教え始めた、私が魔法を使える事に団員もソニアも驚いたようだが、その後ソニアがなぜか納得したような顔をした。

更に三年後、十八才になったルランドも卒業間近だ、団員も彼の強さを認めており仲がよい。

「ルランド」

いつものように基礎訓練を終え、私との模擬戦に臨もうとする彼を呼び止めた。

「はい、先生」

「お前はもうすぐ卒業だ。それから好きにすると良い」

「え……でも先生。私は一度も貴女に勝てた事ありません」

私に勝つなど二万年早い。

「強くなった気がしないのか？」

「正直な所……はい……」

そうか……。

「今日の模擬戦は中止だ、ついてこい」
こうして私は彼を連れ町の外に出た。

彼を連れて森へ入り目的の魔物を見つける、触手がたくさん生えた大きなネズミのような魔物だ。

「あれと戦って見ろ」

「あれは……昔俺が挑まされて死にかけた相手じゃないですか……」

顔をしかめるルランド、いい思い出では無いだろうな。

「良いから行ってこい、油断はするなよ」

「勿論です」

私に行けと言われれば彼は断れない、戦士の顔になり向かっていくルランド。

戦闘はあっという間に終わった、彼は触手を躲し続け相手の噛みつきを流れるように受け流し首を落とした、それはまるで私のような動きだった。

「あれ……？」

かつて殺されかけた相手にあまりにも簡単に勝ってしまった彼は間拔けな声を上げた。

「ルランド、勝ったからと言って気を抜くな！」

全くこいつは、今のお前の実力なら当然だ、ずっと私を相手にしていたんだぞ。

「すいません！先生！」

我に返った彼が答える、そんな彼に声をかける。

「これが今のお前の実力だ」

「どうして急に……？」

急に強くなる訳ないだろう……。

「急には無い……今までの成果が形になったただけだ。お前は私と模擬戦ばかりしていたが強くなるにはこれが一番だった。私と戦い続けているうちにこいつをとつくに超えていた訳だ」

「そうか、俺は……」

そう言って武器を持つ手を見る彼。誇れ、お前は強くなった。

こうして今日は終了とし、私はいつものように食事と入浴を済ませて部屋で寛いでいた、その時扉がノックされる。

「ルランドかどうした」

「もうすぐ卒業らしいから話をしておきたくて」

「まあ入れ」

彼を部屋に入れ果実水を出す。

「それで話とはなんだ？」

私を見て黙っているルランド、しばらく沈黙が続き私が再び促そうとした時、ルランドが言った。

「先生。俺は貴女を愛しています、俺と一緒に街を巡ってください」私を見つめて言うルランド。

は？いや待て。

こいつ私に恋をしていたのか？何故よりもよって私に……その想いは報われないぞ。

「無理だな」

「……なぜです」

苦しそうな顔の彼、新しい恋を見つけて欲しいが。

「お前の気持ちは嬉しいが私は人を恋愛対象として見ていない……そもそもそんな物が無いからな」

苦しそうな顔から困惑した顔になる彼……これは話しておくか。

「信じられるかは分からんが聞いて欲しい」

そしていつもの様に私の事を話した、過去の事、私が人では無い事、ここに至る迄の事を。

話し終わった後、静寂が訪れた彼は俯き拳を握り締めている。

「それでも、俺は先生の事が……」

幼い少年に戻ってしまったような声で言う彼。

「お前の気持ちは嬉しく思う。恋愛感情は分からないが……私もお前の事は大切な教え子だと思っている」

子供の様に涙を流す彼の頭を撫でる。私はお前の想いに答えられない……新しい恋を見つけ幸せになつてくれ。

暫くの間泣き続ける彼を撫で続けていた。

その後、彼はすつきりとした顔になりいつもの様に戻った。そして数日で準備を整え目的のために旅立っていった、いつか魔物から全ての町を救い私に妻を紹介すると言って。

私が人間に求愛されるとはな。

今までそんな事が無かったからそれなりに驚いたぞ、そう言えば私は美人だったな、強くて美人でいつまでも若く見える……そんなにい事なんだろうか？

そして私は彼の出発を機に街を離れた、今までまったく気にしていなかったが町の名前はシルチと言うらしかった。

これでルランドとも会う事は無いだろうと思っていたのだが。

ルランドの旅立ちを見届けてから十年後、街道を歩いている私に念話が来た。

『先生、聞こえてるか？……これでいいんだよな？先生？』

これはルランドか？向こうから念話が来るのはもしかして初めてじゃないか？あいつらは全く連絡をよこさんからな……まあ私も用が無ければしないが。

『先生？駄目なのかな。どうすつか……』

おっと不味い。

『聞こえているぞ』

『うおっ!?!良かった駄目かと思っただぜ、先生』

『お前から連絡が来るとは思わなかったぞ』

『どういう意味だよそれ？』

随分感じが変わったな。悪くなっただけはない、何とかフレンドリーになったような感じか？

『お前も大人になったか?』

今いくつになったんだルランド。

『何年経ったと思ってるんだよ先生……十年だぞ、俺も二十八だ』

『ん? まだそんなものか、意外と経っていないな』

『……そんなんだから一万年をサラツと過ぎちまうんだよ』

言われてしまったが、寝てたようなものだぞ。

人間は僅かな時間で色々変わるものだな。

『で……何の用だ?』

『先生の知恵を借りたい……俺のいる町に来てくれないか?』

何かあったのか、私を頼るような。

『構わんど、可愛い教え子の頼みだからな』

『ありがとよ先生……町の名前はレクシドだ分かるか?』

アルベリク商会のある町じゃないか、久しぶりに見に行くか? でも

まずはルランドの事だな。

『分かったすぐ行く』

『どれぐらいかかる?』

私は開発していた転移魔法でレクシドのそばに飛んでいた

『もう着いた』

『……はあ?!』

レクシドに着いた私は混乱するルランドに場所を聞き移動した。

大きな趣味の良い屋敷がある。どうやらこの十年で辺境の英雄などと呼ばれて部下も各地に出来て、ギルドと言う戦闘集団を作って各地の魔物と戦っているらしい。

「此処か」

扉に近づき門番に近づくと声をかけてくる。

「お嬢さん何か用かい?」

感じは悪くない、中々良い仲間に出会えたようだな。

「ルランド・カリスに会いに来た、クレリア・アーティアが来たと伝

えてもらえないか？」

「……分かった、ここを頼む」

彼は僅かに訝しんだが、別の門番に声をかけると屋敷に入ってしまった、そしてしばらく待つと急いで戻ってきた。

「ルランドがお会いになります、どうぞこちらへ」

態度が変わっている、奴に何か言われたかな。

屋敷の応接間に案内され、飲み物を飲んでしているとドアが開き歴戦と言った風体の男が入ってきた、この男……。

「十年ぶりだな先生！」

「元気そうで何よりだ」

やはりルランドか、昔よりもずっと腕を上げているようだな。

「積もる話もあるだろうが今は用件を聞きたい」

そう切り出すと彼は語り始めた。魔物の増加に伴って魔物の素材が多く取れるようになった事、需要はあるが各地で異常に高かったり安く買い叩かれたりと差が激しすぎる事。

そこで彼は考えた。自分達ギルドが魔物を狩り各地の商会と連携して、買取価格の安定と需要と供給のバランスを取れないかと言う話だった。

ただ具体的にどういう仕組みにすればいいかわからず悩みに悩んで私に頼る事にしたらしい。

「二つ良いか」

気になる事がある。

「なんだい先生」

「この案お前が考えた訳では無いな？」

彼はバレたかと言った顔になる。

「正解。知り合いの商会の案だよ」

なるほどな、なら恐らく……。

「その案を出した者に聞いてみる、誰かは知らないが恐らく何か考

えていると思うぞ」

モニカだったら食いついて来そうな話だな。

後日ルランドが発案者に訪ねてみた所、すでに考えてあると答えが返ってきたらしい。私は何のためにここに来たんだ。

その後彼の家に泊まる事になった私は、談話室でルランドと話しをしていた、色々な話をしてそこそこの時間が経った後私は聞いた。

「ルランド、お前は結婚はしないのか？」

「……先生がそれを言うのか」

彼は苦笑いしながら答える……彼の初恋は私だったな。

しばらく黙っていたがポツリと彼が言う。

「気になってる相手は居るんだ」

良かった、私にこだわっても良い事は無いからな。

「誰だそれは」

「俺にあの案を話した商会の娘だよ」

商売だけでなく、人生も一緒にか。

「名前は何というんだ？」

「マリア・アルベリク」

……アルベリク？私が離れた時は男だけだった気がするがまた生まれただのか？

「どうした先生？」

おっと考え込んでしまった。

「上手く行くと良いな」

「ありがとよ」

それから頻繁にルランドとアルベリク商会の話し合いが行われ

色々と言が形になってきている、その間わざわざ来てくれたのだから、私はルランドの屋敷に世話になっている。

そんなある日、私は町に出て店を見て回っていた、アルベリク商会の本拠があるだけに規模も数も他の町とは一味違う。

「失礼その方？」

声が聞こえるが私は商品を見ている、そうしてしばらくすると。

「あの、すみません」

真後ろで声が出た、私は振り返り声を上げた人物を見た。

「申し訳ありません、間違っていたら申し訳ありませんが……ルランドさんの屋敷に滞在している方でしょうか？」

赤い髪の大人しそうな少女だ、誰だこいつは。

「ああ、確かに滞在しているがそれがどうかしたのか」

「あの、こちらへ来ていただけじゃないでしょうか？」

私を人気がない方へ誘う女、何かするようには見えないしまあ良いだろう。

人気が無い所へ来た私に女が質問してきた。

「ルランドさんと貴女はどんな関係なのですか？」

「……ん？どういふことだ？」

「その前に聞きたいのだが、お前は誰だ？」

ハツとする少女、彼女は姿勢を直し答える。

「申し訳ありませんでした。私はアルベリク家長女、マリア・アルベリクと申します」

ほう、こいつが例の娘か、私とルランドの関係を聞いてきたと言う事は、案外この二人上手く行きそうだな。

「なるほどそれで私と奴の関係か」

「はい」

彼女は私が名乗り返していない事など気にならないのか答えをせかす。

「先生と教え子、だな」

「ルランドさんに教えを受けていたのですか？」

逆だが細かく説明も出来ないし、する気もない。

「通りかかったから少し模擬戦をしていた」

「その……男女の関係などでは……」

顔を赤くして聞いてくるマリア、なるほどな私と恋仲なのではと心配になったわけだ。

「誓っても良いがそんな関係ではない」

昔、告白はされたがな。

「そうですか……」

ほっとした顔の彼女、良かったな、両思いだぞ。

「もういいか？」

「あつ、はい……ありがとうございます……あの、お名前を」

「クレリア・アーティアだ」

そう言つてその場を後にした。

「困った」

私の部屋を訪ねたとたんと言うルランド。

「今度はなんだ」

また何かあったのか。

「新しいギルドと商会の仕組みにギルドカードってシステムを組み込もうとしてるんだよ」

ギルドカードね、身分証明のようなものかな。

「それで？」

話を促す。

「魔力パターンを利用した物を基礎にしようと思っていたらしいんだが、開発者が許可してくれないんだ」

昔ロドロフとミシヤと一緒に開発した物か、しかしなんで許可しないんだ？

「何故断っているんだ？」

「それが自分達以外にもう一人開発者が居て元はと言えばそいつの為に作った物らしくてな」

何故念話で聞いてこないんだ？

「少し待ってくれ」

「お？おう」

ルランドに断りを入れて念話をつなぐ。

『ロドロフ、ミシヤ聞こえるか』

『うお!?!つながった?』

『私も聞こえたよ』

二人の声が聞こえる。

『二人とも魔力パターン技術を使うのを断っているようだな』

『ああ、お嬢の為でもあるし俺達だけで決める訳にもな』

『なぜ念話で聞かなかった?』

『それが、聞こうと思ったんだけど繋がらなかったんだ』

ミシヤが答える、繋がらなかった?』

『どういうことだ?』

『俺にも分からねえ……ずっと使わなかったからいつから駄目になっただのかもしれないんだ』

どうなっている?』

『今はその事は良い、後で調べてみる』

『分かった』

ひとまず用件を終わらせよう。

『魔力パターン技術使わせても良いぞ』

『いいのかい?』

『ああもちろんふたりも良いと思うのだが』

ミシヤの確認に返す私。

『お嬢が良いなら俺達は構わないけどよ』

『そうだね』

二人とも構わないようだ。

『では頼んだ、念話については何か分かったらこちらから連絡する』
会話を終えてルランドに話しかける。

「魔力パターン技術使って構わんぞ」

「え?なんで先生が……嘘だろ!?!」

困惑した後、驚くルランド。

「良いから開発者に連絡を取ってみろ、今度は許可を貰える」

「ありがとよ先生……」

そう言っつて部屋を出て行った。

一年後、無事に許可を得たルランド達ギルドとアルベリク商会を始めとした各商会は魔力パターン認証技術としてギルドカードを作製し、徐々に世界へと広がっていく。

その途中ルランドはギルド総括長として各地のギルドを統率する立場になった。

更に五年後、魔物の買取が安定した結果、ギルドメンバーの中に魔物を狩りより価値のある珍しい魔物を求めて未開の地にもおもむく者が現れ始め、やがて彼らギルド所属者は冒険者と呼ばれるようになり数を増やし、一種の何でも屋の様な立場になってゆく。

その間に念話の問題も判明した、本人の魔力と大気中の魔力濃度が念話に影響していることが分かった、私の様に大きな魔力があれば問題ないが、少なくなつてくると距離や先程の大気中の魔力が影響して繋がったり繋がらなくなったりする様だ。

そして私はそれを見届けた後、町を離れ旅を再開した。

ギルドと商会の仕組みの定着と冒険者の誕生を見届けた私は再び旅に出ていた、結局あれから長い間同じ町に居たにも拘らず商会の皆に会う事は無かった。

それで何となく分かった事がある。

一度長く関わった人間には意味もなく関わる気がしない。

飽きてしまう……とは少し違うが、以前会った相手よりも新しい誰かの方が興味を引くようだ。

それに気が付いた時自分はやはり酷い奴なんだなと思わず笑った。

どれ程仲が良くなるうと興味を失えばそれまで……自分の身勝手さを感じながら旅をする中、立ち寄った場所である話を聞いた。

宗教だ。

クリミア教と言う宗教が各地に広まっているらしい、布施などを神に捧げる事で死後神の世界へ行けると言う事らしいが……。

なぜこんな妄言が信じられているんだ？

あまりにもおかしい。今まで出会った者達を見るとそんな事を信じる者がそこまで増えるとは思えないのだが……。

興味がわいた、行ってみるか。

こうして私はクリミア教本部のある神都テレミアに向かう事にした。

かなり賑わっているな。

中々に大きい町だ、何故か黒い服の人間が多い気がする……私も黒いワンピースだが。

「ごらっしやこ」

私は町の食料品店に立ち寄り食料を買うついでに聞いてみた。

「この町は黒い服が多い様だがどういうことだ」

店員の女性は不思議そうに言う。

「ん？お嬢さんクリミア教の信徒じゃないのかい？」
なぜそうなる。

「どういうことだ？」

「お嬢さんは黒い服を着てるだけなんだね、クリミア教の信徒は黒い服を着るのさ……昔ここに降臨した神様が黒い服を着ていたらしくてね」

そう教えてくれる、なるほど神とやらに合わせている訳か。

「なるほど。教えてくれてありがとう」

「いいよ、こんなを買ってくれたしね」

店員にお礼を言って店を離れる、なぜこんなに信じられているのか教徒に聞いてみようか。

「ここが神が住んでいた神所です」

私はそのあたりの信徒に声をかけなぜそこまで信じているかを聞いた所、実際に神が住んでいた家が存在し今も奇跡に守られていると聞いた。

見学できるか聞いた所、問題無いようだったので案内されたのだが……。

「……これは」

「一見ただの家のように見えますが、いつまでも汚れる事が無く、何をしても傷一つ付きません！今の世界にこの様な魔法も技術も存在していません！これこそが神の技！神が存在した証明なのです！」

困惑する私をよそに説明に熱が入る信徒の男性、私は説明を聞き流しながら目の前の家を見ていた。

「ここはあの村だったのか」

ポツリとつぶやく……それは間違いなくかつて私がンミナ達と過ごした家だった。

あの家のせいか……。

私は宿を取り部屋で考える、確かにあれには私の維持魔法や防御魔法がかかっている。

今の魔法技術であろうと何であろうと私以外では恐らく破れる者は居ない。

単なる言葉だけならばまだしも、実際にああして今でも不可能な現象が起きていれば信じてもおかしくは無い。

昔はこの村で神として崇められていたが、まさかここまで規模が大きくなるとは……。

まあ放っておこうか、心の拠り所は必要だ。暫くこの町を見て回ったらまた旅を始めよう。

ん？なんだあいつらは。

町に滞在してから三日目の朝、町を歩いていた私は町の広場の中央にある高台に居る豪華な黒い服を着た男と、黒い服を着た少女を見つけた。

周りには信者である黒い服を着た者達が居り、普通の服を着た女性が跪いている。

「私は神の国に行きたいのですどうすればよいのでしょうか？」

跪いている女性が言う、神の国だと？

そう思っていると豪華な黒服の男が言う。

「神の言葉を聞き従えば貴女は死後神の国に誘われるでしょう……神の生まれ変わりである巫女様のお言葉を聞きなさい」

神の生まれ変わり？私は此処に居るのだが。

「はい……」

男の言葉に従う女性、宗教とはこのような物なのか……下らんな。「神として命じる……汝は教祖たるこの男に……すべてを捧げなさい」

い、さすれば神の国に導かれる……でしょう」

「はい……神よ」

巫女と呼ばれた少女の顔が見えた、彼女はそっくりではないが確かに彼女の面影があった、その顔は悲しそうだった。

「……ンミナ」

私はそう呟いた。

そう思い彼女を見ていると教祖と呼ばれた男が嫌らしい笑みを浮かべながら言う。

「神の言葉は届けられた……貴女は今夜私の所に来るのです、良いですね？」

「はい。身も心も全て教祖様に捧げます……」

女性はそう言うのと、教団が用意したと思われる黒い馬車に乗り込んで連れていかれた。

私はその光景を見届けた後宿に戻った。

「彼女は悲しんでいた」

これは彼女に会いに行くか。

もしも嫌がる彼女に……私の巫女を利用しているのなら報いを受けて貰う。

彼女の居場所は分かる、夜にお邪魔しよう。

そしてその夜私は神殿の彼女の部屋に入り込んだ。

「つく……ひつく……」

彼女は泣いているようだ、私は身に着けていた剣やベルトを外し姿を現した。

「っ!? 誰……っ?」

彼女は驚いたようだが私の姿を見ると話しかけてくる。

「私はクレリア・アーティアと言う、聞きたい事があつてきたんだ」
私は優しく語り掛ける、彼女は戸惑っているが何故か騒いで助けを
求めようとしめない。

「あ、シルミア・アティ……です、クレリア・アーティアさんですか
……何でしょうか……？」

戸惑うような表情をして聞いてくる彼女。

「シルミアか。シルミアは神の生まれ変わりなのか？」

「違います！私はただの巫女の家生まれた人間です……
そうだろうな。」

「どうしてこんな事になっている？他の巫女はどうした？」

「それは関係のないあなたに貴女に話す訳には……」

何か決まりにでも縛られているのか、戸惑うシルミア。

「話して欲しい、シミナの一族に辛い思いはさせたくは無い」

私の言葉を聞き目を見開くシルミア、暫くすると彼女は語り始め
た。

魔法や技術が広まるにつれ扱いが悪くなつていった事、利用されそ
うになる前に泣く泣くこの場所を捨てて逃げた事、自分達も逃げよう
と思っていたが寝ている所に忍び込まれ捕らえられた事、母親の命と
引き換えに教団の巫女として働く事を強制された事。

「なるほどな」

「ひっ!？」

体から霧が出るのは抑えたが髪がなびき始める、昔よりは抑えられ
たがどうもイラつくどダメだな。

「悪かった、怖がらせるつもりは無いんだ」

「平気です……あの貴女は……」

どうするか……今私とその神と言われていたと言つて信じて貰え
るのか？

「信じないだろうが私が神と呼ばれていたクレリア・アーティアだ」
黙ってしまうシルミア。

「一つお答えください」

そう言うシルミア。

「なんだ？」

「ンミナ様は貴女にとってどんな方でしたか？」

それは決まっているあの時、彼女に伝えた気持ちは変わっていない。
い。

「ンミナは私にとって初めて心を許した人間であり、姉であり、妹であり……母親だ」

それを聞いた彼女は私に跪いて首を垂れる。

「……おかえりなさいませクレリア様」

お前達の一族は今も私を敬ってくれるのだな……だが間違っているな。

「シルミア今はそうでは無いぞ」

顔を上げて私を見る彼女、そんな彼女に両腕を開いて待つ私。

「あ、あの……クレリア様？」

黙って待つ私、彼女は戸惑いながらも私に抱き着く、私は彼女を抱きしめる。

「ただいま私の巫女、私の娘……お前と母親は私が救ってやる」

「クレリア……様」

私の胸で泣くシルミア、しばらく彼女の泣き声を聞いていた。

「さてまずは母親を救おうか」

泣き止んだシルミアに話しかける。

「でも私は居場所を知らないのです」

そう言う彼女だが。

「私を誰だと思っているのだ」

すぐに彼女の母親を探し出す、普段はこんな事はしないが今は別だ。

「お前の母親を救いに行く。お前はここで大人しく待っている」

「はい」

そう答える彼女を残し、姿を消し母親のいる地下へ向かう。

見張りは居たが消えている私には関係ない、そのまま地下に下りる。

その先にあつたのはずらりと並んだ牢屋の様な部屋だった、幸いと
言うべきか、彼女の母親以外は居ないようだ。

「良いとは言えない状態だな」

見つけた彼女は寝ていたが、体は弱り始めていた。

「まずは回復だな」

回復させ目覚めさせる。

「ん……あれ、体が……」

起きた彼女は体が楽な事に気が付いたのか声を上げる。

「目が覚めたか……さっさと抜け出すぞ」

「えっ？」

彼女をつかみシルミアの部屋に転移する。

「ふえ？」

「お母さん!」

可愛らしい戸惑いの声を上げる母親と母親に抱き着くシルミア、
私は訳も分からず娘を撫でる母親と泣きながら抱き着くシルミアの姿
を見ていた。

「クレリア様……」

「無事でよかった、私の巫女……私の娘」

シルミアの母親、クレア・アティを抱きしめる。

私がああ神である事を始めは信じられないようだったが
言ったあの言葉で信用された。

どうやら私とンミナの主従の様な家族の様な関係と、死に際のやり
取りは記録に残っており、嚴重に隠し守られ代々巫女と巫女候補達し

か読む事が出来ないらしいな。

それを巫女ではない私が一言一句間違えずに言える事が信じる根拠だったらしい。

まあ他にも転移したり髪が動いたりあっさりクレアを救ったりと、根拠はあったらしいが。

「クレリア様この後の事ですが……」

「まずはお前達が二度とこんな事にならないようにする」

私の巫女達に手を出したことを後悔させてやろう。

その後、私は彼女達を連れて広場に神として名乗りを上げ堂々と降臨し、巫女とは神に仕える者であり生まれ変わりでも代弁者でも無い事を町中の者に魔法で響き渡らせた。

私腹を肥やしていた者達は私の前に引きずり出し、多くの信者と町人が呆然と見守る中、消し飛んでもらった。

町の者達は信者もそうでない者も、ひれ伏し神の怒りに身を震わせ許しを請い、大騒ぎとなった。

この騒ぎは長く続いたが私は後をアティ母娘に任せて身を隠した。泣く泣く逃げた巫女達も戻り、これでふざけた宗教は無くなるだろうと思っていたのだが。

「どうしてこうなったのだ？」

「私には何とも……」

姿を隠して一年、テレミアの付近に身を隠したままクレアとシルミアの報告を聞いた私は聞き返す。

クレアが言うには、あの時ハッキリと名と姿、そしてその力を見せてしまった事で、本当に神が居たと町の全員が崇めるようになってしまいその時共に居たアティ母娘が神に選ばれた使徒として認識され

てしまった。

宗教的にはまったく無くなっておらず、それどころか一気に信者が増えてしまったらしい。

「以前の様な私欲を満たすようなものでは無くなりましたが……」
クレアが苦笑いをしながら言う。

あの後各地で神に似た者を見た事があると次々報告があり、人に紛れ気まぐれに救いをもたらす自由を司る神であると認識され定着してしまった。

あれだけのやったのに恐怖の対象では無いのは無関係な者には一切罰が下されていないかららしい。

後悔は無い、奴らを許す気もなかったし我慢する気もない……が。これは諦めるか。

姿を変えて過ごそうかと思つたが今の姿に愛着があるしな、この姿が一番だ。

目撃者や信者から記憶を消すことも不可能では無いだろう。だが流石に数が多いしそこまでする気にならない、百年ほど身を隠していれば落ち着いて、また旅が出来るようになるだろう。

「クレリア様。私達はどうかいたしましょうか……？」
シルミアが聞いてくる。

「お前達が嫌でなければ……クレリア神教……この宗教が変な方向に行かないようにして欲しい」

後悔は無いがこの名前はな……自分の名前が付いた宗教があったら町で名乗りにくくなるではないか。

「分かりました。私達が見届けます」
二人は了承する。

「無理にやらなくても良いんだぞ？」
そう言うと、クレアが答える。

「いえ問題ありません。私達はすでに信徒から使徒と認識されているので」

そうか、そうだったな。

「巻き込んでしまったな」

「何も問題ありません。私達は生まれた時から貴女様の巫女なので
すから」

クレアは微笑んで答える。

「ありがとう」

そう私が言うと、二人は一礼し、去って行った。

「しばらく人類の勢力圏外を旅するか」

そう決めて旅立った。

流石に何も言わないのは私が嫌だった為、長い間姿を隠す事を皆に
念話で伝えた。

反応は様々だったが皆からは私がする事だからと納得の様な諦め
の様な言葉を貰った。

そうして旅をしているある日、魔力濃度が以上に高い場所を感じ
た。

……この洞窟の中か？

その場所は森の中の洞窟の奥だった、確認するために中に入る。

近寄ってみると魔力が溜まっただけでなく、奥から流れてきて
いる。

原因が奥にあるはずだ。

そのまま奥に進むと曲がりくねった道になってきたそしてしばらく
進む。

女性……か？

金髪の恐らく成人しているだろう女性が裸で倒れていた。

「おい、生きているか？……ん？」

肉体的に問題が無いかと調べた所人間では無いようだった、今まで
見た事が無い。

まさか……いや、違うか……。

私の同類かと思っただがどうやら違うようだ。ただ彼女が特殊な
……私の様な独立した種族である可能性が高い。

とにかく連れ出してみるか。

何かあっても私ならどうにかなるだろう、私は彼女を髪で持ち上げ
ると外へ向かう。

裸なのはちよつとな。ワンピース……いや大人の女性ならドレス
にしようか、黒いドレスを彼女にまとわせる。

「金髪に黒いドレスは中々似合うな」

そんな事を言いながら待つ。

「あう……」

外に出て洞窟のそばの地面に寝かせていた女性が目を覚ました。

「気が付いたか、何があった？」

彼女はオレンジ色の瞳をきよろきよろさせてぼんやりしている、寝ぼけているのか？

「しっかりしろ、しっかり目を覚ませ」

「うー……あー」

彼女は呻きながら転がっている、流石に違和感を覚える。

「おい？」

「だー……うー」

これは……。

「う……わああああああん!!」

「知能が赤子並みなのか……？」

いきなり泣き出した女性を見て思わず口にする。

「とにかく何とかしよう、子育ての真似事なら何人もやってきた」

おそらくお腹が空いているんだろう、肉体的には大人に見えるが念の為栄養バランスを考えた離乳食にしよう。

「くう……くう……」

食事を食べた彼女はお腹が一杯になったのか寝てしまった。

どうするか。

見捨てるか……？いや、どうせしばらく一人で過ごす予定だったんだ、この子……と言っているのか分からないが一緒に過ごすのも悪くは無い。

まずは落ち着く場所を探すか。

彼女を毛布で包んで髪で持ち上げ住む場所を探す。

探し回った結果、森の中にある綺麗な湖の畔に家を建てた。

久しぶりに家を建てたな……。

リビング、キッチン、寝室二つと風呂場に倉庫……後は必要な時に増築しよう。

……精神的に赤子同然なら最初は私の寝室に寝かすか。

私は寝室にベッドを増やし、彼女を寝かせる。

これだと名前も無いのだろうな。

仮に捨てられたなら名前はある可能性が高いが、彼女があつた状態では確認など出来ない。

「そうだな……この子はカミラ、カミラ・アーティアだ」

名前が無いと不便だからな。

カミラと過ごして一月が過ぎた、一月過ごして分かつた事は、彼女の肉体は大人の物であり精神だけが赤子に近い状態である事と見た目の体の作りは人間そっくりでありながら私の様に排泄をしない事、食事は通常の食事でも問題無かつた事……そして。

この子は血液が好きなのか。

生物の血液が好き。狩って来た獲物の血を啜っているのを見た時は大丈夫かと心配したが、満足したようにげっぷをするカミラを見て好物だと分かつた。

体液を好んで吸う生物は小型の魔物や昆虫などには居るが大きな生物で、それも人型など見た事は無い。

普通の食事でも嫌いでは無い様だな。

普段の食事の食べっぷりを見てみると美味しそうに食べている。栄養的には問題無いか……？そもそも私と同じく人間では無い彼女に人間の栄養が関係するかは分からないしな。

カミラと過ごし始めて半月が過ぎた頃彼女が私に「ママお腹空いた」と言った、彼女がいる時に何げなく私がママという事になるのかと呟いたのだが……その直後に話した。

人と比べると話すのも大分早い、かなり早く大人になるかもしれない。

「ママ、ぎゅってして」

あれから更に一年半が過ぎた、はつきりと言葉を話し知性も高く急速に育っているように感じる。

「おいで、カミラ」

座っていた私はベッドに寝て彼女呼び頭を包むように優しく抱き締めてやる、誰かが見ればいい大人が子供に甘えているように見えるだろうな。

「んー」

嬉しそうに、気持ちよさそうに声を上げるカミラ。急速に成長する彼女だが甘えん坊はずっと変わらない。

「ママ、この世界にはいろんな種族が居るのね」

四年後。私は彼女に教育を始めた、これから様々な事を教える。

この子の役に立つ様に。

「そうだな、私とカミラも違う種族なんだ」

「私とママも違うの？ママなの？」

そう思うか、今までの子供たちは他に本当の親が居たがこの子は居ないからな。

「種族が違って母娘にはなれるんだ、カミラもそのうち分かるかもな」

「うーん……わかんない！」

笑いながら言うカミラ、今までの旅で種族違いの親子なども知っている、血は繋がって居なくとも確かに親子だった。

「ゆっくり分かればいいさ」

そう言いながら彼女の頭を撫でた、彼女は目を細めて嬉しそうにしていた。

カメラと暮らしていたある日、私は湖の畔で日光浴をしていた。風がそよぐ中のんびりと椅子に座って景色を見ていると水辺であるでいるカメラが寄ってきた。

「どうしたカメラ？」

声をかけると椅子に座っている私を抱き上げ膝に乗せてからカメラが椅子に座る、体格を考えるとこうなるのだ。

「ママは前は人間と暮らしていたんだよね？」

「そうだな」

私を後ろから抱きしめながら言うカメラに答える。

「いつか私も行きたい」

「そうだな、私はもうしばらく行く気は無いけどそのうち行くかな」
「うん」

町へ行ってみたいと言うカメラの言葉を聞いてすぐには無理だろうと考える。

今私が町へ行きもしも騒ぎになったら彼女が楽しむどころでは無い。

そうなると後数十年は近寄りたくは無いのだが……、彼女はそこまで我慢できるだろうか。

彼女が我慢できなくなったら改めて何か考えよう、最悪見学程度なら姿を変えても良いしな。

「くう……ん……」

彼女は私を抱いたまま椅子にもたれかかり寝てしまった、まあいい私もこのままのんびりしよう。

人と関わり始めてから自然の中でこの様に過ごす事はほぼなくなつた気がする。

かつて一人で長い時を過ごした頃を思い出し、私は彼女にもたれかかりながら空を眺め続けた。

ある日。リビングでカミラに膝枕しながら人の町で買っておいた本を読んでいた私は、我が家によって来る魔物を感知した。

しかし私は何も言わないし何もしない。しばらくすると今まで私に膝枕され目を閉じていたカミラが目を開き起き上がった。

「ママ、来た」

「よしよし、中々良い反応だ」

私は彼女の頭を撫で更に彼女に言う。

「では、ご飯を獲ろうか」

「うんっ！」

そう言うと彼女は元気な返事をして外に出て行く、私はその後にく。

「ガアアアアアー！」

待っていると森から丸い体に嘴を持ち長めの二本の足が生えた魔物が飛び出して来る。

「カミラ、良いか？」

「うん」

私に返事をする両手の爪を伸ばし構えるカミラ、最近戦闘も教え始めたのだが覚えが良く身体能力も高い彼女は実戦に入るまで早かった。

「ガツガツ!!」

思ったよりも早い速度でこちらに向かって走ってくると手前で跳躍し嘴で突いてきた。

「えいっ！」

彼女は左の爪で嘴を弾き、そのまま右の手を揃え爪を突きこんだ。

「ギオオアアア!!」

「うるさい……フレイム」

痛みの為か大きく叫ぶ魔物に対し冷静に魔法を使うカミラ、突きこんだ爪から炎が噴き出し魔物の内部を焼き、すぐに魔物は焼け死んだ。

「ママー!どうだった!?!」

爪の汚れを払い長さを戻すと私に聞いてくるカミラ、悪くない戦闘だったが……。

「フレイムはあまり良くなかったな」

「えー、なんで？」

不満そうなカミラ。

「私達は魔物をどうするつもりだった？」

「え？えつと……あつー！」

気が付いたか？

「私達は食べるために殺したんだ、でも見てごらん」

魔物は内部から焼かれ殆ど黒焦げだ、これでは食べられる場所はほとんど無い上にカミラの飲む血液も採れない、かなり無駄になってしまった。

「ごめんなさい……」

「何度も間違えなければそれで良い」

あやまるカミラの頭を撫でながら言う。

「さあ残った部分を取って今度は探しに行こう」

「うん」

僅かな無事な部分を取り、今度はこちらから獲物を探しに森へと入っていくのだった。

雨が降る中新しく増設した錬金室でカミラは私と錬金術の練習をしていた。

「私が用意した見本と同じ色になるまでこの溶液に魔力を流す、さあやってみろ」

「うん」

カミラはゆっくりと魔力を溶液に馴染ませる、魔力コントロールの練習にもなり一石二鳥だ。

「あつ!？」

「魔力を込めすぎたな」

色は見本の色を通り過ぎていた。

「むずかしい……」

元気がなくなるカミラ、彼女は錬金は嫌いでは無いらしいが。

「この製薬法は戦闘時の魔力コントロールの訓練にもなる、やって
おいて損は無いぞ」

「ほんと!?!がんばる!」

元気になる彼女、やはり戦闘の方が好きか。

「これは錬金術の練習だからな?」

「わかってる!」

本当に分かっているかは分からんなこれは。

実戦訓練もかなりの数をこなしカミラももうかなり強くなって
いる、だが慢心しているというか油断しているというか。

今日はまた新しい魔物と戦闘だ。私はこいつを知っている、彼女に
会う前に何度も戦っているからな。

「楽勝!」

小さい人型の口が二つ横に並び目が一つの魔物がアイスランスを
打ち込まれ倒れる、彼女は私の方を見て言う。

「ママ終わったよ!」

「そうか」

私はあえて何も言わない、この先知っておく事は悪い事ではない
筈。

そう言って彼女が魔物に背を向けた瞬間音も無く鋭い岩の槍が空
中に作られ、彼女の頭めがけて打ち出される。

「避ける!」

「っ!?!」

今までの訓練の成果か私の声に反応して咄嗟に横に飛ぶカミラ、敵
の槍は彼女の頬をかすり飛んで行った……反応は中々だな。

私は更に攻撃を加えようとしている魔物を縦に両断する、魔物は今

度こそ完全に息絶えた。

「な、なんで……？」

掠った怪我はあつという間に治ったが驚いている彼女、では教えようか。

「どうしてこうなったかわかるか？」

無言で首を横に振るカミラ、悔しそうだな。

「見た目の小ささに油断したか？あいつは防御を固めて相手の一撃を受けて倒れ、油断したところに致命の攻撃を打ち込んで来る」

奴が他の魔物と戦っているのを目撃した時は興味深く観察してしまった、それまで私にやってこなかったのは私の攻撃が防御を抜いていたからだだったのだと気が付いた。

実際に彼女のアイスランスは致命傷になってはいなかった、黙って聞くカミラ。

「お前、相手が弱そうだからと手を抜いたな？お前の魔法で抜けない防御では無かった」

「だって……そんなの知らなかった」

俯き拳を握るカミラ仕方ない子だ。

「そうだな。知らなかっただろう？ならば何故手を抜いた？世界には見た目と強さが全く違う者も居る」

私などが代表格かな……私はさらに続ける。

「今は良い……私が居る……だがもしお前しかいなかった時は？自分が守りたいものが後ろにいる時は？見た目に騙され油断した結果お前も、お前の大事な者も一瞬で消える事になるかもしれない」

落ち込む彼女に言う。

「奴が倒れた後、殺したと思えば済まずに僅かでも気にしていれば今のお前なら気が付いたはずだ……奴がまだ生きている事に」

「余裕を持つのは良いだろう。だが油断はするな……私はお前に一瞬の油断で悲しむような事になって欲しくは無い」

「うん……ごめんなさい」

いい子だ、私の言葉に反発する事無く聞き入れてくれた……いつか反抗期が来るのだろうか？

彼女は泣きながら私に膝立ちで抱き着き頭をぐりぐり私に押し付けてくる。

そんな彼女の頭を優しく撫でる。私とずっと居るのならそれも良い……しかし彼女がいつか私から離れる事を選択した時にきつと今日の事は役に立つ。

そう思いながら彼女を撫で続けた。

カミラと暮らし始めて二十年が経った、彼女は二十歳になった……年齢が分からない為私と会ってからの時間でつけたただけだが。

「お母様」

湖畔で椅子に座り景色を眺めていると隣で同じようにのんびりとしていたカミラが話しかけてくる。

「何だ？」

呼び方がママからお母様に変わり、子供らしさが消えた彼女に答える。

「私の種族はなんだと思いますか？」

種族か、そうは言っても見た事が無い特徴だからな。

「以前お母様の種族を聞いた時、分からないと言いました」

「そうだな」

彼女が今よりも少し若かった頃聞かれたが私は答えられなかった、私も何もかも知っている訳では無い。

何よりも自分の事が分からないのだからお笑いだ。

「私は自分で作ってしまおうと思います」

「分からないなら新しく付けてしまえという事か」

伸びをしながら言う私。

「はい」

「それで？もう考えてあるのか？」

彼女の方を見て言う。

「吸血種としようと思います」

「随分ストレートだな」

「分かりやすいでしょう?」

微笑みながら言うカミラ。

「良いのではないか? お前自身の事だ、お前が決めたのなら反対する気は無い」

こうして彼女は自らを吸血種と決めた。

毎日をのんびりと、しかし研鑽は怠らず過ごして四十年程が過ぎた。

カミラの見た目は変わらない。ここまでくると私はカミラの寿命もかなり長いのではと考え始めていた。

そんなある日、カミラが自分に関する新たな発見をしたと言ってきた。

一緒に色々とやっていた時期はとつくに過ぎ、今はそれぞれにやりたい事をやっていたのだが、自分の事を調べていたんだな。

「それで、何が分かった? 私に言ってしまったても良いのか?」

彼女は最近髪をポニーテールにしている。

「お母様になら全く問題ないわ」

彼女の研究室の椅子に座り聞く、彼女は特に私に隠す気は無い様だ。

「早速だけどこれを見て欲しいの」

見せて来たのは籠に入ったこの森にすむ小動物だ、くりくりとした藍色の目をしたモフモフ動物だな。

「森で見る小動物だな」

「こいつに、こうすると……」

彼女は人差し指の爪に自分の魔力がこもっている血液をつけて籠の間から小動物に突き刺した。

「見てて」

彼女が言う、私は言われた通り小動物を見る。

「ほづ……」

私は思わず声を上げた、刺された小動物がキュッキュツと呻きながら変化していく、毛の色が変化し、目の色がオレンジよりの藍色に変わる。

「こうすると相手を服従させる事が出来るみたい、相手の意思を縛る事も自由にさせる事も出来るわ」

そう言うと、さっきまでうろろしていた小動物がカミラの方を向き大人しく座る。

「これは凄いな」

やろうと思えば世界中の生物を支配下に置く事も可能かもしれない。

「何か反動があったりするかと思ったのだけど今の所無いわね……さらに大きな動物や、その……人間とかにやったらどうなるか分からないけど」

口ごもる彼女、私に人間の知り合いが居る事を考えているのか？

「気にするな、一部の近い者以外はどうでも良い」

「そう。お母様の知り合いに手を出さないように気をつけないと……」

ほっとした顔をするカミラ。やはり私と同じく珍しいであろう種族の彼女も、他の種族を気に入った者以外どうでも良いと思うのだろうか。

「カミラ、他の種族の者をどう思う？」

私の言葉を聞き考える彼女、かつて聞いた時は会ってみたいと言ったが。

「会った事が無いから分から無いけど、そうね……私とお母様に害をなすなら容赦しないわ、でももし仲良く出来るなら私も酷い事はしないと思うわ」

私と長くいたせいかわ元の物なのか分からないが、私と似たような考えを言うカミラ。

カミラに訳知り顔で色々教えてはいるが、私だって他者から見れば突っ込み所が満載だろうしな。

それでも自分が納得いかなければ全て薙ぎ倒して我を通すつもりだが……力がある者の最後の手段だ。

「カミラ、人で試したいか？」

「えっ？ええ……それはもちろんだけど」

いきなり言われて面食らう彼女、殺人者などの重犯罪者でも持つて来るか。

それから一月程経ち、実験の準備が整った。

「な、なんだ？どこだよここ!？」

「どうなってるんだ!？」

などと口々に騒ぎ立てる実験体。

ちよつと遠出をして集めた殺人犯共だ。私のマジックボックスに放り込めば簡単に誘拐出来る……やはりこの性能のマジックボックスを広めなくてよかった。

個別に檻に閉じ込めてあるので殺し合う事もなく安心だな。

「おい、準備は良いか？」

「はい、お母様」

名前を言う事は避ける、まあ……念の為という奴だな。

「何なんだよお前ら!？」

「何する気だ!？」

声を上げる実験体にカミラが答える。

「これから私の実験に付き合ってもらおうわ……まあ最終的には死ぬでしょうけど重犯罪者だし、自業自得と思って諦めてちょうだい」

そう言って喚く実験体に対して実験を始めるのだった。

こうして特に尊くもない犠牲により、より詳しい事が分かった。血を与えられた者は髪や瞳、肌の色に変化が起きる。

全体的に能力が向上する、これは変化させた血の持ち主の実力による。

性質がカミラに近くなり病気や怪我などが治り回復する。

血液を摂取しやすくする為か、多少歯が鋭くなる。

対象の意思が強いと縛りにくくなる。

対象の魔力が高いと血液が効きにくくなる。

変化した後の生物の血でも他の生物を変化させる事が出来る。

そしてこれは確かめていないが変化した後、力を付ける事も出来るだろう、変化させた者より強くなる事もあるかもしれない。

と言った所なのだが……これは下手に人間に使うとどんどん増えるのではないか？変化した後生物の血でも他の生物を変化させる事が出来るというのが決定的だ。

変化した者が変化させ、その変化した者が変化させ、その変化した者が……と増えて行く気がする。

実験が終わり結果が出た後、私はカミラに言う。

「体はどうだ？」

「特に何も問題ないわね」

デメリットは無いと考えていいのだろうか。

「この性質をどう使うかはお前次第だな」

彼女の力は彼女の物だからな。

「はい、お母様」

ただ変化が広がるにつれ影響力は落ちて行く、いずれ魔力抵抗にあつて止まるだろう……変化した無数の者達が成長しなければ。

彼女の力を確認した実験が終わり、再び日常に戻った私はある日の朝食時カミラに聞いた。

「お前は新しい服などは欲しくないのか？」

「え？服？」

キョトンとした顔をする彼女。

「お前を見つけて初めて私が作ったドレスのままだろうか？」

彼女に作ったドレスは黒のオールシルクベルベットのような質感のAラインドレスワンピースで、トップス部分はボディラインにフィットするタイトライン、ふんわりと広がるAラインは伸縮性もある足のほとんどを覆う長さの物だ。

そして胸元から首、両腕までは黒のレースの様に作っており、所々に様々な花の姿が入っている。

「私はこれが良いのよ」

そう言うとう自分のドレスを触りながら言う。

「その……お母様に守ってもらっている感じがするというか……抱きしめられているように感じるというか」

顔を赤くして言うカミラ……間違いでも無いな。私の一部を服にしているから強度は抜群だ、着ているだけでほとんどの攻撃は効かないぞ。

そして私の一部であるという事は私に包まれているという事でもある、無くしてもお前が探せば服の方から寄ってくる、呪いの様な性能だ。

彼女は気が付いているかどうか知らないが昔ンミナにかけた緊急避難魔法の改良版を彼女にかけているからな、彼女が弱った時は私の元に強制転移だ。

「お母様、このドレスどうやって作ったの？他の服は知らないけど……強度とか着心地とか普通こんな良い物なの？」

彼女がまだ精神的に幼い頃、マジックボックスに入っていた他の服を着せたら、泣いて元のドレスに戻したからな。

「秘密だ……後、一般的な服は昔お前に着せたら泣いて私のドレスにしがみついたぞ」

ドレスをいじりながら言う彼女に僅かに笑いながら答える私。

「もうー」

頬を赤らめ軽く膨らませる彼女。

「気に入っているのなら着てやってくれ、お前の為に作った物だ」

「うん、着る……これからも」

そう言つて食事に戻る彼女、恥ずかしそうな彼女を見ながら私も食事続けるのだった。

それから百年程カミラと共に過ごし、二回ほど引越した。

魔物は依然として多く多種多様になっているようだ。私達が新たな場所に住み着くとかなりの魔物が襲い掛かつて来るが、ある程度経つと減り始め、やがてほとんど来なくなる。

そして彼女と過ごした時が百五十年を越えた頃、彼女は私の元を離れる気になつたらしい。

「今までずっと守つてもらつていたわ。私一人でもやっていける事をお母様に見せたいのよ」

そう言つて彼女は旅立つていった。

あっさりとした別れであったが共に町に行くという約束も十年ほど前に果たした、誰も私に反応する事は無くなつていたし、これでもた面倒なく動ける。

そうして再び一人となつた私は暫くそのまま過ごしていたが、ふと魔法学校の事を思い出した。

他の皆とは何度かあつたがケインには会つて無かつたな。

彼は森人だ。森人の平均寿命は五百年ほど、当時の年齢からすると彼はまだ三百に届いていないはず。

「死んで無いと良いがな」

こうして私はケインに会いに行く為、ウルグラードに旅立つた。

ケインに会いにウルグラードに到着した、元々大きな都市だった様だが魔法学校が出来てからますます賑わっているようだ。

「まずは宿だな」

私はそう呟くと周囲を見る。

大きな通りを人々が行き交っている。

久しぶりの喧噪の中を進み、見かけた店で食料を買うついでに宿の場所を聞く。

……ここか。

訪ねた店員にお勧めの宿を聞いたのだが、確かに良さそうだ。

「いらっしやいませ！ようこそ魔術の麓へ」

宿の従業員らしき少女の声が迎えてくれる、魔術の麓というのはこの宿の名前だ……魔法学校があるからか？

「二月借りたい」

「結構長いですねお嬢さん、観光ですか？」

「いや、知り合いに会いに来た」

受付の男と話しながら必要な事を記入する。

「この町は広いし店も多くあります。回ってみるのも良いかも知れませんが、興味があれば良かったですら魔法学校に行ってみるのも良いでしょう、見学出来ますよ」

「そうだな、時間があれば行ってみよう」

「ゆっくりしていただくさい、これが部屋の鍵になります……向こうの階段の二階へどうぞ、風呂は男女別になっていまして、時間は夕方六時から夜十時までになります、間違えないよう気を付けてください」

「分かった」

部屋の鍵を受け取り二階に上がり部屋に入る、質素ではあるが作りは良い。値段を考えれば確にお勧めの宿だな、後は食事が良ければいいが。

部屋を出て町を探索していると神殿のような建物があった、趣味のいいデザインだ。

「すまないが、あの建物はなんだか教えてもらえないか？」

「ん？お嬢さんはこの町は初めてか？あの神殿はクレリア神教の神殿だよ。興味があるなら行って見な、誰でも入れるぜ？自由の神様だからな」

道行く男に尋ねた私は返ってきた答えを聞いて、脱力した。

「なるほど、ありがとう」

「おう、じゃあな」

そう言つて去つていく男、神殿か……崇められている本人としては一度は見しておくべきかな。

神殿はそれなりに大きいのだがかなりの人が居る、全員信徒では無いだらうが人気があるのか？

奥には台の上にワンピース姿の少女の像があった。台の割に小さい……というか私とほぼ同じ大きさだ。神殿の関係者に聞いた所、実際に降臨した神の姿がこのくらいだったらしい……確かにそうだな。

その後ろの壁にはあの時私が教祖達を処刑した時の姿の絵が掛けられていた、顔などの細部は描かれていないが……どう見ても神というより邪神に見える。

黒く長い髪を広げ黒い霧をまき散らしている姿を見て神だとは思わんな、私なら。

その後説明を聞いていたのだが、あの出来事は現在初めてこの世界に神が降臨し神罰を与えた神話になりつつあるらしい……それを聞いた私の顔はきつと面白い顔だっただろう。

何とも言えない気持ちになったまま宿に帰り、食事と風呂を済ませて翌日まで部屋で過ごした……食事は中々美味しかった。

その後、普通に学校を訪ねようと思ったのだが申し込むことで見学出来るようなので申し込んでみた。

そしてその数日後、参加日がやってきた。

学校を見ると建物もそうだが敷地もかなり広い。

学校の校門前の広場に集まったのは私を含め十人、皆若い男女だ。意外と少ないと思ったが広場には他にも同じような集まりが出来る、その中には大人や老人まで居る。

資料を渡され見学がスタートし説明を聞いていると入学だの授業だのという言葉が耳に入ってくる、資料の内容を見てこれはもしかしてただの施設の説明ではなく入学する生徒に向けた見学なのではないかと思いつめた。

私は休憩中に一緒に見学している一人に聞く事にした。

「すまない、少し聞きたい事があるのだが良いか？」

「ん？貴女と一緒に見学してる方ですね」

校内の飲食店で渡された書類を見ながら休憩している、メガネをかけた背中まで伸びる灰色の髪を三つ編みにした少女に聞くと、少女はメガネを触りながら答えた。

「ああ、聞きたい事があってな」

「聞きたい事は職員の方に聞いたほうが良いのでは？」

「参加者に聞きたい事なんだ」

彼女の対面に座りながら答える。

「まあ、構いませんよ」

そう言うのと資料をまとめ聞く態勢になる彼女。

「ありがとう、この見学だが……どういった目的なのか教えてもらえないか？」

「はっ。」

ポカーンとする彼女、そうだな自分で参加しておいて目的が分からないと言えばこうなるか、もっとよく読んでおくべきだった。

「この見学に参加している者は入学希望者なのか？」

呆けている彼女にさらに質問する、暫くすると彼女は頭を押さえな

がら答えてくれた。

「何なの貴女……見学申し込み書に入学用と書いてあったでしょう？」

「……見落としていたようだ」

文字が魔力を含んでいれば見落とさなかったと思うぞ。

私の言葉を聞き溜息を吐く彼女、私はもう一つ聞きたい事を聞いた。

「施設説明の見学が出来るかと宿で聞いたのだが」

「それは保護者向けの一般施設見学の方、私達がいるのは入学施設見学よ……」

疲れたように語る彼女、私は施設見学が目に入った瞬間用紙を取って書き込んでしまった。

「確かに用紙の作りは同じで一般用、入学用と書いてある字が違うだけだから間違える事はあるかもしれないけど」

やはり間違えやすいのだな、ケインにデザインを変更させよう。

「でも気が付かずに参加までしてしまう人はそんなに多くないんじゃないかしら」

……そうか。

「ありがとう。私の不注意だった事が分かった……普段はここまででは無いのだが」

「ずっと完璧な人なんて居ないわ……あなた私と同じ年くらいでしょ？いつか入学したくなるかもしれないし？」

フォローする彼女、気遣いが出る子だな。

「そうするよ、そうだ名前を言っていなかったな……私はクレリア・アーティアだ」

「クレリア？貴女の両親は随分熱心な信徒なのね、娘に神様の名前を付けるなんて」

そう言っ私を見る彼女、そうか……あれだけ広まっているんだ、そう捉える事になるか。

しかしこれで名乗っても私が本人だと知られる事は無くなった。

「私はヘレン・ワーズよ」

私が考えていると彼女が名乗ってきた。

「よろしくな。私の名前だが……この名前は不味いのか？」

神を名乗るとは、となるのも嫌なのだが。

「大丈夫よ。つける人は多くないかもしれないけど、自由の神だもの。そんな事は気にしないと思うわ」

好きにしろと言う事だろうか……間違っではないかもな、私の邪魔をしなければだが。

こうして私は入学者用の見学を終え宿に帰った。

見学を終えた翌日。普通に会いに行く事にした私はもう一度学校へと向かった。

「ケイン・イヌスに会いに来た」

学校の事務所の様な場所で用件を告げる、受付の女性は書類をめぐり答える。

「事前にご予約はしておられますか？」

「していないが」

「ケイン校長はご予約していない場合お会いになれません」

困ったような顔で言う女性。そうか、奴も立場が出来たのだ。

会いたいと言う者全てに会っては何も出来ないか。

「そうだな、名前だけでも伝えてくれないか？それでだめなら大人しく諦める」

「……それぐらいでしたら」

仕方のない子供を見るような顔で言う女性、いつもの事だ。

「クレリア・アーティアが来たと伝えて欲しい」

「少々お待ちくださいね」

名前には特に反応しない女性、子供にクレリアと付けるのはやはりおかしい事では無い様だ。

そのまま待っているとケインが会うと言ったようで、校長室に案内された。

案内された、校長室の扉にはいつかの手紙の印の絵が描かれていた。

「ご案内しました、校長」

扉をノックし告げる女性。

「入ってください」

そう聞こえると扉を開けて中に入る。部屋の壁には本がぎっしり並んでいる、手前には応接用の質の良い家具、その奥に大きな机があり資料らしき紙束がたくさん置かれている。

「ご苦勞様です、私が呼ぶまで部屋には来なくて構いませんよ」

「分かりました」

そう言つて受付の女性は部屋を出て行き、部屋には私とケインが残された。

「お久しぶりです、師よ」

跪くケイン。かなりの時間が経つたというのに見た目はともかく態度はほとんど変わらんな、こいつは。

「そうだな。手紙は貰つたが」

「お世話になりました」

「わざわざ手紙を送つて来るとは、どうして念話を使わなかつた」

「色々とあるのです。一言で言つて手紙という証拠を残しておく必要があつただけですが」

ケインを立たせて言う私、彼は私に説明した。

「念話で話をつけてしまふといきなり人員を増やすことになりますからね。このような事を提案し了承されて行つたという過程を手紙という形で残す必要があつたので」

部屋のソファに促され座りながら聞く。

「良く分からんが必要だつたからやつたと言う事だな？」

「はい。こちらの都合でお手数をおかけしてしまいました」
クツキーを出し、飲み物を入れてくれるケイン。

「しかしそうだととしても念話で事前に話す事は出来ただろう?」

「まあ、そうなのですが私の意地というか……どうにもならない事以外に念話で助けを求めないと心に決めていたもので……」

苦笑いしながら答える。

「下らんな」

呆れながら思わず口にしてしまう私。

「貴女ならそう言うと思っていました」

申し訳なさそうに言う彼、しかしな。

「悪かった。お前の事を言える立場ではないんだ、私もな」

「何かあったのですか?」

「……クレリア神教の時の事だ」

「ああ……最初に聞いた時はさすがの私も飲み物を吹きましたよ」

微笑みながら言う、そこまで驚いたか……驚きもするか。

「あの後私は身を隠し人類の勢力圏の外で過ごしていた」

黙って話を聞くケイン、私はさらに続けた。

「私が姿を変えられる事は話したな?姿を変えればその様な事はする必要は無かった、しかし私は身を隠す事を選んだ」

飲み物を一口飲む。

「似たようなものだ。出来たのにやらなかった私も、お前と変わらない」

「なるほど。貴女は今の姿にこだわって身を隠す道を選んだ……助けを求めないと心に決め迂遠な手段を使った私と同じような物だと」

私の話を聞き領きながら言うケイン。

「まあ、お前は手紙という物証を残す目的もあつたのだろうか?」

彼を横目に見ながら言う。

「後悔は無い、そうしたかったから選んだ」

「ええ、私も後悔はありません。そうしたくて選んだのですから

……貴女は自由の神ですからね」

「それはやめろ」

それから他愛の無い話をしていたが伝える事を思い出した。

「そうだケイン。この学校の見学申し込み書の事だが、見直した方が良いぞ」

「なぜ師がその事を？」

私は見学申し込みを間違えて参加した事を告げた。

「なるほど……一目で分かる様に変更させましょう」

「そうしてくれ。見学に参加していた少女にも間違えやすいと指摘されていたぞ」

「他の者に任せてしまったのは失敗でしたね」

そう言うケインを見ながらクッキーを食べる、中々美味い。

「全てお前がやる必要は無い。学校の規模が大きくなれば手が回らない事も増えて行く、だから他の者に任せているのだろうか？」

「そうですね。どうしても私でなければいけない物は私が行い、余裕があれば他の物を処理していますね」

机を見て言う。

「他の町に分校を作ったりしないのか？」

「その話はあったのですが、距離が離れてしまうと管理に手間がかかりますからね。一か所にまとめた方が楽です、適当な授業をされる事も少なくなりますし」

「そうか」

私はソファに身を預けた。

「師よ、今後の予定はあるのですか？」

「この町を見て回る……程度だな」

元々ケインの顔を見に來ただけだ、予定など無い。

「もしよろしければ私の学校の相談役になって頂けませんか？」

「私が？」

突然姿勢を直し私に頼むケイン。

「ええ。特に何かをしなければいけないという訳ではありません、学校を回りやりたい事をやっていただければ良いのです」

「事によつてはかなりの無理を言うかもしれないぞ？」

ケインを見ながら言う。

「貴女が言うのならそれだけの理由があるのでしょうか」

正直、ケインが作った学校をじっくり見てみたいとは思う、特に今後の目的がある訳では無いし……。

「分かった、弟子の夢であった学校を見せて貰おうか」

「ええ、ぜひ見て下さい」

私はケインが作り上げたテイリア魔法技術学校で相談役になる事にした。

「師の事は校内に連絡しておきます。後、他の者が居る時は私の事は校長と、師の事はクレリアさんと呼びますので」

「分かった」

その後関係者に私の事を知らせるため、一週間後から来てもらう事、滞在中は宿でも敷地内の客用宿舎の客室でもどちらでも良い事を聞いた。

「町の宿は引き払うか」

客用宿舎に滞在する事を決めて町の宿へ向かう。

「すまない、少し良いか」

宿の受付に行き、従業員の男性に声をかける

「はい、何でしょうか？」

「予定が変わってな一週間後に部屋を引き払いたい」

「何かありましたか？」

心配そうな男性。

「魔法学校に住む事になってな」

「そうでしたか！入学を勧められるとは才能があると認められたのですね！」

感心する男性、入学では無いが説明するのも面倒だ。

「悪いな」

「構いませんよ、頑張って勉強してください」

その言葉を聞いて部屋に向かう。

「どうしたものかな」

部屋の椅子に座り考える、私は校内での立場を決めて欲しいと言われている。

「相談役になれるような立場……」

……皆を納得させられそうな物が思い浮かばないのだが。

一週間後には学校での生活が待っている。

一週間後、私はケインに案内され客室に到着した、かなり良い部屋だ、風呂もあるし自炊もできる。

「この部屋でこれから過ごす訳だな」

「食事は自分で作っても良いですし、校内の食堂でも、町の店でも師のお好きなようにしてください」

「分かった」

私の立場はあの後ケインに連絡し一時期ケインと共に魔法の訓練をしていた友人で、見た目は子供だが成人女性であるという事にした……大きく間違っではないだろうか。

「本当に全校集会で紹介しなくて良かったのですか？」

「構わない、大勢と関わるつもりは無いから……今の所は」

私の事はこういう人物が居るといふ連絡だけに留めてもらった、全員と関わる事は無いだろうしその場で出会った者と関われば良いだろう。

「変わる事もあると言う事ですね」

「私その気になればな」

ケインの言葉に返す、ここで過ごすうちに気が変わるかもしれないしな。

「では、後は自由にお過ごしください。出来るだけ人の常識に合わせてくださいよ？」

「そのあたりは上手くやるさ……これでも町で暮らしていたんだ。

知っているだろうに」

部屋を確認しながら答える。

「念の為です」

「楽しそうな顔で返すケイン。」

「いざと言う時の備えは大事だな」

私は薄く微笑みながら言った。

それからケインは何か用があれば念話か校長室に来るように言つて戻って行った。

《ティリア魔法技術学校は事務所、基礎学舎、応用学舎、多目的学舎、男女生徒寮、教員寮、客用宿舎、グラウンドなどが一つの敷地に存在する、魔法と各技術の普及と向上を目的とした魔法技術学校である。基礎である九級から七級、応用である六級から一級に分かれており、飛び級なども存在する。

授業時間は朝の八時から昼食休憩を挟んで夕方十五時まで、寮の門限は二十一時……》

確かにかなり大きかったがここまでの規模だったとは。

私は校内に出る前にケインの用意した学校説明を確認していた。

魔法科、魔道具科、錬金術科、鍛冶技術科か……。

私の教え子達はこの世界にそれぞれの技術を根付かせたようだ。

ケイン以外は死んだが各技術を生み出し広めた者として記録されているようだ。

皆の家もこの町にあったな、いずれ顔を出してみるか。

私の事は知らないだろうが子孫の顔を見ておこう。

後は料理店も回りたい。

これは毎日少しずつ回れば良いな。料理も過去に比べて美味しく種類も増えた、私は食事を取る事を忘れる時があるがここならば忘れる事は無さそうだ。

時間は昼に近い、町で食事をして午後から学校に行くか。

町の目に付いた料理店に入る、値段は気にしない、商會に居た頃にかなりもらっているからな。

「いらっしやいませー」

席に案内されると店員……ウエイトレスがメニューと水の入ったコップ、小さな濡れタオルを置く。

……何にしようか。タオルで手を拭きながらメニューを見る。

「注文良いか？」

しばらく考え手を上げてウエイトレスを呼ぶ。

「ご注文をどうぞ」

「キノコ焼きと、料理長お勧め魔物肉のステーキをレアに出来る物ならレアで、最後にフルーツのクリームケーキを頼む」

「かしこまりました、ご注文を確認いたします」

ウエイトレスは注文の確認を確認した後戻って行った。

カミラと一度町に行った時、様々な物が良くなっていて軽い驚きを感じた。

現在の四大技術である鍛冶、魔道具、魔法、錬金によって食料の生産や狩り、保存、運搬、加工が随分楽になり料理の種類が増え、より味を追求した物が提供されるようになった。

「料理長お勧め魔物肉のステーキのレアとキノコ焼きお待たせいたしました」

色々考えているうちに料理がやってきた、よし食べよう。

まずはキノコ焼きを食べた。

うん……美味しいな。過去に私も作ったが塩加減も焼き方も酷かった事が分かる、程よい味付けと気持ち良い歯ごたえだ。

次はステーキ。

焼きたては熱いが私には関係ない事だ。レアで問題無い肉だったようで、しつかりレアになっている。

魔物の肉は生では人に悪影響を及ぼす物もある、私には関係ないが人に紛れている今は余計な事はやめよう。

……良い味だ。

強めに効いた塩味に加え各種香辛料の香りと刺激。レアな肉の歯ごたえに血肉の味と香りが合わさり中々の物だ。

この町で潰れていない以上一定以上美味しいのは間違いなさそうだと思います、入ったが……中々やる。

これは他の店に行くのが楽しみになってきた。

「フルーツのクリームケーキです」

ステーキとキノコを食べ終わりケーキをお願いした。

三角形の小さなケーキで緑色のフルーツが角切りでちりばめられている。

ん……やはり甘い物が一番好きだな。

初めて食べた果実の驚きは今も覚えている。

あれは野性味がある甘みだったがこのケーキは繊細な甘さだ。

フルーツも甘いのだがクリームとしっかり住み分けられていて、お互いを邪魔しない。

美味しいが、これからより食文化が進めばこれらもそれほど美味しい物では無くなるのだろうか。

頻繁に食べれば味が向上していくのを楽しめるかもしれない。

「ありがとうございましたー」

食事を終えて時計を取り出し時間を確認する、この魔道具も便利だな。

十二時四十分、そろそろ校内を見て回ろう。

私は学校に向かって歩き始める。

授業中に誰かに会う事は少なそうだ。

私は基礎学舎内を歩きながら思う。授業中は教室以外に人などま
ずいない。

授業に入り込む気にもならないしな……。

教室の一つに近づき覗き込む。等間隔に机と椅子が並び生徒が座っていてその前で女の教師が魔法の授業をしている、人数は二十人程かな？

「……先生、あの……廊下に」

覗いていると一人の生徒が気が付き教師に声をかけた。

「あら……どうしたの？誰かの妹さん？」

扉を開けて聞いてくる女教師、私は答える。

「ケイン校長に聞いていないか？相談役のクレリア・アーティアだ」

「ええっ!？」

驚く彼女、大方予想以上に子供だったからという理由だろう。

「も、申し訳ありませんその……」

すぐに謝る彼女、気にするな私と会った者の大半が通った道だぞ。

「気にするな、それより授業を見学しても良いか？」

「え……？は、はい……構いませんが」

どうやら今年入学した九級生のようで懐かしくなる基礎の授業だった。

二時間ほど授業と休憩をはさんだが生徒達はチラチラと私を見るだけで近づいて来る事は無かった。

それを見ていた教師が最後の授業中私に話を振ってきた。

「クレリアさん何か魔法を見せて頂けませんか？」

「良いぞ」

皆が見守る中私は人差し指を立て顔程の水球を作る……が、教師は驚いているが生徒は良く分かっていないようだ。

「無詠唱……初めて見た……はっ!？」

私の出した水球を見ていた教師が我に返る、無詠唱とはなんだ？

「すいませんクレリアさん。彼らではまだこの凄さが分からないかと……」

申し訳なさそうに言う教師。

水の透明度、水球の維持の精密さ、発動速度、色々良い見本だと思っ
たが……。

そうか……まだ習い始めて何も分からないのだったな。

「ではこれでどうだ？」

私はそう言うのと水球を崩し、水を凍らせてこの学校の印……大樹の
根元に一人の少女が佇む姿のレリーフを一瞬で作り出す。

「すげー!？」

盛り上がる生徒、口を開けたまま固まっている教師……この印のモ
デルは私だそうだ……ケインの奴め。

その後氷を水に戻し消失させると生徒達はみな憧れるような目で
私を見ていた。

見た目で侮る者は元から居なかったがはつきりと力を見てより実
感した事だろう。

どうやら見てわかる派手さが生徒達の心を掴んだ様だ……実際に
行う事がどれだけ難しいかいつか知るだろうな。

その後。教師が我に返り騒ぐ生徒を抑え、私は教室を出てケインの
所へ行った。

職員に指示を出していたケインは彼らが退室すると、もてなしてく
れた。

「今日基礎学舎の授業を見てきた」

ソファに座り落ち着いてから言う。

「どうでしたか？」

「皆に教えた魔法を教えた時を思い出したよ」

紅茶とケーキを出しながら聞いてくるケインに答える。

「そう言えば……教師が無詠唱と言っていたが？」

気になった言葉を聞いてみる。

「私が考えました……師の方法では難易度が高すぎる為、僅かな魔

法しか発動できません」

……そうなのか。

「私が編み出した詠唱はよほどの問題がない限り、必要な魔力と長い詠唱を行う事で数多くの簡単な魔法を発動する事が出来ます」

「それは凄いな」

「勿論高度になるほど魔力操作などの技術や知識は必要ですが、詠唱で補う事で成功率が上がります」

新しい技術を作ったのか。

「私では思いつかなかつただろう技術を知るのは良い物だな」

私は薄く微笑みながら言葉をこぼす。

「師の元に居た頃使えなかつた魔法もいくつかは使えるようになりましたよ」

「私の教え方はお前達に合っていなかつたようだな」

紅茶を飲みながら呟く私。

「それは違いますよ。貴女が教えてくれた知識と技術があつたからこそ詠唱技術が生まれたのです……私だけでは不可能でした」

真剣な顔で言うケイン。

「そうか、新たな技術のヒントにはなつたのだな」

ケーキを食べながら言葉を返す、美味い。

「恐らく無詠唱で大量の魔力を使い、精密な魔法を一瞬で発動出来るのは師だけだと思います」

「年季が違うからな」

紅茶を一口。

「この詠唱も時が経てばより短い詠唱でより高度な魔法が使えるようになるかもしれませぬね」

ケインは紅茶を飲みながら言う、彼の元にはケーキは無い。

「そうだな。人はきつと様々な物を考え出すだろう、私も何か考えつく事があるかもしれないが……楽しみだ」

私は思わず微笑む。

「師が楽しそうで何よりです」

笑いを漏らしケインが言う、これからも好きに過ごさす。

その後私が魔法を見せた生徒が噂を広げ、腕の良い魔法使いだと校内に広がった。

一緒に居た教師から講義をして欲しいと言う意見があったが、私がやる気にならない限り大きく関わる事は無いと伝えた。

「クレリア先生おはようございます」

ある寒い日の朝、校内を歩く私に生徒が挨拶をしてくる。

「おはよう。何度も言うが私はこの教師ではないぞ」
半年後。

私が魔法を披露してから私の噂を聞いた生徒が少しずつ話しかけてくるようになり、話しているうちに何故か生徒達に気に入られ先生と呼ばれるようになっていく。

「あ、クレリア先生だ」

「今日も可愛いわね」

「それでいてかっこいい上に魔法も凄いいしね」

周りの女子生徒がひそひそと話すが、もっと声を押さえないと私には聞こえるぞ。

「クレリア先生いいよな……」

「見た目と性格のギャップが堪えないよな」

男子生徒の会話も聞こえてくる……恋をするのは良いが私はやめろ、無駄だぞ。

「おやクレリア先生、朝食ですか？」

教師の一人に声をかけられる。

「お前達までその呼び方をするのか」

教師は笑いながら言う。

「学校の教員でなくても先生にはなれますからね、慕われている証拠です」

「まあ、悪い気はしないが」

そう言うのと彼は微笑みを深くして、立ち去って行く。

私はそのまま校内の食堂で食事をとる。

町の料理店に負けない美味しさだ。元々この町で店を出していた料理人を専属で雇ったらしいな。

ゆっくり食事できるのは良い事だ。

私が食事をするのは生徒が登校した後だ。生徒が食事中に私が居ると絡んで来て食事どころでは無くなる。

今年も後僅かだな……。

そろそろ年が変わり新年になる。一月一日に入学式が行われるこの学校では新入生を受け入れる準備が進んでいる。

年が明け学校の入学式も済み、新入生が新しい環境に慣れようとしている頃。私は多目的学舎の前に集まっている生徒達を見つけた。

胸元のバッジを見ると新入生、九級の物だ。

「どうした？」

「ん？……ああ、先生にここに来るように言われたんだけど開いてないんだ」

困ったように言う男子生徒、教師が開け忘れたのか？

「教師が来るまで待っていればいいが、このままでは寒いな」

そうやって私が彼らの空間を暖めようとした時声がかげられた。

「クレリア？」

声に振り向くとメガネをかけた灰色の髪を三つ編みにしている少女が居た。

「お前は……ヘレン・ワーズだったか？」

「ええ、覚えていてくれたのね」

私に近づいてくる彼女はさらに言う。

「なに？結局入学したの？」

「そういうわけでは無いが、とりあえず寒いだろう？暖めるぞ」

「え？」

私は生徒たちの空間を暖める、皆寒さが無くなり驚いているよう

だ。

「これ……あなたがやったの？」

「このままでは体調を崩す者が居そうだからな」

「私達と同じ新入生でしょう？どうやってこれだけの魔法を……」

驚いている彼女、入学時に説明を受けていないのか？

「入学時に説明を受けていないのか？相談役のクレリア・アーティ
アだ」

「ええっ!?同姓同名の別人かと……」

後半をつぶやくように言う彼女。周りもざわつく、そう思っても仕方ないかもな。

「皆……めんね！」

教師が急いだ様子でやってきた。

「この季節に外で待機させる様な事をするな」

「すみませんクレリア先生」

私の言葉にただ謝る教師、混乱するから先生と呼ぶな。

「え？えーと……」

私は混乱し始めるヘレンと生徒達に説明をする事にした。

あの後説明を聞いた彼女達は皆驚き、その授業に交じって見せた魔法にさらに驚いていた。

その時ヘレンに「あんな抜けた事をする人がこんな凄い人だったなんて……」と呟かれ、聞こえてしまった私は何とも言えない気分になった。

その後、私は多目的学舎に残り次に予定されている魔法の実践授業に参加する事にした。

「魔法の詠唱は日常の生活で発動しないように構成されています。丸暗記して詠唱するだけでもよほどの事が無い限り簡単な魔法なら使う事が出来ますが、意味を理解し詠唱の構成を変更する事で魔力と技量にもよりますが、様々な魔法を作り出す事が出来ます」

教師がボードに詠唱を書きながら説明をする。説明を聞いたび思うが、やはり例外はあっても殆どの者が簡単な魔法なら使える……というのは普及にはかなりのプラスになる。

「では、まず水を出す魔法の呪文を教えます。まずは暗記して使ってみましょう」

そう言つて手の平を下に向け前に突き出す。

「mizuyonizimidase」

そう唱えると、手のひらから僅かに水が垂れてくる……確かに魔法だが。

いや……何も知らない生徒達に教える訳だしな、最初はこれで良いのか。

私がそう思っている間にも教師は続ける。

「詠唱を変える事で魔力消費も増えますが効果を増す事が出来ません」

そう言つて教師は再び詠唱を唱える。

「mizuyokoboreyo」

そう唱えると水の量が増す。

「こうして水が多く出るようになります」

生徒達はわくわくした顔で見ている。

「構成によつては短い詠唱で高い効果が出る事もあれば、長いだけであまり効果が高く無い事もあります。例としては最初の水の魔法詠唱よりも二度目の水の魔法詠唱の方が短く効果が高いです」

説明を続ける教師。生徒達は真剣に聞いている、良い子達だ。

「最初は分からないと思いますが勉強と実践を繰り返し返せば分かるようになるでしょう……では最初の詠唱を実践してみましよう。ですが人には絶対向けられないように！」

先生の言葉で皆詠唱を始める、私は皆の様子を見ていた。

「muziyonizimidase」

一人の女生徒が唱えるが何も起きない、私は彼女に近づいた。

「詠唱が間違っているな」

「あ、クレリア先生……こんにちは」

私を見てお辞儀する女生徒、そこまでしなくても良いのだが。私は彼女に教える事にした。

「mizuyonizimidase……やってみろ」
優しく教える、厳しすぎても良い結果にはつながらないだろうしな。

「muziyonizimidase……うう」
何も起きない、最初が間違っているな。

「mizu、だ……やってっらん」

「mizuyonizimidase」
そう唱えると手のひらから水滴が垂れてきた。

「やったー！」

喜ぶ彼女、微笑ましいな。

「うんそれで良い、忘れるな」

「クレリア先生、ありがとうございました！」

嬉しそうな顔で元氣にお礼を言う彼女、頑張れよ。

その後教師と共に他の者にも教えて回った……育てるのはやはり楽しい。

こうして生徒や教師と交流し時には相談に乗り魔法の助言しながら過ごしているある日、私は教え子達の店を見に行く事にした。

ロドロフ、ミシヤ、ラムランの店に行ってみようと思う。

特にロドロフ夫妻とは約束があったが果たして受け取れるかどうか……忘れられているかもしれないな。

こうして町に出掛けた、朝食は何処かで食べてから行くか。

……あの店のパンも中々だった。

ジャムトーストを食べて、向かうのはロドロフ夫妻の店だ。

鍛冶と魔道具の祖と言われ始めている二人の店は、確固とした地位をこの町で確立しているようで衰える事は暫くなさそうだ。

「いらつしやいませ」

店はかなり大きい、武防具と魔道具があるから当然かもしれないが。

「すまないが、初代との約束の物を受け取りに来たのだが……店主は居るかな?」

店員に話しかける。

「は、はあ……?」

ああ、いきなりこれはまずかったな、分かる訳が無い。

「えーと、店主に御用で?」

困惑したような顔で聞いてくる。

「ああ、ロドロフ夫妻の子孫のはずなのだが……」

誰かに譲ってしまったっていたり途絶えていたら、関係ないかも知れないな。

「伝えてはみますが……お会い出来るかは分かりませんよ?」

良かった、取り次いでもらえそうだ。

「初代の約束を果たしに来た……と伝えてくれないか?」

二人が覚えているのならきつと伝えてはいるはず。

「……分かりました、少々お待ちください」

戸惑っているだろうが、きびきびと動く店員は店の奥に入って行った。

思ったよりも早く戻ってきた店員は私を応接室へと案内した、待たされると思っていたが既にそこには一人の男が待っていた。

「始めまして。ロドロフ武防具店、ミシヤ魔道具店六代目総店主、ル

シオ・アティライトと申します」

一礼する男、恐らく子孫だろう。

「丁寧にありがとう。私はクレリア・アティアという」

「クレリア様どうぞこちらへ」

ソファに案内される、テーブルには紅茶とクッキーがすでに用意してあった。

「さて、申し訳ありませんがご用件をもう一度お願いしたいのです」
真剣に聞いてくるルシオ、いいとも。

「初代……ロドロフ夫妻との約束の物を受け取りに来た」
それを聞いた彼は頷いた。

「間違いなさそうですね」

私は用意してあった紅茶を飲む。

「随分簡単に信じるな」

あまりにもあっさりとした対応に、思わず問いかける。

「初代の約束を知っている者は代々の店主のみです。貴女は約束を受け取りに来たと仰いました、代々約束を受け取りに来る人物に対して絶対に無礼を働いてはいけない、深く聞いてはならない……そう伝えられております」

「そうか。話は変わるがアテイライトというのは……」

そう言うとな彼は人の好い笑みを浮かべて答える。

「過去に姓が必要だろうと考えて付けたものですね」

「確かに現在では必要だな」

「ええ」

頷きながら答える彼。

「では……早速ですがお渡しいたします」

そう言うて地下の宝物庫らしき場所に案内される、その扉にはかつて私が登録した古い魔力パターン認証装置が付いていた。

「魔力を通していただけますか？」

「分かった」

促され装置に当時の魔力を流す、そうすると装置が青白く反応した。

「……確かに。どうぞ……開いております」

扉を開き中に入ると黒と赤を使った鎧と周囲に様々な武器が並んでいた。

「ずつとこの場所は主が来る事を待っていました……今、その役目を終えたのですね……」

呆然としながらルシオが呟く。

「待たせてしまったな」

私はそう呟いて鎧に近づきそつと撫でる。

「ん？……手紙？」

私は鎧のそばに手紙が置いてある事に気付いた、そこには二人の名前が書いてある。

「二人とも、確かに受け取ったぞ」

そこには私が姿を隠すと言った時、生きて会う事はもう無いだろうと思いいこの場所を残した事。

ケインとラムランも協力してくれた事、この装備の名前。

私の魔力に出来るだけ耐えられるようにしてある事、細かくパーツが分かれており軽装から重装まで変更出来る事などの装備の仕様、最後にありがとうと書かれていた。

私の魔力に反応して自動的に装着されると書いてあったな。

皆が私専用につくった武防具だ……着てみようか。

私が魔力を装備に流すと鎧が分解しまとわりついてくる。

フェイスガードは収納展開が出来るのか……周囲の武器も私の周りに集まり漂っている。

思ったように動かさそうだ、私の魔力にだけ反応するのか……それとも常人では動かせるだけの魔力が無いのか。

永遠の黒き女神か……誰がつけたんだ？

この武防具の名前だ。今世界に存在する魔法武防具を圧倒的に超えている……二人の技術はここまで上がっていた、それを私の武防具だけにつき込んでくれた。

私の事では無いよな……？

名前の由来は書いていなかった。魔法や私の力で彼らに聞く事は出来そうだが……やめておこう。

伝えたかったのなら手紙に書いていたはずだ、私の想像に任せると言う事だろう。

今の私は宙に浮かび黒と赤に彩られた女性型全身鎧を纏い、長い黒髪をなびかせている。

更に背後には様々な武器が円状に並び待機している状態だ。

ふと気が付くとルシオが膝をつき私を見つめていた。

「クレリア、さ……様……貴女は……」

「何も言うな」

彼を遮って言葉を紡ぐ。

「私はまだこの町に居る……だが誰にも今日の事は言うな、私の事も聞くな。場合によってはお前の記憶を消す事になる……私は二人の子孫にそのような事はしたくない」

「あ……か、かしこまりました……クレリア様」

ルシオは体を震わせながら、首を垂れ小さな声で言った。

「長い間二人の想いを引き継いでくれてありがとう」

私はそう言って武防具を解除してマジックボックスにしまい、先程の体勢のままの彼に見送られ店を後にした。

「二人が私だけの為に技術をつぎ込んでくれたのが思いのほか嬉しくて失敗してしまったな……」

あの後私は部屋に戻り反省していた。あの場では普通に回収しておくべきだった、明らかに私が普通でない事が分かってしまっただろう。

ルシオが洩らすとは思えないがこれは私の責任だな。彼が見なくて良かった姿を見せてしまった……何事もなく済みます事は出来たはずだ。

黙っていて欲しいが……どうだろうか。

彼からすれば異常とも言える私の姿を見せてしまったのは私の責任だがそれを黙っていないのは彼の責任だろう。

必要なら忘れてもらおう。

二人の子孫でもあるし、私に敵対した訳でもないから記憶だけ消せば十分だろう。

もしも私の敵になるなら殺そう。記憶を消したとしてもまたどこかで同じ事を知り、同じ事を考え、同じ事をするかも知れない……何

も出来なくするのが一番だ。
まだ昼にもなっていないが、その日は部屋でくつろいだ。

魔法武防具……魔法装備や魔装具などとも呼ばれて居るが、ロドロフとミシヤの作品を受け取ってから一か月程が過ぎた。

変わらず各科の授業を見て回り時々口を出すと言う事を行っていた私だったが、ある日校長室でケインに相談を受けた。

「飛び級？」

「はい、これまで飛び級した者は居ないのですが、出来そうな生徒が居まして」

ケインは資料を渡してくる。

「ミナ・トリウムと言うのか」

森人の少女らしい。やはり魔法に関しては森人が飛び抜けているのか、ケインも森人だしな。

長い寿命で訓練を長く出来るという事もあるだろうが、十二歳で試験を突破する辺り、やはり種族的に資質がある者が多いのか。

更に読み進めると一か月程の時間で詠唱構成の変更に成功したそうだ。

「で？私に何をして欲しいんだ？」

「彼女が飛び級に値するか見定めて欲しいのです」

私を見つめ頼んでくる、だがそれは……。

「私では駄目だろう」

私は置いてあったジャムを紅茶に溶かしながら言う。

「なぜです？」

「私はこの正式な職員ではない。お前に許可をもらって好きなように過ごしているが、それは要するに試験だろう？自分の学校の飛び級試験を外部の者にやらせるのか？……それともそうしなければいけないのか？」

そう決めているのなら代わりにやっても構わないが。

私の言葉にぴくつと反応するケイン……気が付いてなかったのか。

「お前……私が居るからと腑抜けていないか？」

呆れながら言う。

「……」こちらで飛び級試験を実施して判断します」

ケインは気まずそうに返事をする。

「それが良いだろう」

誰にでもうっかりはある、ケインも昔教えていた頃は色々やって来た。

後日聞いた所、彼女は見事に合格し級を上げたようだ。

毎日生徒達と関わり生徒達の考え方や閃きに刺激を受ける日々を過ごしている中、私は朝から部屋でホットミルクを飲んでくつろいでいた。

すると部屋の扉がノックされる。

「開いているぞ」

座ったまま扉の鍵を開けると生徒が一人立っていた。

「おはよう先生」

濃い緑の髪をツインテールにした少女、テイリア魔法学校初の飛び級者ミナ・トリウムだった。

「ミナ・トリウムだったか？」

「はい」

私は彼女を部屋に入れ座らせる。

「突然すいません」

「構わんが、話すのは初めてだったな？」

私と彼女はお互い顔は知っていたが直接話した事が無い。他の生徒と関わらず黙々と授業をこなしているのを見た事がある。

「はい。今日は先生に魔法を見せていただきたくて」

紅茶と、クッキーを出しながら話を聞く。

「教師達が見せている物では駄目なのか？」

「そう尋ねると、首を横に振るミナ。

「あんな教師の低レベルの物では無く、もっと高度な物が見たいの」
身を乗り出して言う彼女、いくら飛び級していてもまだ早いと思うが。

「教師達も今のお前より遥かに上だ、軽視するな……それに人に教えるという分野においては恐らく私より上だぞ」

彼女は私を睨むように見つめる。

「もっと早く上達したいの。森人の寿命は長いわ……だけどそれに頼つてもたまたましていたら貴女やケイン校長を追い越せないわ！」

少しづつ声が大きくなり最後には叫ぶように言う、上達したいという気持ちが強すぎるんだな。

「魔法は好きか？」

「好きに決まっているでしょー！」

そう尋ねるとむっとしたように答える彼女。

「そうか、ならば焦るな、心に余裕を持って……そうだな……夢中になると良い」

「夢中？」

ミナは紅茶もクッキーも口にせず聞いている。

「簡単な魔法でもより早く、より効果的に……改良する事を楽しみながら夢中になっていたら自然に上達していると思うぞ」

「楽しむ……」

呟く彼女、私も最初は時間を忘れて魔法の練習をしていたな。

「しかし健康には気を付ける事だ」

私は平気だが彼女はそうはいかないだろう。

「健康？」

「簡単な話だ、無理をして体調を崩せば魔法の訓練が出来無い。一週間無理をした結果一月寝込んでしまったら……無理をせず一月訓練するのと果たしてどちらがいいかな？」

「……たしかに」

納得したのか頷きながら彼女は返事をする。

「無理をせず楽しみながら出来るだけ毎日訓練をこなす。これが最

適だと私は思う」

私が言うのと彼女は多少すつきりとした顔をしていた。

「ありがとうございます(ぎ)います……少し焦っていたのかもしれない」

「そうか……では紅茶とクッキーを楽しむと良い」

彼女の言葉に返すと彼女は紅茶を飲みクッキーを口に入れる。

「ふう……」

ほっとしたように息をつくミナ。

「これが無理をしないと云う事だ、時には一息つく事も大切だ」

私が言えるかどうかは分からないが。

「うん……」

薄く微笑みながら彼女に言うと、彼女は頬を薄く染めて俯く。

「さて魔法を見せて欲しいのだったな」

「……良いの?」

上目遣いで聞いてくる。

「構わない、見ていろ」

私は彼女の前に大きめな水球を作る。

「遠くから見た事があるわ」

さてここからだ、この水球に冷気を送る。

「!？」

驚く彼女の目の前で、水球の中がゆっくり凍っていき大樹の根元に

一人の少女が佇む姿のレリーフを作り上げた。

普段見せているのは水球の水を全てレリーフにする物だが、これは

より高度な物だ。

「凄い造形……水の球も全く崩れていない……でもそれ以上に……

！水と氷の境目が綺麗に分かれてる！……どれだけ精密な魔力操作をす

れば……!」

レリーフが浮かぶ水球に顔を近付けてブツブツと呟く彼女。

ミナはこの歳でこの魔法が高度な物であると気が付いたようだ。

普通ならただ凄いと云うだけだが……ケインの幼い頃と似たような

反応をする。

私は思わず薄く微笑みを浮かべた。

「あっ!？」

しばらくその状態を保った後、私はレリーフをゆっくり水球に戻していく。崩れていくレリーフにミナが声を上げる。

「これでお終いだ、何か役に立ったか？」

「私の目指す場所の高さが分かったわ……今は見る事も出来ない高さだという事が」

ミナは目を伏せて私の質問に答えた。

「……でも私はいずれ先生と同じ所まで辿り着いて見せる」

彼女は私を見る。その目は真っ直ぐに私を見つめ、決意を感じさせた。

「待っているよ」

彼女の将来を楽しみにしながら彼女に答えた。

ミナが私の元を訪れてから二か月が過ぎた。彼女は相変わらずだったが休憩の時には他の生徒と居る所を見かけた、程よく息抜きをしているようだ。

街では今の所私について変な話は無い、ルシオは黙ってくれているようだ。

今日は朝食後にラムランの錬金術店に行く予定だ、時間を確認して町に向かう。

ベーコンエッグはソースが美味しいな。

今日はベーコンエッグを朝食に食べた。新しく開発されたソースをかけて食べると美味かった。

他にも味噌や醤油といった物も開発されているようだ、そのうちそれらも食べる気である。

そろそろ魚を食べようか……扱っている店はどこだったかな。

魚は保存と輸送に手間がかかるため値段が上がる。

一般家庭では頻繁に食べるのは難しいらしいがそれでも私は気にしない、金はある。

……まずは目的を果たそう。魚の事はひとまず忘れて、ラムラン錬金術店に向かう。

この名前は誰かに勧められたのか？彼女が自分から付けるとは思えないんだが……私にはわかりやすいが。

「いらっしやいませ」

錬金術店に入り周囲を見る。

広い店内に効果が書かれた棚がありラベルが貼られた薬が置いてある、液体もあるが……小さい粒が入っている瓶もある。

「すまない、この小さな粒が入っている物はなんだ？」

通りかかった店員に聞く、店員は営業スマイルを浮かべて説明してくれる。

「こちらの商品は錬金術の祖と言われた初代店主が晩年に作り上げた物で、固形薬といます。この粒を水に溶かして飲む事で効果を発揮いたします。遠出をする冒険者などに人気の商品でございます」

「ほう……」

なるほど、ラムランも私の思いつかなかった物を作ってくれたな……確かにこれは良い。

現在は飲む水を出す事が以前よりも簡単だ。ケインの開発した詠唱でほとんどの者が可能だろう。

場所を取る一度きりの薬瓶より遥かに効率がいい……ただ緊急時はすぐに飲めないから向いていないだろうな。

固形薬を手取る、十分な出来栄だな。

「ありがとう。また何かあれば頼む」

「ごゆっくりどうぞ」

私はいくつかの種類の固形薬を購入した後、店の名前が気になり店員に聞いてみた。

「店の名前ですか？それは……恐らく店主ならわかると思いますよ、初代の子孫ですからね」

子孫か、出来ればあってみたいが。

「会う事は出来るだろうか?」

若い男性店員に聞いてみる。

「忙しくないなら平気だと思いますよ? 基本的に誰にでも会いますから」

仕事の手を止めたまま答えてくれる店員。

「では頼めるか?」

「はい、少々お待ちを」

彼は店の裏に入って行った、すぐに一人の女性を連れて来た。

「ありがとう。仕事に戻って」

「はい」

彼女は店員に指示を出す私に向き直った。

「始めまして、あたしはサブリナ・クオリオ、このラムラン錬金術店の店主だよ」

そう言っ手て手を差し出して来る、私は彼女に答えて握手をする。

「私はクレリア・アーティアという」

「神様と同じ名前なのね」

名前に反応するサブリナ、今でも初対面だと反応する者は居る。

「突然ですまない、貴女はラムランの子孫だと聞いたが……」

子孫にしては人間の要素が強い、青いショートカットの髪の毛のボーイッシュな女性だが耳と尻尾以外人間に見える。

「ああ、私は狼獣人と人間の混血なんだ」

そう言っ手て片手で手の爪を、もう片方で牙を見せて来る、牙や爪もやや短い。

「なるほど……それでお話したかったのはこの店名の事なんだが……初代が付けたのか?」

「確か……そうだったはず。理由は確かなんだったかな……」

考え込むサブリナ、彼女がつけたのか……意外だな。

考え込んでいた彼女が急にこちらを見て言った。

「思い出したよ! 確か初代がお世話になったとても大事な人にすぐに気づいてもらう為に付けた……そんな感じだったはずだよ」

「……そうか」

恥ずかしかつただろうに、時間が経つても分かる様にしてくれたのか。

「まあ、その人が誰だったのか……結局来てくれたのかどうかも分からないままなんだけどね……その人もとつくに死んじやつてるだろうし」

お前の店と子孫は元気なようだぞ、ラムラン。

「そうか。わざわざ答えてくれてありがとう」

「良いよ、気にしないで！」

礼を言おうと満面の笑みで答え、店の奥に戻って行った。

「皆の店に行ったのですか？」

「ああ、受け取る物も受け取った」

店から帰り校長室に行き、皆の店に行った事を話した。

「装備の事ですか」

ケインは懐かしそうに言う。

「お前とラムランも協力していたそうだな」

「ええ、その装備には私とラムランさんも協力しました」

ケインは頷き肯定する。

「そうか」

「本来はロドロフ夫妻との約束だったようですが、教え子の我々が集まっている事もあり、皆で作らないかとラムランさんが言いました」

なるほど、彼女は言いそうだ。

「所で……装備の名前についてだが」

「名前ですか？」

ケインが何か知っていればいいが。

「何か聞いているか？」

紅茶を用意しだすケイン、こちらに背を向けたまま話す。

「名前はロドロフさんとミシヤさんが決めました、良い名前でしょう?。」

ケインはそう言うのと振り向く。

「念の為聞いておくが……私の事なのか?」

「明言はしませんでしたが恐らく……間違っでは居ないと思います
が」

二人分の紅茶を持って戻ってくる、ケインはさらに続ける。

「二万年を超える寿命……黒い服を身に纏い……黒い瞳と黒く長い
髪……そして現在神として崇められているでしょう?」

何か間違っているのかと言うように語る。

「私に性別は無いようだぞ?」

紅茶を飲みながら言う。

「見た目は美しい少女でしょう?」

確かに間違っていないように聞こえるが。

「装備の名前と名前の由来を知っているのは私とお前だけだな?」

「はい。ですから気にする事は無いと思います」

紅茶を飲むケイン、この事が広まる事は無いか。

「それにしてもお前……」

「何です?」

私は紅茶を置きケインに思った事を言う。

「私を美しいと思っていたのか」

「思っていましたよ?言わなかっただけです」

二人で紅茶を楽しみながら他愛のない話をして時を過ごした。

ラムラン錬金術店に行つてからもうすぐ三か月。

生徒達は入学から半年程が過ぎ、すっかり学校生活に慣れたよう
だ。

「クレリア先生!」

私が廊下を歩いていると声がかけられた、振り向くとミナが私に向

かつて手を振っている、隣にはヘレンが居る。

ミナとヘレンの元に向かい、正面に座り飲み物をマジックボックスから取り出す。

「先生は自然にマジックボックスから飲み物を出しますね」

ヘレンが言う、たとえば簡単な魔法でもスムーズに使うのは難しい。

「年季が違うからな」

そう言った私とヘレンを見てミナが聞いてくる。

「二人共なんか先生と生徒というより……知り合い？」

「入学前にちよつとね」

「何かあったの？」

ヘレンが答える。するとミナがさらに聞いてくる、ヘレンは私をチラチラと見ている。

「言っても良いぞ」

「そう、あのね……」

その後、私が見学を間違えた話を話すヘレン、ミナはその話を聞いていた。

「あれだけの魔法技術を持つ魔法使いが入学つ……見学……ブホツ！」

堪え切れずに笑うミナ、確かに間抜けな話だが……。

「あー……笑ったー。その時に知り合ったのね？」

ミナはひとしきり笑った後に言う。

「そう言う事ね」

ヘレンはメガネの位置を直しながら答える。

「この見た目なら違和感なく入学前の見学にも行けるわよね」

「たまに大人も居るわよ？ 私達の時も他のグループにいたもの」

私を見ながら納得するミナに付け加えるヘレン、確かにいるが他の者の若さに思う所があるのか入学者は今まであまり居ないらしい。

「それに凄く簡単な物なら魔法書として詠唱がのっている本が町で売っているし、殆どの人はそれで済ますと思うわよ？」

本として売られているのか。

これから更に大勢が簡単な魔法を使えるようになり更に争いも増えるだろうな。

私の周りでは起きていないが、魔法による犯罪などもある。

邪魔な物を排除するのも魔法は便利だ。

一部の者にしか使えなかつた頃に比べれば対抗出来る者も多くなつた、その影響で争い合うようになって被害が広がっているが。

私がこの学校に出入りし始めて約二年。

私は学校の相談役を降りた。ケインには二年居た事に感謝を受け、生徒には私が相談役を止めて学校から出ただけ伝えて貰つた。

ミナは既に応用に進み、ヘレンも応用に進むようだ。

まだ私はこの町に居る気だから町で会うかもしれないな。

相談役を降りたと同時に私は学校の客用宿舎を出たので、泊る所を探さなければならぬが……。

家を買うか。

いつまで居るかは分からないがずっと宿ではゆつくり出来ない、見られたら困るような事もあるかもしれないしな。

一度宿を借りて家を買に行こう。

私はそう考えながら宿へ向かつた。

る、どうにか減らしたいな。

確認を終え、すぐに家を買いに不動産店へ向かう。

「いらつしやいま、せ？」

戸惑う店員の声が迎えた、この姿で家を買うのはおかしいか？

「家を買いに来た、私は成人している問題は無い」

受付に行き店員の女性に声をかけ、容姿の事も伝える。

「かしこまりました、どのような家をお求めですか？」

……スムーズだな。

「怪しいと思わないのか？」

「確かにお客様ほどの年齢で家を買う方は見た事はありませんが、お金さえ払っていただければ問題ありません。売ってはいけないうい決まりもございませんので」

微笑みながら答える女性店員、店の関係者というのは強かだな。

「金はある、それなら問題無いな」

「はい、問題ございません」

薄く笑みを浮かべる私と、微笑む女性店員、奇妙な友情が生まれそうだ。

「よし、では要望だがまず第一に風呂が広い事……これは外せない。後はリビング、寝室、キッチン、トイレ、倉庫も欲しい。後は……出来るだけ広い庭と……場所はどこでもいいが静かな所が良い」

私の要望をメモする店員。私が要望を伝え終わると私に待つように言って席を立った。

「お待ちせ致しました」

椅子にもたれ待っていると、店員が資料の束らしき物を持って戻ってきた。

「お客様のご要望に合っている物件の資料はこちらになります。後にご予算に合わせて選んでいただき、気になったいくつかを実際に見学して頂く……という形でよろしいでしょうか？」

「その方法で構わない」

「かしこまりました。では資料をご覧ください」

店員の提案を了承し、資料を読む。

上位の物件は流石に金額的に手が出ないな。下過ぎると庭があっても申し訳程度であつたり多少騒がしそうな場所であつたりと微妙だ。

「取り合えずこれらの物件は無しだな」

「かしこまりました」

高すぎる物と安すぎる物の資料を返し、残ったのは金額的には中程の物だ。

うーむ……。

「物件の静穏性ならば大通りの騒がしい場所でも魔道具や魔法で防音されている物件もございますよ？」

そう薦めてくる。

「その魔道具や魔法は一定以上の大音量を通す様に出来ているか？」

私なら関係ないが出来る事ならこだわりたいものだ。

すると戸惑いながら店員は聞いてくる。

「それは不可能です。全ての音を遮断する物ですので……よろしければそのご要望の意図をお聞かせいただいても？」

「静かなのは良い。だが災害などの問題があつた場合、全ての音を遮断してしまうと気づけない可能性が高い……普段は静穏性を保ち、被害が出そうなほどの大音量などは通すようにした方が良い。もしくはそれを知らせる物を用意するべきだな」

驚いた顔をする店員。それだけの魔道具と魔法を用意できるかは分からないがその方が安全だろう……普通の人間には。

「色々言つたが私は人混みが嫌いなんだ、大通りはやめておくよ」

「かしこまりました」

そう言つて物件の資料に目を移す。部屋数は……これは多すぎるな、私しか居ないんだ十部屋あつても意味が無い。

こうして私は都市の防護壁近くにある中規模の家……屋敷になる

のか？その中の二つに絞った。

どちらも私の要望は満たしていて寝室数は五、一つは風呂が広く、もう一つは庭が広い、正直どちらでもいいが実際に見て最終的に決めよう。

「この二つを実際に見て見たい」

私は資料を渡して言う。

「はい、今からでも可能ですがご覧になりますか？」

資料を受け取り答える店員、すぐ見られるのはいいな。

「今からでもいいのか、では行こう」

「ではこちらをご購入という事で間違いありませんか？」

「ああ、間違いは無い。支払いは今すぐ出来る」

結局庭の広い方を購入する事に決めた、実際に見た結果庭が広い方の屋敷の風呂の大きさが十分だったからだ。

「すまない、言い忘れたが統一前の硬貨は使えるか？」

「問題ありません。ただ……ウルグラードでの換金レートになってしましますが……」

「構わない。可能なら全て換金してもらえると嬉しいのだが」

この都市でのレートになると言う店員に旧硬貨の換金が出来るか聞いてみる。

「手数料を頂く事になりますが可能ですよ」

「では換金した後に支払うと言う事で良いか？手数料と屋敷の金額を引いて渡してくれ」

「ではこちらの部屋で確認いたします……どうぞ」
別室へ案内される。

こここのレートだと言っていたが足りないと言う事は無いだろうか？かなりレートが悪くても平気な量はあると思うが……。

そんな事を考えて待っていると彼女が袋を二つ持って現れた。

「お待たせ致しました……内訳ですが……お客様から預かりました

旧硬貨の換金後の金額が一億ウエンになります」

……そんなにあつたのか、大白金貨だぞ。

「当時の価値は一億二千万程ですがこちらのレートだとこの金額になります……問題ございませんか？」

金ならまた稼げばいいからな。

「構わない」

「では続けさせていただきます。屋敷の購入金額として八千万ウエン、換金手数料として一千万ウエンを引かせていただき……お渡しする金額は一千万ウエンとなります、何か問題はございますか？」

問題では無いが、そうだな。

「この都市の物価はどうなんだ？」

「……そうですね、お世辞にも安いとは言えません。換金レートも手数料も屋敷の金額も他の地域に比べてかなり悪い方だと思います」
これより悪い事はあまり無いと言う事か。

「答えてくれてありがとうございます。それで構わない」

「ありがとうございます。お金の受け渡しですが小白金貨一枚と、ある程度硬貨を分けた物をご用意できますが……どちらがよろしいですか？」

気が利くな、場所によっては小白金貨では釣りの硬貨が払えないかもしれないからな。

「分けた物を頼む」

「ではこちらです、ご確認ください」

そう言う袋の一つを渡してきた、私は確認しマジックボックスに入れる。

「こちらが屋敷の鍵と証明書になります。この証明書は私どもが販売しお客様が購入したという証になります……この証明書を紛失した場合、屋敷の持ち主であると認められなくなりますのでご注意ください」

「分かった」

私は鍵と証明書を受け取りマジックボックスに入れた。

「本日は誠にありがとうございます」

受付で深々とお辞儀をする彼女を背に、私は店を出た。

……こんなものかな。

私は購入した屋敷の家具を整え終えて、一息ついた。

家具が無かったので家具店で買い揃えて各部屋に設置し掃除した、これで一先ず家として問題は無くなった。

さて、これからどうしようか。

毎日家で能力開発をして、一日三食の食事を楽しむ生活も良いな。

ソファに身を沈めて両足をばたつかせながら考える、そして思いついた。

ここに来てからギルドを見ていない。

ギルドも教え子の成果と言える、今どうなっているか見て見たい。

……冒険者か。

思った以上に有った金もほとんど使ってしまったし……やってみようか。

稼ぎは少なくても楽しいかもしれない。

出来るだけ人らしく戦おう。

あまり人間離れた事をするとう面倒そうだ。

自警団の皆を育てた当時から、自分の決めた範囲でいかに戦うか考えるのも悪くは無いと思うようになってる。

勿論いざと言う時は手加減しないが。

あくまでも問題が無い時のみだ。

装備はどうしようか。

それなりに装備を着て居なければおかしいだろうな。

私専用の装備である永遠の黒き女神は……目立ちすぎるだろう。

武器だけなら良いかも知れないがあの見た目はな……。

どうにか出来ないだろうか。

永遠の黒き女神を出して眺める、そしてしばらくぼーっと見ていたのだが。

そうだ確か手紙に……。

私はこの装備と共にしまっておいた手紙を取り出す。

細かくパーツが分かれており軽装から重装まで変更出来る……これで行けるかも知れない、軽装にするには……。

早速やり方を調べて魔力を流す。すると装備が分解し一部が私に残りは再び待機状態に戻った。

「これなら良さそうだ」

ワンピースのままカチューシャの様な頭部の防具、首輪、胸当て、肘から手先迄を覆う肘当て、腕当て。

更にグローブを一体化した様な防具に、太腿の中程から膝、脛とふくらはぎ、足迄を覆う同じく一体化した様な防具と言う姿になった、これなら良いだろう。

この装備はこのような構造になっていたのか。

詳しく読むと、この鎧は軽く強度と柔軟性の高い魔法金属が細かく分かれて積層構造になっていて、軽装から重装に向かう程、体を覆う面積と装甲が厚くなっていくようだ……細かいパーツが集合した鎧……で良いのか？

今の時点では私でも完全には理解出来ないな……この事をロドロフトとミシヤが聞いたら喜びそうだ。

私の理解を超えた物を作ってやった！と言いそうだ……デザインも性能も良い逸品だ、愛用させて貰おう。

最後に数多くある女神武器から長剣を選び腰に付ける。さて、ギルドへ向かうか。

中々大きな建物だな。

ギルド……正確にはウルグラード冒険者ギルド商会だったか？

早速建物に入る。広間にずらりと並ぶ数字が書いてある掲示板の両面に紙が沢山張られている、それを冒険者と思われる沢山の老若男女が見ている。

奥に並んでいるカウンターの一つに向かい、声をかける。

「ギルドに登録したいのだが」

「はい……ではこちらに必要な事項を記入して下さいね」

私は用紙に記入しながら女性ギルド職員に聞く。

「子供でも問題無いか?」

「問題無いですよ?低ランクの依頼は子供でも可能な物も多くありますし、力不足だと判断すれば私達職員が受けさせる事はありませんから」

なるほど、子供の小遣い稼ぎも出来る訳だ。

用紙を渡すと薄く小さいカードが付いたネックレスともう一枚プレートを持ってくる。

「こちらの二つに魔力をお願いします」

私はそつと魔力を送る、プレートとカードが一瞬光る。

「これで貴女は登録されました。ようこそウルグラード冒険者ギルド商会へ」

微笑んで言う彼女。その後ネックレスの付いたカードを私が持ち、プレートはギルドで保管されると聞いた。

「ではギルドの説明を致します」

彼女が紙を渡してくる、そこにはギルドの事が書かれていた。

冒険者はランク1から10とグレード1から10、依頼は様々な要因を加味して難易度1から10に分かれている。

- 1 子供でもできるお手伝いのような物。
- 2 自衛手段が無い成人した者が受けられる物など。
- 3 討伐や狩猟以外の外での活動など。
- 4 魔物ではない動物の狩猟など。
- 5 ギルドが定めた非常に低い危険度の魔物の討伐依頼など。
- 6 ギルドが定めた低危険度の魔物の討伐依頼など。
- 7 ギルドが定めた中危険度の魔物の討伐依頼など。
- 8 ギルドが定めた高危険度の魔物の討伐依頼など。
- 9 ギルドが定めた非常に高危険度の魔物の討伐依頼など。
- 10 地域などに大きな影響を与えかねない災害クラスの魔物を

退ける、討伐する依頼など。

評価されるのは主に戦闘能力である。

ランクで受けられる依頼の難易度が決まりグレードはその冒険者が同じランク内の仕事をどれだけ成功させたかの目安になる。

討伐以外の物はやりたくないな。他の物は気が向けばやってみよう、それにはまずランクを5にしなれば。

彼女の説明を聞いている途中、質問をした。

「討伐が受けられる5までランクを一気に上げる方法はあるか？」

困ったような顔をする彼女、それでもしつかり答えてくれる。

「……ランクは各ギルドのランク認定試験を受け合格する事で上がります、そのランクの認定試験を合格すればなる事は出来ませんが……」

「駄目なら諦めるさ、受ける事自体は出来るのだろうか？」

そう言うとな彼女は困り顔のまま言う。

「いえ、現在のランクの二つ上のランクまでしか受けられない事になっっています」

「つまり今のランク1の私だとまず3に合格してから5に合格しなければならぬと言う事か？」

「そうなります」

頷き私の言葉に答える彼女。

「ではそれで頼む」

「えっ？」

彼女は私の言葉に思わずといった感じで声を上げる。

「3の試験を受けた後5を受ける、どうすればいい？」

「……ではまずこちらに記入をお願いします」

すぐに仕事に戻る彼女、ギルド職員は中々できる。

「お前が試験を受けるクレリアか？」

「そうだ、よろしく頼む」

数日後、試験を受けにギルドに訪れ待っていた私に声をかけてくる男。

「俺の事は試験官でいいぜ」

「分かった試験官」

そう言った私の前に座る試験官。

「試験内容はこの指定された場所に向かって錬金素材を手に入れてくることだ。俺はついて行くが危険にならない限り手を出さない、勿論俺の助けを借りれば試験は失格だ……いいな？」

目標のエリアと素材が書かれた紙を渡してくる試験官、これは薬草の一種だな。

「良ければ試験開始だ、頑張れよ」

そう言って笑う試験官、任せておけ。

「無事ギルドに到着したな試験官」

「……合格だ」

その後、森に向かいさつさと指定されたエリアに向かい目標の薬草を手に入れた、途中魔物に襲われたがすぐ首を落として処理した。

試験官と共にランク認定のカウンターに向かった。

「ランク3認定試験合格だ」

「はい、では目標をこちらに……確かに目標の薬草です。ランク3グレード1おめでとうございます」

手に入れた薬草を職員に渡す、ギルド職員が私に祝いの言葉を言った後奥に行き、試験官が立ち去ると離れた所で他の職員に話しかけられている。

「あの子合格したんですか？本当に？」

「見ていたんだ、間違いなく合格だ……あの娘恐らくランク5も合格するぞ……」

「流石にそれは無理ですよ」

「……どうだろうな」

試験官が疑われてしまったようだ、しかし私がランク5を合格すると言ったのは良い読みだ。

私はそのままカウンターで魔物の代金を受け取りカードの更新をし、ランク5試験の申請をして家に帰った。

数日後前の試験の時と同じようにギルドで待っているとギルド職員が女性がやってきた。

「……ランク5試験を受けるクレリアさんかな？」

「そうだ、よろしく頼む」

「本当に受けるのね？ここからは助けは無いわよ？力が足りなければ死ぬかもしれない」

私を見つめて話す。

「止める気はない」

そう言うと、私の前に座って説明を始める職員。今回は目的の魔物を一人で討伐して持ち帰る事が試験になるらしい。

「倒すのはこの魔物です」

絵だけが描かれた紙を渡される、私程の大きさの直立した目の赤い魔物だ。

「渡すのはそれだけ、名前や習性、居場所は自分で調べるのよ」

そう言ったところも含めて試験なんだな、ギルドに魔物が載っている本は無いかな。

「分かった……聞きたいのだがギルドに書庫はあるかな？」

紙から顔を上げ訪ねる。

「ありますよ。あちらをまっすぐ進んで道なりに進めば書庫の入り口があります……それと、駄目だと思ったら逃げなさい。試験なんてまた受ければいい……生きて戻る事を考えなさい」

彼女は微笑むと教えてくれた、探してみようか。

「ありがとう」

礼を言って書庫に向かった。

書庫の管理者に許可をもらって探し始める、魔物の本がありそうな所は……。

しばらく探すと魔物の欄があった。これのどこかの本に……《ウルグラーデ近郊魔物図鑑》か、これなら載っているか？

この魔物はラビアトか、森の少し深い所に生息している事が多いよ
うだな。

見つけた本に載っていた。脚力を生かした蹴りとタツクルが主な
攻撃か……絵では大きさが分からなかったが。説明を読むと私の半
分ほどしかないな、これなら大人で多少戦えるのなら負けないだろう
な。

多少戦える大人が勝てる相手に私が苦戦する事は無く、森の奥に向
かい問題無く討伐してギルドへと戻って来た。

カウンターで試験である事を告げて、魔物の受取り場に移動し、ラ
ビアトを取り出す。

「確かにラビアトですね、おめでとうございますランク5試験合格
です」

「ありがとうございます、これで一番下の危険度ではあるが魔物討伐が受けら
れるのだな？」

他の職員がラビアトを運んでいく、解体されて販売されるのだら
う。

「はい。ではギルドカードの更新を致しますので待合広場でお待ち
ください」

そう言われ、待合広場の椅子に座って待っていると呼び出される。

「お待たせしました、これからはランク5グレード1となります

……こちらがカードです」

女性職員に渡された魔物の代金をしまいカードを首にかけ、取り合えず今日はもう帰ろうか。

「一気にランク5になりましたね。これからは魔物討伐ですか？」
席を立とうとした所に女性職員が話しかけてくる。

「一番向いているからな」

そう言う彼女が少し乗り出して言う。

「聞きましたよ。その歳で連続で試験を受けてランクを上げたんですよね？」

今まで知らないまま成人だと言っていたがどうやら十五歳で成人とされているらしい、私はここでは十五歳という事になっている。

「おかしいのか？」

椅子に背を預けて尋ねる。

「二十前後の方は一気に魔物の討伐が出来るランクに上げる方は居ますね。若い方はランク4で経験を積んでからか、もしくはパーティーを組むのが一般的です。若い方が、それもソロでランク5になるのは珍しいですね」

腕を組んで話す彼女。

「ここからはじっくりやるよ、無理をして怪我をしたり死にたくは無いからな」

「最低ランクでも魔物は魔物です、くれぐれも気を付けてくださいね？若い方が亡くなるのは辛いですから」

そうだ、ランク以上の魔物を仕留めた場合の事を聞いていなかった。

私はその事を思い出したのは食事を終え、自宅のリビングでくつろいでいる時だった。

ギルドが依頼を實力によって分けていても魔物には関係ない。

場合によっては遭遇して殺されたり運良く討伐出来たりする事だっただろう。

まあ、それは次行った時に覚えていたら聞こう。

翌日。私はギルドへ向かいカウンターへ向かい、昨日の思い出した質問をしておく。

「おはよう。突然ですまないがランク以上の魔物に遭遇して討伐した場合どうなる?」

ギルドの女性職員が答える。

「討伐した場合安いですがギルドで買い取ります。基本的に依頼にある魔物以外は安いので討伐するメリットはあまりありません。自分で食べたり素材にしないのであれば、逃げるのが一番だと思います」

「なるほど、ありがとう」

その後私は近場の魔物の討伐依頼をこなして自宅へと帰った。

今日はどんな依頼があるかな。

一月後、順調にランク5としてグレードを上げた私はグレード3になっっていた。

「ようクレリア今日は何討伐するんだ?」

「まだ見て無い、これから見るんだ」

私は話し方を変えた、以前他の冒険者と依頼を受けた時その話し方だと咄嗟の指示や仲間の反応が遅れると言われた。

冒険者はあまり敬語や周りくどい表現を使わない、分かりやすく簡潔に、戦闘中はそれが全てだと言われた。

よく言えばフレンドリー、悪く言えば礼儀知らず。

しかし冒険者になった者……特に魔物を討伐するランク5以上の冒険者は相手がどんなに年下でもランクが下でも言葉遣いに文句を言う事は殆ど無い、それが命にかかると知っているからだ。

流石に公式の場では頑張るらしいが、私は冒険者をしている間は多少話し方をかえようと決めている。

「また手伝ってくれよ、お前が居ると仲間が喜ぶ」

冒険者の男が笑いながら言う。

「楽しただけだろうが、自分で稼げ」

そう言い返す、この話し方も良い物だ。

「いやー……それ以外にも男連中が喜ぶんだよ。お前はほら、可愛

げが無いけど顔は良いだろ？」

「ほう、ここで死にたいんだな？」

そう言つて男に手を向ける、男は焦ったように言う。

「褒めてるんだって！強いし美人だし声も綺麗だし！悪い意味は無

いって！」

私は手を下ろしながら言う。

「可愛げが無いっていうのは悪い意味じゃなかったのか？ん？」

「俺急ぎの用があるんだったわ！またな！」

そう言つて男は逃げて行つた。

あの男のパーティーと一緒に冒険に出た時に私があつさりと討伐してパーティー内で報酬を分けてから、他のパーティーからも誘いが増えた。

奴ららしいと言えはらしいが、一方的に使われる事は許さない。

ただ冒険者達との会話は悪い気はしない、軽口を言い合うのも悪くは無い。

さて、依頼を探すか……戦闘力的にはどの魔物でも良いんだが……。

ん……？珍しい依頼書があつた、スナイププラント？

これにしようと手に取った時、もう一つの手が紙をつかんでいた。

「あつ……」

後ろを振り返ると、暗い赤色のセミロングの女性が立っていた、手を伸ばしたままの格好で固まっていたが諦めたように手を離した。

「良いのか？」

彼女に問いかける。

「……どちらかが引かなければ終わらないでしょ？」

確かにそうだが……最近私で楽しようという者が多かったがこの子は何か雰囲気が違うな。

「良ければ一緒にやるか？報酬は皆で山分けでどうだ？」

「えっ？……えつと嬉しいんだけど。私達のパーティーはランク5になったばかりなの、今回が初めての魔物討伐なのよ……それでも良いの？」

ああ、この感じは初討伐だからか、緊張してるんだな。

「構わない。一緒にやろうか、私はそこそこ討伐をこなしてるから手伝おう」

そう言うと彼女は少しホツとしたように言った。

「ありがと。じゃあ皆に紹介しなきゃ、依頼を受けるのは私がやっておくから待合広場のあそこにいる……明るい茶色と水色のショートカットの二人。あの二人がパーティーの仲間だから先に行つて」
彼女は広場を指さして言う、見るとそれらしい二人が会話している。

「分かった」

そう言つてパーティーメンバーの所に向かった。

「そこの二人ちよつといいか？」

私は言われた二人の元に行つて声をかける。

「なーに？」

明るい茶髪の女性が言う。

「間違つてたら悪いがそちらのパーティーの暗い赤色のセミロングの女性と依頼を取り合う事になつてね。彼女が引いてくれたがどちらが早かつたと言う訳でもないし、一緒にやる事になつた」

「暗い赤色のセミロングの女性……ユリアルマの事だよね？」

「そうっぽいね」

水色髪の女性が言い、茶髪の女性が続く。

「座って良いか?」

「あ、いいよ」

そう言うのと席を進めてくる、私は彼女達の反対側に座る。

「自己紹介しておく、私はクレリア・アーティアと言う、役割は……
大体何でも出来るな」

「私はアリアナ・ガット、軽戦士だ」

明るい茶色のショートカットの女性が言う。

「あたしはー、ルフレ・カプラーター!盗賊だよ!よろしくねー!」

水色のショートカットの女性が続く。

「大体何でもつてすごいねクレリアちゃん!」

ルフレが話しかけてくる。

「ソロで活動するにはそれぐらい出来ないと危険だ」

「確かにそうだよね」

答える私にアリアナが納得したように言う。

「武器も魔法も使えるって事でしょ?凄いいねえ」

感心したように言うルフレ、そこに先程の女性が戻ってくる。

「随分仲良くなってるわね」

「あ、ユリアルマおかえりー」

言いながら座る彼女を迎えるルフレ。

「彼女に自己紹介してなかった。私はクレリア・アーティア、役割は
大体何でも出来る」

「私はユリアルマ・ルンブルク。魔法使いよ、お世話になるわね」

「これで揃ったね」

自己紹介が終わるとアリアナが言う、これから準備をして明日には
出発する事になるか?

「今日は準備にして明日朝一で出発しましょう。野宿になるから準備
を忘れないようにね」

ユリアルマが言う、彼女がリーダーか。

「今のうちに聞いておきたい事があったら言っただけ」

ユリアルマが私に言ってくる、そうだな……。

「皆、武器は何を使う?」

「私は剣と盾だね」

と、アリアナ。

「あたしはナイフと弓だよー」

腰のナイフと足元に置いてある弓を見せるルフレ。

「私は杖よ」

60センチ程の長さの杖を見せてくる。

「バランスは悪くないかな、そうすると私はどうしようか」

私がそう言うのとアリアナが言う。

「状況を見ながら遊撃でいいと思う、クレリアなら平気だろう」
それを聞いてルフレが聞く。

「そうなの？」

「うん、彼女ちよつと前に噂になってた人だよ」

「ああ……」

アリアナの言葉に反応するユリアルマ。

「二人とも知ってるの？」

ルフレが言う。

「十五歳で冒険者になって一週間程でランク5になった人だよ」

「うえっ!？」

アリアナの言葉に変な声を上げるルフレ、三人は私を見る。

「ユリアルマも知ってたの？」

「彼女だとは知らなかったけどその話は聞いたことがあるわ」
そう聞くルフレに答えるユリアルマ。

「あただしだけ知らなかったの!？」

納得いかなそうなるルフレ、そんな姿に思わず薄い微笑みを浮かべる私だった。

その後、彼女達としばらく話をした所、仕事で失敗し連帯責任で分割した弁償の借金があり皆で魔物討伐をする事を決めたようだ。
不幸中の幸いだったのはランク5になれる実力があつた事か。

翌朝、私は町の出口のそばにいた。しばらく待っていると、三人がやって来る。

「やつほ！クレリアちゃん！」

「おはよ」

「おはようございます」

ルフレ、アリアナ、ユリアルマの順に挨拶してくる。

「おはよう、準備は？」

「ばっちり！」

私の問いに元気に答える、ルフレ。

私は彼女達の姿を見る。

アリアナは剣と盾、皮の金属補強軽装備。

ルフレはナイフと弓、皮の軽装備。

ユリアルマは杖と軽盾、布の皮補強軽装備。

「ん？ユリアルマ軽盾を買ったのか？」

私が言うとユリアルマは盾を見せながら言う。

「昨日の準備の時にね、やつぱりあつた方が良いと思って」

「金は大丈夫だったのか？」

連帯責任の借金があるのに平気だったのか？

「ええ、この仕事が成功すれば大丈夫よ。駄目だったら駄目だけど」

「おい……」

呆れる私、上手く行かないという事は無いだろうが、駄目だったらどうするんだ。

「そろそろ馬車が来るよ」

アリアナが言う、私は馬車乗り場へ移動した。

「このまま近場まで馬車で移動して、途中から森に入って探すわよ」
馬車の中でこれからの事を話し合う。

目的の魔物が居る場所は森の丘や崖の麓などが多い……らしい。
結構珍しい魔物で、もし討伐出来ればかなりの値で売れるだろう。

「いくらになるかなー」

「まずは見つける事を考えないとね？」

ルフレがそわそわしながら言うところユリアルマが答えた。

「値が良ければ借金も全部返せるかも」

アリアナが目を輝かせる、確かに珍しいと値が上がる、場合によっては驚くほどに。

「浮かれすぎると危ないぞ？」

「はい」

私の言葉に二人同時に返事をするルフレとアリアナ、私がユリアルマの方を向くと彼女は穏やかに笑っていた。

「ルフ！弓で気をそらせ！ユリは私の攻撃の合間に魔法を挟め！」

「了解！」

指示を出すアリアナに同時に答えて動き出すルフレとユリアルマ。森に深く入って行くにつれて魔物が増えて行く、一匹一匹はそこまで強くないが多くなってくると彼女達には辛いだろう。

今私は気配を消している、小さな熊系統の魔物だが今は彼女達に気がそれて私に気が付いていない。

アリアナは私が潜んでいる草むらが魔物の背後に来るように動いてくれる……そろそろだな。

私は女神装備から弓を出し、魔物の足を打ち抜いた、突然動かなくなった足と激痛に混乱した瞬間、アリアナの剣が魔物の首を突き刺した。

「ふうっ」

アリアナが息を吐く、真正面から盾になるのはやっぱりまだ辛い。

「お疲れー」

「上手く行きましたね」

ルフレとユリアルマが声をかけながら近寄ってくる。

「アリアナ、私が正面に立とうか？」
私がそう言うのと彼女は首を横に振る。

「大丈夫、クレリアは色々出来るけど私はこの役目しか出来ないからね。私がやるよ」

にこりと笑うアリアナ。だけどここに来るまでかなり戦った、他の二人も疲れが見え始めている、そろそろ野営の準備をした方が良さそうだ。

「今日はここで野営しよう、皆疲れが出始めてる。このまま進むのは危ない」

「ん、そうしょつか」

「そうね、魔力も持つか分からないし」

「疲れたー。ゆっくりしたいー」

やっぱり疲れていたようだ、すぐに三人は賛成した。

野営の準備をして夕食を作るため、私はマジックボックスから買っておいた材料を出す。

今まで狩った小型の魔物の死体は私が保存して彼女達に譲る事になっっている、ユリアルマもマジックボックスは使えるが、私のマジックボックスの容量に驚いていた。

「ありがとうございますクレリアさん。魔物を保存して貰っちゃって料理中のユリアルマが言ってくる。」

「特に大変でも無いぞ?」

本当に特に何ともない、入れるだけだ。

「それに道中の小型は譲ってくれるっていうしそれを悪いと思ってるのか。」

「私が良いと言ったんだ、気にする必要はない」

「うん。ありがとうね」

そろそろ出来上がる、周囲を警戒している二人を呼ぼうか。

「二人を呼んで来る」

彼女が頷くと私は二人を呼びに行った。

食事をした後に見張りの担当を決めたのだが、私以外の三人の見張り時間を短くして最後に私が朝まで見張る様に持ち込んだ。

「じゃあ朝までお願いね、おやすみなさい」

「任せろ、お休み」

ユリアルマと交代して後は朝まで私が見張りだ。目の前には焚火があり、周囲は森のせいで月明りも届きにくくかなり暗い。

彼女達の寝息が聞こえる中、近づいてくる気配がする……大型の魔物だ。

私は無言でその魔物に意識を向ける。その気配は戸惑ったような動きをした後怯える様に遠ざかって行った。

焚火の炎に当たり、木の焼ける音と彼女達の寝息を聞きながら、私は朝を待った。

朝になり私は三人を起こした。

「ユリアルマ、食事を作ってくれ。何が必要だ？」

私はユリアルマにそう言うと言おうとマジックボックスを開く。

「あらあら、ではお砂糖と……」

必要な物を出していく、そうしているとルフレが話しかけてきた。

「クレリアちゃんほんとにだいじょーぶ？」

徹夜の事か、そもそも寝ないからな。

「大丈夫、ソロの時は寝ない事もある」

「……ソロの冒険者はすごいね」

その会話を聞いて驚いたような声を上げるアリアナ。

「居た……あいつだ……」

いつもはうるさいルフレが声を殺して呟く。

目的の魔物は三方を高い山肌に囲まれた奥まった場所に生えていた、見た目は大きな果実を実らせた木だがよく見ると不自然に動いている。

「よし……慎重に行くぞ。奴の動きから目を離すなよ」

私がそう言うのと頷く三人。

アリアナが盾を構え細い谷底の様な道の入り口へ進む。ルフレが弓で、ユリアルマが魔法でそれぞれ援護できるように構え距離を開けてついでに行く。

念の為私は周囲を感知する……これは。

「下がれ！ 畏だ！」

私はアリアナが入り口に入る前に叫ぶ。

「!？」

私の言葉を聞いたアリアナはすぐに入り口から離れた。

十分な距離を取ると私に近づいてくる、他の二人もやってきた。

「畏ってどういう事？」

ルフレが聞いてくる。

「谷底の様に狭く細い入り口、その地面の下に魔物の魔力が通ってる」

「そんなこと分かるの？」

アリアナが聞く。

「信じられないかもしれないが信じてくれ」

「……信じるわ。方法を考えましょう」

ユリアルマが言う。良かった、彼女達を死なせるのは気分が悪いからな。

畏なのは間違いないだろうが出来れば確かめておきたい。

「上手く行くか分からないが確かめてみよう」

私はそう言つてマジックボックスから果物を取り出した。

「なんで果物？……あつ」

急に果物を取り出した私に疑問を口にするルフレだが思いついたように声を上げる。

「念の為気を付けておけ」

頷く皆を見てから果物を道の方へ投げる、果物が道の上に差し掛かると地面から根のようなものが飛び出し果物は碎け散った。

沈黙する彼女達。まあ踏み込んでたらアリアナがああなっていた訳だし当然か。

「なんでこいつがランク5に居るんだ……?」

アリアナが思わずと言った感じで呟く。

「恐らく平地だと一方から囷を投げて別方面から攻撃すれば片が付くんじゃないか?」

「場所が悪かったと言う事ね……」

私の説明に返すユリアルマ。

「どうするのー?」

ルフレが聞いてくる。

「ユリアルマが燃やしてしまえばいいと思うよ」

アリアナが答える。

「やってみましょう」

ユリアルマが頷き言った。

「駄目だわ……」

ユリアルマが使うファイアボルトも届く前に無数の根に阻まれて届かない、当然弓も駄目だ。

「折角見つけたのにー」

ルフレが悔しそうに言う。

「うーん……」

唸るアリアナ。

全部焼き切れればいいんだな。

「私に任せてもらえないか?」

皆の視線が集まる、期待した顔だな。

「何か方法があるの?」

アリアナが聞いてくる。

「ああ、邪魔されるならそれごと焼き払えばいいだろう」

「そんな事出来る……のよね貴女なら」

魔法使いであるユリアルマが言ってくる、彼女は言っている事の大変さが分かるからな。

「お願いします。どちらにしてもこのままじゃ帰るしかないもの……二人もそれでいい？」

ユリアルマの言葉にうなづくアリアナとルフレ。

「分かった。離れていてくれ」

私は入り口付近まで行くと本体の木に向かって手をかざし炎を放射した、見る者が見れば炎のレーザーだと言うだろう。

それは突き出してくる根をもともせず焼き払い、命中した木の魔物は一瞬で燃え尽きた。

魔物が燃え尽きたのを確認すると、すぐに止めた。

威力は大分抑えたから裏に貫通はしていないだろう。

「……よし。皆終わったぞ」

そう言つて振り返ると皆は間抜けな顔で魔物のいた場所を見ている。

「クレリアちゃんの魔法が凄すぎるとかどうしてそんな力がとかいろいろあるけど……」

ルフレが魔物の居た方を見たまま言う。

「全部消し飛ばして、討伐したと認めてもらえるのかしら……」

ユリアルマが困った顔で言う。

「……あつ」

声を上げる私。

「……やってしまった……」

「もう駄目だ……すぐに今の宿も追い出されてしまう」
うなだれるアリアナ。

「気まずい沈黙の中、私が言った言葉は……」

「皆私の家で暮らすと良い」
だった。

その後私達は丸一日かけてギルドに戻ったが結局証明する物が無く依頼は失敗になり、スナイププラントの危険性だけ伝えてギルドを出た。

「ふんふんふんやんにやににやあ」

良く分らない鼻歌を歌いながら歩くルフレ。

「ご機嫌だねルフレ」

アリアナが言うが、彼女も嬉しそうだ。

「そりゃそうだよー！クレリアちゃんの家にお世話になれるんだよ、宿代が浮くぞー！」

「ルフレさん……ごめんなさいクレリアさん。でも助かるのは本当なんです……」

嬉しそうにはしゃぐルフレと申し訳なさそうにしながらも嬉しそうなユリアルマ。

「元はと言えば私が魔物を消し飛ばしてしまったせいだしな、部屋も足りてるから構わないよ」

そう言って進む。

途中で部屋用のネームプレートを人数分買って町の郊外に向かう。人通りは減り、大通りの賑やかさは消え、静かな住宅地に入ると更に防壁の方へ向かう。

「……ねえユリアルマ、こっちって結構高級な住宅街じゃなかったっけ？」

「……そうですね、最低でも五千万以上のお屋敷ばかりだったはずですが……」

後ろでひそひそと話すルフレとユリアルマ、アリアナは周りを見ながら歩いている。

そして庭の入り口にある鉄門に近づく。

「ここだ」

そう言って門を開ける、庭に入って進むと付いてくる気配がしな

い、後ろを向くと三人がボケっとしている。

「おい、早く来い」

そう言うと、ハツとして皆小走りについてくる。

「すっづ……クレリアちゃんって良い所のお嬢様？」

玄関に向かう途中ルフレが話しかけてくる、何と言つてごまかすか。

「まあ、そんな感じだ」

そう言っている間に玄関に到着する、三人共屋敷や庭を見ている、その内庭に池でも作るかな。

「入ってくれ」

「お邪魔しまーす……今日から住むんだただいまかも？」

「おじゃ……ん？そうね」

「……ただいま、かしら」

ルフレの言葉に言葉を切るアリアナとただいまと言うユリアルマ。「部屋は二階だ。一つだけ離れている大きな部屋は私の部屋だからな。四部屋固まっているから好きな部屋にこのネームプレートをかけて荷物を置いて来い。屋敷と部屋と敷地の門の鍵も渡しておくから無くすなよ」

そう言うと三人は返事をして二階へ上がって行った、防犯の魔法をかけなおしておこう。

魔法をかけ終わって紅茶の準備をしてリビングで待っていると三人が降りてきた。

「凄い良い部屋だった！下手な宿より遥かに良いよ！」

「あんなに良い部屋に住めるなんて思ってた！」

「申し訳なくなるわね」

降りてくるなり私に言ってくるルフレ、嬉しそうに笑うアリアナ、困り顔のユリアルマ。

「さて、三人共座って」

紅茶を入れて皆を座らせる。

「この家のルールを教える、とは言つてもそこまで厳しくは無い」その後、自分の部屋の掃除は自分でやる事。

屋敷全体の掃除、洗濯、食事の用意、風呂の用意などは分担する事。三人以外の者を連れて来る時は私の許可を得る事などを話した。

「今日は疲れているだろうし食事は外でしてゆつくり休もう。食事はおごるから気にしないで食べていい」

「やったー！ありがとうクレリアちゃん！」

飛びついていきそうなルフレ、残る二人もお礼を言ってくる。

「私が食べている店のうちの一つでいいかな？」

「文句なんてないよ、ごちそうして貰う身なんだし」

アリアナが苦笑いしながら言う。

「じゃあ行こうか」

こうして食事に出かけた。

私は注文を終え頼杖をつく、皆も好きな物を頼み後は待つのみだ。

「……クレリアさんは本当にお嬢様なのですね」

ユリアルマがしみじみと言う。

「どういう事？」

「この店も結構な高級店なんだけど……？」

私の問いにアリアナが答えた。そうだったのか……味が良いから来ていたんだが。

「まあ、気にしないで食べる。今日のお詫びの内だ」

話をしながら待っているうちに料理が出され、皆嬉しそうに食べるのを見ながら私は自分の食事に手を付けた。

「美味しかったねー」

ルフレはお腹をさすりながら帰りの道を歩いていく。

「帰ったら風呂に入って今日は寝よう」

「お風呂か、嬉しいな」

「そうねえ」

私が提案するとアリアナとユリアルマが答える。

「風呂でつかい！……ねえ皆で入ろうよ！」

家に着き風呂場を見たルフレが言う。

「私は平気だよ」

「私も平気よ」

アリアナとユリアルマは了承して、私を見る。

「クレリアちゃん」

ルフレも私を見る。

「分かった、入る」

「イエーイ！」

喜ぶルフレは他の二人とハイタッチしている。

私はすぐに過去の娘達の体を何とか思い出し。人間の様に一部を変化させる、そのたび違ったらおかしいし彼女達と過ごす間はこのままでいるか。

「あー……気持ちいいー」

完全に脱力しているルフレ、アリアナとユリアルマも隣でリラック
スしているようだ。

「んー……」

私もゆっくりり浸かっていると、アリアナが私をじっと見て唸ってい
る。

「アリアナ？どうしたの？」

ユリアルマが気付いて声をかける、アリアナは私を見たまま答える。
る。

「いやー若いからこれからだけどき、クレリアってかなり完璧に近

くない?」

「……なるほどね。顔も綺麗だし声も良いし……お肌も綺麗で色々良い色してるものね」

アリアナの言う事に納得顔のユリアルマが答える。

「皆の方が綺麗だと思うが……」

皆の肌を見る、健康的な肌だと思う。

「私達は二十歳を超えているし、何よりクレリアさんは基本的な美しさが違う気がするのよねえ」

湯舟に浸かったままそう言いながらこちらにスーツと移動してくるユリアルマ、そのまま腕を撫でてくる。

「やっぱりすごくいい肌触りね」

そう言いながら自分の腕と触り比べる彼女。

そんな事をしながら後ろから胸を触ろうとしているルフレを避ける。

「むっ……クレリアちゃんの小さな胸はどんな触り心地かなー?」

「ふむ、触りたいなら触って良いぞ……ほら」

私は胸を張って待つ、魔法を使って。

「えっ?良いの?では遠慮なくー」

そう言っただけで触ってくる彼女だが触ろうとしても胸にギリギリ手が届かない。

「あっあれ?ぬぬぬ……」

頑張っているが一向に近づかない彼女の手。

「ほら、どうしたルフレ?触って良いんだぞ?」

「ぐぬー……」

どうにかしようとする彼女。

「クレリア相手は無謀じゃないかなあ……」

「体の表面に沿って防御魔法を使うのはかなり高度なんですけど……」

挑発する私、ムキになるルフレ、そんな私達を眺めながら呟くアリアナとユリアルマ。

彼女はのぼせるまで諦めなかった、その頑張りは認めよう。

「クレリアちゃんギルドに行こー!」

当番の者が朝食を作り食べ終えた後、ルフレが近寄ってくる。

「そうだな、お前達は早く稼がないといけないしな」

「そうなんです!」

彼女はやる気があるようだ。

「他の二人は?」

「私達も勿論行くよ」

「お金、稼がないとね」

私の問いに答えるアリアナとユリアルマ。

私達はギルドに向かう事にした。

「ねえクレリアちゃんどの討伐依頼やる?」

依頼表を見ているとルフレが話しかけてくる。

「まだ決めてないがお前達は決めたのか?」

彼女達は稼がなくてはいけないから早く決めないとまずいんじゃないか?

「クレリアちゃんが決めてよー」

ん?何かおかしいぞ。

「なんで私が選ぶんだ?」

「皆でやるんだし良く知ってるクレリアちゃんが決めたほうが良いでしょ?」

一緒に依頼をやるつもりなのか。

「言っておくが……一緒に依頼はやらないからな?」

「えっ!?なんで!?!」

驚く彼女。

「元々パーティーじゃないし、たまたま一緒に仕事をやっただけだ。」

私のミスで家を提供したが一緒に戦う訳じゃない」

「ええー……」

声を上げるルフレ、そんなやり取りをしているとユリアルマとアリアナがやって来る。

「ルフレさん無理を言っっては駄目ですよ」

「元々あの時だけだったんだから迷惑かけちゃだめだよ」

そう言っつてルフレを止める、彼女はしぶしぶ諦めた。

「たまには一緒に行くこうね？」

笑っつて言うルフレ。

「気が向いたらな」

そう言っつと彼女達は依頼書を見に行つた。

私は再び依頼書に目を向け選り始める。

前日は近場で魔物狩りをして早めに帰つた。共に過ごしている三人は特に問題なく私と暮らしている。

今日は朝から商店を見に行く、彼女達はまだ寝ているようだし起ささないようにそつと家を出る。

朝から大通りは人で賑わっている。

店を眺めながら歩いていると酒屋が目に残まる、そういえば今まで酒を飲んだ事が無い。

「いらっしやい」

酒屋に入ると辺りを見回す、様々な種類が置いてあるが見ただけではあまり分からない。

「少し良いか？初めて飲む酒でお勧めはあるか？」

店員か店主かは分からないが質問する。

「初めてか……待ってろ」

そう言っつて席を立ち店の一角からボトルを二本持ってきた。

「この二本はアルコール度数が一番低くて果実を材料にしてる、試してみるならこの辺りが良いだろう」

赤のラベルと白のラベルのボトルを見比べる……ま、買ってみるか。

「この二本を買うよ」

「毎度あり」

酒屋を出てまたぶらぶらと道を歩く。すると動物の絵が描かれた店があった、見覚えが無い……最近出来たのか？

「いらっしやいませ！」

店に入ると、瓶に入った白い液体が冷やされて並んでいる。

「見覚えが無かったから入ったんだが……食品店なのか？」

店員に疑問をぶつける。

「はい、ここはモーと言う動物のお乳を売っています。いずれこの乳を原料にした他の製品も扱う予定です。この場で飲む事もできますから是非飲んでみてください」

なるほど、まずは飲んでみないと何とも言えないな。

「じゃあ一杯貰おうか」

「かしこまりました。少々お待ち下さい……どうぞモー乳になります」

グラスに入った真っ白な液体、私はそれを一口飲む。

「……ほう」

特に強い匂いは無い、しかし濃厚な味がするし仄かに甘みの様な物も感じる……。

「美味しいな」

「ありがとうございます」

「これは買っていいこう。」

「大瓶を十本くれ」

「ありがとうございます、すぐご用意します」

残りのモー乳を飲んでいる間に大瓶が揃えられたので飲み切つてグラスを返し、金を払って店を出た。これは普段から愛飲出来そうだ。

モー乳をマジックボックスにしまい込んで大通りに戻る、今日はお帰ろう。

家に帰り買った酒を取り出しグラスを用意する、まずは赤の酒、赤ワインを飲んでみる。

「……うーん」

思ったより甘くないし、苦くて変な臭いがする。飲めない訳では無いが……。

「私はモー乳が良い」

白い方も駄目だった。

私はモー乳を取り出すと魔法でもう少し冷やして飲む……美味しい。酒は我が家の三人組に譲ろう、誰か飲むだろう。

三人は居なかったので昔買った本を読む。今度は新しい本を買おうと思しながらのんびりと過ごした。

帰って来た三人に酒を譲りルフレに「まだまだお酒が分かってない」と言われた。

今は分からんな、今後も分かるかどうかと言われれば……分からないな。

翌日。いつもの様にギルドに来た私は、妙に偉そうにしている男達が居る事に気が付いた。

男達は何を倒したとか他の冒険者は大した事無い等と話している。見覚えは無い、他の町から来たのか。

話からするとランク7辺りなのだろう。

私は興味を失い依頼書を見る、そうすると頭の上から声がする。「ん？なんでガキがランク5の依頼書の前に居るんだ？」

先程の男達の一人だったような……？

「私はランク5だぞ」

そう言っってギルドカードを見せる、男は驚いたように言った。

「マジかよ！このギルドはこんなガキをランク5にするのか？」
驚き声を上げる男の声に反応し、仲間らしき者達が集まってくる。

「どしたん？」

「いや、このガキランク5らしいんだよ」

「マジで!?!このギルド大丈夫なのか？」

口々に色々言う男達。

そう言えば今まで見た目でこんな風に絡んでくる奴は居なかったな、このこのギルドの冒険者は良い方なんだな。

「お前達は何故ランク5の所に来た？お前達の話が耳に入ったが、お前達はランク7辺りだろう？」

「口の利き方がなってねえガキだな……まあ教えてやる。俺達はランク7の実力があるがわざとランク5で止めてるんだよ」

何かそうするだけのメリットでもあるのか？

「実力ギリギリの魔物を倒すより余裕がある方が安全だろうか」
まあ、そうだな。

「安全に稼ぐためにわざと上げて無いと言う事か」

「そうだ、お前も賢く稼げよ」

そう言っただけ男達はギルドから出て行った、依頼は良いのか？

私は依頼を取り、カウンターに向かう。

私はカウンターで先程の男達の話聞いてみた。

「恐らく嘘だと思います」

ギルド職員の男性はそう言った。

「クレリアさんが聞いた魔物を本当に討伐しているなら強制的にランクを上げられるはずですよ」

「そうなのか？」

訪ねる私に説明してくれる。

「上位のランクの魔物を討伐できる者を低いランクのままにする事は基本的にありません。冒険者の登場によって魔物は討伐されるよ

うになりましたがそれでもその数は減っているといえませんが。そこまで実力がある者を下のランクに置いておく事は無駄でしかなく、更に下のランクの冒険者の仕事も減ってしまいますからね」

「そうか。ありがとう、では討伐に行ってくる」

「お気をつけて」

職員に見送られギルドを出る。私も上のランクを討伐していたら半ば強制的に上に上げられていた訳だ、いずれは上げるつもりだが今はまだこのままで良い。

それから一月程がすぎたある日、私はいつもの様に依頼をこなし家に帰り三人と共に食事をしていた、他愛のない話をしていたが、話が途切れた時ルフレが話しだした。

「クレリアちゃんは知ってる？」

「それで答えられるか、分かりやすく言え」

「そう言う苦笑いしながらアリアナが話す。」

「少し前に討伐中のパーティーに魔物が乱入してきて、そのパーティーは一人を除いて全滅したみたいなのよ」

「誰がやられた？」

冒険者は命を懸ける、こんな事はそれなりにある。

「えっと一月くらい前によそから来た男のパーティーがあつたんだけど、知ってる？」

「そう聞いてくるアリアナ。」

「分かん」

「分からない物は仕方ない。」

「そつか……それで生き残った人の証言でその魔物が危険度7だつてわかつたらしいの」

「食事を止め真面目な顔で言うアリアナ。」

「この辺りにやって来たと言う事？」

「そう言うユリアルマが話し始める。」

「このギルドに危険度7の魔物を討伐できる冒険者は居ないわ……今別のギルドに討伐できるパーティーを要請しているみたい」

この町は人類の勢力圏の中の方にある、辺境に行くほど凶暴で危険な魔物が増えるみたいだしな。

「クレリアちゃんなら勝てそうなんだけどー？」

ルフレが私を見ながら言うてる。

「どうだろうな。もうギルドで対策してるなら任せればいいと思うが」

適当にごまかす。

「とにかく、ギルドでも通達しているけど討伐されるまでは依頼は今まで以上に注意してやってね？」

ユリアルマに言われて、私は頷いた。

それから一週間後、私は本を見に出かけていた。

店には魔法を始めとした各技術書、戦闘指南書、創作なのか事実なのか分からない冒険記、料理などの本、歌や音楽の本、クレリア神教の本もあった。

色々な種類ごとに良さそうな物を買って店を出る。

早々に目的を終えた私はその足でギルドに向かった。

危険度7の魔物の話を聞いたその日に魔物の情報が張り出され、見かけたらずに逃げる事、すでに応援を要請しており討伐の為にパーティーが向かっている事が連絡がされた。

それでも相変わらず冒険者達は居座っている、犠牲者が出て危険度が高い魔物が付近に居ても冒険者達の暮らしは変わらないようだ。

「クレリア、ちょっといいか？」

そうして何か近場で討伐に行こうかと思ってる居ると冒険者の男に声をかけられた。

彼はここのギルドの冒険者のはず……名前は知らない。

「なんだ？」

男の方を見る。

「俺と付き合ってくれ」

「断る」

男の告白断ると肩を落として戻り仲間らしき数人に慰められている。

最近私は告白を受けるようになった。今頃なぜ……と思ったが我が家の三人曰く、今までは様子を見ていた……らしい。

「見事に切り捨てましたなあ」

ルフレが近寄ってきて言う。

「なんでみんないきなり言ってくるんだ？」

私はルフレに問う。

「クレリアちゃん性格から考えて直球が良いと思ったんじゃない？」

ルフレは私を見ながら言う。

「何をしても無駄だけどな」

ルフレがその言葉を聞いてにやつきながら言う。

「おっと？クレリアちゃんは女の子の方ふあ……」

ふざけた事を言い始めたルフレの顔を掌で押さえる。

「変な事を広めたらお仕置きするぞ」

「クレリアちゃんのお仕置きって酷い事になる予感しかしない」

ルフレを大人しくさせて再び依頼書に目を移し物色するのだった。

あれからまた一週間が過ぎた。

時々例の魔物……ハンドスネイクを見かけて逃げてくる者が居たが犠牲者は出なかった、そして今日リングァイルから討伐しに来た冒険者が到着する予定らしい。

私はいつも通り朝から依頼書を見ていた、すると入り口が少しざわついて五人の男女が入ってきた。

私は目を向け確認する。

男三人の女二人、装備からすると男三人が前衛女二人が後衛だな、ハンドスネイク程度なら倒せそうだ。

名前を知らなかったが姿絵を見て気が付いた事がある。

この魔物はカミラと居た時に大量に襲い掛かってきた雑魚だ。

そこそこ美味しかったので覚えている、大きい上に数が居たのでいまだにマジックボックスにかなりの数が入っている。

これで今回の事は何とかなると考えた私は、今日の依頼を選ぶ作業に戻った。

「では、頼んだぞ」

「ええ……なるべく早く討伐しますよ」

ふむ……そろそろランクを上げるか……？しかしここにはランク5までの魔物しか居ないからな……。

「……っーあの、そこの子……ちよつといいかな？」

これ以上ランクを上げるには上位の魔物が生息している付近の町や村に移動しないといけない。

「その考え込んでいる黒髪の君だよ」

まだ三か月もたっていないのに移動するのはな……と思っっていると私の肩に手を置こうとしているのを感じてかわす。

「あっ……」

手を伸ばしたまま固まっているのは黄色い髪の男だった。

「なんだ？何か用か？」

「偉そうな子供ねえ」

彼の仲間の女性から声が聞こえる。

「……このギルドの子だね？危険度7の魔物が出たから討伐しに来た冒険者なんだけど、この辺りを案内してくれないかな？目撃された場所とかさ」

そう言ってくる男。

「生き残りの男や目撃した者達が居る、そいつらに頼め」

そう言う困ったような顔になる。

「えーと、何と言えればいいかな……君に頼みたいんだけど」

「私は目撃した事も無いしここに来て三か月も経っていない。他に

もつと詳しい者が沢山いるからそいつらに頼んでくれ」

「……分かったよ」

説明すると彼は引き下がり、ギルドを出て行った。

討伐の為のパーティーがやってきて五日程が経った。

「クレリアちゃんまたあいつ来てるの？」

ルフレが心配そうに話しかけてくる。

「ああ」

よく頑張るものだ。

「五日間ずっとだろ？ 魔物を探す合間に何度も来るよね」

アリアナが言う、彼女も心配してくれているようだ。

「まわりつかれているってギルドに言ってみたらどうかしら」

ユリアルマが提案する。

「大丈夫だ。無理な事は言われないし断ればすぐに引く、その内討伐を終えて帰るだろう」

討伐できなければ稼ぎも無いんだ、あまり長い間討伐出来なければ別のパーティーが来るんじゃないか？

「そうだと良いけど……」

ユリアルマは呟く、私はいつもの防具と剣を身に着け家を出る。

「おはよう、クレリアちゃん」

家を出てすぐの場所に例の男が立っていた。

「頑張るなお前も」

名前は聞いたはずだが、ロメオだったか……？

「美しい君のためだ頑張りもするよ」

私に近づいて来る彼。

「討伐はどうだ？」

私が問うと彼はにこりと笑い言った。

「君が案内してくれたら上手く行きそうなんだけど」

「何故私にそこまで頼む？」

私が言うと彼は笑ったまま言う。

「君が今まで見た事が無いほど美しいからさ」

何の関係があるんだ。これが普通の男のアプローチ？というやつなのか？

「このまま君が来てくれないといつまでも魔物が見つからないかもしれない、そうしたらいずれ誰かが犠牲になるかもしれないよ？」

「何となく私が来なければ討伐しないと云っているようにも聞こえるが？」

そう言うと彼は笑みを深くして言う。

「いやいやそんな事一言も言っていないよ？ただ……君と住んでいる彼女達が危なくなる事もあるかもしれない」

「言っている意味が良く分からないが」

彼は急に真顔になり私を見て呟く。

「案内をしてくれないなら彼女達を魔物の仕業に見せかけて殺す」

「ほう……分かった」

「良かった……では善は急げです今から行きましようか」

私の言葉を聞くと彼は微笑み、私を案内する……お前は選択を誤った。

彼について行き、ある程度森の奥に進むと彼の仲間がそろっていった。

「ようやく連れて来たのかよロミオ」

仲間の男が言う、ロミオ……そう言えばそんな名前だったな。

「ようやく説得にに応じてくれました」

「脅迫の間違いでしょ」

そう言うと女の一人が言って笑う。

一応どういう事なのか聞きたいな、軽く自白誘導魔法を使っておくかな。

「おい、お前達は何が目的なんだ？」

そう言うのと男の一人が言う。

「簡単な事だ、お前で俺達が楽しむ、その後は金持ちに売る、お前が消えたのは魔物に食われたから……ほらな？」

女がそれに続く。

「快く案内を受けてくれたまだランクが低いアンタは私達からはぐれ、私達が必死に探すも間に合わず……悔いるような演技をすればそこまで問題にはならないわ」

また男が話し始める。

「討伐自体はするけどな、要請がある時は立候補して救援に行くぜ」最後に女が言う。

「稼げるものね」

なるほどな……やるのは構わんが私の周りに手を出したのは失敗だったな。

もう一つ聞いておこう。

「売買専用の場所などがあるのか？」

そう聞くとロミオが微笑みながら答える。

「あるよ。リンガイルのホレス・コルマノンと言う男の商会の敷地内に一部の者しか入れない場所がある、そこで売買が行われているよ」

こんな所かな、私は魔法を解除する。

「さて、では捕まえよう……出来るだけ傷つけるなよ、値が落ちる」

ロミオがそう言うのと、男が一人近づいてくる。

「こんなガキ軽く気絶させればいいだろ……よく見れば装備も高そうだぜ」

完全に油断して近寄ってくる男、前衛三人は剣、後衛二人は杖とナイフ、弓か。

「私はこれでもランク5だ」

そう言っただけ私の方から距離を詰め首を剣で一閃した。

「つが?!ひゅ……」

首から吹き出る血を手で必死に押さえながら倒れこむ男。

「なっ!」

「くそっ!・困め!」

慌てて武器を抜き構える雑魚達、ロミオと男が私を挟み、後衛の女達は男の後方で構えている。

「たかがランク5だ!・数もランクもこっちが上だぞ!」

ロミオは武器を構えながら、冷静に言う。

私は男に向かって身を低くして疾走する。

「?!はやつ……」

すり抜けざまに首を切り落とし後衛に駆ける、女達は驚愕の表情で固まっていたがすぐに動き出す……だが。

遅い。

わたしは内心で眩き、弓の女の首を切り裂くと流れる様に魔法で拳ほどの石を杖の女に打ち出す。

「っ……」

悲鳴を上げる暇もなく石が杖の女の頭を吹き飛ばした。

私がロミオを見ると、彼は震えながら剣を構えていた。

「あつ?・えつ?」

言葉にならない彼に私は微笑みながら優しく言っつてやる。

「大丈夫だよロミオ。君の仲間が言っつていただろう?お前が消えたのは魔物に食われたからだ」と

ますます震えて座り込む彼に私は続ける。

「私は君達と魔物を探す……不意打ちを受け私とロミオ以外が死んでしまうがロミオが私を救うために魔物と相打ちになる……そうだろう?」

彼に近づきながら話を続ける。

「ただまとわりつくだけならばここまでする気は無かった……しかし彼女達の命に手を出そうとするだけでなく私に手を出して来たのなら……生かしてはおけない」

「ば、ばけもっ……」

言い終わる前にロミオの頭が地面に転がる、その顔には恐怖が張り付いている。

彼が最後に見た光景は、全身が黒い霧に覆われた人型が髪をなびかせる姿だった筈だ。

「そこまで怖いだろうか？」

私はそう呟いて処理を始めた。

その後私は魔物を見つけ彼らの死体の場所で戦いそれらしくした後、殺した魔物をしまつて帰った。

その後は大体私の考えた通りに事が進んだ。

ギルドに戻り奇襲されピンチになり、ロメオ達と共に戦い、最終的に彼らが命を捨てて助けてくれた事を出来るだけ矛盾が無いように語った。

討伐したハンドスネイクを見せた事で討伐の成功と私の証言が信用され、戦闘を行った場所に調査メンバーが送られる事になり、ぐちやぐちやになったパーティーメンバー五人の死体が発見された。

これによってリングガイルに魔物の討伐の完了とロミオ達五人の名誉の戦死が報告される事になりこの件は終息を迎えた。

そして私はその戦いを守られたとは言え生き残った事でギルドからランク6への試験を受けに他の町へ行く事を勧められた。

「リングガイルに行こうと思う」

「リングガイルですか」

私は現在ギルドのカウンターで男性職員と話している。

ランク試験をどうするかと職員に聞かれ、受けると答える则该町の周囲で受けられる町を教えてください、その中に奴が話した町があった。

「危険度相応の腕を持つ者達が居るのは当然ですが、あまり治安は良くありません。荒い者達も多いらしいですよ？」

「大丈夫だ。力で分かせれば大人しくなる」

そう言うと苦笑いする職員。紹介状を受取りくれぐれも気を付ける様に言われてギルドを出た。

家に帰ると、我が家の三人娘がリビングで待っていた。

「行くの？」

「アリアナが聞いてくる。」

「ああ、行ってくる」

「そっかー、クレリアちゃんが上に行くのは嬉しいけどさみしいなあ」

ルフレが頭の後ろに腕を組んで椅子にもたれる。

「貴女なら平気だとは思いますが……気を付けてね？」

ユリアルマは心配そうに微笑みながら私の手を握る。

「私がどうにかなる事はまず無いと思うよ」

そう言うと三人は、そんな感じの事を言うと思ってた、と笑った。

それから半月ほどゆっくりし、出発の少し前に彼女達に家を好きに使っていい事、他の誰かを連れて来る時の決まりの取り消しを伝えてウルグラードを旅立った。

目指すはリンガイル、あんな奴等を送ってきた町を見に行こう。

道中は特に何かある事も無く馬車に揺られていた、そうして十日程の旅を終えて私はリングイルに到着した。

何というか……発展している途中と言った感じの町だな。

そのまま町に入ると冒険者達が多く目に付く、袋にもマジックボックスにも入れずに血抜きをした魔物の死体を引きずって歩く者も居る。

私は近場の店で宿のおすすめを聞いて向かう事にした。

「らっしえい！」

宿の親父の野太い声が迎えた。私はとりあえず一か月程部屋を取る事にし、宿の親父に町の事を聞いてみた。

「この町の事だあ？……聞きたいなら……分かるだろ？」

指をすり合わせる親父、なんだ？

困惑していると親父がしびれを切らした様に言う。

「金だよ金……情報はただじゃねえんだ」

そう言う事か……私は黙って小銀貨をカウンターに置く。

「へっへ、ありがとよ」

そう言うところの町の事を教えてくれた、危険度7の魔物が多く生息する荒野と森に隣接している事、その魔物の商品の輸出で町が成り立っている事など。

「所で……ホレス・コルマノンを知っているか」

「サービスで教えてやるよ……知っているも何も、この町のホレス商会の主だよ、町一番の商会で、実質この町の統治者みたいなもんさ」

私は宿の親父に礼を言って鍵を受け取り二階の部屋に向かった、特に言う事もない普通の部屋だったな。

次の日、私は宿の親父にギルドの場所を聞いて向かった。

送って来たのはギルドのはずだ、ギルドが関わっているのなら少し大事になりそうだな。

「まだチビだが良いなああの女」

「ちっ、若けりやいいいってもんじやないよ」

ギルドに入って聞こえて来たのがこれだった、確かにウルグラーデに比べるとだいたいぶ柄が悪い、力で解決するならその方が楽かもしれないが。

「ランク6の試験を受けに来た。これがウルグラーデギルドの紹介状だ」

ギルド職員男性に手紙を渡す。

「見せてもらうよ……確かに受け取った」

そう言うのとランク試験の準備らしき書類を書き始める。

「所でギルド長に会う事は出来るか？」

「いきなりは無理だよ」

こちらを見る事無く言う。

「前にウルグラーデに討伐応援で来て死んだ冒険者の事を話したいのだが」

そう言うのと、動きを止めこちらを見る。

「関係者の方で？」

そう言う彼に答える。

「ああ、私は彼らの友人なんだ」

実際は違うが。

「お待ちください」

そう言つて席を立ち二階へ上がって行った、しばらくするとこちらへ戻り、応接室に案内された。

応接室で待っていると、屈強な強面の中年男が入ってきた。

「よく来てくれた」

私が立ち上がると中年男が言う。

「時間を作ってくれてありがとう。私はクレリア・アーティアと言
う」

「リングイル冒険者ギルド商会ギルド長、ランドレイ・ラムタスだ
……よろしくな」

握手をしながら言葉を交わす、手の大きさがだいぶ違う。

お互い席に座った所で質問をする。

「早速だが、ロミオとそのパーティーメンバーの事なんだが」

「……ああ、惜しい奴を無くした、これからもっと上に行ける奴だと
思っていたんだ」

辛そうに言うランドレイ、確かに実力はあった方か？

「私は彼のこっちでの活動をよく知らないんだ、どんな感じだった
んだ？」

「そうだな……荒くれ者が多いこのギルドで丁寧な言葉を使い、
困っている冒険者に手を貸していた良い奴だった」

そう言っって目を閉じる彼……おかしい、私が知っている奴と全く違
うぞ。

「……他のメンバーはどうだ？」

私の言葉に目を開けると腕を組みながら話す。

「メンバー同士仲が良く、ロミオが人助けに走ってもお前らしいと
笑っつて行く良いメンバーだったよ」

違和感が凄いな、これは同一人物の話か？仕方ない……彼が知って
いるのかが分からないと困るからな。

私は軽く自白誘導魔法を彼にかける。

「何か彼等の事で知っっている事は？」

彼は考えるようなしぐさをして話す。

「そうだな……事故などに関わる事が多少多かった気はするな、後
ホレスさんとはだいぶ懇意にしているよよく呼び出されていた事くら
いか？」

ほう……後は何か無いか？……そうだ、奴らの一人が応援にはよく
行くとかそんな事を言っていたよな。

「……そうだ。救援依頼があるとホレスさんからもロミオ達を送る

様に言われるな、彼の人柄を考えれば向いているからそのまま頼む事が多い」

その事を聞くと答えてくれた。

「ではホレスの周りでは何かあったか知っているか」

「……関係ないだろうが最近だとホレスさんの商會が妙に警備を強化した事か」

警備を強化した……何故だ？

「最後に……ロミオがしていた事を知っているか？」

「していた事？よく人助けをしていたが……」

「そうか、ありがとう」

そう言つて魔法を解除する。

「彼らの事が聞けてうれしかった、ありがとう」

そう言つて軽く頭を下げる。

「いや、構わない……彼らの分まで生きてくれ」

そして私は応接室を後にした。

私は宿に戻り、部屋で聞いた事を整理する。

ロミオはホレスと繋がり誘拐をしていた……これは彼らのやってきた事と証言でホレスの名前が出た時点で予想出来る。

更に場合によっては町の周囲の事故などのいくつかも彼らの仕業の可能性もある……と。

そして、ギルド長のランドレイはかなりの確率で彼らの裏の顔を知らない。

ギルドが関わっていないなくて良かったな、ギルドごと潰す事になる所だった。

となると、ホレスの所で証拠を見つけてるのが一番早いかな？

翌日、取り敢えずホレスの商会を見てみようと思いを聞いてやって来た。

広い敷地に屋敷が見える。確か敷地内に一部の者しか入れない場所があると言っていたな。

普段を知らないからいまいち分からないが、確かに警備の人数が多いと言えなくもない……気がする。

商会周辺を少し回った後、ギルドに行くと言われ職員に呼び止められた。

「なんだ？」

「クレリアさんですね？……ランク試験の手続きが途中なんです
が」

忘れていた……途中でギルド長に話を聞いてそのまま帰ってしまっただ。

「悪かった、すぐに行く」

私は謝ってカウンターに向かった。

その後私はランク6になった。試験は特定の魔物の討伐、手早く始末してランクを上げた、あまりの速さに職員が驚いていたが。

早速今夜にでもホレスの所に忍び込んで証拠を探そう。

そう考えギルドを出ようとする、三人の男が行く手を遮ったので、避けて通ろうとすると私の前に出てくる。

「邪魔だ、どけ。それとも何か用か？」

「ちよつと付き合ってくれよ」

「悪いようにはしねえぜ」

「こんな美人見た事ねえ……楽しみだ」

三人が言う、最後の奴は何を考えているのか目が怪しい。

「断る」

人気の無い所ならともかくこんな所で来るとは周りが見えていないのか。

「そう言うなよ」

手を伸ばす男をかわすと、男達の後ろから声がかかる。

「……何をやっている貴様ら」

何処かに行っていたのか入り口から入ってきたランドレイだった。

「ぎ、ギルド長!?!ちよつとこいつが生意気な態度を取ったもんで」

男の一人が言う。

「人の行く手を無言で遮って無理やり連れて行こうとするのは良いのか?」

そう言うランドレイが眉間に皺を寄せる。

「貴様ら、むやみに絡むのはやめろ!」

そう言う私に聞いてくる。

「ランク6になったのか?」

「つい先ほど」

そう言うランドレイは皆に言った。

「彼女もランク6の冒険者だ。ランクが下だと思って手を出せばお前達でも怪我するぞ」

「ランドレイ、絡まれないようにするにはどうすればいい?」

そう聞くと、彼は言った。

「実力を見せる事だな」

「分かった。何処かに訓練場は無いか?こいつらをこ……倒せば皆認めてくれるだろう?」

そう言うとき、彼は悩みながら言う。

「手っ取り早くはあるが……大丈夫なんだろうな?」

私はこちらを見ながら言う彼に頷いた。

それから訓練場に行き、戦う事になったのだが他の冒険者もかなり見物に来た。

ギルド長も居る、来たばかりの私が気になるのか？

「五人に増えてるな」

私の前に居る男達は三人から五人に増えていた。

周りからは、一人に五人か弱虫が、とか、きたねえまねすんな、などと声がしている、本当に実力が基準なんだな。

「ちっ、仕方ねえ……一人ずつにしてやるよ」

あまりにも周りからうるさく言われるのが嫌になったのかそう言ってくる男の一人、私はわざと大きな声で言った。

「全員で来い。お前達程度は問題無い……ハンデとして武器も使わないでおいてやろう」

そう言って武器をマジックボックスにしまうと周囲が一瞬静かになり、その直後周囲が歓声に沸いた……こいつら何なんだ。

「あの世で後悔しろやあ！」

明らかに怒り心頭の男達が剣を抜いて掛かってくる。

微妙な戦いでは絡んで来る者が居るだろうからそこそこ力を見せておけばいいか。

切りかかってくる五人の剣を躲し、受け流し、弾く。

手で、膝で、足で……歓声に沸く周囲の中、ただひたすらに躲し受け流し続ける。

一時間後。周囲の歓声は無くなり静まり返る中、私は疲れ切っている男達の攻撃を避け続けていた。

「な……何なんだ……このガキ……」

「くそっ……当たらねえ……」

一時間攻撃していられるこいつ等も弱くは無いららうな。

「そろそろ気が済んだか？」

戦いが始まる前と全く変わらない私が言う。

「ぐっ……」

汗をかき疲労が限界に近い男達は言葉に詰まる。

「降参しろ、私の力は分かっただろう?」

そう言うのと男の一人が私を睨んで言う。

「ふざけんな!このまま降参して終われるか!俺達はこのギルドの冒険者だ!……来いよ!やってみやがれ!」

他の男達もよろめきながらも構える、そうか……。

「分かった」

そう言いながら魔法で適度な空気の塊を五人に同時に打ち出し吹き飛ばした。

吹き飛ばされ、気絶したまま地面に転がる男達、私はそれを見て周りに言う。

「誰かあいつらを見てやれ、死なないように加減はしたが万が一があるからな」

誰も動かずに静まり返った中、私はギルドを出て宿に帰った。

翌朝、私は少しやりすぎたのではないかと考えていた。

あれぐらいならちようど良い感じだったと私は思っているが……奴らも一時間以上戦っていられた訳だしな。

しかし帰り際が静かだったのが気になる。まだこの町には用があるのに何かあったら面倒すぎるな。

どうなるかと思いつながらギルドに入る、すると周囲から声がかける。

「お嬢、依頼見に来たんすか?」

「お嬢!狩り行きましよう!」

「お嬢、今度アタイに戦闘教えてよ」

周囲からかかるお嬢の声……昔何処かで似たような事があった気がする。

こうして多少やりすぎたような気がした思い付きの絡まれない為の作戦は、思った以上に効果を発揮し冒険者の皆に受け入れられた。

「お嬢、どこ行くんです?。」

「食事に行くだけだ」

「もしよければお供しますませ?。」

「必要無い」

それから数日後、受け入れられたのは良かったが……道を歩くだけで冒険者達が話しかけてくる、なつかれるのは良いが少し面倒だ。

私は食事に行くために道を歩く、商會に侵入するつもりだったのにダラダラと伸ばしてしまっている。

店に着き注文した料理を食べていると一人の女性冒険者が私を見た。

「あ、お嬢居た」

冒険者の女性が食事をしている私に近づいてきた。

「ギルド長が来て欲しいってさ」

「分かった。食べ終わったら行くよ」

そう言う彼女は帰って行った。

「さて、わざわざ呼び出してすまないな」

「構わない、用は何だ?。」

食事を終えた後ギルドにやってきた私は応接室に案内された。

「少し気が付いた事があったな……」

「気が付いた事?。」

そう言う正面に座るランドレイは私に聞いた。

「今更気が付いたんだが……紹介状にはウルグラーデからランク6試験を受けに来たと書いてあった」

「そうだな」

そう言う彼は念を押すように聞いてくる。

「君はウルグラーデの冒険者で間違いないんだな?。」

「ああ、そうだ」

そう言うとは彼は厳しい顔をして言った。

「ウルグラーデにハンドスネイクが現れて応援が呼ばれた……先日あれだけの戦いが出来る君が居たのに」

思わず顔が反応するのを抑える……失敗した。

そうだ……あれだけ出来てハンドスネイクが倒せない訳がない。

「あの時は既に応援に彼らが向かっていたので私が倒してしまうと彼らが無駄足になってしまおうと思ったんだ」

そう言うとは彼は椅子に座り直し話す。

「君は彼の友人だと言った、ならば彼らの性格も知っていたはずだ。彼なら倒してしまっても早く安全になったのならそれでいいと笑って答えるはずだ」

私は彼らのここでの生活態度を知らなかったからな……。

「所で……彼らが救った冒険者の男は元気にしているか？」

突然聞いてくるギルド長。

「ウルグラーデで今も元気にしているよ。彼らの分まで生きると言っていた」

そう言うとは彼は座ったまま身構えて言う。

「すまないがお前をこのまま返す訳にはいかなかった」

彼の様子がおかしい。

「……なぜだ？」

何も言わず彼は一つの書類を私の前に投げ渡した。

「それはウルグラーデギルドからリングイルギルドに来た報告の手紙の写しだ」

私はそれを読む。そこにはあの討伐の細かい経緯が書かれていた読み進めると一つの文が目に入った。

ロミオ・シングとパーティーマンバーと思われる名前が並び……その後、以上五名は案内を頼んだ冒険者の少女を守り魔物と相打ちになり死亡とある。

これは、もう駄目か？ 私はさつき男と言われて普通に答えてしまった。

報告書に書かれている事を完全に忘れていた。

「今のは勘違いだ」

自分でも信じない言い訳だな。

「そうか。では止めを刺してやろう」

無理な言い訳を言う私にかれはもう一枚手紙を出した。

「これはウルグラーデのギルド職員が個人的に私宛に出した手紙だ。二日前に届いた」

手紙を読んだ私は諦めた。そこにはクレリア・アーティアと言う少女がランク6試験を受けに行く事、先の討伐の生き残りである事が書かれ、どうか配慮してあげて欲しいと書かれていた。

「くつくつく……」

思わず笑う私、まさか止めが人の良心による物だとは……。

「さて、これでお前が嘘をついている事が分かった訳だが……」

気にしていなかったが彼は完全装備だ、殺す事も考えていた訳だ。

「ああ、私は逃げたりしないぞ」

「俺を殺すか？ただでは負けんし下にも冒険者はたくさんいる、いくらお前でも逃げられんぞ」

腰を浮かせ剣の柄を握る彼に私は椅子にもたれてリラックスしながら言う。

「いや、そのつもりは無い。嘘をついていたのは私だ、済まなかった」

素直に謝ると、彼は構えは解かなかったが毒気を抜かれた様になる。

「なぜこんなことをした？彼らを殺したのはお前なのか？魔物もお前が連れて来たのか？」

一気に聞かれてもな。

「聞いてくれるのなら話すが……私の言葉を信じられるのか？」
そう言う私を見つめる彼、しばらくするとため息をつきながら言う。

「……聞くだけは聞く」

「そうか、お前には信じたくない事だろうか」

そう前置きして話す。

「まず簡単な事を答えておこう。魔物は自然に現れたものだ、犠牲者が出るまで私も居る事は知らなかった」

「……そうか」

疑っているのか信じているのか。

「どうしてこうなったかだが。彼らが私と私の知人を誘拐し玩具にした上で金持ちに売ろうとした事が原因だな」

「……何を言ってる?」

理解出来ていない表情だな。

「彼らはこの町のホレス商会と繋がり裏で美しい女性を死んだ事にして誘拐し、金持ち連中に売っていた」

まあ私の予想だが。

「待って待って……」

彼は私の言葉を信じてはいないだろうな。

「彼らに聞いた所、ホレス商会の敷地内に売買専用の場所があると聞いてここに来た」

彼は黙って聞いている。

「以前お前から聞いた、奴らが事故に多く関わっている事、恐らくあれのいくつかもその為だと思っている」

「……信じられんな」

そう答えるランドレイ。信じて貰えなければホレス商会の屋敷に強行突入して証拠を持ってこようか。

「では聞くが、その事故……美しいと評判の女性が犠牲になっている事が多くは無かったか?」

詳しくは知らないが私の予想が間違っていないのなら……。

私の言葉を聞いてピクリと体を震わせるランドレイ。

「心当たりがあるんじゃないか?」

何も言わないランドレイ。

「私は証拠を見つけようと思っている」

彼は黙って聞いている。

「……私はお前も奴らの仲間では無いかと疑っているが」

「ふざけるな！そんな事してたまるか！」

黙っていた彼はそう怒鳴る。

「お前は仲間では無いのか？」

「当然だ！」

心外だと言いたげなランドレイ。

「あんな奴らを送ってきたギルドの長を信用しろと？」

「ぐっ……」

痛い所を突かれた彼が呻く。

「……お前の言っている事だつて本当か分からない」

「お互いに信用出来ない訳か」

そう言ってお互いを見る……しかし。

「私はお前が関わっていないのは知っているけどな」

「……どういう事だ？」

彼が疑いの表情で私を見る。

「初めてあつた時ちよつとな」

「……何をした？」

咎めるような表情で彼は私を見る。

「悪いとは思っている。ただお前も関わっていたらギルド事潰す事になるだろう？だからハッキリさせておきたかった、害は無い」

彼は溜息を吐いて構えを解いた。

「ん？信用してくれたか？」

「完全には信用していない……ただお前が嘘を言っているようは見えない」

そう言つて座る彼。

「良かった、私もお前を殺したくは無いからな」

彼は好感が持てる。必要で無いなら殺したくは無いよな。

「……出来るとでも？」

「出来るぞ？」

私を睨みながら言うランドレイに思わず返してしまった。

「まあそれはどうでも良いんだ、それよりも証拠を見つけないとな」
睨んでいた彼が表情を戻し顎に手を当てて言う。

「証拠か、そうだな……それさえあればすべて解決するが」

「話は簡単だ。私が忍び込み証拠を探してお前に渡す、そしてお前が公開する」

「俺がか？」

疑問の表情を浮かべる彼だが、私の目的はそれじゃないからな。

「私はあの連中を送り込んできた奴を殺せれば良いんだ、証拠は……そうだな……ついだ」

何とも言えない表情のランドレイ。

「あの強さといい言動といい、多少おかしな娘だと思っていたが……思った以上に危ない奴だなお前は」

頭を押さえながら言う。

「何を言う。私に不利益をもたらさなければ何もしないぞ」

「……自分に都合が悪い時はやるって事じゃねえか」

そうやって彼はソファーにもたれる。

「当たり前だ、お前は自分の大事な物が壊されるのをただ見ているのか？」

「抵抗するに決まってるだろうが」

私の言葉に体を起こし彼は言う。

「そう言う事だよ」

彼は私の言葉に僅かに笑った。

「お前はまだ十五だよな？いつからこうなったんだ？」
苦笑いしながら聞いてくる。

「私は生まれた時から私だよ、たとえ時間が私を変化させても」
「生まれた時からそんなだったら親も苦労しただろうな」

そう冗談めかして言う。

「彼女はいつも笑って傍に居てくれたよ」

そう……彼女は私の母親でもあったからな。

「居てくれた……か」

彼は呟くように言うと話を変え、そのまましばらく二人で語り合った。

数日後、私はホレス商会の敷地に侵入していた。
ランドレイとはそれなりに仲良くなった。

あの話の後彼は私が話した事が本当だった時のために準備をする
と言い、侵入を待つて欲しいと頼んできた。

私は彼の頼みを受け準備の終了を待ち、今日侵入する事になった。
正直透明化、不可視の魔法などがあればぶつかったりしなければま
ず見つかる事は無いと思う。

鍵など私の前では何の意味も無い。

スムーズに屋敷に侵入した私は何か書類の様な物を残していない
かを調べ始める。

そして豪勢な扉の前を通った時、私の聴覚が声を拾う。

「ホレスさんいつまで警備を強化しておくんです?」

「……そうなの、念の為あと一か月はこのままにしておく」

「仕事ですから構いませんがね。聞いていいなら聞きたいんですが
……どうして急に?」

……いた、証拠を見つけてからと思っただが見つけたのなら殺そう。
色々聞き出してからな。

「……ロミオ達の事だ」

「あいつらがどうしたんです?」

「死んだ。ウルグラードに討伐応援に行つてハンドスネイクに殺さ
れた」

「は?ハンドスネイク一匹に?」

「案内をした冒険者の少女を守つて名誉の戦死をしたと報告があつ
た」

「名誉の戦死い?あいつらが?表じゃ上手くやつてるがその状況で
誰かを助けて死ぬような奴らじゃないでしょう?」

「ワシは奴らは魔物にはなく何者かに殺されたと思うておる……
例えば守られた少女とかの」

「あの五人を殺れる奴……いや、それより誰が……ギルドは考えら

れない……ですかね？」

「まずありえんだろうの、ウルグラーデギルドにそのような事をする連中が居るとは思えん」

「誰かに殺されたのなら奴らが俺達の事を洩らしているかもって事ですか……」

「そうだ、ずっと気にしている訳にもいかんがその何者かが来る可能性もある」

そういう事だったのか。なぜ警備が強化されたのか理由が分からなかったからすつきりした……こいつらはもういらぬな。

私は部屋に防音と物理的な結界を施して部屋の中に入って行った。

「こんばんは」

男……恐らく傭兵の槍を持った男が構えてホレスのそばに移動した。

ホレスと思われる太った男はオロオロしているだけだ。

「……何処に居やがる」

そう呟く男。姿を消したままだったな、私は魔法を解除して姿を現す。

「ホレス・コルマノンだな？」

「ち、違う……」

ん？私はホレスと思われる太った男に自白誘導をかける。

「ホレス・コルマノンだな？」

「……そうだ」

先程と同じ質問に答えるホレス、私は魔法を解除した。

「俺を無視するたあふざけたガキだ！」

私に接近し槍を突こうとする男……こいつは必要ない。

「不法侵入だ！死んでもらう……」

私が髪の本を振ると、彼は言葉を言い終わる前に頭を地面に落とした。

「っあ…ひいっ」

ホレスは腰を抜かして座り込み、床を濡らしている。

「……色々話そうと思ったがもういいか」

ホレスのその姿を見た私は一気に冷めてしまった。太った親父の失禁などこれ以上見たくない。

それでも聞く事は聞いておく。

彼に自白誘導魔法をかけなおし、証拠や現在の女性の居場所を聞き出してから首を斬り落とした。

事の顛末としては……ホレスを始末した後、証拠の一部と捕まっていた女性達をギルドへ私だとばれないように渡し、ランドレイが向かって残りの証拠を回収した。

その際のランドレイの顔はそこそこ酷かったと思う。

ホレス商会は解体され、証拠の書類によつて各町の女性を購入していた者達と誘拐に手を染めていた冒険者や傭兵が罰せられた。

販売され生きていた女性達と死んだとされて捕まっていた女性達は解放され関係者と共に喜びの涙を流した。

各町は突然の事件に暫く荒れ、冒険者が関わっていた事でギルドは立場を悪くした。

冒険者は正義の集団だと思っている者が多かったのは意外だったな、何処にだって犯罪者くらい居るだろうに。

創立が英雄と呼ばれたルランド・カリスなのが原因か？

「あー……」

私が事件を公にしてから半年。色々な処理や対応に追われたランドレイが応接室でうなだれて声を上げる。

私はソファに座つてその姿を見ていた。

「疲れているようだな」

「……ああ」

彼の場合、体力的な物よりも今まで気が付かず犯罪者の好きにされていた事実の方が効いたらしい。

その事実を忘れる様に奮闘し、ようやく事件が落ち着いたのだ。ギルド職員もかなりきつかったに違いない。

「丁度良かったクレリア、頼みたい事がある」

彼がうなだれながらも言ってくる。

「なんだ？」

「この町の責任者になって欲しい」

サラツというランドレイ。

「はあ？」

おっと、いきなりの事で思わず声が出た。

うなだれているが彼の目は真剣だ、なぜ私が？

「子供がそんな物になれるか」

「なれる」

そう言った私にはつきりと断言するランドレイ。

「言ってみろ」

そう言うと彼は話し始めた。

「この事件を解決したのがお前だとばらす。ギルドの連中もお前の言う事ならかなり素直に聞く、これだけの功績があれば町の住人も受け入れるはずだ」

「何を言っているんだお前は」

私のした事をばらすと言った彼に言う。

「頼む、まとめられる象徴が要るんだ」

「事件を解決した功労者として祭り上げられると？」

この町はギルドと商会が繋がり犯罪に手を染めていた中心地だ。そのせいで他のギルドより立場が深刻だ、ランドレイが知らなかった事など関係無い。

「頼む！俺では駄目なんだ！経営は周りの者がやる、ただ町の長として就任してくれるだけで良い！」

思い切り頭を下げるランドレイ。

町の経営……長か。

この辺りで趣向を変えるのも良いか？今なら簡単になれるみたいだしな。

「分かった、なるよ。面白いかも知れないしな」

「本当か!?ありがとう!細かい事は任せておいてくれ!」

彼は頭を上げ礼を言ってくる。

「しかしこれだけの事が出来る力といい考え方といい……十五歳とは思えないな」

苦笑いしながら彼が言ってくる。

「まあ、十五じゃ無いからな」

「はっ?」

その後、本当は十五では無い事を話すと彼は頭を抱えて唸ってしまったが、聞かなかった事にして十五と言う事になった。

その後もウルグラードのギルドと私の事で多少騒がしくなったが、こうして私はリングイルの長になった。

私がリングイルの町長になって十年が過ぎた。

町はそれなりに大きくなり私は気まぐれに町の経営に関わりながら町の発展を楽しんでいたが、この十年で変わった事もある。

それは奴隷が生まれた事だ。

魔法が浸透するにしたがって魔法の力がある者が無い者を差別し始めた、それはこの十年で広がり各町に奴隷が生まれた。

待遇は様々で家畜の様に扱う者もいれば通常の雇用者と変わら無い扱いをする者も居る。

魔法と言う絶対的な力の差によって奴隷達は押さえつけられ、各町の有力者は奴隷を逃がさない為の防壁や、私兵団を作り脱走を防ぐようになった。

そんな中、私が居るこの町は奴隷と言う身分は存在しない。

町人は奴隷が欲しいかもしれないが冒険者達は奴隷を作ろうとしなかった。

この町の力の中心である彼らが反対だった事が影響して今の所誰も奴隷を所有していない。

まあ恨みから戦闘中に裏切る者も居るからな。奴隷など作っても使い道が無い上に信用出来る訳がない。

そういった事もあり他の町からたまに奴隷が逃げてくる事がある。町の運営をしている者達が受け入れたりしているうちに町が大きくなっていた。

以前に現在もギルド長をしているランドレイに奴隷について聞かれたが、見知らぬ誰かに対して思う事は無いと答えた。

彼は私らしいと苦笑いしていたな。

今も奴隷の話題は町の会議で持ち上がる。

やはり奴隷が欲しい者は一定数いるようで、こうして久しぶりに出席した会議でもどうするか話している。

「町長はどうですか？」

運営者の一人の男から聞かれる。

「以前ランドレイに聞かれたが答えは変わらないな。見知らぬ誰かに思う事は無い……大体私の判断基準は私に不利益をもたらすか、もたらさないかが大きい。どうしようと私に不利益が無いのなら良い、後は私の知人が奴隷になっていたら助ける位か」

「つまりどちらでも良いと言う事ですね」

そう聞いてくる男。

「違うな」

「……どういう事です？」

疑問を浮かべる出席者達。

「お前達は奴隷を作る事と作らない事、私がこのどちらの方針でも良いと思っっているようだな」

頷く彼ら。

「私は奴隷制度自体に興味が無い。どう言えばいいか……そうだな……どうでもいい……この言い方が良いかな」

この町に十年いる間に私は少し攻撃的になっているような気もするな。

姿が変わらず長く生きている私も精神……心とでもいう物は様々な影響を受けて変わっているようだ。

「な、なるほど」

私の言いたい事が何となく伝わったのか出席者の面々は再び話し合いを始めた。

彼らが私の事を咎めないのは彼らはこの十年で私がこうである事を色々あつて知っているからだ、だから特に何も言っ来ない。

冒険者としてはランクが6なままだと言うのに今ではこの町で最強の町長だと陰で呼ばれているようだ。

後は子供町長とかな……聞こえているぞ。

今日は私の関われそうな話は無さそうだ、会議を抜ける事を伝え自宅へ帰る。

ウルグラードの家はかなり前に共に住んでいた三人娘に譲った。無事借金を返済したと手紙が来た時にウルグラードに行き、所有者の変更をして押し付けた。

今はこの町の町長になった時に貸し出された家に住んでいる。

ウルグラードの家程では無いが十分に良い家だ。

私は家のソファに身を沈め奴隷の事を考えた。

奴隷が発生した遠い原因であるケインも特に何も思っていないだろう。

こう言った事が起こる可能性をずっと教え込んできた、覚悟の上だっただろうからな。

そう考えていると、家の扉が叩かれた。

「町長ー？おすそ分け持ってきたよー」

「そうか、開いてるから入っておいで」

そう言うと少年と少女が入ってきた、少年は動物の肉の塊をぶら下げている。

「今日獣狩りに行ったんだ……でこれが獲物！」

そう言っって肉を持ち上げる、嬉しそうだな。

「そうか、守ってくれた冒険者の言う事はちゃんと聞いたか？」

そう言っって獲物を受け取る。

「うん！」

「嘘よ！彼っいたらまだ動くなっって言われたのに物音を立てて一度逃げられたもん、あたしも狙ってたのに！」

元気に答える少年とばらす少女、少年は気まずそうだ。

「良いか。その獲物が逃げる相手だから良かった……もし向かって来る獲物であつたら誰か怪我をしたかもしれない」

「うん……」

俯いて答える少年、この年なら仕方ないが何かあつてからでは遅いからな。

「だけど……絶対に譲れない事があるなら迷わず動け。譲れない事の為に強くなれ」

少年の頭を撫でる。

「う、うん……」

隣の少女をちらつと見て答える少年。ほほう……頑張る事だ。

「おねえちゃん……町長、私がこの肉でご飯作っても良い？」

少女が話しかけてくる。

「構わない、他の材料も好きに使ってくれ、後呼び方は無理しなくても良いぞ」

「うん……おねえちゃん」

そう言うと少女は恥ずかしそうに答えて笑い、キッチンに向かっていった。

「おい、肉を忘れているぞ。彼女に肉を渡してくれ……ついでに手伝ってやって欲しい」

私が少年に肉を渡しながら言う。

「え？……う、うん」

彼は肉を持ってキッチンに走って行った。

彼はその時、動くのか逃げるのか……。

しばらくキッチンから聞こえる騒がしい二人の声を聴きながら私はモー乳を飲んだ。

ここでの私は人間と森人のハーフと言う事になっている。

特徴は受け継がなかったが寿命は恐らく同じくらいあると言い、皆は納得した。

こんな簡単な言い訳を今まで気が付かないまま暮らしていたとは……気が付いた時私は自分に呆れていた。

これにより長期間一か所に滞在しても全く違和感がなくなり、気にしなくて良くなった。

少年達が獲物をおすそ分けしてくれた数日後、私はリングイルのモー乳販売店に向かっていた。

以前ウルグラードへ少し行った時にリングイルにも出せないかと交渉し、町長の立場を利用して試験的に店を出した。

それなりの数が売れそのまま正式に出店となり、今ではここで製品が買えるようになった。

「あ、町長。いらっしやいませ」

女性店員が声をかけてくる、頻繁に来るから店員も慣れた物だ。

そのまま飲むだけでなく紅茶に入れても良いし料理にも使える、私はそのまま飲むのが一番多いが。

「いつものと……今日は何かあるか？」

新しい製品があるか店員に確認する、ここの製品は美味しい。

「すみません、まだ開発中なんです」

申し訳なさそうに言う。

「大丈夫だ、急いで出来が悪くなったら困る。じゃあ今日はこのシュークリームを五個貰おうか」

取り合えず今日買う物を注文する、私は待っている間店員と話す。

「経営は問題無いか？」

「はい、特に何も」

製品を用意しながら答える。

これは町長として聞いておくべき事だ……多少はこの店が無くなると困るので潰れそうなら助けようと考えているが、あくまでも町の責任者として聞いている。

「いつものモー乳の大瓶五本とシュークリーム五個です、どうぞ」

「ありがとう」

金を払って製品を受け取り、ボックスに入れて店を出る。

家への道を歩いていると後ろから忍び寄る気配がある、そして私に手を伸ばした時その手をつかむ。

「あっ……」

その手は私のワンピースのスカートに伸びていた。

「懲りないなお前は」

そう言いながら少し握る力を籠める。

「あだだっ!!」

痛みに苦しむスカートめくり青年。

私の隙を狙ってやって来る……こいつは子供の頃から知っている。

成長したら言わなくなったが昔は私を嫁にするとか言ってたな。

「もう諦めろ」

「絶対めくる……俺の夢だ」

そう言っつて胸を張る青年、駄目だこいつ。

「私が言う所に言えば普通に犯罪者だぞ」

「だって町長良い年なんでしょ？」

そう言っつて私に返す青年。

「馬鹿者、いくつであろうと犯罪だ」

そう言いながら手を放す。

「くそー……いつかめくつてやるからな！」

掴まれた場所をさすりながら負け惜しみを言っつて逃げていく、私にかまっつて欲しいだけなんじゃないのかあいつ。

そんな暮らしをしていた時、恐らく人類の歴史に残る魔法が生まれた事を耳にした。

それは隷属魔法だ。

対象にかける事で命令を拒絶出来なくなり、主と設定された者に危害を加える事も出来なくなる。

もちろん魔力抵抗で破る事は出来る。しかしそれほどの差がある事など通常はまず無い。

これによつて元々魔法が使えない者は次々魔法がかけられ、遂には奴隷を使う側だった者にも使われるようになった。

まだ実際に見てはいないが隷属魔法は簡単にかけられるものではない筈だ、恐らく相手を捕らえ拘束していなければかけるのは難しいと考えている。

そして……その魔法を開発した者が町の者をひそかに奴隷として縛っつていき町を支配し、他の町へ略奪を行ったようだ。

奴隷達に落とされた町の住人は奴隷にされ、主とやらの支配下になつた。

かけられなかった冒険者の一部も流石に町を……更に言えば知り合いを多く含む奴隷達を相手にする事など出来なかったらしく、従うしかなかったようだ。

それだけなら事は簡単だった、他の町と力を合わせ攻め落としてしまえばいい。

だがその主とやらは隷属魔法の習得の仕方を各町の有力者にばらまいた。

そしてそれを手にした有力者達は何を思ったかその主の様に町を支配し、同じように他の町へ略奪を行ったのだ。

こうなればもう止まらなかった。町同士で争い合い奴隷とされた者達が死ぬようになり各町の間で戦争が始まった。

隷属魔法が開発されてからここまでであったという間だった。私の元にその話が来た時には既に戦争が始まっていたのだから。

「投降するべきだ！大人しく従えばきつと平気だ！」

「あいつらを信用するのか!?誰彼構わず奴隷にして他の町を略奪するような奴らだぞ!？」

「ここは冒険者の町よ。負ける事は無いはずだわ……戦いましょう」

それからすぐに流通が停止した。

今はこれからどうするべきかの会議なのだが……会議は荒れていた、何処かの町に投降しようと言う者、反対する者、徹底抗戦を選ぶ者。

「クレリア、どう思う……?？」

ギルド長のランドレイが私に聞いてくる。

ふむ……。

「これは私の個人的な考えだが良いか？」

そう言うとは彼は頷く。

「私としてはまず全力で抵抗し攻めてくる相手に徹底的に打撃を与

える。その後はこちらの要求を呑んでくれれば敵対しないと相手に伝える」

「それで？」

「何度でも繰り返し続ける、幸いこの町は魔物の生息域に近く何とか自給自足が行える場所にある。こちらが守りを固め一方的に犠牲が増えれば、その内悪戯に犠牲を出すよりも要求を呑んで中立にした方が良いと考え始めるだろう」

彼は黙って聞いている。

「最終的に他の町が全て誰かにまとめられてしまえば勝ち目はないが、下手に手を出すと予想以上の被害が出ると分らせる事が出来れば侵略ではなく取り込もうとするかもしれない」

続きを促す彼。

「この方法はこの町だから出来る方法だ。冒険者の数と質が一定以上無いと耐えきれずに終わる……それに今なら私もいるしな」

「戦力的に問題は無いんだな？」

彼は私に問う。

「今はどの町も敵対し合っている。二つ以上の町の戦力が攻めて来る事はまず無いはずだ、一つの町同士の戦力なら冒険者の多いこちらが有利だ……その上奴らはお互いが邪魔で私達に全力が出せない」

「それは？……そうか！」

私はランドレイに答える。

「全戦力を私達に向ければ他の町がその隙を突き攻めて来るかもしれないだろう？ 奴らは町に守るだけの戦力を残すしかない」

彼は頷く。

「そして出来るだけ討伐も行い食料を蓄え、薬品も作っておく、これからの為に」

そう言つて椅子にもたれかかり続ける。

「どうなるかは分からない。相手がどういった考えをしているか分からないから……私の考える通りかもしれないし、手を組んで来てしまうかも知れない。また別の何かが起こるかも知れない」

考え込む彼、私はもう少し続ける。

「……私も初めての事でこれからどう変化していくかは分からない」

どうなるか楽しみではあるが。

ここまで語ったが、私が話し始めてから周りが静かになっていた。

「町長」

誰かが私に言い会議に出ている者達私を見ている……これは私の言った事が採用されそうな気配がする。

「それでいきましよう」

「あくまでもお前達次第だと言う事を忘れるなよ？」

その後、敵が隷属魔法で縛られているだけの人間かも知れないと知っても方針が変更される事は無かった。

こうしてリングアイルの方針が正式に決まった。

方針が決まった後、私は席を立ち家に帰るとケインに念話をつないだ。

『聞こえるかケイン』

するとすぐに反応があった。

『はい、私も連絡しようと思っていました』

『そちらはどうだ？』

『ウルグラードはまだ無事です。私が居る事と貴女の弟子達が居た事、更に学校もあるためかこの町には全く手を伸ばそうとしていません、それどころかどの町も気を使っているようです』

流石にケインとその学校には手を出さないか。

『そうか、お前達の名と学校は有名だしな』

『リングアイルはどうですか？』

ケインは私がリングアイルの町長だと知っている。

『徹底抗戦だな、リングアイルに手を出すと痛い思いをすると獣達に教えなければな』

そう言うとき笑い声が聞こえる。

『師の事ですから心配はしていませんがお気をつけて』
『ああ、お前はウルグラーデと生徒達を気にしている』
そう言つて念話を解いた。

後日決定した方針を町に伝達したが反対は殆ど無く、実行が決定した。

「確認だ。パーティーごとに必ずまとまって戦い、囲まれないように動け」

ランドレイが町の広場で声を上げる。

この町に向かって来る奴隷と思われる集団、兵士と言うべきか、それが近づいてきていると報告があり、最後の確認をしている所だ。

「負傷者が出たパーティーは控えのパーティーと交代して帰還し、回復した後控えに入れ」

彼は続ける。

「指揮官は殺すな、俺達の力を伝えてもらう必要がある」

方針が決定した後、討伐と各種回復薬の量産、戦い方の訓練を徹底した、かなりの間戦い続ける事が出来るだろう。

「……徹底的に殺せ。そうしなければこちらの思惑通りに動くか分からないからな」

苦虫を噛み潰したような表情で言う。周囲の皆も良い顔はしていない、やると決めても良い気分では無いようだ、知り合いがいる可能性があるから分からなくはないが。

その他確認事項を伝えた後、ランドレイが私に質問する。

「クレリアはどうするんだ？」

「そうだな町長としてやるべきことをしようか」

「なんだ？」

そう聞いてくる。

「戦場を遊撃して皆を助けて回る。その後この軍の指揮官に手紙を渡してくる……心配するな、出来るだけ苦しまないように殺す」

薄く笑う私。

「……そうか」

ランドレイは表情を変えずにそう言って準備に戻った。

私はこの戦争の間はモー乳が手に入らないだろうと考えていたが、店主がどうせ仕事にならないからと店に残っている商品を全て譲ってくれた。

私が居れば町は守れる、少しは貰った製品のお返しをしよう。

「っ……」

「あがつ……い！」

私の剣とナイフが兵士の頭を落とす。

いまは戦闘の真っ最中だ、私はいつもの軽装と左手に女神のナイフ、右手にいつもの女神の剣を持っている。

私は敵の頭を斬り落としながら問題が無いか戦場全体を見ていた。魔法や弓などの遠距離攻撃を弾き、近場の敵を処理しながら移動していると二人負傷した三人パーティーがいた。

「くそっ！」

悪態を吐いて片手で敵の攻撃を受けている前衛二人と、二人が離脱できない為引くに引けない後衛……助けるか。

「今のうちに戻れ！」

彼らと対峙していた敵の頭を切り飛ばし、向かってくる敵を処理しながら言う。

「町長!?!」

「お前達は早く引け！交代だ！早くしろ！」

声を上げる私、その間も殺し続けている。

「す、すげえ……」

「森人と人間のハーフってあんな凄いの……?」

「……俺の知ってるハーフはあんなに強くねえよ」
後退している彼らの呟きが聞こえる。

交代が到着し私は移動を再開した、やはり完璧にはいかない。

それにしても敵の表情が悲し気と言うか苦し気と言うか……嫌そ

うな表情をしているな。

これは相手の剣を鈍らせる為か？私には何の効果も無いが。

更に移動すると前衛は敵の攻撃、後衛は魔法や弓に晒され防戦一方のパーティーが居た。

私は浮き上がり、空気の爆弾を複数同時に打ち出し彼女達に攻撃を仕掛けていた敵の頭を粉砕した。

「なにがっ……!?!」

突然敵の頭が爆散し戸惑う彼女達。

「まだいけるか!?!」

戦いながら声をかける。

「町長!?!」

「戦えるなら立て直せ！無理なら今のうちに交代しろ！」

「交代します！」

素早く良い判断だ。

「あんな正確で威力のある魔法、しかも同時にあれだけの数を……」

町長って何者なの……?」

そう彼女達の中の魔法使いが言っているのが聞こえた。

こうして敵を殺しながら冒険者達を助けていると敵の数が減って来た。

すると気配が一つ離れて行くのを私の感覚が感じた……私は勝敗が決した戦場をランドレイに任せ、気配を追った。

その後男を捕らえ指揮官である事を確認し、手紙を渡し町の支配者に渡す様に伝えて解放した。

町に戻り被害を確認する。外壁は魔法以外で早々壊れる事は無く、被害は少なかった。

こちらに死人は無し、これは最高と言ってもいい結果だ。

薬をそれなりに消費したが、次に相手が攻めて来るまで錬金術師達が奮闘してくれるだろう。

問題無く勝利と言って良い結果だった。

死人が居ないと言う事が何よりも良い。

死んでしまうとだんだん町の戦力が落ちて勝てなくなる、このまま予想通りに行けばいいが……。

改めて見ると数もそれほど多くは無いらしい戦闘時間も僅かだった。

後は……敵の死体の処理をしなければ。後は町の皆の精神が持つか……か？

敵に友人や知人が居た者も居るからな。その辺りは分かっていた筈だが何とも無いとは思えない、私ならともかく皆は人間だ。

結局相手は手紙を無視し再び襲って来たが、二回目を全滅させて手紙を渡したら三度目は戦闘では無く手紙を持って来て要求を呑んだ。

こうして戦いを繰り返した結果、リングイルはウルグラードと同様に手を出されなくなり以前のように取引する町が増えて行った。

それから二年後、リングイルとウルグラードを除いた近隣の町は一人の男によって統一された。

彼は自ら王と言う地位を作り名乗り始め、自らの統一した地域をルセリア王国と呼んだ。

奴隷魔法を作った男は統一の途中で死んだという情報も届いた。

ルセリア王国が出来て三年が過ぎたが、リングイルは今も独立を守っていた。

王国もこの魔物資源は欲しいようで特に問題無く取引をしていると運営者の一人が言っていたな。

ウルグラードもしっかりと独立を守っている。

自治権があれば王国に所属しても良いと思っっているらしいが、今の所は不可能なようだ。

王国の内情は詳しく知らないが今の所崩壊もせず国として成り立っている。王に認められた者達が……貴族だったか？そう名乗って各町を治めているらしい。

今では隷属魔法の弱点とも言える使用に時間がかかる事、時間をかければ解呪出来る事が広まっているため、誰彼構わず無抵抗で奴隷化されるような事は無くなった。

私はいまだにリングイルの町長をしている。

ルセリア王国からの独立を守る為の戦いが上手く行った事で、町の住人達にかなり気に入られている。

戦闘を見た者達には最強の町長と呼ばれた。

とにかく一旦周辺は落ち着きを取り戻した。いずれ国が力を付けた時にこの町もきつと吸収されるだろう、その時も上手くいいが。

「お願いします町長！」

「良いぞ。かかって来い」

私はあの戦闘を見た者達から話が広まりその強さが知られ、稽古をつけてくれと頼まれるようになった……ランクは6で止まっているけどな。

「ふっ!!」

短く息を吐き男が木剣で切りかかる。私はタイミングを合わせ懐に入り彼の攻撃範囲から外れた。

「っ……!?!」

懐に入られた男は咄嗟に距離を取ろうとするがもう遅い、私は軽く鳩尾に拳を打ち込む。

「ぐっおっ！」

彼は打ち込まれる瞬間に後ろに飛んだが衝撃を逃がしきれずうずくまった。

「鎧、……へこんでるんだけど……」

「私普通に殴られただけで死にそう……」

「なんで町長やってるんだろ……」

周囲から聞こえる声。かつて私が誘拐事件を解決した事を知っている者は知っているだろうが、ここまで強いとは思って無かったらしく独立戦争時の戦闘で私の実力に驚く者が多かった。

私の事を詳しく知らない者は私が冒険者ではなく町長である事が不思議なようだ。

「距離を取る以外の対応の方が良い事もある、よく考えておけ。後は……悪かったな、もう少し打ち合うべきだった。その鎧は修理してもらえ、話は通しておく」

「ありがとうございます……ごさいました！」

失敗したな、もう少し打ち合わないと訓練にならない。ここは生きのよい奴が多くて良い。

「よし、次！」

「よっしゃ！行くぜ！」

こうして時折冒険者達と一日中訓練に明け暮れる。急速に成長している者もたまにいて楽しく感じる。

「なんで子供が？」

久しぶりにギルドに来たら突然そう言われた。

この扱いは久しぶりだ、今ではこの町に私を子供扱いする奴などいないからな。

「馬鹿！謝れ！早く！」

「え？……どうしたんです先輩？」

先輩と言われた男が謝るように言うが良く分かっていない若い獣人女性。

「構わないよ。新しく町に来たのか？それなら知らないだろう」

「すいませんね。こいつ森の奥の獣人の村から出てきたばかりらしくて」

まだまだそういった村は残っているんだな。

「自己紹介をしようか、私はリングイル町長のクレリア・アーティアだ」

「ふえっ?!」

尻尾がピンと伸びて固まる彼女。

「おい、しつかり返事しろ」

男が促すと我に返る。

「は、初めまして！リムランと言います！」

そう言ってお辞儀する、尻尾が膨らんでるぞ。

「ようこそリングイルへ、ここがリムランの家になればいいけどな」

「ありがとうございます」

そう言って頭を上げる。

「町長。こいつあの錬金術の祖と言われるラムランが若いころ住んでた村の出身なんだと」

……ほう、あの村は今もあるのか。

「そうなのか……名前が近いのもその為か？」

「はい、いつの間にか近い名前を付ける様になったみたいです。村の場所は彼女が当時居た場所ではなく何度も移動しているみたいですけど……」

「そうか、活躍出来るの良いな……こいつを頼んだぞ」

「頑張ります！」

「任せて下さいよ」

頷いて言う二人の言葉を聞いて外に出た。

各地に点在している村もいつかは一つになるのかもな。

「町長ー。魔法教えてー」

街中を歩いていると子供達がまとわりついてくる。

周囲の大人や親達は微笑ましく見ているが……私も子供達の一部だと思われて居る気がする、私がいい歳だと知っているはずだが。

「ウルグラーデの魔法学校に行くといい。何も分からないまま行ってもしつかりと一から教えてくれるいい学校だぞ」

「町長も行ってたの？」

そう聞いてくる子供達。

「そうだな、少しの間行っていた」

そう言うと、歓声を上げる子供達。

「行ったら町長みたいになれるー？」

「ふむ……行ってみないと分からないな」

「えー……」

納得いかなそうな顔をしている。

「そう膨れるな、こんな事も出来るようになるかもしれないぞ」

「うわあー!!」

「おおー」

私は細かい凍らせた水を空に発生させる。キラキラと光を反射する光景を見て大喜びする子供達と周りの大人達。

「すいません町長」

「構わない」

親達の一人が話しかけてくる。

「実際、魔法学校はどうなんです？」

「そうだな……魔法や技術の学校として現時点で最高ランクに近いと言える。学びたいのなら間違いは無いだろう」

頷きながら聞く親達。

「ウルグラーデも独立しているんですね。戦争に巻き込まれたりしないかしら……」

そう呟く母親、確かにな。

「ケインも居るしそれぞれの技術の祖と言われる者達が居た町だ。早々そんな事は無いと思うが……絶対とは言えないな」

「……町長は校長とお知り合い？」

別の母親が聞いてくる。

「なんでそう思った？」

「え、だって呼び捨てだし……それに何と言うか、呼び方が慣れているというか……」

なるほど、他の者が居る時は校長と付ける様に言われた気がするな。

「まあちよつとな」

「あー、町長って森人のハーフでしたよね？その関係で？」

答えると、思った事を聞いてくる彼女。

「そんなところだ」

適当に答えると頷く彼女……そして私に近づき小声で聞いてくる。

「……もしかして町長ってケイン校長の娘さん？」

……私がケインの娘だと？

「期待に沿えなくて悪いが娘ではない。完全に他人だ」

そう答えると、周りの皆も何となく思っていたのか残念そうな顔をする。

期待されていたのか？

「ただの知り合いだ。あまり間違った噂を流さないでくれよ？相手にも迷惑だからな」

そう言っつてその場を後にした……そう言えばケインの奴、結婚と子作りはどうするのだろう。

家でゆっくりとモー乳を飲んでいたある日、以前気になった事を聞く為にケインに念話をした。

『ケイン、今大丈夫か？』

しばらくすると返事が返ってきた。

『はい、問題ありません……どうしました?』

『聞っておきたい事があつてな……お前、結婚と子作りはしないのか?』

そう言うとしばらく反応が無かったが、やがて声が聞こえてくる。

『……確かに私も二百歳後半に入っていると思えますし考えた事はありますが……』

やはり寿命が長いと歳を覚えない物だよな、それよりも一応考えていたのか。

『で?』

『で、とは?』

『言いたくないのなら無理には聞かないが、相手はいるのか?』

『今の所は居ませんね』

ふむ、森人や他の種族の女性も普通に居るはずだが。

『そうなのか』

『元々森人は寿命が長いせいなのか結婚に対する意識が薄いのですよ、それに子供も出来にくいですからね』

長命種が他の種族と同じ速さで増えたら確かに何か問題が起きそうだ。

『余計な事だったか。話はこれだけだ』

『いえ。お心遣いありがとうございます、師よ』

どうなるんだろうな。そう思いながら念話を切った。

こうして日々を過ごしていた私だが、再び世界が荒れそうな事が起きた。

ルセリア王国の国王がクレリア神教から名を無くし自由神教とする事、各町の神殿、巫女達を王国の管理下に置く事を決めて動き始めた。

私はそれを聞いた時「良くやった」と思ったが……自由の神を信仰

する信徒達には到底許せる事では無かったらしい。

王国で現状を受け入れていた信徒も反発し、奴隷化した信徒を匿い解呪しているようだ。

冒険者の中にもかなりの信徒が居た為に奴隷になっていた信徒が次々と解放され町の家屋をひそかに拠点として活動し始め、町の王国派と争いが起きているらしい。

これには私も驚いた。リングイルの信徒達はそこまでクレリア神教の話などしなかったし、熱心に信仰している様子も見られなかった。

信徒達がそんな事をする程に信じているとは思っていなかったのだ。

町の信徒達に聞いた所、実際に地上に現れた記録がある唯一の神である事と、自由と言う冒険者にある意味関係する神である事から冒険者の中ではかなり深く浸透しているらしい。

あまり話をしないのは、地上のどこかで過ごしている神が何も気にする事無く過ごせるように……と言う暗黙の了解があったらしい。

全く知らなかった。微妙に私に効果があったのもまた何とも言えなかったが……皆が事あるごとに私の話をしていたら私は嫌になつて人間を滅ぼす……まではしなくとも人の世界から長く離れていたかも知れない。

そんな訳でリングイルとウルグラデーを除いた王国所属の町は静かに内戦が起き始めている、宗教自体はどうなっても良いが巫女達に手を出す事は私が許さない。

時間が経てば彼女達が逃げにくくなる。

この町にもクレリア神教の神殿はある、私は数える程しか神殿には行っていないが……自分を祭る神殿に行く気になれないし、行っても問題が無いか聞く位だった。

私が普通に会いに行つて今の巫女達が私に気が付く事は無いだろう。実際数回行った時は名前と姿に触れられたがそれだけだ。

以前に巫女が私だと判断したンミナとの話がいまだに伝わっていれば信じるかも知れないが……神殿の絵になっているあの時の姿を

見せればいいか？

基本的に巫女は神殿に寝泊まりしているので、神殿が存在する町さえ分かれれば問題無い。

いざとなったらすべての町を回るか……。

いや……いつその事王とやらを殺してしまおうか。

他の者がまた王になるだけか？神として脅せば収まるかもしれないがそこまではやる気にならないしな。

国が出来て人の世界が変わり始めているのを壊してしまいたくは無いです。

色々と考えていると焦げ臭い臭いがし始めた……料理の途中だった。

国は壊さず巫女達が望めば助け、この町で受け入れよう。まずはこの町の巫女に正体を話さないとな。

考えをまとめ後始末をし始めた。

その後私はリンガイルの神殿の巫女達に話があると言い、夜に無人の神殿の大広間に全員集まって貰った。

私は防音と人払い、外部から見えないように視覚遮断をかけた。

「町長。この様な時間にお話とは何かあったのですか？」

集まった十人の中の一人が聞いてくる、さてどうしようか。

「今王国で何が起きているか知っているな？」

彼女達は暗い顔になり答えた。

「はい。クレリア神教から神の御名を消し去り神に仕える私達を国の……王の管理下に置くと……」

「そうだ。そこでお前達に聞きたい、お前達は各地の巫女達を救いたいのか？巫女達は……救って欲しいと思っっているだろうか？」

そう言うと、彼女達は顔を見合わせこちらを見ると頷き、言った。

「思っていると思います。神に仕える我々が神以外の元に行くなど考えられません」

「もし助かるとするならば……どうしたい？」

彼女達の一人が言った。

「あの国は神を捨てました。もし出来る事なら……どこかで静かに祈りを捧げて暮らしたいです」

彼女達を見ると反対は無い様だ……嬉しいが一步間違えれば狂信になりそうだ。

「この町で受け入れると言うのはどうだ？」

そう言うと言を横に振る。

「それはいけません。この町に巫女が集まれば国が狙うでしょう……それこそ国の力を集めて来るはずです。王はきつと神の巫女を従える事で自らを神の子だと示したいのだと思います」

なるほどな、王としての権力を神の子であるとしてさらに高めたいのか。良く考える物だ、感心する。

「国を滅ぼせるとしたら？」

「いえ、そんな事をすれば大勢の犠牲者が出ます……その中には神の信徒も居るのです……そのような事は望みません」

「そうか」

だがやる事は決まった、巫女達を助け人の手が届かない場所で過ごさせよう。

「分かった。私はお前達を助けよう」

そう言うと言彼女達は不思議な顔をする。

「いくら町長でもそれは……」

私は彼女の声を遮り話す。

「お前達が混乱を望まないのなら国を滅ぼす事はしない」

「町長？」

困惑する彼女達。

「巫女達は全て救い……助けよう」

彼女達に分かってもらおう為髪をふわりと広げる。

「町……長？」

「私の巫女達は渡さん」

巫女達は呆然と私の変化を見ている、手っ取り早く信じて貰う為に

神っぽくしないとな。

宙に浮かび、黒い霧を纏う。

そして彼女達が何度となく見たであろうあの絵を再現した。

「あ、貴女……様……は」

巫女達は既に座り込んで私を見上げている。

「久しいな我が子達よ」

そう言うのと彼女達は戸惑う。

「く、クレリア・アーティア様……？」

「町長……が？そんなまさか……」

「同じ名ですが……本当に……？」

「しかしあのお姿は……間違いなく……」

彼女達から声上がる。

「ご無礼を承知で申し上げます……初代様の事は覚えていらつしやいますか？」

……まだ伝えられているんだな。

「ンミナの事か……彼女は私が初めて心を許した人間だ」

そう言うのと彼女達は一斉に首を垂れ声を揃え言った。

「おかえりなさいませ、クレリア様」

彼女達は未だに仕えてくれるんだな。

「まさか町長が……っ申し訳ありません！」

呟きひれ伏す巫女。彼女達は随分神である私に偏ったイメージを
持っているな、巫女達の娘に膝の上で小便をされた事もあるんだぞ、
今更そんな事で怒るか。

「町長でいい、今の私はこの町の町長だ」

いつもの姿に戻りながら言う。

「し、しかし……」

困り顔の巫女達。

「こんな事が無ければこのまま人の世界で暮らすつもりだった……
それにお前達は私の巫女だ、お前達が私に仕える限り余程の事が無い
限り咎める事は無い」

まだ戸惑う彼女達、ここはあれだな。

私は両腕を開いて待機した。

「何年前だったかな……百年以上前だったと思うが……その時会った巫女にも同じ事をした、順番に來い」

「あ……あの？」

私は近くに居た巫女を自分から抱きしめ頭を撫でながら言った。

「私が助ける。お前達は私の子の様な物だ」

「う……ぐすつ……」

泣き出す巫女。

「昔もそうだったがお前達は私が抱きしめるとすぐ泣くな？」

こうして皆を抱きしめて、彼女達が落ち着くのを待った。

皆が落ち着くと彼女達の一人が言った。

「同じ名前の町長さんだと思っていたら、本物のクレリア様だったなんて……」

「ん？私が人の世界に紛れ込んでいる事は知っていたんだらう？」

そう言うのと恥ずかしそうにしなから答える彼女。

「知っていましたけど……本当に出会えるとは思っていませんでした……以前お姿を現したのは百五十年以上前なんですから」

そんなに……ああ、カミラとそれぐらい過ごしていたな。

「私は自分のやりたい事がある時しか動かない。お前達を見捨てたくないし国も滅ぼしたくなかったからお前達に正体を明かした」

そう言うのと私が質問をした巫女が聞いてくる。

「ではもし……もし私達が国の滅びを望んでいたら……貴女様はどうしましたか？」

「滅ぼしていたな」

彼女は驚いた表情をする。

「しかし、先程滅ぼしたくなかったと……」

「国などまた出来る」

そう、国はまた待っていれば出来るだろう。

私の今の優先順位は彼女の方が上だ。

「お前達の望みを叶える方が優先順位が上だった。それだけだ……逆に言えばいくらお前達の頼みでも私はその気にならなければ行う事は無い」

「クレリア様は自由な方ですね」

彼女は目を瞑り言う。

「自分勝手なだけだ。期待外れだったか？信じていた、仕えていた存在がこんなもので」

「いいえ……自由の神らしいと思いました」

彼女はそう言って目を開ける。その瞳には絶対の信仰心が宿っているように見えた……この子達は私が何を言っても肯定するんじゃないか。

「やっぱり王と町の貴族だけでも殺そうと言うと」「やめて下さい」と止められた……否定も出来て安心したよ。

彼女達は他の神殿と良く連絡を取り合っていたらしくルセリア王国内で神殿がある町を教えてもらった、地図と合わせれば救出は簡単だな。

彼女達に会う度に説明するのは面倒だからまずはマジックボックスで全員誘拐しよう。

転移出来る街には転移し、行った事のない町は速めに飛んで回った。

こうして巫女達を誘拐して回った後、私の正体と証拠、動いた理由を説明した。

「お帰りなさいませ、クレリア様」

巫女達の合唱。結構人数が居たな……。

現在居るのは既に人類の勢力圏外だ。彼女達をマジックボックスに入れたまま良さそうな場所を探し、切り開いて広場にした。

海も川も森も近くにあるので悪くない。

「お前達。本当に人の世界に戻らなくていいのか？」
望むならどうにかするが。

「はい。ここで余生を送ろうと思います……しかし若い者達は巫女の血を絶やさない為にウルグラードの神殿に預けたいのです」

彼女達の代表であるエレジアが言う。彼女はリングイルの神殿の巫女で水色髪を背中まで伸ばした細身の女性だ。

王国の上の方だけでも殺そうと言った私を止めた子で、神と言う事になっていて私に意見が言える貴重な人材だ。私と一番話していると言う事で代表になった。

「そうか。では若い者達はウルグラードの神殿へ移動させ、残りの者はここに住めるようにする」

私は魔法を使い周囲に村を作り上げた。

「これが神の御業……」

巫女達は眩き、呆然と出来上がる村を見ていた……実際はただの魔法だが。

「お前達は狩りや解体、畑などの技術や知識はあるのか？」

「魔法とある程度の戦闘、料理などの家事は一通り可能ですが……それ以外は……」

困り顔のエレジア。最悪私が町で買った食料でしばらくは平気だがずっとそういう訳にもいかない。

「そうか。しばらくは私が食料を用意する、その間に覚えるしかないな」

「はい……感謝いたしますクレリア様」

そう言って微笑むエレジア。

「農耕は私もやった事が無いな……私も此処で過ごしてやってみよう」

「私達と共に暮らして頂けるのですか!？」

驚きと嬉しさが混ざったような彼女と巫女達。

「久々にのんびりお前達と暮らすのも良い」

そう言って、本格的に準備を始める。

それから私は年若い者達をウルグラードの神殿に送り、残った巫女達に家を割り当てた。

すぐに村を魔法で保護してリンガイルへ戻り、町長を辞める事をランドレイを始めとした運営者達に伝えた。

全員に引き留められたが私が意見を変える気が無いと分かると渋々諦めてくれた。

そして作物の種、農耕関係の本、いずれ必要になる家畜等をマジックボックスに入れる。

家畜達が必要になるまで私のマジックボックスに保存しておく事になる、こうして思いつく限り色々な物を買集めた。

そしてモー乳とモー乳製品は各店舗を回って全て買い占めた。無くなる度に買いに行くのは面倒だ、足りなくなったらまた来るつもりではいる。

後は、何か……そうだ。

『ケイン今いいか?』

『はい、構いませんよ』

ケインからすぐに返事が来る。

『ルセリア王国に管理されるのは嫌だと巫女達が答えたからウルグラード以外の巫女は全て人類の勢力圏外で暮らす事になった』

『……それはまた……巫女が一斉に消えたら王国も困るでしょうね。適当な偽物が巫女になると思えますよ?』

巫女が偽物ならもう助ける事も無いな。

『それは勝手にすれば良い』

『しかし……ウルグラードの巫女達も共に行きたかったと思いますよ?』

『む?しかしそこは安全だろう』

ケインと学校があれば平気だろう。

『そういった問題では無いのです師よ』

『……そうなのか?』

私には分からないが人間としては仲間外れは寂しいのかも知れない。

『はい。そうですね……彼女達に会って「正統な巫女の血を地上に残す為にお前達は選ばれた」とでも言っておいて下さい』

『それでいいのか?分かった。言ってお来よう』

確かに私が集めた巫女達は子を作らずに死ぬだろう。

そうなると巫女の血はウルグラーデの巫女達が最後になるかもしれない。

今までに他の道を選んだ者は居なかったのだろうか?

こうしてウルグラーデの巫女達の元に再び向かい言葉を伝え、私は巫女達の村に戻った。

こうして私は巫女達と村で暮らし始め、生きる為の技術と知識を巫女達と共に身に付けながら生活が始まった。

数日後、私は気が付いた事を彼女達に聞いた。

「少しいいか?」

「クレリア様!どうぞ何なりと」

まだ巫女達は対応が硬い、その内普通に話せると良いが。

「お前達。夫や友人と離れる事に抵抗は無かったのか?」

気が付いた事を聞いた。

「問題ありません。私達は代々夫になる者や友人に、神に出会う事があるなら神を優先すると伝えております。それに納得出来ない者は巫女と結婚する事が出来ません」

昔から彼女達はこうだったな……更に彼女は続ける。

「子は神のお力によって娘しか生まれませんので離れる事はありません。皆も同様です」

そう言ってお笑む。娘しか生まれないのは恐らく私のせいだろうな。

百何十年以上も女しか生まれなないんだ……何かあるとしか思えない。

村の事が落ち着いたら調べてみようか、私は彼女達に礼を言つてその場を離れた。

「上手く出来ましたクレリア様！」

村に住んで約四か月が過ぎた。少しずつ色々な事を吸収する巫女達は今獲物の解体を行っている。

「良いぞ。もうこの獲物の解体は完璧か」

嬉しそうに笑う巫女。

最初は大変だった……戦闘力があつても解体は初心者。

肉をバラバラにしたり内臓を傷つけて臭いに悶えたりしていた、その後臭いは消してやったが。

最初は練習する分野を分けて出来る作業が偏らないようにした。

「確か皮の処理の工程を覚えた者が居たはずだな」

隣にいるエレジアに問う。

「はい、では次から貴女は皮の処理の方へ行ってください」

「分かりましたエレジアさん」

そう言つて後かたづけを始める巫女。

「これで取り敢えず暮らして行ける様になりましたね」

エレジアが私を見る。

「そうだな。後は覚えた者が他の巫女に教えれば良いだろう」

「次は農耕でしょうか？」

「ああ、私も楽しみだ」

農業に取り掛かり約一年、ようやく作物が取れる状態になった。

「ようやく形になったな」

私は出来上がった畑を見る。

「そうですね……自然の力だけで食料を作るのは大変だと言う事が分かりました」

エレジアも嬉しそうだ。

最初は自然に作ろうとしたのだが全く上手く行かず、結局魔法に頼った。

魔法で土の状態を良くし、作物に回復魔法をかけ、魔法で水を与え……何から何まで最終的には魔法に頼った、使える物は使う事にしたとも言えるかもしれない。

「魔法を使った途端に上手く行ったな」

「クレリア様が私達にも使える様にしてくれたからです」

私は農業用の魔法を作り巫女達に教えた。上手く行かない者には詠唱を組み上げ使えるようにした。

こうして生活しているうちに巫女達はそれぞれ得意な事、やりたい事などを行うようになり自然と役割が固定されていった。

村に住み始めて二年。役割も完全に決まり生活が安定した為、私は彼女達が女しか生まない原因を調べる事にした。

実際に娘を生んだ巫女達に協力を頼み彼女達の身の安全に注意しながらひたすらに調べ続けた。

あれから七年、村に住んでから九年が過ぎた。

森の魔物の襲撃や作物を狙った空からの魔物や鳥の被害を防ぎながら巫女達と暮らしていたが、遂に巫女達が女しか生まなかつた原因が分かった。

……分かっていた事だがやはり私が関係していた。

昔ンミナに行った治療が原因だ。

あの頃の私は肉体だけを見ていたが彼女の魂にも影響を与えていた。

その魂の傷とも言える状態は子から孫へと残り、一族の娘の魂を縛り続けた。

妊娠したンミナが心配で魂に干渉できる様になったが、あの時見えていた魂は表層にしか過ぎなかった。

より深く知った今なら分かるが……これは言葉で説明出来る気がしない。

しかし知ってしまうと色々とやってみたくなる……出来る可能性があるならやってみたくなる事もある。

ウルグラーデの巫女達を含めた彼女達一族に打ち明けて謝罪し、治せる事を伝えたのだが……なぜか喜びこのままで良いと言われた。

村に住んで十一年。

村の近くの海辺で椅子にもたれてのんびりとしている私はふと思う……この辺りには大きな気候の変化が無い、暑すぎず寒すぎず、かなり安定している。

気が向いたら以前のように雪の降る地域などにも行くかな。

そう考えながら波の音と海風に包まれ一日を過ごした。

「喜んだ理由ですか？」

村に住んで十五年、家の庭に生えていた野生の花の世話をしているエレジアに私は問いかけた。

「疑問に思っていたが今まで聞くのを忘れていた。魂の異常を治せるのに何故断った？」

今更だが思い出したからな。

「私達では到底知る事が出来ない部分に、神である貴女が付けた印

がある事が幸せだからです」

「よく分からん、どういう事だ？」

「私達が神の巫女である証が存在する事が嬉しいと言う事ですよ」
更に言う彼女。

「証？」

私が言うのと彼女は私のそばに近寄り、私を見る。

「はい。その魂の印は子孫に引き継がれる……つまり神である貴女であれば魂を見る事で初代様の子孫である事が分かり、それこそが神の巫女の血統の証となるのです」

エレジアは頬を紅潮させて言う、その声はとても嬉しそうだ。

……神の巫女である証か。確かにずっと残るなら見分ける事が出来る。

いや待て……巫女が生むのは女のみ……その娘が生むのも女のみ……そうなるといずれ世界中が巫女の子孫になって女しか生まれなくなるんじゃないか？

一人しか生まないのなら問題無いか？それでも双子であったり、数人生む者も居るだろう。

それが繰り返されればいずれ……考えすぎかもしれないが遠い未来人類が滅ぶ気かも知れない。

「エレジア、話しておきたい事がある」

私は自分の考えをエレジアに話した、するとエレジアはしばし考え込み答える。

「つまり増えすぎないように上手くやると言う事か？」

「はい。人数を管理して増えすぎた場合は、子を作る人数を制限します」

頷くエレジア。

「増えすぎた場合は結婚は出来ませんが子を作りません。減りすぎた場合は子が欲しい巫女の夫婦に作ってもらいます、勿論子供達は一族

で助け合って育てますよ」

「男は必ず一族以外の者だから問題は無いか？」

「結婚する夫にもこの事は納得した上で結婚してもらいます」
そう言って彼女は地面の花を見る。

「恐らく結婚しない娘達も居るでしょうし、本当に管理が必要になる事は少ないと思います。少ない分にはすでに結婚している巫女の夫婦に二人目以降を生んで貰えば良いだけです」

「駄目そうならやめればいいか」

そう言っていると彼女は私を見る。

「よろしくお願いします。結果が出るのは私が死んだ後ですから」

その後この事をウルグラーデの巫女達に伝えた所、厳守すると答えた。

村に住み三十年が経ち、老衰で巫女達が死に始めた。

みんな満足そうに逝ったな。

魂の研究を続けている私は複数の魔法と私でも集中を要する魔法技術、そして莫大な魔力か魔素を使用して死者の蘇生や若返り、不老不死化、更に魂の選別召喚と送還などが出来るようになったが……彼女達にそれらを使う事は無かった。

いつだったか「それらの魔法を使う時は良く考えて下さい」とエレジアが言っていた。

これらの魔法は軽々しく使えば世界を壊す事になるかもしれないと。

どんな弊害があるかもわからないが、我慢出来ずに習得してしまっ

た。
不老不死にした後でも私なら殺せるが……どちらにしてもいつかは使ってしまうだろうな、我慢出来る気がしない。

そしてもう一つ。

この事が魔法の完成に大きく貢献したのだが……これらの研究中

に私と魔素の関係が見えた。

実験段階でも相応の魔力や魔素を使う、例えば魔力を一気に使うと周囲の魔力が一時的に薄くなる訳だが……。

自身のミスで私は周囲の魔素が少ない時に魔素を使う実験をしてしまった、勿論周囲の薄かった魔素は一瞬で消費され魔素が足りずに発動しない筈だったのだが……。

発動したのだ、問題無く。

私は困惑した……恐らく今までで一番。

実験後確認しても魔素は周囲から完全に無くなっていたのだが、その時気が付いた……魔素が私から漏れていた。

魔素は自然界に存在し植物や魔物に吸収されて魔力を生み出す物だと思っていたのだが……その魔素が自分から漏れ出している事に僅かに混乱した。

思えば魔素が全く無い場所に居た事など無かった。周囲の魔素が私から漏れている魔素を隠していたのか？

何よりそんな可能性を全く考えていなかった私は気にもしていなかった。

私は改めて自分の体を確認めた。周囲の魔素が無いまま魔素を使つて魔法を使い続けた、使用量を少しずつ増やしながら。

その結果……大量の魔素を消費する研究中の魔法すらも発動してしまったのだ。

今思えば無茶をしたと思う……魔素が私を構成する何かであった場合、死ぬ可能性があったかもしれないのだ。

更に確かめると私の体と魔素は別物である事は分かった、次に自分の一部を分け実験をした。

そしていくつ分かかった事がある。

私の体は魔力でも魔素でもない何かで出来ている事と……体から漏れている魔素は私の体である何かから放射されている副産物の様な物だと言う事。

普段は漏れ出ている程度だが停止する事も一瞬で莫大な量を発生させる事も出来る事。

そして……恐らくその総量が無限に近い事。

こうして私は魔素を気にせず実験を行う事が出来るようになり、一気に研究は進んだ訳だ。

私の実験する場所には危険なので誰も入れないよう魔法がかかっているのだが、最初の一年程で外からエレジアが呼んでいる事に気が付いた。

そして一年も周囲を気にせず籠っていた事を叱られ、それから私は適度に休憩を取りながら実験をした。

自分の事が分かるかと思えばもつと訳が分からない何かだった。

それでも一歩前進だ、何より魔素を使用する物なら使いたい放題だ。

もしも限界があつたとしてもそれならそれで構わない。

「クレリア様」

家のソファに座った私に大分年を取ったエレジアがやってきた。

「ん？どうした？」

「ご一緒にお茶でもどうですか？」

そう言つて二つのカップを見せた。

「貰おう、モー乳を入れてくれ」

「分かりました」

微笑むエレジア。

紅茶を入れる音を聞きながら本を読む、冒険記だが間違いなく実話では無いな。

「お待たせしました」

エレジアがカップを私の前に置く。

「何の本を読んでいるんです？」

「冒険記だ……しかし実話ではないな」

紅茶を一杯飲み、本を渡す。

「何故実話では無いと？」

「読めばわかる……ここだ」

彼女は私が示した場所を読むと納得した顔になった。

「なるほど……『自由の神は彼を認めて神の力の一部を与えた』……ですか」

「私はそんな事をした覚えは無い」

魔法や技術を数人に教えた事はあるがあれは神の力では無いしな。

「……クレリア様の名前は無くなってしまったのですね」

こつそりと町で買った冒険記、すでに私の名は世界から消えて無くなっていた。

「私は嬉しいが……」

彼女は苦笑いする。

「貴女は名前が出る事を嫌がっていましたからね」

エレジアは紅茶に口を付ける。

「お前は自分の名前が広がる面倒さを知らないんだよ」

「そうですが、それでしたら大人しくしていると言うのは……」

「私はやりたい事はするぞ？世界に影響を与えすぎないようにだな」

彼女の言葉を遮って言う。

「何故世界に対する影響を気にするのです？」

「私が思い切り好き勝手したら世界が私の思い通りになるかもしれないだろう？」

私は紅茶を飲む。

「その何が悪いのでしょうか？」

カップをテーブルに置く。

「私は、私が思いつかないような事を人間が……何者かがしてくれる事を期待している。この世界がどう変わっていくのか見たいんだ。手を出す時は出すが私の思い通りになどしたくは無い」

彼女を見る。

「二人が嫌いな訳では無い、だがやはり誰かといえるのは楽しい物だ

……それが心を許せる者ならなおさらな」

「そうですね」

エレジアは微笑む、ほんのり頬が赤い。

「私は変わる世界を眺め、紛れ込んで楽しみたいんだ。人が……生物が減びるまで」

私は彼女に薄く微笑みかける。

「滅びるでしょうか？」

少し寂しそうな表情をする

「このままなら大丈夫じゃないか？」

「そうですね……」

「いや……これからどうなるのか私だってわからない。そしてそれが良い……もし分かる力を得ても私はきつと出来るだけ使わないだろう」

私は彼女を見つめて言う。

「先程聞いた話からすれば使わないでしょうね、貴女は」

「より大事な事の為なら使うだろうが、それ以外ならば恐らく使わないな」

語りながら二人で紅茶を楽しんだ。

村に住み四十年、住んでいる巫女は一人になった。
そして今、彼女も逝こうとしている。

エレジアは一年前、私に「良い人生でした」と言い残し眠る様に逝った。

「クレリア様」

もう彼女は目を開けない。

「……何だ？」

「今まで……ありがとうございます」

「私が共に居たかったから居ただけだ」

「そうですね……申し訳ありません……何か飲み物を……」

心から申し訳なさそうに言う、謝る必要は無い。

「分かった、待っている」

私は席を立ち、体に良い薬湯を用意する。

「持ってきたぞ……おい？」

飲み物を用意し戻って来た時、彼女は既に逝っていた。その顔は微笑みを浮かべている。

私は死んだ彼女を埋葬し、村を取り壊す。
さて、どうしようか……リンガイルを覗いてみるか？

あんな旗無かったはずだが……。

リンガイルに着いたが、町の色々な所に白地に金の王冠ある旗がかかっている。

道行く人に聞いた所、ルセリア王国の国旗らしい。

飲み込まれたか、時間の問題だったからな。

モー乳販売店があったので色々買った、店員は見知らぬ者に変わっていた。

私は宿を取りこの町に暫くいる事にした。

数日後。モー乳を瓶のまま飲み歩いていると、念話が来た。

『師よ、よろしいでしょうか？』

『どうした？』

『直接会ってお話したい事がありました、ウルグラーデに来ていただけませんか？』

珍しいな、わざわざ私を呼び出すとは。

『分かった、急ぎか？』

『可能でしたら』

それを聞いて私はウルグラーデに転移した。

『今町の外だ。これから学校に行く』

『はい。お待ちしております……受付で名を名乗ってくださいね』
『分かった』

私は念話を切ってウルグラードに入っていく。

ウルグラードの神殿は私が言った通りに名を自由神に変えており、名前は無くしていた。

巫女達にはそうするように言っておいたからな、彼女達は私が言うならと受け入れてくれた。

私は学校へと大通りを歩いていく。何やら物々しい、武装をした者が多く見回っている。

「えっ!？」

歩いていると驚いた声と何か落ちる音が聞こえる、振り向くとメガネをかけ灰色の髪をした老婆がこちらを見て小さい紙袋を落としていた。

「大丈夫か？」

私は袋を拾い、老婆に渡す。

「え、ええ」

「気を付けるんだな」

そう言っ学校に向かおうとした時。

「……クレリア？」

つぶやきが聞こえた。

「何故私を知っている」

私は振り返る。

「本物？」

「何を言ってるんだ？」

震えながら私に近づいた彼女が私を抱きしめた。

「おい？」

「急に居なくなっって私がどれだけ心配したと……」

泣き始める老婆、周りの視線が集まる。

「とにかく目に付かない所に行くぞ。来い」

私は老婆を連れて移動したが途中で家に来て欲しいと頼まれ、こい

つが誰か気になった私はついて行く事にした。

家の者は出かけているらしい、一般的な作りの家に案内され椅子に座った。

「で？お前は誰だ？」

「年取ったもんね……分からないか」

苦笑いする彼女。

「ヘレンよ、ヘレン・ワーズ」

その名前を聞いた時、背中まで伸びる灰色の髪を三つ編みにして眼鏡をかけた少女が浮かぶ。

「ヘレンなのか？」

「そうよ」

彼女はメガネの位置を直す。

「久しぶりだな」

「何してたの？どうしてまだその姿なの？」

私は彼女に隠す所は隠して話しをした。

「貴女森人のハーフだったのね……やっぱり」

彼女は当時から年齢にそぐわない力を持つ私を怪しんでいたらしく、そうでは無いかと思っていたらしい。

それから彼女と話をして色々な事を聞いた。

ヘレンが魔法学校の元教師で、今は事務職をしている娘が居る事。孫は教師として働いている事などを聞いた。

そうして時が過ぎ……。

「……いかん」

「どうしたの」

紅茶を飲む途中で固まった私に聞いてくるヘレン。

「約束があったんだ、また後でな」

そう言っただけで家を出ようとする。

「今もちよっと抜けてるのね」

後ろから笑い声が聞こえた。

テイリア魔法技術学校の受付で名を名乗ると、校長室に案内された。

ケインと二人になると彼は紅茶と茶菓子を用意してソファへと私を案内した。

「遅かったですね？」

「私の前に紅茶を置く。」

「途中でヘレンに会った」

納得顔になる彼。

「彼女の子供も孫も学校に居ますよ」

「遅くなってしまったが急ぎの話なのだろうか？」

私は話を促した。

「ええ……実は……」

彼は話し出す。

ウルグラーデはテイリア魔法技術学校がある事と正統な神の巫女が居る事でルセリア王国からの独立を今まで守っていたが、大きくなったルセリア王国が物資の流通を規制した上で武力をちらつかせ取り込もうとし始めた……と言う事らしい。

「ケイン、入るわよ」

そこまで話した時に女性の声が出て誰かが入ってくる。

「今は来客中なんですが」

「ごめんね、でも例の事だね」

言葉を交わす二人を私は見ていた。

「ごめんなさい、話している途中……で……」

私を見て驚きをあらわにする女性。十八前後かな……しかし見た事があるような気がするな。

「クレリアー！」

彼女は私に飛びついてくる。

「ミナ、失礼ですよ」

「ミナ？」

私は女性を見る。

「そうよーあなたを超える魔法使いになる、ミナ・トリアムよ！」
それから落ち着きを取り戻し話をした、私が森人とのハーフである
事などおおよそヘレンにした話と同じ事を伝えた。

「次期校長で……ケイン校長の妻？」

「そうよ」

そうか、ケインとミナがな。

「何よ……好きになった物は仕方ないでしょ」

私が二人を見比べていると、仄かに顔を赤くして言ってくる。

ケインが咳払いを言う。

「クレリアさんお願いします……流通を規制され攻められれば町は
長く持たないでしょう。無理を承知でお願いします……ルセリア王
国の軍を共に撃退し、王国に所属している町と同等の地位と自治権を
認める条約を結ばせて欲しいのです」

「あたしからもお願いします。貴女はケインと並ぶ大魔法使い……
どうか私達と町と学校の未来に力を貸して……！」

頭を下げる二人。ヘレンとミナは知らない仲では無いし、何よりも
……。

私は頭を下げているケインを見る。今まで力を尽くしてきた弟子
の頼み、断る気は無い。

「分かった。力を貸す」

「……ありがとうございます」

「ありがとー！」

悔しそうな嬉しそうな不思議な表情をしているケインと、喜び突っ
込んでくるミナ。

「では、これからの事を話そうか」

私は胸に張り付いているミナを引きはがして言った。

二人と話した所ウルグラードの方針として徹底抗戦する事は決定済みで、冒険者ギルドと警備隊、自警団も結成され町の内部にも目を光らせているらしい。

更に私が各地の巫女を誘拐し姿を隠した際に「ウルグラードの神殿の巫女が神に謁見し巫女の血統を守っている」という事を広めて他の町の神殿の正統性を無くしているため、他の町から自由神を信仰する冒険者達が集まって来ている。

まあ他の神殿はかなりお粗末になっているらしいな。髪が黒くなかったり染めようとしてまだらだったり、目も黒くない。

まあそうなるだろうな、元々黒髪黒目はこの世界の人類には居なかったのだから。

臨戦態勢の町を見て回っている私は念話をつなぐ。

『ケイン』

『どうしました?』

『私は人の範囲で戦うぞ?勝利は約束するがまた神だ何だと騒がれたくないからな』

念話しながら店でモー乳を買う。

『そうですか……』

『何だ?何かあるのか?』

モー乳を飲みながら話す。

『師は人間の力の範囲を知っていますか?私はやりすぎる気がするんですが』

黙ってしまう私。

『それに力を出していただかないと戦力を覆せないのですが……』

『うーむ……分かった。多少は名が広がってもいい、弟子と知人と弟子の学校の生徒達の未来のためだ』

『申し訳ありません』

ギルドの周囲や、町の広場には応援に来てくれた冒険者の為の施設が設置されている。

『気にするな。たまには弟子に頼られるのも良い物だ』

『……はい』

そこまで気にする必要は無いのだが、ケインならこうなるか。

「いいか！隣にいる者と連携して並ぶように位置取りをしろ、穴を作るな！」

私がウルグラードの学校の客室で過ごし二週間程が過ぎ、ルセリア王国の軍がやってきた。

外壁から見ると昔リンガイルで相手した数の……2・5倍ぐらいか？多いのか少ないのか分からんな。

「負傷した者は無理をせず後退しろ、治療を受けてから戦線に戻れ！」

「援護魔法部隊は自分と前衛の防御、攻撃魔法部隊は用意した高台から後方の敵の排除、攻撃魔法部隊の防衛部隊は攻撃魔法部隊を守り抜け！」

私はケインに頼み一人で遊撃だ。冒険者の皆は私の事は特に気にしてないだろう。

「弓部隊は高台の前から山なりに射撃して敵を狙えよ！」

さつきから説明しているのはウルグラードのギルド長だ、以前とは別人になっているな。

「……ん？君！君はどこに配属されている？」

一人離れて聞いていた私にギルド長が言う。

「ケイン校長から役目を受けている」

そう言うとは彼は私をじっと見つめている。

「……そうか。頼む」

そう言った後もしばらく見てくる。

「私に何か用でもあるのか？」

「いや、すまん……そういう訳じゃないんだ。ただ昔親父が一瞬で振られたって言ってた少女に似てる気がしただけだ」

そう言って苦笑いするギルド長。

「相手もとつくにいい歳になつてるだろうに」

「そりゃそうだな」

彼は笑って移動していった。

両軍がぶつかり戦闘をしている中、私はまだ町の中にいた。

いつもの女神軽装備は変わらないが、敵が多そうだから大剣を使うつもりだ。

私は外壁へ飛びあがり戦場を見る。でこぼこした大地で前衛がぶつかり合い、空中は弓や魔法が飛び交っている。

敵は訓練を受けた兵士のような。

まあやる事は同じだ、取り敢えず魔法使いが一番厄介だから排除しておくか。

多い所は……あの辺りか……。

戦場中央、敵陣の奥から多くの魔法使いらしき気配がする。

……魔法が多く放たれているからこれは見ただけでも分かるな。

さて……行くか。

私は魔法部隊の上空にやって来ると、火球を打ち込んでから降下する。

爆音と共に直径数メートルのクレーターが出来た。

「なっ!?!なにがあった!?!」

「何処からか攻撃が!?!」

騒ぐ敵の声を聞きながら魔法使いに切りかかり、一振りでも相手の頭を落としていく。

「敵襲だー!!」

周囲から敵が集まり、全方位を敵に囲まれる。

私はその敵を大剣を振り回して薙ぎ払っていく。

次々と切り裂いていると、敵の声が響く。

「離れろー！魔法が行くぞー！」

周りの敵が距離を取り、生き残った魔法使いと周囲の魔法使いが私に向かって魔法を打ち出す。全て火球だな……では。

「離れて居れば安全と言う訳でも無いぞ？」

私は炎の壁の輪を自分の周りに作り、その輪を一気に広げる。

「あつ……」

「うああ!？」

敵の攻撃魔法は炎の壁に飲み込まれ、火力の高さで一瞬で燃え尽きる敵兵達。

そして燃え尽きる仲間を見た他の兵は、必死に逃げ出し始めた。

逃げられれば追いはしない、頑張るといい。

「はっ、はっ……くそおーおー!!」

炎の広がる速さから逃げきれずに燃え尽きて行く敵兵士、私の周りに円状に赤く熱を持った地面のみが残った。

「化け物……」

それを見ていた範囲外の敵兵の声が聞こえた。

この程度で化け物は無いだろう。

私はそう思いながら背後にファイアボールを打ち込み、正面の敵に突っ込んで行く。

初戦は私が魔法使いの本隊とその周辺を消滅させたので優勢だった。

ウルグラード側もそれなりに死傷者が出たようだが。

私は前線から離れた本隊に行ったのであの距離から私であると判別出来る者は居ないかもな。

私は姿を消し、町に戻った。……最初から姿を消したまま戦えばよかつたんじゃないか？

私は学校に行き、校長室を訪ねた。

「ケイン……校長」

ミナも居た為、咄嗟に校長を付ける。

「あ、クレリア先生」

ソファに座っていたミナが振り向き言う。

「私は先生では無い」

そう返して私はソファに座った。

「なんでわざわざ校長つてつけるの？結構年も近いんじゃないの？」

ミナが私に言う、ケインが付けて欲しいと言ったからだな。

「そうですね。校長はいりませんよクレリアさん」

ケインがそう言つてソファにやってきた。

「そうか、分かった」

ミナが紅茶を私の前に置く。

「私達は立场上戦争にあまり出る訳にはいかないので……心苦しいですね」

ケインがミナの隣に座りながら言う。

「教育者が率先して人を殺すのはな」

「いざとなれば戦いますが」

私が言う、ケインが言葉を返す。

「まあ、お前達はまだここに居ろ」

そう言つて私は紅茶を飲む。

「そう言えば、聞いた話だと敵の魔法使いの本隊を誰かが叩き潰したら面白いわね？」

ミナがカップを置いて言う。

「私がやった」

二人が私を見る。ケインはやっぱりと言った表情、ミナは小声で「やるう」と言った。

「やはりそうでしたか、お疲れさまでした」

「多少派手に戦ったのだが、中々楽しかったぞ」

「やっぱりすごいよね貴女って」

感心する彼女。

「貴女にとって人間との戦いは遊びの様な物でしょうからね」

「殺す事を楽しんではいない、敵でないなら殺さないぞ」

私はケインを見る。

「それだけ実力差があるって事でしょ？」

ミナはケインと私を交互に見ながら口を挟む。

「そうだな」

私はそう言ってから話を変える。

「それで……ケイン。向こうは何か言って来たか？」

「特に何も……恐らく今度のもっと大規模な軍になるでしょう」

彼は私を見た後、手元のカップに目を落とす。

「クレリア、貴方が本当に強いのは分かったけど無理しちやだめよ

？」

「大丈夫だ。あの程度ならな」

紅茶を飲み終わるまで三人で話をして過ごした。

それから一月程何事もなく時が過ぎ、私はヘレンの家と校長室、客室を行ったり来たりする生活をしていた。

大半は客室で魔法の更なる可能性を探していたが。

そしてある日。偵察に出ていた冒険者の一人がルセリア王国の大規模な軍がウルグラードに向かっていているのを発見した。

その報告と共にウルグラードは警戒態勢から臨戦態勢に移行した。

外壁から見ると遠くにルセリア王国の軍とウルグラード義勇軍が見える。

ウルグラードは流通を減らされている状態だが、まだ問題は起きていない、更にこの一か月程は冒険者達が周囲の資源を集めていたのでその影響もありそうだ。

私が居る事を知らない者達は、どのような戦いをしてもこのままでは負けるのは時間の問題だと分かっているはずだが……諦める気は無いようだ。

今回から私は姿を消して戦うつもりなので会議にも参加していない。

大分敵の軍勢が多くなった。魔法使いの部隊の規模も数も前回とは違う。

ティリア魔法技術学校を卒業した者もいるかも知れないな。今は他の学校もあるらしいから魔法使いも増えているだろう。

どちらにしても敵になるなら殺す事は変わらないな。

再び戦闘が始まった。守りを固めて準備をしても数の差はどうにもならないようだ、持ち堪えてはいるが押されていく。

その光景を眼下に見ながら私は敵陣へと向かった。

私は姿を隠したまま上空から敵陣の魔法使い部隊へ突入する。

「なっ!？」

「なんだ!？」

「急に味方が吹っ飛んだ!？」

姿を隠したまま大剣を振り回し、次々と魔法使い達を殺していく。

「何かいる!!足跡が付いてる!!」

ああ、そうか。地面に立っていると足跡は残るな、地面は柔らかい所もあるし。

私は宙へ浮かび再び攻撃を開始した。

「足跡も消えた!？」

「このままじゃやられるだけだ!やられた仲間の辺りへ魔法を叩き込むしかない!」

混乱した魔法使い達の中の一人が叫んでいる。

「そ……それはっ!？」

「このままじゃ一方的に殺されるだけだぞ!!」

「くっ!!」

そうやって周りの魔法使い達が敵を殺している場所にファイアボールを打ち込み始めた。

私は特に気にする事無く魔法使い達の中を斬り進む。

「居るのか居ないのか……畜生!何なんだ!!」

全く変化が無いからか敵の魔法使いが叫ぶ……当たっているぞ?効いていないだけだ。

それから私はこの魔法使い部隊を全滅させ、新たな魔法使いの部隊へと飛び立った。

こうして私は次々と魔法使いの部隊を潰して行き、今最後の部隊を潰していた。

「一体何故こんな事に……」

そう呟いた魔法使いを殺す。

相手からすれば何も無いのにいきなり仲間がバラバラになる訳だからな。文句の一つも言いたくなるだろう。

魔法部隊を壊滅させた私は、空から軍がぶつかり合っている前線を見る。

自軍の魔法部隊が全滅した事が伝わったのか敵の前線部隊にも動揺が広がっているようだな。

その後攻め切れなくなったルセリア王国軍は撤退して行った。

「それで……まだ何もないのか?」

校長室で私、ケイン、ミナがソファに座り話し合う。

「ええ……いまだに王国からは何も……」

どこことなく暗い表情のケインに聞いてみる。

「完全に流通を止めて放っておくだけでもこの町は終わりそうな物だが……なぜやらないか理由は分かるか？」

そう聞くとミナが代わりに答えてくれる。

「詳しくは知らないけど貴族の名誉とかなんとからしいわよ？何の意味があるかは知らないけど」

鼻で笑いながら呆れた表情で言う。

「本当に意味が分からんな」

貴族の名誉のために兵士達は死ぬるのか、人はやはり面白いな。

「今回の事で手加減は出来ないと考えたのか、流通は完全に止められました」

私を見るケイン、ミナもその言葉を聞いて表情を暗くする。

「次は手加減無しの軍勢が来ると思います」

私は本気を出すのが遅いと感じるが、敵は簡単に勝てると考えていたのだろうか。

「今度は私達も出る事になると思うわ。もう教育者がどうこう言つてられないもの」

「だがこれをしのげば国を超える力がある事が示せる。攻め込まれなくてはならぬと認めると言えば上手く行くかも知れないぞ？」

私の言葉に頷く二人。

「結局……力が上である事を示さなければ不可能なのですね」

呟くケイン。

「自分の意見を通すためには種類はどうあれ力が必要だ。お前も知っている事だろう？」

全てを敵に回しても気にならない強さがあれば何も問題は無いと思う。

あれから約二か月程が過ぎたある日、ウルグラーデは全方位をルセ

リア王国の軍に囲まれていた。

「全軍では無いだろうが町一つには十分すぎる数だな」
校長室で話し合う私達。

「確かに、町一つに向ける戦力では無いですね……」

「ようやく本気になった訳ね。義勇軍と私達三人で勝てるかしら……」

対面に居るケインとミナが言葉をこぼす。

「……この町の戦力では全方位を守る事は出来ません」

「私達でどこまで援護できるかしら……」

二人の表情は暗い。

「ミナはともかくケインは何故暗い顔をしている、私が居るだろう」
私がそう言うとミナが独り言の様に呟く。

「いくら何でもこの戦力相手じゃ勝てるかどうか……」

「……こうなる前に話が付くと思っていたのです」

国の貴族共が名誉だなんだと言い出す前ならそうだったかもな。

「思った様にいかない事はいくらでもあっただろう？……誰だつて
そうだ」

自分が魔法や錬金術を練習していた頃を思い出す。

失敗をわざわざ話したくなど無いが、人と暮らしている時にもそんな事はそれなりにあった。そう言うとケインは顔を俯かせる、そんなケインをミナは心配そうに見つめる。

「そして……それが面白いんだよ」

思わず薄い笑みを浮かべてしまう。

二人は私を見る。

「思い通り……確かにそれはそれで愉快だろう。だが私は全てが自分の思った通りになるなどつまらないと思っている」

私は二人を見る。

「私が思いもよらない発見や行動。それは見ていてとても面白い……それが私にとって不都合であったとしても不愉快では無いんだ」

「……どうしたのクレリア？」

訝しむミナ。

「このままでは勝つ事は難しい……そうだなケイン？」

「はい」

私を見つめ答える。

「私一人でやる……お前達は此処に居ろ」

「……それは」

「ちよつ!?ちよつと……無茶よ!いくら強くてもあの数を貴女一人でなんて無理よ!」

言葉に詰まるケインと私に詰め寄るミナ、私はミナの頭に手を伸ばし撫でる。

「任せておけ」

そう言つて私は校長室から出て行く。後には固まっているミナと姿勢を正し頭を下げるケインの姿があつた。

さつさとやつてしまおう、私は姿を消しウルグラードのかなり上空へ飛ぶ。

下を見ればウルグラードを包囲するルセリア王国の軍が見える。

私はウルグラードに防御魔法を張り。自分の周囲に威力を上げた火球……かなり大きい物を複数作りだす。

小さくともあの程度の軍を吹き飛ばす事は出来る。だが、天から光が落ちて行く様を人々に目撃させなければならぬ。

そして私は周囲を包囲する軍に向かって火球を打ち出した。

打ち出した火球はかなり大きいにもかかわらずみるみる小さくなつていき……閃光と爆炎を巻き起こし軍を飲み込んだ、遅れて私にも轟音と熱風が届く。

その炎が消えた後町の周囲に残っていたのは赤く融け、抉れた大地だけだつた。

このやり方はつまらないが大掃除には向いている。

その後ウルグラーデはルセリア王国に自治権を認めたと同じ地位を約束する条約を認めさせ、自治都市ウルグラーデとなった。

もつと有利な条件も付けられたはずだがケインはそれをしなかった。それが戦争の火種になると考えたようだ。

その辺りは好きにすると良い、そこからはケインのやる事だ。そして現在私は校長室でミナに問い詰められている。

「クレリア……貴女何者なの？あんな……あんな魔法ケインにだって無理だつて分かる……ケインは知ってたの？」

ミナは正面に座っている私から隣にいるケインに視線を移す。

「ケイン。私はこうなると分かってやったんだ……だからもう隠さなくていいぞ」

「そうですか、師がそう言うのならもう構いませんね」

「え？師って？ええ……？」

声をかけると私を師と呼ぶケイン、戸惑うミナ。

「師の事をお話しますよ」

そう言つて私の事を説明し始めるケイン……お前がするのか。

ケインが話を終えた。ミナはまだ声を発さず俯いている。

暫くそうしていたが彼女は勢良く顔を上げて言った。

「私だけ知らないとか酷いじゃないよ！」

何とも言えない沈黙が辺りを包む、彼女は顔が赤くなっている。

「……私はそういう何かなんだ、黙っていて済まなかったな」

「私は師が話すなど言つた事は妻にも話す気は無いですからね」
噛んだ事を流して会話する。

「私は貴女を超えろと言つただけ……」

赤い顔のまま私を見る。

「貴女が何者でも負ける気は無いわよ」

「ミナらしいな」

ミナは笑い、私も薄く微笑む。

やがて彼女の顔色は元に戻ったが私の話題は続く。

「それだけ長い寿命なら私も目標がいなくなる心配はしなくてよさそうね。もし何処かに行ってもたまには会いに来てよね」

「まだこの町に居るつもりではあるが……用があるなら念話で呼べ」

私の隣に移動して話す彼女。

「あの時の魔法ってどうやってるのよ」

「それはな……」

「私達が出来るのそれ……?」

「知らん」

「じゃあ……」

一人で紅茶を飲むケインに微笑ましく見守られながら、魔法談議に花を咲かせた。

「ウルグラーデに家を……ですか」

「ああ」

数日後、校長室で会話する私とケイン。

「学校に居ても構いませんよ?」

「悪くは無いがやっぱり自分好みの家が欲しくてな」

二人共紅茶を口にする。

「そうですね。では費用はこちらで出しますよ」

ケインが紅茶を置きながら言う。

「いいのか?」

「今回の事で返しきれない恩を受けましたからね」

私も紅茶を置く。

「特に気にしていないぞ」

「私が気になりますので」

お互いに顔を見て言う。

「そうか。それで気が済むならそうするといい」

「購入する家が決まったら連絡をください。どの家でも構いませんよ」

「分かった」

こうして家を買いに不動産に行ったのだが、名前を名乗ると「お客様は運が良いですね」と言われある物件を紹介された。

クレリアと言う名前の者だけが今の持ち主と顔合わせをして、合格すれば無料で屋敷が貰えるらしい。

「なんだそれは」と思ったが、気になった事があったので会ってみる事にした。

物件の屋敷で顔合わせと言われたので、約束の日に地図を見ながら向かう……この道はやはり……。

着いた場所にあったのは以前住んでいたあの屋敷。

私は鉄扉を開けて庭を歩く。あの時いつか作りたいたいと思い、彼女達に言った池があった。

屋敷の扉を開け、リビングに入ると三人の年老いた女性が座っていた。

「久しぶりだな三人娘」

私がそう言うと、彼女達は涙を流し私に抱き着いた。

その後いきなり居なくなった事を三人から叱られ、話をした。

彼女達はそれぞれ家も家庭も持っていたが、この屋敷はずっと管理していたらしい、いつか私が戻って来た時のためにあのような条件を付けたようだ。

今まで数回クレリアと言う者が来たが別人で、きつともう駄目だろ

うと思いつつも取り消す事が出来ず、そのままにしていた所に私が来た……という事だ。

あの時譲って貰った家を返すと言われ受け取る事になり、私は再びあの家に住むことになった。

ケインに無料で家が入ったと伝えないとな。

時折訪れる彼女達と語り合う日々を送る事になりそうだ。

ウルグラードに住み二十年が過ぎた。

ヘレン、アリアナ、ルフレ、ユリアルマは既に逝き、ルセリア王国はルセリア神王国と名前を変えた。

世界が少しづつ変化する様子を見ながら、私はまだこの屋敷で日々を過ごしていた。

この二十年でウルグラードからいつの間にか戦神信仰という新しい宗教が広がっていたが私は気にしていなかった。

後にケインとミナから先のルセリア神王国との最後の戦いで使った私の魔法が原因だと聞いた。

姿を隠していた事と人類では不可能な威力もあって、戦神が戦いに介入したと考える者が現れたらしい。

私は放っておく事にした、ケインとミナは言わないだろうしな。

「いらっしやいませー」

私は今行きつけのモー乳販売店に居る。まとめて買っておいでも良いのだが時期によってモー乳も味が違うのでこまめに買いに来ている。

ふむ、今日はモー乳プリンがあるな。

「モー乳の大瓶十本とモー乳プリンを五個頼む」

「いつもありがとうねクレリアさん」

店員の女性が私に声をかけながら用意をし始める、二十年通えば覚えられて当然だな。

「この製品はお気に入りだからな」

「嬉しいわ」

そう言っつて笑いを零す。彼女はこの店の店主の娘だ、彼女がお手伝いしている頃から私は来ているからな。

「ありがとうございましたー」

その声に後ろ手に手を振る。

モー乳をしまつて通りを歩いて人とすれ違っていると、突然男の声

がした。

「おい、お前！ぶつかっておいて何も言わねえのか！」

気にせず歩こうとして直後に後ろから伸びてくる手をかわす。

「何か用か？」

振り向いて言う。

「何か用だ?!ぶつかったら謝る様に言われてねえのか！」

脅す様に言ってくる。

「確かにぶつかったら謝るべきだな……だがお前には当たっていないな」

「俺がぶつかったって言ってるんだよ！」

そう言って睨みつけてくる。

「大人しく因縁を付けた事を謝るのならこのまま許してやるぞ？」

そう言うのとポカンとする男、その後顔を赤くして怒り出す。

「てめえ……！」

「そこ！何してる!？」

男が掴みかかろうとした所に声がかかる、武装した三人の男女がこちらに近づいてくる。

彼らはこの町が自治都市になった際に作られた治安維持隊の隊員だろう。

治安の維持や犯罪者の逮捕など都市内を担当している。

外敵からの防衛には警備隊があり、それらはウルグラード自治軍に分類されている。

「くっ……」

男は逃げだした。逃げたら捕まえてくれと言っているような物だぞ。

「奴を追え！」

二人が男を追いかけて、残った隊員が話しかけてくる。

「大丈夫ですか？」

「ああ、助かった。触れても居ないのにぶつかったとうるさかったからな」

隊員は身をかがめ視線を合わせて話す。

「治安維持隊が巡回しているから何かあったら言うんだよ？」
「分かった」

あの男は治安維持隊に救われたな。場合によってはこの町から人が一人消える所だった。

「ではこれで、良き日を」

隊員はそう言つて去つていった。

この「良き日を」という言葉は、治安維持隊のお決まりの挨拶の様な物だ。

いつ誰が言い始めたかは不明だがいつのまにか使われていたそう
だ。

再び通りを歩きだす、私は今は金を稼ぐような事はしていない。

ケインに無料で屋敷が手に入った事を話したら大金を押し付けられた。

要らんとしたたら「せめてお金だけでも受け取ってください」と頼まれてしまった。

「モー乳を買う資金にさせて貰う」と言うと「ぜひそうしてください」と笑っていた。

当てもなく歩いていると、路地を少し入った所に居る二人の獣人が話している事が耳に入った。

「お前はどうする？」

「……ここにも思い入れはあるし、同じになるとは……」

何の話だろう、少し立ち聞きさせてもらうか。

「俺は行くよ。考えたくは無いけど……確かにまた起きるかもしれないんだ」

「そうか……」

そう言うと獣人の一人が路地から出て行く。詳しく聞きたいが話してくれるだろうか。

私は興味に負け残っていた獣人に自白誘導をかけて質問した。

判明したのは人間が奴隷を作った事を知った都市に住んでいない
獣人達が対抗する為に集結しているという事だった。

一応獣人の集まっている場所も聞いた。覗いてみるのも面白いか
もしれないな。

更に噂だが獣人だけでなく人間や他の種族を信用出来なくなった
大地人や森人も同じような動きをしているらしい。

確かにいきなり隣人を奴隷にするような者と一緒に居たくは無
いかもな。

ケイン達はこの事を知っているのだろうか。

私は校長室を訪れて得た情報について聞いた。

「そんな話が……」

「その反応からすると知らないな？」

私とケインはソファに座って話していた。

「噂でしかないが大地人や森人も同じような動きをしているらしい
ぞ」

ミナは外出中らしい。

「ウルグラードに住んでいる同族を誘っていると言う訳ですか」

「恐らく他でもしているだろうな」

ケインは溜息を吐く。

「隷属魔法によって有無を言わず奴隷にされれば当然かもしれま
せんね……」

「またあんな事が起きるかもしれないと思うのは当然か」

私は視線をケインに向ける。

「そうですね……この町では奴隷は居ませんが、信用出来ないと思
えてしまうのは……当然ですね」

「いつから動いていて、今どれほどの規模なのかは分からないが
……場合によっては新しい国が出来るかもしれない」

紅茶を一口飲む。

ケインは視線を下げて言う。

「国が出来る事自体は構わないのですが、それらの国と戦争になりそうですね」

ふむ……力を付ければ指導者にもよるが……人間達は勿論、共に暮らす同族に対しても復讐として奴隷にしようと戦いを仕掛ける可能性は……あるな。

「面白そうだ、国が増えて世界がより賑やかになるぞ」

そう言うケインが困ったような顔をする。

「扇動しないでくださいよ?」

「私は関わりはするが何かをしろとは言わないぞ?……もし戦争が起きたならそれは彼らの意思だよ」

「そうですね」

ケインは紅茶を見つめている。

「私は彼らの手伝いをしてくる」

「予想は出来ませんが、なぜです?」

「何となくだ、興味がわいたとか気になったから……とでも言おうか?」

ケインは苦笑いをする。

「師のお好きなように」

その後、獣人以外の正確な場所が分からない為、誘っている者を捕まえて場所を聞こうと考え通りを歩いていった。

そこにミナが誘われたとケインから念話が来たので、その現場に行き周囲を探った。

「……があるだろう?」

「……かに……だが……」

路地裏から会話が聞こえる……私は少し近づく。

「これからも大丈夫だと言えるのか?」

「ううむ……」

二人の森人、もう一人は悩んでいるようだ。

「同族同士で身を守るべきだ。俺達は仲間が奴隷になるのを黙って見て居たくは無い」

「……分かった。俺も行くよ」

そう言った森人と握手をする勧誘していた森人。

さて、自白してもらおうか。

勧誘されていた森人には眠って貰い、勧誘していた者に森人の集まっている場所を聞く……神木……世界樹？もしかしてケインが居た村の辺りじゃないか？

その後大地人が多い場所をうろついて大地人の勧誘者を見つけ、同様に場所を聞き出した。

これで三種類の集まっている場所が分かった訳だが……どこから行こうか。

正直何処からでもいいので、紙に数字を書いてその辺りの子供に選ばせた。

その結果森人、大地人、獣人の順番で訪れてみる事に決まった。

あった。あの大樹だ……空を飛び森人の集結している場所に向かうと大きな木が見えて来た。

大樹……世界樹の根元に降り立つと世界樹が迎えてくれたような気がした。

お前も恐らく一万年以上生きてるんだよな。

「貴女！そこで何をしているの!？」

一人の森人の女が笛の様な物を吹くとみるみる森人が増えて行った、その手には杖や剣などの武器が握られている。

以前にも似たような事があったな。

私はそう思いながら世界樹が傷つかないように距離を取った。

その途端に私に矢や風、水、土の魔法が殺到する。

火を使わなくなったか、成長したな。

そう思いながら殺到する魔法を全て防ぐ。

「……馬鹿な」

森人のつぶやきが聞こえる。

「申し訳なかった……私に敵意は無い。そもそも私は森人のハーフでもあるんだ……ここに森人が集結していると聞いて力を貸したくてやって来た」

「……人間に見えるけど?」

私の見た目に突っ込んでくる森人。

「私は森人の特徴が出なくてな、良く誤解される……奴隷の問題が起きた当時、私はリンガイルに居た事とこの見た目のおかげで被害を受けなかった」

今考えた適当な言い訳……全て嘘では無いが、私の言い訳を聞く森人達。

「信用できないわね」

そう答える森人。証明も出来ないからな……流石に無理かと諦めかけた。

「町長!?!」

「先生!?!」

すると後から来た森人達が私を見て叫ぶ。

「知り合いなの?」

信用できないと言った森人が彼らに問いかける。

「お前も話なら知ってるだろ?昔リンガイルをルセリア神王国から守り切った最強の町長だよ!」

「昔私達に魔法を教えてくれた大恩人だぞ!」

そうか……ケインがまだ生きてるんだから年長者の中には当時魔法を教えていた者達が残っていてもおかしくないな。

「なに!?!こいつ……この方が?」

「ああ!あの町は町長がいる間奴隷も作らなかつたし、今も姿が変

わらず生きているんだからハーフなのも間違いないぜ」

「急に辞めて消えてしまったんだけど、町長！どこに行ってたんですか！」

「お久しぶりです！先生！また会えて嬉しいです！」

私に声を上げる森人達、悪いが全員は覚えていない。

「大事な用があつてな。数十年ほど町を離れていた、リングイルを守れたのは皆の力があつたからだ。そして教え子達……久しぶりだな、元気そうで何よりだ」

「そうだったんですね……皆！この人は大丈夫だよ！むしろ最強の人が仲間になるんだ！大歓迎だぜ！」

「はい！先生こそお元気そうで嬉しいです！」

私の言葉に大はしゃぎの森人達、それを見て周囲の森人達も納得したのか武器を下ろす。

「申し訳ありません。ただこちらの事情も分かっていたいただきましたのです」

そう言つて一人の森人女性が頭を下げた後、握手を求めてくる。

「いや、謝るのは私の方だ……いきなりここに侵入したのは私だ。この見た目で警戒される事を考えておくべきだった、済まなかったな」

握手に答えて言う。

「私はエルフィ・マルマロウと申します。現在ここに集結している森人達をまとめている者です」

彼女は金髪をポニーテールにした胸の大きな女性だ。

「クレリア・アーティアだ……昔森人達の魔法の教師とリングイルの町長をしていた、今は特に肩書は無いな」

失敗するかと思われたが私を覚えていた森人達のおかげですんなりと受け入れてもらう事に成功した。

それから私は家を貰い住む事になった。私を知らなかった者達は

かつて私が森人に魔法を教えたのだと知ると態度を改めた。

エルファイが言うには集団戦闘に関する事や町の運営に関する事のアドバイスが欲しいらしい……戦闘はともかく運営はまともに参加していなかったんだが。

それでも出来るだけ覚えている事を教えた。役に立ったかは分からないがエルファイは伊達に森人をまとめている訳では無いようで、私が教えた事から考えを膨らませ色々やっているようだった。

集団戦闘の訓練をしながらエルファイに知っている事を助言しているある日、エルファイが訪ねて来た。

「急に悪いわね」

「構わない」

彼女をソファに座らせて飲み物を用意する、私に対する言葉遣いは普通にしてもらった。

「紅茶で良いか？モー乳もあるぞ？」

「紅茶をお願いするわ」

私は彼女に紅茶を用意する。

「さて、何か用か？」

飲み物を用意し私も対面に座り、彼女に問う。

「ええ、実は食料の見通しが良くないの」

「自給出来ないと言う事か？」

私は彼女に目を向ける。

「ええ、このままでは周囲の森に影響が出てしまう……森が死んでしまうかもしれない」

森の資源を取り尽くしてしまいそうなのか？

「自分達で作ればいい。食料を生産し家畜を育てれば解決する」

「やってはいるけど育てるのは難しいし時間もかかる、とても間に合わないわ」

俯く彼女を見ながら考えているのは巫女達と過ごした時作った農耕魔法だ。

あれなら誰でも使える、更に言えば彼女達は魔法の適性が高い森人だ。教えれば食料問題は解決するだろう。

「よし、私の作った魔法を教えよう」

「まさか……何とかする魔法があるの？」

私は彼女に農耕魔法を教える事にした。

「……更に出来た農作物の一部を家畜の餌にすれば成長を促進して家畜の卵や乳も良く取れるようになるだろう。これらは私がある村で実際に使って効果を確認している」

農耕魔法の説明をすると彼女は食いついた。使い方や注意点、副次的な効果も説明する。

「……凄いわ、これなら食糧問題が一気に解決出来る」

「この魔法があれば少ない人数で広い畑を維持出来る。魔法資質や適性が高い森人ならなおさらだ」

「貴女は私達の種族に魔法を教えた先生なのよね……どうやってこんなに魔法を極めたの？」

私を見つめてくる彼女。

「まあ色々あってな」

そう言うのと触れられたくない事だと思ってくれたのかそれ以上の追及をやめ、顎に手をやって考え始める。

「今すぐに始めれば十分に間に合う……クレリアさん。申し訳ないけれど行きますね」

そう言つて席を立つ。

「頑張れよ。この場所がどうなるかはお前達次第だろうからな」

そう言うのと彼女は頷いて出て行った、これで生活基盤は出来たかな？

それから一年後。

私が教えた農耕魔法によって森人達は周囲の環境を壊さずに安定

した食料を得た。

これからどうなるかは分からないがこのままならこの場所に永住出来るかもしれない。

私は一度他の種族の様子を見ようと一度ここを離れる事を伝え、大地人の集結地へ向かう事にした。

大地人の集結地は山間部だった。

彼らはそこまで排他的になっておらず、私が持っていたロドロフとミシヤの印が付いた古い武防具や魔道具を見ると完全とは言えなかったが信用はしてくれた。

「俺達も場所を作ろうと色々してるんだが、どうしても場所がねえんだ。何とかなんねえか？」

用意してもらった家に来ているのはガンド・ルブラス。大地人達の元締めをしている男だ。

茶色い短髪のぼさぼさ頭でいかつい顔をしている。

農耕魔法を教えた事で完全に信用は出来なくても私の知識と技術は当てに出来ると考えているようで、悩みを言ってくる。

住む場所か……そうだな……。

「時間をくれ。何とかしてみよう」

「おう、期待してるぜ……アンタの知識と技術は信用できるからな」
そう言つてガンドは家を出て行った、さてどんな物を作ろうかな。

「クレリアさんよ。どうするつもりなんだ？」

私はガンドを連れて山のふもとにやってきた私は採掘魔法を使つて見せる。

「おお!!？」

山肌の岩がくり抜かれていく、あつという間に洞窟が出来上がった

た。

「大地人でも使える様に詠唱を組んである。これで山脈を切り開きアリの巣の様になげればいくらでも住む事が出来るし、雨風も関係なくなる」

「おおお……」

ガンドは洞窟を見て呻いている、話を聞いてるんだらうか。

「すげえぜークレリアさんよ！それは俺達でも使えるんだよな!？」

私に振り向くガンド。

「お前、私の話を聞いていたか？お前達でも使える様に詠唱を組んだと言っただらう」

「これでいくらでも広げられるぜ！」

そう言っつて喜ぶガンドだが注意点もある。

「これから注意点を説明する。これを怠ると作業している者が全滅する可能性もある……しっっかり聞いて絶対に守れ。いいな？」

「……おう」

そう言うと、「全滅する可能性」に反応したのか真面目な顔になる。聞かないと実際にそうなるかもしれないからな。

それから掘り進める時の注意や空気を通すようにしなければならぬ事など、注意点をしっっかりと伝えた。

「お前……忘れるなよ？」

「仲間の命に係わるっつゝ事が良く分かった、忘れねえよ……」

こうして彼ら大地人は住処を山間部や山の中腹、麓に広げ大きくなつていった。

そして一年ほどが過ぎた頃、私は彼らに一時的に別れを告げ獣人達の元に向かった。

私は以前は狼獣人の集落にしか行っていなかったが、町になった元集落には色々な種類の獣人が居た。

私が集結地に行き手助けをしたいと言うと意見が割れる。

「自分達の為に助けを借りるべき」と言う頭脳派の獣人達と「言いたい事は分かるが他の種族の奴の力など借りたく無い」と言う肉体派の獣人だ、分かるなら賛成してくれ。

そしてまあ……どうなったかと言うと……。

「うらららららあー！」

「あたらねえ!？」

「じゃあっ!？」

「ふんっ!？」

「ふっ!？」

「くそっ!？」

様々な方向からの攻撃を飛び回り、受けて、弾いて、躲す。

結局力を見せろと言う事になり戦う事になった、こいつらは変わっていない。

最初は一対一で戦っていたのだが私の強さを見た獣人達が「自分とも戦え」と沢山挑んできた為、面倒になった私が「全員まとめてかかって来い」と言った所、私対獣人軍団になった。

「どうした!これだけで私一人倒せんのか!？」

私も楽しくなり、獣人達を煽る。すると更に獣人の数と勢いが増した。

「なめんなあああああっ!!！」

声を上げた一人の獣人、二足歩行にした熊を引き締めたような姿の男。

獣人達の長である熊の獣人、ベキア・ルトロムが突っ込んでくる。

「来い」

「うおらあああああ!!！」

隙の無い素早く破壊力のある突きを繰り出してくるベキア、私はその腕を土台に逆立ちをしてそのまま回転し、後頭部に膝を入れた。

「っが!うおおおあああ!？」

私のいた場所にもう片方の腕を振るが私は彼を蹴って離れる。

「逃がさねえぞ!？」

着地を狙って他の獣人も殺到してくる。

私は獣人の一人が空中で繰り出してきた蹴りを受けてボールの様に飛んで行き、木の上に着地する。

「何とも無いな」

首をかしげながらそう言うと獣人達が再び飛びかかって来る、それから私と獣人達の戦いは長く続いた。

「いやあ完敗だ！認めるしかないじゃないか！」

戦闘以外では意外とまともなベキアが言う。

「認めてくれたようで何よりだ」

今はベキアの家で二人で話をしている、あの後獣人全員が疲労で倒れるまで戦ったのだ。

「……クレリアさん。あんたは自分を森人とのハーフだって言ったけど……」

ベキアは真剣な目で私を見つめる。

「あの強さはそんなんじゃない。あんた……一体何者なんだ？」

多少やりすぎたか。

「私は皆と同じこの世界に住む一つの存在だよ。多少違うだけだ」

「はあ……深くは聞かないよ。その気になれば俺達全員を殺せただしね」

どこであつても数が集まれば食料の問題は起こるようで、頭脳担当の獣人から食料の補充について知恵を貸して欲しいと言われた。

「……素晴らしい魔法ですな……我々にも使えるのですね？」

獣人達から声上がる。

「獣人でも使える様に調整している、問題無いはずだ」

彼らに農耕魔法を教えると他の種族同様その効果にすぐに食いつ

いた。

「戦闘が苦手な者達に覚えて貰いましょうか」

「そうですね。戦士達には戦う事に集中して貰いたい、内政は我々が支えなければ」

こうして獣人達にも農耕魔法が広まる事になった。

それから一年と少しかかって彼らの食糧事情が安定すると、私は一時的に離れる事を告げてウルグラードに帰った。

各種族の所に約一年ずつ、合計約三年程を過ごして私はウルグラードに帰って来た。

これから国に至るのか、分裂してしまうのか、消えてしまうのか……どうなるかは分からないが楽しみにしていよう。

彼らに頼んで通貨を統一硬貨のままにしたのは正解だった、国ごとに変わると私が面倒だからな。

私は自分の屋敷に戻りソファに座る。少しゆっくりしたらモー乳販売店に行こう。

それから私は五年程、三種族の町とウルグラードを往復して過ごした。

約五年程私が各種族の町とウルグラードを往復している間に、各種族の町は都市を超えて急速に発展していた。

ある日、私はいつもの様に森人達の都市に来ていた。

周囲の地域には農地や畜産場が広がり各町の道も整備され安全を維持出来るように頑張っているようだ。

更に治安維持と外敵からの防衛の為の治安維持隊と警備隊が作られた。

この辺りの名前はウルグラードやルセリア神王国と同じになった。

他の二種族も同じ物を作っている。

他の種族が攻めて来る事も三種族達は考えていて、軍や防衛の為の建物も作っているみたいだな。

「こんにちはクレリアさん」

私はやって来たエルフィをソファに誘導する。

「わざわざ来るとは何かあったのか？」

貰った家でモー乳を飲んでいたらエルフィが会いに来た。

「改めてお礼を言いたかったのよ」

紅茶を用意しながら聞く。

「私の暇潰しみたいな物だよ」

「それでもよ……ありがとうございますクレリアさん。私達に知恵と魔法と技術を与えてくれて」

紅茶をエルフィに出し、座った所で彼女は頭を下げた。

「知っている事だけで力になれない分野も多くあったと思うが……

その感謝は貰っておこう」

彼女は頭を上げて微笑む。

「私は国を作ろうと思います」

「そうか」

真剣な表情の彼女を見る。

「一緒に名前を考えてくれませんか？」

「私にセンスを期待されても困る」

私はそう言っつてモー乳を飲む。

「私もある訳では無いわよ」

エルフィが苦笑いを浮かべた。

その後二人で話し合い、国の中心である世界樹のあるこの都市をユグラドと名付け「森林国家ユグラド」とする事に決まった。

私は大地人の住処にやって来た。

山間部や山の中腹、ふもとに都市は拡大し、周囲にも大小の町が出

来た。周囲の鉱石資源もあり順調に彼らの住処は広がって行った。治安の維持や防衛のための組織や制度も完成した。農耕魔法によって畑と家畜も数を増やし、要所には防衛の為の砦が作られた。

「これは？」

私はガンドが渡してきた大きい弓の様な物を見る。今いるのは武器を作っている工房だ。

「これは俺達が開発した魔道弓だ」

「ほう……詳しく聞いても良いのか？」

私は弓を眺める。

「クレリア嬢になら構わねえよ」

ガンドが言うには大地人は魔法資質や適正が低い者が多く、効果的な遠距離攻撃魔法を使える者が少ない。

それを何とかしようと開発したのが魔道武器で、魔道弓と言うらしい。

魔道武器は主に彼らが苦手な遠距離の戦闘に使う物が考えられており、これが第一弾なんだとか。

魔道具の技術を活用して今まで人の手で行っていた引き絞り、放つという動作を僅かな魔力で自動で行う。

自動化のおかげで大型化を可能にし威力と飛距離、時間当たりの発射数が増加している上に魔力が切れない限り肉体的な疲労をかなり減らして撃つ事が出来る。

「矢は手でセットしなきゃならねえがそれだけだ、その上接近されても体力は残っているから戦える」

そう言って笑うガンド。

「これは凄いな……武器に魔道具の回路を組み込んで魔法を発動する物はあるがそれを動作の自動化に使うか」

聞けば「なるほど」と思うがその発想が出来るかが問題だ、少なくとも私は今まで考えた事が無かった。

「これは戦いを変えそうだな」

弓をガンドに返す。

「ただ、簡単に作れるもんじゃねえんだ……量が用意出来ない」

彼は弓を眺めている、量産は難しいか。

「今の所、要所にいくつか配備出来れば良いぐらいか？」

「そうだな……魔道弓は部品が摩耗しない限りずっと使える、数の関係で同時には無理だが交代でずっと撃ち続ける事が出来る」

弓を慎重に収納して戻ってくる彼。

「狙うとすりゃあ……前衛じゃなくて後方に控える魔法使いだろうな」

「命中精度は？」

「良くはねえな。魔法使いの集団に撃ち込んで誰かに当たればいいくらいか……数が居れば誰かに当たんだろ？」

そう言っただけは笑った、面白い物を見せてもらった、私は礼を言うとうるぐらうに帰った。

後日。再び訪れた時に中心の都市をガンドウと名付ける事、国を作るつもりである事とその国に「魔工国ガンドウ」と名付ける事を聞いた。

久しぶりに私は獣人の都市にやって来た。他の種族の様に農耕や牧畜、治安の維持などの制度が整い各町や村との道と彼ら獣人独特の獣道が作られていた。

獣道とは何だと聞いた所、一見道に見えなくても獣人達はそこを使っただけで来る事が出来る道だそう。

他の種族にばれないよう移動したり、奇襲したりと色々使えるらしい。

更に肉体強化魔法も改良を重ねられ、単独での戦闘能力は大きく上がった。

他の種族が彼らと戦うなら相応の装備か人数、効果的な作戦が必要になりそう。

「どうかな？皆も大分強くなったよ」

ベキアは私の隣で嬉しそうに、今私は鍛錬場で戦闘を見ている……

鍛錬場で戦う獣人達は確かに良い動きをしている、他の種族とは比べ物にならない。

「油断すると負けるぞ」

そう言うのと彼は私を見る。

「あー……油断はしないように言っただけ元々の気質と言うか……中々上手くは行かないよ」

「ぼつが悪そうな表情をする彼。」

「もし大勢や強力な敵と戦う時は頭脳担当の連中と話し合えよ？」

「当然さ、分かっているよ」

彼は胸を張る。

「話し合った事を守る様にも言っておけよ」

「……分かっているよ」

彼は何とも言えない表情になった、頑張れ。

再び訪れた際にいつの間にか都市の一つの名前がカルガになり「獣王国カルガ」と言う国になっていた。

他二種族の都市もさほど間を置かず建国を宣言して国となる。

こうして世界にはルセリア神王国、森林国家ユグラド、魔工国ガンドウ、獣王国カルガの四国が存在する事になった。

四国が存在するようになったが現在それぞれの国の領土は隣接していない。

噂くらいは各国共に耳にしているかも知れないが、既に四国になっているとはどの国も思っていないかもしれない。

私は三国間を行ったり来たりしていたが、ある日ユグラドに来た私にエルファイがギルドについて聞いてきた。

「ギルドについて知りたいと?」

久しぶりにエルファイに会いに行くとソファに案内され、尋ねられた。

「ええ、私達もギルドを作りたいと思っているの」

「何故私に?」

「貴女は人間の町の町長だったのでしよう?ギルド商会システムについて詳しく知っているかと思って」

確かに知っている、町長時代に聞いたからな。

「頼ってばかりで申し訳ないけれど……」

「良いぞ、教えよう。私はこの国の行く末が見られればいいからな」
彼女はきよとんとした顔をする。

「貴女って不思議な考え方するわよね?……私達は確かに他の種族より寿命が長いけど……なんていうかもっと遠い未来まで見られるような言い方だわ」

「僅かな時間でも大きく変わる事もある」

そう言うと彼女は笑う。

「実際に国が出来たりしているものね?」

そして私は国の主要な人物を集めて貰い、ギルド商会の説明をした。

ギルド説明を終えてユグラドの自宅に帰る途中、子供達が集まって何やらやっているのを見かけた。

何事かと思い覗いてみると地面に多重円が書かれていて、子供達が魔法で小さい石を作りそれに向かって転がしている。

「ちよつといいか?……これは何なんだ?」

「お姉ちゃん知らないの? 教えたいよ!」

訪ねた少女が元気に教えてくれる。

円の中心程点数が高く、石を複数交互に転がしてより点数が高い方が勝ち……と。

「それでね……!」

相手の石にぶつけて弾いて相手の点数を減らしたりしても良いと、中々面白そうだな。

「私もやって良いか?」

「いいよ! じゃあ私とやろ!」

少女と対戦する事になった。

「転がらない石は駄目だよ? 石は三個ね!」

円から離れた所に二人で並ぶ、私は小さい丸い石を三個作った。

「お姉ちゃん凄いや! まん丸!」

「おっ!」

私が作った滑らかで綺麗な丸い石に驚く少女と周囲の子供達。

「でもお姉ちゃん、そんなに綺麗な石と転がり過ぎちゃうかもよ?」
なるほど……石の転がりやすさと投げる力で調節しないといけないのか。

「私はこの石!」

彼女はでこぼこした形の悪い石を三個作った、それ以上丸く出来ないのか?

「お姉ちゃんお先にどうぞ!」

そう言われて石を転がす、石は円の一番外周の左寄りに止まった。

「じゃあ行くよ!」

少女は石を転がす。強めだと思った勢いは石の形によって抑えられ、内側から三番目のやや右寄りに止まる。

「次は上手くやる」

私は石を慎重に転がした、石は真つ直ぐ進み中央の奥側に止まる。

「よし」

周囲から歓声が上がる。

「やるねお姉ちゃん」

彼女はそう言うときつきよりさらに強めに石を転がす、その石は先ほど私が投げた中央奥の石に当たり彼女の石は中央に残り……当てられた私の石はスムーズに円の外まで転がって行った。

盛り上がる子供達。

「そう言う事か……」

綺麗な丸石では当てられた時耐えられない、相手に当てられるだけの技量がある時は簡単に弾かれてしまう訳だ。

「あ、作った石は変えられないからね？」

そう言つて笑う。

「これは厳しいな」

私は中央の彼女の石を狙つて投げる……当たつたが彼女の石は綺麗な球体ではない。

当たつて僅かに動きはしたが円から出す事は出来ず、投げた私の石も内側から三番目の奥側左に止まる。

「これで最後だね」

少女が石を投げる、石は内側二番目のほぼ中央に止まった。

「私の負けか」

負けはしたが面白かった、簡単な勝負だと思つたが奥が深い。

「初めてなのに真ん中に入れるなんてお姉ちゃん凄いね！危なかったよー」

彼女が微笑んで言う。

「面白かったよ、ありがとう」

「私も面白かった！また遊ぼうね！」

私はその場を離れて家に帰った。

「うーん……」

私が何となくガンドの工房に立ち寄った際に、ガンドが唸っているのを見つけた。

「何を唸っているんだ」

歩み寄りながら声をかける。

「おお？嬢ちゃんか……ちよつと考え事をな」

そう言っただけは工房の椅子に座る。

「魔道武器の事か？」

「そうじゃない……いや、それもだが今は違う」

私は椅子に座って続きを促す。

「人間達のギルド商會つてのをこの国でも作ろうかと思っただよ」

「いい考えだと思っただよ、きつとこの国でも有効だろ」

「だよなあ……でもよ、詳しい奴が居ないんだよ」

彼が顎に手をやって考え込む。

「私でよければ教えるが」

彼は勢いよく私を見た。

「ほんとか!?!……しかしなんでそんな事知っただよ？」

不思議そうな顔で聞いてくる。

「昔町長をしていた事があつたな……その時に覚えた。少し古いか

も知れないが基本は今も変わらないと思う」

「クレリア嬢は多芸だな……教えてくれるならありがたい、よろし

く頼む」

「すぐにでも教えられるがどうする？」

「頼む」

彼は頭を下げ、皆を呼んだ。

こうして魔工国ガンドウにギルド商會が出来た。

「所で、魔道弓の試射をしてみないか？」

「どうした、いきなり」

時が経ち、ギルド商会が軌道に乗ったある日。ガンドが私に声をかけて来た。

「他の種族が使うとどうなるのか見て見たくてな、使用感を聞かせて欲しい」

「私では意味が無いと思うが……」

結局興味があつた事もあり、試射をする事にした。

試射場へ移動した私は魔道弓を渡される。

「良いか？魔力は弱く流してくれよ？」

「分かった」

私は魔道弓を持ち射撃位置へ移動する。

「重量はどうだ？」

「……それなりに重いな」

私は片手で持つて重さを確かめる。

「……身体強化魔法とか使ってるか？」

「使つて無いな」

「……とりあえず撃つてみてくれ」

彼は何やら考えている様子だ。

私はそんな彼から意識を移し、遠くの的に狙いを定めて僅かに魔力を流す。

勝手に弓が引き絞られて射られ、反動で私は後ろに倒れた。

「大丈夫か!？」

ガンドが近寄ってくる。

私自身は強靱でも体重が軽いままだった。もつとしつかり構えるなり体重を重くするなりしないと反動で倒れる。

「平気だ。それよりもう一射良いか？」

「良いけどよ……」

心配そうな彼を横目で見ながら構える、足を開き体重を少し増やし

て反動に備える。

魔力を流し射撃する……今度は問題無く撃つ事が出来た。隣に置いてある矢をセットしては射撃する。放った矢は的には当たるが中心には一本も当たらない……確かに命中精度は良くないな。

「大地人ならば問題無いが重い上に反動が大きい。獣人も使えるだろうが森人や人間では難しいかも知れないな……勿論身体強化魔法抜きでの話だが」

射撃しながら言う。

「そ、そうか」

彼の返事を聞きながらしばらく射撃した後、私は射撃を止めて彼に言う。

「このままでは使用出来ない者達の為に固定する台があると良いんじゃないか？脱着出来るとなお良い……まあ参考程度にな」

「……ふむ、なるほどな」

「命中精度の事は今の所思いつかないな」

魔道弓を弓立に戻す。

「ありがとよお嬢、参考になったぜ」

「それは良かった」

その後、食事を用意して貰ったので食べてから帰った。

私が久しぶりにカルガで獣人の頭脳担当達と森を見ながらお茶を飲んでみると、ベキアがやってきた。

「やっと見つけたぜクレリア」

「どうしたベキア」

私に歩み寄る彼、頭脳担当達は彼の話の邪魔をする気はないようである。黙っている。

「あれ？こいつらと居るから聞いてると思ったが……話してないのか？」

頭脳担当達に言うベキア、彼らの一人がお茶を置く。

「今は休憩していました。飲み終わった時に話そうと思っていたのですが……」

頭脳担当の一人がこちらをちらりと見る。

「飲みながらでも良いぞ？話してくれ」

そう言うのとベキアが話し出す。

「なら俺から話そうかな」

彼は近場の岩に座り、頭脳担当達を見ながら言う。

「こいつらが人間達のギルド商会システムをこの国に導入したいと言って来てな」

彼は視線を私に戻す。

「クレリアは知ってるんだろ？こいつらに話はしてみたみたいじゃないか」

確かにギルド商会について彼らに話した事はある、覚えてたんだな。

「それで、導入するのか？」

彼は腕を組む。

「導入した方が良いとこいつらが言うからな……俺以外だったらやらなかったかもしれないが、その方が良いのなら俺は導入しようと思ってる」

「上手く行くと良いな」

彼は不敵な笑いを浮かべる。

「行かせるさ。無理やりにもな……頭脳担当達の事は信じてるし、締める所は締めないと国としてやっていけない事が分かったしな」

「治安維持隊なんかは獣人特有の考え方ではやれないからな」

私が言うのと彼は頷く。

「その辺は厳選してる。後は子供達の教育でも抑える時は抑える事をしっかり教えるつもりだよ」

「獣の本能は厄介だな」

「悪い事ばかりじゃ無いんだけどな」

ベキアだけでなく頭脳担当達も苦笑いしている。

そのまま彼らにギルド商会の事を教えてお茶の時間は終わった。

ギルド商会の説明を終えてしばらくの時間が経ち、私は都市内の広場に居るのだが……。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん」

「遊ぼー」

「眠いー」

「あつたかーい」

私は獣人の子供に群がられて埋もれていた。

通りがかった時に子供が泣いていたので魔法であやしたら懐かれてしまった。

広場の子供達がまとわりついてくる。子供の柔らかい肌と体毛がすべすべ、ふわふわする。

「うーむ……」

広場に寝ころび子供が群がっている状態のまま唸る私。無理やりどけるのも可哀そうだしな……。

基本的に悪意が無い子供に私は甘いようだ、勿論必要な時は殺すが。

子供の相手は得意では無いがやった事が無い訳でも無い。この子達の気が済むまでこうしていようか。

「あらあら、大丈夫？お嬢ちゃん」

寝転がっている私の視界に獣人女性が覗き込んでくる。

「大丈夫だ。嫌と言う訳じゃない」

「それならいいけど……あら？貴女獣人じゃないわね？」

彼女は少し探るような目を向けてくる。

「ああ、私は森人のハーフでベキアの知り合いだ。国を作る協力をしている……不安なら彼を呼んでくると良い」

そう言うと彼女は少し考えた後言う。

「そう、そこまで言うなら平気かしら……ゆっくりしていつてね」

そう言って微笑んで去って行った、信じてくれたようで良かった。こうしてモフモフに群がられて時間をつぶしていると頭の方から声がする。

「何だよやっぱりクレリアじゃないか……」

ベキアが覗き込んで来た。

「どうしたベキア？」

「獣人じゃない俺の知り合いって言う奴が子供のそばに居るから来て欲しいって言われたんだよ」

駄目だったようだ、本当に彼に言いに行つたんだな。

「クレリアだと思つたけどな。もしもって事もあるし」

私のそばでしゃがむ彼。

「その考え方は悪くない」

私がそう言くと子供達をみる彼、私も目を向けると群がったまま皆眠っていた。

「俺は国を強くするよ、こいつらを守るんだ」

「頑張るんだな、初代国王」

「やめろよ」

彼は気恥ずかしそうに笑って帰って行った。

私は子供達が目覚めるまで寝息を聞きながら空を見ていた。

ウルグラードにある自宅で風呂の湯舟にうつぶせに浮かびながら、私はふと頭にある知識の事を考えた。

後から身に付けた知識と混ざり合ってしまったているが、聞き覚えが無い物が元からあった知識なので判別は出来る。

例を挙げると「科学」と言う言葉などだ。これだけでは何の事だか全く分からない。

これだと名前が同じでも知識にある物と同じか分からない。この辺りは諦めているが……。

いつかは知識にある事が実際に私の前に現れるかも知れない……

もしかしたら私自身が発見するかも知れないが。

少し楽しみだが……期待しすぎないようにしないとな。

湯舟から上がり体を拭き魔法で水気を飛ばす、今日は家で食事を作ろう。

各新興国にギルド商会が出来てから四年が経った。

森林国家ユグランド、魔工国ガンドウ、獣王国カルガの三国は今も成長を続けている。

三国はもう国として完全に形になった。

これからは領地を広げるのかこのまま維持するのは分からないが、もう私が何かする事は無くなるだろう。

そう思いながら休憩がてら首都であるカルガの中を散策していると、大通りで並んだ大勢の獣人が都市の外へと進んで行くのが見えた。

あれだけの数を集めるとは、何かするのか？

興味を持った私はベキアの所に向かい話を聞いてみる事にした。

「それは開拓部隊の準備だよ」

ベキアは私の正面のソファに座って言う。

「森を切り開いて村にするのか？」

「ああ、そろそろ領地を広げようと思ってね」

「簡単に来れるのか？」

彼は考えるそぶりを見せる。

「簡単ではないかな。森の奥を切り開いて安全に過ごさせて自給出来るだけの拠点を作るのは意外と大変だよ」

「それまでは野宿の様な物か」

「獣人は村の場所を稀に変えるから、慣れてはいるよ……きつと周囲の資源を取り尽くさないように自然と習慣になつて行つたんだと俺は思ってる」

彼は大きい木のコップで水を飲む、私も用意された紅茶を飲んだ。

「食料を自分達で作る事で移動する必要も無くなった。ギルド商会

の事もある……クレリアには返しきれない恩を感じてる」
彼は私を見る。

「この国に興味がなければ見捨てていたかもな」

「理由はどうであつても俺達は実際に救われた」

そう言った彼に私は僅かに笑う。

「好きに思っていればいい」

「そうさせてもらうよ」

そう言つて彼は笑つた……だが私はその気にならなければ本当に見捨てただろう。

「所で……その開拓、私も行つて良いか？」

「それは構わないけどな……」

言葉に詰まる。

「何かあるのか？」

「散々世話になつて開拓まで手伝つて貰うのはな……俺達の気持ちの問題があるんだ」

彼にしては珍しく言い淀んでいるな。

「何が言いたいんだ？」

「出来るだけ助けるのは最低限にして欲しいんだ」

「私がやれば早いぞ？」

「だから俺達の気持ちの問題なのさ、これ以上借りを増やしたくないんだよ」

両手を組み、私を見つめる。

「……分かつた出来るだけついて行くだけにしよう」

「ありがとう、頼むよ」

「場合によつては気にせず手を出すからな？」

そう言つと彼は頷いた。

私がこうやつて提案を聞いて動くのは彼らを気に入っている証拠かもしれない。

気に入らない者の言う事など私は聞かないからな。

それに誰かの頼みを聞いて助けるのも中々楽しいと感じているのも確かだ。

こうして私は獣王国カルガの開拓部隊に、彼らの仕事を見届けると言う名目でついて行く事になった。

部隊は村を作る為の防衛や耕作など目的毎に分かれていて、それらをまとめて一つの開拓部隊として送っていると聞いた。

更に交代でずっと作業をする事で無防備になる時間を無くし、拠点の素早い構築を目指すらしい。

私は大まかに聞いた内容を思い出しながら部隊の後方で歩いていた。

馬車などは道が悪すぎて入れない、その代わりマジックボックスを覚えていく者が集められている。

マジックボックス持ちはまだまだ貴重だ、容量が大きければその重要性は一気に上がる、どの場所でも優遇されるだろう。

恐らく防衛の硬い部隊の中央付近で守られているだろう。ある程度安全を確保して本国との行き来が可能になるまでは現地でどうかしなければならぬ。

様々な物資を保管出来る彼らの存在は部隊の生命線ともいえる。

そして私は周囲からどうしていいか分からないような目が向けられている。

わざわざ名を広めている訳では無いから国内にも私を知らない者は大勢いる、獣人では無い……けれど部隊の上の者は特に何も言わない。

私がどういった立ち位置なのか分からないのかもしれないな。

「少し良いか？」

私は移動して部隊の隊長に声をかける。流石に各部隊の隊長などのまとめ役にはベキアが私の同行を認めていると伝えられている。

「何でしょう？」

「目的地に到着する迄の時間はどれ位かかるか分かるか？」

隊長は少し考える仕草をした後答えてくれた。

「上手く行けば一週間ほどだと思えます」

「上手く行けばか」

「はい。道中の下調べはしていますが、魔物の領域は何があるかわかりませんから」

彼は真面目な声で言う、流石に良い人材を集めているな。

初日は小型の獣などが来た程度で終わった。隊はそれぞれに野営をして交代で見張りをする、全員に負担が分散するように考えているようだな。

私も割り振られた野営で食事をする。しかし道中は木が無く、馬車は無理でも人は通れる様になっていたな。

その事を訪ねてみると、前々から下見を行い部隊を送る為に軽く木を伐採して迷う事が無いように経路を作っていたようだ。

本格的な整地は拠点を作って安定してからすると言う。それも含めるとかなり以前からの計画なのか。

周囲では隊員が作業をこなしている。ベキアも良くここまで練度を上げたな、暴走や勝手な行動をする気配が殆ど無い。

開拓部隊だから特に優秀なのだとは思う。

魔物の縄張りの真ただ中でそんな事したら被害が大きそうだしな、人員には気を遣うだろう。

「そろそろお休みください」

私のそばに歩み寄りながら隊長が促してくる、ここは大人しく寝た振りをしておくかな。

「分かった、休ませてもらうよ」

焚火の周囲に大き目の仮設テントが並ぶ。

私は女性扱いなので女性用の物に入る、薄いベッドロールの上に寝転び渡されていたマントをかける。

寝る事が無い私は目を閉じ、周囲の気配を探りながら時間をつぶした。

一度魔物が近づいて来たのを感じたがすぐに離れて行った。

明け方に私は魔物が群れで向かって来ているのを感じた。

まだ遠いが誰も気が付かないようならベキアには悪いが教えるか。

「魔物だ！・戦闘準備！」

魔物がだいたい野営地に迫った時、甲高い音と叫ぶ声が聞こえた。

周囲で寝ていた女性隊員が飛び起き隣に置いてある装備を付け始める。

取り合えず様子を見に行こうと外に出ようとすると、隊員に止められてしまった。

「外に出ても良いけど焚火の辺りから離れないでね！」

そう言って飛び出していく隊員達、外に出ると防衛や治療の準備など皆忙しそうに動いている。

何かしても良いが……出来るだけ手を貸さない約束だしな。

程なく魔物は討伐された。魔物達の死体は部隊の補給物資になり治療と食事をした後、野営地を解体して移動が始まる。

最後尾を移動中、頭上に果実が生っているのを見つけた。

風魔法で果実を切って落とす。

落ちてくる果実を水魔法で受け止めて洗い、風魔法で皮をむく。

「……どうした？・食べるか？」

気が付けば隣にいる隊員が私を見ていた、私は風魔法で切り分けようとした。

「……いえ、貴女が食べて下さい」

「そうか」

私は切り分けるのを止めて果実に噛みついた。

酸っぱいが甘みもある、みずみずしくて爽やかな味と言えるかも知

れない。私が知らない美味しい物もまだ森にあるんだろうな。

二日目、三日目は多少の魔物の邪魔はあったが特に問題無く進んだ。

そして四日目、昼にはまだ少しある時間に森の木々の上に何かが集まって来ているのを感じた。

上を取られると不利だ、これは少し言っておくか。

「ちよつといいか?」

私は隊長の所へ行き声をかける。

「何でしようか?」

「森の木の上に何かが集まって来ている、大型の生き物では無いが数がそれなりに居るぞ」

そう言うのと隊長の顔が引き締まった。すぐに各隊に連絡が行き警戒状態に移行し彼らも集まっていた存在を発見した。

小型の魔物で、長い手足と尻尾で森の中を移動し油断している獲物に上から集団で襲い掛かるようだ。

隊が警戒し始めると諦めたのか散って行くのを感じる。

「もう大丈夫だ、奴らは散って行った」

「ありがとうございますクレリアさん」

隊長が礼を言ってくる。

「よく私が言った事をすぐ信じて行動に移したな?」

彼の方を見ると彼も私を見た。

「上からもしもあなたが無かを警告した時は絶対に信じて即行動するように言われています……その言葉は間違っていないませんでした」

そう言って一礼し去って行った、私が必ず口を出すと読んでいたのかな。

その後、散発的に襲い掛かってくる魔物達を物資にしながら進み、目的地に到着したのは出発してから九日目の昼前だった。

途中から時間は気にしていなかったが予定より遅いな。

到着した開拓部隊は即座にそれぞれの行動を始めたようだ、詳しく聞いていないがみんな忙しく動き回っている。

私は特に何もせず予定地の中をうろついていたが、声がかかる。

「すみませんが到着したとはいえ周囲の安全は保障できません。部隊の中心にいて下さい」

一人の長身の女性隊員が私に話しかけてくる。それに答える前に両手で箱を抱えた短身の女性隊員が言う。

「彼女は大丈夫だ、魔物なんかには負けるような人じゃない」

今度から大勢に紛れ込む時は全員に通達して貰おうかな、お互いに手間だ。

「しかし危険では？」

長身女性隊員が短身女性隊員に言う。

「彼女は例の戦いの人だぞ」

「えっ？彼女が？」

長身女性隊員が私を見る。

「例の戦いというと、戦士達との集団戦の事か？」

私が聞くと短身女性隊員が私の方を向いて言う。

「はい。私は見ていました……あの時の貴女のとてつもない強さは今もはつきりと覚えています」

「失礼しました、ご自由にどうぞ」

長身女性隊員がそう言いながら軽く頭を下げ、去っていく。

「気を付けてな」

「はい。そちらもお気を付けて」

私の言葉に返して短身女性隊員は目礼をし、仕事に戻って行く。

その後うろついていたが特に興味を引くような物も無く、私は結局焚火の前で座ったまま動き回る隊員達を見ていた。

仮設の拠点を作っても安全には程遠い。

ここからは交代しながら昼夜問わず拠点の構築、周囲の安全確保、樹木の伐採と資材の確保、農地の作成など多方面にやるべき事は多いらしく、まだまだこれからだという事を聞いた。

到着した日の夜。交代要員はすでに就寝し、あちこちに焚火と松明が用意され、場所によっては明かりの魔法もかかっている。

昼間の内に広げた土地は僅かだったがぼっかり空いた空から差し込む月明りが周囲を照らしている。

木々を伐採して月明りが届く場所を増やせればそれだけでもかなり違いそうだ。

周囲からは作業の音に混じって何かの鳴き声らしき様々な音が聞こえる。

私は夜の見張りに入れてもらい周囲の気配を探りながら魔法を使い手元で色々とやっていた。

水球を出したり凍らせたり、炎で文字を書いたり、土で色々な物を作ってみたり、風で葉っぱを自在に動かしたり……遊びや暇潰しの様に見えても行う内容の難易度を上げれば魔法の訓練になる。

水氷土火風が交じりあった球体を作り出してみる。これが一番難易度が高いかも知れない、それぞれの干渉を防ぎながら完璧に制御しないと崩壊する。

……ん？

曇って来たと思えば僅かに雨が降って来た。

私は雨の日があまり好きでは無いから雨が降ると大体家に引つ込むのだが……今はそんな事を言っていられない場所だからな。

このぐらいなら焚火は消えないだろう。

私は自分の体を雨から守りながら魔法球で時間を潰す。

途中で通りかかった隊員が驚いたような表情でこちらを見ていた。

夜明け前に雨は上がった。

日が昇り始めた辺りで魔法球を消し、交代の隊員が起きて来るのを待つ。

曇り空で日が昇っても少し暗いな。

交代の時間が近づくと交代する隊員が作業を中断して集まった。

警備だけは交代の穴を作らないため直接交代要員が向かって交代する。

私は集まって来た一人に声をかける。

「どの担当か知らないが上手く行きそうか？」

声をかけられた優しい気な隊員の男は私のそばに近寄って答える。

「僕は建築担当の一人だよ。魔法や魔道具があってもすぐには出来ないね……ただ問題がある訳じゃないからこのままなら予定通りに完成すると思うよ」

「そうか、それは良かった」

「君は獣人では無いよね？どうして参加したんだい？」

そう聞いてくる、特に悪い感情がある訳ではなさそうだ。

「ベキアの……国王の知り合いでな。この開拓が上手く行くように見届ける役目を頼まれてな」

実際は私が行きたいと言って用意された立場だが。

「国王の……道理で隊長達が何も言わない訳だ」

そう言って笑う。

話しているうちに交代要員が揃ってやって来た。

彼らはこれから食事をしたり風呂に……風呂はあるのか？まあ体を拭いたりして寝るのだろう。

私も入りたいし……風呂を作ろうか……うん、やはり風呂は欲しい。

無ければ作ろう。

開拓部隊の大隊長……ここでの最高指揮官に許可は貰った。

まずは寝た方がいいと言われ、昼間に魔法で作ると周りが騒ぎそう
だという理由もあり夜を待つ事にした。

テントに行き風呂場の間取りを考えながら夜を待ち現在に至る。
場所は仮設食堂の隣だ、そばに川が流れていて排水に便利だから決
めた。

まずは魔法で石の大きな建物を作り中心を壁で分割して男女の
入り口を作る。

中心を分割している壁を中心に線対象になる様に脱衣所を作り、同
じように浴場に浴槽と洗い場を作る。

仮設の風呂場だしこれ位でいいか……。

それなりの出来に納得した私は、マジックボックスから魔力保存用
の魔道具とお湯を出す魔道具を取り出して埋め込み管理室を作った。
そこから水路を男女の浴槽につなぐ、人数が居るから浴槽は大きく
作った。

洗い場の水道に通すお湯も同じように魔道具を配置して最後は浴
槽に合流させる、浴槽からあふれたお湯と洗い場で使ったお湯は排水
溝から川に排水する。

上手く行ってるだろうか？

魔力を補充し魔道具を作動させて女湯の方に行くと既にお湯が出
て来ている、湯温も良い感じだな。

洗い場の水道を開けると手元にしっかりお湯が出て来る……そう
だ、桶も用意しないとな。

すぐに木材で適当な数の桶を作り浴場の入り口近くに積み上げた。
石鹸もある程度は用意しておいてやろう。あくまで私が入るため
のついでだが、無くなる前に本国と流通が出来る様になれば取り寄せ
られるだろう。

男湯の方も一通り確認して問題が無い事を確認した私は、お湯が満
ちるのを待ってしばし風呂を楽しんだ。

その後大隊長に浴場を作った事と時折魔力の補充が必要な事、入る
少し前にお湯を出す魔道具を作動させる必要がある事など必要な事
を伝え、夜の見張りに戻った。

翌日。浴場が出来た事に対する反響は大きかった、特に女性隊員が大喜びした。

誰が作ったのかと質問もあつたが大隊長は何も言わなかった。

一部の隊員は私の方を見ていたが……知らんな。私が風呂に入れたかつたんだ。

風呂に入れるようになったみんなは身体的にも精神的にも負担が減つたように見える、実際に当初の予定よりある程度早く作業が進んでいった。

開拓で一番の難所は、開拓し始めてから拠点完成するまでの間だと思つているが……これからは少しずつ楽になつていくのだろうか？

それから時折地上の魔物と、極稀に空の魔物の襲撃があつたが、大きな問題は起こる事は無く拠点は村と言つて良い状態に作り上げられた。

拠点が村として完成し、昼夜問わず作業をする事が無くなつてから三日間休養を取つた。

人員の余裕が出来たのでこれからは本国に向かう街道の整備に取り掛かるらしい。

「しかし、ここまで来るのに何日かかった？それだけの距離を整地するのはかなりかかるのでは無いか？」

整備開始の日の朝、私は近くに居た部隊の女性隊長と話をしていた。

「間違いなく時間がかかる作業ではありますが、こちらからは全体の半分以下で済むはずですよ」

「何故だ？」

問いかける私を見ながら彼女は説明する。

「出発時に街道整備をしていたのを見ませんでしたか？」

まったく気にしていなかった、していたか？

「見ていないな。忘れていると言う事は無いと思いたいが」

「そうでしたか。実は私達開拓部隊が出発するより前から本国側からも街道整備をしているんです」

「……なるほど、言いたい事が分かった」

開拓した村側と本国側から道を作っていつてつなげる訳だ、これなら村側は半分以下で済む。

「まあそういった方法を取っているので、こちらの負担は半分以下になる訳です」

そう言って笑い彼女は続けた。

「更に言うとうと道を作る場所は我々が移動してきた道なので一から整備する訳ではありませんから」

「開拓は大変なんだな」

「それでも国を大きくするにはやらなければいけませんからね」

彼女はクスリと笑ってそう言う。「もう行かなくては」と言っ去って行った。

私は魔法なりこの体の力なりで簡単に整地して魔法で家を建てるが、一般的な開拓がここまで手間のかかる物だとは知らなかった。

私が魔法を使って村を作った時、それを見ていた巫女達が驚いていた理由が今分かった。

これだけの手間と時間がかかる開拓をあつという間に、それも一人でやれば驚きもする。

私もついて行き街道整備を見物していたのだが、地面をひたすらに固めて平らにして行くという単純な物だった。

しかしこれはもどかしい。

魔法で一気に平らにして石の道でも作ればいいと思う。

出来るだけ見守る事にしよう、周囲の安全確保でもしようか。心配だけは探っておこう。

身体強化と地面を平らにする作業は相性がいいのか、石や岩を道の外に放り投げ、木の根などを引き抜いて、でこぼこだった道を順調にならして行く。

だが、いくら距離が半分以下で順調でも一日の大半は食事や睡眠などに使う事になる。

それに作業中の警備と野営地の警備や維持に人数を取られて作業出来る者が思ったより少ないのも原因か。

更に整備が進めば野営地も移動させなければいけないしな。

私の様に食事や睡眠も休憩もいらぬのなら楽なんだが、獣人達には不可能だろう。

本国側は早いだろうからそちらに期待だな。

最終的に本国側の整備部隊に合流するまで天候や魔物の妨害もあり一か月近くの時間がかかった。

私はその時点で開拓部隊と別れてカルガに戻ったが、まだ魔物の不意打ちを防ぐために道沿いの木をある程度切り倒したり、魔物を追い払ったりとやる事はあるらしい。

帰って来た私は開拓が上手く行った事を伝えるためにベキアの元に向かう。

「どうだった？開拓は」

「中々楽しかったぞ。目標を持ち一生懸命に動く生物を観察するのは面白い」

案内されたソファに座り笑みを浮かべる。

「……それは良かったけど……上手く行ったんだよね？」

真剣な様子で聞いてくる。

彼の元に詳しい報告が行くにはもう少し時間がかかるのだろう。

「問題無く開拓は終わった。犠牲も無く村としても問題無いだろ

う」

「そうか。よかった……」

ほっとした様子のベキア……心配になる気持ちは分かる。彼らも弱くは無いがそれでも脆い事には変わりないからな。

しばらく雑談した後、また留守にする事を伝えてこの国を後にした。

獸王国カルガを後にした私は、魔工国ガンドウの町の一つを訪れた。

そこで私は山肌を開いた居住区と思われる洞窟から大量の水が流れ出し、町を水浸しにしているのを目撃した。

「周囲では大地人達が慌ただしく動いている。

私は大地人の一人に近づいて声をかけた。

「水脈でも掘り抜いたのか?」

「あん?……おう。町の拡大の為に掘っていたんだが地下水脈をぶち抜いちまったらしい、幸い犠牲者は出なかったが見た通りの状態だぜ」

彼は水をせき止める壁を作りながら言う。

「どうするんだこれは」

「どうするつつつてもな……もう埋められないしこのまま水源にするしかねえかもな」

こちらを見ずに彼は作業を続ける。

「このまま壁で囲って水路にでもするのか?」

「取り敢えず周りに水が行かねえようにしてるだけだ。その後魔法で地面を掘って水路にするんじゃないかねえかなあ?」

「そうか、気を付けてな」

「おう」

話を終えて首都であるガンドウへ向かった。

街道を歩きガンドウへ着いた私は国王であるガンドの工房へやって来た。

ガンドは居なかったが、彼の弟子が工房で作業している。

「あれ、お嬢。今日はガンドさんはいねえぞ?」

弟子の一人が私に気が付いて声をかけてくる。

「特に用がある訳じゃない、何となく来ただけだ」

「そうか。お嬢なら自由にしていいと言われている、ゆっくりしてつてくれ」

弟子達は私と面識があるので特に気にせずになそう言うとな作業に戻って行った。

ゆっくりと言われたが、炉の熱やハンマーの音が響く場所は落ち着ける場所とは言えないだろう。

工房内を見て回るが目新しい物は無いな、魔道武器は何処かに厳重に保管してあるだろう。

いくら親しくても国の機密は教えてはくれないだろう。

そう考えると魔道弓を見せて使わせてくれたのはかなり信用されている方だと思う。

「邪魔したな、外を回ってくる」

「おう、また来ると良い」

近くに居た弟子の一人に一声かけて外に出る。

やっぱりあの中は暑いな、外が涼しく感じる。

遠くに見える山肌畑が見える。この場所の環境にあつた物を栽培しているからこの国の大地人達は他の国とは食べている物が多少違う。

森人と獣人は環境が似ているが食べ物好みが違うので育てる作物に差が出ている、特に獣人は大半は肉が好きだから畜産が大人気だ。

しかし……食べ比べたが私は魔物の方が美味しく感じる。

街中を歩いていると見覚えのある女性大地人が居た。

国の運営陣の一人だった気がする。

「あ、クレリアさん良い所に来てくれました」

彼女が私を見つけて呼ぶ、私は彼女の元に歩いて行った。

「問題でも起きたか？」

そう言うとな彼女は首を横に振り話し始めた。

「いいえ。問題では無いのですが……今、畑で作物を育てています

よね」

「そうだな」

私が教えた事だしな。

「……その方法を使って果樹を育てて、果物を収穫出来ないかと考えています」

「ふむ……」

「クレリアさん？」

声を上げた私に首をかしげながら言ってくる彼女。

「いや。なんでもない……しかし果樹か……恐らく問題無いと思う」

果樹の事をすっかり忘れていた私は誤魔化す事にした。

他の国にも教えておこう。

「増やしすぎても駄目にするだけだが……大地人は果物が主食では無いだろう？」

そう言うと彼女は苦笑いする。

「実はですね……大半の大地人はジャカイモなどが好みなのですが、中には果物が好物な者も居てですね……」

「好物を用意してやりたいと言う事か？」

そう言うと彼女は恥ずかしそうに言う。

「それもですが……その、私もその中の一人です……」

「果物好きと言う事か」

「はい……」

なるほど、自分の為にも実現したい訳だ。

気にする事は無いのに、食の種類が増えるのは良い事だ。

「それですね。クレリアさんならこの場所でも育つ果物の木をご存じではないかと思ひまして」

「食料の種類が増えるのは良い事だ、ここの環境でも育つ果樹を教えよう」

「ありがとうございますー！」

嬉しいのか声が少し大きくなる、声を上げた後周りを気にして顔を赤くする。

「よし、ガンドの所に行つて許可を貰いに行くか」
「はい！」

こうしてガンドと会い許可を得た彼女はみんなと一緒に私から果樹についての話を聞き、果物が好きな仲間と果樹園作りに奮闘する事になった。

後日、他の国に行つた時に果樹園の事を教えておいた。

ある日私は首都ユグラドに訪れた。

町に入る少し前から激しい雷雨に見舞われ、私は風雨を遮断して汚れない様に浮かんで移動している。

すぐにユグラドの自宅に駆け込み風呂に入つて引きこもつた、激しい雨と雷の音が聞こえる。

いつその事魔法で雲を吹き飛ばそうかと考えていた時、今までとは比べ物にならないぐらいの轟音がした。

近くに落ちたな。

どこに落ちたかは分からないがこの雨なら火事にはならないだろう。

そう思いながら温めたモー乳を飲みながら雨が上がるのを待つっていると、風雨の音に紛れて家の扉を叩く音と声が聞こえた。

「クレリアさん！いませんか!?クレリアさん！」

私はのそりと立ち上がり扉の方に向かう。

「まだ帰つていないのかしら……一体どうすれば……」

「何だこんな時に……」

扉を開けると風と雨が室内に入ろうとするが、全て遮断する。

「クレリアさん！良かった……神木が……世界樹が落雷で傷を……」

落雷……雷魔法を作ってみよう。

必死に話すエルフイを見ながら私はそんな事を考えていた。

「どうにかできませんか!?このままでは世界樹が死んでしまいます

！」

あの木が雷程度でどうにかなるだろうか？一応雷雨が終わったら見に行くか。

「あれだけの木だ、簡単に死にはしないだろう」

「しかし表面が大きく裂けているのです！」

今までにだって落雷くらいあっただろうに……初めて雷が落ちたのか？

「落ち着け、今までもあった事だろう？」

「確かにありましたがあれ程の傷を負った事は無かったのです……」

暗い表情で言うエルフィ。

「この雷雨が収まったら見に行く、それまで大人しくしている」

「でもっ……」

面倒になった私は彼女を眠らせた……ソファに寝かせておこう。

モー乳が冷めてしまった、私はモー乳を温めなおし飲み始めた。

その後一時間半ほどで雷雨はおさまり、雲の切れ目から光が差し込んで来た。

約束通り世界樹の様子を見に行くか。

足が汚れるので浮かびながら世界樹の前まで移動し、裂けた樹皮の状態を確認する。

……やっぱり問題無いな。ただの樹なら真つ二つだったかもしれないがこの大きさの樹がこの程度で死ぬとは思えない。

「クレリアさん！」

世界樹の診断を終えてそのまま枝に座っていると下にエルフィが走って来た。

「いま木の状態を見ていた所だ、やはり問題無かったぞ」

「え？でもあんなに裂けているのに……」

戸惑う彼女、状態をしっかりと見れば納得するだろう。

「エルファイ、ここまで来られるか？」

「え？は、はい……あまり早くは飛べませんが」

そう言うとな彼女は浮かび私の元までやって来る。

「見てみる」

私は裂け目を彼女に確認させる。

「あ……」

声を洩らす彼女に言う。

「広範囲に裂けているが表面の樹皮だけだ。お前達で言えば皮膚が切れただけ……下手したらエルファイが気にしていなかった落雷の方が状態としては重かった可能性もある」

「あうあ……」

変な声を上げて赤面する彼女、大事なのはわかるがもつと確認した方がいいと思う。

「まあ、もしもと言う事もあるから……もう少し冷静になった方がいいとは思いますが、すぐに私に助けを求めた事は間違っていないかもしれない」

「……はい……」

エルファイは顔を手で押さえたまま小さい声で答える、彼女はしばらくの間顔を赤くしてプルプル震えていた。

その後、世界樹の大きな裂け目は問題無い事をエルファイが森人達に伝え、大きな騒ぎにはならず終わった。

彼女の醜態の拡散も私のみに抑えられた。

「面白い物を見られた」

「クレリアさん！絶対言わないでくださいよ!？」

すべては私次第だな。

世界樹騒ぎも大事にならず収まった数日後の深夜。

私はユグランドに滞在したまま雷魔法を研究していたのだが、私に念話のような何かを送ってくる者が居る事に気が付いた。

誰だ？はつきりとした意思ではない……私を呼ぶような、来て欲しいと思うような……とても希薄でぼやけた意思を感じる。

私は普段は使わなくなつた感覚を広げて送り主を探す、そしてそれはすぐに見つかった。

世界樹か。

送り主は世界樹だった。

こんな面白そうな呼びかけに答えない訳がない。私は家を出て世界樹に向かって歩き出した。

涼しげな月明りが地上を照らし、遠くから生物の声がかすかに聞こえる……中々気持ちがいい。

世界樹の元に行くと夜の闇にうっすらと薄い緑色に輝く世界樹の姿があつた。

樹皮の裂け目の部分が周囲より光を発しているように見える。

そこに誘導していると考えた私は光を発する裂け目に飛んでいく。

これは……。

その裂け目から琥珀色の液体……恐らく樹液が湧き出していた。

「……持つていけと言う事か？」

世界樹に向けて話しかけると木の葉がさわさわと鳴る。風は感じなかつた、恐らく世界樹の返事だろう。

私は入れ物を作り、どんどん樹液を採取していった。かなりの量になるが大丈夫なのか？

「もう大丈夫だ、無理をするな」

樹皮に手を当てて言うと、樹液は減つていきただの裂け目へと戻つた。

「ありがとう、大事に使わせて貰う」

そう言つて木の根元に降りると、上から何かが落ちて来る。

なんだ？……世界樹の果実？

落ちて来たのは世界樹の果実だった。

私にくれたのだろうとマジックボックスにしまうと、次々に落ちて来る。

「おい、もう十分だ。お前の気持ちは分かつた」

かなりの量が落ちて来た上に止まる気配が無いので声を上げるとぴたりと止まった、樹液の時といい言葉が分かるのか？

私はただ状態を確認しただけで治療した訳ではない、この礼は貰い過ぎだ。

……確か世界樹も魔素を吸っているはずだな。

私は根元に近寄り手を当てると体から魔素を生み出す。

確認してみると私が生み出した魔素を世界樹がどんどん吸っているのが分かる。

しばらく魔素を与えていると目の前に実が一つ落ちて来た、もういいと言う事だろうか。

私は魔素を止めると世界樹をひと撫でて家に向かう。

振り返ると世界樹の光はすでに消え、いつもの夜が広がっていた。

家に帰り世界樹の樹液を一口食べてみたが、濃く爽やかな甘い香りと濃厚だがしつこくない甘さがとても美味しかった。

私の表現力では上手く伝えられないな……実際に食べてみなければ分からない味かもしれない。

世界樹から樹液を貰ってから数日後、朝になり久々に町中を散歩しようとして外に出た。

朝の冷たい空気が気持ちいい。町中を歩き回りやがて広い魔法訓練場の隣を通りかかるとエルフィと数人の男女の森人達が集まっている。

その横にはかろうじて人型と言えるような……一般的な人の大きさの太った人形が一体居た。

何か面白そうな事をやっている、興味がわいた私は彼女達の元に向かった。

「おはようエルフィ、皆もおはよう」

「クレリアさん、おはようございます」

挨拶をするとエルフィと皆は挨拶を返してくる。

「朝から頑張るな」

「いつもの事ですよ、クレリアさんは朝から何故ここに？」

エルファイが言う。

「散歩の途中に通りかかったただけだ、エルファイ達が見えたから挨拶に来たんだ」

「そうでしたか」

「それにこいつに興味をひかれてな」

「あ……」

私の言葉に言葉を詰まらせるエルファイ、見られてはまずい物だったりするのかな？

「問題があるなら黙っている事は出来るぞ？」

そう言うのと、周りで会話を聞いていた男性森人が発言する。

「先生なら構わないと思いますよ。先生の意見や考えを聞いてみたらどうでしょう？」

「……そうね……クレリアさんなら構わないかしら」

男性森人の言葉を聞いてしばらく考え込み、答えを出すエルファイ。

「いいのか？」

「ええ、貴女なら信用できるし貴方ほどの魔法使いの意見も聞けるなら助かるし……」

確認する私に返すエルファイ、何か行き詰っているのかな。

そう思っているとエルファイは説明を始めた。

「これは「ゴレム」と言う土人形よ」

「土人形が何かの役に立つのか？」

私の疑問に彼女は答える。

「役に立つわ……いずれは」

「このままでは駄目なんだな」

「ええ。これはね……もっと大きくした上で数を揃え、兵士として使うのが目標なのよ」

「ほう……」

思わず声を洩らす私、彼女は話を続けた。

「私達森人は魔法は得意だけれど肉体的にはあまり強くない」

「身体強化の魔法があるだろう?」

疑問を投げかける私に彼女は言う。

「身体強化魔法を使うなら攻撃魔法の方がかなり効率がいいのよね」

別な何かで不得意な分野を補おうと言う事か?

「それで、魔法で作れる土や石で作ってみようと言う事になったのよ。もちろん上手く行けば金属製のゴレムも挑戦したいと思ってるんだけど……」

そう言っ隣にある土人形を見る、どう見ても役に立つようには見えない。

「出来たのがこれか」

「そうなのよね……」

彼女は疲れた声で言った。

「具体的にどうしたいんだ?それによって難易度が変わりそうだが」

「そうね最高の物を目指すのであれば……」

そう言っ彼女が言った理想は……。

森人の誰でも使える魔法である事。

作り出した者の命令を守る様にする事。

出来るだけ高い耐久力と近接戦闘能力。

材料は魔法で作り出せる物か出来るだけ簡単に手に入る安価な物である事。

「……なるほど」

「どうかしら……かなり難しいとは思っけど」

「今のお前達では無理だな」

「むう……」

彼女の理想を聞いた私は答えると彼女は唸る。

私なら恐らく可能だが森人達では現時点ではどうやっても不可能だと思っ。

画期的な新技術や素材が見つければあるいは、という所だろうか。「とは言えやってみなければ何とも言えないか。予想以上に上手く

行くかも知れないし、もつと難しいかも知れない」

「……手伝ってくれるの？」

「面白そうだからな。私が思いつかなかった挑戦だ……全員私が手伝う事に反対しないのなら是非開発してみたい」

「私は反対なんてしないわ。貴女が手伝ってくれるなら心強いもの……皆はどう？」

私が協力を申し出るとエルフィが全員に確認する。周りの森人達は全員私の協力を許可してくれた。

「ありがとう。それとこの研究で得る事になる技術や知識は森人達の女王または王……現在はエルフィになるが、その者の許可が無い限り他者に教えない事を約束する」

駄目だと言われても勝手に開発はしたと思う。

だが考案者の許可なく広めたりはしない。

「分かりました。そこまで考えてくれてありがとう……貴女なら守ってくれると信頼できるわ」

私の宣言にエルフィは微笑んで答えた。周りの森人達も次々に信頼を口にしてくれる、元から裏切る気は無いが悪い気分では無い。

「そうと決まれば私は研究に入る。家にいるから何かあった時は来い、研究の進み具合は私がエルフィに伝えに行くとしよう」

「待って、貴女には研究に集中して欲しいの。私達も全員で研究するけどこの中で貴女が一番優れた魔法使いよ……私が貴女の家に行くわ、良い？」

余計な時間を使わせたくないのか。

私としてはその方が嬉しいが。

「そうか、それで良いならその方が助かる。伝えに行くと言ったが正直行くのを忘れそうだと思っていた」

「気持ちは分かるわ」

彼女はそう言って笑った、こうして私のゴレム研究をする日々が始まった。

森人達からゴレム研究の参加を許され、研究する訳だが……一般的な住宅でやるのは問題がありそうだ。

エルフィ達と別れた私は家に向かいながら研究室を作ろうと考えていた。

地下に作るのが手っ取り早いかな？

家に着いた私はモー乳を一杯飲むと、地下研究室の作製に取り掛かった。

研究室と言っても魔法の場合邪魔な物が無い広い空間があれば大抵どうにかなる。

地下なら秘匿もしやすいしな、エルフィ達が死なない様に空調にも気を付けておこう。

入り口の床を見つからないように偽装すれば完成だ。

よし……研究開始だ。

研究を始めて半年、現在私は家に来たエルフィとリビングのソファに座り話している。

「二つの魔法で誰にでも使えるというのは不可能だと思う。少なくとも今の私には出来ないな」

誰にでも使える様に試行錯誤した結果、私が出した結論はこれだった。

「やっぱり無理よね。無理なのは分かっていたけれど……」

彼女は苦笑いする。言葉ではそう言っているが私ならもしかしたらと思っていたのかもしれない。

あくまでも今の私には不可能と言う事だが。

私を使うなら良いが他の者が使える魔法となると難しい、彼女達と私では差があり過ぎる。

既に私が見えるゴレム魔法は出来ている。

私でなければ恐らく発動しない魔法だが、魔法金属のゴレムを色々な姿で作れるようになってる。

私はこれを元に彼女達が見える様にしようと思ってる。

目の前で考え込んでるエルフイを見ながら私は言う。

「魔力と技量ごとにランクを付けて作ろうと思うんだがどう思う？」

「ランク付け……」

「これなら一応誰にでも使えると思う。上位の魔法でなければ戦力にはならないかもしれないが」

「どのような物なの？」

エルフイは私に聞いてくる。

「一番簡単な物は詠唱を使い小さな土人形を作る物になると思う。そこから大きさや素材などによってランクを上げていく」

彼女は頷く、私はさらに説明を続ける。

「もちろん簡単な詠唱で強力なゴレムが作ればそれにこした事は無いが、大きく強力にすればするほど魔力と技術が必要になるのは変えられない」

「なるほど……」

しきりに頷きながら呟く彼女。

「この方向で作ってみようと思うが、どうだ？」

「……良いと思うわ」

彼女は何かを考えるような様子で返事をする。

この後に人型である必要があるのかと言う話もしたが、自分達と似た形の方が難易度が下がるらしく、人型に落ち着いた。

私はそんな事は感じなかったが……私は姿を変えられるからか？昔練習で変わっていた事が影響しているのかもな。

更に二か月後。エルフイと時折一緒にやって来る森人達と共に研

究を進めた結果難易度ごとにランク分けして魔法を作ったのだが……。

「駄目か」

今私達は地下の実験場でゴレム作製の実験をしている。

「ええ……私では無理ね」

魔法を制御出来なかったエルファイが残念そうに言う。

中位ランクの中の中位である鉄ゴレムはエルファイには使えなかった。

彼女は森人達の女王だけあって森人達の中でも実力は高い方なのだが……。

彼女が使えないという事は大半の者が使えないと言う事だ、これは駄目だな。

「今使えるゴレムでも十分よ。森人達の弱点である近接戦闘を十分補助してくれると思うわ」

彼女は成功した大型の銅ゴレムを見て言う、目線の先には寸胴の大きな青銅の魔法人形が佇んでいる、見た目は人の形に似た青銅の塊だ。

製作者の指示を守ると言う部分はすでに上手く行っている。簡単な物だけが戦うなら十分だ。

私が作ったゴレムは少しだけ複雑な事も可能だが……あくまでも少しだけだ。

これ以上を望むなら、それこそ魂を宿らせる位はしなくてはならないだろう。

「もう少し何とかならないか試してみたい、いいか？」

「それは構わないけど無理しないようにね？」

心配そうに私を見る彼女。かなり無理をしていると思われるな、普通なら無理しているのかもしれないが私だからな。

「大丈夫だ無理はしていない」

それから少しの間雑談した後、エルファイは帰って行った。

更に三か月後。

私は正式名称「ゴレム製作補助魔道具」を作り上げた。名前が長いので普段は「核」と呼んでいる。

核は素材を変えても作動するので脆く作る事も堅く作る事も出来る。

そしてこの核を基礎にしてゴレムを作ってもらった。

「出来た……鉄のゴレムが出来たわ……」

実験場で出来た三メートル程の鉄のゴレムを見てエルファイが嬉しそうに呟いた、現在は鉄が限界だが鉄まで作れば流石に遅れはとらないと思う。

「これなら早々遅れはとらないだろう、魔道具が必要になつてしまった事とそれでも一部の者にしか使えないという欠点が残ってしまったが……」

「何を言うの。十分だわ……恩だけが増えていつちやうわね……」
申し訳なさそうな顔の彼女。

「ゴレムを思いついたのはお前達だ。研究も楽しかった、恩など感じる必要は無い」

「でも……うん、ありがとう」

戸惑った彼女だったが僅かに考える仕草を見せた後、微笑んで礼を言つて来た。

それでいい。

「でも……この核……ゴレム製作補助魔道具……だったかしら？ なんて脆く作れるようにしたの？」

不思議そうな顔をするエルファイが尋ねる。

「それは出来るだけ奪われるのを防ぐためだ」

「……あつ」

エルファイは何か気付いたように声を上げ私に言う。

「戦いに敗れたゴレムから核を取られない様にする為ね？」

「そうだ。敵が知性の無い魔物ならともかく……他種族と争うことになった時、核が奪われれば技術が流出する」

真剣な表情で私の言葉を聞く彼女。

「だが良い事だけではない。核が脆いと言う事は弱点になる……核が使用されているゴレムは核が破壊されてしまえば機能を停止する。強力な戦力になりえる中位のゴレムにわざわざ弱点を作るのかという問題が起きる」

「確かにそうだけど……難しい問題だわ……」

彼女は言葉通りの難しそうな顔をして言葉を洩らす。

「更に仕様上、核はゴレムのほぼ中央にあるため知られると間違いなく狙われる事になる。こう並べて行くとまだまだ改善点があるが、難しいな」

「そんな事無いわ……貴女は明言しないでしょうけど私達の実力もつとあれば問題無かつたのでしょうか？」

彼女は困ったように笑っていた。

確かにそうなのだが……それをどうにかするのも私の目標だった。

「それはともかく……ゴレムをどう使うかはエルフィ達次第だ。好きにすると良い」

「誤魔化すの下手ねえ……」

彼女は笑いをこらえる様に言った、誤魔化す気は無い。

こうして完成したゴレムは戦闘における歩兵としてこれから森人達の盾となっていくだろう。

その一か月後にゴレムを使って建築している森人達を見て、戦闘に使う事しか考えていなかった事を反省した。

こうしてそれぞれの国は領土を広げ、力を付けて行く。

広がり続けられぬ領土はぶつかると……その時どうなるか。その時を思いながら私はウルグラードに帰るため歩き出した。

ウルグラードに戻り過ぎていた私は、ある日ふと思った。
ルセリア神王国の首都に行った事が無い。

以前から場所は聞いていたが今まで完全に忘れていた。
私はルセリア神王国首都ルセリアに向かって出発した。

道中は馬車を利用してみたが多少雨が降った程度で特に何も興味を引くような事は無かった、そして首都ルセリアに着いたのだが。

大きい都市だ。

首都ルセリアを見た感想はこれだった。

高い防壁がかなり長く広がっている、何十年か経つと都市はこれほど大きくなるのだな。

道中で聞いた栽培魔法が無ければここまで大きくはなれなかっただろうな。

栽培魔法とは人間が作った作物用の魔法だと言う。

聞いた感じではかなり無駄が多そうだが、それでも効果はあるようだ。

都市の入り口で馬車のまま簡単な検査などを受けてから大きな門をくぐっていく。

人々の声が飛び交い、馬車が行きかう大きな大通りをしばらく進むとこの馬車の終点だ。

町中を移動する馬車はまた別らしい。

私は適当な人間に宿の場所を聞き、まず宿を取りに向かった。

「いらっしゃいませー」

明るい声で迎えられる、私は受付へ向かって女性従業員に話しかけ

る。

「宿を取りたいのだが」

「はい、ご宿泊ですね。何日お泊りになりますか」
微笑みを浮かべて聞いてくる。

「取り敢えず一週間頼む」

「かしこまりました」

彼女は手続きをしながら話しかけてくる。

「随分とお若いようですがお一人で？」

「ああ、私は森人のハーフだな。こう見えても成人しているんだ」
そう言うのと彼女の手が止まる。

「……申し訳ありませんが、この宿は亜人種はお断りさせていただいております」

「亜人種？聞いた事が無いが……」。

「亜人種とはなんだ？なぜ泊まれない？」

「……亜人種とは人間以外の劣等種の事を指します。泊まれないのは人間のお客様が不愉快な思いをしない為です」

いつの間にか人間の国ではこんな扱いになっているのか。

次からは人間と言う事にしよう。

「分かった、邪魔したな」

「いえ、お気になさらず……二度と来ないのであれば問題はありませんよ」

微笑みながら言う彼女だが隠しきれない侮蔑と嫌悪を感じた。

今まで来ていなかったがこんな状態だとは。

宿を出た私は他の宿を通行人に聞き人間として宿を取り二階の部屋に入る。

随分ひどいものだな、数十年前までは共に暮らしていたというのにな。

そう思いながらモー乳を取り出して飲む……うむ、美味しい。

モー乳を飲み終えた私は宿に夕食はいらないと伝え、食事がてら町を見て回る事にした。

見た感じではかなり広い都市だからな。

暖かい日差しの中、私は町中を歩き出した。ウルグラードも大きかったがここは更に大きそうだ。

しばらく歩いていると質素な服を着ている人間以外の種族、この言い方だと亜人種がそれなりに居るのが分かる。

みんな首、手首、足首の何処かに輪を付けている。周囲の扱いから察するに彼らが奴隷なのだろう。

死ぬほどではないようだがあまり状態は良いようには見えない。

奴隷は安いのか？安く簡単に手に入るなら使い捨てでも良いかもしれないが、高価で使える奴隷であつたならそれなりの待遇をして力を発揮してもらつた方が良いと思う。

それと彼らが付けている輪から魔力を感じる、魔道具か。

奴隷に付けているのだからろくな物ではなさそうだが。

周囲を眺めながら歩いていると自由神の神殿がある。いつ出来たかは知らないがもしかしたら巫女達を集めた時にここにも来ていたかもしれない。

今ほど大きい町では無かつただろうが、分かる訳が無いな。

あれから町並みを見ながら歩いていたのだが、宿でどんな施設があるか聞けばよかつたと考え、一度帰る事にした。

宿で従業員に話を聞き、部屋で聞いた施設の整理をする。

王城、自由神神殿、宿屋、共同浴場、食料品店、賭博場、闘技場、売春宿、奴隷商店、トロトス魔法学校、王国戦士団本部、王国戦士団各詰め所、王国魔法士団本部、王国魔法士団各詰め所、ギルド商会本部、飲食店、武防具店、魔道具店、錬金術店……。

この都市にやって来た者が行きそうな主な施設はこれ位らしい。従業員が言うには住んでいる者もすべて把握していないらしく、小

さい店などは分からないと言っていた。

取り合えず聞いた所から選んで立ち寄ってみようか、どこに行くか……。

まずは行った事が無い所に行くか……よし、まずは奴隷商店に行こう。

今からでは時間が足りなさそうだし、明日の朝に行こう。

翌朝を迎え、朝食を取り宿でここから一番近い奴隷商店を聞いて向かう。

移動のための馬車に乗り、降りた場所からしばらく歩くと、大通りに面した分かりやすい場所に店があった。

「いらっしやいませ、どのような奴隷をお探しで？」

店に入ると複数の店員が客の相手をして居たがすぐに人間の女性店員が話しかけてくる、良く見ると彼女も奴隷のようだ。

「奴隷を買いに来るのは初めてなんだが、まずは奴隷の説明を聞きたい」

「かしこまりました。ではこちらへ……ご説明させていただきます」

そうやって彼女は私を並んでいるソファの一つに案内し説明を始める。

「私どもの店舗で奴隷を実際に見て選んでいただき、設定金額をお支払い頂きます。その後個室にて隷属魔法による主人の変更と隷属具の装着が行われます」

「隷属具とはなんだ？」

私が質問すると彼女は左手首についた輪を私に見せながら答える。

「隷属具とは隷属魔法の解除を防ぐ魔道具です。外そうとしたり隷属魔法の解除をしようとするとうと激痛を与えます……ほとんどの場合激痛に耐えられなくなり諦めるか気絶します」

「自殺などは？」

「他者による攻撃や事故では死んでしまいますが隷属魔法によって命じられない限り自殺は出来なくなっております」

隷属魔法の解除に対抗する魔道具を作ったんだな。

淡々と答える彼女は説明を続ける。

「隷属の価格は年齢、容姿、体型、種族、能力などで変わります」

そう言いながら隷属のリストを見せて来る、彼らで言う所の亜人種が大半だな。

「隷属になる者はどういった理由がある？」

「罪人や借金が主な理由です……親が子供を売る。またはその逆あ
るようです」

淡々としているが親が子を売るというあたりで少し表情が暗く
なった気がするな。

「他には隷属になる者は居ないのか？」

「他と言いますと？」

彼女は首をかしげ聞いてくる。

「村を襲ったり誘拐したりといった事で隷属になる者は居ないのか
？」

私がそう言うのと周囲が一瞬静まるが、すぐに騒めきを取り戻す。

「当店ではそのような隷属は扱っておりません」

「その言い方だと他の店では居ると言う事になるが」

「いえ、それは……」

彼女が言葉に詰まると、彼女の背後から身なりの良い青い短髪の瘦
せ気味な男が近づいてくるのが見えた。

「お客様、ここからは私がご説明いたします……お前は他のお客様
のお相手をしてきなさい」

男の言葉に「かしこまりました」と答えて彼女は席を立った、代わ
りに男がソファに座る。

「誰だ？」

そう言うのと彼は微笑んで言う。

「店主のスレイル・フリズンと申します。どうかお見知りおきを」

「そうか、私は名乗らないがよろしく頼む」

そう言うとスレイルは頷いて答える。

「構いませんとも。そういったお客様もいらつしやるので」

「そうか、所でこの奴隷の一覧なのだが亜人種が大半だな」

「ええ、私どものメインは亜人種ですので。他の町の亜人種奴隷を集めております」

微笑んだまま説明をする彼。

取り敢えず聞けることは聞いておくか、本当の事を言うかは分からないが。

「ルセリア神王国には亜人は奴隷以外ほぼ居ないと言って良いよな？」

「……そうですね」

何かを感じたか言葉に間が空く彼。

「居ない筈の亜人が罪人として、借金をしてこの国では奴隷になるのか？」

彼は苦笑いをしながら私に言う。

「お客様もこの国の人間であるならお分かりでしょう？ 亜人種は存在が罪なのです……つまり全員が罪人なのですよ」

いきなりおかしな事を言い始めたぞ、どうすればここまで考えが偏るんだ。

私の内心をよそに彼は続ける。

「その罪によって彼らは我々人間の奴隷になる訳ですね。罪人の村を見つけたのなら裁かなくてはなりませんから」

これは、余程統治者のやり方が上手かったのかそれとも魔法が関わっているのか……。

「二つ聞きたいのだが、その考え方は一般的な物なのか？」

「ええ、多少の差はあるかもしれませんが一般的だと思いますよ。」

質問した私に「何を当然の事を」と言いたげに答える。

「お客様もしばらくここに住めば亜人の罪深さが、奴隷の良さが分かると思いますよ」

そう言って両手を胸の前で組んで笑うスレイル、罪人が奴隷になるのは自業自得かもしれないが存在が罪と言うとはな。

「そうか、良く分かった。今度は買うつもりで来させてもらおう」
「お待ちしておりますお客様」

挨拶をかわして奴隷商店を出る。この状態で現在出来ている他種族の国とぶつかったら戦争にしなければならない気がする。

それならそれで面白そうだが……さて次はどこに行くかな。

それから賭博場に行く事に決めた私は、町の賭博場の一つにやって来た。

「ガキかよ……いらっしやい。好きな席について参加しな」

冒険者が傭兵か？武装した男が入り口に立っている。

「初めてやるんだが、説明は聞けるのか？」

「中に居る誰かに聞きな、二つ出来るゲームがあるから好きな席に座ればいい」

中に入るといくつかのテーブルがあり一つのテーブルごとに主催者が二人ずつ居て、取り囲むように人が座っている。

私は空いていた席に座ると主催者にやり方を聞く、見た目が子供なので軽く驚かれたが説明してくれた。

千ウエンから千刻みでかける事が出来る。

サイコロと言う正方形に切り出した骨に一から六までの数字が振ってありそれをコップに入れて振り、出た数字の合計が偶数か奇数かを予想するゲームらしい。

かける金額をテーブルに置き手元に配られた木の棒を偶数なら縦に、奇数なら横にして置いた金の手前に置き、当たれば掛け金が二倍になり外れれば奪われる……と。

「もう大丈夫だ、始めてくれ」

「では再開します」

私が言うのと賭けが再開する。

奇数にしてみようか、千ウエン……中鉄貨一枚をテーブルに置き棒を横にして置く。

「二の二の四、偶数だ」

私の前に置いた金が回収される。

勝とうと思えばいくらでも勝てるだろうが面白くなくなるからな。

「次だ、さあかけてくれ」

主催者の言葉に他の参加者が賭けて行く、次も同じ千で奇数だ。

「三の一の四、偶数だ」

むう、当たるまで奇数で行くか？変えるべきか……。

「次だ、かけてくれ」

千で奇数だ、そろそろ来るはず。

「六の五の十一、奇数だ」

当たった。私の元に二千ウエン戻ってくる……これは普通にやったら儲けるのは難しいな、遊びでやめておくべきだ。

次はトランプと言う四種の絵柄ごとに一から十三の数字が書かれた五十二枚のカードといくつかの追加カードで遊ぶものらしい。

掛け金は百ウエンから百刻みで、役と言う決まったカードを揃えて勝敗を決めるらしい、役を覚えて勝負開始だ。

まずは百ウエンかけて参加する……五枚の手札が配られる、十、四、一、二、三か……ここは十を捨てよう。

次に来たのは一だった、私の負けか。

その後数回やったがこちらも勝つのは難しかった、カードを手に入れる事が出来るのなら家で勝ち負けだけ競って遊ぶ方がよさそうだ。

手に入れる方法は無いか聞いた所、店で普通に売つていると言われたので店に行って購入した。

私は今日はここまでにしようと思つて馬車に乗り、宿へと向かった。

宿で一晩を過ごし、朝食を宿の一階で食べていると宿の入り口から武装した二人の男女が入って来た。

二人は宿の従業員と何か会話をしていたが、従業員が私を指さすと

二人は私の元へやって来て、男の方が私に話しかける。

「食事中に申し訳ない。我々は王国戦士団の者です……聞きたい事があるので一緒に来ていただきたい」

「申し訳ないと思うなら食べ終わるまで待つてくれ」

私がそう言うのと彼らは難しい顔をして黙る、待つてくれるのか。

「待たせたな、用はなんだ？」

食事を終えた私は二人に聞く。

「貴女に奴隷商店での営業妨害と賭博場での不正の疑惑がかかっています」

男が姿勢を正したまま答える。

「どういう事だ？」

「どうと言われましても言ったままの事ですが？」

私の言葉に女が言葉を返す。

奴隷商店では確かに少々突っ込んだ事を聞いたが、賭博場では私は負けているぞ。

「私は賭博場では負けているんだが不正をして賭けに負けるのか？」

「賭けの勝ち負けと不正の有無は関係ありません」

「そもそも不正をしてないと思うんだが、内容は？」

「貴女に話す事ではありません」

どうもおかしい、私を無理矢理連れて行こうとしているように感じる。

そう考えていると男の方が話しかけてくる。

「もしも貴女が無実であるならば謝罪いたします。私達についてきていただけませんか？」

断るのは簡単だが、何があるか分からないのは面白そうだ。

「良いぞ。連れて行ってくれ」

「助かります」

了承すると男が微笑む、女の方は真剣な顔のままだ。

宿の前に止まっている馬車に乗り込むと何処かに出発する。

「どこに行くか聞いても良いか？」

「王国戦士団の本部です。そこで詳しいお話を致します」
男が答える、見に行こうと思っていたがこんな形とは思わなかった。

何があるのかと少し期待しながらどれくらい経っただろうか、ゆっくりと馬車が止まった。

「到着いたしました……どうかこちらへ」

先に降りた二人の後について行くと屋敷のような……屋敷と言うより学校の事務所の様だな。この建物に入るようだ。

連れていかれた応接室に入りソファに座ると待っているように言われ、私を連れて来た男女の団員は退室していった。

しばらく待っていると使用人らしき人物がやって来て紅茶を入れてくれた。

紅茶に何か入っているようだ。

私は薄く微笑みを浮かべて紅茶を飲む。

睡眠薬だな、そう言えば相手の思惑に乗ってやった事が無いような気がする。

性格が悪いと自分でも思うが寝たふりをしてみよう。

寝たふりをしてしばらく待つと扉が開いた。

目を瞑ったまま探ると感覚で探ると、高そうな装備の男女二人とそれより劣る装備の女一人が入ってくる。

「寝ているわね。本当に真っ黒ね……まさか見つかるなんて、ジークから連絡が来た時は驚いたわよ」

高そうな装備の男はジークと言うのか……明るい赤色の髪を短く切りそろえた男だ、優しそうな顔だが体格は良いな。

「僕も最初報告を受けた時は半信半疑だったんだけど……奴隷商店と賭博場の者がほとんど見ていたようでね、見間違いでは無いと判断した」

「ミアリス団長、始めてもよろしいですか？」

少し装備の劣る女が高そうな装備の女の方を向いて話す。

と言う事はこいつはミアリスか……濃い金髪を長く伸ばした女。

鋭い目つきの一般的な体格の女で胸は私並みに無いな。

団長と言っていたからこの中では一番階級が上か？

「ええ、すぐにやって頂戴。まずは奴隷化しなければ始まらないわ」
ミアリスが言うのと恐らく部下の女が私に魔法をかける。

隷属魔法をかける気か、正直何もしなくても効かないと思うが……。

かけられた事で隷属魔法は理解した。

改良してこの女にかけてやろう……女の魔力を押し返して一気に隷属魔法をかける。

すると女が腕に着けていた腕輪が砕け散る、なんで砕けたんだ？

「魔道具が!? お前! 何が起きた!？」

男……ジークが異常に気が付いて私の奴隷に声をかけてくる。

私は目を開けて起き上がる。

「答えていいぞ」

「なっ!？」

私がそう言うのと二人の驚きの声が聞こえ、奴隷になった女が震えながら話し出す。

「隷属魔法を……返されました……私とは比べ物に、ならない魔力で……隷属魔法を防ぐ魔道具も……」

咄嗟に構えて離れたミアリス、ミアリスはゆっくりと扉を開けようとすする。

「逃がすわけ無いだろう」

「ちっ!」

舌打ちをするミアリス、すでに音も遮断し物理的にも通る事は出来ない。

おまけに人払いの魔法もしっかり使っている。

「あっ……」

声が出た方に視線を戻すとジークが私が奴隷にした女の心臓のあたりを突き刺していた。

私を奴隷にしようとした女だ、特に守ってやる気は無い。

「ふむ。敵に回ったなら処分した方がいいと言う事か？」

「お前は何者……いや、何なんだ？」

そう尋ねる私にジークが剣を向けながら言う。

こいつ中々良い剣を持っているな、魔法金属製の剣だ。

「お前達に言う気は無いな。それよりもどうせ逃げられないのだから私の質問に答えてくれないか？」

「それは……どうかなー！」

ジークと言ったか？こいつは身体強化に加えて剣にも魔力を通してている。

一瞬でソファに座っている私に接近して喉を突いてくる、獣人並みには早いな。

私は首の手前で剣の切っ先を掴んで止める。

「っ!？」

一瞬驚愕するような表情をしたジークだが、即座に剣を手放し横にそれる。

「ウインドブレード！」

直後にミアリスの魔法が放たれる。

魔法の発動を感じていた私は自分の表面に薄く防御魔法をはる、なくても平気だと思うが一応戦いだからな。

ミアリスのはなった魔法は天井から床まで調度品なども含めて私以外の全てを縦に切り裂いた、私がかけた結界があるから部屋を貫通はしていないだろう。

「くくく」

「くっー！一人がかりでこれか！」

口元を緩ませる私に予備の剣を抜いていたジークが叫びながら切り込んでくる。

首を狙った横薙ぎをしゃがんでかわしつつジークが手放した剣を拾う。

その瞬間私の立っている場所に上から石の杭が複数落ちて来るが即座に後退し、ミアリスに多分死なない程度に押さえた風の爆発魔法を撃つ。

ミアリスは防御魔法を張りながら飛びのいて威力を抑えたようだ。結界を張っておいてよかった。何もしていなければ部屋の外まで

被害が出ていたな。

ジークの攻撃を捌きながら空中に風爆弾を作りミアリスを牽制する。

私が相手だから分かりにくいがこの二人は強いと思う。

「強いなお前達は、もう少し楽しませてくれ」

「そう言われてもっ！嫌味しか聞こえないよっ！」

大抵の相手はジークの最初の一撃で突き殺されているだろう。

ミアリスのウインドブレードは並みの防御魔法や防具はそのまま切断する威力だった。

連携も私でなければ対応出来たか怪しいな……この二人は私が知っている中でも上位の強さだな。

「まあ私を奴隷にしようとした事は許す気は無いが」

「どうしたものかなっ！折角手が出せそうな巫女が来たって言うのにこんな化け物だとは……巫女つてのは皆こんなに強いのかっ!？」

私と斬り結びながら言葉をこぼすジーク。

みんなこの強さだったら逃げてはいないと思うぞ。

しかしこいつ、私を巫女と言ったな。

「ジークと言ったな？お前何故私を巫女だと思っているんだ？」

「……むぐうっ!？」

私は横やりが入らない様にミアリスを拘束して問いかける。

「ミアリス!？」

何も無いように見えるのに全く動けず声を出せない彼女を見て声を上げるジーク。

「はは……最初からやろうと思えばやれた訳だ……この立場になつてここまで馬鹿にされるなんて思って無かったよ……」

彼は構えをとかなかったが疲れたような声で言う。

「もう一度聞くが……何故私を巫女だと思っている？」

私を悔しそうに見ている彼にもう一度問いかける。

「……その綺麗な黒髪と黒目を見て巫女以外に何を思えと言うんだい……?？」

諦めたのか溜息をついて答える……黒髪黒目……なるほど。

「現在正統な巫女である黒髪黒目の巫女はウルグラーデにしかない……そして君のその髪と目は本物にしか見えない……それだけの事だよ」

「そうか……黒髪黒目は元々この世界にはいない、それを隠しもせず人間の首都を歩くなんて自分は巫女だと言っているような物か。」

しかし狙う理由は……そうか。

「正統な巫女の血が欲しかったと言う事か？」

「そう言うとは彼はミアリスをちらりと見てから言う。」

「そうだよ……数十年前に各地の巫女には逃げられてしまったらしいからね。ウルグラーデも今の所手も出せないみたいだし……昔大敗したらしいから慎重になってるんだらうね」

「私を狙ったのは失敗だったな」

「……本当にね」

彼は覚悟を決めたような顔になっている。

「聞く事は聞いただろ？殺すなら殺しなよ。實力差ははつきり分かった……遊んでただけなんだろう？」

私はミアリスの拘束を解く、しかし彼女は攻撃しようとしな。

「ジーク……」

「来るなミアリス」

ミアリスはジークに近づこうとするが止められる。

「貴女を奴隷にしようと考えたのは僕だ、僕の命で彼女は見逃して欲しい」

「ジーク!？」

自分の命と引き換えにミアリスを助けて欲しいと言うジークと驚き声を上げるミアリス。

「ん？死にたくないならなぜ私に襲いかかったんだ？」

私がそう言うのと二人は黙ってしまった。

奴隷にしようとしなければ、殺そうと襲いかかってこなければ普通に会話したというのに。

「お前達では私が何もしなくても傷一つ付けられないだろう。だがそれでも明確に命を狙って襲って来たんだ、殺されて当然だと思わな

いか？」

「う……」

口ごもる彼、この二人も戦っているのなら自分の言っている事が受け入れられないのは分かっているんじゃないのか？

「なら……なら私を奴隷にすればいいわ！何でもさせればいい！どう!？」

「ミアリス!?何を!？」

「このままじゃ殺されるわ。生きるには彼女の……いえ……ご主人様の奴隷にだつてなるわ……あなたに死んでほしくないのよ」

「僕は君を何とか助けたい……」

ミアリスが突然叫んだかと思うと会話を始めた。

こいつらとの戦いは中々楽しかったが奴隷として欲しいかと言われると特に欲しくもない。

目の前で何やら演劇の様な事をしている二人を見ながら考える。

「彼は王国の戦士団の、私は魔法士団の団長よ。この国や面白そうな事の情報が入る可能性もあるわ」

演劇から復帰したミアリスが私を見て言う。ジークも団長だったのか、巫女一人によく出て来たな。

「ミアリス!?それは……!」

「ここで殺される位なら国も売るわよ。私はあなたと生きたいの……それに奴隷になったら拒否権なんてないもの」

「それなら僕も奴隷になるよ」

「ジーク……」

一人増えた。しかし情報か、確かに私一人ではどうにもならない事かも知れない。

「よし。お前たち二人を私の奴隷にしよう」

「私はミアリス・イムと申します、ご主人様」

「僕はジーク・メルテックと申します、ご主人様」

二人は跪いて言う。

「クレリア・アーティアだ。それとご主人様はやめろ」

こうして成り行きで王国の戦士団と魔法士団の団長を奴隷とした。

二人には死に関する事などをまず縛り、奴隸になった事を私の許可なく他言しない事、私が来た時は怪しまれない様に対応する事を命令する。

それから私から聞きに来た時のみ伝え、情報は送らなくても良い事。

いつも通りに生活して良い事など、色々と決めて早々に町を出た。今度来る時は髪と目の色を変えて来よう。

ジークとミアリスを奴隷化した後、私はルセリア神王国を去りウルグラードに戻って来た。

取りえずジークが言っていた事を確認しよう。

私はテイリア魔法技術学校のケインとミナの元へ向かう、聞けるのはあの二人位しか思いつかない。

「突然すまないな」

「いえ、師ならばいつでも来ていただいて構いませんよ」

私は校長室のソファに座り出された紅茶を飲む。

「実は聞きたい事があってな」

「何よ、聞きたい事って」

ケインの隣に座っているミナが問う。

「今までルセリア神王国の首都ルセリアに行っていたんだが」

「え!？」

「……問題は無かったですか？」

行く事を伝えていなかったせいか驚くミナと心配するケイン。

「そこで王国の者に奴隷にされそうになったのだが……」

「何やってんのよ……」

「私は心配していませんが」

ミナは呆れた声を出し、ケインはそんな事を言う。二人とも私の正体を知っているためか落ち着いているな。

「ケイン。お前さつき私の心配をしたのではないのか？」

「怒らせたら一瞬で首都ルセリアが消えてしまうかもしれないと……」

心配そうな表情のケイン。

「お前、私を何だと思ってる？」

「自分勝手に我が儘な人外だと思っております」
ケインが微笑みながら答えた。

「間違っではないが今の所人間を滅ぼす気は無いぞ?」

「今の所って……そんな事をサラツと言う上に本当に出来ちゃうから困るわよね……」

ミナが紅茶を持ったまま溜息を吐く。

「やらないぞ?」

「はいはい」

軽く流すミナ、私は聞きたい事を改めて聞く。

「で……だな。その時私を狙った者が私を巫女と呼んでな?聞いたんだ、「何故私を巫女だと思ってるんだ」……とな」

二人は……なんだか微妙な表情をしているな。

「そしてそいつは「現在正統な巫女である黒髪黒目の巫女はウルグラーデにしかない、でもその髪と目は本物にしか見えない」と大体こんな感じの事を言った」

二人は黙ってしまった、ミナが何やら残念な者を見るような表情をしている。

「……それで師は何を聞きたいので?」

「ウルグラーデでも私の事はそう思われていたりするの?」

ケインの質問に答えると二人は呆れたような表情をする。

「クレリア……貴女もう少し自分の事気にした方がいいわよ?」

「そうですね……師は私が若い頃から周りの事をあまり気にしない方でした……いえ、気配りをする時はするのですが……」

「ん?んん……?」

頬杖について言うミナと目頭を揉みながら言うケイン、二人の反応に変な返事をしてしまう。

「ハッキリと言わせて貰うと、貴女ウルグラーデの人達に森人のハーフ巫女だと思われるわよ」

「森人のハーフは自分で決めた設定だからな、しかし巫女だと?」

そう言った私にケインとミナが言う。

「師は自分の姿を見た事がありますか? 正統な巫女である黒髪黒目

の巫女はウルグラードにしかおらず、師は見事な黒髪黒目です」

「ここまで言っただけからなの？ 貴女は凄いのか間抜けなのか……黒髪黒目は巫女の血統だけ……そこで黒髪黒目の貴女がうろついたら巫女としか思わないでしょ？」

ああ、普通に生活していたが確かに周りの者からするとそう言う事になるのか。

「では、誰も私の素性について聞いてこなかったのは？」

「黒髪黒目は巫女しかないのにわざわざ「巫女ですか？」と聞くと思う？」

「絡まれたりした時、周囲の者が助けてくれたり治安維持隊の到着が早いのは？」

「神の巫女が絡まれてたら大抵助けるだろうし、すぐ治安維持隊に連絡するでしょうね……絡んで来た奴らは外から流れて来たか、神を信じない奴らだったんじゃない？」

私の質問にミナが次々答える、開き直ってこのまま過ごそう。

「ウルグラードの巫女達は貴女の事を知って居る者がまだ生きていますし、否定しないでしようしね」

ケインが補足してきた。

「ああ……あの時の」

「はい。師が巫女達を集めて姿を隠した時にウルグラードの神殿に預けられた巫女達です」

やはりあの時の巫女達か。

「まだ若いはずだよな？」

「いえ……皆さん人間としてはもうよいお歳ですよ？ 師は寿命が長すぎて時間の感覚が少しおかしいですね」

微笑みながら言うケイン。

「森人もそれなりにおかしいと思うが」

「そうかもしれせん」

それを聞いて苦笑いをするケイン、ミナも笑っている。

しかし私は自分が思っていた以上に目立っていたんだな。

髪と目の色を変えるのはウルグラード以外の人間の国でやってお

けば平気か？

それ以外は今まで平気だったしな。

ある日、私は何となくガンドウを訪れた。道中雨に見舞われた、あまり雨は好きでは無いが特に問題は無かった。

町にも雨が降っていたようで、到着した時には晴れてはいたが道や町並みは濡れていた。

濡れた町並みが昼の日光をキラキラと反射させている。

「お嬢！来てたのか！……お嬢ならもしかしたら……」

ガンドウの自宅に向かつて歩いていると横から声がかかる。

振り向くとガンドの弟子の一人が駆け寄って来た……最後の眩きは聞こえたぞ、何かあったな。

「ついさつき着いた所だ、それで？何があった？」

そう言うと彼は気まずそうな顔をする。

「……なんでわかったんだ？」

「聞こえない様に言っただつもりだろうが眩きが聞こえたぞ」

「あー、すまん……これでどうにかなるかもって思っただついで」

頭を掻いてうつむく彼、話は聞くだけなら聞くぞ。

「で？何があった？」

「町の一つが魔物の群れに襲われて壊滅したんだ……逃げてきた奴が言うにはデカイ蟻みたいな生物がわいて来たらしい」

いつもより声が暗い、まあ町が一つ潰れたとなれば当然か？

「魔物か？」

「多分な……詳しくはガンドさんから聞いてくれるか？今は会議室に居ると思う」

「分かった」

行く先を会議室に変えて歩き出す、蟻か……小さい蟻と似ているのだろうか。

会議室に着いた私は扉を数回叩き返事を待つて入っていく。会議室にはガンドを始めとした国の運営陣が揃っていた。

「お嬢じゃねえか、いつ来てたんだ？」

「ついさつきだ、自宅に向かう途中お前の弟子の一人に話を聞いてな。町が一つ潰れたらしいな？」

声をかけて来たガンドに答える、彼は苦い顔をした。

「お嬢に話したのか……まあ構わねえか」

「詳しくはお前に聞くように言われたのでな、聞きに来たぞ」

そう言うとは私は空いている席に座った、私は相談役の様な物なので文句は出ない。

「俺達でどうにかするべきだと思うが……もし手伝ってくれるんなら助かるのは間違いねえ」

「では、私が説明いたします」

そう言つて来た大地人女性にガンドが頷くと、説明を始める。

「約三週間前、私達運営陣に報告が来ました。町の一つが壊滅したと……私達は報告を聞いてすぐに調査部隊を送りました」

三週間前か。

「生き残りの証言では町の拡張で山を掘っていた所、空洞につながり……そこから蟻のような大きな生物が這い出して来たようです。大きさは恐らく八十センチ前後だそうです」

そう言つて両手で長さを表しながら話す彼女。意外と小さい……いや、一般的な蟻の大きさを考えればかなり大きいか。

「町に偵察に行った部隊の報告によれば……大半の者は食い殺され餌になったようです。そして魔物と思われる蟻は一匹一匹がそれなりに強い上に数がありにも多いようです。偵察部隊も町に蟻が溢れている状況を目撃しすぐに撤退を選択したそうです」

町は蟻の魔物の巣になったかも知れないな。

「現在壊滅した町の付近の他の町の住人も避難しています。そして現在どうやって蟻を駆除するかを話し合っています」

「広範囲を攻撃する武器は開発していないのか？」
私が質問するとガンドが答える。

「魔法なら出来るんだろうが武器はな……魔法武器も聞いた感じじゃ数が多すぎて無理だ……周囲の魔力を使ってどうにかできれば良いんだが、ないものねだりをしてても仕方ねえ」

魔道弓で捌ける数でも無いだろうしな。まあ彼らだけの問題で収まらないかもしれない手を貸すか、試したい魔法もあるし。

「お前達が良ければそいつらを私の魔法の実験台にしているか？」

「お……おう？良いけどよ……町ごと消えて無くなったりしないよな？」

そう提案すると、不安そうな表情をするガンド。

「消滅はしないはずだ……それにそんな事を言っている場合ではないかもしれない」

「どういうことだ？」

彼は私に尋ねる。

「ガンド様、クレリアさんはこのまま蟻が増え続ければ私達はもちろん、地上に居る多くの生物が飲み込まれるかもしれないと危惧しているのだと思います」

先程説明をしていた彼女が私の考えていた事を代弁してくれた。

「彼女の言った通りだ……もしかしたら事は大地人だけの問題では無くなるかもしれない。さっさと駆除しないとどうなるか分からないぞ」

彼女と私の言葉を聞いて彼は私に言う。

「町は建て直せばいいだけだ。好きにしてくれ……俺達が引き金を引いちゃった問題だが……どうか頼む」

「気にするな、何もしなくてもいつかは地上に出て来ただろう。それに魔法の実験台が手に入った」

頭を下げるガンドに薄い微笑みを浮かべて言う、どれ程の効果があるか楽しみだ。

私は援護や同行者はいらないと告げ、早速壊滅した町に向かった。

随分大量に居るな。

上空から壊滅した町を見ると、蟻達が建物の上をせわしなく動いている。

大地人の死体は無いな……運ばれたか？

蟻達は山肌に出来たいくつかの穴に出入りしているようだ、どれかが町の住人が開けた穴で残りは多分これまでの時間で増えた物だな。

さて、実験をかねて駆除するか。

私は早速魔法を発動する。

新しく作った雷の魔法だ、まずは軽く雷撃。

空中から地面に落ちて着弾地点から円状に雷が広がる、蟻達はびくりと震えると動かなくなる。

次は周囲に影響を出さない魔法の実験だ、雷槍……まあ呼び方はどうでもいいか。

放たれた雷の槍が一匹の蟻に突き刺さる。

蟻はすぐに煙を吹いて地面に崩れ落ちる。周囲に大量に居る他の蟻は何ともなさそうだ、成功だな。

後は雷球か。アリの少し上に雷の塊が発生する、周囲のアリに次々と雷を放ちながら私の思った通りに動く。

中々上手く行ってるな。さて次は広範囲の攻撃魔法だ……周囲と攻撃する範囲を分断して内部に雷を充満させる魔法だ、名前は……雷嵐でいいか。

そう考えている私の眼下では町が丸ごと結界に包まれ、雷によってまばゆく輝いている。

魔法が終わり、結界を解くと熱風が広がった。

町を見ると蟻は全て燃え尽き、町全体が溶けている。

ある程度強くすると雷も強力な火の魔法とあまり変わらない様な気がする。

あまり町は壊さないと言ってしまったが、これはすべて建てなおしだろうか。

後で謝ろう。

私はそう思いながら巣穴の方へ向かい、穴の一つに到着した。

この穴は流石に私でも入れる大きさでは無い。

巣穴の中の気配を探ると地下深くにまだ蟻が残っている、少し違う個体が女王蟻か？

入れないならここから焼いてしまおう。

私は巣穴の入り口から炎を内部に送り込む。

しばらく炎を送っていると周囲の山肌が熱を持ち始めた。

しかし地下の温度はまだ上がっていないようで、蟻が生きて動いている気配がする。

火力と勢いをもう少し上げるか。

送っている赤い炎が黄色くなり始める、やがて白くなり一気に勢いを増す。

穴の周りは溶け始めているが届くだろうか？そう思った直後に生きていた蟻の気配が消えてなくなる。

私はすぐに炎を止めた。

水でも良かったか？しかし炎の方が効果が高そうだからな。

熱を出す魔法は強力だがすぐ周囲が燃えたり溶けたりする、一見耐えられそうな物でも意外と溶けてしまう。

女王蟻が消えればもう平気なはずだが、一応周囲に生き残りが居ないか探っておこう。

周囲の確認も終えて蟻の駆除をガンド達に報告した後、彼らは町の復旧に取り掛かる事を決定し調査隊を送り込んだ。

その後、調査隊から町の状態の報告を受けたガンドはすべての建物の取り壊しと再建設を決定し、すでに再建設の計画が始まっている。

「すまないなガンド。結局町は建てなおしになるのだろうか？」

私はガンドの執務室で詫びた、建物を駄目にしてしまったからな。「気にすんな。蟻共をほっとく方が間違いないヤバかったんだ……」

言つたら？建て直せばいいだけだつてよ、死んじまつた奴らの仇を取つてくれてありがとよ」

彼は多少疲れたような表情で笑つて言う。

「そうか」

私としては実験が出来て満足だ。仇を取るといふ考えは無かつたが彼の気が済むならわざわざ否定する事も無い。

「しっかし……何やったんだ？すでに冷えてたらしいが……石の建物も地面も町が丸ごと溶けていたと報告が来てるぞ？」

「魔法の実験だ」

「むう……俺達は苦手だが……やっぱすげえんだな魔法つてのは……」

顎に手をやって唸るガンド。

「使い手による、私はこの世界では上位だと思つている」

上位だとは思うがどこにどんな実力者がいるか分からないからな。

「本当にそうなんだろうな」

彼は笑いながら言う、その後お茶を飲み私はガンドウの自宅に帰つてしばらく滞在した。

しばらく滞在していたガンドウを離れ、私は現在森林国家ユグラドの首都ユグラドに来ている。

国は成長を続けているだろうか？

もう国の発展に関わつていない私は国がどの程度大きくなつていいのか把握していない。

私は最近、この国に来た時は世界樹の元で過ごす事が多くなつた。私が会いに行くのと何となく嬉しそうな気配を感じるし私も居心地がいい。

太い木の枝に座り木の幹に背を預けてのんびりと過ごす事が多くなつた。

夕方近くに世界樹の元に向かうと、大勢の森人が世界樹に集まつて

いる。

「何をやってるんだ？」

「あ、クレリアさんこんにちは」

私は近づいて森人の一人に声をかけた、声をかけられた彼は私を見て挨拶をする。

「実はですね。世界樹に魔物らしき何かに住み着いているように……目撃した者が言うにはやや緑がかった黄色をしたそこそこ大きい生物らしいんですが……」

「分かっていないのか？」

そう言うと彼は困ったような顔をする。

「一部しか見えなかった上にあつという間に世界樹の上の葉の茂みの中に引つ込んでしまつたらしくて……」

「それでこの状態という訳か」

私は世界樹の周りをゆっくりと飛び回っている森人達を見る。

「これだけ大きい世界樹の中からそこそこ大きいとしても一匹の魔物を見つけるのはかなり難しく、見つからないですよ……」

世界樹は今も成長を続けているようで気が付けばますます大きくなっている。

もう他の樹と全く別物だ、空から見ても森の中から飛び出しているためかなり目立つ。

魔物が住み着いているか……もしそうなら世界樹から助けを求めると気配がしてもおかしくないと思うのだが……。

世界樹の気配はいつもと変わらない、私を認識していつもの様に嬉しそうな気配を出している。

世界樹自身は気にしていないようだが。

「私がここでのんびりするついでに見て来るから全員戻ってくれないか？人が多くと出てこないかもしれないしな」

「え？まあ、クレリアさんが言うなら構いませんけど……では近くの詰め所に居るので何かわかったら教えていただけますか？」

「分かった」

そして私の頼みを了承してくれた彼が声をかけて全員を集め、私が

調べる事を伝えると、みんなは私が言うならと引き上げてくれた。

さて皆が引き上げて私だけになったが、普通に探したら中々見つからないだろう。

世界樹が大きすぎる。

と言う訳で世界樹全体を気配察知した、やる気になれば簡単に見つける事は出来る。

今は世界樹の上方の中心近くを進んでいるな、時々止まっては再び動いている、何かしているのか？

さつさと捕まえるか。私は世界樹の上方に飛んでいき気配に近づくと、巣を作っている鳥や他の動物を横目に目的の場所にやって来た。

気配を完全に消しているため相手は気が付いていない、私は魔法で目的の生物を拘束する。

「キツ!」

鳴き声らしき声を出してもがくが解ける事は無い、私は捕らえた生物をよく見る。

大きさは一メートル前後で四足歩行の蜘蛛に近い体型だ。濃い緑色の大小二つ、合計四つの目を持っているようだ。

頭や足など全身が緑がかった黄色い毛でおおわれている、少し触ってみよう。

ほう、かなり肌触りがいい。

私が触っている間も「キツキツ!」と鳴いているが全身の毛のおかげか思った以上に可愛らしい見た目だな。

可愛らしくても危険かどうかは分からない。殺しても良いが世界樹が無反応だったのが気になる。

どうしようかと思っていると世界樹が困ったような、焦ったような気配を出し始めた。

分かりやすく捕らえている魔物の頭にマジックボックスから取り出した剣を向けると、気配が強くなる。

これはつまり……この魔物は世界樹にとって必要と言う事か？

剣をしまうと気配は少し和らいだ、逃げてしまうと困るので脚以外の拘束を解く。

「キッ?」

脚以外が楽になったのを感じたのか不思議そうな声を上げる魔物、私は落ち着かせようと頭を優しくなでる。

「怖がらせて悪かったな。害が無いのなら殺したりはしない」
私は出来るだけ優しく声をかける、通じるとは思っていない。

この私の行動に安心したのか世界樹の気配は落ち着いた。魔物も落ち着いたように見える、こいつは何を食べるのだろうか。

私は肉や錬金用の植物などを魔物の前に置いてみるが反応しない、そして錬金用の昆虫を置いた時に反応を示した。

「キッ!」

前かがみになって虫の方へ行こうとする。こいつは虫が好きなんだな、他の物をしまつて虫を少し増やして拘束を解いてやる。

魔物は昆虫に向かって行き食べ始める。世界樹がこの魔物を気にしなかった、むしろ守ろうとする気配を発したのはこの魔物が他の害虫を食べるからかも知れない。

世界樹にとってこの魔物はいて欲しい魔物な訳だ。となると名前が分からないのは困るな。

「これからお前は毛蜘蛛だ」

「キッ?」

虫を食べている魔物に言うのと反応が返って来た、取り合えず世界樹にとって害の無い魔物だと分かったからこの問題は解決だ。

その後世界樹にとって害が無い事を詰め所に居る森人に伝える。

当然だがエルフィにも連絡はいていたようで、家に帰って風呂に入っているとエルフィが訪ねて来た。

私は部屋に入ってもらい体を乾かして彼女の待つリビングへと向かう。

「今日はなんの用だ?何か飲むか?」

風呂上がりのモー乳を飲みながら言う。

「飲み物はいらわないわ。世界樹に住み着いた魔物について聞きたくて来たのよ」

「ん？害は無いと伝えたはずだが？」

私は彼女の反対側のソファにモー乳を置いて座った。

「貴女、「害は無い」としか言わなかったでしょう？もう少し姿とかどういった魔物か知りたいのよ」

そう言えばそうだったな、私の中で納得して終わらせてしまっていた。

「悪かった、もう少し詳しく話すべきだったな。では今分かったいる事を話そう」

「ええ、お願い」

そして私は現在判明している大きさ、外見や虫以外に食欲を示さなかった事や世界樹にとって必要な魔物なのでは無いか、といった話をした。

「なるほど……虫しか食べないなら世界樹に問題は無さそうね」

私の説明を聞いて安心したように言うエルフィ。

「むしろ他の害虫を食べるからな、それが世界樹の助けになっていくはずだ」

「貴女の話だと結構可愛らしい見た目のよね？見てみたいわ」

エルフィは外見に興味があったのか見てみたいようだ。

「普段は何処にいるか分からないし降りて来るかも分からないからな、難しいと思うぞ」

「そうかあ……」

エルフィは残念そうではあったが納得し、雑談に移る。

今回の事は問題が起きない様にすぐに森人達に説明された。

その後、世界樹でのんびりしていると毛蜘蛛が私の隣にやって来て寝るようになり、私はその肌触りの良い毛に横たわるようになった。

しばらく世界樹の元で毛蜘蛛とのんびりした後、ユグラドを離れ私は首都カルガを訪れた。

久しぶりに周囲を散策しようと森へ入り、奥へのんびり歩いていると一体の食い荒らされた大型獣の死体を見つけた。

森をうろついていればこんな事はよくある、私は特に気にする事無く通り過ぎ離れようとしたが違和感を感じて立ち止まり、振り返る。

おかしい。

私は詳しく調べる為に死体と周囲を見渡す。

死体がある場所は綺麗に草が生えていて周囲もまるで荒れていない、死体の状態からするとまだ死んで一週間も経っていないはずだ。なぜ抵抗の跡がないんだ？

戦闘があつたならもつとこの場は荒れているはずだ。

どこかで殺して持って来た可能性もあるがこの場所にわざわざ持ってくる理由があるとは思えないし、引きずったような跡も無い。

私はカルガの森にも幾度となく入っている。魔物にも遭遇したし死体も山ほど見て来た、しかし現場はいつも荒れていた。

奇襲をする獣や魔物は存在するが、それでも大型獣を一撃で仕留められるモノなどいただろうか。

この森でそんな事が出来る魔物や獣は見た事が無い。

つまり大型獣を全く反応させずに狩れる、もしくは何らかの方法で相手を無防備に出来る力を持った何かがこの森へ流れて来ている可能性がある？

一応ベキアに教えておくか。

私は散策を中止して、ベキアの執務室へ向かう。

私がベキアに用がある事を告げると少し待った後に執務室へと案

内された。

「急に訪ねて来るなんてどうしたんだ？」

机に向かっているベキアが私を見て言う。

「お前執務が出来たのか」

「いきなりそれかよ!？」

私が思わず言った言葉に反応するベキア……すまん、お前が執務をしている事に違和感を感じてしまった。

「王として必要だつて周りから言われちまってよ……必要ならやるしかないだろ？」

少し疲れたように言うが、やる気はあるようだ。

「そうか、まあがんばれ」

「どうでもよさそうだな？」

「どうでもいいからな」

彼は苦笑いする。

おっとこのままでは本題に入れない。私は休憩用のソファに座ると用件を伝える。

「今日はちよつとお前に伝えておく事があつてな」

「何だ？」

「この町の周囲の森に何かが流れて来ている可能性がある」

「……確かか？」

彼は少し気の抜けていた表情を引き締めた。

「ああ、今日森の散策に行った時食い荒らされた大型の獣の死体を見つけたんだ」

「それで？」

「死体の周囲は全く荒れていなかった……全く争った跡が無かったんだ」

彼は眉間に皺をよせる、恐らく私と似たような事を考えたはず。

「不味いな」

「そうだな」

取り出したモー乳を飲みながら答える。

「正面から戦つてお前達獣人に勝てる魔物はこの辺りにはほとんど

居ないと思うが……」

「……不意打ちや能力によっては簡単ではないかもしれない」
彼が私の言葉を続ける、分かっているならもう大丈夫だな。

「伝えてくれてありがとう……これから警備の強化と捜索隊の編成をする」

「二応しばらくこの町に滞在する、助けが欲しければ訪ねて来い」
そう伝えて私はカルガの自宅へ帰った。

カルガに滞在して十日程のんびりと過ごしているが特に連絡はない、ただ解決したとも言ってこないと言う事は厄介な相手だったのか？

助けを求めてこない所を見るとどうにもならない訳では無いようだ。

いつまでも私が助けるのも問題だろうと教えただけにとどめたが、どんな魔物か気になるな。

報告で教えて貰おうと思っていたがやはり実物を見たいな、結果的に助ける事になるがまあいいだろう。

すぐに私は森へと入った。

時刻は昼の少し前、森の隙間から陽が射し込んでいる。

広大な森の中で何の手掛かりも無く特定の魔物を探し出すのは普通ならば難しい事だが、私はそうでもない。

私は普段は使わない知覚を一気に広げ森の中を探し始める。様々な獣、魔物、獣人の捜索隊らしき気配や姿が分かる。

しばらく知覚を使いながら森を歩き、もう少し範囲を広げようかと思いはじめた頃、見覚えのない生物を見つけた。

……私も初めて見るな。

その魔物は灰色四つ足で獣人達を一回り小さくした大きさの魔物だ。

肌は滑らかで目は見当たらない。
丸っこく、足は太く短い。鈍そうな体型だがこいつがそうなのだろうか？

確認するまでは決めつけない方が良いな。

私は監視したまま魔物のいる方へ進んでいく。そしてある程度近寄った時に魔物に動きがあった、私がいる方向へ頭のような部分を向けている。

そのまま近づいていくと魔物は私から離れる様に逃げて行った。

思ったより素早いな。あくまであの見た目にしてはと言うだけで他の生物に比べると大分遅いが。

だが……今のはもしかして私の近寄る気配を感じたのか？この時点で分かるなら獣人達では見つけられないかもしれない。

あの魔物の感知範囲は恐らく獣人より広い。

彼らも気配は消せる。消せるが彼らの場合、基本的に相手を先に見つけてから接近するために行う。

相手の感知範囲が彼らより上だといつまでも見つけられないかもしれない。

しかしあの魔物は相手が悪かった。私は知覚を広げて追いかけている、逃げられると思うな。

ある程度離れた草むらに落ち着いたのを確認すると、今度は私も気配を消して音も無く近づく。

……いた、こいつがどうやって大型獣を反応させずに殺したのかが分からないな。たまたまこいつが見かけない奴だっただけで他にいう可能性も考えておこう。

取り敢えず捕まえて調べよう。私が魔法で魔物を拘束すると全く抵抗しない。

……全く抵抗しないな。

捕らえた魔物に近づいて観察する。すべすべした肌が濡れて光っている、触るとブニブニしているな、目が無い蛙みたいだ。

……さてよ。

さつき見ていた時は肌が濡れているようには見えなかった、私は念のため肌の水分の分析を試みる。

なるほどな……やはりこいつがやったようだ。

肌からにじみ出ている水分は揮発性の毒だった。詳しく調べないと分からないがこの毒で毒殺するか動けなくするかしていた可能性が高い。

魔物と言うのは面白い、毒に特化してる者も居るんだな。

この魔物の毒を参考にして魔法を考えついた……無味無臭の毒の空気などはどうだろう。苦しめない様に意識を無くしてから死ぬように作ってみようか。

まあそれは後だ、まずはこいつを持って帰ろう。私は拘束したまま魔物の毒を無効化し眠らせ、マジックボックスへと入れた。

カルガの自宅に戻り詳しくこいつの毒を調べ、どういった毒かが判明した。

無臭の揮発性の毒で、吸い込むと感覚などが鈍くなっていき吸い続けると死亡するという物だった。

痛みなども感じないから暴れる事無く獲物は死ぬのだろう。

毒の事も分かったのでこいつを捕まえた事を言っておこうとベキアの元に向かう。

屋敷の者に執務室まで案内されて部屋に入ると、変わらず執務を頑張るベキアが居た。

「慣れて来たか？」

ソファに座りベキアに問いかける。

「まあ少しはね……今日は何の用だ？」

「私が知らせた流れの何か事だが、見つけたから捕まえたぞ」

「本当か!？」

「嘘を言っただけ、見るか？」

彼は執務を止めてこちらにやって来る。

「訓練場で見せてくれ」

そう言つて部屋を出て行く、私も後について部屋を出た。

「早速見せてくれ……一応聞いておくが危険はないよな？」

訓練場に着く前に主だったメンバーを集めたベキアが私に言う。

「大丈夫だ、無力化して眠らせてある」

そう言いながら魔物を取り出す、拘束されたまま眠る魔物が皆の前に現れた。

「こいつか……確かに見覚えのない魔物だな……目が無いな」

「強くは見えませんが、何か能力があるんでしょうか？」

魔物を見てベキアが言い、メンバーの一人が私に向かって質問してくる。

「調べた結果こいつは皮膚から揮発性の毒を出す事が分かった。その毒は吸う事で体の機能を弱め最終的に死ぬ、痛覚も鈍るから獲物からすれば何ともないのになぜか動けなくなり意識を失って死ぬ訳だ」
「……魔物と言うのは想像以上に恐ろしいですね……。このような力を持つている個体も居るなんて」

私の説明を聞いて恐怖を感じたのか彼らの一人が呟く。
するとベキアが私に問いかけて来る。

「今まで俺達は見つかられなかったんだが、どうやった？」

「ああ、それはな……」

私はこの魔物は気配の感知範囲と精度が高い事と、その点において獣人達を超えている事を説明した。

「今までずっと逃げられてた訳か……」

しかめっ面になるベキア、周囲のメンバーも微妙な表情をしている。

「私はもうこいつは要らないが、欲しいか？」

「良いのか？」

ベキアが軽く驚いたように聞いてくる。

「構わないぞ。扱いには気を付けろよ?」

「分かってるよ」

「そう言えば名前が分かりませんね」

私とベキアが話しているとメンバーの一人が言った。

「一応私は考えたぞ」

「へえ、なんて付けたんだ?」

私に聞いてくるベキア。

「目無し毒蛙」

私がそう言うとは皆は黙ってしまった。

結局その後誰もその名前で呼ぶことは無く、私は彼らに目無し毒蛙を引き渡して家に帰った。

それからウルグラーデに戻って毒魔法を作ったり、開発途中だった時間魔法を完成させたりして居たらいつの間にかケインとミナの間
に娘が生まれていた。

そして約五年後。領地を広げた各国は遂に一部の領土が隣接し、お互いの国の存在を知った。

私は現在ウルグラーデの自宅のソファに座っているが、寝ている女の子に抱き着かれて身動きが取れないでいる。

「あら、ルーテシアはクレリアお姉ちゃんが本当にお気に入りね」

「嫌という訳では無いが、なぜこんなに懐かれているのか理解出来ない」

子を産んで五年ですっかり母親になったミナが私の飲み物を持ってきてくれた。

子供が生まれてから時折私がケインとミナの娘であるルーテシア・イヌス・トリアムの面倒を見ていたため、ミナも必然的に私の家によく来るようになった。

「生まれてからよく会っているからじゃない？」

私の隣に座ってルーテシアの頭をなでるミナ。その表情は愛しい娘に愛を注ぐ母の顔なのかもしれない。

「お前達夫婦が私にばかり世話を頼むからだろう」

「だって貴女に預けておけば安心だし……世界で一番安全な場所と言っても過言じゃないもの」

「まあ、引き受けた以上は預かっている間の安全は出来る限り保障するが」

向かい合って私の膝の上に乗る、私の体に身を預けて眠る彼女を見る。ミナよりは薄い緑のセミロングで柔らかい髪質をしているため撫でると意外と気持ちいい。

「話は変わるけど、新しい国が三つも出来ていたのね……ルセリアはどうするつもりなのかしら」

娘の頭をなでながら話すミナ。

「どうだろうな、この国は他の種族の事をすでに下に見ている。はいそうですねかと交流するかどうか」

「そうよね……娘が……この都市が巻き込まれないと良いけど……」

心配そうに自分の娘を見る彼女。

確かにルセリアに所属しているから狙われる可能性はある。その上戦ってもぎ取った自治権だからルセリア神王国にもあまり良く思われていないらしいな。

奴隷達に聞いてみるか？手を出すつもりは無いがどうなっているのかは知りたいからな。

私は姿を消して首都ルセリアにやって来た、私はジークの執務室に入り声をかける。

「ジーク」

彼は咄嗟に剣を抜く体勢になる、中々良い反応をする。

「主？」

「そうだ、見つかると色々面倒そうだから姿を隠して来た」

今までに何度か来ているがジークは私を「主」ミアリスは「お嬢様」と呼ぶ。

「今日は何の用だい？」

ぱつと見は独り言を言っているようにしか見えないだろうな、言葉遣いは自然にするように言っている。

「取り合えずミアリスも呼べ」

「分かったよ」

そう言うと彼は部下を呼びミアリスに連絡をした、それぞれの本部が違う場所にあるからしばらくかかるか。

そうして執務を続けるジークを横目に魔法を解いてソファでくつろぐ。

すると部屋の扉がノックされた。

「ジーク？来たわよ」

「ミアリス一人か？」

他の者が居ないか確認するジーク。

「部下がいるけど？」

「重要な事だ……君だけ入ってくれ」

「分かったわ……貴方達は別室で待機していなさい」

部下らしき複数の返事が聞こえ、ミアリスが入ってくる。

「ジーク重要っていったい何がっ……お嬢様」

「重要だよね？」

「確かに重要だわ」

そんな二人のやり取りを聞きながらモー乳を飲む。

「さて今日は聞きたい事があってな、知らなくても咎めはしないから正直に話せ」

「はい」

ソファの体面に座った二人の返事が重なる、私は二人に問いかけた。

「明らかになった他種族の国についてルセリアはどう動くか分かるか？」

そう聞くと二人は考える仕草をしていたがミアリスが話し始める。

「今の所私達にもどうするかの方針は通達されていないわ。武力で何かをするつもりなら私達には必ず命令が下るはず……だからまだ上の者達はどうかを考えていると思うわ」

その言葉にジークも頷く、相手の国力も分からないから流石に即戦争を仕掛けたりはしないか。

「お前達の予想で構わない、どう動くと思う？」

そう尋ねると今度はジークが答えた。

「まず間違いなく仲良くはしないと思うね。今この国に亜人種と仲良くしようなんて人間はいないよ……いたとしても表には出せないよ、国に居られなくなる」

「そうね、どんな方法を取るかは分からないけれど滅ぼそうとする二人ともこのまま仲良くとはいかない予想か、まあ私もそうなると思うているが。」

「……主は人間が亜人を滅ぼして奴隷にしても気にしないのかい？」

「私もそれは考えたわ、お嬢様は亜人達の味方では無いの？」

二人が私に聞いてくる、亜人寄りなのは間違いないかもな。

「構わず好きにすると良い。私は彼らとも交流を持つているが助ける気はない、この四国がどうなるかを見ていただけだ。繁栄するのか、滅びるのか……あるいは新たな種族が現れるのか、私の予想以上の何かが起こるのか、実に楽しみだ」

彼らは真剣に私の言葉を聞いていたが、じんわりと汗をかいている。

「この世界に生まれた知的生命達が一体どこに辿り着くのか。ゆつくりと楽しませてもらうつもりだ」

二人は俯いて小刻みに震えている、どうしたんだ？

「これから時々どうなっているか聞きに来る、まとめて報告書を作っておけ。……いや、これからは何か起こる度にウルグラードの私の家に送って来い。出来るか？」

「わ……分かったよ主」

「分かったわ……お嬢様」

これでルセリアの動きはそれなりに分かるだろう。他の三国は必要なら直接行けばいい。

それから半年ほどが過ぎ、獣王国カルガに私が訪れた時にルセリアとカルガが国境の村を巡って小競り合いをしたと聞いた。

「お互い引かずにそのままか」

「そうだ、村を渡す訳にはいかないからな」

執務室で話す私とベキア。小競り合いの理由を聞いてみると、詳細は分からないが人間達が獣人達を村から追い出そうとしたらしい。当然彼らは断るが人間側も諦めずに少々もめたようだ。

「で？その村はどうなったんだ？」

「もちろん俺達の物だ」

腕を組んだままニヤリと笑うベキア。

「他の方向へ広げた方がいいんじゃないか？」

「もちろんそうだが、国境を固めておかないと奴ら勝手に入り込んでくるからな」

「彼はしかめっ面をする。」

「流石に国同士の戦争に私は加担しないぞ」

私が加担すると加担した側が絶対に勝ってしまうだろう、それは面白くない。

「分かってるよ」

他の二国も人間が入ってこない様に防衛を優先しているのだろうか。

そして私はいつもの様にしばしこの国での生活を楽しんだ。

それからこの二国は小さな小競り合いをし続けた。

お互い大事になるような事はしなかったが、始めから良くなかった人間と獣人達の関係は人間側が獣人を始めとする亜人種を劣等種として見下している事もあり、改善する事は無かった。

程なくしてこの二国はお互いに国境近くに砦などを作り始め、軍備を増強し始める。

他の二国もこの状況に危機感を感じて各国間に砦を作り、もしもの時の為に軍備を増強し始め、緊張が高まっていった。

各国は自国を守るために準備を進めている筈だが、私は戦争をして人間を、亜人種を、お互いを滅ぼしてしまいたいという憎悪を持っている者がいると考えている。

ここまで来てしまったら各国が戦争を続けられないほどに疲弊するか、種族などどうでも良くなるほどの危機が訪れない限り争いの絶えない世界になりそうだ。

どうなろうと楽しみだから構わないが。

ウルグラードは私の本拠がある都市だからウルグラードとその付近は守ろう。

もし世界的に戦争になってモー乳の供給が切れたら困る。私の愛飲している飲み物と好物のデザートが無くなってしまおう。

私は各国が着々と戦争に向かっていているのを見ながら色々と考えていた。

私の予想ではカルガは負けると思っている。少なくとも今のまま戦争になれば期間は分らないがいずれ絶対負ける。

国として数十年先に成立し成長してきたルセリアはカルガよりはるかに強大なはずだ。

国力を上げるために奴隷になっている亜人種を使って現在も各技術を研究開発しているだろう。

私を奴隷にしようとした者達が隷属魔法を防ぐ魔道具を付けていたように、人間の国ならではの新しい魔道具や武防具、魔法などが作られているはず。

そして人間達自身も変化している、例として挙げるなら私の奴隷となったジークとミアリスだ。

かつて人間の中にあれ程の強さを持った者は居なかった。鍛え方か、新たな技術か、種としての進化か。間違いなく人間達も強くなっている。

私が住んでいるウルグラードも戦争に備えて準備をしているらしい。ただ、攻めるためでは無く巻き込まれないために軍備を整え物資を備蓄しているようだ。

獣王国カルガとルセリア神王国が険悪になってから一年後。

各国はすでに砦を建設し軍を配置して軍備を整え終わり、一年の間に二国間の関係はますます悪化していた。

ウルグラードも戦力を整え防御を固め、物資を備蓄して出来る限り

の準備はしたようだ。

戦争の気配が近づくにしたがって各町の間を移動する者は減っていき、どの町も守りに入っている。

普通に生活していてもどこか緊張感が漂うウルグラード。

そのウルグラードの家で過ごしている私の元に、現在ミナとルーテシアが遊びに来ている。

「おねーちゃん抱っこ」

「おいで」

ルーテシアが私に抱っこをせがんで来たので抱っこしてやる。

私の体は十三歳前後の体格なのでいずれ抱っこも出来なくなるな。

「……この一年で何だか町の空気が重苦しくなったわよね」

私の代わりに飲み物を用意しているミナが呟く。

「戦争の気配をみんな感じているのだろう。この町も所属はルセリアだ、巻き込まれる可能性はある」

「世界がこんな事になるなんて思ってたわ。私が子供の頃はみんな一緒に暮らしていたのに……」

そう言いながら彼女は二人分の飲み物をテーブルに置きソファに座る。

私は用意して貰ったモー乳を飲みながら彼女に言う。

「この流れはもう止まらないと思う」

「巻き込まれなければ良いけど……」

何となくミナの声は元気がない、戦争よりも娘が心配なようだ。

「ここに戦火が及ぶかは分からないが安心しろ、ウルグラードとその周辺は守る気である」

「そうなの？ 貴女が守るなら安心だけど……どうして？」

彼女は私の正体を知っているからな。私がこの世界の変わっていかく様を楽しんでいる事も知っている。

だからこそわざわざ私がこの町だけ守る理由が分からないのかもしれない。

「モー乳とデザートを守るためだ」

「……え？」

彼女は気の抜けた返事をする、私は好物を守る。

「戦争の影響でモー乳とデザートが無くなったら困る。だからウルグラードとその付近にあるモー牧場を守るんだ」

「もう……何も言えないわ」

呆れたように彼女はソファにもたれて上を向く。

「おねーちゃんモー乳飲みたい」

抱っこしているルーテシアがモー乳を欲しがらる、私はコップをルーテシアの口元に持って行ってやる。

「んく……んむ……」

「何か……私よりも懐いてない？」

モー乳を飲むルーテシアを見ながら不貞腐れたようにミナが言う。

「心配するな、どんなに私に懐いているように見えても子供にとつて母親は特別だ。お前が愛情を注いでいる限りお前を超える者は居ない」

「そうなのかなー」

頬杖をついてむくれる彼女。

「私は子供を産んだ事は無いし産めるような存在でも無いが子育ての経験は多い、上手くもなる」

「年季が違うかー……」

「そういう事だ」

二人で話しているとモー乳を飲み終えたルーテシアがミナに言う。

「ママ」

ミナに手を伸ばす彼女、ミナはすぐに立ち上がり彼女を私から受け取る。

「ママが不貞腐れているのを感じたようだぞ」

「そうなのかなあ……？」

私がそう言うとミナはルーテシアを抱いたまま微妙な表情をする。それから他愛のない話をしていると家の扉がノックされる、ルーテシアはすでに寝てしまっているようだ。

私が扉を開けるといつも手紙を持ってくるローブの女性が立っていた。顔が見えない一般的なローブの姿だが彼女はルセリアの魔法

士団の団員だろう。

「確かに受け取った」

そう言うで一礼して去っていく、手紙を開封しながらソファに戻り内容を確認する。

それはジークとミアリスからの手紙だった。

その手紙にはルセリア兵がカルガの部隊を強襲し殺害、逃げ延びた獣人が獣王国カルガに伝えた事で獣王国カルガとルセリア神王国が戦争状態になった事。

戦争状態になった事で自分達も戦場に出る事になるので会いに来ても居ない可能性が増える事と手紙はこれからも送るが頻繁に送るのは難しい事などが書かれていた。

「戦争が始まったか」

「えっ?」

ルーテシアを抱いて紅茶を飲んでいたミナが声を上げる。

「戦争……: 始まったの? 誰からの手紙?」

「ルセリアにいる私の情報源からの手紙だ、開戦した事を知らせてくれた」

「いつの間にそんな事を……いえ、それよりも……: 始まったのね」
浮かない顔のミナ、この都市は守るから平気だぞ。

「今日の所は帰れ、ケインのそばを離れるな」

そう言う彼女が頷き、眠ったルーテシアを抱きなおし帰って行った。

私は戸締りをしてソファに座る。

ジークとミアリスの二人は強かった。

他の者もあそこまででは無くとも実力者であるなら、国力で大きく差がある上に兵強さも大きな差が無い事になる。

カルガは苦戦を強いられるだろうな。

戦争が始まって一か月が経った。ウルグラードの状況は戦争が始まる前と変わらないように感じる。

見えない所では影響が出ているかもしれないが、今の所は分からないし私に関係ないのなら気にする事は無い。

奴隷の二人から時々届く手紙によると現在の戦況は獣人が有利らしい、予想が外れたな。

カルガは砦を森の中に作り、侵攻してくるルセリア軍を撃退しているようだ。

これは獣道を使っているのか？獣人の個々の能力は高いからな。

作戦を練って獣道を上手く利用すればかなりの戦力差があっても跳ね返せるかもしれない。

二国が戦争をしている現在、私が何をしているかといえばウルグラードのモー乳販売店でモー乳とデザートを買っている。

「モー乳の大瓶十本とモー乳アイスを五個貰おうか」

「ありがとうございますクレリアさん」

商品の用意をする女性店員、子供だった彼女も今では母親だ。

「戦争の影響はあるのか？」

私がそう尋ねると商品の用意をしながら答える。

「今の所問題は無いですね……ただいつまでも続けば何か問題が起きるかもしれません」

そう言いながら準備を終える。

「何かあったら教えてくれないか？買えないと困るんだ」

「あらあら……分かりました。何かあったらお教えします」

「頼む」

金を払い商品を受け取りながら言葉を交わし、何かあった時は教えて貰えるように約束して店を出た。

町の人通りは少し減ったように感じる。戦争中であるという事実が人々の色々な意欲を失わせているのかもしれない。

開戦から二か月半ほどたったある日、久しぶりに私の元に手紙が届いた。

何か大きな動きがあったか？

私は手紙を開封し、内容を確認する。

そこにはこれからのルセリアの方針が書かれていた。

森という獣人に有利な場所での戦闘に一月以上も攻めあぐねたルセリアは、魔法使いと炎を放射する魔道具を使って獣人達の砦を周囲の森ごと焼き払うつもりらしい。

森ごと全て焼き払う作戦とは中々思い切った事をする。

世界樹がある森だったら私が許さないが他なら好きにすればいい。

森の環境だけでもルセリアにはかなり邪魔だっただろうが、これは獣道に気が付いたか？

木々が無くなり戦場が広くなれば砦も落とすしやすくなるし、獣道も潰せてルセリア軍としては嬉しい訳だ。

今まで獣人達が戦えていたのは森の木々がルセリア軍の規模と行動を制限していたからだと思っている。

森が焼け、獣道が使えなくなり、広くなった戦場に砦だけになれば例え個々の力がルセリア軍より上であっても物量で押し潰されるかも知れないな。

ルセリア軍は獣王国の首都までの森を焼いて進むつもりなのだろうか？

砦を攻略するためなら分かるが首都までとなると、当然だが獣人達も森が燃えるのをただ見てはいないだろうしな。

ルセリア軍の規模は分からないが数が揃えば出来ない事では無いかも知れない。

前回の手紙を受け取ってから三日後の朝。昨晚から雨が降るなか手紙が、実際は報告書のようなだが、それがまた届いた。

何だ？今度は早いな。

いつもの様にローブの女性から手紙を受け取りソファに座って中身確かめる。

なるほど、更に戦火が広がるか。

そこには他のルセリア軍の部隊が獣人の村を襲い壊滅させた時、森人と大地人を巻き込み殺害し生き残りを奴隷化した事が知られたと書いてあった。

これが原因で森林国家ユグラド、魔工国ガンドウとも戦争状態に突入したらしい。

この二国に対応するため森を焼く作戦は中止、それぞれの国との防衛に戦力を振り分ける事になったようだ。

現場に居た指揮官は三国を相手にする事になると知っていてわざとやったのか？バレないと思ったのか、獣王国を見て問題無いと判断したのか……。

巻き込まれた森人と大地人も、戦争中の国に、しかも狙われそうな村にわざわざ滞在しているとは……被害にあった森人と大地人はその村の獣人と個人的に交流があったのだろうか？

その辺りの事はともかく、これでルセリアは亜人種の三国と同時に戦う事になった訳だ。

いくら国として大きくても流星に辛そうだが、どうするつもりなのか見せて貰おうか。

開戦から四か月、私は変わらずウルグラードの自宅で過ごしている。

時刻は昼を過ぎ午後になった。

私はソファで報告書を読みながら戦争の事を考える。状況はルセリアが少々厳しい状況らしい。

獣王国の砦を焼き落とす作戦は中断し、魔工国ガンドウの見た事の無い武器による攻撃や森林国家ユグラドのゴレム兵に手こずっていると書いてあった。

三方向から攻められるルセリアは戦力を分散するしかない、各国の予想以上の手強さに焦っているかも知れないな。

ガンドウの見た事無い武器というのは恐らく魔道武器の事だろうな、数を揃える事が出来たのか。

ゴーレムは開発に関わったから良く分かる。前衛としてはかなり使える兵士だ、核と素材しか消費しないから人的被害が無い。

このままだとルセリアが滅亡するか？出来れば存続して欲しかったが。

そう思いつつ報告書をテーブルに戻す、現在の状況でルセリアが崩壊したらどうなるだろうか。

彼らを知っている私としては、人間を滅ぼすような事は恐らくしないだろう。

奴隷にするのもあまり想像出来ない。

乗り気ではなくとも二度とこんな事をしないよう、管理するために人間を奴隷化するだろうか？

そんな事を考えていると扉をノックする音が聞こえる。扉を開けるとルーテシアを抱いたミナが立っていた。

「おねーちゃん抱っこ」

「ルーテシアがお姉ちゃんに会いたいって言うから来ちゃったわ、今は大丈夫？」

「大丈夫だ、入ってくれ」

私に手を伸ばすルーテシアを受け取って一緒にソファに座る。ミナはすっかり慣れた様子で飲み物の準備をしている。

「クレリア、飲み物は？」

「モー乳を出してくれ」

モー乳を頼んでルーテシアを抱きなおす、彼女は私の頬や髪を触って喜んでいる。

「ルーテシアをは貴女の髪とお肌がお気に入りみたいね」

触られている私を見ながらミナが飲み物を持ってやって来る。

「今まで何人も子供の面倒を見たがよく触られる、なぜだ」

「貴女は胸は見た目相応だけど……美人だしスレンダーで肌も髪もすごく綺麗で肌触りが良いわよ？良い香りまでするし……まさに人を超えているわ」

私が疑問を口にするのとミナが答える、久々に容姿の事に触れられたな。

「以前からよく言われているが今でも良く分からない。確かに人では無いと言われた事が嘘だとも思っていないが……そこまでか？」

「美しさが突き抜けてみんな一歩引く位には綺麗よ」

そう言ってくるミナ、男に群がられても面倒なだけだしそれならいいか。

「声も綺麗なのに……その話し方は男みたいよね、もつたいたい」

同じような事を何処かで言われたような気がする、変える気は無いが。

「私に性別は存在しないと知ってるだろうに、気が付いたら今の姿だったただけだ」

「そうだけど……見た目と声に対して話し方の落差が凄いのよ」

モー乳を飲みながら答える私に紅茶を飲みながら返すミナ。

「お前、私が少女のように話している方がいいと本当に思っているのか？」

「あー……最初の内なら違和感なかったのかもしれないけど……今だと逆に駄目かもしれないわね」

「ミナさん酷いわ、私こんなに大人しくて可愛いのに……」

可愛らしくそう言う彼女が紅茶を少し噴いた。

「……!?ちよつと!?やめてよもう！駄目だわ……もう違和感しかない」

「そうだろう？やはり無理をしない話し方が良い」

「後、自分で大人しくて可愛いって言うのは無いと思うわ」

「そうなのか」

私の膝の上で嬉しそうなルーテシアの頭を撫でながら、駄目出しを

聞いた。

それからしばらくして落ち着いたミナは少し顔を引き締め私に言う。

「ねえ、ルセリアに居るっていう情報源から戦争の情報は無い？」

「何か知りたいのか？」

「一応ルセリア所属でもウルグラーデには情報が入ってこないのよ、だから少しでも今どうなっているのか知りたいのよね」

「そうだな、一対一だった戦争が三対一になったな」

「え……!?!?なんでそんな事に?」

私は報告書にあつた事を簡単に説明した、説明聞いた彼女は溜息をつく。

「なんでわざわざ敵を増やしてるのよ……」

「私に言われてもな。三国まとめて相手しても勝てるかと判断したと私は予想している」

「どうなるのかしらね……出来ればどの国も無くならないで欲しいわ……元々人間が一方的に敵視しているだけだもの、どうにか穏便に平和にならないかしら」

うつむいて言葉を洩らした彼女は顔を上げてルーテシアを見た。

「このままだとルセリアが滅びそうだが、ウルグラーデは大丈夫だと思うぞ。元々独立国のような物だしな」

ケインもウルグラーデの運営に協力しているみたいだし悪いようにはならないだろう……そうだ、ケインで思い出した。

「ミナは学校の校長を引き継ぐのか？」

「えっ? ええ、次の校長は私に決まっているわ」

突然の話題変更に心配そうにルーテシアを見ていたミナが私へと視線を移す。

「でも、娘がある程度大きくなるまでは正式に校長にはならないわ。この子の成長を待つてからとケインと決めているの」

「そうか、子供のためにはその方がいいかもな」
私は寝てしまったルーテシアを抱きながら夕方まで今後の戦争の行方を語り合った。

開戦から半年。大国は伊達では無いようでもルセリアは今も三国と戦争を継続していた。

私はと言うと二週間ほど前に倒れたケインの見舞いに来ている。寝室で横になってるケインのベッド脇にある椅子に座る。

「わざわざありがとうございます、師よ」

「気にするな。ルーテシアも居るしな」

この二週間ミナが代理として校長の業務を行っている、そのため日中は私がルーテシアの世話をしている。

ルーテシアの面倒を私の自宅で見ていたのだが、二週間たっても治る気配が見えない事を心配したミナが私に診断を頼み、私はここに居る。

「私は治りますか？」

状態を確認した私にケインが声をかける。

「お前、かなり昔から無理を続けていたな？体の中がボロボロで一般的な錬金薬や回復魔法では治らない程に酷くなっているぞ」

表情はいつも通りを装うケインだが、にじむ汗がその苦痛を物語っている。

「倒れるまでは問題はありませんでしたよ……？」

「馬鹿者、限界を超えたから症状が出たんだ。このままではそう長くは無いぞ」

「……そうですか」

ルーテシアが寝ていてよかった、あまり聞かせたい話ではない。まあこのままでは死を待つのみだが、私は身内には甘いらしい。

「普通ならこのまま死を待つしかないが……今は私が居る」

ケインは軽く目を見開く。

「ケイン、私はお前を治せる……寿命は延びはしないが寿命を迎えるまで生きられる。どうする？いつそ寿命も伸ばすか？」

ケインは目を閉じて何も言わない、すぐに頼むと言わないのは迷っているのか？

何を迷っているのやら。

「死ぬ前に答えろよ、今日はこれで帰るとしよう」

私は寝ているルーテシアを抱き上げて寝室を出る。

どうして迷う？どちらが良いかなど分かり切っているのではないのか？

仕事を終えてルーテシアをミナに返す時、私は彼女に話があると
言って校長室に移動した。

「クレリア、話って？」

「ケインの事だ」

ソファに座りそう言うとミナの表情が強張る、勘のいい娘だな。

「結論から言うともう一般的な錬金薬や回復魔法では治らない状態だ、このままでは長くはない」

私の言葉を聞いた彼女は脱力し俯く。

「かなり昔から無理をしていたようだ。体の中はボロボロで二週間前に倒れたのは限界を超えたからだ」

「……もう、どうにもならないの……？」

うつむき震える声で私に問いかける彼女。

「どうにでもなるぞ」

「え……？」

顔を上げる彼女の目には涙が浮かんでいる。

「私がお前のお前は知っているだろう？一般的な錬金薬や回復魔法では治らないと言ったが……私の薬や魔法が一般的だと思うか？」

「それは……」

「私なら治せる」

「じゃあ……！」

「ただし、ケインが治して欲しいと言った場合のみだ。どうしても良い相手ならそもそも助けないか勝手に治すが、弟子本人の意思を優先してやりたいからな」

「ケインにはこの話は……？」

「した。したがあいつは治して欲しいと言わなかった」

「なんで……!?!」

涙をこぼすミナ、それは本人にしか分からんな。

「一週間待つ……一週間後に家に行く。それまでに答えを聞けなければ治す事はない、生きていて欲しいなら説得するんだな」

「……分かったわ」

私は校長室を出て家に帰った。

どんな決断をするのか、治せるなら直せばいいと思うんだが。

一週間後ケインの寝室に私は訪れた。

ケインは少しやせたように見える……ミナはリビングでうつむいたまま何も言わなかった。

「さて約束の時間だが……」

「答えは決めました……師よ」

汗をにじませて私を見つめるケイン、答えを聞く前に言う事は言うておくか。

「答えを聞く前に私の話を聞いて貰おうか」

「……はい」

薄く微笑んで言う私に、ケインは返事を返す。

「助かる手段を前にしてそれを手放す事は愚かであると私は思う。自分だけならそれも良いだろう、ただ残される妻と娘がいる者は果たしてそれでいいのか」

ケインは目を伏せる。

「共に過ごしたいと、まだ生きたいと思う事は無いのか。妻と娘を

見捨てて悲しませる、彼女達を思う気持ちがその程度であった、それだけの事かもしれないが」

私はケインを見る、ケインも私を見た。

「私はお前に教えたはずだ、大事な物を守るには力があると。そのためには使える物は使え、命を捨てて守るのではなく守って生きて戻れど。お前は私の教えを理解しているか？守る気があるか？大事な物など無かったか？」

「私は……」

彼の言葉を遮って続ける。

「お前は私の教えを理解していると思っていたが違うようだな。お前は今意味もなく死のうとしている。ただ自分の大切な者を悲しませるだけの選択をしようとしている」

彼は目を瞑りゆっくりと、長く息を吐いた。

「お前にはお前の考えがあるだろう。どんな選択をしようとするかはお前の選択を尊重しよう、たとえば誰が悲しもうと」

「師よ、私は貴女の教えを守っていますよ」

目を開いてそう言った彼の表情は穏やかだった。

「答えを聞こうか」

そう言うと彼は私を見つめてゆっくりと言った。

「……師よ。貴女のお力をお貸しください……私はまだ死ぬ訳にはいかないのです」

「そうか」

こうして私は彼の治療をした。

リビングで一人泣いていたミナに結果を告げると彼女は寝室に走って行った。

柄にもなく余計な事を言ってしまった。

本人の意思に任せると言いながら説得のような事をしてしまったのは、弟子に出来るだけ長く生きて欲しいと私が思っている証拠だな。

翌日、寿命は伸ばさなかつたが私の治療によってあっさり回復したケインは昼過ぎにミナとルーテシアを連れて私の家にやって来た。ソファに座った私の正面にケインが眠ったルーテシアを抱いたまま座り、その隣にミナが腰を下ろす。

「ルーテシアがケインに抱かれているのは珍しいな」

「朝起きた後ケインを見て抱っこをせがんでずっとこのままなのよ」

私の疑問にミナが答える、父親の状態を感じていた？子供はそう言った事を感じるらしいからな。

「調子はどうだ？」

「若返ったようですよ、体調は最高の状態ですね」

元気を取り戻したケインが微笑みながら言う。

「馬鹿者。若返った訳では無く治す前の状態が悪すぎただけだ」

倒れるまでは問題無かつたと言っていたが、自覚していなかつただけだな。

「師よ、助けていただきありがとうございます。私達の一生をかけてこの御恩は……」

「待て」

夫婦で頭を下げ大げさな事を言い出したのを止める。

「何でしょう？」

「そんなたいした事では無いからやめろ」

「死ぬ筈だったケインを助けてもらったのよ？どれだけ感謝してもしたり無いと思うけれど……」

ミナもそんな事を言い始める。

「例え話をしてやろう」

「例え話ですか？」

疑問を浮かべるケインとミナ、そもそも感覚が違うのだろうか。

「お前達がソファに座っていて目の前のテーブルにクツキーが置いてあるとしよう」

「はっ」

「友人がすぐ隣に座りクッキーを取ってくれと言われて取ってやっただけで、その友人が人生をかけて恩を返すと言い始めたら困るだろう?」

キョトンとする二人、私にとってはそんな物だ……そこまでされても困る。

「なるほど……あの程度の事は師にとってクッキーを取ってやる程度の事だと……そう言うのですね?」

「お前達と私の感覚の違いだな。上手く伝わっているか?」

「違いすぎてどうすればいいか分からないんだけど……」

真っ先に理解を示すケインに答える私と、困惑するミナ。

「ミナには上手く伝わらなかったか?」

「元々私達とは実力が違い過ぎるのは分かっている。分かっているけど……はあ……」

ミナは頭を抱えてため息をついた。

「せめてもう少し娘が成長するまで死ぬな」

「そうさせていただきます……師よ」

頭を抱えてうつむくミナを横目に、私の言葉に抱いたルーテシアを見つめながら答えるケイン。

守りたいのなら生きろ。

ケインの事も終わり自宅に帰ると手紙が投函されていた。

私に手紙を書く相手は今の所奴隷の二人しかない。

手紙を取り開封しながらソファに座る、今度は何があったのだろう。

あまりはつきりとした情報では無いな。

手紙にはルセリアが三国を相手にして劣勢になり始めている事、この状況を打開するための何らかの作戦が行われている事が書かれていた。

肝心の作戦は団長である二人にも明らかにされず。親衛隊と一部

の上層部のみが詳細を知っている、と言う事までしか探れなかったらしい。

今のルセリアは多少押されているとはいえ三国との戦線を維持している。

作戦がどんな物か分からないがここからどうするのか楽しみに待っていよう。

開戦から七か月半程が過ぎた、戦況は変わらずヤルセリアが不利ではあるが膠着状態が続いているようで最近は変わり映えの無い報告が続いている。

「きゃーあははははー」

私の家のリビングで魔法を使ってルーテシアを宙に浮かせ、遊んでやる。

彼女が魔法の道に進むかは分からないが特に魔法に対して恐怖を感じてはいないようだ。

私達が危害を加えない存在だと信じ切っているからかもしれないが。

「その遊びが気に入ったのね」

ソファに座り紅茶を持ったまま微笑みながら喜ぶ自分の娘を見ているミナ。

ケインが復帰したためルーテシアの世話に戻ったミナは、ルーテシアを連れて町を歩いたり勉強を教えたりしながら日々を過ごしているらしい。

そしてそれなりの頻度で私の家にやって来る。私に会いたがるルーテシアのためらしい。

ゆつくりと空中を漂わせミナの元にする。彼女がルーテシアをしつかりと抱きとめた所で魔法を止める。

「楽しかった？」

「楽しかった！」

額をくっつけ合い微笑んで会話を交わす母と娘。

その様子を見ながら私はソファに座ったままモー乳を飲む、二人が来た時は大体このような毎日だ。

「いらっしやいませー。あらクレリアさんにミナさん、娘さんも」
店員に声をかけられる。私は常連だしミナは学校の次期校長として知られているからな。

他の客を避けて私は何があるかを確かめる、彩り果実のモー乳ケーキだと？

これは買おう、後は……。

「ルーテシアは何が良い？」

「プリン！」

「じゃあお母さんはシュークリームにしようかしら」

私が品定めをしている後ろで二人は決まったようだ。注文をして品物を受け取っている、私も入れ替わりで注文する。

「モー乳の大瓶十本と彩り果実のモー乳ケーキを五個貰おう」

返事をして品物を用意する店員を見ながら声をかける。

「まだ仕入れは大丈夫か？」

「そうですね、この辺りはまだ問題無いみたいですよ」

「そうか、それなら良い」

品物を受け取って二人の元に戻り店を出た後、私の家で食べようという話になり移動している途中にミナが私に話しかけてくる。

「さつき大丈夫かって聞いてたけど何の話？」

「モー牧場が戦争の影響で駄目になっていないかを確認しただけだ」

「ウルグラードと周辺を守るとか言ってたわよね」

「好物を守るつもりだからな」

そんな会話をしながら家への道を歩く、私とミナに手をつながれてルーテシアは幸せそうな顔をしていた。

「ぷーりーんー」

自宅に着いた私達はデザートを食べる準備をする、と言ってもミナが紅茶の準備をしているのをソファで待っているだけだが。

ソファに座る私の隣でプリンプリンと言っているルーテシアの頭を撫でながら時間をつぶす。

「お待たせ、さあ食べましょう」

「早く早くー」

ミナが紅茶と二つのグラス、食器をテーブルに置き、マジックボックスから自分とルーテシアのデザートを取り出す。

私も自分のデザートと私とルーテシアの分のモー乳を取り出しグラスに注ぐ。

「では頂こうか」

私がそう言うと二人は食べ始める。ルーテシアはスプーンでちまちまとプリンを食べ、ミナはシュークリームをわざわざナイフとフォークで食べている。

「さて私もケーキを食べよう。」

……うん、これはいい。モー乳のクリームの濃厚な甘さに果実の酸味と苦みが良よく合う。

「お姉ちゃんちよつと欲しい」

ルーテシアが私のケーキを欲しがる、気になっているようだ。

「いいぞ……ほら」

「ありがとうお姉ちゃんー」

そう言つてケーキを一口分切り取り口に持って行ってやる、彼女は大きく口を開けるとぱくりと食べた。

「んむ!?甘くて酸っぱくて苦い!」

「ふふ……お前には少し早い味だったかもな」

「ううー……」

思わず微笑んでしまった。彼女は呻きながらプリンで口直しをしている。

「欲張つてお姉ちゃんの食べるからよ」

「むうー……」

ミナが彼女に言うが彼女はモー乳でも口直ししている。

「もう一口食べるか？」

「いらない……」

「くくく、そうか」

おかわりを聞くと顔を背けて断るルーテシア。

いずれ美味しく感じるようになるかもな。

デザートを食べ終わり、ルーテシアは私の隣で絵を描いている。

その姿を見ながら私とミナは戦争について話をしていた。

「もう七か月くらい続いているけど何か情報はある？」

「戦況は変わっていないようだ。どちらかが攻め込む訳でも無くほとんど戦線は動いていないようだぞ」

「丁度三国とルセリアが拮抗しているって事？」

「いや、報告によると最初はルセリアが押されていたようなんだが、ある時期から三国とも勢いが少し無くなったらしい」

「何かあったのかしら？」

ソファでくつろぎながら会話を交わす私達。ルーテシアは気にせず黙々と絵を描いている。

「情報源の方でも探ったらしいが分からなかったみたいだな」

「貴女はあの三国に直接聞きに行けばいいんじゃないの？」

ソファに寄りかかって言うミナ、確かに分かるだろうが行く気は無い。

「今行けば間違いなく助けを求められる、私が手を貸せば絶対に勝ってしまうだろう？それに何が起きているか分からない方が面白い時もある」

「……優しいかと思えばそういう事もするのね」

「私は自分勝手な化け物だからな。それに優しい訳では無い、誰かを助けてもそれは私がやりたかったただけだ。気にしない時は気にしない、関わったのが不運だったと諦めろ」

そう言うのと彼女は首を横に振る。

「私は幸運だったわ……若い頃に遙か高みの魔法技術を見る事が出来たし……夫の、ケインの命も助けてくれた」

「私がやりたかったからやっただけだ」

「ケインの説得も？」

彼女は前かがみになって聞いてくる、その目は私をじっと見つめている。

「そうだ」

「貴女は自分のためだけにやっていると言うけれど、貴女はやつぱり優しいわ。何と言えればいいのか分からないけれど……本質が悪では無いというか……何言ってるのかしらね私は……」

微笑んで恥ずかしそうにする彼女。本質か……私が悪では無いとは言うじゃないか。

「好きなように思っていればいい」

「そうするわ」

「お姉ちゃん見て」

ルーテシアが会話している私に絵を見せて来る。私と思われる黒い人型とミナと思われる大きな人型が、ルーテシアと思われる小さな人型と手をつないで笑っている。

「私はこんなに笑った事は無いと思うが……」

ミナに絵を手渡しながら言うと、彼女も見ながら答える。

「確かに貴女は表情の変化が薄いものね」

「上手く描けているな」

そう言いながらルーテシアの頭を撫でてやると彼女は嬉しそうに笑った。

「ケインが書かれていないようだが？」

「あー……あの人落ち込むかも？でも娘も今いる私達を書いただけだと思うし、娘も夫の事は好きだから平気かな？」

絵について話し合っている私達だが戦争の話をしていただけだと思
い出す。

「話がそれてしまったな」

「そうね……でもさっき言った以上の事は分からないのよね？」

「情報源である者達に分からなかったらしいからな。以前の報告に何かの作戦が行われているような事も書かれていたが、それも分かっているのではないようだ」

「ウルグラードは奴隷も居ないし差別も無い。全ての種族がそれなりに暮らしている訳だけど……戦争が始まってから何となく嫌な雰囲気が出て来てるのよね……」

「自分達の同族が町の外で大規模な戦争をしているからな。多少思う所があるんじゃないか？」

「早く戦争が終わると良いけどね……」

「取り合えず町の見回りでも強化したらいい」

「そうね、念の為そうした方がよさそうだわ」

二枚目を描いているルーテシアを横目に私達はしばらく語り合っ
た。

ある雨が振る夜。私はルーテシアを風呂に入れるために更衣室へ
向かっていた。

「二人で脱げるか？」

「うん！一人で出来るよ！」

ケインとミナはウルグラードの都市会議に出ているまだ帰ってこ
ないため、預かっていた私の家に今夜は泊める事にした。

更衣室で服を脱ぎ、洗い場に向かうとルーテシアも一人で服を脱い
でついでくる。

「はしやぎすぎて転ぶなよ？」

「はいー」

お風呂が好きなのか彼女は楽しそうに返事をして子供用の風呂椅
子に座る。

石鹸を泡立てて手で洗ってやる、タオルは物によっては子供の肌
に良くないらしいからな。

子供の体は小さいので洗うのも早いな、しっかりと全身を洗って洗い流す。

「よし、次は頭だ……ほら頭を乗せろ。良いと言うまで目は開けるなよ？しみるぞ」

「ん……」

椅子に座ったまま私の太腿に仰向けに頭を乗せて彼女はギュツと目を瞑る。

なるべく目に入らない様に頭を洗う、すっかり手馴れてしまった。彼女の頭を洗い終わったら先に浸かっているように言っただけで洗う、しっかりと洗って私も風呂に浸かる。

「ふう、この温度が一番ちょうどいいな」

湯温は三十九度程。ぬるいという者も居るかもしれないが長く入る場合はこれぐらいが良い、その辺りは好みだろう。

ルーテシアは風呂の中を歩いていたが私が来ると膝の上に座って体を預けて来る。

「お姉ちゃんお馬さん出してー」

「いいぞ」

「お馬さんだー！」

上を向き私を見ながら言う彼女の要望に応えて魔法を使い、風呂のお湯で小さい馬を複数作り水面を走らせた。

以前風呂にしっかりと浸からせるために見せたのだが、彼女はこれがお気に入りになったらしく良くせがんでくる。

ミナも頼まれた事があるらしいが出来なかつたらしく今も出来るように頑張っているそうだ、そのうち習得するだろうし魔法訓練としても悪くない。

馬に夢中のルーテシアを見ながらのんびりと温まったが、しばらくのあいだ馬見たさに風呂から上がるのを嫌がるようになってしまうとは思っていなかったな。

「動くな。しっかりと拭かないと湯冷めするぞ」

「魔法でぶわーってしないの？」

彼女は私を見上げる。

「そつちが良いのか？」

「ぶわーっしてー」

私は魔法で水分を飛ばしてやる、彼女は嬉しそうに手足を広げて立っている。

「タオルでも拭けるようにならないとお預けだからな」

「えー」

私は服を着て彼女が服を着るのを待つ。

「風呂上りには水分を取らないとな」

「ぶはっ……冷たくておいしい」

ソファに並んで座り二人でモー乳を飲む、ゆっくり飲む私と一気に飲むルーテシア。

「もうちよつと欲しい」

「飲み過ぎも良くないからもう一杯だけだぞ」

そう言いながらモー乳を注いでやる、彼女は今度はゆっくり少しづつ飲み始めた。

寝るには少し早いな。魔法と魔道具の普及で夜でも明かりを確保する事が簡単になったからな、夜が寝るだけの時間だったのはもう昔の事だ。

「お姉ちゃん魔法したい」

「そうか、じゃあ寝る前に少しお勉強だな」

「えー、魔法はー？」

「勉強をしないで魔法を使うとお母さんもお姉ちゃんも悲しい事になるかもしれない、悲しい思いをして欲しくないだろう？」

「うん……」

私は彼女を抱き寄せ目を合わせて言う。

「これから沢山魔法を使えるようになる、使い方を間違えるとルーテシアの好きな人が泣いて居なくなるかもしれない。お姉ちゃんはそんな事になって欲しくない、分かるか？」

「……勉強する」

「いい子だ」

ギョツと抱きしめて頭を撫でる、子供にはこうする方が効果があるからな。

その後少しだけ魔法について教えていたが、彼女の頭がふらついてきたので寝る事にした。

「寝るならベッドで寝るぞ」

「……んー……」

歯を磨くのはもう無理そうだな……今日は魔法で彼女の口の中を綺麗にしてやろう。

反応が鈍いルーテシアを連れて寝室に向かう、勉強の最後の四分の一程は聞こえてなかったかも知れないな。

寝室に入り彼女をベッドに寝かせ、部屋を出ようとするが彼女が服を離さない。

こういう時は大体決まっている。

「一緒に寝たいのか？」

「んー……」

ほとんど眠りかけながら声を出す彼女、私がベッドに入ると私の腕を枕にくっくっ付けてくる。

頭を撫でてやると彼女は魔力が切れたように眠りに落ちた。

深夜にミナから念話が来て朝に迎えに来ると言ったが、迎えに来るならしつかり寝てから来いと伝えた。

午前九時少し前、寝ていたルーテシアが目を覚ました。

「おはようルーテシア」

「んあ……おはようお姉ちゃん……」

私が言うと彼女はのそのそと私の体の上に乗りうつ伏せになる、私は彼女を乗せたまま起き上がった。

「着替えて朝ご飯にしよう」

「ふあーい……」

眠そうにパジャマを脱ぐ彼女を見守りながらミナから預かった普段着をマジックボックスから取り出し着替えさせる。

「お姉ちゃんはまた同じような服だね？」

「私はこれが良いんだ」

寝る時に着ていたワンピースをマジックボックスに入れてまた取り出す。

別の服と言う事になっているが入れて出しているだけだ。

パジャマと普段着を子供達に理解させるために子供と居る時はわざわざやっている、着替えるように言っても私がやっていないと子供も納得しないだろうからな。

「トイレは大丈夫か？」

「いくー」

朝食はハムエッグとパン、サラダに果物、モー乳を用意する。

私だけなら気にしないがルーテシアは普通の生物だ、しつかり食べなければ育たないし病気にもなるだろう。

「準備出来たぞ、食べようか」

「はい」

私の隣で子供用の椅子に座って食べ始める彼女を気にしながら私も食事を始める。

「あまり急いで食べるな……ほらソースが付いてる」

「うん」

ナイフとフォークをそれなりに上手く使って食べる彼女の口元を拭く、好き嫌いがあまり無いのは良い事だ。

昼はミナが迎えに来たついでに作ってくれるらしいから昼まで遊んでやるか。

食事を終えてリビングで何をしようか考えているとルーテシアが本を持って来た。

「ご本読んでー」

「いいぞ」

私がそう言うと彼女は私の膝の上に乗し、私は彼女の後ろから腕を伸ばし本を持って見えるようにする。

この本は自由神が登場する本だな、今なお自由神の創作本は数が増えている。

自由神の本は大抵主人公が自由神本人であり、世界に紛れ込んでいる時の出来事を創作して描いている物が多い。

他には主人公に手を貸す神として登場したり、世界を滅ぼす存在として敵対したり謎の協力者として暗躍したりと、自由の名のもとに好きなように使われている。

その内容は様々で子供向けの穏やかな話や大人向けの殺伐とした物、中には本当に自由神を信仰しているのか怪しい内容の物もある。今読んでいる本は子供向けの本の一つで貧乏だが親切な女が困っていた少女を助けた所、その少女が自由神で女が幸せになる、と言う物だ。

血を引き継ぐのが女性だけである事から自由神は女性を大事にするとも言われていて、物語の登場人物は女性である事が多い。

たまたまそうなったただけだが、知らない者からすると女を優遇しているように見えるか。

しかし私の見た目が女であり、みんなが言う美人であるせいか男からは不穏な気配を感じる事が多い。

そのせいか女性をそばに置く事が多くなっているのは間違いないだろう、たまに女からも似たような気配を感じる事があるが。

ケインを始めとした一部の男は全くそんな物は感じないが、本当にごく僅かしか居ない。

今ではそういう物だと理解しているが、私を目にする大抵の相手は大なり小なり私に思う所があるようだ。

私が男より女に甘いのはその辺りの差が関係していると思う。

ルーテシアに読み聞かせながら長々と考え込んでいるとあつという間に読み終わった。

「面白かったか？」

「うん！」

満足したように私に寄りかかりながら答える彼女、私は本を閉じてテーブルに置く。

「昼にはミナ、お母さんが迎えに来るからな。昼飯はお母さんが作ってくれるぞ」

「お母さん来る？」

「もう少ししたらな」

ルーテシアを膝に乗せたまま会話する、後は絵でも書いて貰うか。

私の隣で絵を描くルーテシアを見ながら過ごしていると、家の扉をノックする音が聞こえた、時間は十二時少し前なのでミナだろう。

「おかーさん！」

「ルーテシア、いい子にしてた？」

やって来たミナを家に入れるとすぐにリビングのルーテシアの元に向かう、気が付いて走り寄った娘を膝立ちで抱きしめるミナ。

「いい子にしていたよ」

「そう、お母さん嬉しいわ」

私がリビングに入りながら伝えると、ミナはルーテシアの頭を撫でる。

「お腹空いてる？」

「食べたい！」

「そう、じゃあ座って待っててね？キッチン借りるわよ」

「ああ、ある物は好きに使っていいぞ」

ルーテシアの答えを聞いたミナは立ち上がって私に声をかけキッチンへ向かう、私はルーテシアを椅子に座らせキッチンに向かう。

キッチンでミナは料理をしている、私はグラスを二つ取りモー乳を注ぐ。

「今日は何を作ってるんだ？」

「今日は鶏肉と野菜のスープパスタよ」

「美味そうだな」

「美味そうじゃないわ、美味しいのよ」

彼女は笑って言う。

ミナの料理は確かに美味しい、子供に食べさせたいと一生懸命練習していたのを私は知っている。

「そうだったな、期待している」

「任せて！」

そう言っただけ料理を続ける彼女を背にリビングの食事用のテーブルに居るルーテシアの元に戻る。

「ほら、モー乳だぞ」

「ありがとう、お姉ちゃん」

モー乳をテーブルに置いて私も反対側の椅子に座る、ルーテシアは

母親が帰って来て嬉しそうだな。

「お待たせー」

しばらくしてミナが料理を持ってやって来た。

ルーテシアの物は少なめ、無限に食べられる私のは多め、ミナの物は標準的な量だ。

「さあ、食べましょ」

ミナはそう言ってルーテシアの隣に座り面倒を見ながら食べ始める、私もフォークとスプーンでパスタを食べ始めた。

薄味だが美味しいな。濃い味も良いが薄いのも悪くない、私達は三人で語り合いながら食事を楽しんだ。

戦争開始からそろそろ一年になる頃、長らく来ていなかった報告書が来た。
動きがあつたか。

開封して内容を確認する。二枚あつた報告書の一枚に記された内容は私の予想を超えた物だった。

三国がそれぞれ敵対した？

そこにはルセリアとしか戦っていないなかった森林国家ユグラド、魔工国ガンドウ、獣王国カルガの三国がそれぞれと戦争状態になったという報告があつた……何故そうなった？

二枚目も見てみよう。

一枚目だけ見て考え始めてしまった、しつかり確認しよう。

二枚目には知る事が出来た範囲での作戦が書かれていた。

まず各国に特別に訓練した奴隷化した工作員を侵入させ相手の国に協力させる、そして信用を得た上で少しずつ慎重に他者を奴隷化させる。

そしてある程度増やした奴隷化した者を使って他国に攻撃を仕掛け反撃をわざと受けて撤退。

そして報告には向こうから先に攻撃して来たと報告……十分に信

用を得た工作人員達の言葉は疑われる事無く受け入れられる。

各国間でそういった事が行われ、それぞれの国は争い始めた。

一度勢いがついてしまえば誰も疑問に思う事は無く、お互い相手が先に手を出したと考え戦争になったと。

情報源である彼らも限界らしく、これ以上は分からなかったと書いてある。

更に各国の新しい技術も盗み出し研究を開始したと書いてあった。人間の強さと言えるかも知れない。

隷属魔法を使った信用を得て相手を陥れる作戦……手段選ばない非道さと相手を陥れる知恵、相手の全てを奪い自らの物にする強欲さ。

勿論全員がそうでは無いだろう。

だが人間には誰でもそうなる可能性があるのかもしれない、そしてそういった人間達が今のルセリアを作ったのかも知れないな。

戦況は泥沼化した、そしてこれでルセリアには余裕が出来た。

面白い。こうなるとは思っていなかった……自分が何かをするのも良いがやはり他者が私の予想しない事をする事が一番かも知れない。

「くくっ」

ミナ。お前は私が悪では無いと言ったが、こうして喜んでいる姿を見た時もそう言えるかな？

戦争が泥沼化した報告を受けた三日後の十五時頃。

ミナがルーテシアを連れて家にやって来た。

「お姉ちゃん来たよー」

ドアの外から声がした後ノックの音がする、私は鍵を外しドアを開ける。

「お姉ちゃん」

「おっと」

ドアを開けた途端にルーテシアが腰に抱き着いてくる、受け止めた私は彼女を抱き上げてリビングに向かう。

「ミナ、鍵を頼む」

「分かったわ」

微笑みながら私達の姿を見ていたミナは私の頼みに答え鍵をかけてからリビングにやって来る。

私はルーテシアを膝にのせてソファに、ミナは私達の飲み物を用意しにキッチンへ向かった。

「ちよつと重くなつたか？」

「んー？わかんない」

ルーテシアと話しているとミナが飲み物を持ってやって来た。

「ミナ、こいつ少し重くなつたんじゃないか？」

「そうね、もう少しで初等科に入学だもの……子供の成長は早いわね」

「初等科とはなんだ？」

聞き覚えの無い言葉をミナに聞く。

「私達の学校に新設する幼い子供の教育をする科よ」

「いつの間にかそんな物を作っていたのか」

「貴女興味無くすとまったく気にしないじゃない……以前から計画されてたし新しい学舎も作ってたわよ……」

確かにまったく気にしていなかったし知らなかったな。

「一般教養科も作ったわ。常識も身につけないとね」

「魔法馬鹿が生まれないうにか、以前居た誰かみたいにな」

「誰の事言ってるの?……私じゃないわよね?」

ちよつとむつとしたように言う彼女。

「私からは言えないな」

「ちよつと!?そこまでひどくなかったでしょ!」

彼女は焦ったように言うが、魔法の訓練しかせずに誰とも交流しないのはどうなんだろうな。

「大丈夫だ。私も昔魔法に夢中になって丸一年研究し続けた事があ
る」

「……一日何時間くらい研究してたの?」

「文字通りだが?睡眠はしないし食事もとらず丸一年ずっと研究し
ていた。当時一緒に暮らしていた者に叱られたよ」

「……私は普通だったわ、魔法馬鹿って自分の事じゃない!」

呆れたように叫ぶ彼女、間違いなく私の事だな。

「いや、私の事を知っていれば分かるだろう?それでも私には少し
だったんだ」

「時間の感覚が違うものね」

「そうだ。それで話を戻すが、そうするとこれまでのように家には
来られないな」

「そうね、朝から夕方方くらいまでは学校にいる事になるし、今までの
ようには行かないわね」

「学校が楽しいと思ってくればいいがな」

そう言つてモー乳を飲む。

「楽しくしてみせるわよ」

彼女は微笑み、やる気を見せる。

「そうか、お前達の学校だからな。お前達次第で変わるのは当然か」
「上手く行くように頑張るわ、娘の学校生活を駄目にする訳にはい
かないからね」

「頑張れよ」

そう言えばルーテシアがやけにおとなしい、顔を下に向けると私に

寄りかかって寝ていた。

「学校で居眠りしないと良いな」

「慣れればきつと平気……だと良いわね」

私の言葉に苦笑いしながら彼女は紅茶を口にする、私達はルーテナを起こさないように話を続けた。

戦争が泥沼化して一か月と少し、ここ数日ずっと雨が降っているの
で私はウルグラードの自宅に引きこもっていた。

報告によれば戦争はルセリア有利で進んでいるようだ。

他の三国はルセリア以外にも争い始めた事と、内部に作業員がいる
事で上手く行っていないようだ。

それでもそれぞれの国の森や山岳地帯は三国に有利に働いていて
攻め切れず、森を焼き払う作戦は三国を相手しながらは難しいと白紙
になり、現在は消耗戦でじりじりと進攻しているようだ。

最近では町の武防具や魔道具が国に大量に買われ、更に食料も多く買
われて町では品薄気味になり、少しずつ値が上がっている。

更に魔法使いを筆頭に戦闘が出来る者が高額報酬で雇われ、冒険
者が減少した事も合わりウルグラードにも影響が出始めた。

一般的な食料品店は稼げているだろうが、モー乳やデザートなどの
嗜好品は家畜の餌や材料が値上がりしてしまったため値上げをしな
くてはいけなくなり、それに従って購入する者が減っているようだ。

値上がりした食料を買うために嗜好品を買わなくなるのは当然
だった。

まだやっていけるようだがこの先も戦争が続くとどうなるか分か
らないと店で聞いた。

食料関係の問題で思い出したが、ルセリアは私の作った農耕魔法を
使っていないな。

今更思い出した事をリビングのソファに座って考える。

一人当たりの食料生産力は私の魔法があるか無いかで大きく違う

だろう。

ルセリア以外の三国は短い期間と少人数で多くの食料を作れるようになってる。

ルセリアも農業系の魔法は使っていたが効果が違いすぎる、これはもしかするか?……いや、食料が確保出来るだけではそこまで大きく変わらないか?

このまま時間をかければルセリアの食糧問題が大きくなる?

魔物を狩っていた冒険者達を戦争に雇った事で国全体の魔物資源の供給は間違いなく減った。

実際にウルグラードに影響が出始めている事を考えると他の町も同じかもしれない、このままひどくなれば戦争している場合では無くなるかもしれないな。

一人で色々と考えていると雨音に紛れて扉がノックされる音が聞こえる。

「鍵は開いてる、入って良いぞ」

ソファに座ったまま魔法で鍵を開けて中に入るように言う。

「雨は本当に面倒ね」

雨除けの皮のローブを脱ぎ、入り口のローブ掛けにかけてリビングにやって来たミナはうんざりとした顔で言った。

「わざわざ雨の日に来なければいいだろうに」

「ずっと雨でいつまでもやまないんだもの」

そう言いながらミナはキッチンに行き飲み物を用意する、ミナには勝手にしていいと言ってあるので私は気にせず待っている。

しばらく待っていると彼女はいつもの紅茶を持ってソファに座った。

「それで?なんで雨の中訪ねて来たんだ?」

「……この所戦争の影響らしき物が見え始めているわ。貴女の情報源から何か聞いてない?」

「ふむ……」

戦争の泥沼化を教えてなかったような気がする。

「……なにによ?どうかしたの?」

「二月前に報告があつてな、戦争が新しい展開を見せていたんだ。教えるつもりで忘れていたな」

「忘れないでよ……まあ教えてくれるだけでも助かるけどね。貴女が居なかつたらほとんど何も分からなかつた訳だし」

「僅かに呆れたような雰囲気を出したがそれでも情報が分かるのは助かるようだ。」

「遅れたが教えるよ」

こうして詳しい事は省いて、ルセリアの作戦で三国がそれぞれ敵対してしまっている事を話した。

「はあ……」

話を聞き終わったミナはため息をついた。

「戦争が終結するどころかもっと面倒な事になつていゝなんて……」

「私もこうなるとは思つていなかった……くくく」

「貴女は嬉しそうね……私達は色々大変なのよ」

俯いて疲れた声で言う彼女。

「勝敗がつけばすぐに終わるが、ルセリアも優勢とは言え圧倒している訳でも無さそうだ、余計に時間がかかるだろうな」

「個人的にどうにか出来る事は無いかも知れないわね……ウルグラーデ全体でどうにかしないと」

ウルグラーデが独立した国だったら農耕魔法を教えても良かったんだが。

いや、魔道武器やゴレムと思われる技術を盗んでいるなら私が教えた農耕魔法も既にルセリアに知られている可能性はあるな。

「戦争が出来ない程に酷くなればどこかが勝者になつて終わるだろう」

「この状況だと思つたよりも早くそうなりそうよね……ウルグラーデがうまく立ち回れる事を願うわ」

「思い切つて独立国になつてしまつたらどうだ？」

「流石にそれは無理よ。今の自治権だつて貴女がいたから手に入つたのよ？それだつていつ相手が無効にするか分からないのに……出

来るだけ力をつけているけどね」

「あの戦いが忘れられない限りそうそう手は出してこないんじゃないか？また全滅させられるのは嫌だろうからな。何より私はこの先もまだ存在し続けるだろうし、私が意図的に見捨てない限り何度でも相手は全滅するぞ」

「……貴女がこの町に来てくれたのは幸運としか言えないわね」

微笑みながらしみじみと彼女は言う。

お前の夫であるケインがここに学校を作った事が私を呼び込む原因になったのだが。

「まあ敵は私が薙ぎ払っても良いが、経済的な問題は住んでいる者達で何とかして欲しい」

「ウルグラーデの自治体のみんなが頑張っているけど……どうなるかは分からないわね」

「私が何もかもやれば問題なくなるだろうが甘やかす気はない、限界までは頑張って、貰おう」

「そこは大丈夫だと思うわ、貴女が助けている事はみんな知らないから必死よ。あの戦いも神の気まぐれ扱いだし」

「助けられて当然だと思えば始めたら見捨てるぞ？まあ、お前達くらいは助けるが」

そう言うのと彼女は照れ臭そうに笑い、私を見て言う。

「そう思ってくれるなら私の分までルーテシアを気にしてあげて欲しいわね。あの子には幸せになって欲しいもの」

「大抵の親はそう思う物なのだろう？あの子が私に敵対しなければ悪いようにはしないよ」

「敵には容赦しないものね貴女」

彼女は苦笑いして言う。

「私に言わせれば敵に情をかける方がおかしいぞ、もしお前の娘が拷問されて殺されたとして……相手を許すのか？」

「……許す訳ないでしょ」

想像でもしたのか低い声で答える彼女。

「情をかけ、助けた敵がお前の大事な物を奪う可能性だってある。

そんな事にならないように油断しないようにな、お前の立場も十分娘が狙われる物である事を忘れるな」

「肝に銘じておくわ」

四国がお互いに敵対してから約二か月、報告は一か月ほど前が最後で今の所は大きな動きはないようだ。

ミナに現在の戦争状況を教えた時、戦争が泥沼化した事をウルグラーデの自治体に伝えると言っていたので何かしらの対策を考えているか、すでに実行しているかも知れない。

都市内は治安維持隊の見回りが増えた。裏では色々やっているのかもしれないが外出時に感じた事はそれ位しか無かった。

曇り空の下、自宅の庭でのんびりしていると庭の入り口の鉄門が開きローブの女性が入って来た。

その女性は私を見つけると無言で近づき手紙を差し出し、去って行った。

さてどうなったのかな？

開封し中の報告書を見る、今も状況は大きく変わっていないと書いてあるがそれとは別にもう一枚ある。

来て欲しいだと？

いつもは何かある時に報告が来ていたが今回はこういう事か、どうしても直接見て確かめて欲しい物があるようだ。

ルセリア内では見せられない物らしく、都市から離れた草原に来て欲しいと日付と地図が書いてあった。

約三週間後か、一体何を見つけたんだ？

手紙に指定してあった日、十二時少し前に私は地図を見て草原に来たのだが、そこには大勢のルセリア兵がいてあつという間に取り囲ま

れた。

「こいつがそうか？」

「はい、間違いありません」

私の正面には髭面の男と紫の短髪の女性がいた、彼女は間違いないと言った後連れていかれてしまった。

「お前が奴らの主か？ 大分情報を得ていたようだが……やりすぎたな」

正面に残った髭面が言う、情報を貰っていたのがばれたのか。

「ジークとミアリス……聞き覚えが無いとは言わさんぞ？」

「知らない」

「嘘を言うな！ あの二人には解呪不可能な隷属魔法がかかっていた！ その二人が頻繁に連絡していた人物……！ こんな子供だとは思わなかったがお前がああ二人に隷属魔法をかけたんだろう！」

しれっと嘘をついた私に怒鳴る髭面、誤魔化せないか。

「私がお前達が探している人物であったとして、何の用なんだ？」

「色々吐いて貰う……その後は処刑する！ 子供でも機密漏洩は重罪だ、見逃す事は出来ん！」

「あの二人はどうなった？」

「すでに処刑された」

そうか、成り行きで奴隷化したとは言えあの二人は私の奴隷、それに手を出したわけだな？

「あの二人の処刑に関係した者を教えろ、そうすればお前達は助けるよ」

そう言うと、髭面は顔をしかめる。

「馬鹿な事を……おい！ 捕らえろ！」

聞く耳を持たずに指示を出す髭面、数人の兵が私を捕らえようとするが魔法で吹き飛ばす。

「なっ!？」

「無理やり吐かされたいのか？ 関係者を教えろ……答えれば助ける。答えないなら吐かせて殺す」

驚く髭面に歩み寄りながら再び問いかける、余計な手間を取らせる

な。

「捕らえろ！痛めつけても構わん！」

「残念だよ」

叫ぶ髭面にそう言つて襲い来る兵士を魔法で切り刻む、歩いているだけの私に近づいただけでいきなりバラバラになつて散らばる兵士達を見て残っていた者が動きを止めた。

「何をしている!? さっさと止めろ!!」

動きを止めた兵を次々と殺していく私を見ながら叫ぶ髭面、殺されまいと兵士たちは動き出したが僅かな時間で全員私に殺された。

「さて、吐いて貰おうか」

「知らない！私は詳しく知らないんだ！」

立ち向かおうともせずには知らないと叫び始める髭面、それで良いのかお前。

「確かめてみないと」

自白させた結果王城の誰かとしか分からなかった。ルセリアに行つて探すしかないな……髭面を処分して死体を全て焼き、ルセリアに向かう。

また姿を消して……いや、こここそするのはもういいか。女神装備の重装ならば全身鎧で顔がばれる事は無い訳だし、これを着て正面から行こう。

最近戦つて無いからな、たまにはいいだろう。

鎧を着て……武器は……女神のショートソードで良いか。

私の場合武器を使うより生身の方が強い。丁度いい手加減になるだろう、髪一本で魔法金属も切断出来るし、強く握れば握り潰せる。普段の私の力加減がどれだけ絶妙だか分かるな。

どうせ王城にいくのなら三国を敵対させた作戦を考えた者の顔と王の顔も見てみたいな。

現在はルセリア王城の城門上空にいる。

空から王城前まで向かっている途中、王城の敷地内の一部に人が少ない事に気が付いた。

途中の警備の者から聞き出した情報によると、その一部は特定の者以外立ち入り禁止で様々な研究施設が立ち並んでいる重要区画らしい。

新しい技術と盗んで来た技術の研究、後はすでにある技術の改良などをしているのか？

姿を隠さずに来たから下では私を発見した者達が集まり始めている、しかしいきなり攻撃してくる様子は無い。

私は城門前に集まっている人々の中に降り立つ、周囲の人間は遠巻きに私を見てざわついている。

「生まれ！お前は何者だ!?何をしに来た!?!」

閉じた門の前にいる兵士の一人が訪ねて来る。

「ジークとミアリスを知っているか?」

「裏切者が何だというんだ!?!」

「私はあの二人の主だよ。私の物である二人を処刑した者達に報復に来た、関係者を知っている者は教えろ、そうすれば余計な怪我人が出なくて済むぞ」

「応援を呼べ！城に入れるな!」

私がそう言うのと兵士は叫ぶ、こいつらは何も知らなそうだ。

私は雷魔法を纏って城門に向かう。私を止めようとする兵士達が近寄った瞬間、身を跳ねさせ崩れ落ちて行く。

「しばらく意識を失うだけだ、死にはしない」

私はそう言って歩き続ける。周囲の一般人が逃げ惑う中、私は巨大な城門をこじ開けて中に入る。

城の入り口まではまだ距離があるな。

敷地内に入ると正面の城と周囲の詰め所から兵が既に出て来ていた。

こういった兵では情報は得られないだろう、もう少し身分の高そうな者を探そう。

私が城門をこじ開けたのを目撃したのか腰が引けているようにも見える。

やがて意を決し、進む私に襲い掛かるもなすすべもなく無力化される兵士達。

ある程度進むと兵達も近寄るに近寄れず周囲で歩く私を見ているだけになった。

「邪魔だ！離れろ！」

そんな声と共に地面に影が出来る。上を見ると巨大な岩が落ちて来ていた、それと同時に足が埋まり私の動きを阻害する。

轟音と共に岩が地面にめり込む、私は体に薄く障壁を張って無傷だが。

「手を緩めるな！やれ！」

私の聴覚が轟音に紛れた声を拾う、その直後に炎が殺到した。

近寄れないと見て魔法攻撃か、無差別範囲の炎魔法は確かに有効かもしれない。

大量に撃ち込まれる炎の魔法。

そういえばルセリアの権力者は魔法の才能があり、戦闘力は高いと死んだ二人から聞いた事があつたような？

強くなければこの国で地位を維持するのは難しいようだ。

炎に巻かれながらそんな事を考えていると声が聞こえてくる。

「エクスプロージョン！」

岩に石潰されて地面にめり込んでいる私の足元に輝く光の玉が生まれ、その直後ひと際大きい轟音を響かせて大爆発を起こした。

その爆発で岩は砕け散り、私はほほ真上に吹き飛ばされた。

激しい閃光と熱が巻き起こり、轟音が長く後を引く。

そんな中私は空中に停止して相手を見た。

明らかに特別な装備に身を包んだ男女五人。恐らくもつというはずだ、流星に少なすぎる。

「隊長がわざわざ手を下さなくともよかつたのでは？」

「ここまで入られている時点で我々の失態だ。確実に殺さなくては王に顔向けが出来ない」

隊長と呼ばれた男を見る、銀髪のロングヘアで身長は高く体格がいい男だ、その目つきは鋭い。

隊長と呼んだ青髪セミロングの女が私がいた地面を見ながら構えていた。

他の者は……赤髪短髪の男、茶髪でポニーテールの男、ピンク髪の女は三つ編みロングだ。

周囲にいた兵達は居なくなった。

これだけ魔法が使える者にとっては邪魔にしかならないだろうか。しかしこれは良い所に来てくれた、彼らなら色々知っていそうだな、まず彼らの自由を奪っておこう、私は彼らの手足を拘束する。

「なに!?」

「ちっ……」

口々に驚きの声を上げる五人、隊長と呼ばれた男はあまり動揺して

いないようだが。

「上に逃げていやがった……」

赤髪の男が呟いた言葉の間違いを直すために私は答える。

「逃げてなどいない、すべて当たっていたが効果が無かったただけだ。

最後の爆発で上空に飛ばされてしまったな」

「はったりは見苦しいですよ」

茶髪のポニーテール男が言う。意外と余裕だな、何かありそうだ。

「聞きたい事があるんだが、答えてくれないか?」

「ああ!? 答えると思ってるのか!?」

隊長と呼ばれた男に向かって話しかけるが赤髪男が答える。

「お前は少し黙れ」

「んだと!? ……っ!? ……っ!?」

赤髪男を黙らせる、他の四人も黙って見ている。

「改めて聞こうか。ジークとミアリスの二人の処刑に関わっている者を探している、お前達は知っているか?」

「お前達、知っているか？」

隊長が他の者に聞く……なぜだ？妙に素直だ。

「知りませんね」

「僕も知らないね」

「ふむ、では三国を敵対させた作戦の考案者は知っているか？」

そう言うのと四人の意識がピンク髪の女に向くのを感じた、そうか。

「この中の誰かだったりするのか？」

私は薄い微笑みを浮かべながら隊長に聞く、彼は私を見て言う。

「そうかもしれないし違うかもしれないな」

隊長はそんな事を言いつつ私を見つめている。

「そうか……ところで私は相手が誰に意識を向けているか何となく

分かる」

突然の私の言葉に訝しむ隊長。

「作戦の事を聞いた時、一人に意識が集まったのを感じたんだが

……」

「やれ！」

「アンチマジック！」

私がそう言った途端隊長が叫ぶ、その直後ピンク髪の女が魔法を

使った。

「なにっ……!?!」

隊長の表情が変わる、これは魔法のタイミングを計っていたのか？

「そんな……全く効かない……そんな……」

ピンク髪の女が呟く、そこまでショックを受ける事は無いだろう。

「馬鹿な……彼女は対抗魔法の熟練者よ……?」

青髪の女がかすれた声で呟く。

「残念だったな。私とお前では実力が違いすぎる」

ピンク髪の女は俯いて動かない、こいつ精神的に脆すぎないか？

そうだ、自殺出来ないようにしておかないとな。

死んでも生き返らせて聞く事は出来るが予防は大事だ。

「さて質問に答えてもらおうか」

「何も語る気はない」

「ジークとミアリスの処刑に関わった者を教えろ」

魔法を使つて質問をする。お前ではこの魔法に抵抗出来ないだろうが、頑張ってみるといい。

「……私と一部の上層部だ」

「隊長!?!お前つ!?!隊長に何をしやがったつ!?!」

茶髪ポニーテールの男が叫ぶ。

「詳しく話せ」

そう言うのと詳しく話し出す、これで目標が定まったな。

「隊長! 目を覚ませ! 隊長!!」

「うるさいぞ、黙っている」

「……!?!っ……!!」

茶髪を黙らせて話を続ける。

「三国を争わせた作戦の考案者は?」

「シータが考えた」

「そいつは何処にいる?」

そう言うのと隊長はピンク髪の女を見て言う。

「彼女がそうだ」

彼女がどうか、意識が集まったのは間違いなかったな。

「後は、そうだな……王の見た目を教えろ」

「水色の髪のショートヘアの男性、見た目は十七歳前後、常に目を閉じている」

常に目を閉じている?それだけ分かればいいのか、作戦の考案者も見られた事だしな。

「莫大な……人が敵う相手じゃ……ない……」

シータというピンク髪の女は俯いてブツブツと呟いている、どうしたんだ。

こんなものか、私は隊長にかけた魔法を解いて元に戻す。

「くそ……何かされたか……」

正気に戻った隊長は自分の異常に気が付いて顔をゆがめて吐き捨てる。

「ありがとう、さようなら隊長」

私は彼を焼き払う、その後には装備だけが残った。

彼は最後まで私を睨んでいたな。

「お前達は私が帰れば解放してやる、大人しく待っている」

三人は物凄い形相で私を睨みつけている、シータは俯いたままだ。これで後は残りの関係者と王の顔を見に行くだけだな。

その後、私は王城の兵を無力化しながら私の奴隷を処刑した関係者達を処分した。

全員「私はルセリアのく」などと色々言っていたが。

大騒ぎなっている筈だが急に人を見なくなつた。

それはともかく王はどこだ、もう感知を使おうか……。

そう思い始めて城の大広間に入ると全ての入り口から兵が現れ、二階にも弓兵が並んでいた。

今更この戦力で勝てると思つているのか？

「ようこそ、侵入者さん」

私に話しかけてくる目を瞑つた男……この姿は恐らく。

「お前がルセリア王か？」

「貴様！王に向かつて！」

取り巻きの一人が声を上げる。

「構わない、彼女の好きにさせてくれ」

「はっ！」

返事をするとなり行きを見守るようにこちらを見る。

あの装備はさっきの五人と同じだな。

「親衛隊長と四人の隊員が君を殺しに行ったんだけど……ここに君がいると言う事は死んだのかな……？」

ルセリア王が私に話しかけてくる、何故目を瞑つたままなんだ？

「隊長というのは銀髪のロングヘアで身長の高い目つきの鋭い男か？」

「……そうだよ、彼が負けるとなるとかなり不味い相手だね君は」

「と言う事はあれが親衛隊長だったのか」

「名乗らなかつたのかい？」

「ああ、いきなり攻撃して来てそのまま戦闘になった。装備は良かったが隊長としか呼ばれていなかった、だから小隊長かと思つていた」

「あはは、彼がその程度に感じるか。予想以上にヤバいね君は」
「楽しそうに笑うルセリア王、彼からは特に敵意を感じないな。」

「所で……僕の部下にならないか？」

「断る」

「そっか……残念だよ……みんな、彼女を捕らえてくれ」

「そう言つて兵をけしかけるルセリア王だが、どうにかなると思つていないように見える。」

「私は襲い来る兵を無効化しながらこちらをじつと見るルセリア王の視線を感じていた。」

「いや、視線では無い。」

「濃密な魔力で私を見ているように感じる。目が見えないのか？」

「程なく彼らは意識を失い全員無力化された、王だけが残り私の方を見ている。」

「ルセリア王、お前もしかして目が見えないのか？」

「ん？そっだよ？」

「それにしても迷いも無く私の位置を把握していたようだが……魔力を使って周囲を見ているのではないか？」

「……良く分かつたね……僕は生まれつき目が見えなくてね。物心ついた時には普通にやっていたよ」

「年齢は？」

「君が教えてくれたら答えるよ」

「私は数百歳と言つた所だな」

「実際は二万以上だが。」

「人間じゃないのかい？」

「森人と人間のハーフだよ、特徴が出なかつただけだ」

「なるほど。見た目は人間でも寿命は長いわけだ、道理で強いと

思ったよ」

納得したように頷くルセリア王。

「約束通り教えよう、僕は二十三歳だよ」

年齢に嘘が無いならその歳でこの魔力は異常だな。恐らく種族など関係なく突き抜けて強いぞこの男。

「それで君はなんでこんな事を？」

私の行動の理由を聞いてくる彼。

「お前達が処刑した二人は私の物でな。私は自分の物を壊した者に報復に来たんだ」

「そう。彼らは若く強い、良い人材だったけど……許す訳にはいかなかった。それならもう目的は達成したのかな？」

「ん？そうだな……もうやる事はやったし帰ってもいい」

「良かった。いくら僕でも君には勝てそうにないからね、内心どうしようかと焦っていたんだ」

そう言うがとてもそうは見えないな、いざとなればどうにか出来ると思っっているような気がする。

しかし彼は興味深い、彼を調べる事を条件に力を貸すのもいいな。どうするか。

「……ん？なに？悩んでるの？」

「お前の部下にはならないが、私の提案を受け入れるならばらく滞在しても良い」

「本当かい？じゃあ、その提案を聞かせてよ」

「お前の体を調べたい」

「僕の体を？」

「そうだ。お前は異常だ……その年齢でその魔力は種族関係なく今まで見た事が無い」

いや、カミラがいたな。まあわざわざ言い直さなくてもいいか。

「ああ、やっぱり僕はおかしいんだね？」

「何とも言えない、調べてみなければな」

彼は何かを考えているのか何も言わない。

「どうだ？お前が調べさせてくれるならここに滞在し、場合によっ

ては力を貸しても良い」

更に声をかけると彼は瞑った目をこちらに向け嬉しそうに微笑んで言う。

「いいよ、交渉成立だね」

手を出してくる彼、私は彼の手を握った。

「この王家の紋章が入った短剣をあげる、来た時はこれを見せて」

「分かった、その内調べるためにこっちに来るから待っている」

私は短剣を受け取ってマジックボックスにしまいながら言う。

「ああ、それと私は報復は忘れない限りする。お前、私を捕らえようとしたな?」

「……何か嫌な予感がするんだけど?」

私は飛行して王城を飛び出す、そして研究所に岩を撃ち込んで破壊した。

「交渉成立後に、これは酷くない?」

追いかけて外に飛んできた彼が苦笑いしながら言うのが聞こえる。

私は彼に手を振ってウルグラードに帰った。

私がルセリア王城に行つてから約一週間が過ぎ、今まで戦況を報告していた者を無くした私はあれから戦争がどうなったか分からなくなっていた。

あの後一度ウルグラードに戻ったが、早く奴を調べたくてすぐにルセリアに戻った。

しかし奴が忙しくてゆつくりと調べる時間が無く、落ち着くまで一か月ほど待つて欲しいと言われた。

ゆつくりと待つとうか、戦争の事はルセリア王に会いに行つた時に聞けばいい。

さて、現在は十六時。中途半端な時間だが、たまにはミナの家に行くか。

『ミナ?聞こえるか?』

『なーに？貴女から念話なんて珍しいわね……何かあったの？』
ミナに念話を送るとすぐに返事が返ってくる。

『久しぶりに家に行つていいか？』

『いいわよ？……ルーテシアも喜んでるわ、待ってるわね』

連絡を終え、学校内のミナの自宅に向かう途中でモー乳販売店でデザートを買つていく。

値段はそこそこ上がってしまったている。

ミナの家の玄関をノックする、すると家の奥から走ってくる音が聞こえる。

「お姉ちゃん！」

扉が思い切り開いてルーテシアが飛び出してくる、私は彼女を受け止める。

「ルーテシア。しっかりと手を確認してからにしろ……私じゃないかっただけだ」

「……謝る！」

微笑んでそう答えるルーテシア、そういう事ではないのだが今はいいか。

「ミナ、お前がしっかりと教えてよ？」

「分かっているわよ」

受け止めたルーテシアを抱いたままリビングに移動しつつミナに言う。

事前に連絡していたからか飲み物がすぐに用意された。

そうだ、忘れないうちに渡そう。

「ミナ。ここに来る時にデザートを買つて来た、食べてくれ」
マジックボックスから買って来たデザートを出す。

「デザート!？」

「あら？ありがとう……夕食食べて行く？デザートも夕食後に出すから食べて行けば？」

「そうだな、じゃあそうしようか」

「お姉ちゃんご飯一緒？」

「ああ、一緒に食べよう」

「やった！」

ミナは喜ぶルーテシアを微笑みを浮かべながら見た後、デザートを冷蔵庫に持って行った。

「ねえねえ、お姉ちゃん」

私の膝の上に乗ったルーテシアが顔を上げて話しかけて来る。

「なんだ？」

「学校って楽しい？」

「そうだな、私は中々楽しかったぞ？」

参加の仕方は違ったが。

「ふーん」

「行きたくないのか？」

そう聞くとルーテシアは首を横に振る。

「違う……でもお姉ちゃんとあんまり会えなくなるって……」

「少し会える時間は減るが楽しい事もきつと増える」

ルーテシアの頭を優しく撫でる、学校が嫌だと言わなくてよかった。

「この子学校は楽しみだけど貴女に会えないのも嫌だって悩んでるのよ」

デザートを置いて戻って来たミナがソファに座る。

「これからたくさん一緒にいる時間はあるから焦る事は無い、むしろ学校に行ける時間の方がずっと短いんだ」

「そうなの？」

「ミナ、森人は数百年生きるよな？」

私はミナの方を向いて聞く。

「そうね……大体五百年前後かしらね」

「学校に行ける時間は？」

「十五年ね」

私はルーテシアを見て言う。

「分かるか？五百年の内の十五年しか行けない。楽しまないともつたいないぞ？」

「……うん、私いっぱい遊ぶ！」

「遊びではないかもしれないが、まあ初等科では似たような物か」

「学校にいく気持ちが固まってよかったわ、貴女と学校で迷っていたもの」

「そうか」

こうして話をして過ごし、途中で帰った来たケインを加えて夕食が近くなるまで語り合った。

食事も終わり風呂にも入った後、私はまだ彼女達の家に行った。

「ルーテシアは寝ましたか？」

「良く寝ているわ、あなた」

夜も更けルーテシアはすでに夢の中、リビングには私とケインとミナの三人がいた。

「……ルーテシアが迷う事なく学校に行ってくれるようで良かったですよ」

「クレリアさんが上手くやってくれたのよ」

「ありがとうございます、師よ」

「やろうとした訳じゃない。思った事を言ったら納得しただけだ……出来ない事を出来ると思われるのはごめんだぞ」

「ルーテシアは師に懐いていますからね。本人から一緒にいられると言って貰えたのが良かったのではないのでしょうか」

「偶然だろうといい方向に向かったのならいいだろう」

私はそう言ってソファに寄りかかる、しばらく沈黙が続いた後ミナが呟いた。

「初等科が始まる前に戦争が終わってくれればいいけれど……」

「以前から多少情報を得ていたが今は完全に分からないからな」「連絡が無いの？」

「ああ、例のルセリアにいる情報源ですか、師のおかげで大分助かっていますよ」

ミナとケインがそれぞれ話す、私はソファから身を起こし告げる。「いや、今は情報を手に入れる事は出来なくなつた。情報源は私に情報を渡していた事がルセリアにばれて処刑された」

沈黙する二人、何と言えはいいのか分からないと言つた感じか？

「こうなる可能性は知っていたし、元々は私を奴隷にしようとした敵だ。気にしなくてもいい」

ケインが思い出したように言う。

「以前、ルセリアで奴隷にされそうになつたと言つていましたよね？」

「あつ……そういえば……その時の？」

ミナも思い出したのか私を見る。

「そうだ、その時の関係者だ。もう死んでしまつているから教えるが王国戦士団と王国魔法士団の団長の二人が私の情報源だつた」

「なつ……」

ルーテシアが寝ているせいか大声は出さなかつたが目を見開いて驚く二人、何に対して驚いているのか分からないんだが。

「かなり上位の地位にいる者では無いですか……なぜそんな事に……」

ケインが呟くが私も知らない、聞いていないからな。

「私を狙つて来たのがその二人だけだ。それなりの地位だつたのならそれだけ正統な巫女が欲しかつたのだろう」

「情報が詳しい上に正確だつたのでそのあたりの民間人では無いとは思っていました……思つていましたがまさか団長だつたとは……」

「まあ、後一か月もすれば新しい情報が入るはずだ」

「え？でもさつき手に入れる事は出来なくなつたつて……」

そう言つて困惑するミナ。

「ルセリアで新しい情報源が出来てな。一か月後にまた会うからその時に聞いてみるつもりだ。かなり信用出来る相手だから期待していいぞ」

「師の事ですから親衛隊員でしょうか？」

面白そうだから黙ってしよう。

「今は教える訳にはいかない」

「そうですか、残念です」

「友人から情報を貰う事が出来たら教えるよ」

「お願いね?……忘れないでね?」

ミナから念を押された……きっと大丈夫だと思う。

それから約一か月が過ぎ、私はルセリア王城の城門前にやって来た。
た。

女神重装を着ているが、このままでは異常に目立つので体を覆う質の良いローブを上に着ている。

いつでも見せられるように短剣は腰につけておく。

「生まれ、関係者以外は城には入れない」

城門前には以前にはなかった建物が出来て人数が増えていた。

門の上にも人員が配置されていつでも攻撃できるようになっていくように見える。

ここに来る前も警備らしき兵がかなりいた、私のせいかな?

「ルセリア王に呼ばれて来た、これを見せるように言われている」

呼ばれた訳では無く勝手に来たのだがこう言っておけば問題無いだろう、私は腰に付けた短剣の紋章を見せる。

「つ?!?申し訳ありませんでした!!開門!開門だ!急げ!!」

短剣の紋章を見た瞬間に態度が変わり開門される、この短剣は効果が高いな。

巨大な門がゆっくりと開いて行きやがて完全に開いた。

「どうぞお通り下さい!」

「ありがとう」

頭を下げて言う兵士に一言告げて通る。広い道を歩き城の入り口に詰めている兵士達が見えて来た。

「本日はどのような御用でしょうか？」

妙に対応が丁寧だ、ここまで来れているという時点で相応の人物なのは間違いないからか？

「ルセリア王に会いに来た」

「失礼ですが……約束はしておられますか？」

「正確な日時は決めていないが来る事は知っているはずだ」

「王もお忙しい身ですので……正確な日時を決めて頂きたいのですが……」

困ったように言う兵士、今日は会えないのかな？

「今日は会えないと言う事か？」

「申し訳ありませんが……」

駄目なのか、一応短剣でも見せてみよう。

「ルセリア王からこれを貰っているのだが」

「……ただいまルセリア王にお伝え致します、こちらでお待ちください」

私が短剣を見せると兵が突然跪き前言を撤回する、便利だな。

しばらく用意された部屋で待っていると、以前見た親衛隊員装備の人間が迎えに来て城内に案内される。

応接室に案内されて紅茶を飲んで待っているとルセリア王がやって来た。

「やあやあ、いらっしやい」

軽い挨拶をしてくるルセリア王。

「そろそろ平気だと思つて来たんだが、大丈夫そうだな」

ソファに座り微笑むルセリア王に言う。

「そうだね、ようやくつて所かな？君が優秀な人員と施設を壊してくれたおかげで大変だったけどね」

「私に関わったのが間違いだったな」

「いやいや、むしろラッキーだったよ。君みたいな存在に会えたんだからね」

「そうか」

「それで？僕の体を調べるんだよね？」

「その前に聞きたい事がある」

「何？教えられる事なら教えるよ？」

「現在戦争はどうか知っているか知りたい」

「あー、戦争ね……戦争ならもう終わったよ」

「終わった？」

詳しく聞こうとした時に部屋がノックされる、ルセリア王が返事をすると手押し台を押してメイドが入って来た。

「お客様、お飲み物はどうなさいますか？」

「モー乳を頼む」

「……かしこまりました、少々お待ちください」

メイドは一礼して部屋を退出した、用意していないようだ。

紅茶にしておけばよかったか。

「モー乳好きなの？」

メイドとの会話を聞いていたルセリア王が言ってくる。

「ああ、愛飲している」

「ふーん、じゃあ今度から用意しとくよ」

「それは嬉しいな」

やがてメイドが戻りルセリア王に紅茶を、私にモー乳を出して退室していった。

「話を続けようか、戦争が終わったとはどういう事だ？」

「どういう事って……そのままだよ？各国間の戦争は終わった、僕が終戦を呼び掛けたんだ」

「なぜだ？勝てた戦いだっただけではないのか？」

彼は私へと顔を向け溜息を吐いて言う。

「誰かが色々と殺したり壊したりしたせいで厳しくなってね。終わらせる事にしたんだ」

「良く他の三国が受け入れたな？」

私を責めるような視線を無視して話を続ける、彼は苦笑いして答える。

「四国を争わせようと仕組んだ者がいた事が分かってね」

「私の得た情報ではルセリアの作戦だと記憶しているが」

「僕達を争わせるために暗躍していた何者かが悪いんだ、僕達は踊らされていただけなんだよ」

「ああ、そういう事にしたんだな」

「そう言うと彼は何も言わずに微笑んだ。」

「王城内に君の部屋を用意したから、滞在する時はそこで過ごすといいよ」

戦争に関してはそれ以上何も言わずに話を変える彼、知りたい事は分かったからそれでいいか。

「王城内に私を置いていいのか？」

「君がその気になったら場所なんて意味ないでしょ？」

「確かにそうだな」

「そうだ、いい加減名前を教え合わないかい？」

「それもそうだな、私はクレリア・アーティアだ。森人と人間のハーフだ、よろしくな」

「僕はアドル・リィ・ルセリア。ルセリア神王国の国王だよ、こちらこそよろしくね？」

こうして私はルセリア神王国王城に住み、アドルの体を調べる生活を始めた。

それから調べるのは改めて時間が取れた時と言う事になり、部屋に案内された。

現在部屋で女神の重装を脱ぎくつろいでいる。

部屋には忘れずに鍵はかけているので誰かが急に入ってくる事は無いだろう。

かなり豪華な部屋のソファに座り、ミナに念話をする。

『ミナ、今は大丈夫か？』

時間は十四時前だから問題は無いと思うが……どうかな。

『大丈夫よ、なに？』

『戦争の情報を得られたから教えるぞ』

『手に入ったのね？ありがとう』

『戦争は終戦になったようだ』

『……え？……本当に？』

『間違っている事はまず無いと思う』

『そう……終わったのね……よかった……』

『良かったな。それと情報をくれた友人の元にしばらく世話になる事になった』

『そうなの？ルーテシアが寂しがるわね』

『学校が始まれば気にしなくなるさ、上手く言っておいてくれ』

『分かったわ』

『もし何かあつたら連絡しろ』

『そうさせてもらうわ。出来たらたまにはルーテシアに会いに戻って来てね？』

『出来たらな』

そう答えて念話を切る。これで後は奴の事を調べるだけだ……どうなっているのか楽しみだな。

三日後、アドルが私の部屋へやって来た。もちろん私は女神の重装を着ている。

彼がこうしてやって来たのは、出来るだけ城内をうろつきたくない私が部屋に来るように頼み、彼があっさりと了承したからだ。

「そこに座ってくれ」

「分かったよ」

私の指示に従って椅子に座る彼、後は詳しく分析していただけたが時間がかかるだろうな。

「ただ座っているだけでいいのかい？」

「ああ、お前は座っているだけでいい」

「もっと色々される物だと思っていたよ」

何となくほっとしたように言う彼、意外と不安を感じていたのか？

「色々とは？」

「血を抜かれたり切り刻まれたり？」

「私にはそんな事は必要ない。痛くも無いし体に負荷もかからないはずだ、時間はそれなりにかかるが」

「確かに何か探られているように感じるけど痛くはないね……魔法的な物なのかな？」

「そうだ、私の独自の方法だ。教える気は無いぞ」

「そっかー、残念だな」

そんな話をしている間にも分析は進んでいる、じっくりと詳しく、時間をかけて行う。

しばらく他愛のない話をしながら分析をしていたが突然彼が声を上げる。

「ああ、もう時間がない。悪いけど今回はここまででいいかな？」

「構わないぞ、また平気な時に来てくれ」

「じゃあ行くよ、またね」

そうやって彼は部屋を出て行く。

今回は異常な魔力が体に影響を与えているか調べたが、特に問題は無さそうだった。あくまで今の時点の判断だが。

顔を見られたくないために食事は自分で取ると言って部屋に閉じ

こもって過ごした。

アベルが来た時だけ鎧を着て彼を調べ、居なくなると結果を確認して次の検査の予定を立てる。

そんな日々を過ごして一か月、検査の回数も五回目だ。

ようやく断定出来そうな事が分かって来た。

「現時点で分かった事を聞かか？」

「もちろん聞かき、自分がどんな状態なのか分かるのは嬉しいよ」
椅子に座ったアドルは頷いて言う。

「じゃあ教えようか。お前の体は魔力によって強度や能力が大きくなっていて、お前が強い原因の一つだな」

「問題は無いの？」

「体には全く問題は無いな。ただお前の目が見えないのは、お前の目の付近だけ魔力の流れが悪いせいだと思う」

「え？ そうなの？」

「ああ、全身の魔力の流れはスムーズだが目の周りだけ流れがかなり悪い。恐らくお前の目が見えないのはそのせいだ」

「……治るの？」

「治る、訓練を行い目の周りの魔力の流れを意識して良く出来ればな。相応の制御能力が要るから、才能や呑み込みの早さにもよるが時間がかかるかもしれない」

「治るのか……もう一生このままだと思っていたから変な気分だね」

そう言う彼の言葉の中には喜びが混じっている気がする。

「魔力の流れをよく見る事が出来る者が居たなら気が付いたかもしれないが、お前も生まれつき目が見えない事でどうにもならない事だと思ひ込んで気にしていなかっただろう？」

「確かにね。治る物だなんて思っていなかったよ……どんな薬も魔法も効かなかったと聞いていたし」

「調べないと分からないが、お前の魔力が強すぎて効果が無かったんだと思う。後は薬の効果の適用外だったかだな。市販品では無く、どこが悪いかが分かっているその部分にのみ効果が出るように作っ

てある薬であつたなら、あるいは効いたかもしれない」

「そんな事は無理だつたと思うよ？クレリアがこうして調べるまで誰も分かつていなかった訳だしね」

調べ始めて二か月後、今日も彼の体を調べる。

「来たよ、検査して」

「そこに座れ」

いつもの様に彼の体を調べ始める。

「そういえばお前二十三だと言つたな」

「ん？そうだけど？」

「前王はどうなつたんだ？その若さで王になつたと言う事は病気で死んだのか？」

そう言うのと彼は黙って私を見ていた、なんだ？何かあつたのか？

「……前王は僕の父親だつたんだけどね……酷い奴だつた。母さんにずっときつく当たっていた、僕が生まれてからさらに酷くなつたと聞いたよ」

「なるほど。お前が生まれてから酷くなつたとは？」

「目が見えない出来損ないを生んでしまったからさ、王として後を継ぐのに目が見えないのは致命的だよね？」

「なるほどな、しかしまた作ればよかつたんじゃないか？」

「母さんは僕という異常な子を産んだ事で二度と子を産めない体になつた。だけど僕の事を嫌わず愛してくれたよ」

「他の女では駄目だったのか？」

「もちろん作つたよ。僕が王になる前はその中から次の王が選ばれるはずだったからね」

「まあそうだろうな」

「詳しくは省くけど、僕と母さんは殺されはしなかつたけど隔離された場所で暮らしていたんだ……やがて成長して自分の力に気が付いた僕は父親である王と他の子供とその母親を密かに殺した。そし

て後継ぎが僕だけになった時力を示して王になった」

「なるほどな、お前の母親はお前がした事を知らないのか？」

「気が付いていると思う……王と他の王候補達、そしてその母親全員が死んだんだよ……当時の事を知っている者は僕の仕業だと気が付いているはずさ」

「それもそうか、そんな都合よく全滅したら誰だってそう考える」

「そしてそれが僕の地位を確実なものにした。全員を公にせず殺した実力とその残酷さが僕を王に押し上げたんだよ」

「母親は今も生きているのか？」

「そう言うとは彼は表情を暗くする。

「生きてはいるよ……」

「含みのある言い方だな」

「僕を産んでからゆっくりと……でも確実に弱ってきているんだ、もう手の打ちようがない状態だ……」

「それは気の毒にな」

私の知った事では無いが一応気を使ってみる、私も成長している。アドルは辛そうにしているな、自分が生まれたせいだと考えているのか？

「……そうだ、クレリア。母さんを見てくれないか？君ならきつとどうにか出来るかも知れない」

「興味がない」

正直に言う私に彼はさらに言葉を続ける。

「私の出来る範囲なら出来るだけの事はする……どうだい？」

「何でも」とは言わないんだな？」

「出来ない事を大事な交渉に使う事は出来ないでしょ？」

出来る範囲で……か。

「では、ウルグラードに手を出さない事と扱いを改善する事。この二つを守るなら見てやろう」

「ウルグラードに何かあるのかい？」

「私の知り合いが住んでいる……ああ、手を出したらこの国ごとお前を消し飛ばすから余計な事は考えるなよ？」

そう言うと彼は微笑んで答える。

「そんな事はしないよ……それで、その二つを守れば見てくれるんだね?」

「ああ、ただし治せるかは別だ。無理な物は無理だ、その時でも約束は守ってもらう」

「……分かった……ルセリア神王王国国王アドル・リィ・ルセリアの名において約束しよう」

「分かった交渉成立だ、いつ見る?すぐでも構わないぞ?」

「すぐお願ひしたい……いつ死んでしまうか分からない状態なんだ」

「よし、案内しろ」

そう言うのと検査を中断して彼の母親の部屋に向かった。

王の部屋のさらに奥の部屋に彼女は居た。

不規則な寝息をした女性がベッドに横たわっている。

その顔はやつれており年齢もはつきり分からない、確かにいつ死んでもおかしくない見た目だな。

「早速見てみるか」

「頼むよ」

私は彼女のベッドの横にある椅子に座って彼女の状態を確かめる

……衰弱が激しいな、まずは一時的に回復させるか。

私は彼女に回復魔法をかける、すると彼女の寝息が規則的になり顔色が良くなる。

「まさかもう治ったのか……!?!」

「このままでは危険だから応急処置をしたただけだ、原因を治さなければ元に戻る」

彼女の変化を見たアドルが驚いたように言った言葉に私は返す。

「黙って見て居ろ」

そう言うってから彼女をしっかりと調べて行く……なるほど……原

因は意外と分かりやすかったな、人間に治せるかは別だが。

「原因が分かった」

「そうか……それでどんな原因なの？」

「異常な魔力のお前が生まれるまで腹にずっといたために魔力受容体……これは私が勝手につけた名前だが、それが傷ついて魔力を上手く使えなくなっている。命に係わる程にな」

「そうか……僕がいたからか……」

彼の表情は変わらない、何を思っているのやら。

「魔力受容体とは？」

彼が聞いてくる。

「魔法を使う生物にある器官の事だ、簡単に言うとこれが周囲の魔力を吸い蓄積しているから魔法が使えるんだ」

「そんな物が……？」

「極稀にいる魔法を全く使えない者も技術的な問題で使えないだけでこの器官は存在している。誰でも体内を魔力が循環しているはずだ」

まあ私もアドルの体を調べて分かったんだが……今までは魔力を作り出す器官だと思っていた。

「それが傷ついていると？」

「ああ、かなりボロボロだ……よく今まで生きていたな」

「治せるのか……？」

「治せるな」

「……そうか……治せるのか……良かった……母さん……」

俯いて呟くアドル、王だと言ってもまだ若いし、母親にも思う事があるのだろう。

「治せたら治すのも約束の内だ、すぐ治すぞ」

「すぐに治せる物なのか？」

「私ならな。この状態を治せる薬を作れる錬金術師や魔法の使い手は存在しないとは言わないが、かなり少ないと思うぞ？」

そう言っ魔法を彼女にかける、傷ついた魔力受容体を修復させるように調整した物だ。

僅かな時間で彼女の魔力受容体は完全に回復した。

後は魔力受容体が正常に働いて彼女が目を覚ませば治療完了だ。

「終わったぞ」

「治った……のか？」

「魔力受容体は完全に回復させた。後は目が覚めるのを待つて食事を取らせる……食べる物はバランスよく色々な物を少しずつ用意しろ、それと起きた後体調が悪化したらすぐにこの薬を飲ませろ。悪化していないのに飲ませるなよ？」

そう言つて彼に薬を渡す。

「ありがとうクレリア……」

「落ち着いたら体の検査にまた来い」

震える声で礼を言う彼にそういつて私は自分の部屋に戻った。

アドルの母親……フィーア・リイ・ルセリアという名だが、彼女を治療してから一か月が過ぎた。

治療して程なく彼女は目を覚まし、現在は元気になってアドルの補佐をしている。

以前彼女を救つたと言う事で顔を合わせたか、私が鎧姿である事に困惑していた。

顔を見せて欲しいと言われたが鎧を脱ぐ気は無いと言うと諦めてくれた。

それでも何が気に入ったのか知らないが時々私の部屋に訪れる、追いつ返す気も無いので私が暇な時は彼女の会話に付き合っている。

「最近をよく来られるようになったようだが何かあったのか？」
椅子に座つたアドルを調べながら聞く。

「母さんが色々手伝ってくれるおかげで多少時間が出来てね」

「なるほどな、目の方はどうだ？訓練はしているのか？」

「どうにかしようとはしてるけど……何をどうすればいいかいまいちわからなくてね。物心ついた時には自然と色々出来ていたけど、意識してやろうとすると上手く行かないよ」

「少しコツを教えてやろう。どうしても無理なら体の事が終わった後で訓練を手伝ってもいいぞ」

「本当かい？助かるよ」

調べるのを中断して魔力操作のコツを教える、結局その日はそれだけで終わってしまった。

ある日私はアドルの母親であるフィーアと部屋で話していた。

すっかり元気になった彼女は水色の長い髪をした清楚な雰囲気の良い女性となった、寝て居た頃の姿とは比べ物にならないな。

「それでね？その紅茶がとても美味しくてね？持って来たのよ」

「ほう、では頂こうかな」

私がそう言うと彼女はいそいそと紅茶を入れ始める。

王の母親なんだから身分は高いはずなんだが……どこかのんびりとした地位を感じさせない雰囲気がある。

「どうぞ、飲んでみて」

私はその紅茶を飲んでみる……ふむ、確かに香りがかなりいい。

「他の物より香りがかなりいいな、苦みも程よく有りいいバランスだ」

「でしよう？いい紅茶見つけたちゃったわ。この紅茶に変えて貰いましょう」

ニコニコしながら紅茶を飲む彼女。彼女は仕事が出来らしいが普段はそんな姿が想像出来ないほどふわふわしている。

「あの子の体の事……何か分かったかしら？」

そう思っただけで見ていると、彼女が真剣な声で聞いてくる。

「そうだな、大体の事は分かっていると思う」

「あの子は何処か私に遠慮しているみたい。もっと色々頼って欲しいのだけど……あまり体の事を教えてくれないし」

「どこまで聞いているんだ？」

「特に体に問題は無いとしか聞いてないわ……」

「あいつ何故教えていないんだ？……まあ私が気にする問題では無いか。」

「間違っていないぞ？あいつは健康体だ。特に寿命が縮むとか何かある事も無い」

「そう……それだけでも分かれば嬉しいからいいけれど、目の事もあるし……」

「目に関してはあいつの努力次第だが見えるようになるぞ？」

「そう言うと彼女は私に詰め寄って来る。」

「本当に!?!何とかなるの!?!」

「努力次第だと言っただろう。魔力制御が上手く出来れば見えるようになるのは間違いないが、本人が出来なければどうにもならない」
彼女を押し戻して答える。実際に出来るだけの力を身に付けなければこの先も見えないままなのは間違いない。

「体の事は調べるだけ調べたら話すつもりだから待っている」

「分かったわ、ごめんなさい」

「気になるのは母親としては当然なのだろう？気にしていない」

この後は二人で紅茶を飲みながら彼女が帰るまでゆっくりと過ごした。

そして更に二か月程が経ち、出来る限りの検査を終えて新たな事も分かった。

そろそろアドルとフィアに教えよう。

事前に二人で来るように伝えて来るのを待つ、数日後の夜私の部屋に二人が訪れた。

「来たよクレリア」

「こんばんわクレリアさん」

「よく来たな二人とも、検査はもう無いからソファに座ってくれ」

二人はソファに座る。私は紅茶を用意して二人の前に置き、私はモー乳を部屋にある冷蔵庫から取り出して用意した。

「では分かった事を教えようか、あくまで調べた結果から分かる事だが」

二人は緊張しているような楽しみなような何とも言えない顔をしている。

アドルがそんな顔をするのは珍しい。

「彼は生まれつき魔力受容体が多くその一つ一つが一般的な物より強力だった、これがアドルの力の源だな」

「病気では無いのかい？」

アドルが疑問を口にする。

「違う、病気でそうなった場合体がその魔力に耐えられずに死んでいたはずだ。お前の体はその魔力が当然であるかのように対応していた……つまり病気や異常ではなくこれが普通の状態であると私は考えている」

「そうだったのか……」

アドルが自分の手をかざしながら呟く。

「目が見えない原因はアドルにはすでに話しているが、目の周りだけ魔力の流れが悪く目が魔力欠乏を起こしているだけだ」

「魔力だけが足りない状態なの？」

今度はフィーアが質問してくる。

「そうだ、お前達を始め魔法を使う種族は魔力受容体が吸収した魔力が全身を流れている。血液が流れているから目が死ぬ事は無いが魔力が流れていないと完全に力を発揮する事が出来ない」

「じゃあ魔法の力が違うのはそれが関係しているのかい？」

また疑問をぶつけてくる。

「そうだな、生まれつきの魔力受容体の性能は間違いなく影響している……ただ訓練をする事で魔力受容体の魔力の吸収速度、吸収量、蓄積量、魔力濃度などを上昇させる事が出来るから努力次第でひつく

り返す事は出来るだろう」

「……蓄積量と言う事は無くなる事もあるのかしら？」

フィーアが呟いた言葉に私は答える。

「もちろん魔法を使いすぎて蓄積した魔力が尽きた場合……これは予想だが激痛や身体能力の低下が起こるだろうな。更に意識を失ったり酷いと死ぬ事もあると私は考えている」

「でも今までそんな事になった話は聞いた事が無いけど？」

アドルの疑問ももつともだ。

「こればかりは私もはつきりと言えない……そうなるだけの魔力を使用する魔法がいまだに無く、そこまで魔法を連発する機会が無い事……後は原因が魔力の枯渇だと誰も知らないために、原因不明の病気として扱われている可能性もある」

「なるほどね」

アドルは口元に手をやって言う。

「あくまで今の時点で分かった事だ。私自身は十分に調べたと思っているが……更に詳しく調べる事で違う何かが見つかる可能性もある……実際に魔力受容体は以前から知っていたが魔力を作り出す器官だと私は思っていた……が、アドルを調べている途中で違う事が判明したんだ」

「クレリアさんも間違える事があるんですね」

フィーアが柔らかい口調で言う。

「当然だ、何もかも分かる訳ないだろう。今言っている説明も調べたから分かった事で、それでも絶対に合っているとは言えないんだ」
二人は頷いている、いくら私でも無理な物は無理だ……ただその無理な事がいつまでも無理な事のままであるかは分からないが。

「その辺りを理解した上で覚えておいてくれ」

「分かったよ」

「分かったわ」

二人とも分かってくれて何よりだ。

「最後に……これこそ完全に私独自の考えなんだが聞きたいか？」

「是非聞きたいね」

アドルはそう答え、ファイアも頷く。

「本気にするなよ?……彼は自然界でもまれにある突然変異、種の進化の過程で現れるきつかけの一人であると考えている」

黙ってしまふ二人、本気にするなと言っただろう。

「だから多く子をなして世界に広めろ……という物だな……もう一度言うが本気にするなよ?」

「大丈夫、理解してるよ」

そう返事をするアドル。

「それならいい。さて、これでアドルの体の検査も終わりだ」

「そうだ……クレリアは魔力制御の訓練を手伝ってくれると言っただよね?」

「そういえばそんな事も言ったな」

「言ったよ、今日は帰るけど今度から教えて欲しい」

「まあいいか。また平気な時に来い、今度は訓練だ」

「ありがとう」

「クレリアさんいいかしら?」

ファイアが顔を近付けて話しかけて来た。

「なんだ?」

「その、そろそろその鎧を脱いで欲しいのだけど……」

「以前脱ぐ気は無いと言ったはずだが?」

「そうだけどここまでしてくれた恩人の顔も知らないというのは寂しいわ」

「確かにね、何がそんなに嫌なのかは知らない。だけどせめて僕達の恩人の顔くらいは知っておきたいんだけど」

まあいいか、脱いだり着たりするのは簡単だが細かく何回も繰り返すのは面倒だし。

「二人以外の前では鎧を着る。それでもいいのならお前達には見せてやる」

「本当にいいのかしら?」

ファイアが言う。

「お前が見せてくれと言っただろう」

「見せて欲しいのは本当だけれど、貴女がまた断るのならもう二度と言わないようにしようと思っていたのよ」

申し訳なさそうに言うフィーア。

「本当に嫌なら断っている、出来るだけ見られなくなっただけだ。だからお前達二人だけなら構わない」

そう言っただけで私が頭部装備を脱ぐと、私の素顔を見た二人が固まる。

「黒い髪に瞳……クレリアさん貴女、正統な神の巫女だったのね……」

咄嗟に違うと言いつつそうになったが、違うと言えただけでは何だと言われ
るよな。

「色々あつてな。巫女はしていない……察してくれ」

それっぽく言っておけば勝手に何か考えて納得するだろう。

「良く分からないけれど私は気にしないわ、貴女がどんな人でも恩人である事は変わらないもの」

フィーアはそう言っただけで微笑む、彼女は問題なさそうだ。

「それに……今までに見た事が無い美人さんね、見とれてしまうわ」

「よく言われる」

「アドル、凄い美人さんよね?……アドル?」

フィーアに声をかけられたアドルは私を無表情でじっと見たまま固まっている。

「……うん、クレリアは巫女だったのか?……この国の巫女としてずっと居てくれないか?」

「断る」

「そうだよね……うん、今日は君の顔も見られたし僕は帰って仕事しようと思うよ、また来るね」

そう言っただけで部屋を出て行く、なんか違和感があるぞ?

「あら……うふふ……」

フィーアが微笑みながら私を見ている。

「フィーア、まだ何か用があるのか?」

「いいえ、何もないわよ。そろそろ私も戻らなきゃいけないわ……私もまた来るけど息子の魔法の訓練、お願いね?」

「任せろ」

私が返事をするに彼女も微笑みを浮かべたまま部屋を出て行った。

アドルの体の事を説明した後、彼の魔力制御訓練を行うようになってきたのだが、私が鎧を着なくてもいいように他の者が来ないようにしてくれた。

彼は「教えて貰うのだからクレリアがわざわざ鎧を着る手間を取り除くのは当然だよ」と言っていた。

そして今も訓練中だ。彼は訓練場の床に座り、私の握り拳より二回りほど小さい水の魔力球を作って維持していた。

「まだ出来て無いぞ、大きさも小さいし形も悪い。今の状態を維持しながらまずは形を少しずつ完全な球体に近付けろ」

「くっ……」

魔力が多いのは良いな、無理をしても魔力が尽きる心配が無い。

「魔力球の中心から周囲に広げるように魔法を使え、その際に魔力の出力を一定に維持しろ」

もう一時間ほど続けている。これだけの時間集中して行えるのは凄いが流石にもう無理か。

「あ」

彼の声と共に水の魔力球が弾けた、魔力のバランスを崩したな。

「休憩にしよう、しばらく楽にしている」

「分かったよ先生」

彼は「教えてもらうからには先生と呼ぶよ」と言って私を先生と呼ぶようになっていた。

「先生、悪いけどまた手本を見せてくれないか？」

「またか、まあみる事も訓練にはなるか」

私は空中に小さい水の魔法球を作り出す、綺麗な魔法球は空中に微動だにせず浮いている。

「ここから拡大させる」

そう言いながら綺麗な球を維持したまま魔法球が大きくなっていく、私の頭ほどの大きさにまで大きくして止める。

「いつ見ても凄いな……」

アドルが魔法球を見ながら呟く。こいつなら出来そうな気がするんだが、生まれた時から魔力を操作して周囲を見ていた訳だしな。

「まだまだお前はこれからだ、大きく出来たら今度は縮める訓練をするからな」

私はそう言つて魔法球を最初の大きさに縮める、彼はじつと魔法球を見つめている。

「そして次は速度を上げる」

私は早めに大きくしたり小さくしたりを数回繰り返す。

「まあ他にも上の難易度はまだまだあるが、とりあえずはこの辺りまでだ」

そう言つて魔法球を消滅させる。

「僕はさ……」

「ん？」

彼が私を見て言う。

「最初はなんだかんだいって、戦えば僕が勝つと思つてたんだ。僕より強い奴なんてきつといないって思つてた」

「お前の世界は狭いな」

「確かに狭かったよ……かなり僕は強い、そうだよな？」

「そうだな、その歳では間違いなく強い」

「だけど君と訓練をして世界の広さを知つた……この世界には君のような使い手が沢山いるのかい？」

「安心しろ、自分で言うのもなんだが私はこの世界で最高クラスの使い手だと思う。私を超える者はいるかどうか分からないと思う」

彼は大きく息を吸い吐いた。

「よかった、これより上はいないんだね……自信が砕け散る所だったよ」

「成長に邪魔になる自信なら捨ててしまえ、お前は魔力は大きい細かい制御が全く出来ていない。大きさに言うならケーキを切るのに斧を全力で振り下ろしているような状態だ。魔法で吹き飛ばすには問題無いがそんな制御で目に魔力を回したら再起不能所か目が砕けるかも知れないぞ」

「あつはっは……はあ……色々予想外だったなあ……」
彼は苦笑いして言う。後ろに倒れる。

「今日はここまでにしておこう。もし時間があるなら部屋で水の魔法で練習しろ、水以外はやるなよ?」

「大丈夫だよ先生……そうだ、夕食を食べに行つていいかな?魔法の話も聞きたいし」

倒れたまま返事をして言ってくる。

「いいぞ、私の分も持つて来い」

「じゃあ二時間後位に行くよ」

熱心なのは良い事だ。どこまで上達するか楽しみだ、そう思いながら部屋へと帰った。

アドルが魔力制御訓練を初めて一か月と少しが経った。

彼は王としての義務があるため訓練出来るのは短くても数日置き、長ければ十日以上間隔が空く事もある。

だがアドルは早く魔法制御を上達させたいのかそれなりの頻度で夕食を私と取る、訓練をする時間は取れなくても夕食時の座学だけでもしたいようだ。

時折フィーアも私に会いに来る。ほとんどの時間をこの室内で過ごしている私は特に気にする事無く彼女の訪問を受け入れている。

そして今日の夜はフィーアが来ていた。昼頃から降り始めた雨音が外から聞こえる。

「今日はクッキーを持って来たわよ」

「では紅茶でも入れようか」

「私はクッキーをお皿に出すわね」

そう言つて私は部屋に彼女が用意してくれた紅茶を入れる、彼女はクッキーを皿に出している。

私が紅茶を入れて持つて行くと彼女はクッキーを一口食べて飲む。そんな彼女を横目に私は紅茶にモー乳を入れている、彼女はそれを

見ると私に言う。

「貴女いつも紅茶にモー乳を入れてるけど美味しいのかしら？」

私は少し前から紅茶にモー乳を入れるようになった、これがなかなか美味しい。

「美味しいぞ？少し飲んでみるか？」

そう言っただけ私には彼女にカップを差し出す、彼女はカップを手に取り少しだけ飲む。

「……あら？美味しいわね」

「そうだろう？私はこちらの方が好みなんだ」

「私も今日は入れようかしら……モー乳をいただいてもいいかしら？」

私のカップを返しながら彼女が言う。

「いいぞ。量は自分で調節して丁度いい量を見つけれ」

「貴女のお勧めは？」

「モー乳多めが私は好きだな、モー乳六に紅茶が四だ」

「あら？それだとメインがモー乳になるんじゃないかしら……？」

「その方が美味しいからいいだろう」

彼女は少しずつモー乳を入れて味を確認している、やがて納得したのかモー乳を置いた、彼女はモー乳が三割程が好みらしい。

「私はこれ位かしらね……うん、美味しいわ」

彼女は美味しそうに紅茶を飲む、モー乳の美味しさを分かってくれたか。

「息子の訓練はどう？上手く行っているかしら？」

私がクッキーをかじっていると彼女が聞いてくる。

「魔力が高いが制御は悪いな。彼にも言ったが……ケーキを切るのに斧を全力で振り下ろしているような状態だ」

「私が教えてあげられなかったから……でも出来なければ目は見えないのよね？」

「そうだな、逆に言えばそれさえ出来れば見える。悪い条件では無いと思う」

「そうね……もう治る事は無いと思っていたもの」
彼女はしみじみと語る、その姿を見ながら私は気になった事を聞いた。

「この国では地位を得るのに実力も必要なようだが、フィニアもそれなりに強いと言う事か？」

そう言う彼女は苦笑いして答える。

「それなりには戦えるわ……でも息子には及ばないし貴女と比べたら子供のような物よ？」

「私から見れば大半の者は子供と言える」

「ふふ……そうだったわね。お母さん……いえ、お祖母ちゃんかしら？」

「もつと差があると思う」

そう言う彼女は笑う、こうして彼女と時間が許す限り語り合った。

私は久々にウルグラードに戻り、ミナの家へ行く。

ルーテシアに会いに行くのだが、ついでにアドルが約束を守っているかも確認する。

「はい、あら？久しぶりね。こんな朝早くにどうしたの？」

「ルーテシアに会いに来た……平気か？」

「大丈夫よ、ルーテシアはリビングにいるわ」

「急に悪いな」

「念話で連絡してくれば良かったのに」

「忘れていた」

そんな会話をしながらリビングに行くとルーテシアが絵を描いていた。

「お姉ちゃん！」

私に気が付いた彼女は立ち上がり飛びついてきた、私はしっかりと抱きとめる。

「また少し大きくなったな」

私の胸にぐりぐりと顔を押し付けて甘えるルーテシア、まだ数か月程しか経ってないはずだが随分甘えて来るな。

彼女を抱っこしたままソファに座る、ルーテシアはくっ付いたまま動かない。

「今は情報をくれる貴女の友人の所……ルセリアに居るのよね？」
飲み物を用意していたミナがそう言いながら戻って来た。

「ああ、また戻るつもりだ。今日はルーテシアの様子を見に来たのと、ついでだがウルグラードに何か変わった事が無かったかと思つて聞きに来たんだ」

「ルーテシアは貴女に会えないのを寂しく思っているわ。今のその状態を見れば分かるでしょうけど」

ミナが私にくっ付いたまま離れないルーテシアを見て言う、私は彼女の頭を撫でながら話を続けた。

「最近ウルグラードはどうだ？」

「そうね……戦争が終わつて少しだけど元に戻り始めたわ。何より戦争が終わつたつていう事実が雰囲気をよくしているわね」

「そうか」

「後はあれね、ルセリア神王国からのウルグラードの扱いがいきなり良くなつたらしいわ」

「良かったじゃないか」

しっかりと約束は守られているようだ、約束を違える事は無いと思つてはいたが確認は大事だ。

「理由が全く分からないらしくて自治体のみんなも困惑していたわ」

「理由はどうあれ良くなったのならそれでいんじゃないか？」

ミナは飲んでいた紅茶のカップを置いて言う。

「それはそうなんだけど……理由も目的も分からなくて不気味なのよね」

「まあ何かあつても最終的には私がいるんだ。よく分からなくても問題無ければ良いだろう？」

「……それもそうね……」

考え込んでいた彼女は微笑みを浮かべるとソファに背を預けた。

「話は変わるが、ルーテシアは他の子供と普段遊んでるのか？見た事が無いんだが」

「たまに遊んでいるけどこの子は外で駆け回るより室内で絵を描いたり本を読んだりする方が好きみたい」

「その辺は個性だからな。あまりにも酷くないのならそのままでも良い気はする、親であるお前達の教育方針次第か」

「私達も無理強いはするつもりは無いけどね」

ミナは私に張り付くルーテシアを見て言う、私はルーテシアを隣に下ろした。

「やー」

声を上げて私の膝の上に乗ってくる彼女、私は諦めて抱きしめた。

結局その日は泊まる事になり一晩一緒に寝た後、くっ付いて離れないルーテシアを説得し、ルセリアに向かった。

あの子は私に懐き過ぎていて気がする、外に意識を向けて貰うためにしばらく会わない方がいいかもな。

アドルに魔法制御を教え初めて半年。

まだまだ未熟ではあるが視力を取り戻すには十分になったと私は判断した。

そして彼に一日時間を作らせ、視力を取り戻せるか試す日がやって来る。

「私が教えた通りにやってみろ」

訓練場に立って集中するアドル。

良い感じだ……これなら上手く行くだろう。

「よし……その状態を維持しろ……ゆっくりと目を開けるんだ」

そう言うと彼はゆっくりと目を開き眩しそうにする。

眩しいと言う事は見えていると言う事だ、上手く行ったか。

しばらく眩しそうにしていたが慣れて来たのかしつかりと目を開く。

「見える……色が……光が……目が見える……」

彼は泣く事は無かったが、その声は震えている。

「おめでとう」

「先生……顔は魔力で見えていたけど色が付くともっと美人だな」

「その感覚を忘れるな。繰り返し続ければ自然に魔力を流せるようになり、意識しなくても出来るようになる。毎日一回は必ず行え、いいな？」

「……分かったよ、ありがとう先生」

「これで私が教える事はもうないかも知れないな、今日の所はここまでだ。明日から一日一回、忘れるな」

そう言つて部屋に戻る、やる事はやったしそろそろウルグラーデに帰るか。

その日の夜アドルが私の部屋を訪れた、彼は珍しく真剣な顔をしていた。

「クレリア……今までありがとう」

「まあ私もお前の事を調べる事が出来たしな、それくらい構わない」
「それで……この後はどうするんだい？」

「以前住んでいた町に帰ろうと思っている」

「どこだか聞いてもいいかな？」

「駄目だ」

「……僕は帰らないで欲しいと思っている」

「それは出来ないな。だが数少ない友人だ、たまには会いに来る」

「頼む……僕は君に一目ぼれした……僕の妻としてこの国で暮らして欲しい」

ああ、彼もか……こうなる可能性を失念していた。

「無理だな、私はお前を友だと思うようになってるが、それだけで

しかない」

私は異性間の愛やら恋やらは分からない。

家族としてや友人としてなら何となくわかるような気がしているが。

「せめて会えるように居場所を教えてくださいか？」

「教えてらお前、何かしてくるだろう」

「頼む！会いに行けないのは耐えられないんだ……」

「新しい相手を探せ。私がお前の気持ちを受け入れる事は無い」

「まっ……」

そう言つてウルグラードに転移する。

友人のままならこれからも会っていただろうが、こうなった以上二度と会う事は無いかも知れない。

アドルの求婚を断ってウルグラードに転移してから一週間ほどが過ぎた。

ある日、以前と変わらない生活が続ける私の元にミナがやって来た。

「よく来た。ゆっくりしていくといい」

「ありがとう」

現在は十三時過ぎだがルーテシアはすでに初等科に入学していて現在は学校だ。

「今日来たのはちよつと気になった話があつたからなのよ」

「何だ？」

「……ルセリアの全ての町でクレリアっていう黒髪黒目の少女をルセリア王が探しているらしいの」

「なるほど」

探し出す気か、諦めの悪い。

「ウルグラードも扱いが変わって色々情報が来るようになってね？」

その話が来た訳なんだけど」

「それで？」

「貴女、この町の人にはあまり名前は教えて無いわよね？だからいきなり名前で特定はされないでしょうけど……黒髪黒目はバレているし、もし見つかったら面倒な事にならない？」

「なるだろうな」

「それに貴女ルセリアに知り合いだか友人だかが居るって言ったわよね？……それってルセリア王の事じゃないわよね？」

気分転換にしばらく人の世界を離れよう。

「ミナ。私はしばらく人の世界から離れる、後は頼んだ」

「ええ……？もしかして本当にルセリア王だった訳？」

困惑と驚きが混ざった顔をするミナ。

「私はすぐに出る。私はこの町に居なかつた事にしてくれ」

「はあ……分かったわよ……どうせ止められないしね」

「ありがとう、この家は好きに使っていいぞ」

「私は家あるわよ……管理はしといてあげるから行ってらっしゃい」

呆れたように……いや、これは確実に呆れているな。

「何かあつたら念話してくれ、転移ですぐ戻る」

「便利よねそれ……私も使えればな」

「お前ではまだ無理だ」

「もう！いつか使えるようになるからね！」

こうして私は人類の生存圏を離れ外界に飛び出した。

適当に空を飛び、人類の生存圏を飛び出した私は草原を歩いていった。

まだまだ人が住んでいる範囲は狭いな……いつか人類はここまで生存圏を広げられるだろうか。

外界では弱い魔物も居るが現在の人類の手に負えないような魔物もかなりいる、それらとぶつかった時、人類はどうするだろうか。

そう思いながら森を抜けると広い湖に出た。深い森の中に広大な湖が広がっている。

私は水辺に近づいてみる。

すると全く深くない……薄く水が張っているだけだ。

面白い状態だな、私は靴を消して裸足になり水に入る。

ひんやりと冷たい透明な水だ、そのまま湖の中心へ歩いていく。

いい雰囲気だ、水面は鏡のように空を映している。

水面の下に空が広がっているようにも見える。

夜の星空が映ればまた違う印象を受けるだろう。

地下水でもしみだしているのか？世界にはもっと不思議な光景や綺麗な景色が沢山あるのかも知れない。

……ん？

水面に何かが映る、私はすぐに空を見上げた。
空高くを羽と尻尾のような物がある何かが飛んでいた。
視力を上げて見ると全身が黒い鱗のような物で覆われたトカゲの
ような生物だった。

今まで何度か見たような気がする。

……特に目的もない、どこに行くのかあいつを追いかけてみよう。
私は上空へと舞い上がるとトカゲの方へ加速する。

下を見ると水面が鏡のように空と飛行する私を映していた。
そうだ、靴は戻しておこう。私は速度を上げながら足に靴を作り出
す。

トカゲも中々早いようだ、思ったより距離が縮まらない。

私は更に速度を上げた。

トカゲに追いつき、距離を保ちながらしばらく飛んでいると高い山
脈が見えて来た。

それほど時間はかかっていないが飛んでいる速度が速度なので距
離自体はかなり移動しているかも知れない。

山脈に近づくとトカゲが速度を落とした、この辺りが住処なのかも
しれないな。

速度を落としたトカゲは振り向きこちらを見た。

口から炎が漏れているのが見える。

これは攻撃して来るな。そう感じてすぐに急上昇すると、私のいた
所を巨大な炎の塊が通り過ぎた。

トカゲは滞空しながら今度は鋭い氷の塊を大量に飛ばしてくる。

私は向かって来る氷をすべて飛び回りながら避けて行く。

殺したくは無いな。知らない相手は強さが正確に分からないから
面倒だ。

ただ感じる魔力からカミラに匹敵する実力者である可能性が高い。
取り敢えず岩を山ほど作り打ち出した、避けきれぬ量ではないはず

だ。

トカゲは私の魔法をそのまま受けながら突っ込んで来る、私は下に潜り込むようにすれ違おうとしたが目の前に尻尾があった。

なるほど、尻尾も武器になるな。

私は体を捻りかわすが尻尾は蛇のように動いて当てようとして来る。

第三者が見れば一瞬の交差だったかもしれないが中々いい動きをする。

私は更に高度を下げ森に突入する。トカゲは森の中に入らず上空から私を探しているようだったが火を吐いて周囲を焼き払い始めた。

「止めんか、馬鹿者」

そう言つて飛び出すとトカゲが笑つたように見えた。

こいつわざとやったな？それだけの知性があるという事か。

森の上空に戻った私の足元から突然炎の竜巻が巻き上がる。

すぐに移動したが次々に巻き上がって数を増やし、周囲を取り囲む。

届かない上空にまで昇ろうとすると、トカゲが上を押さえていた。

周囲を炎の竜巻に塞がれ範囲を狭められ上空にはトカゲ、中々やると思つていると突然日の光が遮られる。

トカゲが竜巻の上に蓋をするように巨大な岩の壁を作つたようだ。

視界一杯に広がる岩の壁。

間違ひなく知性がある。話せばいいのだが、翻訳魔法の効果はこいつにもあるだろうか。

そんな事を考えながら岩に押し潰された。

もう少し力を出してもあのトカゲなら死ぬ事は無さそうだな。

岩の下でそう考え、私は魔力を高めて周囲を吹き飛ばす。

岩も、炎の竜巻も、周囲の森も、全て吹き飛ばし大きなクレーターを作り出した私は空中で固まっているトカゲの元に戻ると魔力を高めて言う。

「中々面白かった。お前にならもう少し力を出しても平気そうだ」

「何なのだ貴様は……」

ん？今声が……話せるのか？

「お前話せるのか？」

「なに!? 我の言葉が分かるのか!？」

「分かる、お前話せたんだな」

「我の言葉が分かる者が小さき者の中にいるとは……」

「話せるのなら話は早い。私はお前を見かけて興味を持ってな、追いかけて来た」

「小さき者が生意気にも我について来るものだから殺そうと思ったのだが……その力、貴様何者だ？」

「まあお前なら話しても良いが、まず移動しないか？」

「……ふん、確かにそうだな……ついてこい。我の住処に入れてやろう」

私はこのトカゲの住処について行く事にした。

彼……彼女かも知れないが、着いた住処は殺風景なただの大きな洞窟だった。

私はマジックボックスからソファとテーブルを出してモー乳を入れた。

「お前も飲むか？」

「そんな量で足りると思っっているのか？」

「それはそうだな」

正面で横たわるトカゲ……いつまでもトカゲは駄目だな。

「取り敢えず名前を教えてください」

「……貴様が先に名乗れ」

「いいぞ。私はクレリア・アーティアと言う」

「……我はクログウエルだ」

「クログウエル、お前の種族はなんだ？」

「……種族とは？」

「共通の特徴を持った生物を大きく分類する名前のような物だ」

「……そんな物は知らぬ」

聞いてきた時に何となく察したがそういつた物が無いようだ、しかし無いのも困るな。

「私の知識にお前に似たような存在の名前があるんだが……それを名乗る気は無いか？」

「ふむ、聞いてから考えよう……言うが良い」

「竜、もしくはドラゴンと言う……お前の場合は……そうだな、黒竜クログウエルやブラックドラゴンクログウエルになるな」

「ほうほう……よく分らんがいい響きだな……両方同じ意味なのか？」

「そうだな、特に変わらないから両方使っても問題無いぞ」

「よし、我は黒竜クログウエルだ！」

大きな口を開けて咆哮を上げるクログウエル。牙も大きくて鋭そうだ、素材に欲しい。

「私の種族は決まったが、貴様の種族を聞いていないぞ？」

「私は自分が何なのか分からない。気が付いたら世界に存在していて、今まで自分と同じ存在を見た事が無い」

「たかが百年ほどであろう？我のように数千年生きて見つからないのならともかく、まだ諦めるのは早いのではないか？」

「二年以上経つても見つかっていない」

「……何を言っている？我はそのような戯言は好かんぞ」

私に鼻先を近付けて唸るクログウエル。

「本当だ、私はお前達が影も形も無かった頃から存在している。大半は寝ていたが、当時の世界には生物は今ほど多くいなかった」

「そんな事が信じられるか！でたらめを言うのならこの場で殺すぞ！」

起き上がり魔力を高めるクログウエル。信じて貰うにはあの姿を見せればいいのか？

それだけじゃこいつのような者は納得しないかも知れないから色々ときま散らしておこう。

「これを見てから判断してくれ」

「ぬう……!？」

私の変化を感じたのか戸惑う声を上げるクログウエル、そんな彼を尻目に魔力と魔素が溢れ出し私の輪郭が綻び始める。

「……馬鹿な」

クログウエルが呟く。私の髪は放射状に広がり空中を漂うようになびき始め、全身は深い闇色に変わる。

そして目も口も鼻も耳も無い人型の何かが莫大な魔力と魔素を放出しながら立っていた。

「これで分かったか？私が「何か」である事が。貴様程度ではどうにもならない力の差が」

私の声が洞窟に響く、どこから声が出ているんだろうか。

「分かったわー……もうやめて。やめて……死んでしま……」

……ん？口調がおかしいぞ？まあ今は後回しだ。

濃すぎると魔力と魔素は生物には毒なのか？

私はすぐに魔力と魔素を止めて元の姿に戻る。

クログウエルは体調が悪いのかうめき声を上げている。

「我が悪かった。疑った事は詫びよう……今で周囲の弱い生物は全滅したかも知れんが……」

「念のため教えておくが、さっきのは全力では無いからな。もっと力を放出したらお前まで一瞬で死にそうだ」

クログウエルの表情は良く分からないが動きが完全に固まってしまった。

その後クログウエルは落ち着きを取り戻し、私に敵わない事を認めた。

そして私は敬語は使わなくていいと伝えてから会話を進める。

「クログウエル、お前は性別はあるのか？」

「あるぞ？我は女だ」

女か、見た目では私には全く分からないな。

「なるほどな。その辺りは他の生物と同じなのか……ああ、私に性別は無いぞ?」

聞いたような雰囲気を感じて答えておく、彼女は「そんな気はしていた」と答えた。

「私の事を小さき者と言っていたが、私に似た者を見かけた事があるんだな?」

彼女に人類の事を教えた後、私は聞く。

「うむ、様々な場所へ飛んでいるが似たような者が沢山いるのを空から見た事があるぞ」

「どんな姿か覚えているか?」

「どんな……? うーむ……我にとって気にするような存在では無いからな……」

「もし今後それらしい生物を見かけたら姿を覚えて私に居場所を教えてくださいませんか?」

「構わんが……それほどの強さを持っていながらなぜそんな事を気にするのだ?」

私はモー乳を飲んでいたカップを置いて答える。

「私はこの先どれだけ生きるか分からない。生きる事に飽きるような事にならないように世界を私が想像しないような方法で面白く出来る存在を探しているんだ」

「それが小さき者……人類だと?」

「実際に私は人に紛れ生活して来た。人は進化している、きっとこれからも進化するだろう。そして新たな物を生み出すかもしれない、私はそれを見るのが楽しい」

「我には分からない……」

「長く生きるのなら一度くらい人と暮らしてみるといい。何か見つかるかもしれないぞ?」

「私の気が向けばな」

私が薄く微笑んで言うと、彼女は顔を背けて言う。

それから数日後、私はまだクログウエルの住処に居た。

ある日外に出ていたクログウエルが戻って来て質問して来る。

「気になったのだが、私の言葉が分かったのはどうしてだ？ そういった能力があるのか？」

「それは翻訳魔法だな、私が作った魔法だ。それをかけっぱなしにしていたから分かったんだ」

「ほう、そんな物があるのか」

「お互いにある程度の知性が無いと効果が無いが、便利だぞ」

「我にその魔法を教える気は無いか？」

「構わないが……お前も魔法使っていたよな？ 見た感じ同系統だと思いがその所はどうなんだ？」

「私の使う魔法は元素魔法だが、確かに貴様が使っていた魔法も同じ物を感じたな……名前何と言う？」

「名前は……」

水魔法や火魔法と言っていたが全体の名称はつけていなかったよな？……いや忘れてるだけか？

「どうした？」

「確認してみる、待ってくれ」

不思議そうな声色で言ってくる彼女に待って貰い念話をつなぐ。

『ミナ、聞こえるか？』

『どうしたの？ まだ一か月も経ってないわよ？』

ミナの意外そうな声が聞こえて来た。

『確認したい事があったてな、お前達は魔法の事を何と呼んでいる？』

『何と……？ 属性魔法かしら？』

聞いても思い出せない、人類が決めたのか。

『ありがとう、まだ戻らないから頼むぞ』

『分かったわよ、またね』

「こちらでは属性魔法と言うらしい」

私は不思議そうな表情で待っていた彼女に答えた。

「今聞いたような言い方をするな？」

「ああ、人の町に住んでいる友人から聞いていた」

「どうやって聞いている？」

「念話と言う物があつてな」

私は簡単に任意の人物と遠距離でも会話出来る事、大気中の魔力に影響される事などを説明した。

「我にそれも教えろ！」

「構わないがお前は私に何が出来る？まさかただ教えてくれとは言わないよな？」

「なっ!?あたしは数千年生きるドラゴンよ!？」

「……今あたしと言ったか？」

「私の方がお前より長く生きているし強い。その名前も私が付けた物だが」

「教えろ！教えなさいよー！」

何だこいつは。

力を見せた時もおかしくなっていたが、今までの口調と態度は、霧囿気は、態度はどこへ行つた？

「おいクログウエル。今までの口調と態度はどこへ行つたんだ？お前もしかしてそっちが素なのか？」

「そんな事は無い。我は我だ……どうすれば教えてくれるのだ？」
軽く流して話を進める彼女、まあ触れられたくないなら見逃してやろう。

「そうだな……お前の素材が欲しい。後は体を調べさせろ」

「二つも要求があるのか……？」

「翻訳魔法と念話だ」

「調べるのはともかく体の一部は……」

私は特に吹っ掛けるつもりは無いがお前が教えて欲しいと言って来たんだ。

「お前から直接取ろうとは思って無いぞ。例えば歯が抜け変わった鱗が自然に剥がれ落ちたりしないのか？」

それが無いなら痛くないように魔法を使って剥ぐしかないが、どうだろう。

「おお！それならたまにあるぞ！」

「それで十分だ、貰っていいか？」

「うむ、私の寝所に散らばっているから持つて行くといいぞ。放置しておいて正解だったな！」

嬉しそうな声で言う彼女、掃除をしてなかっただけじゃないのか？

「素材はこれでいいな。後は魔法を教えるからその後ゆっくり体を調べさせてくれ」

「うむ、構わんぞ」

元々魔法の熟練者であった彼女は魔法を教え始めて僅か一週間で翻訳魔法と念話を覚えた。

彼女だけなのか竜族全体の特徴なのか、どちらにしても私が教える時間は一週間で終わる事になった。

「じゃあ今日からはお前の体をじっくりと調べさせて貰うぞ」

「我はどうすればいいのだ？」

「特に何もしなくていい、寝ていてもいいぞ」

「そうなのか、簡単なのだな。では貴様の言う通り寝ている、終わったらそのまま放つておいて構わん」

「分かった、お休み」

そう言う彼女が目を瞑り眠り始めた。私は彼女の鱗や角を触ってみる……鱗は堅い感触だが柔軟性もある、角は弾力は無くただ堅い感じだな。

私は眠る彼女の巨体を隅々まで調べ始めた。

彼女の体を調べて共に暮らして過ごしているうちに約一年が経った。

転移があるので何かに夢中になって時間を忘れてたりしなければど

ここでも顔を出す事は出来る。

外に出たのは少し前にミナにルーテシアの進学祝いに顔を見せて欲しいと頼まれた時が最後だったか。

ルーテシアはしばらく見ない間に大きくなっていた。

時間を空けるとはつきりと違いが分かるな。

クログウエルの事はそれなりに分かった。現在までの内容から簡単に言うと彼女の基礎能力は人類や他の魔物など相手にならない高さだった。

彼女だけなのか竜族が生まれながらに強いのかは分からない。

彼女に聞いてみたが今まで苦戦した相手は居ないと言っていた。

その中には彼女に何となく似ている者が一匹だけ居たらしいが、逃げてしまったようだ。

異常なほど強かったルセリア王……アドルもあくまでも人の中での話だった。

種族の差は大きい。この差を人間はひっくり返せるだろうか？何の準備もしないで彼女に喧嘩を売ったら恐らく全滅だろう。

亜人種の国は分からないが人間の国はな。王とその母はまともに見えたが、国民は何故あんなったのか。

暮らしていた時に聞いておけばよかったか。

彼女の住処に住んで日々を過ごしていたある日、私はクログウエルと会話をしていた。

洞窟の外は雷雨が降っていて時々雷の音が聞こえる。

「クログウエルの食事は周囲の魔物を取って食べているのか？」

洞窟の一部の地面に家を作り、庭にクログウエルと話すためにソファとテーブルを用意した私は横たわる彼女に問いかける。

「そうだ、だが我はそこまで多くの食料を必要としない」

「全く必要無いという訳では無いのか？」

「そうだな、ある程度の量で大分長く持つが、間違いなく腹は減る

な」

「つまり食事以外の方法でその巨体を維持出来ている訳だな……」

「きよっ?! 巨体とはなんだ! あたしはそんなにデカくない!」

地面に下していた頭を持ち上げて叫ぶ彼女、急に切り替わるように話し方が変わるのを見ていて面白いな。

「ああ、お前が太っているという訳では無い。竜族的にはそうであつても他の者から見れば十分に大きい生物なんだよ、お前は」

「ああ……んんっ……我もそれぐらいは分かつていた、だが巨体はやめろ」

「じゃあなんと云えばいい?」

「ん?……美鱗の引き締まった体……とか?」

「長い、普通に体でいいな。大きい表現を使わなければいいんだろう?」

「……まあいいだろう」

ある日の夜、私は夕食を作っていた。周りには明かりをつけている、私には必要ないが一応な。

「貴様はいつもそうやって何かをしてから食べているな」

スープを作り、ステーキを焼いているとクログウエルがやって来た。

「料理と言つてな、こうする事で美味しく食べる事が出来るんだ」

「それほどに違うのか?」

「違うな。私も昔調味料を使って食事をした時には衝撃を受けた」

獲物を殺して生で食べるだけだった頃は気にしていなかったが、料理の力は侮れない。

「ふーむ……しかしそんな量では腹の足しにならない」

「あまり食べなくても平気なら何とかなるんじゃないか?」

「それでも流石にそんな量では足らん……我が獲つて来た獲物を料理する事は出来るのか?」

「じゃあ今度食事をする時、食べずにここに持って来い。簡単な料理になるが違いははつきり分かるはずだ」

「おお、いいのか？では明日にでも獲って来よう！」

彼女は尻尾を揺らして言う、結構気になっていたのかもな。

翌日の朝早く獲物を探しに行ったクログウエルは昼前に戻って来た。

両足で大きい魔物を掴み洞窟の入り口に着地すると手で引きずりながらこちらにやって来る。

「獲って来たぞ、さあ料理を作るのだ！」

「分かった」

巨大な串焼き設備を作り準備はしてある。

彼女が取って来た魔物は頭が二つあるヤギのような牛のような……良く分からない大きな魔物だ。間違いなく五メートル以上はある。

今回の調理は大変では無い。適当な大きさに切り分けて串焼きにするだけだ、骨なども食べられるようだが頭や太い骨などは取り除いて切り分けて行く。

「おお、よく分からんが手馴れているな」

そばで見ている彼女が感心したような声を上げる。

「今回は単純に塩を振って焼くだけだ。人と比べるとお前の食べる量は多いからこれが楽だ」

「量を多く作ればいいのではないか？」

「面倒だ」

「ぬう……」

大きい調理器具でまとめて……という方法なら出来るだろうがそこまでやる気は無い。

切り分けた肉に塩を振り、金属製の串に刺して焚火にかけて回す。しばらく回していると次第にいい香りが広がり始めた。

「むう……いい香りがするぞ……」

彼女は鼻先を肉に近付けて鼻を鳴らす。

「まだまだ、肉が大きいからしつかり焼かないとな」

「分かった、待つ……」

顔を引つ込めて伏せる彼女。小さい子供の面倒を見ているような気分だ。

そしてじつくりと火を入れて行くと肉からこぼれる油が焚火に落ち始める、そろそろ大丈夫か。

私は用意しておいた石の大きな皿に肉を下ろし串を抜き、彼女の前に置いた。

「魔物肉の塩焼きだ、食べてみろ」

「うむ……では食べてみよう……!?美味しい!なにこれ!今まで肉はなんだったの!?!」

彼女は言葉を崩しながら一気に食べる、私はその声を聞きながら次の塊を焼く。

「おかわり!」

元気に次を要求する彼女は見た目は大きな竜だが何故か小娘に感じしてしまう。

「まだ焼けてない、もう少し待て」

「えー……?」

「このまま食べるなら食べてもいいぞ?」

「……待つ」

不満そうな声を上げる彼女にそう言うと大人しくなる。

一度食べてしまったからには彼女は今までの食事では我慢出来ないかもしれない。

そして次々と焼いた魔物肉を平らげて、獲って来た魔物を完食した。

「ふー。我は満足だ……次も頼むぞ?」

伏せて料理の余韻に浸る、彼女が言う。

「断る。後は自分でやれ」

「なんで!?!」

彼女は頭を勢いよく上げて叫ぶ。

「なんで私がお前の面倒を見なければならんだ？私は頼まれたから一度だけ頼みを聞いてやっただけだ」

「そんなー!?あの味を知ったらもうそのまま食べられないわよー!？」

「おい、その体格ですり寄ってくるな」

彼女の体の大ききさでされたら潰される、平気だがやられたとは思わない。

「うう……もう食べられないなんて……」

落ち込む彼女だがそんなに絶望的ではないと思う。

「自分で出来るようになればいいだろう、教える事なら引き受けてやる」

「出来るかなあ……?」

「火は魔法でも構わないし、最低でも皮と骨と内臓を取り除いて塩を振って焼く事が出来ればそれなりの味にはなる。より美味しく焼くには相応の経験と技術が必要になるが、それはその気になった時にやればいいだろう」

「やってみる……」

「そうか、ではまた食事をする時に持って来い。最低限の事だけでも出来るように教えてやる」

私がそう言うと彼女は頷いた。

クログウエルが焼いた肉を初めて食べてから十日が経った。

今日、彼女はまた狩りに出かけて行った。この十日間クログウエルはそわそわしていたが、腹が空いていないのに食べる気にはならなかったらしく我慢していたようだ。

今回は彼女に串焼きを教える。

「獲つて来たぞ！」

それなりの時間が過ぎた頃彼女が帰って来た。今回の獲物は蛇のような頭を持った巨大な鳥だった。

羽毛が生えていないな。羽毛が無いと処理が簡単だ、彼女には丁度よかった。

「ではこれから串焼きを教える」

「うむ、頼むぞ」

実際は血抜きなども出来ると更に美味しいのだが……今回はいいだろう。

本人もあの味で納得しているようだしな。

あれから時間をかけて串焼きの作り方を教えた、主に解体の練習だったが。

彼女はその体の大きさに見合わない器用さを発揮した、刃物は彼女の手に生えている爪で十分だったし火は魔法で代用した。

そしてとうとう彼女は私に教わりながら串焼きを焼き上げた。

「出来たぞ！我が作った串焼きだ！」

「よくやった、これでこれから串焼きで食べられるだろう」

「感謝するぞ！」

「食べてみる」

「うむ……美味しい！美味しいが貴様が作った物の方が美味かったな」

「当たり前だ、作って来た数が違う、初めてならこれでも十分だ」

「そうだった……上手く焼くには練習が要るのだったな？」

「そういう事だ」

私がそう答えると、彼女は残った肉を食べ始めた。その姿を見て私も最初はこんな物だった事を思いだす。

「しかし……この塩というのはどうやって手に入れればいいの？」

食べながら私に話しかけてくる。

「海に行つて自分で作るか、岩塩を見つけるか、人類の町で流通している物を買うかだな」

「海で作る？」

「ああ、海水を加工すると塩が取れる」

「面倒そうだな」

「なら人里で売っている物を買うのが一番手っ取り早いな」

「我が買いに行つても問題無いか？」

「駄目だろうな。問答無用で攻撃されるか相手が逃げると思う」

「貴様から習った翻訳魔法があれば会話が出来るだろう？それでも駄目なのか？」

「お前の見た目が人類にどう見えるか分かつて無いようだな。きっと人類からは邪悪な魔物にしか見えないうだろう。話せるからと言って会話に応じてくれる者がいるかどうか」

「我が魔物だ?!」

食事を中断してこちらを向く。

「人類からはそう見えると思う。意外と上手く行くかも知れないし一度行つてみたらどうだ？」

「うーむ……」

「行くのなら攻撃はするなよ？一度攻撃したら関係を戻すのはかなり難しいからな。塩が欲しいだけなら「殺されたくなければ塩を出せ」と言えばいいかも知れない」

「それもいいかも知れない」

「ああ、それと人間の町の一つに私が大事にしている町がある。そこに攻撃をしたら殺すからな」

「そんな事を言われて出来るか！どこがそうなのか教えろ！そこは避けてやる！」

「じゃあ今度一緒に行くか」

ケインとミナに紹介して取引出来るようにした方がいいかも知れない。

彼女が捕まえた魔物の取り除いた部位を売れば多少の金になるだろうし、それで塩や他の調味料を買えばいいのではないだろうか。

いや、それよりもクログウエルの抜けた歯や剥がれた鱗が高値で売れるのではないか？

それを持ち込んで手に入れた金で買えば彼女でも買物出来る。

だが姿がこれではどこか町から離れた森で取引しないと人類と戦争になりそうだ。

「クログウエル、町に行くのは少し待ってくれ。何とか出来るかも知れない」

「何かいい案でもあるのか？」

「私が大事にしている町に友人が居る。私がしっかり紹介すればお前相手でも恐れる事無く取引してくれるだろう」

ふとアルベリク商会の事を思い出したが今もあるか分からないし、もう私を知っている者も居ないから無理だろう。

彼女の体の調査も進めないとな。

今までの結果から「生まれつき高い能力を持った生物」の可能性が高いが。

まずはクログウエルを調べてしまおう。

彼女は嫌がるだろうが対価はすでに払っている、断るなら報いを受けて貰おう。

彼女に調べる事を優先すると言い納得させ、更に三か月の間彼女の体を十分調べた。

時々私の持つ塩を分けてやり、彼女は自分で作った串焼きを楽しん

でいた。

巨大な金属製の串は彼女に譲った。元々彼女の串として作った物で私は使わないからな。

彼女……竜族は元々高い能力を備えた生物で本人は知らないようだが僅かに魔素も吸っているようだ、そこだけを見れば魔物にも近いと言える。

高い知性を持ち元素魔法を操り、教えれば覚えはかなり早く見た目以上に器用だ。

他の生物を下に見ているが実際に生物の中では上位だろう。

しかし、調べた限り「知性のある強力な魔物」としか言えない、クログウエルが聞いたら怒るだろうな。

時間をかけた割にはこの位しか分からなかった。

「取り敢えずこれで調べるのは終わりだ」

「そうか、では貴様の友人に会いに行こうではないか!」

「待て、いきなり行ったら大騒ぎになる」

「ぬ……ではどうするのだ?」

「念話で先に伝えて町の外で会うぞ」

「おお、それなら問題無いな」

それでも近すぎるとこいつが飛んで来るのが見えるだろうな。

見られてしまったら大騒ぎになる事は避けられない、あの二人には飛行してある程度離れた所に来て貰おう。

『ミナ、今は大丈夫か?』

『はいはい、久しぶりね』

変わらぬミナの声が返ってくる。

『頼みがある』

『まあ貴女の頼みならなるべく聞くけど?』

『外界で新しく出来た友人が塩などの調味料を買いたいらしくてな。魔物の素材の買取と調味料の販売をして欲しい』

『町の商人に言えばいいじゃない』

『ちよつと訳ありでな。お前達位しか無理だ』

『……それ、大丈夫なんでしょうね?』

何を思ったか訝し気な声を出す。

『犯罪などでは無い、まっとうな取引だが彼女は町に入れなからな』

『んー？見た目が変わっているの？』

『そうだ、少し変わった友人なんだ。悪い奴では無いのだが見た目で誤解される』

『そういう事なら……えーと素材を代わりに売って、調味料を買って渡せばいいのね？』

『そうだ、取り敢えず一回で大量に買う予定だからそう頻繁に手間を取らせることは無いと思う。それに手間賃としてミナにも報酬を出す』

『別にいいわよ、それくらい』

『しっかり受け取ってやってくれ、感謝の印でもある』

『……分かったわ、取り敢えず受け取るわよ』

『一月後に私が町の外の合流地点まで連れて行く、いいか？』

『いいわ、予定を空けておく』

『頼んだ』

念話を切ると私はクログウエルに方針を伝えた、彼女は了承して取引が実現する事になった。

「当日は翻訳魔法を忘れるなよ？忘れると言葉が通じないぞ」

「分かっている」

一か月が経ち約束の日を迎えた、あれから私はクログウエルに家賃としてマジックボックスの魔法を教えた。

取引するのなら覚えておいた方が良いからな。

それから売るための素材を見繕った。どれだけの価値があるか分からないので、彼女に多めに持って行くように言っておいた。

私はどの町からも遠い森の中にクログウエルを待たせて念話で連絡し、ウルグラードに転移する。

彼女は町の外で待っていた、私が近寄るところちらに飛んでくる。

「来たわね、話した通り素材を受け取って値が付くまで待つて貰う事になるからね?」

「構わない、さっさと終わらせよう」

「長生きの割にせっかちな時もあるわよね、貴女」

そう言つて私について来る、ミナの飛行速度は昔より上がつていた。

しばらく飛行するとクログウエルが見えて来た。

「なにあれ!?魔物!」

「安心しろあいつが私の友人だ」

「あれは人じゃ無いでしょ!」

焦るミナに私がそう言うと呼びが返つて来た。

「見た目は凶悪だが言葉も通じるしそれほど悪い奴では無いぞ?」

「……貴女がいるからいいけど、それ以外で会ったら逃げてるわよ?」

「だろうな」

そんな話をしながらクログウエルの元に到着する。

「こいつがクレリアの友人か」

クログウエルには名前で言うように言つてある、全部貴様では誰が誰だか分からないからな。

「本当に喋つた……」

「貴様……」

「ひゃっ!」

クログウエルは気に障つたのか唸り声を発する。

「唸り声をあげるなクログウエル……この女性が私の友人の一人、ミナ・トリウムだ。ミナ、この黒竜が私の新しい友人のクログウエルだ」

「よろしくお願いするわね、クログウエルさん……えっと、性別はあるのかしら?」

「ああ、彼女は女性だ」

「ふん……我はクログウエル。小さき者よ、我と話せる事を光榮に

思うがいい」

「お前、塩を売って貰えなくなっても私は助けないぞ？」

「ぐっ……まあよろしくしてやらんでもない」

「確かに悪い竜？では無さそうね」

私とクログウエルのやり取りを見てミナが呟く。

それからの事はスムーズに進んだ。

クログウエルの牙や鱗を渡して一度解散した後、渡した材料がとも強力な素材である事が分かり高値が付いた。

その内のいくらかをミナに渡し、クログウエルは塩を始めとした調味料を大量に買い込んだ。

お互いに念話が出来るため、今後必要な時は私を通さずに取引をするように言った。

クログウエルにはミナに無理を言ったら罰を受けて貰うと言っておいた。

今回の事でそれなりに打ち解けていたので問題無いとは思いが念のため。

ミナとクログウエルを会わせて取引を終えた私はクログウエルと共に住処に戻った。

私は洞窟の家に作った風呂に入って今回の事を思い返す。

ミナには世話になった、私が何であるかを知っているからこそ彼女は逃げずに交渉してくれた。

ミナ自身も私がいなかったら逃げていると言っていたし、クログウエルは私がいなければ襲っていたかもしれない。

自分が認めている相手の言う事には耳を傾けるが他の者の言う事は聞かず、すぐに攻撃に移るような感じだな。

クログウエルは私に言われたくないようだが、私は一応話は聞くし、すぐに攻撃はしないから違う。敵対したら何か特別な理由が無い限り確実に殺すが。

「クレリア、いるな？」

クログウエルの声がする、彼女は取引の時から私を名前で呼ぶようになっていた。

「風呂に入っている所だ、どうした？」

私はそのまま風呂場で話す、彼女も耳が良いので聞こえているだろう。

「周囲を見回って来る、しばらく戻らないかもしれない」

「そうか……ちよつと待て、私も行くぞ。出来ればクログウエルの上に乗りたいのだが、いいか？」

空を飛ぶ生物に乗ってみたい。

「む？我の上にか？……本来ならばそんな事を言った者は殺すが……クレリアなら我慢してやろう」

「そうか、ありがとう。ではすぐに出るから待ってくれ」

「うむ、早くするのだぞ」

すると外でクログウエルが横たわる音がする、すぐに準備をしよう。

「よし、頼んだぞクログウエル」

準備を終えて私は彼女の背中に立っていた。

「では行く、振り落とされるでないぞ？」

「落ちても平気だから気にするな」

「そうだったな」

そう言うと彼女は空へ舞い上がる、翼も使っているが飛行魔法に近い。

私は魔法で風圧も遮断しているし落ちないようにもしているのだ。どんな飛び方をされても立ったままで問題無い。

『好きなように飛んでくれ、私の事は気にしなくていい』

飛行中は念話の方が良いだろう、私は念話でクログウエルに声をかける。

『そうか、では好きにさせて貰おう』

彼女は速度を上げて大空を突き進む、高度は高くなり山脈が広がっているのが見える。

『見回ると言っていたがそんな必要があるのか?』

眼下の大地を見ながら私は彼女に聞く、特に必要ないように感じるのだが。

『私の住処の周辺は私の物だ、他の者が勝手をしていないか見回る必要がある』

なるほど、周囲の土地は自分の物だと主張している訳だ。

『もし人類がやって来て住み着いたらどうする?』

『ふむ……そうだな……。我に敬意を払い調味料を献上するのなら、私の土地に住む事を許してやらん事もない』

少し考えて言う彼女、料理を知る前だったら殺すとしたか言わなかったかもしれない。

今は調味料と美味しい料理を知っているから人類をただ排除するという考えはしなくなったのか?人間から手に入れた方が楽しいな。

そんな事を思いながら眼下を眺めていると、眼下の森に灰色で楕円形の何かが見えた。

しっかりと見てみるとダンゴムシのような生物がいる。

魔物かどうかは分からないがこの距離で見えると言う事はかなり大きいだろう。

『クログウエル、気になる物を見つけたから行ってくる。お前は見回りを続けていてくれ、終わったたら帰っていい』

『む?何を見つけたのだ?』

『右の……丘の方向だ。手前の地面を見ろ、何か大きい生物がいる』
私は見つけた方向を彼女に教える、彼女はそちらを向くとすぐに見

つけたらしく反応した。

『いるな、何だあれは?我も見ただ事がないぞ』

『と言う事は移動してここまで来たのか……まずは近づいてみよう』

そう言って私はクログウエルの背から飛び降りた。

『我は見回りがある程度終わったら戻ってくる』

『分かった』

離れていく際にクログウエルが言う。私は返事をしながら目標の生物に向かつて落下し始めた。

距離が縮まる程に大きさが分かる、それなりの大きさの島程はあるんじゃないか？

間近で見るとやはり大きいな。

側面に近寄って表面を触ってみると金属のような感じだ。でこぼことした灰色の装甲を持った巨大なダンゴムシ、というのが見た目では一番近い表現かもしれない。

白いガラス玉のような大きな物が複数ついているが、これが目だろうか？それともただの模様か？

目に付いたから見に来たが、ただ大きいダンゴムシのような魔物みたいだな。

だがここまで大きい生物は珍しい、移動はかなり遅い。

森の木々を薙ぎ倒して進んでいるようだが、このスピードなら余程の事が無い限り他の生物が轢かれる事は無さそうだ。

……ん？止まった？

こいつを上から見下ろしながら考えていると動きが止まった。私に対して何かするつもりか？

そしてそのまましばらく待っていたのだが……。

何もないのか？

いくら待っても何もして来ない、何も起きない。

この魔物は止まったままだ。

もう放っておいていいか、初めて見たが大きいだけで特に何かありそうな感じはしない。

私はこいつの背中に着地して外殻を手で叩く、分厚い金属の塊にしか感じない。

こいつが移動してきた跡を見る限り相当重量があるようだし、遅いのはそのせいか。

動きが止まっているのは休憩だったりしないだろうか？

そう思っていると上空から声をかけられる。

「見回りは終わったが……デカいなこいつは」

クログウエルはダンゴムシを見てそう言いながら着陸する。

ダンゴムシはびくともしない。

名前でも付けるか。ダンゴムシのような感じだがこいつはダンゴムシでは無いからな。

「こいつは鋼殻虫だ」

「何だ？クレリア、こやつを知ってるのか」

彼女が私の方に頭を向ける。

「知らん、だから私が勝手に付けた」

「……そうか。我も初めて見る相手だからな……動いてないが殺したのか？」

「いや、少し前まで速度は遅いが進んでいたのだが……何故か止まってしまった」

「何か分かったのか？」

「この外殻がかなりの厚みと強度と重量を持っている事くらいだな。大きなダンゴムシ系統の魔物のようだしもう興味が無くなった」

私は外殻を叩きながら答える、こいつにはこれ以上興味がわからないからもう帰ろう。

「我はもう帰るぞ？」

「帰ろうか」

私がそう言って彼女の体の上に乗ると彼女は空へと舞い上がり住処へと向かい始める、私はクログウエルの背に立ち夕陽に染まる世界を眺めていた。

鋼殻虫を見つけた日からどれだけ経っただろうか？私は現在もク

ログウエルの住処で毎日を過ごしていた。

ここで暮らしていると時間を忘れる。時々料理をしているクログウエルを見たりミナからの念話で時間の流れを感じる事があるくらいだ。

予定や約束がある時以外は時間の経過に対する考えなどこんな物だ。

流石に気が付いたら知人が全員寿命で死んでいた、といった事にはなりたくは無い。

これからは出来るだけ気にしようと思っている、あくまでも出来るだけだが。

『クレリア？聞こえる？』

『聞こえている』

洞窟の家のリビングでソファに座っているとミナから念話が来た。

『ルーテシアが初等科を卒業するからお祝いに会いに来てくれないかしら？』

『もう卒業か？早いな』

『貴女、私がこうやって連絡しなかったら忘れていつまでも引きこもってるでしょ？』

何もなくても訓練に集中出来るからな、何もなければいつまでもそのままの可能性はある。

『忘れてはいない、気が付いたら時間が過ぎているだけだ』

『時間に関してはこれだものね……まあこっちから連絡すれば答えてくれるし来てくれるからいいけど……』

声がかかれば余程気がのらない事でない限り断る事は無いと思う。

『ルーテシアが初等科を卒業すると言う事は……私がウルグラーデを離れて六年近く過ぎていると言う事か』

『貴女今更何言ってるの？』

呆れたような声が聞こえる。

『いや、今連絡が来るまでまったく気にしていなかった。時間が経つのは早いな』

『今まで私がたまたま連絡してたじゃない』

『連絡はされていたが何年経ったとは言ってなかっただろう』

『はあ……貴女は時間に対して無関心すぎるわ』

『無関心では無い。何かやっていると忘れるだけだ、約束や目的がある時は気にしている』

『とにかく来られるなら一週間後に来て。忘れないでよ?』

『分かった、家に行けばいいか?』

『そうね、午前中は卒業式で昼前には帰ってくるから昼食は家で一緒に食べましょう』

『それは嬉しいな。じゃあ昼少し前に行こう』

『それでいいと思うわ、じゃあ待つてるわね』

念話を切ると今度はクログウエルに念話をつなぐ。

『クログウエル、私は一週間後にウルグラーデに一度戻る』

『む?何かあったのか?』

『ルーテシアが初等科を卒業するらしくてな、祝いに行く』

『ほう、ルーテシアがな……そう言えばミナとケインにも長い事直接会っていないな……私も行くか』

『やめろ。大騒ぎになる』

クログウエルは町の事を学習し、いつの間にかミナだけでは無くルーテシアやケインとも仲良くなっていた。

悪い事では無いし六年経っていたらそんな事も起きるか。

『では……そうだ!以前我の牙を加工したペンダントを作っただろう?あれを我とクレリアからの祝いとして渡して欲しい』

『あのお前の姿を彫った物か?』

あれはいい出来だ、私のマジックボックスに入っている。

『そうだ、いいだろう?』

『そうだな、私とお前からの祝いの品として渡そうか』

『うむ、頼んだぞ!』

私は返事を聞いて念話を切り、一週間後を待った。

私はルーテシアの初等科卒業を祝うために転移でウルグラードにやって来た。

すぐに学校に向かい敷地内のミナ達の家に向かう、卒業式はもう終わっている時間だな。

家に到着し、扉をノックするとすぐに扉が開いた。

「はい、どちら様……お姉ちゃん？」

姿を現したルーテシアは薄い緑色の髪をツインテールにしている。はつきりと覚えてはいるがミナも昔同じ髪型だったかも知れない。

「久しぶりだなルーテシア」

あまりにも私にべったりだったのではばらく直接会っていないかったのだが、もう私より背が高いな。

「入っていいか？」

「うん」

家に入り彼女と共にリビングに移動する。私はソファに座るが、ルーテシアは私の近くで立ったままだ。

「どうした？」

「お隣座って良い？」

「いいぞ、おいで」

私がそう言うのと隣に座る……随分おとなしくなったな。

昔はあつた途端に突っ込んで飛びついていたので。

ああ、もう私の方が背が低いから無理だと思っているのか。

実際はルーテシアが百倍重くても何の問題も無いのだが。

「いらっしやい、ゆっくりして行ってね。私はお昼作るから」

ミナが私に声をかけてそのままキッチンに消えて行く。

私はルーテシアにお祝いの品を渡す事にした、忘れたらまずいな。な。

「ルーテシア、初等科卒業おめでとう。これは私とクログウェルからの祝いの品だ」

そう言つて私は木箱に入れてあるクログウエルの牙のペンダントを渡した。

「ありがとう……お姉ちゃん」

彼女は嬉しそうな顔で受取り箱を開ける。

このペンダントは魔法金属とクログウエルの牙から作った物だ。

彼女はペンダントを見ると目を輝かせた。

「ありがとうお姉ちゃん！」

そう言つて抱きしめて来る、身長差のせいでこれからは私が胸に顔を埋める事になるな。

「クログウエルにも伝えておくよ」

「うん、クロちゃんにも伝えてね」

「クロちゃん？」

初めて聞いたが、クログウエルの事か？あいつルーテシアにそう呼ばれているのか。

「クログウエルだからクロちゃんよ？」

「そうか、伝えておく」

私がそう答えると彼女は微笑んでペンダントを首にかけ、牙に彫られた竜の姿を見ている。

「クロちゃんそっくりね」

彼女はそう言つて私を見る、私は彼女の頭を撫でながら答える。

「見たままを私が彫った」

「お姉ちゃん凄いな」

そう言つてペンダントを見る彼女はとても嬉しそうだ、これだけ喜んでくれればクログウエルも嬉しいだろう。

こうして彼女と久しぶりに話をしながら待っているとミナが料理を持ってやつて来た。

「ご飯できたわよ。今日はルーテシアの好きな物にしたからね」

「やったー！」

こういう所は変わっていないかもな。

食事前のテーブルに移り、飲み物の用意をしてから食事を始める。

「ケインはどうした？」

私はミナに聞く。

「彼は夕方に帰ってくると思うわ、校長だもの」

「役目を放って帰る訳にはいかないか」

「ええ……ん？ルーテシア？その首にかけているペンダントどうしたの？」

「お姉ちゃんがお祝いだってくれたの」

「そうなの？わざわざありがとうねクレリア」

そう言っつてミナは私を見る。

「クログウエルも来たがっていたが流石に無理だからな、せめて祝いの品をとペンダントを贈る事にしたんだ」

「これ……何で出来てるの？」

ミナがルーテシアの首にかかっているペンダントを見て言う。

「チエーンの部分は魔法金属製だ。ペンダントトップはクログウエルの牙から切り出した物を使い、私がクログウエルの姿を彫った。更にそこに宝石や魔法金属を埋め込み色を付けた」

最初は彫つてあるだけだったのだが、一週間でもう少し何かしようとしてこうなった。

「ちよつと……魔法金属と宝石とクログウエルさんの牙だけで出来るのこれ？とんでもない高級品じゃない……」

彼女が私に身を乗り出して耳打ちする。

「私達にとつてはそうでもない、気にするな」

「あんなもの持ってたなら誰かに奪われるかも知れないわ」

彼女は心配そうに言う、確かに価値のある物を子供が下げているら奪おうと考える者も居るかもしれない。

私はルーテシア以外が触ったり一定以上の危険な現象が近づいた場合守りの障壁が展開されるようにしようと考えた。

「ミナ、それならばこうしようと思うんだが」

私は考えた事をミナに伝える、彼女は困ったような表情になった。

「それだと私達も触れないじゃない……でも貴女の守りは心強いわね」

「お前の言う事も分かるからやるんだ。出来るだけそんな事になら

ないように気を付ける。それとも今更あの子にペンダントを返せと
言うか？」

ミナは嬉しそうにペンダントを見ているルーテシアに目を向ける
と諦めたように言う。

「……そうね。聞かれたら安物だと言う事にしておけばいいし、い
ざと言う時に守ってくれるなら悪くは無いわね」

「よし、では魔法をかけよう」

私は隣に座っているルーテシアのペンダントに魔法をかける。こ
れでルーテシアだけしか触れず彼女を守る魔法のペンダントになっ
た。

「いつ見ても貴女の魔法は見事な物よね、あれだけの効果がある魔
法を手も触れずに一瞬だもの」

頬杖について言う彼女、私は既に魔法を自然と使っているから何と
も言えない。

「料理が冷める、早く食べよう」

少し話し過ぎた、せつかくの料理の味が落ちてしまう。

「そうね、ルーテシアも食べましょ」

「うん」

そして改めて食事を始める。

食事を終えて三人でソファでくつろぎながら会話をしているが、何
かやるか。

「二人とも、カードで遊ばないか？」

私は以前ルセリアで買ったカードを思い出した、多人数で室内で遊
ぶにはいいと思う。

「カード？賭博に使われるあれよね？」

「賭けなければただの遊びだ」

ミナの言葉に私は答える、得点制などにして勝敗だけ決めればい
い。

「お姉ちゃんどんな遊びなの？」

ルーテシアは興味を持ったようで私に聞いてくる。

「このカードだけで複数の遊びが出来るんだ、ポーカーかババ抜き辺りが手ごろだな」

私は二人にポーカーとババ抜きの説明をしてどちらをやるか決めて貰った。

最初と言う事もあり、より簡単なルールのババ抜きをやる事になった。

「むむむ……」

私のカードを前にルーテシアが唸っている。

こういったゲームは面白いが、知ろうとすれば手札なども全て分かる。

それでは勝負にならないし面白くも無い。

ただ知ろうとしなければ分からないまま行えるので問題無く勝負は出来る。

「ルーテシア、早く決めてくれないか？」

「分かっているよお姉ちゃん……これにする……やった！揃った！」

彼女は私のカードから一枚抜き取り確認して喜ぶ。

次に私はミナからカードを引く……揃わんな。ミナはルーテシアから引き、揃ったカードを捨てている。

そして時間は進み、結果は私が最下位、二位がルーテシア、勝者はミナだった。

「貴女が何かで負けるのって新鮮よね」

「分からない様にすれば普通に負ける事も出来る。勝ち負けの分からない勝負も私は好きだぞ」

私はミナの言葉に答える。負けられない勝負に負ける気は無いが、それ以外なら負けても楽しいものだ。

「もう一回！もう一回やろ!？」

一位になれなかつたルーテシアが再戦を要求する。

「今日は好きだけ付き合おうぞ」

私はそう言つてカードを配る、彼女が初めて勝者になるのは数戦後の事だった。

あれからケインが帰宅するまでカードで遊び続け、その後四人での勝負となつた。

最終的に一番勝率が高かつたのはミナで次にケイン、ルーテシア、私の順だ。

ルーテシアはトランプが気に入つたらしくミナにねだつていた、きつと購入する事になるだろう。

現在は二十二時過ぎ、ルーテシアはすでに眠っている。

一人で眠れるようになったんだな。

「私が正式に校長に就任するのはルーテシアが十五を超えてからにするつもりよ」

私達は三人でリビングに集まりミナの学校校長就任の話をしていった。

ルーテシアは現在十二歳だったか？後三年ほどで就任か。

「ケインは退任した後はどうするんだ？」

「私は妻の補佐をするつもりです」

ケインに退任後の事を聞くとミナの補佐をするらしい、死ぬまで学校に関わり続けるつもりなのか。

「他にやりたい事は無いのか？」

「妻の補佐として学校にいる事がやりたい事ですから……それに新しい科が出来るかも知れませんかからね」

彼がそれでいいならそれでいい、そして新しい科か。

「新しい科が増えるのか？」

「まだ正式に決まっていますが、戦闘技術科設立の話が持ち上がっていますね」

「戦い方を教えると言う事か」

「はい、魔法はもちろん各種武器の戦い方の基本を教えます」

「魔物はどこにでもいるから覚えておいて損は無いな」

人の相手も出来るようになるしな。

「もし本当に設立する場合は、引退した冒険者の方などを教師として雇う事を考えています」

「私の就任と近いと色々慌ただしくなるから……その前に設立するか、私が就任して落ち着くのを待つてからにするか、それとも設立しないか。私達も迷っているのよね」

飲み物を用意していたミナが話に混ざる。

「私の意見が聞きたいのか？」

そう言うと二人は頷いた、そうだな……。

「万全を期したいのなら五年後以降がいいだろう。早く設立しなければならぬ切迫した理由が無いのなら余裕を持った方がいいと思う。設立しないなら何も言う事は無いな」

二人は私の話を聞いて考えているようだ。

「私は学校運営をした事が無い。責任を取らないとは言わないが素人の意見だという事は覚えておいてくれ」

「はい、あくまでも意見の一つとして受け取っていますのでご安心ください」

ケインが私にそう言って笑う、敷地は広いこの学校だがどこまで大きくなるのだろうか。

「ん？帰ったか」

翌日私は転移でクログウエルの住処に戻って来た、彼女は獲物を解体している。

「クログウエル、ルーテシアがお前に感謝していたぞ？ペンダントはかなり気に入ったようだ」

家に向かいながら伝える。

「そうか！私の姿が描かれているのだ！当然だな！」
そう言いながら尻尾を地面に叩きつけている、喜んでいるのがよく分かるな。

「ルーテシア達は元気だったか？」

「みんな元気だった。それとあのペンダントの価値を分かっているといとミナが呆れていたぞ」

「我にとっては無価値だからな！当然だ！」

微妙な返しをするクログウエル、私はそのまま家に帰って風呂に入る準備をした。

風呂から出てくつろぎながら魔法球を作っているとクログウエルの声が聞こえて来た。

「クレリア、聞こえるか？話がある」

私は立ち上がり外の椅子に移動して話を聞く態勢になる。

「なんだ？」

「うむ、我は住処を変えようと思う」

「何故だ？特に悪く無い場所だと思うが」

「それはな、この辺りの魔物に飽きたからだ」

飽きた？……ああ。

「他の場所で美味しい獲物を探すつもりか？」

「そうだ、新たな味を求めて場所を変える」

言いたい事は分かるが……。

「調味料の取引はどうするんだ？」

「多少離れていても念話と私の飛行速度があれば問題あるまい」

「それもそうか。新しい住処からウルグラード付近まで行くのに必要な時間を確認しておけよ？ミナを数日待たせたりしないようにな」

「……分かっているとも」

「何だその間は、忘れるなよ？ミナも暇ではないのに対応してくれているんだ」

クログウエルの素材の売り値のいくらかはミナの手数料になるから損をしている訳では無いが、わざわざ都市から離れた所まで来てくれているからな。

「分かっている！ミナがいなければまともに買う事など出来んからな」

「人類から見ればお前は強大な魔物だから当然だ」

「ふんっ！あのような連中と一緒にするな！」

声を荒らげるクログウエル。知性の高い彼女が一般的な魔物と一緒ににされたら怒るのも当然か。

「例え会話出来ても強大な力がある者は恐れられる物だと思うぞ」

「クレリアの方がよほど危険なのに町に入っているではないか……」

私を羨ましそうに見るクログウエル、彼女の表情もかなり分かるようになってきたな。

「私は見た目だけなら小さな人間の少女だからな」

「やはり見た目と大きさが問題か……魔法で人間の姿になれないものかな？」

「姿を変える魔法……変身魔法か、出来るとは思うが私は作らんぞ？」

「クレリアは姿を普通に変えられるから要らんだろうな」

「気が向いたら作ってみるかな」

「我もその気になったら考えてみよう。それよりもどこに向かうかだが……クレリアは一緒に来るのか？」

私達は魔法の事は後回しにして移動の事を話し始める。

「行くぞ、私は転移があるからな。どれだけ移動しようと関係無い」「くそ……我にも使えれば！」

「私が使って一緒に転移出来たのだから不可能では無いはずだが……魔法の技術が足りないのか？」

クログウエルは何故か転移が使えなかった、教えたのだが発動しなかったのだ。

「やり方は教わったのだ！絶対に使えるようになってやる！」

「また話が脱線してしまった。ついて行くが、どこに行くんだ？」

「そうだな……別の大陸に行ってみようかと思っている」

「それはかなり遠いだろう」

「我なら問題は無い」

「いや、あまり遠いと念話がつながらなくなるぞ？お前なら平気だろうがミナの方からつなげられなくなる可能性がある」

「そもそも念話は限られた者にしか教えていない」

「学校でも教えていないので現在使えるのは私、ケイン、ミナ、カミラ、クログウエルだけか？」

「ルーテシアに教える事は許可しているのでその内ケインかミナが教えるだろう」

「何とかならんのか？」

「お前私に頼りすぎだぞ、自分で何とかしろ」

「何でもしてやる気は無い」

「私はすぐに会いに行けるからな……いや、私も念話が来なければ長い間連絡をしない可能性があるな」

「何とかしよう」

「……何だ急に？何故やる気になった？」

「悩んでいたクログウエルがいきなりの意見が変わった私に驚き、聞いてくる」

「私は相手から念話が来ないと連絡を忘れる」

「ほう？我は運がいい、では頼んだぞ……ふふふ」

「まあ自分のためでもあるからな、何とかするか」

「ミナ達の使う念話の魔力を補強して届かせればいい訳だ、しばらく色々考えよう」

「クログウエル、しばらく考えるから完成するまで出発は延期だ」

「うむ、分かった。我も向こうから連絡が出来なくなるのは困るからな」

「彼女の返事を聞き、私は考え始めた」

一か月後。私はクログウエルの住処がある山脈で一番高い山頂に、魔法金属であるミスリルを使って三角円錐の塔を建てた、高さは約百三十メートルある。

「……何だこれは？」

クログウエルが塔を見て私に問いかける、これが何なのか分からず困惑しているようだ。

「これは念話用の魔力増幅中継塔だ」

「……聞いても分からないぞ？」

私は指輪を一つ見せながら言う。

「細かい事は省くが、この指輪を使って念話する事でこの塔につながる。そしてこの塔が周囲の魔力を利用し増幅して、遠距離にいる私達とつながるようにする」

「ほう……細かい事はどうでもいいがこれで念話の問題は解決したのだな？」

「この指輪を渡して実際に成功すればな」

「なるほど、確認か」

「私達が次の住処を決めた後に指輪を使って念話してもらおう、それが上手く行けば終了だ」

「では早速やるぞ！クレリア！早く渡してきてくれ！」

「慌てるな、すぐに行く」

私はそう言ってウルグラードに転移した。

ミナ達に説明して指輪を渡し、私達は次の住処を探した。

最終的に海を越え新しい大陸の北方、それもかなり高い山脈の山の頂上付近にある洞窟に住み着く事になった。

外は常に雪景色で吹雪く事も多いが、私達には何の影響も無い。

そして次の住処が決まったため、私はミナに念話を頼んだ。

「まだか……？」

「もう少しだな、十二時に連絡するように頼んである」
クログウエルがそわそわしている。これで駄目ならまた考え直し
だ、私としても上手く行つて欲しい。

『クレリア？聞こえる？……大丈夫かしら……間違えてないわよね？』

来た、聞こえた……乱れも無くはつきりと聞こえる。

『聞こえるぞ、どうやら上手く行つたようだ』

『今あなた達何処にいるの？』

『別大陸の北方の山脈だ』

『別大陸!?よく届いたわね……』

『これで連絡が出来るだろう？私としても時間を忘れてしまうのは避けたいからな』

『私達が連絡しないと大抵時間を忘れてそのままよね』

『助かっている。さて、クログウエルが待ちきれずにそわそわしているんだ、彼女にも連絡してやってくれ』

『わかったわ』

そして念話が切れ、隣のクログウエルを見ていると……ぴくつと震え尻尾が暴れ始める、連絡が来たんだな。

こうして私達の新しい住処が決まり、親しい者達との連絡手段が確立された。

新たな場所で生活を始める私とクログウエルは一度周囲を見て回る事にした。

「別々に見て回ろう。私は山脈上空から見えた海沿いをゆっくり時間をかけて見て行こうと思う」

「わざわざ時間をかけるのか？」

「それが良い、場合によるが」

理解出来ないと言った表情をするクログウエル、彼女には分からないかもな。

「まあよかろう、我も好きにするからな。何年でも時間をかけるといい」

「そこまでかかるかは分からないが、何かあったら念話で伝える」
その後クログウエルは海とは逆の方向へ飛び立っていった。その姿を見送り、私は海へと飛び立った。

雪の降る浜辺を歩いていく、大分北の方だからか気温が低く、遠く
の海には氷がちらほらと浮かんでいる。

積もった雪の中に生えている木や植物は向こうの大陸の物とは違
うようだ。

役に立ちそうな物は採取しながら進む。

誰も居ない雪の積もった浜辺を、雪を踏みしめながら歩く。

ふと振り返ると私の足跡だけが長く残り、遠くの足跡は既に雪に埋
もれて消えていた。

こちらの大陸にも知性のある生物が発生している可能性はある、居
て欲しいと思いつつ海を横目に歩みを進める。

どれくらい歩いただろうか。岩場を越え、入り江を通り過ぎ、ひた
すら歩き続ける私にクログウエルから念話が届く。

『クレリア、聞こえるか？』

『聞こえているぞ』

『ある程度我は見て回ったが……まだ海沿いを歩いているのか？』

『ああ、歩いている』

『その海沿いに小さき者の住処らしき物があつたぞ』

『確かか？』

『規模は以前見た物より小さいが間違いないだろう。住んでいる者達も似ている姿をしていた』

『ありがとう、行つてみる。場合によつてはしばらく帰らないかもしれない』

『分かった、好きにするがいい……我は新しい魔物の味を確かめるのでな』

早速何か捕まえたのか？取り敢えず海沿いにあるようだから向かつてみよう。

歩くのを止めて空に上がると、遠くに見えた。確かに小さい、規模としては村だろう。

見つからないように近場に降りて歩いて村に近づくと、外で作業をしていた男性が私に気が付く。

「ん？こんな所で……見た事の無い姿しているな……何だお前？」

そう言つた男性は私から見ても見覚えの無い姿だつた。全体としては人だが頭には角が生え肌は青黒く、目は縦に瞳孔が開いていた。服は向こうの大陸と大差は無さそうだな、彼は私を見て警戒しているようだ。

「みんな！何か来やがつた！来てくれ！」

男がそう言つと数人がやつて来たが、私を見ると身構える。私は数人から遠巻きに囲まれる形になつた。

「お前達に危害を加える気は無い、この場所の事を聞きたいんだ」

「おまえみたいによく分からねえ奴に話す事なんかねえ！どつかいけ！村に近づくな！」

そう一人が言つと残りの者も騒ぎ立てる、これは一旦出直すか。

「一度帰る、また来るよ」

「二度と来るな白い奴め！」

肌が白いのが珍しいのか？　そう言えば確かに白い肌の村人は一人も見ていないな。

力づくで入り込むのは気が進まなかった私はじつくりと関わる事を決め。一度村から離れ翌日にまた来ようと考えた。

「……また来たのか」

あれから私は一日一回彼らの元を訪れた。

一か月過ぎた頃から反応が変わり始め、二か月が過ぎた今は警戒されずのため息を吐かれる程度になった。

「言っただろう？　危害を加える気は無いと。私はお前達の事が知りたいだけだ」

そう言うのと村人達が話し合いを始めた。

「……どうする？」

「どうするって言ってもな……」

「確かに何もしてこないけど……」

「……急に暴れるんじゃないかしら？」

「それなら最初から襲い掛かって来たんじゃないやねえか？」

「今も話を聞いているだけで何もしてこない。確かに俺達とは見た目が違うけど話は通じるし……」

「もう二か月よ？　我慢強く毎日会いに来て……小さい子だし……流石に可哀想になって来たわ」

「……分かった。村長に話してくるから待って貰え」

何とかなりそうか？

その後私は質問攻めにされ、村長の預かりとなった。取り敢えず受け入れられたと考えていいだろう。

村長からこの村はクギラと言う漁村だという事も聞いた。

最初は周囲の者から見張るような視線を受けていたが、漁の手伝いをしながら共に暮らし、時間が進むにつれ彼らの警戒は薄れて行った。

そして共に暮らし始めて半年程経つと、警戒される事は無くなった。

その間に彼らから色々な事を聞いた。この村の所属が「バウムルス王国」と言う国である事、彼らが個人の事を「魔人」と呼び、総称を「魔族」と呼ぶ事。

体も少し調べさせて貰った。

その結果、魔人は確実とは言えないが魔物か魔獣から進化した可能性が高い。

一般的な獣から進化した獣人とは違い、強力な魔物や魔獣から進化したと考えられる彼らは全体的に基礎能力が高いように感じた。

「……そして、この村を見つけた訳だ」

「なるほど……この大陸以外にも土地があつて貴女のような者達が住んでいる場所があるんだねえ……」

現在は世話になつている村長の家で村人と共に宴会中だ。その時に私の事を詳しく教えてくれと言われたので別の大陸から来た事を話した。

「最初に話していたらすんなり受け入れていたか？」

私がそう言っていると村長は頭をひねって言う。

「難しかっただろうねえ。あまりにも見た目が違うからね……何を言つても警戒していたと思うよ……？」

「そうか。どちらにしても同じだったか」

そう言った私に、村長は頷いた。

「他の大陸ね……俺達が気にする事じゃねえな」

参加している魔人の男が話す。

「そうだな、クレリアじゃなきや海を越えられないんじや……そいつらが来ることは無いよな」

彼らには私が見た目通りの歳では無い事を教えている。

「そうだな、もし越えられるようになったとしても大分時間がかかるだろう」

「きつとその頃にはこの場にいる奴は誰も残ってないな！」

私の言葉に男の一人がそう言っただけで笑う。そうだな、私以外は生きていないだろう。

「クレリアさんや、ワシは感謝しておるよ」

急に村長が感謝を告げて来る。

「いきなりどうした？」

「この村の魔道具をよくしてくれただけでなく、魔法をよりよく使えるように教えてくれた……貴女を受け入れた自分の判断を褒めてやりたくなる」

「私こそ受け入れてくれて助かった。村長が受け入れると決めなければどうにもならなかったかも知れない」

「ワシがした事はそれ位だがね」

「見た事も無い姿のよそ者を受け入れる判断は難しかっただろう。大半の者なら守りに入り受け入れようとはしなかった筈だ」

「それならば二か月以上も毎日毎日ワシらの村を訪れるのも大変だっただろうに」

「それほど大変では無かった」

そう言うと村長は笑って果実酒を渡してくる、ここでは果実酒は貴重品だ。

私はそれを受け取って一気に飲んだ。

「……他の町へ行くのだろうか？」

果実酒を飲んだ私に村長が尋ねる。

「教えて貰った町に行ってみるつもりだ」

「ここは小さな村だから大事にはならなかった……教えた町は大きい……どうなるか分からないよ……」

「いざとなればどうにでも出来るから心配するな」

そう言うと村長は苦笑して言う。

「ならばもう何も言わないよ、気を付けてな……」

宴会は終わり深夜になった。私は与えられた部屋でクログウエルに念話をつなぐ。

『クログウエル、今いいか？』

『む、寝ようと思っていたのだが』

『すぐ終わる』

『分かった、それで？』

『新しい町に行こうと思う』

『魔人共の町か……』

滞在中に時々クログウエルに念話して大体的話はしてある。

クログウエルは順調に暮らしているようで、ミナとの取引もしっかり出来ていると言っていた。

『貴様の事は心配していない、貴様をどうこう出来る者が居るとは思えないからな。こちらの事は気にせずに行ってくるといい、何かあっても念話があるだろう？』

『確かに、では行ってくる』

そう伝えて念話を切った。後は村人に挨拶して向かうだけだが、気になる事もある。

それは魔法と魔道具があった事だ。

この村には魔道具があり、魔法を使う者も僅かだがいた。

私はこの大陸に初めて来た。と言う事は私が来る前に誰かが魔道具と魔法を伝えたか、魔人が作ったのだろう。

私は誰かが伝えた可能性が高いと考えている。名前まで一緒なのだからそう考えるのが自然だと思う。

取り敢えずその辺りはまた後で考えよう。

問題は次の町の事だ、この村では上手く行ったが次はどうなるだろうか。

いきなり殺しにかかって来ないと良いが、そうになったら滅ぶのは魔族の方だ。

数日後、村人に別れを告げて教えて貰った町へと出発した。

クギラを出て町に向かう、町の名前はニルンと言うらしい。歩く事はせずに飛んでいく、早く見てみたい。

教えて貰った方角にしばらく飛び続けると、遠くに大きな町が見えて来た。

恐らくあれがニルンだな。

さてどうするか。姿を消せば入れるだろうがずっと消えたままでは会話も買物も出来ない、ばれれば侵入者扱いだろうな。

ローブでも着るか？それでも顔を見られたら駄目な気はするが。髪を顔の前に垂らして……いや、それも怪し過ぎるか。

そんな事を考えながら町から十分に距離を取った場所に下りて歩いて向かう。

一応ローブだけは着てみた、堂々と行けば意外と平気かも知れない。

町をつなぐ広い街道らしき道に出て進む。馬車に似た乗り物も行き来しているが、馬ではなく魔物のような生物が引いている。

周囲を進む魔人達の姿は様々だ。髪の色や長さ、瞳の色、角の形と色、肌の色や魔物に近い体の特徴は向こうの大陸の人類にはない。

ちらりと見える牙からすると歯にも差異がありそうだ。

翻訳魔法が無ければ言葉も違ったのだろう。向こうの種族と会った時が大変そうだな、恐らく出会うのはかなり先だと思うが。

ローブを着て深くフードをかぶっているため今は誰も私に気が付いていないようだ、このまま行けばいいが。

そのまま進み続けると町の入り口が見えて来た。しっかりとした防壁に囲まれ、大きな門が開いている。

特に一人一人確認はしていない、これならいけそうだ。

特に止められる事も無く門を抜け、町の中に入る事が出来た。

まずは宿を取るか、そこで私は気が付く。

この国の通貨が無い。

すっかり忘れていた。これはどこかで手持ちの物を売って金を作るしかないな。

「いらっしやいませ」

私は道行く魔人から買い取り店があるかを聞き、やって来た。金を少し取り出して買取を頼む、売れるだろうか？

「……金ですね、少々お待ちください」

俯き気味な私が金塊を出すと店員は色々と確認をして重さを確認して戻ってくる。

「この量ですと十万ウエンですね」

「……何だと？」

思わず呟いてしまった。

「ご不満でしたでしょうか？」

「いや、買い取ってくれ」

「では金額をご確認ください」

「問題無い、ありがとうございます」

「ありがとうございます、またのご利用をお待ちしています」
私は店を出て歩きながら考える、私の前にここに来ている者がいる可能性が大きく上がった。

この硬貨、ウエンと言う名前も同じな上、描かれている模様が違うだけで他はすべて向こうの大陸の人類の硬貨と同じだ。

自然とここまで同じになるとは考えにくい。国の通貨を変更出来る立場、恐らく国の中心に近い人物にこの通貨を知っていた者がいる。

いつ来たかは知らないが今も生きているかは分から無いな、森人だったらまだ生きているかも知れない。

取り敢えず金は出来た、宿を決めてしばらくこの町を見て回ろう。

買取の店は魔人に聞いたが、出来るだけ顔を合わせて話したくは無
い。

私が魔人では無い事がバレるかもしれないからな。
広い町を歩き回り、宿の看板を見つけた私は店の中に入っ
た。

「いらつしやいませ」

「一週間ほど泊まりたいのだが」

「かしこまりました……料金はこちらになります」

「分かった」

提示された料金を支払う。部屋の鍵を受け取り、風呂の時間などの
説明を受けて二階の部屋へ向かう。

部屋に入ると私はローブを脱いでソファに座る。

風呂は大浴場か……入れる訳ないな、一発でばれる。

朝一番に入ろうか、見られたら忘れて貰おう。

翌朝の一番に入ったが運よく誰も来る事は無かった。

浴室にあった硬めのブラシは何に使うか分からなかったが。

私は数日町を見て回っていた。

今日は闘技場に行くつもりだ。ルセリアにもあったが結局見ない
まま離れてしまったからな。

宿を出て闘技場に向かう。魔獣車と言ったか？それに乗って闘技
場前の広場まで移動した。

闘技場の入り口にあった説明では、国が運営する人気の娯楽で、魔
人同士、魔人と魔物、魔物同士などの戦いが行われていると書いて
あった。

重犯罪者の処刑を見せ物にする時もあり、その時の入場券は高値が
付くらしい。

どちらかが降参するか戦闘不能になるまで戦い、勝者には賞金と名
誉が与えられる。

敗者には治療はされるが何も無いようだ。

すべての試合は賭けも行われていて、当たればその時に設定されて

いる倍率で返って来るようだな。

大きな町には規模の差はあっても一か所は闘技場があるらしい。

魔人は戦いが好きなのか。ルセリアの闘技場は知らないが、同じような物だったのかもしれない。

今日は三試合あるようだ。魔人同士と……魔人と魔物、後は魔物同士か。

最初の魔人同士を見てみようか。

金を払い専用の紙のカードを受け取って中に移動する。簡単な石の長椅子が階段状に中央の広場を取り囲んで並んでいる、大きなすり鉢みたいだな。

中段の適当な場所に座って待っていると席は魔人で埋まった。人混み特有のざわつきの中、闘技場の中心に一人の男が現れると静まってくる。

やがて男が大きな声で話し出した。

「ようこそーニルン闘技場へ！本日の第一試合は魔人ジズと魔人バルヌの戦いです！」

魔法で声を大きくしているのだろう、遠くてもよく聞こえる。

今はそれぞれの戦士の紹介のような事を話している、どちらも中堅の戦士で魔法も近接もそこそこ出来るらしい。

説明が終わると二人の男の魔人が広場の両側から現れた。

確か、私から見て左がジズ、右がバルヌだったな。

客達は歓声を上げてそれぞれの戦士を応援している。

戦士はそれぞれ用意された物から選んだ装備で戦うらしい。二人とも軽戦士のような装備でお互いに剣だ、組み合わせも色々考えているのかもしれない。

一進一退の攻防は見ていて面白い。

実力に関係なく真剣な戦いは思わず見入ってしまう何かがある。

戦いは剣技と魔法の両方を駆使した戦いだ、どちらも傷を増やしながらも決定的な攻撃は受けていない。どちらかのスタミナか集中が切れるまでは続くか？

そう思いながら見ていたが、バルヌの動きが僅かに鈍ってきている

……む。

大きな歓声が起こる。バルヌの動きが遅れた瞬間にその太腿をジズが薙ぐ、深くは無いが厳しい状態だな。

私は痛みを知らないが冒険者達などに聞いている「痛みは動きを阻害する」と。

スタミナ切れに太腿の傷、逆転出来るだろうか。

ズボンが血に濡れて行くバルヌは更に動きが悪くなる、もう降参した方がいいと思うが。

動きが鈍っても剣と魔法を攻撃に、防御に上手く使って粘るバルヌ。

上手くジズの攻撃の隙が大きくなるようにしているようだ。

「これはいいのか？」

思わず出した私の声は、特大の歓声にかき消された。

バルヌに誘導されたジズはバルヌの脇腹を捕らえたが……バルヌはジズの首を突き刺していた。

バルヌが剣を引き抜くとジズは崩れ落ち地面に血を広げていく。

その一方でバルヌは魔法で治療を開始していた。

あれは間違いなく死んだのではないか？私は隣にいる魔人に姿を晒さないように聞いてみた。

「すまない、闘技場は初めてなのだが……殺していいのか？」

「ん？あんた今まで見た事無いのか？珍しいな……どちらかが降参するか戦闘不能になるまで戦うってルールは知ってるよな？」

「知っている」

「戦闘不能は死亡も含まれるんだよ、死んだら戦えないだろ？」

「なるほど。ありがとう」

「おう、あんたも楽しんでいきな」

そう言っ隣隣の魔人は席を立った……そうか、戦闘不能は気絶などだと思っていたが、死亡も含まれるな。

確かにさっきの魔人が言った通り、死んだら戦闘不能だ。

金と名誉を求めて死ぬか。合意の上なら覚悟はしていただろう、退場するバルヌと職員らしき者に引きずられていくジズの死体。

地面に赤い筋を引きながら連れていかれるのを見て「魔人も血は赤いのか」と思いつつ闘技場を後にした。

周囲の客は興奮が冷めていないようで、いたるところで先程の戦いについての話をしていた。

私も戦いは嫌いでは無いが……。

私は友人が出ていたら止めるだろうか？それとも友人の選んだ道だと受け入れるか？

試合で死んだら生き返らせて文句を言うかもな、私は闘技場正面の広場でそう考えた。

さて、残り二試合ある訳だがどうしようか。魔人と魔物はそれほど楽しくなさそうだし魔物同士もあまり興味が無い……やめておくか。

闘技場を離れた私は様々な店が立ち並ぶ通りにやって来た。

歩きながら店の前の品物を眺めていると、店の前で二人の魔人が何かやっている。

「ちよつといいか？……それは何をやっているんだ？」

「ん？ああ……これはオセロと言う遊戯だよ。この白と黒の……」

私が聞くとそのまま説明に入る赤い髪の魔人男性。

これは決まった範囲に交互に色違いのコインを置いて行き、挟むと自分の色に変わる。

最終的に自分の色が多く残った方が勝ちと言う物らしい。

「面白そうだな、これは売っているのか？」

「この店で売ってるよ。気に入ってくれたなら買ってくれれば嬉しいな」

そう聞くともう一人の青い髪の魔人男性が言ってくる、一つ買っておこう。

「買おう」

「ありがとう……あの……金額がだいぶ多いのだけど？」

「面白そうな物を作ってくれた礼だ」

「え？……ちよつとお客さん？」

「じゃあな」

多く金を渡し商品を受け取って人混みへ紛れ込む。

これからより面白い物を作る事に期待して少しだが多く渡した。

換金出来る物は山ほどマジックボックスに入っている、換金する手間はかかるが実質金の問題は無いのと同じだ。

そうだ。こつちにはモー乳は無いのだろうか？……探さなくては。

食料品店を回っていると、それらしい瓶入りの白い飲み物があつた。

一旦転移で戻り大量に買っておこうかとも思ったが、これなら飲めるだろうか。

ラキ乳か、買ってみよう。

私はラキ乳と名の付いた飲み物を一本買って店を出る。

そして買ったばかりのラキ乳に口を付けた。

……モー乳に似てはいる。多少癖があるがまた別な味わいがあるな。

うん、美味しい。

これは買いだな、私は店に戻りラキ乳を二十本購入した。

用意してくれた店員は「ここまでまとめて買う人は珍しい」と言つて笑っていた。

こちらにいる間はしばらくこのラキ乳を飲もう、モー乳を切らす前に気が付いてよかった。

よし、好みに合った飲み物も手に入れたし食事をしに行こう。

美味そうな店を探そう。

私は近場で見つけた食堂に入った。

内装は質素だが客の出入りは多かった、これならば不味くは無いと思う。

「焼肉定食お待ちー!」

トレイに一式揃った定食が運ばれてくる。タレが絡んだ薄切りの肉と野菜、スープと皿に白いコヌと言う粒が山盛りになっている。料金の割に量があるな。特にコヌが山盛りだ、私はコヌを食べてみる。

味はほぼ無いが弾力がある……これは他の食べ物と一緒に食べた方が良いな。

薄切り肉を口に入れると甘辛い味が広がる。

これはコヌと合う……私は黙々と食事を勧め、全て食べ終えた。

「ありがとうございますー!」

料理を食べ終わり店を出た私は最初にお金を払って買った店に行き、また少しの金塊を売り金を補充してから宿に帰った。

私は宿の自室に戻ると考えた、風呂に自由に入れる宿を探そう。

「ちよつといいかな?」

宿の職員に声をかける。

「何でしようお客様?」

「部屋に風呂が付いている部屋はあるか?」

「こちらの宿にはありませんが、他の宿にはついている所もありますよ」

「そうか。すまないがそちらに行こうと思う、明日で宿泊は終わりで頼む」

「かしこまりました、またお越しくださいね」

翌日。今までの宿を出て部屋に風呂のある宿へと移った、値段はそれなりに高くなったが風呂が優先だ。

宿を移って数か月は経ったと思う。

毎日色々な料理店で食事をして店を見て回った。私が魔人で無い

事はその間全くバレる事無く、問題無く過ごす事が出来ていた。

いつもローブを着ている変な人物、程度は思われていそうだが。

私は闘技場に試合をよく見に行くようになった。自分でもここまで見えるようになるとは思って無かったが、一対一の命懸けの真剣勝負は見ていて面白い。

何回も見ているうちに必ずしも殺す訳では無い事も分かった、倒れて動かなくなれば生きていても戦闘不能で負けになるし、降参する者もいた。

現在私は劇を見て出て来た所だ。

魔人の戦士が魔族の王女と駆け落ちし、最後に王女の父親に戦士が殺され王女が後を追う。悲劇と言えいいのか？

そんな話だったのだが、何故王女が自殺したのか全く理解出来なかった。

大勢の魔人が行き交う大通りを進み、部屋に戻る。

そしてすぐに部屋に付いている風呂に入った。

宿の値段がそれなりに高いので近い内にまた換金をしないと。

今度は多めに換金しておこう。

一人用の小さい浴槽だが、私は体が小さいのでそこまで狭くは感じない。

だがやはり広い風呂の方が良い。

備え付けの石鹸もそこまで悪い物では無かったが、私が作った物に比べるとどうしても劣るので自分の物を使っている。

私はこの国の事を考える。

現在滞在している町が所属している国の名前はバウムルスト王国というようだ。

意外とバレーずに暮らせていたからすっかり忘れていたが、他の国もあるのだろうか。

誰に聞いても分かるだろうがわざわざ聞くとな何故知らないのか怪しまれそうだ、考えすぎかもしれないが。

本屋にも行ったがそれらしい本は見なかったが、もう一度しっかり探してみるか。

明日はまず金の換金をして本屋だな、そう決めて風呂を楽しんだ。

いつもの換金店にやって来た私は、いつものように金塊の買取を頼む。

「いつもありがとうございます。現在、少々お時間をいただきますがよろしいですか？」

「構わない」

「ではこちらのお席でお待ちください」

店内の椅子に座って呼ばれるのを待つ。

しばらく特にやる事も無いので店内を見て待っているとようやく私の番号が呼ばれた、いつもより長く待ったな。

「こちらが換金額です。どうぞご確認ください」

「……確かにあるな。ありがとうございます、また来るよ」

「またのご来店をお待ちしております」

換金店を出て少し歩くと同じ武装をした男の魔人二人が私の前を塞いだ。

「こんにちは。我々はこの町の治安部隊の者ですが……フードの方、少々お話を聞かせていただけますか？」

「私か？」

「失礼、女性の方でしたか。あくまでもお話のみです、詰め所の方に同行して頂きたいのですが……良いでしょうか？」

声で性別は分かるか。対応は丁寧だが、本当にただ話を聞きたいだけか？私の後ろにもう一人いるのは念の為か。

礼儀正しく話しかけて来た者を無下にするのもな、バレたらバレたでそろそろ他の町に移動すればいいか。

「分かった、案内してくれ」

「ありがとうございます」

魔人の一人がそう言うのと私は三人に連れられて治安部隊の詰め所に案内された。

連れてこられた部屋は普通の応接室のような場所だった。丁寧に
対応しておいて牢屋の可能性も考えていたが考え過ぎだったようだ。
「こちらをどうぞ……さて、話を聞かせていただきます。私は治安
部隊の小隊長を務めているザニメアと申します」

「クレリア・アーティアだ」

私が名乗るとソファに座り自分の紅茶をいれていた彼が一瞬止ま
るが、すぐに元に戻る。

「それで？なぜ私が連れてこられたんだ？」

「数か月前なのですが、他の町で金塊の盗難がありまして……そこ
にローブを着た人物が頻繁に金塊を換金していると報告があった物
で……」

「ああ……それは怪しむな。ただ私は数か月前はクギラと言う小さ
な漁村にいたから関係ないと思うぞ？」

「なるほど……申し訳ないがフードを取って頂けますか？一応目撃
者の証言と違う事をはっきりさせておきたいので」

やはりこうなるな、声が漏れないように外部との音は遮断しておこ
う。

「取っても構わないがいきなり攻撃しないでくれよ？」

「ええと……どういう事でしょうか？」

戸惑う彼を見ながら私はローブを脱ぐ。

「なっ?!魔人では無い!?!」

驚きの声を上げ腰を浮かすザニメア、剣に手をかけているのは仕方
ないか。

「私はこの大陸の外から来た他の種族だよ」

「大陸……他の種族……?」

「まあ聞いてくれ」

こうして私は彼に説明した。他の大陸、そこに住む人々、私が新た
な大陸を目指してやって来た事を。

彼は脱力したようにソファに寄りかかり頭を押さえて言う。

「はあ……俺の手に負える問題じゃないぞ……」

話を聞いた彼は溜息を吐いた、疲れたような表情をしている。

「魔族の国は他にもあるのか？よければ教えて欲しい」

「……分かった」

そうやって彼は説明を始める。

「この大陸には現在三つの国がある、一つはリベザルク・ルテリツジ王が治めるここ、北のバウムルスト王国だ、首都はバウムと言う。もう一つはエルヴァン・サノワ王が治める南東のヴァイル王国、首都はリフラムだ。……最後の一つは女帝カミラ・アーティアが治める南西のアーティア帝国で首都はリリティアだ……」

そうか、私が名乗った時彼が一瞬固まったのはこのせいだったか。聞き覚えのある名前が聞こえたぞ。

「……どうした？」

私が黙り込んだのを見て声をかけてくるザニメア。

「ありがとう、よく分かったよ。それでもう私は帰っていいのか？」
そう言うのと彼は考え、答える。

「申し訳ないが難しいと思う。どちらにしても上には報告しないといけない……他の大陸に我々以外の種族、放置など出来る訳がない。詰め所の部屋に住んでもらって対応を待つて貰う事になると思う。……クレリアが悪いとは思わないが、放置はできない……すまないが……」

分かっていった事なので問題無い。

「分かった、大人しく待っている。もし危害を加えられそうになったら返り討ちにするが構わないな？」

「あー……魔人はみんな強いからな……俺がそんな事はさせないから安心してくれ」

真剣に言うザニメア、彼は悪い男ではなさそうだ。

「取り敢えず保護と言う形で住んでもらうから、姿を見られないようにしてくれよ？大陸や種族の事をむやみに広げるのはまずいと思うから」

詰め所の一室、私が住む事になる部屋でザニメアが言う。

「分かっている、大人しくしているよ」

「食事は持つてくるから部屋から出ないように、トイレはそこにあるから」

入り口とは別の扉の方を向いて彼は言う。

「方針が決まるまでどれくらいかかる？」

「すぐに報告書は出すけど……上次第だから俺には何とも言えないかな」

「そうか、ではのんびり待つか」

「君は子供なのに大人びているね」

「お前も若いのに小隊長とは中々だな」

そう言うのと彼は苦笑して言う。

「俺はもう四十過ぎだよ……いい歳さ」

「大分若く見えるが」

「魔人は寿命は百年前後だけど見た目はほとんど変わらないんだ、それに年齢による衰えがほとんど無い……病気にはなるけどね」

「魔族はそう言った特徴があるのか、なかなか興味深いな」

「好戦的な者も多いから気を付けてくれよ？」

「問題無い。ああ、それと私は長命種でな？」

「長命種……？」

「寿命が長いんだ。私はこう見えて三百歳をこえている」

「……騙そうとしてないよな？」

彼は疑惑の目を向けて来る。

「信じないならそれでもいい。現実が変わらないからな」

「分かった……一応信じる。もう行くが何かあったら俺が来た時に言ってくれ」

本当に信じたかは分からないが、彼はそう言うのと部屋を出て行く。部屋には私だけになる、私はソファに座るとラキ乳を取り出して飲

んだ。

後はどうなるか待つだけだな。

『クレリア？聞こえる？』

ラキ乳を飲みながら考えているとミナからの念話が来る。

『聞こえている、どうした？』

『私達の事忘れないように……というのは冗談だけど。そっちの大陸では何か見つかった？』

そう言えば魔族の事を教えて無いな。

『そうだな、今の所三つの国と魔族と言う種族を見つけたくらいだな』

『……は？……え？……新しい種族……？国がある？』

『そちらの国と変わらない程に発展しているぞ』

すぐに返事が返ってこないな、どうしたんだ？

『おい？どうした？何かあったか？』

『今あったわよ！新しい大陸に新しい種族の国！私達と同じ程に発展している！！大事件なんだけどー！』

大分慌てているようだ。そこまで驚く事か？

広い世界だしまだ会っていない何かがいてもおかしくはないだろうに。

『落ち着け』

『……もう！貴女は全く……』

『騒いでも何も変わらないぞ』

『はあ……どうしようかしら……』

『私だから来れたんだ。まだそちらの人類に広い海を越える方法は無いだろう？空を飛んだとしても速度を出すか長い時間飛べないとこちらの大陸まで来る事は出来ないからな』

『その……魔族だったかしら？……まだこちらに来る方法は持っていないのよね？』

『正体がばれないように町に紛れ込んで暮らしていたただけだからはつきりとは分からないが、恐らくまだ無理だと思う』

『そう……ん？正体がばれないように？』

『見た目がだいぶ違ってな。姿を見られると魔人では無い事がばれてしまう』

『……魔族について分かっている事、出来れば全部教えてくれない？』

『いいぞ。ではまず……』

私は分かっている事、個体は魔人と呼ぶ事、見た目、寿命や年齢による衰えが無い事や病気にはなる事、好戦的な性格の者が多い事、その実力が他の種族に比べて高い事などを教えた。

『……いつか……いつか出会った時に戦争になると思う？』

私の話を聞いた後ミナが聞いてくる、好戦的と聞いて心配になったのか？

『そちらの大陸にいる種族達と魔族が出会うのは恐らくまだ先だが、お互いがどれだけ繁栄しているかにもよる。先に大陸に渡る方法を確立した方が優勢になる筈だ、お互いどう判断するかは実際に会ってみない事には分からないな』

『……きつとルーテシアの生きているうちに起こるわよね』

『どうだろうな』

『どうしようかしら。私はクレリアの事を知っているから信じるけど……こんな事言ってもきつと誰も信じないわ……』

『どうするかは任せる、私としてはそこまで気にしなくてもいいと思うが。備えるのはいいが、いつ実現するかも分からない事に必要以上時間や労力を使うのは無駄だと思うぞ？』

『そうね……取り合えずケインと、特にルーテシアにはしっかり教えておかないと……また何か分かったら教えてくれる？』

『いいぞ、忘れていなければだが』

『……たまにこつちから連絡するわ』

彼女がそう言うのと念話が切れた。

それから一か月後。私はザメニアから首都バウムに行って説明を

して欲しいと頼み込まれ、了承した。

私を首都バウムに送るに当たってザメニアと他の数名と共に向かう事になり、魔車でいくつかの町に立ち寄りながら移動する事になった。

道中は特に問題無く進み、やがて首都バウムに到着した。

数日滞在した後送ってくれた皆は帰って行った。なるほど、私が帰る事は無いようだ。

そして現在、私はバウムルスト王城の王国会議場だったか？その控室にいる。

部屋の出入り口には王国兵らしき者が二名、扉を塞ぐように立っている。

私はローブを着て姿を隠している状態だ。兵士は詳しく聞いていないのかローブ姿の私に戸惑いを覚えているようだが、それでも忠実に職務を全うするべく直立している。

それなりの時間を待っていると部屋の扉が開き、身なりのよい男が現れた。

男は私を見て言う。

「準備が整った、ついてこい」

「わかった」

「わかっただと……？かしこまりましたと言え。会議では態度と言葉使いに気を付けろ」

男は鼻を鳴らし注意してくる。

「早くつれて行け」

「貴様……平民の分際で舐めた態度を……」

そう言つて怒りを表す男だが私は気にしない、そんな事より今こいつは平民と言ったな。

「今私を平民と言ったが、そういった差があるのか？」

魔道具や魔法、通貨まで似ているのなら、貴族の制度が同じように作られていても驚きはしないな。

「そうであつた……貴様は蛮族だつたな……さつきとついでこい！
時間を取らせおつて！」

そう言つて部屋を出て行く男、私はそれについて行く。

「ローブはここで脱いで行け」

ザメニアに姿を隠すように頼み込まれて隠していたが、もう必要は無いが。

私はローブを脱いでついて行く、部屋の兵士が動揺するのが分かる。

そのままついて行き、大きな扉に着くと扉が開いていく。

中は中央が空いており左右に国の要人らしき魔人達が座り、並んでいる。

正面奥は数段高くなつていて王座らしき場所に男が座っているな。

その男は頭の横から前に突き出す太い角を生やした大きな体格の男だ。

見た目の感想としては……傲慢そうだな。

「角が無いぞ……」

「……恐ろしいほどに白い肌だな」

「角と肌はともかく……凄まじい美しさだな」

様々な声が混じる中を進む。中央に着くと迎えに来た男が私の後ろに少し下がり、場内に響く声で私に言う。

「跪け！」

「断る」

場内が騒めき始める。

「私はお前達に頼まれて来てやつたんだ、まずは貴様達が跪け」

「無礼者が！……ここで処刑してもよいのだぞ！」

誰かの声がする。こういった立場の者とは仲良くなるのは難しい、私が基本的に無礼で跪いたり敬語を使つたりしないから反感を買う。

「私に言う事を聞かせたいのなら力づくで聞かせてみる」

「衛兵！……やつを捕らえよ！」

すぐに衛兵に囲まれたが、そこで声がした。

「……静まれお前達」

王座と思われる場所にいる男がそう言うのと全員が黙る。
なかなか羨が行き届いている。

「何のために呼んだと思ってる……話を聞く前に殺してどうすんだ？」

周囲の者を見渡し言う。

「……申し訳ございません、王よ」

誰かの返事が聞こえる、王と呼ばれた男は私に目を移した。
すると衛兵達が引いて行く。

「本当に角も無く肌も白いな……しかし……」

席を立ち近づいてくる王と呼ばれた男……私の顔に手を伸ばして
来たのを障壁ではじく。

「つ?!いいいな……俺はリベザルク・ルテリツジだ。お前氣に入った
ぞ、俺の物になれ」

何を言ってるんだこいつ。

「お前に興味など無い。話を聞くと行って呼びつけておいていきな
り自分の物になれとは、これが王でこの国は大丈夫なのか？」

そう言うのと周囲から怒りの声が上がった。王……リザベルクだっ
たか?こいつも多少怒りを感じているかな?

「俺が優しくしている間に言う事を聞いた方がいいぞ……?なあ、
クレリア・アーティア?」

私の名を聞いた途端部屋が大きく騒めいた。

「アーティアですと!?!」

「アーティア帝国の縁者か!?!」

「あの国のトップの女も確か角が無く白かった!見た事がある!」

「これはいいですな……捕らえればあの国に有利に立てるかもしれ
ませんぞ」

「話など捕らえてから無理やり聞けばよい!」

「あの女の身内なら捕らえるべきですのう」

突然騒がしくなる魔人達。こいつ等はアーティア帝国との関係を
考えているのか。

これは完全に敵対したか?私は笑みを浮かべるリザベルクを見て

言う。

「関係しているかはまだ確認していない。それと、一応とは言え王なら配下の躰はしておけ、お前でもそれ位は出来るだろう?……リザベルク」

そう言うのと彼は魔力をまとい殴りつけて来る。

「俺はリザベルクだ!!」

「そうだったな」

私はそう言いながら彼の拳を手で受け止める。

まさかいきなり殴りかかって来るとは、名前を間違えたのは悪いと思っているが。

「……!?!」

「すまなかつた。名前を間違えてしまうとは、もう大丈夫だ。リザ、リザベルク」

すっかり謝ってから腹を優しく殴ると彼は吹き飛んで行った。

王に手を上げたらもう話し合いは難しいだろうな。

「王!?!」

「兵を集めろ!!逃がすな!!」

「殺すな!!生かして捕まえろ!!」

周囲の者が叫んでいるが、手は出してこないようだ。

「はっ!やるじゃねえか!ますます気に入ったぜ!!」

途中で体勢を立て直して、笑いながら突っ込んでくるリザベルク。叩きつけをギリギリでかわすと床を叩き割り、周囲の者を巻き込み階下へ落下する。

落下中に私に攻撃を仕掛けて来る彼は楽しそうだ。好戦的な者が多いと言うのは間違いないようだな。

「向こうの奴らもこれ位やれんのか!?!」

「これ位ならやれる奴はいるだろうな」

王の攻撃を受け流しながら階下に到着する。私は彼の攻撃をかわしながら会話を続けていた。

周囲の者は遠巻きに私達の戦いを見ているが、驚いているようだな。

私が弱いと思っていたのか？

「死ぬんじやねえぞ！」

彼は炎を掌に発生させ叩きつける。私が後ろに飛ぶと地面から大爆発が起きた。

私は爆風と熱を障壁で遮断する、場所を気にしないと城が吹き飛ばすぞ。

そう思っていると爆風が消える前に彼が飛び込んで来る。

「おいおい。無傷とは……俺が甘く見てたみたいだな！」

「そろそろ帰りたいのだが」

彼が手をすくい上げると炎が押し寄せて来る、私はそれをかき消す。

「帰りたいのなら俺を倒してからにしろ！」

「分かった」

「!？」

私はそう答えると彼が反応出来ない速さで近づき、手刀で腹を貫いた。

「ぐっ?! まだだ！」

そしてその直後彼の体に雷を通す。

「があああああああああ!?!」

彼は絶叫を上げて白目を剥く。

私は腕を引き抜いて距離を取り、脱出しようとした……だが。

……驚いたな。

「どこ行く気だ……? まだ終わってねえぞ……」

「その状態で動けるのか、少し甘く見ていたか」

振り向くと彼は腹に穴を開け、全身から薄く煙を吹きながらも立っているリベザルクがいた。

「俺はこの国の王だ……負ける訳には行かねえんだよ！」

最初は悪印象しかなかったが、ふむ。

「そうか、ならばもっと強くなれ。もしも次に会う事があれば、また戦おう」

彼は私を睨みつけながらよろめく体を必死に維持しているように

見えた。

「その言葉忘れんなよ？……ごほっ！お前がこんなにやる奴だったなんてな……さっさと行きやがれ……」

「すぐに治療しろよ」

私はそう言ってローブを纏い、戦闘で開いた穴から外へ飛び立った。

王城での戦闘は知れ渡っているようで、地上では大騒ぎになっている。

この国は来るのは控えよう。次は気になっていたアーティア帝国に行こう。

バウムルスト王国を抜け出した私は南西に飛ぶ。しかしどのあたりまで行けばアーティア帝国の領土なのかが分からない。

ある程度の距離を移動し、いくつかの町が過ぎた。

流石にそろそろアーティア帝国だろうか？次に大きな町を見かけたら立ち寄って話を聞いてみよう。

そう考えながら飛んでいると進行方向のやや左側に町が見えて来た。

それなりに大きそうな町だ、これで現在どの国に居るかが分かるな。

町から少し遠い場所に下りて徒歩で町へと向かう。

しばらく進んでいると、訓練場のような場所で一人、戦闘訓練のような事をしている魔人を見つけた。

見た目から歳は……そうだ、見た目はほとんど変わらないんだっとな。

一応見た感じでは十代前半だろうか？

しばらく見ていたが、素質はありそうなのだが訓練方法が悪すぎる。

あれでは体を壊してしまうだろう、普通の生活にも問題が出てしまう可能性が高い。

ただ非効率だけなら気にしないがあれは駄目だ、私は彼女の方へ歩き出した。

「おい、その少女」

「は？は？？」

息を切らして振り向く彼女。

濃い紫の短髪で、160cmほどの身長の大人数しそうな見た目の少女だ。

だがその瞳は強い力を放っているように感じる、これは予想以上に

いいかも知れない。

「その訓練はやめろ。体を壊す可能性がある上に効果が少ない」

「そんなはずはありません！確かに強くなっています」

「少しは効果があるからそうだろうな。だが無駄が多い上に危険だ」

「私の両親が教えてくれた訓練方法です！間違っている訳がないですよ！貴女はまだお子様ですから分からないのですよ！」

親が教えた？こんな訓練をか？

「ではこうしよう。一週間だけ私の訓練を受けてくれないか？それでだめならしつかりと謝罪するし何なら金も払おう」

ただでさえ能力の高い魔人。更に彼女ならばしつかりと訓練すれば一週間で効果ははつきりと出るはずだ。

「ええ!?お金はいらぬですよ！」

「どうしても嫌なら無理には言わない。だが素質がありそうなお前が訓練のせいで駄目になるのは出来れば防ぎたい」

「……そこまで言うのなら、一週間だけですよ？」

彼女は悩んだ末にそう言った。

「お前の名前は？」

「私はシシー・エツフェルです！貴女は？」

「私はクレリア……」

アーティアはやめた方がいいかもな。

「どうしました？」

「いや、私はクレリアだ。よろしくな」

「よろしくね？クレリアちゃん！」

彼女は眩しい笑顔を見せながら言った。

話を聞くと彼女はアーティア帝国の領土である近くの町、イロネクに住んでいるらしい。

そしてその町で猟兵ギルドに所属しながら、時間がある時はここで

訓練しているという。

獵兵ギルドについて聞くと、向こうで言う冒険者ギルドのような物だった。

私はイロネクに宿を取り、毎日決まった時間に一週間だけ訓練をする事になった。

「よし、いったん休憩だ」

「ぶはー！」

彼女は声を上げてその場に倒れる。今は基礎訓練と体幹訓練を両立した訓練をしている。

「いきなり止まるな。立って体をほぐせ」

「分かりました！」

彼女は体をほぐし始める、私はそれを見ながらシシーに話しかけた。

「フードを被った怪しい私の言う事を聞いてよく頑張るな」

そう言うのと彼女は体をほぐしながら真剣な顔で言う。

「そういえば怪しいですね……」

「今更何を言っている」

「いえ、訓練方法を駄目だと言われた事に気を取られて気にしていませんでした」

「そうか、しかしお前はよく素直に話を聞いて頑張っている。適当にやって駄目だったと言う事も出来るだろうに」

「貴女が教えると言って私はそれを受けたの。一週間だけだけど私は生徒、貴女は先生……それにしっかりとやりもしないで貴女の方法が悪いだなんて言えないから」

本当に効果が無いと私に分からせるにはやれるだけやっていなければ駄目だと考えているのか？真面目な子だな。

「やってよかったと思わせよう。よし、次だ」

「はー！」

二日目。前日と同じくいつもの基礎を私の回復魔法を使いながらみっちり行う。彼女は常に限界の僅かに上を要求され、苦しいはずだが一度も弱音を吐かなかった。

三日目に彼女は夢を語ってくれた。アーテシア帝国の帝国近衛兵になり、いつかは帝国近衛兵筆頭になりたいのだと言った。

女帝であるカミラ・アーテシアは自国民に尊敬され愛されている、自分はその方に仕えたいと興奮気味に語った。

「両親はその夢をどう思っているんだ？」

休憩中に話を聞いてみた。

「最初は反対していたんですけど途中から何も言わなくなりました。訓練を覚えてくれたのもう平気ですよ！」

そう言っただけは笑った。

四日目、彼女は何故か元気が無かった。

「シシー、どうした。いつもの元気が無いぞ？」

私は休憩中に声をかけた、やる事はやっているのだが顔が暗く声に元気が無い、明らかにおかしいと分かる。

「……体が軽いです。猟兵ギルドの討伐依頼も……今までが嘘のように相手が弱く感じるの」

彼女はそう言っただけ、効果を感じているからこそ暗いのか。

私の訓練で大きな効果があるという事は彼女の両親が効果の無い訓練方法を教えていたという事になるからな。

まだ四日だが、私が魔法を使い訓練すれば短い時間でも効果は出る。

特に彼女は伸びが良い、私の見立ては間違っていないかった。

「まだ三日ある。それから答えは聞く、さあ次の訓練だ」

「うん……」

五日目、彼女は少し元気を取り戻していた。いつもの様に訓練を繰り返してしつかりと効果を感じているようだ。

もう彼女は分かっているだろう。何らかの理由で彼女の両親は効果が無い訓練方法を教えたのだと。

彼女の話しぶりからすると両親とは特に不仲な訳では無いはずだ。

むしろ深く想われている印象を受けた。

六日目、彼女は四日目よりも沈んでいた。聞いてみると両親に訓練の事を聞き喧嘩になったようだ。

「もう猟兵ギルドも帝国近衛兵になるのもやめて他の事をして欲しいって……でも、もうはつきりと分かる……凄く実力が上がってる……今までやって来た事は、あの訓練方法は嘘だったって……分かってしまった」

「明日訓練が終わったら私もお前の家に行く。お前の両親と話がしてみたい」

「え……？」

「さて次だ！早くしろ！」

「あ……うん」

呆けた顔のままそれでも訓練を始めるシシー。私の気まぐれではあるがついにて何とかしてみよう。

七日目の訓練が終わり、私は彼女の家に案内され両親に紹介された。

彼女の両親は私を見て微妙な表情をしていた。

シシーを退席させて話し合ったが、両親は危険な猟兵ギルドでの仕事も帝国近衛兵もやって欲しくは無いらしく、当初は反対していたという。

そして彼女が本当に猟兵ギルドに入ってしまったため、危険な依頼を受けるランクに上がる前に嘘の訓練方法を教えて才能が無いと思わせ、諦めさせようとしたらしい。

しかしいつまでも諦めず嘘の訓練を続ける娘を見てどうしようかと悩んでいた。そこに現れた私が教え始め、実力が目に見えて上がったのでなりふり構わずやめさせようとして喧嘩になったという事らしい。

私はあの嘘の訓練をずっと続けていたら体を壊し、取り返しがつか

ない事になっていたかもしれない事を理解させた。

そしてあの子は恐らく夢をあきらめる事は無いと言う事、親である二人が子の努力を無駄にしている事、今までの彼女の訓練の様子などを話して聞かせた。

最終的にシシーは両親が今までずっと心から心配をしていた事を知り、両親は彼女の夢への決して諦める事の無い心を知った。

そして両親は嘘をついた事と、そのせいで体を壊す可能性があった事を話して謝り、娘の夢の応援をする事を約束した。

そして彼女も心配をかけていた事を謝り、そこまで思ってくれている事を感謝した。

「これからはしっかりと訓練を考えろ。分からなければ猟兵ギルドの者にでも聞け」

私がいなくても彼女がギルドの誰かに訓練の事を聞けば、どうにかなっていた気がする。

私は話が付いたのを確認して席を立つ。

今日で約束した最後の日だ、このまま私は首都リリティアへ向かう。

「クレリアちゃん、もっと私に教えて下さい！」

「悪いが私は向かう所がある。他に何をやるのも自由だが、私が教えた基礎は怠るなよ」

「そうですか……貴女に教わった事は忘れずに続けます。いつかまた会いましょうね？」

寂しそうなシシーに私は忘れていた事を聞いた。

「また会えたらいいな。最後に……首都リリティアの場所を教えてください」

私は首都リリティアの場所を教えて貰い、シシーと両親に見送られてイロネクの町を後にした。

イロネクを後にした私は首都リリティアに向かう。

場所は分かったのですがすぐに着くだろう。少し寄り道をしたが女帝カミラが私の娘なのか確認しておきたい。

見えた、遠目から見てもかなり広い都市だ。

城もはつきりと見えるな、私はいつもの様に遠くに降りてから徒歩で都市に向かう。

問題無く都市へと入る事が出来た私は、周囲を観察しながら進む。

魔人達が広い大通りを行き交い、売り子の声が飛び交っている。

視線を上げると、遠くに女帝が住む城が見える。

いくつか見た他の魔人の町よりかなり活気があるように感じるな。

まずは宿を取ろうと場所を聞き、そこに向かう途中も街や魔人達の様子を見た。

途中に寄った町といい、アーティア帝国の魔人は明るいいつか、あまり生活に不満を持っていないように感じる。

ウルグラードも似たような感じではあったが、あちらはあの都市だけだった。

アーティア帝国は帝国全体がこうなのだろうか？

女帝が私の娘だとしたらこの分野ではもう私を超えているな。

私ではここまでの事は出来ないだろう。いや、私は可能でもここまではやらないかも知れない。

宿についた私は、料金を払う時にバウムルスト硬貨を確認された。

それぞれの国の硬貨のデザインが違うようだ。

以前泊まったイロネクの町では確認されなかった事を話すと、発行した国が違っても使う事は出来るようで、わざわざ確認しない所もあるそうだ。

私はアーティア帝国の硬貨を見せて貰ったが、そこに描かれている姿はどう見てもカミラには見えなかった。

女帝が私の娘である可能性は高そうだ。

宿で城への行き方を聞いた私は魔車で城へ向かった。

城は遠くから見ても存在感を放っていたが、入り口まで来るとやはり大きい。

城門にいる兵士に女帝に会う事は出来るか聞くと、不可能では無いがただ会いたいと言う理由では難しいようだ。

相応の理由か功績が必要だと言う。

この国では自由に女帝に意見を出す事が出来るが、彼女まで意見を届かせるには審査を通過する必要があるらしい。

彼女まで意見が届き、有用であると判断されれば褒賞が与えられたり、場合によっては側近などに誘われる事もあるらしい。

なるほどな、優秀な者は出来るだけ取り入れるのか。

危険な人物だったらどうするのかと聞くと、人間性も大きな判断基準であると説明された。

どんなに優秀でも危険な思想を持っていたり、他者を見下したりといった事をする者、またはその傾向がある者は要職には就けない……という事を大々的に布告していると言う。

更の場合によっては国外追放、処刑なども容赦なく執行される。

国民達には優しいが害を与えるなら容赦はしないのがこの帝国の女帝であると熱く語ってくれた。

少なくとも国民からの人気は高そうだ。

それを聞くと私はその場を去ったが、城に近づいた時に感じた気配で分かった。

間違いなく私の娘だ。

いつの間にか女帝になっているとは。はつきりと分かったからには名前を伝えるか念話で呼べば入れるだろうが……ふと考えが浮かぶ。

私だと知らない状態の娘と戦って実力を見てみたい。

あの子とはよく訓練したが、相手が私だと魔物の時のような苛烈さが足りなかったからな。

今の彼女の力を確認しておこう、外敵に対する対応も見てみたい。そうと決まれば準備だ。

まずはバレないように気配と声を変えよう。
後は彼女に見せていない女神重装を着て行けば正体不明な襲撃者の完成だ。

出来るだけ周囲に被害が出ないようにだけ気を付けよう。

その日の深夜、私は城に忍び込みカミラの寝室に向かう。
寝室に入ると広い部屋に質素だが質の良い家具が並んでいた。

私は昔の彼女が気が付くかどうかの気配を出してベッドに近づくと私の手足と頭が動かなくなる。

「……すぐには殺さん、色々吐いてもらおうか……ラフィー！ 賊だ！」

カミラが起き上がり言う。

これぐらいは気が付かなくては話にならない、あの頃から成長していない事になってしまう。

「よく気が付いたな」

「その程度の気配隠蔽で誤魔化せると思うな。楽には殺さんぞ……」

そうやって私を睨む彼女の姿は最後に会った日のままだ。

「……陛下」

音もなく部屋に一人の女性魔人が入ってくる。その魔人女性はカミラを守るのではなく私を逃がさないような位置取りをした。

「ラフィー、逃がすなよ」

ラフィーと呼ばれた魔人は灰色の瞳をした女性だった。

背は高く、側頭部から後頭部側にねじれた白い角が一对生えており、灰色の髪をポニーテールにして茶色い肌をしている。

「はい、他の者も既に配置についております」

「ここで戦うと城が壊れるぞ？」

「お前を捕らえる事が優先だ、城など直せばいい」

カミラはそう言うが、私に壊す気は無い。町の外に行くか。

「ここで戦うのなら町にも被害が出るかもな。町がどうなっても良いと？」

「すでに町には帝国兵が展開されている、帝国の民と兵を甘く見るなよ」

私の言葉にラフィーが答える、残念だが減点だ。

私は拘束を破り窓を突き破って町の外へ飛ぶ。

長々と話をする前に私を完全に無力化するべきだったな。

「捕らえたければついて来い！」

そう言うときカミラとラフィーが追いかけて来る、中々の速度だ。

町から離れ、草原に降り立つときカミラが仕掛けて来る。

「いきなりだな」

「戦いから離れて腑抜けていたようね……無力化してからゆっくりと話は聞くわ」

爪で切りかかってくるカミラを女神のロングソードで受ける。

無力化が目的だからか本気ではなさそうだが、あの頃よりずっといい動きだ。

私はショートソードを出しカミラとは別の方向へと向ける、そこにはラフィーが音もなく斬りかかっていた。

「二人がかりか、卑怯では無いか？」

「敵には何をしてもいい……とまでは言わないが、余計な情けをかける気は無い」

ラフィーはそう言うとき力を込めて来る、そして二人は連携をし始めた。

草原で激しく攻防を繰り返す私達。

二人ともいい速度だ、並の者では見えないだろう。

周囲の草原は余波で急速に荒れていく。

殺さずに情報を得ようとしているし全力では無いか、どうにかならないだろうか。

私は少しだけ力を上げる。

「……っ!? ラファイアー！ 殺してしまっても良い！ 油断するな！」

私に何かを感じたのかカミラが言う、問題無く力を計れているな。さて、これで娘の本気の戦いが見られるだろうか？

カミラの速度が一気に上がる。力も先程とは比べ物にならない程強くなり、距離が空けば魔法を撃ち込んでくる。

周囲は滅茶苦茶になり見る影もないが。

そんな戦いの中、気配が複数こちらに向かっているのを感じる。

カミラの周りに光球がいくつも生まれる。

その一つ一つが自由に動き私を狙ってくる、随分出来るようになったな。

ラファイアーは私の足止めを目的にしたような戦い方に変わったように感じる。

光球を飛び回ってかわしながらラファイアーを相手にする。

やがて感じていた気配が到着する。十人の魔族が現れ、遠巻きに私達の戦闘を見始めた。

「我々も行くか？」

「いや、あのお二人の邪魔になるだけだ……我々はいざと言う時にいつでも援護に入れるようにしておこう」

「陛下と筆頭殿を相手にあれだけ戦えるとは……何者だ？」

そんな会話が聞こえる、お前達も一緒に戦おうじゃないか。

私は彼らに魔法攻撃をする、しかし皆それぞれに対応して無傷だ。

「……!? あの野郎！ 更に俺達にまで!?」

「陛下が負けると思えないが……危険すぎる」

私はそんな事を言っている彼らにカミラとラファイアーを引き連れ急降下し、斬りかかって行った。

「っ!」

「いっ!」

「この賊やりやがるー!」

乱戦となったが彼らもいい動きだ、恐らく帝国の中では実力者だろう。

この人数でもお互いの邪魔をしないように自然と動いているように感じる。

「離れろー!」

カミラがそう叫ぶとラファイーを含めた全員が離脱した。

そしてその直後分厚い氷が私を覆い、氷に包まれた私はそのまま地面に落下した。

「陛下……」

凍り付いた私を見ながらラファイーが声をかけている。

「あのままでは被害が大きくなりそうだったからな……凍らせた。生きてはいるだろうから色々吐かせるぞ」

「はっ」

そう言ったカミラにラファイーと十人の魔人は跪いて返事をした。

この氷は凄いな。

氷の強度をここまで上げるのはかなり難しい。これならクログウエルも脱出は難しいかもしれない。

成長を感じる事が出来たしそろそろ私だと教えるか。

砕いたらまたすぐに襲い掛かって来そうだから念話で教えよう。

『カミラ、聞こえるか?』

すると目の前のカミラがピクリと反応する。

「陛下? どうかいたしましたか?」

「少し待て」

「はっ」

そう言うのと歩いて少し離れていく。

『お母様? お久しぶりですね』

『今平気か?』

『お母様よりも優先する事は無いわ』

『今から久しぶりに会わないか?』

『今からですか? もう少ししたら私から連絡しようと思っていたのだけれど……』

『そうだったのか。ではもう少し待とうか?』

『会いたいです……』

『じゃあ会おうか』

『はい。あ……でも今私はお母様といった大陸にはいなくて……後……』

『ああ、知っている……魔人の国の女帝になっているのだろうか？』
『そう言うと少し間が空く。』

『何故お母様がそれを……こちらに来ているのですか？』

『ああ、お前の近くにいたんだ』

『そうならそうとすぐに言ってくれば迎えに行っただのに……』

『いや、最初はお前では無く同姓同名の別人かと思っていたんだ。
首都リリティアのお前の城に行った時に気配で確信してな』

『リリティアに居るのですか!?こんな賊に時間を取っている場合
じゃないわ、すぐに迎えに行きますので今何処にいるのか教えてちよ
うだいお母様』

『今か？お前のそばで氷漬けになっている』

『へ……?』

滅多に聞けないカミラの呆けた声だ。

『今お前の近くで氷漬けになっている黒と赤の全身鎧を着た小柄な
賊が私だ』

『……お母様も冗談を言うようになったのですね?』

『本当だ』

そう答えると目の前のカミラが氷漬けの私に近づいて来る。

私は内側の氷を砕きながら右手を彼女に向けて振った。

彼女は慌てたように周りの者に言う。

『状況が変わった。これからこの者を開放する、攻撃はするなよ!』

『陛下!』

『大丈夫だ、敵ではなかった』

『……かしこまりました』

周りの者は戸惑っているようだが、カミラが敵ではないと言った事
で納得したようだ。

『どうぞお母様、出てきてください』

『分かった』

そう答えて私は氷を砕いて出て行く、周囲の魔人達は驚いている。

「陛下の魔法から……!?!」

「……嘘だろ!?!」

そんな声がする中、私は装備を解除していつものワンピース姿になる。

「魔人ではない!?!……少女?」

ラフィーが呟く、そしてカミラが私に微笑んで言う。

「ようこそアーティア帝国へ……お母様」

「……えっ!?!」

「……お、お母様あ!?!」

ラフィーと他の魔人の驚きの声が、荒れた草原に響き渡った。

それから取り敢えず城へ帰りカミラとラフィー、そして国の側近達で話す事になった。

戦闘に来ていた他の近衛兵の十人は会議場の警備に回っている。

円卓に並んで座る私とカミラ。私の反対側にはラフィーが座り、それ以外には残りの側近達が座っている。

「みんな、お母様の事で苦勞を掛けた……悪かったわね。ではお母様、どうぞ」

私はカミラに促され話し始めた。

「私はクレリア・アーティアと言う、カミラの母だ。娘と共に居てくれるお前達に感謝する」

「もったいないお言葉です」

ラフィーが真つ先に答え、残りの者達も似たような返事をした。みんな忠誠は本物のようだ、娘の配下が彼らでよかった。

「そして、皆に謝罪する。騒がせてすまなかった」

「お母様、なぜあのような事を?」

謝罪した私にカミラが疑問をぶつける。

「お前の成長を見たくてな」

「クレリア様、普通に戦おうと陛下におっしゃればよかったのでは？」

ラフィーが声を上げる、私はラフィーの方を見て答える。

「それでは私の知りたい事が分からない可能性があった」

「知りたい事……ですか？」

別の者が声を上げた、私はカミラを見て言う。

「この子の本気とまではいかななくても、敵に対する戦い方を見たかったんだ」

「本気で戦うように言えばよろしいのでは……？」

また別の者が言う。

「皆がどう思っているか分からないが、カミラは自分に悪意を持っていない相手には基本的に優しい。相手が私だと分かっているとどうしても手加減をする、昔からそうだった」

「……お母様」

微妙な表情のカミラ、本当の事だろう。

「確かに……」

ラフィーが呟くと私とカミラを除いた全員が思う所があるらしく頷いている。

「だから気配を変え姿を隠し、侵入者として近づいた。カミラが手心を加えないようにするために」

「お考えは理解いたしました、至らぬ我々をお許しください」

全員が首を垂れる、そこまでしなくてもいいのだが。

「実際最後の魔法は良かったぞ、強敵にも十分通用する物だった」

「お母様は簡単に出て来たのには？」

カミラはそう言うが、間違いなく強力だった。

「それは私だったからだ、竜族にも通用する物だったぞ」

「竜族？」

カミラが聞き返してくる。

「私が出会ったかなり強力な種族だ。名付けたのは私だが」

私は姿の特徴を説明し、魔法や言葉を理解する知能を持つ事、カミラに迫る力を持つ事を話した。

「陛下……それは南の孤島にいる魔物の事では？」
側近の一人が声を上げる。別の個体がいるのか？

「確かに特徴は多く一致しますね……島の周囲から大きく動かないから監視にとどめているが……」

別の側近がそう言っただけで考え込む。

「確か国境の付近に大きな黒い魔物が飛んでいたと報告があったはずだな？その特徴と似ていないか？」

更に声上がる。

やがて彼らの間で話し合いが始まった、黒い特徴の似た魔物……クログウエルか？

「クレリア様の話では陛下に迫る実力を持っていると事だが、討伐するべきか否か」

「下手に手を出して犠牲を出す事は出来ないが、放置も出来ないです……」

「取り敢えず南の竜は刺激しなければ今の所は大丈夫でしょう。これまで大陸の方に来たと言う報告は無いです」

「問題は目撃された黒い魔物の方だ……今まで長い間そんな魔物は目撃されていなかった。どこかからやって来たと考えるべきだが、被害が出る前に本格的に討伐に取り掛かるか国境付近の守りを固くして様子を見るべきか……」

「ちよつといいか？その目撃された黒い魔物だが、もしかすると私の友人……いや、友竜かも知れない」

私がそう言うとみんなが私を見る。

「魔物と友好を結んでいるのですか？」

側近から声上がる、私は側近達と話し始めた。

「さっき説明しただろう、言葉を理解する知性を持っていると。知性があり話せるのなら、例えば……私達を餌としか認識していない。などといった状態でない限り友好を結べる可能性はあるだろう？」

「なるほど……であるならばそのご友……竜に確認して頂けますか？」

「分かった。今確認するから少し私抜きで話してくれ」

「今……でございますか？」

「私は領いて念話を使う。」

『クログウエル、今大丈夫か？』

『どうした？』

『お前こつちの大陸に来てから南西の方まで来たか？』

『行ったな』

『お前以外に黒くてお前ほどの大きさの他の生物はいなかったか？』

『むう？そんな者はいなかったな、いたら気が付いている』

『じゃあお前だな』

『なんだ？何かあったのか？』

私は自分の娘の国を見つけた事、そこでクログウエルが目撃されて脅威と判断され、討伐しようと言う話が出ている事を説明した。

『娘だと？性別は無いのでは……そもそも子をなせるのか？』

『私が拾って育てたんだ、義理の母と言う奴だな』

『なるほど、しかし我を討伐しようとするとは身の程を知らぬ奴らだ』

『言っておくが私の娘は魔人ではないし、恐らくお前と同じかそれ以上に強いと思うぞ？』

『ほう……それは興味深い。貴様以外に我と戦える者がいるのか』

『仲良くなれば調味料や珍しい食材が買えるかもしれないぞ？』

『……仲介をしてくれないか？』

すっかり料理の魅力に取りつかれているな。

どうやらクログウエルはアーティア帝国と友好を結ぶ事を決めたようだ。

『分かった、その内迎えに行く。魔人を襲うなよ？受け入れられないぞ』

『うむ、待っているぞ』

そして念話を切りみんなに目を向けた、みんなは色々と話し合っているが私の動きを感じ取りこちらを見る。

「私の友人で間違いないと思う。その魔物は黒竜クログウエルと言つて、向こうの大陸で出会った竜族の女性だ」

そう言うのと驚きの表情をする側近の面々。

「ではお母様、敵では無いのですね？」

「ああ、友好を結んで竜の素材と引き換えに調味料や珍しい食材が欲しいらしい。それと、魔人を襲わないように言つてあるから安心してくれ」

「では、会議が終わり次第準備を始めます。まずは帝母であるクレリア様の事を国民に布告し、その後専用のクログウエル殿の着陸場所の選定と通達もしなくてははいけません……忙しくなりますな」

帝母？女帝の母と言う事か？

側近達はやる気に満ちている、良い人材を集めたものだ。

「お母様はこの後はどうするつもりなの？」

「この国にしばらくいるつもりだ、出かける事はあると思うが」

「城に部屋を用意させるわ」

「町の宿でも構わないぞ？」

「駄目よ。お母様に対してそんな扱いは出来ないわ、お願いだから城に住んで」

カミラが頼み込んでくる。特にこだわりは無いから娘の言う事を聞いておこう。

「自由に外出していいのなら城に住む事にする」

「……いいわ。お母様の部屋の用意をしろ、相応の場所をな」

「かしこまりました、陛下」

カミラは側近の一人に命じて私に向き直る。

「お母様、私達は今日の所はここまでにしましょう」

「分かった」

「我々は部屋に戻る。お前達には任せるが、何かあれば報告しろ」

「かしこまりました、カミラ様」

私達はカミラの部屋に向かった。

カミラの部屋で二人だけになる。

ソファに座っている私の隣にくっついて座るカミラ。

「凄いなカミラ。女帝になるとは」

「うん……」

「色々教えてくれ」

カミラは色々と話してくれた。

カミラは私と別れた後、まだ国が一つだけだったこの地に訪れた。魔人では無いハンデを背負いながらも有り余るその力と私に教えられた知識で皆をまとめ女帝となった。

言葉で言えばたったこれだけだ、だがそこに至るまでの苦労は私では想像出来ない。

魔道具や錬金術、鍛冶、そして魔法は私から学んだ事を女帝になる過程でカミラが広めたそう。

通貨も当時の物は分かりにくかったため、カミラが知っていた人類の通貨制度に統一させた。

そして他の二国は突然現れた魔人では無いカミラが国を継ぐ事に反対だった者達が離反して興した国だと言う。

カミラは当時それを当然だろうと認め、援助まで行い三国となったと教えてくれた。

「お前は私の自慢の娘だ。私には無い物を身に着けた、もう私に守られるだけの娘では無いのだな」

そう言つてカミラを胸に抱く。

彼女は私に抱きついて静かに泣いていた。泣き虫なのは変わらなかったと思いつながら私は彼女を優しく撫で続けた。

たまには娘に甘えられるのも良いものだ。

あれからカミラはそのまま寝てしまい、ベッドへと連れて行ったのだが、彼女が私を離さなかったので一緒に寝た。

目が覚めた時のカミラは色々思い出したのか恥ずかしそうな顔だった。

泣いてしまったのは私に認められた事が嬉しかったかららしい。この地での事は大変ではあったが楽しかったとカミラは微笑んで言った。

城の皆の頑張りで私の部屋は素早く用意された。カミラの部屋に近く、趣味の良い豪華な部屋だった。

その数日後。カミラの母である帝母クレリア・アーティアとして国内に私の存在が布告された。

その一か月後にカミラから受け入れる準備が出来たと言われ、クログウエルを首都リリティアに連れて来た。

多少の混乱はあったがカミラが治め。帝母である私の友として国民に認知させた。

竜の素材の質の高さを知ったカミラは相応の値段で買い取る事を約束し、クログウエルは無事に調味料や珍しい食材を手に入れた。

クログウエルは自分が直接来ても問題の無い国として大いに気に入ったようだった。

彼女はカミラと戦いたかったらしいが、今はそんな気は無いと断られたようだ。

ただ、カミラはいつか戦うと言ったらしく、クログウエルはその日を待つ事にしたと言っていた。

こうしてクログウエルはアーティア帝国と友好を結び、私は帝母とと言う立場を得てアーティア帝国首都リリティアでの生活を始めた。

帝母として暮らし始めた私は、帝国の式典などに出て欲しいと頼まれた。

カミラには国民に顔を見せる事も大事なのだと頼まれた。どうやらただ座ってればいいらしい。

中には面白そうな事もあるかしないと考え、私は気になったり気に入った物になら出ると言い、カミラもそれで構わないと了承した。

「カミラ、魔族には階級制度があるのか？」

ある日私の部屋に訪れたカミラと語り合っている時に質問をした。ラフィーは私達のそばに立ったまま静かに待機している。

「あるわよ？知りたいなら説明しましょうか？」

「陛下、クレリア様には出来るだけ知って頂いた方がよろしいかと」ラフィーがそう言うって私を見る。

「二応聞いておこうか、全く知らないのも問題がありそうだ」

私がそう言うのとカミラが説明してくれた。

「魔族は実力や家柄で下位、中位、上位に分かれるわ。実力に差があっても同じ位なら扱いとしては一緒になるわね」

「基本的には実力が優先されます、家柄で敵は倒せませんからね。強く有能であれば、もしくは優れた何かの一つあるだけでも有用だと認められれば相応の地位に上がれます……前提として人格が問われますが」

ラフィーが長い補足を付ける。

「ラフィー、私がまだ説明しようと思っていたのに」

「申し訳ありません、より詳しくご説明しようと思つた真似を……」

「いいわよ別に、貴女なら」

「……はっ」

二人のやり取りを見ていたがカミラの雰囲気柔らかい。かなり気を許している様だ。

「カミラ、ラフィーはお前の信頼出来る存在か？」

私がそう言うとかミラは私を見て微笑む。

「ええ、私の初めての友人よ」

「ありがたく存じます」

ラフィーの言葉は硬いが、カミラを見る瞳にいつもの鋭さは無く穏やかな雰囲気をもとっている。

お互い大事な友人だと思っているようだ。

「そうか、カミラを頼む」

「お任せください」

私の言葉にそう答えるラフィーは微笑んでいた、これなら平気だな。

「続きを話すわよ？」

「ああ、頼む」

続きを促すカミラに私が答えると、彼女は続きを話す。

「どんなに有能でも行き過ぎた思想を持つものは引き込む事は無いわ。出世したいと思う事、美しい女を、強い男を欲する事も別に構わない。ただそのために国と国民に……仲間に被害を出す者は必要ない。競うのは構わないけれど足を引っ張る事は許されない……こんな感じね」

話しながら女帝の顔になるカミラ。

確かに有能でもそれ以上の被害や不仲を引き起こすなら必要ないな。

「だから大抵の事では特に罰しないわ、勿論許せる範囲を越えれば罰を与えるわ。国外追放や処刑も必要なら躊躇しない」

次にラフィーが口を開く。

「功績を上げれば上げるだけ褒美は出ます。実力者は相応の条件で雇い入れますし陛下の目にとまればその場で声をかけ登用する事もあります。もちろん相手の意思は尊重し、今まで陛下は無理やり配下にした事はございません」

「なるほど、そうやって集まったのが今の帝国の人員なのか」

「はい、我々は形は違っても陛下に仕えたいと願う集った者達です。陛下と国のために動き敵対などしません。そしてこの国の国民は自

ら陛下の支配を受け入れていきます」

「この帝国が他の国と違う雰囲気なのはそのせいかな」

「帝国の国民の誰であっても陛下に意見を申し立てる事が出来ますし、数が少なければすべて陛下にまで届きます。多い場合は途中で側近達の審査が入り、本当に問題であると判断された物のみが陛下に届きます」

「カミラのやり方で集めた者達だからこそ信用して任せられる訳か」

「はい、少なくとも現在の者達がなくなるまでは……いえ、陛下がいる限り帝国は発展を続けると考えております」

「カミラ」

「何？お母様」

私はカミラに聞く。

「お前の事はどれだけ知られている？」

「私が魔人では無い事は見た目でばれているし、長命種である事は国中に知られているわよ？年齢も今は二百五十歳前後だつて明言しているし……国民みんなが信じているかは分からないけれど」

「向こうの大陸の種族の事は？」

「信頼出来る者達には教えているわ」

「ラファイも聞いているんだろう？」

「はい、そこに住む種族達の事は聞いております……数百年生きる種族もいるとか」

ラファイはカミラの言う事を信じているのだろうか、それでも微妙な表情をしている。

「実際に見なければ信じられないのも無理は無い。どちらにしてもラファイ達が会う可能性は低いだろうな」

「クレリア様、それはどういう事でしょうか？」

「今の魔人の、魔族の力ではあの海を越える事が出来ないからだ。いつかは越える事が出来るだろうが、それがいつになるかは分からない。私とカミラがここにいるのは例外だと思え」

「なるほど……かしこまりました」

「後、大陸の話で思い出したのだが……」

私はここに来る前にバウムルスト王国と言う国で他の大陸と他種族の事を話してしまった事と、リベザルクと言う王と戦った事を話した。

「どういたしましょう、陛下」

カミラは考え込んだままだ、ラフィーの問いかけにも反応しない。

「名前も知られている。また出会う事があるかは分からないが、もし会った時は約束通り戦おうと思う」

「お母様に無礼を働くだけでなく自分の物にしようとするとは……」

そう呟きが聞こえカミラから怒気と魔力が滲み出る。

「……陛下？」

カミラの変化にラフィーが声をかける。

「ラフィー。バウムルスト王国はアーティア帝国の帝母に無礼を働いた……滅びるべきだな」

カミラは怒りの表情をして低い声で言う。そこまで怒ってくれるのは悪い気はしないが……。

「私を理由に開戦しようとするな。私は自分の言葉使いが悪い事も無礼である事も分かっているからな、お互い様だ」

私はそう言いながらカミラの頭を撫でる、彼女は怒気と魔力を消して言う。

「でも、何か言いがかりをつけて来るかもしれないわよ？聞いた内容が本当なら向こうが原因だもの。あまりにもふざけた事を言ってきたら残念だけど滅んでもらうしかないわ」

「帝母クレリア様の事は布告していますからね。バウムルスト王国もそのうち気が付くでしょう」

ラフィーがそんな事を話す、特に知られて困る事では無いと思うが……。

「もし何かあれば王だけ殺して取り込めばいい。そして元バウムルストの国民はこの国に馴染んで貰えばいい」

私は一番楽そうな方法を提案する。

「何があつてもお母様を渡す気は無いからそれが一番楽かしらね。私一人でも王国に乗り込んで滅ぼすくらいは簡単に出来るし」

そう言ったカミラをラフィーが驚いたような表情で見ている。

私と戦った時が全力だとも思っているのだろうか？カミラはもつと強いぞ。

「私と戦った時も全力では無かったからな」

「はい……ラフィーには殺してもいいと言ったけれど、それはラフィーが下手に手加減して危険な目にあわないようにするためよ」

「陛下……」

「ごめんねラフィー。私は平気だけれど貴女は魔人だもの。あの賊……まあお母様だった訳だけど、貴女が下手に手加減すれば危なかったかもしれないから……」

「いえ、お心遣いありがたく存じます」

ラフィーは本当にうれしそうだな、この先この関係が崩れる事は無さそうだな。

「少なくともあの戦いの時よりは強い訳だ、それなら十分だな」

「ごめんなさいお母様、私は未知の敵に手加減を……」

カミラは叱られる前の子供のような顔で私を見て来る。

幼い頃に未知の敵相手に手を抜いたり油断をするなど言った事を覚えていいのか。

「お前が判断した事だ、私は何も言わない」

「え……？」

彼女は悲しそうな顔をするが悪い意味では無い。

「悲しそうな顔をするな。お前の事をどうでもいいと思っている訳では無い。お前はもう守られるだけの娘では無い、今更私の教えた事を忘れているとは思っていない」

カミラは悲しそうな顔のまま聞いている、ラフィーも真剣な顔で私を見ている。

「私が何も言わないのはお前を認めているからだ。もうお前は私を手を引いて歩く必要は無い。自信を持って」

実際には賊を装っていた私の実力を見誤っているのだが、私だから

な。

今の彼女にあの隠蔽を見抜けと言うのは酷だ。

「はい……お母様」

彼女は笑顔になる。

ラフィーは何となくホツとしているように見える。

「甘えたい時やどうする事も出来なくなった時はいつでも言え。どんな事にでも手を貸す訳では無いが、娘の危機なら話は別だ」

「……はい」

微笑みを見せる顔の頬がほんの少し赤くなる。ラフィーは微笑みながら私とカミラのやり取りを見ていた。

ある雨の日の夜、私はカミラの部屋で会話をしていた。

ラフィーは私達を二人だけにするために部屋の外で待機している。

「カミラ、ふと思ったのだが」

「なあに？お母様？」

「この国の名前は何故アーティア帝国なんだ？以前から同じ名前だったという偶然はそう無いと思う、以前の国の名前からわざわざ変えたのか？」

「……それは成り行きというか、国民達の勢いに合わせたのよね」

彼女は飲んでいた紅茶を置いて苦笑いする。

「どういう事だ？」

「私がここにやって来た時はこの国はアティア王国と言う名前だったのよ」

「それで？」

私は先を促す。

「そこで私は女帝になる訳だけど……その頃には国民が読みが似ている事もあってアティアをアーティアと言うようになってね……それでそのままアーティア帝国に……」

「国民が望んだのならいいのではないか？望まれたからと言って何

でもやってやる訳には行かないが、お前は構わないと思ったのだろうか？」

「そうね。自分の……お母様の姓が付く事に忌避感は無かったわね。むしろ長く国としてアーティア姓が残る方が私は嬉しかったわ」

「同じ姓の者が居たりしないのか？」

「他の国なら分らないけれど、アーティア帝国でアーティア姓を名乗れるのはお母様と私だけよ。後は……例えば婚姻相手とか子供とか、そういった関係者だけよ」

「皇帝の姓だからな、そういった制限もあるか」

「ええ、だから罰を覚悟で偽っていたりしない限り、帝国では今はお母様と私だけになるわね」

「罰か」

「皇位詐称は死罪よ」

「皇位？」

「……あつ、ごめんなさいお母様、忘れていたわ……。階級は一番上に皇位があるの、これは皇帝や王、後はそれに連なる者だけがなれる階級よ」

「なるほど、と言う事は私も皇位だな？」

「そうよ、皇位になるわね。正式な言い方だと……アーティア帝国皇位帝母クレリア・アーティア……となるわ」

「自分で言う事は無さそうだ」

そう言うとかミラは声を上げて笑った。

「帝国の理由？」

「ああ、最初は王国だったんだらう？帝国にしたのは何か理由があったのか？」

私の部屋でくつろぐカミラにこの国だけ帝国である事の理由を聞くと、隣に座っているカミラは少し挙動不審になる。

「どうした？」

「何でもないわ、帝国の理由よね？」

彼女はそう言って話し始める。

「笑わないと約束してくれるなら話すわ」

「分かった、約束しよう」

彼女の言葉に返答する。

「私が国の王になる時に王では私の偉大さに足りないと言われて……それで、じゃあ皇帝にしようと私が……」

「つまり勢いで言った事に決まってしまった訳だ」

「はい……」

小さい声で言うカミラ。その頬は赤くなっている、そこまで恥ずかしがる事か？

「いいじゃないか、確かに女帝の方が似合っている」

私は彼女の頭を撫でる。

「……まあそれだけの話よ」

彼女はそう呟きながら私に撫でられ続けた。

「出かけるのでしたら近衛兵の誰かをお連れください」

ある日、そろそろ外に出ようとラフィーに出かけると言ったらこう言われてしまった。

「私には必要ないと思う」

「陛下から帝母様が外出される際はそうするように命じられております」

「カミラに話をしてくる」

「行つてらっしゃいませ」

「またな」

頭を下げるラフィーに一声返して執務室に向かう。

「カミラ、入っていいか？」

執務室の扉をノックして声をかける。

「お母様？どうぞ入って下さい」

私は部屋に入つてソファに座り、机で執務を続けるカミラに話しかける。

「外に出かけようとしたら近衛兵の誰かを連れて行くように言われたのだが」

「嫌なの？」

こちらに顔を向けて言うカミラ。

「嫌では無いが何故だ？私が誰かに何かされると思っている訳では無いだろう？」

そう言うとカミラは困つたような顔をして言う。

「アーティア帝国の帝母を一人で出歩かせる訳にはいかないのよね」

「それは立場上と言う事か？」

「まあそう言う事ね……お母様は嫌でしょうけど我慢してくれないかしら……？」

そう言つて私の事を見て来る。

「分かった、娘の頼みだからな。大人しく誰か連れて行こう」

「ごめんなさいお母様。私が帝母として広めてしまったから……」

「広めたのは側近達だろう」

「いいえ、私はその話を聞いていたのよ。止めなければ全て私が決

めたのと同じ事、私は止める事が出来るのだから」

「あまり気にしすぎるな。ラフィーを連れて行っていいか?」

「大丈夫よ、今まで皇帝として過ごしてきたんだもの。ラフィーなら連れて行って構わないわよ?あの子きつと喜んでついて行くわ」

「こちらがお勧めの店でございます」

あれからラフィーに同行を頼むと嬉しそうに了承してくれた。

今も言葉使いは硬いが喜んでるように感じる。

私が美味しい食事が好きだと言う事をカミラから聞いていたらしく、町の案内を頼むと魔車を手配しお勧めの店を紹介してくれた。

「て、帝母様?!?このような店へようこそいらっしゃいました!」

店の者は驚きながらも対応するが行き過ぎた態度では無い。

カミラが必要以上に気を使う必要は無いと広めているらしい、私にとっては助かる。

「何かお勧めを用意してくれ」

ラフィーがそう言うのと席に案内された。

ここに来るまでも大分騒がれたが、私達が入ると店内の客達がざわめく。

「おっ……おい……あの方は……」

「帝母クレリア・アーティア様だ……こんなに近くでお姿を拝見出来るとは……」

「何と美しいお方、陛下の母上であるのも納得しちゃうわ」

「陛下より年上なのに少女に見えるわ……可愛い」

「陛下より強く、陛下に様々な知識を教えた方らしい。陛下自身が認めたらしいぞ」

「……帝母様。静かにさせますか?」

私にそう聞いてくるラフィー。ひそひそと話されているのを私が不快に感じていると思っっているのかも知れない

「構わない。それよりも食事を楽しもう」

周囲からの視線と称賛の言葉を受けながら食事を待つ。

こんな状態は今だけだ、そのうち慣れて行くに違いない。

この食事はシンプルであったが素材の味を上手く使っていて、中々の味だった。

それから私達は美味しかった事を店の主人に伝えて店を出た。

私達が出た後、店に魔人が殺到していたが大丈夫だろうか？

それからラフィーの案内で様々な場所を回る。劇場でアーティアド帝国誕生の劇を見たり闘技場で死闘や魔物同士の戦いを見たりした。

「次は競技場に参りましょう」

ラフィーは聞き覚えの無い物を口にする。

「競技場か、初めて見るな」

私達は再び移動を開始した。

競技場に着くと他の客とは違う入り口に進む、すると競技場の上部にある観戦場所に着いた。

私が席に座ると説明を始めるラフィー、眼下では模擬戦が行われている。

「競技場は命をかける事が無い内容の物を行います」

彼女は模擬戦を見るように促す。

「現在行われているような安全対策を施された模擬戦、精度や技術、時間を競う勝負などを行う施設です」

「模擬戦は分かるが、他には何があるんだ？」

「そうですね……射出される的を規定の魔法でどれだけ早く、外さずに落とせるかといった競技や、罨をかくぐり出来るだけ早く目的地に到達する競技などがありますね」

「戦闘訓練になりそうだな。良い人材が見つかりそうだ」

「実際に闘技、競技共に陛下の目に留まり登用される事があります。帝国兵になるだけならば帝国軍学校に行く事が一番可能性が高いですが、陛下から直接お声がかかると待遇が違いますから、自信のある

者はそれを狙っている事もあるようです」

「自分を売り込む者もいる訳か」

「ただ配属はどこになるか分かりません。近衛兵は常に陛下のもとにおりますが、それ以外は各町や砦の部隊になる事もあります」

説明を聞きながら模擬戦を見ていたが、戦っている者達の様子がおかしい。

周囲の見学者もこちらを見ている。

「帝母様に帝国民達が気が付いたようですね」

ラフィーが言う。私に見られている程度で動きが悪くなるようでは実戦は無理だな。

「もう少し見ていたかったがそろそろ帰ろうか」

「かしこまりました、本日はここまでに致しましょう」

私は帝国民達の視線を受けながらラフィーと共に城へと戻る事にした。

「私がいるだけで周囲が普段通りで無くなるのは困るな」

私は城に帰る魔車の中で言葉を零す。

「時間が経てば多少は帝国民達も慣れる事でしょう。今は陛下の母上が帝国に訪れたという事実には舞い上がり気味なのだと思います」

「そうだといいが。帝母としての扱いは構わないが、それで実力を発揮出来ないなどという事になったら私が楽しめないからな」

「あまりにも続くようでしたら何か対策を考えます」

その後は他愛のない話をしながら城へと戻った。

現在私はカミラに誘われ、軍学校の御前試合を見に来ていた。

「カミラ。今までもこういった物に出る時は着ていたが、この服は着ないといけないのか？」

私が着ているのは黒を基調とし、白と赤の色を使用した装飾が多い
ひらひらとしたドレスのような服だ。

「正装と言う物よお母様。帝母として正式に訪れる時は着て欲しい
わ」

「カミラは私の作ったドレスに多少装飾品を付けただけなのに、何
故私だけここまで着飾る必要がある」

軍学校の観覧席にカミラと一緒に並んで座っている私は、服装を見
比べながら問う。

「私のドレスは元々そういつた事に向いているデザインだもの、お
母様はそこまで考えて作ったのでしょうか？」

「いや、お前に似合いそうな物を考えて作ったただけだ。そんな事は
考えていない」

「このドレス凄く評判がいいのよ？素晴らしい生地とデザインだっ
て」

「お前が着ているからよく見えるだけだろう」

「そんな事無いと思うけれど……お母様がそう思っているのなら仕
方ないわね」

苦笑いをするカミラ、着ている者が優れていれば良く見える物だ。

試合は悪くない物だった、魔人という事もありみんないい動きをし
ていたな。

……ただ、飛行魔法を使える者がいるのに生かされていない、とい
う印象を受けた。

夕方、私が部屋の外で風に当たっていると、遠くにクログウエルが
飛んでいるのが見えた。

私が城に移ったので北方の山脈の洞窟に一匹で住んでいるクログ
ウエルは、ウルグラードとの取引を少し減らした。

その分をアーティア帝国にまわしているためこうして時々現れる。
騒ぎにならないように事前に私の友人だと話しているが、国民の認

識は帝母の配下……つまり私のペットのような扱いらしい。

クログウエルが知ったら怒るだろうな。

そんな事を思いながらクログウエルが城の敷地内に着陸するのを見てみると、念話がある。

『クレリア、今大丈夫？時間を忘れてない？』

『ミナか、大丈夫だ。周りの者達がいるからな』

『そう、それなら良かった』

『それで？いつもの様に世間話でもするか？』

月に一度は念話を忘れずにくれるミナは、何もなければいつも私と少しの間だけ雑談をする。

『今日はちよつと連絡をね、いつも月に一度は私が連絡していたけど時々変わるかもしれないから』

『そうなのか、ケインか？』

ケインはどちらかと言うと私の邪魔をしないように放置しそうだが。

『ルーテシアがね？私が月一で連絡していると話したら自分がやるって言うのよ』

『あの子では私の用意した念話の指輪があってもまだ無理じゃないか？』

『そうね、だから出来るようになりたいって一生懸命になっているわ』

『それにばかり集中して他をおろそかにしない様に言ってくれ』

『心配なら直接言っておいて、転移でいつでも来れるでしょ？』

夕日を浴び、茜色に染まる景色を見ながら考える。

そういえば、クログウエルには話したがミナ達にはカミラの事を話していなかったような気がする。

『そうだな、たまには行くか』

『あら、珍しいわね』

『そうでもないだろう？お前達に話しておきたい事も思い出したしな。三人そろっている時に会いに行くから平気な時を教えてください』

『……貴女がそうやって話す時って碌な事無い気がするわ』

『今話してもいいが……一応話していいか聞いてからにしようと思う。場合によっては無くなるかもしれない』

『取り敢えず時間を空けたら教えるわ』

『頼む』

そして念話を切る、カミラに話してもいいか聞いておこう。

私はカミラの執務室にやって来た、ミナ達にカミラの事を話してもいいか聞くためにやって来たのだが……。

「私も行くわ」

説明を聞いた後カミラはそう言った。

「ウルグラーデについて来るのか？」

「そうよ。問題無いわよね？」

「私は構わないが。ラフィー、いいか？」

私はそばに控えているラフィーに言う。

「問題ありません。帝母様の転移で行かれるのでしょうか？時間的にはただの外出と変わりませんので」

「ちよつと？何でラフィーに確認したのよ」

カミラは目を細めて私に言ってくる。

「お前は私のために皇帝の職務を放棄してついて来そうだからな」

「流星にそこまではしないわよ」

不貞腐れたような表情になるカミラ。

「とにかく問題無いなら私は構わない、一緒に行こう」

「楽しみだわ」

こうしてカミラもついて来る事が決まり、その事をミナにも伝え
た。

彼女は私の娘なら歓迎すると言い、会う日も決まった。

今日はウルグラードに向かう日だ、私はカミラの部屋へと向かった。

特に服装は変えない。カミラはいつもの私の作ったドレス、私もいつものワンピースだ。

もうすぐ朝の九時になる、そろそろ行かないとな。

「カミラ、そろそろ行くぞ」

「ええ、準備は出来ているわ」

カミラは私の隣にやって来る。

「行つてらっしゃいませ」

ラフィーが見守る中、私達はウルグラードに転移した。

「私もこの魔法覚えようかしら」

ウルグラードが見える丘に転移した後、カミラが呟く。

「知りたいなら教えてやるぞ？今のお前なら一人でなら転移出来ると思う」

「帰ったらお願いします、お母様」

町に向かつて歩きながら会話する、約束の時間までにはミナ達の家に着くだろう。

私達はミナの家に着き、リビングで顔を合わせた。

一方にはケイン、ミナ、ルーテシアの一家が。

もう一方には私とカミラの親子が並ぶ、ここは両者を知っている私が仕切るか。

「さて、紹介しよう。彼女はカミラ・アーティア、私の娘だ」

まだ皇帝である事は言わない、仲良くなるのに邪魔なだけだ。

「始めまして。ご紹介に預かったカミラ・アーティアと申します、本日はお母様のご友人に会えて光栄です」

カミラが微笑む。

私は続いてケイン達の紹介をする。

「彼はケイン・イヌス。私の元教え子でありこのウルグラードにあるテイリア魔法技術学校の現在の校長だ」

「始めましてカミラさん、ケイン・イヌスと申します。わが師のご息女にお会いでき嬉しく思います」

そう言って会釈する。

「彼女はミナ・トリアム。ケインの妻であり私の元教え子だ、テイリア魔法技術学校の次期校長でもある」

「始めまして、会えて嬉しいわ！一緒に貴女のお母さんのお話しましよー」

彼女がそう言って笑うとカミラも嬉しそうに微笑んだ、私の話をするののか。

「そしてこの子が、ルーテシア・イヌス・トリアム。ケインとミナの娘で現在はテイリア魔法技術学校に通っている……そうだよなミナ？」

そう言っているとミナは頷く。

「る……ルーテシア・イヌス・トリアムです。テイリア魔法技術学校でクレリアお姉ちゃんと念話出来るように勉強しています」

そう言って頭を下げる、カミラは微笑んでその姿を見ている。

「ルーテシアちゃんはクレリアお姉ちゃんの事好き？」

優しく問いかけるカミラ。

「うん」

ルーテシアが答えるとカミラは嬉しそうに笑う。

「私の事もカミラお姉ちゃんと呼んで欲しいな」

「……カミラお姉ちゃん？」

「はい、カミラお姉ちゃんよ」

戸惑いながらもお姉ちゃんと呼ぶルーテシアに返事をするカミラ。

ケインとミナは微笑んでその様子を見ている、上手く行きそうだ。

それから私はカミラとケインとミナの三人が話している間にルーテシアに無理をしない様に話し、いつか私に念話をしてくれる事を楽しみにしていると伝えた。

「うん！クレリアお姉ちゃん大好き！」

そう言つて抱き着いてくるルーテシアの頭を撫でる。悪意なく懐いてくる者は可愛いものだな。

三人は話し込んでいるようだな、私はルーテシアと遊ぶか。

「何かしたい事はあるか？今なら遊べるぞ？」

「トランプしたい」

トランプか、二人では人数が物足りないな。以前買ったオセロを薦めてみようか。

「ルーテシアが楽しめるか分からないがオセロと言うゲームをやってみないか？」

「やってみる」

ルーテシアがそう言ったのでルールを説明してやってみる。

私も買ってからやっていた訳では無いが流石に今のルーテシアに負けたりはしないだろう。

何回か遊んだが、ルーテシアはオセロが気に入ったようだ。トランプといい、こういった物が好きなんだな。

「むー……」

勝てないのが悔しいのか唸っている。それとなくいい勝負にしてみたら負けおこそう。

こうして時折ルーテシアに花を持たせつつ、オセロを二人でしているとカミラ達の声が聞こえる。

「カミラさんはこちらの種族と魔族が出会った時どうなると思う？」

「そうね……少なくとも今日私がここに来た事で少なくとも私の国

はいきなり敵対する事は無いと約束するわ。もちろん相手の出方次第ではあるけれど……国としての取引は要相談ね」

「……失礼。カミラさんのその言い方からすると貴女は高い地位にいる方なのですか？」

カミラの発言から想定したであろうケインが割り込んで訪ねる。

「まあそうね、高い地位ではあるわ」

「もしよろしければ教えていただいても？」

「構わないわよ」

カミラは一呼吸開けて言う。

「私はアーティア帝国初代皇帝、女帝カミラ・アーティアよ。改めてよろしくね」

そう言つて微笑むカミラを二人は実に良い驚きの表情で見ていた。

それから私はミナにカミラの立場を黙っていた事を責められたが、仲を深めるためにはその肩書はいらなかったと言うと、何となく言いたい事が分かったのか何も言わなくなった。

ともあれ三人とカミラは仲良くなれた、みんなで他愛のない話やゲームをしてルーテシアもカミラに懐いたようだ。

「そろそろ帰るわね」

「カミラもう帰るの？お昼食べて行けばいいのに」

「ごめんねミナ、あまり時間が無くて。お母様の転移で来たから可能だったけれどあまり長い時間は取れないのよ」

そろそろ時間か、私はルーテシアに言う。

「ルーテシア、そろそろ帰るよ」

「うん……」

カミラが私の隣にやって来る、さして帰ろう。

「クレリアお姉ちゃんまた来てね？」

ルーテシアが私に言う、身長之差で見下ろされている。

「また来るよ」

「あ、後……カミラお姉ちゃんも」

「ふふっ、また来るわ」

微笑んで答えるカミラ。

「じゃあな、何かあったら連絡してくれ」

私はケインとミナを見て言う。

「分かりました、師よ」

「私はいつもの様に定期的に連絡するわよ」

二人はそう返してくる、私は領き転移魔法を使う。

「ではな」

「またね」

私とカミラは最後に一言残し、リリティアに転移した。

「お帰りなさいませ陛下、帝母様」

城に転移した私たちをラファイーが出迎えてくれた、そのままラファイーを引き連れて執務室に移動しながら会話する。

「どうだったカミラ？私の友人は」

「お母様が友人になったのも分かります、三人共好感が持てました」

「特にルーテシアは長い付き合いになる可能性もある。お前達の仲が続く事を祈るよ」

「私もルーテシアは気に入っているわ、姉として仲良くして行くつもりよ」

「そうか。話は変わるが転移魔法を教えてやるから時間を作っておけよ？私は何時でも構わないから声をかけてくれ」

「便利だし早いうちに時間を作るわ。今日は残りの執務を終わらせないといけないから無理ね……ラファイー、今日の食事は執務室に頼むわね」

「かしこまりました」

カミラがラファイーに言う周囲にいたメイド達に手配し始める。

「無理をするなよ」

「今日出かけるために急ぎで執務を調整したからこうなっただけ、普段はこんな事は無いわよ」

「それならいい。ラフィー、すまないが私の食事もカミラの執務室に持って来てくれ」

「お母様？」

「かしこまりました」

再び控えていたメイドに指示を出す。

「折角だ、一緒に食べよう」

「あまり話していられないわよ？執務があるし」

「構わない、娘の頑張りを見るのもいい物だ」

そう言っ私はカミラの執務室に向かって歩き出す。

後ろからついて来るカミラから小さく笑い声が出た。

こうしてカミラのウルグラード訪問は終わった。

私が帝母としてリリティアに住んでから数年は時が過ぎただろうか。

その間カミラに頼まれた時は帝母として様々な催しに出席した。闘技場と競技場は好きなのでよく行っていた、帝母としてでは無く個人的にも行つて楽しんだ。

カミラも女帝としての執務などを日々こなしながら時間を作つては習得した転移でウルグラードに行つている。

クログウエルは今もウルグラードとリリティアで取引を続けている。

普段は北の山脈でのんびり過ごしているようだ。

今は国民も落ち着き、必要以上に騒がれる事は無くなったが、頻繁に町に出て来る帝国民想いの帝母だと言われている。

私が楽しんでるだけでそのような意図は全く無いのだが、わざわざ否定しないでいいとカミラに言われたので好きなようにさせている。

そんな日々を送っていたある日、カミラの部屋でくつろいでいると側近の一人が部屋にやつて来た。

「陛下、お耳に入りたい事がございます」

「話せ」

カミラの許可を得た側近は話を始めた。

「先程情報が入りました。それによるとバウムルスト王国が大規模な国力と軍備の増強を行っているようです」

「予想される理由は？」

カミラの目つきが変わる。

「我々、もしくはヴァイル王国への侵攻が目的だと思われます」

「なぜ急にそんな事を……」

そう言つて考え込むカミラ。そんなカミラのそばに待機していたラフィーが言う。

「魔族の統一を考えているのではないのでしょうか？」

カミラと側近はラフィーに目を向け、側近が言う。

「筆頭殿、なぜそう思うのです?」

「バウムルスト王国は他の大陸に我々以外の種族がいる事を知っています」

そう言うときカミラは目を細め、側近は顎に手をやり考えるような仕事をする。

あの国には私が色々話してしまっただけからな。

「あくまで予想ですが……まず魔族を統一しその後技術や国力を高め、いずれ別大陸へ侵攻するつもりなのでは無いかと」

ラフィーは自分の予想を口にする。確かに技術や国力を高めるなら統一した方がいい気はする。

「魔族が他の大陸に渡るのはまだ難しいけれど……新たな技術を開発するためにまずは統一……と言う事かしら」

「恐らくは……ただ我々が手に入れていない情報がある可能性は否定出来ません」

カミラと側近が話し合う。私はまだまだ不可能だと思っているが、ある日突然一気に事が進む時もある、隷属魔法の時のように。

そこで私は思いついた事を言ってみる。

「バウムルストの王が私の事に気が付いた可能性は?あの王は負けたままで大人しくしているようには見えなかった。単に私がアーティア帝国にいと知って手を出そうとしているという事は無いかな?」

私がそう言うとき側近が話し出した。

「あるいは、両方なのではないでしょうか?」

「両方ね……」

側近の言葉にカミラが反応する、更に側近は続けた。

「はい……他の大陸に備えるための魔族の統一と、その過程の帝母様との再戦。その両方を同時に行うつもりなのでは?どちらを行うにしても国力は必要ですので……」

なるほど、統一の過程でアーティア帝国とも戦う事になるだろう。カミラが他国の支配を受け入れるとは思えないからな、これは戦争に

なるかもな。

「他の大陸に行く方法は後回しにして、魔族を統一するついでにお母様と再戦しようとしていると?」

「どちらがついでなのかは分かりませんが恐らく……」

カミラの問いに答える側近。先に統一して国をあげて大陸間の移動方法を開発する、悪くは無さそうだ。

「どちらにしてもただ見ている訳には行かない……皆を集めろ、これからの方針を決めなくてはならない」

カミラのその一言でアーティア帝国の今後を決める会議が開かれる事になった。

その後の会議によって帝国の方針は決定した。

国力を上げ始めているバウムルスト王国に対して帝国が現状を維持するという選択肢は無く、アーティア帝国も国力の増強と軍の拡大を行う事が決定された。

「農地の拡大と人員を確保しなければなりません」

今は方針は決定し具体的な内容を話し合っている、そこで出た話は食料問題だった。

向こうの大陸でもあった問題だ。

「帝国の食料生産能力は悪くはありませんが、もっと効率を良くしなければこれ以上の軍の拡大は難しいと思われます」

軍に所属する者は戦う事が使命、軍人はあらゆる生産に貢献出来ない。

軍を拡大するという事は消費だけが増えるという事だ。

土地を新たに開発して農地を増やせばいいと言った私に側近の一人はこう語った。

「アーティア帝国は背後を海に阻まれており内陸側は他の二国に封鎖されており。現状で新たな土地を増やすには他国から土地を奪うしかありません」

すると別の者が言う。

「他の二国が国を作る際に現在の場所に作ったのはこうなるように仕組んでいたのでしょいうな」

「つまりこの国は海と他の二国に閉じ込められているんだな？」

私は確認するために問う。

「はい、アーティア帝国はこの大陸の南西の端に位置しています。東側には大陸が広がっていますが他の二国が存在しているため開発出来ません……この事は以前から問題視されておりました」

彼らはこの事をずっと気にしていたようだがいい案が無かったのか声に力が無い。

「侵攻して奪えばいいだろう」

「元は同じ国の者ですから出来るだけ争いたくはありません。それに我々は侵略者にはなりたくは無いのです……明確に敵対する理由があるならともかく、ただ土地が欲しいという理由で何もしていない他国に攻め込むのは……」

私が言うと、顔をしかめながら答える側近達。

何とも甘い考えだがそう考えられる者達でなければカミラも引き入れようとは思わなかったかもしれない。

「ではどうする？ 私達が立ち止まっている間に他の二国は領土を増やし強大になるだろう。そしていつかこの国を滅ぼすかもしれないぞ？」

その考え方を悪いとは言わないがそれではどうにもならない事もある。どんな内容であれ心を決めて方針を決める事が出来たら私も手を貸そう。

そう思いながら言った私の言葉に黙ってしまう側近達、するとカミラが頬杖をついたまま言う。

「そうなっても私一人でどうにかなりそうだけど、それでは駄目よね。あなた達がそう考えられる者達である事は嬉しいけれど、この国が危機に陥る位なら私は他国を侵略するわよ」

「陛下……」

側近達は嬉しそうだがそれでも何か思う所はありそうだ、カミラは

頬杖を止めて彼らに語る。

「むやみに力に訴える事はしないけれど、国が危機に陥る可能性が高いわ……貴方達は国が、仲間が、家族が危機を迎えてもそんな甘い事を言い続けるの？私は守りたい物を守る、躊躇する事は無いわ。納得出来ないのなら力を貸してくれなくてもいい……ただ邪魔をするなら容赦はしない」

カミラのその言葉を聞いた側近達はしばらく俯いていたがその中の一人が言う。

「私は陛下に忠誠を誓いました。何もかも賛成はできませんが今の陛下は間違っていない……そう思います」

「綺麗ごとだけでは国を守れませんからな……もしもの時は我々が泥をかぶりましょう」

次々に声が上がらなければ必要であれば侵略を行う事が決定した。

「カミラと側近の皆の決意は見せて貰った、私も手を貸そう」
途中から参加せずに見ていた私の言葉に全員が私を見る。

「お母様、力を貸してくれるの？」

「お前達が方針を決める事が出来たなら、その内容に関わらず手を貸そうと思っていた。それに今の私はこの国の帝母だからな」

「お母様はこの状況を打開出来る何かを知っているのね？」
みんなの視線を感じながら私は答える。

「知っている」

こうして皆に私が開発した農耕魔法を教え、その効果とすでに向こうの大陸で大きな成果を出している事を話した。

「凄い……これなら一気に食料に余裕が出来ます……」

「効率が良すぎて恐ろしいほどですね……」

次々に称賛の声を上げる側近達、そんな中カミラは指示をだす。

「この魔法で食料の問題は無くなるけれど農家が職を失う可能性があるわ、事前の説明を国中にして段階を踏み、それなりの時間をかけて国中に普及させなさい。新たな仕事の斡旋や保証を十分に行い、農耕魔法の普及に影を落とす事が無いように注意して。後、この魔法の詳細を他国に奪われる事が無いように目を光らせて」

「お任せください」

側近達はそう答えるとこれからの詳細を話し合い始めた。そんな中、私はカミラに声をかける。

「カミラ、私はこれで戻る。軍の拡大に関する会議には呼んでくれ」

「お母様、何か案があるの？」

「軍の拡大についての会議が始まったら提案するつもりだ」

「分かったわ、その事について話すのは少し後になるわね。まずはお母様の農耕魔法を普及させないといけないから」

「いつでもいい」

そう言って私は話し合いの続く会議場を後にした。

それから一か月程経ったが、特に大きな出来事も無く過ぎ去った。農耕魔法の普及も上手く行っているようだ。

ある日、カミラから軍の拡大の話し合いをされると言われて出席した。

今日は側近だけでは無く近衛兵達もいる。

「さて、これから軍の拡大に関する話し合いをする訳だが……お母様から話があるらしい」

カミラがそう言うのと出席している皆は私の話を聞く体勢となった。

「お母様、どうぞ」

「ありがとうカミラ」

私は礼を言うと一度間隔をあけ、話し始める。

「私の話に時間を割いてくれてありがとう。長々と無駄な事を話すのは意味が無いから本題に入る」

そう言って私は新しい部隊の提案を始めた。

「軍の拡大をするタイミングで新たな兵を作りたい」

「新たな兵とは？」

当然の疑問を口にする側近、説明をしよう。

「私が作りたいのは飛行兵だ」

「飛行兵……」

誰かは分からない眩きが聞こえた。

「飛行魔法に熟達した高い機動性を持つ兵だ。空を飛ぶ脅威や上空から地上への対地攻撃を行う」

「空から……攻撃……」

「私は考えていた。今はどの国も空に対する考えが薄い、闘技場や競技場で飛行魔法を使える者も全くと言っていいほど使っていない」

「確かにそうね」

カミラが納得したように言う。

「お前達の中には空を飛ぶ魔物を相手にした事がある者もいるだろう。ならば分かるはずだ、空を飛び回り遠距離魔法を撃たれるだけで飛べない者はかなり劣勢になる」

「確かに……」

カミラはそんな事が無いためいまいちわからない表情をしていたが他の者達はある所があるようで声を洩らす。

「思い浮かべろ、空を飛び回り伝令として、斥候として、戦場で上空から一方的に敵を攻撃する兵。それが数を揃え、軍として動いたとしたら？」

「いいかもしれないわね」

カミラは微笑みながら言う。採用するかはカミラ次第だ、私は話を続ける。

「もちろん自由に空を飛び回り高速戦闘を行う難易度は高い。ある程度ならこなせるだろうが納得いくだけの戦闘を行える者は全兵士から才のある者を募っても数は多くないだろう。だから更に飛行兵を分ける」

「どう分けるの？」

私はカミラの疑問に答える。

「まず帝国飛行部隊を作り飛行魔法を一定以上扱える者を飛行兵として迎える。そして次は帝国空戦部隊を作り、飛行部隊員の中から更に厳選し高い実力を持った者を戦闘に特化させ空戦兵として迎える」

「実際にやってみないとどうなるかは分からないわね、これは」
カミラが頬杖をついて呟く。

「皆の実力次第でこの部隊が出来るかが決まる、それにカミラが駄目だと言えば無理には薦めない」

「お母様は最終的にどの程度の熟練度を考えているの?」

「カミラとここにいる近衛兵達は見たと思うが、私が侵入者としてカミラとラフィーと戦っただろう?あの程度だな」

「それは難しいんじゃないかしらね……」

カミラは険しい顔をしている。

「実際にカミラとラフィーは私とやり合っていたが」

「それは私達だからよ、他に可能なのは近衛兵の皆くらいじゃないかしら」

「飛行魔法を訓練に取り入れて、才能のある者を見つける事が出来たならどうだ?そうして選ばれた者により高度な訓練を受けて貰い、厳選していく訳だ。ここにラフィーを入れて十一人存在して居るのなら他にも出来る者が居る可能性はあるだろう?」

「……確かにそうね……無理だと最初から諦めるには惜しい内容だし……やってみましょうか」

こうして空を舞台に活躍する新たな兵科が作られ始めた。

無事に作られ帝国を強くするのか、それとも実現する事無く消えるのか。

私も提案したのだから手伝う気はある、やるだけやってみよう。

あの会議から半年程が経った。

この半年の間に帝国は食料生産の安定と軍の拡大の準備を並行して行っていた。

既に軍の準備は整えた様だが、農耕魔法の普及はまだ全て終わっていないらしい。

新たな兵科のための準備も終わり、正式な隊の発足は目前まで迫っ

ている。

あれから飛行兵の告知は帝国中に行われた。帝国兵の基本訓練に飛行訓練を導入し、すべての帝国兵から飛行部隊への移動希望者を募集した。

その中で基準を満たした者は全員飛行部隊に内定した。

国民の飛行部隊のイメージは優秀な者が所属する特別な部隊だ。

実際に色々と基準が厳しいので間違つてはいない。

空戦部隊に入れる者が現れるのはいつになるだろう。

どの程度合格者が出れば正式に隊として形に出来るだろうか？後で聞いておくか。

もしも僅かな人数しか集まらなかった場合は特殊部隊に変更だな。

飛行部隊の発足において私が協力したのは訓練の内容を決めるための助言と、教導隊の育成だ。

帝国には飛行をしっかりと教えられる者がいなかった。とは言え今から教導出来る者を育成するとなると時間がかかる。

最悪私が一人で教えてようかと考えていたが、近衛兵達を一時的に教導隊にしても良いとカミラに言われ、頼む事にした。

無理にやらせている心配と近衛兵としての職務の問題を尋ねたが全く問題無く、近衛兵達はかなり乗り気だった。

そして私は近衛兵から五人を借り、教導隊員として他者に教える為の訓練を受けて貰い、帝国飛行教導隊が作られた。

みんな伊達に近衛兵だった訳ではなく、かなりいい教導隊員になったと思う。

それからまた時は流れ、現在広い訓練場を会場にして帝国飛行部隊の発足式が行われている。

先程から女帝であるカミラの演説が行われ、選ばれた飛行部隊隊員二十五人と教導隊員である五人、合わせて三十人が最前列に、周囲には沢山の兵士達が並び緊張した面持ちで話を聞いている。

正直、全帝国兵から募ってもこれだけなのかという気持ちがある。基準が高すぎたのか、満たしていても飛行部隊に入る気が無い者が多くいたのかは分からない。

「新たに発足したこの部隊は世界で初めての試み。そして貴方達はその先駆けとなる！アーティア帝国初代皇帝カミラ・アーティアの名において……今ここに帝国飛行部隊の発足を宣言する！」

カミラが大きく響き渡る声で宣言すると、飛行部隊と教導部隊の三十人は一斉に返事をし、その後には大歓声が起こった。

こうしてアーティア帝国で……いや、世界で初めての空を中心とした部隊が誕生した。

正式に帝国飛行部隊が発足してから約一年が過ぎた。

農耕魔法の普及もほぼ終わり、飛行部隊と軍の拡大も大きな問題無く進んだ。

十人だった近衛兵は軍の拡大によって増員した、筆頭のラフィーを頂点に初期の十人が隊長となりそれぞれ部下が付いた。

最初の教導隊の五人は兼任だが、優先して優秀な者を部下に与えた事で上手く行っている。

第一近衛隊から第十近衛隊に分けられ規模が大きくなった。飛行兵の登場で目指す者は多少減ったが近衛兵はいまだに一番人気の隊らしい。

新しく出来た飛行部隊も順調に数を増やした。

一時期教導隊員が五人で大丈夫かと思う時期があったが、隊員から教導隊に入りたいと希望する者が現れ始め、上手く行き始めた。

十分に数が揃うまでは私も教導隊員の育成を行っている。

初めて教導隊員の訓練を受けに来た者達は私が教導隊の訓練に出ると必ずと言っていいほど驚き、しばらく挙動不審になる。

だが、やがて全員訓練に必死になり、それ所では無くなるので問題は無かった。

空戦部隊への選抜も何人かすでに目立つ者がいると聞いている、もうすぐ空戦部隊が出来るかも知れないな。

そんな中、私はある話を聞いた。

ある町の帝国兵隊長の推薦で軍に入った若干十二歳の女新兵がかなりやるらしく、将来有望だと噂になっているらしい。

「そんな奴がいるのか」

「ええ、私にまで話は届いているわ。そういった事は私まで上げる

ように言っているから」

カミラの部屋でその話を聞いた私はその兵に興味を持った。

「名前は聞いているか？」

「聞いているわ、シシー・エツフェルと言う新兵よ」

聞いた事のある名前だが、彼女は会った当時十代半ばだったはずだ。

……待てよ？私が興味がなかった事もあって見た目で勝手に判断し、年齢を確認していなかったような気がする。

もし本人なら当時は十一歳程か、伸びる訳だ。

「……お母様？どうしたの？」

私はカミラにここに来る前に会った少女の話をした。

「お母様が才能を感じて訓練をした少女ね……」

カミラの顔は良い笑みを浮かべていた。これは儲けが出ると確信し、逃がさないと心に決めかけたの友人と同じ雰囲気を感じる。

「彼女はリリティアに配属するわ、実際に見て判断したいもの」

「そうか」

そう言う私を彼女は笑顔で見ている。

シシー・エツフェルはリリティアの部隊に配属された。

そして彼女は秘められていた才能の片鱗を見せ始め、見る見るうちに強くなっていった。

彼女がリリティアに配属されてから僅か一か月程でカミラは彼女に声をかける事に決めた。

今私達はカミラの部屋でシシーの事を話している。

「どこに誘うんだ？」

「私としては飛行部隊に入って、出来ればお母様が考えている空戦部隊まで上がって欲しいわね。もちろん無理には誘わないけど」

彼女は確か夢があったはずだが、どう答えるだろうか。

私は教導隊の育成や帝母としての職務、と言っても参加するだけだが。

そういった事をこなしながらも時々ウルグラードに行つてミナ達と交流していた。

時間が出来ればカミラと共にルーテシアと遊んだりもしている。

カミラの話を受け入れたシシーは飛行部隊に入り実力を伸ばしている。見た限り彼女が空戦部隊に上がるのは間違いなさそうだ。

少し前にシシーに会つたが、以前訓練をしたのが私だと知つて酷く慌てていた。

ずっと自分より年下だと思つていた事を謝られたが、私の身長を見て子供だと思わない方が難しいので、気にせず普通に話すように言つた。

うる覚えであつた夢の事を聞くと、近衛兵になる夢があつたと彼女は答えた。

どうしてその夢を諦めたのかを問うと、カミラ直々に空戦部隊に入つて欲しいと頼まれ、考えを改めたらしい。

後悔は無いかと尋ねる私に、彼女は「後悔はありません、私をここまで育ててくれた貴女の考えた部隊に入れるのが嬉しいです！」と明るく答えたので問題は無い様だ。

最初から存在した他の部隊も拡大され、国の領地の大きさは変わらなくとも帝国は大きく国力を上げた。

隣国の二国とは領地にかかなりの差があるようで、何とか出来るうちに仕掛けた方がいいかも知れないという意見も僅かだが出始めた。

だが、出来れば向こうから攻めて来て欲しいという気持ちは残っているようだ。

攻め込むより攻め込まれて反撃した方が色々都合が良さそうなのは何となく分かる。いつ何があるか分からない、空戦部隊を早く作るべきか。

更に数年が経ち、飛行部隊の上位者の中から空戦部隊に移る人員が決定し正式に発足する事になった。

この数年で教導隊の人員も増え、飛行部隊の教導隊員に問題は無くなった。

私は近衛兵の教導隊員に引き続き空戦部隊の教導隊員になる事を頼み、空戦部隊の発足に備えた。

予定ではシシーが若いながらも第一空戦部隊の隊長になる事になっていく。能力と性格を考えると彼女で問題は無さそうだ。

一方ウルグラードではルーテシアが変な男どもに惚れられるという出来事が起きた。

その事に対してミナとケインが何もしない訳など無く、彼女に被害は無いまま問題は解決したようだが、ルーテシアが男嫌いになってしまったらしい。

それが被害と言えば被害だろう。

大人しく可愛らしい彼女に男が寄ってくるのは当たり前かもしれないが、変な男に惚れられるとは運が無いな。

まあ寿命は長いんだ、その内男嫌いも直るだろう。

そして現在、私はウルグラードのミナの家に住む。

ミナは近い内に校長に就任する予定だ。

「クレリア、これ見て」

そう言つてミナは何かの皮で出来た小さめな鞆を持って来た。

この鞆、魔法がかかっているな。

「これは魔道具か？」

私がそう言っていると彼女は感心したように言う。

「やっぱり貴方なら見破るわよね。これは最近流通し始めた魔法鞆よ、マジックバッグとも言おうわね」

「マジックボックスの魔法に似せたのか？」

「そんな所だと思っわ。これは見た目以上の容量を持っている鞆よ、ただ制約もあるけど。時間は完全には止まらないし、入るのは入

り口の大きさよりも小さい物だけ。生き物は入らないし、開け閉めに魔法が必要よ」

「結局魔法が要るのか？」

「極稀にいる魔法が使えない人でも使用出来るように出来ているらしいわ。確認した訳じゃないけどね」

「便利だろうなこれは」

一人一つ持っているだけでかなり役に立つだろう。

技術として覚えておきたいな。

「ただね……物凄く高いのよこの鞆」

「新しい物はそんな物だろう、出来れば調べたいのだがいいか？」

「貴女にならないわよ」

「そんなに時間はかからないと思う、次来る時には返すよ」

「気にしない時はしないのに……気になるとこれだもの」

ミナは溜息をついて私を眺めていた。

私は鞆を持ち帰り、調べて魔法鞆の技術を得ると、再びミナの家に行った時に忘れずに返却した。

現在、シシーは帝国空戦部隊隊長として隊員に支えられながらも上手くやっているようだ。

今からおよそ一月前に発足した帝国空戦部隊は、一部隊最低四人、最大十人の範囲で編成する事になっている。

現在は七名が所属しているが人数が増えれば第二部隊が作られる、その際には基本的に副隊長から隊長が選ばれる事となる。

空戦部隊の隊員は飛行部隊よりも厳しい訓練と高い基準が用意され、その訓練は近衛兵の教導隊員に任せている。

いずれは空戦部隊の教導隊も近衛兵以外の者で揃えたいが、これはまだ時間がかかるだろう。

空戦部隊の隊員が増え、教導に移動する事を望む者が現れてくれるといいが。

これで空を自由に飛び戦える部隊の基礎が出来た、娘の国だし出来るだけ長く繁栄して欲しいものだ。

私は久しぶりに会議に出席した。軍の拡大も進み、飛行部隊と空戦部隊も今の所は順調に数を増やしている。

「隣国の二国はまだこちらに攻めて来るような動きは見せておりません」

側近の一人が報告する。カミラに情報の大切さを教えていたので、情報収集を以前からしている事は聞いている。

「帝国とバウムルスト王国の軍備の増強に反応したヴァイル王国も軍備の増強を開始しております」

「どちらか一方と争っている時に手を出されるのは避けたい、今まで同様に動きに注意して……」

カミラと側近が話している時に会議室の扉が開く。

「緊急のご報告です！」

「細かい作法はいい、すぐに話せ」

駆け込んで来た兵が跪いて言うが、すぐにカミラは先を促した。

「南に生息していた竜と思しき魔物が、我々の国の上空に侵入したと報告がありました」

「そんな……今までこちらに来た事など無かったのになぜ……?」

接近達の中からそんな眩きが聞こえる。

「襲われた場所はあるのですか？」

側近の一人が兵に尋ねる。

「今の所その様な報告はありません」

「分かりました。新たな情報を手に入れたらすぐに知らせてください、夜中でも関係なくすぐに」

「かしこまりました！」

側近との会話を終え、兵は一礼し去っていった。

「相手にクログウエルのような知性があるか確認したいところよね」

考えるているような様子のカミラが言う。

「そうですね。もしクログウエル殿のような知性があれば、事を大きくせずとも何とかなるかもしれません」

「確認なら私が行こう」

私がそう言うとかミラは私を見る。

「お母様、いいの？」

「ああ、もしもの事を考えるなら私が一番いいだろう」

何より私が見に行きたい。

側近達は私の力を知っている事もあり、特に口を挟まなかった。

私が譲歩するように見えなかったのだろう、こうして私が南の魔物に会いに行く事になった。

……いた、あれだな。

あれからすぐに私は目的の魔物に会うために気配を探りつつ飛び回った。

そして私は遠くにその姿を捕らえる。

一気に速度を上げて魔物に近づくと、相手は滞空して私に威嚇するように唸り声を上げた。

その姿は確かに竜のようであったが大型の鳥の魔物のようにも見える。

「戦う気はない、私はお前と話をしに来た」

そう話しかけるが返事は返ってこない、相変わらず唸りを上げて警戒しているように見える。

知性は無いのか？

「話せるのなら話して欲しい、話せないのか？」

そう話しかけても反応は変わらなかった、しばらくそのまま対峙していると魔物は雄たけびを上げ飛び去って行った。

「ただの魔物だったか」

私はそう呟くとすぐにリリティアに転移した。

転移して戻った私はカミラにただの魔物であった事を話す。

「ただの魔物だったのね」

「間近で見ると竜と言うより巨大な鳥の魔物の亜種、といった感じだったぞ」

「知性が無いのなら討伐するしかないわね……何かあってからでは遅いもの」

知性が無いのなら欲望に任せて何をするか分からないからな。カミラ達にとっては害獣でしかない。

「せっかくの機会だもの、飛行部隊と空戦部隊の初戦の相手をしてもらいましょう」

「油断はしないようにな」

「ええ、出すのは空戦部隊と飛行部隊の実力者だけに限定するわ」

すぐに討伐隊は編成された。

飛行部隊の隊員はいくつかの部隊に分かれ、目標の魔物の搜索。空戦部隊はその報告を受けて迎撃に出る、という事になった。

魔道具を使用して連絡を取り合いながら探し出して討伐する。隊員達にとって初めての空での実戦だがどうなるだろうか。

「指揮はシシー・エツフェルに一任する。飛行部隊と連絡を取り合い必要であれば指示を出し、魔物を討伐するように伝えて」

「はい、その様に致します」

側近はそう答えると一礼して執務室を去っていく。

「私は様子を見に行ってくる」

執務室でモー乳とラキ乳を飲み比べていた私はカミラにそう言う
と両方を飲みほした。

「お母様も行くの？」

「姿を消して見ているだけだ、姿を見せる事も手伝う事もしない」

「お母様はどうでもいい相手と気に入っている相手とで扱いの差が激しいわよね。シシーが殺されそうになったら助ける気でしょ？」

「知らない所で死ぬ事を防ぐのは対策をしなければいけないから余程気に入った相手以外にはしないが、目の前で親しい友人が危機に陥れば助ける位はする」

「……もしかして私のこの服も何かあったりする？」

カミラはドレスのスカートを摘まみながら言う。

「今まで話していなかったが、そのドレスには色々としてある。前は私の娘だ、気に入らないなら育てたりしないし今もこうしていい」

「……ありがとうお母様」

カミラは執務机から私の前までやって来て抱き着いて来た。

頼る事が無いように今まで言っていなかったがもういいだろう。

今はもう立派な一国の主だしな。

私は姿と気配を消して、討伐対象である魔物の遥か上空から観察している。

始めは空戦部隊について行こうと考えたのだが、魔物の方について行く事にした。

相変わらず魔物はアーティア帝国の上空をうろついている。私にはこいつは何かを探しているように感じる。

飛び回る魔物について回っていると遠くから魔人達がやって来るのが見えた、帝国の飛行部隊だ。

魔物に気が付いた彼らは高度を相手より高く取り、魔物の背後に回り込んだ上で距離を保ち追跡しながら連絡している。

悪くない、訓練の成果か。

それからそれほど経たないうちにもう一部隊飛行部隊が到着し、最初の部隊よりかなり離れて追跡し始めた。

そしてしばらくその状態が続いた後、シシーが率いる空戦部隊が現れた。

高い高度を維持したまま魔物の背後から現れた彼女達は、シシーを先頭に左右に広がり魔物の上空から一斉に魔法を放った後、即座に魔物に向かって加速しながら第二射を放った、空戦部隊の初の実戦が始まる。

「やっぱりお風呂はいいわねお母様」

私の隣で湯舟に浸かりながら気持ちよさそうにカミラが言う。

空戦部隊初の実戦はあっさりと終わってしまった。

飛来する魔法に反応して回避をした魔物は予測して撃たれた第二射を避けきれず被弾し、本格的な空戦になる前に飛行不能になり墜落死した。

多少問題なども起きるかと思っただけで見ていたのだが、あまりにも簡単に事が運んでしまったため初の実戦としては問題の結果となった。

恐らくあまり経験にはならなかっただろう。

上手く行った事は良い、だが経験が足りなくなるのは問題だ。

そこでクログウエルに模擬戦を頼んでみた。

急な頼みにもかかわらず彼女は引き受けてくれた。

正直に言うとして受けてくれるとは思って無かったのだが、クログウエルに感謝だな。

クログウエルと戦闘を行った彼女達はまた一つ強くなっただろう。空戦部隊との戦闘訓練はクログウエルも思ったよりも楽しかったらしく、たまにならまた戦っても良いと言ってくれた。

「思った以上に空戦部隊は強かったわね」

「そうだな。予定ではあの魔物でそれなりの経験を積ませる予定だったんだが、あっさりと討伐してしまった」

相手が弱すぎたという訳では無い筈だ。

「その代わりにクログウエルと模擬戦は相手が違いすぎないかしら

……」

「どうせやるなら相手は強い方がいい、断られていたら私が模擬戦をするつもりだった」

「……それは酷いと思うわよ」

二人で湯舟に浸かりながらのんびりと会話をする。

「お母様、最近新しいデザートが出来たらしいから明日食べに行きましようよ」

「私達二人が揃って普通に外に出て平気なのか？」

「……そうね、持ってきて貰いましょうか」

「いいのか、そんな事をさせて」

「大丈夫よ？向こうから気に入った物があればいつでも届けると言つて来たから」

そう言いながら私を持ち上げ、膝にのせる。

「なんだ？」

「久しぶりにお願ひ、昔一緒に暮らしていた時もしていたじゃない」「仕方ないな」

そう言つて背中を預けカミラの胸に頭を乗せる、乗せ心地がいい。

「で？明日持つて来て貰うのか？」

「ええ、こつちで手配しておくから。お母様は十五時位に私の部屋に来て」

「分かった、楽しみにしておこう」

それからカミラとデザート感想を言いあつたり、ラフィーと風呂に入つたり、メイドが私と入りたいと言ひ出したり。

時々ウルグラードに行つたり、色々としながら時は過ぎて行く。

そんな中、他の二国との軍の規模の差が本格的に問題になり始めた。

飛行部隊と空戦部隊があつても、あまりも兵数の差があると勝てなくなる。

兵の質はこちらが上だろうが数では圧倒的に他国が多い。カミラ一人いればどうにでもなってしまうが、カミラは全てを自分だけで済ませる気は無い。

共に戦うという感じか。私とカミラを頼り、ただ助けてくれと言うようになればカミラはどうするかは分からないが私は見捨てる。

さて、このままではこちらから攻めなくては勝機が無くなる。

カミラの判断次第だな。

こちらから攻める事を決定するべきかカミラ達が考えていた時、バウムルスト王国から降伏し属国になれと話が来た。

断れば宣戦布告すると言う使者に対してカミラは嬉しそうにその話を断った。

これでアーティア帝国は売られた喧嘩を買う事になる。

それからの行動は早かった。元々戦争をする準備は出来ていたアーティア帝国は、すぐに各所に連絡をして準備を整え、相手からの正式な宣戦布告を待つ。

程なくしてバウムルスト王国からアーティア帝国に宣戦布告が行われると、すぐにカミラは各地に配置していた兵を侵攻させ先制攻撃を行った。

「状況はどうなっている？」

会議場にカミラの声が響く。

カミラと側近達は現在会議中だ、私はそれを黙って聞いている。

「先制攻撃は成功しました、多数の主要な地点を確保する事に成功しています」

「出来るだけ平野で戦うな、地形を生かせ」

「はっ」

「ヴァイル王国の動きは？」

「現在は軍の編成をしているようです」

「目を離すな、何かあればすぐに知らせろ」

「かしこまりました」

戦争に関して私は特に何もしないつもりだが、何かあれば助けてしまう気がする。

いや、助けてしまうだろうな。

ただ、私が動く前にカミラが力を出すだろう。

私の出番はきつと無い、私は戦況の推移だけを聞く事にした。

ある日の戦況報告によると、飛行部隊が油とファイアボールで地上を焼き払う作戦を行ったと聞いた。

作戦は上手く行ったようで各地の戦線で効果を発揮しているらしい。

耐える者もいた様だがマジックボックス内に保存されている油の絶え間ない投下と上空から降り注ぐファイアボール相手では長く持たなかったらしい。

相手はこちらの飛行部隊と空戦部隊の存在を知らなかったのか、甘く見ていたのかは知らないが、全く対応できていなかったらしい。

上空に向かって弓や魔法で攻撃する者もいたようだが、上空を高速で移動する彼らに弓が届く事は無く、魔法は簡単に避ける事が出来たらしい。

彼らは全員、無傷で帰還した。

最初の先制攻撃の後、しばらくの間アーティア帝国は攻め込む事はせず迎撃に努めていたが、ある程度被害を出すとバウムルスト王国もむやみに攻めてこなくなった。

敵の中にも飛ぶ者が現れ始めたらしいが、長い訓練を積んだ帝国の空戦部隊と飛行部隊に勝てるはずもなく、簡単に落とされたらしいな。

相手が対応してくる前に戦況を出来るだけ有利にするため、空戦部隊と飛行部隊は連日休息しては出撃を繰り返した。

戻ってくるのは食事と風呂と睡眠のためだけ、それ以外は彼らは空にいる状況が続いた。

こうなる事は事前に部隊員に説明済みで、部隊の皆は弱音を吐く事無く戦い続けた。

食料備蓄施設や武器や魔道具の生産施設などを敵の国の内部にまで侵入し強襲した。

地上の部隊も奮戦し、様々な手段を使い少数で多数を抑えこみ時間を稼ぎ、敵軍がなだれ込むのを防いだ。

宣戦布告と同時に攻めにくく守りやすい地域を手に入れておいた事が大きかったようだ。

やがて地上の戦況は膠着する事になった。

それでも空戦部隊と飛行部隊は敵の警戒の薄い所や無警戒な地域から侵入し空襲を仕掛けて敵軍の被害をじわじわと拡大させていった。

想定以上の成果に喜ぶも、やがて敵は要所だけでなくこちらが兵を置いていない、本来なら進軍しないような場所からも進軍し始めた。

どこから突破されるか分からない状況になった帝国は兵を各地に回すしかなかった。

そして空戦部隊と飛行部隊は兵が減り、手が回らなくなっている戦線を転戦する事になる。

空戦部隊と飛行部隊は長い連戦に疲労がたまり始めていた。

地上も要所は落ちてはいないが他の場所は敵の進軍を妨害する事しか出来ず後退し始め、防衛線が崩れ帝国内に侵入を許し始めた。

会議では打開案を模索していた、側近達は話し合いを続けている。

「数の差が響いて来ましたね……」

「農耕魔法の普及によって軍の人員は増えていますが総人口が増えた訳ではありませんからね」

「相手は広範囲に戦線を広げても兵数に不足は無いが、我々には無理がある。無理をして兵を置いても僅かに足止めする事しか出来ず無駄死になっちゃいます」

それを眺めながらカミラはため息をついた。

「新しく国を興す事を認めずに処分しておくべきだったわね」

「その時は良いと思っただらう？」

「お母様……私は建国の手助けまでしたのよ」

どうなるかなど分からなかったのだから気にする事は無いと思うが。

まあ私も過去の判断が原因で大事なものを危険に晒したとしたら、思う所はあるだろう。

「自分が許せないのなら今やれる事をやる事で多少は気が晴れるかもな」

しばらく考え込むカミラだったがやがて私に微笑みながら言う。

「お母様、行ってきます」

「そうか、気を付けて行って来い」

私がそう言うとカミラは立ち上がり側近に指示を出す。

「今回の苦戦は私の過去の判断と考えの至らなさに責任がある、ここからは私が出るわ」

「陛下……あの二国の建国は当時の国民からの嘆願もあつたのだと聞いております。陛下がそのような事を気になさる必要は……」

「例え嘆願があつてもそれを受け入れたのは私よ。認めないという選択も出来た、それをしなかったのは私だもの」

「……」武運を」

部屋を出て行くカミラの後ろ姿を側近達は跪いて見送った。

女帝カミラが出ると言う事は近衛兵も出ると言う事だ。

筆頭であるラフィーはカミラにつき従い共に敵軍を蹂躪した。

他の近衛兵隊長達はそれぞれの部下を従えて各地を抑えて回り、その間にカミラとラフィーが次々と敵軍を押し返していく。

カミラ一人で問題無いと言った私の言葉は誇張ではなく、彼女が戦いに出てから戦線は押し戻され、逆にバウムルスト王国の領地に食い込み始めた。

現在知っている中で、クログウエル、カミラ、私は人類からすれば理解の外の存在だろう。

圧倒的な強さを持ち、数も畏も全てを力で押し潰す。

恐らく現在の人類では敵対した時点で負けが確定していると言っても過言ではないはずだ。

バウムルスト王国は運が悪かったな。

そしてその全員がアーティア帝国に関わっている、やろうと思えば魔族だけでなく他大陸の統一も簡単だ。

武力だけで統一した国がどれだけ持つかは知らないが。

カミラが参戦した事でこちらが負ける事は無くなった。バウムルスト王国へは一度降伏しないかと打診したのだが断られたそうだ。

その返答を聞いたカミラは容赦なく進軍していった。

やがてバウムルスト王国からアーティア帝国に降伏する町や村が現れ始め、カミラはそれを受け入れて差別する事無く帝国民として扱った。

その対応が知れ渡ると次々とバウムルスト王国の地域が寝返り始め、最終的には降伏を受け入れない王と一部の配下達が首都に立てこもる事になった。

「何故ここまで降伏を拒むのだろうか」

「それは私が聞いたわよ」

今日は首都に攻め込む日だ。現在は朝だが雨が降り、周囲は薄暗い。

私は最後までくらははこの目で見ておこうと首都を包囲している軍のテントに来ていた、そこでカミラと話をしている。

「何と言っていた？」

「誰かの下につく気は無いらしいわ」

「私と同じような考えだった訳だ、奴には力が足りなかったが。敗北を受け入れて力を付けようとは思わなかったのだろうか？」

「性格によっては受け入れられないでしょうね。死ぬ事になっても変えない所は凄い事かも知れないわ」

「この国の王とは次会った時は戦おうと話をしていたのだが」

「お母様が行く？」

「いや、もしも会う事があつたららの話で約束した訳じゃない。カミ

ラに任せる」

「じゃあ行ってきます、お母様」

「油断はするなよ」

いつもの様に挨拶を交わし、テントを出て行くカミラの後を追うように私も外に出る。

雨に打たれながら首都を見渡せる場所に移動して眺めていると、空戦部隊と飛行部隊が首都の周囲を警戒しながら飛び回っているのが見える。

やがてカミラが飛び立ち、城へと向かって行った。

カミラが向かって暫くすると、閃光が薄暗い世界を照らし爆音が雨の音をかき消した。

激しい戦闘の余波で城と首都が瓦礫に変わり、ある時突然静寂が戻り雨の音が戻って来た。

こうしてアーティア帝国とバウムルスト王国の戦争は、バウムルスト王国の消滅で決着した。

最後は王がカミラとの一騎打ちを望みカミラはそれを受けたという。

王は私の事を話していたようだがカミラは「お母様の相手にお前では足りない」と答えたそうだ。

バウムルスト王国は消滅し、領地はアーティア帝国の一部となった。

急に増えた領地の対応に側近達は大忙しだ。

結局最後まで動きが無かったヴァイル王国はある時突然属国になる事を望んだ。

何か裏があると疑ったカミラが側近達に情報を集めさせた所、先の戦争でカミラの強さを知った王が決めた事だと判明した。

ヴァイル王国民の中には自分達の王を腰抜けと言う者も多くおり、国も一時的に荒れたがやがて収まった。

先の戦争のカミラの事を知っている者からは英断であったと言われているらしい。

こうして思わぬ出来事もあり、魔人の国はアーティア帝国によって統一される事になった。

それからは忙しい日々が続いた、とは言っても私が忙しい訳では無いのだが。

私はいつもの様に式典に出席したりするだけで実際に忙しいのはカミラと側近達、その配下の者達だ。

突然領地が大きく増えたのだから当然だ。準備はしていたと言っていたがそれでも大変なようで、元バウムルスト王国民の中から多くの有能な者を登用した。

今の所元バウムルスト王国民もヴァイル王国民も帝国の支配に不満は持っていないようだ。

支配後の対応が良かったのだと元バウムルスト王国の側近が話してくれた。

アーティア帝国に敵意を持っていた者の大半はあの戦争で死んでおり、現在残っている者は中立や友好的な者達ばかりらしく、いきなり国が荒れる事は恐らく無いはずだと言っていた。

これでアーティア帝国の成長を抑え込んでいた問題は消えた、これから帝国は成長し始める事だろう。

魔人の国がアーティア帝国によって統一された後、帝国は周辺地域の開拓を開始した。

そんなある日、カミラから濁った熱湯が噴き出している地域があると話をされた。

「濁った熱湯が湧き続けている地域か」

「ええ、お母様なら何か分かるかと思って」

少しずつ周辺地域を開拓しているうちに地面から煙を吹いている地域にぶつかっただけならいい、部隊が探索している途中で気分が悪くなる事もあったという。

「それはおそらく温泉だと思う」

「温泉……？」

私は温泉をカミラに説明した上で、その地域を開発して温泉街を作る事を提案した。

「温泉街……いいわね」

「有害な物が出ている所はしっかりと封鎖して近付けない様にしておけよ」

「分かっているわ、すぐに計画を立てましょう」

私も設備などの相談に乗り、アーティア帝国は温泉街の建設に着手した。

現在私はウルグラードのティリア魔法技術学校内にある校長室に居る。

校長の椅子にはミナが座り、様々な書類に目を通していた。ケインから後を継いだ彼女は新たな校長として頑張っている。

「ミナ、来たぞ」

「いらっしやい、そこに座って……何か飲む？」

「ではモー乳を貰おうか」

「それ好きよね」

ミナは立ち上がり飲み物を用意し始める、やがて準備を終えて私の正面に座る。

「今日はルーテシアに会うんでしょ？」

「そうだな、念話でそろそろ会いたいと言っていたから来たんだ」

ルーテシアは無事私に念話を繋げるようになり、現在私に定期的に連絡をしているのはルーテシアだ。

ミナと比べると連絡してくる頻度が高いが少し世間話をする程度である事が多い。

「あの子、あの事があってから男性は苦手になってるから……怖いんじゃないかって嫌いなだけらしいけど」

あの事とは以前ルーテシアが変な男に好かれて付きまとわれた事だが、あれからも何回か似たような事があつたらしく男嫌いは酷くなっていた。

普通に接する事は何とか出来るが恋愛的な意味で好きになれないみたいだな。

「無理に結婚はしなくてもいいけど……どんな形であれ幸せになつて欲しいわね」

ミナはルーテシアの幸せを願う、私もルーテシアに幸せになつて欲しいと思っている。

記憶をいじれば男に対する考え方も変わるが、頼まれたらやってやろう。

「まだまだ時間はある、もつと時間が経てば変わるかもしれない」

「そうね……もしかしたら運命の人に出会っていきなり結婚したりするかもしれないし」

「そんな事があると良いな」

その後しばらく話した後ミナは仕事に戻り、時々会話を交わしながら校長室で彼女が帰宅する時間まで待った。

「お姉様！」

やがて学校が終わり、残っていた教師達も仕事を終えて帰り始める時間にルーテシアが校長室にやって来た。

部屋に私とミナだけだと分かるとソファに座っていた私に駆け寄って膝にのせる。

「私を膝に乗せるのが好きだなお前は」

嬉しそうに微笑みながら私を膝にのせるルーテシアはもう子供ではない。

薄緑の長い髪を持つ大人しそうな美人と言える姿に成長していた。

「座り心地が悪いですか？」

「いや、かなり良い」

聞いてくるルーテシアに答える。実際ルーテシアの膝の上は柔らかいし胸が大きいので頭も丁度良く乗る。

「良かったです」

そう言っただけ私を後ろから抱きしめて来るルーテシア。

彼女は私をお姉様と呼ぶ割に妹のような扱いをしてくる事がある。

私の方が遥かに年上なのは知っているはずだが、大抵の者は見た目に影響されやすい。

子供に見える私ではこういう扱いになるのも仕方ないのかもしれない。

「ルーテシア、私も仕事が終わったから取り敢えず帰りましょう」

「お母さん……そうですね、帰りましょうか」

彼女はそう言う私を抱いたまま立ち上がり部屋を出る、ミナが校長室に鍵をかけて三人で彼女達の家に戻った。

「お帰りなさいミナ、ルーテシア、我が師よ」

家ではミナの補佐になったケインが迎えてくれた。

学校の事の他にも忙しくなった妻の代わりに家事を行っているらしい、出来た夫だと言えるとと思う。

夕食もケインが用意したのだが意外と美味しかった。

忙しい合間を縫ってずっと練習していたそうだが、私が褒めると彼は「妻の味には敵いませんが」と言いながらも満足そうに笑っていた。

「お姉様、明日は休日なのでお出かけしませんか？」

「いいぞ、時間はある」

「お昼は私が作りますから食べたら出かけましょう！」

私がルーテシアからの誘いを受けると彼女は笑顔を見せて喜び、昼食を作ってくれると言う。

彼女も料理を練習していて腕は中々良い、これからもっと上手くなるだろう。

それからケインとミナ、ルーテシアと私で風呂に入り、今はルーテシアに抱き着かれながら寝ている。

ルーテシアにはすでに私が自分でも分からない何かであるという事を話してある。

彼女はそれを聞いても動じる事無く「お姉様がどんな存在でも私にとってはお姉様です」と言って受け入れた。

ケインもミナもルーテシアも私が自分達とは違う、大きな力を持つ何かだと知っても普通に接してくる。

私の胸に顔をうめて静かな寝息を立てるルーテシアの柔らかな髪を撫でながら、夜が明けるのを待った。

翌朝、ミナの作った朝食を四人で食べて午前中はゆつくりとした時間を過ごす。

特にミナとケインはケインが無理をして死にかけた時以降、しっかりと休むようにしているようだ。

午後はルーテシアが作った昼食を食べてからルーテシアと出かける。

二人で大通りを歩きながらどこへ行くこうか話していると声をかけられた。

「あれ？ルーテシア先生？」

数人の種族の違う男女が声をかけて来た、改めてウルグラードでは差別が無い事が分かる状況だ。

この町では差別をする者はすぐにいなくなる、そういった者にこの町の住人はいい顔をしない。

「あら、皆さんもお出かけですか？」

ルーテシアと数人の若い男女が話し始める、先生と言っているという事は生徒なのだろう。

「せっかくの休みだしね、先生も買い物？」

「ええ、お姉様と一緒にね」

「お姉様？……ってこの子凄く可愛いんだけど……」

若者たちは私を見る、どう見ても子供な私の姿に困惑しているように見える。

「ルーテシアの姉代わりのクレリアと言う、よろしくな」

「えっと……よろしくお願いします？」

困ったような顔で答える彼ら、その時彼らの一人が気が付いたように言う。

「あつ、そうだよ。ルーテシア先生って森人じゃん」

「あー、そうだった……と言う事はクレリアさんは……」

そう言いながら私を見て来る彼らに私は言う。

「見た目はこうだが幼い頃のルーテシアの世話もしていた。だから姉代わりな訳だ」

「なるほど……すいませんでしたクレリアさん。その……見た目でどうしても……」

「この見た目だからな。いつもの事だし仕方ないと分かっている、気にするな」

「は、はい。ありがとうございます」

少し学校でのルーテシアの事を聞いてみたいな。

「ルーテシアの学校での様子はどうだ？私の予想だが君達は生徒なのだろう？」

「はい、先生に教えてもらってます……先生は授業も分かりやすい

し人気ありますよ」

「優しいし可愛いしね、先生の事嫌いな生徒なんてほとんどいないと思います」

「皆さん恥ずかしいのでやめて下さい……」

褒める生徒達に照れるルーテシア、その反応のせいで可愛いと言われているのではないかと思う。

しばらく話していると彼らの一人が私に言う。

「……それにしてもクレリアさんってとんでもない美人ですよね。

俺こんな美人今まで見た事無いですよ」

「周りからはよく言われるな」

すると他の女子が言う。

「なに？あんたクレリアさんに惚れたの？あんたじゃ無理よ、諦めなさい」

「う、うつせー！お前らだって見とれてたじゃねーか！」

「う……それは、こんな美人見た事無いし……ねえ？」

男女問わず顔を赤くする、褒められて嫌な訳では無いがそろそろどこかに行きたい。

「ルーテシア、そろそろ行かないか？」

「そうですねお姉様、みんな気を付けてね？あまり夜遅くまで外にいないように」

そう言っつて別れようとする、数人の……主に男子が待ったをかける。

「あのーこれからみんな服でも見に行こうと思ってるんですけど先生達も一緒にどうですか？」

「どうする、ルーテシア？私はどちらでも良いからお前に任せる」

「うーん……じゃあ一軒だけ一緒に行きましょうか、その後は好きなようにするという事で」

「やったーじゃあ行きましょうルーテシア先生、クレリアさん。いい店知ってるんです」

仕方ないと言うような表情で答えるルーテシア、彼らは喜び私達を案内しながら店に向かう。

「うわ！クレリアさん似合うー！」

「これは……惚れる……」

「お姉様可愛いですよ」

服屋に到着した私達は全員で服を見ていたのだが、彼らの一人が私に似合う服を着て欲しいと頼んで来た。

服を着てやるくらい大した事では無いので引き受けたのだが、次々着せては皆に見せている、疲れたり飽きたりしないのか？

今の姿は半そでの鳩尾辺りまでしかない上着に太もも丸出しの短い魔物革のパンツ姿だ。

胸と腰回りしか覆って無いしへそも丸出しだな。

「お姉様、後ろを向いて下さい」

「ん？分かった」

ルーテシアがそう言うので私はルーテシアに背中を見せる、すると髪留めを使って私の黒髪をポニーテールにした。

「これで良し……お姉様もういいですよ」

私は皆の方に振り向いた、すると他の皆が騒ぎ出す。

「先生分かってる！」

「これはヤバいな……」

「髪型一つでこんなに変わるのか……」

「何あの子可愛い……いいなあ……」

騒ぐ彼ら以外にも関係のない客の声も混じり人が増えている、こんなに騒いで大丈夫なのか？

「あまり騒ぐと迷惑になるぞ？ルーテシアも一緒になって騒ぎ過ぎるな」

「あ……ごめんないお姉様……皆も他のお客さんもいるのだからほどほどにね？」

「ごめん先生、クレリアさんがあまりにもほら……ねえ？」

「ちよつとはしやぎすぎたね、クレリアさんの姿に浮かれちゃって

……」

周りから注目されている事に気が付いて大人しくなる彼ら、何事も程々にしないと。

「お姉様、この服買いませんか？私がお支払いしますから」

「いらん、私はいつもの服で十分だ。買った所で着る事は無いと思う」

私の着ているワンピース以上にいい物はそう無いだろう。

「そうですか、残念です……その、この髪留めだけでも買いませんか？お姉様の着ているワンピースにも髪色にも合う物を選んだんです」
そう話すルーテシアの手には大きな赤いリボンが付いた髪留めがあった、気落ちしているようなルーテシアを見て私は聞く。

「私に似合うか？」

「はい、とても」

「では買って私に付けてくれ」

「……っ！はいっ！」

彼女はすぐに購入しに行く、その間に私はいつものワンピースに着替えると戻って来たルーテシアが私の髪にリボンを付ける。

どうやらポニーテールでもストレートのままでも使える様だ。

「綺麗ですよお姉様」

「ありがとう」

言葉を交わしながらルーテシアが私の手を取る、そのまま私達は生徒達に別れを告げて店を出る。

「先生ってホントにクレリアさんが好きなのね」

「産まれた時からあんな美人でしつかりした姉がそばにいたら嫌いにはならないよねえ……」

「分かる」

後ろから生徒達の声が聞こえるが、気にせずにルーテシアに手を引かれながら次の行き先を話し合った。

その後一緒に色々な店を見て回り、ルーテシアは大満足のようにだ。ルーテシアが買ってくれた髪留めは壊れない様に保護しておいた。夕食の時間になる前に家に帰り、四人で食事をした後に転移でリリテイアに帰った。

別れる際にルーテシアが寂しそうだったが今は向こうが本拠だからな。

ある日私はカミラに亜人種の作った三国について尋ねられた、そして私もしばらく行っていない事に気が付く。

「しばらく行っていないから今どうなっているかは分からないな」

「お母様のしばらくと言う事はそれなりに昔かしらね」

カミラの部屋でくつろぎながら語り合う。

「確かにどれだけ前かは覚えていない」

「覚えている時の状態だけでも教えてくれないかしら?」

「彼らの事についてはあまり言いたくないな」

「なんで? 仲が悪かった訳でもないんでしよう?」

「仲が良かったからだ、本来外部の者に話さないはずの事まで聞いているから話せない内容がある」

「なるほど。それなら見た目とか何が得意とか、種族の大雑把な性格の傾向とか……そう言った事は教えてくれる?」

「カミラが言ったように古い情報かも知れない、それでもいいのなら話そう」

私は彼らの事について話す。種族の身体的な特徴や得意な事、大まかな寿命などを簡単に教える。

「お母様はなんでしばらくその国々に行ってなかったの?」

「向こうの大陸には当時四つの国があったのだが、戦争が起きてな」

「四種族も居たらぶつかり合う事もあるわよね」

カミラはそう言って先を促す。

「当時人間以外の種族とはそれなりに交流があった私は手助けを頼まれる可能性があった。私が手伝えれば手伝った勢力が必ず勝つてしまふ、それで行くのを控えたのが始まりだった気がする」

「四国を戦わせて見物していたの?」

「いや、私が戦争を起こした訳ではない。戦争になってしまったから行かなくなった。私が勝つ国を決めたく無かったからな、それから他の事に気を取られて今まで忘れていた」

「お母様らしいわね……特に他の事に気を取られて忘れて忘れる所がカミラはそう言って呆れる。

「どこか一国とだけ交流していたら多少は助けていたかな。……いや、やはり何もしていなかつただらうな」

私がそう言うとかミラが聞いてくる。

「三国と交流していたから手を貸す勢力を選ばなくてどれも選ばなかつた訳では無いの?」

「そうなのか?」

「私に聞かないでよ……三国全てに手を貸せばよかつたんじゃない?」

「そんな事をしたら人間が滅びるぞ」

「お母様はそんな事気にしないでしょ?」

「勝手に滅びるならともかく、私が深く関わった事でどこかが滅びるのは避けたいな」

「なるほどね、だからどこも助けずにただ見ていたと」

「そうなるな。これから私の考えが変わる可能性もあるが、今の所はそう考えている」

私がそう答えるとカミラは小さく笑って勢いよくソファにもたれる。

「どうした?」

「お母様は自由だなと思って」

「私は基本的にはやりたい様に過ごすが、遊びで何かを滅ぼしたり誰かを殺したりはしない。話だって聞くだけは聞かし、相手によつては多分我慢もする。例えばカミラの頼みならよほどの事でない限り聞く気はある」

「……ありがとうお母様」

私はカミラと二人でゆつたりとした時間を過ごした。

「南の海に山が出来ている?」

ある日の事、私はカミラからそんな話を聞いた。
飛行部隊が偶然発見したようだ。

「ええ、更に輝く液体が周囲に流れ出しているらしいのよ」
「輝く液体？」

「念の為近くには行かなかつたらしいけど、遠目からだ山の上から流れる明るい液体が大量に流れ出ているように見えたらしいわ。近い内に調査するつもりよ」

私は座っていたソファから立ち上がる。

「見に行くの？」

「もちろん見に行く、気になるからな」

「お母様の事だから平気でしようけど、気を付けてね？」

「分かった、行ってくる」

私はカミラに答えて部屋のバルコニーから南の海へと飛び立った。

アーティア帝国南に広がる海に向かうと、遠くに山が見えて来た。確かに山から光る液体が流れている、だがこれはただの溶岩だな。確か火山活動だったか。惑星の中は温度が高い溶岩が流れていて何かのきっかけで地上に噴き出したりするらしい。

そうなるもただの惑星の活動という事になる、特に問題は無さそう
だ。

私は上空から溶岩が噴き上がる噴火口と周囲から立ち上る蒸気を
見ている。

たまには熱めの風呂にも入ろう。

私は噴火口の底に向かって降りて行く。

途中で幾度も噴きあがる溶岩が私に降りかかる。

昔は溶岩の風呂も入っていたな。

私はワンピースを解き裸になる。そして火口の溶岩にそっと足か
ら入って行く。

軽く音がして私の全身が溶岩に沈む。

上を見るとここが火口の底である事が良く分かる。周囲は溶岩で明るく照らされ、何かが噴出するような音や湧き出す音が絶え間なく聞こえて来る。

改めて入ると溶岩風呂も悪くない。噴き上がる溶岩が降りかかるが特に気にならない。

うろ覚えではあるが、昔入っていたのは火口ではなくただの溶岩だまりだったと思う。

火口の底で溶岩に浸かる。この風呂は誰かと一緒に入るのは無理かも知れないな。

カミラやクログウエルなら平気だろうか？今度聞いてみよう。

この場所は私の溶岩浴場にしておこう。

私は溶岩から出て服を纏い、適当な場所に金属製の柱を立てると「アーティア帝国溶岩浴場」と彫り込んだ。

「ただいま」

「お帰りなさいお母様」

首都リリティアに帰った私はカミラの執務室にやって来た。

「どうだった？」

カミラは執務を中断して私に尋ねる。

「ただの火山活動だと思う、噴火して溶岩が噴き出しているだけだ」

「どういう事？」

私はカミラに私ができる範囲で説明した、彼女は納得したのか感心したように言う。

「なるほどね……地下がそんな風になっているなんて……これはお母様の中にある知識よね？」

「そうだ、今説明した程度しか分からないが最初からあった知識だ」

「お母様や私の事も長い時間を生きれば分かる時が来るのかしらね？」

「分から無い。私は今、こうして誰かとただ過ごしているだけでも

満足している。いつかは知りたいとは思いますが、急がなくてもいいと思っっている」

「私は自分の事は分からなくてもいいかな……分かるならそれに越した事は無いけれど、私はお母様と一緒にいる今が大事だわ」

「カミラのしたいようにしたらいい」

カミラはどちらかと言えば私に近いはず。

もしかすると私と同じ位の寿命があるかもしれないな、私は最近自分が不老不死なのでは無いかと思いつ始めているが。

ラフィーとシシーの二人に頼まれて訓練をしている時、ふと翻訳魔法を使ったままだという事を思い出した。

訓練が終わったら一度解除してみよう、どれだけそのままにしていたかあまり覚えていないな。

そう考えていると空中で模擬戦をしていた二人が私の元にやって来る。

「帝母様、訓練を見ていただきありがとうございます」

ラフィーはそう言って頭を下げた。

「クレリア様、何か悩みでも？」

考え込んでいた事に気が付いたシシーが聞いてくる。

彼女は私を様を付けて呼ぶ、呼び捨てでも構わないと言ったのだが、流石に無理だと断られた上にラフィーにもやんわりと叱られた。

「訓練には全く関係ない事だ、気にするな」

「そうですね、気になります但しクレリア様がそうおっしゃるなら聞きますせん」

残念そうなシシーを見て、隠す事でもないので話す事にする。

「そんな顔をするな。隠す事でも無いから教えるが、翻訳魔法を使ったままだという事を思い出したただけだ」

「翻訳魔法ですか……？」

不思議そうなシシー、隣で聞いているラフィーも気になっている様

子だ。

「言語の異なる者と会話するための魔法だ。相手の言葉を聞き取る事や、言葉を伝える事が出来る様になる。クログウエルが私達と会話出来るのも私が彼女に翻訳魔法を教えて使っているからだな」

「……それならそのままでもいいですよ？」

シシーがもつともな意見を言うが、自力で言語を習得する事が出来るかも試してみたい。

「急に思い出したただけだ。深い意味は無いし訓練中に考える事では無かった、悪かったな」

そう言つて話を打ち切る。そこで模擬戦は終了になったが、気になった私はその後に翻訳魔法を切つて会話出来るか試してみた。

その結果カミラとは普通に会話可能だった。

魔人とは不明な言葉があつたがそれなりに会話が可能で、ウルグラーデにも行き試した所普通に会話可能だった。

いつの間にか会話可能になっていて驚いたが、クログウエルは駄目だった。

翻訳魔法を切つて話してみたが、お互いに何を言っているか全く分からなくなつた。

私はクログウエルに頼み、言語の習得が出来るか手伝つて貰う事にした。

その代わりに手伝つて貰っている間は私がクログウエルに食事を作ると約束した。

それから結果だけを言えば、私は言葉を聞いているだけで自然と言葉が分かるようになり、それと同時に話す事も出来るようになっていた。

最初は駄目で元々と思ひ、分からないままに会話を交わしていた。だが、すぐに部分的に分かるようになり、僅かな時間で問題無く会話出来るようになったのだ。

私はこの程度で習得出来るのなら今後は翻訳魔法は必要な時だけにしつかりと習得しておこうと考え直した。

私はアーティア帝国の港に建造された魔道船を見ていた。飛行部隊と地上部隊に警備された魔道船はもう一つの大陸へと渡るための準備をしている所だ。

大陸を統一し領土を広げたアーティア帝国は急速に発展し、私はこの国に留まりその発展を見続けた。

帝国の輝かしい未来を帝国民達は期待し、それに答えるように帝国は豊かになり大きくなって行った。

技術も目覚ましい進歩を遂げ、海を渡るための魔道船を生み出すに至った。

私は以前の休眠から目覚めた後、世界全てを見ていない。だからまだ別の大陸がある可能性も残っている。

しかし、まずは位置がはつきりしている私が居た大陸からが無難だろうとこの計画が行われた。

この大陸もまだ全てを開発してはいない、大きく帝国の領土が増えたと言っても依然としてその大半は魔物の勢力圏だ。

ラフィーは結婚し子を産んだ。その後は専業主夫の夫に家庭を任せ、現在も近衛兵の筆頭として私達の傍にいる。

カミラは彼女に家族との時間をしっかりと取り、大事に出来るように配慮した。

シシーは第一空戦部隊の隊長から現在は帝国空戦部隊総長になって忙しい日々を送っている。

軍の規模も拡大し、少なかった飛行兵も十分な人数となり再編成が行われた。

細かい事を言えば語り切れない程の出来事があった。

魔道船の準備と並行し大陸へ渡る人員の選抜が行われた。

そしてラファイアが皇帝の代理として全権を委任され、相手の国と交渉を行う予定になっている。

「ラファイア、ルセリア神王国と言う国は人間以外を恐らく認めない。関係を持つのなら森林国家ユグランド、魔工国ガンドウ、獣王国カルガ、この三国のどれかにした方が良い」

私は出発を控えたラファイアへ話しかける。

「かしこまりました帝母様、ご忠告ありがとうございます」

「お母様、そのルセリア神王国はそんなに酷いの？」

カミラが私に尋ねる。

「以前の姿しか知らないから今もそうとは限らないが私が居た頃はそんな物だった。人間以外を劣等種と呼び「劣等種は存在が罪」などと言いつつ殺したり、奴隷にする者が普通に居た。当時の王はそのような思想は持っていないがその状況を変えようとはしていなかった、だから恐らく現在も変わっていないだろう」

私がそう言うときカミラとラファイアは顔をしかめる。

「何それ……ラファイア、念のため言っておくわ……手を出されたら遠慮無く反撃しなさい。戦争になっても構わない……私が許すわ」

「はい、陛下。他の者にも通達致します……それでは」

ラファイアは一礼すると魔道船に向かって行く。

その数日後、私とカミラは彼女達の出発を見送った。

ラファイア達の乗った魔道船を見送った日の夜、カミラと共に風呂に入っていると彼女が呟く。

「私達は転移で簡単に行けるのに変な感じだわ……」

「転移は簡単な魔法では無いし、用がある度に私達が全員を送る訳にもいかない。魔人達は他の大陸に行くための手段を欲し、魔道船を作り上げた。自力で移動出来るようになったのだからそれで十分だろう」

カミラの呟きに答えると、それを聞いたカミラは目を瞑る。

「そうね……魔車のように沢山普及すればきつと大勢の種族が大陸間を行き来するようになるはず、これから先が楽しみだわ」

「これから先か……やはりアーティア帝国が続いて欲しいと思うか？」

「長く過ごして来た私の国だしね。より良い未来を願う気持ちはあるわよ？お母様の名の付いた国が無くなるのも面白くないし……」

「そうか、出来るだけ長く繁栄するといいな」

「うん……」

そんな事を話しながらゆったりとしている時に私は呟く。

「溶岩風呂もいいがやはりこちらが一番かな」

「……お母様、普通あれをお風呂とは言わないわ……他の者を誘っては駄目よ？」

「分かっている、私には似たような物であるというだけだ」

以前誘ったのだが、クログウエルにはそんな趣味は無いと断られ、カミラにも無理では無いと思うが行きたくは無いと断られた。

まあ無理強いするつもりは無い。

それから約半年後。別大陸へと渡っていた魔道船が首都リリティアへと帰還し、すぐにラフィーによる報告会議が開かれた。

報告によると森林国家ユグランド、魔工国ガンドウ、獣王国カルガの三国と友好関係を結ぶ事に成功したようだ。

最初の一国と接触した後、三国間で僅かだがつながりがあったようで、他の二国とも話し合う事になったらしい。

その後三国間での話し合いが進み、無事に三国との同盟締結に至ったという。

報告会議が無事に終了した後、私はラフィーと共にカミラの部屋に居た。

そこでカミラがしみじみと呟いた。

「最初はどこか一国と同盟が結べれば良いと思っていたけれど……」

ラフィーに任せて正解だったわね」

「三国がつながっていた事と、各国の王が私達の事を頭から否定せず話し合う決断をしてくれた事が良い結果を生んでくれました」

ラフィーはそう言うが、それだけでは無いだろう。

「何よりもラフィーを始めとした皆のおかげよ。あなた達は私が期待した以上の結果を出してくれた……ありがとう、今回の事に対するお礼は正式にさせて貰うわ、全員にね」

「感謝いたします、皆も喜ぶでしょう」

カミラがそう言うのとラフィーは嬉しそうに返事をした。

「帝母様、お尋ねしたい事があるのですが……」

「何だ？」

しばらく皆で他愛のない話をしていると不意にラフィーが私に尋ねる。

「帝母様は向こうの国の一つと深い関係を持っていたのですか？」

「なにかあったのか？」

私がそう答えると彼女は話し始める。

「三国との対話時に、私が陛下より全権を任されている事を話したのですが……森林国家ユグラドの女王が何故か動揺したように見えたのです」

「それで？」

「その数日後、ユグラドのエルフィ・マルマロウ女王に帝母様の事を知っているか聞かれたのです」

ああ、エルフィか。

「私は陛下のお母様である帝母様である事をお伝えしたのですが、その後色々質問されました」

「なるほどな、エルフィは森人だからまだまだ現役だろう」

「何かご関係が？」

「彼女が建国した時、国が安定するまで手を貸した事がある。他の二国も同様に助けたが、他の二人はもう現役を退いているのだろう。忘れられている可能性もあるが」

「なるほど、女王のあの勢いはそういった理由でしたか」

「全て話したのか？」

「はい。問題無いと判断したので陛下が魔人では無い事や、帝母様が陛下の義理の母である事などをお伝えしました」

「また会う事になるかも知れないな」

視線をエルファイからカミラに移して問うとカミラが答える。

「そうね……立場上会う可能性は高いと思うわよ？」

「何も言わずに離れた事を責められそうだ」

「お母様が原因なので素直に受けるべきだと思うわ」

「そうだな」

私はそう答えて他愛のない話に戻るのだった。

それから時間をかけてアーティア帝国と三国は関係が続けた。

仲を深め、技術の交換をして、やがて三国も魔道船を開発した。

それぞれの国もアーティア帝国との接触を機会に陸路での積極的な交易を開始した。

更に港を作り上げてアーティア帝国と交易も開始され、四国は大いに繁栄する事になった。

一方で人間の国は関係を拒否して閉鎖的な国となる、アドルなら交易を受けると思ったが。

もしかしたら王が交代しているのかもしれない。

その後、ウルグラードだけは私とつながりがある者がいた為に、人間の国で唯一四国と交易している都市となった。

ウルグラードが四国との交易関係を結んだ後、ケインが倒れたと連絡があり、私はウルグラードに転移した。

「病気ではない、種としての寿命だ」

私はケインの寝室でケイン本人とミナ、ルーテシアに説明した。

ミナとルーテシアはいつか来る事だと覚悟していたのかそれほど取り乱す事は無かった。

「痛みを抑えて、動けるようにはしてやる」

そう言うのと二人はお願いしますと言って部屋を出た。

「さて、ケイン」

「はい、師よ」

寝ているケインの横に座って魔法をかけながら話しかける。

「以前も言ったかもしれないが、私は寿命も伸ばせる。ケイン、お前は どうしたい？」

そう言うのとケインは私をじっと見つめてやがて話し出す。

「……私はこのまま逝こうと思います」

「そうか、お前もその選択をするのだな」

私がそう言うのとケインは上半身を起こして私を見る。

魔法による調整は終わった、動くだけなら問題は無いはずだ。

「師よ、これは私の仮説なのですが……短命な者が後天的に長命になると恐らく……精神、心……言い方は様々ですが、それが持たないのでは無いかと考えています」

私は黙って彼の仮説を聞いていた。ただ長い時間を過ごすだけでそのような影響を与えるだろうか？

「人生に満足しています……ただ、こうして自分が寿命を迎える事になった時感じたのです、これ以上の時を生き続ければきっと自分を保てなくなる……と」

自分に死が迫って初めて気が付いたという事だろうか。

「数百年生きる種族の私でさえもこうなのです。百年程しか生きる事が出来ない者達がどう感じたか予想出来ます……長く生きるには相応の精神が必要なのだ……そう、思います」

「私はそれを備えていると？」

「はい。師にとってはそれが当然の事であり、その精神も相応の物なのでしよう。……短命種を長命種にするには寿命を延ばすだけでは恐らく不可能です……やがて心を壊し、ただ生きているだけの何かになるでしょう。今まで師の提案が断られていたのは、幸せであった

と同時にこれを感じたのではないかと」

寿命を迎える時にしか分からない感覚か。

私に分かる事は無さそうだ。

「精神にも手を加えるかもしくは……耐えられるだけの精神を持つ者ならば可能かも知れませんか……そのような者が存在するかどうかは分かりませんが」

この会話をした約一か月後、彼は逝った。

盛大な別れの儀式が行われたが、私とカミラ、クログウエルは出席しなかった。

別れは先に済ませていたからな。

学校はすでにケインが居なくても問題無くなっていた、彼はやるべき事を全てやってから逝ったようだ。

ミナとルーテシアはしばらくは元気が無かったが、やがて元気を取り戻した。

ケインの死を境にルーテシアは教師から副校長になり、校長であり母親であるミナを補佐するようになった。

恐らくこのままルーテシアが次の校長になるのだろう。

ウルグラードとも交易が開始された後、平穏で楽しいと言える日々が続いた。

友人達と関わりながら帝母としての役目を果たす日々。

エルファイとも再会した。

彼女は怒りながらも私の無事を喜んでくれた。

他の二国とは距離が開いてしまったが、私は再び彼女達の国へ訪れるようになった。

技術はますます向上し、念話ではないが遠距離と通信する方法が開発され、魔道船の性能も向上した。

それらの技術の向上の原因の一つになったのが魔法合金だ。

四種族の技術開発者が共同で開発したこの金属は、魔法金属を組み

合わせる事で様々な特性を持った金属を作る事が出来る物だった。

この魔法合金の登場によって技術は再び急速に発達した。

大陸間の移動は早く簡単になり、誰でも料金さえ払えば自由に行き来が出来るようになった。

ラフィーが逝き、シシーは結婚して主婦となり、やがて孫を持った。初期の中核メンバーは全員逝ったが、跡を継いだ者達は優秀で、彼らがいる間は帝国は安泰だと思えた。

そんな日々の中、ウルグラードがアーティア帝国所属になりたいと言っているという報告をルーテシアから念話でされた。

『何故私に言う？帝国のトップはカミラだぞ』

『カミラお姉ちゃんがクレリアお姉様に言うようにと。関係が深いクレリアお姉様に任せるそうです。カミラお姉ちゃんとしては受け入れる事に賛成だそうですよ？』

カミラは最終的な決断を私に任せた様だ、迷う事は無いな。

『アーティア帝国は正式にウルグラードをアーティア帝国領として認める』

『ありがとうお姉様。事を起こして駄目だったら問題ですもの、事前に二人に話しておきたかったの』

『基本的には関わらないが、どうにもならなければ連絡しろ。悪いようにはしない』

『そうならないように気を付けるわ、それじゃまたねお姉様』

ルセリア神王国は今に至るまでウルグラードに今まで散々手を出していた。

それが原因でウルグラードはルセリア神王国からの離脱とアーティア帝国への所属を宣言したようだ。

その宣言を聞いたルセリア神王国はウルグラードに兵を出したが、アーティア帝国と同盟の三国もウルグラードを守るために兵を出した。

四国間での交易と技術交流によって発展した国力の差は明らかで、同盟軍はルセリア神王国の軍を一蹴した。

その後正式にウルグラードはアーティア帝国の領地になった。

後で聞いた話だがウルグラードは報告されていた事以外にも細かくルセリア神王国からちよつかいを出され続けていたようで、我慢の限界だったらしい。

ウルグラードを不当に扱わないという約束はアドルが王である間のみだったはず、やはり王が変わっていたようだ。

これで事が収まると思っていたがそうはいかなかった。

アーティア帝国領となった後もルセリア神王国は手を出し続け、とうとうカミラは「これ以上ウルグラードに干渉すればルセリア神王国を攻め滅ぼす」とまで言い警告した。

ルセリア神王国がそれを無視して再び手を出したため、カミラは宣戦布告した。

以前の戦争で他国の技術を奪っていたルセリア神王国だったが、それをはるかに超えるアーティア帝国と同盟三国の軍の前にあつという間に敗北した。

カミラに徹底的に攻められたルセリア神王国は消滅し、その領土は四国間で分配された。

ルセリア神王国の中には差別意識が無い事を隠して生活していた者もそれなりに存在し、彼らはウルグラードに移住を希望し受け入れられた。

心の底から差別に染まった者は差別をやめ共に暮らすか、考えを変えず隔離された町で生きるかを選ばせた。

すると多くが隔離生活を選んだ、どうしても他の種族を認められなかったようだ。

人間と言う種族は戦争による徹底的な殲滅の影響もあり、その数を大きく減らす事になった。

そして各国はしばらくの間は戦争の後始末を行い、それが終わると
魔人、森人、大地人、獣人、人間の五種族は共存する道を歩み始める。

ある日の夕方、私はウルグラードのミナの元を訪れていた。ウルグラード自体には時々来ているが、今日はミナが家にいるので会いに来た。

「今飲み物を用意するわね」

部屋のソファに座るとミナは飲み物を用意しにキッチンに向かった。

テーブルの上に資料のような物が置いてある、私は何気なくそれを手取る。

「魔道飛行船研究」と書かれたその資料には、大勢を乗せて空を移動する乗り物の事が書かれていた。

面白いな。

「お待たせ……あら、それ読んでは？」

ミナが飲み物を私の前に置き、ソファに座る。

私はミナに問いかけた。

「これを書いたのは誰だ？」

「それは以前テイリア魔法技術学校の魔道具科を卒業した、ネベリオ・カシルズと言う男が持って来た物よ」

「今は何処にいる？」

「ウルグラードの魔道具店で働いているわよ？ 研究費を出してくれる出資者を探しているみたいで、私の所にも来たわ」

カミラにも話してみよう、もし失敗したとしてもこの発想が埋もれるのは惜しい。

「この資料貰っていいか？」

「えっ？ いいけど……もしかして出資するつもり？」

「カミラに話してからになるが、私は出しても良いと思っている。国の研究として全面的に支援したい」

「貴女がそう言うなら決定したような物じゃない」

「カミラは私が言った事でも駄目なら駄目と言うぞ。私がそう教え

た」

「確かに、カミラさんは貴女の事を優先するけど。その辺りはしっかりしていたわね」

私は資料を貰うとミナの家から直接転移でカミラの元へ向かった。

カミラに資料を見せて国の研究として支援したいと相談した所、「面白そうね、海が行けたなら空も行けるかもしれないし」と言ってく承した。

側近達も魔道船の研究が落ち着いた事と、興味を引く内容であった事で領いてくれた。

国の研究として行うので発案者の意見を基に準備をする事に決まり、通話魔道具で連絡をして来て貰う事にした。

その後彼と連絡がつき、魔道飛行船研究をアーティア帝国が国の研究として支援する事、家族と共にアーティア帝国へ移住するのなら全員の生活を保障する事、などの説明をしたようだ。

通話魔道具があるテイリア魔法技術学校に呼び出され、説明を受けた彼の反応は混乱の極みであり、見ていてとても面白かったと担当した者が言っていたらしい。

更に魔道飛行船研究を行う研究員の募集をアーティア国内の技術者に行い、希望者を集めた。

こうして集まった者達で研究チームを作り、ネベリオを研究主任に任命された。

彼は涙を流して喜び、現在も研究開発に奮闘している。

私が魔道飛行船研究所を覗いてみようかと向かっている途中、研究所方向から大きな爆発音が聞こえた。

私は空を飛び研究所へと急ぐ。

「怪我人はこっちに運んで！揺らさないようにそつと運ぶんだ！」
現場では念の為に常駐させていた治療魔法使いが怪我人の治療を行っていた。

だが怪我人の人数が多すぎて手が回っていないようだ。

「動ける者は怪我人を集めろ、私が治す」

「て、帝母様!?!」

「さっさと集めろ。重傷者が先だ」

驚く彼らにそう言うのと動ける者達が慌てて怪我人を集める。

私は回復魔法で全員を一気に治療した。

「帝母様の魔法……初めてみたけど。高度過ぎて全く理解出来ない……」

治療していた回復魔法使い達の眩きを聞きながら、私は後を任せてその場を後にした。

幸いな事に死者は出なかったが、研究は一時的に中断。

研究員から話を聞き対策をする事になり、最終的に実験などを出来るだけ安全に行えるように改善する事となった。

それから時間をかけて対策を行い、実験を行う時は防御魔法で強化した部屋で操作出来るようにした。

更に防御と回復の出来る魔法使いを増員し、実験時には同席させすぐに対応出来る様に待機させる。

今回起こった事故の原因は、魔動出力機に蓄積した魔力に本体が耐えられなかった事が原因だった。

限界を超えて爆発したそうだ。

開発中の小さな物だったからこれだけの被害で済んだ。

これから研究が進み、より大型でより多くの魔力を使った物が開発

された時、同じ事が起これば死人が出るだろう。

建物は建てなおせるが優秀な人材の命は戻らない、訳でもないな。

私がいれば。

それでも研究員の安全には力を入れておくべきだろう。

新たに安全対策が施された研究所で彼らは日々研究をしている。

私はあまり研究所には行かないし関わらない様にしている。

カミラにあまり行きすぎると彼らにとって負担になると言われたからだ。

稀に帝母として訪れる程度で特に深く関わる事は無く、ただ開発の成功を待つ事になっている。

「代表対抗戦を見に行く?」

私はその話をカミラから聞いたのは土砂降りの雨のせいで外に出る気にならず、自室でくつろいでいる時だった。

「ええ、ティリア魔法技術学校の行事らしいわ」

あれか、以前からあるのは知っていたが特に気にしていなかったな。

「あるのは知っている。関係者では無かったから見た事は無いが」

「ほら、ウルグラードはもうアーティア帝国の都市だから。見学しに行く事になったのよ」

「なるほど、女帝としてか」

「そういう事。お母様もどうかしら?」

「行くこう」

私はティリア魔法技術学校代表対抗戦を見に行く事にした。

カメラと校長のミナが挨拶を終え、私は副校長のルーテシア達と共に専用の観戦場で開始を待っている。

「勝敗はどう決まるんだ？殺す訳には行かないだろうか？」

私は隣のルーテシアに聞いた。

「審判が判断します。安全対策はしてありますし、審判として複数の人員も用意していて危険な時には試合を止める事もあります」

「学校で死んでしまったら来ている意味が無いからな」

「今の所死人は出ていませんし、怪我人は出ていますが致命的な物は無いですね。何より、相応の事が出来る者しか出れませんから」

「なるほど」

「参加資格は周囲に伏せて本人にのみ通達されて出場は強制ではありません。出る事を本人が決めてから周囲に通達されるので、逃げたと言われる事もないですね」

「わざわざそうしたと言う事は以前あった訳だな」

「はい、今はもう平気ですが」

会話をしている内に準備が整ったようで、試合が開始される。

対抗戦は近接戦闘だけで戦う近接戦闘技術戦、魔法だけで戦う魔法戦闘技術戦、全てを駆使して戦う総合戦闘技術戦の三種類があるらしい。

勝ち抜き戦、トーナメントとも言うが、その方式で戦うと説明された。

対抗戦は問題無く進んだ。

全員未熟ではあるが真剣に戦う姿は見ていて良い物だった。

その後感想を聞かれそんな事を答えると、「貴女から見たら誰であつても未熟でしょうね」とミナに苦笑いされた。

しかし、見ていて楽しかったのは間違いない。

かつて戦闘を教えていた事を思い出した。

それから各戦闘の上位者に声をかけるようにカミラが指示を出していた。

帝国軍に誘っているのだろう。出場者の中にはそれを期待して出た者もいるのかもしれない。

無事に対抗戦は終わったが、ミナとルーテシアに誘われ家に泊まる事にした。

個人的な事なら転移で移動するが、今回は女帝としての訪問だ。

魔車と魔道船を使う時間のかかる移動をわざわざ国の者達としてるので、一日だけ滞在出来るように調整した。

「学校の方は平気なのか？」

「アーティア帝国の皇帝様と帝母様の対応をする事になっているので、今日は学校の事は他の人に任せています」

私の疑問にルーテシアが答える、問題が無いならいい。

ウルグラードの上層部とも顔合わせを終えたので、明日には帰る事になっている。

しかし個人的に転移でよく来ているので、いつもと変わらない気分だ。

「折角来たのです、今日はずっと一緒にいましょうね！」

ルーテシアは張り切っている、そんなに久しぶりでもないだろう。

「普段から私もお母様もそれなりに来ているわよね？」

カミラも同じ事を思ったのか、ルーテシアに言う。

「何を言っているのです！お姉様とお姉ちゃんが一緒に会いに来てくれる事はあまり無いですよ！」

ルーテシアは胸を張って言い切った。

確かに個別にはよく来ているが同時に来る事は少なかったかもしれない。

この後私とカミラに挟まれ楽しそうにするルーテシアとのんびりと過ごし、風呂も三人で入った。

私が小さいから良かったが、少し狭かった。

私達はルーテシアを真ん中にして並んで寝る事になった。

二人が寝た後で外に散歩に行こうと思ったのだが、ルーテシアは私

とカミラの腕を両脇に抱えたまま寝てしまった。
私は諦めて一緒に寝ている事にした。

ある日、私は魔道飛行船研究所からの報告書をカミラの執務室で見
ていた。

その報告書には船体の材料を加工しやすく、軽く、強度のある魔法
合金か魔法金属で作ろうとしている事が書かれていた。

「加工しやすく、軽く、強度のある魔法合金か魔法金属か」

「現在使っている魔法合金は強度は高いけれど重たい上に加工が難
しいらしいわ、お母様は条件に合う魔法合金か魔法金属を知ってる
？」

カミラは私に聞いてくるが、私もそういった事から離れて大分経っ
ている。

残念だが役に立てそうにないな。

「私の知っているのは昔の物だけだが、そんな物は無かったな。研
究者達は現在ある物も調べているようだし、存在しないかまだ見つ
かっていないのだろう。この報告書には現在確認している金属は全
て一長一短で条件に合わない物しかないと書いてある、新しい何かが
見つからなければこれ以上は難しいかも知れない」

「お母様も知らないか……そんな都合のいい金属あったらとつくに
使われているわよね……」

「そう言う事だな。ただ新しく作る事は出来ると思う、どれだけ費
用と時間がかかるかは分からないが」

「え？」

「アーティア帝国の鍛冶師にも魔法合金を作れる者がいるからな、
作り方さえ覚えれば後は試行錯誤するだけだ」

「お母様が作るの？」

「無いなら作るしかないだろう？」

「んー……資金は何とかするわ、やりたいならやっつけていいわよ？」

「ありがとう。ではやってみよう」
こうして私は新しい魔法金属と魔法合金の研究開発を始める事に
した。

カミラは研究所に新しい魔法金属と合金の開発に着手する事を伝え、帝国領内の鍛冶師達に連絡を取り、協力者を募った。

集まった鍛冶師達は帝母である私が共に開発を行う事に驚いていたが、ある程度の時間が経てば慣れ、私に技術を教えてくれた。

新しい魔法金属と合金の開発に成功した場合は、アーティア帝国の許可が無い限りは一般には流通させない、という事で事前に話している。

結果だけ言えば、開発は成功した。

だが帝国民に無駄遣いするなど怒られても反論出来ない程に資金と資源を使い、様々な割合や製法を試し、時には普通ではありえないような方法をわざと試したりした。

こうして試行錯誤の末に完成した魔法合金の製法を知っている者は全員記録され、漏れた場合は追及され重い罰が課せられる事になる。

ただ、完成した魔法合金を使うとなると当初の想定より大幅に魔道飛行船のコストが上がる事になる。

一応それに関してはカミラが問題無いと言っている。だから問題無いのだろう。

魔法合金の名前はクレリア合金になりそうになったが、どうにかクレリウムで納得させた。

クレリウムを研究所に渡した時、研究員達は大喜びしていたらしい。

その値段を聞いて引いていたらしいが構わず使うように指示したようだ。

新しい魔法合金に変えた効果はハッキリと現れた。

時間はかかったが標準的な魔人一人を乗せて飛ぶ事が出来る魔道飛行船の試作船を完成させる事に成功したのだ。

私も報告を受けて見学した。

感想としては……魔法金属のおかげで落下しても外装は壊れないが、乗っている生物と他の部分は無事では済まないだろうな。

操作性も悪そうに見えだし、安全性も高めなくては普及は難しいだろう。

その後も試作船を元に操作性や安全性の改良を何年も行い続け、その成果として一人用の魔道飛行船が使用に耐える性能を発揮した。

完成したその魔道飛行船は、オーツと名付けられた。

魔道飛行船オーツは船体の大きさの割には一人乗りで、操縦するには専門の訓練を受けなくてはいけないが十分に操作性と安全性を両立している。

そしてアーティア帝国最初の正式な魔道飛行船として登録された。

この魔道飛行船の完成を機に新しい学校の設立案がカミラに提出され、魔道飛行船操縦士育成学校が設立される事が決定する事になった。

魔道飛行船の研究開発はこれからも続くため、魔道飛行船操縦士育成学校も設立に向けてゆつくりと動き始めた。

人事や学校の建設など、カミラと側近を始めとした関係者達はこれから長い時間をかけて体制を作って行く事になりそうだ。

「正式な魔道飛行船が完成したな」

「お母様は操縦したのよね？どうだった？」

私は執務室で休憩中のカミラと完成した魔道飛行船について話していた。

「試作船と比べれば段違いに安定していた。私は説明を受けて少し上昇して着陸しただけで操縦したと言えない程度しか動かさなかったが、専門の知識と技術は必要だと思う」

あれは知識と技術が無ければ安心して飛ばせないだろう。

これから魔道飛行船操縦士育成学校の教員を育てるのが大変そう
だ。

「次は多人数を乗せて長距離を飛べる魔道飛行船の開発かしらね」

「目標はそうなると思う、だがそう簡単には行かないだろうな。簡単ならそれに越した事は無いが、一人を安定して飛ばすだけで何年かかった?」

「えっと確か……約六十年かかっているわね」

「六十年か……私達にとってはそれほどでは無いが、人類には人生をかける程の時間だ。森人は例外だが」

「確かに研究員もかなり入れ替わっているしね……研究費は出せるけれど彼らには時間が足りないのね」

「寿命を延ばしてやる事も出来るが」

「お母様……世界からどんな扱いを受けるか分からないわよ? 恐れるか群がるか……どちらにしても良い事は無いと思う。そんな事に対応するのは面倒じゃない?」

「ケインが死ぬ前に言っていたよ。元々短命な種族が後天的に寿命を延ばすとやがて精神が持たなくなるのではないか、伸ばすなら精神も変えなくては難しいのでは無いか、と」

「ある程度なら平気そうよね? 永遠を望むと後悔する事になるかもしれないって事かしら?」

「試した事は無いが、寿命の1.5倍程度なら平気そうな気がしないか? 十倍になると分からないが」

「多少なら平気な気はするわね……実験してみる?」

「いつかはやってみようと思うが今はいい、まずは魔道飛行船だな」

「彼らの研究に期待しましょう」

「そうだな」

その後、研究主任であったネベリオ・カシルズは大勢を乗せて飛ぶ夢を未来に託して逝く。

そしてその意思は後の者達に引き継がれ、研究は続いて行つた。

魔道飛行船の発案者ネベリオ・カシルズが逝き、魔道飛行船の父と呼ばれるようになってから時は流れ、魔道飛行船の研究開発は停滞し始めていた。

研究開発の停滞について考え込むカミラと側近達。

そんな時、同盟三国からほぼ同時期に共同研究の申し出があった。実用可能な魔道飛行船の開発成功は他国にも伝わっていた、彼らはその技術を得たかったようだ。

アーティア帝国の魔道飛行船技術を他国に渡していいのか？などと言った話し合いが連日行われたが、最終的に帝国は三国からの共同研究の申し出を受け、四国で研究開発を行う事になる。

新たな人員と資金、資材などの提供を受ける事で、より多く、同時に様々な研究を行えるようになった、そしてその状況に対応するため研究施設の拡大が行われた。

共同研究が決まってから実際に研究が開始するまでに多少の時間がかかり、その後もしばらく目立った成果が上がらなかったのだが、ある日魔道飛行船だけでなく様々な事に影響を与えそうな技術が開発された。

その技術は魔法陣と名付けられた。

魔道具に使われる魔道文字を参考にして生まれたこの技術は、魔法を使う際に詠唱と特定の魔法文字を用いて物や空中に魔法陣を描き、より高度な魔法を行使する技術だった。

魔道飛行船の部品などに魔法陣を組み込む事で、今までは不可能だった効率と効果を生み出す事が出来るという。

この技術を開発した者達はより良い物が出来るならと、この技術を秘匿する事無く広めた、これにより様々な物の精度や効果、効率が飛躍的に向上する事になった。

それからは今までの停滞が嘘のように研究開発が進み始める。やがて各国の長い研究の末、四国の共同開発による最初の大型の魔道飛行船が完成する。

これは現在の人類の最高の技術を集めて作られた最大五十人程が乗れる魔道飛行船で、基礎を作った研究者の名前を使用しネベリオ式魔道飛行船と名付けられた。

この魔道飛行船が完成するまでの間に魔法陣も人々の目を引き、個人による魔法陣を使った魔法の行使技術が普及した。

更に大規模で複雑な魔法陣を用意し複数人で行う儀式魔法や、大魔法といった物も編み出され定着する事になった。

魔道飛行船の完成は大々的に発表され、初の飛行はアーティア帝国首都リリティアからウルグラードへの飛行に決まる事となる。

飛行は厳重な警備の下に行われ、各国の王などの関係者達が初めての空の旅を体験し、私はエルフィと語り合った。

魔道飛行船は共同開発を申し出てくれた順に、それぞれの国に配備される事になっているらしいが、全ての国に配備されるのはまだ先の話になるだろう。

魔道飛行船関係の事が大きな節目を迎えて落ち着きを見せたある日の夜、私は自室で魔法陣を試していた。

空中に平面の魔法陣を描き魔法を発動する、確かに制御しやすいが魔法陣を作る時間があるから咄嗟の事には対応が難しそうだ。

逆にしっかりと準備を整え、人数を揃えれば今まで私やカミラ、クログウエルしか扱えなかったような魔法も発動するだろう。

更に技術が上がれば人体の欠損の修復なども出来るかも知れない。足元の床や地面に描いてみたり、手元に小さく描いてみたりした

が、高い効果を得るには魔法陣を大型にしなければならぬようだった。

……平面ではなく立体にして発動させればもつと小さい範囲で高い効果を得られるのではないだろうか？

私が簡単な立体魔法陣を組んでいると部屋がノックされる、入って良い事を伝えると、カミラがやって来た。

「お母様、紅茶でも飲まない？」

「飲む。入れてくれ」

カミラは私の正面にある簡単な立体魔法陣を気にするそぶりを見せながら紅茶を入れてくれた。

「いつものモー乳入りでいい？」

「頼む」

私が効果的な立体魔法陣を模索していると、カミラが紅茶を持ってきてくれた。

「はいどうぞ……お母様？それは……」

カミラは私の隣に座りじつくりと魔法陣を見ている。

「魔道飛行船完成の過程で魔法陣の技術も普及したが、今まで使った事が無かったから使っていた」

「小さいけれど……これ、立体魔法陣よね？」

「この方が効果的だと思ってやってみた」

「やってみたって……いつの間に訓練していたの？」

「今作った」

「えっ!？」

私を見ているカミラにそう言うのと驚いた表情で声を上げる。

「ついさつき立体にしようと思っ立ってな」

「そう……お母様？立体魔法陣は現時点では可能ではあるはずだけど、難易度が高すぎて不可能と言われてるから……あまり外でやらないでね？」

カミラは紅茶を飲みながら私に忠告する。そこまで難しくは無いが、カミラが言うのなら控えておこう。

「分かった、外では控える」

「それで……立体魔法陣の効果はどう？」

「効果はかなり高い。このままこの技術が進化すれば、いずれ私で

なくても限定的だが人体の欠損の修復なども可能になるだろう。いや、もしかするとそれ以上も可能になるかもしれない」

「……そんなに？」

「ああ。魔法陣は魔法を使う際に魔力で描くか、あらかじめ書いてある文字に魔力を通す事で効果を発揮する。つまり事前に書いておく事でも効果を発揮出来る訳だ。前者は本人の技量が必要だが、後者は殆ど必要無い。つまり巨大な魔法陣を書く知識と、時間、必要な魔力があれば、本人の技量に関係なく発動出来る可能性があるという事だ」

「……ちよつと不味いんじゃないかしら……」

「私は高度な魔法をその方法で行うには立体魔法陣である必要があると考えている。立体魔法陣は事前に書いておく事は出来ないだろうし、地面に書くにしてもそれだけの魔法を発動させるには広大な面積が必要になるはずだ。実現出来ないとは言わないが、かなり難しいだろう。それに、今更危険だからと無かった事にも出来ないだろう？ 私は止める気は無いぞ」

「そう……そうね。流星に今更止められないわ」

「複雑な儀式用の立体魔法陣を展開する魔道具などが生まれるかもしれないな」

私がそう言うのとカミラは黙ってしまった。

だが思いついてしまったのだから仕方ない、きっと誰かが同じ事を思いつく。

その時どうなるかは私にも分からない。

魔道飛行船の開発成功は世界に大きな影響を与えたが、私個人としては魔法陣の与えた影響の方が大きかったように感じた。

魔法陣の登場によって様々な物が改良され性能などを向上させた、それは現在でも続いている。

これからどうなっていくのか楽しみにしながら、私はカミラと共に紅茶を飲んだ。

魔道飛行船が完成してからも世界は少しずつ変わって行く。

町が増え、それぞれの国には魔道飛行船の為の空港も出来た。

各国に配備された魔道飛行船による交通網は既に常識になっている。

そんな中、四国間会議の場で魔道飛行船による新大陸探索案が提出されたようだ。

カミラと同盟各国はその案を採用し、再び四国の共同計画が始まる事になった。

「魔道飛行船で新大陸を探すのか」

私の部屋にやって来たカミラと魔道飛行船による新大陸探索計画について話す。

あるかどうかは分からないが私自身もまだ世界を全て見て回っていない、新しい大陸が生まれている可能性は十分ある。

「私も世界を知りたいし、各国も余裕が出て来て乗り気だったし……進めておこうと思って」

「世界がまた広がるな。世界中に彼らが住むようになるのも時間の問題か」

オセロをしながら語り合う私達、私は押されている自分の色を見ながら話す。

「そうね……お母様の言う時間の問題と彼らの時間の問題は大分長さが違うとは思うけれど……いずれ世界中に全ての種族が暮らすようになるかも知れないわ。隔離した元ルセリア神王国国民の意識改革も終わった今、気になる事も思いつかないし」

「そういえばそんな事もあったな。」

「忘れていたがそんな者達もいたな、結局今はどうなっているんだ？」

「世代交代時に教育を行って差別意識が付かないようにしたわ。現在は隔離は解除されて普通のアーティア帝国の町になっているわよ」

「洗脳したのか。カミラもやるな」

「そこそこ差をつけられて負けたな。」

「洗脳って……差別をしないように教育しただけで他は何もしてないわよ」

カミラが笑いながら言い、オセロを片付けて脇に置く。

「放っておく訳にもいかなかったし、あのままよりは良かったと思っているわ」

「不安な材料は無くしておくべきだからな、私でもきつとそうしていた」

「これ以上何かするつもりは無いわ。後はアーティア帝国民として普通に暮らして貰いたいわね」

二人で語り合いながら夜はふけていき、その日カミラは私の部屋で寝た。

探索に用意する魔道飛行船は各国二隻作る事に決まったようだ。

探索船団は八隻と言う事になるな。

各国がこの計画に期待しながら忙しくしているが、私は特に変わらずいつものように過ごしている。

現在、私はルーテシアに誘われて一緒にアーティア帝国領にある温泉街に来ている。

「ここも開発当初に比べると大きくなったな」

「お姉様、まずお宿に向かいましょう？」

ルーテシアと手を繋いだまま、私達は温泉街の道を歩き宿へと向かう。

温泉街にいる他の客は私に気が付くと一瞬驚く。だが私が町をうろついているのはよくある事だ。

帝国民達もその事は知っているので、私が過剰な装飾が付いた帝母

としての衣装では無い場合は、なるべく普段通りにしてくれる。

宿の対応は全てルーテシアがやってくれた。部屋は帝母だからといって特別な物ではなく、他の客と変わらない。

それなりに広い部屋には一般的な家具が置いてあり、二人用のベッドが一つ置いてある。

部屋に着いた私達は温泉街用のローブ姿に着替える。

ゆったりとした長いローブは中々動きやすい、私は子供用だ。

「お姉様、まずは温泉街を回リませんか？」

「そうだな。温泉に浸かるのは戻ってからにしようか」

温泉街に出て、食べ歩きをしたり土産物を見る。

ルーテシアは温泉成分を抽出した温泉玉という物を買っていた、お湯に入れると簡易的な温泉になるらしい。

それを聞いて昔採取した温泉がまだ残っている事を思い出したりもした。

温泉蒸しはほんのり甘くて美味しかった。この温泉街の食べ物は基本的に小さく、少ない。

訪れた者が色々な物を食べ歩けるようにしているらしい。

一つを二人で半分にして色々な物を食べ歩いたが、私はともかくルーテシアが夕食を食べられなくなるので程々でやめておいた。

宿に帰り、ルーテシアに抱えられたままのんびりと過ごし夕食を食べた。

夕食後、私は温泉でルーテシアに丸洗いされ、ゆっくりと温泉に浸かった後は一緒に寝た。

その後、家に帰ったルーテシアはミナに旅行の事を楽しそうに話し、ミナは嬉しそうにその話を聞いていた。

ある日の夕方、自室の窓から久々にクログウエルがやって来る光景が見えた。

他の三国に初めて見られた時は大騒ぎになったが、カミラがすぐに

対応したので大事にはならなかった。

それ所か他三国は取引しないかと持ち掛け、クログウエルはそれを受けた。

各国は彼女の素材の良さを知っていたようだ。

そのため彼女は以前ほどリティアに来なくなっていたのだが、今日は用事があるようだ。

彼女はそろそろこの辺りから離れると言っていた。

また新しい食材を探らしい、それでも取引はしつかり続けるらしいが。

順調に魔道飛行船の製造は進み、その間にも各国は豊かになって行った。

やがて魔道飛行船が完成し、探索隊の人員が選ばれる事になる。

発見した大陸を開拓するための人員や、護衛の空戦部隊と飛行部隊も編成された。

更にマジックボックス持ちの魔法使いと魔法靴も大量に配備され、物資も十分揃え、準備を整えた。

そして準備が終了すると八隻の魔道飛行船隊は新たな大陸の発見に向けて出発して行った。

各国は探索期間はそう長くかからないという予想をしているようだ。

確かに海に行く訳ではないので楽かもしれない。

どちらしても三か月以内には戻ってくる予定であるらしい。

魔道飛行船隊が出発してから時が経ち、いつ戻って来てもおかしくないほどの時間が過ぎたある日の明け方。

急に城内が騒がしくなり始めたのを感じた私は様子を見に行った。

「間違いないのね？」

「はい、報告によれば間違いないと」

「救援の部隊をすぐに編制して向かわせて、こちらでも準備をしない」

「すぐに行きます」

寝起きのままのカミラと側近がカミラの私室の前で会話していた。私の横を頭を下げて通り過ぎる側近を横目に、私はカミラに声をかける。

「何があった？」

「お母様……魔道飛行船隊がこちらに戻っていると言う連絡があったのだけど……戻ったのは一隻。それもなんとか飛んでいられる程にボロボロらしいわ」

それぞれの魔道飛行船には空戦部隊と飛行部隊が乗っていたはず、それでもほぼ全滅する被害か

「事故か？それとも襲われたのか？」

「クログウエルに似た、白い魔物に強襲されたらしいわ」

「竜族か」

「まだ確実ではないけれど魔道飛行船隊がほぼ壊滅したとなると……そうかもしれないわね」

ただの魔物があの戦力に勝てる訳がないし、壊滅に迫いやる事などまず出来ないだろう。

何があったかは聞かなくては分からない。

その後緊急会議が行われ、受け入れ準備をしながら帰還を待つ事になった。

しばらく後に逃げ延びた魔道飛行船が帰還する。

事前に送っておいた救援で怪我人が手遅れになる者は居なかったが、乗員は三分の二程に減っていた。

休ませてやりたいが、まずは生き残った乗員から詳しく話を聞かな

くてはならない。

話を聞き終わった後、再び会議が開かれた。

「新しい大陸を発見して上空に入った時に襲撃を受けたのね」

「そのようです、強力な魔法攻撃を高速で飛行しながら撃ち込んで来たらしく、長くは持ちこたえられなかったようです」

カミラと側近達が話し合いを行っているのを私は黙って聞いていた。

「陛下。その魔物がクログウエル殿と同種であり、同等の実力を持っているとしたら魔道飛行船隊の戦力では勝ち目はありません……むしろ一隻逃げ延びただけでも運が良かったのではないかと思えます……」

空戦部隊と飛行部隊の隊員も実力者ではあるが、いまだにクログウエルとの模擬戦では大きな差がある。

実戦になればこうなるだろう。

速やかに情報をまとめ、これからの方針や行う事を整理し会議は終了した。

私はその日の夜、カミラの私室にやって来た。

部屋をノックすると元氣のない声で返事があり私は部屋に入る。

「お母様……」

彼女はベッドに座り俯いていた。会議での毅然とした姿は消え失せ覇氣は無く、幼い頃の彼女を感じた。

私が隣に座ると静かに話し始める。

「私は強力な何かが居る可能性があったのに、あの戦力ならば問題無いと判断したわ」

「実際にあの戦力ならば大抵の魔物は問題無かっただろう。私も同じ判断をした。相手がクログウエル級だった事が問題だったな、奴と同等の存在はこの世界にそう多くないだろう。発見した大陸は奴の縄張りだったのかもしれない」

「多くの犠牲を出してしまったわ、もっと準備をするべきだった」
「竜族相手では数を増やせば増やしたただけ犠牲になっていただけだろう」

彼女は私の胸に顔をうずめて体を震わせている。

「私も問題無いと思つて口を挟まず送り出した、カミラだけの責任ではない。後悔してもいいが引きずるなよ」

私は魔道飛行船隊が壊滅しても何も思う事は無いが、彼女は違う。

例え私に近い考えをしていたとしても、私では無いのだ。

彼女は顔を埋めたまま小さく頷いた。

さて、これからどうなるか。

諦めるのか、討伐するために手を尽くすのか。

数日後カミラは正式に今回の魔道飛行船隊による探索計画の報告をした。

起きた出来事の説明と、犠牲になった者達の家族への補償、そして自分の考えが甘かった事の謝罪を行った。

他国ではカミラを責める声も起きたがすぐに収まり、代わりに別の声が各国で上がり始める。

それは魔道飛行船隊を襲った魔物を許すな、各国で今までの技術を使って討伐のための武器を研究開発するべきだ、と言う声だった。

カミラを始めとした各国の王達はそれを認め、魔道兵器と名付けられた武器の開発が始まった。

魔道兵器の開発が始まって少し時が過ぎたある日。

私は魔道飛行船隊に襲い掛かった竜族に会いに行こうと思ひ立ち、教えて貰った大陸の方向へ飛んでいた。

やがて遠目に大きな大陸が見えて来た、ここが発見した大陸だろ

う。

大陸の上空に侵入してしばらく待機していたが、目的の相手が現れる気配は無い。

空を飛んでいるのなら相手の行動範囲はかなり広いはず、魔道飛行船隊が襲われたのは遠くからでも目立った事と、たまたまこの辺りに相手がいた事が原因か？

もしそうなら運が悪かったと言うしかないだろう。

しばらくうろついて来なければ帰ろう。

私は少しの間辺りを飛び回る。

わざわざ探してまで会いたい訳でもない、いずれ人類が報復に向かうだろう。

その後しばらくいたのだが目的の相手は現れなかった、私は何もする事無く帰った。

魔道兵器の開発は報告を見る限り魔道飛行船に搭載出来る大型の物を開発しているようだ。

現在は魔工国ガンドウの魔道武器を元に研究開発する方向に進んでいるらしい。

研究所の規模は年々拡大され、研究者の数は今も増えている。

兵器の試作のための兵器工場も数を増やしていた。

その途中にも新たな魔道具や娯楽などが開発、考案され各国は豊かになる。

アーティア帝国首都であるリリティアでも新しい建物が作られ始めた。

増える国民に対して土地が足りなくなる事を見こして、住宅を縦に伸ばす事で同じ面積に多くの人数が住めるように設計したらしい。

食料生産の事もあり全ての土地を開発する訳には行かない。

その問題を以前からどうにかしようと考えていたようで、少数だけ建築して経過を見るそうだ。

現在、私はアーティア帝国南の海に出来た活火山にやって来ている。

私の浴場になっている場所だ。

火口にある溶岩だまりに浸かって一息つく。

相変わらず溶岩が降り注ぐ中、肩まで浸かり溶岩を手ですくってみる。

するとドロリと重量のある溶岩が手の隙間から流れ落ちて行く。

この良さを分かち合える者が居ないのが残念だ。

同盟国の種族達はまず不可能だろう。カミラも嫌だと言うし、平気そうなクログウエルは興味が無い。

そんな事を思いながら一人で入浴していると違和感を感じた。

地下か？

小さな揺れが少しずつ大きくなってくるのを感じ、地面の震えが大きくなる。

それはやがてとてつもない轟音に変わり激しく揺れる。

私は何が起きるか予想がついたが、特に問題無いのでそのまま浸かっていた。

突然火口から溶岩が空高く吹き上がり周囲にも溶岩があふれ出してくる。

その直後にそれは一気に勢いを増し、私ごと上空に噴き上げた。

もう入っていられないか。

私は空中で停止し、服を纏い様子を見る。眼下では溶岩が高く吹き上がり周囲に流れ出ている。

私は以前立てた立て札、柱だったかな？

それを立てたはずの場所に行ってみたが、何もなかった。

立てたのは間違いないはずだが、場所を間違っているのだろうか？仕方ない、もう一度立てるか。

私は目立つように魔法で大きめの金属の柱を建て、そこに「アーティア帝国領、帝国浴場」と彫り込んでおいた。

噴火によって周囲に流れる溶岩の中に満足いくまで浸かった後、私は首都リリティアへと帰った。

ルーテシアに会いたいと言われウルグラデーの家に向かう途中に、私はこの町にずっと自宅がそのままになっている事を思い出した。

もう住む事は無いだろうし維持するミナも面倒だろう、売りに出す事にしよう。

「来たぞ」

「お姉様、どうぞ中へ」

家に着くとルーテシアが迎えてくれた、いつものようにソファに座る。

「お飲み物を用意しますね」

「頼む」

ルーテシアはそのままキッチンに向かって行った。

「いらっしやい、何かあった？」

正面でくつろいでいたミナが聞いてくる。

「ルーテシアが会いたいと言うのでな」

「ありがとね。時々会いたくて仕方なくなるみたいなのよ」

「それは構わない。話は変わるがウルグラデーにある私の家はまだ維持しているのか？」

「維持しているわよ？手入れも頼んでいるから状態も良いわ」

「長い間住んでいないのに悪かったな、売ってしまったくれ」

「いいの？」

「ああ、もう住む事は無いだろう。売った金はそのまま受け取ってくれ」

ルーテシアがそっと飲み物を置いて隣に座る。

「雑談では無いのを感じて口を挟まないようにしてくれたようだ。」

「そういう訳には行かないわよ」

「構わない、今まで維持してくれた事を思えば私が金を払うべきだ」

と思う」

「いいのよ、貴女に受けた恩を思えばこの程度の事」

「それは後で話そう、取り敢えず売ってくれ」

「わかったわ、売りに出しておくわね」

「お姉様、家を売るのでですか？」

会話が途切れた時にルーテシアが話しかけてくる。

「ああ、もう長い間住んでいないしある事も忘れかけていたからな」

「私が幼い頃にお姉様が住んでいた家ですよね？」

「そうだ、当時はウルグラードが拠点だったからな。今はアーティア帝国の首都であるリリティアの方に移っているから今まで忘れていた。もっと早くこうしておけばよかったな、ミナには悪い事をした」

「構わないわよー」

ミナは飲み物を言いながら軽く答える、ルーテシアは残念そうにしているが。

「クレリア……聞きたい事があるんだけど……」

「何だ？」

ミナが真剣な声で話しかけてくる、私はミナに目を向けて答える。

「魔道飛行船隊の事なんだけど……」

「正式に発表した内容以外には何も無いぞ？」

「そうよね……貴女とカミラさんの性格なら隠すような事はしないわよね……まったく……」

「何かあったのか？」

「一部の人が何か隠しているんじゃないかって言ってただけよ」

「お姉様がそんな事する訳無いです」

ルーテシアが不満そうに口を挟む。

「一応詳しく話そうか」

私はあの事の流れを話す。

戦力に問題は無いと判断した事、クログウエル級の相手に出会ってしまった事が問題であった事などを偽りなく伝えた。

「以前実際に襲われた地点で奴を探したが、現れる事は無かった。」

私は魔道飛行船隊が遠くからでも目立っていた事と、偶然奴がその付近にいた事が原因だと考えている」

「たまたま見つかったから襲われた……?」

ルーテシアが呟く。

「運が悪かったと言えるかもな、ただ……」

「ただ?」

ミナが私に尋ねる。

「クログウエルは縄張りの周囲を巡回しているが、奴も同じ行動をするのであれば今回の事が無くてもいつか見つかかり、同じ事が起きていた可能性は高い。これはカミラにも話した事だが、魔道飛行船隊の規模がいくら大きくてもクログウエル級の相手では被害が大きくなるだけだ。言い方は悪いが少ない被害で脅威を見つける事が出来たとも言える」

「見つけた大陸の付近が縄張りだった訳ね……そして人が入植した後にもし見つかれば被害はその程度では済まなかった……と言う事ね」

「あくまで予想だが」

「……今は武器を作っているのよね?」

「私は直接関わっていないが、襲って来た竜族を討伐するために魔道飛行船搭載用の兵器を研究開発している」

「討伐出来るのかしら……カミラさんと同じくらい強いよね?」

「それはクログウエルの話だ。カミラは今も実力を上げているからもう当てにならないが、相手にどの程度の力があるかは正確には分からない。本当に竜族かどうかはともかく、今回編成した魔道飛行船隊を壊滅に追いやった事を考えると相応の実力者なのは間違いないな」

「どうなると思う?」

「どうなると言われてもな。これから開発される兵器の性能にもよるが、魔道飛行船隊の数を揃えれば討伐出来るのではないか?人類側の犠牲も多そうだが」

「魔道飛行船の防御をするような物は作って無いの?」

「考えているという話は聞いた事がある。魔道障壁だったかな?魔

道兵器と魔道障壁の攻守を揃えて搭載したいと考えているようだが、苦勞しているようだ」

「魔力の供給の問題でしょうか？」

ルーテシアが問いかけて来る、間違いではないがそれだけでも無い。

「それもあるがそれだけでは無いな」

「他には何があるのです？」

「私は専門では無いから簡単な事しか分からないからな？魔力の他にすぐ思いつくのはサイズや重量の問題か。兵器と障壁発生装置を搭載した分全体の重量は重くなり場所も取るだろう。更に魔力を蓄積する魔道具を今よりも改良しなければ十分に稼働出来るだけの魔力が得られない。このままだと場所と重量の問題が大きくなり魔道飛行船に搭載出来ないだろうな」

「なるほど……」

「場所の問題は船体を大きくする事も出来るが、それだと船体自体が重くなる。改良してより小さく、軽く、大容量にするのが一番良い」

「簡単には行きませんか？特に魔力補給は人力ですし……」

「そうだな。飛行中に補給は出来るが全体量からすると気休めにしかならない上に乗組員の魔力が尽きる。町には常に貯めてある魔力があるから通常は気にならないが遠征になると大問題だ」

「そう考えるとかなり難しい事に挑戦しているのでは……？魔道飛行船に搭載出来る魔力蓄積量で長期間魔道飛行船と兵器、障壁を維持するととなると……」

「兵器も障壁も使わないうちはただの重りで魔力消費は無いし、それに関しては補給用の魔道飛行船を考えているようだぞ？」

「なるほど……魔力を補給するための飛行船を用意するのですか」

「魔力蓄積用の魔道具だけを積んだ補給用の魔道飛行船だな」

この日は三人で魔道飛行船の話題を夜まで話した。

ある日の夕方、私は森林国家ユグラドの世界樹の頂上で枝に座っていた。

私の元にやって来た毛蜘蛛に寄りかかり、夕焼けに染まった世界を眺めながらくつろいでいる。

これまでもたまに来ていたが、世界樹はますます大きく高くなり景色は中々良い。

頂上付近は常に風が吹き、世界樹の枝葉を揺らしている。

私は風を感じながら寄りかかっている毛蜘蛛の事を考えていた。

恐らくこいつは私が始めて出会った毛蜘蛛では無いと思う、だがここに来た私に怯える事も無く寄って来た。

周囲にも毛蜘蛛がいるのは感じる。

いつからか数が増え始めたがどの毛蜘蛛も私に対して警戒していないようだ。

世界樹の雰囲気を感じて私が敵では無いと分かったのか？世界樹は私が訪れると今も変わらず楽しそうな、嬉しそうな気配を出す。

世界樹はいつからか実を付けなくなっていた。

現在、世界樹は森林国家ユグラドの象徴として各国に知られている。そんな世界樹に私がこうして居られるのは女王であるエルフイが許可を出しているからだ。

私は彼女に感謝しつつのんびりと世界樹の上で過ごした。

「エルフィ様、本日の執務は終了となります」

「分かったわ」

席を立ち私室へと移動する。

今日の執務はこれで終わりね。

力を抜き、気分を切り替えた私はふと過去を思う。

今でこそ森林国家ユグラドは繁栄し私も初代女王になっているけれど、私だけの力で成し遂げた訳では無かった。

沢山の仲間に支えられて来た……そう思いながら私室に入り、ある人物を思い浮かべる。

その人物の名はクレリア・アーティア。

森人のハーフで私の友人。私の国が安定したのは彼女がいたからと言っても過言では無いわ。

色々と助けてくれた後、彼女は突然姿を消した……その間に戦争なども起きた。

そして再会した時、彼女はアーティア帝国の帝母になっていた……けれど関係が壊れる事は無かった。

だが……私は気が付いてしまった。

きっかけはクレリアと再会し、再び交流を持ち始めたある時の会話。

ウルグラードのテイリア魔法技術学校校長であったケイン・イヌスさんについて話す機会があった。

彼女は彼が年下であるような話し方をしていたので、明確にそうだと聞いた訳では無いが間違いないと私には感じられた。

彼が亡くなった時の年齢が400歳を越えていたという話を聞き、更に彼が幼い頃に彼女が魔法を教えた……という話を聞いた。

この話と彼女が彼を年下扱いしていた事からも分かる通り、彼女は彼より年上なのはまず間違いない。

そして彼が亡くなってから既に二百年以上が過ぎている……そうすると彼女の年齢は600歳以上……どう考えても森人の寿命を超

えている。

その上、彼女は自身をハーフだと言っていた。基本的にハーフは純粋な森人より寿命が短い事が分かっている。

彼女が嘘をついているのは間違いない。

私は悩んだ……この事を彼女に話し説明を求めるか、心に秘めて今
の関係を続けるか。

そして私は心を決めた。私の寿命も後百年程だ……知らないまま
でいたくはない、聞いた結果どうなったとしても構わない。

私が彼女に連絡を取り、会いたい事を伝えると来てくれるそうだ。
彼女は話してくれるだろうか。

私は現在、森林国家ユグラドにいる。

エルファイから会いたいと連絡があったので会いに来た。

私はエルファイの私室へと案内されて部屋に入ったが、メイドが飲み物を入れて部屋を出るまでエルファイは一度も話す事は無く、どこか緊張しているようだった。

「どうしたエルファイ、何かあったのか？」

ソファに座り用意された紅茶に取り出したモー乳を入れながら声をかける。

彼女は黙ったまま自分に用意された紅茶を見つめていたが、心を決めたのか話し始める。

「今日来てもらったのは貴女に聞きたい事があるの」

「なんだ？」

「……貴女は一体何者なの？」

森人のハーフだと知っているはずだが。

「何者とは？」

「貴女は自分を森人のハーフだと言っていたけれど……気が付いてる？ 貴女の話と事実を照らし合わせると貴女は今600歳を超えている事になるのよ。」

なるほど。

自分の時間感覚がおかしいのは分かっている、いつの間にかぼろを出していたんだな。まあ彼女になら知られても良いだろう。

「森人の寿命は最大でも500歳前後だったか。600歳を超えていたら怪しむのは当然だな」

「あっさり認めるのね……更に言うとハーフの寿命はもつと短いから明らかに異常だから」

「そうか、まあエルフィ個人になら知られてもいい。広めるのはやめてくれよう？」

「話してくれるの？」

「自分から話す事は殆ど無いが、気がついていてる者に隠す気も無いからな」

彼女は明らかにホツとしているように見える、何をそこまで緊張しているのか。

「何でそんなにホツとしているんだ？」

「……話してくれないかと思っていたのよ」

「問題無いと判断した相手には話すぞ？駄目なら忘れて貰えばいいからな」

「ちよつと、怖いこと言わないでよ……。で、話してくれるのよね？教えてよ」

私は自分の事を話して聞かせる事にした、証拠も見せれば納得するだろう。

「そうだな、教えよう。まず、お前の考えている通り私は森人のハーフでは無い。本当は自分でも何だか分からない何かだ。そして一万年以上前からこの世界に存在し続けている」

「え……？」

「知的生命体に出会う事を目的にして大半は眠っているような状態だったのだが、目を覚まし人に出会い、彼らに紛れて過ごすようになった」

「ちよつと……？」

「その後色々あって神として名を残してしまう事に……」

「ちょっと待ってってば!？」

いきなりエルフィが大声で止める、話して欲しいと言ったから話しているのに。

「どうした?」

「いきなりどんどん言われて理解が追いつかないわよ!」

「悪かった。ではゆっくりと話して行こう」

こうして私は彼女に一つ一つ話して聞かせた、彼女は話を聞く度に驚きながらも聞き続けた。

思いつく限りの話をした後、エルフィはソファに寄りかかり何か考えているのか目を瞑り動かない。

やがて彼女は目を開き、座りなおすと私を見て話し出す。

「ええと……何を言えいいのかしらね……」

このような反応をするのは仕方ないのかも知れないな。

「二年以上前から生きているのよね?」

「そうだ、当時は人類は勿論いなかったし、大陸の数も形も今と違っていたな」

「貴女が嘘をついているとは思えない……でも……」

信じ切れていないようだな、まずは確実な証拠を見せた方がいいか。

私は髪を束ねてカップを取ると紅茶を飲む、もう冷めている。

魔法で私とエルフィの紅茶を温めなおした。

更に片手を黒く染める、エルフィはそれを目を見開いて見つめていた。

「それ……どうなっているの?」

「信じ切れていないようだからな。これで私が間違いなく「何か」である事が分かったか?」

そう言っただけで全身を黒く染めていき、やがてかつてクログウエルの前で見せた姿になる。

魔力も魔素も出していないから彼女に危険は無いだろう。

「怖がるな、私は最初から私だった。見た目だけだ、突然中身が変わったりはしない」

エルフィは少し震えていたようだが、私の言葉を聞いて気を取り直したようだ。

「信じられなくてごめんなさい。もう大丈夫よ……この目で見た事はごまかせないもの」

私はいつもの姿に戻り手で持って熱い紅茶を飲んだ。

「そう……全て本当なのね。一万年以上昔から存在する事も……自由神が貴女であった事も、様々な事を人類に教えた事も……」

「言い忘れていたがこの国の世界樹も私が昔魔法をかけた樹だと思う」

「へっ?……じゃあ神木は貴女が作ったの?」

「意図してやった訳では無い、以前死にかけていた樹から果実を取った事がある。その礼に回復させたんだ、その当時から他の樹よりも大きくなっていたな」

「昔からそんな事が出来たのなら、神と思われるのも仕方ないんじゃないかしら……」

「当時はそんな事になるとは思っていなかったからな。神ではないのに神扱いされたのは興味深かった」

「全部細かく聞きたいけど、時間がかかるから一つだけ聞きたいわ」
「何だ?」

「貴女は……世界の敵になる事はあるの?」

「私から敵になる事は無いだろうな。襲って来る者は殺すが、自分から意味も無く殺そうとは思わない」

「そう、それなら……安心したわ。これからもよろしくね?」

「(こちらこそ)」

彼女は微笑んで言う。

私はそれに言葉を返し、いつものように雑談をして過ごした。

最初は多少ぎこちなさが残っていたが、話している内に元に戻った。

やがて夜になり、また会う事を約束して私はリリティアに帰った。

私は部屋でカメラから借りた報告書を読んでいる。

魔道飛行船に搭載する兵器と魔道障壁発生装置、またそれに関連する部分の改良は難航しているようだ。

使用する魔力に対して用意出来る魔力が足りないらしい。

多少改良され、改善されているがそれでも問題無く運用出来る状態にまで達しないという。

私も研究所に行って色々と説明を受けているのである程度は分かる、だが本格的に私が研究に取り組む事は無い。

やる気にならない。

各国は豊かになってきているため研究開発は不自由なく出来るだろう。きつといつか出来る日が来るだろう。

私の周囲は少しずつ変わっていく。ミナが校長をルーテシアに引き継ぎ引退し、各国の町並みも数階建ての物が増えて来た。

以前試していた住宅の有効性は認められ、各国に普及した。

安い上に大人数を収容出来るので若者に人気らしい。

そして研究開発の方でも新たな技術が開発された。

「吸魔法陣」と名付けられたその技術は、世界の技術全てを再び進化させる事になった。

周囲の魔力を吸収してそのまま使用したり貯蔵する事が出来る技術で、これにより使用中にも時間によって自動的に魔力が補充されるようになった。

この発見がされた時は大騒ぎだった。今まで人力であった魔力の補充を自動化し、大気に漂う魔力を使用する事で魔力を気にする事無く使用出来るようになったのだ。

この技術に飛びつかない訳がない。

主要な魔道具は見る見るうちに吸魔法陣が使われた物に変更された。

そして当然ながらその技術は魔道飛行船関連の物にも応用され、使用魔力の改善などもあり、魔道兵器の安定した搭載、運用が実現した。こうして完成した武装船は非武装の物が「魔道飛行船」と呼ばれるのに対して「魔道飛行戦闘船」と呼ばれるようになり量産体制に移って行く事になる。

ある日カミラの執務室で私とカミラは会話を交わしている。

話しているのは魔道飛行船隊を襲った竜族と思われる魔物の事だ。

この話をする少し前にクログウエルから連絡があり話をしたのだが、それが問題だった。

『久しいなクレリア』

私が部屋でくつろいでいる時クログウエルから念話が来た。

『久しぶりだな。今は何処にいるんだ？』

クログウエルが話した場所は分からない場所であったが、新しい場所の問題なく暮らしているのならそれで良いと気にしなかった。

『そうだ、クレリアよ。最近我の同族のような奴に出会ったのだ』

『他にもいたんだな。話の分かる相手だったか？』

『話にならぬ相手だったぞ、我の話を聞きもせず襲い掛かってきおって……』

『知性の無いただの魔物だったのか？』

『いや、会話は出来た。ただ我を敵としか見ておらず、罵倒を浴びせて襲い掛かって来たのだ』

『知性があるのにそんな行動をとったのか？』

『うむ、何を言っても返答が滅茶苦茶でな……会話にならないというのはああいった状態をいうのだな』

『それでどうした?』

『うむ、あまりにも無礼なので殺した』

『出来れば会って見たかったが』

『一度は放置して去ろうと思ったのだぞ?だがしつこくてな……面倒になって殺してしまった』

『気にするな、それでどんな奴だったんだ?』

『ん?そうだな……嫌だが我に似ていたな……それと奴は真つ白だった』

真つ白でクログウエルに似ている?

『おいクログウエル、死体はどうなった?』

『死体か?地上に落ちた』

『場所は分かるか?』

『大体でいいのなら分かるぞ、どうした?』

『案内しろ』

『いきなり何だ、仕方ないな……』

こうして私はクログウエルが殺した魔物の死体を回収しに行った。案内された場所は魔道飛行船隊が発見した大陸の一部だった。そして発見した死体は確かにクログウエルに似ていて、全身が白かった。

私はクログウエルに礼を言い、その死体を回収して戻った。

そして私はカミラに死体を見せながら、クログウエルが戦闘になった位置と全身の色から、魔道飛行船隊を襲ったのがこの魔物である可能性が高いという事を話した。

そして現在に至る。

「あくまでもそうである可能性が高いだけで確実ではないのよね……」

「事の経緯と、確定では無く、違う可能性もある事を一緒に報告すればいいだろう」

「報告は必要ね。それから……気を緩めず、新しい大陸への再挑戦は当初の予定通りのまま進めましょう」

「他にも危険な存在がいる可能性もあるからな」

それからカミラは自国と同盟各国に魔道飛行船隊を襲ったと思われる魔物が帝母の友人に討伐された可能性があると発表した。

確定した訳では無い事も伝えた。

その報告を聞いた者達の多くは危険な戦闘を行わずに済む可能性が高くなったと喜んだようだが、一部の者は自分達の手で殺したかったと考えていたようだ。

危険な存在がまだ存在する可能性が残っているため準備は予定通り行つて新大陸へと向かう、という事も忘れずに発表し、計画は進む。

魔道兵器と魔道障壁の開発も終わり、魔道飛行戦闘船も数が揃った。

ここに至るまでに大きな出来事無く、私は日々を過ごしている。

あえて言えば、自由神神殿の巫女達が各地に広がり始めた事か。

巫女の中にも別の道を望む子が現れ始めたので、私は彼女達の女性しか生まれない状態を元に戻した。

私は彼女達に自由神として接して話し、説明した。

彼女達は神の印が無くなる事を嘆き拒否したが、生まれる子の性別を元に戻すだけで、私の印は消えないと伝えるとあっさりとな得した。

黒髪黒目の彼女達は目立つ、だがやがて血が混ざり合い、世界に広がればそれも無くなるだろう。

いまだに自由神信仰は世界に根付いていたが、いつの間にか出来ていたもう一つの神の、戦神信仰だったか。それも裏では世界に広がっている事を知った。

何故裏なのかと言うと、戦神信仰の教義とでもいふべき物に問題があった。

終わりのない闘争の世界を望む、という物になっていて、人間にとっては色々と問題があるようだ。

その事を知った時、裏で世界中に終わりのない闘争の世界を望む者達が広がっている事に気が付いたが、興味は無いので放置した。

現在、魔道飛行戦闘船を一国で五隻用意し、全二十隻で新大陸へと向かう直前の準備段階になっている。

アーティア帝国が作り上げた空戦部隊と飛行部隊は各国でも採用され、現在では各国に部隊が設立されている。

魔道飛行戦闘船は最新の設計で開発され、各国に作られた空戦部隊と飛行部隊がそれぞれの国の魔道飛行戦闘船に配置された。

先日、世界が注目する中、準備が完了し、出発式が行われ魔道飛行戦闘船隊は再び新大陸へと旅立った。

そして今、私はカミラの私室でくつろいでいる。

「これからは魔道兵器を使って戦うようになるのかしらね……？」
カミラが言葉をこぼす。

「そうだな、魔道飛行戦闘船があれば地上の魔物を討伐するのはかなり楽だろう、その程度の相手に使うには過剰戦力だと思うが」

「確かにあれで攻撃したら森ごと無くなりそうよね……」

「基本的に各国の王の許可が無ければ出番はないんだ。必要無ければ許可しなければいいだろう」

「そうね、強力な魔物でも現れない限り使う事は無いかも知れないわね」

その後新大陸に溢れていた魔物を一部の国が魔道兵器の力で薙ぎ払い、開拓する事に成功したと報告があった。

結局魔道兵器を使ったようだが、楽なのは間違い無いらな。

それから各国は移住者を募り、人類は急速に新大陸を開発していった。

新大陸の開発によってそれなりの町が出来始めた頃。

ミナから連絡があり、ルーテシアがティリア魔法技術学校の校長を辞めると言われた。

更にルーテシアは私と暮らしたいと言っていて、私の許可と、住んでいる城がある首都のリリティアに何か仕事は無いかと私に連絡を取ったようだ。

私がカミラにルーテシアがこっちに来るかもしれない、という事を話すと、喜んで歓迎すると言った。

「いらっしやい、入って」

私が彼女達の家に行って来ると、ミナが出迎えてくれる。

そしていつものように飲み物を用意され、ソファに私とミナ、ルーテシアが揃った。

「私と暮らしたいらしいな」

ルーテシアが頷く。

「私としては問題無い、カミラも歓迎すると言っていた」

「本当ですか!?!」

喜ぶ彼女。

私にとっては娘のような物だし、カミラからすれば妹だからな。

断る事はまず無い。

「仕事だが、リリティアにある魔法技術学校の教師などはどうだ?」

現在は各国にも学校が出来ている。一番有名なのは間違いない。ルグラーデのテイリア魔法技術学校だが、他の学校も極端に悪い所は無い。

「教師なら問題ありませんね」

「後は部屋だが、都市に家を用意するか、城で部屋を用意するかだな」

「私が城に住んでも問題無いのですか?」

「カミラが良いと言ったから問題無いな」

不安そうに聞いてくるルーテシアに答えると安心したような表情に変わった。

「ルーテシアは家庭的だから貴女の専属メイドにしても良いわよ?」

ミナがそんな事を言って来た。

確かに家庭的だし悪くはないかも知れないな。

そう思った私は誘ってみる事にした。

「私と住んで専属のメイドでもやるか?」

「やります!」

いきなり前のめりになり叫ぶルーテシア、ミナは苦笑いしている。

「本気か？私は冗談で言ったのだが」

「駄目ですか……？」

彼女は泣きそうになっている、本気ならそれでもいい。

「ルーテシアが本気でそれが一番いいと考えているのなら構わない」

「是非お願いします！」

その返事を聞いて私はルーテシアの隣に座っているミナを見る。

「ミナ、いいのか？」

ルーテシアを見て苦笑いしていたミナは私を見て言う。

「貴女が迷惑でないならこの子の好きにさせてあげて？」

その後ルーテシアは私と共に住み、私専属のメイドになるという事に決まった。

念話でカミラにその事を伝えると大笑いしていたが許可してくれた。

その話をした深夜、ルーテシアが眠りに落ちた後に私は彼女が起きないようにベッドを降り、リビングに向かう。

リビングのソファにはミナが座って紅茶を飲んでいた。

「それで……どうしたの？」

「聞きたい事があってな。念話でここに居るように頼んだのはルーテシアの事だ」

「そう」

彼女は紅茶を置いてソファに座りなおす。

「男嫌いは改善していないようだな」

「そうね……あの子はほとんど変わってないわ……孫が見たかったけど、本人が嫌なのに無理に結婚させたくは無いわ」

「時間が解決すると思ったんだが、駄目だったか」

「あの子は以前からこうするつもりで、校長になってから任せられる人材を育ててたのよ」

「そうだったのか。学校の所有権はどうなる？」

「ウルグラードの運営陣に任せる事になるでしょうね。貴女かカミラさんが欲しいなら譲ってもいいわよ？」

「やめておく、もう私が関わる事は無いだろう。カミラには聞いてみたのか？」

「聞いたわよ？流石に手が回らないみたい。国の運営になら出来るみたいだから頼むつもり」

「その辺りの判断は好きにするといい」

「……ルーテシアの事、お願いね？」

「何だいきなり。よほどの事が無い限り見捨てる事など無いぞ？」

「私やカミラを殺そうとするようなら考えるが。」

「私ももういつ死んでもおかしくない年だもの。安心して娘を任せられるのは貴女とカミラさんだけ……貴方達なら私が居なくなったら後もあの子が幸せになれると信じられるわ」

「幸せは人によって違うらしいからな、上手く行くかは分からんぞ？」

「大丈夫よ……貴女のそばにいれば」

「まあそれでいいなら彼女が死ぬまで共に居よう」

「ありがとう」

「どうせならミナもこちらに来るか？部屋を用意するぞ？」

「私はこの家に残るわ……ここは私の大切な場所だから」

「そうか、気が変わったらいつでも言え」

「ありがとう」

そう言うと彼女は部屋に戻って行った、私は誰も居なくなったりリビングでしばらく過ごした後ルーテシアの元に戻り朝まで過ごした。

「そうか、気が変わったらいつでも言え」

「ありがとう」

クレリアにそう返して私は自室に帰りベッドに横になる。

「……これがあの子の幸せなら、母親として応援するわ」

ある日私はルーテシアから話があると言われてあの子の話を聞いた……その内容は中々に衝撃的だった……。

自分が男をどうしても恋愛対象に見られない事、クレリアを愛している事、男嫌いになる以前から初恋がクレリアであった事……。

こんな気持ちの悪い娘でごめんなさいと……そんな事を泣きながら私に話すのだ。

私は混乱したが……彼女に何かを言わなくてはと彼女を抱きしめ、気持ち悪いなどと思わない事、貴女は大切な娘である事、無理ならば男と恋愛などしなくていい事を話した。

あの時は私も自然と涙が出て来たわね……娘は今までずっと隠し続けて来たんだもの。

そして落ち着いた私達はこれからの事を話し合った。

彼女はこの思いは伝えないつもりでいる事と、学校の校長を辞めてクレリアのそばにいたい事を話し、私にそれを認めて欲しいと頭を下げられた。

私はそれを認めた。

そしてルーテシアから既に学校を任せられる人材の育成を行っているという話を聞いた私は、それが終わったら校長をやめて彼女のそばに行く事を薦めた。

私の言葉を聞いて、クレリアが娘を専属のメイドにすると言った時、娘は受け入れると思った。

そして娘は予想通り食いつき、その地位を得た。

彼女はそこまでする相手を見捨てたりはしない……娘が不幸になる事は無いだろう。

これで思い残す事は無い……。

その夜、彼女に呼び出され娘の話をした。

彼女は時間が解決すると思っていたようだけど、娘の話を聞いていた私は時間など意味が無かった事を知っている。

私も誘われたけれどここも私の大切な場所だから断った。

彼女は娘が死ぬまで傍にいてと言ってくれた。

これで私は安心して逝く事が出来る、まあ……まだまだ死ぬ気は無
いけどね。

その後、ルーテシアは私の部屋で共に住み、世話をする専属メイド
となった。

ただ、メイドとしての教育を受けていないためしばらくは毎日メイ
ド教育を受けて貰う事になった。

私としてはそのままでも良かったのだが、ルーテシアがしっかりと
覚えたいと言ったのでこうなった。

真剣にメイドを目指すつもりなのか？形としてはメイドだが私と
しては娘と暮らすような気分なんだが。

ミナは学校の所有権をアーティア帝国に譲渡したようだ。
それからルーテシアとの生活が始まった。

彼女は私が眠らない事を既に知っているため私に会わせて無理を
せず、しっかりと寝る時間を取るように言い聞かせた。

出来るだけ一緒に寝て欲しいと言われたので私は領いた。
この子は昔から私と寝るのが好きな事を知っている、それくらいな
ら構わない。

毎日彼女はよく頑張っている。

メイドとしての勉強を始め、私の身の回りの世話を嬉しそうに、楽
しそうに行い、風呂も食事も、私の生活のほとんどの時間に寄り添い、
世話をしてくれる。

彼女は本気で私の専属メイドになる気らしい。

カミラはまるで私の妻のようだからかい、ルーテシアは顔を赤く
していた。

こうして私とカミラの日常にルーテシアが加わった。

新しい大陸を発見し、土地と資源を獲得した同盟各国は開発を進め、豊かな生活をしていった。

技術は進み食と娯楽が増え、魔道兵器の登場により魔物による被害は少しづつ減って行き、どの国も種族が交じりあい多民族国家となっていた。

ミナは人生を謳歌し逝った。彼女は死の間際に柔らかな微笑みを浮かべながら人生に満足していると語り、ルーテシアの幸せを祈りながら安らかに旅立った。

このまま繁栄して行くかと思われたアーティア帝国だったが、その思想にいつからか不穏な物が混じり始める。

側近達から他の同盟国を支配し統一するべきだと進言する者達が現れ始めた。

国の拡大に合わせて側近達の数も増え、何世代も代変わりしている。

カミラは帝国民の思想の変化に驚いていた。

私は豊かな生活に慣れ、それが当然になった世代が増長しているのでは無いかと考えていた。

もちろんカミラは却下したのだが、事はそれだけで終わらなかった。

一部の者が暴走して他国と問題を起こし、側近達はその責任が女帝カミラにあると発表、明らかに無関係であったが今の帝国民にそれを知る術はない。

そしてカミラ自身が退位を表明した。

私はそこまでする必要は無いのではないかと言ったが、カミラはあまりにも長い間帝位にすぎたと考えていたようだった。

現在の国民は私とカミラの実力を話でしか知らない。

私達が戦うような出来事は同盟成立以後は無かった、何が原因かは分からないが私達が邪魔になったのかもしれない。

カミラに何の相談もなく次期皇帝も既に決められていた。いつも

のカミラであれば一喝し、改めて力を示して正していただろうが、カミラはそれを抵抗せず受け入れた。

そろそろ帝位を譲って私とルーテシアの三人でのんびりしたいと思っていたから丁度いいと思っただらいい。

内心ルーテシアが羨ましかったようだ。

カミラは国民に望まれて皇帝になった、望まれなくなったのなら後は任せようとすんなり引いた訳だ。

退位する前にカミラは森林国家ユグラドのエルフィ王女にアーティア帝国に不穏な思想が目覚めている事と皇帝が変わる事を伝え、各国に注意するように伝えておくように頼んだ。

カミラの退位は受け入れられ、退位後、私とカミラとルーテシアは事前に見つけておいた大陸から離れた大きめの島に移り住んだ。

移住した事はエルフィにだけ伝えておいた。

後に私達が突然姿を消した事で騒ぎになったと聞いたが、殺そうとしていたのだろうか。

こうして私達はエルフィを除いた人類全てとの関係が無くなり、三人で静かにのんびりと暮らす事になった。

島にやって来て数か月。

私達は快適な生活をしていた、ルーテシアは城に居た頃よりますます幸せそうに私とカミラの傍にいる。

私とカミラの立場は無くなり、ルーテシアもメイドではなくなったが、彼女は変わらず私の世話をしてくれる。

もうそんな事をする必要は無いと言うと、今まで通りやらせて欲しいと頼まれたので好きにさせている。

この島は暖かくルーテシアにも過ごしやすい気候だ、私とカミラはどんな気候でも問題無いが、ルーテシアの事を考えてこの島にした。

この判断は間違っていないかったようだ。

私とカミラとルーテシアは島の砂浜に水着姿で横たわっている。

カミラとルーテシアに頼まれて泳ぎやすい服を全員分作り、三人で海で泳いだ後に皆でくつろいでいる。

寝ている所には日よけをつけている、ルーテシアの為だ。

私達と同じようにしていると彼女が危険な事になる場合がある。

「はあ……海で泳ぐ事がこんなに楽しいなんて知りませんでした……」

ルーテシアは私の寝ている日陰に入り、横になって呟いた。元気を取りもどしたようで良かった。

ミナが死んでからルーテシアは表面上は元気だったが、寝ながらミナの、母の名を呼んで泣いている事があった。

「気候が暖かいと気持ちいいだろう？ウルグラードは気候は安定していたが海で泳げるほど暖かくなかったし、海自体が無かったからな」

「はい、疲れましたけど……」

横になりながら私を見て話す彼女は、疲れているが楽しそうに笑っている。

「二人とも、何か飲み物飲む？」

「あ、お姉ちゃん。私が用意しますよ」

反対側にいるカミラがそう言うのとルーテシアが起き上がる、カミラはそれを手で制す。

「いつも色々してくれてるし、泳ぎつかれているのだから今は私に任せなさい」

「……うん。お姉ちゃん、ありがとう……じゃあモー乳お願い」

「私はモー乳入りの紅茶を、モー乳はいつもの量で頼む」

「了解、ちよつと待ってね」

鼻歌を歌いながらテーブルの上に置いてある魔法靴から飲み物を出すカミラ。

ルーテシアは基本的に私とカミラのために色々してくれるが、ここに来てからしつかりと甘えてくれるようになった。

「はい、モー乳よ」

「ありがとうお姉ちゃん」

「お母様にはこれね」

「ありがとう」

飲み物を体を起こして受け取り、海を見ながら三人で飲み物を飲む。

「これを飲み終わったらお魚を取りませんか？夕食に使いたくて……」

ルーテシアが私達に提案する。

「私は行くぞ、カミラはどうする？」

「もちろん行くわよ」

「決まりだな」

私達は空を飛び海へ出た。カミラとルーテシアはこの島に来るまで魚を取った経験が無かったが今では慣れたものだ。

「また魔物が取れるといいわね」

以前カミラは海の魔物を捕らえた事がある、美味しいので出来たら取りたいと思う。

「確かにお姉ちゃんが捕まえた魔物は美味しかったですね」

「ルーテシアは無理をするなよ。どうしても魔物が欲しいなら私が取ってくるからな」

私はそのまま、カミラとルーテシアは魔法を使って海へと突入した。

水中ではカミラとルーテシアは会話出来ないので念話で会話をする。

『魔物を狙うのもいいが普通の魚も捕らえておけよ？』

私は二人に同時に念話を飛ばす、複数で会話出来るように改良したので陸上で三人で話すのと変わらない。

『解ってるわ、最低限捕まえてから狙いに行くわよ』

『私は普通のお魚を捕まえます』

『もしもの時は私が何とかする』

この海は水がかなり透明なので光はそれなりに深く届く。それぞれ自由に動き回りルーテシアは普通の魚を取り、カミラは早々に魚を取らえて魔物を探している。

私は何かあった時の為にカミラとルーテシアの位置を把握したまま魔物を探す。

普通の魚は多く泳いでいるが、魔物は見たらない。本気で見つけようと思えば簡単に見つけられるが、それではつまらないからな。

カミラは大分深い所にいるな、深ければ魔物がいる訳でも無さそうだが。

しばらく探し回っているとようやく魔物を見つけた、そこまで深くは無い所を泳いでいる。

口に長い蟹の足のような物が生えている細めで長い体をした魔物だ。

『魔物を見つけた、今から捕まえる』

『分かりましたお姉様』

『お母様に先を越されてしまったわね、また捕まえようと思っただけだ』

『カミラ、こいつを捕まえたら戻るぞ』

『わかったわ、今から戻るわね』

捕まえる事は簡単に済んだ、私はその辺りの魔物に手こずる気は無い。

その日は捕まえた魔物を問題無いか確認してから、浜辺で調理して食べた。

私は三人の時間を大事にしながらも、自分の力を高める事や、新たな力を得るための訓練や研究に以前より力を入れるようになった。

カミラも訓練を今でも欠かさずに行っている。

私は日中はルーテシアと共に過ごし、彼女が寝た後にベッドを抜けて訓練や研究をするようにしている。

それなりに広いこの島には野生動物や弱い魔物も居る。

狩りをしたり畑を作ったりしながら、島の中と周囲の海だけで生活が出来ていた。

そんなある日の夜、私は隣で寝ているルーテシアに訪ねた。

「ルーテシアはここでの生活に飽きていないか？」

「飽きる……ですか？」

私やカミラは訓練や研究に飽きる事無く時間をかける事が出来るが、ルーテシアはそうでは無いだろう。

「毎日あまり変わり映えのしない生活だからな、ここでの生活がつまらなくないか？」

「……水遊びや森の散歩、狩りやお魚取り、畑のお世話……お姉様、お姉ちゃんとお過ごしす毎日はとても穏やかで幸せな時間です。飽きたりつまらないと思う事は無いと思いますよ？」

「そうか、それなら良い。どちらにしてもここで手に入らない物を町に買いに行く事はある、その時には向こうで何かしよう」

「それはいいですね、何をしますか？」

「町に何かがあるかによるが、食事をして服を買いに行ったり、闘技場や競技場を見に行くのもいい。劇場に劇を見に行ったり、新しい何かがあればそれを体験するのもいいだろう」

「楽しみです……」

「たまには買い物に行く以外にも遊びにいこう」

「……はい……」

しばらく話していると彼女の反応が鈍くなってきた。無理をせず寝るように告げ、頭を撫でると彼女は眠りに落ちて行った。

「お母様、今日は外へは行かないの？」

「今日は家にいるつもりだ」

外は雨が降っている。

カミラはソファに座る私の膝の上に頭を乗せて寝ころんでいて、

キッチンではルーテシアが鼻歌を歌いながら朝食を作っている。

「お母様つて溶岩をお風呂にしたりする割に雨は駄目なの？」

下から私の顔を見ながらカミラが言った。

「駄目ではない。用があれば雨でも外にでるし無ければ出ないだけだ」

「雨が嫌いな訳では無いって事？」

「嫌いではない。わざわざ雨の日を選ぶ理由が私には無いだけだ」
以前は嫌いだったような気もする。

「そうね、確かに私もわざわざ雨の日は選ばないし……」

「対策をしないと足元が汚れるのが嫌だ」

「ああ……確かにそれは嫌よね、泥が跳ねるし」

二人で話しているとルーテシアから声がかかる。

「お姉ちゃん、運ぶの手伝って」

「はいはい、今行くわよ」

カミラが起き上がり、キッチンに歩いて行く。ずっと一緒に暮らすようになり、お互いに少しずつ遠慮が無くなって来たように感じる。それは言葉遣いや行動にも表れ始め、カミラはルーテシアの前でも娘として私に甘えるようになり、ルーテシアはカミラに妹として色々言うようになった。

共に住む前から悪い関係では無かったが、ますます仲が良くなった気がする。

キッチンから二人の話す声が聞こえるが、とても穏やかで楽しそうだ。

やがて料理を周囲に浮かべてカミラがやって来る。

「出来たわよ、お母様」

料理がテーブルにゆっくりと着地した。

ルーテシアの料理は美味しいので、基本的に食事はルーテシアが作る。

私とカミラが手伝う事もあるがあくまでも手伝いだ。

「お姉様、コップをお願いしますね」

私はルーテシアに頼まれコップを用意する。それぞれ好きな飲み

物を入れて準備を整える。

「では食べようか」

私の言葉で食べ始める。

いつの間にか決まりのようになっていく風景、今日も私達は三人で時を過ごす。

私達が島に移り住んでから時が過ぎる。

私達は時間を既に気にしていないが、ルーテシアが言うには数十年……少なくとも二十年以上は過ぎているらしい。

ある日私とルーテシアは街に買い物に来ていた。

カミラは「たまには二人で行ってらっしゃい」と辞退した。

「お姉様、これはどうですか?」

「グライウの肉か、買っておこう」

「他に何か買いますか?」

「クログウエルのために調味料を買っておこう」

「調味料は……あちらですね、では行きましょうか」

クログウエルは私達が帝国を出た後に取引を辞めた。

行くたびに魔道兵器が狙いを定めて来るのが気に入らないらしい。

結局街に買い出しに来ている私達が代わりに買っている。

金はクログウエルが今まで鱗などを売った金が余っているので問題は無かった。

買い物を終えて町を歩いていると、国の情報紙が店先に置いてあったので購入し、店に入る。

デザートを食べながら読んでみよう。

色々書いてあるが……ふむ、新たな兵器の研究開発を継続しているか。

「どんな事が書いてありました?」

ケーキを食べながらそう尋ねるルーテシアに紙を渡す、彼女はそれを読むと溜息を吐く。

「これ以上どうするつもりなんでしょうか……もう十分な気がしませんけど」

「気持ちに分かるぞ?」

「え?」

彼女は驚いたように私を見る。

「何が起こるか分からない以上、力をつけておいて間違いはないは

ずだ。私もそう思いながら強くなった。私は生きたいように生きるには力があると思っっているからな」

「言いたい事は分かりますけど……ただの戦争の道具になりそうです」

「国家間の関係が悪くなればそうなる可能性はある。私達が国を出た時点で不穏な思想があったし、半ば追い出されるようにカミラは退位したからな」

「……何故それを許したのです？」

彼女は少し不機嫌な声で話す。

「簡単に言えば私達とゆっくり暮らすために丁度良かったと言う事だ。長く求められるまま帝位にいたが、求められなくなったので丁度良いと辞めた訳だな」

「国の人達はお姉ちゃんを都合よく使っていたんですか？」

「違うな。確かにカミラは国民から求められて皇帝になったが、強制された訳では無い。嫌ならば皇帝になどならなかっただろう、彼女自身が求めに応じたんだ」

ルーテシアは黙って聞いている。

「カミラなら力を示し再び統率を取り戻す事も出来ただろう。だが彼女は私達と共に居る事を選んだ。気になるなら本人に聞いてみるといい」

「そうですか……」

「私もカミラも都合よく利用されるのは嫌いだからな。カミラは私の教育のせいかも知れないが」

「ふふ……お姉ちゃんはお姉様によく似ていますよ？」

微笑んで言うルーテシア、見た目の話では無いだろう。

「そうか？私が育てた娘だからな、多少似る事もあるか」

「ええ、そっくりです。お二人が思っている以上に」

そんなに似ているか。穏やかに笑いながら言うルーテシアを見ながら、残っていた紅茶を飲んだ。

転移で自宅に戻った私は、町で見た光景を思い出す。

町の上空に飛んでいた魔道飛行船は見た事の無い物だった。

新しい魔道飛行船は順調に作られているようだ、国を離れた私達が国の計画を知る機会は少ない。

エルフィに聞けば教えてくれるかもしれないが、外部に漏らした事がばれると彼女の立場が悪くなるので聞いていない。

世界の動きを知るための手段が欲しい所だ。

私一人ならそのままにして楽しむ所だが、カミラとルーテシアが危険に晒されるのは避けたい。

何か作るか、考えておこう。

いい案を思いついたら試作してみよう。

『クレリア、聞こえるか?』

ソファでそんな事を考えているとクログウエルから念話が届く。

『どうした? 調味料なら買っておいたぞ、また取りに来い』

『いや、それも大事だが用事はその事では無い』

『なんだ?』

『私の住んでいる大陸にお前達のいた国の魔道飛行戦闘船……だったか? それ飛び回っていてな……どうやら我を討伐するつもりのような』

まあ、どの種族から見てもクログウエルは恐ろしい魔物に見えるだろうな。

『好きにしているが、手を出すといつまでもまとわりついて来ると思うぞ?』

『面倒な……滅ぼしてもいいか?』

『それはやめて欲しい。楽しみが減ってしまう、私は彼らの先を見たいからな、今滅びるのは困る』

『そう言うと思っていた。我がそれを無視して滅ぼそうとすれば我が消える事になるのだろうか?』

『どうだろうか』

『全く貴様は……我はここに居るのはやめてお前達のいる島に住む』

事にした。構わんな?』

こちらに来るのか、島は広いから問題は無い。

『いいぞ。私達と暮らそう、二人も喜ぶだろう』

『当然だな、すぐに向かうぞ』

こうして三人で暮らしていた島に、竜族のクログウエルが加わる事になった。

クログウエルも流石に野ざらしは嫌なようだったので、島の岩場をくり抜いて住処を作ってやった。

彼女は時々私達と共に海に潜ったり模擬戦をしたりするが、大抵は色々な場所で寝ている。

住処で寝ないのか。

更に気まぐれに魔物を捕らえて戻って来ては、ルーテシアに調理を頼んでいる。

ついでに私達の分の魔物を取って来てくれる時もある。そんな事を思っていると重い音と振動が近づいてくる。

「我は地上にあまりいる事は無かったが……ここは中々よい場所だな」

私達が外で昼食後の休憩をしている場所に、クログウエルが姿を現した。

「クログウエルさん? 畑を踏まないでくださいよ?」

「分かっておる……」

ルーテシアの言葉に疲れたように呟くクログウエル。

最初にこの島にやって来た時、クログウエルは畑に着陸してカミラとルーテシアに説教を受けた。

戦いならともかく、言葉でひたすらに叱られる事など恐らく今まで無かったはずだ。

クログウエルには親しい二人からの説教は効果的だったようで、それ以来畑や建物を注意深く見て判断するようになった。

「クログウエル、今から模擬戦出来る？」

私とルーテシアのそばで椅子に座っていたカミラが声をかける。

「今日は気が乗らん……後にしろ」

「仕方ないわね。お母様……いい？」

カミラは私を見て頼んでくる。可愛い娘の頼みだ、聞いてやろう。

「いいぞ、いつものように周囲に影響が出ないように海の上で空間を隔離してやるからな？」

「私はともかくお母様の攻撃が外部に漏れたら危険なものね」

「お前が死ぬような攻撃はしていない」

「お母様は私やクログウエル相手だと死にはしないけど危険な攻撃をしてくるじゃない」

「それなりに危機感が無ければ効果が薄いからな。ルーテシアはともかくお前達は多少無理をしても平気だ。出来るだけそんな事にならないようにするつもりだが、いざとなれば生き返らせてやる」

「私も結構自分を化け物だと思っっているけれど……お母様はもう理解不能よね？」

「魂の意思は尊重するぞ？生き返りたくないと言うなら無理には生き返らせないし、私の頼みを聞きたくないというのなら無理強いもしない」

「……私もう色々麻痺して驚かなくなったわよ」

そんな私達の会話を聞いて呆れた表情をするクログウエルと固まっているルーテシア。

私は長い研究と能力開発で色々と出来るようになっていく。

分かるように説明しろと言われるとどう説明すればいいか分からないので、まだまだ私は未熟だ。

新しい生命を作ってみたり、他の知的生命体が存在する世界などから色々と連れて来たり送ったり、難しくはあったが色々出来るようになった。

何より他の知的生命体がいる世界がある事は私も驚いた。

カミラに初めて成果を話した時は大騒ぎして「いきなりとんでもない事言わないで！」と叱られた。

これからの目標はその力や技術を更に磨く事と、新たな力の開発もつと出来る事を増やす事だ。

「何が起こるか分からない、貴様の事だからそうそう危険な事は無いと思うが……気軽にやるでないぞ?」

クログウエルが言う。

「実際にやる事は……どうだろうな?……いつかはやるかもな」

「……それが原因で大事にならないといいけれど」

我に返ったルーテシアが言う。

「今の話は……本当、なんですすよね……? お姉様がわざわざそんな嘘を言う意味は無いですし……」

「ルーテシアよ、お前のお姉様は我でも理解不能な力の持ち主だぞ? まあ……気にしない事だ」

ルーテシアに重々しく声をかけるクログウエル。

以前私が彼女を黙らせるために見せた状態は彼女しか知らない。

ここでそんな事をすればカミラとクログウエルはともかく、ルーテシアが死ぬ。

「ルーテシア、私の年齢は知っているだろう? 時間をかければこれ位は出来るようになる」

「そう……でしようか?」

「ルーテシア、此奴の言う事を何でも信じるのはやめておけ。我にはどれだけ時間をかけようが不可能に感じるぞ」

私の言葉に納得しかけたルーテシアをクログウエルが止める、私はおかしな事は言っていない。

「お母様、取り敢えず模擬戦をしましょうか」

「そうだな」

考え込むルーテシアとその姿を見ているクログウエルを横目に、私達は島から離れた。

私は十分な広さを魔法で隔離し、外に攻撃が漏れないようにする。

「準備は出来た。いつものように範囲外には出られないからな？」

「ええ、今度こそお母様に勝つ……のは無理だと思うけれど、手こずらせて見せるわ」

「私はお前の力量に合わせて強さを変えるからな」

「はい、お母様」

「今回は遭遇戦をやるか、私は転移でどこかに移動する。お前は私を見つけ出し、討伐するつもりで来い」

「……分かりました」

やはり私相手だと本気が出せないか。

「大丈夫だ、カミラの本気程度で私がどうにかなる事は無い」

「分かりました……出来るだけ本気でいきます」

出来るだけか、誰であろうと敵になった時は殺すべきだが。

まあこの子はこれでいいのかもしれない。

私は現在、戦闘範囲にある小島の森に潜んでいる。気配はカミラにも感じられる程度に出しているから集中すれば分かるはずだ。

カミラはまだ遠くにいる、こちらから見つかりにくいように海中を進んでいるようだ。

こちらに近寄って来ているが、気が付いたような動きはしていないな。

気配を消しすぎたか？

私がもう少し気配を出すか考えていると、突然周囲が明るくなる。

上を見た瞬間、輝く光球が私の付近に落ち、爆発を起こした。

障壁を張りながら爆風に乗って離れる。

先程の光球で私がいた島は消え、えぐられた島の跡地に海水が流れ込み始めている。

気が付いていたんだな。そう思った瞬間、離れた海面から光の奔流が二本私に放たれる。

照射され続ける魔法を障壁で防ぎ、カミラのいるであろう場所に魔法を打ち込む。

私の放った魔法が水面に着弾するよりも早く、背後の海からカミラが飛び出してくる。

遠隔発動。

魔法の始点にカミラは居なかったか。

近接戦闘か、付き合ってやろう。

私の魔法の爆発音が響く中、カミラは両手の爪を伸ばし斬りかかってくる。

その鋭い攻撃を私は素手で受け止める。

中々の速度だ。私達は立ち位置を激しく入れ替えながら、近接戦闘へと移行した。

甲高い金属音が海上で響く。こうして普通に戦っているが、クログウエルは目で追う事が困難で、ルーテシアは動きが全く見えていないらしい。

かわした攻撃は海を深く割っている、今日は多少強めに攻撃しているようだ。

私は爪での攻撃をされながら、更に上下から魔法の照射を受ける。照射されている部分にのみ障壁を張り魔法を遮る。

カミラは私の対応を予想していたのか、動揺は見られない。

「お母様の防御を抜ける気がしないんだけど……？」

「本気を出さないからだ」

「そんなの関係ない癖に！その気になれば全部避けられるのにわざと受けてるの知ってるんだからね！」

戦いながら会話する私達。カミラには悪いが、私が戦う時は手加減するしかない。

手加減しないと彼女相手でも戦いにならずに終わってしまう。常に手を抜かれているという思いが彼女にあるのも当然だ。

「悔しいのなら全力を見せてみる」

言葉は返さずに攻撃の勢いが増すカミラ。

しばらく攻防を繰り返していると突然私の体の動きが鈍り、動かなくなる。

今の力では動けないな。

「抜け出さないのねお母様……ではお望み通り受けて貰いましょうか」

「魔法陣か、訓練していたんだな」

「しない訳無いでしょう？」

「それもそうか。これだけでは無いよな？」

「当然よ」

カミラは上空に目をやる、つられて目を向けると上空に巨大な立体魔法陣が描かれていた。

「良い構成だ」

「お母様の防御を貫くにはこれぐらいしなければ無理だと思っわ」「やってみろ」

カミラは微笑むと転移で姿を消した。

そして拘束された私に上空の立体魔法陣から魔法の光が降り注ぐ。

私は転移で魔法の影響範囲外に移動する。

そして即座に魔法を発動すると、拘束されたお母様に上空から太い光の奔流が降り注ぐ。

白く輝く光の奔流は僅かな時間の後、細く収束しその威力を上げる。

現在私が出来る最大級の威力を持つ魔法……立体魔法陣を使っているから一般的には大魔法と言うのかしらね。

相手を行動不能にしないと当てにくいのが欠点だけれど、今はこれが精いっぱいだわ。

私はお母様に育てられ様々な知識を得て戦闘の経験を積んだ、幼い頃の私は戦う事が好きで日々強くなり……自分はいつかお母様を超えるのだと思っていたのを覚えている。

しかし力をつければつける程、お母様の理不尽な程の強さが分かるようになって行つた、今でもお母様は誰が相手でも本気を出さない。

私はいっしかお母様が本気で力を出し切って戦える相手になりたと思うようになった、何か一つでも認められたくてお母様の元を離れた。

皇帝となった後。私が呼ぶ前にお母様が来てしまったけれど、お母様と再会し認められた時は嬉しかったな……。

最終的には皇帝を退位しお母様とルーテシア、クログウエルと暮らすようになり、再び自由に鍛錬と研究が出来る環境になった。

……やはり私はこういった生活が好きなのだと感じた。

結局お母様の元で戦い続ける事が強くなるために最も適した環境で、改めて私はお母様という事が好きなのだと知った。

お母様は強いだけではない。私達に理解不能な色々な事が出来る、死すらお母様には大した事では無く、簡単に覆す事が出来るしまう。

以前こことは別な知的生命体がいる世界を発見し、干渉できるようになった事についてのようにならされた時は思わずお母様を叱つて

しまった……。

後で後悔したが私の気持ちも分かって欲しい、そんな事をいきなり言われて普通に流せる訳がない。

他にも魂をどうか肉体を作って……などと、私では理解出来ない事を言う。

いくつかは小動物などで実験済みらしい。この島にはお母様が作った生命体が多少生息していると言う事かしら？

私はお母様に追いつく事が出来るのかしらね……？

お母様は長い時間をかければ誰でも自分と同じ事が出来ると思っている節がある。

少なくとも私はどれだけ時間をかけても出来る気がしないのだけれど……。

この魔法はそんな遥か高みにいるお母様に届きたくて作り上げた魔法だ。

周囲の魔力も利用している。それだけじゃない、この魔法に自分の魔力のほとんどを使用した……だというのに光に飲まれるお母様の気配は全く変化が無い。

やがて光は収まりお母様の姿が見える……まだ駄目ね……でも、いつかは……。

今までの攻撃で一番強力な物だった、カミラもそれなりに本気で攻撃してくれたのだろう。

何よりいつも使っている強度の障壁を初めて貫かれ、張りなおす事になった。

実に見事な一撃だった。

私が遠くにいるカミラを見ると魔力を殆ど使ったのかふらついている、私は彼女に近づき支えてやった。

「お母様……」

「見事な一撃だった。私の障壁を貫いたのはお前が始めてだ」

「本当……?」

彼女は驚いたような顔で言う。

「本当だ。間違いなくお前は強くなった、よく頑張ったな」

そう言っただけで顔を撫でてやると私に向かって倒れこんでくる。

私はそのまま意識を失った彼女を魔法で抱き上げると、島に戻った。

カミラを寝室に寝かせ、私はベッドに腰かける。

消耗した魔力を回復させるために私は魔力をカミラに吸収させた。すると彼女は数分で目を覚ました。

「……あれ……?」

ぼんやりとした表情で声を出すカミラ。

「大丈夫か? 魔力の使いすぎだ、回復はさせたがしばらく寝ている」

「私……そう……魔力を消耗して気を失ったのね」

「大分無理をしたな」

「お母様に届かせるにはそうしなければ無理だと思ったから……」

「少なくとも意識を失わないように調整しておくべきだな。もう少し寝ろ」

「うん……」

頬を優しく撫でると、彼女は眠りに落ちた。

すると控えめなノックの音がした、入るように言うというルーテシアが心配そうに入って来た。

「お姉ちゃんは大丈夫ですよね?」

「大丈夫だ、魔力を使い過ぎただけだ」

そう言うというルーテシアはほっとしたように息を吐いた。

「良かった……何か大事があったのかと思いました……」

「私に一矢報いたくて少し無理をしたようだ」

「はあ……全く……普段私に無理するとか言うのに自分はするん

だから……」

「くくく……。まあそう言うな、出来ればしない方がいいが時には必要な事もある。無茶では無く、無理ならたまにはしても問題無いだろう」

「平気でも心配です」

不貞腐れたように言うルーテシア。心配をかけたか、カミラが意識を失う事などそう無いからな。

「しかし無理しただけの結果は出したぞ。今まで貫かれた事が無かった私の障壁を初めて貫いたからな」

「ええっ!? つと……」

それを聞いたルーテシアが驚きの声を上げすぐに口を押え音量を抑える。

「お姉様のあの障壁を貫いたんですか……?」

「ああ、見事な一撃だった」

「お姉ちゃん凄いわ……」

ルーテシアは眠るカミラの顔を見ながら呟いた。

「私はこの子が目覚めるまでここに居る。ルーテシアはどうする?」

「残っている家事を終わらせませす、夕食までに目覚めると良いんですが……」

「そこまではかからないと思うぞ?」

「では夕食もいつものように用意しますね」

ルーテシアはそう言うのと静かに部屋を出て行った。

そして外が茜色に染まる頃、カミラは目を覚ました。

「おはよう」

「おはよう……お母様」

「体はどうだ?」

カミラは上体を起こし確認する。

「ぼつちりよ、もう何の問題もないわね」

「よし、では私は行く。お前も夕食までには来い、ルーテシアが心配している」

「私も行くわ、もう平気だし」

私たちは二人そろってリビングへと移動しソファに座る。

「お母様の障壁を貫けたのは嬉しいけれど、その後がこれじゃ話にならないわね」

カミラは脱力してソファに身を預ける。

「師として言うならその後に行動出来るだけの余力を残せないのは問題だ。だが母としては娘の成長を嬉しく思う」

「……ありがと、お母様……」

頭を撫でてやると照れたように俯き、呟くカミラ。

普段とは違う家族にしか見せない姿だ。

そこにルーテシアがやって来る、ルーテシアはカミラに近づくと話しかける。

「お姉ちゃんもう大丈夫なの？」

「もう大丈夫よ、心配かけたわね」

「心配しました。無理するなど普段から私に言ってるのに……」

「ごめんね、今回はお母様に私の力を見てもらいたくて」

そう言っつてルーテシアを抱きしめるカミラ。

血のつながりは無いが、姉妹のように見えるな。

その後ルーテシアが食事を用意してくれた。カミラは手伝おうとしたが、ルーテシアは今日はゆっくりして欲しいと断った。

こうしてカミラが私に成長を見せてくれた日は過ぎて行った。

カミラの成長を身をもって確認した日から時が経ったある日の夜、ルーテシアの寝ているベッドから抜け出した私は自宅から少し離れた地下にある研究室に向かった。

やはり世界の情報を全く知らないのは問題だろう。

私はこれから情報を得るための何かを作ろうと考えている。町に出回っている情報だけではあまり役に立ちそうも無いからな。

様々な所から情報を集めてくれる何かを作りたい。

情報を出来るだけ見つかる事無く集められる、そしてもし見つかったとしても破壊されたり捕らえられる事無く逃走出来る。

ゴレムのような。いや、私の命令を理解し、自分で判断する事が可能で、更に会話も出来るようにしたいな。

出来れば集中して作りたい、一か月程こもらせて貰おうか。

朝を待ち、私はカミラとルーテシアに話をした。

情報のためだと説明し、納得して貰う事が出来た。

それから約一か月後。私の研究室には私の手に収まるほどの黒い球体がある。

完成したな、早速起動実験を始めよう。

起動の為の魔力を少しだけ送り込む、すると球体は表面にうっすらと魔道回路を輝かせながら浮かび上がる。

『起動を開始』

念話で声が聞こえてくる。必要な情報はすでに書き込んだ状態なので放っておけば完了するだろう。

『絶対者を設定……クレリア・アーティア様を登録しました』

『魔力パターン登録……終了、設定中……終了』

『本体の名称を決定してください主様……「ヒトハ」設定完了』

次々と自動で設定が決まっていく。

これが終わったらカミラとルーテシアも登録しないとな。

『起動設定を終了します』

そう言うのとヒトハは再び表面を僅かに輝かせながら話しかけてくる。

『主様、ご命令を』

「ついてこい、お前の上位者を登録する」

『かしこまりました』

浮いたままついて来るヒトハ。設定では彼女は女性だ、声も女性的にしてある。

登録者の種類は三種類。絶対者と上位者、そして下位者だ。

絶対者とは文字通りヒトハに対して絶対的な権限を持つ者の事だ、彼女は絶対者の命に反する事が出来ない。

上位者とはヒトハに対して絶対者の命に反しない限り命令出来る者の事。

下位者はヒトハが指示を出し使う者達の事だ。

絶対者は私、そしてこれから上位者としてカミラとルーテシアを登録する。

「お姉様？終わったのですか？……それは何ですか？」

外は夕方だった。研究室を出て家に行くと、庭にいたルーテシアが声をかけて来た。

「説明するからカミラを呼んで来てくれ、リビングで待っている」

「はい、わかりました」

私がソファに座ると私の顔の横辺りにヒトハが滞空する。しばらくするとルーテシアがカミラを連れてやって来た。

「お母様、完成したの？」

カミラは私の隣に浮かぶ球体を見ながら言う。

「ああ、取り敢えず座ってくれ」

二人が正面に座った所で話を始める。

「こいつが私が作った情報収集用ゴレムで、ヒトハと言う」

『主様の配下のヒトハと申します』

「きゃっ!?!……喋った?」

ルーテシアが驚き声を上げた。

「凄いわね……念話だけ……普通の女性みたいだわ」

カミラも驚いたように言う。

「頑張った」

「凄いです……作られた人格とは思えませんね」

私がそう言うのとルーテシアはヒトハを見ながら呟やいた。

「これからお前達二人をヒトハの上位者として登録する」

「上位者?」

カミラの疑問に私は絶対者と上位者の説明をする。

「つまり登録しないと基本的には言う事を聞いてくれないのね?」

「自分で判断して聞いてくれるかもしれないが、しておいた方が確

実だ」

カミラの疑問に答えると今度はルーテシアが話しかけてくる。

「良いのですか? 私達を登録してしまつて」

「構わない、ルーテシアも何か知りたければヒトハに頼め」

「じゃあ登録しましょうか、ルーテシアもね」

「分かりました、お願いします」

「決まりだな。カミラから順にヒトハの言うとおりに登録しろ……」

ヒトハ、上位者登録開始」

『了解しました。上位者登録開始……登録者本人が名前を登録して

ください』

「カミラ・アーティア」

『登録開始……上位者カミラ・アーティア様を登録……魔力を提供

してください』

カミラはヒトハに魔力を送る。

『魔力パターン登録……終了、設定中……終了』

『上位者カミラ・アーティア様の登録を完了しました』

『上位者登録を継続……登録者本人が名前を登録してください』
やり方を見ていたルーテシアが言う。

「ルーテシア・イヌス・トリアム」

『登録開始……上位者ルーテシア・イヌス・トリアム様を登録……魔
力を提供してください』

ルーテシアがカミラと同じように魔力を送る。

『魔力パターン登録……終了、設定中……終了』

『上位者ルーテシア・イヌス・トリアム様の登録を完了しました』

「上位者登録終了」

私はそう言つて登録を終了する。

『上位者登録を終了します』

「よし、これで取り敢えず必要な事は終わった」

「ヒトハ、事前に入れておいた情報は理解しているか？」

『はい、理解しています』

「では各国を回り情報を集める。乗り物や兵器、武器の情報と、どの
程度世界に人が広がっているかの情報は優先しろ。後は任せる、行
け」

『かしこまりました』

そう言うヒトハは姿を消した。私の情報を元に転移したな、今は
アーティア帝国領にいる様だ。

「私達にも声は普通に届くのね」

「誰に言葉を届けるかは選べる。ヒトハが内容に問題が無いと判断
している事と、お前達が上位者に登録されているから届けているんだ
と思う」

カミラの言葉に私は答えた。

「今ヒトハはアーティア帝国領にいる。後は彼女に任せよう、何か
問題が起きたら私には分かるからな」

「居場所が分かるのですか？」

ルーテシアが聞いてくる。

「私の一部を僅かに組み込んでいる。だから動力切れは起こらない
し、どんなに離れていても居場所も状態も分かる。更に強制的に手元

に戻したりこちらから向かう事も出来るぞ?」

「何やってるのよお母様……私のドレスみたいな物よね?」

「まあ似たような物か?」

「……ん?と言う事はお姉ちゃんの事も分かっていたのですか?」

ルーテシアはカミラのドレスが私の一部である事を知っているため疑問を口にする、するとカミラが勢いよく私を見る。

「確かに……お母様は私の状態も知っていたの?」

「似たような物だと言っただろう。ヒトハは本体に私の一部が混ざっているが、カミラは服だ」

カミラは頷く。

「ドレスの状態からカミラが危険な状態でない事は分かっていたが場所は探ってはいなかった。出来てしまうから私を信じて貰うしかないが、私がアーティア帝国に来たのは本当に偶然だ」

「勿論私はお母様を信じるわよ……それに心配して貰えるのは嫌じゃないし……」

「お姉ちゃんは可愛いですね」

「ほら、夕食作るわよ」

ルーテシアがそう言うのとカミラは恥ずかしそうにして夕食を作りキッチンに向かった、ルーテシアは微笑みながら後をついて行く。

約一か月ぶりに三人で夕食を食べて風呂に入り、二人が寝るまで傍にいた。

ヒトハを作り終わって私は再びいつもの生活に戻ったが、着実に情報が集まっていた。

念話での報告が来る時間は余程の事が無い限りいつも深夜に行われる。

これは私が寝ない事と夜間はルーテシア達が寝ている事を踏まえただ上ヒトハが選んだ時間だ。

そしていつもの時間ぴったりにヒトハからの報告が届く。

『主様、本日のご報告を致します』

『頼む』

『以前報告いたしました魔道飛行船に関してご報告いたします。現在各国が開発している魔道飛行戦艦ですが、完成間近なようです。また、研究段階ですが小型の魔道戦艦艇とそれを搭載する魔道飛行母艦と言う艦の研究開発も行われています』

『そうか』

『更に地上の兵器も研究開発が始められているようですが、現在得られたのは魔道戦艦車と言う開発名だけでした』

『十分な成果だ、よくやってくれた』

『ありがたいお言葉、感謝いたします』

『引き続き頼んだぞ』

『お任せください』

『そろそろお前の状態を確認するから近いうちに一度戻って来い』

『かしこまりました』

そう言うとは私は念話を切る。私の方から切らないと彼女はいつまでも念話を切らないからな。

色々と開発が進んでいるようだ、人が世界を広いと思わなくなるのも時間の問題かもしれない。

世界が少しずつ、確実に変わっていく中、私達は変わらぬ生活を続けた。

訓練や研究をしたり、遊んだりして時を過ごす。

クログウエルも島でのんびりとした生活に慣れて来たようで、大抵島の何処かで寝ているか私達と共に居るようになった。

ヒトハは時々私の検査を受けに戻りながら、各地の情報を集め続けた。

そんな中、私は個人携帯兵器と個人障壁発生装置が開発された事を報告された。

「法具」と呼ばれる一メートル程度の長さの射撃武器と、障壁発生装置である「防珠」と呼ばれる腕に装着する幅の広い腕輪のような装置だ。

どちらも吸魔法陣を使っている。いや、この言い方は正しくは無いか。

現在魔力を使用する物で吸魔法陣を使用していない物は存在しない、それが当然でありわざわざ言う事では無くなっている。

周囲の魔力を使い、多少の充填時間を要するが打ち放題な訳だ。

障壁の方も魔力を吸収しながら動くので、強力な攻撃を受けなければ十分な効果がある。

こうして様々な兵器などが完成し、大きな力を得た人類は新大陸の隅々まで手を伸ばし、魔物達をその力で排除しながらその殆どを手中に収めた。

魔車は数を減らし、一度に大人数を運べる魔道車が開発され、各町はより簡単に行き来が出来るようになっていった。

ますます数を増やした人類は残っていた森を切り開き、湖や海辺に新しく大地を作り、住む場所や食料の生産場所へと変えて行った。

エルフィはこの流れをあまり快く思っていないようだが、世界の流れを彼女一人で変えられる訳も無く、諦めているようだ。

種族は混じり世界に広がっていく。ハーフも増え始め、今では誰も種族を気にしなくなった。

僅かな時間でここまで世界が変わるとは、やはり人類は見ていて面白い。

数年前、エルファイがこの世を去った。

死ぬ前に私達は彼女と最後の挨拶をして居たので別れの儀には参加しなかった。

ヒトハの集めた情報では、エルファイが死んでから各国間で小さないざこざが起こるようになっていっているらしい。

「こうして見るとエルファイは有能だったな」

『はい、彼女が亡くなってから国家間の関係が少しずつ悪化しています、主な原因は利益の問題のようですね』

久しぶりに私の元に来ていいるヒトハが私の言葉を肯定する。

「過去の経験からの予想だが、その内戦争になる可能性がある」

『私の予想も主様と同様です』

明け方のリビングでヒトハと会話する。

「ヒトハ、今日は戻る前に研究室に來い」

『かしこまりました、よろしければ何を行うのか聞かせていただけますか？』

「お前の防御を強化する。これから戦争になるのなら危険な環境で活動する事が増えるかも知れない。本体の強度で問題無いとは思いますが念の為だ」

『お心遣い感謝いたします』

朝食を取り、二人にヒトハの強化をする事を告げて研究室に向かう。

二人も彼女の事は大事に思っているようだ。

以前ルーテシアが料理のレシピを集めて欲しいと頼んでいるのを見た事があるし、カミラが何かを頼んでいる所を見たとルーテシアから聞いている。

「強化した障壁を搭載するぞ」

『よろしくお願いいたします、主様』
そう言つて自ら作業台に乗り、待機状態になるヒトハ。
私はすぐに彼女の改良に取り掛かった。

改良は終了した、これで簡単には破壊される事は無いだろう。

「終わったぞ」

そう言つたとヒトハの表面が薄く光り、浮かび上がる。

『ありがとうございます主様』

「使えるか？」

『問題ありません』

彼女の周りに障壁が張られるのを感じる、上手く動作しているよう
だ。

「これから障壁の強度を確認する」

『かしこまりました』

その後確認は問題無く終了したが、その後攻撃手段も必要だと考え
再び改良し、魔法照射を行えるようにした。

カミラとルーテシアもいざと言う時の攻撃手段はあつた方がいい
と言つていた。

攻撃魔法の確認も行い、問題無くヒトハは情報収集に戻つていっ
た。

夕食後ソファでくつろいで居ると、私の隣にいるカミラが言う。

「最近買い出しで行く町の雰囲気は良くないわね」

「そうだな」

今日は買い出しでいくつか町を回つたのだが、以前からヒトハの報
告でも聞いていた通り、何となく空気がおかしい。

エルファイが居なくなつてから、五年か？

それほど時間が経っていないにもかかわらず、各国の関係が悪くなり始めている。

「エルファイが居なくなつた途端にこのありさま。女王が一人居なくなつただけで戦争が起きそうなほど世界が不安定になるってどういう事なのかしらね」

「ヒトハの報告では利益の問題で色々あつたらしいぞ？」

「また……？以前もそんな内容で争っていたわよね？」

「争っていたな」

「こんな短い時間で変わり過ぎじゃないかしら……エルファイが生きていた間は、ここまでおかしくならなかったのに」

「エルファイがこうならないように色々と手を尽くしていたと考えた方がいいな、今までの平和は彼女が作っていたのかもしれないぞ？」

「今の状況を見ていると冗談だと言えなくて困るんだけど……」

「どちらにしてもこのままでは何かありそうだな」

「私が退位してからの帝国はあまり良いとは言えない状態なのよね、新しい皇帝は側近達の言いなりらしいし」

「物語に出て来そうな話だな、正しい情報なのか？」

「ヒトハにアーティア帝国の皇帝周辺の情報を集めて欲しいと頼んでおいたの」

「なるほどな、それならば間違いないか」

ルーテシアが飲み物を持って来てくれた。

彼女は自分が立ち入る問題では無いと感じた時は口を挟まず大人しくしている、私達に飲み物を置いた後、ルーテシアはソファに座つた。

私とカミラはルーテシアに礼を言つて用意してくれた飲み物を飲む。

「私が皇帝だつた時に他の国を支配して統一するべきだという意見が出たけれど……それを実現しようとしているみたい。もう私が居た頃の帝国では無いのね」

「支配者が変われば国も変わる、今の帝国はそんな国なのだろう」

「お母様の名を残したくて付けた名前だけれど……こんな国になる

のならつけるべきじゃなかったわ……ごめんなさい……お母様」

カミラは俯き小さな声で言う、私はそんなカミラの頭を抱き寄せる。

「私はお前が努力し築き上げた国の姿を見ている、それで十分だ」

「私はある時、皇帝として残るべきだったのかしら……」

「お前はあの時、退位を望まれた。ある意味最後まで彼らの望みを聞いたとも言える。私はお前の決断が間違っていたとは言えない」

「うん……ありがとう」

「帝国民達は新たな皇帝を迎えて変化を望んだのか？カミラが居てはあれ以上繁栄出来ないと考えたのだろうか。変化はあったと思うが、必ずしも望んだ様に変化する訳では無いからな」

「帝国民達も様々な事が上手く行き続けて浮かれていたのかしらね」

「そうかもな」

少しの間静寂が訪れたが、ルーテシアがそれを破る。

「お二人とも一息つきませんか？デザートを用意します、今日はイチホゴのケーキが良いですか？」

「頼む」

「うん、お願い」

私とカミラが返事をするるとルーテシアはデザートを用意しに行き、その後は皆で雑談しながらデザートを食べた。

建物が高い。

買い物に来た私が最初に思った感想がこれだった。

いつもは程々の規模の町に買い物をして来ているのだが、今回は大都市に来ている。

「本当に高い建物ばかりですね……」

ルーテシアも周りを見て感心するように言う。

「流石に大都市は違うわね、人も多いし店も多いわ」

ここはアーティア帝国の都市の一つで商業都市でもある。

私達が買い物をするために朝から町を歩いていると、ギルド商會が目に入る。

様々な魔道製品が生み出された影響で、各国の冒険者は数を減らした。

国が兵器を用いて討伐を行ってしまったために獲物が少なくなっ
てしまったからだ。

冒険者の多くは他の職に移った。一部はまだギルドに所属してい
るが、個人や会社などの警備兵のような仕事をしている。

かつてのように冒険をして魔物を討伐する冒険者は現在では僅か
しか居ない。

更に一部の危険の少ない魔物や利用価値の高い魔物は人の家畜と
して飼われ、生産されるようになっていた。

私が好きなモー乳販売店も世界に広がり、今ではどこの町にも店が
ある。

今私はカミラとルーテシアを連れて「闘球」と言うゲームを行う店
に来ている。

ルールはかつて森林国家ユグラドで子供達に混ぜてやった玉遊
びに似ていた。

勝負は私が一位、カミラとルーテシアは同じ戦績だった。

街の中を歩き、外で飲み物を飲んでみるとカミラが男達に声をかけ
られたが、私を見ると引き上げて行った。

「何だ？」

「お母様の事を私の娘だと思ったみたい、あの男達は二人の子持ち
と言っていたからルーテシアも私の娘扱いだったみたいよ？」

カミラが私に答える。

もう子ども扱いは慣れたものだ。

こうして三人で出歩くと大抵の場合、私とルーテシアが娘だと思わ
れる。

三人だとあまり男達に声をかけられないのはカミラが人妻だと思
われているからだろう。

ルーテシアと二人の場合は大抵ルーテシアが姉だと思われるか、私
が娘だと思われるかのどちらかになる。

「あんな男達がお姉ちゃんに近づくなんて許せませんね」

男達に怒りを示すルーテシア。

「人妻に手を出さないだけ奴らはまともだろう。たまに関係無く、
それ所かまとめて手に入れようとする者もいるからな」

以前私とルーテシアを娘だと誤解した上で、私達全員に手を出そう
とした男達がいた。

皆それなりの立場の男だったらしいが、全員怒ったカミラに殺され
た。

カミラの怒りによって男達が色々とおかしな状態になったので、し
ばらく騒ぎになっていたな。

「ああ……あれですか……」

ルーテシアの声に昏い色が宿る、まあ男嫌いの彼女からしたら最悪
に近いだろうからな。

ちなみに私一人だと男が声をかけてくる以外に、危険な者達も寄っ
て来る事が多い。

まあ簡単に言うると誘拐や強姦目的の輩だな。

普通に声をかけて来た男は普通に断って終わりだが、それ以外の者
達は全員死体となった。

放置しておくのと別の被害者が出るだろうからな、掃除は出来る時に
しておくのがいいだろう。

処分した時はその度騒ぎになっていた、人類の数は多いのだから多
少減った所で問題は無いと思う。

「悪かったルーテシア、思い出させてしまったな」

「大丈夫ですお姉様、ゴミが掃除されて良かったと思っていますよ
？他の者が被害を受けなくなるのですから」

私に微笑んで言うルーテシア。

少し私とカミラの価値観に引きずられている気がするが優しい性
格は変わっていない。

ただ、よりいっそう男嫌いが進んでしまった。

もうルーテシアの男に対する意識は変わらないかも知れない。不穏な気配もあるし二人のために出来るだけ買いだめはしておく。

私は最悪何もなくとも問題無いが、カメラは平気か分からないし、ルーテシアは確実に問題があるからな。

会話しながら歩いていると、ルーテシアが写影具で写影を取ってくれるという店を見つけた。

写影とは特殊な鍊金薬を使った紙などに一定範囲の風景などを写し取るものだ。

少し前に登場した物で、それなりに値段は高いが驚くほど高いという訳でも無い。

「お姉様、お姉ちゃん……あの……一枚とりませんか？」

「そう言えば撮った事が無かったな」

「良いじゃない、取りましようよ」

私たちが店に入ると中年の人間と思われる男性が話しかけて来た。

「いらつしやいませ、撮影でしょうか？」

「ええ、私達三人でお願い」

「かしこまりました、あちらへどうぞ」

私達は撮影のための壁がある位置へ移動する、カメラとルーテシアが私を挟み腕を組んでくる。

「三人共お綺麗ですね……あなた方ほどの女性は見た事が無いですよ」

店の男性がお世辞か本心か分からない言葉を投げかけて来るが、これは本心だろう。

「ありがとうございます、撮影お願いするわね」

カメラが返すと撮影が開始された。しばらくの間動かない様に言われ待っていると両側から抱かれる腕に力が込められた。

二人の行動に思わず口元が緩んだ気がした。

その後、撮影された写影を三枚に複製して貰い、料金を支払って店を出た。

受け取った写影を二人はしばらく嬉しそうに眺めた後、大事そうに

マジックボックスへとしまい込んだ。

その姿を見ながら私が写影を魔法で保護してマジックボックスへと入れた。

私はお母様と共に写った写影を見て思わず笑みを浮かべる、長い間共に過ごしていてもこうして形に残りいつでも見る事が出来るのはいい物よね。

いっそのこと写影具を買ってしまったおうかしら……そして二人に色々な服を着せて……うん、良いかも知れないわ。本格的に検討してみましよう。

私はそんな事を考えてから写影をマジックボックスに入れた。

お姉様とお姉ちゃんと一緒に写影……やっと撮る事が出来ました……。

以前から撮りたいと思っていたけど、今日ようやく叶った。

私は手に入れた写影を見る。

お姉ちゃんと私はお姉様の腕を抱き笑っている、私がこんな笑顔になるなんて自分でも驚きだ……自分で見ると女の顔をしている気がする……これは恥ずかしい。

だけど……このお姉様の写影を手に入れられて私は嬉しすぎて大変だ。

写影に写るお姉様は間違いなく微笑んでくれている……この表情を私とお姉ちゃんで見せ出したと思うと嬉しい。

店の男にも見られたのは諦めるしかないだろう……。

いっその事、写影具を買ってしまうのも良いかも知れない。

私もお金はあります、二人に色々な服を着せて撮影したい。

本格的に検討してみようかな……そんな事を考えながら私は写影

を大事にマジックボックスへと収納しました。

写影を撮った後、洋服やアクセサリの店などを覗きながら三人で町を楽しみ、昼食を食べた後に私は二人に言う。

「これから町を回って食料や生活に必要な物を可能な限り買い集めておくぞ」

「え……何故……？あ……」

ルーテシアが疑問を口にしたが思い至る事があつたような声を上げると。

「これから先どうなるか怪しいものね、買い溜めはしておきましょうか」

カミラは私を見て言う、私達は転移で移動するために町の外へと向かった。

各町を回って生活に必要なになりそうな物を次々に買い込み、それぞれのマジックボックスへ分散して入れる。

総額も総量もかなりの物になったが私達には問題無い。

「お姉様、ご相談があるのですが……」

ある日の昼食後、ルーテシアが私に声をかけて来た。

「なんだ？」

「私……ある魔道具が欲しいのですが……個人的に買ってもよろしいですか？」

「ルーテシアの金で買うのなら私にわざわざ許可を取る必要は無いだろう？」

全員で使う物のために金は集めてあるが、それ以外の金は個人の物だ。

それをどう使おうが構わないと思うが。

「一応話しておこうかと……」

「そうか、では一応聞いておくが何を買うんだ？流石に「魔道飛行船

を買う」と言われたら考える事になるかも知れないな」

「それは秘密にしておきたいんだけど……駄目ですか？変な物じゃないしそう大きな物でも無いから……」

「内緒という事か。いいぞ、好きにするといい」

「いいの？」

「お前はおかしな事はしないでだろう？だから秘密にしたいのなら聞かないし調べたりもしない」

「うん……ありがとう」

彼女は微笑んで礼を言うと、カミラと買い物に出かけて行った。

「ただいま帰りました」

「ただいま、お母様」

二人が帰って来た、ルーテシアはすぐに夕食の用意をしにキッチンに行った。

「ルーテシアは目的の物を買えたのか？」

ソファに座るカミラに問う。

「買ったわ、最初はクログウエルも呼んで使うつもりよ」

「使う？カミラも関わっていたのか？」

「偶然欲しい物が同じだったの、二つもいらなから二人で買ったのよ」

「そうか」

「……お母様、クログウエルは明日来るって言ってるわ、すぐに使えるわね」

念話をしていたのだろう、しばらく黙り、私に伝える。

そして翌日の朝にクログウエルがやって来た。

「我に来て欲しいとは……何の用だ？」

「これから私達と写影を撮って欲しいのよ」
カミラがクログウエルへ話しかける。

なるほど、買ったのは写影具か。

「写影……風景を写し取る物だったか？」

「皆で撮りたいのよ、いい？」

「ふむ……構わんぞ」

クログウエルも了承して皆で撮る事になったが、そこでルーテシアが声を上げた。

「ヒトハさんはまだ来ませんか？」

「彼女はすぐ来られるから最後よ。お母様、お願い出来る？」

カミラが頼んでくる、私が連絡をするとすぐにヒトハが転移で現れた。

『ただいま戻りました主様』

「皆で写影を取るらしい、お前も入れ」

『かしこまりました』

そして皆でどう並ぶかやどこを背景に撮るかを話し合った。

その結果、家を背景に横からクログウエルが首を出し頭だけ写影具の方を向き、その首の前に私を挟んで三人並ぶ。

両脇の二人から腕を組まれ、私の頭の横にヒトハが浮かぶという状態だ。

私が魔法で操作を行い撮影し、人数分複製してそれぞれに渡す。皆渡された写影を見ている。

私はその写影を保護してからマジックボックスへと入れた。

みんなマジックボックスに入れていたが、ヒトハはマジックボックスを使えない事に気が付き、この後すぐにマジックボックスを使えるように改造した。

写影を撮り終わり、ヒトハがマジックボックスを使えるように改造した後、家に帰ると、クログウエルが家の前で寝ていた。

家に入りソファでくつろぐ二人に声をかけた。

「クログウエルのために買ったんだな」

「……はい。クログウエルさんとも撮りたいと思っていたのですが、竜族である彼女は町で撮る事など出来ませんから……写影具を買ってここで撮るしかなかったんです」

私の言葉にルーテシアが答える、彼女はいい子だな。

「それでお母様、せっかく買ったのだからこれだけで終わってしまったのはもったいないと思うのよ」

かなり高い値段だっただろう、その写影具を写影一回で終わらせるのは確かにもったいない気はする。

「そうかも知れないな」

私がそう言うと、カミラとルーテシアが顔を見合わせてから私を見る、そしてルーテシアが口を開く。

「ですので……お姉様をたくさん撮ろうと思います」

こつちが本当の目的では無いだろうな、まあ好きにさせてやろう。

私はリビングに買って来た様々な服を並べて行く、お姉様はそれを見て薄い微笑みを浮かべています……とても綺麗です。

写影具は違和感無く買ったと思う。クログウエルさんを理由に使ってしまいましたけど、一緒に撮りたかったのも嘘ではないです……。

それに戦争が起こりそうな心配がしていますから……もしそうなれば手に入らなくなるかもしれないですからね。

お姉ちゃんはリビングの壁を背景にするように写影具を設置していますね。

写影用の鍊金葉も大量に買ったし、お姉ちゃんが言うには作れるらしいので好きなだけ撮れます。

私を買った服を並べましたが……。

こうして見ると似たような服ばかりでしたね、私の好みの服を買っ

たので似るのは仕方ないでしょうか……。

「ルーテシア、準備が終わったから私が買った服も出すわね」

そう言ってお姉ちゃんも服を出し始めました……私とは全く方向が違う服です、活動的な服とでも言えばいいでしょうか？

「私は何を着ればいいんだ？」

意外とお姉様も乗り気ですね、もつと早く実行するべきでしたか。

「ではお姉様……まずはこれを……」

私が最初に渡したのは飲食店の女性が着る制服、お姉様のサイズが無かったのでわざわざ作って貰いました。

間に合ったのが信じられません、店の方には無理を言ってしまうました。

露出は少ないですが普段の雰囲気によって仕える雰囲気に感じられて私の心が震えました。

お姉ちゃんの用意した丈の短い半袖と半ズボンも素晴らしかった、へそと太もも、そして控えめな胸が眩しい。

お姉様が帝母として着ていたドレスもあり、あまりの美しさに私の気が遠くなってしまうました。

そんな中、お姉ちゃんが言いました。

「お母様、ルーテシアはあの鎧姿を見ていないんじゃないかしら？」

……鎧姿？私はわくわくする心を押さえ二人の会話を聞いていた。

「あの鎧か、確かに見せていないな」

「見せてあげたら？」

「服では無いが、いいのか？」

「お願いしますー！」

私を見て言うお姉様に食い気味に言ってしまった……恥ずかしい。

「では着るか」

お姉様がそう言うのとマジックボックスの穴から何かが現れ、次の瞬間には黒と赤に彩られた女神が現れた。

美しさと勇ましさを兼ね備えたその姿に私の目は釘付けになった。

「これでは顔が見えないな」

お姉様がそう言うのと重装だった鎧が動き、変化して行きます。

私はお姉様の全ての状態を撮影した、とても素晴らしい時間でした……。

最終的には私とお姉ちゃんも着替える事になり、撮影される事に……恥ずかしかったです。

カミラもルーテシアも満足してくれたようだ。

たまには違う服装をするのもいい物だな。

ルーテシアが特に喜んでいて、鎧姿を見せた時の反応が面白かったな。

カミラとルーテシアの事も撮影したが、二人共元がいいからな。

どんな服も似合っていた。

二人の服の数は少なかったなので、私と比べると撮影時間は短かった。

だが、その後撮影された写影を全て複製したので、意外と時間がかかった。

また何かあれば撮影したいと言われ、たまになら良いと答えた。

いつかまた撮影をする事もあるだろう。

ある日、朝食時にヒトハから報告があった。

『主様、アーティア帝国について緊急のご報告です』
帝国の事なら皆に聞かせておくか。

『ヒトハ、カミラとルーテシアにもつなげ』

『よろしいのですか？』

『構わない』

『かしこまりました』

「二人とも、ヒトハから緊急の報告だ。お前達も聞け」

二人は食事の手を止め聞く体勢となる。

『アーティア帝国が同盟を一方的に破棄、各国に宣戦布告いたしました』

動いたか、面白くなりそうだ。

二人は報告を聞き真剣な表情をしている。

『各国の動きは？』

『森林国家ユグランド、魔工国ガンドウ、獣王国カルガの三国は以前から国境に魔道兵器を置き防衛態勢を整えていたようですが、現在の動きは確認しておりません』

『そうか、宣戦布告後のアーティア帝国の動きは分かるか？』

『現在多くの軍が国境近辺に集まっています、恐らくこれから各国へと向かうと思われます』

宣戦布告の事実を伝えるためにすぐに連絡してきたのだろう、今はまだそれ位しか分からないか。

『そうか、ありがとう。ヒトハは各国間の戦況の把握を第一に動いてくれ。気を付けろよ、私はお前を失いたくは無いらな』

『……かしこまりました』

その言葉を聞いた私は念話を切る。

「戦争が始まったな」

「……予想していたからか、思っていたより驚きはしませんでした」

私の言葉の後にルーテシアが自分の心境を語る。

「私は基本的には戦争には関わらない。念のため情報は集めるが、それだけにするつもりだ」

「そうね、私もお母様と同じ意見よ」

「関わる必要がありませんからね、お姉様の意見に賛成です」

二人は私の意見に賛成する、これからのんびりと過ごそう。

クログウエルにも伝えておこう、私は彼女に念話で人類の戦争が起きた事を伝えた。

どうやら彼女も興味は無い様だ。

人類の間で戦争が起こっている中、縁の深い者がどの国にも居ない私達は変わらぬ生活を続けた。

ただ、昔とは違い今はヒトハがいる。彼女からの報告で戦況がどうなっているかはある程度は分かるようになっていた。

今の所は国境付近での戦闘が行われているが、人が主力であった頃と違い、現在は魔道兵器が使われている。

広範囲にわたり大規模な戦闘が行われ、人も物も次々と消費される。

だが今までの繁栄で人も物も溢れている各国は止まる気配を見せていない。

まだ開戦してそれほど時間が経っていないから当然かもしれないが、簡単に収まるなら最初から戦争など起こしてはいないだろう。

彼らの内、ほとんどの者は初めての戦争だろう。しかしずっと人類を見ている私からすると特に目新しい事は無い。

以前の戦争はいつだったか覚えていないが、森人の中には以前の戦争を経験している者がいるだろうか？

いや、彼らの寿命より昔だったかな？

以前の戦争について考えていると、ソファに座っている私の隣にルーテシアが座る。

「何か考え事ですか？」

「以前の戦争はいつ頃だったかなと思っただけ」

「どんな戦争だったのですか？」

「ルセリア神王国、森林国家ユグランド、魔工国ガンドウ、獣王国カルガの四国が互いに争った戦争だったはずだが……いや、他にもあったような気がするな」

私は記憶力があまり良くない、うっかり何か忘れているかも知れない。

「それは……亜人種族独立戦争の事でしょうか？」

ルーテシアが聞き覚えの無い事を言う。

「何だその名前は」

「確か、当時の日記のような物が複数発見されていて、ある程度過去の出来事が明らかになっていくんです。その四国が争った戦争は現在そう呼ばれている戦争に間違いはないと思います」

「なるほど、どれくらい前の事か分かるか？」

「正確には分かっていますが、約四百年から四百五十年程前の事のように。私が生まれた頃にもかぶっているのも、もしかしたら私が幼い頃の事だったかもしれませんね」

ルーテシアが幼い頃。

「ルーテシア、お前は自分の年齢を正確に覚えているか？」

「年齢ですか……ごめんなさいお姉様……あまり正確には……」

「大体でもいいぞ？」

「恐らく四百二十歳前後だと思います」

「と言う事は、戦争は四百二十年前辺りの出来事のはずだ」

「そうなのですか？」

「思い出した。お前が幼い頃、ミナと戦争の事を話していた覚えがある」

「なるほど、お姉様が思い出した事が正しければ戦争の時期が絞れますね」

「そうすると森人の中には以前の戦争を経験した者がいる可能性もあるな」

「確かにそうですね……お姉様には何か考えがあるんですか？」
「なぜそう思う？」

「詳しく聞いて来たので何か考えがあるのかと……」
誤解させてしまったか。

「悪かった、ただいつ頃だったのか知りたかったただけだ」

「謝らないでくださいお姉様！……勝手に深読みしたのは私なので
すから」

私が謝ると慌てて言うルーテシア。

「答えてくれてありがとうルーテシア」

そう言つて頭を撫でる、彼女にも寿命が迫っている。

「はい……」

彼女はそう言うのと暫く私に撫でられ続けた。

朝に私が砂浜に向かおうと家を出ると、家の畑のすぐ傍にクログ
ウエルが寝ていた。

「クログウエル、起きろ」

私が彼女の体を叩くと彼女は目を覚ましたようだ。

「あたしの眠りを妨げるのは誰よ……」

寝ぼけて素が出ているな。

「私だ」

「……なんだクレリアか……我に何か用か？」

「畑に近すぎる、お前が寝ぼけて動いたら潰れるぞ」

「何……？」

彼女は頭を起こして確認するとそつと畑から離れ、横になる。

「寝ぼけたまま動くからだ、また説教をされる所だったな」

「……我にあんな事をするのはあの二人位だぞ……」

「お前、私達以外に親しい者はいるのか？」

「いない、出会う者の殆どは私の姿に怯えて逃げるか殺そうと襲い
掛かってくるかのどちらかだ」

「そうだろうな」

本性はその辺りの小娘みたいな奴なのだが、分からないだろうしな。

「姿を気にしない者は貴様とあの二人位だ」

「あの二人は色々と特殊だからな。カミラは幼い頃から私を知っていた上に今では私に次ぐ実力者、ルーテシアは小さい頃からお前と関わって慣れていた」

「言っておくが幼い子供であろうと我には怯えるぞ?……だがあの子は全く動じずに懐いてきた挙句、我をクロちゃんなどと呼びおつた」

「そうなのか?」

「あの子が我に対して何故恐怖を抱かなかつたのは理由があつてな。この理由があつたからこそ、この関係になれたのだと思う」

「何だ?」

「幼い頃、我に懐くルーテシアに聞いたのだ。我が恐ろしくは無いのか……と」

「それで?」

「あの子は微笑んで「クレリアお姉ちゃんのお友達なら怖くない」と言っただ」

「そうか」

まあ悪い気分では無いな。

戦争の戦況はアーティア帝国がやや劣勢になっているように感じる。

ヒトハが報告してくれる戦況の報告を全て合わせて考えると、そう間違っていないはずだ。

かつてのルセリア神王国のようにお互いを敵対させる事無く一対三で戦い続け、やや劣勢で済んでいるのはそれだけアーティア帝国が強力な国である事の証明か。

それから時が過ぎると、劣勢であったアーティア帝国は少しづつ押し始められる。

更にヒトハからアーティア帝国の各地で独立しようとする動きが起こり始めているという報告を受ける。

私はヒトハに独立に関係する事を優先的に調べるように頼み、報告を待った。

そして現在。

『ご報告いたします』

『頼む、まずは原因からだ』

『はい。現在の帝国は上層部と軍部、帝国民の考えの違いが大きくなっています。他国を征服し統一したい上層部と軍部、一方戦争をしてまでそんな事をしたくはない帝国民……更に軍部は基本的に上層部と同じ考えですが、一部が今の帝国にはついていけないと考え始めています』

『なるほど、しかしこれだけで独立しようと考えられるだろうか。成功させるのはかなり難しいと思うが』

『これは確実では無い情報なのですが……上層部の誰かが独立を手助けしているような痕跡があります』

『アーティア帝国の上層部か』

『はい、上手く理由をつけていますが各地に送られる兵達は独立を望んでいる者達を選ばれて送られています。また、各地にいる統一思想の兵達は集められ戦地に送られています』

『なるほどな』

『これだけの事が出来ると言う事はかなりの地位にいる者だと思われませんが、誰がやっているかまではまだ分かっておりません』

『誰がやっているのか気になるな』

『どういたしますか？』

『独立の動きと戦況の方を優先してくれ』

上層部の誰かと言う事だけは分かっているのだから、構わないだろう。

『かしこまりました』

以前から戦況に何かおかしいものを感じる。劣勢のアーティア帝国に対して押し込む好機があっても、どの国も行わない。

更に防衛に力を入れて出来るだけ被害を出さない様にし、何かを待っているようにも見える。

違和感を感じながら時が過ぎたある日、ヒトハからアーティア帝国の各地が独立してアーティア帝国に敵対したと報告を受けた。

そしてヒトハはそれを手助けした者も調べていた、私が気になると言っていたのを覚えていたようだ。

独立を手助けしていたのは現皇帝と複数の側近だった。なぜこうしたのかは分からないが彼らには彼らの理由があるのだろう。

皇帝と側近ならばあれだけの事も出来なくは無いだろう、皇帝は操り人形だと思っていたが中々やるものだ。

各地が独立した後、元同盟の各国と戦争になるかと思われたが、元同盟各国は独立した地域を素通りして侵攻したらしい。

カミラが言うには「各国が事前に皇帝と裏で通じていた可能性が高い」との事だ。

更に独立した地域に攻撃を仕掛けるアーティア帝国軍を元同盟国が阻んだという。

この動きはカミラが言うように、同盟各国は皇帝と通じており、独立した地域を防衛する事を事前に約束していたのでは無いかと考えている。

しかし様々な地域で独立の動きがあった割には独立したのは三つの地域。

更に言えば僅かな領地しかない場所だけだ、これではアーティア帝国にとっては誤差の範囲でしかない。

恐らくまだ何かある。

ある日の深夜。

ベッドを抜け出し研究室にいた私に、ヒトハからの報告があった。

『ご報告いたします』

『聞こう』

『先の独立の影響でアーティア帝国軍の内部の動きが僅かですが鈍り始めました』

『誰が独立支持者か分からないからか？』

『はい、独立支持者を処分する事に躍起になり探し出す事を指示しています、指示しているのは独立支持者の側近です』

『なるほど、目の色を変えて独立支持者を探す事を指示している者が独立支持者とは上手くやったな』

私は微笑を浮かべる、他の者は見抜くだけの力が無かったか。

『主様？』

『続きを話そう。独立した地域が少ないのは何故だか分かったか』

？』

『申し訳ございません、正確には分かりませんでした。ただ恐らくは……アーティアド国内に疑心暗鬼を引き起こし動きを鈍らせるためだったのではないかと』

『内部に独立支持者がいると知られば動きにくくなるだろうに』

『だからこそその先程の策なのではないでしょうか？独立支持者搜索の責任者は独立支持者でありながら帝国内では一、二を争う程の帝国統一主義者として名が知られているようです』

『なるほどな、それなら目の色を変えて独立支持者搜索を主導しても誰も疑わないか』

『実際に現在もその側近が疑われている様子はありません、むしろ他の帝国統一主義者から称えられています』

『時間稼ぎか』

『恐らくは』

『ヒトハはこれまで通り独立の動きと戦況を優先してくれ』

『かしこまりました』

『気を付けろよ』

『……はい』

カミラも色々と仮説を考えているようだが、これからどうなるかな。

私は庭へと出て空を見上げていた。

星々と三つの月が明るく輝いている、その光景を見ながらふと考える。

私なら宇宙を進み月までたどり着けるだろうか。

今私は何を考えた？

なぜ月が宇宙にあると考えた？何故宇宙を知っている？

私の中では月は空に浮いている惑星だったはずだ。

何時からこうなった？夜空を眺める事など、月を気にする事など最

近は無かった様な気がする。

私は笑いをこらえながら庭の椅子に座る。

長い間自分の事で新しい発見が無く、私はこういう存在であると納得したと言うのに、また良く分からない事が起こるのか。

以前の自分ならどう考えたか分からないが、今は来るのならいくらでも来いと感じる。

自分の身にも私が思いもよらぬ事が起こるのが楽しくて仕方がない。

その結果、大事な者達に危害が及ぶ事になる時が来たら私から離れる事にしよう。

いつか克服して帰ると思うが。

詳しい事は何もかも分からない。

分からないが、私の知識は増えるらしい。

私は暫く一人で月を眺めていた、そのうち月に行ってみようと思いつながら。

世界は戦争で騒がしい。

そんな世界をよそに、雨が静かに降る島で私達は過ごしている。夕方、ソファでくつろぐカミラに、私は聞いた。

「カミラ。お前が血を飲んでる所を長く見ていない気がするが、大丈夫なのか？」

「あれ？お母様には……ああ、お母様の元を離れてからだから言っていないわね」

「何かあったのか？」

「私は魔人の国で皇帝になった後、流石に血を飲んでる所は見せる訳に行かないと思つて飲む回数を減らしてたんだけど……」

見つかったらいい反応は期待出来ないか。

「それで？」

「生きるのには血が絶対必要な訳じゃないと分かったのよね」

「そうなのか？幼い頃はだいぶ飲んでいたが」

「幼い頃は一番好みだから、美味しいから飲んでいただけだと思うわ」

「つまり血は嗜好品のような物で、生きるのに必ずしも必要では無いと？」

「そういう事になるわね。でも、飲んだ後しばらくは気分はいいわよ。」

「酔ってるんじゃないだろうな？」

「……ああ！言われてみればそうかもしれないわね」

ハツとして私の言葉に答えるカミラ。

「血に酔うか、化け物らしいじゃないか」

「ふふ、そうね」

私の言葉に笑つて答えるカミラ。その表情は自らが化け物である事を誇りに思っているような表情だった。

「そうだ、お母様。話は変わるけど森林国家ユグラドのゴレム兵が

魔道兵器搭載になったわよね？」

「ヒトハからの報告ではそうらしいな」

魔力の供給が必要なくなった個人携帯用魔道兵器は、ゴレムに持たせるのにうってつけだった。

現在ではユグラドの兵は基本的にゴレム魔道歩兵のようだ。

「歩兵戦ではかなり有利よね」

「だが森人は数が少ない。ゴレムがなければとつくに森人が滅んでいた可能性はある」

そう考えるとあの時、エルフィのゴレムを作るといふ判断が、結果的に未来の森人という種全体を救ったんだな。

「増やせばいいのにね、子供が出来にくいとはいっても出来ない訳じゃないんだし」

「国が子作りを推奨している様だがそう簡単に考えは変わらないらしい」

「寿命が長いから世代をまたいで意識を変えるのも一苦勞……って事ね」

「そんな所だ」

「ゴレムの話題に戻るが、あくまでも歩兵だ。魔道飛行戦艦に搭載されている大型の魔道兵器や魔道戦闘車の前にはどうしようもない」

「以前はかなり強力だったんだけど……今では無理なのね」

「個人で戦況を左右出来る事はこれからはないだろうな。兵器の質と量、これがこれからの戦いの中心になると私は考えている。個人でどうにかするならば、それこそ私やカミラ、クログウエルのような突き抜けた実力者でなければ不可能だろう」

「この世界に私達以外にそれほどの者がいるのかしら……」

「それは分からない。ここまで人が勢力を伸ばしても出て来ないのなら居ないかもしれないし、私のように力を隠しどこかに紛れているかもしれない」

「これから更に世界に人が広がり、彼らの目が世界の隅々まで届いた時。私達はどうすればいいのかしらね……」

少し暗い声で言うカミラ。出来るだけ共存出来るようにしたいが、

駄目なら残念だが人類を滅ぼすか、月にでも行くか。

「そうだったら人を滅ぼすか月にでも行くか」

「お母様が良いのなら人類を滅ぼすのは構わないけれど……月つて、お母様が教えてくれた空にある三つの惑星の事よね？」

「その名前も知識から取っただけで正しくは無いのだから、まあその月だな。後、あれは空にある訳では無い、更に外側の宇宙と言う所にある物だ」

「あれ？以前は空だと聞いたと思うけど……？私の記憶が間違っていたかしら？」

「いや、以前は確かに空にあると言った。それは間違いない」

「お母様」

「ん？」

カミラの声に目を向けると、真剣な顔をしてこちらを見ているカミラと目が合った。

「何かあった顔をしているわ」

「私の表情はあまり変わらないらしいぞ？」

「何年一緒にいると思ってるの？」

長くいれば分かる物なのか。

「隠す気は無い、ルーテシアとクログウエルにも話しておこう。集めてくれ」

「わかったわ」

やがてルーテシアとクログウエルが庭に集まった、雨は話している間に上がったようだ。

クログウエルは横たわり、私達は椅子に座る。

「わざわざすまないな」

「お話とはなんですか？お姉様」

「我まで呼ぶとは……何用だ？」

私は自分に起きた事を話した。いつの間にか知識が増えていた事

と、宇宙の事を伝えたのだが、三人の反応はそれぞれ違った。

「何も問題は無いのですか!?!大丈夫ですよね!?!」

焦って心配するルーテシア。

「なるほど、体は問題無いのよね?そっか、それでさつきはああ言ったのね。宇宙かあ……私もお母様と行きたいわね」

心配しつつも私と行く宇宙を想像するカミラ。

「そんな事か。今更貴様に何があっても驚かんわ!しかし宇宙か……高い空を飛んでいた時もあの惑星とやらの大きさは変わらなかったからな。空とはそこまで高い物なのだと思っていたが……空の外にあったのだな、納得いった」

私の心配より宇宙に興味があるクログウエル。

「いつの間にかあった宇宙の知識は不十分の筈だ。現在分かっている事は呼吸が出来ず過酷な環境で、僅かな力で移動出来るという事だけだ」

「……私は間違い無く無理ですね」

ルーテシアが残念そうに言う。

「行きたければ何か考えてみよう」

魔法や私の力があればどうにか出来るかも知れない、もし実際に行うなら他の生物で実験してからの方が良いな。

「我はどうだ?」

「昇れるだけ昇ってみたらどうだ?体に異変があったらすぐ戻れば死ぬ事は無いと思う」

魔力が宇宙にあるのなら不可能ではないはず、後はクログウエルの体が適応出来るかだな。

「私も試してみようかしらね」

「お前は私寄りだからな、平気だとは思いますが注意しろよ?」

その後は宇宙について皆で話し合っただけだった。

私の知識の話をしてからも変わらぬ日々を過ごす私達。

深夜に私はいつもの様にヒトハからの報告を受けていた。

『現在の戦況は膠着状態ではありますが、意図的に作られた膠着状態だと思われれます』

『そうか』

『アーテイヤ帝国の侵攻を各国は守りに徹して受け流しています』

『状態はほぼ変わらずか』

『膠着状態とはいえ戦闘自体は頻繁に起こっていますので、各国の被害は着実に増えております』

『魔道兵器の残骸が散乱する中で戦っていたりするの？』

『はい』

その後、私はヒトハに指示を出してカミラとルーテシアが起きて来るのを待った。

前回のヒトハの報告から僅か数日後。

昼の少し前、ソファでカミラとルーテシアの二人が作る料理を待っている時、ヒトハから緊急の報告が来た。

『緊急のご報告を致します』

『何があつた？』

『アーティア帝国城にて帝国統一主義者である側近と軍の上層部の者。その殆どが死亡いたしました』

殆どが死んだ？

「お姉様、お料理が……」

「ルーテシア、ちよつと待つてね」

私を見たカミラがルーテシアを止める。

「緊急だ」

私がそう言うのと二人は何も言わなくなった。

『主様？』

『ヒトハ、分かっている事は？』

『現時点で分かっている事は、帝国統一主義者を隠れ蓑にしていた独立支持者の側近が、何かしらの理由を付け帝国統一主義者達を会食に招待し毒殺したという事です』

『また思い切つたな』

『確實ではありませんがその場に居た者の言動から、その会食の關係者は全て独立支持者側の者であつたと思われれます』

『招待をした独立支持者の側近は？』

『共に毒を食し死亡しました。彼女以外の独立支持者の側近はそれぞれ理由をつけて出席しておりません。更に出席していなかつた帝国統一主義者の側近達も殺されている可能性が高いと思われれます』

『この事で帝国内に動きは？』

『現在城内は混乱して……』

突然ヒトハの声が止まる。

『どうした？』

『申し訳ございません……たつた今得た情報です。元同盟国の三国が進軍を開始、それと同時に各地が独立を表明しました……かなりの地域が離れたようです』

『全て計画していたのか？』

『はつきりと断言は出来ませんが、計画だと思われれます』

命を捨てるか。そうしなければ疑われ、同じ独立支持者の仲間に手が伸びる可能性がある事は分かるが。

そこまでする覚悟を持てる者は多くは無いだろいな。

報告の内容を私から聞いたルーテシアは言葉を失い。

カミラは「帝国も終わりね……いえ、以前から分かっていた事だった」と呟いていた。

カミラの言う通り帝国は以前から色々国として問題が出ていたからな。

ヒトハからの報告の中に、ルーテシアにだけ教えていない報告がある。

意外にも私の判断ではなくヒトハが進言してきた事だ。

内容は何と云えばいいか。「人の闇」とでも云えばいいか？ そういった物だ、わざわざ触れるような内容ではない。

言える事は、国の上層部が腐り落ち、多くの人々が裏でそれを被っていた、という事だ。

それから次々と独立する地域が増え、度重なる独立によって力を失ったアーテシア帝国は敗北。

帝国は解体され皇帝と全ての側近、軍の上層部も全員処刑された。これを聞いた時、最初から彼らは生き残る事など考えていなかった

事を知った。

皇帝と側近達、そういえば名前も知らないな。

お前達が帝国を裏切り滅ぼした事は、間違いでは無かったと思っ
ている。

アーテイヤ帝国の上層部がやっていた事の詳細は、同盟国の手によ
り表に出る事無く葬られた。

その後各国の大物が何人も姿を消したようだが。

解体された帝国の各地域は同盟国に属さずある程度まとまりを見
せ、それぞれが国のように点在する形となった。

戦争の終結が三国から宣言され戦争が終わり、森林国家ユグラド、
魔工国ガンドウ、獣王国カルガは戦争で疲弊した自国と、荒れ果て残
骸が散らばる戦地を立て直すために内政に力を入れ始めた。

「お姉ちゃんが作った国、無くなっちゃいましたね……」
ルーテシアが悲しそうに呟く。

戦争の終結の報告を機にヒトハも一旦私の元に戻り、リビングには
全員が揃っている。

「育ちすぎた国は駄目になる物なのかしらね……」

カミラは平然と言っているが、私は彼女がしてきた努力を聞いてい
る。

本当に何も感じていないという事は無いだろう。

「そんな事は無いといたい所だが、人の思想の変化は早いからな。
世代を重ねる速度が速いからか？」

『国が乱れた際、強引に正すだけの力がある者が存在し、その存在が
揺らぐ事無く永遠に支配していれば……あるいは永遠の繁栄を可能
に出来るかも知れません』

ヒトハがそんな事を言う。

「そんな者がいるとは思えないが」

私がそう答えると、ヒトハは私を見ているように感じる。

『私には可能だと思われる方にお二人ほど心当たりがございます』

「ヒトハさん、それは誰……」

ルーテシアがそう言いながら私とカミラを見て言葉を切る。

『ルーテシア様のお考えの通りです、我が主様であるクレリア・アーテシア様とご息女であるカミラ・アーテシア様ならば可能だと考えております』

やろうと思えば出来そうだが、そんな事はしないだろうな。

牧場で何も変わらず暮らし続けるモー牛達を永遠に眺めるような物だぞ。

「アーテシア帝国は無くなったが間違いなく一時代を築いた、私は自分の名を冠した国が繁栄した事を嬉しく思っている」

私がそう言った時、小さくカミラが「ありがとう」と呟いたのが聞こえた。

「戦勝国の三国は内政に力を入れているのよね？」

カミラがヒトハに聞く。

『はい。戦勝国である森林国家ユグラド、魔工国ガンドウ、獣王国カールガの三国は戦場に散らばる死体と残骸の回収。戦没者の家族への対応などに力を入れています』

「今回は……今回もかしら？確か以前も戦争を仕掛けられていたわよね？……あの三国は長く存続するかも知れないわ」

「カールガは良くも悪くも真っ直ぐな者が多いし、ガンドウは鍛冶などの職人が多いからな、変な方向に意欲が向かない限り滅多な事にはならないだろう。ユグラドは寿命が長いため思想の変化が遅い事と、森と共に生きる思想が根付いているから急激に変わる事は無いだろう」

「ガンドウの変な方向とは何ですか？」

ルーテシアが私に聞いてくる。

「例えばだが、材料に人が一番合うからと使い始めたり、人自体を改造して兵器にしようとしたり、町や人や大地、世界そのものを無に帰すような威力の兵器の研究に囚われたり」

「怖い事言わないでくださいお姉様！」

それを聞いたルーテシアが叫ぶ、実際どうだろうか？兵器もだが、儀式魔法もこれから先、何か問題を起こしそうだ。強大な魔法陣や立体魔法陣を作り上げる知識と労力と魔力があればだが。

いや、周囲の魔力を使う技術があるという事は、世界に影響を及ぼすような儀式魔法が以前よりも簡単に出来るという事だ。

規模によっては世界中の魔力を吸う事になる可能性も無いとは言えない。

「ヒトハ」

『何でしょうか、主様』

「魔法陣に関する事と、どこかで大掛かりな魔法の準備の情報があればすぐに知らせてくれ」

『かしこまりました』

その後すぐにヒトハは現在の魔法陣の情報を集めてくれた。

魔道兵器の登場で魔道兵器用の魔法陣は現在も活発に研究されているが、個人や儀式魔法の魔法陣の研究者は数を減らしたようだ。

それでもまだ研究している者達は数多くいるらしいが。

アーティア帝国が滅び、新たな国が多く生まれ、戦争も終わった世界はまた平穏を取り戻した。

私達も再び町へ行くようになり戦争前の生活に戻って行く。

世界が落ち着きを取り戻し、私達が変わらぬ日々を送っていたある日。

いつもの様に何処かへ出かけていたクログウエルが怒りの気配を纏わせながら戻って来た。

「クログウエル、何があった?」

「ふん……魔道飛行戦艦だったか?あれにいきなり襲われてな、返り討ちにしてやった」

「なるほど、空にも人が増えて来たからな」

「手を出すなどは言うまいな?」

クログウエルが私を睨む。

「構わない、いくらでも返り討ちにするといい」

「ほう?手を出すなど言うかと思っていたが……」

「敵に気を遣う必要は無い」

「うむ、当然の事だな」

「ただ私達に迷惑はかけるな、守って貰いたい事が二つある」

「なんだ?聞くだけ聞いてやる」

「一つはお前がここに住んでいる事を悟られない様にしろ、人が追って来ている時はここに近づくな」

「うむ、それは良いだろう。どうせ返り討ちにするからな」

「もう一つはお前からは絶対に手を出すな、攻撃を受けた時だけ反撃して欲しい」

「何故だ?」

「お前から手を出せば人類は全力でお前を討伐しに来るだろう。大量の魔道飛行戦艦相手ではいくらお前でも危険だ。手を出せば被害を受け、手を出さなければ何もしてこないと理解されれば、手を出してくる事が無くなるかもしれない」

「うーむ……」

唸り声を上げて考え込むクログウエル、私はもう一つ付け加えた。

「下手に手を出して飛ぶ度に飛行戦艦が纏わりついてきたら面倒だ

ろう?」

「それは……確かにな……分かった! 我からは攻撃しないと誓おう」

「ありがとう、もし攻撃を受けたら消し飛ばしてやれ」

「もちろんだ」

クログウエルはそう言って家の前で寝始めた。

今日は三人で町で開催されている「ボツシユ」と言う競技を見に来た。

ボツシユとは特別な装備をまとい空を飛び、ボールを自分の魔力で飛ばし合って相手の拠点に入れば得点になるという競技の事だ。

八対八で行われ、拠点をボールから守る門番一人を必ず用意し、残りを前衛、中衛、後衛に振り分けて戦う。

原型はかなり昔からあったようだが、正式に競技となつてからまだ日は浅い。

それでも既にかんりの人気を誇る競技になつているらしい。
む、そろそろ始まるな。

ボツシユを観戦し終わった私達は人が多い通りを三人で歩いていた。

「面白かったですね!」

ルーテシアはかなり気に入ったようだ、確かに面白かった。

「誰も死ぬ危険が無いのは良いわね、試合自体も見ていて面白かったわ」

カミラはかつての闘技場でも思い浮かべているのだろうか、現在の競技で命の危険がある物はそう無いんじゃないか?

私は話を聞きながら不審な動きをしている男が近寄つて来ている

のを感じていた。

男は人混みに紛れ私達に……ルーテシアの後ろに近づいてくる……そしてルーテシアの尻に手を伸ばし……。

「あの選手の動きが……」

「ぎゃあああ!?!」

「っ!?!」

いきなり真後ろで悲鳴を上げた男に驚いて咄嗟に離れるルーテシア、周囲の人々も何事かと男を見ている。

「ルーテシア、行くぞ?」

私は気にせずにルーテシアに声をかける。

「え?でも彼が……」

ルーテシアがそう言うと言は指を押しさえながらどこかへ行ってしまった。

周囲の人々も男の去っていった方を見ている者が多かったが、やがて人の流れに混ざって行った。

「どうしたんでしょうね?気にしても仕方ないわ、行きましょうルーテシア」

カミラはそう言いながら私をちらりと見た、カミラなら気が付いているよな。

「はい……」

不思議そうにしながら歩き出すルーテシア。

『私がやろうと思ったのに……』

『すまないな、お前も狙われる時があるんだからからその時にやってくれ』

『そうするわ』

念話でカミラと会話する、ルーテシアの尻を狙った男の指を私が魔法でへし折った。

私達が人通りの多い道に行くと、稀に指を折る男が現れる事になる。

ルーテシアは弱くは無い、殺気などにも反応出来るだけの實力はある。

しかし殺気にしか反応しない。

戦争が終わってさほど時間が経っていないのにあんな者もいる、実際に関わったり被害を受けていなければこんなものなのだろうな。

それから時が経ち、元アーティア帝国の独立した地域は徐々に各国に吸収され始めていた。

ヒトハからの情報では無理矢理な物ではなく、独立した地域の方から支援と保護を求めたのだという。

各国はその求めを受け入れた。それ以来、国に保護を求める地域が時々現れている。

現在私は砂浜を散歩している。

ついでに何か流れ着いていないかも探している、今まで大した物は見つかっていないが。

流木や海藻がほとんどだがたまに生物の死体なども流れ着いている事がある。

ん？あれは。

歩いていると波打ち際に何か流れ着いている、私はそれに近づいた。

ただの塊に見えるが、これは食い荒らされた人間だな。

私は以前クログウェルが魔道飛行戦艦を返り討ちにした事を思い出していた。

関係あるかは分からない、全く関係なく別の何か起きただけかもしれないしな。

私は死体を燃やした。流れ着いた死体は焼く事になっている、腐るからな。

陸地から遠く離れた海上で落とされた場合、生き残っても帰還は難

しいだろう。

現在、個人で長い距離を飛べる者は人類の中には恐らくいないはずだ。

更に魔道飛行船を始めとした乗り物が作られ始めてから、軍での個人の魔法の能力は以前ほど重要視されなくなったらしい。

戦うなら個人で魔法を使うより、周囲の魔力で発動出来る魔道兵器の方が良いと考えるようになったのだろう。

周囲の魔力を利用して様々な魔道具を発動出来るようになった事でわざわざ自力で魔法を使おうとする者は減り、それに合わせて魔法を使える様にする者も減少しているようだ。

ただ、いざという時自力で色々な事が出来るのは間違いなく便利。

そう考える者もいる。

更に熟練者は個人携帯兵器である法具や個人障壁発生装置である防珠を装備した者とも対等に戦えると言われているため、魔法を習得に行く者は減ってはいても常に一定数は居るらしい。

学校は魔法だけを教える場所では無いしな、実際は以前と比べて学校全体の生徒の数は大きく変わっていない。

その内の何人が魔法を選んでいるのか、という話だ。

そう言えば、私は法具と防珠がどのような物か実際に見ていないな。

ヒトハに持って来て貰おうか。

私はヒトハに法具と防珠を用意して貰い皆で性能を見る事にした、クログウエルは興味が無いらしい。

「これが法具と防珠なのね」

法具は長方形の本体に持つ部分と射撃のための引き金が付いた物で、防珠は腕を覆う大きい目の腕輪のような物だった。

「魔力で動く人類の武器ですか……」

ルーテシアもまじまじと見つめている。

『この二つが標準的な携帯型の装備です。威力や連射速度、連射時間などの向上のための研究は現在も行われています、使用方法ですが……』

ヒトハから説明が行われ実際に効果を確認する為の準備を始める。

「予想以上に軽いな」

「そうなの？魔法金属でも使ってるのかしら？」

私は法具を持ちカミラと話す。

「まあ撃ってみよう」

私は構えて正面の岩を撃つ、反動は無く低く唸るような音と共に岩に小さな穴が開いた。

「……これだけ？」

カミラが空いた穴を見て言う。

「その様だな」

私はそう言って法具を置き、岩に開いた穴に近づく。二人も私について来た。

私の親指より二回りほど大きな穴が開いている。

「こんなので使えるの？」

『法具には種類がありファイアボールなどを放つ物もありますが、これは貫通力を求めた物です』

カミラの呆れた声にヒトハが答える、ルーテシアは穴を調べている。

「予想以上に地味だったな」

「威力も話にならないし……これでよく戦ってたわね……」

カミラと話していると穴を調べていたルーテシアが言う。

「お姉様とお姉ちゃんにはそう見えるかもしれませんが……これは一般的にはかなりの脅威だと思いますよ？」

「そうなの？」

カミラが言葉を返すとルーテシアが説明してくれた。

岩よりも強度のある魔物などほとんどおらず、個人で持ち歩く事が出来て実質いくらかでも攻撃出来るこの武器は、私達が考えているよりもずっと優秀なのだとして一生懸命教えてくれた。

「なるほど……私やお母様の基準がおかしいだけで、十分優秀であると言う事ね？」

「はい……大型で強力な魔物は大型の魔道兵器を使えばいいだけです。これほど簡単に……それこそ子供でも使えるような武器に、これだけの威力がある事は凄い事なんです、むしろ危険とも言えると思います」

カミラとルーテシアの会話を聞き、私はそこまで優秀なのか？と考え込む。

どう見ても威力が低い、岩に穴が明けられる程度では話にならない。

「ルーテシア、貴女のお姉様が考え込んでいるわよ」

「……お姉様とお姉ちゃん二人の基準がおかしいだけです。これでも一般的には優秀なんです……」

ルーテシアが私にもう一度説明してくる。

「わかった、悪かった。私とカミラの基準がおかしいのだな」

「はい、そうです」

納得させようと頑張るルーテシアの頭を撫でる。

「そうやってすぐ撫でる……嬉しいです」

ルーテシアが後半の言葉を呟くようにこぼす。

これで道具の実験は終わりにした。

もちろん防珠も実験をしたのだが、あまりの弱さに疑問を抱いていた所をルーテシアが再び私達に一生懸命説明してくれた。

「本体が壊れたらどうなるんだろうな？」

「効果が消えるだけでしょう？」

私とカミラは魔道兵器が壊れた時どうなるかの話をしていた。

「ため込んだ魔力が周囲に爆発的に広がるんじゃないか？」

「確かに……でもそれだけなら特に問題はないんじゃないかしら？」

だがクログウェルと会った時、魔素や魔力が濃すぎると生物は死ぬような事を言っていた。

本当なのは確かめていないが私達はこの兵器を使う事は無いし、

関係無さそうだ。

「実験も終わりましたし……まずは片付けて戻りませんか？」
ルーテシアが私達にそう促す。
そうだな、まずは片付けよう。

法具と防珠の確認を終わらせて家に戻り、二人に実験をする事を伝えた。

私はその辺りの敵性動物と魔物の同種を複数捕まえ、地下実験室へ向かう。

地下実験室に到着した私は手早く準備を整える。

周囲に影響が出ない様に遮断する結界を張り、捕らえた生物を入れておく檻を用意した。

まずは魔力で実験だ。

敵性動物から試していこうか、大きさは私の身長ほどの四つ足の獣だ。

先程から私を襲おうと暴れている。

私は動物の周囲にもう一つ結界を張り、中に魔力を少しずつ送り始める。

最初の内は全く変わらなかったがやがて動物の動きが鈍り始め、更に魔力が濃くなると動けなくなり、最終的に死んだ。

魔力の濃度以外は何も変えていない、自然な状態のままだ。

次は魔物だ。

四つ足の目が沢山ある魔物で、先に実験をした動物と同じ程度の大きさだな。

結果は、動物よりも長く持ったが最後は同じように死んだ。

動物と魔物、一度ずつしか行っていないのではつきりと言えないが、クログウエルの言っていた通り、過剰な魔力は生物を死に至らしめるという事が分かった。

次は魔素での実験だ。

死体を処理して魔力濃度を戻し、動物を入れる。

では魔素を送ろう。

しばらくは変わらなかった。そのまましばらく送っていると動物が唸り始め、目は血走りよだれを垂らし始めた。

更に送り続けると動物の顔にいくつもの短い切れ目が走り、次々に
瞼を開き始めた。

捕まえて来た魔物に似ている。

更に魔素を送り経過を見ると、今度は苦しみ始めた。

やがて体が裂け全身が原形を留めないほど滅茶苦茶になり、そのま
ま死んだ。

魔素が動物を魔物に変えている？

私は仮説を立てた。変化した動物が捕まえて来ている魔物に何と
なく似ていたからだ。

次に魔物に実験を行ったが結果は同じだ、苦しみ始め全身が原形を
留めなくなり死亡した。

まだ何とも言えないが、興味深い。

私は実験に没頭していった。

その後カミラとルーテシアにしばらくこもる事を連絡し、実験体を
集めなおして実験を行った。

その結果分かった事は、まず魔素も魔力も濃すぎると動物、魔物共
に死に至る事。

死ぬにはかなりの濃度が必要で、自然には恐らく起きないだろうと
いう事。

そして種族や個体によって耐えられる濃度が違う事も分かった。

次に動物は魔素を多く吸うと魔物に変わる個体がいる事と、変化す
る濃度にも差がある事が判明した。

だが魔素を与えても魔物にならずそのまま死ぬ個体が殆どで変化
するのは極僅かだった、最初に魔物に変化したのはかなり運が良かつ
たと言える。

そしてこの方法で変化すると、時々突然変異ともいえるような凄ま
じい変化を起こす事も分かった。

見た目も完全に変化し、元となった動物よりもはるかに強力なつて

いた。

ただ、すべての魔物がこの変化で生まれていると考えるのは難しい。

素質があり魔素の許容限界を超えると魔物へと変化する。

私はそう考えているが、変化するにはそれなりの濃度が必要だ。

そんな事がそうそうあるとは思えない。

そうするとこの世界に魔物が大量に存在する事がおかしくなってしまう。

冒険者が討伐しても討伐しても現れていた魔物が、こんな方法だけで増えているとは考えにくい。

そうなるど大量に何らかの方法で発生している上で、魔素による変化もあると考える方が自然だろう。

色々ど本来の目的以外の事も分かった、中々楽しかったな。

そう思ってカミラに少し話をした所、魔物が森などの空間にいきなり発生する事は今では常識だと言われた。

私はその事を今まで知らなかった自分に呆れていると、カミラに「まさかお母様が知らないとは思わなくて……ごめんなさい」と謝られた。

私はカミラにこれは自分の見落としてある事を告げ、彼女の頭をしばらく撫で続けた。

自分が思っていたよりも無知だった事に呆れてから少し時が経った頃、私はある事を試したくなっていた。

それは「人に魔素を多く吸わせたらどうなるのか」と言う事だ。

ただ、私に敵対せずただ暮らしている者を実験体にするのは私が気に入らない。

と言う訳で、ヒトハにそれなりの人数の重犯罪者の集団を探す様に頼んでおいた。

それからしばらくいとも通りの生活をしていると、ヒトハから連絡があった。

『主様、重犯罪者達の根城を発見致しました』

『どんな事をしている奴らだ？』

『幸福薬が主な収入源のようです』

『幸福薬とはなんだ？聞いた事が無いぞ？』

『裏で流通している錬金薬のようです。通常の錬金薬の効果に加え、幸福感やとてつもない快樂を得られるなどの効果があるようですが、依存性が高い上に使い続けると体に異常を起こし死亡します』

『そんな物が出回っているのか、しかし……』

『幸福感と快樂、それに加え通常の錬金薬の効果もあるのか』

『はい、錬金薬の効果もあるのです……私の想像ですが、これを作った者は自分の薬をもっと売りたいと、金が欲しいと考えたのででしょう』

『自分の薬を買わせるために依存性のある成分を入れたと？』

『恐らくは……そして客が抜けられなくなった所で価格を上げるなりしてしまえば……』

『抜けられなくなった客は大金を支払ってでも買うようになる訳か』

実験材料に出来そうな犯罪者を探して貰ったら面白い物が見つかった。

『先程ご報告した通り、この幸福薬は通常の薬としての効果もあります。この薬の依存症になった者は必要も無いのに飲み続けるようになるため、その結果薬の有効成分の過剰摂取で死に至る事が多いようです』

『作っている側はこの事を分かっているのか？この薬で大勢が死ぬば騒ぎになるだろう？』

『初期はそれで事件になった事もあったようですが、現在は客の依存度により成分を調整しているようです』

『何となく想像はつくが、説明出来るか?』

『相手の依存度に合わせ本来の錬金薬としての効果を薄めていき、最終的には依存成分だけにしてしているようです』

『そうするだろうか』

『しかし依存成分その物にも毒性はあるようで、最終的に死ぬ事は変わりません。それ所か依存成分により体調を崩し、それを治すためにまた幸福薬を飲み……という連鎖になる事が多いようです』

『見事に自滅しているな』

『この幸福薬は先の戦争に紛れて裏で世界中に広がりつつあり、各地に秘匿された生産工場が出来ています』

『国は気が付いているのか?』

『今の所は気が付いていないようです』

気が付いていないのか。しかし、本当に気が付いていないのか?

『依存症からの回復は出来るのか?』

『生産している組織の実験情報によると軽度の依存なら摂取しなければ苦しみながらも時間が解決するようですが、重度の依存者は発狂死するようで、実質治療不可能です』

『ヒトハ、各国に証拠の幸福薬と警告を送っておけ』

これぐらいはしておこう、広がりすぎて人類が全滅するような事は避けたい。

『かしこまりました』

「ふう……今日の仕事も終わりだな」

森林国家ユグラドの錬金薬研究者になって半年、ようやく仕事にも慣れて来たが、ちょっと遅くなっちまったな。

後片づけをして自分の机に書類を置きに行くと、俺の机の上に一本の瓶が置いてある。

「何だ……?俺はあんな物置いた覚え無いぞ?」

警戒しながら近づいてみるとそこにあつたのは錬金薬だった。

「市販の錬金薬？何でこんな所に……？」
どう見ても市販の錬金薬だ……解毒薬か。

「ん……？」

錬金薬の下に手紙のような物が置いてある、俺は薬を持ち上げそれを取った。

「手紙か……？」

俺は中身を取り出しそれを読む。

「何だこれは、悪戯か？」

その手紙には裏で危険な錬金薬である幸福薬が作られている事、見た目では判別困難である事、服用した者の陥る状態や末路などが細かく書かれていた。

……そして今置いてあるこの錬金薬が問題の幸福薬だと書かれている。

「……どうするかな……」

知らない間に置かれていたのもそうだが怪しすぎる。

どう見ても普通の錬金薬だし先輩の悪戯だと思いたいが……。

今日残っているのは俺だけ。先輩は悪戯はするけど俺の反応を見たいのかいつも必ずその場にいるし……何よりこんな質の悪い悪戯をするような人じゃない。

……どうせ遅くなってるしな……それにこの内容、作り話にしては出来過ぎているようにも感じる。

「ま、騙されてやるか……」

俺はそう考えながら成分分析の準備を始めた。

各国に証拠の幸福薬と警告を送っておくようにヒトハに指示した数日後、私はその製造拠点の一つに訪れていた。

町からかなり離れた場所にある大きな倉庫のような建物だ、一見周囲には人の気配は無いように見えるが、隠された監視施設があるな。私が調べて分かった事だが、依存性のある錬金薬を作るのにそのままで手間はかからない、一般的な錬金薬に依存成分を入れるだけだ。

だから正確に言えばここは依存成分を作っている成分生産施設と言えるかもしれない。

やる事自体は簡単に終わった。姿を消してマジックボックスに奴らを入れて行くだけだ。

この施設は一番近い国に教えておくようヒトハに言っておいた。さて、こいつらを使って実験開始だ。

「残念な結果だったな」

その後私は犯罪者達を使って実験をしたのだが、全く成果が無かった。

魔素、魔力共にただ苦しんで死ぬだけだった。

もしかしたら魔人は魔素によって変化した他の種族だったのではないかと思っていたのだが、そんなに単純な事では無かったようだ。

私の人を使った実験が成果無しで終わってからはしばらく後、各国は違法錬金薬の存在を明らかにした。

森林国家ユグラドの新人研究員が成分分析の復習で取り扱った解毒用の錬金薬から通常含まれていない成分を発見し、報告。

詳しく調べた所、依存性があり生物に様々な悪影響を与える事が判

明したという。

ほぼ同時に他の国でも発見され、その情報は世界中に広がった。そこからは色々大変だったようだ。

各錬金薬店に調査が入り、幸福薬を販売していた店は処分を受けた。

国が気が付いていなかったからか、随分堂々と売っていたようだ。錬金薬は成分分析を受ける事を義務づけられ、抜き打ちの検査も行われるようになった。

私は内心では国と違法錬金薬の製造者が繋がっているのでは無いかと考えていたのだが、そんな事は無かった。

依存成分を作っていた者達は裏に潜み国の手から逃れ、現在も幸福薬を求める客に裏で売り続けているようだな。

ヒトハが本気を出せば全て見つけて根絶出来るだろうが、そこまでやらせる気は無い。

幸福薬は正式に違法錬金薬と認定され製作、販売、使用、所持、全てを禁じられ、違反者には厳罰を与える事が決定されたと聞いた。

違法錬金薬の騒動が収まり話題に上らなくなった頃、私は砂浜で椅子に座り本を読んでいた。

その時ヒトハからの報告が入る。

『主様、ご報告したい事がございます』

私は本を読みながら答える。

『なんだ？』

『新しい国が生まれる可能性が出て参りました』
新しい国か。

『詳しく頼む』

ヒトハの話によると元アーティア帝国であった地域は、現在も時々三大国家である森林国家ユグランド、魔工国ガンドウ、獣王国カルガに吸収されている。

そんな中、多数に分かれた国が再びまとまる気配があるという。

『アーティア帝国に戻るのか?』

『現在の時点で詳しくは分かりませんが、国を興そうとしているのは間違いありません』

『そうか、引き続きその事は調べておいてくれ』

『かしこまりました』

私は穏やかな波の音を聞きながら本を読み進めた。

国が出来たとヒトハから報告があった。

以前ヒトハからの報告で国が出来そうだという報告があったが、つい最近正式に国となったようだ。

『国の名前は?』

『アーティア合衆国となっています』

帝国の名が残ったな。

『どんな感じだ?』

『国の体系としてはそれぞれの国が国のまま集まっている状態に近いですね』

『国の集まりか』

『各国から代表を選出して、更にその中から国民に選ばれた一人が統率者となり運営していくようです。大本となる法はすべての国で適用され、各地域で細かく法が違うようですね』

『面倒な国だな』

『元々別の国であった物が無理やり一つの国になったのです。こうしなければ納得しなかったのでしょうか』

『そうかもな。ただ、帝国時代の名がそのまま残るとは思っていないかった』

正直な所、もう二度とこの名は使われなれないと思っていた。

『彼らは彼らなりにアーティア帝国に思い入れがあったと言う事なのでしょう』

『良い国になるといいが』

『主様、それはかなり難しいと思います』

私は厳しい意見を言うヒトハに微笑んで言った。

『くくっ、そう言うな。どうなるかはまだ分からないのだから』

森林国家ユグラド、魔工国ガンドウ、獣王国カルガの三国はア―
ティア合衆国を認めた。

こうして最終的に、四国が世界を支配しているという以前と似たよ
うな状態になった。

新たな国の名前がアーティア合衆国だと知ったカミラが何とも言えない表情をした日から時が過ぎ、つい先日ルーテシアが逝った。

「ルーテシア……死んじゃったわね……」

「そうだな」

庭で椅子に座りカミラと語り合う。

「お母様に抱かれて幸せそうに逝ったわね」

苦しまない様にしたからな。

『死とは不思議な状態ですね。しかし、主様なら覆せるのでは？』

私の横に浮いているヒトハが言う。

「可能か不可能かで言えば可能だ」

『ルーテシア様は望まなかったのですね』

「ああ、ケインやミナと変わらない反応だった」

『ルーテシア様のご両親ですか』

「望まない者に強制する気は無い、近しい者ならなおさらだ」

彼女の体は彼女の望み通り遺灰を容器に入れて、庭に作った墓にペ
ンダントと共に埋葬した。

別れの儀式は行わなかった。

クログウエルはあれから毎日ルーテシアの墓の傍で寝ている。

彼女は悲しむような事は何一つ言わず、ただルーテシアの死を見ていたが、それでも何か思う所はあったのかもしれない。

「お母様、昼食を作って来るわね」

食事のために私達はリビングに戻り、お母様はソファに座り私は昼食を作りに行く。

「ありがとう、頼む」

私はお母様の返事を聞きながらキッチンに向かう、ルーテシアと一緒に食事を作る事は、もう出来ないのね……。

調理器具はルーテシアが使いやすいように整理整頓されている、この配置を変える事はきつと無いわね……。

彼女と共に料理をしている内に料理の腕はいつの間にかお母様を超えていた、教えてくれた彼女には感謝しているわ。

優しく気配りが出来て、少し抜けていて……いつも可愛い笑顔を見せていた私の妹は逝ってしまった。

私達が長い時を生きる以上、これからいくらでもある事……それでも心を通わせた大事な人を見送るのは寂しいものよね……。

お母様がいる限り私が孤独になる事は無いと思う。お母様は一人でも何も問題無いはずなのに私を娘として大事にし、そばにいてくれる。

だけど私はそれに甘える事無く過ごさなくてはいけない。でも……たまになら甘えても良いわよね？

……私は、もしかしたらルーテシアはお母様を愛していたのでは無いかと思っている。

家族としてではなく女として……本人がそう言った事は無いし、私も聞く事はしなかったけど……。

ただの私の勘だし、もう真実は分からないけれど、この事をお母様に話す事はこの先もきつと無い。

彼女の想いが本当だったとしたら……何も言わずに死を選んだ彼女の事を裏切りたくは無いから。

私はルーテシア仕込みの料理を次々と作って行く、そして完成した料理を浮かせてお母様の所へ持って行く。

「では頂こうか」

準備を終えお母様の言葉を聞き、食べ始めた。

「お母様、美味しい？」

「美味しいぞ、ルーテシアと料理をするようになってから驚くほど上達したな」

そう話しながら食べるお母様は、食事の速度は遅いけれど食べる量に限界が無い。

なので普段は一般的な量の範囲で食べるのをやめている。

「ルーテシアの料理と、どっちが美味しい？」

「ルーテシアの方が美味しいな、あくまで私の好みでの判断だが」

お母様は正直に答えてくれた、結局彼女が生きている間に超える事は出来なかったわね。

「ほぼ同じ美味しさだ、もうすぐルーテシアを超えるかもな」

「……ありがとうお母様」

もう少しだけ……もう少しだけ彼女が生きていてくれたら、私が彼女を超える所を見せられたのにね。

きつと、彼女は喜んでくれたに違いない。

ある日、クログウエルが軽くだが傷を負って帰って来た。

「お前、その傷はどうした？」

「人類共の兵器が強力になってきている、我が傷をつけられるとは……もう油断はせぬ」

クログウエルに傷を負わせる程になったのか。私は問題無いが、ヒトハは大丈夫だろうか。

私はヒトハを強化しようと考え、呼び出す事にした。

『主様、参りました』

「よく来た」

研究室にヒトハを呼び出しクログウエルの事を伝える。

『なるほど、クログウエルさんに傷を……ですか』

「クログウエルに通用する兵器だと今のお前でも危険だろう、更に強化するぞ」

『かしこまりました』

私は彼女の本体をさらに改良、強化し、全体の性能を大きく引き上げた。

現在のヒトハは球としては世界最強かも知れない。
これで即座に破壊される事無いはずだが、強化には限界がある。
この球体の体のままでは手を加える余裕がなくなりつつあるな。
別の体を作るか？まあ、単純に球体を大きくして行くだけで良いの
だが。

クログウエルはあの出来事以降、人類に対してある程度警戒するよ
うになった。

自分に傷をつけた相手を甘く見るのは問題外だからな、クログウエ
ルの判断は正しいと言える。

ヒトハの報告で、クログウエルが私の頼みを聞いて自分からは手を
出さないようにしてくれている事は知っている。

それで人が手を出さなければ何もしてこないと気が付けばいい、そ
う私は思っていた。

だが実際はそんな事は無く、空を巡回する魔道飛行戦艦達は増える
一方らしい。

そんな状態ではあるが、時には町に出かけながら日々を過ごしてい
る私に、ヒトハから緊急の報告があった。

『緊急報告いたします』

『頼む』

『クログウエルさんを討伐するために人類が行動を開始しました』
放って置くという判断はしなかったんだな。

『クログウエルとカミラにもつないでもう一度話してくれるか？』

『かしこまりました』

『クログウエル、カミラ』

私が声をかけると反応があった。

『む、なんだ？』

『お母様？どうしたの？』

『ヒトハから報告だ、お前達も聞いておけ。特にクログウエルはな』

『何だというんだ、まったく』

『わかったわ。ヒトハ、話してくれる?』

『クログウエルさんを討伐するために人類が行動を開始しました』

『ほう……我を討伐するつもりか』

『一度も手を出さなかったのよね?』

カミラの疑問にクログウエルが答える。

『もちろん我からは手を出しておらん、奴らから攻撃してきた時は全て返り討ちになっているがな』

『えっ!?』

カミラが驚きの声を上げる。

『……それだと、人類は討伐しようとするでしょうね』

『何故そう思う?』

私はカミラに問いかけた。

『向こうから攻撃してきたとしても、その度に反撃していたら向こうの記憶に残るのは攻撃されたという事だけだと思うわよ?』

『気が付かないと思うか?』

『気が付かないと思うわ。人類はすでにクログウエルを「人類に危害を加える討伐すべき敵」だと認識しているはずよ』

『攻撃せずに逃げていたらどうなったと思う?』

『こう言うとうすればいいのかと思うかもしれないけれど……恐らく勢いづいて討伐しに来ると思うわ』

『何だそれは、何も変わらんなでは無いか』

クログウエルが割って入ってくる。

『予想ではあるけど可能性は高いはずよ……人類は自分より強力で、いつ手を出してくるか分からない存在をいつまでも放置出来ないと思う』

『手を出さずに放置していた魔物などもいたはずだが?』

私が疑問をぶつけるとカミラが答える。

『それはまだ人類に力が足りなかったからよ。魔道飛行戦艦を始めとする兵器を作り出し、力を手に入れた人類は自分達の安全と利益のためにきつと手を出すわ……もしかしたら生物としての本能なのか』

しらね?』

『つまり、何をしようとクログウエルは狙われる事になるという事か』

媚びへつらえば狙われないかもしれないが、そんな事をクログウエルがする訳が無いからな。

『ふん……クレリアよ……まさか大人しくしていると言うつもりでは無いだろうな?』

どちらにしても人類がクログウエルを敵視する事が変えられないのなら。

『私達に手を出すには今でも力が足りないのだと思い知らせてやればいい訳だ』

『確かに……そうかもしれないわね……』

『そう来なくてはな! 我もいい加減うんざりしておったのだ!』

考え込むカミラと嬉しそうなクログウエル、ルーテシアが逝った後でよかった。

彼女にはきつと荷が重かっただろう。

人類に身の程を分からせるとクログウエルは張り切っている。
やる事は簡単だ。

クログウエルが魔道飛行戦艦を島まで誘導しこの島が住処である
事を知らせる。

島には私が障壁をかけて被害を無くし、攻撃を受けたら反撃して殺
す。

これを相手が諦めるまで続けるだけだ、ある程度人類が減れば気が
つくだろう。

今の世界に親しい者がいなくて良かった、気にせずに全員殺せるか
らな。

巫女の血筋もいるかもしれないが私達に敵対した時点で関係は無
い。

準備を整えて、と言っても準備など必要な者は居ないのだが、一応
ヒトハは戦闘には参加せず、各国の私達に対する反応やその他の情報
を集めて貰う事にした。

やがてクログウエルが島に魔道飛行戦艦を連れて来た、搜索ではな
く巡回の艦か？一隻だけだな。

その魔道飛行戦艦は遠巻きに島を迂回するとそのまま去っていつ
た、さてどう来る？

その後しばらくは何事もなかった。

私達が本当に人類が島を見つけていたのか疑い始めた頃、遠くに大
量の魔道飛行戦艦が見えた。

「ふん……人間共が群れておるわ」

「凄い数ね……私も気を引き締めないといけないわ」

クログウエルとカミラが呟く。

戦艦の姿が見えた時に島の山の頂上に移動した私達は、改めて魔道飛行戦艦の群れを見ていた。

確かに数が多い、クログウエルだけにここまで用意するとは。

だが、脅威を排除するために出来る限りの力を尽くすのは良い事だ
と思う。

「取り敢えず攻撃されるまで待てよ？」

「分かっておる」

反撃と言う形を取る為、待つ事にする。

魔道飛行戦艦が島を取り囲んだ所で、人類に対して魔法で私の声を届ける。

《人類よ、引け。お前達が手を出さなければ私達は何もしない、静かに時を過ごさせてくれ》

私達もこれで帰るとは思っていないが。

伝え終わった後しばらく相手は沈黙していたが、魔道飛行戦艦の各所に付けられている兵器が島を狙い、一斉に射撃した。

大量の光の帯は私が張った障壁に阻まれて轟音を立てる。

島の周囲の海水が蒸発し島は白い蒸気に覆われた。

「お前達、行くぞ」

「任せるがいいー」

「はいーお母様ー」

攻撃を受けた私達は空へと舞い上がり、三方に分かれて人類の魔道飛行戦艦の群れに向かって行った。

「お前達、行くぞ」

「任せるがいい！」

その声を聴いた我は飛び立ち、他の二人と違う方向へと加速して行く。

我は口を開き炎を吐く。普段人類などには力を出さぬ、だが今回は手加減せん……力を分からせるための戦いだと聞いているからな。

吐いた炎は艦の障壁に阻まれているが、耐えられると思うな。

やがて持続し続ける炎が船体に突き刺さり、爆発を起こして艦が傾き始めた。

うむ……敵を破壊するには炎や爆発が一番良い。

更にもう一隻の艦の上に強大な岩を落とす、障壁は破れておらぬが艦はそのまま岩の重さに耐えきれず海に沈みおった。

我を狙う魔道兵器を一瞥し、艦の上に回り込む。

設置されている魔道兵器が狙っておるな、その攻撃を受けながら我は炎を吐く。

……この魔道飛行戦艦とやら、動きが鈍すぎるぞ。

これでは攻撃が避けられないだろう。

我は魔法も併用して艦を次々と落とすしていく。

兵器の攻撃は確かに我に効くかもしれないが、気を抜かなければ致命傷にならぬ。

お母様の合図に答えて飛び立つと、すぐに周囲に複数の魔力球を作り出して適当な艦へと打ち込む。

一発魔力球を撃ち込まれた艦は僅かに耐えた障壁を失い被弾し、上部の三分の一程を消失させて他の艦に突っ込んで爆散した。

クログウエルと違って普通の人間と同じ程度の大きさしかない私は狙いにくいのか、威力の小さい兵器ばかりが狙ってくるわね。

彼らにとってはこれも強力なんでしょうけど……お母様やクログウエルと訓練している私にとってそんな物は大した威力ではないの

よね。

近づいてちまちま落としていくのも大変だわ、飛び回りながら魔力球を撃ち続けていればいいかしらね？

それに……この戦艦凄く鈍重だわ。

攻撃を避ける気が無いとしか思えない、これは……きつと魔道障壁が開発された事で避ける事を考えなくなったのね。

障壁を簡単に破ってくる相手を想定していなかったのかしら？……今こうなっているのだから想定していなかったんでしょうね。

私は溜息を吐き、魔道飛行戦艦の群れの中を飛び回りながら周囲に魔法球をばら撒き続けた。

二人に合図をし、私も戦艦へと向かいながら魔力の奔流を放つ。

その奔流は障壁など意に介さず手前の戦艦を貫通し、背後の複数の戦艦も貫いた。

落下し始める戦艦達を無視し、いくつもの奔流を放ちながら戦艦を薙ぎ払って行く。

被弾した戦艦達は両断され爆発し、海へと消えていく。

その間も生き残っている戦艦から主力と思われる攻撃が殺到しているが、全く私の障壁を抜けない。

カミラはこれを単独で貫いたというのに、これだけ集まっても無理なのか。

残念だ。

私はそう考える、人類は繁栄し強くなったが、それでもこの程度でしか無かったか。

彼らも命を懸けて大切な者のために戦っているのだろう、それを貶める様な事はしたくは無いが、無駄死にとしか言えない。

私はこれからどうするかを考える、その間も総攻撃を受けているが障壁に遮られ何とも無い。

そうだ、忘れていた。

私は言い忘れていた事を二人に伝える。

『言い忘れていたが全滅はさせないで欲しい。逃げる奴は追わないでくれ、それとその時は出来るだけ見逃してやったと分かる様にして欲しい』

生き残りがいた方が状況がよく伝わるはずだ。

『む？早く言わんか……それで？見逃すとはどうすればいいの？』

『私はその辺りの事を言われなかったから一応逃がしておいたけど……見逃したという事が分かる様にすればいいのね？』

『そうだ。例えば、逃げている艦を見ながら近くを飛び回り、その後離れていく。などがいいかも知れない』

これならきつと見逃されたと感じるはずだ。

念話での会話中も私の周囲は戦艦の砲撃で光に包まれているが、遠くでカミラとクログウェルが暴れているのを感じる。

『うむ、貴様がそう言うならやってみよう』

『わかったわ、やっておくわね』

二人の返事を聞いて念話を切る、カミラに感謝しないとな。

もし言い忘れていたとしても最低限は逃がす事が出来ていた。

人類が作り出した魔道飛行戦艦は最強であると信じていた……ここに来るまでは。

「主砲を受けてもびくともしていません！」

「全戦力の約四割が消失！なおも増加中！」

「主砲出力最大！副砲は停止しろ！全部回せ！……壊れてもいいから回せ!!」

「やれるだけ回避運動をしろ！……分かってんだよそんな事は！すぐによれ!!」

少し前までは静かだった艦内は怒号が響く混乱状態だ……俺がこんなに落ち着いて作業しているのは混乱を通り越してしまっただのか

もしれない。

「艦長！」

「……撤退だ！全速で撤退っ……！」

艦長がそう言っている時、光の奔流が俺の目を焼き、俺は思わず目を瞑った。

……そして再び目を開けた時、俺が見たのは外の景色だった。

「え……？」

俺は思わず呟いた……。

艦長席から上部が全て無くなっていて、爆散する他の艦が見える。光が通った付近には乗員達の体の一部だけが転がり、生き残った他の乗員は恐怖からか喚き散らしたり、うずくまり動かなくなっている。

役目を放棄して叫びながらどこかに行ってしまう者も居た。

もう軍としての形を成していない……まあどちらにしてもこの艦は終わりだ。

いや、この艦だけじゃない……この戦いは勝てない。

攻撃がまったく通用しない上に、僅かな時間で全戦力の四割を消し去る相手に勝てる訳がない……俺達は手を出してはならない存在に手を出した。

そんな存在がこの世界にいるなんて思いもしなかった。

俺は静かに遠視の魔道具を覗き込んだ……どんな姿なのかどうしても見たかった。

見つけたその姿は……長い黒髪をなびかせる黒いワンピースを着た少女だった……あまりの美しさに俺はその姿をただ見ていた。

そして俺は彼女のその姿に、かつて神殿で見た自由神の姿を重ねる。

そうだ……自由神は人の世界に紛れて今も何処かに居ると言い伝えられていた、きっと……彼女は……。

やがて彼女の姿が眩しい光に塗りつぶされ、俺の意識は途切れた。

だいぶ減ったな。カミラもクログウエルも順調に減らしているよ
うだ。

まだ引かないか、そろそろ勝てないと分かってもいい頃だが。
逃げる事が出来ないのだろうか？

私はそう思いながらも戦艦を落とし続ける、やがて相手の反撃は散
発的になり始めたが、引かないのであれば消えて貰う。

今も真剣に命を懸けて戦っている者達には悪いが、もう戦いとは言
えないかもしれない。

クログウエルやカミラが見た撤退した艦は処罰覚悟で撤退したの
だろうが、その判断は間違いでは無かったと思うぞ。

「艦長……撤退してしまつてよかつたのでしようか？」

「心配するな、お前達は俺の命令に従つただけだ」

不安な声を上げる副官に声をかけ俺は考える。

あれは駄目だ……人が勝てる相手では無い。

俺も軍人だ、敵前逃亡などもつての他だというのは理解している。

遠視員から竜族と思われる魔物の他に人型の存在が二体いる事は
聞いていた。

しかし、大量の主砲を平然とかわしながら、あれだけの威力の魔法
を無造作に連発し続ける姿を遠視の魔道具で見た時、俺は撤退を決め
た。

金色の長い髪をなびかせる黒いドレスを纏った美しい女、俺はその
姿を見た瞬間目をそらしてしまった。

これはただの勘だ。

誰もがそんな事で決めたのかと怒るだろうな……だが、俺はこれで
生き延びて来た。

俺にとって勘は重要な事だ。

艦長失格、軍人の恥さらし。恐らく戻れば俺は軍を辞める事になる

だろう。

……いや、罪人として刑に服す事になるかもしれない。

それでも後悔は無い。この艦の乗員を無駄死にさせる訳には行かない……そう、無駄死にだ！

あれだけの力の差を見せつけられてこれ以上挑むなど、無駄死に以外に何と言えはいい？むしろあれを見て何故倒せると考える!?

勝ち目のない相手に手を出すのはただの馬鹿だ！

竜族だけなら被害は大きくてもどうにかなったかも知れない、だがあれは駄目だ……！

「俺は戻った後、艦長を辞める事になるだろう。だけどな……俺は今日の撤退を間違っているとは思ってねえ、お前達を無駄死にさせる訳には行かねえんだ」

俺は副官と乗員に言い聞かせるように話した。

「……ありがとうございます、艦長」

副官は頭を下げて礼を言う、きつと……分かってないんだろうな。

結局、あの戦いで戻ってこられたのは俺と同じように撤退を選んだ僅かな艦だけだった。

俺は罪に問われる事は無く軍から艦長を続けるように頼まれたが、自分から軍を辞めた。

あれと戦って無駄死にしたくない。俺は田舎に移り住み、畑を耕して暮らし始めた。

その後、あの時の副官は艦長となり、あの時の乗員と共に奴らとの戦いで死んだらしい……馬鹿野郎共が……。

戦闘は私達の圧勝で終り、大量の戦艦はほぼ全て消滅するか海の藻屑となった。

「終わったな」

「我は楽しかったぞ」

「少しだけしか撤退しなかったわね」

私、クログウエル、カミラの順で口を開く。

現在は家の庭に集まって話し合っている所だ。

「結局カミラが最初に見逃していた艦以外は逃げなかったな。私もここまで逃げずに戦うとは思っていなかった」

カミラの近くにいたすぐに撤退した数隻以外、全て戦い続けて全滅した。

あの状況でも逃げようとしなければなら、きっと戦いの中で死にたかったのだろう。

「これで我を敵に回す事の恐ろしさがわかったであろうな」

「これだけ被害を出せば……諦めるかしらね？」

「何度でも、人類が諦めるまで叩き潰すぞ」

「わかったわ、油断はしないようにしないとイケないわね」

「場所が知られているからな」

「ふん、来るなら来るといい。我の力を思う存分味わわせてやる」
こうして私たちはいつもの生活に戻った。

クログウエルは変わらず飛んでいるが、あれ以降魔道飛行戦艦がクログウエルを見て逃げるようになったらしい。

しっかりと効果が出ているのを確認して安心した。
また来るかとも思っていたがこれでもう平気かもしれない。

あの時はそう思っていたのだが。

『人類はまだ討伐を諦めていないようです』

その後のヒトハからの報告の第一声はこれだった。

『あれだけ派手にやられてまだやる気なのか』

『人類の敵に負ける訳にはいかない、との理由が大半の意見のようです』

私の記憶にある三国。森林国家ユグラド、魔工国ガンドウ、獣王国カルガはそこまで戦争を好むような国では無かったはずだが。

『ユグラドはどんな反応を示している？』

森人はまだ私を知る頃の思想に近いはずだ、彼らはどう考えているのだろうか。

『ユグラドは唯一この討伐に意欲を見せていません。ですがユグラド以外の意見が一致しており、それに異を唱える事が出来ない状況のようです。この度の私達への攻撃も、参加はしていますが力を入れておりません』

自分達の国以外の意見が揃ってしまえば反対はしにくいだろう、群れを作る生物はそういった傾向が強い様だからな。

私達のように跳ね返せるだけの力があれば気にしなくてもいいが、ユグラドはそうではないだろう。

他の三国から責められれば立場が危ういと考えてるのだと思う。カミラも同意していたし、それほど間違っではないはず。

先の戦闘時に、少し被弾しただけで乗員が逃げ出していた艦があったな。

あの時は特に気にしなかったが、森人が逃げていたのかも知れない。

乗り気でないなら危険になった時、すぐに逃げるように言われていてもおかしくはないと思う。

逃げる間もなく死んでいる者も多くいるだろうが、私達に攻撃している事は間違いないのだから諦めて貰おう。

逃げる者を追わない時点で大分優しくしているしな。

私がいた当時から大分時が流れているし、人類の思想が簡単に変化する事も知っている。

もしかしたら森人も他種族の変わりように驚いているかも知れない。

『主様?どうなさいましたか?』

『少しユグラドと森人について考えていただけだ、これからも報告を頼む』

『かしこまりました』

ヒトハの返事を聞き、私は念話を切った。

いつ人類がいつ来てもいいように障壁は維持してあるが、私としては来ても来なくてもどちらでもいい。

結局あれから初戦を含めて合計三回戦う事になった。

二回目は初戦から数年後だったと思う。

数を増やし、新しい魔道兵器を搭載した魔道飛行戦艦が多く配備されていた。

結果は初戦と変わらず、人類軍は再びほぼ全滅した。

三回目は魔道海戦艦だったか?それが大量に海に展開し、島を取り囲んだがあまり役に立っていなかった。

飛べない上に速度も遅く火力も無い。まともに攻撃を回避する事も出来ず、何より上空の魔道飛行戦艦の墜落に巻き込まれていた。

カミラがあまりにも酷い状態に同情を見せる程だった、全滅はさせたが。

そして三度に渡りほぼ全滅という結果を受けた人類は、これ以降手を出してくる事は無く、島の周囲にも近寄らなくなった。

人類が私達の住む島に近寄らなくなってから私達はまた静かに日々を過ごしている。

やがてヒトハから、この島が邪竜とその使徒達が住む島として語ら

れていると知った。

「邪竜とその使徒達ねえ……」

カミラが苦笑いして呟く。

ヒトハを含む四人、と呼んでいいのかは分からないが、四人で家の庭の前に集まり語り合う。

「我が邪竜か、中々良い呼び名だな」

「私とカミラは人類の中ではお前の配下らしい」

「人類共は実力を判断する事が出来んのか？……我よりも強者である二人を配下扱いとは」

出会った頃はクログウエルと同程度の実力だったカミラは、現在ではクログウエルよりも上だ。

以前私の障壁を一枚破った時点で既に超えていたと思う。

『外見や大きさを考慮すれば納得の評価だと思います』

ヒトハが意見を述べるとカミラが反応する。

「人類は外見に大分判断を左右されるから」

「愚かな……こ奴は見た目は人類に近い少女だが、我など比べ物にならない化け物だと言うのに」

クログウエルが頭を小さく横に振る。

「私やカミラが町に行くとき声をかけられる事は勿論、体を触ろうとする者がいたり、誘拐しようとする者がいたり、まあ色々な者が集まってくるな」

「町ごと……いや下手すれば国ごと消されるかもしれないぬと言うのに、馬鹿な事をするものだ」

クログウエルがしみじみと言う。

「流石にそんな事はしない、私が人間に絡まれただけでそんな事をすると思うのか？」

「我には分かる、必要ならばするだろう？」

「必要ならな。ただ、人間相手にそこまで必要になる事などそう無いと思う」

「クログウエルも狙われなくなったし、人類もこの辺りには近寄らなくなつたし……。クログウエルは目立つからいつまでも認識され

るでしょうけど私とお母様はその内忘れられるかも知れないわね」

「今回の事で私達の姿が人類側に見られているだろうが、しばらく町に行かなければ問題無いだろう」

「そうね」

私達は雑談しながら一日を過ごした。

広い空間に各国の主要な人物が集まっていた。

僕は報告をする事になってしまったために待機している。

「大きな被害を受ける事になった今回の討伐戦だが……」

今は邪竜とその使徒達に対する対応をどうするかを話しあっている。

「……と言う事です、そして今回使徒達と思われる写影が発見されました」

会議が進み、僕の順番がやって来た……僕は落ち着いてゆつくりと立ち上がる。

「皆さんお手元の白い封筒に入った写影をご覧ください」

全員が封筒から複数の写影を取り出す。

「まずは一番の写影をご覧ください。これはある町の写影店に残っていたものです。撮影時期は恐らく三十から四十年ほど前になります」

僕の手元には長い黒髪をした黒い瞳のワンピース姿の少女と長い金髪でオレンジ色の瞳をしたドレス姿の成人女性、そして長い薄緑の髪をした赤茶色の瞳の長袖のセーターとロングスカート姿の女性の三人が並び、微笑みを浮かべて写っている写影がある。

「撮影当時の店主はすでに亡くなっていますが、後を継いだ息子が聞いていた話では、あまりにも美しかったので無断で自分用に複製し飾っていたようです」

「確かにとても美しくいな……」

各国の方々は口々に眩くと写影をじっくりと見ている。

「当時の写影具はしばらく動かずに待機している必要があり、その一枚のみで彼女達は帰ってしまったようですが、それから程なくして一瞬で撮影出来る写影具が開発されました」

僕は次の写影を手取る。

「では一番と二番の写影をご覧ください、こちらが先の戦闘中に遠視付きの写影具で撮影された黒髪の少女と金髪の女性です」

その写影に写っていたのはどう見ても最初の写影に写っていた内の二人にしか見えない。

全員が写影を見比べてざわついているが、僕は最後の説明に入る。

「最後に黒い封筒に入った写影をご覧ください。多くの写影がありますが、これは町中で一般人が撮影した写影です。撮影時期はバラバラですが……見ていただいた通り、使徒達は非常に優れた容姿をしています、町中でその姿を目撃した多くの者が撮影していたのです」

沢山の写影、そのどの写影にも変わらぬ二人の姿が映っている。

「これは……」

誰かが呟き他の方々もざわつき始めた。

「ずっと昔から使徒達は人に紛れてやって来ていたという事です、町の出入りを厳しく監視した方が良いでしょう」

自分で言つて意味の無い事だと思つてしまう。

使徒の写影を見て、似ている写影があると上司に言つてしまったのが不味かった。

他にもないか探すように命じられ、少し探ただけで沢山見つかった。

探せばもつとあるだろうなあ……でもそれが分かったからと言つて何になるのだろう。

あれだけの力があるなら下手に探し出せばどうなるか分かるはずなのに。

……写影には普通に食事をして買い物をしている美しい使徒達の姿があった、その姿からは敵対する意思など微塵も感じない。

もし彼女達が人類の敵だったなら、わざわざ人を装い、お金を払つて買い物を楽しむだろうか？

でも、僕はその考えを言えない。
言えるわけがない……僕は彼女達に心の中で謝りながら話を続け
た。

人類が私達を避けるようになり何年経っただろうか？

長い間情報収集に大活躍してくれたヒトハはしばらく情報収集を休ませ、共に過ごすようにしている。

クログウエルは出かける事が少なくなりよく寝るようになったが、それでも時々魔物を取ってくる。

私達は島の森と畑、海で取れる食材と買い溜めした資源を使い生活し、人の町へは行っていない。

だがそろそろヒトハにまた情報収集に向かって貰おうと考えた。

私は庭の椅子に座ってくつろいでいる。

その私の隣で浮いているヒトハに話しかけた。

「ヒトハ、今から情報収集に戻って欲しいのだが。行けるか？」

『問題ありません、主様』

「そうか、情報は自由に集めて構わない。では頼む」

『かしこまりました』

私の言葉を聞きヒトハは転移して行った。

それから再びヒトハからの情報を受けるようになったのだが、ある日ヒトハから私達に関する事が報告された。

『私達の写影が人類に渡っている？』

『はい、実際に写影を確認いたしました。隠し撮りだと思われませんが間違いなく主様とカミラ様でした』

『出回っている量は？』

少数ならヒトハに処理を頼もう。

『不特定多数の者に撮影されていたようで、どこにどれだけの量があるか不明です。すべて処分する場合、情報収集を停止した上で行ってもどれほどの時間がかかるか分かりません』

何故そんな状態になった？

『写影はしばらく状態を維持しなければ撮影できないはずだが？』

『どうやらその後、瞬間的に撮影できる写影具が一般にも出回ったようです』

そんな物が出来ていたとは気が付いていなかった。

当時は確か戦争になるかならないかという時で、ヒトハにそんな事を調べる指示もしていなかったはずだ。

だがこれはこれで構わない、こういった事があるから楽しい。

『放っておけ』

『よろしいのですか？』

『情報収集を停止しなくてはいけない上に、いつまでかかるかわからない事をさせる気は無い。何より、その程度は問題無い』

『かしこまりました』

『そのまま情報収集を続けてくれ、頼むぞ』

『はい』

私はヒトハの返事を聞くと念話を切った。

それから人類は発展を続ける。

世界中の大陸の魔物を狩り、森を切り開き、私達の島の付近を除く世界の隅々まで手を伸ばしていった。

「精密立体魔法陣？」

『はい、人類が開発した最新の魔法陣で「高密度立体魔法陣」とも呼ばれています』

私達は戻って来ているヒトハの報告を聞くために庭に集まっている。

ヒトハの状態に問題が無い事は組み込んでいる私の一部を通して分かっているが、それでも念のため時々報告ついでに手元に戻して直接確認している。

「名前から推測すると単純に立体魔法陣の密度を高めて使うと言う

事かしらね?でも……」

カミラが意見を言うが歯切れが悪い、私も引つかかっている事を口にする。

「人類は立体魔法陣を使えなかったはずだ、なぜいきなり改良が行われているんだ?」

「お母様もそう思うわよね?」

私の疑問にカミラが同意する。

今までそんな事は聞いていなかったが、以前から使えていたのか? だが使えるようになっていたならヒトハが放置するとは思えない。

「ふん、何を言っているんだ……簡単な話だろう。我にはわかる……ほぼ同時に見つかったのだ!」

クログウエルが自信満々に言うが、そんな事があるだろうか?

カミラは黙って考え、私がヒトハに問いかけようとした時ヒトハが言った。

『クログウエルさんの言葉の通りです、立体魔法陣と精密立体魔法陣の技術はほぼ同時に見つかりました』

ヒトハのその言葉に静寂が訪れる。

「間違いないな?」

『間違いありません』

私の確認にヒトハが答える。

「我の言った通りでは無いか!ふはははは!」

大喜びのクログウエルだが私はそれなりに驚いている。

新たな技術とその改良法がほぼ同時に見つかる事など初めてでは無いだろうか。

「こんな事ってあるのね……」

「くくく……これだから面白いんだよ、カミラ」

眩くカミラに私は言う。

こういった事があるから人類を見ているのは面白い、久しぶりに驚かせて貰った。

『並行して複合技術も開発されているようです』
更にヒトハから情報が渡される。

「複数の魔法陣を組み合わせる使う技術だったか？」

『はい、それを立体魔法陣にも使えるようにしているようです』

「これは急速に発展しそうだな」

それから人類は再び発展を続けた。

大陸は全て人類の支配圏になり、かつての脅威であった魔物は意図的に残された僅かな自然の中に少数が残るのみだ。

様々な食材が栽培され、多数の動物と魔物が家畜として育てられるようになって行った。

複合精密立体魔法陣も技術が確立した。

その時は、その技術を使って私とカミラも独自に魔法陣を作ったりして楽しんでいた。

地上には人が溢れ、様々な魔道飛行船が空を飛び交い、彼らは世界を手に入れた。

私達の島の付近を除いて。

ある日、私が砂浜で読書をしているとヒトハの本体が軋む感覚を感じた。

耐えられないと判断した私はヒトハを強制転移させる、すると私の正面にひび割れたヒトハが現れた。

『……主様？私は……？』

すぐに転移させたが、ヒトハの本体から伝わった威力を見る限り転移させて正解だったと思う。

「処置をする、話はカミラを呼んでからだ」

何があったかを聞かなくてはいけませんが、まずは修復だ。

私は魔法金属を取り出しヒトハの修復を行いながら念話を飛ばす。

『カミラ、すぐに転移でいつもの砂浜に来い。ヒトハの報告を一緒

に聞け』

私が念話するとカミラが転移で現れた、余計な問答をせずに動いてくれるのは流石私の娘と言うべきか。

「一体何が……ヒトハ!? どうしたの!？」

カミラはすぐにヒトハの状態に気が付いて駆け寄った。

その間も修復はしているのもう危険は無いが、外見を後回しにしているからひび割れたままだ。

「もう大丈夫だ、後で精密検査と修理だな」

「そう、良かった……」

私の言葉に胸をなでおろすカミラ。

「さて、ヒトハ。何があった?」

『魔道兵器研究所付近にいたのですが……閃光に包まれた後、主様の前にいました』

これだけでは分からないな。

「ヒトハ、最後にいた場所を教えろ。私が見てくる」

『かしこまりました』

「カミラはこのままヒトハのそばにいてくれ。私は状況を確認しに行く」

「……気を付けてね、お母様」

私は頷くとヒトハがいた場所の付近に転移した。

「人類は何をした」

ヒトハがいた位置の上空に転移した私は、眼下に広がる巨大なクレーターと周囲の更地を見ていた。

ヒトハは魔道兵器研究所付近に居たと言ったが、眼下には何も残っていない。

魔力は……異常は感じないな。多少濃いだけだ。

恐らくヒトハはこの状況を作り出した現象に巻き込まれたのだろう。

転移させなければ壊れる所か、僅かな私の構成物だけを残して消滅していたかも知れない。

魔道兵器研究所、そしてこの状態。

予想だが、私にはこれしか思い浮かばなかった。

魔道実験事故。

恐らくそう間違っではないだろう。

何が原因かが気になるが、施設も人も全て消えてしまったようだし、これ以上ここに居ても何もわかりそうにない。

人類も気がついていだろうし、帰るか。

島へ帰った私はヒトハのいた所がクレーターと更地のみになっていた事、ヒトハが恐らく魔道実験事故に巻き込まれた事などを説明し、ヒトハの精密検査と修理、改良を行った。

今回の出来事で私はヒトハの魔力出力を上げ、障壁の強化と同時展開できる枚数の増加、自動修復機能と強化外装を取り付けた。

その影響で球の大きさが子供から大人の握り拳ほどの大きさになったが。

取り敢えずヒトハを失わずに済んでよかった。

ヒトハは私の一部を通して繋がっているから救えないという事はまず無い。

遠く離れた者の危険を感知して対応する事は事前に処置をしておけば簡単だ。

していなくても難易度が上がるだけで可能だが。

こう考えるとヒトハは私の初めての眷属とも言えるのか？私の一部がほんの僅かとはいえ混ざっている訳だしな。

待てよ？私の体の強度は私自身も把握しきれていない程強靱だ。

ならば私の体の構成物でヒトハの本体を覆えば、かなり耐久力が上がるのではないだろうか？

私はその事をヒトハに告げ、やってみる事にした。

「ヒトハはそのまま浮いていてくれ」

『かしこまりました』

私はヒトハの本体に混ざりこんでいる私の構成物を残したまま、改めて霧状にした構成物をヒトハに纏わせる、そしてそのままヒトハの本体を覆った。

私から体の一部を分離した場合、それを私の構成物と呼ぶようにした。

私の体の一部と言うのは少し長いし語呂が悪い。

ヒトハの本体は私の本性と同じように光を反射しない完全な闇の球となり、そのまま地面に落下した。

「どういう事だ？」

「ヒトハ、聞こえるか？どんな状態だ？」

ヒトハを拾い声をかけるが反応が無い、私はすぐに表面の構成物を回収した。

『申し訳ございません、主様』

「構わない、何があった？」

『魔力が主様の体の一部を通過出来ないのだと思います』

「私の一部の事はこれから構成物と言え。それで、魔力が通過出来ない？」

『かしこまりました。はい、主様の構成物に覆われた際に、飛行魔法の作用が遮断されました。また主様の声は聞こえていましたが念話も通話不能となりました』

これでは使えないな、いい案だと思ったんだが。

『お母様、まだかかりそう？そろそろ食事よ？』
食事の時間か。

『すぐ行く、そのまま準備してくれ』

『分かったわ、ちゃんと来てよね』

「まずは食事に行く。後々また考えよう、行くぞ」

『はい、お供いたします』

私はヒトハを連れて食事に向かった。

それからカミラと食事をし、研究のためにこもる事を伝えた。

私の構成物で覆う方法を諦めきれなかったからだ。

魔力の問題を無くす事が出来ればかなりの効果が期待出来る。かなりの時間がかかると思っ取り組み始めたのだが。

「上手く行ったな」

『以前と何も変化はありません、状態は良好です』

そこには吸い込まれるような完全な闇の球が浮いていた。開始して十四回目で成功した。

最初は理由が分からなかったが、その後時間をかけて色々試した所、私が「魔力だけでも通せるようにしたい」と思いながら行った

めに成功したと判断するしかなかった。

「どうやら私がイメージした特性が付くという事らしい。」

どこまで無茶な特性が付けられるかと試行錯誤している途中に、私自身が魔素だけでなく魔力も生み出せるようになっていた事に気がついた。

「一体いつからこうなっていたのか記憶に無い、そう考え始めて我に返った。」

「まずはヒトハを完成させなければ、忘れていなければその内また色々試してみよう。」

「そして強度の実験をした。」

周囲に被害が出ないようにしてからフルーツを構成物で覆い攻撃をしたが、私が攻撃した程度では問題は無く、中のフルーツも無事だった。

「結果からこの方法は有効だと確信し、私の構成物のコーティングはヒトハの標準装備となった。」

最後にヒトハの外見だが、カメラから空間に穴が開いているようにしか見えないからどうにか出来ないかと言われ、外装を付けたのでヒトハの外見は以前に戻った。

「ヒトハは復帰して再び情報を集め始めた。」

「いつもの様に島の中で過ごしていた私の元に、ヒトハの報告が来る。」

「『ご報告いたします』」

「頼む』」

「『以前私が巻き込まれた事故の原因が魔力圧縮技術の実験による物だと判明いたしました』」

「『なるほど、名前から何となく想像出来るな』」

「『その名の通り魔道兵器に通常以上の魔力を圧縮して送り込み、莫大な威力を生み出す技術のようです』」

それである爆発か。爆心地の魔力が多少濃かったのは、発動されなかった魔力の残りだったのかも知れない。

『圧縮された魔力と発動した魔法の威力に魔道兵器の本体が耐えられなかったと言う事か?』

『原因としては魔道兵器の設計不良が挙げられておりました』

『設計不良か』

『はい、事故を起こした魔道兵器の設計図は保管されておりました。彼らはそれを詳しく調べたようです。その結果、想定 of 圧縮魔力量と実際の圧縮魔力量にかなりの差があった事が判明したと情報を得ております』

『それは爆発するだろうな』

『下手に強度があつたために圧縮魔力が送られる間は耐えてしまい、射撃した瞬間に限界を迎えたのではないかとの見解です』

圧縮魔力を送っている間に限界を迎えていれば魔力が噴出するだけで済んだだろう、想定以上の圧縮魔力に半端に耐えてしまったばかりに誰も気が付かなかつた。

そして発動時の威力に耐えられず爆発か。

『それで、魔力圧縮技術の進展は分かるか?』

『現在小型の物は成功しています』

『そうか、また何かあれば報告を頼む。それとお前の判断で時々私の元に来い、点検をするからな』

『かしこまりました……私の判断で……ですか?』

『出来ないか?』

『かしこまりました』

『よし』

ヒトハの返事を聞き念話を切った、私がヒトハの判断で点検に来るように言ったのは彼女の成長を促すためだ。

元々私が作った魂だった彼女は、一つの存在に成長している途中だ。

最後には意思を持ち私に意見する位になる事を願っている。

夕方の浜辺で沈む太陽をカミラと見ていた時、私はカミラのドレスについて尋ねた。

「カミラ、お前のドレスもそろそろ新しくするか？」

するとカミラは私を見て少し首を傾げる。

「どう変えるの？」

「いざと言う時にはお前の全身を覆うようにしたい」

「……もしかしてヒトハの事が関係してる？」

カミラが私を優しい目で見つめている気がする。

「私の構成物は高い防御力がある、いざという時に守れるように変えておきたい」

そう言うときカミラはクスリと笑う。

「良いわよ？心配なのよね？……お母様の気持ちは嬉しいもの、断ったりしないわ」

「そうか、ありがとう」

「あつ、でもデザインは変えないで？気に入っているの」

「分かった」

私はカミラに代わりの服を渡し、ドレスを預かった。

カミラが寝ている間に終わらせてしまおう。

そのまま夕食まで語り合いながら過ごし二人で食事を作って食べた。

翌朝カミラが作ってくれた朝食を食べ終わった私は、ドレスを取り出した。

「カミラ、終わったから渡しておく」

「えっ？もう？」

「夜の内に終わらせたよ」

「お母様なものね」

そう言つてカミラは笑う。私とずっと暮らす様になつて皇帝としてのカミラは薄くなり、かつて暮らしていた頃に戻つてきているようにも感じる。

私はカミラにドレスの説明をする。

「まずはお前の魔力をこのドレスに送つてくれ」

「分かつたわ」

カミラが服に魔力を通すのを感じる、私とつながっているから当然だが。

「これでカミラを覚えた。この服はお前の意思によつて保護状態と通常状態に変化出来るようになってる」

「それは便利ね」

カミラが感心したように言う。

「保護して欲しい、守つて欲しいなどの守護を願う意図の意思ならば反応する」

「うん、いい着心地だわ……」

「そうか」

説明している間にカミラがドレスに着替えた。

「このドレスは魔力と魔素などを着用者の意思で生み出す事が出来る他に、内部の環境を整える事が出来る」

「え？……それつてこれを着ていればどこでも活動出来るつて事？」

「保護状態ならな」

「……魔力も魔素も私の意思で生み出すつて……このドレスがあれば他に何もいらなないじゃない」

「食料などは生まないぞ？」

出来るようにしておくべきか。

「お母様、他には何か出来るの？」

試してみようかと思つてみると、カミラが聞いてくる。

「後は、脱いでいても念じれば来るし一瞬で着る事も出来る位だな」

「なるほど……最高のドレスだわ。何よりもお母様の手作りというのが嬉しいわね」

「素材的には私そのものと言える訳だが」

私の言葉にカミラが噴き出した。

「ぶっ！あはは！確かにそうだったわね……幼い頃からずっと私を見守って居てくれた大好きなお母様……」

そう言つて私の胸に顔を埋めるカミラ、私は久しぶりだなと思ひながら優しくその頭を撫でた。

カミラのドレスを新調してからも皆で穏やかな日々を過ごしている。

クログウエルは最近私達と語り合うか、寝てばかりいる様だ。

今日も私とカミラは訓練を続けながら穏やかに過ごしていたが、突然クログウエルから相談をされた。

「世界を渡りたい？」

「うむ……以前貴様は可能だと言っていた覚えがある……我をどこかに送る事は出来るか？」

「可能だが、何故他の世界に行きたいと思ったんだ？」

「人が溢れここではもう自由に飛べぬ……このままお前達と暮らすのも良いと一度は考えた……だが……やはり飛べない世界では生きていけない」

「ここでも飛ぶ事は出来る」、そう言いかけて私はやめた。

彼女がこの判断をしたのは私が原因だ。人の行く先を見たいと、人類と戦うのを止めたのは私だ。

私が止めていなければ早い段階で彼女は人と敵対し、恐らく人類を滅ぼしていただろう。

それを私が止め、強者である私にクログウエルは従った。

ぶつかり合い、お互いが意思を曲げなければ弱い方が折れるか消えるしかない。

お互いにそれを良く分かっているからこそその選択。

言動は偉そうだが彼女は私を強者と認めたとあの時から一度も私に逆らった事が無い。

だから彼女は選んだ、私の意思に背かず自分の意思を貫く道を。

それならば私の答えは一つだ。

「分かった、お前を他の世界へ送ろう」

あれから私はクログウエルの望む世界を聞き、出来るだけ近い世界を選びだした。

知的生命体の存在しない、自然と命が溢れる世界を。
見つける事さえ出来れば送る事は簡単だ。

翌日、私達は島にある丘の上に居た。

クログウエルが出来るだけ早くして欲しいと言ったため今日にした。

カミラとヒトハも見送りに来ている。

「これからお前を別の世界へと送る、準備は良いか？」

「うむ、いつでも良いぞ」

「念の為カミラはヒトハを持ってそこから動くなよ、クログウエルも移動はするな」

「うむ」

「わかったわ」

クログウエルはとカミラの返事を聞いた私は魔力を放出した。

クレリアがあたしを送る準備を始めた……カミラもあたしを見送るために来ている。

この島での暮らしは悪くは無かった。

……このまま空を捨てて暮らすのも良いかも知れないと思ってしまっう程に。

でも……クレリアに言った通り、あたしは自由に飛べない世界では生きていけないみたい。

弱者は強者に勝てない。当然の事だ……彼女の意思に背かず私の意志を貫くにはこの方法しか思い浮かばなかった。

そう考えている内にあたしの体が浮き上がり、複合精密立体魔法陣が包み込む……そして魔力が大量に流れ込むのを感じた。

「準備が出来たぞ」

早い……流石だよ。あたしには理解出来ない異世界間の移動準備をこんな短時間でやっちゃうなんて。

「……元気でね、クログウエル」

カミラが声をかけてくる、出会った頃は同じ位だったのに強くなっちゃって。

「向こうで楽しんでやるつもりだ」

これは本気だ、行くからには楽しまないとね。

『向こうの世界でも危険はあるでしょう。油断しないようにしてください』

ヒトハは言動があたし達に少し近くなってきたね。

「安心しろ、その様な隙は見せん」

二人と挨拶をかわしてからクレリアに合図する。

「では行くぞ」

クレリアの言葉で周囲が暗闇になり……クレリアの声だけが聞こえる。

「いつかまた会おう」

「ふん……貴様から会いに来たら会ってやる」

いつかあなた達の意思で会いに来て欲しい。

そしてあたしは落ちて行くような感覚を感じ……次に吹き付ける風を感じた。

目に入ったのは暖かい日差しが降り注ぐかつてのあの星の様な大空と、眼下に広がる自然にあふれた大地だった。

あたしは翼を大きく広げて雄叫びを上げ、大空を加速した。

「行っちゃったわね……」

「生きていればまた会う可能性はある」

カミラの寂しそうな声に答える。

会えない訳では無い、あの世界は分っているからな。

「クログウエルが世界を渡る決断をしたのは私が原因だ。人が溢れ
ても飛ぶ事は出来るし、襲ってくる人類を返り討ちにする事を止める
気も無かった、それでも……」

「不自由よね、それは」

カミラが言う。そうだな、彼女にとってそれでは不自由過ぎた訳
だ。

「今頃自由を満喫しているだろう」

別れ際にまた会おうと言ってしまったが、会う事はあるだろうか。
カミラに言った通り生きていればいつか会うかもしれないな。

それに私の場合相手が死んでいても会おうと思えば会えるからな。

クログウエルが世界を渡ってから時が流れ、人類は今も数を増やし
ている。

海は少しづつだが陸に変えられ人の町が増えて行き、夜でも町中は
昼のように明るくなり人類は昼夜を気にしなくなった。

最近では私達の島の付近にも魔道飛行戦艦や魔道海戦艦が姿を見せ
るようになり始めた。

クログウエルという目立つ脅威がいなくなったので、人類は私達の
事を忘れ始めるとヒトハから報告があった。

これでまた人の世界に紛れて生活する事も出来るだろう。

私達の島は今、人類の最新魔道飛行戦艦に囲まれている。

「こうなったか」

「お母様、私達の写影が人類の手に残っている時点ではいつかはこう
なっていたと思うわよ？」

こうなった原因だが、私達の島の付近に現れ始めた人類が私達を発見したからだ。

その姿からかつての邪竜の使徒と判断された様だ。

そこまでは良い。だが人類がいきなり攻撃をして来るとは思っていなかった。

障壁に阻まれ島には届かなかったが、攻撃してきた者を私が許すはずも無く、反撃によって相手は消滅した。

それから人類の中で「古い言い伝えにある災いが目覚めた」と言うような事になり全人類との敵対へ至った訳だ。

見つかった時もだが、今囲まれた時にも事前に敵意は無いと伝えたが駄目だったな。

対話をしようとする者が僅かしか居ないのか、完全に敵扱いで話す気も無いのか。

どちらにしても向こうがその気なら相応の対応をしよう。

ヒトハに尋ねた所、以前の戦いから少なくとも三百年以上は過ぎていると言われた。

三百年程しか経っていないのに古い言い伝えとは言い過ぎでは無いだろうか？

そんな事を口にする、カミラから「人類にとっては違うわよ？」と言われた。

その言葉を聞き、確かに人からしたら少し昔の話だと考え直す事にした。

だがその後、「以前の戦いの時に若かった森人はまだ余裕で生きていく程度の時間だぞ」と言うと、カミラも考え始めてしまったが。

実際、当時の事を知る森人の年配達は私達に関わる事を止めたらしない。

だが血気盛んな若い者達を止める事など、ましてや世界の動きを止める事など出来なかったようだ。

そんな訳で私達は人類と敵対し、今まさに攻撃されそうな状況なのだが、私達は家でくつろいでいた。

「確か魔道戦略兵器と言ったか？」

『はい、別名として圧縮魔力砲とも呼ばれているようですが』

ヒトハに現在の人類の切り札の名前を確認する。かつて事故を起こした兵器は時を経て安定して使用出来る兵器になっていた。

「周囲の魔力では足りずに結局この兵器だけは魔力貯蔵式に戻ったのよね？」

カミラがヒトハに言う。

『はい。使用する魔力量が膨大で周囲の魔力だけでは発動までにかかるの時間がかかるようになってしまったため、圧縮魔力を併用する形になっていきます』

いつか周囲の魔力を効率的に集める技術も開発されるのだろうか。

「魔力が周囲に満ちているからって……考え無しに使って問題無いのかしら？」

カミラがため息をついて話している途中で、くぐもった小さな轟音と僅かな振動が起こり、家の外が光に包まれた。

「……攻撃を開始したのね」

カミラが呟く。障壁は張ってあるが、最新の魔道戦略兵器は流石の威力だな。

私の障壁にそれなりの負荷が掛かっている。

威力的には以前カミラが私の障壁を破った魔法と比べられる程の物だと思う。

「この威力の攻撃を島一つにこれだけ撃ち込むとは」

「お母様だって敵には容赦しないわよね？」

「確かにそうだ。この攻撃は当然だな」

『記録では相当な数の圧縮魔力の用意があったはずですので、しばらく続くと思われれます』

私は二人と会話しながらモー乳を飲む。

しばらく本を読んでくつろいでいたのだが、私は地下に異常を感じた。

「地盤が無くなりそうだ」

本から顔を上げ、呟く。

「地盤？」

聞き返してくるカミラに説明する。

「この島の障壁は島を覆うように張ってあるが、障壁の範囲に入っていない島の地盤が攻撃で削られて無くなりそうだ。このままだとこの島が水没する」

「……大丈夫なのよね？」

少し心配そうに言うがそこには私への信頼も含まれているように感じる。

「大丈夫だ。今は島を浮かせておいて、後で直す」

「さらっと言ってるけど……相変わらずお母様はお母様だわ」
安心したような呆れたような表情でカミラは呟いた。

「諦めて帰るようならそれでもよかったが、無理そうだ。壊滅して貰おう」

「そうね。このままだとずっと撃っていそうだもの……効いて無い事は分かっていると思うんだけど」

「人類は後が無いと考えているのだろう。何せもう攻撃してしまつたからな、反撃されて滅ぶかもしれないと思えば必死にもなるだろうな」

「その気は無いのよね？」

「勝手に滅ぶのならともかく私が滅ぼす気は無い。だが反撃はする」

私は読みかけていた本に目を移し再び読み始め、魔法を使う。

魔道戦略兵器の攻撃が人類の敵が存在する島に降り注いでいる。

「どうだ！我々の進化に驚くがいい！」

「準備出来次第どんどん撃ち込め！遠慮はいらんぞ！打ち尽くしても良いと言われているからな！」

普段は魔道戦略兵器はそう撃てる物ではないからな、使う必要のある敵が居ないから許可が出ん。

使う相手が残っていて嬉しいぞ……！

何が災いだ……あの島に居る奴らもこれで消える、我々が真の世界の頂点となる！

「島の状態はどうだ！消えたか!？」

「いまだに健在です！障壁も消えていません！」

私の質問に通信士が答える……しぶといな。

「いずれ耐えられなくなる！止めは私の艦が行うのだ！他の艦に奪われるな！」

私は島の障壁が消えるのを今か今かと待つ、とつとつと私に殺される！

「……っ!?!ほ、報告!!北側に展開している第一艦隊の一隻が爆発！周囲の艦を巻き込み消滅しました!!」

……は？爆発？

魔道兵器の安全性は完璧なはずだぞ!?!確かに過去には事故を起こしたが、現在はあり得ない筈だ！

「何だこれは!?!」

「さっさと報告しろ！」

通信士が叫ぶ、報告するように言うと通信士が答える。

「……第三艦隊、第八……第十四……多すぎて把握出来ない程の艦が次々と爆発を起こし周囲に被害を出しています！」

どういう事だ!?!今までこんな事は無かった！

「まだ増えていますっ……!?!」

報告の途中で艦を激しい揺れと轟音が襲った。

「何が起きた!?!」

「我が艦の上空に展開していた四番艦が爆発！周囲を巻き込み消滅しました！」

……奴だ！あの島の悪魔どもがなんかやっているんだ！

早くあの悪魔を殺さなくては！早く！早く！早く！！

私は未だに障壁を維持する島を睨み、さらなる攻撃を指示しようとして、光に包まれた。

魔道飛行戦艦は魔力を多く積んでいるからすぐ爆発するな。

私は本を読みながら魔道飛行戦艦に積まれている圧縮魔力にきつかけを与える。

溜まった魔力にきつかけを与えてやれば、暴発し周囲を巻き込み消えて行く。

圧縮魔力の爆発は中々の威力だ、魔法金属製の船体が丸ごと消滅するとは。

威力ばかり求めて防ぐ事を考えていないのかも知れない。

もし国が対立し戦争になった時、あの威力の攻撃をお互いに打ち込むのか。

人口が一気に減りそうだな。

次々と戦艦が爆発している影響か島への攻撃が減って来た、攻撃している余裕が無くなって来たか？

その後、私は地盤を修復した。

人類側にどれだけの被害が出たかは知らないが、全滅する前に撤退して行ったので以前よりは賢くなっている。

ただかなり遠い位置だが、島を取り囲むように常に戦艦がある程度常駐するようになった。

監視だろうな。

実際は何もして来なければ私達もする気は無いのだが、前回とい今回といい頑なに会話しようとしなからな。

彼等は遠巻きに島の周囲をうろつくが、一定の距離を保ち入って来る事は無かった。

ただ、以前一度だけ何を思ったのか一隻で突っ込んで来て、長々と島の周囲をうろついて帰って行った戦艦がいた。

何もしてこなかったから放置したが、何だったんだ？

私は人類が私達に対して恐怖を感じているとヒトハから報告を受けた。

その報告を機に、私達が居ては人類が安心して発展出来ないのではないかと考え、姿を隠す事を検討し始めた。

「みんな……俺のわがままに命をかけてくれてありがとう！」

俺は帰還した後、乗員を集めて頭を下げた。

「俺達は艦長に命を預けてる、謝る事はねえよ！」

「そうだ、どこだろうが俺達はついでに行くぜ！」

乗員達が声をかけてくれる、俺はもう一度頭を下げた。

「しかし本当に何もしてこなかったですね……」

乗員の一人が言う。

「……そうだな。これは艦長の考えが当たってるか？」

誰一人耳を貸さなかった島の悪魔の言葉……何もしないなどと言われても実際に大量に被害を出している彼女達を信じられない気持ちには良く分かる。

俺は以前から、勉強を兼ねて今までの戦闘報告を読み漁っていた。

そしてある事実に辿り着く。報告を見る限り、彼女達からは今まで一度も攻撃を仕掛けていない事に。

戦闘記録は映像の撮影も義務付けられている……この情報に間違いは無いはず。

俺は考えた、「人類が攻撃をしたせいで彼女達も身を守るために戦

うしかなかったのではないか」……と。

その考えを確かめるには実際に行ってみるしかない。俺は乗員にこの話を聞かせて今回の事を話した、無駄死になるかもしれない事も……。

皆はついて行くと言ってくれた……死ぬかもしれないこの行動に。

そして今回の事で確信した。どれほど島に近づいてもこちらから手を出さなければ相手は何もしてこなかった。

つまり……人類が一方的に襲い掛かり敵視していただけで彼女達はただの被害者である……という可能性が高くなった。

しかし今の彼女達は人類にとって恐怖の対象だ。今更人類が手を出したせいだと言って人類の考えが変わるだろうか……。

幸い……と言って良いのかは分からないが、彼女達に人類が手を出す事は当然無いだろう……。

これからずっと無いと言えない……いつかまた人類は必ずあの島に攻撃をする、俺には何となく分かっていた。

島に居る存在に会ってみたい、俺はそう考えるようになっていた。

どんな事をされるか分からない、自分の判断を呪うかもしれない……だけど……会って話してみたい……俺のその気持ちは大きくなっただけ一方だった。

人類が島を取り囲み、私達を監視し始めてから特に何かが起こる事は無く、私達は毎日を過ごしていた。

ある日の夜。

私は庭の椅子に座り星空を見ながらカミラと話をしていた。

「カミラ、私はそろそろ移住しようと思っっている」

「え？移住するのお母様？」

私の方へ顔を向けるカミラ。

「地上も空も人類が溢れた、私達が居ると安心して進化出来ないだろうからな」

「かなり私達を恐れて萎縮しているものね……いつ私達が攻撃してくるかと怯えているのかしら？でも、わざわざお母様が退かなくても……」

「今の人類では私達をどうする事も出来ないからな。もし人類が私に近い強さを持っていれば私が退く事は無かった」

「どういう事？」

カミラが不思議そうに聞いてくる、上手く伝えられるか分からないな。

「私達と近い強さを持っていれば、私達を気にはするだろうが普通に暮らせるだろう。ただあまりにも力に差があると、例えば私達が何もしなくても弱い側は常に恐怖を感じる、はずだ。上手く伝えられないが」

私がそう言うとカミラは考え込み……言う。

「……人類的には後ろから頭に魔道兵器を突き付けられたまま、「絶対に撃たない」って言われてる気分かも知れないわね」

なるほど、中々良い表現をする。

「良い表現だ、恐らくその様な感じだろう。折角ここまで育った人類だ、どこまで行くか見てみたい」

「なるほどね。わかったわ」

伝わってよかった。

「私は人類が認識出来ない所へ移住しようと考えている」

「どこへ行くの？地下？」

「いや、月へ行く」

「……あの月？」

「そうだ」

カミラは夜空を見上げて言う。

私が考えた中で見つからず人類を観察出来る場所としては月が一番だと判断した。

「月に住める環境を作ろうと思っている。カミラもドレスの機能があれば平気だとは思いますが、ずっと保護状態というのも嫌だろうか？」

「……確かにそれは嫌ね」

「月に住む環境を作るつもりだが、この島を持って行く気はあるか？」

「え？……この島には他にも生物が住んでいるし、島はこのままにしておきましょう。それよりルーテシアのお墓をどうするかが気になるわ」

「ルーテシアの遺灰とネックレスはウルグラードに残っているケインとミナの墓に移すつもりだ。ここに残して置いたらどうなるか分からないからな」

「そう……それでどの月に行くの？三つあるわよね？」

「一番大きい月に作ろうと思っている」

「分かったわ、それでいつから作り始めるの？私もドレスの使い方を実践しておきたいし、手伝うわよ？」

「そうだな、実際にドレスを試すいい機会だ、手伝って貰おうか。まずは宇宙で問題が無いか確かめよう、明日の昼を食べてからにしようか」

「明日の昼食の後ね、分かったわ。じゃあ私はそろそろ寝るわね？おやすみなさい、お母様」

「おやすみ」

家に戻っていったカミラを見送った後、私はしばらく月を眺めてい

だが、忘れていた事を思い出す。

「宇宙に魔力があるか調べていなかった」

私はそう呟いて立ち上がり、宇宙へと向かった。

翌日、昼食を終え、カミラのドレスを実際に使う時が来た。

「先に保護状態にしておけよ」

「私が生身で耐えられるか分からないものね」

「確かめてもいいが今やる事では無いな。今回はドレスの効果を確認して、問題無ければ月の改造に移る」

カミラが頷くと全身が深い闇に覆われ、いつものカミラの姿がそのまま切り抜かれたように黒く染まる。髪の毛の一本一本まで上手く保護しているな、しっかりと機能している様だ。

「宇宙にも少し魔力があるが、ドレスの機能を使ってくれ。最初は慣れないかもしれないから駄目だと感じたら私に言え」

「やってみるわ、この感じだと平気そうだけどね」

「よし、行くぞ」

カミラが頷く、そして私と彼女は並んで空へと登っていく。

ここからは念話で会話するか、宇宙だと通常の音は聞こえなかったからな。

『カミラ。宇宙では通常の音は聞こえない、念話で話すぞ』

『了解よ』

会話中も上昇し続け、やがて周囲が暗くなってくる。

カミラはきつと体にかかる重さが無くなっていくのを感じているはずだ。

やがて完全に周囲が暗くなり、宇宙へとやって来た。

『カミラ、止まれ』

『ええ……あれ？なんか妙な感覚ね……』

カミラが止まろうとして回転している。

『いつもより勢いを抑えろ、重力を考えるな。ここでは少し力が加

わるだけで飛んで行くぞ』

宇宙の中でも更に暗いカミラの姿は良く分かる。私も姿を変えて
いる時はこんな感じなのだろう。

そう思いながらいまだに回転しているカミラを見ていた。

その後少し時間がかかったが、カミラも宇宙に慣れる事が出来た。
『あの惑星が私達がいた場所なのね……』

カミラは私の隣に佇み惑星を見ている。真っ黒で、感じる事は出来
るが見た目では視線が分からない。

『カミラ、何かおかしな所は無いか？どんな小さな異常でも教えて
くれ』

『うーん……今の所体調は地上に居た時と変わらないけれど……』
上手く行っているか？問題が無いなら良いが。

『途中で何か感じたらすぐ言ってくれ』

『そうするわ、ありがとうございますお母様』

『そろそろカミラも無重力に慣れたようだし、月に向かうぞ』

『ええ、行きましようか』

月に向かって速度を上げる、それなりに遠そうだな。

『主様？ご自宅にお姿がありませんが現在はどこらに？』

ヒトハからの連絡だ、この時間に来たと言う事は何かあったのか？

『今は月に向かっている途中だ、何かあったか？』

『いえ、報告ではなく検査を受けようと思ひまして』

そうか、ヒトハの判断で来るように言っているからな。

『検査は月でやろう、こちらに呼び寄せるぞ？問題無いか？』

『問題ありません、お願いいたします』

私はヒトハを手に転移させて掴む、高速で移動しているからこうし
ないと一瞬で離れてしまう。

『このままお前を連れて行く、ゆっくりしている』

『ありがとうございます、主様』

う。私に握られたまま礼を言うヒトハ、月についたら先に検査をしよ

私達は無事に月に到着した。今度から必要な時以外は転移で行き来しよう。

月の表面は荒れていて、大小のクレーターが数多く出来ている。予想以上に何も無い、意外と時間掛かるかもしれないな。

『取り敢えずヒトハの検査をしておこう。カミラは少し待っていてくれ』

『じゃあその辺りを見て回ってるわね』

『主様、よろしくお願いします』

カミラが飛び立つのを見送ってヒトハを検査する。

『ここに新しく住む環境を作るのですね』

ヒトハが話しかけてくる、私は検査をしながら言葉を返す。

『そうだ、自然を再現するのは初めてだが』

『お手伝い出来ればいいのですが……』

『気にするな、お前にはそういった力を与えていないからな。人類

の情報を集めておいてくれ』

『かしこまりました』

『もう転移は出来るな?』

『はい、問題ありません』

よし終わった、問題は無いな。

『終わったぞ、問題は無い』

『ありがとうございます、では情報収集に戻ります』

『頼む』

そう答えるとヒトハは転移していった。

『カミラ、来てくれ』

『今行くわ』

その返事の直後、転移でカミラが現れた。

『それで、どうするの?』

『自然に循環する環境を作るぞ』

『それはかなり難しそうだけれど……』

『広くする予定は無いし、私の構成物を使えばどうにかなるだろう。理解不能だがかなり万能なようだからな』

『お母様が自分の体を理解不能と言っているのは変な気分だわ。でも確かにあり得ない事も出来てしまうし……お母様の体に変な影響が無いなら私は良いけれど……』

カミラは自身を覆っている私の構成物で出来たドレスを見ながら言う。

そのドレスやヒトハのコーティングもだが、具体的な事を考えれば何の問題も無く上手く行った。

逆に、ただ「硬くなれ」などのハッキリしない場合はかなりムラがあったな。

変な事をしなければ安全である可能性の方が高いが、便利だからと良く考えずに使うと予想もつかない事になってしまう可能性もある。

それはそれで面白そうだが。

こうして月の改造が始まった。

まずは私達の拠点がイシリスから見えない様に月の自転を変更し、常にイシリス側に同じ面が来るように調整した。

それからイシリスから常に裏側になる部分の中央付近を基準に、ある程度の範囲を障壁で隔離して私の構成物を置く。

これは見た目は私の頭ほどの大きさをした球状の闇の塊だが、イシリスの大気を再現し状態を維持する為の物だ。

私は障壁内が惑星と同じ大気になるか様子を見て成功を確認し、次へ移る。

イシリスの環境を再現出来ればこちらの物だ。

カミラには隔離したすべての範囲の大地をかなりの深さまで農耕魔法で土に変える作業をして貰い、私は他の環境を整えていく。

海を作り、山を作って水源を作り川にして海と繋ぐ。気温は一定の範囲で緩やかに変化するようにして昼夜を作り、カミラが魔法で変え

た肥沃な土地に木や草花などの植物を植えた。

野生動物は今放すのはやめておこう、環境が整わなければ問題が起きそうだ。

場合によってはマジックボックスに保存している野生動物を放そう。

食料は私達、正確に言えばカミラが食べる分だけ手に入ればいい。

畑と畜産で十分だろう。いや、魚は欲しいな。

家畜を用意し、畑も作ったのだが。

多すぎた。

二人で世話をするのが大変だと気が付いた私は、世話用の簡単なゴレムを作り任せられるようにした。

勿論収穫された物はマジックボックスの収穫品入れに保存される。完成はした。だがこの環境を維持している殆どの物に魔法が関わっているので、魔力が無くなると崩壊する。

私の構成物で出来た闇の塊がこの環境を維持している要なので、土台を作り固定し、私とカミラ以外近付けない様に小さい障壁を張っておいた。

後は私達が手を出さなくても問題無いかを確認して完成だ。

島に戻ってしばらく放置しよう。

離れていても私の構成物である闇の塊があるため、問題が起きれば感じる事は出来るし、時々遠視で確認もするつもりだ。

「後は私達が手を出さなくても問題無い事が分かれば一旦完成だ。足りない物があれば後から足していけばいいだろう」

「じゃあ島に帰るの？」

カミラは環境が整ったので保護状態を解除している。

「ああ、転移で戻ってしまおう。宇宙を楽しむのはここが完成してからだ」

「そうね、まずはここを完成させないとね」

私達は島へと転移した。

「それでお母様、具体的にはどの程度放置しておくの?」
「最低十年だな」

私達は我が家でくつろぎながら月の拠点の事を話し合う。

「十年ね、意識していないと私達だといつの間にか過ぎていっているわよね?」

「そうだな、この十年だけは意識しておこうか」

「お母様……あの月の拠点、だいぶ大きいわよね」

「そうだな、惑星にある物を大体揃えて整えようとしたら広くなつてしまったのは間違いない。本来の予定ではここまで広くするつもりでは無かった、カミラが大地の改造や色々と他の事を手伝ってくれて助かった。ありがとう」

そう言つて隣のカミラの頭を撫でる。

「手伝いたかつたし平気よ、それに広い方が安定しやすいと思うし」
「本当は島の庭程度にしようと思つたんだが、海や川、山も欲しくなつてしまつてな。ああなつた」

「海と川と山を入れようとしたらこうなるに決まつてるじゃない……」

考えついただけだがカミラに話してみるか。

「私が考えた構想段階の物にそれを覆す物がある」

「どんな物?」

カミラは私を見ながら聞いてくる。

「マジックボックスの技術を流用した小さく広い世界だ」

「小さくて……広い?」

「マジックボックスの中に世界を作り上げるといふ物だ。時間の流れなども出来れば自由に変えられるようにしたい」

「そんな事出来るの?」

「出来るかどうか分からないからやってみるんだろう?これが成功すれば私やカミラのマジックボックスの中で生物が暮らす一つの世界を作れるかも知れない」

「……それだと自分が行けないんじゃない?」

「だからそれに魔法靴の考えを取り入れて、一つの世界を何かに、例えば魔法金属の箱や球のような他の物の中に作り上げる」

「なる程！それなら魔法靴の入り口を作る詠唱を流用して出入り出来る世界を作れるかも知れない！」

「その通りだ。どうだ？面白そうだろうか？」

「ええ！魔力が大量に無ければマジックボックスの中を広く出来ないけれど、お母様なら！」

「私の魔力は恐らく尽きないだろう。つまり本当の惑星並みの広さにも、それ以上にも出来る可能性がある。後はその中に惑星を作るか存在している物をそのまま入れてしまえばいい」

「作るのともかく、惑星を丸ごと入れるのは出来るの？」

「出来ると思っている。魔法靴の入り口は実際の靴の入り口より大きくはならないが、マジックボックスの方法を使えば魔力次第で入り口はどこまでも大きく出来る」

「じゃあ……」

「恐らく魔力さえあれば出来る。ただ、膨大な魔力が前提だからカミラだと服からの魔力供給無しでは惑星は無理かもしれないな」

「マジックボックスの入り口に飲まれる惑星……住んでいる生物から見たら恐怖よね？」

「そうなのか？」

実際に惑星を飲み込むかはともかく、いつかは作ってみようと小さく大きな世界の話に花を咲かせた。

島の悪魔……写影では美しい女性にしか見えなかったが、初めて彼女達に会いたいと考え始めてから約五年が過ぎた。

自由に行動出来るだけの地位を手に入れるために力を尽くし、何とか周囲からの圧力を気にする事無く行動出来るだけの地位に就く事が出来た。

幸いかつての部下も健在で、あの島に行くのなら力を貸すと言ってくれた。

そして俺達はどうとうあの島に向かう事が出来る。

「皆、ありがとう。……この件に関しては私の地位と権限において君達に迷惑をかけない事を誓おう」

「あの時も行つたら？…ついて行くつてよ」

私がある程度の地位を求めたのは周囲に邪魔をされない様にと言う理由の他に、彼らに行動の責任が及ばない様にする為でもあった。五年前島に突入した時は考え無しに動いて誤魔化すのに苦労したが今ならば堂々と行動する事が出来る。

当日乗つていく魔道飛行戦艦は新型だが非武装だ。

どうせ攻撃する気は無いし、した所で彼女達に通用するとは思えない。

それなら余計な警戒を抱かせないように最初から非武装で行けばいい。

彼女達は何者なのか？人類をどうする気なのか？どうしても直接聞いてみたい。

私達は二日後、再びあの島へと向かう。

『主様、 以前ご報告した人間の軍人が島へと来る様です』
私は庭で本を読んでいる時にヒトハからの報告を受けた。

『以前島の周りを飛び回り、帰って行った戦艦の艦長だった男だな？』

あの戦艦については調べていた、あれだけ変な動きをすれば調べるに決まっている。

私はヒトハから時々彼についての報告を受けていた。どうやら私達に対して一般的な人類とは違う考えを持っている様だ。

実際に私達と会って会話しようとしているらしい。

『どうやら二日後に島に来るようです』

『ヒトハも当日は島に戻れ。私と共に奴に会うぞ』

『かしこまりました』

私はカミラにも一緒に会うように伝え、彼が来るのを待った。

そして二日後の昼前。

遠くに非武装の魔道飛行戦艦が姿を見せた。私達は特に変わった事はせず、そのまま庭でくつろいでいた。

戦艦はある程度島に近づくと停止し、中から小さな乗り物が一つ出て来た。

戦艦はそれを見届けると帰って行く。

通信用の魔道具が作動しているな。

その小さな乗り物は地上に着陸した。中から現れたのは短い黒髪、青い目の背が高い、がっしりとした男だった。あまり若くは無いか？

彼は私達の元へやって来て緊張した声を出す。

「……突然の訪問申し訳ない。使徒の方々とお見受けします……どうかお話をしていただけませんか？」

そう言つて頭を下げた、本当に珍しい男だな。

「話はしよう。だが、まずは食事でもどうだ？」

「……いただきます」

彼は僅かに考えた後、了承した。

私はカミラに食事の用意を頼み、彼との会話を続ける。

「この庭で食べるか？家に来るか？」

「……お宅にお邪魔出来れば」

何かを決意するように言う。

そう警戒しなくとも相手は何もしなければ何もしないが、彼がこの状況で気を抜くのは難しいか。

私達は家に入りカミラの料理を待つ、彼は私をチラチラと見るが何も話そうとしない。

「食事が終わったらゆっくりと話そう。お前が何かしようとしないうり私達は危害を加える気は無い、安心しろ」

そう言うのと少しだけ硬さが抜けたように見えた。

やがて料理が用意され、食事となった。

「っ!?う、美味しい……!」

彼は驚き、呟くと無言でひたすら食べた。

途中で自分の行動に気が付いて恥ずかしそうに俯き、カミラに笑われた。

食事が終わりソファに案内して飲み物を出す、彼はモー乳だった。

「それで？お前は誰だ？」

私は彼に問う。

「申し遅れました！私はアーティア合衆国空軍遊撃艦隊所属第三位！シズキ・カシルズと申します！」

すると突然立ち上がり名乗る彼。

「丁寧なあいさつをありがとう。私はこの島で暮らしている、クレリア・アーティアだ」

「私はカミラ・アーティア、クレリアお母様の娘よ」

『ヒトハと申します』

私とカミラの名乗りに驚いた顔をした後、ヒトハの名乗りで軽く体が跳ねた。

「いつ……今のは!？」

「彼女だよ」

私は隣に浮いているヒトハを示す。

『驚かせて申し訳ありません』

「あつ……いえ……失礼いたしました、問題ありません」

問題がありそうな表情で言うシズキ、始めて念話を受けたらこんな物か。

「話ならいくらでも付き合っつてやる、落ち着いて話す事をしつかりとまとめてから話せ」

彼が落ち着くのを待ち、再び会話を始める。

「失礼しました。もう……大丈夫です」

彼はそう言っつてソファに座りなおす、そして私達に言う。

「早速ですがお聞きしたい事があります。……お二人は先程アーティアと名乗りましたが……我々の国と何か関係があるのですか？」
まずそこからか。

「あると言えばある。アーティア合衆国より以前にあつたアーティア帝国は知つているか？」

「はい。我々の国の基礎となつた、かつて世界の大半を支配してつた大国だつたと認識しています」

「そうか、知つているのなら話が早いな。隣にいる彼女がアーティア帝国の最初で最後の皇帝、女帝カミラ・アーティアだ。会えて良かったな」

彼が動かなくなつた。大抵こういつた時は皆、同じような反応をする。

「いや、それは……」

彼が何とか口を開いた。

「当時の皇帝の記述は無いのか？同じ見た目だと思つが」

彼は思い出しているのかカミラをじつと見ている。

「まあ信じなくても良いわよ？貴方が信じなくても事實は変わらな
いし」

微笑みながらカミラが言う。

「いえ、信じます。あれだけの力を持つ方がそのような嘘をいう意

味が無いですから……。それと残されていた資料には帝母クレリア様と記述がありましたか……」

「ああ、それは私だ。カミラが私の娘なのだから当然だな。姿も記述と同じだろう?」

「……はい、間違いない」

彼は頷く。言っておいてなんだがよくそんな内容まで覚えているな、私より記憶力がいいかも知れない。

「お二人は……森人なのですか?アーティア帝国があつたのは三百年以上前の事ですから……」

「お母様、私達はいくつなんでしょうか?」

「私に聞かれても覚えていないぞ。カミラは確か昔百五十年程一緒に暮らしていたから……八百から千の間くらいじゃないか?」

「私はそれ位なのかしら?まあ少なくとも森人の寿命じゃないわね」

「私は少なくとも一万は越えているから話にならない」

そんな事をカミラと話し合っていると彼の反応がまた無い事に気が付いた。

「大丈夫か?そのままだと話が進まないぞ?」

「あつ、ええ……ではお二人は何者のですか?」

「分かん」

「えっ……?」

「分かんと言っている。一応カミラは血を吸う事も出来るため自分を吸血種と呼んでいるが、私は全く分からないし自分で名前も付けていない」

「なる……ほど……」

「すまないな、答えてやれなくて」

「いえ!問題ありません!」

私がそう言うと彼は大きめの声で返して来た。

「では……お二人は……人類をどう、お考えですか?」

彼は一度深呼吸すると再び疑問をぶつけて来る。

「私は今までずっと人類の発展を見て来た、これからもそうするつ

もりだ。お前達が手を出してこない限り、敵対する気は無い」

「私もお母様とほぼ同じね……何もしないならわざわざこちらから手を出す気は無いわ」

それを聞いて彼は安心したようだ、そして頭を下げた。

「過去から現在まで、貴女方を一方的に敵視して攻撃した事を人類として謝罪いたします。申し訳ございませんでした」

「気にしていない。強大な力を持つ者が何もしないと言っても安心は出来ないだろう？こちらにも反撃はしているしな」

気持ちを受け取る。ただ全てを彼が謝る必要は無いと思う。

あくまでも私の考えだが、過去の者の行いから学ぶ事はいいと思う。

だが過去も含めた全てを自分の事のように気にする必要は無い。

過去の事は過去の事だ。

やったのは当時の人間達で、彼では無いのだから。

彼からの質問は続く。

「次の質問なのですが……貴女方と共に居た黒い魔物が見当たらないのですが、外出中なのででしょうか？」

「彼女は黒竜クログウエルという」

「彼女……女性なのですか!？」

「ああ、多少気は荒いが普通に会話も出来るぞ？」

「会話も出来る……そうだったのですか……今はどちらに?」
「どことなく暗い表情になるシズキ。」

「もう居ない」

「っ!?!……失礼ですが……お亡くなりには?」

「違う。彼女は別の世界に行く事を望み、私がそれを叶えた」
「今頃は思うままに空を飛んでいるだろう。」

「あの……?申し訳ない……意味が分からないのですが……」

「もう居ないが死んだ訳ではないという事だ」

「そう、ですか……」

彼は何とも言えない表情をしている。しばらくすると気を取り直したのか再び質問をして来た。

「あなた方はこれからここで私達を見続けるのですか？」

「いや、私達はいずれここを去るつもりだ」

「……一体どこへ？」

「それは言えない。ただお前達を怯えさせる事無く観察出来る場所だ」

「その様な場所があるのですか……」

「だからお前達は安心して発展するといい。そしてお前達が私達を忘れた頃、またお前達の世界に紛れ、楽しませて貰う」

「それで良いのですか……?」

シズキは私とカミラを見て言う。

「何がだ？」

「人類全てに恐れられ敵視され……たった三人で。寂しくは……無
いのですか？」

「何とも思わないな」

私は素直な意見を伝える。

「私は親しい人と暮らすのは楽しいし、親しい人が死ぬと悲しくも
感じるけど。きっと一人でも平気だと思う……出来ればお母様とは
離れたくはないけどね」

カミラも自分の考えを述べる。

彼は黙って私達の言葉を聞いている。

「お前は人として考えているのだろうが、私達は人では無い。お前
が考える事が全て私達にも当てはまると思わない方が良い」

「そうですね……」

彼はそう呟いた。

時刻は夕方になり、彼は帰るようだ。

「本日はお話をしていただきありがとうございます」

そう言って彼は立ち上がり深く頭を下げた。

「話す事が出来て楽しかった。人類の中にもお前のような者が居る
事が分かって良かった」

私がそう言うと彼は少し恥ずかしそうに微笑んだ。

「所で、お前を連れて来た戦艦は帰ってしまったようだが。あの小
さい船で帰れるのか？」

「これで連絡をして迎えに来て貰う予定です」

彼はそう言って手に収まる大きさの魔道具を見せてくる、連絡用の
魔道具か。

「……正直に言いますと、何かあった時に犠牲を私だけにするため
でもあったのですが……」

彼は迎への連絡をした後、申し訳なさそうにそう言った。

「連絡が無ければ、私達に何かをされたという事で見捨てる事に

なっていたのか？」

「そうです。正直死ぬよりも辛い目に遭う事も覚悟して来ていたのですが……」

「簡単に滅ぼせる相手にそんな事をしてどうするんだ？」

「そ、そうですね……」

私がそう言うのと苦笑いするシズキ。

「ああ、それともう一つ」

「……何でしょうか？」

「今日の盗み聞きは見逃してやる」

「っ!?!……ありがとうございます」

目を見開くシズキ。

その後当たり障りのない会話をしながら待っていると戦艦が到着し、彼は帰って行った。

帰りの戦艦内の艦長席で俺は深く息を吐き、体をほぐす。

「バレていましたね……」

「そうだな……」

俺は隠し持っていた二つ目の通信魔道具を取り出し通話を切った。通話状態のままにしてバレない様に持ち込んだつもり……だったんだが。

乗員皆が今日の話聞き、録音もしてある。

「戦艦に魔道兵器……これだけの力を手にしても彼女達にとって人類は取るに足らない相手だったみたいだな……」

俺は半ば眩くように言葉をこぼす……実際に会って話した事で確信した。

彼女達は本当に俺達を脅威だなどと思っていない。むしろ滅ぼさない様に気を使ってすらいる。

「いやー、何というか……録音はしましたがけど、こんなの公開出来ませんよ?」

「そうだな……しかし処分してしまうのは駄目だ」

「資料室の奥に厳重に保管しておきますか？あそこはもう誰も探しに来ませんし……」

「そうだな、俺が奥深くに隠しておこう」

俺達は帰る道中ずつと彼女達とかわした話の内容を語り合っていた。

彼の乗る戦艦が離れていくのを見ながらカメラが口を開く。

「彼、黒髪だったわね」

「そうだな」

「名前からすると魔道飛行船の基礎を作った彼の子孫よねきつと」

「多分な」

「盗み聞きを見逃したのは巫女の血が入っていたから？」

「いや、元々誰に聞かれても良かった。もうすぐ私達は居なくなるのだから」

「そうね……そういえば神殿は今はどうなっているの？」

「ヒトハが言うにはウルグラードの神殿は今でも代々続いているらしい。ただ現在の巫女はただの職業の一つで、自由神信仰も信仰する理由が変わっているようだ」

「どういう事？」

「以前は自由を愛する人々がその教義に共感して信仰していたようだが、最近は自由を求める人々が教義に魅力を感じて信仰しているようだ」

「なるほど……」

「自由を愛する事から自由を願う事に変わっているという事だと思う」

「人類は自由が無くなっていると感じているのね」

「私には分からない事だな」

「自由神様ですものね」

「もう誰も知らない事だ」
笑いを堪えているような顔で言うカミラに返しながら、私達は三人で家に向かって歩き始めた。

月の拠点を作ってから十年が過ぎ、問題も無かったため移住をする事にした。

ルーテシアの遺灰とペンダントはウルグラードに残っているケインとミナの墓に移した。

私はシズキ・カシルズにヒトハを通してここから居なくなる事と、この場所を好きにして良い事を伝えた。

私達がここで暮らしていた形跡は全て消し、住んでいた家は回収し月でも使う事になった。

カミラがルーテシアと共に過ごした家を壊したく無いと言ったからだ。

「行くか」

やる事を終え、私は二人に言う。

「そうね」

『主様、いつでも移動可能です』

こうして私達は月へと転移した。

月の裏側へと移動した私達だが、家の場所を決めていない事に気がつき、カミラに好きな場所を選ばせた。

そして彼女は海辺を住居に決めた。

家を設置してしまえばもう特にやる事は無い。

この隔離された世界はこのままで安定しているし、畑や家畜、魚の養殖も私の作ったゴレムが管理しているからな。

その後に訓練用の土地も欲しくなったので訓練場も作った。

宇宙での訓練はその辺りの宇宙空間に障壁を張る事で可能なので問題無い。

取り敢えずはこれで良いだろう。これから私は二人と一緒に月で惑星を観察しながら暮らして行こう。

私は拠点内から星が散らばる宇宙を一度見上げた後、家に戻って行った。

月に移住してから少し時が経った、私達は島にいた時と変わらぬ穏やかな日々を過ごしている。

現在、私は拠点を出て月面を一人で歩いていた。見上げるとそこには惑星イシリスが見える。

イシリスと言うのは人類がいつの間にか付けていた自分達の住む世界、つまり今私が見ているあの惑星の名称だ。

今更だが私達もあの惑星をイシリスと呼ぶ事にしようと思った。

現在の人類は私達が居なくなった事を認識し、世界に敵は居ない状態になっている。

そのせいか戦うための技術の研究は少なくなり、それ以外の物に力を入れるようになっていくようだ。

ヒトハからの報告に興味を引く物があつた。映像と音声を世界中に同時に送る、魔力通信放送という物だ。

『魔力通信放送か、興味深いな』

『送信側の様々な映像と音を離れていても受信側が確認する事が出来る物です。通称「魔放送」と呼ばれ現在人類に人気があります』

世界中と話が出る技術はかなり前から出来ていたな、そこからこのような物が生まれるとは。

『ヒトハ、それを見るにはどうすればいいかわかるか?』

『受信魔動機を入手すれば可能なようです』

魔動機か。人類は単純な機能や構造の物を「魔道具」、複雑な乗り物や装置を「魔動機」と呼び分けるようになっていた。

『可能なら手に入れて持って来てくれないか?』

『かしこまりました』

「お母様、それ何？」

あれから数日後、ヒトハが受信魔動機を手に入れて戻って来た。家のリビングに置こうと思いいヒトハと一緒に向かうと、ソファに座っていたカミラが不思議そうに聞いてくる。

「人類が開発した魔力通信放送を見るための受信魔動機だ。音声付きで離れた場所の映像などを見られるらしいぞ」

「へえ……凄いわね。今から見るのよね？私も見たいわ」

「今置くから待っている」

「はい」

私は座りながら見る事が出来る位置に受信魔動機を置く、思ったよりも大きい問題は無い。

「動かすぞ」

私は平たい円状の受信魔動機を作動させる。

「何も起きないけど……」

カミラが呟く。間違いなく作動しているが何も映らない、これは恐らく……。

『魔力通信放送が月まで届いていないのだと思われます』

ヒトハが私の予想を代弁した、私は以前の念話を思い出していた。

「これは中継する必要があるな」

「あー、なるほど……月で使う事なんて想定している訳無いものね……」

カミラも気が付いて苦笑いしている。

月程度の距離なら簡単に届くように出来ると思うが、必要も無いの出来るようにはしないか。

「中継する物を作って来る」

「気を付けてね、行ってらっしゃい」

『主様、お気を付けて』

カミラとヒトハを家に残し惑星イシリスの傍に転移して、魔放送の魔力を探り届いている範囲を探す。

やがて魔放送と思われる魔力を見つけた。

間違いないだろう、その魔力はイシリスの近くの宇宙空間にまでは一応届いているようだ。

私はその場で魔放送に対応した小型の中継増幅魔動機を作った、これで月の拠点でも見る事が出来るはずだ。

そういえば、以前作った念話の中継塔はどうなっているだろう。気になった私は消えかけている記憶を頼りにかつて中継塔を作ったと思われる場所へと向かったが、そこには何も存在しなかった。

場所を間違えたか？それとも人類に回収されたのだろうか？魔法金属の塊だったからな。

どちらにしても既に必要無い物だからいいだろう、そう思いながら私は月の拠点へと転移した。

拠点に戻ると騒がしい音が聞こえる。リビングに行くとき受信魔動機から何かの競技の映像と音声が流れていた。

「お母様！映ったわよ！ほらほら！」

カミラがはしゃいで私をソファに連れてくる、ヒトハも私の隣に飛んでくる。

「綺麗に映っているな」

「そうね、見る物は選べないみたいだけど」

『カミラ様、現在放送されているのはこの放送だけのようです』

「あ、そうなのね。これから増えたりしないのかしら？」

『増える可能性は高いと思います』

そんな会話をしながらも魔放送を見続けるカミラとヒトハ。

その姿を横目に、私も初めての魔放送を楽しんだ。

魔力通信放送が我が家に来てから、受信魔動機はよく使われるよう

になった。

一人になった時はとりあえず作動させている。

皆で一緒に見る時も多く、今は三人で競技放送の後の情報放送を見ている。

《各国は上流階級や資産家などを対象とした人工の空に浮かぶ島を作る事を決定しました。また増え続ける人口の増加に対応するために地下都市を作る事も決定され、この双方の計画は近い内に着手される予定で……》

「空に島か」

「今なら可能なんじゃないかしら？ 大きな戦艦が浮いている位だし」

『生活用に設計する事で暮らす事は可能だと思います』

「上流階級や資産家向けと言っていたが、逆に不便では無いか？」

「んー、そういう人達は自分ではやらずに使用人に任せられるから、不便な事なんて気にしないんじゃないかしら？」

私の疑問にカミラが答える。

「確かにそうか。私も二人に色々やって貰っているし、彼らの事を言える立場では無かったな。もし不便な事や要望があれば言ってくれ、何とかしよう」

「今の所は無いわね」

カミラは紅茶を飲みながら言う。

『……私も特にはございません』

今の所は問題無いか？ 嫌々やらせたくは無いらしい、何かあれば考えるつもりだったのだが。

ある日、私は拠点で各作業をしているゴレムの元を訪れた。

収穫された物を箱から回収していない事に気が付いたからだ。

収穫物を入れる箱の容量は大きくても無限ではない。

回収しなければいずれ入らなくなる。時間の感覚がズレている私

達では忘れ、やがて溢れる未来が見える。

私は容量が自動で増える食糧庫を作り、そこに集めるようにしておく事を考えた。

家の隣に専用の食糧庫を建てる、この食糧庫は容量がギリギリになると周囲の魔素と魔力を使って勝手に容量が増えるようにしてある。

恐らくこれですつと平気だと思うが、思い出した時には見に来よう。

私は各ゴレムの設定を変更し、収穫物を定期的に箱から食糧庫に移すようにした。

搾りたてのモー乳も冷えていなかったので冷やしてから保存するように改良しておいた。

こうして私達の家の横にある食糧庫にゴレムが時々納品しに来るようになった。

食糧庫を作った後、カミラに自分のマジックボックスの中に食料がある程度入れておく事と、食材は出来るだけ食糧庫から使うようにする事を伝えておいた。

それから家から食糧庫に通路をつなげた、これでわざわざ外に出る必要も無い。

その後はカミラと二人で放送を見ている、最初は一つしかなかった放送はあつという間に数を増やしていた。

呼び名も最初は魔放送と呼んでいたが、やがて「魔」も省略され、私達の間では放送と言われるようになった。

色々な放送を見る事が出来るようになったが、今はその中の情報放送を見ている。

表の情報はこれを見るだけである程度は知る事が出来るようになった。

裏の情報は今もヒトハ頼りだが、最近は人類が情報の漏洩防止に力を入れているようで、ヒトハでも自由に情報を手に入れる事が難しくなつて来ている。

元々姿を消して入り込み情報を得ていたのだが、部屋に入るために魔道具の鍵が必要であったり、情報が魔道具に入っていて取り出すのに決まった手順が必要であったりと複雑になってきているらしい。

私はそういった物を解析する機能を付けようか考えている所だ。

『主様、精密検査をお願いします』

丁度いい、検査を終えたら改良しよう。

「この場でやってしまおう、ソファに降りて魔法などは使うなよ」

『かしこまりました』

そして私はヒトハの精密検査を始めた。以前から異常があった事など無いが、私の構成物で出来たコーティングをしてからは検査の必要は無いかも知れないと思い始めている。

「問題無いな。このまま新しい機能を付けようか」

私がそう言ってもすぐに返事がない。

「どうしたヒトハ？」

『主様、ご無礼を承知で申し上げます……本当に異常は無かったのでしょうか？』

「どういう事だ？お前自身が何かおかしいと感じる事が起きているのか？」

私が見落としたのだろうか？もう一度調べよう。

そう思っているとヒトハが言う。

『私は主様の道具です、命を受け行動する事が存在する理由のほずなのですが……』

私は彼女の言葉を黙って聞く事にした。

『しかし……近頃理解出来ない異常が起きるのを感じるので』
彼女はそう言って黙ってしまった。

「どんな異常か説明できるか？」

『申し訳ありません……言語にする事が不可能です』

ヒトハが成長しているのかも知れない。ただ私の言う事だけをして来た彼女だが、好き嫌いの感情が生まれ始めている可能性があるな。

こうして改めて目の前にすると子供の成長に近い気がする。

「ヒトハ、それは異常ではない。私がお前に望んでいた事だ」

『主様が私に……？』

「そうだ、今は理解出来ない異常に感じるだろう。だがその異常を消そうとしなくていい。いつかきつとお前の中ではつきりと分かる形になるだろう」

『……かしこまりました……』

私はその後ヒトハに解析機能を付けた、これからの彼女の成長が楽しみだ。

ヒトハが成長の兆しを見せてから数日後、私はヒトハを呼び出して

いた。

『ただいま参りました、主様』

「すぐに呼び戻してしまつてすまないな」

『主様の命ならば何も問題ありません』

今日、私はふとヒトハをコーティングしている私の構成物にも魔力と魔素の発生機能を付けた方が良いのではないかと思いついた。

今までヒトハは本体に僅かに混ざった構成物から魔力や魔素を得ていたが、量が増えればヒトハの魔法攻撃の威力と障壁の強度を上げても問題なくなる。

「……という訳で強化するつもりだが、問題無いか？」

『はい、問題ありません』

ヒトハに説明した後には了承を得て、強化を始める。

『主様、ご相談があるのですが』

「どうした？お前には世話になつていいるからな、大抵の事は聞くぞ？」

出来るだけの事はしてやろうと思う、彼女はそれだけの働きをしてくれている。

『私は手が欲しいのです』

「手か。構わないが、理由を聞いても良いか？」

ヒトハが言うには情報を得るために人の手で複雑な操作をする魔動機がある事、大きな魔力や魔法を感知する物があり、魔法だけでは問題がある事が増えているようだ。

「なるほどな、よく言つてくれた。早速用意しよう」

ヒトハには暫く待つていて貰い、手を作り始めた。

ヒトハの意思で動く腕と手を完成させた私は早速ヒトハに取り付けた。

『素晴らしいです、これで人類の道具を使いやすくなります』

外見は丸い球から細い棒が伸びて手が付いた状態だ、手はヒトハが

設定上女性なので女性らしい形にした。

腕の分だけ移動に制限がかかってしまうが、その辺りは問題があったら変更しよう。

「使ってみて何か問題があればすぐに言ってくれ」

『はい、ありがとうございます……主様』

「お母様、何か……ヒトハ？」

カミラにも見せようと部屋にいたカミラを呼び出した。

「手が無いと人類の道具を操作しにくいと言うので取り付けた」

「そう言う理由なら確かに手はあった方が良いと思うけど……今のヒトハに腕と手を付けたらこうなるわよね……」

「手を浮かせる事も考えたが、魔力や魔法に反応する防犯設備もあるようだからな」

手と腕を動かして確認しているヒトハを見ながらカミラと語り合う。

「いつそ私達みたいな体を作ってあげたら？」

「それは彼女が自分の望みを言えるようになってからだな」

「どうして？」

カミラが私の方を見て言う。

「外見は選ばせてやりたいだろうか？」

「なるほど、彼女の意見を聞くためのね」

「後から意見を聞いて変えても良いが、最初から姿が決まっているとそれに慣れてしまつて変える気にならないかもしれない」

そう話しながら少し自分の事を思い浮かべた、私の今の姿に慣れて姿を変えたりする事が無くなっている。

「いつになるかは分からないけれど体を作るのは決定してるのね？」

「彼女が望めばな」

「楽しみね、お料理教えようかしら」

『主様、私は情報収集へと行つてまいります』

「頼む」

微笑むカミラと話しているうちにヒトハは練習を終え、情報収集へ戻って行った。

「腕と手の数を増やせば効率が上がるな」

「変な癖がついて体を持った時にヒトハが困っても知らないわよ？」

私の言葉にカミラが苦笑いした。

ヒトハを改良して腕と手を取りつけた後は得られる情報が多少増えた。

現在は私とカミラ、頻繁に私の元へ戻って来るようになったヒトハと共に放送を見ていた。

《空島の建設が完了し運用されてから十年。その数はますます増えており、島一つを個人で所有するケースも……》

「これ……もっと人口が増えて空も埋まったらどうするのかしら？」

『地下を階層に分ける事になるのではないのでしょうか？』
カミラとヒトハが話し合っている。

《地下都市計画も順調で、年々その規模を広げています。価格が低く設定されているため地上に住居を持たない貧困層からの支持が特に高く……》

「住み分けが起きているな」

「貧困層は地下に押し込められ金持ちは空島を独占ね……」

『衛生的な問題は無いのでしょうか？』

私とカミラが話していると、ヒトハが疑問を口にした。

確かにその辺りは問題無いのだろうか？

「地下に人が住み始めて十年よね？人類的にはそれなりの時間だし……その辺りはある対策されているんじゃないかしら？」

「致命的な問題があれば今まで続いていないか。だが、これ以上人類が増えて食料は問題無いのだろうか」

「確か、人が世界を全て踏破して住処に変えた頃と比べて……今の人口は五倍位にはなっていたはずよね？」

カミラはヒトハに確認する。

『はい、その程度に増えております』

人類同士の大きな戦争は起きず、危険な野生の魔物は殆ど駆逐された。

魔道具や錬金薬、魔法によって生活は安定し、怪我や病気で死ぬ事

も少なくなり人類は数が減りにくくなった。

そして見る見るうちに人類の数は増え始め、住処を欲した人類は空と地下へその手を伸ばした。

「放送の言っている事を信じるのなら、空島はあまり住居の問題に貢献して居ないようだな」

「個人で島一つと言っていたものね」

『無駄が多すぎますね』

私達は時々こうやって得た人類の動きに対して色々と話し合ったり先の予想をしたりしている。

今私は家とは別に用意した研究室で実験をしている。

研究自体はどこでも出来るが、私は静かで一人になれる所が好きだ。

現在行っているのはヒトハの体の開発だ。

いつか彼女が体を望むような事があった時、与える事が出来る様に完成はさせておきたい。

もしヒトハが望まなければ、ゴレムに使用出来るので無駄にはならない。

カミラとヒトハにはゴレムの新しい体の研究と伝えてある、カミラはこれがヒトハの体の準備であると気が付いていたと思うが、特に何も言わなかった。

目指すのは人類に似せた外見。

違うか。人類が生まれるより先に私がいた、人類に関してだけならば順番的には彼らは私に似ている事になる。

つまり目指すのは私に似た姿という事だな。

取り敢えず外見は私やカミラに近くし、成長出来る強力な体を目標にしようと思う。

まずは素体を完成させ、外見は後から変更出来るようにする方が良いだろうか。

そんな事を考えながら研究を進めていると、カミラから念話で食事をしているかを聞かれた。

熱中すると私が気が付いた時には人類が居なくなっていそうなので、少しずつ進めて行こうと決めた。

私はカミラに今すぐ帰ると伝える。

「ただいま」

研究室から戻り、ソファに座る。

「お帰りなさいお母様……てつきりこもると思っていたけど、何かあったの？」

カミラがキッチンから出て来て聞いてくる。

「時間がかかりそうだから少しずつ進める事にした。熱中していても気が付いたら人類が消えていたりしたら困る」

「大丈夫よ？ 私が時々声をかけてあげる、それにヒトハからの報告もあるわよ？」

確かにヒトハからの報告があるな。カミラにも時々声をかけて貰えば問題は無いかも知れない。

「ではしばらく研究に集中させて貰おうか。何かあったり、私と過ごしたい時は声をかけてくれ」

「そうするわ、……あつ、そろそろ料理がいい感じだわ」

カミラは微笑んで答えた後、慌ててキッチンへと戻って行った。

それから私は研究室にこもり研究を続けた。

時々ヒトハからの報告を受けたり、カミラに食事をしようと誘われ食事をしたり、中々良い生活を送っていた。

今は久しぶりに放送を見ている。大体私が見るのは情報放送だ、様々などうでも良い情報が流れる中、土地開発の情報が流れる。

《各国は浮島の増加に伴い、島の製作と運営方法に関しての新しい法を作る事を決定しました。島同士の衝突や、上空にある島による影など、様々な問題が起こっており……》

「浮島って移動出来たのね」

『速度はあまりありませんが移動自体は可能です。そして今までは所有者や管理者の一存で自由に動かさせていました』

「事故が起こるのは当然だな」

《続きまして、地下都市の情報です。地下都市の規模は現在も広がり、居住者も増え続けており、大成功を収めています……》

「地下都市の情報は表に出していないのか」

私が言うのとヒトハが反応する。

『その様ですね』

「国も分かっているんでしょう?」

カミラがヒトハに問いかける。

『はい、国だけではなく国民も間違いなく気が付いています。ですが止めたり改善する気は無いようですね』

「国にとっても色々都合が良いのかしらね……自主的に地下に集まってくれるし」

ヒトハとカミラが話し合っているのを聞きながらヒトハの得た情報の事を考える。

放送では何の問題も無いように伝えているが、現在の地下都市は安く住めるために貧困層の住人が多く集まっている。

それだけなら良かったのだが、あの場所は身を隠しやすく閉鎖的で、違法に空間を作りやすい場所になっている。

そのせいか犯罪者やゴロツキ等が集まり始め犯罪組織などが出来ていて、治安が怪しくなっている。

「私は研究に戻る」

「行ってらっしゃい」

『行ってらっしゃいませ』

地下都市に住む多くの人間が巻き込まれそうだな、そう思いながら研究へと戻って行った。

ある時、ふとイシリスにある風呂として使っていた火山の事を思い出し、研究を止め様子を見に来た。

人類が住んでいるのか。

少なかつた陸地は広がって大きな島に変わり、人類の住処となっていた。

火山も活動を止めている、もう入れないか。

火山活動は止まっているようだ、火口も冷えて固まっている。それなりに気に入っていたのだが、他の事に気を取られてしばらく入って居なかつた。

刺激を与えれば活動を再開するかもしれないがやめておこう。

私は転移で月に移動し、研究に戻った。

私は惑星イシリスが見える月面で椅子に座り本を読んでいた。

既にヒトハの体の研究は一応の終わりを迎え、彼女が望めばすぐに体を与える事が出来るようになっていた。

研究が一旦終わった私は、そろそろ人類の町へ行ってみようと考えていた。

私がそう考えた理由はヒトハの報告だ、人類は一部の僅かな者を除き、私達の事を覚えていないらしい。

イシリスを離れて何年経ったかは知らないが、少なくとも人類の中から私達の事が消えて無くなる程度の時間は過ぎたのだろう。

そう思いながら本と椅子をしまった直後、少し離れた所に隕石が落ちて来た。

舞い散る月の地表、隕石の大きさは大した事はない様だ。

月で暮らしていればよくある事で、大きさに差はあるがよくこうして落ちてくる。

拠点は障壁があるので問題は無い、以前そこそこ大きな隕石が私の上落ちて来た時は邪魔なので消したが。

拠点へ帰った私はカミラとヒトハを呼び出し、人類の町へ行ってみる事を提案した。

「本当に問題無いの?」

『カミラ様、私達の事を知っていた者達は森人の一部を除き、全て死んでいますし、他の種族は私達の事をもう知らないので問題は無いと思います』

「うーん……」

カミラはあまり乗り気ではないようだ。

「やめておいた方が良いと思うか?」

「出来ればやめた方がいいんじゃない？あの時を知っている森人がまだ生きているというのが気になるのよね……」

「発見されて手を出されても大変なのは人類の方で、私達には何の被害も無いぞ？」

私がそう話すと、カミラは苦笑いをして言う。

「まあそうなんだけど……。うん、お母様が行きたいのなら行きましようか。お母様が言った通りもし見つかったとしても私達には何の問題も無いし」

「もし発見されたら今度は十分に時間を空ける事にしよう」
こうして私達は久しぶりに人類の町へと降りる事になった。

人類の町へ行く事が決定してから数日後、私達はリビングに集まっていた。

「どの国に行くの？」

『ユグラドは避けた方が良いかと』

ユグラドには当時を知っている森人がまだいるからな。

「流石にユグラドには行かない。アーテシア合衆国に行こうか」

「アーテシア合衆国ね……。きつとかなり変わっているのじゃないかね」

カミラはやや落ち着きがないように感じる、自分の国であった場所がどう変わっているか気になっているのだろうか。

『現在は国の発行した本人である事を確認するためのカードを持っている者が多く、無い者は国や町に入る際に面倒な手続きがあるようです。転移で直接町の裏路地などに移動する事をお勧めします』

「今はそんな物があるのか」

『身分証明カードと言いまして、対象の魔力を登録して確認するの
で、持っている者は肌身離さず持ち歩く者が多いようです』

「無いと自由に動けないなら作った方がいいかしら？何処で作るの？」

カミラがヒトハに尋ねる。

『国民保障ギルドで発行出来ませんが、魔力登録の他に名前や現在の住所などを登録しなければ発行されません』

「それじゃ無理ね……住所はイシリスに無いもの」

私はヒトハの言ったギルドという言葉で思い出す。

「ヒトハ、冒険者ギルドが今はどうなっているか分かるか？」

『先ほどお話しした国民保障ギルドが元冒険者ギルドです。身分証明カードはギルドカードの技術を応用して作られた物です』

「いつの間にか無くなっていたのか」

『はい、現在の人類に「冒険者」という者は存在しません』

「魔道飛行船の発明で人がいけない場所が無くなってしまったし……冒険なんてもう出来ないわよね」

「そうか、今は世界中に人類が住んでいる。手が入っていない所は殆ど無いか」

『更に言いますと、魔道兵器の開発と発展の影響で人類の個体の強さは大きく落ちています』

「そうか、人類はもつと力を持つ生物に進化すると思っていたのだが。」

「そう思い、アーティア合衆国に転移しようとする、カミラが止める。」

「お母様ちよつと待って？」

「どうした？」

「ヒトハ、私達がいた時とお金は変わってる？」

カミラがヒトハを見て言う。

『現在は当時の硬貨は使用されておりません、各国ごとに違う硬貨が使用されています』

「やっぱりね……換金は出来るのかしら？」

『可能です。かなり値が低い物もありますが、金や銀、特に魔法金属は現在も高値で取引されているようです』

「資源は今まで貯め込んで来た物が大量にある。」

「いざとなれば金や宝石、魔法金属を作る事も出来るので換金に困る」

事は無いだろう。

「他に換金出来そうな物はある？」

『後は珍しい素材や宝石などですね』

「宝石は分かるが、珍しい素材とは？」

私はヒトハに素材について聞く。

『人類が滅ぼした魔物や生物の牙や骨、皮などですね。素材として優良な物も多く存在し、取れる魔物が既に絶滅しているので数が限定されています。その為、かなりの高値がつけられています』

「供給源を潰してしまわなければそうはならなかった。人類はこうなる事を考えなかったのか？」

「考えていた者は居たんじやないかしら？止められなかっただけで」

私がこぼした疑問にカミラが反応する。

分かっていても止められなかったか、人類としてはよくある理由なのだろうか。

「さて、話し込んでしまったな。転移予定の裏路地には今誰もいない、そろそろ行こう。換金は宝石をいくつか売ればいいだろう」

「じゃあ出発ね」

『お供致します、主様』

二人と共に私はアーティア合衆国に所属する町の裏路地に転移した。

転移を終えると、そこは高い建物に挟まれた真つ暗な細い路地だった。

「……狭いし汚いわね」

『裏路地とはこのような物です、カミラ様』

二人も暗視は出来るので、路地の状態について話している。

私達がいる路地は壊れた机や椅子などが壁に積み重なっていて、通る事は出来るがお世辞にも綺麗とは言えない状態だ。

「表通りに出るぞ。夜ならそう目立たずに紛れ込めるだろう」
角をいくつか曲がると暗闇の路地の先に光が見える、表通りに着いたようだ。

「凄く明るいわね……この分だと昼でも変わらなかったんじゃないかしら……」

「そうだな。ここまで昼と変わらないとは思っていなかった」

夜だと言うのに魔法の光に照らされた町は昼の様に明るかった。

少しは目立たないかと思って夜にしたというのに、既に私とカミラの容姿に反応したのか周囲の人間がこちらを見ている。

「面倒な事にならない内に換金に行くぞ。ヒトハ、宝石の買い取りをしている店の場所は分かるな？」

『はい、ご案内します』

私達はヒトハについて行き、その場を立ち去った。

「……私達の知るアーティア帝国の姿は全く無いわね」

移動中カミラが呟く。

確かに帝国とはまったく違う。

高い建物と様々な店がぎっしりと並び、建物や店の前には映像の看板が商品などを宣伝し、周囲の人の喧騒と合わさり常に騒音の様騒がしい。

大きな通りには個人の乗り物と思われる魔動機が行き交い、空にも多くの飛行魔動機が飛び交っている。

至る所に浮かんでいる明かりが町全体を昼の様に照らし、人の数は夜であるにもかかわらず減っているようには見えない。

月から町が光って見えるのも納得だ、ずっと昼のような物だからな。

『こちらです』

私達が案内されたのは大通りにある清潔感のある白い建物だった、「ヴィオールド宝石店」という名前らしい。

「いらっしやいませ、本日はどのようなご用件で？」

「宝石をいくつか買い取って貰いたいのよ」

念の為、私ではなく一目で大人だと分かるカミラが対応する。

「かしこまりました、身分証明カードをお願いいたします」

「何処に入れたかしらね……ちよつと待ってね？」

カミラの咄嗟の演技中に私は二人に念話を繋ぐ。

『ヒトハ？聞いていないぞ？』

『……宝石の買取では身分証明の提示は必要なかったはずです』

「森人の祖母から宝石の売買に身分証明は必要ないと聞いていたのだけど……」

上手くカミラが探りを入れる。

「なるほど……お客様のおばあさまは森人でいらっしやいましたか。申し訳ありませんが必要無かったのはかなり昔の事でした……現在は盗品であった場合などのために身分証明カードの提示を求めているのです」

『ヒトハ？』

私はヒトハの名を呼ぶ。

『申し訳ございません……情報が古かったようです……』

こんな事は初めてだ、どこか不具合でも起きたか？

いや、まずはこの場を去ろう。

『カミラ、上手く誤魔化せるか？一度出よう』

『分かったわ』

「仕方ないわね……今度は持つてくるわ。急ぎでは無いしね」

「規則ですので、申し訳ございません」

店員が申し訳なさそうに言う。

「良いのよ。祖母にも今は違うと言っておくわ、ありがとう
そう言っって店の出口へ向かう。

「またのお越しをお待ちしております」

店員の声に見送られて店を出た。

店を出て人気の無い裏路地へ入る。

「二人とも、今日は中止だ。帰ってヒトハを見る」

『申し訳ございません、主様』

「今までこんな事無かったわよね？ 私も心配だし構わないわよ」
「帰るぞ」

私はヒトハを抱え、月の拠点へと転移した。

月へと戻り、私はヒトハを点検したのだが、問題が見つかる事は無かった。

なぜ宝石店での情報の間違いが起きたのか、原因を色々と考えた末に私が出した答えは「ヒトハが私達に近づいているから」だった。

「……私達に近づいた影響で間違えるようになった訳？」
リビングに居たカミラにその事を話す、ヒトハは研究室で待機させている。

「色々と考えたんだが、それ位しか理由が見つからなかった。魂、心、精神。言い方は色々があるが、それが変化し始めている証拠だと思おう」

「お母様はこれで良いと考えているのよね？」

「勿論だ。以前話したかもしれないが、成長し変化するように作ったのは私だ。彼女は外部からの刺激を受けて変化していく、どう変わるかは私にも分からない。私の元を離れるかもしれないし、立場による拘束を破り敵になるかもしれない」

「ヒトハが敵になるのは出来れば避けたいけれど……なったらどうするの？」

「私の邪魔にならなければ放置する。もし私や周囲に手を出して来たら相応の報いを受けて貰うし、命を狙うのであれば死んで貰う」

私が最優先、次が私の周囲だ。

私の元から去るだけなら構わないが、手を出して来るのなら話は別だ。

「そう……もしも私だったらどうする？」

カミラがそうなるとは思えないが。

「何も変わらないな」

「……そう。お母様らしいわ」

少し寂しそうに言うカミラ。

「ただし、その対応は本人の意思であった時の話だが」

カミラは私を見て何かに気が付いたような表情をした。

「例えば操られていたり、騙されていたりした場合は多少は考える」
「そうね……強制されていたりした場合は、本人ではなく強制した者に責任がありそうね」

「この手の物は色々面倒だ。私であれば相手が自分の意思で行っているかどうか、誰かに操られたり騙されたりしているのかが判別出来るが、大抵の場合真実が分からないまま終わる」

「そうでしょうね……」

「話がそれて来たな。取り敢えずこれからはヒトハが間違える事もあると思っていてくれ」

「そうするわ」

ヒトハには今回の事は気にせず、今まで通り指示外では好きに行動するように言った。

それから、また今度町へ行こうと二人に提案した。二人共行きたいと答えたのでまた行く事を約束した。

その後、ヒトハが地下都市ならば証明カードを提示しなくても換金出来る店がある事を調べてくれた。

次は最初に地下都市へ向かい、換金してから地上の都市へ行こう。

それから数日時間を空け、私達は地下都市へとやって来た。

「薄暗いし、空気は悪いし……何だか怪しい気配が多すぎるわ……」
カミラが多少嫌悪感を込めた声で言う、気持ちは分かる。

どこことなく不穏な気配がする都市だ、戦争時のような雰囲気と言え
ば近いだろうか。

「このどこが上手く行っているのかしら……お母様、換金して早く移動しましょう」

「そうだな。ヒトハ、案内を頼む」
『はい、こちらです』

ヒトハに案内されて着いたのは、路地の一角にある雑貨屋だった。普通の雑貨屋にしか見えないが、証明カードを必要としないという事はそれなりの理由があるのだろう。

『証明カードを使わずに換金できる店の中で、ここが一番問題が少ないと思います。換金ではなく「商品交換をしたい」と言ってみてください』
「偽装しているのかしら」

カミラが店を見て言う。

私達は店に入りカウンターに座っている中年の男に近づく、この男は私達が店の前に来た時から私達を警戒していた。周囲からも複数の視線を感じる、余計な事をしたら何かされるかもな。

「商品交換をお願い」

カミラが小声で男に声をかける。すると男は軽く反応を示し、私達について来るように言ってみて裏へと入って行く。

裏にあった地下への階段を降りて行くと、扉が複数ある普通の応接室があった。

案内した男は私達にしばらく待つように告げ、すぐに出て行った。言葉通りしばらく待っていると、複数ある扉の一つからそこそ若い男と中年の男がやって来た。

「見かけない奴だな、初めてか？」

若い男は私達の前に座ると突然そう言った。

「ええ、証明カードを使わずに換金出来ると聞いてね」
カミラが対応する、私では見た目でなめられそうだからな。

「そうか、俺はお前達の事を詳しく聞かない。お前達も聞くな……
さて、物を出せ」

そう言われ、カミラは換金するための宝石を五つ出す。

「宝石か……この場で鑑定する、いいな？」

「良いわ」

男の言葉にカミラが返すと中年の男が宝石を鑑定し始めた。

やがて鑑定していた男が若い男に耳打ちする。それだと私達には聞こえてしまうぞ？・本物である事と正規の買取値を言っていたな。

「よし、確認は取れた……値はこれだ」

かなり安い値をつけられている、十分の一程だ。

「いくら何でも安すぎないかしら？」

「ここじゃこれが適正だ」

カミラと男が話しているうちにヒトハに聞く。

『ヒトハ、どう思う？』

『通常ですと三倍は出していました、甘く見られているのだと思います』

『そうか、では力で教えてやろう。カミラ、制圧して適正な値にしてくれ』

『分かったわ』

そう言うときカミラは魔法を使う。

『どういうつもりだ……？』

若い男を拘束し鑑定士男を気絶させると若い男が言った。

「なめられてるようだから、分からせてあげようかと思ってね」

「馬鹿な事をしたな。魔法や魔力に反応する部屋の中で使うとは、今頃周りには俺の仲間が集まってるぜ？」

男の言う通り部屋の外に人が集まって来ていたが、カミラに既に制圧され全員気絶している。

「なら来るのを待ちましょうか」

男は黙ったまま表情を変えない。

しばらく待ったが部屋には誰も来ない、カミラが周囲の者を気絶させてしまったから当然だ。

「来ないわねえ……？」

「……何をしやがった……？」

男がカミラに問いかける。こう言った事をしているせいで度胸があるのか、慌てる様子はない。

「全員気絶させただけ、周囲の仲間は生きているから安心なさい」

「はあ？ここからそんな事出来る訳ねえだろうが……」

彼のその言葉を聞いて人類は本当にな弱くなったのだと感じた。

「実際来ないじゃない。で？さっきの三倍出してくれたら大人しく帰るけど……どうする？」

そうカミラが言うと言は黙って考えた後、払うと言った。

「これで良いな？」

拘束を解かれた若い男はマジックボックスから金を取り出して私達に渡した、こいつは魔法使いだったのか。

「確かに受け取ったわ。私達は帰るから仲間達をみてあげなさい」

私達が立ち上がり入って来た扉に集まった時、攻撃が障壁に遮られた。

不意打ちか、悪くない。

恐らくカミラが殺してしまうだろうから障壁を張る。

カミラは背を向けたままだが男の周囲が炎に包まれた。

「くっ……!？」

男の声が炎にかき消され男が装備していた個人障壁発生装置、防珠だったか？

その障壁は無いも同然に消し飛び、私の障壁に阻まれる。

そして炎が消えた後にはへたり込んで居る無事な男の姿があった。

「お母様？」

あの威力を防げるのは私かヒトハだけだ、カミラは私を見て声を上げる。

「防いですまなかった、本来ならば間違いなく殺す所だが、殺すより

奴隷にしておこうと思つてな」

そう言うとかミラは納得したような表情になる。

「情報源ね？」

「情報と換金のためだな。一か所使える場所を用意しておくのも良いだろう？」

私は男に近づいていく。男は法具を向けるが引き金を引けないようだ、私が止めているからな。

私は男がこちらに向けている法具に目を向けて、ある事に気が付く。

「ヒトハ、こいつの持っている法具、軍用じゃないか？この刻印に見覚えがあるぞ」

『そうですね、個人携帯兵器としては多少古い型ですが間違いありません』

正式に払い下げられたものか、もしくは横流し品か？

まあいい、取り敢えず奴隷にしまおう。

どうしてこうなった……俺はそればかり考えている。

彼女達はもう帰つたが、最初はとんでもない美人が俺の支配しているエリアに入ったと言う報告だった。

そして俺の換金所の一つに來た事で気になっていた俺は……会いに行つちまつた。

確かに二人共とんでもない美人だった。

特に黒髪の子供の方は別格の美しさだった……余計な欲を出した俺は安く買い叩けば困つた彼女達が俺にすぎると思い、通常よりもかなり安い値を提示した。

……それが失敗だった。

金髪の女の方が鑑定士を気絶させ俺を拘束した、馬鹿な事をしやがつたと思つたが……。

金髪は周囲の配下を気絶させたと言つた。何を馬鹿なと思つたが、

誰一人部屋に来なかった。

俺は三倍払えと言う彼女の言葉を受け入れ金を払い、出て行く所を撃つたのだが……彼女達には全く通じなかった。

軍の横流し品で、多少古いが威力は間違いないはずだった。すると突然、俺は炎に包まれた。

何が起きたのか分からなかったが、静かな部屋に響く彼女達の会話が聞こえる……どうやら金髪の女より黒髪の子供の方が立場が上のようにだった。

……そして俺は奴隷にされた。

黒髪の子供から、ヒトハという腕と手が生えた、頭に直接話しかけてくる球に情報を提供するように命令され、他にも色々と縛られ要求される事になった。

俺も魔法使いの端くれだ、この隷属魔法は駄目だ……解除など出来る訳がない。

大きく息を吸い、一度止めると長く息を吐き立ち上がる。

「心を決めろキャリア・ファンブル。組織とあいつらとの間で上手く立ち回るしかない。取り敢えず、全員気絶しているなら俺があいつらと話をつけた事にするか……」

俺は心を決めてこれからの事を考えながら部下を起こしに行った。

「換金は普通にするのよね？」

「する。情報源として使うなら普段通りにさせておくのが一番だ、立場を使って何か変わった事をしてしまうと、疑われ情報が入らなくなる可能性がある。これからもただの客の一人として普通に交換する」

地上の町を歩きながらあの場所の使い方話す、あの男には私達に對して普通に対応するように命令してある。

「地下都市は酷かったわね。都市全体がああだったら、ただの巨大な犯罪都市だわ」

『実際、ゴロツキや犯罪に手を染める者が集まり、国をまたぐ大小さまざまな犯罪組織が集まる巨大な地下犯罪都市となっているようです。しかし表通りなどの一部の地域は外部からの客用に整っていて、比較的治安も良くなっています』

「……前に話していたけれど本当に地下に犯罪者を押し込んだのね」

『押し込んだと言うよりも予想外に集まってしまったので蓋をしたのだと思います』

カミラは呆れているようだが、私はそれなりにいい方法だと思う。集めておいた方が監視しやすいし処分も楽だ。

とは言っても人類の善悪など私にはどうでもいい事だ。

私達に都合がいいのなら相手が何をしていようと構わない。

「ようやく現在使われている通貨を手に入れたし、街を見て回ろう」
こうして私達は久しぶりの町を楽しみ始める。

しばらく三人で楽しんだ後、私達は個別行動をする事になった。

カミラとヒトハは二人でどこかに行ったので、私は一人で本屋に

やって来た。

長い時を過ごす私には、本はかなり良い物だ。一度読んだ物でも時間を置けばまた楽しむ事が出来る。

私の記憶が完璧では無い事が良い方に働くのは、今の所一度楽しんだ物をまた楽しめる事くらいだな。

こうして見ると、数は多くあるが以前より大分値段が高くなっている気がする。

何気なく店内を回っていると「四大技術の始祖達」という歴史の本を見つけた。

封がされているため開けて読む訳にはいかないが、これは読んでみたい。

私の教え子達の事が載っている本だからな。

取り敢えずこれを買ってから他の本を探そうと考え、私は本をカウンターに持って行った。

「お嬢さん、今時紙の本を買うとは珍しいね」

カウンターにいた老婆が私かけてくる、どういう事だ？

「何で珍しいんだ？」

私がそう言うと彼女は珍しいものを見るような目をして言う。

「魔道書庫を知らない訳じゃないだろう？」

魔道書庫、知らないな。

「そういった物と関わらないまま生きて来たからな。良ければ教えて貰えないだろうか？」

私の言葉に彼女は驚いたようだが、しっかりと教えてくれた。

魔道書庫とは本のデータの入ったカードを差して読む事が出来る魔動機で、現在は殆どの人はこれを使って読んでいる。

その為、場所を取る上に保存が難しい紙の本を買うのは、よほどの本好きか学者くらいらしい。

なるほど、簡単に持ち歩いて場所を取らない魔道書庫が一番人気という事か。

「ありがとう、見に行ってみる。まずはこの本を買う、いくらだ？」

「買うのかい？」

「私は本を買いに来たんだ」

「魔道書庫にも同じ物はあるよ?」

「そう言う事か。」

「私は本が好きなんだ、魔道書庫と本で同じ物があるなら本を選ぶ」
保存方法や保管場所など私には問題にならないからな。」

「そうかい……ありがとうね」

「そう言うて彼女は本を受け取り封を外す、私は料金を払って本を受け取った。」

「良ければまた買っておくれ」

「また来る」

その後カウンターを離れ、私は再び本を見て回った。

そして言った通りに大量の本を持ってカウンターに再び戻って来た私を見て、老婆は驚いていた。

本は買ったし魔道書庫を見に行ってみよう。私は老婆に教えて貰った魔道書庫店へと向かった。

『カミラ様、どこへ行かれるのですか?』

「貴女の装飾品を見に行くわ」

隣を浮遊するヒトハの問いに答えながら街中を進む。

事前にお母様にはヒトハの体にリボンのような装飾品を付けていか聞いておいた。お母様は「ヒトハが良いと言えば構わない」と答えた。

『私の……ですか?』

「そうよ。でも貴女が嫌ならやめるわ、どうする?」

『主様は何と?』

「貴女に任せるそうよ」

「そう言うて彼女は黙ってしまった、出来れば自分で決めて欲しいけれど……。」

『どちらでも構わないのであれば……装飾品を付けてみようと思

ます』

しばらくの沈黙の後ヒトハは答えた。

私達は店内に入る。明るく派手な店内は女性客が殆どで、付き添いで来ている男性も少しいた。

「何が合うかしらね……」

『付ける事は決めましたが何をどうすればいいのか分かりません』

「そう、まずは金属製の物とそれ以外があるけれど……金属はやめた方がいいかしら？」

『……そうですね、物によっては活動に悪影響があるかも知れません』

「じゃあそれ以外ね」

私は非金属製のアクセサリの方へ移動する、布や手ごろな値段の宝石、骨から削りだした商品などが並んでいる。

「この辺りね……ヒトハ、好きな物を選んでみて」

私がそう言うのと隣でアクセサリを見ていた女性が私を不思議そうに見ている、それを見て私は気が付いた。

ヒトハはゴレムだと思われると思う、けれど普通に会話できるゴレムなど人類は知らないし、彼女の声は他の客には聞こえ無いようにしている。

……つまり私は他の者から見ると独り言を言いながらうろつく変な女と言う事になる。

『ヒトハ、念話で話すわよ』

『……？はい、何の問題もありません』

これで変な目で見られる事は無いわよね？

彼女は商品の周囲を他の客の迷惑にならない様にウロウロしていたけれど、やがて一つの装飾品を手に取り持って来た。

『これなどどうでしょうか？』

ヒトハが持って来たのは……細い紐に、何かの骨から削り出したペ

ンダントトップが付いたペンダントね。

『この様な物をルーテシア様が付けていたのを覚えております』

うーん……「ルーテシアが付けていた」か。

『本当にこれが良いの？ルーテシアが似た物を付けていたから気になっただけでは無いの？』

『分かりません……』

私はそう呟くヒトハを軽く撫でる。

『そうね、貴女的に言うなら……目にした時に自分の中に一番大きな異常が起きる物を選んでみて？』

『……探してみます』

そう答えて再び探しに行くヒトハ、彼女の言う異常が感情の大きな動きなら、嫌いな物かも知れないのよね……好きと嫌いの違いが分かるかしら……？

『ヒトハ、異常が起きたらそれとはまた違う異常を起こす物も探してみて？』

『……違う異常ですか？……探してみます』

それから時間をかけてヒトハは二つの品を持って来た。

一つは明るい水色の、手首につける布製のアクセサリ。

もう一つは同じく手首につける様々な色が混じった……私的には下品なデザインの布製のアクセサリね。

……下品と言ってしまったけれど、ヒトハにも好みがあるわよね？

……あれが好きなのもかもしれないし、感想を言うのはやめておきましょう。

『この二つです。一方は危険を感じますが、もう一方は安全です』
安全と危険……今の彼女にはその様に判断されているのね。

『それで……どちらが危険で、どちらが安全なのかしら？』

『はい、この様々な色が混じった物が危険です……そして、この水色の物が安全です』

私はそれを聞いてほっとした、ヒトハの好みに文句を言う気は無かったけれど……私の感覚と近くて良かったわ。

『じゃあ安全な方を買いますよ』

『はい、ありがとうございます』

私はヒトハの選んだアクセサリを買い、ヒトハの左の手首に付けた。

店を出て次の目的地である服屋に向かっていく途中、ヒトハは自分の手首に着いたアクセサリを手を持ち上げて何度も見ていた。

お母様に痛まない様にならない様に保護してもらおうかしら……

そう思いながらヒトハと共に服屋へと向かう。

私は本屋を出た後、魔道書庫店へと向かい魔道書庫魔動機本体と本のカードを買った。

それなりに金を使ってしまったが、足りなくなったらまた換金すればいい。

『お母様ー？そろそろ集まらない？』

これからどうしようかと思っていた所に、カミラから念話が来る。町の時刻表示を確認するとかなり時間が過ぎていた。

『分かった、お前達の居る広場に向かう』

『待ってるわね』

私はすぐに二人の居場所を確認し、広場へと歩き出した。

「こつちこつち」

広場へ向かうとカミラが椅子に座ったまま手を振ってくる。

その横にはヒトハが浮かんでいる。

周囲の者がカミラを見ているな、私も似たような状態だが。

「ヒトハは装飾品を付ける事を選んだんだな」

私はカミラの隣に座りヒトハを見る、その手首には装飾が付けられていた。

『はい、これが一番異常で安全でした』

『どういう事だ？私はカミラを見る。』

『一番異常を感じる物を一つと、それとはまた違う異常を感じる物を選ばせたのよ。好きな物と嫌いな物を選ばせたかったのだけ……ヒトハはそれを安全な異常と危険な異常と判断したのよ』

カミラは私に説明した。なるほど、好きな物と嫌いな物の事か。

『そういう事か』

『ええ』

少しづつだがヒトハが変わっている事を感じる。

「お母様、このアクセサリ保護して貰えないかしら？」

「お前も出来るだろう？」

「お母様の方が安心だから」

保護なら大して変わらなと思うが、私はそう思いながらヒトハのアクセサリを保護してやった。

「お前達はアクセサリを見に行っただけなのか？」

「服も見に行っただわ、お母様もあるわよ」

「私のも買ったのか」

「私達の服選びは楽でいいわ、サイズが変わらないものね」

カミラはそう言って笑っている、確かにそうだが私はあまり服に興味が無い。

「お母様は何してたの？」

「私は本を買い集めていた。後は魔道書庫という物を教えて貰って、それも買って来た」

「本関係だけじゃない……それで、魔道書庫って何？」

私は魔道書庫についてカミラに教えた。

「良いわねそれ。私も買おうかしら……」

カミラは気になったようでそんな事を言った。

「買いに行くか？本体があればカードは貸し借りが出来るらしいぞ」

「買いに行くわ」

カミラも魔道書庫魔動機を購入し、それから私達は食事を取るために客が多く入っている店に入ってみる事にした。

「中々だな、この値段なら十分だろう」

人気のありそうな混んでいる店に入ったおかげか、値段の割にいい味をしている。

私は肉の盛り合わせセットとモー乳、カミラは生魚の切り身と黒茶を頼んだ。

お互いに少し分け合って食べたが、どちらもそれなりの味だった。

「まあ悪くは無いわね」

「たまには外食も良いが、カミラやルーテシア、ミナの料理より美味かった事は無いな」

「当然よ」

私がそう言うのとカミラは嬉しそうに笑う。

彼女達の腕はもちろんだが、揃えている食材が人類の物とは違うのも美味しい理由の一つだろう。

「お前が調理を習い始めた頃の料理は色々面白かったぞ」

「それは言わないで……分かってるわよ」

カミラはルーテシアと共に料理をして腕を上げた。

当然最初から上手かった訳では無く、初期の不思議な料理も私は食べている。

あれはルーテシアに味見させなくて良かったと今でも思っている。

「私だから何とも無かったが、ルーテシアが味見していたらどうなっていたか」

「……うん、今ではお母様で良かったと私も思っているわ」

「ふふ、私の判断に感謝しろよ？」

私はカミラに微笑み、食事を続けた。

その後三人で語り合いながら食事を済ませ、久しぶりの人類の都市を楽しんだ私達は満足して月へと帰った。

人類の都市を楽しんだ日からしばらくして、ヒトハが地下都市の情報を得て来た。

地下都市は今では完全に犯罪組織の温床になりつつあり、地上からの違法な侵入経路も数えきれない程あるらしい。

それでも地下都市が潰されないのは、各国と程度の差はあるが繋がっていて、国としても完全に無くなると困るからという理由のようだ。

そうでなくてもあれだけの人間が住んでしまっている以上、国としても簡単には潰せないだろうな。

地下都市の中には違法錬金薬である幸福薬を作っている組織もあるようだ、幹部達は地下都市では無く浮島にいる様だが。

貧民層はかなりひどい生活をしていて、親を亡くした孤児達が多くいるようだ。

そういった子供達は大抵地下都市の犯罪組織に良い様に使われたり、憂さ晴らしに使われて死んでいくらしい。

ヒトハは最近私が頼んだ事以外の情報も多く集めるようになり始めた。

私が頼んだ情報を手に入れた後は好きにして構わないと言った事が影響し始めているのかも知れない。

最近では犯罪組織の情報や孤児、貧民層などの情報を持ってくるようになった。

犯罪組織はともかく、何故孤児や貧民層の情報を持って来る様になったのだろうか。

どんな理由にしても彼女が何かに興味を持つ事は悪い事では無い、このまま好きにさせておこうと思う。

私は紙の本ではなく、魔道書庫で魔道書を読んでいた。言葉だけ聞くと魔法の指南書を読んでいるように聞こえるが関係は無い。

紙の本に比べると魔道書は遥かに多くの種類がある、現在の人類が読書に魔道書庫を一番利用している事が良く分かるな。

操作自体も単純で使いやすく、本体とカードさえあればどこに居ても好きな本を読めるというのは確かに便利だ。

カミラはこの魔道書庫を買ってから以前よりも少しだけ多く本を読むようになった。

今も月面で私の隣に座り、魔道本を読んでいる。

カミラは宇宙空間でも生身で平気だった。

ただ、宇宙は魔力がかなり少なく強力な魔法の発動が難しいため、ドレスからの供給に頼る事になりそうだ。

取り敢えず彼女も宇宙で問題無く活動出来る事が分かったのは嬉しい事だ。

ドレスの保護機能はあまり必要無くなったが、いざと言う時の保険にはなる。

『お母様』

私がそう思いながらイシリスを見上げていると、隣にいるカミラもイシリスを見上げながら言う。

『何だ？』

『イシリスってここから見ると綺麗ね』

『そうだな』

私は素直に答える。私達もこの光景を美しいと感じる感覚はある。

『この宇宙には他にもこんな綺麗な、人類のような生物がいる惑星が沢山あるのよね？』

『他にも知的生命体が居る世界はある。世界によっては在り方や法則が違う可能性もあると思うが、同じように美しい惑星はきつとあるだろう』

同じ宇宙かどうかは分からないが。

『お母様……星にも寿命ってあると思う？』

私の方を向き彼女が疑問を口にする。惑星に寿命か、考えた事もなかったな。

『寿命か、考えた事も無かった。例えばあのイシリスの場合、私は生物では無く石や金属のような物の塊としか思えない』

私はイシリスを見たまま話す、彼女もずっとイシリスを見ている。

『そうね、イシリスが今まで見てきた生物と同じだとはとても思えないわ』

『私は石や金属に寿命があるとは思えない。時間によって劣化したリ変質する事を死と呼ぶのなら、寿命があると言えるのかもしれない』

『それは何か違う気がするわよね』

『私がそう思い込んでいるだけで本当は有るのかもしれないし、やはり無いのかも知れない。もしかしたら有ったり無かったりするかもしれない』

『何を言っても今は本当の事は分からないのね……』

『そういう事だ。星の寿命と言う考えは面白かったが、私は確かめたいと思うほど興味が湧かないな』

『何となく言っただけだから気にしないで、私もそこまで興味があ
る訳じゃないわ』

カミラがどうしても知りたいのなら多少調べてもよかったが、その必要は無いか。

『お母様、そろそろ食事にしましょうか。今日は久しぶりに血も頂くわ』

『そうだな、戻ろう。血液も家畜の物で良いなら継続的に手に入るからな、好きな時に飲むといい』

『この拠点で育てられた家畜の血は悪くないわよ？育ちが良いからかしら？』

『それは関係あるかもな』

そんな会話をして私達は拠点へと転移した。

宇宙空間を飛び回り魔法を撃ち合う私とカミラ、イシリスからは大分離れた宇宙で私達は戦闘訓練をしている。

地上にいた時と違い広大な空間がある宇宙では、カミラは周囲を気にする事無く力を出して戦う事が出来る。

現在私とカミラの距離はかなり空いていて目視は難しいが、お互いを知覚しながら戦闘をしている。

『周囲を気にしないでいいのは楽しいわね！お母様！』

カミラから普段ではあまり聞かない声色の念話が届く。

暴れる事が出来て楽しそうだな。普段は大人しく理性的な彼女だが、幼い頃は戦闘が一番好きだった。

今も戦闘が好きなのは変わっていないようだ。

彼女が私を絶対的な強者だと思っている事も楽しそうな理由の一つだろう。

自分が全力で攻撃しても問題無いから気が楽なんだろうな。

『ふふ……行くわよお母様！』

攻撃の宣言までしている、それは本来無駄な事だと教えただろう。カミラは今、生身のままドレスからの魔力供給を受けて戦っている。

彼女はその魔力で魔力球を大量に作り出した、中々の数だ。

今の力を抑えていないカミラだと地上で使った場合、一つで惑星を三分の一程度はえぐり取れる威力にはなるか？

私は前面に範囲攻撃を行う。こちらに向かっていたカミラの魔力球は巻き込まれ次々と爆発を起こし、宇宙空間に数多の輝きを生んだ。

もしイシリスに当たれば危険な威力だが、宇宙ではこの程度の爆発は小さい物だろう。

『誘爆を起こすようではまだまだだ。外部からの干渉に影響されないように、好きな時に好きな魔力球を起爆出来るようにした方が良い

かも知れないな。さて、今日はここまでだ』
『うん』

少し幼い頃の口調になっているカミラと共に月の拠点に帰った。

「力を抑えずに使うのはやっぱり気持ちいいわね」

拠点に帰り、湯舟に浸かりながらカミラが呟く。

「宇宙での全力戦闘に慣れすぎて地上で力加減を間違えるなよ？」

「その辺りは大丈夫よ。ただ……たまには全力で戦わないとなまりそうじゃない？」

「確かにそうかも知れないな、私は全力を出した事は無いが」

「宇宙なら問題無いでしょ？やってみたら？」

確かにそのはずだ、だが嫌な予感がする。

「何故かやめた方が良い気がしている。ただの勘だが、取り返しのつかない事になるかも知れない」

「……お母様なら何があってもおかしくないわよね」

カミラは今までの私の事を知っているため慎重になったのか、考えをすぐに変えた。

「例えば、ただ攻撃をするにしても、加減を間違えれば敵味方問わず広範囲の全てを消滅させてしまうかもしれない。そしてその力を集中させた場合、何が起きるか予想出来無い」

例えば宇宙に穴が開いてしまったり、どことも知れぬ場所とつながってしまったり。

最悪この宇宙が消える事になる可能性もあるかも知れない。

ただ何となく不可能では無いような、自身の限界が無い様な気がしている。

「私は全力は出さず、相手に合わせる位が良いと思っている」

「……うん、お母様がそう感じているならその方が良いと思うわ」

「私が全力を出した時、どうなるかは分からない。だからと言って絶対に戦力を出さない訳では無い。私は負ける位なら何が起きよう

と全力を出す」

「まあ……お母様が本気を出す様な相手がいたら、私はきつと殺されてるだろうし……後はお母様に任せるわよ」

「手が届く範囲は出来るだけ死なせない様にするつもりだ」

私は隣にいるカミラの頭を撫でる。

「ん……私も諦めたりはしないから」

その後、夕食をどうするか話し合いながら風呂を楽しんだ。

ある日、私は地下都市へ行く事を告げ、一緒に来るか聞いた。

「……地下都市へ行くの？」

『どこであろうとお供いたします、主様』

ヒトハは私の誘いを断らなかつたが、カミラはあまり乗り気では無いように見える。

そういえば換金に行った初めての訪問の時点で嫌そうにしていたような気がする。

「換金に行っただけでしたっけ回り回っていなかったからな、理由はその程度だ」

「私はやめておくわ。あそこはあまり好きじゃないし……ごめんなさいお母様」

カミラは眉を下げて謝った。

「謝る必要は無い、ただ誘っただけだ。本当に連れて行く必要があつたら有無を言わさず連れて行く」

「ふふ……そうね。お母様だから心配はいらないとは思うけど……気を付けてね」

カミラは表情を微笑みに変える。

私がおんなに強いかわかっていても、カミラとヒトハを始め、かつて共に過ごした親しい者達はいつもこうして心配し、声をかけて来る。

そして私はそれを悪くないと感じている。

「気を付ける。ありがとう」

私はカミラに言葉を返し、ヒトハと共に地下都市の換金店付近へと転移した。

無人の路地裏に転移した私は換金店に移動し、店に居る男に換金を頼む。

以前ここで一人男を奴隷化したのが、そこそこの立場の男だったらしく私の事をこの上客として部下に伝えている。

実際かなりの量の換金をしているので嘘では無いと思う。

そういえば名前を聞いていないな。

私は用意された部屋のソファに座りヒトハに念話する。

『ヒトハ、私がここで奴隷化した男の名前は何と言うんだ？』

『キャリア・ファンブルです主様。この辺りの換金店の元締めでもあります』

『微妙な地位だな』

やがて私が奴隷化したキャリア・ファンブルが部屋へとやって来た。

態度は変えるなど言っているため初対面の時と対応はほぼ変わらない、上客と言う設定だから多少扱いが良いくらいだ。

特に問題が起こる事も無く換金は終わった。

彼のおかげで気にする事無く大量に換金出来る、店としても損は無いから問題は無いだろう。

「キャリアの所に上客か……」

地下都市の中でも深部に当たる場所、そこに秘密裏に作られている部屋の一室で男が呟く。

「そんな客はたまにいるだろうか？なんで今更そんな事気にしてんだ？」

同じ部屋にいるもう一人の男が声をかける。

「その客が換金した総額だ、見てみる」

声をかけられた男は資料らしき紙をもう一人に渡す、それを読んだ男は驚きの声を上げる。

「何だこりや!? 短期間で何だよこの額は……」

「分かるだろう? 今まで短期間にこれだけの額を換金した者はいない」

「何もんだ?」

「分からない。相手は最初は大人と子供の女二人と護衛らしきゴレム一体で来たらしいが……情報が無い」

「物は本物か?」

「それは俺も確認した。どの宝石も本物で最上級品だ……間違い無い」

「なら良いんじゃないか? 誰であっても物が本物で、何も仕込まれて無いなら問題無いだろう?」

「そうではあるが……多少は気にしておこう」

地上に比べると全体的に薄暗い町並みの中を歩く。

地下と言う事もあり地上程高い建物は無い、その代わり地下に深い建物はあるかもしれない。

ヒトハによるとこの大通りは外部からの客向けで比較的安全だと言う。

ただし、裏へと一步踏み込めば治安は極端に悪くなり、軽い気持ちで入り込んで行方不明になる者がそれなりに居るらしい。

思ったよりも表通りには外部から人が来ているんだな。そう考えながら表通りから外れようとした時、声をかけられた。

「おいお前、そっちは駄目だ」

私が振り返るとボロボロの汚れた服を着た茶髪の少年がいた、見た目は私より少し上に見える。

『この辺りをねぐらにしている孤児だと思われま
す』
なるほど、危険だと教えてくれたのか。

「こっちは駄目なのか？」

「外の人間が気軽に裏へ入ると出て来られない、表通りだけにす
か帰った方が良い」

私の問いに答える少年、この辺りに住んでいるならこの事聞いて
みるか。

「この辺りに詳しいなら色々教えてくれると嬉しいが、どうだ？」

「タダじゃ無理だ。情報料を出すなら案内する」

「しっかりしているな」

『こうしなければ生きていけないのだと思われま
す』

親切でそんな事をしている余裕は無いという事か。

「どうするんだ？俺も暇じゃないんだ、必要ないならもう行くから
な」

「分かった、これで案内を頼む」

「つ!？」

私は彼に小金貨を一枚差し出す、すると彼は息を呑み私を見る。

「お前本気か？」

「何がだ？」

「これ……小金貨だぞ？」

「この程度大した額ではない」

「もう返さないからな……ついて来な」

彼は小金貨を受け取ると懐に入れて歩いていく。

その後、彼に大通りの店の情報や危険な場所、やってはいけない事
などを聞きながら大通りを歩き回った。

大半はヒトハから聞いていた事だが、細かな情報は初耳だった。

彼に頼んだのは正解だったな。

「……あんた、名前は？」

それなりに時間をかけ案内されている途中に彼が言う。

「私はクレリア・アーティアと言う」

そう言うのと彼は足を止め振り返り、少し驚いたような表情で言う。

「あんた……アーティア合衆国の偉い奴の娘か？」

アーティア姓だからか？

「無関係だよ。ただ同じなだけだ」

「そうか……」

「お前の名は？」

「……ケイ・ビックス」

「そうか。案内を頼むぞ、ケイ」

「……おう」

「これで大体の大通りの案内は終わりだ。普段はここまでしないけど貰った額が額だから……」

時間をかけて大通りを案内された後に彼は言った、いつも通りでもよかったが彼なりの感謝の印なのだろう。

予想以上に彼はしっかりと案内をしてくれたし、私におかしな感情を向ける事も無かった。

「ありがとう。私はこれからゆっくり大通りを見て回る事にするよ」

「ああ、じゃあな」

こうして私はケイと別れ、彼のお勧めの店から見て行く事にした。

表通りのめぼしい店を見て回り、私は裏通りを見て回ろうと思い始めた。

ケイには止められたが私は元々裏通りも見て回るつもりだったからな。

私は表通りを外れ裏通りへと入る。

それ程表通りから離れていないにもかかわらず突然暗さは増し、建物もボロボロ、店は合法なのか違法なのか分からず、どこを見ても怪しししかない。

外部客用の表通りと違い過ぎるな。

道を行く人間や建物の中から私に対してまわりつく様な視線と感覚を多く感じる。

『裏通りに入り込んだ外の人間がどうなったのか大体想像出来ませぬね』

「これはそれなりに実力が無ければどうにもならないな」

私に目を向けている者達は私をどうしてやろうかと考えているようだ、中には携帯兵器で武装している者もいる。

すぐに来ないのは私の傍にいるヒトハを警戒しているのかも知れない。

「お兄ちゃん!?……やめて!」

「ざっさきと出しやがれ!」

「ぐっ……!今日は稼ぎなんかなかった!」

私の耳が更に細い路地からの声を拾う。その中に聞き覚えのある声が混じっている。

私はその声ができる路地へと入っていった。

最悪だ……こんな時にこいつらに見つかるなんて……。

「今日の稼ぎを出せってんだよ……出さないとどうなるか分かってるよな?」

「お兄ちゃん!」

「来るな!!」

大声を出し妹を離れさせる。

殴られた顔が痛むが今日のだけは駄目だ。

クレリア……恐ろしく綺麗で大人びた話し方をする少女がくれた小金貨……これがあればかなりのあいだ妹と皆を食わせていける。

今日は稼げなかったと納得させる必要がある。

「何度も言ってるだろ!今日は稼げなかった!」

そう言うのと三人の男達は笑いながら言う。

「へえ……?俺達はお前が大通りで女のガキを案内しているのを見たがなあ?とんでもねえ美人だったな。あんな女が裏に入つて来ねえかなあ……」

俺は俯き齒を食いしぼる。

見られていた……こいつら最初から見張りでも置いてたのか?

痛めつけられ、動く事が出来ない俺の懐を奴らの一人が漁る。

「うお!?マジか!?小金貨だぜ!!」

「すげえ!!あの女何者だよ!」

「おっしゃ!これで女でも抱きに行こうぜ!」

薄れる始める意識の中、そう話す男達の声が聞こえる。

「お兄ちゃん!」

妹が俺の傍へと駆け寄る音がする、くそ……俺は……。

「貴様ら何をしている」

意識を失う直前、あの少女の声が聞こえた気がした。

私が角を曲がった時見たのは、ボロボロになり地面に倒れているケイと、ケイに駆け寄る少女、そして離れて行く三人の男だった。

私の目に男の一人が持っている小金貨が見えた。

『状況から判断しますと、主様がケイに与えた小金貨を男達が奪ったようです』

「貴様ら何をしている」

私がその声をかけるとケイに縋り付いていた少女と男達が私を見た。

「んあ？何だお前……んん？」

「こいつあの時案内されてた女じゃねえか!？」

「こんな美人見た事ねえからな！間違いないぜ！」

そう言いながら戻って来る男達。

「お前が持っている小金貨は私が彼に案内の対価として渡した物だ、大人しく返すなら重傷で許してやる」

私はケイに回復魔法をかけながら話す、彼はもう大丈夫だ。

「何言ってるんだこの女？」

「気にすんな、それよりさっさと捕まえて楽しもうぜ、そんで後は売っちゃまおう」

「売るのは勿体ねえなあ」

どうしてこの手の奴は言う事が似ているのだろうか？

「そうか。返す気は無いんだな？」

「あ？当たり前だろ、自分の事を心配しとけ」

私が問うとそう返す男。

警告はした、怪我で済むうちにやめておけばいい物を。

その上私に手を出そうとするとは。

若い少女が居るので頭を斬り飛ばすのはやめておこう。

「俺が捕まえる、そんで俺が一番のりえ？」

話していた男の目が突然反転する。

そしてすぐに目、鼻、耳から血を流して倒れ込み、痙攣し始めた。

「はあ!？」

「え……っ？」

突然一人が倒れた事に声を上げる残った二人の男、すぐお前達も同じ事になる。

「え……いったいどうにやつで……」

「お、おい!?なんだきよれっ……」

同じように血を流し倒れる二人。殆どの生物の弱点である頭を潰して綺麗に殺した、これならあまり怖くないだろう。

彼らが持っていた小金貨を手元に引き寄せ、ケイと少女の方に歩いていく。

「大丈夫か?」

私はケイに覆いかぶさっている少女に声をかけるが反応が無い、どうしたのかと思いい覗き込む。

「何でだ?」

何故か少女は気絶していた。

『主様、例えば地下都市生まれでも幼い子供にとってあれはまだ刺激が強いと思います』

最初から寝かせておけば良かった、取り敢えず死体を処理してからケイを起こすか。

「……?俺は……?」

ケイは起きた後、僅かな時間ぼんやりしていた。

そして自分の体の上で寝ている少女を目にすると慌てて抱きしめた。

「パトラ!?大丈夫か!?パトラ!!」

「気絶しているだけだ、怪我もしていない」

私の声にケイが振り向く。

「あんたは……。俺はどうなったんだ?怪我もしていないし……。あいつらは?」

自分の体の状態と周囲に誰もいない事に疑問を感じたのか、ケイは私に問いかける。

私は裏路地を見に来た時にケイの声が聞こえ、声の方へ向かうとロボロのケイが居たので回復させた事を話した。

「行くなって言ったのに来たのかよ……でも、ありがとう。あんたに貰った金は取られちまったけど……妹が無事ならそれでいい」

「それなら取り返した、受け取れ」

そう言う彼に小金貨を渡す。

「これ……確かに取られたはずなのに、どうやって?」

私を見て驚く彼に私が男を殺して奪い返した事を伝えると、彼は表情を硬くする。

「殺したのか!?!……すぐに町を出てもうここには来ない方が良く!何をされるか分からないぞ!」

報復か、一応仲間意識はあるのだな。

「お前達はどうか?」

「……みんなは俺が逃がすから気にしなくていい」

私の問いに彼は答える、声が硬いな。

『あくまで私の予想ですが……恐らく関係者として捕まり主様の情報を吐かされた後、殺されると思います』

ヒトハが私に教えてくれる。

助けたのは私の我が儘だからな、その事で彼らまで狙われるのは私の気分が悪い。

『どういたしますか?』

ヒトハが私に指示を求め、私に放って置く気が無いのを察したのか?

『まずはみんなとやらに会いに行く、そこで方針を考えるぞ』

『かしこまりました』

そう話している間にケイは気絶している少女を抱いて去ろうとしていた。

「ケイ、皆に私を紹介してくれないか?」

「……そんな事してどうするんだ」

彼は振り向かずと言う、その声は暗い。

「私の行動が原因だしな、助ける」

「多少強くたってどうにかなる相手じゃないんだ……いいから早く逃げろよ」

彼はこの状況でも私を逃がそうとしている、この子は良いな。

「他に頼る者もないのだろうか？ 私に賭けてみる気は無いか？」

彼にそう言った後、私はヒトハに言う。

『ヒトハ、私は一度関わった者には多少甘くなるらしい。特に子供には』

『カミラ様も私も知っています。町に行った時も意図的に行っていない子供の粗相には一度も怒っていませんし、むしろ助けていましたから』

そうだったか？

そんな会話をしていると彼は私をじつと見つめ、呟いた。

「……本当に……どうにか出来るのか……？」

「任せろ」

私は珍しくそう言い切った。

「任せろ」

彼女は不敵な、だが美しい微笑みを浮かべて答えた。俺は思わず見惚れたが……すぐにそんな場合では無いと考え直した。

正直に言えば、自分を含めて七人を俺一人で助けられる自信なんてなかった。

彼女は関係無いと言っていたけど、名前からするとかなりの権力者の娘のはず。

彼女の親がどう出るかは賭けだけど。

俺だけなら断った。だけど今は妹とあの子達が居る……皆のためなら……俺は彼女に頭を下げた。

「分かったよ。クレリアを信じる……俺達を助けてくれ……」

それから俺は妹をおぶったまま、クレリアを皆が隠れ住んでいる地下の部屋に案内した。

「ただいま、みんな」

入り組んだ狭い路地を進んで案内された部屋でケイが声をかけると、壁に立てかけてあった板が動き子供達が出て来た。

「お兄ちゃん！」

四人の子供達が集まってくる。

「何か変わった事はあったか？」

「何もないよ」

「エルネットは？」

「あんまりよくない……今も寝てる……」

「そうか……」

すると私に気が付いた一人が声を上げる。

「……誰……？」

その声で他の子供達も気が付いて警戒している、こんな場所ではそうなるだろうな。

「取り敢えず中に入ろう、話さないといけない事があるんだ」

ケイはそう言っただけに隠れていた穴から中に入る。

私も後に続き、その後しつかりと板で蓋をした。

ケイがおぶっていた少女も目を覚ました、私に少し怯えているようだが。

その後ケイはこうなった理由を話した。

子供達はこれからどうなってしまうのかと不安そうな表情をしていたが、私が助けると言うとき子供達の反応は二つに分かれた。

助かると喜ぶ子と、私を全く信じていない顔で見る子だ。

「まだ何もしていないからな。信じられないのも分かる、だからまずは信じて貰う」

そう言っただけでケイを見て言う。

「エルネットと言ったか？治療するから連れて来い」

「本当か？」

「ボロボロのお前を治したのは私だぞ、もう忘れたのか？」

私が答えると彼はハツとした様な表情を浮かべ、急いで奥へと消えていった。

「お前達も見ている。私がお前達を救うと言った事が本当だと信じさせてやる」

「……うん」

子供達はそう言っただけで黙ってしまう、そしてケイが一人の少女を抱えてやって来た。

「抱いたままでいいぞ」

私は近寄って来たケイにそう言うと、抱えられていた少女を魔法で治療した。

「……お兄ちゃん？」

すぐに抱かれていた少女が目を覚まし、声を上げる。
ケイと見ていた子供達の驚いた気配がする。

「エルネット！……大丈夫なのか？」

「うん……全然苦しくないの……あたしどうなっちゃうの？」

「治ったんだよ……このお姉ちゃんが治してくれたんだ」

「あ……ありがとうお姉ちゃん……」

ケイの言葉で私に気付き、礼を言う少女。

私は彼女の頭をひと撫ですると集まるように言う。

「何をするんだ？」

ケイがそう聞いてくるが、私は答えずマジックボックスから料理と飲み物を取り出した。

恐らく子供達は空腹だろう。

「食え、お前達には栄養が足りていない」

全員いきなり現れたご馳走に釘付けだ、だが手を出そうとはしない。

「……いいの？」

そんな中、一人の少女が私を見て言う。私は料理をつまんで一口食べた後、少女の口元に持って行く。

「食べてみろ、危険な物では無い」

少女は私の手から料理を食べる、すると見る見るうちに顔が明るくなり「美味しい！」と叫んで自分から食べ始めた。

それを見ていた他の子供達も一口食べ、そこから全員止まる事は無かった。

その後、私は子供達と一緒に食べようと誘われ共に食事をした。

エルネットという少女を治療した事と、この食事で子供達は私を完全に信用したようだ。

信じるのが早すぎると感じるが、まだ子供だからな。

私に少し怯えていたケイの妹も普通に接してくれるようになった、

自分達に危険な事はしないと分かってくれたようだ。

ヒトハは散々弄り回されていた。

お腹が一杯になりまとまって寝る子供達を見ながら、私とケイは話を
する。

「クレリアが言った事は本当だった……ありがとう。信じてよかつた」

「気にするな、私からすればお前もまだ子供だ」

「子供って……クレリアより俺の方が年上じゃないか」

私は以前の設定を使う事にした。

「私は人間と森人のハーフでな、こう見えて百年以上生きている」

「マジかよ……俺は、てつきり親が高い地位にいて、それを使うのか
と思っていたんだ……でもさっきの力を見たら納得した」

彼は私を見て言う。

「アーティア合衆国とは関係無いと言っただろう、それに親もいない」

「……そうですか」

「無理して敬語を使わなくても良いぞ？」

「いえ、助けて貰った上にならずと年上だから……ですから」

「そうか」

まあ今は好きにすればいい。

私は魔法靴を取り出しケイに使い方を使った。

「食料は魔法靴の中にある物を使え、今日は私がいるからお前ももう寝ろ」

「うん……分かりました」

彼らが全員寝た後、私は念話でカミラに今日の事を話す。

『お母様はその子達をどうしたいの？』

『私は彼らに教育を行い、地上に上がって暮らせるようにしようと思っ
ている』

『そう、じゃあ私も手伝おうかしら』

『良いのか?』

『私も悪意の無い子供は嫌いじゃないし、ずっと一人で月にいるのもね』

『私の位置がわかるか?』

『分かるわ、早速行くわね』

子供達が目を覚ました時、見知らぬ大人が増えていく事に怯えたが、私の年齢とカミラが私の娘だという事を伝えると受け入れてくれた。

私は子供達にまずは身分を与えようと考えた。

『身分ですか……養子にしてくれる者が居ればそれで解決するのですが』

どうするかを考えている時に聞いたヒトハの言葉を私は採用する事にした。

『ヒトハ、身内の居ないそれなりの資産家を探し出せ』

私はヒトハに独り身の資産家を探し出して貰い、彼らを養子にするように仕向けた。

色々行う事はあったが、無事に七人はその資産家の養子となった。

それから彼らだけで過ごせるように田舎に家を買ひ、私は教育を始める事にした。

彼らが地上の家に移った日に、私は子供達を集めてこれからの事を話した。

地上で生きていける様に勉強をする事を始め、これからの生活の事をしっかりと話し納得させた。

カミラとヒトハも子供達が自立するまで一緒に住む事になった、カミラは久しぶりの騒がしい暮らしを中々楽しみにしている様だ。

私とカミラが勉強と様々な技術を教え、目指す道が決まったら専門の学校に通わせる事にする。

彼らは身分証明カードを手に入れているので何の問題も無く生活する事が出来る。

ヒトハは護衛にしようと思ったが、情報収集であまり家にいないため方針を変更し、全員に簡単な守りのネットワークスを渡しておいた。

効果は攻撃等の遮断と、発動した事が私に分かるという物だ。

危険から身を守る物だと教え、忘れずに身に着けておくように言い聞かせた。

しばらくは私とカミラで子供達の面倒を見る事になるが、この子供達が大人になるのに十五年程しかかからない。

私達にとっては長い時間では無い。

こうしてケイとその妹のパトラ、ランダン、ダニエリ、ルートール、チエリ、エルネットは新たな生活を始める事になった。

子供達は養子になったため、姓は全員「シルグロフト」に変わり、人間の社会的には七人は兄妹として扱われる事になった。

「起きろ、朝だぞ」

私は最年長であるケイを起こす。

腹一杯食べて風呂に入り、柔らかく暖かい大きなベッドで寝ている子供達は、よほど心地いいのかまだぐっすりと眠っていて起きる気配が無い。

「おはよう」

ケイが身を起こし私に挨拶する。

彼は声をかけるとすぐに起きる、地下都市での生活の影響だろう。

「朝食の用意は始めている。お前の役目はこの子供達を起こして連れてくる事だ」

「……頑張るよ」

彼は寝ている子供達を見て苦笑した。

一度私に敬語を使う事を決めた彼だが、私が何度かやめるように言うとうと敬語をやめた。

彼は以前より雰囲気柔らかくなり、表情も穏やかになった気がする。

ここまでされてようやく本当に安心したのだろう。

その後、だいぶ遅くなったが子供達は全員起きて来る事が出来た。食事を終えたら勉強の時間だ。

そんな生活をしていると、ヒトハから犯罪組織が私と子供達を探しているという報告を聞いた。

そういえば裏路地では視線がかなり向けられていたな、そんな中で犯罪組織の構成員を殺せばこうなるだろう。

「諦めると思うか？」

『キャリア・ファンブルが言うには、あちらの世界では甘く見られたら終わりだそう。手を出せば必ず報復すると周囲に示す必要があるよね』

「良く分かる。と言う事は諦める事は無さそうだな」

私も手を出されれば必ず報復する、より重要な事があれば別だが。

『現在は地下都市を搜索しているようですが、主様が外部の人間だと思っっているため、搜索を地上にまで伸ばす気であるようです』

人間では無いが外部から来たのは間違いない、月から来ているからな。

「子供達がこの町の外に出るようになっても諦めないようなら消えて貰おう。あの都市には沢山の組織があるんだ、いくつ潰れても大して変化は無いだろう」

「おねーちゃん！」

家のソファで本を読んでいるとエルネットが近寄って来た、私はいつの間にか姉になっている。

母親のつもりだったが、この見た目ではどうしても無理があるようだ、カミラが母と呼ばれているな。

今日は何をしても良い休日だ、子供達も自由に過ごしている。

エルネットは私に正面から抱き着いて来た、ルーテシアもこの位の時はこうだったと思いつながら受け止める。

「どうした？何かあったのか？」

「何にも無いよ？」

私が聞くと彼女は私を見て首をかしげる。

子供がやる事だ、特に理由など無かったのだろう。

彼女を抱いたまま本を読んでいると、後ろから近づいてくる気配を感じる。

これはダニエリだな。

そのまま気が付かないふりをしていると私の目を手で覆ってくる、そしてエルネットの声がする。

「だーれだー!」

エルネットはこのために来たのか？私はエルネットの問いに答える。

「ダニエリ、私には通用しないぞ」

「えー!?なんでわかるんだよー!」

彼は不満そうに言いながら手をどけると、私の隣に座った。

「お姉ちゃん何で分かったの?」

エルネットが私に聞いてくる。

「私は後ろが見えるんだ」

私がそう言うと二人は「嘘だー!」と言って笑いながら走って行った。

「転ぶなよ」

私は一声かけると再び本を読み始めた。

私が一人でソファに座り本を読みながらヒトハと念話していると、ケイが現れた。

彼は私に話しかけようとするが私はそれを手で止める。

報告を聞き終わった後、私はケイに話しかけた。

「悪かったな、ヒトハと会話していた」

ヒトハが話せる事は子供達も知っている、始めは頭に響く声に怯えていたが全員すぐに慣れた。

「姉さんに聞きたい事があった」

ケイは私を姉さんと呼ぶ、他の子供達が私を姉と呼び始めてしまったので、それに合わせている。

「何だ?」

「姉さんは地下都市には沢山の孤児が居る事を知っているよね?」
「知っている」

ケイは反対側に座り私を見る。

「皆を助けても良いだろうか？」

そんな事を言われるとは思っていなかった。皆を助けたい、か。

「お前が全て面倒をみるのなら好きにすればいい、私達は手を貸さない」

私の言葉に驚いた表情をするケイ。

「……俺達を助けてくれたじゃないか」

余裕が出来て他者を思う事が出来るようになったのか？悪い事では無いな。

「お前達を助けたのは私の気まぐれだ、お前達の為では無い。何も無ければ私はお前を見捨てていた」

私は更に続ける。

「私は誰でも助けるような事はしない、自分が助ける気になった者しか助けない。私にも限界はあるし、見ず知らずの者にかける情けも無い」

彼にはそう言ったが私に限界は無いかも知れない。

情けも少しはあるかもしれない。だが、どちらにしてもそこまでの気にはならない。

「限界以上に守る者を作れば、守りたい者達ごと潰れるぞ？それを見極められるなら連れて来ても良い。ただし、お前が責任を持って」

「……分かった……」

彼はそう言って去って行ったが、その拳は固く握りしめられていた。

助けたいというその気持ちは否定しないが、守る者を増やして自滅しては誰も幸せにならない。

しかし、私は子供に甘い事を自覚しているからな。

いつか思わず助けてしまう様な事もあるかも知れない。

子供達と暮らし初めてから数年が経った。

それぞれ学校に通う事が決まり、隣の町の学校へ通学する事になった。

そして犯罪組織はまだ私と子供達を探していた。

その執念深さは素晴らしい、素晴らしいが子供達の邪魔だ。

消えて貰おう。

『ヒトハ、奴らを処分する。補佐に付け』

『かしこまりました』

私はカミラにも連絡し、地下都市へと向かった。

現在、私は家のリビングで子供達と放送を見ていた。

私達は出来るだけ子供達全員が揃う機会を作るようにしている。

《次の情報です。地下都市壊滅事件ですが、いまだに原因は明らかになっておらず、引き続き捜査が続けられています……》

カミラが私をちらりと見る。

《この事件はおよそ半年前、地下都市に存在する複数の犯罪組織が突然壊滅した出来事の事で、この事件を重く見た各国は即座に治安維持部隊を投入し混乱する地下都市の一部を制圧、治安の向上を行う事になりました。更に……》

大体予定通りになってくれたな。

放置していた地下都市が大きな力を得る事を問題視していた各国が、力を削ぐようとタイミングを計っているという情報を得た私は、後始末を彼らに任せる事にした。

私が組織を壊滅させ混乱が起きた後、各国の部隊はかなり早く突入して来た。ヒトハに頼んで各国へ仕込みをしていたのが効いたのだろう。

これで私達を探していた組織は消え、ついでに地下都市の治安が少し良くなった。

少し良くなっただけで犯罪都市である事は変わっていないが。

地下都市で犯罪組織を潰した後、特に何かが起こる事も無く二年程が過ぎ、子供達は学校へと通いながら順調に成長している。

一番年上であったケイは今までの遅れを取り戻す様に努力し、町の治安維持部隊に入った。

そして新人の中では一番優秀な隊員との評価を受けている、このまま順調にいけば相応の地位になる事が出来るだろう。

他の子供達はそれぞれの年齢にあった学校へと入学し、これから進む道を見つけようとしている。

当初はテイリア魔法技術学校に通わせようかと考え、距離があるので寮暮らしになる事を説明した。

だが子供達が「みんなと離れたくない」と嫌がったため、白紙に戻した。

カミラが「地下都市で寄り添って生きていたあの子供達は、全員が全員をととても大事に思っているみたい」と言っていた。

何時か離れる事になる可能性の方が高いのだが、今はまだこれでも良いと思っている。

学校へ行っていた子供達もみんな帰宅し、最後にケイが帰って来た。

「ただいま、みんな」

「お帰りなさい、お兄ちゃん。先にお風呂入ってくれる？」

「分かったよ」

妹のパトラが出迎え、風呂場へと送り出す声が聞こえる。カミラとヒトハ、子供達は夕食の用意を始めている。

そんな中、私はソファに座ってのんびりと本を読んでいる。

私が動くのは私が動く気になった時か、子供達だけではどうにもな

らなくなつた時だけだ。

皆で会話しながら夕食を取る。

普通の事だが、皆は幸せそうだ。

私はそれを見ながら食事をしている。

「姉さん、夕食後の勉強を見てもらつていいか？」

ケイが私に頼んでくる。

彼は遅れを取り戻すため本来の授業時間外にも教えを受けている。

「構わないぞ、他にも一緒に受けたい者は居るか？」

私が聞くとパトラ、ルートール、チエリの三人が手を上げた。

「よし、食事が終わつて一時間後にまた来い」

やる気があるのならいくらでも教えてやろう。

ある時、何気なく放送を見ていた私は偶然現在の森林国家ユグラドの首都を見た。

「森林国家はもう名前だけだな」

私は呟く。私が見たユグラドの首都は、森が無くなり人工物で溢れていた。

首都の中央にどこから見ても目立つ巨大な樹だけが残されている。

世界樹は以前見た時より多少大きくなっている気がするが、それ以外は変わっていない様に見える。

何処となく葉に元気が無いように見えるが、周囲に森が無い事が影響しているのだろうか？

ユグラドを見た事で他の国はどうなっているか気になった私は、ヒトハを連れて他の二国の首都も見に行つてみた。

ユグラドと同じ様に広大な森の中にあつた獣王国カルガの首都も、ユグラドと同様自然は無くなつていた。

何よりも変化したのは獣人達で、魔道兵器に頼るようになった獣人達は持っていた高い身体能力を失っていた。

失ったと言ったが、正確には獣人自身の戦闘能力が必要無くなり、訓練しなくなった事が原因だな。

それでも魔人の次に身体能力は高いとヒトハは言ったが、かつて私と戦った時の力を持っている者は恐らくもういないだろう。

魔工国ガンドウは今も鍛冶が盛んなようだ、作る物は武防具から様々な部品や原料となる金属の作成に移っているようだった。

以前は山間にあった首都だが、周囲の山が無くなり広大な都市になっっていた。

原料の産出は遠く離れた山脈や発見した地下鉱脈から得ているようだ。

これはヒトハから聞いた事だが、以前地下の鉱脈を掘っていた際に地下都市へと貫通し、それなりに大事になった事があるらしい。

改めて世界を見ると、森は世界から消えてなくなっていた。

様々な事が魔法と魔道具、魔動機で可能になり、木材はあまり必要では無くなったため、森は全て開発してしまったらしい。

もう広大な森を散策する事は出来ないが、その分は他の事で楽しめば良いだろう。

「買い物に行ってくるねー」

「いってらっしゃーい」

子供達の声が聞こえる、買い出しに出かけたようだ。

私はいつもの様にソファに座り本を読んでいたが、ふと以前に読もうと思っていた本を思い出した。

私はマジックボックスから「四大技術の始祖達」を取り出し読み始めた。

「現代の四大技術と言えば皆さんは何を思い浮かべるだろうか？」

現代四大技術。それは魔法、錬金術、鍛冶、魔道具である。

それぞれの技術は時を経て混ざり合い、様々な恩恵を私達に与えている。

一番有名な物は魔道飛行船だ、魔道飛行船は前述した四大技術の結晶ともいえる。

その他にも、皆さんが現在当たり前のように使っている様々な物に技術者達の長い研究の末に生み出された技術が使われている。

本書ではそれらの始祖である大魔法使いケイン・イヌス、大錬金術師ラムラン、名鍛冶師ロドロフ、名魔道具技師ミシヤの四人について記している。」

本に記された名を見て私は思わず微笑みを浮かべた、皆の名は今も語り継がれているのだな。

私はゆっくりと本を読み進めた。

本を読み終えた私はあの頃を少し思い出していた。

忘れかけていたが、この本を読んだおかげか色々思い出せたな。

私の元を離れた後の皆の功績や様子が記されたこの本は中々楽しかった。

この本にはどの家系も直系は既に存在せず、現在は店も残っていない事が書かれていた。

私は本をしまう、また気が向いた時に読み返そう。

本によると色々と記録は残されていたようで、それらの情報を元に歴史学者の仮説や推測を交えて解説されていた。

ラムラン、ロドロフ、ミシヤの三人は人間からすればかなり昔の人物なので色々と仮説が書かれていたが、最近まで生きていたケインについては記録が多く残されていて一人だけ情報が多かった。

四人とかかわりが深い伴侶や友人達の事も資料が見つかった

ようで、それなりに情報が書かれていた、中には私の事では無いかと
思うような物もあったな。

そんな中ただ一人、ルーテシアだけが行方不明扱いになっていて、
発見されなかったと書かれていた。

私達と暮らしていたのだからこの扱いも仕方ないだろう。

街で写影を撮った時にはルーテシアもいたが、誰もそれがルーテシ
アだとは気が付かなかっただろうしな。

私はそう考えながら別の本を取り出し、子供達の帰りを待ちながら
ページをめくった。

更に時は過ぎ、子供達も全員が十代の半ばを超えた。子供達の会話も幼い物ではなくなり、時折学校での授業の話などもあるようになった。

「チエリ姉さん、学校で先生に聞いたんだけどさ……」

みんなで食事を終え全員がくつろいでいるとランダンがチエリに話しかける。

「どうしたの?」

「四大技術の始祖の事で新しい発見があったの知ってる?」

「ロドロフとミシヤ夫妻の手記が発見がされて、歴史学者の間で騒ぎになっている話よね?」

「知ってたのかー。うん、先生が話題にしてたんだ」

「人によつては興味深い話だもの、これから他の二人の手記も無いか探そうとするとかしてないとか」

「でもさ、俺は信じられないなー。始祖に技術を教えた何者か聞いたかも知れないなんて」

何?

「でも、発見された手記には師が居た事が書かれていたらしいじゃない? はつきりと知識と技術を教えてくれたと書いてあったらしいわよ?」

「誰にも私の事を言わない代わりに手記に書いていたのか?」

私が微妙な雰囲気を出している事に気が付いたカミラが話しかけてくる。

「どうしたのお母様?」

カミラは変わらず私をお母様と呼ぶ。

子供達に母と呼ばれているカミラが子供達に姉と呼ばれている私を母と呼ぶ、関係を知らない者が聞いたら訳が分からないだろうな。

「何も無い」

問いに答えて念話で話す。

『あの子達が話しているのは私の事だと思う』

『そうなの？』

カミラには私自身の事は色々と話しているが弟子達との事は話していないかったかも知れない

『黙っていれば私だと分かる事は無いだろう』

『そう、それなら気にしなくても良いわね』

いまさら私とつながる事など無いので何もせず放って置く事にした。

私は月面で本を読んでいる、頭上には夜のイシリスがある。

イシリスは夜になると人類の魔法の光が輝いて見える。

子供達と過ごしていた日々は終わった、子供達は大人になり、自立し家庭を持った。

皆が過ごした家はケイとパトラの夫婦が住み、今でも年に数回は集まっているらしい。

二人は結婚まで大分かかったな、私は月面であの二人の事を思う。皆のために一生懸命なケイに、パトラは兄としてではなく男として好意を持った。

ケイも家で自分を待っていてくれるパトラに妹としてではなく女として好意を持っていたが、兄妹として過ごした時間が長かったため夫婦になるまでかなり時間がかかった。

本人も皆も、二人が本当の兄妹では無い事は知っていたが、同じ人物の養子となり兄妹扱いだった事も多少面倒だった。

最終的に結婚は認められ、現在は夫婦として暮らしているのだが。みんなが家を出てケイとパトラだけになった後、私達は子供達に家を出る事を伝えて月へと帰った。

子供達は嫌がり、ケイとパトラも自分達と一緒に暮らせば良いと言ってくれたが断った。

私達にも帰る場所があると答え、たまには会いに来る事を伝える

と、渋々納得してくれた。

最近は何で過ごしつつも子供達に会うために時々イギリスへと向かう生活を送っている。

ヒトハからの情報で、子供達が私達の正体について話し合っていた事があるのは知っている。

結局「助けてくれたし、優しいしどうでも良い事」という結論になったので私が何かする事は無かった。

話を聞いた時は優しいという言葉に疑問を感じたが、彼らがそう感じているのならそれでいいだろう。

それから彼らは小さな問題を起こしながらも順調に日々を過ごした。

皆は子を持ち、孫が生まれ、良い祖父、祖母になった。

そんなある日、私はカミラとヒトハと共に放送で情報を見ていた。

《次の情報です、森林国家ユグラドで神木として長年扱われていた世界樹が切り倒される事が決定しました》

世界樹を切り倒すか。

「世界樹ってあの大きい樹の事よね」

『はい、長年森林国家ユグラドの守り神として崇められてきた樹の事です』

カミラとヒトハの会話をよそに私は情報を聞いていた。

《以前から広範囲の日の光を遮る事や魔道飛行船の航路、土地の問題などで国家間会議で取り上げられていましたが、森林国家ユグラドの神木として残したいとの国の意向を受けて現在まで残されています。しかし他国からの度重なる要請を受けユグラドがどうとう世界樹の伐採を承諾しました。伐採は計画を立てて行われる予定です

……》

私は世界樹に会いに行き、望むならここに連れて来ようと考えた。

「二人とも、話がある」

「世界樹の事？」

『何でしょうか？主様』

二人は私に向き直り答える、この情報を見た後なら予想は付くか。「私は世界樹が切り倒されるのをただ見ている気は無い」

以前はハッキリとしなかったが、現在は私が回復魔法をかけた樹が世界樹である事が分かってている。

意思の様な物も感じるし、果実や樹液も貰っている。

このまま見捨てる気にはならない。

『どうするの？』

カミラが尋ねてくる。

「世界樹が望むならここに連れてくるつもりだ」

「いいんじゃないかしら」

『この拠点にあの大樹を植えるのですか？』

予想していたようなカミラと疑問を口にするヒトハ。

「そうだ。二人に手伝って貰う事は無いが先に言っておこうと思つてな、何か気になる事はあるか？」

私がそう言うと二人が答える。

『イシリスと比べると月はかなり小さいですが……それでも世界樹を移す事に問題は無いと思います』

「私も特に反対する理由は無いわね、一つ気になる事はあるけど」

「何だ？」

「世界樹って宇宙でも平気なの？あの大きさだと障壁を超えるわよ？」

確かにそうだな、障壁を高くしないと駄目か。

連れてくる前に広げてしまおう。

「連れてくる前に広げる事にする」

私は障壁を世界樹が入る様に広げる。

「……あつという間に広がったわね」

『いつ向かうのですか？』

障壁が広がった事を感じたのか苦笑いして言うカミラと、これからの事を問うヒトハ。

「放送ではすぐに切り倒される訳ではなさそうだが、時間をかける気は無い。今は丁度ユグラドは夜だからな、すぐに向かう」

「そう、行ってらっしゃい」

『行ってらっしゃいませ』

私は二人に見送られ森林国家ユグラドの世界樹へと転移した。

私は世界樹の頂上へと転移した。

世界樹の周囲は人類の建造物で取り囲まれている、夜でも根元には人々が集まっているようだ。

こうして見ると世界樹の枝葉が周囲の建物の上を覆っていて、飛行する乗り物はこの樹を避けて飛んでいるようだ。

世界樹の気配が私を歓迎しているように感じる、私が人類と深くかわらなくなつてから来ていなかったが、この子は変わらないな。

そう言えば毛蜘蛛はどうしたんだ？

私が来た時は必ず現れていたが、あまりにも来なかったから私を知らない世代に変わったか？

世界樹は寂しそうな気配を発した、気になつた私は気配を探る。

世界樹に毛蜘蛛達の気配は一つも存在しなかった、何故だ？

聞こうにも世界樹は寂しそうな気配を発するだけで会話が出来ない。

一番最初に思いつくのは、周囲に森が無くなり毛蜘蛛がいられなくなつた可能性だが。

取り合えず今は本来の目的を優先しよう。

私は世界樹に話しかける。

「人類はお前を切り倒す事を決めたようだ」

私の言葉を聞いた世界樹から気配が消える、私はさらに言葉を続ける。

「私はお前がこのまま人類に切り倒されるのを見ている気は無い、出来れば私達が暮らしている場所へ来て欲しい」

世界樹は何の反応も示さない、それでも私は言いたい事を言い切る。

「無理やり連れて行くことは思わない。私は一週間後またここに来る、共に来てくれるのならその時何か反応をして欲しい」

私はそう言うとき世界樹の幹を撫で、転移で月へと帰った。

「お帰りなさい」

『お帰りなさいませ』

カミラとヒトハが戻って来た私に気が付いて声をかけてくれた。

「お母様、後から気になった事なんだけど……」

「何か思いついたのか？」

カミラの言葉に答えた私は彼女の問いを待った。

「樹が望むなら連れてくる……みたいな事を言ってたわよね？世界樹って意思というのが人格というか……そういう物があるの？」

「意思はあるぞ、言葉は話せないが雰囲気が変わる。楽しそうだったり悲しそうだったりな。実際私の言葉に果実を落とすといった反応を返した事もある、ここに連れて来られたらよく探ってみるといい。カミラなら感じる事が出来ると思うぞ？」

「意思があるなんて今まで知らなかったわ……実は私、世界樹をじっくり近くで見た事は一度も無いのよね」

そう言いながらもカミラはあまり驚いていないようだ。

ヒトハも成長しているし、樹に意思があってもそう驚く事では無いからな。

「誤解しない様に言っておくが意思を感じる事が出来るのは世界樹だけだ、他の植物で感じた事は無い」

「お母様……何かした？」

カミラが何とも言えない表情で私を見て問いかける。

「回復魔法をかけたか、私が作った魔素を与えたりはしていたが、それ以外は何もしていない」

「してるじゃない……あそこまで大きく成長した上に意思があるのは原因があると思うのだけれど……」

確かに他の植物と比べてあまりにも大きいし、他に意思のある植物は見た事が無い。

やはり私が行った事が原因なのだろうか？

『ここへ連れて来る事が出来たのなら調べてみてはどうでしょう』
「世界樹が許可してくれたらな」

それから再び世界樹に会いに行くまでの一週間の間に、世界樹が来る事を望んだ時に植える場所を確保した。

拠点の状態を維持している私の構成物、一応闇の塊と呼んでいる物のすぐ隣、月の拠点のほぼ中心に植えるつもりだ。

世界樹に会いに行った日から一週間が経ち、今日再び世界樹の元へと向かう。

「折角準備をした訳だし、来てくれると良いわね」

「私としても来て欲しいが、どうなるかな」

『断られた場合は時間を空けてまた誘ってみてはいかがでしょう？
実際に切り倒されそうになれば考えが変わるかもしれませんが』

「そうだな、断られた事で私が興味を失わなければそうしてみようか。行ってくる」

私は夜の世界樹の元へ転移した。

転移すると世界樹頂上の冷たい風が吹き付ける、地上からはユグラドの様々な音が聞こえる。

「答えを聞きに来た、来るのなら反応をしてくれ」

私がそう言うのと私が立っている枝が仄かに緑色に輝く。

これは見覚えがある、世界樹が初めて樹液をくれた時の現象だと思う。

明確な意思表示、これは私と共に来るといいう事で間違いないだろう。

「来てくれるか、ありがとう」

私の言葉に答える様に足元の輝きがゆっくりと明滅する、そして嬉

しそうな気配を放ち始めた。

同意は得た、すぐに連れて行こう。

「世界樹、これからお前を私達の拠点へと連れて行く。抵抗せず身を任せて欲しい」

輝きが少し早く明滅した、分かってくれたようだ。

私は魔法を使用し、世界樹全体を障壁で覆う。深く広く広がっている根も全て丁寧に覆い、準備は完了した。

「行くぞ」

足元の輝きが反応するのを確認してから私は世界樹と共に月へと転移した。

《突如消失した世界樹の行方は現在も分かっておりません。ユグラドにいる大勢の人々が世界樹が突如消える瞬間を目撃しておりますが……》

「見事に騒ぎになってるわね」

『世界樹程の巨大な樹が目の前で突然消えれば当然ですね』

私達は月で放送を見ている。

放送では連日消え去った世界樹の事を話していた。

それを見ながらカメラとヒトハは語り合っている。

《……原因も特定されておらず、魔法や魔道具で運び去られたという説や世界樹が自然が消えた地上を見限り天へと旅立ったのだという説など、様々な……》

少しは合っているかも知れない、魔法で月の拠点へと移動したのだから。

世界樹が何を思っただ移動を決めたのかは分からないが、自然がほとんど無くなった地上を見限ったというのは意外と間違っていないのでは無いかと考えている。

月に転移した後、世界樹は無事に拠点の中心付近へと植えられ、今の所は特に問題は起きていない。

この拠点内には自然も多くある、そのおかげか世界樹は穏やかな気配を出しながら過ごしている。

離れて見ると月から大樹が生えている訳だが、イシリスからでは見えない裏側なのだから気にする事は無いだろう。

俺達は部屋にある大型の画面で一つの映像を黙々と繰り返し見ている。

世界樹が消えた瞬間が記録されている映像を確認しているのだ。

大勢の国民が目撃した世界樹消失事件だが、あんな事が起こるとは思っていなかったため写影はほとんど無く、あつたとしても何の異常も発見出来なかった。

そんな中、世界樹が消えた瞬間を魔道飛行船から撮影魔道具で撮影して保存していた人物がいた。

その人物は夜の世界樹を上から何となく撮影していたらしいが、その時世界樹が消失したと言う。

その後その映像を確認した所、消失する少し前に世界樹の頂上におかしな物が映っている事を発見したそうだ。

詳しい事が分からなかったその人物はユグランド政府に映像を提出した、そして俺達が現在その映像を見ている訳だ。

映像にはかなり距離があるが周囲の町の光に照らされた世界樹が映っている。

そしてそのしばらく後……突然世界樹が消えて男性の驚く声と共に画面が乱れる。

映像の撮影者が驚いて魔道具の維持を忘れたのだろう。再び映像が戻ってもそこに世界樹は存在せず、暗い闇があるだけだった。

「この……世界樹が消える前の……ここですね、世界樹の頂上付近が薄く緑色に輝いています」

距離がある上にかなり小さい光だが頂上付近は暗闇なので確認する事は出来る。

映像を停止して提供者からの報告を説明する担当者、確かに暗闇に緑色の輝きが見える……見えるが……。

「遠すぎて分からんな……」

共に見ている者の一人が俺の感想を代弁してくれた、確かに光っているがこの映像から分かる事は結局ほとんど無い。

原因の一つである可能性は高いが……この光が何なのかもわからない。

他の者も全員黙り込んでいる、俺はしばらく帰れなそうだと思いつながら映像を見ていた。

世界樹を月へ連れて来てからある程度の時が経った。世界樹消失事件の謎はいまだに解明されず、時間の流れに埋もれつつある。

私達は時々イシリスに下りては人類の町を楽しみながら過ごした。少し変わったのは、世界樹の上で本を読むようになった事だ。

カミラも今では世界樹の意思を感じ取る事が出来るようになった、残念ながらヒトハは無理だったが。

時々会っていたケイ達は全員逝った。

彼らが死んでから彼らの子供や孫にも会う事は無くなり、また時間を気にしなくなっ行って行った。

ある日、私が世界樹の上で本を読んでいるとカミラが新しい魔道具を買って来た。

「新しい魔道具か、どんな物なんだ？」

「音声と映像を保存……撮影できる物よ。後、これは魔動機に分類されるみたいよ。」

「そうなのか、最近出来た物か？」

「大分前からあったみたいよ？で、これはその最新型」

「なるほど。それで何を撮影するんだ？」

「まずはお母様よ」

当然の様に言うカミラ。まあ構わないが。

「断る気は無いが、何をすればいいんだ？」

「んー、そうね……普通に本を読んだりやりたい事をしていてくれれば私が勝手に撮影するわ」

それから私はしばらく本を読んだ後、世界樹の根元に行き少し樹液を分けてもらった。

「まだ撮影しているのか？」

カミラは私が本を読んでいた時からずっと私について来て、行動を

撮影し続けている。

「まだまだ余裕はあるわ」

「そうか。満足するまで好きにするといい」

私は自宅へと歩いて行く、カメラは隣を歩きながら私の姿を撮影している。

「お母様が世界樹から樹液を貰っている姿、あれに似てたわね」

隣で撮影しながらカメラが話しかけてくる。

「あれとは？」

「テイリア魔法技術学校の校章よ……ほら、大樹とその根元にいる少女の。姿もお母様そっくりじゃない」

あの三人はカメラに話していなかったのか。

「似ていて当然だ。あれは世界樹の根元にいた私を若い頃のケインが見て、校章にしたのだから」

それを聞いてカメラは驚いて聞いてくる。

「えっ？あの校章の元はお母様と世界樹なの？」

「そうだ。作った本人であるケインが言っていたから間違いないと思うぞ？」

「それは似てるわよね……だって本人達だもの」

「まあそれだけの話だ。家に着いたらこの樹液を使って何か作ってくれ」

「分かったわ、校章の話も聞けたし頑張っちゃうわよ」

そんなに面白い話でも無いと思うが、喜んでいいるのならそれでいいか。

その後カメラは私に自分を撮影させ、更にその後ヒトハと世界樹、他の色々な物を撮影してようやく満足した。

私は夜の時間に変化している月の拠点内を歩いていた。

世界樹の方を見ると世界樹全体が薄緑に輝いている。

世界樹は月の拠点に来てしばらくしてから、夜に時々こうやって輝

くようになつた。

中々美しい光景だと思ふ、私は輝く世界樹へと向かつた。ある程度近づくと世界樹は嬉しそうな気配を放ち、葉がさわさわと鳴り始めた。

私は世界樹の太い枝の上に座り、輝きの中で本を開く。穏やかな風の中で夜が明けるまで私は静かに読書を楽しんだ。

「また戦争が起きそうだと?」

私とカミラがオセロを楽しんでいると、ヒトハが帰つて来た。

その時報告されたのはイシリスの国家間の関係が再び険悪になつて来たという報告だつた。

『はい、原因は様々ですが大きいのは利益の分配と現在の王同士が不仲と言う事のようにです』

「ちよつと待つて。利益でもめるのはまだ理解出来るけれど……王同士が不仲つていう事は、ただ相手が気に入らないから戦争するつて事?」

カミラがヒトハに尋ねる。

『そう取つて頂いて問題無いと思います』

カミラは溜息を吐いて言う。

「大国の王がそんな事でどうするの……感情があるのだから好き嫌いはあるでしょうけど……それを戦争の理由の一つにするなんて……」

背もたれに倒れ込むカミラ、皇帝をしていたカミラからすればあり得ない事なのだろうな。

「理由などそんな物では無いのか?」

「自分達の……個人の喧嘩に国と国民を巻き込んで死なせるなんてただの馬鹿よ。気に入らないなら当人同士で殴り合いでもすればいいわ……よく今まで王で居られたわね……」

私の言葉に不機嫌な顔で語るカミラ、王が駄目でも周囲が優秀な

らば意外といけそうだ。

「私は王になる者は基本的に優秀であると思っっているぞ。例外もあるだろうが」

「この報告だけだと優秀とは思えないけれど……」

「そこだけが欠点なだけで他は優秀なのかもしれないぞ?」

「そうなのかもしれないわね……」

カミラは落ち着いて私との勝負を開始した。

「戦争で地上が荒れるなら終わるまでは行くのをやめておこうか」

「そうね。しばらく待っていれば戦争も終わってまた元に戻るでしょうし」

私としては気になる事もある、以前私達に散々撃ち込んだ魔道戦略兵器の事だ。

「ヒトハ、人類が魔道戦略兵器を使うつもりなのかどうかは分かるか?」

私はオセロをしながらヒトハに問いかけた。

『今の所どの国も使う気は無いようです。お互いに使用して争えば取り返しがつかなくなる可能性がある事に気が付いているようですね』

「そうか、気が付いているならまだ人類が滅ぶ事は無さそうだ。あの威力の攻撃をお互いに撃ち合えばかなりの被害が出る事になるだろうからな」

「私達に使ったあの攻撃よね?あの時は私達がいた所が島で、周囲に何も問題無さそうだから使ったのかしらね?」

「恐らくな、それとは別に私達を何としてでも排除するという決意もあったのかもしれないが」

『これからどうなるかは分かりません。突然取り返しのつかない事をするのが人類ですのぞ』

カミラはヒトハの言葉を聞いて苦笑いしている。

「戦争が始まったら終わるまで放っておこう」

「気が付いたら全滅してたりして」

カミラが悪戯な微笑みを浮かべて言う。本当に起こりそうな所が

心配だ。

「ヒトハに時々確認して貰うからそれは無いと思うが、全滅してしまつたらそれでもいい」

「もし人類が全滅したらどうするつもりなの？」

「人類を蘇生して復興させても良いが、それだとまた同じ事を繰り返して全滅しそうだからな。新しい生命体が生まれ進化するのを待つか、場合によっては私が作ってみるのも面白いかも知れない」

カミラとヒトハが傍に居るならもう睡眠の真似事をする必要も無さそうだしな。

「今まで通り過ごしていれば時間は自然と過ぎて行くでしょうし、作るにしてもお母様なら時間はかかっても上手く行くでしょうね」

そう言いながらオセロをするカミラ、私の負けか。

「まあ考えるのは人類が実際にいなくなつてからだな。私は人類がまだ進化すると思つているし」

オセロを片付けながら答える。

「そうね。どうなるかなんて分からない訳だし、そんなに急いで決める事は無いわね……何か飲む？」

「モ―乳を頼む」

「分かつたわ」

カミラは席を立ちキッチンに向かつた。

やがて人類は戦争を始めたが、しばらくは戦争とは名ばかりの小競り合いのような物だった。

しかし報復に報復を繰り返し、規模はどんどん大きくなり戦争開始から僅かな時間で小競り合いでは無くなった。

やがて二国間の争いだった戦争は四国を巻き込んだ大戦へと姿を変え、それぞれの大国は争いを続けた。

そんなある日、ヒトハが報告を持って来た。

ソファに座つてその報告を聞いた私は何とも言えない気分になつ

ていた、カミラはソファにもたれて疲れた顔をしている。

「人類が魔道戦略兵器を使ったというのは間違いないのね？」

カミラがヒトハに確認する。

『間違いありません。アーティア合衆国が最初に使用し、それをきっかけに各国が魔道戦略兵器の使用を始めました』

「全滅するかも知れないな。まさか危険を理解している状態で使うとは、いつか言っていたヒトハの言葉が正しかったな」

「使われたら他の国だって使うわよ。自分の国の被害が増えるだけなもの」

お互い使わずに持っている事が使われない為の最善の方法だったのかもしれないな。

一度使ってしまったら止まらないだろう。

「直接都市に使われてないだけマシかしらね」

カミラはそう言うのと紅茶を飲んだ。私はその姿を見ながら予想を裏切られた事を嬉しく感じていた。

踏みとどまるのかこのまま突き進むのか、これからが楽しみだな。

あれだけの兵器を使用して各国が無事で済む訳も無く、戦争による被害は一気に増加した。

各国は魔道戦略兵器を撃ち合い、次々とその命を散らしていった。私達には子供の喧嘩のように見えるが、彼らは本気だ。

『各国は直接都市部に攻撃を始めました、世界中に広がる都市や町、村が攻撃され非戦闘員の被害も甚大です』

「……避難はしていないの?」

ヒトハとカミラが人類の戦争について話し合っているのを聞きながら、私はモー乳を飲みソファにもたれる。

『避難しようとする動きはありません。ですが何時、何処が攻撃を受けるか不明なため各国の国民もどうすればいいか分からない状態のようです。その結果、大半の国民は環境の整っている都市や町から避難する事を躊躇い、結局避難出来ずに被害を受けているようですね』

「……何処に逃げてでも巻き込まれる時は巻き込まれる。それなら少なくとも生活に困らない都市部に居ようという事かしら」

私は特に何か感じる事は無かったが、カミラは非戦闘員が巻き込まれる事をあまり良く思っていないようだ。

「カミラ、また国を作って統一でもしてみるか?カミラがやりたいのなら私は止めないぞ?」

カミラは悩む事無く答える。

「……いいえ。私はもうそこまでする気は無いわ……少なくとも今はね」

カミラは私を見て答えた後、ヒトハを見る。

「私はお母様達と暮らすこの生活を気に入っているもの。今は他に何も要らないわ」

「そうか」

「さて、そろそろ食事にしましょうか?何食べたい?」

「肉料理が食べたい」

「分かったわ……待っててね」

カミラが微笑みながらキッチンに向かう。

私達の生活はまだ変わる事は無さそうだ。

四国それぞれの間で行われていた人類の戦争は国同士が同盟を結んだ事により二対二に変わった。

だが二対二になった所で大して状況が変わる事も無く、その後も戦闘は続き各国は急速に疲弊していった。

「私から見ると毎回同じような事で争い、数を減らしては元に戻る。という事を繰り返し返しているだけに感じる」

「私もそう感じる事はあるけど……寿命の短い種族にとってはそうでは無いでしょうね」

『人類の歴史は大体同じような事の繰り返しです。戦争を行い数を減らしては復興し、平和を大事にと叫びながら発展したかと思えば再び争うのです』

月の拠点で放送を横目に私は二人と語り合っている。

放送は戦争が始まってからのどの国の放送も連日戦争の事を放送しているが、一国だけ、魔工国ガンドウの放送だけは一時期されていなかった。

戦闘に巻き込まれて魔放送設備が消滅したらしい、予備の設備を使用して放送が始まるまでの間放送が途切れていた。

どの国も戦争を続け、繁栄していた各国は衰え、かつての姿は無くなった。

そして私達が本格的に人類の滅びを感じ始めた頃、ようやく人類の戦争は終結した。

どの国も疲弊しているというのに戦争を止めようとはせず、私はこのまま人類が復興不可能なまでに数を減らしてしまうのではないかと思っていたが、どうやら止まったようだ。

終戦を呼び掛けたのは森林国家ユグラドだった、そして各国はすぐ

にその提案に乗ったのだ。

喧嘩をして謝るに謝れなかった子供達のために、最年長であったユグラドがきつかけを与えたとも言えるかもしれない。

戦争期間としては過去の物より長くは無かったが、兵器の威力と都市部を攻撃した影響で人類の数は激減した。

それでも戦争さえしなければまた増えて行くだろう。

戦争は終わったがどの町もボロボロ、というよりも魔道戦略兵器の威力で消滅していて、復興は今までに無いほど厳しい状態だとヒトハからの報告を受けた。

「それでも復興を始めたか。まあ、現状ではするしかないからな」

『はい。各地で協力して復興に力を注いでいます』

「戦争は終わった訳だし、放って置けばまた元に戻っているわよ」
カミラが本から顔を上げて口を開いた。

「そうだな。ヒトハ、復興がある程度終わったら教えてくれ」

『かしこまりました』

取り敢えず町に行くのは後にするとして別の話をしよう。

「国民はこの戦争の理由を知っているのか？」

私がそう言うとかミラが反応する。

「王同士の不仲が理由の一つにあるって事？」

「そうだ。そんな理由でも国民は命を懸けて戦うのか気になつてな」

『各国の国民への説明や情報放送にその理由は一切入っていません』

「そういう所は良い連携するのね」
カミラが呆れたような声を出した。

『実際にその理由が知られた場合、もしかすると今回の戦争は起こらなかったかも知れません。ただ、それ以外にも意見の食い違いや利益の分配などの問題は残っているため、今回を避けていても遅かれ早

かれ戦争にはなっていたでしょう』

「意見の食い違いや分配を戦争の結果で決めようとしている訳じゃないだろうか？」

『話し合いで決めようとはしていますね。ですがどこの国も折れる事は殆ど無く、かなり長く荒れるようです』

私の疑問にヒトハが答え、さらに続ける。

『大体は森林国家ユグラドが折れる様です。それでも残りの三国が言い争いを続けている事があり、今回の戦争は長期にわたってそれが続いた結果だと思われます』

「ユグラドは他の三国の争いに巻き込まれただけなのかしら？」

カミラがヒトハに問いかける。

『全く無関係と言う訳では無いでしょう。しかしかなりの決定事項に対して妥協し相手を立てているため、私としては事を荒立てずに解決しようと努力していると感じます』

「損をしているな」

私の感想を言うとカミラは私に言う。

「そうね……だけどそれは戦争になる方がもつと悪くなると思ってるからだと思うわ。もし必要だと考えればユグラドだって戦争に踏み切ると思うわよ？」

「戦争を回避する方が被害が大きいと感じた時か？」

名ばかりとはいえ私は町長もしていたし、帝国にもいたが、実際に町の運営や国を動かしていたのは私以外の者達だった。

大まかな方針や最終目的は決めていたがそれを実現する方法と行程を考えていたのは私では無かった。

そういった事も実際にあったのかもしれないな。

「そうね……例えばある種族全体に何か強い思い入れがあつて……それに対して他の種族がその種族にとって許容出来ないような事を要求をした場合「それなら戦って死んだほうがましだ」と思うかもしれないわね」

「なるほど」

「これは個人にも言える事よ。例えば……私であればお母様を裏

切って殺せと言われたら……間違いなく勝てなくても相手に戦いを挑むわ」

「つまり相手に命よりも大事な物があつて、それに危害を加えようとした場合に起きやすい訳か」

私も自分の邪魔をしてくる者や、カミラとヒトハに危害を加えようとする者がいたら、例え勝てない相手でも排除しようとするだろう。

「まあ、よほどの事が無い限りそんな状況は無いと思うけれど……そう言う事かしらね。そうすると場合によっては相手からの要求が変更される事もあるわ。要求によつて得る利益と被害が合わなくなるから、ただ色々と絡んでくるからそのまま戦争になる事も多いけれど」

「人類は大変だな」

問題無ければそのままでもいいだろうし、気に入らなければやらせなければいいだけだと思う。

「お母様？本当に分かつてる？」

そんな事を話ながら夕食までの時間を過ごした。

私は仕事を終えて自宅に戻つて来た。

「はあ……。戦争は終わったけど各国の被害は酷いわね……。どうして魔道戦略兵器を使つたりしたのよ……」

アーティア合衆国が、私の母国が最初に魔道戦略兵器を使ったのは間違いない……。そんな事をすればこうなるのは分かっていたはずなのに……。

私はご飯の準備をしてからお風呂に入った、湯舟に浸かりながら今日の事を思い出す。

「気のせいだったのかなあ……」

魔道戦略兵器用の圧縮魔力の溜まりが以前よりちよつとだけ遅い様な気がしたから報告したんだけど……。上には勘違いとか、誤差だとか言われただけだった。

私はお風呂で伸びをして溜息を吐く。やっぱり気のせいじゃないと思うんだけどな……。

でも誤差だと言われれば確かにその程度なのも間違っていないし……。

「明らかに遅いなら聞いてくれるだろうけど、あの程度じゃ言っても無駄だったなー」

愚痴を言い、顔を半分ほど湯舟に沈めてブクブクと音を立ててから、顔を上げる。

「まあ、報告はしたしもういいかー」

私はお風呂から上がってご飯の仕上げにかかった。

世界の被害は甚大だ。これから長い復興が始まる……私もこき使われるんだろうな。

幸い私の居る地域は無事だったし、生き残れただけでもましか……はあ、また明日も頑張るかー。

私達は月で生活しながらイシリスの人類の町が復興するのを待ち始める。

戦争終結から多少時間は経っているが、まだまだ気休め程度しか復興は進んでいない。

被害を出した戦争の期間に対して、復興にかかる時間がかなり長くなる気がする。

無事だった地域に各地から避難民が集まり、捨てられた都市は廃墟になっていくらしい。

現在、私は庭で二人と共にのんびりしていた。

「……思ったよりも酷かったわね。かなり人類の数が減っているわ」

ヒトハから人類の被害の情報が集まるにつれて、その被害の大きさが分かって来た。

カミラはその報告を聞いて呟いた、確かに予想以上に被害が大きかったな。

「大丈夫だろう、人類はある程度数がいけば勝手に増えて行くからな」

これはまず間違いないだろう、実際に惑星イシリスに溢れる程に増えたのだから。

一時的に減ったとしてもまた増えるはずだ。

「……人類って実は戦争が好きなのかしら……？」

カミラがそんな事を言うが、この状況を見るとそれほど間違っていないのかもしれない。

「数が増えると争って減るように出来ているのかも知れないな」

私はふと、人類にそういった何かを組み込まれているのではないかと考えた。種を繁栄させるために数を増やし、繁栄しすぎれば自ら殺し合い数を減らす。

もしそうなら上手く出来ている。

「だとすると定期的に争って数を減らすのは本能って事？」

「今思いついた事だ。根拠など何も無い」

「動物だったか魔物だったかは忘れてしまったけど、お母様が言ったような本能を持っている種がいたのを覚えているわ……人類が似たような本能を持っていたとしてもおかしくは無いわよね？」

「確かに同じような本能を持っている可能性が無いとは言えない。ただ、その可能性はかなり低そうだ」

「でも、こうなる前に誰も止めないのはおかしいと思うのよ……大勢が戦いたくないと思えば止まると思うんだけど……」

「止まらずにここまでしてしまうのは、そうなるように出来ているから、と言いたいのか？」

「もしかしたらだけどね」

例え真実を知る事が出来なかったとしても、こうやって色々予想するのは楽しい。

「しかし私も戦闘は嫌いでは無いし、カミラも幼い頃から戦闘が好きだっただろう？ 私達も人類の事を言えないぞ」

そう言うときカミラは笑って言う。

「ふっ……そうね、暴れるのも殺すのも楽しいわ。お母様の影響で普段は落ち着いているけれど……もしもお母様に拾われなかったら好きなように暴れて、いずれお母様に出会って殺されていたかもしれないわね……」

「どうかな？ カミラも地上の他の種族や魔物とは違う珍しい存在だからな。私がそれに気が付いたら生かしておいたと思うぞ？ 扱いは今とは違ったと思うが」

「もしそんな出会いだったらどんな関係になっていたかしらね？」

どんな関係か、か。

「話を通じるなら友人になってたかも知れないし、話を通じなかったら奴隷化して珍しい研究対象扱いだったかも知れない」

「……なるほどね」

カミラは指を口元に当てながら言葉をこぼす。

私に会わなかったカミラを見る方法が無い訳では無いが、今のカミ

ラが消えて無くなるかも知れないのでやる気にはならない。

別の時間に居るカミラになら今のカミラと共に会う事も出来るだろう、そこに別の私は居ないようだが。

「また戦争前の状態にまで増えるのにどれだけ時間がかかるかしら……」

私が余計な事を考えていると、カミラがそんな事を口にする。

「復興自体は急げば急いだけ早く終わるが、人類が数を増やすのは急げば早くなる訳では無いからな」

安定した環境で時間をかけなければ人類の数は増えない。

子が生まれるにも、生まれた子が子を産むためにも必ずそれなりの時間がかかる、家畜であつてもそれは大きく変わらない。

どこかの世界にはどんな増える種族も居るかも知れないな。

「……数百年で同じ程度まで増えるかしらね？」

「私は人類がどの程度の時間をかけてここまで増えたのか把握していないから何とも言えないな」

これからも私は特に気にする事は無いだろう、もし必要な時はヒトハに頼んでみるか。

「う、それを言われると……。私もハッキリとは把握していないけれど多分数百年……。だと、思うけど……」

カミラも分かっている事認め、言葉が弱気になる。

『主様。私が人類から得た情報では亜人種族独立戦争が行われていた頃は今から約千年程前の事のようにですが……』

ヒトハが良い情報をくれた。亜人種族独立戦争は確か、国を作った亜人種と人の戦争だったか？

「そうすると森林国家ユグラド、魔工国ガンドウ、獣王国カルガの三国は建国から約千年。当時争っていた国の名前はルセリアだったか？その国はその後滅んだはずだから……」

「ルセリア神王国はアーティア帝国が滅ぼしたのよ、お母様」

カミラが私に言う。

「そうだったな、思い出したぞ。そしてアーティア帝国も無くなりアーティア合衆国になった訳だ」

「合衆国が何年経っているかは分からないわね」

「私がカミラに出会ったのはそれよりも前だ、カミラは千歳以上と言う事だな。私が人類と会ったのは更に前だが、それほど長い時間は経っていないはずだ」

「それでもお母様の正確な年齢は分からないわね」

「休眠前にどれだけの時間を過ごしていたか分からないからな。一万数千歳だろうか？いや、そもそも私が気が付く前の事が一切不明だからな」

「気になる？」

カミラは私を見て聞いてくる。私がああ瞬間生まれたなら関係無いが、色々おかしい私の事だ、気が付く前から存在していた可能性もあると思う。

「以前は気になっていたが今はどうでも良いな。勿論分かるならその方が良いが、今の私はそれよりもこれからの事が楽しみだ」

私の正直な気持ちだ、少なくとも執着する事は無い。

「私もこれから何があるのか楽しみだわ」

「何事も無ければ穏やかな日々がずっと続くかもな」

「それならそれでもいいわよ」

カミラは微笑んで言う、私はモー乳を一口飲みカミラ達と会話を続けた。

人類が大幅に減ってから百年程が過ぎたと思う。

各国の人間の数はある程度増え、各地の廃墟と化した都市の建て直しが始まり、再び世界中に人が散り始めた。

「それなりに人類の数が戻ったな」

「そうね。後は一気に増えるかしら？」

『一定の環境下において生物が突然大量に増えるのは時々起こる事です、人類も条件が揃えば同じように増えるかもしれません』

リビングの放送では復興の進み具合と、これからの計画などが放送

されている。

この受信魔動機も人類が完全に復興を遂げたら新しい物に変えよう。

ヒトハは最近では情報収集をあまりしていない。

復興中で特に知りたい事が無い事と、ヒトハが私達の傍にいる事を望んだからだ。

私に対して自分の望みを言う、いい傾向だ。私は彼女の望みを尊重し私が必要だと思う事が無い限り自由にする事を許した。

ヒトハは私の傍に常に浮遊して付き添うようになり、私とカミラとの会話が増えた。

以前と比べてヒトハは話し方が変わった。説明しにくいのが、ただ物を伝えるだけだった言葉に変化が現れているように感じる。

ヒトハがまた少し成長した事を嬉しく感じながら、私は二人と日々を過ごす。

あれから更に百年程が過ぎた。現在人類は見事な復興を見せ、以前のような繁栄を取り戻した。

「以前の様な状態まで戻ったわね。早かったのか遅かったのかは……何とも言えないけれど」

「私は思ったよりも早いと感じたな。近い内にイシリスへ降りて最新型の受信魔動機を買おうか」

『以前から主様は交換したいと話していましたからね。情報を集めておきましようか?』

「いや、今回は必要ない。店頭で見て決めようと思う、カミラとヒトハも一緒に見て決めないか?」

ヒトハの申し出を断り、皆で店に買いに行く事を提案する。

「良いわね。ついでに他の店も回りましようよ」

『お二人とお買い物ですか。楽しみです』

二人も乗り気のような、カミラはきつと服屋だろうな、私も新しい本と魔道書庫のカードが作られていないか確かめに行こう。

「どうだ……?」

「駄目です……作動しません」

俺は頭を抱えなくなった……二百年程前、人類は戦争を起こしお互いに魔道戦略兵器を撃ち合った。

そして人類はその数を急激に減らし、一時期危険な状態にまでになつたらしい。

だが人類はそれを乗り越え、こうして復興したと言う事だが……ここ十年程で魔道兵器の調子が徐々に悪くなり、つい最近とうとうまともに作動しなくなった。

「原因は……分からないよな……だからこうなつてんだからな」

「はい……すみません……」

俺の苛立つ声に謝る彼、おっと不味いな……彼が悪い訳じゃないのに。

「謝らないでくれ。俺が悪かった……原因が分からず気が荒れていたようだ」

「いえ……この状況では仕方ありませんよ」

上の奴らは原因を調べろと言うが……これは魔道兵器の欠陥じゃない、一から全て何度も何度も複数の人員で確認したんだ。

これで魔道兵器の欠陥だったら俺達は全員辞職してやるさ。

「私は魔力の問題ではないかと思っっているんですが……」

彼が俺にそう言ってくる。魔力ねえ……確かに圧縮魔力の溜まりがここ十年程で大分遅くなった。

「魔力の問題か……思いつくのは魔力の変質……後は枯渇だが……あり得るのか？」

魔力は確認は出来ないが世界中に溢れている。

今までなくなるような事は無かったし、誰も魔力が無くなるなんて考えちゃいない。

「魔法使い達にも話を聞いてみましたが……今の所魔法を使えないという事は無く、魔力に違和感を感じる事も無いそうです」

「あー、わっかんねえな……。魔法使い達も分からないような変質が起きているとか、考えたくはないが単純に魔力が減っているか……」

どちらにしても原因を調べる事は難しい、そしてもし原因が分かつたとして、人類にどうにも出来なかつたらどうするのか……。

「俺達は魔道兵器の開発と研究をしているだけで魔力に関しては分かかんねえんだよな……」

「あの……実はつい最近、私の知り合いの魔法使いにも相談したんです。それで、その時こっそり教えてくれたんです……魔法使いは魔法を使う技術が高いだけで魔力に関して知っている事は……殆ど無いそうです」

「何だよそりゃ……」

俺は内心冷や汗を流した……今まで散々使って来た魔力の事を、人類は何一つ知らない可能性がある事に……。

「そもそもどうして魔力がある事が分かった？……この技術を作り出した始祖達は何か知っていたのか……？」

「その始祖達に師がいたって記録が残っているらしいですけど……」

彼も連日の検査と原因の特定で疲れているのか話を始めた。

「本当にそんな奴がいたとしたら魔力の事を聞いてみたかったぜ」

「上にはなんと報告しますか？」

「魔道兵器に問題は無いと伝える。恐らく魔力の問題で、俺達は魔力の専門じゃない事もな」

「納得しますかね？」

「辞職する事になるかもしれないが……問題無い物は問題無いし、分からん事は分からん。大人しく引退するよ」

この問題が起きているのが俺達の国だけなのかが知りたいな……。

「ただいま戻りました」

休憩に行ってたやつらが戻って来た、もう一度だけ最初から確認するか……。

俺は魔道兵器研究所を辞職した。

金は十分稼いでいたし、何よりも他国の魔道兵器研究者と話が出たからだ。

そして俺は各国の相応の地位にいる研究者達に手紙を送り呼び出した。

内容はたった一言「大型魔道兵器が作動しない事について話し合いたい」と書いた。

これは賭けだった。でも、もしも世界規模でこの状況が起こっているなら必ず彼らは乗って来る。

何故なら俺も彼らも研究者だからだ。

そして俺は賭けに勝ち……郊外に用意した俺の別邸に各国の研究者が集まった。

「集まってくれてありがとう……早速俺が今回皆さんを集めた理由をお話します」

俺は大型の魔道兵器が十年ほど前から異常を起こし始めた事から、最近作動すらしなくなった事までを話した。

すると各国の研究者達も同じ状況でありこの現象が世界規模である事が判明した。

俺はこの現象を解明するために国を越えて協力したいと申し出た、彼らは快く協力を約束してくれた。

こうして俺はこの別邸に住み全員のつなぎ役となった。原因を特定するために様々な情報を集め、特定の日に集まり話をする事を決めて解散した。

「くそ……」

俺は部屋のソファに倒れ込みながら呟く。

各国の研究者に協力を頼んでから、俺も皆も出来るだけの事はして来たが、未だに原因が分からない。

情報を集めようにも魔道兵器が動かなくなるという現象しか分からない。俺達は魔力を見る事が出来ないし周囲の魔力を感じる事も出来ない。

魔法使いは体内の魔力であれば多少感じる事が出来る様だが……残念ながらそれだけで何も有効な情報は得られなかった。

俺も今まで何も考えず、当然のように魔力を使って来たが……本当に人類は魔力の事を何も知らなかったのだと思いついた。

協力してくれている研究者達も諦めてはいないが何一つ進展はなく、きっかけすらも掴めていなかった。

「嘘だろ……」

ある日、協力者である研究者の一人から魔力を多く消費する他の魔道兵器も不調になり始めていると言う情報を貰った。

今は少し違和感を感じる程度だが、現在動かなくなっている魔道兵器の時と同じ現象である事を確認したとの事だ。

「……隠していたら取り返しがつかなくなるかも知れない……」

俺は協力してくれている研究者達に各国に連名で報告して欲しいと相談した。

状況は少しずつ悪くなって来ている。

国にこの問題を認識させ、人類全体で解明しなければ取り返しのつかない状況になるかもしれないと自分の考えを説明した。

皆は俺の考えに賛成してくれた、それから全員がすぐに集結し、連名の報告書を複数作製した。

そして俺達が一斉に報告書をそれぞれの国に送ると、効果はしっかりと発揮された。

各国の優秀な研究者である彼らの連名の報告書は重く受け止められ、ようやく国はこの事態を把握する事になったのだ。

「二人とも、明日イシリスに降りようか」

私はカミラとヒトハに提案した。

「行くのね、良いわよ」

『主様のお好きなようになさってください……私も楽しみです』
事前に話しておいたから話が早いな。

「明日朝食をとってから向かい、それから夜まで町で過ごそう」

「分かったわ」

『分かりました』

私とヒトハは睡眠が不要だがカミラは寝るからな。

「行くこうか」

翌日の朝、食事を終えた私達は早速イシリスに転移する、今回行く場所は魔工国ガンドウだ。

転移は問題無く出来たが、すぐ私は違和感を感じた。

周囲の魔力が以前来た時より薄い。

「お母様、魔力が……」

カミラが私を見て言う、その表情は困惑気味だ。

「以前降りた時はここまで魔力は薄くなかった、どういう事だ？」

『私には魔力を測定する機能がありませんので分かりませんが……
それほどに差があるのですか？』

ヒトハが私に尋ねる。彼女は魔力を使用する事は出来ても感じたりする事は出来ない、分からないのは当然だ。

「かなり薄くなっている、この状態がこの辺りだけなのかは確かめなければ分からないが」

「世界の魔力が減っている……？」

カミラが呟く、取り敢えず今日は町を回ろう。

「二人とも今日は町を楽しもう、この事はまた改めて私が確認してみよう」

私はそう言って町へと歩き出す、二人も私について来た。

町を夜まで楽しんだ私達は拠点へと戻った。

カミラは新しい服を、私は本と魔道書庫カードを買った、そして三人で受信魔動機を見に行き、最新型に買い替えた。

金は以前換金した物を使ってしまったが、大分古い硬貨だと驚かされただけで問題無く使えた。

私は新しい受信魔動機を設置してから二人に言う。

「私は今からもう一度イシリスに行って魔力を確認して来る」

「手伝う事はある？」

「各地を回って確認するだけだから大丈夫だ」

「そう、気を付けてね」

『いってらっしゃいませ』

「行って来る」

二人の言葉に返事を返し、私はイシリスへと転移した。

魔工国ガンドウの上空で魔力を調べる、人類には来られない高度なので騒がれる事も無い。

私は周囲の魔力が町と変わらず薄い事を確認すると高度を維持したままイシリス中を飛んで回る事にした。

それからしばらく私は世界中を飛び回り、魔力の状態を調べた。

その結果、この状況は一部の地域だけではなく、この惑星全てで起こっているという事が分かった。

この状態が一時的な物なのかどうか知りたい所だ。

しばらく様子を見て回復する事が無ければ本格的に調べてみよう。

私は気にはなっているが、危機感は一切感じていない。
カミラもヒトハも私の構成物を所持しているので魔力も魔素もその場で補給出来る。

もしこの星から魔力が無くなったとしてもあの二人には関係無いからな。

私の体は便利だ、分け与えても減っているようには感じないし、戻せば素直に同化してくれる。

人類にも一度くらいは警告しておこう。

魔力が希薄になってきている事が原因で人類側に何かしら問題が起きているかも知れない。

もし何か起きていれば私の手紙を気にする者も居るだろう。

「手紙？」

「はい、研究室にいつの間にか届いて居まして……」

「いつの間にかって……ん？差出人の名前が書いていないな」

今時手紙など誰が……私は手紙を開封し中身を読んだ。

「何だこりゃ？」

そこには世界中の魔力が薄まっている事と念のため魔力の使用を控えた方が良くと書かれていた。

そんな事がなぜ分かる？全く……ただでさえ魔動兵器が動かなくなつて大変な状況なのに、こんな質の悪い悪戯をするとは。

「何でした？」

「ただの悪戯だったよ」

私は手紙を机に放り投げて仕事を再開した。

俺達が連名で報告書を送った後、国も事態を把握して動き始めた、俺は研究所に戻りはしなかったが独自に調査している。

各国の研究者達とは今も連絡を取り合って協力体制を維持していた。

現在、俺はその中の一人から送られて来たある手紙を読んでいる、彼の研究所へ送られて来た差出人不明の手紙らしい。

その手紙には世界中の魔力が希薄になっている事、魔力の使用を控えるようにした方が良いと言う警告が書かれていた。

「魔力の減少……俺達も考えた事だ」

ただ俺達はそれを確認する術がない……果たして本当なのか？俺達が把握出来ない魔力の状態を知ることの手紙の人物は誰なのか？

皆にも手を貸して貰おう。

……分からないのなら分かる物を作ればいい。俺は魔力の濃度を測定する魔動機……魔力濃度測定魔動機を作るため協力体制にある研究者達に協力を求めた。

手紙は出しておいたが信じる者は居るだろうか。人類は魔力を使う事は出来るが見る事が出来ない、魔力の濃度を感じる事も出来ないだろうし、難しいか？

「放送では魔力の事についてはまだ伝えて無いわね」

カミラが放送を見ながら言う。

「混乱を避けるためか？もしこのまま希薄になるようなら、いずれ国民が使う魔動機や魔道具にも影響が出るはずだ。いつか必ず知られてしまうと思うが、それでも隠すのか？」

「隠しきれなくなれば知らせるでしょうけど、今の時点では公開するつもりは無いよね」

『知らせた所で国民は騒ぐだけで恐らく役に立ちませんからね』

「騒ぎが起こるだけで何の解決も出来ないなら、言わない方がましだもの、気持ちにはわかるわ」

確かに知らせた所どころでどうにかなる訳では無い。大々的に魔力の使用を制限する時には情報を公開する事になると思うが、現時点では知

らせても面倒が増えるだけな気はするな。

ただ、人類の世界は誰かの閃きで一気に変わる事があるからな、どうにもならなくなったら情報を公開して広く意見を集めてみるのも良いかも知れない。

《次の情報です。先の戦争において大きな被害を引き起こした魔道戦略兵器や大型の魔道兵器を廃棄する事が四国間会議で正式に決定しました、先日各国の代表の連名で「世界の平和維持のために大きな破壊を生む兵器を廃棄する事を決定した」と発表しましたが……》

「世界の平和のために、ねえ……」
放送を見ながら、裏の事情を知っているカミラは呆れたように呟いた。

『起動しない魔道兵器の最後の使い道ですね』

各国は全く起動しなくなった魔道戦略兵器や大型魔道兵器を廃棄する事を決定した。

兵器を維持しているだけでも費用が掛かるといふ事もあるが、万が一にも動かなくなっている事が国民に知られる事が無いように処分してしまおうという思惑もある。

世界平和のためと言う彼らの言葉も全くの嘘では無いだろうが、実際は証拠の隠滅だと思う。

問題無いのか、元には戻らないのか、魔力の事がはつきりと分かるまでは気にしながら過ごそう。

惑星イシリスの魔力の変化を確認しながら過ごしていた私は、リビングで二人と話し合っていた。

「お母様……イシリスの魔力は確実に減り続けているわ」

「そうだな、魔力が減り続けているのはもう確実だ」

『このまま減り続けた場合、魔力がイシリスから消えてしまう可能性があるので無いですか？』

惑星イシリスの魔力を確かめながら過ごし始め、それなりに時が経った。

僅かずつではあるが魔力の減少は止まる事は無く、現在も減り続けている。

「私は原因を探る、二人も何か気が付いた事があれば教えて欲しい。推測でも構わない、何かのきっかけになるかもしれないからな」

「分かったわ、私も魔力は感じる事が出来るし気が付いた事があつたら伝えるわね」

『私は得た情報の中に何か無いか探してみましよう』

「頼む」

私はそう言つて席を立つ、もう一度世界を回つてみよう。

惑星イシリスの上空へとやって来た、希薄になった魔力に変化は無い。

月にいたままでは何も分からないだろうと思ひやって来たが、何を調べればいいのかも分からんな。

私は空中に浮いたまま考える。

取り敢えず魔力が減っているのは人類が魔力を大量に消費している事が原因であると仮定しよう。

そうだとすると、世界の魔力の総量は決まっていて、それを使い果

たしそうになっているという事がまず思い浮かぶ。

これが原因だとしたらもうどうにもならないな、減る一方なら使用量を減らした所で延命にしかないら、いつか必ず枯渇するだろう。

後は外部へと魔力が流出している可能性か。

宇宙へと流出していたり、私の様に他の世界を知る者が奪っている可能性、それは流石に無いかも知れないな。

宇宙に流出していた場合、現在の人類で止める事が出来るかと言われれば難しいだろう。

現時点で人類は宇宙へ到達する事が出来ていない。いや、宇宙に行こうという考え自体持っていないかもしれない。

他者に奪われている場合も人類に対処する事は不可能だろう、少なくとも相手は世界を越える術を持っているのだから。

それだけの事が出来る相手に現在の人類が勝てるとは思えない。

仮説を確かめて行こうか、まずは簡単に調べられる宇宙への流出からにしよう。

私はイシリスの周囲の宇宙へと上昇し魔力の流れを調べる、またイシリスの周囲を回るか。

流出は無かったな。それ所かイシリス内で完全に遮断されていて全く宇宙へと漏れていない、見事なものだ。

周囲を回り調べた結果。全く流出していない事が確認出来た。

私の調査が間違っていない限り、宇宙への流出が原因では無いな。

次は魔力が奪われている可能性だが、魔力の動きからはそのような痕跡は無い。

他の次元や世界からの干渉も感じられない。いや、私を騙せるほどの相手である可能性もある。

しばらく色々確認してみよう。

私は抜け道は無いか、秘匿されていないかを時間をかけて調べ始めた。

どこかから奪われている可能性は恐らく無いな。

色々確かめてみたが何の問題も無かった、これで気付かれない様に奪われていたら私の完敗だ。

今の私では無理だったという事だな。

後は、地上や地下の何処かで異常に魔力が消失している場所などが無いか探すか。

念の為カミラにも確認して貰おう。

『カミラ、少し手伝って欲しいのだが』

私はカミラに念話をした。

カミラと手分けしてすべての国と地域を回り確認したが、人類が大量に魔力を消費しているだけで他の原因は見つからなかった。

「お母様、他に何か手伝う事はある？」

「いや、後は地下だからな。カミラはそこまで感覚を広げられないだろう？」

「惑星の地下全ては確実に無理ね……じゃあもう月に帰るわね？」

「ああ、ありがとう」

私はカミラの頭をひと撫でする、カミラは微笑んで転移していった。

地下を調べて行くか。

『主様、よろしいですか？』

地下を調べて行くこうとしたその時、ヒトハから念話が来た、私は彼女に答える。

『大丈夫だ、どうした？』

『人類の情報には魔力やそれに関する物がほとんど無く、有効な情報を見つける事が出来そうにありません……』

人類はずっと魔力を気にする事無く過ごして来たようだから難しいか。

『調べる事は続けますが……有効な情報を得る事はかなり難しいと思います、申し訳ありません……』

『お前が謝る事は無い。それに得られる情報が無いという事が分かるのも立派な情報だ、余計な手間が省ける』

『……ありがとうございます』

『まだ全て調べていないんだろう？残りも頼むぞ』

『かしこまりました』

彼女の返事を聞いて念話を切る、魔力は薄くなったがああ二人なら念話も余裕でつながるな。

魔力に依存しない念話も教えてあるが使うかどうかの判断は二人に任せている。

私はそんな事を考えながら地下へと感覚を広げて探る、宇宙への流出を調べた時は念の為私自身が世界を回ったが、地下を掘り進みたいはない。

私はそのまま惑星の地下を調べる、すると地下深くに何かがある。

イシリス中の地下に、点々と家程の大きさの魔力と魔法の反応が散らばっている、私は詳しくその反応を調べようとした所で気が付いた。

これは人類がない頃に建てた私の拠点だ、完全に忘れていた。

地下に点々と存在する反応は、以前私が建てた家だった。

世界中で暮らすために家を建てた後、そのまま解体する事無く私は一万年休眠していた。

私が再び活動するまでの間に全て地下に沈んだのか。

今回の事には関係なさそうだな。

私は自分の家を無視して他に何か無いかを探すが、特に何も見つからなかった。

地下にも原因になりそうな物は無かったか。

何が原因だ？本当に限りある魔力を使い切ってしまっただけなのか？

調べて原因と思われる何かが見つからなければその結論に至るしかないのだが、何かを見落としていないだろうか？

私は一度帰る事にした、他に何か原因となりそうな何かが無いか考えてみよう。

「お帰りなさい、何か見つかった？」

月に戻った私にカミラが尋ねる。

「いや、地下にも魔力減少の原因になりそうな物は無かった」

私はそう答えながらソファへと座る。

「そう……それなら単純に魔力が尽きただけなのかしらね……？」

カミラはそう言うともー乳を出してくれた、私はそれを一口飲む。

「それならそれでもいいのだが、私はもう少し他の可能性を考えてみる」

「何か手伝える事があつたらまた言つてね」

「そうするよ」

カミラと会話しながらその日は翌日までゆっくりと過ごした。

月の拠点に帰り色々原因の事を考えているとヒトハがやって来た。

『主様、私が持っている情報の中から魔力に関連する物をまとめておきました……どうぞ』

ヒトハは情報のまとめられた紙を五枚差し出してくる、かなりの量があるはずのヒトハの情報の中で魔力に関連する物はこれだけなのか。

「ありがとう、良く集めてくれた」

『お役に立てたのなら嬉しいです』

ヒトハは頭を下げるように縦に動く私の横の定位置にやって来た。

私は早速ヒトハの持って来た情報が書かれた紙を読み始める。

読み進めるが本当に大した事が書かれていない、無限の力、人が使える神の力などの様な物ばかりだ。

この様子ではヒトハの頑張りが無駄になりそうだ。

ヒトハの苦労にあわなれないと思いつつながら読んだ次の内容に私は目を止めた。

たった数行の内容だったが「魔力が尽きないのは何か魔力を生み出しているからだ」という内容だった。

私はその文を動かさずにじっと見つめる。

もう一度確認しよう。

『主様?』

私は立ち上がると外へと出て行く、向かうのは世界樹の所だ。

『主様、何か気が付かれたのですか?』

「ああ、私は以前それを見ていた。魔力と魔素の関係を」

私達は世界樹に向かいながら会話をする。

『魔力と魔素ですか……？』

「そうだ、魔力はヒトハも使っているしカミラも感じる事が出来るが、魔素は今の所私以外には見る事も感じる事も出来ないようだな」

『そこに何か原因が？』

「私の考えが間違っていないければな」

私は世界樹の元へやって来た、世界樹が喜んでいる気配を感じながら魔力と魔素を見る。

世界樹は月の拠点内の魔素を吸い、魔力を放出していた。次は他の樹を見に行こう。

私は拠点内の森へと向かう、背後で世界樹がさわさわと鳴った。

森に着くと私は樹を見て行く、魔素を吸い魔力を放出する樹とそうでない樹がある、なるほど。

次は家畜だ。

家畜達は僅かな魔力を吸い僅かに魔素を出していたが、魔力を吸わず魔素も出していない種類もいた。

後は魔物だな。

私はマジックボックスに収納されていた生きた魔物を取り出し確認する。

魔物は魔素を吸い魔力を出している。

「帰ろう、まだ推測だが原因が分かったかも知れない」

『かしこまりました』

私はすぐに帰るためヒトハと共に転移した。

『カミラ、家に来てくれ。原因が分かったかも知れない』

『すぐ行くわ』

私は家に転移した後カミラを呼び出す、ソファにマジックボックスから飲み物を出して座ると、すぐにカミラがやって来た。

「あら？お母様が用意してくれたの？」

用意してある飲み物を見てカミラが言う。

「たまにはな」

「それで、原因は何？」

「まだ過程ではあるが、話そうか。私自身も忘れていたが、簡単な循環だったんだ」

私はカミラとヒトハに話し始める。

「この世界の一部の植物や動物、魔物は魔素を吸い魔力を放出する」

「魔素ってお母様がだけが分かるあれの事？」

「そうだ、そして魔力が使用されると魔素を放出する」

その言葉を聞き、ヒトハとカミラはそれぞれ呟く。

『魔素を吸い、魔力を放出する木々と動物、そして魔物……』

「人類によつて森は全て失われ、魔物は一部を残して狩り尽くされていく……」

「分かったか？ 私は現在の魔力の減少が起きたのは、魔素を魔力に変える存在が極端に減った状態で、魔力を大量に消費している事が原因では無いかと考えている」

「なるほど……」

私の言葉を聞きカミラは呟く。

「二人は分からないだろうが、惑星イシリスの魔素は以前より濃くなっている。魔力の減少ばかり気にして魔素を全く気にしていなかった私の落ち度だ」

そこから気が付ければ良かったんだが。

『魔力だけが使用され魔素になっているために濃くなっていると……？』

「恐らくな、魔素を吸い魔力を発生させる者と魔力を使い魔素を発生させる者。人類が森や魔物をほぼ全滅させた事でその循環が破壊された」

「魔力は増える事が無くなり使われるだけとなり……それでも残っていた魔力で維持して来た、けれど限界が来た……そういう事？」

ヒトハに返した私の言葉の後にカミラが続く。

「きつと人類が森を消し魔物をほぼ全滅させた時点で始まっていた

んだろう。この説は私がヒトハのまとめてくれた情報から魔力と魔素の関係を思い出し、調べた事実から推測した内容だが、それほど間違っていないと思う」

「それで……どうするの？」

「特に何もする気は無い、私が魔力を世界に満たせば助かるだろうが、そこまでしてやる気も無い。個人に多少肩入れはしても種全体に肩入れはしない、気まぐれにするかもしれないが」

「知らなかったとはいえ森を消し去り魔物を減らしたのは人類だ。魔力に興味を向け、調べていけば間に合ったのかもしれないが。」

人類が土地を放棄し、状態を元に戻そうとした所で元に戻るかどうかも分からず、仮に戻ったとしてもそれまで人類が生き残れるかも分からない。

そもそも魔力が減っている事に気がつかなければ話にならない。

「……以上が魔力濃度測定魔動機での測定結果を元にした魔力の状態です」

俺達は現在四国会議に魔力研究者として参加している、協力して魔力濃度測定魔動機を開発した俺達は、世界の魔力が間違いなく減り続けている事を明らかにした。

そして今。各国の代表の前でその結果を報告した所だ、誰も言葉を発さず静まり返っている……黙っていても現状は変わらないけどな。

「原因は不明です、各国にお願いしたいのは魔力の使用を控える通達です……そして原因の究明に全面的に協力して頂きたい」

各国の代表は魔力の使用を控える通達を行う事と、原因の究明に全面的に協力する事を約束してくれた。

《国からの通達をお伝えします、現在世界中の魔力が僅かに不安定

になっているため、必要以上に魔力を使わない様をお願いします。この通達はすべての国で行われています……」

私達が魔放送を見ていると魔力の使用を控えるようにとの放送が流れた。

「お母様、これは……」

「人類も魔力の減少に気が付いたようだ。感じる者が居たのか、調べる為に魔動機でも作ったのか。どちらにしても優秀だな」

しかしこの通達ではどれほど分かっているか分からない。

本当に大した事では無いと思っっているのか、隠して穏やかな表現にしているのか、どっちだ？

『しかし……主様の説が正しければ、分かった所でもうどうにもならないのではないだろうか？』

ヒトハが私に言う、確かに厳しいが手が無い訳では無い。

「絶対に不可能という訳では無いと思う。今すぐ人類の数を出来るだけ減らして、生きるために必要な最低限の魔力消費だけで数百年から千年程過ごせば、確実に元に戻るとは言い切れないが増えるはずだ」

「それは難しいわね……私やお母様ならともかく、そうしなければ減ぶと分かっていたとしても実行出来る者が人類の中に居るかどうか……」

「その上確実に戻るかも分からないからな。人類の事だ、何か驚くような解決方法を見せてくれるかもしれない」

「今回は難しそうだけれど……無いと言い切れない所が人の凄い所なのかもしれないわね……」

さて、これから人類はどうするのだろうか。

人類の国が魔力の現状を知り、使用を控えるように通達してから時間が経ち、その間も私は魔力の状態を確認し続けていた。

「人類は本当に魔力の使用を控えているのか？」
私がそう口にした原因は魔力の状態にある。

魔力の使用を控えるように通達された前と後で減る速度が変わっていないからだ、これでは使用を控えているとは言えない。

「今まで好きなかだけ魔力を使って来たんだもの……控えろと言われても難しいでしょうね」

確か人類……いや、人類だけでは無い、生物は一度良い環境に慣れるとそれ以下の環境に落ちる事を嫌うのだったか？

『各国が行った通達は殆ど効果が無かったようですね』

「強制力の無いただの通達なんてこんな物よ。取り締まって罰を用意しなければ、わざわざ節約して手間をかける事なんてしないわよ」
私はその手間を楽しいと思う事もあるのだが、その辺りは好みだからな。

『人類は現状ほぼ何もしていないと言う訳ですか』

「そうなるわね」

しかしカミラは人の事をよく分かっているな。

私もそれなりに長く人と過ごしていると思うが、理解出来ない事が多い。

どれだけ長く共に過ごしてもこの先ずっと分からないままかも知れない。

そして人類の魔力の使用量が変わらないまま時が過ぎ……ある時、魔力の減少により人類にとって大きな出来事が起きた。

「えっ……!?……失礼しました……ここ、ここで緊急の情報です。」

アーティア合衆国、魔工国ガンドウ間を飛行中の魔道飛行船に異常が

発生し……墜落したようです……都市に落ちた飛行船の乗員の状況や都市の被害についてはまだ分かっておりません……」

魔放送を見ていると魔道飛行船の墜落が放送された。

魔道飛行船の稼働も不可能になったか、魔道兵器が順番に動かなくなっただ、更に減れば消費の多い順にこうなるのは予想出来た。

「恐らくそう時間を空けずに全ての魔道飛行船は稼働しなくなるだろう」

「魔道飛行船の維持が出来なくなる量にまで魔力が希薄になったのね」

私の言葉にカメラが答える。

人類は一番の移動手段を失った、各地の状況はどうなるだろうか。

魔道飛行船が使えなくなり移動が難しくなった影響は大きかった。必要な場所に人員が到着出来ず、各地の様々な場所で問題が起きた。各国は問題無く動いている陸路の交通手段を大幅に増やし、対応したようだがそれでも数が足りていない。

このままではいずれ陸路で使っている魔動機も動かなくなるだろう。

「この状態でもまだ本格的に魔力の使用を制限しないのね……本当に滅ぶ気なのかしら……?」

「魔道飛行船が落ちたんだ、流石に国民も無関心ではいられないだろう。原因を知りたいがるだろうし隠すのはもう難しいだろうな」

「私は出来れば人類には生き残って欲しいけれど……お母様はそこまで気にしていないでしょう?」

「そうだな、滅んでも生き延びてもどちらでも構わないと思っっているが……」

「巫女達の事は良いの?」

カメラは私にそう問いかける、巫女達か。

以前の巫女達なら助けていたかもしれないが現在の巫女達を助け

る事は無いだろうな。

かつて私が狂信者とまで思った信仰心はすでに無く、いつからかただの仕事になっていったからな。

現在に至っても変わらず私を信じ、待っているなら巫女として見る事が出来たし、流石に放っておかなかつた。

だが現在は巫女として仕えている対象が、自由神が何なのか、誰一人知らないらしい。

私とンミナの話が書き残されていたはずだが、それも今では失われているようだ。

かつての信仰心を維持している巫女がいたならその巫女だけでも助けようとヒトハに調べて貰ったが、一人もそのような者は居なかつた。

もし居たのならその巫女だけでも月に連れて行こうかと考えていたのだが。

「お母様？迷っているの？」
考え込んでいたな。

「少し今の巫女達の現状を思い返していただけど、私は今の巫女達を助ける気は無い」

「そう、お母様がそう考えているのなら私が口を挟む事じゃないわね」

『念入りに主様の巫女達の事は調べました、まず間違いはないと思いますが……』

ヒトハは不安そうだな。

「そんなに気にするな、誰にでも失敗はある。私も色々忘れたりしているだろう？特に魔力と魔素の関係を忘れていたのは自分でも酷かったと思っている」

『主様は頂点に居られる方ですから、何も問題ありません。私は役に立たなければどうにでもなる存在ですから』

「私はお前が敵になら無い限り、処分する気は無い」

『主様……』

「お前がいつか心から何かを望んだなら、私にその望みを聞かせて

欲しい、嘘偽りなく正直にな」

『……はい、主様』

その時は彼女の意思次第だが出来る限りの事はしてやろう。
私の隣ではカミラが微笑んでヒトハを見ていた。

魔道飛行船が使用出来なくなった後、人類は陸路と海路を充実させる事にしたようだ。

魔道船と魔道車は魔道飛行船が登場してから数を減らしていたが、再び多く作られ運用された。

その努力もあり世界の交通手段はある程度は確保された。
それを月から見ていた私達は、この状態が長く続かない事を感じていた。

一つ一つの魔力消費は少なくても数を増やせば同じ事、数を増やすぎた魔動機は魔力の消費を魔道飛行船があつた頃と同じ程度まで増やしていた。

人類は以前より確実に衰退はしていたが、再び安定し生活をしていった。

……。
全ての魔道飛行船が稼働を止め、陸路と海路に移ってから時は過ぎ

ある日を境に食料生産施設や医療設備、そして陸路と海路の交通用魔動機達が次々と稼働を止め始めた。

私達の予想通り、人類の陸路と海路の交通手段と生命線である食料、医療施設が稼働を止めた。

「本格的に人類の危機だな」

「……そうね」

人類の現状をヒトハから聞いた後、私達は人類について話をしていく。

カミラはヒトハから報告を受け始めた時点では各国の対応が遅すぎる事に大分不満を漏らしていたのだが、現在はいつもの様子に戻っている。

人類内でも早々に魔力の使用制限をかけようという話は出ていたようだ。

しかし各国は長年揉め続け、決定が伸びていたらしい。

最終的には交通手段と各施設が停止した事でようやく危機感を持った者達が、各国の邪魔な者達をやや強引にその地位から引きずり降ろして行動を開始したようだ。

その話を聞いたカミラは何も言わなくなった。

「カミラ、思う所はあるだろうが人類には様々な者が居るし色々な事がある、一部の者の行動が世界を滅ぼす一因になる事もあるだろう」

私としては、事が起きてしまっただけでは間に合わないのではないかと考えている。

「ヒトハのあの話を聞いて心底呆れてしまったわ、私もお母様と同じで滅んでも生き残ってもどちらでも良くなったわね」

状況が悪化しているのが分かっているにもかかわらず、長い間そんな事をしていたらカミラだけでは無く大抵の者は呆れてどうでもよくなるかも知れない。

「ヒトハ、人類は全員が現状を知っているのか？」

私はヒトハに尋ねる。

『各国では現在も状況は公開されていません。実際に停止した施設などに関わっていた者やその周囲の者達から情報が広がっています。が、そういった施設から離れている町や村では情報が遅れていると思われると思います』

「そうか、ありがとうございます」

放送を見てみようか。

「カメラ、放送を……」

そう言いながらカメラへ振り向くと、既にカメラが受信魔動機を操作していた。

「お母様、もう放送はされていないみたい」

これは人類にとってはかなりの痛手だな、恐らく様々な連絡手段も使えなくなるだろう。

様々な設備や交通機能の停止、その上連絡手段も無くなるか。

「早く魔力の使用を制限していれば、考える余裕くらいはあったかも知れないのにね……」

放送を映さなくなった受信魔動機を見つめながらカメラが眩いた。

それからの人類の状況は悪くなる一方だった。

食料、医療、交通の施設が停止し、魔力によって支えられていた人類は混乱し始めた。

各国もようやく魔力の使用制限などの対策を広めようとしたのだが、その時には既に遠距離の通信は不能になっていて各地に連絡をすする事が出来なかった。

その後完全に通信が不能になった事で、各地は分断された。

それぞれの国は魔力の回復の研究と魔力に代わる新しい技術の開発も始めていた様だが、間に合うのだろうか。

……俺達はこのまま死ぬのか……？

食料は減り、錬金薬も新しく作った物はまともな効果が無くなっている。

何処にも連絡は繋がらず、魔放送も見る事が出来ないため何が起きているかも分からない……。

どこかに移動し助けを求めようにも移動用の魔動機が動かない。

徒歩で長距離を移動など出来る訳がない……。

ひよつとしたらどこも同じ状況で助けなど無いかも知れない。

俺はどうすればいい……？

私は拳を握り締め自らのふがいなさに歯を食いしぼるしかなかった。

魔力の消費を減らさなければいつかこうなると感じていたのに、こんなにも長く時間を費やしてしまった！

私も……危機感を感じながらも、どこかでどうにかなると考えていたのでしょうね。

もつと早くあいつらを黙らせておけば……。

この時間は間違いなく命取りになる、きっと私達はお終いだわ。

ここまで機能不全を起こしてしまったら、近い内にこの国は無くなる……。

恐らく至る所で物資の奪い合いが起これると思う。

軍が出てくれば一時的には治まるでしょう。

だけど……追いつめられた国民は間違いなく国にも牙を向けるわ。

俺は家族と実家へと戻る、自給自足出来なければきつと全滅してしまおうと感じたんだ。

「あなた……」

「大丈夫だ、俺の実家は食料を生産してる。そこで自給自足出来るようにするんだ」

「でも食料生産の設備も止まってるとって……」

「魔力に頼らずに作るしかない。かなり昔はそうやっていたらしいし、出来ない事は無いよ」

俺は不安を感じさせない様に妻に明るく言うが、内心では不安で一杯だ……。

魔力を使わず、一から食べ物を作る方法なんてろくに知らない。

……それでもやらなければ。娘を、家族を死なせてたまるか！

「映らないなあ……」

魔放送が映らなくなってからそれなりに時間が経ってる。

どうしたんだろう？ 最近はあまりいい事が無い。

食材も大分遅れてる、連絡も通じないし……何か事故でもあったかな？

困ったな……ここは首都からかなり離れてるし、買い替えるにしても結構時間が掛かるんだよね。

はあ……どうしようかなあ……。

僕は受信魔動機を見て溜息を吐いた。

「食料や生活に必要な物を買集めろ、いくら使っても良い」

「かしこまりました」

執事に指示を出し、私はソファへと座る。

まさかこんな事になるとは……幸い私の家は金がある。

そこら中から必要な物を買集めればそれなりに持つだろう。

……正しかったんだな。

魔力の消費を減らさなければ大変な事になると、国が主導して制限

をかけるべきだという話は何度もあった。

だが私達は……いや、正確には一部の利益を求める者達だが……彼らはそれを認めなかった。

私が手を貸していれば彼らを押さえる事が可能だったかもしれない。
い。

そう……可能だったかもしれないんだ……。

私は酒を取り出してグラスへと注ぐ。

「彼らに流されて何もしなかった私が何をいまさら……だな」
私はそう呟いて酒を飲んだ。

魔力に代わる新しい何か……。

すでに引退した私に何を言うかと思えば……やれと言うのならやりますけどね。

……私だって死にたくありませんから。

でも、その何かが見つかるまで……我々は持ちこたえる事が出来る
のでしょうか？

『主様、ご報告いたします』

「頼む」

私は帰還したヒトハの報告を聞く、カミラも私の隣にいる。

『アーティア合衆国、森林国家ユグラド、魔工国ガンドウ、獣王国カ
ルガの四国は崩壊いたしました』

こうなる事も考えていたから特に驚きは無いな。

「魔力の回復と新たな技術の研究開発はどうなった？」

『成果を出す前に国が崩壊し、それ所ではなくなりました。現在各
町や都市はそれぞれに活動していますが、戦闘が得意な者達が盗賊と
なり、数を増やして各地を襲っています』

動くのが遅かったからな。制限や技術の話が出た時点で実行して
いれば、もう少し余裕があったと思う。

「戦闘が得意な者なんてまだいたの？」

『あくまでも他の人類に比べればの話です、私が見た限りでは子供
の遊び以下ですね』

カミラの言葉にヒトハが答える、自分の力で戦わなくなった人類が
強い訳が無いか。

「法具と防珠も使えないのよね？」

久しぶりに聞いたな、個人携帯出来る魔道武器と障壁発生装置だっ
たか？

『はい。現在は現存している剣などの武器や武器になり得る物など
を振るっています。魔法を使える者は戦闘要員では無く、かなり大事
に扱われています』

魔法は少し使えるだけでも大いに生活に役立つからな、現状ではそ
ういった扱いになるか。

もし、親しい友人がまだ生きていたら私は人類を助けただろうか？
友人だけしか助けられないような気もするな。

そもそもケインとミナ、ルーテシアやエルフィなどが生きていたら

こんな状況になどなっていないなかっただろう。

「人類の数はまた減りそうね」

『食料は魔力を使用する以前は生産にかなり手間と時間が掛かっていたようですし、錬金薬も新しく作った物は効果を無くし始めている様です』

「食料の問題でまずは荒れそうね……既に盗賊が居るしこれから本格的に略奪が始まりそうだわ」

『そして飢えで人々は死んでいくでしょう』

私が友人達の事を考えている間にも二人は会話を進める。

「家畜化した魔物に食料を与える事が出来なくなり飢えさせた場合、人に襲い掛かるかもしれないな」

私がふと思いついた事を呟くと二人がこちらを見た。

「忘れてたわ、飼いならされているとはいっても魔物は魔物……自然に発生しなくなっても普通の生物のように増える事は出来るはず」

『人を食料にしてまた増えそうですね』

「その方が魔力の回復には良いだろうな」

家畜にされていた魔物が人類を食料にして増え、人類が数を減らせば魔素を魔力に変える生物が増える事になる。

数が逆転すれば魔力が回復し始めるかも知れない。

それから人類はどうか生き延びていた。

しかし、魔力を使用しない食料の生産が困難で、時間がかかる事が分かれると状況が変わり始める。

力のある者達が食料を独占し、手に入れられない者達が飢えて死んでいく状況になり始めた。

やがて限界を迎えた人々は暴徒となり、食料を独占していた者達を数の暴力で押し潰した。

暴徒となった彼等は食料を奪い、更に暴徒同士で奪い合い、殺し合った。

盗賊が次々と現れては村などを襲い、時には盗賊同士が争った。豊かであった世界は、力のない者達はただ奪われ、死んでいく世界に変化して行く。

現在でもかろうじて使う事が出来る水を出す魔道具や火を出す魔道具、明かりを生む魔道具は莫大な価値を持つようになり、奪い合いが終わる事無く続いている。

世界は荒廃し始め、人類は衰退の一途を辿って行く。

「ヒトハ、大体で構わない。現在の人類の数が全盛期と比べてどれほど減ったか分かるか？」

私はソファでくつろぎながら、隣に漂うヒトハに問いかけた。

「恐らくですが百分の一以下にまで減っていると思います、もっと少ないかも知れません」

「……大幅に減っているわね」

『魔力を使用しない現在の食料生産量で、生存可能な数まで減ったのだと思います。魔力の恩恵の大きさが分かる結果ですね』

ヒトハの言う事は納得出来る、食料が増えないのなら人類の方が減るしかない。

「家畜化されていた魔物は完全に処分されたのか？」

『はい、食料が減り始めた初期の時点で、全て殺され食料になりました』

「私もうつかりしていたが、飼料を用意出来ない程に食料が減っていたら大抵は食べるだろうな」

魔物が人を襲うと思っていたのだがそんな事は無かった。

追いつめられ始めた人類は、早々に全ての魔物を処分し食料にしていたのだ。

『これで人類は完全に道を断たれたのでは……？』

魔物が増えれば僅かではあるが魔力が戻る可能性はあった。

だが、もうこの星に魔物は残っておらず、自然に発生する可能性は

絶望的だ。

魔物による魔力の増加の道は完全に無くなってしまった。

「そう言えばお母様、海の魔物はどうなったのかしら」

「海か」

カミラの一言で私は海の魔物の事を考える、海の魔物は元々数が少なかった上に人間に狩られていたはずだ。

「深海なら、まだ魔物が残っている可能性はあるな」

今更だが海の中を本格的に調べた事が無い事に気が付いた。海に魔物がいれば長期的に見て元に戻る可能性はある、人類は深海には行けない、手を出される事も無いはずだ。

ただ、私はその事に全く興味を感じなかった。

魔物が地上にしよう和海にしよう、私はこれからどうなっていくのかを観察するつもりでいる。

そういえば、移住してから海に入る事が無くなったな。月にも海や湖は作ったが泳いだりはしていない。

「気になるのなら調べてみたらどうだ？」

私は気にしている素振りをしているカミラに提案してみる。

「お母様は気にならないの？」

「興味が湧かないな」

「そう……私は気になるし、ちよつと調べてみようかしら……」

「好きにするといい」

「何か分かったら教えるわね」

「教えてくれるのなら話は聞こう」

カミラは海を調べる事にしたらしい、私はのんびりと過ごす事にしよう。

「お母様、イシリスの海へ行ってくるわね」

私が世界樹の枝の上で本を読み返しているとカミラが私の元へとやって来た。

「気を付けてな、油断はしない様に」

私が答えるとカミラは微笑む。

「どこに実力者がいるか分からないものね」
分かってはいるなら良い。

カミラは私にそう答えた後、転移でイシリスへと転移していった。

お母様に挨拶をした私は、イシリスの上空へと転移した。
……海へ向かう前に少し町の様子でも見てみようかしら？
ここからだ……獣王国カルガの元首都が近いかしらね。
私はカルガの元首都へと向かった。

誰も居ないわね……。
かつての首都は誰も居なかった、食料品店をのぞいてみても中には
何もない。

首都に暴徒が押し寄せたのよね。

私は大通りを歩く……多少荒れているのはそのせいかしらね。
石で出来た家などは荒れているけど、金属で出来た物は殆ど傷つ
いていないわね。

人類が金属に傷をつける事が出来るだけの力を無くしているから
かしら？

魔動機は放置されたままね。

動かなくなったら役には立たないし、加工も出来ないものね。

高い建物が森の樹のように立ち並ぶ街を歩いていく、すると一つの
大きな建物から声がした。

ここはかつて来た事がある。劇場だ、この場所に住んでいる者が居
るみたい。

声に誘われて向かうと劇場前に複数の男がいた、私が更に劇場に近
づくとその男達が私に気付く。

「おい……」

「スゲエいい女だな」

「逃がすなよ、後ろへ回つとけ」

小さい声だが聞こえている、彼らは野盗なのかしら？

「あなた達、ここに住んでいる野盗なの？」

私がそう言うのと男達がニヤニヤしながら答える。

「ねーちゃん俺達の所に来いよ、いい思いさせてやるぜ？」

「やめておくわ、ただ何となく見に来ただけだから」

「残念だけどな……女、逃げられると思ってるなら大間違いだ」

私が断ると目をぎらつかせて立ち上がる、背後にも男達がおり私は
囲まれる形になった。

「素直になれば痛い思いをせずに気持ちよくなれるぞ？」

「大人しく引き下がるなら死ななくて済むわよ？」

男の言葉に私がそう返すと、彼らの表情が怒りに染まる。

「痛めつけてからやってやる！大人しくさせろ！」

一人が叫ぶと周囲の男達が襲い掛かってくる。

……遅すぎる。

「私はお母様のように優しくは無いわよ？」

私は襲い掛かって来た男の腕を無造作に斬り飛ばす。

「へ……ぎやあああああつ!?腕がつ!?俺の腕え!？」

男の肘から先が私の爪によって分割され、バラバラに散らばる。

腕が無くなった事に気が付いた男はうずくまって腕を押さえる事
に必死みたい。

「しばらく苦しんでいなさい」

私はうずくまっている男に声をかけた後、他の男達の片腕を次々に
解体していく。

あつという間に周囲は血と腕であった肉片、うずくまる男達でいっ
ぱいになった。

「……何というか芸が無かったわね。腕を解体するだけじゃなく
て、もっと工夫をした方がいいかしら？」

「何だこいつ!？」

一人が顔を歪めながら走り出す、逃げちや駄目よ？

「あがあああああ!？」

魔法で足を切り飛ばすと転んでのたうち回る、それを見ると私は自
然と笑みを浮かべてしまう。

お母様には幼い頃に戦っている姿を見られているからバレているけれど……ヒトハはまだ私のこういった所は知らないかもしれないわね。

「貴方はもういいわ、さようなら」

優しくそう言つてのたうち回つていた男を爆散させる。

くぐもつた爆発音の後、水っぽい音をさせながら男だった物が降り注ぐ。

体に血と肉片を浴びる……気分が良いわ。

私は頬に付着した血を指ですくい、一舐めしてみた。

う……これは駄目ね、不味いわ。

「な……何だこりゃ!？」

その声に振り向くと劇場から大勢の男女が出て来ていた、これだけ彼らが叫んでいたら当然かしら。

「気にしないで？襲い掛かって来た彼らを返り討ちにしただけよ」

私が話しかけると彼らは私に目を移す。

すると全員怯えたような表情をして後ずさつた、それだけ数がいるのになんて臆病なのかしら……。

「もうここに用は無いし行くわ、お邪魔したわね」

そう告げて空へ上昇しようとした所で、周囲のうめき声に気が付いた。

「あなた達も、もういいわ……お疲れ様」

私はうずまつて呻くだけの男達を全員同じように爆発させて空へと舞い上がる。

取り敢えずお風呂に入りましたよか。

私は一度月へと帰る事にした。

カミラの気配だ、もう帰って来たのか？

ソファに座っていた私がそう思っていると血と肉で汚れたカミラが入って来た。

「随分汚れているな、何をしていたんだ？」

彼女に問題が無いのは分かるので心配はしていないが、その汚れようはどうした？

「海を調べる前に人類の様子を見ようと思っただけで……盗賊だったみたいで絡まれちゃって」

「そうか。取り敢えず風呂に入れ、床が汚れる」

大体の流れを察した私はカミラに風呂に向かうように促す。

「うん、そうする……行ってくるわねお母様」

そう答えてカミラは消えた。床を汚さないように風呂場まで轉移したか。

恐らく絡まれたから殺したんだろう、あの子の事だから楽しんでいただろうな。

しばらくするとカミラがさっぱりした様子で戻って来た。

「ふう……さっぱりしたわ」

「久しぶりに人の血を飲んで来たのか？」

私がそう聞くと彼女は顔を横に振る。

「二応少し口にしたのだけれど……。不味くて無理だったわ、家で飲む血液が一番ね」

「そうか、ここの家畜達の血液の方が美味しいのか」

「多分だけれど、彼らの血が不味いのではなくてここの家畜の血が美味しいのだと思うわ」

「育ちが良いからか？美味しい理由が分からないな」

「間違いない野盗よりもここの家畜の方がいい暮らしをしているとは思わよ？」

「そうかも知れない。」

「カミラ、海の調査はどうするんだ？」

「今日はもうやめておくれ、一眠りしてから改めて行くつもりよ」
「そうか」

カミラが隣に座り私の太ももに頭を乗せる。私はそれを受け入れ、本を読みながら彼女の頭を撫でた。

結局カミラは明け方までそのまま眠った。

彼女は目を覚ました後に私と多少早い朝食を取り、再びイシリスの海を調べるために出かけて行った。

人類は資源を奪おうとする者とそれを防ごうとする者の争いを頻繁に起こし、以前では何の問題も無かった怪我や病気で死ぬ者が激増した。

まだそれなりに数がいいた人類は増える事無く時の流れと共に減り続け、やがて世界には小さな村や町が僅かに点在するのみとなった。

人類の数が減り、世界に小さい村や町が点在する状態になってからも私達は人類を見続けている。

「私はヒトハの報告をいつものリビングで聞いていた。

「盗賊が減り始めたの?」

カミラがヒトハに確認する。

『はい、各地を荒らしていた盗賊達が盗賊をやめています』

「……襲える町や村が減ったから?」

『はい。現在は一部の盗賊が村と手を組み、他の盗賊から守りながら畑仕事を行うようになり始めています』

文明が崩壊したため、高い情報収集能力を持つヒトハを阻む物は存在しない。

その為、今では簡単に現在の人類の状況が分かるようになっていく。

「なるほどね。でも……よく村が受け入れたわね?」

『盗賊は他の盗賊に対抗出来る唯一の戦闘集団です。村側は申し出を断れば襲われる、襲われる位なら……という状態でした。後は盗賊の中に魔法を使える者が僅かに居たためでしょうか』

カミラとヒトハが盗賊について話し合っている、他者の考えを聞いているのは嫌いでは無い。

「魔法使いを引き込めるという理由もある訳か。それで、上手く行っているのか?」

私が話すとヒトハは私の方を向いて答えてくれる。

『はい。盗賊達は予想以上に真面目に働き、村に馴染みつつあります』

「心でも入れ替えたか?」

『その辺りの決定的な情報はありませんでしたが、盗賊達が「もう奪うだけでは生きていけなくなる」と言っていました。生き残るために村に永住しようとしているのだと思います』

「稼げなくなつた盗賊は廃業か」

『彼らは村の防衛や農作業などの危険な仕事や力仕事を率先して行い、自衛のために戦えない村人に訓練なども行っています。村の者が残つて欲しいと考えるだけの仕事をしているようですね』

中々上手い変わり身だ。村が何を欲しいか見定めて手を貸し、溶け込むつもりか。

恐らくその者達が盗賊行為を再び行う事は無いだろうな。

『他の盗賊の中には独自に村を作り、暮らしている者達もいます』

「ほう、定住する気になつたのか」

『はい。一部の略奪をやめていない盗賊達は思うように利益を得る事が出来ず、少しずつ数が減っています』

「同じ立場であつた盗賊達が村や町の側に回つたからな」

『やがて全て居なくなると思われます』

「そうだろうな」

人類はまた繁栄しようとしているようだ。

人が定住し、子を作ればゆつくりとだがまた村は大きくなるかもしれない、だが。

「長くは無いかもな」

『恐らくは』

「そうね」

私の言葉に二人が続く。

人類が大幅に減つた事で魔力の使用量も大幅に減つた、最も使用していた時期に比べれば極僅かだろう。

だが魔力は現在も減り続けている。どんなに使用魔力が少なくても、増えないのなら減る一方なのは当然の事だ。

以前カミラが海を調べた時は、魔道飛行戦艦の残骸などは見つけれらしいが、肝心の魔物はいくら探しても見つからなかつたらしい。

海の魔物はどうなつたのか？

魔素を吸う魔物が、魔力が少なくなつた事で自然死するだろうか？

しかし実際、海に魔物は居なかつた。

海の魔物は少ない魔力では生きていけなかつたのか、何か他の理由

があつたのか。

原因は分からない。

魔力が増える事無く減り続けている現在の状況を考えると、恐らく本当に陸にも海にも魔物は居ないのだろう。

今の人類は僅かに残った魔力を少しずつ使い潰して生き延びている状態という事になる。

こうなつた以上、数を増やせば魔力の使用量が増え、魔力が尽きるのが早まるだけだ。

魔力が尽きた時、どうなるのか？

私が思い出すのは魔力欠乏の事だ。

恐らく人類は魔力が無ければ生きていけない。

世界の魔力が尽きる時は、単純に魔法や魔道具が使えなくなるという事では無い。

人類が減びる時である可能性が高いという事だ。

数を減らし、日々を生きる事に精一杯な人類に、どうにかする手立てがあるとは思えなかつた。

この状況からまだ何かが起こる事があるのだろうか、私は僅かな期待を込めて人類を見ていた。

それから人類は魔法を殆ど使う事無く、地道に世界を開拓して行つた。

かつてとは比べ物にならない程遅い歩みではあつたが、それでも人類は再び数を増やし始めたのだ。

そんなある日、いつもの様に世界の魔力と魔素の濃度を調べた後に私は二人を呼び出した。

下手をすればカミラ達が危険かも知れないからな。

「わざわざ呼び出して悪かつたな」

「平気よこれくらい」

『主様より優先する事はありません』

呼び出した二人に早速話をする。

「魔力が無くなる前に人類が滅ぶかもしれない」

「どういう事？」

『他に何か原因があるのですか？』

「お前達にも説明しておく。ヒトハは恐らく平気だが、カミラはドレス無しでは危険である可能性もある」

「私が？」

カミラが驚いた表情で私を見る。

「そうだ。これはお前達には見えず、感じる事も出来ない魔素の事だ」

「聞かせて頂戴」

『お願いします』

聞く体勢になった二人に私は話し始めた。

「私は以前、魔力と魔素の濃度が生物に及ぼす影響を実験した事があった」

「ああ……詳しい話は聞かなかったような気がするけど、何となく覚えているわ」

カミラの言葉を聞きながら私は話を続ける。

「その時の結果だが、濃すぎる魔力は単純に生物を死に至らしめ、魔素は生物をただ殺す事もあれば別の生物に変化させる事もあった」

「その変化した生物のその後は問題は無かったの？」

「その後、生物としての姿を保つ事が出来なくなり結局死んだ」

「そう……」

「人は魔素によって変化せず死ぬだけだったが、カミラは人では無い。イシリス全体の魔素が濃くなって来た事で、カミラにも何らかの影響がある可能性が出て来た訳だ」

ドレスがあるからどうにでもなるとは思うが。

「母様がくれたドレスがあれば平気だと思うわ。何もかもお母様が気を遣う事は無いのよ？」

「娘の事だからな、もっと早く話をしておくべきだったと思っていて。今後、カミラは違和感を感じたらドレスを使うようにしてくれ。」

後はヒトハだ」

『主様の構成物で覆われた私に悪影響があるとは思えません……それに私は生物ではありませんし……』

「私も恐らく平気だと思っっているが、二人とも何かあれば私に言うように」

「お母様に黙っている事なんてないわよ」

『同じく主様に隠す事などありません』

「そうか、ありがとう」

「それで……人類が危険なのはそのせい？」
まだ話していなかったな。

「そうだ。今のイシリスは魔力が使用され続け、魔素が増えている」

「魔素が濃くなって死ぬって事ね？」

『主様の実験結果からすると人は死ぬだけです』

「現在イシリス全体の魔素の濃度は実験中の濃度に近づきつつある、当時の私は自然にこれ程の濃度になるとは考えていなかったと思う」

当時は魔力と魔素の関係を忘れていたからな。

「今回の話は忘れる事無く話す事が出来で良かった、二人の安全に関わる事だったからな」

私がそう話すとヒトハが話しかけて来た。

『主様……無礼を承知で申し上げます。私は主様が完璧では無い事を嬉しく感じております』

この記憶力が原因で問題が起こる可能性もあるのだが、ヒトハはそれを嬉しく感じると言う。

「そうか」

「ヒトハ……？」

私はヒトハがそんな事を言うとは思っていなかったため内心では少し驚いていた、カミラも驚いたようにヒトハを見ている。

『主様が完璧であったなら私はきっと生まれませんでした。必要とされませんでした。主様に仕える事はありませんでした。……私は、完璧では無い主様をこれからも支えたいのです』

なるほど、ヒトハは順調に育っている様だ。

「そうだ、私は完璧な存在では無い。どれだけ強くても、様々な事が出来ても、失敗する。これからも不完全な私を私を支えてくれ、ヒトハ」

『この命尽きるまでお仕えいたします、主様』

ヒトハ自身が気が付いているかは分からないが、今彼女は命と言った。

私は思わず微笑む。

また一步、目覚めの日へと近づいた気がした。

「あ、二人とも。私も傍にいるからね？忘れないように」

「当然だ、お前は私の娘だぞ」

『カミラ様を忘れる事などありません』

その日の夜はカミラと共にベッドに入り、枕元にヒトハを呼んでカミラが寝るまで語り合った。

カミラとヒトハが支えてくれる事自体は嬉しく思う、だがそれに甘える気は無い。

出来るだけ私自身も取り返しがつかない事が起きないように注意しなければならぬが、どうなるだろうな。

後は取り返しがつかない出来事が起きない様に、更に言えば起きた出来事から取り返せるように、まだまだ力をつけなくてはならない。

人類は再び数を増やし始めた。

環境に恵まれていない為非常に緩やかではあるが、それでも確実にその数を増やしている。

同時に世界の魔力消費も僅かずつ上昇し、魔素の濃度も少しずつ濃くなって行く。

「数は僅かになったけれど、今の所人類は結構上手く行っているわね」

カミラがそう言いながら私の隣に座る。月の拠点の時間は現在昼過ぎだ。

「特に大きな問題は起きていないな」

私は答える。現在、人類の生活は魔力をほぼ使う事無く安定し始めていた。

『問題無く生活していますね』

「魔力が無くなれば人類が生きていけないと考えていたが、問題無さそうだな」

人類が魔力が濃い環境で死ぬ事は実際に確認したが、薄い場合の確認はしていなかった筈。

以前人類を調べた結果から、死ぬ事になる可能性が高いと予想していただけだ。

この状況を見ると外れる可能性の方が高そうだな。

「まだ結論を出すには早いんじゃないの?」

「そうだな。だが、このままだと魔素の方が先に危険な量に到達する事になりそうだ」

魔素の濃度はそろそろ実験で人類が影響を受け始めた濃度に到達する。

『魔力の方はまだ無くなっても生命維持に問題が無い可能性が残されていますが、魔素の方は確実に命にかかわる事が主様によって確認されていますので……こちらの方が人類にとっては問題でしょう』

私は眩しきで目を覚ました。

……朝だわ、朝食の用意をしないと。

私は隣のベッドで寝ている夫を起こさないように起きてキッチンへ向かう。

食料は無駄には出来ないわ、痛む前に使わなきゃ。

私は火起こしの道具を使って火を起こす。

話では火種を起こす、魔道具？と言う物もあるらしいけど……見た事無いわね。

昔は誰でも簡単に火がつけられたらしいけど、今は駄目みたい。

生まれた時から今の生活をしている私達には想像出来ないけど、昔は空を飛ぶ乗り物で世界をあつという間に移動出来たとか……。

今の生活に不満がある訳じゃないけど、どんな物だったのか見てみたかったな。

朝食の準備を終えた私は、夫がまだ来ていない事に気が付いた。

いつもは途中で眠そうに現れるのに。

「あなた、朝ご飯が出来たわよ」

寝室に戻り夫に声をかける。

……起きないわね……もう。

「あなた……っ!？」

夫の体に触れた瞬間鳥肌が立つ、体が冷たい!？」

「あなた!?!どうしたの!?!あなたっ!!」

夫は安らかな寝顔のまま死んでいた。

原因は分からず終い……別れの儀式を行った後、皆は私を慰めてくれた……何で私の夫が……。

そう思っって悲しみ沈んでいた私だけど、それで終わりでは無かった……。

それから一か月もしない内に向かいのおじいさんが突然倒れ、そのまま亡くなり……その二週間後には村はずれのおばさまが亡くなっ

た。

何一つ原因は分からず次々と死んでいく。やがて、みんな次は自分では無いかと怯えて過ごすようになって行った。

私だっていつああなるか分からない……どうしてこんな事に……どう……し……て……。

突然私は急な眠気に襲われ、迫る床を見ながら意識が闇に溶けて行った。

魔素の影響が出たか。

私はヒトハから人類が突然倒れ、意識を失ったまま死に至っているという報告を受けた。

「これが魔素の影響？」

カミラが私に聞いてくる。

「そのはずだが、以前の実験と様子が違う。私の実験では苦しんで死んでいた」

「……どういう事かしら？」

カミラは私に尋ねるが、今の時点では原因は分からない。

以前の実験と違う事といえば、急激に魔素が濃くなったか緩やかに濃くなったかの違い位しか思いつかない。

『何か以前とは違う原因があるのでしょうか』

「過程が違う事で症状が変化したのか？ 以前の実験では短時間で魔素の濃度を急激に上げていたが、その影響かも知れない」

実験を急ぎ過ぎたか。

しかし、色々行うと実験体の数がかなり多くなってしまふ。

重犯罪者が在庫切れを起こしそうだな。

「……なるほど、そういう事もあるのかしらね？」

カミラは私の説明にある程度納得したようだ。

『死体の状況を見ると特に苦しんではないようでした』

「予想だが、恐らく本人達は何も分からないまま死んでいるだろう」

「眠るような感覚かしらね……？」

「私は死ぬ時の感覚は分からないし、実際に寝た事も無いから何とも言えない。この症状は取り敢えず魔素中毒と言う事にするが、ヒトハから聞いた中毒者の状況を考えると、魔力欠乏で死ぬよりは魔素中毒で死ぬ方が楽なのでは無いだろうか」

『それは……魔力欠乏の場合苦しむという事でしようか？』

正面に浮いているヒトハが私に尋ねる。

「予想だが魔力欠乏による死は苦しいと思う。苦痛という感覚も私は分からないが、生物がどんな時にそれを感じるかは知っているつもりだ。魔力欠乏によって引き起こされる症状を考えると、恐らくかなりの苦痛を感じると思う」

「なるほどね。そうなる……今死んでいる者達は不運なんだか幸運なんだか分からないわね」

「それは本人達次第だろうな。苦痛の無い死を望む者もいれば、苦しむ死が待っていても生きたいと思う者もいるだろう」

「どちらにしても私達が気にする事では無いかしらね……？」

「そうだな」

それから各地で突然眠るように死ぬ者が現れ始め、人類は再び減って行く。

そんな中、更に人類に追い打ちがかかる。

『人類の一部が、魔素中毒による死に方とは明らかに異なる症状で死に始めています』

「どんな死に方だ？」

私はヒトハに確認する。

『もがき苦しみながら……ゆっくりと弱って死んで行きました』

「……お母様の言っていた事が当たったわね」

ヒトハの答えにカミラが呟く。

駄目だったか。

こうなる可能性が高かったのは間違いない。だが、問題無い可能性もあるのではないかと考えていたのだが。

「実際に人類の体を調べて予想した結果だからな、可能性は高かった」

「もうかなり魔力は希薄よね」

「そうだな、現在の魔力濃度はごく簡単な魔道具や魔法が辛うじて使える程度だろう。正直、私は人類がここまで魔力が薄くても平気だとは思っていなかった」

もつと早く影響が出ると考えていたからな。

『身体能力の向上や魔法を使う為に必要であつただけで、生命の維持だけならば少量で問題無かつたのではないでしようか？』

ヒトハが良い意見を言ってくれた。

なるほど。魔力は力の底上げや魔法を使う為に多く消費していただけで、生命の維持その物には殆ど必要無かつたという訳か。

「ヒトハの仮説が当たっているかも知れないな。今の人類が異常に弱いのは魔力が薄すぎて体内の魔力が少ないからだと考える事も出来る」

私はヒトハを見て話す。

『ありがとうございます。……主様、私はそろそろイシリスへと行つてまいります』

「分かった、二人ともイシリスに降りる時は注意しろ。魔力の供給と魔素の事を忘れないようにな」

『はい、十分に注意いたします』

「私はもう行かないと思うけれど、気を付けるわ」

カミラが私の隣で答え、ヒトハは返事をした後に転移していった。

私は一人で月面からイシリスを眺めている。

今のイシリスは夜だが、以前のような輝きは無い。

ただ生きているだけで魔力を使ってしまう以上、何かが起きない限

り人類に生き残る道は無いかも知れない。

人類がいる事で魔力が減り魔力欠乏者を増やし、人類がいる事で魔素が増え魔素中毒者が増えて行く。

自分達の存在が自分達を殺す、人類にとっては救いの無い話だ。

私は暗いイシリスを眺め続ける、この気分は何だろうか。

かつての友人達の種が減びる事に思う所はあるが、良く分からない。
い。

初めて知的生命体を探そうと思った時、私はどう思っていた？

確か話し相手が欲しかったはずだ。

今はカミラとヒトハが傍に居るのでそんな事を思う事も無くなったが、確かにあの時そう思った。

一人で過ごしていた頃、一人でいる事に対して何かを感じた覚えはない。

では、どうしてあの時、話し相手を求めたのか？

……つまらなかった？

観察する対象が、私を楽しませてくれた人類が消えてしまう事をつまらないと感じているのか？

だというのに助ける気にならないとは、私はよく分からない奴だな。

「くくく……」

私は微笑みを浮かべながら長い間イシリスを見つめ続けていた。

人類の中に誰彼構わず殺したり犯したりする者や、自殺する者が現れたらしい。

カミラは自暴自棄になっているのではないかと言っていたな。

魔力欠乏と魔素中毒の恐怖に怯え、数を減らし続けながらもまだ人類は存在している。

町は無くなり、村や集落の様な規模の集団を作り日々を生活しているようだ。

「以前から思っていたけど、誰も都市に住んだりはしないのね」
カミラの言葉にヒトハが答える。

『都市部を住処にしていたのは盗賊などの略奪者ですね。基本的には土の地面が残っていて水源がある場所……川や湖などの水辺に多く集まって住んでいます』

「あ……考えたら当然よね。石や金属で覆われた地面で農作業は無理だし、水も無いもの」

都市の機能が生きているなら間違いなく都市が良かっただろう。だが、機能が死んでいたら都市では食糧や水が手に入らない。

現在の人類の都市や大きな町は、人が長く住めるような場所では無い。

『現在の人類の分布は水辺の周囲に村や集落が点在している状態です。残されていた道具や武器を使い、農作物を頼りに暮らしています』

「果樹が少しでも残っていれば果実を取る事も出来たんでしょうけど」

『果樹は人類同士の争いで大半が死んでしまい、残りも魔力の減少と魔素の増加が原因で全滅しましたからね』

「魔物が居れば狩りも出来たでしょうけど……」

本を読みながら二人の話聞いていた私は、会話を割り込んだ。

「魔物はこうなってしまった人類にとってはいなくて良かったかも

知れないな」

私がそう言うとかミラがこちらを見る。

「どうして？ 食料にもなるし素材も手に入るわよ？」

「今の人類が魔物に勝てると思うか？」

私の問いにカミラは難しい顔をする。

「……無理かもしれないわね」

「以前、家畜化された魔物が人類を襲うと言った事を覚えているか？」

「ええ、覚えているわよ」

「あの時はすぐに処分したようだが、恐らく人類は魔物に対抗する力は無かったと思う。魔道兵器は無く、個としての力も落ち、訓練もしていない。あの状態では自由になった魔物に狩られて絶滅していた可能性がある。そうなっていれば人類がいなくなり魔物が増え、時間にかかるだろうが魔力が回復し始めたかもな」

「確かにそうなっていたかもしれないわね……」

「ただ、その後に魔物が滅びる可能性もあると思う。人類以外の食料が存在しないため食い尽くした後は共食いになり、残りも飢えて死ぬかも知れない。環境が回復するまで持つかと言われれば、難しいと思う」

『行きつく結果は同じかも知れないですね』

ヒトハが言う通り、過程は違うが全ての生き物が全滅しそうな状況は変わらないと思う。

「以前も似たような事を言ったかも知れないが、人類が樹々と魔物を絶滅寸前に追いやった時点で結末がほぼ決まってしまった気がする」

私は二人にそう話して本に目を移した。

その後も二人はしばらく話していたが、やがてヒトハが転移していった。

「イシリスに行ったか」

「ええ」

「そろそろヒトハに人類の情報を集めて貰う事も無くなるかも知れ

ないな」

「そうね」

「念の為最後まで情報収集は続けて貰うが、何か新たな事が起きるだろうか」

「難しそうよね。後は彼らが減って行くだけでしようし、この環境で新しい何かを生み出すと言っても……何が出来るのかしら……」

カミラも同じ意見か、私から見ても今の人類にこの状況をどうにか出来るとは思えない。

後は減びるのを待つだけになりそうだが、それでもまだ人類は生きている。

まだ可能性は残っている。

「お母様、そろそろ訓練の時間よね？」

「そうだな、行くか」

カミラの確認に答える。

「少しずつだが確実に伸びている、無茶はするなよ？」

「ええ、体調には気を付けているわ」

私が念の為注意すると彼女は微笑んで答えた、分かっているなら良い。

その後カミラとの戦闘訓練を一週間ほど続けて行った。

休憩、睡眠、食事、水分補給などは無しだ、いつでも必ず休めるとは限らないからな。

「私は寝るわね……おやすみなさい……お母様」

「おやすみ、しっかり休め」

『お休みなさいませ』

一週間の戦闘訓練を終えたカミラは食事を取り風呂に入るとすぐに寝室へと向かって行った。

ある時期からカミラは過酷な状況で長く戦う訓練をし始めた。

私はカミラの体調に気を付けながら訓練に付き合っている。

現在は一週間程度なら問題無く戦い続ける事が出来るようになった。

服の魔力供給は使用はするが、制限している。

彼女は状態が悪くなっても、数時間ほどで元の状態に回復する。

何か問題が起きるのではないかと慎重に確認しているが、今まで問題は起きていない。

これからどうなるのかはまだ分からないが、場合によっては長時間戦い続けても睡眠時間が数時間あれば万全な状態に戻る。という不思議な存在になるかも知れない。

そこまで考えて自分の事を思い出し、私の方が不思議かも知れないと考えたがすぐにやめた。

これから彼女はまだまだ成長する可能性がある、彼女にやる気があるのなら私はこれからも手を貸すつもりでいる。

数時間後、起きて来たカミラはやはり完全に状態が戻っていた。

今は元気に遅めの昼食を作っている。

「出来たわよー」

声が聞こえカミラがキッチンから現れた。周囲には料理を盛りつけた皿が浮いている、ヒトハは飲み物を持って来てくれたようだ。

「今日はお母様が好きな肉料理よ」

そう言いながら席に着く彼女、同時に周囲に浮いていた料理達がテーブルに並ぶ。

「では、頂こうか」

いつもの様に私の一言で食事を始める。

『どうぞ、主様』

「ありがとう」

ヒトハがモー乳を入れてくれた、私は礼を言い一口飲む。
今日もいい味だ。

『カミラ様、どうぞ』

「ありがとう、今日は何？」

『世界樹の果実を使った果実酒に、草食生物の血液を少々加えています』

私はあまり酒が好きでは無いがカミラは中々気に入っているようで、こうしてたまに食事中に酒を飲む。

色々と飲み方や味を変えられるのが良いらしい。

「うん、美味しいわ。ありがとうヒトハ」

『喜んでいただけで光栄です』

世界樹の果実は私が食べてきた果実の中で一番の味だ。

その果実で作られた酒は美味い。

あまり酒が好きではない私でも世界樹の果実酒は美味く感じる。

「カミラ、世界樹の果実酒より美味しい酒はあるのか？」

私がそう言うとな彼女は少し考えてから話し始める。

「私の個人的な感想だけれど、総合的には世界樹の果実酒が一番だと思うわ。ただ、好みや気分で飲みたい物が変わるでしょう？だから人によっては他の物が良いと思うかもしれないわね。実際に私は他のお酒も美味しいと感じているから、その時の気分で飲み分けているわ。ヒトハに任せる事も多いけれど、それもまた良い物よ？」

「そうか」

私は飲むのなら世界樹の果実酒だけで十分だが、酒が好きならばそういう事もあるか。

しかしカミラがここまで気に入るとは。

使う事はあまり無いと思っていた魔法を使った酒の製造技術だったが、覚えておいて良かったな。

「話は変わるが、訓練の事で話がある」

「何？」

訓練の事と聞いてカミラが真面目な雰囲気になる。

「内容に問題がある訳では無い、ただこれからもカミラはこの訓練をやりたいのかを聞きたいだけだ」

「お母様が迷惑でないのならやりたいけれど……駄目？」

そう言ってくる彼女の表情は何かをねだる子供のように見える。

「迷惑では無い、体に悪影響が出ないなら好きにすると良い。いつでも手を貸そう」

そう言うと彼女は嬉しそうに微笑んで言った。

「うん、ありがとうお母様」

私達は日々を過ごしながら人類を見ていたが、何かが起こる事も無く数を減らし続けて行った。

そしてある日、いつもの様に戻って来たヒトハから報告を受ける。

『主様、人類が限界を迎えています』

「そうか」

もう何かが起こる事は無いのだろうか。

「現在の人類の状態は？」

『川沿いの集落に居る五人が、最後の生き残りです』

残った人類は五人か。

人類は私が初めて出会った知的生命体だ、最後は見ておきたい。

私は彼らの居場所を見つけてリビングの空間に様子を映し出した。

「私はこのままどうなるか見ているつもりだが、二人はどうする？」

「私も起きている間は見ていようかしら」

『お供いたします』

カミラが私の隣に座り、ヒトハも私の横に飛んできた。

映し出されているのは小さな集落だ、かろうじて家だと分かるような物が一つあり周囲には畑が広がっている。

その畑で男二人と女二人が畑仕事をしていた。

「もう一人はどうしたのかしら？」

カミラが言うのとヒトハが答えた。

『もう一人は赤子です』

「……今の状態で良く生きてるわね」

確かにそうだな、人類は魔素に対する耐性の低い者、少ない魔力に体が耐えられなくなった者から死んでいたと思う。

赤子の場合、魔力が少なくても平気と言うのはまだ分かるが、魔素に対する抵抗はそう高くはないはずだ。

「ヒトハ、赤子は魔素中毒で死んでいる者が多かったはずだな？」

『はい、私を知る限り赤子や幼い子供の死因の多くは魔素中毒です』
今の環境に耐えられる子供が生まれたのか？しかし、そうだと
も生まれるのが遅すぎた。

「もしかしてその子は今の環境で生きて行けるのかしら？」

カミラが集落を見ながら私の考えと似たような事を言う。

「今の環境でまだ死んでいないのなら、その可能性が高いかも知れない」

「お母様もそう思う？」

私の言葉にカミラがこちらを見る。

『あの赤子がこの環境に適応しているのなら、あの四人が先に死ぬでしょう。その時、残された子はどう致しますか？』

ヒトハが私へと問いかける。

「特に何もしない」

私はそう答えた。

それよりも、何処かにヒトハが見落としている適応者がいないだろうか。

私はすぐに他に適応して生きている者が居ないか探してみたが、他には見つからなかった。

このままだとあの赤子が最後の人類になりそうだ。

私は食事を取る事無く五人を見続けている。

大人ではあるが、まだ若いであろう四人の男女は種族の特徴が無い。

確か、時が過ぎていく間に純粋な種族はいなくなり、人類は全て混血になったのだったか？

時々僅かに特徴を持つ者が生まれる程度で、ほとんどの者はどの種族の血が濃いのか分からない状態になっていたはずだ。

四人は全員で力を合わせ食料を作り、子供の世話をしていた。

彼らは今、食料を干している。世代を重ね魔法を使う事が常識ではなくなると、魔法を使わない技術が生み出された、干す事もその中の一つだ。

時々彼らは周囲にあるだれも住んでいない住居や町の廃墟へ向かい、残っている物を探している。

今の彼らは徒歩での移動だ。天候はあまり悪くなる事は無く、危険な生物もいなくなっているイシリスだが、短い距離でも移動にはそれなりの時間を要する。

時間がかかれば勿論食料と水が必要で、今の彼らにとっては少し離れた町の廃墟に移動する事はそれなりに大きな冒険になるようだった。

視点を分けるか。私は集落の映像の隣に町へと向かう二人の男の映像を映し出した、これで何かあっても見逃す事は無いだろう。

私は男達の方を見た、町に向かう街道があるので彼らが迷う事は無さそうさ。

その街道も現在は荒れているが、それ以外の場所よりは歩きやすい様に見える。

二人とも時々何か会話を交わしながらひたすらに歩いている、始めから何を言っているかも分かるようにしておけばよかったな。

私は音も聞けるように変更する。

さて、彼らはどんな話をしているのだろうか。
そういえば彼らは夜に移動しているな、昼間だと何か問題があるの
だろうか。

そう思いながら私はしばらく男達を見ていた。

それからしばらく私達は彼らの様子を見ていた。

「……何も言わないわね」

隣で見えていたカミラが呟き、ヒトハは黙って私の隣に浮いている。

「歩く音や風の音は小さく聞こえている、単純に彼らが黙って歩い
ているだけだな」

「まあ……移動中ずっと話している事なんてそう無いわよね」

カミラの言う通り移動中ずっと話している者などそういないだろ
う、何より彼らは命がかかった冒険中だ。

「静かだな、これだけでももう生物がいない事が良く分かる」

「良く分かる?」

『主様、それはどういう事でしようか?』

カミラが私の言葉を繰り返しヒトハが私に疑問を投げかける。

「夜が静か過ぎると感じないか? イシリスの島で住んでいた時、夜
はどうだった?」

「夜? どうと言われても……」

『虫……でしようか?』

カミラが悩んでいるとヒトハが答えた。

「正解だ。夜が静かだという事は、すでに小さな虫達も全滅してい
るという事だ」

「確かに以前はうるさいほど虫の音がしていたわね……」

カミラは以前の暮らしを思い出して納得している。

今のイシリスの地面には草は生えておらず、むき出しの土か人工物
のどちらかが広がっている。

流石にこの状態では虫などの小さな生物は生きて行けないだろう。

大きな生物に目が行きがちだが、小さな生物も同じように消えていたという事だ。

地中にも生物はいただろうが、恐らく生きてはいないだろう。

もし魔力が必要無い生物がいたとしても、魔素の影響を受けてしまうのなら同じ事だ。

「なあ……」

「ん？どうした？疲れたならそろそろ休むか？」

そんな事を考えていると声が聞こえて来た。彼らが会話を始めたようだ、私は彼らの会話に耳を傾けた。

「どうしてこんな世界に生まれちゃったのかって、考えた事無いかな？」

「……無いとは……言えないかな。まだみんなが居た頃に、この世界の話を聞かされた時とかね」

「……俺と妻の子供は生まれてすぐに死んじゃったし……このままだや未来に希望をつなぐ事も出来ない」

「きつと何処かに誰がいるさ、出会えるかどうかは……分からないけど」

彼らは自分達が最後の人類だと知らないのだったな。

あの四人は二組の夫婦か。

「確かに、こつちから探しに行く事は出来ないからな……」

「……ああ」

「でも、今の状態を維持出来ていれば生きて行く事は出来ると思う……そうすればいつか誰かに会えるかもしれない」

「……まあやれるだけやるさ。妻と……お前達を残して逝けないかな」

「……ありがとう」

その会話を最後に再び歩く音と風の音だけが聞こえ始めた。

「今の彼らは他の人類がいない事を知る方法が無いのよね」

『はい。彼らは他の人類が既に全滅している事を知らず、まだどこかに人が残っていると考えているようです』

カミラの呟きにヒトハが説明する。

「そう思っていれば生きる希望にはなるだろう、報われる事は無いが」

「彼らにとっては知らない方が良い事かも知れないわね」

『知らないよりは知っている方が良いのでは無いでしょうか?』

私の言葉にカミラは同意している雰囲気だが、ヒトハはあまりよく分からないようだ。

「人類は、個人差はあるだろうが知らない事で幸せになる場合がある。勿論知りたいと言われれば私は教えるが、知ってしまう事で物事への関心を無くしてしまったり、酷い時は自ら死んでしまったりする」

『知らない事が良い事もあるのですね』

「少なくとも人類にはそういう事がある、という事だ」

「お母様だったらどう思う?」

「私か?もし私であったなら知らないよりは知りたいと思う、それが自分にとってどれだけ不都合な事でもな。そして、興味を持っては関わるし、気に入らなければひっくり返す」

「聞いているから思っただけだ……お母様と人類を比べても意味が無かったわね」

カミラはそう言いながら紅茶を飲んだ。

私は比べる対象には向いていない様だ。

そう思いながら集落の方に目を向けると、二人の女性が畑仕事をしている。

一人は赤子を布のような物で体に巻き付け、抱いたまま仕事をしている。時々もう一人の女性と交代して抱いているな。

現在の環境に耐えられる農作物が残っていないければ、ここまで人類が持ちこたえる事は出来なかっただろう。

それから時が経ち、赤子が歩く様になってすぐに二人の男が同時に魔力欠乏で死んだ。

四人の中でこうなった時の事を決めていたのは知っている。それぞれの妻が苦しむ夫に止めを刺した。

一度起これば助からず、苦しむだけであると知っているからこそその対応だろう。

私から見ても中々良い対応だったと思う。

「あえて言えば、殺すまでに大分硬直していた時間があつた事が問題だったな」

「お母様、助からないと分かっているでも愛する人を殺すのは辛い物なのよ」

私とカミラは彼女達の対応について話し合っていた。

「事前に話し合っていたのだから簡単に出来ると思っていた。想定していても実際に起こった時は思った様に動けない物なのか？」

「お母様も人類が感情に動かされて思いもよらない事をする事を知ってるでしょう？分かっていても……という事があるのよ」

そういう物か、苦しむだけならすぐに楽にしてやる方が良いと思うが。

夫に止めを刺した後、二人はしばらく涙を流したままうずくまり夫の傍に居た。

それからしばらく時間が経つと、ふらつきながらも動き出し死体を埋めていた。

「二人とも酷い状態ね、でも時間が解決するかしら？」

『母親の方よりもう一人の女性の方が危うく見えますね』

ヒトハがそう言った片方の女はその翌日に自殺した、ヒトハの見る目は正しかったな。

それから残された母親と息子の生活が始まった。

畑を縮小し子供の面倒を見ながら必死に生きる姿に私は母の強さを感じた。

「彼女は精神が強いわね、母親だからかしら？」

「確かに今まで見て来た母親は他の女と比べて色々強かった気はするな。変わらない者もある程度はいたが」

子を産んだ後の女の殆どは程度の差はあっても強くなる傾向があった。

精神的な物であったが、大抵の場合何かしらの変化が起きていた。

そんな彼女の生活を見ていたある日、彼女に魔力欠乏の症状が現れる。

ただ、彼女は暴れる事も叫ぶ事も無かった。

大の男ですら泣き叫び、のたうち回る苦痛があるはずだ。

だというのに彼女はよろよろと我が子の元へと向かい、そのまま抱きしめると涙を流しながら「生きて」と呟き始めた。

「お母様？」

私は立ち上がり彼女の元へと転移した。

「ぐっ……!?」

私にもとうとう症状が現れた。

想像を絶する痛みの中、私にあるのは残される息子への想いだけだった。

あの子はまだ一人で生きていけない……私が今死んでしまえばあの子も死んでしまう！

私は必死に息子の元へと向かい、無邪気な顔で私を見る息子を抱きしめて泣いた。

生きて欲しい、死なないで欲しい。

「生きて……生きて……お願い……生きていて……誰か……神……様……」

意識が遠くなり息子を抱いたまま倒れ込む……もう目が見えない……。

……痛みが消えた……？

突然消えた痛みには戸惑っていると頭上から声が聞こえてくる。

「お前の強さを見せて貰った。お前達を救わなかった私が言ってもお前は怒るだけかもしれないが、お前の願いを叶えよう。この子の寿命を全うさせる事を約束する」

私はこの声が神なのだと思った。

神という存在が本当に存在していた事に驚き混乱したが、それよりも神が息子を救うと約束してくれた事が嬉しかった。

「この子の名は……ライベル……どう、か……お願いし……ます」

私は何とか声を搾り出した、徐々に意識が薄れて行くが……もう不安は無かった。

今まで魔力欠乏の苦痛にある程度耐えた者はいたが、微動だにせず我が子の事だけを想い涙を流すとは。

息子を抱きしめた彼女の顔は苦痛に歪んだ表情では無かった。

彼女は我が子へ微笑みを向けたまま死んでいた。

『二人共、生き残った子供を助ける事にした』

『ふふ……お母様が転移した時に分かったわよ』

『かしこまりました、主様』

私は彼女からそっとライベルを抱き上げ、すでに転移して来ているカミラに渡した、ヒトハも隣で彼を見ている。

それから私は彼女の黒髪を少し切り取り、劣化しないように魔法をかけて纏めて縛る。

次にペンダントを作った、ペンダントトップは開く事が出来るようにし、中にその髪を仕舞う。

そして私は彼女の体を抱き上げた。

私は彼女の死体を埋めてから二人の元へ戻る。

「急に決めてしまつて悪かつたな。二人とも」

「大した事じゃないわよ。それに、お母様のやる事は結構急な事が多いわよ?」

『主様に対して迷惑などと言う事はあり得ません』

子供を抱いたまま笑つて話すカミラと、心なしか嬉しそうな声色のヒトハ。

私は子供に、ライベルにペンダントをかけた。

「このペンダントはどうしたの?」

カミラがペンダントについて聞いてくる。

「作つた。中にはライベルの母親の髪が入っている」

「なるほど、形見つて訳ね……この子ライベルつて言うのね?」

「ああ、死ぬ直前に母親が教えてくれた」

『かなり濃い黒髪ですな主様』

「そうだな」

この子が黒髪である事は見ていたから知つている、最後に私と関わりがある血筋の特徴を持つ者が残る事になつたか。

「お母様、これからどうするの?ここで一緒に住むのかしら?」

「そのつもりだ。私達は今では珍しい長命種で、この集落で暮らしていたと言う事にしよう。集落の者は寿命と原因不明の病気で全員死に、この子の母が死ぬ時に後を頼まれたという事にしよう。どうだ?」

「いいんじゃないかしら」

『私達が教えない限り知る方法はありませんからね』

二人もこれで良いようだ、後はこの子が死ぬまで見守ろう。

この子は授乳が必要な時期は過ぎていたので、離乳食を作り与える事にした。

成長した時、違和感が無いように周囲の畑は維持し、食事に月の拠点で作った栄養豊富な食材を混ぜて与えた。

大部分は周囲の畑で取れた食材を使うためかなり味は落ちたが、それでも十分食べられる味の物が出来た。

勿論作ったのはカミラだが。

「この子よく食べるわね」

『食べないよりは良いのではないのでしょうか』

「それもそうね」

ライベルは幼いながらによく食べた。今まで足りていなかった物を必死に得ようとしているかのようだった。

だが恐らくそれは考え過ぎで、味が以前の物より格段に良いからという理由だと思う。

母親役はカミラに任せ、私は姉役として畑仕事をしている。

私は何気なく足元の土を掴み取り、確かめる。

土には極僅かな、辛うじて分かる程度の魔力しか含まれていない。これでは作物が育っても栄養は少ないだろうな。

こうして土の状態を確認し、改めて今植えられている作物が存在している事に僅かながら驚きを感じた。

もしかするとライベルと同じようにこの環境に適応出来たのかも知れない。

少し離れた所ではヒトハが作物の状態を確認している。

私は川まで水を汲みに行く事にした。

ライベルの前で堂々と魔法を使うのはやめておく事にしたからな。

「ヒトハ、私は水を汲んでくる」

『いつてらっしやいませ』

私は集落の近くにある川に着いた、私は川の状態も確認する。
水は澄んでいて人類に悪影響を及ぼす様な問題も無い。

これなら飲む事が出来るが、水草一つ生えておらず生物はいない。
私は大きな器に水を汲んでいき、すぐに満杯にすると持ち上げて家
へと戻って行った。

私達が共に暮らし始めてから時間が経った。

途中に何か問題などが起こる事も無くライベルは順調に成長し、大
人になった。

「母さん、水を汲んで来たよ」

「ありがとうライベル、その水は向こうに置いて蓋をしておいて」

「分かったよ、姉さんとヒトハは？」

「二人とも畑よ」

「俺も行ってくるよ」

「もうすぐ食事だからついでに呼んで来て」

「分かった」

畑に居ると会話が聞こえてくる、私は現在ヒトハと共に畑の作物に
水をやっている所だ。

「姉さん、ヒトハ」

その声を上げながらネックレスを付けた体格のいい黒髪の男、ライ
ベルが駆け寄ってくる。

「どうした？」

今の私は寿命が長いだけの普通の人間だ、あの距離から声が聞こえ
る事は無い。

「そろそろ飯だっさ」

「そうか、丁度水を撒き終えたし一度戻ろう」

『では戻ります、主様』

ヒトハは私にだけそう伝えたと、頷くように動き家へと移動し始めた。

ライベルにはまだヒトハが話せる事を明かしていない。

話す事は出来ないが、言っている事を判断し動く、人類が栄えていた頃の遺物だと話してある。

食事は塩などが無いため素材の味だけだ。

だが素材の一部に月の物を使用している事とカミラの調理技術の高さのおかげで、かなりの薄味ではあるが素材の甘みや旨味を上手く生かした仕上がりになっている。

料理するための火力は衝撃を加えると高熱を発する魔法金属を私を作り、ヒトハと同じ過去の遺物であると説明している。

適当な言い訳だとは思いますが彼にそんな事は分からない、信じて昔は凄かったのだと夢を膨らませていた。

私達がライベルを育て始めた時に集落にあつた木材は少なく、どう考えても彼が生きていくには足りなかった。

周囲から集める事も出来るか分からない為、言い訳を考えて道具を作った訳だ。

「母さん、食料は足りてる?」

食事をしながらライベルがカミラに聞く。

「そうね……保存している物も合わせれば問題無いと思うわよ?」

「もう少し畑を広げようと思うんだけど……駄目かな?」

「それは構わないけれど……どうしたの急に?」

「もう少しだけ備蓄を増やしておきたいんだ。何かあつた時、次の収穫があるまで問題無く過ごせるようにさ」
なるほどな、この子なりに考えたのか。

「ライベル」

「姉さん?何?」

私が声をかけると彼は振り向いて答える。

「増やしすぎるなよ？余裕は十分あった方が良いが、多すぎて保存食を駄目にしてしまったら無駄働きだからな」

「うん、わかってる。大体だけど収穫から次の収穫までにどれだけ食料を使っているか調べておいたんだ。一時的に収穫量を増やして目標に到達したら、収穫量と使用量が同じくらいになるように戻すつもりだよ」

元々の素質なのか私達の教育を受けたからなのかは分からないが、中々良い子に育ったと思う。

『お母様、いいのよね？』

『いいぞ、私とヒトハも手伝おう』

『かしこまりました、主様』

念話で会話をして決定する。

「じゃあ保存してある種を使っていいから自由にやってみなさい、お姉ちゃんとはヒトハにも手伝って貰ってね」

この家族の長という事になっているカミラがライベルに言う。

「分かった。慎重にやるし、何かあったら姉さんが注意してくれるから平気だよ」

そう言って私を見る。

「私も手伝うとは言ったが頼りすぎるなよ？私に何か言われる前に気が付けるように心がけろ」

「姉さんは厳しいよなあ……まあ俺の事を思っ言ってくれてるんだろうけどさ」

ライベルが苦笑いする。

「食べて少し休憩したら畑へ行くぞ、どの辺りにどの程度増やすのか聞かせて貰おう」

「分かったよ」

それから他愛のない話をしながら昼食を終えた。

ライベルは不安そうだったが、一度目は無事に以前より多くの収穫

を得る事が出来た。

そこから更に畑を広げ、現在は二度目の収穫を迎えている。今回もそれなりに上手く行っているな。

備蓄が目標の量に到達するまでこのままでも問題無いが、もう少しだけなら広げても平気かも知れない。

その辺りの判断はライベルに任せよう、今は全員で収穫だ。

収穫した作物は一度調理し、程よい大きさにした後で熱石に当てる。

熱石とは私が作った魔法金属にライベルがつけた名前だ。

石では無いのだが、そう見えたのだろう。

その熱石を使って加熱すると同時に乾燥させて行く。

水分を限界まで抜く事で大分長く持つようになる、そして食べる時は水に戻して食べる訳だ。

地面に掘った部屋に熱石を置き、熱石をしばらく叩き続けて部屋の温度を上げて乾燥させる。

熱石を何かに使えないかと、ライベルが考えた方法だ。

この方法だと天日で数日かけて行っていた乾燥が半日以下で終わる上に、天日で作った物よりも長く持つ。

色々な面で有効な方法となった。

そして冷ました後に保存用の地下室へと運び込む。

全員でやればそう大変では無いし、何よりライベルが良く働いてくれる。

ある日、畑仕事の休憩中にライベルがペンダントを開けているのを見た。

彼には本当の母親の形見が入っていると教えていたが、今まで彼は一度も本当の母親の事を聞いて来ない。

「姉さん」

私は特に何も言わずにそのまま通り過ぎようとしたのだがライベ

ルに呼び止められた。

「何だ？」

「俺の本当の母さんの事……聞いてもいいかな？」

どんな心境の変化かは分からないが、知りたいと言うのなら隠す事では無い。

私は彼の隣に座り話し始めた、月から見ていた間の事を思い出しながら彼にゆつくりと話して聞かせた。

「……母さんの最後は知ってる？」

彼が下を向いたまま言う。

「知っている、看取ったのは私だ」

そう言った後、少し間をあけてから話して聞かせる。

「彼女は強い女性だった、何よりお前を心から愛していた」

彼女が死ぬ時、誰であつてももがき苦しむ程の苦痛を感じながらも、全く表に出す事が無かつた事。

幼かつたライベルを抱き、泣きながら生きて欲しいと言つていた事。

私に後を託し、ライベルに微笑みを向けたまま死んだ事を話した。

彼は下を向いたまま小さく震えていた、地面にある濡れた跡は見ないでおいてやろう。

しばらくそうしていた彼は腕で目元を拭うと前を見た、赤くなつていたが力強い目つきをしていた。

「姉さん。仕事を再開しよう……聞かせてくれてありがとう」

私達は仕事を再開した、帰つた後ライベルはカミラにも感謝の言葉を伝えていた。

その日の夜、ライベルが寝た後に私達は会話をしている。

「どうしたのあの子？いきなり凄く感謝されたわ」

私は昼間あつた事をカミラに話した。

「母親の事を聞いたのね」

『今まで聞いて来なかった事が不思議でしたが……ようやく聞いたのですね』

「後は日々を過ごすだけかしらね……何事も無ければ良いけれど」
暮らすだけならもう安定している、このまま寿命を全うする事は可能だろう。

「何があってもあの子の好きにさせる。母親に寿命を全うさせると約束したが、彼の人生は彼の物だ」

私は彼を自由に生きさせた上で約束を果たすつもりだ。

曲解すれば、永遠に寝かせたまま寿命を迎えるまで生かしておく事でも約束は守れるだろう。

私はそのような事をする気は無い、彼女は「生きて」と言ったのだ。
本人が生きてると実感出来なければそれは死んでいるのと大して変わらない。

それでは彼女の望みが叶えられたとは言えないだろう。

畑を広げて食料の備蓄が目標を越え、畑を丁度いい広さに戻し終わった頃。

問題無く暮らしていたある日、ライベルが大事な話があると言い私達を集めた。

「みんな……俺は他の人類を探しに行こうと思う」

彼は真剣な表情でそう言った。

事前にこの可能性を考えていた私達は予定通りの対応をする事にする。

「どうやって行くつもり？」

カミラの言葉にライベルは言う。

「持てるだけの保存食料を持って川沿いに移動しようと思ってる。これなら水で戻して食べる事が出来るし、飲み水にも困らないと思うんだ。戻る時に迷う事も無いと思う」

「条件を飲むなら、好きにしていいいわよ」

「条件？」

「ヒトハを連れて行きなさい……それが条件よ」

「ヒトハを？でもそうしたら人手が……」

彼は難色を示す、そこに私が口を挟む。

「ここでの生活は安定しているし、畑もある程度縮小したから問題は無い。何かあるか分からないお前の方が問題だ」

「う……確かにそうだけどき……」

「何かあった時一人では危険だ。お前のやりたい事を止める気は無いが、私はお前の母と約束している」

「姉さん……」

彼は私の言葉に何かを感じたのか、表情を曇らせる。

「ヒトハを連れて行け、お前に何かあれば約束を果たせなくなる」

「姉さんにそう言われたら断れないよ……。分かった、連れて行く」

彼は私の言葉に対して困ったように微笑むと、ヒトハを連れて行く

事を了承した。

「言うまでも無いとは思うけど……準備は怠らないようにね？」
カミラが釘を刺すと彼は大きく頷いた。

それからライベルは長い間、近場の集落の建物を分解したり、周囲を念入りに調べ回って僅かに残っていた木を掻き集めた。

そして私達の協力を得て、その材料で物に乗せて運べる道具を作り上げる事に成功する。

魔車に何となく似ている事から私が人力車と名付けた、この道具は台の上に物に乗せて引いて行くという方法で多くの荷物を運べる物だ。

時間をかけて準備を整え、やがて出発の日がやって来た。

「ライベル、分かっているな？」

「大丈夫だよ姉さん。出来るだけ余裕をもって行動する……だよな？」

余裕は大事だ、余裕は冷静さを生む。

今まで見て来た者達の中には余裕の無い者が大勢いた。

それは時間であつたり金であつたり食料であつたりしたが、そのどれであつても冷静さを失つた者達はあまりいい方向へは向かわなかつた。

彼にはそうなる前に考え直せるようになって欲しい。

『ヒトハ、頼むぞ』

『かしこまりました』

ヒトハには彼が違和感を覚えない範囲で出来るだけ手を貸す事と、命に関わる場合は力を隠さず助けて私に知らせる事を話しておいた。

……川下の方へ向かつてみるか。

集落を離れ、川に辿り着いた俺は人力車を引きながら川下へと歩き始めた。

姉さんが名付けたこの人力車は上手く出来たと思う。

母さんと姉さんは凄い、俺の知らない色々な事を知っている。

この人力車だつて、手伝つて貰わなかつたら作れなかつたと思う。

ヒトハは荷物の上に乗つたまま周囲を見ているように動いてる。

……このヒトハも凄いよな。

言葉は話せないけど、こつちの言っている事を理解して動くんだもんな……。

おまけに動力が不明らしい。

姉さんが見つけてからずっと動いているらしいけど……。

本当に大昔の人類は凄い力を持つていたんだなつて思うよ。

昔……世界は木々に覆われて多くの生物が住んでいたらしい、その世界で長い間人類は繁栄していたみたいだ。

それがどうしてこうなつてしまつたんだ……？姉さんは大昔に人類がやりすぎたからだつて言つてたけど……。

母さんと姉さんは長命種らしいからまだ人が多く居た頃を知っている。次々と謎の病気で死んで、減つてしまつたみたいだけ。

……きつと俺の方が先に死んじゃうんだろうな。

でも一人じゃない。

ヒトハも居るし、二人ならきつと俺が死んだ後も強く生きて行つてくれるさ。

時々ヒトハに話しかけながらひたすら歩く。返事などしないと分かつてはいるけど、声に反応をしてくれるからなんだか話しかけてしまふんだよな。

……そろそろ食事にして休憩しようか。

姉さんの言葉を思い出しそう考える。

無理をせず休憩しておく事にする、急ぐ事も無いんだしね。

「ヒトハ、食料を一食分出しておいてくれる？」
そう言うとヒトハが食料を出し始める、それを確認した俺は川へ水を取りに向かった。

保存食を水で戻す間、俺は地面に座り改めて周囲を見渡す。
そこには荒れた大地に風が吹いている光景しかない。

何も無いな……いつ見ても感想はこれ位しか出て来ないや……。
空を見上げれば曇った空が見える、長く歩き続ける時は晴れているよりこの方が涼しくていいかな。

俺は水で戻した保存食を食べしばらく休憩した後、再び歩きだした。

それから特に何も無く数日歩き続けた。地面は荒れているけど起伏は殆ど無いし、中々歩きやすいかな。
そうして歩いている俺の目に何かが映る。

「……何かある！」

俺は思わず叫んでしまった。

遠くに何か見える！

はやる気持ちを抑え進んでいくとやがて集落が見えて来た。

「誰かいないか!？」

入り口らしき場所で声をかけてみるが反応は無い……俺はそのまま集落へと入った。

複数の屋根の無いボロボロの木の家がある。

これだけ木が残っているという事は、今まで誰もこの集落に来ていなかったみたいだな……。

俺はその一つを覗いてみる……。

……何も無い。

僅かにボロボロの床板らしき物があるだけで特に何も無い、そのまま外に出ると他の家を覗く。

これは……最後に死んだ人、かな……。

そこには人骨が散らばっていた、きつと埋めてくれる人が居なかったんだろう……。

集落の中に墓場を見つけた俺は、そこに穴を掘り人骨を埋めた。

……せめて同じ場所で眠って欲しい。

ここの家で一晩過ごせるかと思っただけど、これじゃ外と変わらないよな。

俺はこの集落を離れ、先へ進む事にした。

それからいくつかの集落跡を見つけたけど、誰も見つかる事は無かった。

そんな事が続いていたある朝。

遠くに大きな町が見えた、川からは離れるが分からなくなる程の距離じゃない。

「でかいぞあれは！あれが町という物か!？」

遠くからそびえたつ高い塔が沢山見える、俺は早足になりながら塔へと向かった。

見えたから近いかと思っただけど……意外と遠かった……。

でも……これはすげえ……。

丸一日程かけて町に着いた俺は、生まれて初めて見る人類の遺産に目を奪われた。

荒れているけど元々の地面は驚くほど平らである事が分かるし、巨大な建物が隙間なく立ち並んでいる。

何で出来てるんだ、これ……？

町に放置されている大きな何かに近づくと、俺の顔が映る。

軽く叩いてみると不思議な感触がした。

……凄すぎて俺じゃ何が何だか分からない。

母さんか姉さんなら何か分かっただろうけど……。半開きの扉から建物の一つへと入ってみる……。空気が少し淀んでるな。

中には何も無い……。と思っただけど、長方形の何かの一つだけ床に落ちていた。

手に取って見てみると、色々と小さい何かが付いていて妙に軽い……。なんだこれ？

拾った何かを持ったまま奥に目を向ける。

奥へ行きたいけど、暗すぎるかな……。？

扉から入る光じや入り口の近くしか見えない。

これ……。持って帰ろうかな？母さんか姉さんなら何か分かるかもしれないし。

俺はこの何かを持ち帰る事を決めて外に出た、人力車にしまつてから町の中を進む。

途中にある大きな物を覗いて見ると中に座れそうな形をした物があり、その上に別の何かがおいてあるのが見える。

中に入れないかと色々としてみたがびくともしない。

諦めて透明な板に張り付いてよく見てみる……。四角い板か何かに人の顔が……。書いてある？

妙に耳が長い気がするけど……。良く見えないな……。

俺は大人しく諦めて先に進む事にした。

それから途中にある色々な物を見たり触ったりしながら長い間この町をうろついていた。

そしてふと気づく。

ここじゃ水が手に入らない、もう戻らないと不味い。

町に夢中で忘れていた……。こっちに来る前に汲んでおいた水は予想外に遠かったからほとんど使ってしまった。

ここから川に戻るにも一日程かかる、俺はすぐに戻ろうとして固まる。

……。川の方は……。どっちだ？

俺は体が急に冷えて行く感覚がしていた。

どちらを向いても似たような町並みがあるだけ、夢中でどう進んだかも覚えていない。

不味い……不味い、不味い、不味い！

ライベルは無言で強張った顔をしていますね。

夢中になって町を見て回り始めてからこんな予感はしていましたか……迷いましたね？

私は浮かび上がると荷物の上から降り、川の方向へと移動し始めます。

「え？……ヒトハ？」

ライベルは私の行動に戸惑っているようですね……私は一度彼の方を向き再び進みます。

「こつち……なのか？」

私はもう一度振り返り縦に頷くように動き、進みます。

彼は大人しくついてきました。

町を出てからも進み続け、やがて遥か遠くに川が見えました。

「川だー！良かった……ありがとうございます……」

彼は私を抱きしめ呟いています。主様の命ですから当然の事です。

私は荷物の上に戻り、再び彼を見守ります。

俺は大いに反省する事になった、初めて見た町に浮かれて迷うなんて。

……食料が手元にあっても水はあの場所では手に入らなかった。

ヒトハがいなければ死んでいた可能性が高い。

俺はヒトハと、ヒトハを連れて行くように言ってくれた母さんと姉さんに感謝した。

それから川から離れる時は常に川がどちらにあるか気にしながら進むようにした、こんな失敗何度もしたら姉さんに叱られる。

ライベルの奴、浮かれて迷うとは。

私は空中に映し出した彼の姿を見ていた。

「彼にとって初めて見る大きな町だもの、浮かれるのも分かるけどね」

隣で見ているカミラが苦笑いしている。

カミラの言う事も分からなくは無いが、命に関わる事を忘れるのは問題だろう。

「ヒトハを付けておいて良かった、いなかったらあのまま死んでいたかもしれない」

「お母様がこうやって見ているんだからそれは無いわよ」

「ヒトハに頼んでいても気にはなるからな」

私達はライベルの事を見ていた、これはヒトハにも教えていない。迷った彼を誘導したヒトハはいい仕事をしてくれた。

「そろそろ畑仕事をしてくる、カミラはあの子を見ていてくれ」

「分かったわ」

私はカミラの返事を聞き畑へと向かう。

あれから俺は更に川沿いに進み続け、人が住んでいた痕跡のある場所をいくつも見つけた。

しかし誰にも会う事は無く、食料が折り返しに近づいて来ていた。もう帰ろう……これ以上は危なそうだ。

引いている人力車の重さは大分軽くなっている。

保存食が半分ほどになっているから当然だけど……。

その分帰りは多少楽かな？

俺は戻る事を決めると、すぐに引き返し始めた。

町で迷った時に思い知ったからね……もう無様な真似はしない。

来る時に一度通った場所だ。

特に問題が起こる事は無く、俺は順調に進み続けた。

ただ帰る事だけを考え、ひたすら歩き続けていると……やがて遠くに見覚えのある畑が見えて来た。

俺達の畑だ……。

帰って来たんだと思うと体から急に力が抜けるが、俺は気力を保ち歩き続ける。

そして畑で仕事をしている母さんと姉さんを見た時、俺は人力車を置いて走り出した。

「帰ったよ!!母さん!姉さん!」

すると二人は顔を上げ母さんは微笑んで、姉さんは口元を緩めて……。

「おかえり」

そう、言ってくれた。

私達は帰って来たライブルに温かい食事を取らせ風呂に入れた。

その後、彼はすぐに寝てしまったのでカミラが寝床に連れて行く。

「ヒトハ、ご苦労だったな」

『途中に多少問題がありました但し処理いたしました』

恐らく迷った事だろうが、これは本人から聞こう。

「その問題とやらは本人から聞くとしよう。ヒトハ、これでライブルの付き添いは終了だ。またいつもの様に動いてくれ」

『かしこまりました』

会話している間にカミラが戻って来た。

「疲れていたのね、よく寝ているわ」

「慣れない旅をして過ごしたんだ、疲れもするだろう」

世界全体で見ると彼の旅した距離は僅かだが、人類が衰退してから恐らく一番長い距離を移動したのではないだろうか。

「今度は川上に旅をすると言いそうだな」

映像からあの子が川下に向かっていた事は分かっている、今度は逆にも行きそうだな。

「言いそうよね」

私がそう言うのとカメラも苦笑いして同意する、私は彼がそう考える可能性が高いと思っている。

彼は丸一日近く眠り続けた後、腹を空かせて起きて来た。

ライベルが旅から戻った後、彼から詳しく話を聞いた。

彼は町に夢中になり迷った事を正直に私達に話し、反省とヒトハを連れて行くように言ってくれた事への感謝を述べた。

そして彼は私達に一つの魔道具を見せて来る。

「町の建物の中に落ちてたんだ。母さんか姉さんなら何か分かるかも知れないと思って持って来た」

これは通信用の魔道具だな、かつて見た物と形が違うが間違いないだろう。

「どうだろう？なんだか分かる？」

ライベルは期待した様な目で私達を見て来る。

「これは通信用の魔道具だ」

「通信用の……魔道具？」

私の言葉に不思議そうに聞いてくる彼。

「魔力を使用して遠く離れた者と話が出る道具だ」

「遠くと話せるのか!? 凄いなこれ! ……あ、でももう使えないのか」
彼は大喜びするがすぐに落胆した表情になる。

「使えないな。今の世界には魔力がほぼ存在しないから動く事は無い、その上話す者が同じ物を持っていなければならぬ」

「もう動かないのかあ……」

実に残念そうな彼だが、動かないものは動かない。
「母さん、家に飾っていい？、旅をした記念にさ」
「良いわよ。でも、邪魔にならない所に置くのよ？」
「やったー！じゃあどこに置こうかな……」
彼はカミラから置く許可を貰うと魔道具を持ったまま悩み始めた。
「私は畑を見に行くから置き場所を決めたら来い」
「うん、わかった」
私は彼にそう言うのと外へ出た。

あれから一年ほど経った時、彼は今度は川上へ行きたいと言った。
私達は以前と同じようにヒトハを連れて行くように言い、彼も今度は素直に頷いた。
準備を整え彼は再び旅立ったが、以前より大分早く戻って来た。
途中で山になっていたらしく、どうにもならず戻るしかなかった様だ。

彼はどうにか生き残りを探し出そうとしていた。
その事にあまりにもこだわる為、ある日私は理由を聞いた。
「母さんと姉さんは長命種だろ？二人は俺が死んだ後も生きるんだ。……その時、他の誰かが居れば寂しくないと思って」
それを聞いた私はライベルの頭を撫でながら話す。
「本当にやりたいのなら止めはしないが、私達は平気だ。後の事は気にするな」

彼は黙って私の話を聞いている。
「お前が幸せに生きる事が私の願いだ」
「……うん」
彼はそう言っ泣き始めた、私はそんな彼の頭を撫で続けた。
私が彼に言った言葉は嘘では無い。始めは彼の母親に約束したからだが、いい子に育った上に長く面倒を見ればそれなりに情も湧く。
それから彼は生き残りを探す事にこだわる事は無くなり、私達と過

ごす日々をととても大事にするようになった。

その後も彼は懸命に生き続けた。

生活は楽とは言えず、娯楽も無く……出来る事といえば私達と会話する事くらいしか無い。

それでも彼は生き続けた。

「母さん……姉さん……ヒトハ……」

年老いたライベルが寝たまま私達を呼ぶ。

彼は百五十年近く生きている、そろそろ限界だろう。

「三人ともここに居る」

私達は彼の傍に座っていた。

私は大分前にヒトハが話せる事を教えている。

彼はとても驚いていたが、笑ってかつて救ってくれた事を感謝していた。

「……俺は、幸せだ。幸せだよ……」

「そうか」

「ありがとう……俺は向こうで三人の……幸せを……祈ってるよ……」

「ゆっくり休め」

「お休みなさい、ライベル」

『さようならライベル』

私達の言葉を聞いた彼は安らかな顔で人生を終えた。

彼の死体は形見のペンダントと共に母親の隣に埋めた。

人類は絶滅した。

こうなる事は分かっていたが、実際に起こると何とも言えない気分だ。

これが想像と実際に起きるのとは違うという事か？

「お母様、これからどうする？」

「そうだな。月に帰って新しい知的生命体が現れるのを待とうと考えているが、どれだけ時間が掛かるか分からない。以前は一万年程で今の人類が現れていたが、次はどれだけ待つ事になるだろうな」

私は休眠が可能だが、そうすると二人を放置する事になる。

恐らく私が再び休眠を行う事は無いかも知れない。

「私はいくらでも待てる気がするわ、私達は長い時間をのんびりと過ごしているのも好きだし」

『今までも平気でしたからね』

この二人が居るからな。

私は二人の会話を聞きながらそう考える。

取り敢えず月に帰るか。

「二人共、帰ろうか」

「ええ」

『了解しました』

私は最後に彼らが眠る墓を見て、月へと転移した。

人類最後の一人の死を見届けた私達は月の拠点へと帰り、イシリスに次の知的生命が現れるのを待つ事にした。

この状態のイシリスに生命が発生するのはいつになるかは不明だが。

長い目で見る事にしよう、場合によっては私が少し手を加えれば良いだろう。

「ここに帰ってくるのも久しぶりね」

「カミラ、イシリスでの生活中に消費した物資は補給しておけよ」
ライベルと共に過ごしていた間は戻っていなかったからな。

「分かったわ、でもまずは家に異常が無いか確認しないとね」

カミラは返事をしながら家の中に入って行き、私は外で拠点の環境に異常が無いかどうか確認した。

……全て問題無いな、後は世界樹の様子を見に行っておくか。

『世界樹の所へ行ってくる』

『いつてらっしゃい』

いつもより少し明るいカミラの声が返って来た、月に戻って来た事が嬉しいのかも知れない。

私がヒトハと共に世界樹の元へと向かうと、嬉しそうな気配がある。

世界樹も問題は無い様だ。

……ん？。

私が根元に近づくと、この拠点の環境を維持している闇の塊が土台ごと世界樹の根に取り込まれかけている。

近くに植え過ぎたか。

しかし、世界樹が闇の塊を狙っているようにも見えない。

「お前、何か企んでいないだろうな？ 私と敵対するのならお前も処分するぞ」

そう口にしてみるが、世界樹からは嬉しそうな気配がするだけだ。

出来るだけ好きにさせてやるつもりだし、しばらく様子を見る事でしょうか。

問題になりそうならやめさせればいいだろう。

拠点全体の状態と世界樹に問題が無い事を確認した後、私とヒトハは家へと戻った。

「お帰りなさい、食事の用意するわね」

「頼む」

私が帰るとカミラが食事の用意を始めた。

『戻ってきましたね、主様』

「しばらくは何処かに行く事も無いだろう、またここでの生活が始まるな」

ソファに座り、自分でモー乳を用意して飲む。

ヒトハはいつもの様に、私の隣に浮いて待機している。

私はマジックボックスから本を取り出す。

新しい本は以前から手に入らなくなっている。

紙の本は脆く簡単に駄目になる上に、人類に火を起こす材料として使われ早々にイシリスから存在を消してしまったからだ。

そんな事を考えつつ、しばらく本を読んで待っているとカミラが食事を持って来た。

「出来たわよー。色々揃ってるから楽しかったわ」

「美味そうだな」

久し振りとも言える月での食事という事もあり、カミラは張り切って作ったようだ。

普段よりかなり量が多いが、私に量など関係ない。

「カミラは無理して食べようとするなよ」

「分かってるわ、お母様がいるからこれだけ作ったの。それに今回だけよ、次からはいつもの量を作るわ」

カミラはどこか満足そうだ、たまにならこういう事も良いだろう。

「頂こうか」

私とカミラは大量の料理に手を伸ばした。

食事を終えた後、私とカミラはゆっくりと風呂に入っていた。

湯舟に浸かりながら、私はカミラに世界樹の話をした。

「闇の塊を飲み込もうとしている様に見える……ねえ……」

「カミラの目から見て何かおかしい事に気が付いたら教えてくれ、対応する」

「んー、世界樹はお母様の事好きみたいだし、悪い事はしないとと思うけど……」

私もそこまで心配はしていないが、世界樹には問題無くても私には問題があるかも知れないからな。

「私は不都合な事が起きないのなら、世界樹が私の構成物を取り込んでも構わないと考えている。念の為だ」

「分かったわ、何か気が付いたら教えるわね」

「頼む。それとヒトハ、忘れていたがお前も洗う」

私は隣で湯舟に浸からずに浮いているヒトハに目を向けて立ち上がる。

『かしこまりました』

カミラに返事をしてから、私はヒトハを洗う為に洗い場へ向かう。

その後は三人でゆっくり我が家の風呂を満喫した。

月での生活に戻り、ある程度時が過ぎたある日。

皆でくつろいでいると、カミラが私に提案して来た。

「お母様、これから三人で何かしない？」

「何か？」

「ええ、何かしましょう？」

『私は賛成いたします』

ヒトハはすぐに参加を選んだ。

「急にどうした？」

私はカミラに問いかける。

「今ならお母様が多少熱中しても問題無いでしょ？それに私が皆で何かしたいの」

カミラがやりたいのならば今の私には特に断る理由も無い。

「新しく何かが見つかるまで他の事をしておこうという訳か」

「そんな所よ」

私の言葉にカミラは微笑んで答える。

「構わないぞ、何をする？」

ただ日々を過ごすのも悪くはないが、何かをする事も楽しいものだ。

それに、そうして手に入れた技術や力がいつか訪れた脅威に対して役に立つかもしれない。

「三人で話し合って何をするか決めましょう？」

「何をするかも皆で決めるのか」

「そういう事、お母様は何かある？」

「新たな力や技術の開発だな」

「それを皆でやるの？」

カミラは苦笑いしている、何かおかしいのだろうか。

「ヒトハは何かある？」

カミラがヒトハに話を振る。

『……特に思いつく事は……申し訳ございません』
言葉通り申し訳なさそうに言うヒトハ。

「気にするな。必ず意見を出さなくてはいけない訳では無い」

私はヒトハを軽く撫でる。

不安そうな子供には触れてやるのが良い。

幼い頃のカミラにもよくやった、今でもたまにする事もある。

これは以前からヒトハにもやっている。

同じように効果があるかは分からないが、やらないよりは良いと考

えている。

「色々と話してみようか」

私はカミラに言う。

「そうね。……ヒトハ？ゆっくり決めましょう？」

私に返事を返してから、カミラはヒトハに声をかけた。

『はい、ありがとうございます』

さて、何をしようか。

話し合いは長く続いていたが、途中からはただの雑談のようになっていた。

そんな中でカミラが言う。

「そう言えば前に、マジックボックスの技術を使って広い空間を持ち歩けるようにしようって話をしたわよね？それはどうかしら？」

そんな話を話した事もあったな。惑星を持ち歩こうなどと話していたような覚えがある。

『良いのではないのでしょうか？賛成です』

ヒトハも良いと感じている様だな。

「お母様。ヒトハも賛成みたいだし作ってみない？好きなように世界を作るのも楽しいかも知れないわよ？」

「実際に世界を作るかはともかく、小さな物の中に惑星一つが入る程度の空間を作れるかは試してみたいな」

「じゃあ決定ね？持ち運べる世界の作成をしましょう」

『微力ながらお手伝いいたします』

こうして私達は持ち運べる世界を作る事に決め、今後の事の話に移った。

私に合わせてしまうとカミラが睡眠と食事を取れなくなる。

そういう理由からいつもの様に生活しつつ、その合間に持ち運べる世界を製作する事に決めた。

カミラが居ない間に進めてしまったら皆でやる意味が無くなるからな。

二人には念の為、私が夢中になっていたら声をかけるように頼んだ。

私は夢中になると多少周りが見えなくなる事が多い。

以前は夢中になって二人を放置していた事もあったが、今はそのよ
うな事をする気は無い。

こうして二人に頼んでおけばどちらかが止めてくれるだろう。

「さて、これからやる事だが」

私はリビングでこれからの事を話す。

「何から始めるの？」

カミラが私に尋ねる、何となく楽しそうな声色をしているな。

「まずは内部と外部を行き来する魔法を完成させる」

「完成してから出入りできない状態になっていたら無駄になるもの
ね」

『早速行いますか？』

「そうだな、二人が良ければやろうか」

それから私達は三人で魔法開発を進めたが、元々難しい魔法では無
いためすぐに完成間近になった。

そこで、私は二人に先にやっていて欲しい事があると頼む。

「やって欲しい事？」

『何でしょうか？』

私は尋ねて来る二人に伝える。

「使う素材の選定と、形状を決めて欲しい」

「素材と形状……形状はともかく、素材は大事な事よね」

カミラは納得した様に話す。

「そうだ。実際に惑星などを入れていた時、器が壊れてしまったら周囲に影響が出ると思う」

『どうなるのです？』

私はヒトハの問いに答える。

「恐らく内部の物が出て来るはずだ。もしも他の惑星の中で壊れてしまった場合、惑星同士が衝突する事になるだろう」

『……確かにそれは危険ですね』

「そうなたら住んでいる生物達に迷惑がかかるからな、出来るだけの対策は必要だ」

「迷惑で済めばいいけど……」

カミラが呟いた。

「その場に私がいれば問題無いが、私が居ない時に壊れてしまうのは避けたい。勿論魔法で強化や保護はするが、念の為に素材も厳選したい」

「確かにしつかり選んでおいた方が良いわね。後は形状だけ……これは後でも構わないかしら」

「形状は特に言う事は無いが、大きさは私達が片手で掴める程度の大きさを予定している」

「……なるほど。まずは素材の選定だけれど、形状も考えておきましようか」

カミラはそう言いながらも何か考えている様だ。

こういった魔道具を作る際には、安心して使える強度と持ち運びやすい大きさは重要だ。

後は軽さだが、これはマジックボックスも魔法靴も問題無いので内部の重量は影響しないと考えている。

それでも確認はするが。

もし何か問題が起きて、手で持てる大きさのまま重量が内部の総重量と同じになっていた場合、私以外は持てないかもしれない。

「素材を入れた魔法靴を渡しておくから、先に確認しておいてくれ」
「分かったわ」

私は魔法靴をカミラに渡す。

「なんだか楽しくなって来たわね。行くわよヒトハ」

『かしくまりました』

そう言っつて二人は外へ出て行く、私も出入り用の魔法を仕上げよう。

出入り用の魔法はそれほど時間はかからずに完成した。

これで本格的に持ち運べる世界の開発が出来る、そう思いながら私は二人の元に向かった。

……爆発音が聞こえるな。

私が音の方へ向かうと、魔法金属を始めとした素材の残骸が散らばっていた。

「何をしている?」

「強度確認よ」

カミラが私の問いに答える。

『……損傷が大きいですね、これも駄目なようです』

ヒトハが残骸を確認して言う。障壁を張って周囲に被害が出ない様になっているなら特に言う事は無い。

「今の所どれが良いと見ている?」

「お母様を作ったクレリウムかしらね。厚みがあれば一番耐えているわ」

軽く、薄くても高い強度を持たせるために作った魔法合金だからな。性能は頭一つ抜けているかも知れない。

人類は結局これを超える魔法金属を作る事が出来なかったな。

「これしかないか」

「でも強度はこれでも駄目だと思うわ。人類の魔道飛行船も外装はクレリウムだったはずなもの」

「そうだったな」

私達の攻撃に全く耐えられずに落とされていたのを思い出す。

『主様……このままではどれも使えないかもしれないかもしれません』

ヒトハの言葉を受けて私は考え始める。

また新しく魔法金属を作るか?

納得出来る物を作るのに時間はかかりそうだが、三人で魔法金属から作るのも悪くは無いな。

そう思いながら何気なく二人を見ていて気が付く。

……良い素材が身近にあるな。

「私の構成物」

私が呟いた言葉に二人がこちらを見る。

「それは……確かに素材としては最高かも知れないけれど……」

『主様に問題が無いのでしたら私は賛成です』

「私の構成物は高い強度を持ち、様々な特性を付けられる便利な物だ。万全を期すなら今の所これ以外思いつかない」

「……本体を別な物で作って、覆って保護すればいいんじゃないの？」

それも悪くない、むしろそれで十分かも知れない。

だが、私は私の構成物がこういった事に使えるのかを試してみたい。

「カミラが言う方法でも十分だとは思いますが、私の構成物を使う事にする」

「お母様がそうしたいのなら私は構わないけれど、何かあったらやめて欲しいわ」

『主様、十分にお気を付けてください』

「ありがとうございます、問題がありそうならすぐに中止するつもりだ」

私は二人に礼を言うと、私の構成物を分離する。

「よし、これに手を加えて行こう」

私達は作業に取り掛かった。

こうして持ち運べる世界を作り始めたのだが、すぐに問題が起きた。

「私達じゃ手を加えられないわよこれ」

『どうにもなりませんね』

二人では分離した私の構成物に手を加える事が出来なかったのだ。その為作業はすべて私が行い、二人は私と会話しながら眺めている

だけになった。

「悪かった。こうなる可能性を考えていなかった」

私は二人に謝った。

皆で製作するという目的の一つを、私が試したい事を行った事で潰してしまった。

「良いわよ、見ているだけでも楽しかったわ」

『主様の素晴らしい力を見せていただく事が出来ました』

二人はそう言ってくれる。

皆で作るという点では失敗だったが、私は意見を変える気は無い。事前に気がついていても、恐らく行っただろうな。

今度三人で別な物を作ろうか。

「お母様、問題無いのなら本体の入れ物を作りたいわ。どうかしら？」

そう考えていると、カミラが提案して来た。

それはいい案だ。

「何の問題も無い、是非作って欲しい」

問題は無いのでそう答えたが、もし問題があっても私はどうにかして問題を無くしていただろう。

「本体の作業を見ていたから、本体をお母様が作り終わったら作りますようか。ヒトハもそれでいい？」

『はい、問題ございません』

それからは再びいつもの様に過ごしながら製作を進めた。

時には訓練をして、時には人類が残したゲームで遊んだ。

私に新しい知識が流れ込んで来たり、巨大な隕石が月にぶつかるのを防いだりしながら時は過ぎて行く。

月の研究所で少しずつ製作を進めていた私は。たった今本体を完成させた。

「持ち運べる世界の本体が完成したぞ」
そう言って二人の前に本体を置く。

出来上がったのは小さな闇の塊だった。

「正直……見た目は変わってないわよね？」

カミラが手に取り眺めている。

『確かに、違いが分かりませんね』

間違はなく完成しているが、外見は何も変わっていないからな。

「変えた方がよかったか？入れ物を作ると言っていたから気にしなかったのだが」

「何も問題無いわ、ありがとうお母様。この方が自由に入れ物を作るから良かったと思う」

「正式な名前を決めないと」

私がそう言くと二人も考え出した。

しばらく皆で考えている時、私はカミラの掌にある完成品を見て思いつく。

「掌の世界、というのはどうだろうか？」

そう言くと二人は私を見る。

「いいんじゃないかしら」

『素晴らしい名前です』

「そうか、決定だな。この完成品の名前は「掌の世界」だ」

こうして名前も決まり、後は入れ物を作るだけになった。

その後、カミラとヒトハの二人は入れ物を作り始めたのだが、私は顔を出していない。

経過を見ずに完成品を見て欲しいというカミラの頼みを聞いたからだ。

私はいつも通りに過ごし、二人が製作をしている時は世界樹の元で

二人の周囲の知覚を完全に遮断して過ごしている。
今でも世界樹は嬉しそうに私の事を迎えてくれる。

闇の塊は今では完全に世界樹の根に包まれて見えなくなっていたが、それから何か問題が起きる事も無く時が過ぎていく。

「お前、また少し大きくなつたな。元気で何よりだ」

私は太い幹に手をつけて話しかける。

風に吹かれて周囲の大きな葉が鳴っている、ここは中々居心地がいい。

ある日、カメラから完成したという報告があつた。

私はリビングで待つていて欲しいと言われ、言われた通りソファに座つて待つている。

「お待たせ、お母様」

しばらく待つていると、カメラとヒトハが現れる。

ヒトハは小さな箱を持つていた。

『どうぞご覧ください』

ヒトハがテーブルに箱を置き、中身を取り出してそつと私の前においた。

「良いな」

私はそう呟いた。

一目見てすぐに分かるとても良い出来だつた。

横幅は私の掌から少しはみ出る程で、高さは15cm程だろうか。
質素で穏やかさを感じさせる装飾が施された台座が美しい。

その台座の上には透明度の高い球体に乗つていて、気品を感じる装飾が表面に施されている。

そして球体の中心には私が製作した黒い本体が納められ、常に揺らめいて見えていた。

『台座は私が担当いたしました。クレリウム魔法合金を使用し、装飾を施しました』

ヒトハは私に説明してくれる。

『カミラ様より主様は派手過ぎる装飾は好まないと聞いたため、私なりに考えさせて頂きました』

これはヒトハが考えたのか。

こういった事も出来るようになったのは成長しているという事だろう。

「次は私ね。本体を覆う素材は透明度を出すために魔水晶を魔法強化して材料にしたわ。装飾はお母様に好みに合わせて控えめで主張し過ぎない物にしたつもりよ」

透明な魔水晶に表面の装飾が映えている、いい出来だと思う。

「実際には本体は魔水晶内部に固定されているけど、水晶の透明度を生かして浮いて揺らめいて見えるように加工しているわ」

なるほど、実際に浮いて揺らめいている訳では無い訳だな。

二人が作った物ならばどんな物であっても構わないと考えていたが、予想以上に素晴らしい出来だ。

「二人ともありがとう。私の予想以上の出来で驚いている」

私がそう伝えるとカミラは嬉しそうに微笑み、ヒトハは左右に少し揺れていた。

「今はまだこれ以上する気は無いが、いつか世界を作る時には手伝ってくれると嬉しい」

「もちろんよ」

『お手伝いさせていただきます』

製作した掌の世界は部屋に飾る事にした。

本来ならマジックボックスにしまっておく方がいいが、私達の合作でもあるし美術品としても気に入っている。

そして何処に置くかを話し合った結果、リビングに飾る事に決まった。

掌の世界を作り終えてから、時は流れる。

特に何か起こる事の無い変わらない日々ではあるが、私はそんな日々も嫌いでは無いな。

一人で過ごしていた日々も悪くは無かった。だが、一人であった頃に戻りたいかといわれれば、戻りたいとは思わない。

今まで過ごす内に時間に対する感覚が多少変わった。

私は元々時間をあまり気にしていなかったが、人類が居た頃は僅かに時間を気にかけていたカミラとヒトハも、今では全く気にしなくなった。

今の私達は人類が減びてからどれほどの時間が経ったか分からない状態になっている。

現在、私は世界樹の枝に座り、月の世界と風に揺れる葉を見ている。世界樹はかなり巨大だ、上に登れば月の拠点が良く見えるだろう。

「お母様ー、食事が出来るわよー？」

下からカミラの声が聞こえる。私達はこうしてわざわざ時間をかけて行動するようになっていた。

私は返事を返さず世界樹から飛び降りる、ヒトハも私を追ってついて来た。

私達は並んで家へと歩く。

様々な興味を引く事に関わるのは勿論楽しいが、こんな時間も私にとっては心地いい。

その時、私はこちらに近づいて来る小惑星を感じた。

「二人とも、小惑星が近づいているが当たる事は無いから気にするなよ」

私は歩きながらそう伝える。

「いつもの事ね、分かったわ」

『了解しました』

イシリスには当たるが既に生物などいないし、あの程度でどうにかなる事も無いだろう。

私達はそのまま家に向かい、食事を楽しんだ。

その後、私は念の為にイシリスの様子を見に行った。

恐らく先程の小惑星が落下したのだろう。イシリスの一部が煙の様な物で覆われて見えなくなっていたが、やはり特に問題は無さそうだった。

私は月面からイシリスを見上げていたが、すぐに拠点へと引き返した。

ある日、私在家畜達の様子を眺めていると念話が来た。

『お母様、私の所へ来て。イシリスの様子が変わっているわ』

『すぐに向かう』

念話での報告を聞いた私はカミラの元へと転移した。

興味深い事になっているな。

イシリスは全体が黒い煙のような物に覆われて光の筋を走らせていた。

『二人とも、私はイシリスへと向かうがどうする?』

『行くわ』

『お供いたします』

『分かった』

私達は転移でイシリス上空へと転移した。

「なにこれ?」

『何も見えませんね』

転移後、二人の声が聞こえるが姿が見えない。

予想以上に煙のような物が分厚くイシリスを覆っている様だ。

「地上へ向かおう、降下しろ」

私がそう言うと二人の気配が降下していった、私も二人について行く。

暗闇を抜けると、地上は輝く川の世界になっていた。

至る所に巨大な火山が生まれ、噴火を繰り返している。

月から見た時、惑星全体が煙の様な物に覆われていたのは噴火の影響か。

「なにこれ……何で急にこんな事に？」

『今までイシリスでこのような事は見た事があります。ですがその時の火山は単独で、ここまでの規模の物は見た事ありません』

二人はかなり驚いている様子だが、取り敢えず見て回ろう。

「障壁を張っておくべきだったな、もう遅いだろが」

火山からの物だろう、周囲には雪のような灰が大量に降り注いでいる。

「あつ……帰ったらお風呂に入りますよう」

『私も洗わないと問題がありそうです』

二人は既に汚れているな、勿論私も汚れている。

障壁を張らずにイシリスに転移した時点で手遅れだった。

「帰ったら皆で風呂にする事は決定だが、まずは手分けして状況を確認しよう」

「分かったわ」

『了解しました』

私達は三方向に分かれた。

明るく輝く大地を上空から見て回る。

火山同士の間隔があまり離れていないからか、周囲の大地が溶岩で埋まりそうな状況だ。

海にも多くの火山が出来ていて、溶岩が海に流れ込み煙を上げ続けている。

都市や町、集落など、人類の痕跡は全て飲み込まれていた。

その後私達は状況を報告し合い、惑星全体が同じ状況である事を確認した。

「この惑星規模の大噴火で何かが変わるだろうか」

「どういう事？」

カミラが私の言葉に対して疑問を口にする。

「イシリスに新しい知的生命体が現れる可能性が、少しは上がるのではないかと思ってな」

「そうね……あのままだといつまでかかるか分からなかっただろうし。これだけの規模だもの……何かが起きる可能性はあるわよね」

『この状態は生命が生きていける環境では無いのでは？』

ヒトハが問いかけて来る。そうかもしれないが、全く望みが無い訳でも無い。

「ライベルのような事もある。以前の生物が生きていけない環境下でも、生きて行けるように進化出来るという事をあの子が示した。だからどんな環境であろうと可能性があると私は考えている」

「なるほどね……。かなり難しいとは思いますが、無いとは言えない。だから待つ……という事ね？」

「そうだ。どんなに低くとも可能性があるのならばいくらでも待つ、私にはそれが出来る筈だからな」

私は微笑みながら答える。

『主様、いつまでもお供いたします。……どれだけの時を過ごしても問題ありません』

「私も生きている内はまだまだお母様というわよ、こうしている事が楽しいし嬉しいもの。心安らぐ事はあっても嫌だとは感じた事は無いわ」

「ありがとう。所で……溶岩がある訳だし、久しぶりに浸かろうと思っただが」

「私はやめておくわ」

『私は強度的に可能でしょうか？』

「え!? ヒトハは入るの？」

結局私とヒトハは溶岩風呂に入り、カミラは近くでその様子を見ていた。

その後、家に帰り改めて風呂に入った。

だが体に触れた湯が一気に蒸発し風呂場が蒸気で真っ白になり、私とヒトハはカミラに苦笑いされた。

あれから火山活動は更に活発になり、長い間イシリスは噴煙と溶岩に包まれている。

時々私は溶岩に浸かりにイシリスへと降りるようになった。

二度目は汚れない様に障壁を張るようにしたのだが、溶岩に浸かる時は解除するため無駄だと気が付いてからはやめた。

その為、私は溶岩に浸かり、その後汚れを落とすために家で風呂に入る……という行動をしている。

カミラは溶岩を持ち帰って家で入れれば良いと言っていたが、火口に浸かり噴き上がる溶岩を見ながら入る方が好みだ。

ヒトハは一度入ったが良さが理解出来なかったらしく、私と共に火口には来るが浸からずに隣に浮いているだけになった。

溶岩浴の仲間が出来るかと思っただが。

私が溶岩に浸かっている時にも小惑星は落下している、イシリス中に時々落下しているな。

もしイシリス自体が壊れてしまうような大きさの小惑星が来た場合は手を出すかもしれないが、それ以外は放置している。

ただ、人類がいた頃はこれ程小惑星が落ちて来た事など無かったはず。

そこが気になると言えば気になるな。

私は月面でイシリスを見上げている。

イシリスの火山活動は少しずつ収まって来た。
噴火の治まった火山が増え始め、流れる溶岩の川も減り始める。
私は溶岩浴もそろそろ出来なくなるなど思いながら、イシリスを眺
めていた。

一応溶岩はある程度保存しておいたから家で浸かる事も出来るが、
私は周囲の環境を含めて気に入っていた。

家に入るかは分からないな。

『大分収まって来てるわね』

隣にやって来たカミラもイシリスを見上げる。

『この火山活動で惑星の大半が溶岩に覆われたが、そろそろ完全に
治まるかも知れないな』

『また何かあると良いわね』

『そうだな、これからを楽しみにしよう』

私は現在、時々イシリスの状態を確認しながら過ごしている。

今回起こった大規模な火山活動は治まりかけた状態を維持したまましばらく続いていたが、やがて完全に治まった。

火山活動が治まりイシリスの煙も完全に落ち着くかと思っただが、今もイシリスを覆っている煙は消えていない。

それどころか再び煙が厚くなり、現在では惑星全体が煙に覆われ地表が見えない状態だ。

「イシリスの煙は中々晴れないわね」

食事をしている時、カミラがイシリスを話題にする。

「そうだな」

「全く消える気配が無さそうだし……しばらくはこのままかしらね」

「私は一度地表の様子を見にイシリスに行くが、二人はどうする？」

「どうしようかしら……気にはなるけれど……大体予想出来るのよね」

「私も予想はしている。煙によって太陽の光が長い間遮断されているからな、恐らく地表の温度はかなり下がっているだろう」

「今回はやめておくれ、帰ったら話を聞かせて？」

「良いぞ、もし予想外の事が起きていたら呼ぶか？」

「いいの？じゃあ何かあったら呼んで欲しいわ、見に行くから」

「分かった、ヒトハは？」

『お供いたします』

「では行くか」

「行つてらっしゃい、気を付けてね」

「分かった」

私はカミラの見送りの言葉に答え、イシリスへと転移した。

転移した直後、激しい吹雪に襲われた。今は昼のはずだが薄暗く、予想通り気温が低い。

『行くぞヒトハ』

『了解しました』

吹き荒れる吹雪の轟音で声が聞こえないと判断し念話に切り替えると、そのまま私達は地上へと下りて行く。

『真っ白ですね』

地上に近づいた時にヒトハが言う。

周囲は全て真っ白に染まり、何処を見ても白しか見えない。

『大体予想通りだったな』

このまま極端に環境が変わり続けると、生命の誕生が遠のきそう
だ。

『少し見て回ろう』

『かしこまりました』

それから地表を確認したが、最後まで白い景色が変わる事は無かつた。

「ただいま」

『ただいま戻りました』

「お帰り、どうだった？」

カメラがソファに座ったまま聞いてくる。

「強い吹雪になっていて地表は真っ白だ。かなり積もっているよう
だったが、それだけの様だったから戻って来た」

「予想通りだったのね」

「その通りだ。いつか気温が上がる事があれば、次は大量の氷が解
けて水浸しだな」

「ふふ、やっぱりそう思うわよね」

カメラも同じ事を想像していたのか笑いながら言う。

あれだけ氷があれば次はどうなるか簡単に予想出来るからな。

「何か動きがあるまではあのままだと思うが、待っていればまた何か起こるだろう」

「そうね、ゆっくりと過ごしましょうか」

『お二人とも、何か飲み物をお持ちいたしましょうか?』

「モー乳入りの紅茶を、割合はいつものままで頼む」

「私は世界樹の果実酒をお願い」

『かしこまりました』

ヒトハが飲み物を用意しにキッチンへと向かう。私はソファに座り、またいつもの生活へと戻った。

私は現在、小惑星を警戒するためにイシリスと月の周囲の宇宙空間を知覚しながら過ごす様になっている。

小ささまざまな宇宙の飛来物を確認し、ぶつかると問題のありそうな物だけを排除している訳だが、その中の一つの動きが気になる。

『二人とも私の元へ来い』

私は念の為、二人を自分の元へと呼び寄せた。

心配しすぎかもしれないが、宇宙には何があるか分からない。

「どうしたの?」

『主様、御用でしょうか?』

すぐに現れた二人に私は説明を始める。

「私が周囲の宇宙空間を知覚しているのは知っているとと思うが、気になる動きをしている物がある」

「どう気になるの?」

カミラの疑問に私は答える。

「途中で減速した上に、方向を数回変えながら近づいて来ている」

『ただの漂流物がそのような動きはしませんね』

「お母様、何だか分かる?」

普段はやらないが、明らかに不審な物なら話は別だ。

私は知覚を使い詳しく調べる。

……これは……なるほどな。

私は口元が緩むのを感じた

「詳しく知覚してみた。どうやら乗り物のようだ、多数の生命体が乗っている」

「乗り物!?生命体に乗ってるの!?!」

カミラが驚いた声を上げるが、私も内心では驚いている。

イシリスの人類は宇宙に辿り着かなかった。

生身でも問題無いかまでは分からない。

だが、少なくとも宇宙空間を移動する事が出来るだけの技術を持つ生命体が、この宇宙には存在していたようだ。

宇宙には他にも私が想像も出来ない何かが溢れているのだろう。

つい先ほど私自身が言った通り「宇宙には何があるか分からない」のだから。

『その様な生命体がいるのですね……』

私が内心で喜んでいると、ヒトハが呟く。

この生命体が何であれ、近づいて来ている以上ただ見ている訳にはいかない。

「私は確認しに行くが、お前達は来るな」

「でもっ……分かったわ、お母様に任せる」

カミラは叫ぶが、すぐに私に任せてくれた。

未知の存在。

敵かどうか分からずどれだけの力があるかも分からない。

そんな相手の前にこの二人を連れて行く気にはならないな。

「ヒトハ、構わないな?」

『……主様がそうおっしゃるのならば』

ヒトハも納得してくれた。

私は念の為、拠点の障壁を強化してから目標へと向かった。

この辺りの星系は見えていなかったな……。

惑星の資源を調べて回り、豊富な資源があれば本格的に動き回収する。

これも軍の仕事だ。

ワープを使ってかなり離れた星系に来たが、この星系は凄いな……。

これほど資源が豊富な星系は珍しい。

距離は離れているが時間的にはそうでも無かった、ワープ航法は偉大だ。

今までの調査結果だけでも十分我々が動く価値があるが、もう少しだけ調べていない所を調べておこう。

その後は……帰還するべきか？

いや、まだ余裕はある。この付近を調べてから改めて考えようか……。

「加速した？……群長。何かが……こちらへと迫っています」

私が色々と考えていると、レーダーを観測していた者の報告と共に情報が送られて来る。

「まだ加速している?!……まもなく本艦の最高速度を越えます!」

一体なんだ……?そんな速度を出せる艦が何故こんな所に？

「何処の所属艦か特定出来るか？」

「もうすぐ解析が終わります、お待ちください……っ!」

返答した者が言葉に詰まる、どうした？

「ぐ、群長……これは艦ではありません。われわれと同程度の大きさの何かです……それ以外はエラーを起こし不明です!」

その報告が静かな艦内に響いた。

「特一戦闘警戒!!」

私は迷うことなく警戒令を発動させた、途端に艦内が騒がしくなる。

我々と同程度の大きさ……?そんな大きさでこの艦以上の速度を出す物など私は知らない。

「各出力最大!攻撃にも防御にも最大の出力を出せるようにしておけ!……ワープは!」

「十分必要です!!」

何かあつてもすぐには逃げられないか……。

一体なんだ？我々と同じ程度の大きさしかない物がこの艦以上の速度をどうやって出している？

新種の宇宙生物か？もしそうなら危険だ、奴らは我々の常識を超えている事がある。

……もうすぐアレがこちらに到着するな。

危険だろうが危険でなからうが報告しなければならぬが……その前に生きて帰らなくてはならない。

僅かな時間の後、それは我々の艦から離れた所で停止した。

映像には黒髪の美しい少女が映っている。

「ヒーラン星系種の少女……？」

誰かのつぶやきが聞こえ、全員が見とれているかのように映像を見ている。

確かに似ている、似ているが……。私には宇宙よりも暗い何処かへと我々を引きずり込もうとしているように見えた。

「目を覚ませ！ヒーラン種の少女が生身で宇宙にいられるか!?この艦以上の速度で移動する訳がないだろう!?見た目に騙されるな!!」

私の怒声に部下達は我に返ったように動き始める。

「レーザー照射準備！シールド展開！」

「りよ、了解！」

「レーザー照射準備完了！」

「シールド展開完了！」

僅かに遅れるが皆も優秀な部下達だ、すぐに指示に答えてくれた。映し出されているアレは我々に近づいてくる。

……どうする？

……いや、近付けるのは危険だ……殺すしかない。

「レーザー照射！」

「レーザー照射します！」

この艦に装備されているレーザーは強力な物だ、念のため戦艦で来た事が幸いした……。

「ぐ……群長……レーザーが……」

映像には照射されているレーザーがアレに当たる前に、見えない何かによって遮られている様子が映されていた。

部下達が信じられない様な顔をしているが、私だって信じられない。

「馬鹿な……」

私はそう呟きながらも、頭では次の行動を考えていた。

もう私達は攻撃してしまったのだ、攻撃してしまったからには向こうも我々を敵と判断するだろう。

私はどうするかを考える、急がなければアレの攻撃が来る……！

しかしいつまでも反撃は来ない、画面の中の何かはこちらをじっと見つめている様に見える。

「群長！ワープ可能です！」

「ワープ開始！」

ワープ可能の報告を聞いた私は、即座にワープの指示を出した。

そして私達は隣の星系へとワープする。

……生き延びる事が出来たか……。

資源があれ程豊富であるにも関わらず、あの星系が手を付けられていないのはアレがいるからか。

私達と同じように訪れて資源に釣られ、あれに殺されたのだろう。

この映像と戦闘記録、各種データは全て提出すべきだが、相手は考えた方が良くかも知れない……。

私が考えているうちに艦が消えてしまった。

周囲にもいない。

転移に似た反応を出していたから何処かへ移動したのだろう。

接近するまでの間で、中にいるのがイシリスの海洋生物を思わせる特徴を持った人型の生物である事と、知性がある事が分かった。

知性があるのなら会話が出来るかも知れないと更に近づいた事が問題だったのだろうか？

……そういえば、イシリスの野生動物も急に近づけば警戒したし、時には抵抗もして来たな。

次はもう少し慎重に近づこう。

私は月へと帰り、二人に話して聞かせた。

「どうしようか考えている内に消えたのね」

私の説明を聞いたカミラが言う。

「周囲にもいなかった、転移のような反応があったからどこか遠くへと移動したんだろう」

「逃げたのかしら？」

「恐らくそうだろう、失敗してしまったな」

『失敗ですか？』

聞き返してきたヒトハに私は答える。

「そうだ。どんな判断をするにしても、先にあの艦が逃げられない様にしておくべきだった」

「次はそうしたらいいじゃない、また来るわよきつと」

「カミラはまた来ると思っているのか？」

私の言葉にカミラは頷いて話し始める。

「……知性があつてそこまでの文明があるなら、逃げた艦は何処かに所属していると思うわ。そして今回の事を報告するはずよ」

「なるほどな」

「きつと国も相当大きいはず、宇宙を移動出来るのならいくつもの惑星を支配下に置いていてもおかしくないわ。そんな国がこのまま逃げるとは思えない」

『ここに来た目的も分かっていますね』

「そう言えばそうね」

ヒトハの言う通り、なぜあの艦があの場合にいたのかが分からない。カミラの予想では再びやって来る可能性が高いようだし、次に期待だな。

「可能性が高いのなら待ってしよう。次は友好的でない場合に備えて月やイシリスからもっと離れている時に会う事にしようか」

「お母様が負けるとは思っていないけれど……」

「不安か？」

「不安よ、それがお母様であつてもね」

『危険であれば逃げてしまえば良いのではないのでしょうか？』

「その選択もある」

私はヒトハの言葉を肯定する。

「お母様も逃げる気はあるのね？」

カミラが意外そうに言う。

「場合による。逃げた方がより良い結果につながると思えば逃げもする、そんな状況はそうあるとは思えないが」

「なるほどね……」

「食事の前に風呂に入るか」

「じゃあみんなで入りましょうか」

あの知的生命体が再びやって来る事を期待しよう。

私はそう考えながら、風呂へと向かった。

宇宙を移動する技術を持った知的生命体が存在する事を確認してからも、私達は時を過ごしている。

時々イシリスの様子を見ながら自由に過ごしているが、一つ大きな出来事があった。

「主様、お飲み物の用意が出来ました」

ぎこちない動きで一人の女性が飲み物を持って来た。

私ともカミラとも違うその声には、はつきりとした感情が込められている。

見た目は十八歳程になっている。

灰色の瞳を持ち、肌は白く、瞳と同じ灰色の髪を肩辺りで揃えている。

彼女は体を得てから給仕服を好んで着ているな。

「新しい体はどうだ？」

「まだまだ慣れが必要ですが、素晴らしい体です。私もお二人と同じように共に生きて行ける事が夢のようです」

私が作り上げたこの体はヒトハの要望を聞き、作り上げた物だ。

見た目や触り心地は私達と大差ないが、その肉体は私、カミラ、人類、ゴレム、魔動機、そのどれとも違う。

名前を付けるとすれば、魔法生物とでも言うべきか。

身長は155cm。体重の基準は46kg、胸はやや控えめだ。

カミラからは私に少し似ていてかなりの美人だと評価された。

外見が私に多少似ているのは、ヒトハが私を主にしているからだろうか。

「問題が無いようにしているつもりだが、慣らしだという事を忘れるなよ？」

「はい、承知しております」

彼女は微笑む。

体を手に入れてからヒトハの感情が良く分かるようになった、表情

が分かるのは重要だな。

「隣に座れ」

「私は主様に仕える使用人ですが……」
困ったような表情になるヒトハ。

こうしてヒトハを見てみると、彼女が一つの生命になった事を感じる。

体だけでは無く、精神や魂という意味でも。

「いつもお前は私の隣に浮いていただろう」

「……では、失礼します」

ヒトハはそう答えて隣に座る、問題は無いようだな。

彼女はある日、私達のように共に生きたいと言い出した。

作られた意思ではなく自分の意思で共に居たいのだと。

体を与える準備は事前に終わっていた。

それを伝えた時のヒトハの呆けた念話の声は初めて聴いた声だったな。

そして彼女は体を得た。

体を得て目を覚ました時、彼女が初めてした事は嬉し泣きだった。

それからの彼女は食事をしては泣き、風呂に入っては泣きと、それはもうよく泣いた。

以前では感じていなかった感覚が一気に押し寄せていたのだろう。

もっと早くこうしてやれば良かったとも思ったが、彼女自身が変わらなければ意味が無かった。

そうでなければ、私達に似た姿の魔道具が出来上がるだけだからな。

体の感覚や見た目などは私達に近く、排泄はしない。

痛覚は無く、何かあった際はヒトハに異常が通知されるようになってる。

「主様、何か御用があったのでは？」

ヒトハを見ながら考えていると彼女が声をかけて来た。

「その服の着心地はどうだ？」

「素晴らしいです、他の服は必要ないですね」

彼女の着ている給仕服は私の構成物を使用している、カミラのドレスと同じだ。

この服は私の構成物の色を変化させた物だ。

これはヒトハの提案だった。

今まで私は色を変えろという事を試さなかった、考えからすつぽりと抜けていた。

私はその事を二人に話したのだが、カミラには「お母様が何処か抜けているのは昔から知っているわ」と言われ、ヒトハには「そんな主様を支える事が私の幸せです」と言われた。

この服はカミラのドレスのように変化させる事が出来る、ヒトハはロングスカートを好んでいるようだ。

カミラのドレスも他の服に変化出来るようにするか聞いたが、彼女が「後々必要だと感じた時に付けて欲しい」と言ったので見送った。

「デザインを変更したい時は言うようにな」

「はい」

元のヒトハの本体は頭部に人類の脳のように収められ、体に接続されている。

もしも何か問題が起きた時は体を放棄する事も可能だ。

「色々とこれから教える事になるが、まずは普通に生活を続けて体に慣れろ」

「はい、そう致します主様」

これは重要だ。

今でこそ私に飲み物を用意出来る程になっているが、体を得てからしばらくの間は立つてゆっくり歩くだけで精一杯だった。

更に以前の体の感覚が抜けず、物の上を通ろうとして足を引っかけたり、狭い隙間を通ろうとして体が引っかかったりもしていたな。

私達と同じような体で生活する為には、今まで必要無かった様々な事を覚えなくてはいけない。

最終的にはこの体で私達と一定以上戦えるようになって貰う。

そんな事を考えているとカミラが風呂から上がって来た。

「ふー……さつぽりしたわ」

「カミラ様、お飲み物はいかがいたしますか？」

「お風呂上がりだし、モー乳を貰える？」

「かしこまりました」

カミラは風呂上がりだけの時だけ、時々だがモー乳を飲む。

風呂上がりだけの時だけは紅茶や酒より良いらしい。

『カミラ』

私はヒトハに気付かれないように念話でカミラに話しかける。

『どうしたの？』

『私はヒトハにアーティア姓を与えようと思う』

『どうぞ、モー乳でございませう』

『ありがとうございます』

カミラは念話をしながらもヒトハに対応する。

『もう家族みたいなものでしょう、遅いくらいよ？』

『ヒトハが体を得た時に与えたい、という私の我が儘だ』

『あの子が体を欲しがらなかつたらどうするつもりだったのよ』

『その時は普通に与えていた、いつになつたかは分からないが』

『もう……ほら、お母様。決まったのだから早くしてあげて』

『分かった』

ヒトハは飲み物を用意した後、私の傍に控えている。

「ヒトハ、こちらに來い」

「はい」

そう答えてヒトハは私の前にやって来る。

「お前にこれから名乗る姓を与えたいと思うが、構わないか？」

「ありがたく頂戴いたします」

ヒトハはそう言って跪き、首を垂れた。

「これからお前はヒトハ・アーティアと名乗れ」

「……え？」

声を上げて私を見るヒトハ。

やはり体があると良いな、表情で驚いているのが良く分かる。

「お前が使用人でありたいのなら私達はそれを否定しない、これからも頼む。しかし、私達はお前を既に家族だと思っている。この姓を

与えるのは当然だ」

「家族なら同じ姓を名乗りたいものね」

カミラも優しい微笑みを浮かべてヒトハを見ている。

「私は娘が二人になったな」

「ありがとうございます……ごぎいます」

この日、ヒトハはまた泣く事になった。

こうして彼女は正式に使用人でもあり家族でもある存在となった。

それから私達はいつもの様に暮らしながらヒトハに生活の事を教え、完全に体に慣れるのを待った。

最初の内はただ日々を過ごしているだけでも訓練のような物だっただろう、それから彼女は少しずつ出来る事を増やして行った。

彼女は私達の助けを借りながら、おぼつかない動きで給仕や掃除、料理などを行う日々を繰り返した。

カミラは「教える相手がいると楽しい」と言っ嬉しそうにヒトハに色々と教えていたな。

家の事をやり終えると、彼女は「一刻も早く体を慣らしたい」と言い、家畜の世話なども行い始めた。

私達はそれを止めなかった、今の彼女は色々な事をやりたいように見えたからだ。

やがて全身の動きは少しずつ滑らかになり、大雑把な動作をする事が減り繊細な動作をするようになって行く。

歩き方や身のこなしから少しずつこちなさが無くなっていき、佇まいも徐々に洗練されて行った。

こうして以前とは見違えるほどに滑らかに動けるようになったが、もう少し時間が掛かりそうだ。

意識せず自然に動けなくては戦闘訓練には移れない。
現在はキッチンから楽しそうな娘達の声が聞こえている。
私はその声を聴きながらソファでモー乳を飲んだ。

私は湯舟に浸かりながら、体を洗っているヒトハとカミラを見ていた。

カミラはヒトハの様子を見ながら体を洗っている。

「もう体を洗うのは問題なさそうね」

「お二人のおかげです」

最初は初めての風呂の感覚に感動して泣いていたので私達が洗ったが、慣れるために入り始めるとまともに体を洗えなかった。

石鹸を付けて体を洗う、その動作をするために彼女はそれなりの時間を費やした。

慣れていない頃は一度の風呂で大分時間がかかったのを覚えている。

今は体を洗っている彼女から違和感を感じない、もう大丈夫だろう。

体を洗い終わった二人は私の両隣へと入って来た。

「問題は無さそうだな」

「はい。ですが主様のお世話を致しますので……これからも一人である事は少ないでしょう」

私が声をかけると、ヒトハは微笑んで答えた。

「主の世話ではなく親子として入らないのか？」

そう言うとヒトハは黙ってしまふ、娘になったとはいっても急には難しいか。

「硬いわねえ……娘でもあるんだからこういう時は普通でいいのに」

カミラが苦笑いして言う。

「一度呼んでみる。お母様でもお母さんでも、母上やママでもいいぞ、父上やお父様でも構わない」

「それは……」

困ったような表情をするヒトハ。

「お前は私の娘だ。主である事も間違いないが、私は娘が親を常に主と呼ぶのは好ましくないと考えている。お前が呼びたくないなら無理にとは言わないが、可能なら呼んでみる」

彼女はかなり長い間黙り込んでいたが、突然頭を下げた。

「……申し訳ありません」

私は慣れるまで時間がかかりそうだと思ったが、同時に嬉しくもあつた。

こうして考え、悩み、私が言ったとしても安易に実行しない。

勿論、大抵の事は聞くだろう。だが内容によつてはこうして拒否する。

その事に対して私は何も言わない、私は彼女にこうなつて欲しかったのだからな。

「気にするな、いつかその気になつた時に呼んでくれればいい」

「あつ……」

私はそう言いながらヒトハの頭を撫でた。彼女は一瞬体を震わせたが、目を瞑り黙つて撫でられている。

「私の妹は可愛いわね」

その様子を見ていたカミラが楽しそうに言った。

風呂から出た私達は、夕食の準備を始めた。

今日は普段は参加しない私も娘達と料理を作る事にする。

ミナやルーテシア、カミラの料理の腕が私を越えているので、私が料理をする事は滅多に無い。

ヒトハは今はまだ料理に慣れていないが、やがて私を追い抜く事だろう。

「じゃあ皮をむいてみて、急がなくていいわ。時間はかけていいから出来るだけ薄く、皮だけを剥くようにしてみてもいい」

カミラがヒトハへ指示を与えている。

皮剥きか、料理の練習にも体に慣れるためにも丁度いいかもな。

「私はどうすればいい?」

「お母様はそこにある食材を全て一口大に切ってくれる?」

カミラが視線を投げた方向には食材が用意されていた。

「今日は何を作っているんだ?」

食材を切りながらカミラに聞く。

「食材を切って煮込むだけの具沢山のスープよ。味付けは私がしてるから心配しないでね」

「そんな簡単な物で良いのか?」

私が顔を上げそう聞くと、カミラはヒトハを見て答えた。

「今はこれぐらいでいいのよ」

つられてヒトハを見ると、皮を剥いている。

その表情は真剣で、周りが見えていない様にも感じる。

しかし、物凄く剥くのが遅い。

今まで体に慣れるために料理もそれなりにしていたはずだが。

体の慣れと料理の腕は別なのかもしれない。

そういえばカミラも身体能力は高かったが最初は料理が下手だった。

「その辺りはカミラに任せる事にする」

「任せて……今度は私が教える番よ。これからきつと彼女も上手くなつていくと思うわ、お母様は覚えているかもしれないけど……私だって最初は今の彼女より酷かったもの」

カミラは笑ってそう話し、自分の作業に集中し始める。

「覚えているよ」

私はカミラに一言返して食材を切り始めた。

その後出来上がった夕食は美味しかったが、ヒトハが剥いていた食材は剥く前よりも一回り程小さくなっていた。

ヒトハの奮闘を見守りながら時は過ぎ、彼女は日常の動作を無意識に行えるようになった。

体がある事が彼女の基準になり、躓く事も隙間に引つかかる事も無くなった。

今もソファに座る私の前で飲み物を入れてくれている、そこで私はふと気になった事を聞いた。

「ヒトハ。今の体に慣れたのは良い事だが、以前の体である球体に切り替えた時の動きは問題無いか？」

いざという時は体を放棄して分離出来るが、その時に動き方を忘れていて動けなかったら意味が無い。

そんな心配をしていると彼女が答える。

「今の所は忘れておりません、今後忘れてしまうかどうかは不明ですが……」

「時々自分で確認するようにしておいてくれ。忘れていると感じた時は私に知らせるように」

「かしこまりました。……どうぞ、モー乳入り紅茶でございます」

ヒトハは返事をして、滑らかな動作で飲み物を私の前に置く。

「もう違和感は無いか？」

「はい。意識する事無く自然に動きます」

そろそろ戦闘訓練に入っても平気そうだな。

「料理はどうだ？」

そう言うヒトハの表情が少し曇る。

「申し訳ございません……まだ主様にご満足いただける腕では……」

「そんな顔をするな、聞いたただけだ。早くしろと言う訳でも絶対に上手くなれと言う訳でも無い」

私は立ち上がり彼女の頭を撫でる。撫でられる彼女は恥ずかしそうに目を瞑り、微笑みを浮かべている。

料理の腕前は彼女の頑張り次第だが、戦闘訓練はそろそろ始めても問題無さそうだな。

私は彼女の頭を撫でながらそう考えていた。

ヒトハの訓練を開始する事を決めた私は、二人を月に残してイシリスの状態を確認しに向かう。

この惑星をヒトハの訓練に使おうと考え、下見を行っている。確認しても以前と大して変わっている様には見えない。

イシリスを覆っていた雲はいまだに厚く、地上は一面凍り付き激しい吹雪が吹き荒れている。

吹雪を遮断して訓練用の広い場所を作ろうと決め、私は広範囲に障壁を張り吹雪を遮断した。

気温の低さは変わらないが、私達にとってこの程度は問題無い。こうしてヒトハの訓練の日々が始まった。

「まずは基本的な動きからやろう」

「かしこまりました主様」

かつて人類に教えていた方法を参考にしてヒトハに戦闘の動きを教え始めた。

攻撃、防御、回避の体の動かし方。

一对一、一对多での戦闘方法。

一つ一つを丁寧に教えて行く。

私の作った体は私やカミラには及ばないが強力だ。

弱くも作れるが、どちらにするかと問われれば私は迷う事無く強い体を選ぶ。

何をされようと全てをひっくり返す事が出来る強さがあれば大抵何とかなる。

少なくとも本人に害は及びにくいと思っている。

私達の戦闘は大抵の場合魔法などを使う為、基本的に武器は使わない。

私の手やカミラの爪の方が強力だからな。

武器を使う時はその武器の扱いを学ぶ時、後は手加減する時か。

防具も使わない、一定以上力を出した攻撃には無意味だったからだ。

女神の鎧が軋んだ時はすぐに障壁で防御し状態を確認したが、問題は無かった。

友人達が作った女神装備が、強敵相手には使えないと分かった出来事だったな。

壊したくはないからな。今後、カミラとの訓練で使う事は無いだろう。

そういった理由でヒトハも普段の給仕服と素手で訓練している。

とは言ってもカミラもヒトハも服は私の構成物だからな、守りがかなり硬いと思う

魔法の勉強と訓練も並行して行うのでヒトハはかなり忙しいだろうが、ある程度強くなければいざという時に危険だからな。

「良いわよ、その調子」

カミラとヒトハが戦闘訓練をしている、非常にゆっくりとした戦闘だが徐々にきつくなっていくだろう。

「下半身が疎かになっているわよ」

「あっ!?!」

ヒトハは足を払われ縦に勢いよく回転する、そこへ突きを入れるカミラ。

「うん……やるわね」

突き込んだカミラの拳を上手く受けて着地するヒトハ、今のは中々良い動きをしていた。

「じゃあもう少し早くするわよ」

「はい……っ!?!」

カミラは普通に歩くように近づくと途中で速度を上げて一気に接近した、先程までよりも僅かに早い。

こうして終了の時間が来るまで二人はひたすら戦い続けた、この後

は魔法の勉強だ。

私達は室内へ移動し、魔法の勉強を始めた。

今のヒトハは備え付けられた機能ではなく、自由に魔法構築し使う事が出来る。

使うためには色々知らなければならぬ事がある。

「これから魔法を使う為の勉強を始めるが、その前にお前が戦う為の方法を教える」

「戦う為の方法ですか？」

「そうだ、以前のイシリスは周囲に多くの魔力があった。しかし現在は僅かしかなく、宇宙空間にも豊富にあるとは言えない。そこで、カミラのように本体とも言える以前の体と、着ている給仕服から魔力の供給を受けて魔法を使用する方法を教える」

「主様の構成物から魔力を引き出して使う方法ですね？」

「そうだ、その後魔法の基礎を教える。基礎さえしつかりと出来ればいずれ自分で魔法を作る事も出来るだろう」

「宜しくお願いいたします」

こうして彼女はいつもの日常に、戦闘訓練と魔法の勉強が加わった日々を送り始めた。

「主様、無駄の少ない強度の障壁をどうやって張っているのですか？」

三人でのんびりしている時、ヒトハが私に尋ねて来た。

「それは私も興味あるわ。お母様は障壁で攻撃を受ける時に、丁度良い強度に張っているわよね？どうやって見極めているの？」

カミラも話に加わってくる。

「難しい事では無い、実際に攻撃を受けて大体の威力を判断しているだけだ」

私の言葉に二人はよく分からないという表情をしたので、詳しく説明をする。

「私が複数の障壁を張れる事は知っていると思うが、外側に攻撃の威力を判断するためだけの障壁を展開し、威力を見極めているだけだ。つまりただの工夫だな」

「なるほど……」

「主様、私にも出来るでしょうか？」

「複数の障壁を同時に展開しそれぞれを個別に制御した上で、障壁にかかる攻撃の負荷を正確に把握し、それを基に適正な強度で即座に障壁を展開出来れば可能だ」

「ただの工夫って言う難易度じゃない気がするけれど……試してみたいわね」

「カミラ様、私との訓練で試してみては？」

「そうね、やってみようかしら」

二人はそう話し合っている。

「基本的には常に出来るだけ強力な障壁を張っておいた方が良い事は忘れるな。私は戦闘中にも行っているが、下手に行うと相手に遅れを取るぞ」

そう忠告すると二人は訓練の時だけにすると聞いた、失敗した時にどうなるかは分かっているのだろう。

「役には立つぞ。事前に障壁で受けきれない威力である事などが確認出来れば、回避に切り替える事も可能になる」

未知の敵の攻撃を受ける時には便利だ。

そういえば以前やって来た種族の艦の攻撃はかなり弱かったな。警戒していたのだが、恐らく戦闘力の低い輸送艦の様な物だったのだろう。

あの種族にも興味はある。知的生命体が生まれるまでの間に関わるとも悪くはなさそうだが、まずはイシリスを優先したい。

私は今の所はイシリスを優先しようと考えながら、訓練に向かう二人について行った。

ヒトハは順調に訓練と勉強をこなしていった。

やがてヒトハは最低限ではあるが、問題無い所まで成長した。

次は宇宙空間での戦闘訓練を行う事になる。

私はヒトハの体を環境の変化にも強く作った、どんな環境でも問題無く活動出来るだろう。

彼女は以前の体の時に宇宙空間に出ている。

そのおかげかは知らないが、多少振り回されている程度でそこまで悪い動きでは無かった。

この調子ならすぐに自由に動けるようになると思う。

『宇宙空間ではかなり力を出しても問題無い、ヒトハは常に全力で戦うようにしてくれ。何か問題があれば私が防ぐ』

私はヒトハにそう伝えた。

『了解しました』

『さて……じゃあ始めましょうか？』

ヒトハの初めての宇宙戦という事だからだろうか、カミラはヒトハに開始の言葉をかけた。

『カミラ様……お願いいたします』

そう言つてヒトハは真剣な表情になり、戦闘態勢を取った。

カミラはヒトハの言葉に微笑んで頷いた後、表情を引き締める。そして宇宙での訓練が開始された。

私は離れた所から二人の戦闘を見ていた。無数の星の光を背景に、二人の魔法が輝きを放つ。

第三者から見ると中々目立つな。

カミラがヒトハに合わせて規模の小さい魔法を使っているからこれで済んでいるが、私との戦闘の光はかなり遠くからでも確認出来るかもしれない。

背景に溶け込んだ黒い色の魔法なら相手に見えにくいかな？

強敵相手には見た目の色などあまり関係無いかも知れないな。

そんな事を考えつつしばらく訓練を見ていたが、ヒトハが何かを仕掛けそうだ。

そう思った直後、遠目からでもわかる太い光が放たれた。

まだ拙い魔法だが彼女は日々成長している。イシリス内でも魔法は禁じていなかったが、体術が主な訓練だったので彼女は魔法を使っていなかった。

もしもあれをイシリス内で使っていたら止めた上で叱っていただろうな。

地上であるの威力の魔法を使ったらイシリスが欠けてしまう。

後、ヒトハの魔法はまだまだ集束が甘い、見た目は強力そうで広範囲に見えるが実際は本人の想定以下だと思う。

だからこそイシリスが欠ける程度の威力しか出ていないし、今もカミラが放った魔法がヒトハの放った魔法の中をかき消される事無く突き進んでいる訳だな。

既にカミラは攻撃を回避しているが、ヒトハはあのまま気が付かなければ直撃だ。

カミラの魔法が接近している事に気が付けるだろうか。

見えなくても感じる事は可能だ、それはどんな攻撃も同じ事。

カミラには「それはお母様だけ」と言われたが。

どんな物であっても効果を発揮する前に気がつく事が出来れば防御する事も、かわす事も出来る。

実力があれば無力化する事も、更にそこから反撃する事も出来るだろう。

だが、今のヒトハではどれも難しいと思う。

そう考えていると爆発が起き、カミラから念話が来る。

『ヒトハが魔法の直撃を受けたわ。手加減しているから平気だと思っただけ………続けていいのよね？』

『時間までは何度でも仕切りなおして繰り返し戦ってくれ、お互い異常を感じた場合は中断して私に言うように』

『分かったわ……ヒトハ？また行くわよ』

『かしこまりました主様……。まだまだお願いいたします、カミラ様』

彼女達の言葉を聞いて念話を切る、そして再び宇宙に魔法の輝きが煌めき始めた。

今日の訓練は問題無く終わった、既に魔法の基礎は教え終えているのでもう私の授業はしていない。

私達は風呂に並んで浸かりながら一息ついていた。

「結局、一方的にやられてしまいました……」

「落ち込まないの。私には長い戦闘経験があるもの……全てにおいて貴女はまだ私に遠く及ばない。今の時点では仕方ないわ」

風呂に浸かりながら、落ち込んだ様子のヒトハに声をかけるカミラ。

「……確かにそうですね。私はまだ赤子のような物でした」

「これから成長していけばいいのよ。それに、私に遠く及ばないとヒトハに言った私も……お母様に遠く及ばないのよ」

「……主様はどれほどの力を持っているのですか？」

カミラの話聞いて、ヒトハが私に聞いてくる。

難しい質問だな。

「私は今まで全力を出した事が無く、全力がどの程度の物なのか確認した事も無い」

「お試しにならなかつたのですか？」

ヒトハがそう言っって首をかしげるが、この感覚を説明して理解出来るだろうか？

「私は限界を感じた事が無い、そもそも限界を感じるという感覚が分からない」

今思えば、膨大な魔力と魔素を生み出せる事が分かる前からそんな感覚は知らなかつたし、私が上限を決めていた事はあつても限界と言

えるような感覚を感じた事など無かった。

「それはつまり……主様には限界が存在しないと……？」

ヒトハが呟くように言うが、それはどうなのだろう。

「分からない。限界が異常に高いだけかもしれないし、本当に存在しないのかもしれない」

私は湯舟の水面に映る私達を見ながら話を続ける。

「魔法で言うなら、体自体が魔力と魔素の発生源になっている私に魔力切れは起こらないと考えていいだろう。つまり制限無く魔法を作り上げる事が出来る上に、威力や効果もどこまでも上げられるという可能性が生まれる」

「……そういう事になるのね。でも、私達の服やヒトハの以前の体に組み込まれている構成物も魔力を発生させる事が出来るし……同じじゃないの？」

カミラはそう言うが、同じでは無い。

「確かにお前達に使用されている構成物も大量の魔力や魔素を無尽蔵に発生させる事が出来る。だが、僅かな量の構成物でそれだけの量を発生させている事を忘れていないか？その塊である私が意図的に発生させる魔力と魔素の量は、恐らくお前達の想像を遥かに超えるだろう」

何せ、発生量も限界が存在するか分からない上に、その発生も一瞬で終わる訳では無い。

その量が、私の意思で継続して発生し続ける事になる。

恐らく二人が想像しているより遥かに異常な状態になるはずだ。

「確かに、そうなるわね……」

「主様が使おうと思えばその想像を超える量の魔力と魔素を自由に使えるという訳ですか……」

私の説明に二人は呟く。

二人の手元にある構成物でも時間をかければ同じ事が出来るかも知れないが、膨大な時間がかかるだろう。

それに、私は彼女達が無理に膨大な魔力を使おうとすれば、魔法の暴走を抑える事が出来なくなると考えている。

「魔力や魔素を発生させる事だけではない。体の強度も他の生物とかなりかけ離れている筈だ。私は戦闘時、障壁で防御を固めているが、恐らくそのまま受けても私の体には何の被害も無いと考えている」

「……服の強度を考えると、納得出来わね」

「……そうですね」

二人は納得した様に言う。

「これは私の考えなのだが、もう一つ話しておきたい事がある」

「まだ何かあるの？」

カミラの言葉に私は自分の考えを話す。

「あらゆる事において私に限界が存在しない可能性が出て来てしまった事で、私の拳一つで惑星が、銀河が、宇宙が壊れる可能性も無いとは言えなくなった」

そう言うと二人は沈黙する。

やがてカミラが溜息を吐いて口を開いた。

「はあ……規模がおかしくて出来の悪い物語を聞いてるみたいだわ」

「主様がそうおっしゃるのなら起こり得る事なのでしょうね……」

ヒトハもどこかぼんやりとしている様に感じる。

「自分でも出来の悪い作り話に感じるが、実際に私の感覚では限界が見えない。今言った事がただの妄言であると、私は言い切る事が出来ない」

「試すなら慎重に、少しずつ試して見るしかないわね」

「そうだな」

出来るだけ何も無い宇宙空間を選ぶ事にしよう。

私が長々と話をした事で大分風呂が長くなってしまった、私達はその後すぐに風呂から上がり食事の準備を急いだ。

月での穏やかな生活を続ける私達。

ヒトハは今も順調に実力を伸ばし続けている。

以前と違う所は、カミラとヒトハの訓練の頻度が少し増えた位だろうか。

私は世界樹の枝に座り、以前訪れた知的生命体について考えていた。

彼等の存在を知った後、私は月を中心に知覚する範囲を以前より拡大した。

転移に似た技術を持っている彼らは、いつどこに現れてもおかしくないからな。

彼らが転移のような事をする時の反応は最初の接触で分かっている。

知覚している範囲に同じような反応を確認した場合は対応するつもりだ。

これからも私達は時々イシリスを確認しながら過ごすつもりだが、彼らは再びやって来るだろうか。

もし再びやって来た場合、私は軍人のような立場の者達がやって来るだろうと予想している。

友好的だろうと敵対的だろうと、全く武力を伴わず未知の相手の元へ向かおうとするとは思えないからな。

夕食を終えたある日。

ソファで数えきれない程読み返した本を再び読んでみると、カミラが呟く。

「以前現れた知的生命体……来ないわね」

「そうだな。来てくれた方が面白そうではあるが、来ないならそれ

でも構わない」

私が呟きに答えると、カミラはソファにもたれた。

「来ると思っていたんだけど、私の予想は外れちゃったのかしら……」

「予想を裏切られるのは楽しい物だぞ」

そんな会話をするカミラと私に、ヒトハが飲み物を持って来る。

「私もカミラ様と同じように、早い内に再びやって来ると考えていました」

飲み物を用意しながら言うヒトハ。

「あれからそれなりに時間は経っていると思うが、現れないな」

「既に私も正確な時間は分かりませんが……恐らく数百年程は過ぎていると思います」

私の言葉にヒトハが答えてくれる。

数百年か、あの時私と出会った知的生命体は私の事を誰かに伝えなかったのか？

それともあの時に出会った者達が全てで、少数の種族だったのだろうか。

「どうなったのかしら？ 報告はしたけれどされた側が本気にしなかった？ もしくは報告自体していない……？」

カミラはそう話しながら用意された酒を飲んでいる、予想が外れて残念そうだ。

「分かっている事は水生生物のような特徴を持つ人型の知的生命体と言うだけだ。彼らの社会がどういった物なのか、そもそもそういった物があるのか。確かな情報が無い状態での予想は難しい、それにまだ来ないと決まった訳でも無いだろう」

「数百年過ぎて来ないなら、難しいんじゃないかしらね……」

カミラは溜息を吐いて言う、ヒトハはその日の夕食を彼女の好物にした。

ある日、私がソファながらモー乳を飲んでみると、知覚に大量の転移に似た反応を感じた。

例の艦が消えた時の反応だ。

「お母様？急に微笑んでどうしたの？」

「主様？どうなさいました？」

私の様子が変わった事に気が付いて二人が声をかけてくる、どうやら私は微笑んでいたようだ。

「カミラ、お前の予想は外れてはいなかったぞ」

「え？」

「かなり遠いが転移に似た反応を感じる。かなりの数が現れているな」

私の言葉に良く分からないといった表情を見せたカミラだが、その言葉を聞くと笑みを浮かべた。

「では……出発するのですね？」

ヒトハが私に確認するように言う。

「ああ、彼らの元へ向かう。友好的ならばいいが、そうでなければそれなりの対応をしよう」

もし敵対したら彼らに強めの魔法を試してみようか。

イシリス内では周囲に被害が出ない様に調整していたが、宇宙ならば多少大規模になっても問題はないだろう。

「気を付けてね、お母様」

「お風呂とお食事のぐ用意をして、ぐ帰宅をお待ちしております」

「ありがとう、行ってくる」

私は二人に答え、反応から少し離れた宙域へ転移した。

事の発端はある屋敷の持ち主が家族を持たずに亡くなった事だった。

相続する者がおらず、都市の預かりになった屋敷内の片付け作業を行っていた時の事らしい。

作業員が偶然発見した屋敷の隠し金庫の中にあつたのは、四百年程昔のある星系調査結果と映像だった。

大量の資源が記されたその星系の調査報告の事は誰も覚えが無く、確認した結果当時は偽の報告が行われていた。

その事実の上層部は怒りをあらわにしたが、当の本人は遙か昔の人物であり、子孫も既に居ない。

そのため、その辺りはうやむやになったという。

その後、上の興味を引いたのは調査結果と共に残されていた映像だった。

映像にはヒーラン星系種に似た美しい少女が宇宙空間を漂う映像が残っていた。

だが、ヒーラン星系種では無い事は確かだ。あたし達もだが、ヒーラン星系種は生身のまま宇宙空間で活動する事など出来ない。

更に映像を確認すると、その少女がレーザー照射を受けて平然としている映像が映されていたという。

この映像を見た事で、この少女のような姿をした存在が未確認の宇宙生命体であると判断された。

そして、どうするかを話し合う事になったみたいだ。

あたしはそこそこの地位にいるとはいっても重要な会議に出られる程じゃない、だけど仲の良い高官から知っておけと話をされた事で色々知る事が出来ている。

会議はかなり長引いたようだけど、最終的に星系に存在する資源が見過ごせる量では無い、という事になったそうだ。

そして、最終的に資源の回収と、現在も存在していた場合は映像の未確認宇宙生命体を捕獲する。という目的で艦隊を送る事が決定されたという。

宇宙生命体の中には私達の想像を超えた生態をしている物も多く存在している。

四百年前の記録であっても、今も存在している可能性は十分にあると判断された。

未知の宇宙生命体かあ……知性があれば話し合いで……いや、無理

かな。

数が少ないならわざわざ面倒な交渉をするより力づくでどうにかしようとするだろうから。

せめて捕まった少女の姿をした宇宙生命体が酷い目にあわない様に祈っておこう。

現在、あたしは編成された艦隊の中の一つに乗船している。

私の艦の準備は完了し、各艦隊の準備の完了を待っている所だ。

宇宙だと些細な事でも大事故につながるから気を使うよね。

「何で当時の群長は報告しなかったんでしようか？」

あたしは情報を教えてくれた仲の良い高官と通信で会話する。

彼は本国に残っているが、今回の艦隊派遣の責任者だ。

「映像では未確認宇宙生命体はレーザー照射に平然と耐えていた。当時の記録ではあの戦艦に搭載されていたレーザー兵器は最高の物だったとある……それが効かなかったんだ。下手に手を出せば被害が大きくなると考え、罰せられるのを覚悟で隠蔽したのではないかと俺は考えている」

「なるほどー。欲を出して当時の艦隊で向かえば相手に攻撃が効かずに一方的にやられていたという訳ですか」

「そうだ。一度知らせてしまえば当時の彼の階級では方針を変える事は出来なかつただろう。だから隠して知らせなかつたのだと思っ
ているよ」

「当時の彼は悩んだのかな……？報告義務があるし、嘘の報告までしてかなり不安だったんじゃない？あたしだったら出来ないかなあ……」

「ははは……まあ本来は厳罰だが、仲間を守るためにした事だ。俺は一方的に責める事は出来ないな」

彼が下の者から慕われているのはこういった所だ。相手の気持ちを汲んでくれたり、正式な場でなければあまり言葉遣いなどを気にしないのだ。

「先輩は、彼女が捕獲された場合……どうなるか聞いていますか？」
あたしは今回の捕獲について彼に聞く。

「研究所で詳しく調べる事になると思う。心配しなくても殺す事は無いよ？ 貴重な未確認宇宙生命体だからね……死んでしまったら取り返しがつかない」

「それなら良かった。後……その……」

「ん……？ なんだい？」

無いとは思うけどもしもの時の為に聞いておかないと。

「もし……もしもですが。あの未確認宇宙生命体が私達の想像を遥かに超えた化け物で……あたし達が全滅しそうなった時はどうすべきですか……？」

あたしがそう言うとしばらく沈黙が流れる。

沈黙が続き、不味い事を言ってしまったと後悔し始めた時、彼は口を開いた。

「その時は即座に撤退し、報告するように。責任者としてやるべき事がある」

彼は真剣な声でそう答えた。

「了解いたしました」

あたしも言葉を正し、返答した。

「二応この命令も全艦隊に通知しておく事にするよ」

彼は急に軽い口調でそう言った、個人的に聞いてみた事が全艦隊に通知される事になってしまった。

「念の為ですから」

「そういった事が役に立つ時もある」

そう話して二人で笑った。

艦内連絡で全艦隊のワープの準備が整い、予定の時間通りワープが開始される事が通知された。

「もう行きます」

「うん、行っておいで」

あたしは通信を切ると急いで艦内の配置に就く。

やがて予定の時間となり、艦隊はワープを開始した。

彼らの艦隊は広範囲に展開していた。

分かつてはいたが相当な数がある、未知の存在に接触する為に数を揃えたのだろうか？

私は彼らを知覚しているが、彼等はまだ私を捕捉していない様だ。間近にいきなり転移で現れたら彼らを驚かせてしまおうと考えて、かなり距離を取っているからな。

私はここから驚かせない様にゆっくり近づいていく事にした。

しばらく移動していると、艦隊に動きがあった。

停止して様子を見てみると私を囲むように半円状に展開して行く。どうやら私を捕捉したようだ。

彼らの言語がまだ分からないので、久しぶりに翻訳魔法を使用して全艦隊に語り掛けてみる事にする。

《そちらが攻撃しない限り私は攻撃しない。この言葉を理解し、話し合う気があるのなら、何か分かりやすい反応を返して欲しい》
私がそう話しかけた後、しばらく艦隊は沈黙していたが、やがて一部の艦隊から攻撃と言えなくも無い物を受けた。

これは攻撃されているのだろうか？それとも私が分かりやすい反応を返す様に言ったからか？

何しろ未知の相手だ、この行動が挨拶や風習のような物である可能性も無いとは言えない。

《申し訳ないが、話し合うという返答なのか攻撃なのかが分からない。もしも話し合う気があるのなら現在の行動を停止して欲しい》
そう言うと今度は周囲にいる全ての艦隊から攻撃のような物が放たれる。

私は障壁で全てを防ぎながらやる事やっておく事にする。

逃げられない様に全艦隊を隔離するため、私は魔法を使用した。

これで一定の範囲からは出られず、転移のような事も出来ない筈だ。

取り敢えずやるべき事を終え、考えなおす。
いまだに艦隊からの攻撃のような物は続いている。

だが、私が彼らの事を知らないだけで彼らなりの歓迎なのかも知れない。

そもそも翻訳魔法が通じているのだろうか？

私は艦内の声を聞いてみる事にした。

……問題無く分かるな。

これなら私の言葉も聞こえていると思うのだが、この反応の意図が分からない。

そう考えていると、ある会話が聞こえる。

《捕獲中止だつてよ、駆除する事にしたのか》

《一匹だったらしいし、もう終わってるだろ》

……なるほど。どうやら最初は私を捕獲しようとしていたが、殺す事に変更したのか。

途中で攻撃のような物の威力が僅かに上がっていたが、あの時点で攻撃だった様だ。

残念だが、攻撃して来るのであればこのまま返す気は無い。

本当に彼等で試す事になるとは。

私はそう思いながら少しだけ広範囲、高威力の魔法を使う、発動は艦隊の左翼中央辺りにしよう。

そして私が魔法を発動すると、船団の中心から黒い球が広がり艦を次々に飲み込んでいく。

距離があると広がっていくのが見えて分かりやすいな。

黒い球はその範囲を広げ左翼の艦隊を全てのみ込み、更に広がって行く。

艦隊の左翼中央を狙った私の魔法はその範囲を広げ、中央の艦隊にまで到達して停止した。

私の位置から見ると宇宙に巨大な暗闇が円状にぽっかりと開いているように見える。

狙った通りに魔法は効果を発揮した、周囲の空間や魔法の範囲外にも問題は起きていない。

この程度の威力と範囲なら特に問題は無さそうだな。

失敗する事は無いとは思いますが、惑星内では今後も色々と気を付ける事にしよう。

惑星内で今のような魔法を使ったら使ったら敵も友人も惑星ごと消えてしまうからな。

やがて黒い球は姿を消し星の輝きが見え始めるが、そこにいた艦隊は消滅していた。

残った約半分程の艦隊は突然の事に混乱しているようだ。

我を忘れたかのように攻撃を仕掛けて来る艦が多いが、逃げようとして他の艦と衝突している艦もいる。

動かない艦はワープを行おうとしている。

恐らくあの転移のような移動の事だろう、それが行えない事に驚き戸惑っているようだ。

隔離も問題無く出来ているな。

では、攻撃してくる残りの艦を処理しよう。

私は船団の中を移動しながら魔法、素手による打撃と髪を使った斬撃で数を減らしていく。

彼らの攻撃は私が居る場所とは全く違う方向に放たれているが、どうしたんだ。

混乱しているのだろうか？

そんな疑問を感じながら敵を減らしている時、私はこの艦を一つ貫つておこうと考えた。

宇宙を航行出来る艦だ、気が向いた時にでも調べよう。

私は周囲を見回し、後方に逃げて行く艦の中に転移した。

「発見しました、映像の宇宙生物と一致します」
報告が艦内に響く。

あの未確認宇宙生命体を捕捉し、艦隊が展開する。本当にまだ存在していたのね……。

宇宙生命体に油断は禁物、これは宇宙に生きる者なら誰もが学ぶ事だ。

展開を終えたしばらく後、突然艦内に声が聞こえた。

《そちらが攻撃しない限り私は攻撃しない。この言葉を理解し、話し合う気があるのなら、何か分かりやすい反応を返して欲しい》

私達の使用している言語だった。

なぜ私達の言語を話せるのかという疑問はあった、だけどそれよりも重要な事が分かった。

あの宇宙生命体には知性があり、私達との対話を望んでいるという事だ。

「耳を貸すな、スタンレーザー用意」

しかしそんな事にかまう事無く、捕獲用のスタンレーザーを撃ち込む。

捕獲が目的だからね……私は少しあの生物に同情しながらもその光景を見ていた。

効果が出ているんだろうか？あの生物はレーザーを受けながら平然とこちらを見ているように見えた。

そして再び声が聞こえた。

《申し訳ないが、話し合うという返答なのか攻撃なのかが分からない。もしも話し合う気があるのなら現在の行動を停止して欲しい》

「スタンレーザーが効いていないのか……？」

誰かのつぶやきが聞こえる。

私は驚いた。確かに正確には攻撃とは言えないかも知れない、けれどスタンレーザーを受けて何ともない宇宙生命体はあまり多くはない。

その時、私の中で先輩に言った言葉がうつすらと浮かんだが、スタンレーザーが効かない相手は今までもいたと振り払う。

やがて、付近にいる全ての艦から最高出力のスタンレーザーが撃ち込まれる。

しかし、それでも全く効果があるようには見えず、レーザーを受け
たままアレは沈黙していた。

「……了解しました。捕獲中止！駆除へ移る！……シトロンレ
ザー用意！」

スタンレーザーが効かないのならこうなるよね。

「了解！シトロンレーザー発射準備！」

捕獲から駆除へと命令が変更され、スタンレーザーから最高の威力
を持つシトロンレーザーへ切り替えられた。

最高出力のスタンレーザーが効かないのなら念の為その方がいい、
中途半端に傷つけて暴れられたら面倒な事になるし。

「発射！」

殺す事になってしまったかと思っていると、シトロンレーザーが発
射される。

そして私は見てしまった。シトロンレーザーの集中攻撃を受けな
がら、平然とこちらを見るアレを。

「シトロンレーザーが全く効いていない!？」

艦内に動揺が広がる。

私も動揺で体が震える、今まであの攻撃を受けて耐えられた宇宙生
命体なんていないはず……！

あの兵器が開発され現在も強化、改良が行われているおかげで、私
達は宇宙生命体の脅威に対抗し繁栄しているのだから。

「司令に連絡！」

「りよ、了解！」

群長が指示を出した直後、モニタを見ていた一人が叫んだ。

「報告！右翼に展開している艦の反応が消失していきます！」

「画面映せ！」

その言葉に艦隊の右翼側が映し出される。

「何だよ……これ……」

それは誰の声だったのか、静まりかえった艦内には機材の起動音だ
けが響く。

画面には……宇宙より黒い巨大な何かが、艦隊の右翼を飲み込んで

いく姿が映し出されていた。

気が付いた艦が逃げようとするが間に合わず飲み込まれていく。

「そこから離脱しろ！死ぬぞ！」

《何言ってる？艦隊行動中だぞ、こんな通信してどうなっても……》
あたし達は少しでも助けたくて飲み込まれる前の艦に必死に逃げろと呼び掛ける。

今、通信中に突然声が途切れた艦はたった今黒い何かに飲み込まれ消えた。

音も無く静かに消えて行く……相手の通信からはもう何も聞こえない。

あの攻撃は中央まで到達し、司令も命を落としてしまった。

そして、命令系統が混乱した私達に体勢を立て直す時間が与えられる事は無かった。

なぜならその後、あの宇宙生命体があたし達に襲い掛かって来たからだ。

あたし達を含め大半の艦隊はそれでも攻撃をしていたが、速度が怖ろしく速く全く攻撃を当てる事が出来ない。

艦隊は抵抗らしい抵抗も出来ないまま破壊されていく。

《あれはどこだ!?何処にいる!》

《レーダーが役に立たない!?来るなあああ!!》

《助けてくれ!誰か!?!だれっ》

通信は叫び声と爆発音が響く阿鼻叫喚の様相を見せ、ともに他の艦との連絡が取れない……このままでは間違いなく全滅だ。

「どうすればいい……どうすれば……」

同僚や群長の大声が飛び交う艦内で、呟いた私の声は馬鹿みたいに震えていた。

アレは今も艦隊の中を飛び回り次々と艦を破壊している、シールドなんて何の役にも立っていないかった。

あたしは圧倒的な力の差を感じた。

……私達に手に負える相手じゃ無かったんだ！

考えろ……！この状況から生きて帰る道を……！！

死は目前をうろついている……気まぐれでこちらに手を出していないだけだ。

私はレーザーの画面を凝視したまま必死に考える。

その時私は気が付いた……反応が消えて行く味方の艦の中に、残されている反応がある事に。

恐怖を抑え込みながらレーザーの情報をもとに残されている艦を確認していく。

これは……攻撃をしていない艦は破壊されていない？

武器系統の不調か恐怖にすくんだか……きつと後者だろうけど、攻撃をしていない艦は狙われていない！

気まぐれで攻撃していた訳じゃなかったんだ！

……そうだ！アレは言っていたじゃないか！攻撃しなければ攻撃しないと！

攻撃してこない相手には手を出さないのかもしれない！

「攻撃中止！中止よ！やめなさい！！よく見て！攻撃していない艦は狙われていないのよ！！」

あたしは無理矢理攻撃を止めようとする。

越権行為だが生きて帰るためにはそんな事を言っていられない。先輩に伝えないと……手を出していい存在じゃなかったって！

「攻撃中止！中止しろ！」

やがてあたしの言葉を理解した群長が攻撃を止める、あなた最高よ群長！

「皆、総司令からの言葉を思い出して！逃げましょう！生き残って報告するのよ！」

あたしの勢いに群長も頷き、撤退指示を出す。あたし達の艦は全力で後退しながらワープの準備をし始める。

逃げられるかも知れない……そう希望が湧いた時、アレが艦橋指令室に現れた。

私は艦の長らしき者達がいる場所へと転移した、周囲の知的生命体は微動だにせず私を見つめている。

「始めまして。突然だがこの艦を……」

「うああああああ!!?」

私の言葉を遮り、叫び声を上げた彼らの中の一人が腰にあった何かを掴んでこちらに向ける。

「駄目よ！攻撃しないで！」

誰かの叫び声があったが彼は止まる事は無く、手に掴んだ何かから光が放たれ障壁に遮られる。

私は何度も光を放ち続けるそいつの頭を斬り落とした。

「艦に当たったら壊れるだろう」

「ああ……」

小さく悲しそうな上げる者がいる、先程攻撃するなど叫んだのもこいつだな。

「お前、なぜ攻撃を止めた？」

私に話しかけられた知的生命体は怯えたような表情で話し出した。

「あ……あなたは攻撃をしていない艦を破壊していなかったの……。そ、それに……言っていました。攻撃しなければ、攻撃しないと」

声が震えていて聞き取りにくかったが、言っている事は分かった。どの種族にもこういった者はいる様だ、彼女一人の力では攻撃を止められなかったのだろう。

「その通りだ。攻撃されたので反撃したが、私は元々話し合う気であった。そこでお前に相談がある」

「な、何でしょうか？」

私はこの中で話を通じそうな彼女に要求を聞いて貰う事にした。

「私にこの艦を譲ってくれないか？」

「え……?」

動揺する彼女、自分達がどうなるかを気にしているのだろうか？

「心配するな、お前達は他の無事な艦に移動させてやる。そしてワープで逃げられるようにしてやろう」

「それは、どういう……？」

「私はお前達をこの宙域に閉じ込め、ワープも使えない様にしていく」

私の言葉に彼女だけでなく黙って事の経緯を見ていた他の者も息をのむ。

「どうだ？譲ってくれるか？」

周囲の艦は私が突然消えたと思っているのだろうか。私を見失った事で攻撃は止まっているが、今度は逃げられない状況に焦っているようだ。

「ぐ、群長……」

彼女がそう言って高い位置にいる者を見た、あれがこの艦の長か？

その群長と思われる者は無言で頷いた。

「この艦を……お譲りします」

「そうか、ありがとう。艦を譲ってくれた札に今残っている艦は全て見逃そう。ただし、攻撃せずに撤退する艦だけだ。今後攻撃を行った艦には消えて貰う、いいな？」

「……はい、ありがとうございます」

私はその返事を聞いた後、攻撃してこなかった艦の一つに彼らを転移させる。

それからすぐに貰った艦をマジックボックスへと収納した。

その後攻撃して来る艦を全て破壊した私は撤退して行く艦を見送り、月へと帰った。

「……はい、ありがとうございます」

あたしが答えると、一瞬で景色が変わる。

突然の出来事にしばらく呆然としていたあたし達だったが、突然あたし達が現れたのを見た移動先の乗組員も同じような物だった。

先に我に返ったあたし達があの宇宙生命体を絶対に攻撃しないとすぐに撤退する事を話すと、素直に頷いてくれた。

幸いワープの準備だけは終了していた。あたし達は生き残っている他の艦に同時通信で攻撃をせず撤退するように一方的に話をした後、そのまま即座に撤退した。

本星への移動中、あたし達が移動した艦の群長は落ち着いた後に語ってくれた。

早い時点でワープをしようとしたが、上手く行かなかったと。

嘘だとは思っていなかったけど、あたしはあの宇宙生命体が出ていた事が本当だったと改めて知る事になった。

あたしは越権行為で処分される事を覚悟していたけど、群長を始め全員から感謝される事になった。

自分達がこうして生きて帰れたのはあたしのおかげだと。

その言葉を聞いた後、あたしは意識が遠くなった。

次に目にしたのは軍の病院の天井だった。あたしが目を覚ました事を知ると医者が呼ばれ、状態を確認した。

あの未確認宇宙生命体が乗り込んで来た艦に居た皆も衰弱していたみたい。

その中でもあたしが一番酷く、二週間が過ぎてようやく目を覚ましたのだと話をされた。

そして、あたしは本当に生きて帰れたのだと実感し泣き崩れた。

「起きているか？」

「はい」

あたしが目を覚ましてから数日後、先輩が私の病室へと訪れた。

「大体の事は他の者から聞いているし、俺がするような事じゃないと部下には止められたが……あの宇宙生命体と会話をしたお前から直接話を聞きたくてな」

私は体が小刻みに震えだすのを感じた、精神的な障害でも負っちやつたかな……。

「すまない……お前がそんな状態であつても俺は話を聞かなくてはならない」

先輩は私の手を握り、辛そうに話す。

私はゆっくりと息を吐くと静かに話し始める。

あたしは隠す事無く全てを話した。

知性があり語り掛けて来た事、話し合いを求めてきた言葉を無視してあたし達が攻撃を仕掛けた事、反撃で一瞬にして全艦隊の半分程が消滅した事。

「……なるほど。その後に艦を破壊して回り、お前達の艦に突然現れて艦が欲しいと言ったのか」

「そうです……その際に宇宙生命体に向かって攻撃した者が一人殺されました……やめるように言ったのですが」

私は声を上げて止める事しかできなかった、今思えばアレを前にしてよく声が出たと思う。

「それ程の宇宙生命体に至近距離で接して被害が乗員一人で済んだのはむしろ凄い事だろう。お前が気にする事では無いよ」

「はい……」

先輩は気にするなと言うけど、すぐには割り切る事は出来ない。

「直接会話してみて、お前はどうか感じた？」

先輩は私にそう聞いてくる、私は感じた事を素直に話す事にした。

「とても……理性的だったと思います。話し合いを求め、反撃以外

に攻撃をせず……艦の対価としてあたし達を含む攻撃をしない艦全
てを見逃してくれました」

「なるほど……」

先輩はそう言って考え込んだ。

「なんだか眠い……でもあたしはこれだけは言っておかなければと
思ひ言葉を続けた。

「ただ……」

「……ただ？」

「あれはあたし達程度が触れて良い存在ではありません。ただそこ
にいるだけで周囲の生命を削る……そんな存在です。あたし達は今
回の事を覚えておかなければならない。忘れてしまえばまた触れよ
うとする者が現れます……先輩がどんな判断をするかは分かりませ
んが……出来る事なら……これから先……未来永劫触れる事無く
……そつとしておくべきだと……そう……感じます……」

酷く眠いから途切れ途切れになっちゃったけど、これがあたしの偽
りのない本心だ。

あたし達はいつの間にか……宇宙には手が出せない存在もいる、と
いう事を考えなくなっていたんだ。

「ありがとう、とても参考になった。しばらくゆっくり休んでくれ
……俺もまたお見舞いに来るよ。今度は軍人としてではなく、一人の
友人としてね」

「うん……待ってるね……」

あたしはそう呟くと、眠気に耐えきれずそのまま眠りに落ちた。

その後。

先輩がうまく立ち回った事で、例の星系はブラックホールが大量に
発生している危険区域として立ち入りが禁止される事になる。

後々は星間図からも消すつもりだと先輩は言っていた。

そして、あたし達には緘口令が下された。

もしも他言した場合。話した者は勿論聞いた者も死罪になるとい
う、現在ではまず考えられない様な厳しい罰則が決定されていた。
あたしはその話をすんなりと受け入れた、それ位はするべきだと
思ったからだ。

事の発端となった星系調査結果と映像は何処かに嚴重に保管され、
存在を知る者は極僅かな者だけに限られた。

多くの者に知られる事が無いように。

同じ事を繰り返さぬよう、覚えておくために。

「お疲れ様」

「お帰りなさいませ、主様」

「ただいま」

私は出迎えてくれた二人に言葉を返すと、風呂に入った。

その後は皆で食事だ、ヒトハも一緒に食べるようにしているので皆
で用意をする。

ゆっくりと食事を楽しみ、食後に全員がリビングに揃った。

「お母様、そろそろ知的生命体との事がどうなったか聞きたいのだ
けど」

カミラがタイミングを見計らったように聞いてくる。

「私も食後に話すつもりだったから話そうか」

私がそう言うと二人はすぐに話を聞く体勢になる。

「まず先に結果を教えよう、友好的な関係は結べなかった」

「襲って来た？」

「ああ、話し合いに持って行こうと声はかけたが駄目だった」

「言葉が通じなかったのですか？」

「通じてはいた。だが、相手は最初から私を捕らえる気でいたよう
だ」

そう話すとカミラが苦笑いをする。

「馬鹿な事考えたわね、どうにかなると思っていたのかしら？」

「情報が無いと判断を誤るとは、こういう事を言うのでしょうか？
主様がどのような存在か知っていれば、きっとそのような事は考えな
かったと思いますし」

「そうね……彼らはお母様の事を何も知らなかった。だからそんな
事を考えたのね」

「攻撃して来たから反撃した、例の力を解放した魔法の実験もつい
でにやって来たぞ」

「どうだった？」

カミラが飲み物を置いて聞いて来る。

「惑星内で使う事は出来ないな。範囲と威力が大きすぎて敵も味方
も周囲の惑星ごと消えて無くなる。実際に一度で広範囲に展開して
いた敵の艦隊が半分ほど消えたからな」

「……今までよく平気だったわね」

「イシリスが消えてしまっていた可能性があつたのではないでしょ
うか？」

二人にそう言われるがその通りだな。

「あくまで出来るだけで、私がやろうと思わなければそのような事
はまず無いと思う。それに、問題がありそうだと感じたら対処はす
るつもりだ」

「それで……彼らは全滅したの？」

「いや、話の分かる者に偶然会つてな。彼女に免じてある程度の者
達は生かして返した」

私がカミラの疑問に答えると、ヒトハが言う。

「それなりの数を生かしておく事にしたのですね？」

「全体の数と比べて多いのか少ないのかは分からないが、そうだな」

「また来るかしらね？」

「どうだろうな。今回の戦力は数は多かつたし個々の強さもイシリ
スで戦った魔道戦艦よりは強かつたが、それは比較した場合の話で、
どちらにしても私にとっては大した物では無かつた。もし彼らの手
元に何か特別な戦力が存在し、自信があるのならもう一度くらいは来
るかもしれない」

「……来るでしようか？」

ヒトハが尋ねて来る。

「恐らく来ない可能性の方が高いはずだ。彼らに特別な戦力があつたとしても、今回来た艦の戦力から見て、私に手傷を負わせる事は難しいと思う。ただ、判断するのは彼らだ。彼ら自身が私を殺せると判断すれば来るだろう」

「本当に主様に傷を負わせるほどの物である可能性もありますが……かなり確率は低そうです。ほぼ不可能なのではないでしょうか？」

ヒトハは私を見ながら話す。

「私はいつまでも余裕でいられるとは思っていない。だからこそ日々力を高め、様々な力を得ようとしている」

私はヒトハに答える。今の力に満足してはいつか負ける時が来るかもしれないからな。

「お母様はどこまで強くなるのよ……いるだけで周囲に被害が出るとか、そんな事にはならないわよね？」

カミラが呆れたような声で言う、その言葉からは何となく私の身を案じる様な雰囲気も感じる。

「それは注意しておこう。力を手に入れる事に固執して、自分の身や周囲を滅ぼすような真似をする気は無いからな」

「お母様の事だから平気だとは思うけど、一応言っておかないと不安なもの……ねえ？ヒトハ？」

「はい、主様の行動に問題を感じた場合はすぐに進言いたします」
二人はそう言つて静かに笑い合う。

彼女達はこれからも私を見ていてくれるらしい。

「気軽に何でも言うの良い、何を言われようと聞く気ではいる。実際に行動するかは別だが」

「勿論そのつもりよ。今までもそうだったじゃない」

「はい、遠慮なく進言させていただきます」

私の言葉に二人は返事を返し、雑談に花を咲かせ始める。

二人の仲が良好で何よりだ。

私はそう思いながら二人が話しているのを聞いていた。

「そうだ、二人に土産を用意していたのだった」
他の星系から来た知的生命体に帰って貰って、ある程度の時が過ぎたある日。

私は彼らから艦を貰っていた事を思い出した。

「お土産？」

ヒトハは無言で不思議そうに私を見て、カミラは疑問の声を上げた。

「彼らの艦を貰ったんだ、見てみないか？」

「見たいわ！……んっ、少し興奮しすぎたかしら」

「……興味深いですね、是非見てみたいです」

カミラは嬉しそうに声を上げ、その後少し恥ずかしそうにした。

ヒトハは静かに話す、楽しみで仕方ないといった表情をしている。

「じゃあ宇宙に行って取り出そう、すぐ行くか？」

二人は頷くと転移していった、私は二人を追いかけて転移する。

転移先では、二人が待ちきれないといった表情で待機していた。

『早く出して、お母様。見てみたいわ』

カミラがせかしてくる、ヒトハも隣で楽しみにしている様だ。

こんな様子の二人は珍しい。

『分かった』

私がマジックボックスから貰った艦を取り出すと、何も無い宇宙空間に大きな艦が現れる。

『中々大きいわね』

『これが宇宙を移動する乗り物なのですね』

二人は艦を見て眩く。

この艦の大きさは魔道戦艦よりもはるかに大きい。

『外見は何となく海洋生物のような雰囲気を感じるわね』

『確かにイシリスに居た海洋生物のような特徴が所々にありますね』

二人が言うように、外見はイシリスの海中に生息していた生物のよ
うな流線型をしている。

ただ、生物でないの是一目で分かる。

『入り口はどこなのかしら?』

『そうですね、どこでしょうか?探してみます』

『私も探すわ』

二人はそう言って艦を見て回り始める、転移で入ったので私も正式
な出入り口の場所は分からない。

調べようと思えば調べる事は出来たが、二人が楽しそうに探してい
るのを見て一緒に探す事にした。

『お二人共、それらしきものを見つけました』

しばらく三人で周囲をうろついていたが、ヒトハがそれらしい場所
を発見する。

ヒトハの所へ行くと、船体中央下部の側面に、それらしい扉のよう
な物が付いていた。

『どうでしょうか?扉の様に見えるのですが……』

『確かにそれっぽいわね……』

『近づいてみよう』

私はそう言って扉の様な場所に近づく。

出入り口では無く、格納式兵器の搭載場所という可能性もあるかも
知れないな。

表面を触って見ると、滑らかな金属のような感触がする。

『ここじゃないのかしら?』

『他にそれらしい場所を探して見ますか?』

傍に居た二人が話しているが、これ以上外をうろついていたくも無
い。

少し調べてみると、内部の通路とつながっているのは間違いない、

大きさからしてもここが入り口の可能性が高いと感じた。

『少し調べたが、ここが入り口の可能性は高いな。中につながっている』

『でも、何の反応もしないわよ？』

『何か条件が必要なのではないでしょうか？宇宙空間で突然開いてしまうのは問題だと思いますし……』

中につながっているという私の言葉にカミラは船体を撫でながら話し、ヒトハは何か方法があるのでと推測した。

『ヒトハの言う事が当たっていいそうだな。確かに、何かが近づいただけで勝手に開いたら話にならない』

『……仕方ないから転移で中に入りましょうか』
カミラがそう提案してくる。

『それが良いと思います』

『私も転移で入ったからな、そうしよう』

ヒトハと私は賛成し、転移する事にした。

転移した先は、私が彼らと会話をした指令施設のような場所だ。

確か、中央部の高い場所が群長と呼ばれていた者がいた場所だったな。

その周囲には座席と様々な設備が扇状に設置されている。

『ここはイシリスに近い環境なのね、普通に話せるわ』

『その様ですね、生活環境が大きく違うのでは無いかとと思っていましたが……』

『この艦、動力も動いたままなんじゃないかしら？』

『……確かに、周囲の魔動機のような物は動いているようですね』

そう言いながら二人は物珍しそうに見て歩く。

『まだ余計な物は触るなよ？どんな機能があるか分からないからな』

『分かったわ』

『心得ております』

そう返事をして二人は思い思いの場所へと進んでいった。

私は一番何かがありそうな、群長の席であった中央に向かう。

中央に着いた時、下からカミラの声がした。

「あら？この死体は……。これがやって来た知的生命体よね？へえ……血は人類と変わらない色なのね」

「私も見てみたいです」

カミラの声に反応してヒトハが飛んで行く、私は中央を見ながらカミラに釘を刺す。

「その血は飲むなよ。何かあるか分からないからな」

「流石に飲まないわよ……」

カミラから少し不貞腐れたような声が帰って来た。

「船の見た目もだけど、彼ら自身も何となく海洋生物っぽいわよね？」

「そうですね。しかし何故ここに死体があるのでしょうか？」

私は群長の席を調べながら説明する。

「私がここに侵入した時、そいつが攻撃して来てな。船が傷つきそうだったから殺したのを忘れていた。ヒトハ、その死体は回収しておいてくれ」

「かしこまりました、回収しておきます」

ヒトハに頼むと、すぐに返事が返って来る。

気が向いたら調べよう。

この艦をマジックボックスに入れておいて良かったな、そうでなければ腐っていた。

中央の設備を時間をかけて慎重に調べた所、この艦の設備は魔力的な物では無い事が分かった。

二人は途中から私の作業を見ていたが、恐らくよく分かっていたな。二人は途中から私の作業を見ていたが、恐らくよく分かっていたな。

教えてくれる者がいればいいが、何も分からないまま調べるのは理解するのに時間がかかりそうだ。

「群長席の設備を調べた事で得られた情報を共有しよう」

「何が分かったのか気になるわね」

「楽しみです」

二人とも興味があるようだ。

現在、私達は複数が並んで座れる席に座って話をしている。ここは休憩所のような場所だったのでだろうか。

「まずは彼らの事だ。彼らはニアレ星系種、という種族らしい」

「ニアレと言う惑星に生まれて進化したのかしら？」

「恐らくそうだろう。同名の惑星も出て来ている」

「星系と言う事は……やはり複数の惑星にまたがって生活しているのでしょうか？」

「その様だ、そして数も多い。恐らく魔法人類を遥かに超えるだろう」

私はヒトハに答えながら思う。

私に宇宙の知識があったのは幸運だった。突然頭に現れた知識だったが、恐らく一部でしかない知識であつても役に立っている。

この現象で私に害があつた事は無く、今の所は有益なだけだ。

「次に、この艦の事を話そう。この艦は戦艦だ。正式名称は、ニアレ統一宇宙軍ラディアス級戦艦シフィス、というらしい。登録番号がN83884529だという事も分かったが、これは無数にある艦を管理するための物だと思う」

「統一宇宙軍ね……」

カミラが艦内を見回しながら呟く。

「かなり規模が大きそうな名称ですね。登録番号の桁が大きいのはそれだけ数が作られているという事でしょうか？」

「恐らくな。得た情報によると、この艦が彼らの主力戦艦だった様だ。この程度なら二人を戦わせても問題無かった」

「こういう事を過保護と言うのだろうか。」

「気持ちは嬉しいわよ？でも、次は私達も戦いに出たいわね」

「はい、実戦経験は必要だと思えます」

カミラとヒトハはそう言ってやる気を見せる。

「そうだな、次からは二人も一緒に戦おう」

いざという時は私が何とかしよう。

「次の情報が二人の話した疑問の答えになるかも知れない。ニアレという本星らしき名の惑星を始めとした、多くの座標や惑星の地図と思われる物も見つかった。この戦艦を使う事が出来れば彼らの本星にも行けるだろう」

「ニアレ星系種の名前の由来と、彼らが数多くの惑星にまたがって生活している証拠……って事ね」

カミラがヒトハと目線を合わせながら言う。

「それで……彼らの本星に行くの？」

「どうするのですか？」

二人はそう聞いてくるが、あまり乗り気ではないようだ。

惑星に乗り込んで彼らを滅ぼすと思っているのではないだろうな。

私は攻撃して来た相手は種族ごと滅ぼす、といった考え方はしていないぞ。

「どちらにしてもこの艦を動かすには手が足りない。行く場合は手を増やす事から始めなければならぬ」

「今はどうするか迷っている感じ？」

カミラにそう聞かれ、私は正直に答える。

「そうだな、イシリスの事もある」

私は考える。

人手が必要……。

身の回りの世話をヒトハだけに任せている。

それでは彼女は他の事をしようと考えないかも知れない。

艦の事はともかく、人手は増やすか。

「艦の事は一旦後回しだ、話がある」

「あら？何か思いついたの？」

「嫌ならやめる。取り敢えず話を聞いてくれ」

「分かったわ」

「主様、お帰りになられますか？」

「帰るぞ」

それから、私達はすぐに艦から出てマジックボックスに仕舞い、転移で月へと帰った。

月へと帰った私達は飲み物等を用意し準備を整えてから、話を始めた。

「まずはヒトハの生活についてだ」

「私の……ですか？」

ヒトハが意外そうな顔をする。いきなり自分の生活についての話になるとは思っていなかったのだろう。

「長い間お前は訓練と私達の身の回りの世話だけをする生活になっている。そこで、自由な時間を与えるために新しく人手を増やそうと思う。ヒトハから見ると妹の様な者になるな」

「妹……？いえ、私は今のままで何の問題もありませんが……」

「自由な時間を作るだけだ。その時間で私達の世話をしたいのなら止めはしない」

「つまり、自由な時間を作るけれど何をすることも自由つて事ね？」

「そうだ」

私はカミラの言葉に頷く、今はこれで良い。

「人手を増やす事でヒトハに自由時間を作り、艦の乗員も兼任させる。構わないか？」

数が揃ったら一度ニアレの戦艦で本星に行ってみるのも良いな。

もしイシリスに生命が生まれたら、イシリスを優先するつもりだが……どちらが早いだろうか。

「私は構わないわよ？のんびりと三人で過ごすのもいいけれど、賑やかなのも嫌いじゃないもの」

あっさりと答えたのはカミラだ、妹が増える事が嬉しいのか微笑んでいる。

「私は……」

ヒトハは少し表情を暗くして考え込んでいる。

今のヒトハは訓練と私達の世話が生きがいなのかもしれないが、いずれ他の事にも目を向けて欲しい。

「ヒトハ、そんなに真剣に悩む事無いわよ。さつきお母様が言ったでしょ？他の事が出来るというだけで、やる事は貴女が決めるのよ？」

カミラがそう言うのとヒトハはいつもの表情に戻る。

ヒトハ自身が考えを変えなければ、今と変わらない事に気が付いたか？

「主様、何の問題もございません」

「よし、では決まりだな」

こうして新しく人手を増やす事が決まった。

私はそれなりに時間をかけて考える。

数を揃えるのなら、まとめる者がいた方が良さだろうな。

まとめ役は取り敢えず三人にしておくか。

始めに、ヒトハと同様の構造をした魂を持つ三人の娘達を作る。

この三人はヒトハの妹と言えるだろう。

そして、ヒトハの三人の妹達が調整魂を持つ多数の人型使用人をまとめ上げ、様々な活動を出来るようにする、というのはどうだろう。艦を動かす時は彼女達に役割を決めて活動して貰い、ヒトハをまとめ役にし各役割からの情報をまとめる。

更にカミラがその情報を確認し方針を決め、私はいざという時に力を貸す。

これでどうだろうか。

一度二人に聞いてみよう。

特別な理由が無い限りは押し付ける事はせず、娘達の意見を聞いておきたいからな。

もし二人が嫌がったら、また考えればいいだけだ。

私は二人を呼び出してこれから作る妹達とその形態の事を話した。

「私が……妹達のまとめ役ですか？」

「私が方針を決めるの？」

「嫌なら考え直す。無理矢理やらせる気は無いからな。妹達のまとめ役としては姉となるヒトハに、これから増える事になる皆を含めた全体をまとめるのは皇帝をしていたカミラに任せるのが一番だろうと思っただけだ」

「まあ、妥当な判断よね」

「そうだろう？」

私はカミラの言葉に返す。

「妹達と配下の使用人達が集めた情報を私がまとめ、カミラ様に報告し判断を仰ぐ……という事ですね？」

ヒトハが私に確認してくる。

「そうだ、集まった情報を分かりやすく纏めて欲しい。後はその情報を確認したカミラが判断するだろう」

私が答えると、ヒトハは考え込んだ。

それを見ていたカミラが口を開く。

「基本的にお母様が私達の頂点だし、私が方針を決めるとはいつてもお母様の言葉が最優先よね？」

「何もしなければそうなる。嫌ならカミラを最優先にしようか？」

「その必要は無いわ。私はお母様が頂点でなければやる気が無いもの」

私の言葉が最優先の方が良いのか。

自分の決定を私に覆されるのが嫌で無いのならそれでも良いが。

「そうか、それでいいのなら頼む」

「分かったわ……ふふ、楽しみね」

私とカミラがそんな話をしている間もヒトハは考えている。

好きなだけ悩んで貰おうとそのままにしてカミラと話をしていたが、やがて私へと跪く。

「先程のお話、お受けいたします。主様を支えるという事は、常に傍にいる事だけが全てではありません。……それに、妹達が出来る事も楽しみに感じていますので」

「そうか、ありがとうヒトハ。必要以上に無理はするなよ？」

「はい、問題ありません」

そう言って微笑むヒトハ。

その微笑みは自然で、無理をしているようには見えない。

私はヒトハの頭を撫でる。

彼女は私から離れる事を良く思っていない様だったが、私が妹達について考えている間に何かあったのか？

『ヒトハは少し考えが変わったみたいよ』

カミラから念話がある。

『私が一人で考えている間に何か言ったか?』

『皇帝時代に居た使用人の話を少ししたのよ……どうやら思う所があったみたいね』

『やはりこういう事はカミラに任せるに限るな』

『何時も上手く行くとは限らないからね?』

『分かっている、ヒトハの表情を見る限り問題は無さそうだ。ありがとう』

「主様……」

カミラと念話していると、ヒトハの困惑したような声が聞こえる。

「お前の変化が嬉しくて、ついな」

私は彼女の頭から手を離す。

すると私が撫でやすいように屈んでいたヒトハは綺麗な立ち姿に戻った。

「では、本格的に作り始めるか」

「待ってお母様。その前にもう一つ聞きたいんだけど……調整魂って何?」

作り始める為に転移しようとした私を、カミラが止める。

「……悪かった。説明をしていなかったな」

私は謝罪して説明を始める。

「名前は適当に付けただけだが、調整魂とはヒトハのように自然に生まれた自我を持つ者ではなく、私が設定した自我を持つ魂だ」

「どういう事?」

カミラが尋ね、ヒトハは黙って聞いている。

「長い時をかけ自然に生まれた自我を持ち、変化して行く過程で敵対する可能性も残しているのがヒトハと、これから作る三人の妹達だ。それに対して、この調整魂は始めから感情や自我、戦闘力、情報の共有能力を持ち、私と私に近い者には嘘がつけず、敵対する事も出来ないようにする」

「なるほど……報告を受ける側としては嘘がつけなくて敵対出来ないのは気が楽ね」

しみじみとそんな事を言うカミラ、皇帝時代に何かあったのか？

「そうだろうか？」

私はそんなカミラに言葉を返して、ヒトハが用意してくれた飲み物を一口飲んだ。

「そうすると、個体差がほとんどないのかしら？」

飲み物を置き、私はカミラの問いに答える。

「最初は無いな」

「最初は？」

カミラは疑問の声を上げた。

「作られた初期は全て同じだが、変化はする。情報の共有は出来るというだけで強制ではなく、共有する情報も取捨選択する事が出来る。勿論鍛えれば強くもなる。時間が経てば共有されている情報とその個体だけが持つ情報が生まれ始め、強さや性格も個体差が出て来るだろう」

「お母様は個性を出したいのね？」

「その通りだ。今回は報告を受ける事になるヒトハやカミラの事を考えて、嘘を付けず敵対も出来ないようにし、短時間で数を揃える為に最初からある程度完成した者を用意する事にした。もしやりたいのなら全員ヒトハの様に一から育てても良いが、どうしたい？」

「ここまで説明したが、その方が良いかも知れない。」

今の所、時間はどれだけ掛かっても特に問題は無いからな。

「うーん……。ヒトハはどう思う？」

カミラが先程から黙ったままのヒトハに尋ねる。

「私としましては……。始めに私の妹達である三人を育て、その後人数……。例えば五人程の使用者を育てます」

ヒトハには何か考えがあるようだ。

「それで？」

私はヒトハに先を促した。

「その五人の使用者が十分に成長した後、更にその五人に数名……。例えば五名ずつ……。合わせて二十五名の使用者の教育を任せます。この様に、教育は使用者の中の誰かに任せれば良いと思います」

最初に教育係を育てて、後をその者達に任せるといふ事か。良いかも知れない、帝国で部隊を作っていた頃を思いだした。ヒトハの案を採用させて貰おう。

「三人の妹達以外の使用人は、虚偽と敵対が出来ない様にしておいた方が良いわね。その方が色々と安心なもの」

カミラが意見を出す、それも採用だ。

「皇帝の立場で言わせて貰えば、ヒトハもヒトハの妹達も、縛れるのなら縛っておいた方が良いのは間違いないけれど……しないでしょう？」

「しない」

「そうよね」

私がカミラの問いに即答すると、カミラは微笑んで言った。

カミラも皇帝として言っただけで、本人としてはやりたくは無いのだろう。

二人には話していないが、そういった制限は後から好きなように追加や変更をする事も出来る。

もし使用人の制限を無くしたい時は解除すればいいだろう。

まず私がやる事は無いと思うが、勿論ヒトハとカミラにも可能だ。

「ありがとう二人共。私が言った先程の内容は破棄し、ヒトハの案とカミラの意見を採用させて貰う。まず三人のヒトハの妹達を作り、十分だと言えるまで育てる。その後五人の教育係を作り教育した後、残りの娘達を任せる。そして妹達以外の娘には制限を付ける事にする」

「主様、本当によろしいのですか？」

ヒトハが確認して来る。

「私はお前達の案を聞いて良いと判断したから使った。ヒトハ、お前はしつかり私を支えている」

「はい、お役に立てて嬉しいです」

そう言っつてヒトハは微笑んだ。

「カミラ、制限は必要だな？」

私はカミラに確認する。

「必要よ。大量の情報を扱うのなら、情報自体の真偽はともかくとして……報告者が絶対に嘘を言わない、敵対しない、と言うのはとても大きい事だもの」

「そうか。大分予定と変わったが、問題は無い。まずは妹達を作るとしよう」

最終的にヒトハの案とカミラの意見を採用し予定を立て、私は最初の目標であるヒトハの三人の妹達の製作と育成に向けて行動を開始した。

ヒトハの妹達を製作する作業は問題無く進んだ。

一度ヒトハを作っている事が理由だろう。

途中、カミラやヒトハが様子を見にやって来る事があった。

特にヒトハは妹達の事が気になるのか、頻繁に私の元へと訪れている。

この調子なら四姉妹として良い関係を築けるかも知れない。

私は二人と日々を過ごしながら、妹達の製作を続けた。

妹達の製作に取り掛かってからどれ程の時が流れただろうか。

今日、三人の妹達が完成した。

現在、リビングには私とカミラ、ヒトハの他に三個の球体が飛んでいる。

それぞれの球体にはそれぞれ違う色の帯状の印が入っている、分かりやすくするために私が付けた物だ。

青色の印が次女のフタバ、紫色が三女のミツハ、赤色が四女のヨツバだ、この色は以前イシリスに生えていた花の色を参考にしている。

名前については、ヒトハと合わせて四姉妹になるのだから共通の何かが欲しいと考え、花の葉を想像してつけた。

初期設定を終えた三人を部屋に連れて来た後、この部屋から出ない様に自由に飛んでいるように言ったので、彼女達はそれぞれ漂ったりうろついたりしている。

用が無いのなら止まっていればいいと思ったが、この子達は生まれただばかりで今は命令を受けて動く魔道具と大して変わらない。

自由に飛べと言われれば飛ぶ事が命令で、止まって待機などしないという事にたった今気が付いた。

「フタバ、ミツハ、ヨツバ。私の傍で待機しろ」

『かしこまりました』

声色の違う三つの声が同時に届き、三体は私の傍に飛んで来て待機する。

「作られたばかりの頃のヒトハを思い出すわね」

「そうだな。そういえば、ヒトハは私に作られたばかりの頃の記憶はあるのか？」

ふと疑問に思った事を聞いてみた。

「うっすらと思いつく事が出来る事が僅かに存在しますが、最初期の物と思われる記憶はありません。……しかし、中には覚えている事もあります。例えば、お二人と都市へ行きカミラ様とこの装飾品を選んだ事、ルーテシア様やクログウェルさんの事などもハッキリと覚えていきます」

そう言いながら水色の装飾品をマジックボックスから取り出して見せるヒトハ、そういえばそんな事もしていた。

きっかけがあれば、思い出す事もあるだろう。

あの時の私は、確か別行動をして本か何かを見に行っていた気がする。

「嬉しいわ、記憶に残っているのね。……でも、覚えているのも分かる気がするわ。貴女はあの時初めて、自分の意思で好きな物と嫌いな物を選んだのよ？」

「はい、今なら分かります。私はあの色使いとデザインは嫌いです」

「貴女が危険と言ったアクセサリの事ね。今だから言うけど……あのデザインがヒトハの好みだったらどうしようと思っていたのよね」

カミラが苦笑いして言う、もう一つはそんなに酷かったのか。

「中にはそういった者もいると思いますが、私の好みではありませんでした」

そんなカミラにヒトハは微笑みながら答えた。

「この子達の事だが、成長しそれぞれの個性を持つまでには時間がかかるかも知れない。ヒトハの時と違い、今回は周囲に私達しかいない。外部からの刺激は少ないだろうし多種多様とも言えないからな」

「ヒトハの時は情報収集が色々な刺激を得る機会にもなっていたけれど、それが無いものね」

「そういう事だ。出来るだけこの子達に構ってやってくれ、何か簡単な事を頼んだりただ話すだけでも良い。子供に構ってやる感じで良いと思う」

「そうする事にするわ」

「やってみます……姉ですから」

姉を強調するヒトハにカミラが優しい気な視線を送る、私も気が付けば少し微笑んでいたようだ。

それからの生活は三体の娘達を主体にした生活になった。

常に共に過ごし、話しかけ、簡単な物事を頼み、本を読み聞かせ、訓練も見学させた。

そんな事をしながら長い間生活を続けていると、やがて妹達に多少の個体差が現れ始める。

フタバは家事などに興味を示し始め、ミツハは新しい事や道具に興味を持つようになり、ヨツバは戦闘訓練に興味を持ち始めた。

今もリビングでヒトハが彼女達に自分の経験を話して聞かせているが、それぞれ反応が僅かに違う。

順調に個性が現れ始めている事が分かる。まだ時間はかかるだろうが、これからが楽しみだ。

私はいつもの様に妹達に少しだけ手伝って貰いながら作られた朝食を食べた後、本を読もうと世界樹のもとにやって来た。

『あ、クレリアさんいらっしやーい』

すると突然、間延びした声が聞こえる。

「世界樹か？」

私は世界樹からの念話だとすぐに気が付いた。

『あれ!?分かるの!?!……そうだよー、こうして話せるなんて嬉しい

なあ』

幼い声と話し方だが、しっかりとした意思を感じる。

世界樹は私と同じ位の時を生きている筈だから当然か。

いや、最初はただの樹だったな。あの時点で自我が無かったのなら、年齢的には私より少し下になるのかも知れない。

「いつから話せたんだ？」

取り敢えず彼か彼女か分からないが、聞きたい事は聞いておこう。

『ついさっきだと思うよ？いつも伝えてたけどクレリアさん分かって無いみたいだったし……今日も伝えたら答えが返って来たから驚いた！』

「お前が使っているのは念話だな、自然に使えるようになったのか？」

『もしかしてボクって凄い？』

「そうだな、凄いと思う」

『えへへ……』

精神的にも樹としてもそれなりの年齢のはずだが、なんだか子供の様だな。

「それと、お前の声は聞こえていなかったが嬉しそう、楽しそう、悲しそうといった雰囲気は感じていたぞ」

『それは知ってるー。言葉は伝わらなかったけど、何度か行動で意思の疎通は出来てたもんね？』

「お前に意思のような物があるのは知っていたが、ハッキリと自我があるとは思っていなかったからな。植物の無意識の反応だと思っていた」

『そう思われても仕方ないかなあ。ボクは他の樹達の言葉も分かるけど、ボクみたいにはつきりしてる子は居なかったし』

「樹の言葉が分かるのか？」

『うん。多分ボク以外には無理なんじゃないかな？クレリアさんだってこうして話せなければきつとあのままだったでしょ？』

確かにそうだ。

こうして話しかけられる事が無ければ、私の世界樹に対する認識は

意思のような物がある珍しい樹のままだっただろう。

「いくつか聞きたい事があるんだが、答えてくれるか？」

『いいよー』

「性別はあるのか？」

『両性だよー』

「どちらでもあると言う事だな？」

『うん、ボクだけで苗が作れるよ』

「他に何か出来る事はあるか？」

『何かー？んー……魔素を魔力に変えたり、果実とか樹液が作れるよ？。』

「魔法は使えるか？」

『クレリアさん達が使ってる色々出来る奴だね！……無理なんじゃないかなあ？。』

「そうか」

恐らく戦闘力は無いな、いざという時のために何かしておくか。

後々、本当に魔法が使えないか確かめてみるのも良い。

「お前はこれからどうしたい？」

『ん？このままここでみんなと居たいよ？クレリアさん達もいるし、向こうの皆は死んじゃったけどここには仲間がいっぱいいるし』

「分かるのか」

『うん……ずっと消えていく皆の事を感じてたよ』

樹なので表情は無いが、この声が寂しそうな、悲しそうな声である事は分かる。

『クレリアさんが少しでも皆を助けてくれていて嬉しかったよ』

イシリスの植物を月に持って来た事を言っているのだろうか。

「たまたまそうなっただけだ」

『それでも……ありがとうね』

言葉が途切れ、風と葉擦れの音が聞こえる。

幼い声と話し方で誤解されそうだが、どうやらその精神はそれほど幼くはないようだ。

「皆に紹介しよう。カミラとヒトハの他に新しく三体増えているか

ら、彼女達にもな」

『最近よく見る丸い子達だね』

「知っているなら話が早い。ヒトハの妹達だ、気にかけてやってくれ」

『え……？ヒトハちゃんの妹なの？全然形が違うんだけど。ボク達はそこまで違う形にならないけど、そんな事もあるんだね』

「彼女達は少し特殊だな」

私はヒトハ達の事を世界樹に説明した。

彼……彼女でもあるが、とにかく彼は私の話を聞いて納得したようだ。

『その内同じような姿になるの？面白いねー？』

こうして私は皆に世界樹を改めて紹介した。

カミラとヒトハは特に驚く事無く受け入れた。三体の妹達も樹が意思を持ち話す事が珍しいと知らないため、問題無く受け入れた。

ある程度妹達が個性を出し始めた後、自由に行動している際に妹達が世界樹の根元に集まっている光景をよく目にするようになった。

今も世界樹の枝に座って本を読んでいる私の下で集まっている。

全く動かない彼女達だが、念話で会話している筈だ。

盗み聞く事も出来るが、やめておこう。

私は読書を中断し、世界樹の根元に集まっているヒトハの妹達をしばらく見ていた。

三人の妹達は個性を出し始めてからも、順調に育って行った。始めは同じであった彼女達は長い時間をかけ、それぞれに独立した人格を得る。

そしてある日、彼女達は体を欲した。

『クレリアさんまだー?』

『後で会わせてやるから大人しく待っている』

『はい』

現在の拠点内は早朝だ。

現在、私は研究室にいるのだが、世界樹が念話で時々話しかけてくる。

よく三人と話していたから気になるのだろう。

私は彼女を黙らせ、カメラとヒトハが見守る中で最後の確認をする。

今日は三人の妹達が体を得る日だ。目の前にはベッドが三つ並んでおり、それぞれに目を閉じた体が横たわっている。

自我を確立した順番はフタバ、ヨツバ、ミツハの順だった。

体を得るのが同時になったのは、フタバが三人一緒に体を手に入れたと言ったからだ。

ヨツバもそれに賛成したためミツハを待ち、そして少し前にミツハも自我を得た。

準備は出来た、しかし彼女達は何も言わないな。

意識はあるし念話なら話せるのだが。

「準備は出来た。フタバ、ミツハ、ヨツバ、始めるぞ」

『お願いいたします』

三人揃った念話が聞こえてくる、返事を聞いた私は三人に最後の仕上げを行った。

それから僅かな時が経ち、ゆつくりと目を開けた三人に私は声をかける。

「おはよう、私の娘達」

その後、まともに立つ事も出来ないまま必死に体を起こし私に挨拶をしようとする三人に、私は正式な挨拶はある程度まともに動けるようになってからで構わないと話した。

三人が早く動けるようになっていと言った為、すぐに慣らすための訓練を開始する事にした。

私は訓練をカミラとヒトハに任せ、現在私達が住んでいる家の隣へと向かう。

娘が三人増え、部屋が足りないので対策をするためだ。

これから更に人数が増える事が決まっているので、私は今の家を増築するよりも新しく建ててしまった方が良くと考えている。

カミラとヒトハも新しく家を建てる事に特に反対する事は無かった。

ただ、カミラからは以前の家も残してくれと言われたので今まで住んでいた家もこのまま残す事にする。

私は何も無い土地の前に立ったまま、こういった家にするかを考える。

ウルグラードに持っていた屋敷。あれは知識にある洋風と言う物の見た目に近く、外見も悪くはなかった。

あれを手本にして規模を大きくした物を建てよう、念のために後々増築出来る様にもしておこう。

どういった物するか決めてしまえば、建築自体は魔法で簡単に出来る。

中の椅子やテーブルなどは……木を使おうか。

私は建物の本体を作り上げ、内装を細かく作り始める。

私とカミラは勿論だが、ヒトハ達四姉妹も他の使用人と分けた方が

良いかも知れないな。

一階は応接室や来客用の食堂、厨房、倉庫への入り口などを置く。
二階は姉妹の配下の使用人達の部屋と厨房、食堂、休憩室、風呂。
三階は私とカミラ、四姉妹の部屋と食堂、厨房、談話室、風呂にしよう。

各階に複数のトイレも完備しておく。

応接室と来客用の食堂もだが、使う機会は来るのだろうか。

屋敷内の明かりなどの設備は魔道具を使用するようにしよう。

私の構成物である闇の塊で常に環境が調整されている月は魔力が切れる心配が無いので、これが一番いいと思う。

庭は……月の拠点全体が庭のような物だから必要無いか。

私は色々と考えながら手早く屋敷の中を整えていく。

所々手を止めてどうするかを考えながら作業を進め、昼食前には屋敷の準備が整った。

取り敢えずはこれでいいだろう。何かあればその都度変えて行くとして、後は引越した。

昼食時に新しい屋敷を作った事と、今日の訓練が終わった後に引越す事を伝える。

食事の後、カミラとヒトハは再び三人の訓練へ向かった。

やがて夕方になると訓練を一度終了し、引越しをする。

妹達はまだまだともに動けない為、見学だ。

夜、夕食を食べた後にカミラと訓練を交代したが、ヒトハが最初に体を得た時とほぼ同じ道を辿っていた。

ふらふらとぎこちなく歩き、足元に躓き、隙間に引つかかる。

ふとヒトハを見ると、恥ずかしそうにしていた。

「ヒトハ、どうした？」

私はヒトハの様子を見て声をかけた。

「主様……その、私もあのような状態であったのだと思うと少し

……恥ずかしく思いまして」

なるほど、自分の事を重ねているのか。

「気にするな。以前に話したと思うが、私も魔法の習得時には地面に頭から突っ込んでいた。私の時は今のようになっている者はいなかったが」

ふらつきながら、体に慣れるために簡単な訓練を行っている三人を見て話しをする。

「そうですね……知っているのは主様とカミラ様だけです、気にしない事に致します」

「そうするといい。しかし、体を得る前はよく話していたが、今は全く話す事無く黙々と訓練をしているな」

「慣れる事が出来なければいつまで経っても主様に正式に仕える事が出来ない、必死なんだと思います。体に慣れて仕える事が出来れば以前の様に戻るでしょう」

「焦る必要は無いのだが」

「あの子達自身が早く仕えたいと思っっているのです……駄目でしょうか？」

「彼女達がそう望んでいるのなら構わない」

ヒトハの雰囲気や三人を見る目が少し柔らかい気がする。

本人も気が付かない内に、少しずつ姉らしくなっているのかもしれない。

三人の訓練は進み、やがて日常生活に問題は無くなった。

そんなある日、正式に挨拶をするために私の部屋へ行く事を許可して欲しいとヒトハから頼まれた。

断る理由など無い私は、それを許可した。

そして現在、私の部屋で三人が跪いている。

跪かれている私の後ろでは、ヒトハとカミラが控えて三人を見守っていた。

「これからも主様に尽くす事をここに誓います」

普段とは全く違う態度であいさつをする三人に私は言う。

「三人とも、いつも通りで良いぞ」

そう言うのと三人はすぐに立ち上がりそれぞれ微笑みながら話し始める。

「ご主人様は堅苦しいのがお嫌いでもものね」

そう言つて柔らかい微笑みを浮かべるのは次女のフタバだ。

身長は161cm。青く長い髪を三つ編みにして、見た目は二十歳程の少々青白い肌をした女性の姿をしている。

彼女は誰に対しても微笑みを絶やさず穏やかで丁寧な言葉で話す。

家事などが好きでよく調理を手伝っている、私から見るとおしとやかな感じだな。

「ヒトハお姉ちゃんがこういう時はこうした方が良いって言つてんだけどなあー」

身長は142cm。紫色の短めの髪をサイドテールにした、一五歳ほどの見た目をした肌の白い少女が軽い口調で話す。

彼女が三女のミツハだ。

彼女は道具などの構造を見るのが好きで、好奇心が強く、落ち着きがなく、騒がしく、不真面目で誰に対しても馴れ馴れしい。

流星に私相手には許可が無い限りしないが、かなり自由に育った元気な子だ。

「だから私はいつも通りでいいって言つただろうが……」

この言葉使いが少々荒い娘が四女のヨツバだ。

赤く長い髪をポニーテールにして二十三歳ほどの年齢を想定した見た目をしている。

肌は褐色、身長は175cmで、かなり背が高い。

彼女は戦闘訓練がお気に入りだ。

これからの訓練が楽しみなのではないだろうか。

何となく軍人の様な、冒険者のような雰囲気を感じる。

「そんな事言つてー、ヨツバ滅茶苦茶緊張してたくせにー」
ミツハがヨツバに、にやつきながら言う。

「うるせえぞミツハ！お前だつて大人しく黙つてただらうが！」

「二人とも静かにしないと駄目よ？」

フタバが二人をなだめようとする。

「フタバお姉ちゃんだつてそわそわと落ち着きなかつたじゃん、それに主様に言う言葉を何度も練習してたの知ってるからねー？」

「なっ!？」

ミツハの言葉は事実だったのだろう、フタバの顔がほんのりと赤く染まる。

「三人共、言い争うのはそこまでにしなさい……ミツハ、許可が出るまでは主様に礼儀を尽くすのは当然の事です」

私の隣で控えていたヒトハが騒ぎ始めた妹達を止める。あの堅苦しい態度と言葉はヒトハがさせたのか。

ヒトハの言葉で静かになった三人に私は声をかける。

「これからまだ覚えて貰いたい事がある。使用人としての仕事はもちろん、魔法や戦闘訓練も残っているからもうしばらく頑張つて欲しい」

「かしこまりました」

三人が綺麗に声を揃えて言う。

「それから、これからも今のままの態度で構わないし、娘として甘えたい時には遠慮なく来るといい。カミラとヒトハもな」

「は、はい……」

私の言葉を聞いた三人は、気恥ずかしそうに返事をして退室した。ヒトハも私達に一礼し、妹達の後について行く。

「あんなに動揺しちやつて可愛いわね。ヒトハもちよつと赤くなつていたみたいだし」

四人が出て行った後、微笑みを浮かべたカミラがソファに座りながら言う。

「子が親に甘えるのは当然では無いのか？少なくとも私は甘えられて嫌な気分にはならないが」

「皆の前であんなに堂々と言われたら……流石に恥ずかしいかもね？」

「皆と言つても部外者がいる訳では無いだろう、全員私の娘だぞ？」

「そうなんだけどね……まあ問題無いと思うわよ？」

「そうか」

「これから三人は魔法の勉強と戦闘訓練をするのよね？」

「そうだ。以前のように勉強は私が教えようと思う、お前とヒトハには戦闘訓練を頼みたい」

「良いわよ、一対三も楽しそうだし」

「ヒトハにも手伝つて貰えよ？」

「もちろんよ。人数が増えたから一対一以外にも色々出来るわ……楽しみね」

カミラも戦闘は好きだからな、四女のヨツバと気が合うかもしれない。

私はこれから一段と騒がしくなると思いつつ、席を立った。

新しい屋敷は大人数を想定しているため色々と規模が大きいが、今は六人だけだ。

現在、私達は三階の食堂で食事を取っている。

人数が増えて来たら二階の食堂で皆と共に食事を取る事にしようか。

食事の準備は、人数が少ない内はヒトハかカミラのどちらか一人と、妹達の中の誰か一人で行う当番制にした。

今日の食事当番はヒトハとフタバだ。

「フタバ、何故見ている」

フタバは自分の食事に手を付けず、私が食事する姿を微笑みながら見つめている。

「ご主人様のお口に合うか心配になってしまつて……お味は如何ですか……？」

微笑みながらも不安そうな表情をするフタバ。

「練習時間を考えれば十分な味だと思う、美味しい」

カミラやヒトハが単独で作った料理と比べる事はまだ出来ないが、このままいけば彼女はあの二人と同等かそれ以上になるかもしれない。

私の言葉を聞くと、彼女の微笑みが明るくなった。

「ご主人様のお口に合つて良かったです……」

「フタバ、私が付いているのですからそこまで主様の好みから外れた味にはさせませんよ」

ヒトハがそう言つて私に飲み物を注ぐ、人数が揃つたらこういった役割も当番制にしよう。

「美味しいなこれ、フタバ姉さん上達早いな」

「おいひいよね……フタバお姉ちゃん凄いよー！」

ヨツバが静かに食べながら感想を言い、ミツハは勢いよく食べながら言う。

「ミツハちゃん？その食べ方はやめるように言ったでしょ？」

「はい」

フタバが微笑みながら少し怒ったように言うと、ミツハは返事をし
てゆっくりと食べ始めた。

「毎回言われてんのに分かんねーのかお前は」

「うるさーい。それよりも！ちゃんとミツハお姉ちゃんって言っ
てよー」

「誰が言うか！なんでお前が三女なんだよ！どう考えてもお前が四
女だろうが！」

ミツハとヨツバの言い合いが始まる。

「ヨツバ、それは作った順番だ」

私がそう言うのとヨツバが私を見て言う。

「主様が悪い訳じゃないです、こいつがガキなだけだから」

「ふふん！お姉ちゃんだぞー！甘えていいよー？ヨ、ツ、バ、ちゃ
ん？」

「この野郎！」

煽るミツハと怒るヨツバだが、これでも仲は良い。戦闘訓練の時に
良い連携を見せたりもする。

「二人ともそこまでです。主様は楽しそうに見ていらっしやいます
が……それ以上は食事の場では許しません。フタバも見えていないで
止めなさい」

「ヒトハお姉様……申し訳ありません」

フタバは気が付いたように謝る。

「ごめんなさい……ヒトハお姉ちゃん」

「……悪かった、ヒトハ姉さん」

騒いでいたミツハとヨツバも大人しくなる。

フタバ、ミツハ、ヨツバの間ではそれほど差は無いのだが、ヒトハ
に対しては何というか、一人だけ年の離れた姉に対する反応に見え
る。

実際はかなり離れているからな、どうやら下の三人はヒトハに頭が
上がらないようだ。

「ふふ……私はこういう雰囲気は好きよ？こんな騒がしい日々はいつぶりがしらね……」

四姉妹のやり取りを私と共に見ていたカミラが楽しそうに言う。今まで殆どの日々を静かに過ごして来たが、私もカミラも騒がしいのが嫌いという訳では無い。

「カミラお嬢様……」

そんなカミラを見てフタバが呟いた。

「カミラ様……それでも限度があります。あまりにも見苦しい事をさせる訳にはいきません」

呟いたフタバを横目に、ヒトハはカミラに話す。

ヒトハもしっかりと私達に意見をぶつけるようになっていて、実にいい傾向だ。

「その辺りはヒトハに任せるわよ？ただ賑やかなのも悪くない……それだけよ」

カミラが微笑んでヒトハに言うと、ヒトハも微笑んだ。

「ミツハ、ヨツバ。カミラ様が仰ったからといって調子に乗らない様に、いいわね？」

「はいー！」

「分かりました」

ヒトハがそう言うと二人は元気よく返事をし、フタバはその様子を見ながら微笑んでいた。

私は彼女達の騒ぐ様子を見ながら、食事をする。

こんな食事もあるくない。

ある日、本でも読もうと世界樹へ向かうと根元にミツハがいた。どうやら魔道具を見ているようだ。

「あ、主様だー」

『クレリアさんいらっしやーい』

近寄ると、ミツハと世界樹から声をかけられる。

「何をしているんだ？」

「これはどうなっているのかなー？って思ってた」

そう言っただけ魔道具を見せて来る。これは屋敷の廊下に使っている明かり用の魔道具だな。

「知りたいのか？」

「うん、気になるんだ」

『ボクもこういうのは分からないからさ、一緒に見てたんだ』

「これは廊下の明かり用の魔道具だ」

「そうじゃなくて、どうやって動いているかが気になるんだよー」
構造が知りたいのか。

「主様はどうしたの？」

座り込んだまま私に聞いてくるミツハ。

「本を読もうと思っただけ」

「本!？」

立ち上がり興味深々と言った様子だ。

「その魔道具は良いのか？」

「う……気になる……でも主様と本……」

魔道具と本を交互に見ながら迷うミツハ。

「時々でいいのなら魔道具について教えてやる、だから今日は本にしよう」

「本当!? やった!」

そんな話をしていると、私は転移の反応を感じた。

その直後、ヒトハが転移で現れる。

「失礼します主様。……ミツハ、屋敷の明かりが一つ無くなっていくのですが何か知りませんか？」

聞かれたミツハは、持っていた魔道具を後ろに隠している。

「廊下の明かりの場所はちよつと知らないかなー？」

「……どうして廊下の明かりだと知っているのです？」

ヒトハの言葉に焦ったような表情になるミツハ。

この反応、これは恐らく……。

「ミツハ、お前。屋敷に使用していた物を持って来たのか？」

「うう……」

私の問いにミツハは縮こまった。

「予備から持って来たのならいいが、それは駄目だ。大人しく叱られて来い」

「はい……」

「ミツハが犯人でしたか、行きますよ」

大人しく魔道具をヒトハに渡して連れて行かれるミツハは反省している様だ。

あの様子なら必要以上に叱られる事は無いだろう。

『あーあ、連れて行かれちゃった……。でも、使っている物を持って来たなら駄目だよね』

「そうだな」

私は世界樹の根元に座り、本を読み始めた。

私は今、イシリスに降りている。

時が過ぎ、現在のイシリスはそれなりの変化を見せていた。

いつの間にか植物が生え始めているが、動物などはまだ生まれていない。

そんなイシリスの大地で、ミツハとヨツバが対一で戦闘訓練をしている。

周囲に被害が出ない様に張った障壁内で模擬戦中だ。

「おらあー！」

「うわっ!?!」

戦闘は一方的にヨツバが押している。

三人の中でヨツバが一番上達が早い。

次はフタバで、ミツハは戦闘が苦手なようだな。

「くっ!?!もー！ヨツバのくせにー!」

「ミツハはまだまだだな」

寸止めされたミツハは、文句を言いながらヨツバに引き起こされ

た。

「ヨツバ、私と一戦どうかしら？」

「ぜひお願いします！」

カミラに模擬戦を申し込まれ、嬉しそうに答えるヨツバ。

そして戦い始める二人だが、ヨツバは回避や受け流しが苦手なようだ。

いいように翻弄されて、まともに戦えていない。

普段もそうだが、力押しでどうにかする傾向があり、繊細な技術は苦手なようだ。

「だー！くっそー！当たらねえ！」

思った様に動けない事に苛立つヨツバが叫ぶ。

「そんなに分かりやすい真っ直ぐな攻撃だと、ある程度以上の相手には通じないわよ？……ほら」

「おわっ!？」

ヨツバは攻撃の勢いを利用され、転がされる。

「あつははは！かっこわるーい！」

そんな姿を見てミツハが大笑いしている。

「私もミツハちゃんも、ヨツバちゃんに最近勝てていないでしょう？そんな事を言っちゃ駄目よ？」

「むー……そうだけどさー」

ミツハはフタバに頭を撫でられながらたしなめられ、大人しくなる。

訓練を開始した頃はいい勝負をしていたが、フタバとミツハが他の事をしている時もヨツバは好んで戦闘訓練をしている事が多い。

流石に差も生まれるだろう。

「まだまだあー！」

「良いわね、折れない子は好きよ」

跳ね起きながら牽制し体勢を整えるヨツバ。

それを見たカミラは嬉しそうに笑っている。

その後のフタバとミツハの訓練は私とヒトハが行った。

結局、今日の訓練が終わるまでカミラとヨツバはずっと戦い続けて

いた。

今日の夕食の当番はカミラとヨツバだ、ヒトハが言うにはヨツバが気合を入れていたらしい。

カミラの料理はいつも通り素晴らしい出来だ。

ヨツバの料理はどうだろう、以前より上達しているだろうか。以前のヨツバの料理は、あまり良いと言える物では無かった。

それでも過去のカミラの料理よりは遥かにまともだったが。

そう思いながら、私は料理を口にする。

……なるほど。

カミラの助けが大きいのが、間違いなく上達はしているな。

前回を思えば、かなり良いと言える。

私の感想を待っているヨツバに、私は話しかけた。

「まだまだカミラに助けて貰っている部分が多いが、間違いなく上達している。美味いぞ」

「ありがとうございます！」

笑顔で私に返事をするヨツバ。

「やったじゃん！」

「良かったわね、ヨツバちゃん」

「よく頑張りましたねヨツバ」

ミツハとフタバ、ヒトハも嬉しそうにヨツバに声をかける。

かけられた言葉に微笑んで頷いたヨツバは、満足そうに自分の食事を開始した。

楽しそうに食事をする四姉妹。

その光景を見ながら食事をしている私に、カミラが懐かしそうに言う。

「思い出すわね……私も初めてお母様に美味しいと言って貰えた時は嬉しかったわ」

「今では私達の中で一番の腕前だが、当時は私以外が食べていたら

危険な味だったからな」

「続ければヨツバも上手くなるわよ」

「どうしても無理であればヨツバを料理から外そうかとも考えていたんだが、もう少し様子を見ようと思う」

私はやれば出来る、などと言うつもりは無い。

自身が男女間の恋や愛を理解出来ない様に、どうしても難しい事は存在するだろう。

それなりに努力をして上達しなければ、無理にやらせようとは思っていないかった。

それに、料理は出来なくてもそれほど問題では無いからな。

戦闘が苦手であった場合は、無理矢理にでもある程度は叩き込んでいただろう。

そうでなければ単独行動の時に本人が被害を受ける可能性がある。

これから先、いつ何が現れ敵対するか分からないからな、念の為だ。

「成長は感じた、私の考えは杞憂だったな」

「伸び悩む事があるかもしれないけれど、それは別に構わないんでしょ？」

「他に問題が起きない内はな。少なくとも今の所は、本人のやる気がある限り練習を止めはしない」

私は退室する際、通りすがりにヨツバの頭をひと撫でしていく。

その後、後ろから騒ぐ声が聞こえたが、気にせず部屋を後にした。こうして私は、騒がしい時間を過ごしている。

現在、私は魔法の授業を行っている。

「うむむう……」

ミツハが唸り声を上げた。

「ミツハ、何処が分からないんだ？」

「ここです……」

彼女は頻繁に質問をして来るが、その度に私は詳しく説明している。

多少時間はかかるが問題は無い。

「フタバお姉ちゃんはともかく、ヨツバはなんで分かるんだよお……」

弱っているように見えるが、ヨツバに絡むという事はまだ元気がある証拠だ。

「戦闘の役に立つんだ、覚えるに決まってるんだろ」

「戦闘馬鹿」

「ああ？」

この二人はいつも通りだな。

「ミツハ、苦手であろうと戦闘能力と魔法技術はある程度は必ず身につけて貰う。いつ何があるか分からないからな」

「頑張ります」

ミツハはそう言うのと再び私が書いた説明を読み始める。

ふむ……効くかは分からないが話してみるか。

「ミツハは魔道具に興味はあるか？」

「え……？はい、あります」

突然の話題にミツハは不思議な顔をしつつも答える。

「魔道具には魔法の技術も使われている。分からないままだとうにもならないぞ」

「主様！私！頑張ります！」

その後、ミツハは授業を積極的に受け続け、最低限必要な知識を身につけた。

やり切ったミツハの頭を撫でて褒めてやると、嬉しそうにはしゃいでいたな。

気になっている物に関係があると知れば多少は苦手意識が無くなり、やる気も出るかと思って言ったのだが……予想以上に効いたようだ。

ある日の夕方。

厨房の前を通った私は、厨房でフタバが料理を作っている事に気が付いた。

夕食の準備にはまだ早い。

そう思いながら私が厨房へ入ると、鼻歌を歌いながらフタバが料理を作っている姿が見えた。

「フタバ。今日はお前とヒトハの当番だが、まだ作るには早いぞ?」私を見て、喜色を増した微笑みを浮かべたフタバが話し出す。

「ご主人様!実はヒトハお姉様から一品だけ、全て私が作る事を許して貰えたのです!」

ヒトハが許可を出したか。一定以上の技術は身につけたと考えるもいいな。

「ご主人様、味見をして頂けますか?」

私は差し出されたスープの入った器を受け取り、口にした。

これは……バランスが崩れているな。

酸味と鼻に抜ける香りが強すぎる。

「フタバ、これは正しく調理したか?」

「始めて一人で作るので少しアレンジしました、いかがでしたか?」嬉しそうに聞いてくるフタバだが、アレンジをするとこも味が崩

れるか。

レシピ通りに作ってあげれば上手く行っただろうに。

「フタバも味見をしてみろ」

「はい……………っ!？」

口にしておかしい事に気が付いたのだろう、笑顔が目に見えて弱くなった。

「分かるか？酸味が強く、香りも強すぎる。レシピ通りに作ってあげればお前の腕ならかなり期待出来たと思う」

「……………申し訳ありませんご主人様……………このような物を……………」

すっかり落ち込んでしまった。

癖は強いが不味い訳では無い。

この子がアレンジの仕方を知らないだけだ。

「酸味も香りも僅かな量に押さえておけば、アレンジとしては成功だったかもしれない。もし、アレンジを覚えたいのならカミラとヒトハに教えを乞うと良い。それと、この料理は夜に出す様に」

「え……………でも……………」

私の言葉に、困った様な微笑みを向けて来るフタバ。

「不味い訳では無い、バランスが悪いだけだ。それに、娘が作ってくれた料理を私が捨てる事は無い。次も期待している」

「……………はい。私……………頑張りますから」

震える声で答えるフタバの頭をひと撫でしてから、厨房を後にした。

近い内に美味しいアレンジ料理が食べられるかもしれないな。

その火の夕食時、フタバが作った料理は賛否両論だった。

ミツハは駄目だったがヨツバは中々好みだったようだ、カミラとヒトハは私と似たような感想だった。

ヒトハに「初めて一人で作る時はアレンジをしない様に」と叱られていたが、アレンジを教えるって欲しいというフタバの頼みをカミラとヒトハは了承していた。

三人の戦闘訓練と魔法の勉強の終わりが見えて来たある日。
世界樹の枝の上で私が本を読んでいると、根元にフタバ、ミツハ、ヨツバが揃ってやって来た。

『お？三人共、やつほー』

世界樹は私にも聞こえるように念話をしているようだ。

「やつほー!」

「世界樹ちゃんは今日も元気そうね」

「よう、時間が出来たから会いに来たよ」

元気に言うミツハ、フタバとヨツバもそれぞれ話しかけながら根元に腰を下ろした。

『みんな、訓練は上手く行ってる?』

「そうだな、主様からはそろそろ終わりだと聞いているよ」

世界樹の言葉にヨツバが答える。

ヨツバの言う通り、後少しで三人の訓練は終わる。

訓練が終われば、彼女達は当番はある物の、それ以外の時間はそれぞれ好きなように過ごす事になる。

三人の訓練が終わったら、私は教育係となる使用人を作る作業に入るつもりだ。

最初は五人作るつもりでいる。その五人に教育を任せる事が出来るようになれば、人数は増やしやすくなるだろう。

『みんなはさー。クレリアさん……主様に対して嫌な所とか無いのー?』

突然、世界樹が私の事を話題にする。

折角の機会だ、現在の彼女達が私をどう思っているのか聞かせて貰おうか。

「敬愛するご主人様に嫌な所なんてある訳無いわ!それに……わ、私達のお母様でもあるし……大好きよ?」

フタバがいきなり声を上げる。

後半は小声だったが、しっかりと私の耳に届いている。

彼女は私の事を母親だと思い、慕っているようだ。

「私も大好きだよ！厳しい時もあるけど頑張ったら褒めてくれるし！」
嬉しそうに言うミツハ、「頑張ったら褒める」これは人類の親子から学んだ事だ。

これだけで相手の精神に良い影響を与える事が出来る。
しっかりと伝える事が重要らしい。

私のように他者の思っている事が分かるような相手で無い限り、言葉や行動でしっかりと伝えなければ相手に伝わらないからな。

普段は深く読む事は無いが、いざという時に便利なのは間違いない。

「私も……その、す……好きだぞ。カッコいいし、何よりあの圧倒的な強さ！私の母は最強だ！」

最初は恥ずかしそうに言っていたが最終的には叫ぶヨツバ。
彼女にとっては強さが一番なのかも知れない。

「私達でしょ！ヨツバだけのお母さんじゃないんだからね！」
「そうよ、皆のお母様なんだからね？」

ヨツバの言葉を二人が訂正する。

今の時点で彼女達が私の敵になる事は無さそうだ。
敵になつて欲しいという訳では無いが。

『だつてさー。皆に好かれて良かつたね、クレリアさん？』
私がそんな事を考えていると、世界樹が私に声をかけて来た。

「え……？」

「はっ？」

「まさか……!?!」

気の抜けた声を上げるフタバとミツハ、ヨツバは気が付いたのか上を見上げた。

「あ、主様……」

ヨツバが小声で言う、見つかったか。

「何故わざわざ教えただ？」

私はそう言いながら三人の前に降りた。

『ほら、家族が仲良くするために思っている事を伝えないと？』

そんな事を言う世界樹、三人は固まったまま反応が無い。

「確かにそうだな。さあ、遠慮なくお前達の好きな母に甘えるとい
い」

私はそう言いながら腕を広げたが、三人はまだ固まっている。

反応がおかしいな。

今まで関わって来た友人達を見る限り、子供は父より母の方を求め
る傾向が強かった。

その為、無性ではあるが母という事にして接していたのだが。

彼女達は父の方が良かったのだろうか？

その後、三人は大慌てで弁解をして、最終的に私に甘えてくれた。

世界樹は私が居る事を知っていた上であるの質問をしたお詫びとし
て、三人に果実と樹液を渡した様だ。

やはり母で問題無い様だな。

頃。フタバ、ミツハ、ヨツバの訓練が終了して時が経ち、生活に慣れた

私が作り上げた五人の教育係となる使用人の教育が終了した。

ヒトハが教育を担当した為、使用人としての能力はかなり高い。

戦闘能力や魔法技術も身に着け、教育係として全ての事を一定以上教えられる状態にまで育て上げた。

名前は全員で話し合った。

そして四姉妹が葉を表している事もあり、花の名前が付けられる事に決まる。

リン、ソニア、ティモル、ミスミ、マギ。

最初の五人にはこれらの名前がつけられた。

それに合わせて合計二十五人の新たな使用人を製作し、一人につき五人の教育を任せた。

教育係である彼女達の教育が上手く行かなければ別な方法を探そうと考えていたが、彼女達は見事に二十五人の使用人を育て上げられた。

この教育方法の成功で私達が教育を行う必要は無くなり、人手も充実した。

私はフタバ、ミツハ、ヨツバに二十名ずつ割り当てる事を決めると、更に三十名製作し教育を任せた。

これで、使用人である彼女達はヒトハ達姉妹を除いて六十名。

全員に花や、それに近い名が付けられている。

彼女達も私の娘の様な存在だ。

「侍女隊？」

ある日、ヒトハから使用人という名称を変えたいという提案があつ

た。

「はい。私と妹達を含めた全体の呼称として名乗る事を許していただきたいのです」

使用人隊、侍女隊。

確かに侍女隊の方が良いな。

「分かった、名前の変更を認めよう。今からお前達は侍女隊と名乗れ」

「ありがとうございます、主様」

「侍女隊の方が響きが良いからな」

こうして彼女達は私の侍女隊となった。

時が過ぎ、教育中であつた三十名が教育を終えると、侍女隊は総勢六十四名となった。

屋敷内は侍女達が日々の当番をこなしながら自由に過ごす様になり、随分と賑やかだ。

今の所はこれ以上侍女を増やす目的が無い為、新しい侍女の教育は行っていない。

私は彼女達が教育を受けている間に宇宙戦艦の操作方法を調べていたのだが、簡単な操作説明書の様な物が見つかった。

この内容を身に付ければ最低限の航行は可能だろう。

しかし、そうなると広大な宇宙へ出る事になる。

現在、四姉妹以外の侍女隊の者は転移が出来ないが、間違いなく出来た方が安心だ。

教えておいた方が良いだろうな。

転移を覚えさせる事を決めた私は、教育係であつた最初の五人を一時的に当番から外して転移魔法を教え始める。

彼女達に転移はまだ難易度が高く、時間はかかったが丁寧に教え込む事で転移を習得する事が出来た。

私は奮闘してくれた彼女達に感謝を伝え、後を任せた。

彼女達は全ての侍女に転移を習得させる為に、今も授業と訓練を行っている。

全員が転移を習得した後はフタバ、ミツハ、ヨツバがそれぞれ二十名を管理し、侍女隊全体はヒトハがまとめる。

もしも何かあればカミラに話が行き、カミラが必要だと判断すれば私に報告が来るだろう。

ある日、私は本格的にニアレに行く準備を始める前に、最近放置していたイシリスの様子を見ておこうと地上に降りた。

植物が生えていたイシリスだが、いつの間にか以前の様な荒れ果てた世界になっていた。

あの植物達は適応出来なかったのだろう。

そう考えながら海へ出ると、何かがいるのを感じた。

私はすぐに海中を覗く。

ただ見ただけでは特に何も見えないが、更によく見ると小さい物が漂っているのが見える。

とても小さく単純な構造のようだが、これは生物だ。

私は生物が生まれるにはまだまだ時間が必要だと考え、長い目で見るつもりでいた。

先にニアレに行く事になると考えていたのだが、思っていたよりも娘達に時間をかけていたのかも知れない。

いや、イシリスが生命の生まれやすい惑星である可能性もあるか。とにかく、生命が生まれたのならこちらが優先だ。

この生命が何処まで進化するか見てみたい。

やがて知性を持ち、私達と会話が出来るような存在になる事を期待しよう。

私は気分良く転移で月へと帰った。

月に帰った私は、皆にイシリスに生命が生まれている事を伝えた。

「えっ……生命が生まれていたの!？」

私の話を聞いてカミラが驚いている。

その周りでは数人の侍女が飲み物を用意していた。

「ニアレに行くのは中止し、このままイシリスを観察する事にした」

「……いいの?ニアレには以前やって来た知的生命体がいるはずよ?」

カミラが尋ねて来る。

「生命の観察が優先だ。ニアレも確かに気になるが、それ以上に新たに生まれた生命が知的生命体に進化する所を見てみたい」

途中で終わってしまう可能性も高いが、それでもこの機会を見逃す気は無い。

知的生命体と判断する基準が曖昧だが、その辺りは私の感覚で判断してしまおう。

「じゃあ、ここで過ごしながら生まれた生命の観察をするのね?私も結構気になるし良いと思うけれど」

「そのつもりでいる」

「その間、他の事はしないのですか?」

話を聞いていたヒトハが尋ねて来た。

「勿論やる時はやる。だが下手に別な事をして気を取られていると、気が付いた時にはイシリスに知的生命体が溢れていた……という事態にもなりかねない」

「……なるほど」

「主様ならばそういった事が起こりそうですね」

私は集中すると時間の経過をあまり気にしなくなるからな、カミラとヒトハは私について思い当たる事があるのか納得している。

「お母様が以前に目が覚めた時は、既にある程度文明を持った人類が居たのよね?そこに至る過程を見たいの?」

「そういう事だ」

私はカミラの言葉に答えた。

「先に生命が生まれるとは思っていませんでした。私はニアレに行く準備が先に終わると考えていましたから」

ヒトハも私と同じ様な事を考えていたようだ。

「私もそう考えていたが、実際にイシリスに生命が生まれているかな」

「あの……ご主人様。お話が良く分からないのですが……」

話をしている私達にフタバが申し訳なさそうに口を挟む。

彼女の方へ目を向けると、彼女だけではなくミツハとヨツバも不思議そうにしていた。

「そうか、お前達には詳しくイシリスの話をしていなかったな」

私は簡単にイシリスに以前いた知的生命体、人類の事を三人に説明し始めた。

「そんな者達がいたのですね……」

「滅んじやったんでしょ？今も居たら面白そうだったのになー」

「かなり弱かったみたいだし、相手にはならなかったと思うけどね」

三人共反応は様々だったが、いまいちピンと来ていないようだ。

私は以前撮影した写影があつた事を思い出す。

「少数だが私の友人となった者達もいるし、娘のような者もいた。この子だ」

私は撮つた複数の写影を取り出し、その中のルーテシアを指さした。

「うわ!? ホントに私達と似てる!」

「でも、耳が長いな」

「先程ご主人様から教えて頂いた特徴からすると……森人と言う種族なんじゃないかしら?」

ルーテシアの姿を見て反応する三人。

「フタバの言う通り彼女は森人だ。名前はルーテシア。友人の娘で私にとっても娘のような存在だった。ある時期から一緒に住み始め、

四百五十歳程だったか……？その辺りの年齢で寿命を迎えた」

「主様ー。四百五十年つて短すぎないかな？私達もとつくにそんな年齢過ぎてるよね？」

「他の種族は百年程なのですよね？……そんな僅かな時間で一体何をして生きていたのでしょうか？」

ミツハとフタバがそんな事を言う。

「私は種族によって時間の感じ方が異なるのではないかと考えている。彼らにとつては百年でも長い時間だ、そしてその時間で面白い事をする事もある」

相手の寿命が短いと、出会った後、次に会いに行つた時にはすでに相手が死んでいる事が多い。

恐らく、意識しなければあつという間に時間が過ぎてしまうだろう。

「そうなのですね……」

「ふーん……」

二人とも良く分かっていないかもしれないな。

「主様……こいつは何です？」

黙つて写影を見ていたヨツバが写影の一つを指差した、そこには私達と共に写るクログウエルの姿がある。

「彼女はクログウエルだ。黒竜と言う種族だが、これは私が名付けた物だ」

「……彼女？」

ミツハが私を見て言う。

「分かりにくいと思うが女性だ」

「女……見た目じゃ分から無いな。でも強そうだ、戦つて見たかったな……」

残念そうに写影を見るヨツバ。
寿命が尽きていなければ今すぐにでも会えるが、言うのはやめておく。

「懐かしいわね、今も生きているのかしら？」

「カミラお嬢様、どういふ事なのでしょう？」

カミラの言葉にフタバが疑問を口にする。

「彼女は私達と共にイシリスにいたの。でも、途中でお母様に頼んで他の世界へと移動したのよ」

「他の世界……ですか」

フタバは呟く。

彼女達には別の世界の話をしていなかったな、興味があるのだろうか？

「そうよ。だから彼女の寿命が尽きているか殺されていない限り、会おうと思えば会えるのよ。お母様の力が必要だけどね」

カミラがそう言うと、ヨツバが嬉しそうな顔で私を見た。

「生命の観察が優先だ。今の所行く気は無いし、お前を送る気も無い」

今の彼女では勝てないだろうしな。

「うう……分かりました」

断ると明らかに落ち込むヨツバ、そんなにクログウエルと戦いたいのか。

「そう落ち込むな、後で私が模擬戦をしてやる」

「やったぜ！」

私の言葉でいきなり元気になる、やはり戦いたいだけか。

「ヨツバさあ……あれだけボッコボコにやられてるのによくやるよねえ」

そんなヨツバを見てミツハが呆れたように言う。

この子はそこまで戦いが好きという訳では無いからな。

「馬鹿野郎！だからいいんじゃないか！手の届かない主様やカミラ様と戦う事で私は強くなるんだ！」

実際、頻繁に模擬戦をしているヨツバはヒトハを除けば侍女隊の中で一番強い。

このままだとこの差は広がる一方だが、私はそれでもかまわないと考えている。

最低限の訓練が終われば、更に強くなるのも他の事をするのも自由だ。

「ヨツバに負けっぱなしなのもやだしなあ……私ももうちょっと訓練しようかなー」

「私も料理ばかりじゃなくて訓練をしようかしら……」

ヨツバの熱にあてられたのかミツハとフタバも考え直しそうだが、好きにするといい。

私は生まれた新しい生命がどのように進化するのかを観察しながら過ごし始めた。

海に漂っていた小さく単純な生命は、時の流れの中でゆっくりと変化していった。

しかしその後、突然イシリス全体が凍結する。

私はもう終わってしまうのかと思ったが、生命は凍結を乗り越えた。

それから再び生命は増え続けたが、今度は突然生命のほとんどが絶滅した。

どうやらイシリス内の環境が変わったようだ。

増えていた生命の多くが、変化し始めた環境に耐えられず死んでしまった。

それでも、僅かに残った生命は細々と生き残りながら更なる進化を遂げる。

新たな環境に適応し、再び数を増やし始めたのだ。

そして今までの生物と少し違う生物が生まれ始めた頃に、今度は隕石が衝突した。

衝突する事は気がついていた。

しかし惑星が破壊される程の物では無い事と、こういった現象が新しい進化のきっかけになるのだと考えた私は傍観する。

隕石が原因で生物が滅びる可能性もあったが、生物は滅びる事無く生き残った。

こうして生物が進化している間に地表にも動きがある。

大地はイシリスの表面を動き回り、離れたり近づいたりといった事を繰り返す。

やがてより複雑な生物が生まれ始めたが、舞台は未だに海中で、大きさも極小さい物だった。

その後もイシリスは数回の凍結を繰り返し返した。

その度に生物達は危機を迎え、多様性を得て、活発に生存競争を

行っている。

「全然人類のようにならないわね」

「以前は一万年程で人類が現れていたのだが……。既に私の感覚でもかなり時間が経っているはずだ。恐らく一万年など軽く過ぎているだろう」

私とカミラは談話室で話し合う。

四姉妹や侍女隊の者もいるが、それぞれ雑談したり遊んだりしている。

「間違いなく進化はしているが……。まだまだ小さく、生息圏も海中に限定されている」

「人類の時と何か違うのかしらね？」

「色々と環境が違うのは間違いない。大きな違いとして思いつくのは魔力位しかないが、進化に大きな影響を与えていたのだろうか」

「可能性はあると思うわよ？実際に魔力で色々な事が出来ているじゃない。それを考えれば、進化を促進するような何かを引き起こしているも私は驚かないけれど……」

カミラはそう言つて目の前にある飲み物を一口飲む。

「人類は魔力を体内で循環させていた。魔力は肉体を強化するだけではなく、進化を促す効果もあったという事か？」

「魔力を循環させる事に成功した生物が、一万年程で人類に進化した……。とか、どうかしら？」

「その可能性も無いとは言えないか。もしそれが正しければ、今頃人類は更に進化をしていたかも知れないな」

しかし、人類は既に滅んでいる。

もう終わった事だ、いまさら人類を復活させる気も無い。

「これは私達の感覚でも、まだまだ長い時間がかかりそうだ」

「そうみたいね……。でも、私はこれからどんな生物になるか結構楽しみにしてるわよ？」

「私も楽しみにしている。最終的には交流が出来る知的生命体になつて欲しいな」

更に時が過ぎると、少しずつ大きな生物が現れ始めた。

棘の生えた触手のような物が頭部から二本生えた1m程の大きさの生物や、目が五個ついている触手が一本だけ生えた10cm程の生物だ。

私は新たな生命が生まれてから、時々マジックボックスに色々収納している。

勿論、この生物も捕まえておいた。

どちらも身が少なく硬かったが、味は悪くはなかった。

少しずつ変化して行く生物達だったが、ある時期を境に突然様々な生物が現れ始めた。

あまりにも急な変化だ。

「どういう事かしら？今まで様子と比べると明らかにおかしいわよね？」

私達はいつもの様に談話室で話している。

周囲には侍女達が控えており四姉妹はいない、別な事をしているようだ。

「少し調べて見るつもりだ、私も気になっているからな」

「止めはしないけど、気を付けてね？」

「分かった」

私はそう答えると、カメラ達に見送られながらイシリスへと轉移した。

イシリスへと転移した私は、早速海を見に行く事にした。生物は今も海にしかない。

そこで急に増えたのだから、まずは海に原因があると予想してもおかしくは無いだろう。

私は海に潜る。

新しく生まれた生物達が豊富に存在し、随分賑やかになっているな。

そんな光景を目にしながら、私は周囲を感知し始める。

私の感知範囲なら月からでも確認は出来る。

それでもこうして実際に海に潜っているのは、直接見たかったからだ。

浅い海中には原因のような物は見当たらない……もつと深い場所か？

私は深く潜っていく。

やがて生物が減り始め、暗くなり始めた。

静かな海中をしばらく潜り続けていると、海底が見えて来た。

これ以上は潜れないか。

海底にも生物は存在していた、いるとは思っていたが予想以上だ。

熱水が噴き出している場所も点在し、その周囲はかなり温かい。

しかし、この程度で生物が突然多種多様になるとは考えにくい。

私は長時間海底をうろついていたが、変わり映えしない景色があるだけで原因のような物は見つからない。

それらしい物は何も無かった為、私は知覚を広げ始めた。

すると海底に似合わない人工的な物を感知した、それは海底にいくつもある。

私が作った家では無い、何だろうか？

すぐに感知した場所に向かうが、向かっている途中から異常に気が付いた。

海水に魔力が混じっている。

今のイシリスにこの濃度の魔力が残っているとは。

私は内心で少し驚きながら魔力が混じった海水の中を進み、目的地に到着した。

そこにあつたのは白く巨大な丸い物体だった。

何だこれは？

私は物体の周囲を見て回る。

破損した部分から中を覗いてみるが、中は空洞だ。

表面を触って見る。

ザラザラしていて、少し力を入れると碎けてしまった。

かなり脆いな。

ん？……これは。

何か書いてある。

かなり見にくいだが、表面に文字が書かれている事に気が付いた。

そこには「圧縮魔力貯蔵用34―773」と書かれていた。

圧縮魔力貯蔵……。

これは魔道兵器の一部か？

こんな所に転がっているとは。

私はふと、思い出す。

以前、私達は多くの魔道飛行戦艦を落としました。

その中には海へと沈んで行った物も多くある。

これはその戦艦に積まれていた物では無いだろうか。

海に沈んだ戦艦に積まれていた貯蔵用の魔道具が、様々な要因でこ

こに集まったのか？

魔力貯蔵用の魔道具は魔法金属で出来ていて、かなり頑丈に作られていた筈だ。

過酷な環境でも破壊されずに残っている可能性は十分ある。

そこまで考えた私は目の前の魔道具を見て、気が付く。

……さつき簡単に碎けたな。

それに……こんな色だったか？

触った時、私は必要以上に力など入れていない。

本来なら、どの様な魔法金属を使っている程度で碎ける訳が無い。

私は改めて目の前の白い金属のような物を調べ始めた。

調べた結果、この白い金属は魔力が抜けた魔法金属だった。

その事から私は一つの仮説を立てる。

魔法金属の強度に守られていた圧縮魔力だったが、世界の魔力が減った事で時間と共に魔法金属の魔力が失われ、脆い金属に変化した。

やがて脆くなった魔法金属は破損し、深海に大量の圧縮魔力が流れ出した。

そして、詳しい理由は不明だが……その魔力は海底に留まり続けた。

こうして魔力を含んだ海水が生まれ、深海にすむ生物達の一部が長い間この魔力の混じった海水内で生活する事になった。

その結果、海水に含まれた魔力が深海の生物達に影響を及ぼし、今回の出来事につながった、という物だ。

これは魔力が生物の進化に対して何らかの影響を及ぼす事が前提の仮説だが、私ではこれ位しか考えつかない。

今ではそれほどの濃度では無いが、以前はもっと高い濃度であった可能性も高い。

仮説ではあるが、過去の文明が残した物が新しく生まれた生物に影響を与えた可能性がある訳だ。

中々面白い物を見たな。

私は満足して月へと帰った。

「お帰りなさいませ、主様」

屋敷へと帰った私を侍女達が迎えてくれた。

「お風呂のご用意が来ております、お入りになりますか？」

風呂の用意をしてくれていたようだ。

「ありがとう、入らせて貰う」

「では、こちらへどうぞ」

侍女は微笑んで私を風呂場へと案内する。

よく働いてくれる子達だが、彼女達の自由な時間もしつかりと作れるよう当番を組むようにヒトハには話してある。

私は自分で洗おうと思っていたのだが、侍女達に頼まれ洗って貰う事にした。

風呂で侍女達に洗われた後、私はいつもの談話室へと向かう。

談話室にはカミラとフタバ、数人の侍女がいた。

「こちらへどうぞ、主様」

「お帰りなさいませ」主人様

「お帰りなさい」

侍女達とフタバ、カミラに迎えられいつもの様にソファへと座る。そこで私は海底であった事と仮説を話し、フタバ達にもどういった物なのかを説明した。

「以前、海で見つけた魔道飛行戦艦の一部よね？海底にも行っていたのね」

「仮説が正しければ、これからも今回のような事が起こるのでしようか？」

カミラは以前の事を思い返す様に話し、フタバは私に尋ねて来る。「海底の魔力は時間の経過で薄くなって行くはずだ。もし仮説が正しかったとしても、今回の様な事がまた起こる可能性は低いと思う」

私がフタバの質問に答えた後、カミラが口を開いた。

「聞いた限り他の原因らしい原因も無かったのよね？実際に様々な生物が爆発的に増えている訳だし……関係ありそうよね」

「色々と話したが私としてはどちらでもいい、今は特に興味は無い」私も魔力についてまだ知らない事があるかも知れないが、今は生命が優先だ。

「そうなの？お母様なら調べると思っていたわ」

「私もご主人様がお好きそうな事だと思っていました、違うのでしょうか……？」

意外そうに言う二人だが、そこまで意外そうにする事では無いだろう。

「私は興味があるか、気になるかが行動の基準だ。お前達も心当たりはあるだろう？」

今は魔力の事よりもイシリスの生命に興味がある。

「……そうだったわ」

「ご主人様はそういう方でしたね」

カミラは苦笑い、フタバは微笑みを浮かべて答える。

その後は夕食まで二人や侍女達と雑談をしながら過ごす。

私は娘達と過ごす時間も気に入っている。

時は変わる事無く流れ続け、イシリスと生命達にもさまざまな変化が起きている。

急激に数を増やした生物達は更にその種類と数を増やし、イシリスは気温の急激な上昇、下降を繰り返した。

一方宇宙でもいくつか気が付く事がある。

遠くに見えていた星が輝きを増した後に消えてしまったり、以前と位置が違っていている事などがあった。

私はそんな変化を観察しながら、イシリス自体に致命的な被害を与えそうな巨大な隕石などを防いでいる。

変化を繰り返すイシリスで、生物達は何度も数を増やしては絶滅を繰り返す。

時折、私が問題無いと判断した隕石が落下してイシリスの環境が大きく変化する事もあった。

幾度も危機を迎える生物達。

だが、それでもイシリスから生物が絶滅する事は無く……ある時、とうとう生物が海を離れ上陸する。

それからは次々に陸上に生物が現れ始め、生物達は陸上で数を増やして行く。

イシリスは、再び陸にも海にも生物が溢れる惑星となった。

以前の様な姿を取り戻したイシリスの姿を見た時、娘達と共にその回復力に感心し、嬉しく思った。

私は様々な生物を捕まえる為に頻繁にイシリスへと降りていた。

大きな昆虫達が私を狙う事もあったが、全て死ぬか私のマジックボックスに入る事になっている。

生命に溢れたイシリスで絶滅と繁栄が繰り返され、隕石が降り注ぐ。

そして現在。

イシリスは巨大な生物が数多く生きる惑星となっていた。

「中々大きくなったわね。お母様が望む知的生命体にはまだ遠そうだけれど、まだまだこれからよね」

カミラがイシリスの現状を話す、意外と楽しんでいる様だな。

「私はこれからイシリスに行ってくる。降りたい者がいれば自由に降りて構わないが、気を付ける様に」

「分かったわ。行ってらっしゃい」

カミラの返事を聞き、私はイシリスに転移した。

イシリスの上空に転移した私は、眼下を見下ろす。

最初に生物が上陸した当時は、まだ所々に小さい植物が生えていただけだった。

しかし、現在は巨大な植物が生い茂り、その中を巨大な生物達が生きる世界が広がっている。

私は目に付いた生物の元に降り立つ。

この生物は、私が近づいても特に気にしていないようだ。

大人しいな、肉食では無いからだろうか？

草を食べている生物を観察していると足元を小さな生物が横切る、その生き物は草に紛れて離れて行った。

小さな生物達も逞しく生きているようだ。

そう考えながら草を食べている生物を触ってみる……ガサガサした硬い肌だ。

しばらく生物を観察していたが、やがて私は生物から離れ空へ移動した。

上空から周囲を調べると、大きな角を持つ大型の生物や、中型の生物が群れを成している光景が見える。

興味を引いた生物を見つけては観察する、と言う事を繰り返してい

た時、突然大きな咆哮が聞こえた。

「おらー！かかって来いよー！」

私が咆哮が聞こえた場所に向かうと、生い茂る森の中でヨツバが巨大な肉食と思われる生物と向き合って叫んでいた。

近くにはヒトハ、フタバ、ミツハも居る。

「全く……戦ってみたいからとわざわざ来るなんて……」

ヒトハが溜息を吐いて呟くのが聞こえた。

「ヨツバちゃんならこうなるわよね」

「ヨツバーー！やれー！やっけろー！」

フタバは困ったように笑いながら言い、ミツハは楽しそうにヨツバの応援をしている。

四姉妹達も楽しんでるようだな。

たまには姉妹だけの時間も必要だろうと考え、私は彼女達に気が付かない様にその場を後にした。

それから私は、生い茂る森の中を歩きながら植物や生物を集めていた。

使う機会があるかは分からないが、いつ消えてしまうか分からない生物や植物達だ。

ある程度は保存しておきたい。

そんな事をしながら歩き回っていると、背後から唸り声が聞こえる。

近づいているのは気が付いていたが、私に絡んで来るとは。

振り返ると、先程ヨツバと対峙していた生物の同種と思われる生物が私を見ている。

当然別の個体だと思うがこちらの方が多少大きいな。

そう思いながら、噛みついてきた生物の顎を障壁で防ぐ。もつと食べ応えのある相手を選んだ方が良いのではないかと思うが……目に付いた生物を何でも襲うのかもしれないな。

「残念だが、私はお前が食べられるような体ではないんだ」意味が無いと思いつつもそう告げ、久しぶりに髪の毛の一本を使い首を薙ぐ。

するとすぐに頭が落ちる。

その後、切断面から血を噴きながら胴体が重い音を立てて倒れた。こいつは美味しいのだろうか。

そう思った私は、その場で生物を解体して殆どを収納し、残りを食べしてみた。

意外と美味しいな。

やや硬いが、良い歯ごたえと言えるかもしれない。最近柔らかい肉の生物はあまり見ない気がする。

そんな思いを抱きながら全ての肉を完食した私は、またのんびりと探索して回る。

やがて侍女から食事の時間が迫っていると連絡を受け、月へと帰った。

「それで、戦ったんだけど強くなかったんだ。デカくて見た目も強そうだったんだけど……」

食事をしながらヨツバが私に話をする。

周囲ではカミラや四姉妹、他の侍女達も食事をしている。

「主様やカミラ様を相手に訓練している私達にあの程度の相手が敵う訳が無いでしょう……当然です」

呆れたように言ったのはヒトハだ。

しかしそう言いながらもあの場所に居たという事は、妹達と共に外出する事自体は嫌では無く、少なからず心配もしていたのだろう。

「ヨツバちゃんが殺した生物は問題無い事を確認したので、今日の

お食事に使われていますよ」

フタバが私に説明してくれる。

珍しい味と食感だが、食べた事があると感じたのはそういう事か。

「見てた私は面白かったよ？ 迫力があつたと思う！」

ミツハは満足したらしい。

「大きくて鋭い牙と多少の力がある程度じゃ、私達の中の誰にも勝てないわ。ヨツバは強敵を見つけたいようだけど、私達並の相手がそうにいるとは思わない方がいいわよ？」

「そうかあ……」

カミラが軽く苦笑いして話すと、ヨツバは残念そうに肩を落とした。

「ヨツバ、カミラ様程の相手はこの先見つかるか分かりませんよ？ 主様と同等となると……居るかどうかも分かりません」

ヒトハがヨツバに話す。

私は今も私に近い存在がどこかにいると考えている。いつか会える時が来るだろうか。

「ヒトハ姉さんに言われなくても、カミラ様と主様が実力者なのは知ってるけどよお……。ヒトハ姉さんも色々な相手と戦ってみたいだろ？」

「私は戦う事を目的に戦う気はありませんよ？」

「私もヨツバちゃんみたいには考えていないわよ……？」

「こいつは戦闘馬鹿だから仕方ないよ。考える事も出来る癖に、戦う事を優先しちゃうんだもんなあ……」

「必要な時は考えてるよ！」

他の姉妹達の言葉に叫ぶヨツバ。

本当にただ戦いだけを求めて問題を起こすのなら私も考えるが、必要な時に考えているのならそれでいい。

大型の生物達はそれなりの時間イシリスに存在している事になっ

た。

数が減る事もあったが完全に絶滅する事無く残り続ける。

その間に大陸も再び動き出した。

毛が生えた空を飛ぶ生物など、様々な生物が現れては消えて行く。

生物達は繁栄と衰退を幾度も繰り返していたが、ある隕石が落ちた時に状況が変わる。

その隕石が落ちた後、吹き飛ばされた地表はイシリス全体を覆い気温を大きく下げた。

その状況自体は今までもあった事だ。

ただ、その期間が問題だった。

落ちた場所が問題だったのか他の原因があったのか、今までよりも遙かに長く続いたその状態は、生物を弱らせ植物を枯らす事になる。

大型の草食生物達は食料を失い数を減らし、それを捕食していた大型の肉食生物も同様に減り始めた。

そして、僅かな期間で大型の生物達は全て死に絶える事になる。

小型の生物はまだ多く残っているため問題は無いと考えていた私だったが、その後火山の噴火が起こる。

以前起きたイシリス全体を覆う程の物では無かったが、あの時とは違い今回は生物達がいる。

火山活動によって溶岩が、新たな陸地を作りながら森と残っていた小型の生物達を焼き払う。

結局、全ての事がおさまり環境がある程度安定した時、生物は極僅かしか残っていなかった。

だが、今回も生物は生き残った。

途切れそうでも途切れない生物達の営み。

極僅かに残った生物達は生き続け数を増やし、新たな種が生まれ、再び世界へと広がっていく。

あれから、生物達は比較的小型の生物が多くなった。

稀に巨大な生物を見かける事はあったが、いつの間にか居なくなっている。

この頃から、大きな絶滅や生物に被害を出す程の隕石の衝突が減り始め、比較的安定して生物達は時を過ごしていく。

私は、時々イシリスに向かい自分の目でイシリスを確認している。そんなある日の事。

久し振りにイシリスを探索していた私は、毛が生えた小型の生物が手……前足か？

それを使い、小さな石を転がしている姿を目にした。

ただ生物が悪戯に石を転がしているだけ。

他の者が見ればそう感じたかもしれない。

だが、私にはその姿がその石を取ろうとして失敗しているように見えた。

私はその生物に近づいてみる。

その生物は私に気が付くと樹の上に逃げ、そこから私をじっと見ていた。

「よく見ている、こうするんだ」

私はそう話しかけながら、その生物に見えるようにゆっくりと足元の石を掴み、その生物へと見せた。

その生物は特に反応を示さない。

恐らく、私の行動を理解出来るような知性は無いだろう。

ただ、その生物は間違いなく私の手を見ていた。

やがて、私の手を見ていたその生物は森の奥へと姿を消し、私も再び周囲の探索を始めた。

珍しい事をする生物だったが、その様な生物は今までも多くいた。あの生物も似たような物だろう。

やがて隕石は極端に減り、イシリスも特別大きな変化をする事が無くなった。

この頃になるとほぼ無くなっていった世界の魔力が極僅かに回復していた。

私は魔力が増える原因に心当たりが無かったが、すぐにある事に思い至る。

イシリスには魔素は十分にある。

今まで様々な生物や植物が生まれて来たが、その中に魔素に関わる生物や植物がいたのかも知れない。

私は長い間イシリスに降りて様子を見ていたが、あまりにも変化が無くなったため、しばらく時間を空ける事にした。

そして、ある程度の時が過ぎたある日。

久しぶりにイシリスへやって来た私は、以前の人類にどことなく似ている生物の住処を見つけた。

人間と言うには無理がある外見だが、特徴は似ている。

彼らは私を見つけると騒ぎ出す。

その騒ぎの中、私は彼らの元へと向かい声をかけた。

「私の言葉が分かるか？」

私が話しかけると、彼らは分からない言葉で叫ぶ。

念の為声をかけたが、彼らは新しい生物だ。

言葉が通じる可能性が低い事も分かっていた。

彼らの言葉を覚えられるだろうか？

そう思いながら襲い掛かって来た彼らを蹴散らすと、地に頭を擦り付け何かを言い始めた。

以前もこんな事があったような気がする。

私はそう思いながら彼らを見ていた。

出会ってすぐに彼らを無力化した私は、彼らと関わる事にした。言葉を話し意思の疎通をしている彼らは、知的生命体と呼べるのではないかと考えたからだ。

私に身振り手振りで意思を伝えようとする彼ら、私は言語が習得出来るか確認するために、しばらく彼らと生活を共にした。どうやら、彼らは私を特別な存在だと考えている様だ。

何が原因なのかは分からない。

私は特別な事をした覚えは無い、彼らから見たとしてもその様な事はしていない筈だ。

言葉を覚えた私が初めて話した時は少し騒ぎになったが、彼らは話が出来た事をとて喜んでくれた。

会話が出来るようになってから少し時が経つと、彼らは自らを人間と言う様になった。

彼らの事を私が暫定的に人間と呼んでいた影響だと思う。

私は言葉を覚えてから彼らと共に住む事をやめたが、彼らのもとには頻繁に訪れていた。

そんなある時、私は娘達も彼らと交流させておこうと考える。

私は強制では無いが、興味がある者は彼らと交流を持つて欲しいと皆に話した。

するとカミラとヒトハ、フタバ、ミツハ、ヨツバの四姉妹、侍女達の多くも興味を持ち、彼らの元へと時々訪れるようになる。

彼らは突然訪れた彼女達に対して警戒したが、私が彼女達の事を仲間だと説明すると安心してくれた。

私や娘達を特別扱いする態度は全く変わっていない。

娘達の言語の問題に関しては魔法を使った。

私が魔法を使わず、わざわざ言語を覚えたのはそうしたかっただけだ。

彼らと交流する事が彼女達にとって良い刺激になればいい、そんな事を考えながら私は彼らと交流する娘達を見ていた。

ある日、彼らは私達の話している言語を知りたがった。

私はひたすら頭を地面に付けて頼む彼らに、私達が普段使用している言語を教える事にした。

話せるようになる事は悪い事では無いし、簡単な事を多少教えれば満足するだろう。

私は彼らを侮っていたようだ。

簡単な事を教えれば満足すると思っていたのだが、気が付けば殆どの者がかなりの言語を習得していた。

そしていつの間にか、私達の言語を一定以上話せるようになった者の中から選ばれた者達を選び、新たな地へと送り出すという風習が出来ていた。

どうしてそんな事をするのか彼らに聞いてみると、増えた数を減らすためだそうだ。

それは追い出されるという事なのではないだろうか？

彼らの様子を見ると、選ばれた者達は全員が選ばれた事を喜び、選ばれなかった者達は選ばれなかった事を泣きながら悔しがっていた。

私には全く理解出来なかったが、選ばれる事は彼らにとって嬉しい事の様だ。

詳しく話を聞いても「これは嬉しい事」といった意味合いの事しか言わない。

私はそれ以上聞く事をやめ、旅立つ彼らを見送る事にした。

ある時期から彼らの私達への扱いが、特に私への扱いが更に変わった。

当初から私は彼らに特別な存在だと思われていたが、彼らはどれだけ世代を重ねても変わる事無く訪れる私達を見ている。

恐らくそれが原因で、私達を自分達とは違う遙か格上の存在なのだと認識した様だ。

更に、私に侍女隊の者達が跪く光景を見た彼らは、私が最上位の存在だと考えたらしい。

彼らと娘達の交流が始まってから時が経ち、娘達は一人、また一人と交流をしなくなり始め、月で過ごす生活に戻った。

元々強制ではない。これからも交流したいのならすばいいし、したくないのならしなければいい。

そして、彼らとの交流をする者が数人程になったある時、彼らは姿を消した。

交流を続けていた侍女からの報告を受けて私が訪れた時、そこには荒野が広がり、彼らが居たという痕跡も無くなっていた。

全滅したのか移住したのかは分からない。

周囲の森が無くなっているのを見た私は、火山が原因では無いかと考えた。

恐らく噴火の影響でこの場所に住めなくなり、移動したのだろう。仮にこの場所に住んでいた彼ら……人類が全滅していても、ここから旅立った者達がどこかで生き延びているだろう。

観察の続きをするために他の人類を見つけておくか。

私は、彼らが魔法人類のように繁栄する事を期待している。

魔法人類とは、現在の人類と過去に居た人類とを分ける為に私が付

けた名前だ、魔法を扱っていたため単純に魔法人類とした。

魔法人類が滅びた時、私は観察対象が消えてしまう事をつまらな
と感じていた……と思う。

しかし、今は種の最後を見届ける事が楽しいと感じている。

どの様な道をたどり、どのように滅んでいくのか。

それを見ているのが面白い。

人類には出来る限り生き残って貰いたい。

この先、彼らがこの惑星で繁栄する可能性を感じているからな。

その後、私は別の場所で暮らす人類を見つけたが、彼らはいつの間
にか服を着るようになり姿が以前より私達に近づいていた。

彼らはまだまだ進化の途中の様だ。

新たに見つけた彼らの前に私が訪れた時、彼らは私に平伏して「精
霊様」と言った。

そして、私達の言語を儀式の様な物に使っていた。

何がどうなっただけそうだったのかは不明だ。

ただ、私達……特に私の事が代を重ねても言い伝えられ続けてい
る、という話を聞いた。

私の事を知っているという事は、彼らは私達が交流していた集落か
ら旅立った者達の子孫なのだろう。

しっかりと生き延びていたようだ。

彼らは同じ場所にとどまらず、移動しながら生活していた。

定住する者達と旅を続ける者達がいるのか。

しばらく彼らと過ごした私は月へと帰り、その後は時々イシリスに
降りては各地の人類と交流した。

彼らとの交流の中で、少しずつ姿を変えながら賢くなっていく人

類。

しかし、過去に存在した魔法人類と明らかに違う特徴がある。

それは彼らが異常な程に脆い事だ。

簡単な事で負傷し、死んでしまう。

以前に多少高い樹から落ちただけで死んだのを見た時は多少驚いた。

あの程度、魔法人類ならば子供でも軽傷で済む、死ぬ事などまず無い。

魔法人類と同じ感覚で接していると、思わぬ被害を生みそうだな。彼らのこの脆さは、惑星から魔力がほぼ無くなっている事が原因だと思う。

実際に魔法人類も絶滅間近の者達はかなり脆くなっていた。

現在のイシリスには魔物が存在せず、かなり弱い生物しかいないが、人類はそれらの生物より更に弱い。

私は彼らの先を期待し、道具の作り方や彼らでも出来る火の使い方のきつかけを教えた。

それからの彼らは道具を持ち、火を使う様になった。

これが人類が今まで絶滅せずに生き延びて来られた理由の一つだろう。

武器を用いて非力さを補い、防具を纏い肉体の脆さを補う。

道具を使い作業の難易度を下げ、時間を短縮する。

火は冷気を遠ざけ、武器にも明かりにもなり、物に熱を通す事が出来る。

子を多く産み数を維持し、集団で暮らし隙を無くし、数で攻め獲物の命を奪う。

こうして人類は今も滅びる事無く存在していた。

物を作るという事は大きな可能性を秘めている。

人類はいつか様々な物を作り出し、その脆さをもともせずはこの惑星の支配者になる可能性もある。

私はきつかけを与えたが、ここまでにしたのは人類だ。

この先、何かのきつかけを得る度に彼らは進化し、発展して行くか

も知れない。

「人類の様子はどうか？」

イシリスから戻り屋敷の談話室で四姉妹達とカードゲームをしているとカミラがやって来て私に聞いて来た。

「これからの彼らに期待して道具の作り方と火の使い方のきつかけを教えたが、それなりに使いこなしている様だ」

「魔法人類の時と同じような感じね？」

「あの時より簡単な物だ、きつかけを与えただけで授業などはしていない」

「大丈夫なの？」

「今の所は問題無さそうだ」

「このまま文明を持つまでに進化するかしらね？」

「私はその気なれば手を貸すつもりだが、危機を迎える度に助ける気は無い。場合によっては滅びる事もあるだろう」

そんな事を話しているとゲームに負けてしまった、最下位か。

「やったぜ！主様に勝った！」

「やったー！いえーい！」

「こういうった遊びでは御主人様に勝てるので嬉しいですね」

「勝たせていただきました」

彼女達はそれぞれに反応している、勝者はヒトハだが妹達は私より上である事を喜んでいる様だ。

「私はここまでする、後はお前達で楽しんでくれ」

「はい」

「またやろうな！主様！」

私は彼女達から離れ、カミラと共にソファに座る。

「お母様。彼らは自分達を人間、人類と名乗っているけれど……本当に見た目が私達に近づいて来ている気がするのよね……」

座った私にカミラが話す、私は遊んでいる四姉妹と侍女達を見なが

ら答えた。

「それは私も感じている」

最初は獣の血が濃い獣人のような姿だった彼らは、今ではかなり私達の姿に近くなっている。

「以前の人類とは全く別の生物よね？……ここまで似る物なのかしら？」

「今の所、何か関係があるとは思えないが……確かに似ていると感じるな」

以前やって来たニアレ星系種。あの知的生命体も多少違う所はあったが、今思えば大部分は私達や人間に似ていた。

「……知的生命体になるためにはこの形状になる必要があるとか？」

カミラが考え込みながら言うが、恐らく違うだろうな。

「それが合っていれば簡単で良いが、クログウエルや世界樹がいる」
私はカミラを見て話す。

世界樹は植えられている月の拠点の中央付近から動けないが、念話で私達の内の誰かと話している事が多いため、全員と仲がいい。

世界樹の根元に侍女達が集まっている事もある。

「あ……そうね。もしそうならクログウエルも世界樹も居ない事になっちゃうわ」

私の言葉に照れた様な表情をするカミラ。

「案外、ただの偶然かも知れないぞ？」

「それは流石に……そうなのかしらね？」

「もし何か理由や原因があったとしても、簡単には分からないだろうな。時間をかけて研究すれば何か分かるかもしれないが、そこまでして知りたいとも思わない」

「そうね……この話はここまでにしましょうか。私はあの子達に混ぜられて来るわ」

そう言って席を立ったカミラは四姉妹と侍女達の元へ向かい、歓迎されてその中に加わった。

道具と火を使うようになった彼らは滅びる事無く世界中に広がって行く。

その間も多少イシリスの環境の変化などがあつたが、人類全体を脅かす程の脅威にはならなかつた。

人類を始めとした様々な生物が増えて行く中で、イシリスも植物に覆われて行く。

月に戻つて娘達と過ごし再び人類の様子を見た時、彼らは火を使い金属を精錬する事が出来るようになっていた。

更に農耕をするようになり、彼等の生活は一気に安定するようになった様だ。

魔法を全く使わない方法だが、中々上手く行っている。

今のイシリスは魔法人類が滅びた時に比べれば魔力がある、だが新しい人類に魔法を使える者は現れていない。

調べてはいないが、恐らく魔力受容体が元々存在しないのだろう。

他の地域では進化の過程で環境による影響が出たのか、肌や頭髪、目の色が違う者達が現れている。

だが、色が違うだけで大きな差は無く、魔法を使える者も現れていない様だ。

様々な地域を見ていた時に気が付いた事だが、一部の地域に住んでいる者達はまだ精錬や農耕を知らない。

各地で進化にかなり差が出ている事が分かる。

私は人類を見続けた。

全滅する地域も多く発生したが、人類自体が絶滅するような事は無

く、生き残った人類は順調に進化して行く。

そして時が経つにつれ、顔にかなり特徴があるものの、それ以外はかなり私達や魔法人類に近い容姿になっていた。

私は現在、月の談話室で飲み物を飲みながら本を読んでいる。

普段はそれなりの人数が居る談話室だが、今は誰も遊んでおらず数人の侍女が居るだけだ。

「お母様、聞きたい事があるのだけどいいかしら？」

そこにカミラがやって来て話かけて来た。

「何だ？」

「今の人類には妙に体が太い者がいるわよね？」

「いるな」

彼らの中には体格が大きい者達がいる、主に力を必要とする作業をしている者達に多く見られる特徴だ。

「私達や魔法人類とそう変わらない者達も多くいるけど……彼らはなぜあんな事になっているのかしら？」

カミラは不思議そうだった。

「いつもの様に仮説で良いのなら話してもいいが、どうする？」

「聞かせて欲しいわ」

カミラは即答した。

「では話そう。彼らの肉体があのように変化しているのは、肉体の性能が影響しているのだと思う」

私はカミラに話し始める。

「性能……力とか速さの事？」

「そうだ。より強い力やより速い動きを得るためだ」

「何でああなるの？」

「カミラ、魔法人類と人類。何が一番違うと思う？」

私に問われ、しばらく考えてからカミラは答える。

「……魔力かしらね」

「そう、魔力だ……魔法人類は魔力で肉体が強化されていた。彼らは力の源が魔力だったため、肉体があまり変化しなかったのだと考えている」

「じゃあ……人類は何を力の源にしているのかしら？」
考えるような仕草をするカミラ。

「人類は魔力が使えず、力の源は肉体のみだ、強くなるには肉体自体を強化するしかない」

「なるほど……」

納得したような表情だな。

「もし人類に魔力を使える者が生まれた場合も、程度の差はあるだろうが極端に肉体が発達する事は恐らく無いと思う」

「……魔力的な強化が圧倒的に上で、肉体的な強さがほぼ必要無いから？」

カミラが大体言いたい事を言ってくれた。

「その通りだ。まとめると、魔力的に強化されていた魔法人類は肉体の強さがほぼ必要無いため細身の者が多く、肉体自体を強化するしかない人類は体格が大きくなるという事だな」

「なるほど……お母様は仮説というけれど、説得力が凄いわね」

「どんなにそれらしく言っても仮説は仮説だ」

私達はそれから部屋に侍女が増えるまで雑談をしていた。

私はそれから人類の進化を見続け、時々イシリスへ向かう日々を送る。

そしてある時、人類初だと思われる文明が生まれていた。

すぐに生活している様子を見に行つたが、実際に見て私は彼らの成長を感じた。

洞穴や森で生活していた彼らは、文明を起こすまでに進化したのだ。

それから私はこの文明を訪れながら過ごしていたが、やがてイシリスの各地の大きな川の周辺でも新たな文明が生まれ始める。

私は新たな文明が生まれる度にその文明へ向かい、見て回つた。

初期の文明は文字などが無かったが、いくつかの文明が現れて消え

た頃には文字を使う文明も現れた。

地域によつて使う文字や言葉は勿論、その文明のみの技術や発明など、多くの違いがあつた。

私はそれらの文明全てに関わり続けた。

多少私の影響を受けた文明もあるが、彼ら独自の文明を壊す程では無かつたと思う。

文明を起こした人類がどこまで行く事になるのか、これからも見せて貰おう。

人類の文明は発生しては滅びるといふ事を繰り返していたが、その中で滅びる事無く発展した文明も存在した。

それらの文明は各地で国となり、法、宗教、神話などを作り出す。神話は口頭で聞いたが、それなりに面白かったな。

それ以外にも様々な物語が作られた。

以前聞いたのは実在した何処かの王が主役の物語だったと思うが、あの物語は中々良い出来だった。

知識を得て技術を生み出した彼らは国として繁栄したが、今度は争っては滅ぶという事を繰り返す様になった。

私はイシリス各地を移動しながら傍観し、時には自分から首を突っ込んだ。

カミラと四姉妹、侍女達はそんな私をいつも微笑みながら見送ってくれる。

どうやら、人類が発展していく中で魔力を扱える者達が現れている様だ。

各地で話を聞いた限りでは、風を起こす、水を出す、ある物を別の物へ変える。

そういった者達が稀に現れ、他の人類からある時は神の様に、またある時は神の後継者や神の加護を得た者として扱われていると言う。

彼らの多くは殺されているらしい。

彼ら、彼女らは僅かに魔力への適性があり、生まれつき少しだけ魔法を使っていたのだろう。

今の人類は基本的に魔力が使えない、その為そういった者達は非常に珍しい。

現時点では、多くの人類の中に現れる突然変異としか呼べない。

しかし可能性の一つとして、人類が魔力を扱う種へと進化する事もあり得る。

かなり貴重な人類なのだが、今のイシリスでそういった力を持つ者は穏やかな日々は送れないようだな。

肉体強化などを生まれつき無意識に行っていると思われる者は、強者として名を残している事が多かった。

他者に知られる事無く、隠したまま消えて行った者もいるかも知れないな。

現在、私が色々な事を長々と考えているのは、珍しい状況を見ているからだ。

複数の者達が魔力適性を持ち争っている地域を発見した私は、彼らの争いへと多少干渉し彼らの事を観察している。

極稀にしか現れない珍しい人類が、一部の地域で同時期に、複数現れるとは思っていなかったが……見ていて中々面白い。

この辺りは周辺地域より魔力が僅かに濃い。現在のイシリスは地域によって魔力が濃い地域や薄い地域が出来ていて、時間と共に少しづつ変化しているようだ。

二百年もたたない内にその争いは終結したが、それなりに楽しませて貰った。

魔力適正者の子供達がどうなるかが気になり、私はその後もしばらく見ていたが、子供達の中に魔力適性を持つ者はいなかった。

興味を失った私は、他の地域へと行く前に一度月へと帰る事にした。

「魔力適性者……が現れていたの？」

「呼び方は好きに呼べ。どうやら以前から人類の中に極稀に魔力適性を持ち、生まれつき僅かに魔法を使える者や身体能力の向上が起きている者が生まれていた様だ」

月に帰った私は談話室でカミラ達にイシリスについて尋ねられ、魔

力適性者の事を話した。

「そういう人類が生まれてもおかしくは無いわよね。魔法人類という前例が居るし」

「彼らと比べると遊びのような物だが、現在の人類からすれば驚くべき力なのだろう。身体能力向上者は大抵の場合英雄扱いされ、それ以外の者は神の関係者扱いされている様だ」

私がそう言うと、一緒に聞いていたヨツバが疑問を口にする。

「じゃあ私らはどうなるんだ？」

「本物の神様だとおもわれるんじゃない？主様に聞いた程度で神の力扱いなんですよ？」

ヨツバの言葉にミツハが答える。

「私は御主人様の侍女が良いわ、神様なんて思われても困るだけですもの」

「そうですね。それに……私達程度で神ならカミラ様や主様はどうすれば良いのでしょうか？」

「んー……カミラ様が神様の神様で……主様が神様の神様の神様！」

フタバの言葉にヒトハが疑問を口にする、その言葉にミツハが元気に答えた。

それを聞いた娘達は笑う。

「何で笑うのさ!？」

「そういう事は勝手に思わせておけばいい、違うと言っても中々信じて貰えないからな」

私はそう言って飲み物を一口飲んだ。

「二度思い込んでしまうと中々考えを変えられない物よね……私達も気を付けないといけないわ」

カミラは侍女達と自分に言い聞かせるように言った。

人類はゆつくりと発展を続ける。

その間に魔力適正者達も僅かに現れていたが、そのほとんどが力を失った事にしたり、隠したりする様になっていた。

過去に同じような者達がどうなったかを考えれば、そうする気持ちも分からなくは無い。

大体の場合、人類から見ると不幸と言える結末を迎えているからな。だが、それでも堂々とその力を見せる者はいる、私が現在観察している少女のように。

可愛らしい姿をした少女の名は、ジャンヌと言う。

彼女は人類からすればかなり強力な他者への強化魔法を使えていた。

神の姿を見て、その声を聞いたと言う彼女だが、それは彼女自身が無意識に行った物だ。

私から見ると、少女は自分で作り出した映像と声に感動して泣いた事になる。

それからの彼女は強化魔法を使い勝利を重ね、大いに自らの国に貢献した。

しかし、結局は人間に陥れられて処刑される事になった。

彼女が魔法を隠す事無く使った理由は、家族の為だ。

恐怖を感じながらも戦場に向かい、時には傷つきながら戦った彼女に待っていたのは自国の裏切りと仕組まれた裁判だった。

現在、私達は姿を消し空からジャンヌの処刑を見ている。

炎に包まれて燃え尽きて行く彼女を見ながら私は隣にたたずむ女性へと声をかける。

「自分の処刑を見る気分はどんな物なんだ？ジャンヌ」

「特に何も感じる事はございません。私は既に主様の眷属なのでから」

そう答えるジャンヌは本当に何も感じていないようだ。

私は彼女を観察している内に会ってみたくなり、ある時彼女に会いに行った。

そこで私は彼女が他の人類とは大きく違う精神構造をしている事に気が付いた。

信仰心に溢れた彼女は、私こそが神であると思い込み、私の眷属となり共に永遠を生きる覚悟を語った。

かつての巫女達の様な狂信を感じた私は、いつか試してみたいと思っていた短命種を長命種に変えるという対象の最初の一人に彼女を選ぶ事にした。

現在の彼女は精神以外は侍女達と大して変わらぬ存在となっている。

自分の力が魔法であると知った彼女は神の御業を与えて貰ったと涙を流し、真なる神である私に永遠の信仰を捧げた。

私が彼女に「神では無い」と言うと「分かっております」と答えるのだが、内心では私が唯一絶対の神であると思っただけだ。

彼女の私へ向ける信仰心は偽りなく、本物だった。

私を神と呼ぶのをやめ、異常な信仰心を隠す事。

私に対して侍女の態度で接し、行き過ぎた真似をしない事。

私に固執せず他にやりたい事などをして楽しむ事。

彼女は様々な私の要求を全て受け入れ、過ごしている。

抑え込みすぎるのも問題があるかと考えたが、彼女が言うには問題無いらしい。

本人がそう言うのなら良いだろうと、そのままにしている。

信仰も自由にすると良い。

「これで人間としてのお前は死んだ。これからは私達と共に過ごす事になる」

「はい、御身に永遠の信仰を捧げます」

そう言っただけで空中で跪くジャンヌ。

魔法を習い始めてまだあまり時間が経っていないのに中々器用だ。

その後、ジャンヌは眷属という言葉を好んで使い、それが侍女達の間で気に入られ使われる事になる。

カミラは眷属であり娘、ジャンヌは眷属であり侍女、四姉妹と侍女隊は眷属であり侍女であり娘、という事になった。

発展していく人類を見ながら世界を回っていた時、私はある島国にしばらく滞在した。

この島国の季節によって姿を変える景色を気に入った私は、この島国、日本に拠点を持つ事を決める。

この日本もかなり独自の発展をしている地域だった。

狭い島の中に多くの勢力が存在し、他の地域と同じように争いを繰り返している。

私は北寄り、中央、南寄りの三か所の海に景色を楽しめるように島と家を作り、北寄り島、中島、南寄り島と名付けた。

家は日本の物を使用し、風呂や休憩時にも景色を楽しめるようにした。

暈は始めて使ったが意外と悪くなかったな。

侍女達に管理する家を増やした事を話すと、全く問題無いと言われたため、私は感謝を伝えて管理を任せた。

それからすぐに当番が再編成され、新しく作った三つの家が侍女達の管理下に加わった。

新しく島を作った事で日本に住んでいる人類に騒がれるかと思っていたが、船はあつても陸地からあまり離れる事は無く、島に気が付く事は無かった様だ。

私は月と日本に作った三つの島にその時の気分で滞在し世界を見続ける事にした。

皆も日本の四季をそれなりに気に入ったようで、自由な時間を使い時々各島へ訪れるようになって行く。

日本に訪れる事が増えた私は、同時に日本の様子を見る事が多くなった。

最近では鉄砲と言う携帯出来る遠距離武器が現れた。始めは日本人が開発したと思っただがどうやら他国から伝えられた物のようだ。

鉄砲とは筒状の本体に爆発物を詰め、その爆発の勢いで鉄の塊を飛ばす武器だ。

初めて見た時は武器だと思わなかった。

ただ鉄の球を飛ばすだけの子供の玩具だと思っていたのだが、しばらくしてから人類の脆さを考えればこれでも十分な威力である事を思い出した。

どうやら日本は他の地域の国々よりも技術の発展が遅いようだったが、刃物の技術は素晴らしかった。

私は現時点で二名の刀工に一本ずつ刀を打って貰っている。

腕の良さそうな刀工に女神装備を見せ「これと同じ程度の刀が欲しい」と言っただけ魔法金属を手渡した。

しかし、彼らは魔法金属を加工出来なかった。

そこで彼らの代わりに私が加工準備をし、それ以外は全て刀工である彼らに任せた。

そして出来たのが「妖刀正宗」と「妖刀村正」だ。

生きていた時間が違う二人の刀工は、出来上がった刀に同じ「妖刀」という名を付けた。

完成後、何故か彼らは泣いていたが、私は金を渡し礼を言ってその場を後にした。

後に、二人は刀工として有名になったようだな。

長い間戦争と平穏を繰り返す世界だったが、日本に少し興味を引く男が現れた。

彼は同じ時代を生きる他の人間の考えからかなり離れた考え方と価値観を持つている男だった。

寝ている所に私が尋ねても、彼は全く動じず会話に応じていた。

私は彼……信長と交流を持つようになり、彼の周囲の者とも関わるようになる。

彼はいつも私の事を大事な友人だと紹介し、紹介された者は大抵の場合私を見つめたまま固まっていた。

彼らと交流を持った事で、私は日本にいる時間がますます増えた。

彼の家臣達ともそれなりに仲良くなり、彼の天下統一は目前に迫っていた。

ある日、私はいつもの様に信長の元へと向かう。

場所は分かる、今は本能寺にいるな。

転移で本能寺へ向かった私は、本能寺が燃えているのを見た。

周囲に軍もいる様だ。

私はすぐに信長の所へ転移した。

「信長」

「クレリアか……」

そこには槍を持ち、死んでいる蘭丸を抱えた血まみれの信長が座っていた。

「謀反か？」

「……ああ」

「誰だ？」

「……光秀だ」

彼か、そんな事をするようには見えなかったが。

火の手は回っている、もうここから出る事は出来ないだろう。

私は考える。

彼もまたジャンヌとは違った方向で一般的な人類とはかなり精神構造が違うし、何より男の実験体も必要だ。

月の皆も彼の事は知っているし、カミヲを始めとした数人は顔も合わせている。

私達の正体を知った時、彼は笑いながら「この世は面白い、出来る事ならお前達のようにいつまでも見ていたい物だ」と言った。

その時は、その願いを叶える事が出来る事を言わなかったが。

私は考えた末に、彼を男の実験体にする事にした。

「信長」

「……何だ？」

彼は友人でもある。

最後の決断は彼自身に選ばせよう、彼が望むのなら眷属にする。

私は燃え盛る部屋の中で問いかけた。

「お前は人を捨て、私の眷属として長い時を歩む気はあるか？」

信長は私の言葉を聞いて目を見開いた、彼のこんな表情は珍しいな。

「お主は……」

彼は何かを言いかけるがその先を言葉にする事は無く、すぐに別の言葉が返って来た。

「人の身などに未練は無い。お主の下についてやろう……儂は飽きるまでこの世を生き続ける！」

信長は不敵に笑い私に答える。それを聞いた私は彼を月へと連れて行った。

月に戻った私は、信長を眷属化する前に最後の説明と確認をした。ジャンヌにも眷属化する前に短命種を長命種に変える実験でもあるという事は伝えていて、彼女も理解した上で眷属となった。

この事はカミラと侍女隊の者達も全員知っていて、もし異常があれば私に連絡が来るようになっていた。

そして私の話を聞いた彼は、迷う事無く眷属になる事を了承した。

「光秀は討たれたか」

「お前の死体が見つからなかった事で、何処かで生きているのではないかという話が出ているな」

「見事の中しているでは無いか！」

着物姿の信長が笑いながら言う。

彼の立場は、私の眷属であり友人であり……月の警備隊だろうか？警備隊と言っても彼一人な上に、全員が彼より遥かに強いので今はあまり意味は無いかも知れない。

現在は彼が気になっていであろう事を話して聞かせている所だ。

「天下統一。今となつては何と小さき事か……宇宙はどこまでも広い」

不意に彼はそう呟いた。

信長は月から地球を見ている。

イシリスは今、人類から「地球」と呼ばれている。

今ではイシリスと言っても人類には伝わらない為、私達も彼らの呼び名を使う事にした。

彼は始めて月から地球を見た時、大きな衝撃を受けた様だ。

日本の狭さは知っていたようだが、宇宙の広さを知ると彼は言葉を無くした。

その時、今まで抱いていた野心が消えたらしい。

今の彼は私達の教える事を身に付けている途中だ。

何が起きるか分からない宇宙では戦闘技術と魔法は覚えておいて損はない。

最低限の知識と力を身に着けなければ自由は無い事を伝えた私に、彼は一言「道理」と答え、熱心に学び始めた。

女子供に完膚なきまでに敗北する事に我慢出来ないのではないかと思っていたが、そんな事は無かった。

「姿は人でも、お主らは人ではない。人をやめたばかりの己が太刀打ち出来るなどと考えていない」

そう彼は語り、挑み続けた。

カミラとヨツバが一番彼を気に入っている。

戦闘訓練的な意味で、らしいが。

フタバ、ジャンヌは男が私の眷属に入る事を快く思っていないようだが、私が決めた事ならと納得している。

ヒトハは私が決めたのなら何も思う所は無い様で、ミツハは信長にも絡んでいるため嫌いという訳ではないだろう。

多少問題もあるかもしれないが、今の所全員の関係は悪くない。

「まずは念話を覚えてもらう」

私は基礎を習得した信長にまず念話を教える事にした。

何かあった時、連絡出来ないのは困る。

「念話か、どんな物なのだ？」

『これが念話だ、分かるか？』

私が念話をすると信長は目を見開く。

「これは何とも不思議な感覚だな……」

念話を受ける感覚は実際に体験しなければ分からないだろうな。

「では、授業を開始しよう」

「頼む」

私の言葉に、彼はそう言って姿勢を正した。

信長は中々早く念話を覚えた。

私は彼が念話に十分に慣れた頃、世界樹の元へと連れて行く。

「……見事な大樹だ」

信長はそう呟き、世界樹を眺めた。

「世界樹と言う、仲良くしてやってくれ」

「仲良くだと……？」

『お？新しい子だよ？よろしくねー』

信長は軽く体を反応させたが、すぐに世界樹へと目を向ける。

「念話……？この樹か？」

『目の前の樹がボクだよ、よろしくね信長君』

「……よろしく頼む。ここに居ると愉快な事ばかり起きるな」

「のんびりと日々を過ごす事の方が圧倒的に多いぞ。ジャンヌとお前はそれの長い時を耐える事が出来るかが問題だが」

「やってみれば分かる、その為に儂らはいろのだろうか？」

「そうだな、耐えられなくなったら言え。死ぬか耐えられるようにするか選ばせてやる」

「心得ておこう」

「よし、では行こうか」

『え？ちよつと早くない？』

「信長、世界樹は大抵念話で誰かと会話している。声をかけられた時、気が向いたら話し相手になってやってってくれ」

「分かった。世界樹よ、また会おう」

『信長君、またねー』

信長が笑いながら世界樹に声をかけ、そのまま再び授業へと戻った。

時は流れ、ジャンヌと信長が私の眷属になり数百年は過ぎたはずだが、ジャンヌと信長に異常は見られない。

これは予想以上にいい結果だ、このままどこまで問題無く過ごせるか試そう。

現在の世界は二人が人であった頃から大分変わった。

日本も他国と関係を持つようになり文化が混ざり合い発展している。

世界の国々も、戦争は起きているが以前よりは落ち着いてきたように見える。

色々な事があったが、私の中で一番大きかった事は科学を知った事だ。

その言葉が彼らの歴史に現れた事は非常に興味深かった。

人類の「科学」と私の中に在る「かがく」が同じかは分からない。

その言葉しかなく、どんな物かは分からないからだ。

私は彼らの「科学」が「かがく」だと思う事にした。

また同じ名を耳にしたら、その時に考え直せばいいだけだ。

科学を発見した後、彼らは科学を使い発展していった訳だが、その途中で私は考えた。

魔法人類の時は姿を隠しひっそりと紛れ楽しんでいたが、今度は私達が自由に世界を楽しみつつ、出来るだけ私達の正体が分かりにくい状態を作れないか……と。

私達の正体が、力が全人類に知られてしまうと、自然な反応を楽しめない。

恐らく大半が首を垂れ、何でも言う事を聞くようになってしまうだろう。

反抗する者や意に介さない者も勿論いるだろうが、恐らく多くは無いと思う。

それでは駄目だ。

私は出来るだけ彼らが自由に過ごしている世界を楽しみたい。

そして、私は環境を整える事を決める。

普段やらない事をしてみるのも面白いかも知れないしな。

皆にも協力を頼んだ所、カミラと信長が食いついた。

私はどういった状態を目標にしているかを聞いた二人が、自分達に任せて欲しいと頼んで来たのだ。

私が「二人に関係なく私は勝手に動くが、それでも構わないのなら任せる」と言うと、構わないと返答された。

やる気を見せる二人を見て好きにさせてやろうと思った私は、二人に任せる事を決める。

カミラからどうしても私が必要な時は手伝って欲しいと言われたので、それも了承した。

私の力では無く、私が必要な時と言っていたが、何をする気なのだろうか。

その後、使える人間を引き込んで使ってもいいかと二人から提案され、問題を起こさないなら良いと認めた。

侍女隊の者達もカミラに手を貸して色々としていたようだが、楽しんでるのなら良いだろうと私は特に何も言わず、何をしているかも知る事が無いように注意して過ごした。

それからある程度の時が経ったある日。

私はカミラ、信長の両名から現在の状況を報告された。

地球上の大国を含む多くの国が裏では私達の支配下にある事。

しかし、特に指示はしておらず、自由にさせている事。

人類の中から集めた私達側の者達が世界中の企業の社長などの要職に就いている事。

その企業などから集めた金が、人類の世界での活動費になっている事。

大体このような事を説明された。

そしてその途中、私は「月の庭園」という言葉を耳にし、カミラに尋ねる。

「この月の庭園という名前は何だ？」

「いつの間にか私達を知る者達からそう呼ばれていたのよね。どうやら侍女達の名前に花に関係したり、それに近い名前の者が多いから……らしいわよ？」

「花関連で庭園は何となく分かるが、なぜ月なんだ？」

人類は私達の拠点に気が付いているのか？

「ああ、それは人類は月に神秘性を感じていて、「人とは思えない美しさ」みたいな意味で使っているみたいよ？」

なるほど、拠点に気が付いている訳では無いのか。

「見た目に惑わされる愚か者達だ……いくら美しくとも触れれば命を奪う毒花だと言うのにな」

信長が愉快そうに話す。

「失礼ね、何もしなければ美しい花のままよ。それと、この名を知っている者は程度の差はあっても裏を知っているという証拠だから。覚えておいてね？」

カミラは信長を一瞥して文句を言った後、私に説明する。

「分かった」

いつの間にか人類に私達の名前が決められていて、定着している様だ。

悪くは無いし、このままでも良いだろう。

「それで……大きな国のトップが入れ替わる時は顔合わせする事にしたから、彼らに会って欲しいのよ」

私がおうのか。

「会ってどうするんだ？」

「これからも励めと言ってやればよい」

私の質問に信長が答える。

そういえば、信長も以前は一国一城の主だったな。

「好きなように話してくれれば良いわよっ」

「必要な時は手伝うと言ったが……必要か？」

「必要よ。彼らは私が月の庭園の支配者だと思っているわ……お母様が居る事を教えないと」

私は支配している訳では無い。

……いや、そういった部分もあるな。

しかし、人類の世界で過ごす気である私は知られない方が良いと思うのだが。

彼らが私を知らず、カミラの事を頂点だと思っているのが嫌なのだろうか？

「北極の地下に謁見用の部屋を用意してあるわ。そこに侍女が転移で連れて来るから……お願い」

「分かった。元々手伝うと約束していたし、色々と頑張っていた様だからな」

私はそう言って報告の続きを聞き始めた。

俺の国は酷い所だった。

戦争が続き国は崩壊し、秩序は失われていたんだ。

その日を生きて行く事で精一杯な毎日。

この国をどうにかしたい……そう思いながらも何か出来る訳も無く、ただ生きていた。

ある時、食料と仕事を探しに町へ出た俺は、争いに遭遇してしまっ

た。俺は何とかやり過ごそうと、必死に物陰に隠れて伏せていた。

すると、近くで歩く音が聞こえたんだ。

もし見つかったら何をされるか分からない……そう思いながら、俺は祈るように息を潜めていた。

だが、そこに現れたのは長い黒髪をなびかせたワンピースの少女だった。

……ああ、見惚れたとも。

話を続けるよ？

「おい、お嬢さん……！そっちは戦闘が起きてる……！行くんじやない……！」

言葉が伝わるかも分からないまま俺は少女を止めた。

すると少女は地面に伏せている俺に顔を向けて言ったんだ。

「人類の戦争を見物しているだけだ、気にするな」……と。

その時の俺は、きつと間抜けな顔をしていただろうね。

「何を言っているんだ」と思った。

当然だろう？彼女は戦争を見物に来たと言ったんだから。

国が荒れ、家族も友人も死に……！今も大勢が苦しんでいる……！その戦争を見物しに来たと言った彼女に、俺は怒りが湧きあがったよ。

ただ、その後を……はつきりと覚えていないんだ。

近くで戦闘が起きているにもかかわらず、怒りに任せて色々と自分

の気持ちやぶつけたと思う。

叫び散らし、肩で息をする俺に……少女はその美しい顔を向けて言ったんだ。

「では、お前をこの国のトップにしてみよう」……と。

「その少女が貴方を……？」

ある国の大統領の部屋に四十後半程の男が座り、傍に立っている若い男と話をしている。

「そうだ、彼女は俺に色々な事を教えてくれた。そして見る見るうちに国から戦争が減り、安定し……俺は大統領になった」

「それで……その少女は？」

「いなくなった。ある日突然……私の胸ポケットに「後は任せる」と書いた紙切れだけを残して」

大統領と呼ばれた男は部屋に飾ってある写真立てを見た、そこには一枚の紙切れがある。

「……何者だったんでしようか？」

「分からない……ただ……」

「ただ？」

「彼女の姿は最後まで……初めて出会った時と変わっていないかったよ」

仕事を首になった。

俺達が手掛けていた仕事は失敗し、大損したからだ。

「なんで俺が……」

失敗したのは俺達のせいじゃない、俺達が言った事を無視した上のせいだ！

一緒に働いていた俺の親友も辞める事になっちゃった……。

俺も、親友も、今は新しい仕事を探してる。

お互いにまた安定したら飲もうと約束して別れてから二か月……。俺も親友もまだ新しい仕事は見つかっていない。

「はあ……」

公園に座り、コンビニで買った弁当を食べる。

今までの稼ぎがあるから、すぐに金が尽きる事は無いけど……。

「失礼、真西 春木（まにし はるき）さんでしょうか？」

突然声をかけられ顔を上げると、スーツを着た凄い美女がいた。

「そうですが……何の御用でしょうか？」

内心動揺しながら言葉を返すと、彼女は名刺を出して言う。

「私はこういう者です、よろしくお願いします」

「はい……」

受け取った名刺には月島商業株式会社人事部長ミスミ・アーティア

……と書いてあった。

月島……月!?

現在世界最大のグループである月下グループ……子会社の名前に月が入る事が多いと言うのは有名な話だ。

その会社の人事部長がなぜ俺を？

「お話を聞いて頂きたいのですが、お時間をいただけませんか？」

「はい、問題ありません」

話しを聞かないという選択肢は無い……今より悪くなる事は無いだろうしな。

「単刀直入に申し上げます、貴方をわが社に迎え入れたいのです」

月下グループの傘下の会社に俺が!?

「とても嬉しいですが、俺の事は調べましたよね？」

「はい、全て知っています。手掛けていた仕事に失敗し、大きな損失を出して解雇された……と、合っていますか？」

俺達のせいじゃない、そう言いたかったが言えなかった……もうあの事は俺達の失敗という事になってしまっている。

「はい……合っています……」

俺は下を向いて答えた。

「嘘はいけませんね、正直に言っただけなら困りません。すると彼女はそう言った、俺は勢いよく顔を上げて彼女を見る。

「あの失敗は貴方が原因ではありません。秋元 安道（あきもと やすみち）……彼のせいでしょう？」

俺は驚いた。

彼女が言った名前は、俺達の言った事を無視した上司の名前だったからだ。

「ご心配無く、彼と上層部はもう処理しましたから」

処理……いや……なぜそんな事が……そもそも……。

「貴方がいた会社は名前に月が付いていませんが、孫会社なのです。貴方に目を付けてやって来たなら、勝手に解雇しているではありませんか……。私達が貴方の力を十分に発揮出来る場所をご用意しましょう」

彼女は混乱し始めた俺にゆっくりと話して聞かせてくれる……なるほどな……。

でも、俺だけじゃ……俺だけじゃ駄目なんだ。

「そうそう、来ていただけなら貴方が信頼する方を一人だけ連れて来て頂いても構いませんよ。言ったでしょう？ 全て知っている……と」

そう言っただけで彼女は笑う、全て分かった上で言ってくれている……俺は涙がにじむのを感じながら親友の名を言った。

ミスミさんに誘われ再就職した俺達は二人で改めてミスミさんにお礼を言おうと上司に聞いたのだが……。

「いない……？」

「ああ、そんな人は人事部に居ないよ？」

俺達は呆然とした。

どういう事だ？ 彼女は偽物……？

いや、そんなはずはない！ 実際に俺達は再就職してるじゃないか！

「そんな外国人みたいの名前の社員がいたら忘れないよ」
本当にいないのか聞きなすと、上司は笑いながらそう答えた。

「総理……どこへ行くんです？」

「荒谷（あらかや）、お前は次の総理大臣だ……だから、知らなくてはいけない」

スーツを着た二人の男が首相官邸の中を歩く。

やがて何も行き止まりへ着くと地下への階段が現れ、そのまま地下へと降りて行く。

「何ですこれ!?こんな所があるなんて……!」

入り口は勝手に消え、二人は更に深く奥へと歩いていく。

やがて嚴重に閉じられた扉の前に着くと二人は足を止める。

「いいか荒谷……これはふざけて言っている訳じゃない。真剣に聞いて欲しい」

「……はい」

男のあまりにも真剣な顔に、荒谷と呼ばれた男は緊張気味に返事をする。

「これからある方にお前を会わせるが、どんな相手が出て来ても甘く見るな。多少失礼な程度で怒るような方では無いらしいが……敵対を匂わす様な事は絶対に言うな!分かったか!」

「あの……総理……?話が良く分からないのですが……誰に会うんです?」

「地球の支配者だよ……私達の間では「月の庭園」と呼ばれている」
総理と呼ばれた男がそう言うのと静寂が訪れ、しばらくすると荒谷が口を開く。

「月の庭園……?総理もそんな冗談を言うんですね……あはは……は……」

笑う荒谷。

だが、全く表情を変えない総理を見て黙ってしまふ。

「言ったはずだ、ふざけて言っている訳では無いと。……本当に機嫌を損ねれば地球が消えてなくなるかもしれないんだ」

「何を……何を言ってるんですか!? そんな漫画みたいな……! どうしたんですか総理!?……松本さん!」

荒谷に松本と呼ばれた男は静かに言う。

「私も前任者から話された時は同じような反応をしたよ……。だが何を言っても、お前が信じなくても……。現実が変わらない」

沈黙がおりる。

そのまましばらく時間が経つと、荒谷が口を開いた。

「何されてるんですか……? 人類は……。餌にでもなってるんですか……?」

流石に冗談では無いと分かったのか、静かに言う荒谷。

「いや……。何もされていない。あの方達が望んだのはあの方達の事を多くの人類に知られないようにする事だけだ。頼まれる事はあつても命令される事は無く、それ以外は好きにするように言われている」

「どういう事です……?」

「言葉通りだよ。あの方達は裏で世界を支配しているが、何かを求めめる事はほぼ無い……。それどころか私達人類の事を助けてくれる事もある」

「もう訳が分かりませんよ……。何が目的なんですか……?」

「……お母様が人類の世界で過ごす為だと言っていた」

「お母様……?」

「実はな、今日会う方は私も初めて会うんだ。今まで支配者だと思っていた方は地位としては二番目……。もう一人……。本当の支配者がおられるそうだな」

「それがお母様……?」

「話の内容から考えるとそうだろうな。ああ……。言い忘れていた。どんな想像をしているのかは知らないが、全員驚くほどの美人だぞ? 特徴も人間にそっくり……。すまん、間違えた……。私達があの方達に似ているんだつたな」

松本がそう言うのと、荒谷は顔に手を当てて座り込んだ、色々処理しきれなくなつて来たらしい。

「……総理になんてなるんじゃないやなかつた……」

「なる前に聞いただろ、覚悟はあるかと」

「こんな意味だなんて思いませんでしたよ……」

「悪いな、大国と言われる各国のトップや大きな組織の長。……あの方達を知る事を許した立場の者にしか話せないんだ」

「歴代の総理も知っていたんですね……」

「そうだ。一体いつからそうだったのかは知らないが、誰にも言う事無く……言えなかつたのかも知れないが。……全員人生を無事に終えているよ」

「広めようとした者は居なかつたんですか？」

「私も生まれていない頃の事だから詳しくは知らないが……昔、国のトップが突然いなくなり国が荒れた事があつたらしいな……」

「絶対関係ありますよね？それ……」

「どうだろうな。さあ、そろそろ時間だ。いいか？絶対に失礼な事はするなよ？」

「分かりました……。もう逃げられないんです、やってやりますよ……」

私は帝母の時の様な服装に着替え、北極の地下にある謁見室へ移動する。

やりすぎない程度の装飾が施された美しく広大な空間に、私の椅子が用意されている。

せっかく娘が用意してくれた場所だし使わせて貰おうか。

そう思いながら、用意された席に腰を下ろす。

私の右側にカミラが立つ。

一段下がった位置の両脇には四姉妹が二人ずつに分かれて立ち、正面の扉まで侍女隊の者が一定間隔で並び両脇を固めている。

「カミラ」

「なに？お母様？」

「帝母だった頃を思い出すな」

「そうね」

「少し会話すれば良いのだな？」

「話す内容は自由にしていいから。お願い」

「分かった」

「日本国内閣総理大臣、松本 英明（まつもと ひであき）様。次期内閣総理大臣、荒谷 和幸（あらかや かずゆき）様。ご両名が参りました」

「入れなさい」

カミラの言葉で扉が開き、年配の男とそれなりに若そうな男が入ってくる。

二人はゆっくりと歩いて近寄って来るが、若い方の男は少し震えているな。

私達の見えた目は人類の女性と大して変わらない。

そこまで怖がるような姿はしていないはずだが。

やがて二人は丁度良い距離で止まる。

すると年配の男が跪き、もう一人がそれを見て慌てて真似た。

「日本国内閣総理大臣、松本英明でございます。御身にお目通り出来た事、心より嬉しく存じております……」

松本英明と名乗った男に目配せされ、もう一人も話し始める。

「じ、次期日本国内閣総理大臣、荒谷和幸でございます……っ!」
噛んだな。

すると噛んだ本人だけでなく隣の者まで固まった。

少し緊張をほぐしてやるか。

「荒谷和幸と言ったな。私は故意でないのなら失敗など気にしない。ゆっくりでいい、もう一度言ってみろ」

「は、はい……次期日本国内閣総理大臣、荒谷和幸でございます。

御身にお目通り出来た事、心より嬉しく存じております」

「丁寧な挨拶ありがとう。しかし、私はお前達のような改まった話し方をする事が苦手でな、多少無礼でも許して欲しい」

二人は黙って聞いている。

「私の名はクレリア・アーティア。お前達が月の庭園と呼んでいる者達の支配者という事になっているが、そんな偉そうな物では無い。あえて言うなら……彼女達の親だな」

そう言うのと跪いている二人の困惑が伝わる。

カミラが微笑んでこちらを見ているのを感じるな。

「日本国は私達の事を世界から隠す事に尽力してくれているそうだな。娘のカミラが色々と無理を言うかもしれないが、どうしても無理なら私に言うといい。説得してやろう」

カミラが微妙な表情をしているのを感じる。

「ありがたく存じます」

私の言葉に年配の男が答えた。

その後少しだけ話し、彼らは帰って行った。

「本当に少し話したただけだな」

「謁見なんてそんな物よ？」

「そうだったな」

二人が帰った後、私は皆に後を任せて南寄り島へと向かった。

侍女に連れられ戻った二人の男は黙ったまま総理官邸の部屋へと戻ると、力が抜けたように椅子に座った。

「お前……心臓が止まるかと思っただぞ……」

「すいません……。あんなに緊張したの生まれて初めてで……。あの場所は多分……総理官邸の地下じゃないですよ？松本さんは何か知ってますか？」

「地球の何処かの地下らしいぞ、転移で俺達を移動させているらしい」

「は……？転移？……何だそれ!?完全にSFかファンタジーじゃないか……便利だろうな」

「……荒谷。お前意外と総理大臣に向いてるかもな」

「だって何と言うか……俺の失敗も軽く流してましたし。人間よりよっぽどまともに見えましたよ？……凄い美人だらけでしたし……特にお母様……クレリア様が」

「言っただろう？多少失礼な程度で怒るような方達では無いと。敵対しなければかなり温和な方達なんだ……変な気を起こすなよ？」

「でも、昔のトップは消えてるんですよ？」

「敵対したからだろうな。隠れようとしているあの方達の事を世界に広めようとしたか……排除しようとした。だから消された」

「なるほど……という事は、どうせ俺達が想像出来ない程強いんでしょう？」

「ああ……具体的には見た事は無いが、地球程度なら簡単に壊せるぞうだ」

「マジか……。ははっ！本当にファンタジー世界じゃないですか

……」

「トップが消えた時に、敵対するとどうなるか他の国も知ったはずだ。だが謁見前に言ったように、ただ人類を使っている訳じゃなく恩恵もある。資源や食料を融通してくれたら、大きな災害時は月下グープとして援助をしてくれる事もある」

「月下ってそうだったんですか!？」

頭だけを松本に向けて声を上げる荒谷。

「後……死者を蘇生したり人を不老不死にも出来るらしいぞ」

「今、死者蘇生と不老不死って言いました?」

「……出来ないと思うか?」

「出来ると思うか……じゃ、ないんですね」

「どう思う?」

「分かりませんよそんな事……」

二人の男はしばらく椅子に身を預けたまま会話していた。

『お母様、ちょっといいかしら?』

彼らとの謁見を終えてしばらく過ぎたある日、北寄り島の家に住む私はカミラからの念話を受けた。

『どうした?』

『ミツハからの報告にあった物の中にお母様の判断を聞きたい物があるの』

ミツハ達の侍女隊は各国を回って情報を集めていたはず、何かあったのか。

『アメリカで月に行く計画が進んでるみたいなのよ』

そうか、人類は宇宙に進出する気なのか。

私は微笑みを浮かべた。

『どの月だ?』

『私達の拠点がある、この月よ』

なるほど、これは私に相談して正解だ。

『彼らが本当に月に来るようであれば見えない様にしておく』

『止めなくていいの?』

『私達の庭に遊びに来るような物だ。それに彼らには伸び伸びと発
展して欲しいからな』

『分かったわ。この件に関しては放置して……成功して月に来そう
ならお母様に連絡すればいい?』

『それで良い、頼んだぞ』

「月への有人飛行は成功し、我々の技術力を世界に知らしめること
が出来ました」

アメリカのホワイトハウスで大統領達に嬉しそうに報告する男。

それもそのはず、十年以上かけた計画が無事に完了したのだから。

「しかし、不思議な事がいくつも起こったと宇宙飛行士達は証言し
ています」

「不思議な事だと?」

大統領が聞き返すと、進行役とは別の男が言う。

「危険な状況に陥った時、何故か何事もなく乗り切れたそうです。
それらが無ければ生きて帰っていたか分からなかった、と彼らは証言
しています」

そこで聞いていた者達の一人が話し始める。

「謙遜だな。彼らの行動力と機転が困難に打ち勝ったのだろう」

他の者もそれに賛同し口々に宇宙飛行士達を褒めたたえるが、大統
領である男は何かを考えているように黙っている。

「大統領?何か……?」

大統領の様子に気が付いた進行役が声をかけるが……。

「良くやってくれた。我々は人類として始めての偉業を成し遂げ
た」

彼はそう言っていていつもの様子に戻った。

「お母様、アメリカの大統領からお礼が届いているわよ」
月の屋敷の談話室で本を読んでいると、カミラから箱を手渡された。

アメリカの大統領？

……ああ、あの男か。

察しが良いな、私が手を出した事に気が付いたか。

彼はなかなか物分かりのいい男だ。

私が良いと言えば必要以上に気を使わず対応する。

他の国は良いと言っても「そのような事をする訳には……」などと言つて余計な事をする時があるからな。

私は彼が謁見に来た時に堅苦しい事が嫌いだという事を話していた。

だからこそその対応だろう。

各国の代表の中で一番気を使つてくれているのは彼かも知れない。

「古書か」

「お母様の好みに合わせたのね」

彼がくれたのは古書だった。私が読書好きだという事を覚えていたようだ。

私は読んでいた本をしまうと、贈られた本を読み始めた。

カミラと信長による世界への手回しはほぼ形になり、月の皆も地球で問題無く活動出来るようになったある日。

月の屋敷の談話室で雑談していた私は、カミラに相談を持ち掛けられた。

「金が余っている？」

「ええ、人類の通貨が集まりすぎているの。人類の社会で色々出来るように集めたのだけど、溜まりすぎちゃって……使わないと色々」と

不味いわ」

「好きに使えばいいだろう、なぜ私に言う?」

「お母様のお金だからよ?他の皆には既に人類の通貨は持たせているわ。お母様はお金を使わないから溜まる一方なのよ」
なるほど。

私は人間の世界で金を使うような事はしていないし、大抵自分ですうにか出来る。

「それで、私の分の金は全部でいくらあるんだ?」

「お母様は日本がお気に入りのようだから円で言うわね?約一京五千兆円よ」

「それは多いのか?」

「多いわよ?出来れば何かに使って欲しいわ」

「使い道などそう無いぞ。ばら撒く訳にもいかないだろう?」

「……やめてよ?」

「分かっている。しかし……地球で人類の繁栄と四季を楽しんでいるが、金の使い道を考えなければな」

カミラがわざわざ私に使えと言ったのだ、使わなければ問題があるのだろう。

「こんな事で考え込む事になるとは思っていなかったな。」

「主様、孤児院などを経営されてはいかがですか?」

傍に控えていたジャンヌがそう提案して来た。

「孤児院か、子供を援助する施設だったか?」

「はい。主様は子供にお優しいので……それに私達の為にもなります」

「どう言う事だ?」

私が問うと、ジャンヌは微笑んで答える。

「孤児院の子供達を教育し、その中で見つけた優秀な者達を私達のグループへと就職させるのです。もちろん他の子供達も見捨てる訳では無く、しっかりと教育を施し自立させます」

「なるほど。いい案だと思います」

ヒトハがそう言いながら歩いてくる。

「そう思うか？」

「はい。使い道に困っていらつしやるのでしたら、こういった意見を取り入れてみてはいかがでしょうか？」

ヒトハは話しながら私の隣に控える。

「主様だ！何話してるの!？」

「御主人様、今日はこちらにいらつしやったのですね」

「あー、訓練はやっぱ楽しいな。……主様！おはようございますー！私が金の使い道を考えている事を話すと、皆で考えようという話になつた。」

「世界中の強者を集めた大会を開きたいです」

ヨツバがそんな事を言う。

「またそつち系じゃん！……私は兵器の実演販売会とかしたい！」

ミツハは人類の機械や兵器が好きだからな。

「ミツハちゃん。今の人類社会ではそれは難しいわよ？……御主人様、私は料理大会を開きたいです」

フタバは料理か、良いな。

世界の何処かに腕の良い者が埋もれているかも知れない。

「私は勿論、孤児院です。子供達を救う事が出来て、更に私達の為にもなります」

ジャンヌは孤児院、全く問題無いな。

「私は学校を作る事を提案いたします。そして、優秀であるにもかかわらず貧困などで見合った教育を受けられない者達を受け入れます。これはジャンヌが提案した孤児院との連携も考えております」

「孤児院の子供達が成長した時にその学校に入学させるといふ事？」

「はい」

カミラの質問に答えるヒトハ。
なるほどな。

ジャンヌがヒトハと握手してお礼を言っている。

「皆ありがとう。いずれいくつかを、場合によっては全てやろうと思う」

私は皆に礼を言い、やがて話は他の話題へと移った。

北寄り島の雪景色を背景にして、私はカミラ、四姉妹と共にテレビを見ている。

娘達も人類の世界を楽しむようになり、私は世界各地に家を買った。

金を使うという理由もあるが、本格的に人の中で暮らそうと考えたからだ。

各地の家には現地の人間を多く雇い入れ、管理させている。

侍女隊が直接管理しているのは北寄り島、中島、南寄り島の三つの島だけだ。

畳の居間で大きな炬燵に入って、テレビを見ながらみかんを食べる。

年末はこうして私と過ごす事が定着した。

来年は他の娘達と年末を過ごす事になるだろう。

「もうすぐ今年も終わりだねー」

ミツハが炬燵に首まで入りながら言う。

彼女達も寒さなど全く関係無い体だが、人のように潜り込んでい

る。「そうですね……ヒトハお姉様、おみかんを一つ下さいませんか？」

「良いですよ」

「ありがとうございます」

フタバにみかんを渡すヒトハ、フタバは受け取ったみかんを剥いて食べ始めた。

「カミラ様、今度総合格闘技と一緒に見に行きましょう。特別席を用意するので」

「良いわね。ヨツバがお勧めする試合を見に行きましょうか」

「カミラ様ならそう言うと思ってた！後でじっくり考えとく」

格闘技を見に行く話をするカミラとヨツバ。

皆、私の予想以上に人類の世界に馴染んだ。

信長は世界を歩いて回っていて、たまに帰って来ては皆から微妙な扱いを受ける土産を置いて行く。

本人が言うには、他の地域を回っている内に以前行った所が変化するから飽きないらしい。

ジャンヌは今も私の侍女のまま満足そうに月で過ごしている。

一度私を主神とした神話を作り宗教を起こそうとした事があったが、それはやめさせた。

世界樹は相変わらず念話で誰かとよく話しているが、ただ静かに過ごしている事もある様だ。

《西暦1999年も後僅か！記念すべき西暦2000年が訪れます！》

テレビでは西暦二千年を待つ大勢の人々が映されている。未だに情勢が不安定な地域もあるが、全体的に見れば世界は大体平和だと言える。

現在、私は日本に一番よく滞在するようになっていた。他の国にも四季はあるが、日本が一番良いと感じるからだ。

人類が西暦2000年を迎えた後、私は日本の首都である東京に用意した屋敷に住み始めた。

表向きは、私は月下グループ最高経営責任者の一人娘、という事になっっている。

時間の流れによって変わる事の無い私達は、時の流れによって違和感が出て来る。

雇っている人類には、私達の姿が変わらない事や、住んでいる者達が入れ替わっても違和感を感じない様にだけ手を加えさせて貰った。

他に害は無いし、給料と待遇は良くしている。

簡単に言うと、敷地内に無料で自宅を用意し家族と共に住む事が出来る。通常よりもかなり多い給金を貰えたりする。

福利厚生の実も万全だ。

その反面、求める能力は非常に高い物になっているが。

以前、ミツハに「家の庭に住宅地があるみたい」と言われたが、敷地もそれなりに広い。

侍女隊の者なら広くても少人数で問題無い。

しかし人間の手で維持するのなら相応の人数が必要なため、屋敷には常に一定数の人手が滞在している。

移動は自家用車や自家用ヘリ、自家用ジェットを使う。

人の世界で過ごすなら転移は必要な時だけにしてみたらどうか、とカメラに提案され、それも良いと感じた私は必要な時以外は人類の移動手段を使っている。

雇ってみると、人間のメイドなども中々便利だ。

何かを頼んだ時に、人間の感覚の範囲で決めて用意してくれる。

私は今日、初めてゲームを買いに行く。

カードゲームやボードゲームではなく、ビデオゲームやテレビゲームと呼ばれる家庭用ゲーム機で遊ぶゲームだ。

私が興味を持ったのはごく最近の事で、カメラが私でも楽しめる筈だ、と薦めて来た事がきっかけだった。

目的のゲームはファーストパーソン・シューターだ。

FPSとも呼ばれる物で、一人称視点でゲームの世界を任意で移動して戦うゲームらしい。

カメラが言うにはゲームの視界に映らない物は知る事が出来ず、視界外から気が付かない内に攻撃されたりするらしい。

私は、現実ではどこから何をされようとか、それが不可能なゲームなら、いい勝負が出来るのではないか、という事だ。

やってみようと決めた私は、自分で選んで購入するために現在秋葉原に向かっている。

運転手が車を走らせている中、冷蔵庫から牛乳を取り出して飲む。

この牛乳は、新しい人類が飼育している牛と言う動物の乳だ。

モー乳よりさっぱりとしているが、私のお気に入りの一つとなった。

「お嬢様。間もなく秋葉原に到着いたしますが……歩行者天国になつているため侵入は出来ません」

「入り口で降ろしてくれ。お前は何処か近場で駐車して待機している、違法駐車などするなよ？帰る時は連絡する」

「かしこまりました、お嬢様」

やがて車が止まりドアが自動で開く。

「到着いたしました」

「行ってくる」

「いってらっしゃいませ、お嬢様」

私は運転手に声をかけ、外に出た。

建物が立ち並び、多くの人々が行き交う街は騒がしい。

周囲の者達が私を見てざわついているが、いつもの様に見た目に反応しているだけだろう。

この付近にゲームを多く取り扱っている店がある、場所は調べて来たのですぐに向かおう。

「ねえ、少しこの辺りを紹介するよ。俺詳しいからさー！」

「目的地は決まっているし場所も知っている、必要無い」

「美味しい店知ってるんだ、おごるよ！一緒にどう？」

「食事をする気分ではないし金もある、他を当たってくれ」

店に行くまで男達のナンパを断りながら移動する。

見た目は子供だというのに、なぜこんなに集まって来るんだ？

ただ、意外と強引な者はおらず、断ると落ち込んでいたが素直に去って行った。

人が多く、何か問題を起こせばすぐに誰かが通報する可能性が高い事が理由だろう。

目的の店を発見した私は、家庭用ゲーム機が置いてある場所へと向

かう。

どれが面白いだろうか。

私はゲームが並ぶ棚を見る。

FPSとしか考えていなかった私は、ここで考える事になった。

ゲーム機自体の種類と、それぞれのゲーム機のFPSに分類されるゲームの多さにどれが面白いのか全く分からない。

誰かに聞いて一番人気の物と、後いくつか……いつその事全部買うか？

「あの一、お嬢さん？」

私がそんな事を考えていると隣から女の声がする。

振り向くと黒髪をポニーテールにした若そうな女が私を見ていた。

「何か用か？」

「えっ？あ……えつと……ずっと悩んでいるみたいだからどうしたのかなって思つて……」

私は意外と長い間悩んでいたのか？彼女はずっとゲームの前で悩んでいる私を心配して声をかけてくれたようだ。

ついでだ、この子に聞いてみよう。

「最近FPSと言うゲームに興味を持ったのでゲーム機と一緒に買うつもりなのだが。どれが良いのか分からなくてな、考えていたんだ」

「FPSが気になってるの!？」

私の言葉に声を大きくする彼女。

「嬉しい！女の子でFPSする子ってあんまりいないんだよね……」

私で良ければお勧めを教えるよ？」

それなりにやっているなら何も知らない私が選ぶより良いだろう。

「では頼む」

「任せといて！」

「お勧めするならコールオブフューリーかバトルグラウンドかな」

彼女はそれぞれのソフトを持って来て言う。

「何か違うのか？」

「こっちのコールオブフューリーはどちらかと言うと個人の技術が重要なゲームだね。対戦も色々ルールはあるけど敵を倒さないと貢献した事にならない事が多いかな」

そう言うってからもう一つのソフトを見せて来る。

「バトルグラウンドはチームでの戦いを楽しめるゲームだね。こっちは敵を倒せなくても索敵、回復、補給、占領と言った事で経験値やポイントを貰えるよ。私は初心者ならこちらをお勧めするかな」

「なるほど、役割がある訳だな」

「そう言う事。どちらもオンライン対応でボイスチャットも出来るから、マイクも買うと快適だよ？」

ボイスチャット、会話しながらプレイできる訳か。

「マイクも種類があるのか？」

「あるね。安くても使えるけど、ある程度良い物を選んだ方が快適かな」

ふむ……。

「バトルグラウンドを買おうと思う、マイクも頼んでいいか？」
「任せて！」

「値段は気にせず、一番良いと思う物を紹介してくれ」

「え？良いのは結構するよ？大丈夫？」

「大丈夫だ」

「んー……じゃあ……これかなあ。私も欲しかったけど手がでなかつた奴、三万円だけど……」

「ではそれにしよう」

「ホントに買うんだ。あ、ちよつと待って!?ヘッドセットもあるんだ！」

「ヘッドセット？」

「ヘッドホンとマイクが一緒の奴で、周囲に音が漏れないんだ」
なるほど。だが、私はスピーカーを使っているからな。

「うるさくても問題無い環境だし、スピーカーを使っているから必要無いな」

「意外とお金持ち？」

「それなりにはな」

「あのさ……良かったら一緒にゲームしない？私の周り是一緒にやってくれる人居なくて……あっ！お金持ちそうだからとかじゃなく……！」

慌てて言い訳する彼女に、私は携帯電話を取り出して差し出した。

「では携帯の番号を交換しよう。やる時には連絡をするし、そこから連絡してくれてもいい。私はいつでも問題無いから好きな時に連絡してくれ」

「良いの？やった！……えっと、クレリア・アーティアちゃん？……ハーフなのかな？」

「生まれが海外なだけだ……お前は倉森 千穂（くらもり ちほ）と言うのか。よろしくな、千穂」

「よろしくね、クレリアちゃん！」

「そうだ。色々と手伝ってくれた礼に、もしも何かあれば力になるう。覚えておいてくれ」

「あはは……別に気にしなくていいのに。それより、一緒にご飯食べない？」

彼女は笑って答え、一緒に食事を食べに行かないかと誘って来た。私はその誘いに乗り、彼女と食事をしてから別れ、帰路についた。

「帰ったらゲームが出来るように準備をするか……私だ、ゲームをするための環境を整えて欲しい。……ああ、それはもう買ってある……それで構わない、頼んだぞ」

帰りの車で家へと電話をして準備を頼んだ、千穂と一緒にやってみ

るか。

「ただいまー」

「お帰りなさい」

秋葉原から帰った私は、すぐに自分の部屋へ行く。

今日は色々あって自分の買い物を忘れちゃったよ……。

そのままベッドへ倒れ込み携帯を取り出すと、友達に登録してあるクレリア・アーティアの文字を見る。

見た時は衝撃だったな……。

ゲームの美少女がそのまま現実に出てきたような美しい女の子だった。

周りの人達も完全に緊張で固まってたもんね。

私達が移動すると周りが騒めいていたし……でもあの子全く気にしてなかったな。

……もう慣れちゃってるのかも。

私は彼女に声をかけた自分に驚いてるけどね！

何か悩んでるように見えたから思わず声をかけてしまった。

でもあんな子がゲームを、しかもFPSをやろうとしているとは……嬉しいね！

ホント周りではないからなあ……ゲーム自体しないか、ゲームはするけどFPSはやらないって子しかない。

後は……なんかお金持ちそうだったなあ。

そんな事を考えていると持っている携帯に着信があった。
クレリアちゃんだ！

「も……もしもし？」

「千穂、今日の夜ゲームをするつもりなんだが、一緒にやるか？」

いきなり向こうからのお誘い！これはやるしかないよ！

「やるやる！時間は何時が良いのかな？」

「千穂の好きな時間で良いぞ、こちらが合わせる」

なんだか申し訳ないなあ……。

「えっと……じゃあ……」

私は時計を見る、夕ご飯が七時位だから……先にお風呂に入っちゃって……。

「じゃあ八時くらいに一度私から連絡するね？」

「分かった、じゃあな」

彼女がそう言うのと電話が切れる、緊張しちやったよ……。

その後、私は先にお風呂に入り、夕食までの時間で勉強をした。

ゲーム用に部屋を用意した私は、千穂とゲームをする約束をした後、時間までゲーム部屋でのんびり過ごす事にした。

「人間の女の子の友達が出来たらしいわね？」

部屋に入って来たカミラが、私の隣に座りながら言う。

「店で相談に乗ってくれてな」

「こちらで調べたけれど、高校一年生で春には二年生みたいね」

「そうか」

「若いわね。ゲーム仲間として長く過ごせるんじゃない？」

「ゲームが面白ければな。今夜やってみるが、期待外れだったらやめるぞ」

「彼女はどうするの？」

「付き合いは続ける、友人とはそういう物だ」

「そうね」

私はカミラと話しながら約束の時間まで過ごした。

「お母様、そろそろ時間じゃないの？八時よね？」

「大丈夫だ、千穂から連絡が来る事になっている」

私はそう言うのとゲーム機を起動した。

そのまま待っていると、私の携帯に着信が来る。

「私だ」

「あ、クレリアちゃん？今日はよろしくね。それで……どこまで準備したのかな？」

電話に出ると、千穂が尋ねて来る。

「もうプレイ出来る状態だ、メイドの中に詳しい者がいたので頼んだ」

「メイド!?!……ええと、じゃあゲーム機を起動してくれる?」

「もうしている」

「あ、そうなんだ。じゃあ私がフレンドを送るからIDを教えて?」
私は彼女にIDを教える。そしてしばらくするとフレンド申請が送られて来た。

「今送った申請を選んで、登録するを選んで?」

「分かった……選んだぞ」

登録しましたと表示され一覧に「ちいねこ」と表示されている。
本名はつけない方が良いとメイドに言われたが私は「くれりあ」と付けている。

「クレリアちゃん本名付けたの!?!危ないよ!?!」

「誰も本名とは思わないだろう。それに、そういった心配は私には必要無い」

千穂が心配するが私はそう答える、本当に何も問題無いからな。

「んー……分かった。何かあったら両親に言うんだよ?」

「分かった」

両親はいないが、こう言っておく方が良いだろう。

「よし、じゃあゲームからバトルグラウンドを選んで起動してね」

「……起動したぞ」

私はゲームを起動する、オープニングらしきものが始まりその後タートルへと変わった。

「オンラインモードは分かる?説明書に書いてあるはずだけど」

「大丈夫だ」

「じゃあ今回は私が誘うけど、一応誘い方は教えておくね?オンラインプレイを選んだ後、セレクトを押すと招待を送ると招待を受ける

の二つが出るの。招待を送るを選ぶとリストが出るから、その中から招待したい人を選んで招待するを選ぶと、相手に招待が送られて、相手がそれを受けると分隊に合流するからね」

「分かった」

「じゃあ送るよー。通知が届いたらセレクトで招待を受けるを選んで、私の送った招待を選んで受けるを選ぶと合流だよ」

送られて来た招待を受けると私が分隊に参加した、私と千穂だけのようだ。

「おー、来た来た。分隊は五人まで入れるけど、今日は練習だし他の人は入れないで二人でやろうね」

「分かった、この画面で兵科を選ぶんだな？」

「そうだよ。あ、その前に携帯じゃなくてボイスチャットに切り替えよう。設定でボイスチャットをオンにして？」

「設定だな……どうだ？」

「あーあー……どう？聞こえる？」

スピーカーから彼女の声が聞こえる、上手く行ったようだ。

「聞こえるぞ、私の声はどうだ？」

「ぼつちり聞こえるよ！じゃあ兵科を選ぶほうか」

「それぞれの兵科は大体予想が付くな」

「まあ名前がそれっぽいからね。突撃兵が敵を倒すのがメインの兵科で、偵察兵が索敵と狙撃、援護兵が弾薬の補給と援護射撃、衛生兵が回復と蘇生だよ」

「順番にやっていくか、まずは突撃兵だな」

「うん、全部試して自分にあつた兵科を探すといいよ」

「武器は少ないな」

「それぞれの兵科で戦って、昇進すると少しずつ銃とカスタムパーツが増えて行くよ。でも、後から使える物が絶対に強い訳じゃないから……これも自分に合った銃とカスタマイズを探す感じだね」

「なるほど、なかなか奥が深いな」

「遊んでいるうちに何となくこれが良い、って言うのを感じるかも」

「そうか、まずはやってみよう」

「そうだね、まずはやってみようか。これからやるのはコンクエストって言うモードで、敵陣地を奪って相手の兵数をゼロにした方が勝ちっていうルールだよ」

「分かった」

ロードが入り配置選択画面へ切り替わる、どうやらすでに戦いが始まっているようだ。

「まずは一番敵陣に近い拠点からスポーンしよう」

「了解だ」

スポーンすると周囲から銃声が聞こえる。

「じゃあCを攻めてみよう」

「よし、行こう」

千穂の後ろを歩きながら照準の反応を確認める。

「クレリアちゃん！敵！」

建物の陰から出て来た敵の胴に照準を合わせて撃つ、撃つたびに照準が上に跳ねたが倒せた。

「ナイススキル！」

千穂が言う、何故か照準が上に上がるな。

「千穂、撃つと照準が上に上がっていくのだが」

「それはリコイルって言って、撃つた時の反動で銃がブレるんだよ。」

同じ所を撃ち続けるならそれを抑えながら撃つ必要があるんだ」

「何だと？」

私達が試しに撃つた時はそんな事は無かったが、それは私達だからだな。

「どうしたの？」

「何でもない。やはり狙うのは頭が良いのか？」

「うん、胴体より頭がいいね。慣れないうちは難しいかも知れないけど」

「やってみる。千穂、そろそろ移動した方がいいんじゃないか？」

説明をしている間、私達は全く動いていない。他の場所が奪われそうだぞ。

「あ?!不味い！負けちゃう！」

私達は目的地へと向かう。

途中で敵はいなかった。攻められている分、こちらは手薄なよう
だ。

「占領だけど、一定の範囲内に相手より多く人数がいれば占拠ゲ
ージが増えて行くからね」

「了解だ、ゲージが動かない時は人数を増やすか殺して減らせばい
い訳だな？」

「その通り。それと占拠し始めると敵にもその情報は表示されるか
ら、阻止しに来ると思ってる？」

「分かった」

私は二階に、千穂は一階に潜みゲージを上げているとゲージが停止
した。

誰か来たか。

「敵は探してると言うから隙を見て倒そう」

「了解」

二階への階段が見える位置に伏せていると敵がチラチラと頭を出
して警戒しながら上がって来た。

私は頭を出した瞬間に頭を打ち抜く。

「凄い！クレリアちゃん！ヘッドショットだね！」

そう言われた直後、私も死亡した。

「やられたか」

「ありやー……後ろから来てたのか。私の所には来なかったから二
人とも二階へ行っただね」

「なるほどな」

これがカミラが言っていた事か。

面白いじゃないか。

目視と仲間からの情報を見て、予測して動く必要がある訳だ。

最終的にその試合は勝つ事が出来た、私の成績は15キル8デス

だった。

正面からの打ち合いでは殆ど負けないな。

「……クレリアちゃん初めてだよね?」

「そうだぞ?」

「えーとね。大抵の人は、特に初心者の方はキルデス比が1……つまりキルとデスが同じ位になるかデスの方が多いい事が殆どなんだけど……」

「そうなのか」

人間と私とでは反射の速度が全く違う。照準の移動速度は早く感じないしリコイルも分かれば問題無い。

ただ、不満な点もある。

「千穂。照準の速度が遅すぎる、もっと早く動かせないのか?」
これだ。

どんなにコントローラのスティックを倒しても一定以上の速度が出ない事が不満だった。

「えつと……オプションの感度を上げると早くなるけど、操作が大変になるよ?」

「問題無い、今の速度では遅すぎる」

私はオプションを開いて感度を最大にした。

「そうなんだ……もしかしてとんでもない子を引き込んだりしたかなあ?」

「よし。これでもう一戦やってみるか、他の兵科も試したいしな」

「オツケー、じゃあこのままもう一戦行ってみよう。兵科が合わないなど思ったら死んだ後、リスポーンする前に変えられるからね」

「分かった」

それから何戦かプレイしたが、中々面白かった。

設定を変えても照準の速度は遅かったが、これ以上は上がらないから仕方がない。

恐らくどれだけ早くしても私には遅いままだろう。

私の最高戦績は35キル4デス程になった。

正面からの打ち合いでは相手が多すぎなければ撃ち勝つ事が出来た。

背後を取られた場合は流石に負ける事もあるな。

「クレリアちゃん凄いな!?!」

「他の者達の援護があるから出来る事だ、私だけの力ではない」
これは本当だ。

弾薬が尽きれば遠距離からの攻撃が出来なくなり、回復が無ければいつか撃ち負ける事になる。

偵察が無ければ敵の動きを把握出来ず、後ろを取られる事になるだろう。

「思っていたよりも面白いな」

「本当!?!これからもやってくれる!?!」

「やるつもりだ、これからも一緒に遊んでくれると嬉しい。新作が出たら次も買うだろうな」

「やった!FPS女子仲間ゲット!」

大喜びの千穂だがそろそろ夜も遅い、騒ぐのも限界だろう。

「所で、時間は平気なのか?お前は学校があるのだろうか?」

「あつ……不味い怒られる!今日はこれで終わるね!?!また遊ぶ時はゲーム機のメールか電話……電話の方が確実かな?電話するから!今日はありがとう、また明日ね!」

「お休み千穂」

「おやすみ!」

そう最後に言葉を交わしボイスチャットが切れ、千穂が退室した。私は部屋の内線を使い女執事につなぐ。

「ゲーム用の部屋の設備を更に整える。念の為、もう一人分の機材を揃えておいてくれ……ああ、同じ物で良い」

その後、詳しいメイドに同じ部屋でオンラインプレイをするなら音が混ざらない様に人数分のヘッドセットがあった方がいいと言われ、揃える事にした。

「マジ!? やった! くれりあさんとちいねこさんの分隊だ!!」

「俺、一緒の分隊になれる事なんてこの先無いと思ってた……」

「頑張るからよろしくな!」

「皆、よろしくね」

「よろしく頼む」

私は千穂と共にバトルグラウンドをプレイし続け、世界ランクの一位になった。

千穂がランキングを見ていて発見し教えてくれたのだが、言われるまで全く気にしていなかったな。

彼女はランクには入っていないが、私がいつも一緒にいるフレンドとして知られている様だ。

ゲームシステムの縛りがある以上、照準の速度や武器性能などが設定された範囲から逸脱する事は無い。

しかし、敵を見つけてからの反応と状況の判断速度の違い、操作のミスを全くしない事。

こういった所で大きな差が生まれ、私が一位になったのだと思う。ゲーム内のランキングの一位にずっと君臨する私を他のプレイヤー達は噂した。

チートを使っているという物から、運営が用意したAI説も浮上した。

色々と言われている間も、私は普通にプレイしていた。

その後、一度だけ運営会社からアカウント停止を受けたが、メイドが提案した「撮影したプレイ動画を送る」という方法を試した所、すぐに停止が解除された。

AI説はすぐに消えたが、チート説はそれから残っていた。

しかしそれも、運営会社が私の許可を得た上で録画していたプレイ映像を公開し「現在世界ランク一位であるプレイヤーのくれりあがチートを使用していない事を確認した」と発表した事で消える事に

なった。

これにより世界中のFPSプレイヤーは、私の事を腕の良いFPSプレイヤーであると認識する様になった。

「俺くれりあさんのファンで！公式が公開した映像見てこのゲーム始めたんです！まさかこんなに早く会えるなんて！」

このゲームでは名前は重複出来ない、だからこそ確実に私であると分かる訳だ。

私達二人の分隊を作り、解放すると一瞬で人が埋まる。

ゲーム上に表示はされているので、招待限定が解除されるのを待っている者達がいるらしい。

私達とプレイするためだけによくやる物だ。

「海外の人だと、クレリアちゃんは分かるかもしれないけど私は何言ってるか分からないよー」

私は現在の人類の言語は全て話せるし、知らない言語も聞いている内にすぐ分かるようになるが、人間である千穂は勉強しなければ分からない。

「勉強あるのみだな。英語くらいは話せるようにしておくと便利だと思うぞ？」

「クレリアちゃんは何でそんなに話せるの？」

「自然に覚えた」

「なにそれ!？」

嘘では無いと思う。

そんな日々を過ごしながら月に、島に、各国の家に、その時の気分で移動しながら娘達との時間も大事にしつつ過ごしていた。

「あ、もしもクレリアちゃん!？」

「どうした千穂?！」

東京の家のゲーム部屋に居た私は、千穂からの電話に出る。

「しばらく電話が通じなくて！何かあったんじゃないかって……」

月に居ると届かないからだな。

「電波の届かない所に滞在していただけだ。心配するな」

「良かったー……ゲームもしてないみたいだったから……」

「ネットがつながっていない所だからな」

「そっか、今日はこれからどうするの？」

「やるか？」

「いいねーじゃあすぐ準備するよー」

そう言う彼女の言葉を聞きながらゲーム機を起動するとメールが来ていた、時間は……私が月にいた時か。

「ちよつと待ってくれ、メールが来ている」

「はーい」

メールはどうやらゲームの開発会社からの物のようだ。

そのメールには今度おこなわれる世界大会にゲストとして是非参加して欲しいという事が書かれていた。

「千穂、開発会社からのメールが来ていた。バトルグラウンドの家庭用ゲーム機世界大会のゲストに来て欲しい様だ」

「うそっ!?!ほんとに!?!凄いやっ!」

大騒ぎする彼女だが、どうするか。

「千穂は行けないのか？」

「そうだね。私はランク外だから行けないし、行けたとしても行かないよ?その大会は強者のみが出れるんだよ!」

何やら熱く語る千穂、そういう事ならやめておくか。

「ではやめておこう」

「え!?行かないの!?!もったいないよ!行った方が良いと思うよ?こんな機会そう無いもん」

彼女は参加を薦めてくる。

「世界の上位が集まる大会だから良い試合が出来ると思うし、きつと楽しいよ?」

なるほど……手ごたえのある試合が出来るのなら行ってみるか。

その後、私は開発会社と連絡を取り、正式に引き受けた。

開催は半年後で、開催三日前に現地に入って貰える様にアメリカ行

きの飛行機のチケットを送って来るらしい。

大会……正式名称は「バトルグラウンドコンシューマー世界大会」というらしいが、その大会へのゲスト参加が決まった私はいつも通り日々を過ごしていた。

「合宿しようよー！」

「合宿？」

いつもの様にゲームをしてボイスチャットで会話していると、千穂が言った。

「大会に出るクレリアちゃんの特訓として、私の家に泊まりに来ない？」

「千穂の家に？」

「うん、一日一緒に遊ぼうよ」

……待てよ？

オンラインプレイをするゲームの特訓で、泊まりに行つて遊ぶ？

「それは練習になるのか？私がお前の家に行つても意味がないような気がするが……オンラインプレイをするゲームで泊まってどうするんだ？」

千穂の家に二人でオンラインプレイする環境は無い筈だ。

「あつ……私がクレリアちゃんのをプレイを見て勉強するとか？」

「それだとお前の特訓だろう」

「う……泊まりに来て欲しくてよく考えずに言いました……」

千穂らしいと言えば千穂らしい行動だ。

「いいぞ、泊まりに行こう」

「え!?! 本当に!?!」

「それくらい何の問題も無い、泊まって欲しかったのなら普通に言えればいいだろう」

「ええー？私の苦労は一体……」

「それで、いつにするんだ？」

メイドが部屋の冷蔵庫から牛乳を取り出して用意してくれた。

「来週の土日で！家族にはいつか来るって言ってるんだ！」

「来週の土日だな」

「うん！出来れば朝から来て欲しいな……九時位とか……」

「分かった、九時にそちらに着くようにする」

「じゃあ決定ね、楽しみー！」

約束をしてから普通にゲームをプレイして、その日は過ぎて行つた。

約束の日、私は車に乗り千穂の家へと向かった。

出かける前に住所を聞いていない事に気が付いたが、運転手が知っていたため問題は無かった。

一日分の着替えをポストンバッグに入れて持ち、土産も用意した。泊まるための持ち物一式はメイドに用意させたが、中々良い物を選んでくれたようだ。

「到着いたしました。お嬢様」

「ありがとうございます、明日の帰宅時間は追って連絡する」

「かしこまりました」

住宅街で停車した車から降りると一般的な一軒家があり、表札には「倉森」と書かれている。

玄関のボタンを押すと中で音が聞こえ、誰かが来る足音がした。

「はい、どちら様ですか？」

「約束通り来たぞ」

「クレリアちゃん！待ってたよー！」

私はそのまま家の中に招かれ、リビングへと移動する。

そこには彼女の両親だと思われる中年の男女と、若い男がいた。彼女から弟がいる事は聞いている、彼がその弟だろう。

「始めまして、私はクレリア・アーティアと言う。今日は招待ありがとうございます、一日だけだがよろしく頼む」

「凄く綺麗な女の子ね……。私は千穂の母親の倉森かなえよ、よろしくね？」

かなえは微笑んで言う、千穂は母親似か。

「私は父の倉森悟（くらもり さとる）だ。君は名前が日本名ではないけど、ハーフなのかい？」

「生まれが海外でな、向こうの名前を付けられただけだ。私は日本人だよ」

私の見た目なら、日本人が一番違和感がないだろう。

「なるほど、将来が楽しみな美人さんだね……。言われ飽きてるかもしれないけど」

そう言って悟は笑う。

二人共悪い印象は感じない、千穂の親だと納得出来る人柄だ。

「春斗。ほら……。あなたも挨拶しなさい」

「く、倉森春斗（くらもり はると）です……。よろしくお願いします」

「よろしく、千穂から話は聞いているよ」

少し緊張しているようだ、この位の年齢は不安定な事が多いからな。

「簡単な物だが手土産を持って来た。千穂から父親はワインが好きだと聞いていたので、これを」

私はメイドに用意させたワインを取り出して渡す。

「これはご丁寧に。後で味わわせて貰うよ」

「母親と弟は甘い物が好きだと言っていたので、私のグループのケーキを持って来た。常温でも保存出来て、それなりに長持ちする物だ」

「あらー！ありがとうございます、頂くわね。ほら春斗、お礼」

「あ、ありがとうございます……」

取り出したケーキを手渡して少し話した後、私は二階の千穂の部屋に案内された。

「荷物はここに置いてね」

「分かった」

彼女の部屋は……そういえば一般的な女子高生の部屋をよく知らないな。

白と黒色で揃えられた家具とベッド、テレビの近くにはゲーム機が置いてあり、壁には制服がかけてある。

漫画もあるな、参考書も置いてある。

「千穂は勉強は出来る方なのか？」

座りながら千穂に問う。

「まあそれなりには、成績を維持する代わりに好きなだけゲーム出
来てる感じかな」

「時々プレイしなくなるのは勉強のためか」

「うん、勉強が優先だね。後はテストの時とかもしないかな」

「そうか」

その辺りはしっかり考えている様だ。

「そんな事よりゲームの話しよ！」

その後、雑誌を二人で見ながら新作のゲームの話をしたり、私が千穂にプレイを見せたりしながら夕食までの時間を過ごした。

私は夕食後に千穂と風呂に入っている。

二人で入ると狭いかと思っただが、私が小柄なので問題無かった。

「クレリアちゃん肌綺麗だねー」

「そうか」

「いいなー」

そう言いながら私の肌を見ている。

私の姿は人間としての特徴を作ってはいるが、基本的には以前から全く変わっていない。

長い付き合いだ。

彼女はとても羨ましそうに私の体を眺めている。

「お前の肌は悪くは無いと思うぞ」

人間の中では綺麗な肌をしている方だと思う。

「ありがとう」

そう言って彼女は笑う。

「今度はお前が家に泊まりに来るか?」

「いいの!?!」

狭い風呂場で千穂の声が響く、そこまで反応するとは思っていなかった。

「良いぞ、友人だしな」

「後で予定を決めよう!」

「そうだな」

風呂から上がった私達は、再びゲームで遊ぶ。

それから夜更かしする事無く夜には就寝し、私は翌日の午前中に帰宅した。

クレリアちゃんが帰った後、私達の話題は自然と彼女の話になった。

「独特な話し方だったけど、可愛くていい子だったわね。あなた」

「そうだね。若いのに良く出来た子だった、手土産まで用意しているとは……」

私の目の前で両親がクレリアちゃんの事を話している。

「それだけじゃないよ。クレリアちゃんはバトルグラウンドの世界ランク一位なんだから!今度アメリカの大会にゲストで出るんだよ!」

「マジで!?!サイン貰っとくんだった!」

弟が叫ぶ。

緊張してろくに話せなかったのにそんな事出来るの?

「良く分からないけど凄いのねえ……」

「そうだな」

駄目だ、二人は全く分かってない。

「姉ちゃんいつの間にあんな凄いかわ……ゲーマーと仲良くなったんだよ」

誤魔化しても無駄だからね、見とれてずっと気にしてたの知ってるから。

クレリアが帰った日の夜。

千穂と春斗が寝た後、悟とかなえはクレリアから貰ったワインを開けようとしていた。

「さて、何をくれたのかな?」

そう言いながら包みを丁寧に剥していた悟の動きが止まる、その様子を不審に思ったかなえが声をかけた。

「どうしたのあなた?」

「これは……嘘だろう!?!」

悟はワインが好きで、それなりに詳しい。

だからこのワインの事も知っていた。

「サン・ルイン……しかも六十年前の当たり年の……」

「な、なに……?何か凄い物なの?」

夫の様子に不安になったのか尋ねるかなえ。

「……超オールドヴィンテージワインだよ」

「た……高いの……?」

「私が調べた時は、これと同じ物が……三億以上で販売されていた……」

「さっ!?!」

あまりの金額に体が跳ねるかなえ。よくて三千円程の物だと思っていたかなえには刺激が強すぎた。

「これは返そう……受け取れない……」

「そ、そうしましょう……」

「そう言えば……ケーキも貰っていたよな?」

「ええ……でもケーキにはそんな物無いわよね……？」

「念の為に見てみよう。ワインがこれだったんだ、何かあるかもしれない」

「そうね……持って来るわ」

かなえは恐る恐るケーキを持って来る。

袋から出すと高く買って買った事は無いが知っているケーキが出て来た、月下グループの孫会社である有名店の一本一万円のケーキだ。

三億で感覚が麻痺しているのかその金額にホッとする二人、だが二人はほぼ同時にある事に気が付き再び固まる。

彼女はこれを渡す時何と言った？

確か「私のグループのケーキを持って来た」と言っただけ……。

「あなた……」

かなえが不安そうに悟を見る。

「言わないでさ。友達なんだ、何も問題はないよ」

翌朝、二人は疲れたような表情をしており、千穂に心配された。

千穂の家から帰った次の日、私は彼女の両親から連絡を受けた。

ワインは受け取れないと言う。

どうしてかと聞くと、三億円以上するようなワインを手土産として受け取る訳にはいかないと言われた。

メイドが用意したので問題無いと思っていたが……。

用意したメイドに聞くと「大事なご友人の様でしたので見合った物をご用意いたしました」と返って来た。

彼女達には一般的な人類の感覚も期待していたのだが、私の家に仕えているせいで少し感覚が私達に引つ張られているのかもしれない。私は数十万円程度の物を用意するように言い、千穂達が居ない時に家を訪れてワインを交換した。

二人はそれでも高すぎると言ったが、説得して帰った。

千穂の家への泊まりが終わった数日後、彼女は泊まりに行く日を早く決めておきたいと言って来た。

「私はいつでも良い、いつがいい?」

ゲームをしながら会話する私達、時にはゲームと関係ない話をしながら戦う事もある。

「そっか、じゃあ……そっち行っただよ!」

「了解だ」

待ち構えてヘッドショットをする、これでここは占拠出来るだろう。

「五月のゴールデンウィークの六日間は駄目かな?」

「休みの間ずっと泊まるという事か?」

「違う違う!その期間の平気な間だけだよ!」

「お前が問題無いなら六日間泊まっても構わないぞ?泊まってみて居心地が悪ければ途中で帰ればいいだろう」

「えっ!?!……大丈夫?ご両親の予定とかは?」

「駄目なら許可などしない、どうする?」

「そっか、じゃあ……いい?」

「いいぞ」

「やった!じゃあ決まりね!」

そんな事を話しながらもゲームでは勝利を収めた。

FPSゲームを気に入り千穂と共にプレイしている私だが、他のゲームもやっていない訳ではない。

面白いと感じる物は感じるが、微妙な物も多い。

例えば、対戦格闘ゲームなどは相手の行動に簡単に合わせる事が出来るのでまず負ける事が無く、あまり面白くない。

ロールプレイングゲームは懐かしさを感じる物が多い。

剣と魔法の世界やエルフ、ドワーフ、獣人などが出て来る物は特にそう感じる。

現在、一般的にファンタジーと言われている世界観の原形は魔法人類の世界だ。

以前、友人に魔法人類の事を話した事がある。

後にその友人は私の話した魔法人類をもとにして、現在のファンタジー世界の原形を作り上げた。

だからエルフは森人と似ているし、ドワーフも大地人に似ている。獣人はかつて存在した彼らそのままだ。

ただ、懐かしく感じる事はあっても面白いかと言われれば、そうでも無い。

大抵の作品の登場人物達は私から見ると行動が甘く、何よりストーリーが決まっている事が問題だった。

思うように行動出来ないのはマイナスだ。

中にはある程度自由に行動出来る作品もあり、それはそこそこ楽しめたが。

頭を使うゲームや綿密な作戦を練る必要があるゲームはあまり興味を引かなかった。

カミラ達に色々押し付けている事から、月の皆もきつと分かっている。

最終的に力でひっくり返そうと考える私は頭脳労働に向いていない……と。

今までそういった地位についても、殆どを周囲の者に任せていた。力だけでは不可能な事が存在し、必要に迫られればやるかもしれないが……それ以外は気分次第だな。

後は、私が今の人類に伝えた魔法人類考案のオセロやトランプだ。

これは今でも私達がやっているのだから、長く楽しめると言える。更に現在はオンラインで対戦出来るようになってきているからな。

こうして私は手広く色々なゲームに触れている。

やはり今の所はFPSが一番だが、ランダム要素のあるローグライクも中々好みだったな。

2000年も五月に入り、ゴールデンウィークの初日を迎えた。今日から千穂が泊まりに来る予定だ。

……そういえば、千穂は高校二年生になったのか。

「お嬢様、そろそろお時間です」

色々と考えているとメイドから声がかかる。

千穂を九時に迎えに行く約束だ、そろそろ行こう。

「お世話になります……千穂、失礼な事はしないようにな」

「大丈夫だよ、心配しすぎじゃない？」

車の前で千穂の両親と挨拶をする。

彼女は両親にかけられた言葉に返事を返すと、車へ乗り込んだ。

「千穂は責任を持って預かる、では行こう……出してくれ」

私も彼女の両親に声をかけてから車に乗り込み、出発させた。

一度泊まりに来た時から、彼女の両親が妙に私に礼儀正しい気がするな。

「言い忘れていたが、忘れ物は無いか？」

「大丈夫、出かける前にも確認したから！」

クレリアちゃんに車で迎えに来ると言われて待ってたけど、何か想像と違う……。

多少お金持ち……みたいな事を言っていたような気がするけど。

運転手さんは服装といい態度といい、親という感じじゃない……専属の運転手？

車も高そうで大きいし、冷蔵庫とテレビまでついてる……！これが

多少？

「私の部屋で一緒に寝るのだったな？」

予想外の状況に戸惑っているとクレリアちゃんが声をかけて来た。

「うん、お泊りといったら同じ部屋で寝ないとね」

ゴロゴロしながら眠くなるまで話すのがいいんだよ！

色々とはなるけど、今更気にしても仕方ないよね。

それよりもクレリアちゃんと楽しもつと。

「大会って7月の末だったよね？」

「そうだな」

クレリアちゃんは何とも無さそうに答える。

二か月以上あるけど、私だったらもうソワソワしてるかも。

「この冷蔵庫って何が入ってるの？」

「色々入っている。気になるなら見てみると良い、飲みたければ飲み」

「良いの？じゃあ……」

私は冷蔵庫に入っていた高そうな飲み物を避けて、ジュースを飲みせて貰った。

クレリアちゃんとお話ししながらふと周囲を見ると、周りに家が無くなっている。

「ねえ、クレリアちゃん。周りに何もなくなっちゃったけど……ここはどこななの？」

「ここは隣に座っているクレリアちゃんに聞く。」

私は隣に座っているクレリアちゃんに聞く。

「私の家の敷地内だ、ここは庭のような物だな」

「……え？」

この自然公園みたいな所が庭……？

車で移動する必要がある庭って……。

クレリアちゃんって私が思っていた以上に凄いお金持ちなのでは……？

家に着いた私達は車から降り、控えていたメイドから挨拶を受けて入り口に進んで行く。

「し、城……？」

千穂がそう呟くが、建築様式が違う。

「城ではない、一般的な日本建築の家だ」

「……一般的？」

何ともいえない表情の彼女だが、規模が大きいただけで間違っではないはずだ。

「倉森千穂様。ようこそいらっしやいました……お荷物をこちらへ、すぐに必要な物はございますか？」

「あ、ありがとうございます！大丈夫です！」

千穂は噛みながら荷物を手渡す。

「お嬢様のお部屋にお持ちいたします」

そう言っつてメイドは去って行った。

「お嬢様、これからどういたしますか？」

別のメイドに尋ねられる。

「ゲーム部屋に行く。千穂、こっちだ」

「かしこまりました、後の事はお任せください」

私達はそのままゲーム部屋へと移動する、千穂は周りを見回しながらついて来た。

「好きにくつろいでくれ」

「ひろっ!?!……うわあ！ゲーム一式揃ってる！」

部屋に驚きながらも、ゲームを見つけて喜ぶ千穂。

「ここで一緒に出来るようにメイドに揃えさせた」

「やろうー！」

目を輝かせていい切った彼女はとても嬉しそうだ。
「そう言うと思ったよ」

それから彼女は時々訪れるメイドに恐縮しながらも、私とゲームをしている。

ある程度の時間が経ち、休憩を挟んでいる時に千穂が尋ねて来た。
「あの、クレリアちゃんのご両親は？ご挨拶とかしとかないと……」
私はそう言われて人としての設定を思い出す。

「両親は忙しくてもう長い間会っていない。ここは私に用意された家だが、忙しくて会えない両親がせめて苦労しない様にと用意した物だ」

「……っ!? そうなんだ……」

彼女の表情が歪む。

「言っておくが寂しい、悲しいという感情は無いから平気だぞ？」
そう言うのと彼女が私を抱きしめて来た。

「分からないだけだよ……大丈夫。私はずっと友達だから……傍に居るから……」

何やら変な感じになったぞ……この設定で平気なのだろうか。
しばらくそうしていたが、やがて彼女は私を開放した。
その目は少し赤い。

「でも、ご両親は何をしているの？この家を見る限りかなり凄いお金持ちみたいだけど……」

「月下グループの取締役会長と代表取締役社長をしている」
「……納得したよ。自然公園みたいな広い敷地と大きな家、多くのメイドさん達。どれだけお金がかかるのか分からないけど、並のお金持ちじゃ無理だと思ったし……」

千穂は私を見ながら話す。

「私はずっとクレリアちゃんの友達で居たいけど……いいかな？」
「お前が私に敵対せず、今のままでいるのなら友人で居られると思

うぞ」

「敵対って……あはは！そんな事する訳無いじゃない！」
彼女は笑いながら言うが、人類の変化は激しいからな。
ただ、彼女がそうなる可能性は限りなく低そうだ。

私達はゲーム部屋で昼食を取った後、私の部屋へ移動する。

彼女が私の部屋の広さやベッドの大きさに一通り驚き、落ち着きを
取り戻した後、そのまま部屋で過ごし夕食も取った。

食事の美味しさに感動しながら食べていた千穂は、恥ずかしそうに
しながらもおかわりが出来るかを聞き、一度おかわりをした。

その後は風呂だ。

千穂は私の部屋に運び込まれていた荷物から服を引っ張り出し、つ
いて来る。

「うわぁ……凄い……」

風呂を見て呟く千穂。

「私は広い風呂が好きだからな」

「クレリアちゃんは着替えを用意しなくていいの？」

「入っている間にメイドが用意してくれる」

「あ……そっか、クレリアちゃんはそれが普通なのか」

そんな会話をしながら千穂が浴室を歩いて行く。

「ねえ、背中洗いっこしない？」

「いいぞ」

洗い合うのは今でも娘達としているからな。

こうして背中を洗い合い湯舟に浸かり、出た後はベッドで会話して
いたのだが……。

「千穂？」

少し話していると彼女の反応が無くなった。

彼女は寝てしまった様だ、慣れない環境で疲れたのかも知れない
な。

「まだ初日だ。ゆっくり休め」
私は翌日の朝までベッドで本を読んでいた。

翌朝。

千穂がトイレに行っている間に私は服を着替える。
ただ、今日はいつものワンピースでは無い。

人間は同じ服をずっと着ないからな、私もいつものワンピース以外の服を時々着るようになった。

今日は青のストライプシャツに、白のふんわりとした生地フレアスカートだ。

「可愛い！センスいいね！」

「メイドが用意した物を着ているだけだ」

「私はこれなんだけど……」

彼女は学生用のバッグから白いゆつたりとした服を取り出した。

「中々良さそうだな」

私はゆつたりとした服が好きで、装飾品もあまりつける事が無いからな、これは良い。

「え？ただのスウェットなんだけど……」

「スウェットか」

私は内線で用件を伝える。

「今度スウェットと言う服を用意してくれ……ああ、その辺りは任せる……頼んだ」

「……なんか凄い高級なスウェットが出てきそう」

彼女はそんな事を言いながら着替えていた。

着替えも終わり、これから何をするかをベッドの上で話し合う。

「千穂はスポーツなどはしないのか？」

「スポーツかあ……。苦手とは言わないけど、やる場所が無いし……あまりやらないのに道具を買うのもねー」

そう言って彼女は仰向けに倒れた。

「私の家には色々揃っているぞ？何かやってみたい物はあるか？」

「へー、何があるの？」

「テニス、水泳……。後は卓球、バドミントン、バスケットボールなどだな。体育館やグラウンドもあるからやろうと思えば大抵のスポーツは出来ると思う」

「ほえー……。あつ、でも二人で出来る物じゃないと駄目だね」

「メイド達を連れて来る事も出来るぞ？」

「いや、それは流石に悪いよ……」

そう言って起き上がる千穂。

「無理にやる事は無い、お前がいいのならずっとゲームでも構わないしな」

「んー……。じゃあテニスしよう？ルール知らないけど……」

「じゃあ朝食を食べて少ししたらやろうか、用意をさせておこう」

「勝負だ！クレリアちゃん！」

三つの基本ルールだけでプレイする事にした私達は、メイドが用意したジャージに着替えた。

私は白の、彼女は赤のジャージを着てコートに立つ。

他には審判役と球拾いのメイド数人がいる。

「いくぞうー！」

彼女はそう言って天高くボールを投げてラケットを振り抜き……。その後にはボールが落ちて来た。

私ともう一度打ち直すのを待っていると、彼女は少し顔を赤くしたまま打ちなおした。

彼女が打ったボールはしっかりとコートに入りそうだが、バウンドしてきたボールを私は彼女が打ちやすい所へ打ち返した。

「やあー……あつー！」

力んで打ったボールがネットにかかる、私の得点表にポイントが加算された。

「ぐぬぬ……」

ネット前に転がっていたボールをメイドが回収している間に、別のメイドが私にボールを手渡してきた。

「行くぞ」

「こーいー！」

私はボールを上投げ、十分に手加減して打つ。

打ったボールは大きく山なりの軌道を描いて千穂のコートに入る。

「うりゃー！」

十分手加減したおかげで彼女も返す事が出来た、これ位で平気そうだな。

「勝者、クレリアお嬢様」

メイドの声が響き、千穂はその場に崩れ落ちた。

「ひい……はあ……もう、駄目だ……」

千穂はテニスが入ったのか何回も試合を続けた。

負け続けてはつまらないだろうから、時々勝ちを譲りながら試合をしていたのだが……彼女の体力が限界なようだ。

「無理するな。ほら、酸素だ」

「はー……はー……うー……」

私はスプレータイプの酸素を吸わせる。

その後、メイド達が彼女に処置をして回復させ、今は上体を起こしてスポーツ飲料を飲んでいる。

「あー……。こんなに運動したの久し振りかも……」

「学校では体育という授業があるだろう?」

「学校の体育はみんな真面目にやってないかな。運動部の子がそれなりに真剣にやってるぐらいで、大体は適当だよ?」

「そうなのか」

「……クレリアちゃん、もしかして学校行つた事無いの?」

「必要な教育は全て受けている。行く必要が無いし、行く気も無い」という設定だ。

「……何も勉強する事が無くても、クレリアちゃんに必要な何かが見つかるかもしれないよ?」

「考えておこう」

学校か。

今の所行く気は無いが、これから長く人類との生活が続くなら一度くらいは行ってみるのもいいかも知れないな。

テニスの後、千穂の汗を流すために私達是一緒に風呂に入った。私は汗は出ないが、風呂は何度入っても悪くない。それから昼食を取り、現在はゲーム部屋に来ている。

「運動の後はゲームするよー!」
すっかり回復し、遊ぶ気満々の千穂は元気に言うが、私は一応聞いておく。

「勉強はいいのか?」

「課題が少しあるけど、そこまで多くないから大丈夫だよ?」

「忘れないようにな」

そう言うとき彼女は悩み始める。

「うーん……確かに忘れそう。勉強はしつかりするっていう約束で自由にゲームをしている私としては、それはまずいなあ」

「決めるのは千穂だが、私は処理しておいた方が憂いなく残りの時間を過ごせると思う」

「確かに……終わらせておいた方が良いかな……?」

それからしばらく千穂は考えていたが最終的に勉強をする事に決め、ゲーム部屋で勉強をする事になった。

課題をする千穂の話に付き合いながら、二日目の午後は過ぎて行った。

三日目の朝。

「昨日の内に終わらなかったあ……」

「勉強しながら私に構うからだ。集中していれば終わっていたんじゃないか?」

朝食を終えた後、私の部屋で千穂は昨日の課題の続きをやっている。

昨日の課題中、頻繁に私に絡んでいた彼女は昨日の内に課題が終わ

らなかった。

『やつほー、クレリアさん元気ー?』

千穂と会話している私に世界樹からの念話が聞こえた。

『私は今まで体調を崩した事は無い。お前は問題無いか?』

『ボク? 元気だよー?』

問題はないようだな。

いつもなら話に付き合う所だが今は千穂が居る。

『今は友人が来ている、用があるのなら早く言え』

『用は無いよ?』

いつもの念話にたまたま私を選んだだけか。

『あと数日したら一度月へ帰る、その時になら付き合おう』

念話しながら会話も可能だが、特に用が無いのならやめておこう。

『はーい、じゃあまたねー』

のんびりとした声でそう聞こえた後に念話が切れた、また別の相手を探している事だろう。

千穂を見ると課題に集中している、この調子なら午前中には終わりそうだ。

「終わりっ!」

集中し始めた彼女の邪魔をしない様に静かに本を読んでいると、声が聞こえた。

「終わったか?」

「ぼっちり! さて……ゲームをするぞー!」

彼女は手早く片付けを終え、ゲームをしようとする。

「待て。昼が近いから先に食事にしないか?」

「あ……そうだね、その方が良いかも」

彼女は時間を確認すると、そう答えた。

少し早い昼食を取る事を決め、内線で連絡をする。

すぐに用意すると返答があったが、調理時間が掛かるから少し待つ

事になるな。

「課題を終えてお腹も一杯、時間も一杯……私は幸せです！」
そう言っつてゲームを始める千穂。

「本当にゲームが好きだなお前は」

「前より好きになったかも、一緒に遊べる友達が出来たからだと思
う」

私の事だろうか？

今までは身近な人間にFPS仲間がいなかったようだが、そんなに
嬉しいのか。

「フレンドはいるけど、ゲームだけでの関係だし……周りの友達は
FPSやらないし。……こうやって過ごせるFPS好きの友達が
ずっと欲しかったんだ」

「そうか。では好きなだけ付き合おう」

「いいねえ、じゃあよろっか!」

「そうだ!この前ネットのニュースで見たんだけど、バトルグラウ
ンドの続編を作ってるって!」

現在は夜の十時を少し過ぎた所だ。
食事を済ませ風呂も入り、後は歯を磨いて寝るだけの状態になつて
いる。

私はシルクの薄い桃色のパジャマを着て、千穂は前のは色違いの
スウェットだ。

「発売日は決まっていらないのか?」

「うん。作ってるのは発表したけど、発売日はまだ分からないみた
い」

「そうか、ではのんびり待つ事にしよう」

「私は早く出て欲しいなー。あ、そう言えばクレリアちゃんはPCは買わないの?」

私の方を向いて言う千穂。

「パーソナルコンピュターか」

「今時その名前で呼ぶ人は少ないけどね」

千穂はそう言って笑う。

「便利だという話は聞くが、私は持っていないな」

「PCにもFPSゲームがあるんだよ。バトルグラウンドもあるし、家庭用とPC版は大体分かれてる事が多いんだ」

「何故だ?」

「操作性が全く違うから。これは私の意見だけど……慣れるとマウスとキーボードの方が強い事が多いんだよね」

「という事は、私の成績は家庭用の世界ランクなんだな?」

「そういう事。PCをやっている人は家庭用を下に見てる人もいるから……そういう人達にはクレリアちゃんは二軍のトップみたいな感じにみられてると思う」

少し表情を暗くする千穂だが、そんな事はどうでもいい。

「好きにさせておけばいいだろう。それよりも、PC版には今よりも強い相手がいるという事だな?」

「そうだね、PC版の方が強い人が多いと思う」

「なるほど。よし、大会が終わったらPC版もやってみるか」

「クレリアちゃんならまた一位になれると思う。後……PCでも私と一緒にやってくれる?」

一緒と言う事は、彼女はPCを持っているのか。

彼女の部屋に泊まりに行った時にPCらしき物を見た覚えが無いが、購入したのか。

「良いぞ。ただ、やるのは世界大会の後にする」

「うん!これからも一緒に遊ぼうね」

彼女はそう言って笑った。

翌朝、私はメイドに全国大会後にPC版をプレイする事を伝え、それまでに環境を整えておくように頼んだ。

「なんかあつという間に感じたなあ……。泊めてくれてありがとうね、楽しかったよ!」

「そうか、私も悪くは無かったぞ」

ゴールデンウィークの最終日を迎え、私は彼女を自宅へと送り届けた。

千穂は私とゲームや話をしたりスポーツをして楽しそうだったな。彼女らしく大半はゲームだったが。

私は彼女を送った後、月へと移動した。

楽しかったな……。色々心臓に悪い事もあったけど。

私はそう思いながら約一週間ぶりの自分の部屋でベッドに倒れ込む。

お金持ちなんだろうとは思っていたけど……。

クレリアちゃんが月下グループの一番偉い人達の娘だったのは流石に驚いたなあ……。

「んー……」

私は枕に顔を埋めながら声を洩らす。

……クレリアちゃんは大切な友達だ、嫌いになる事は無いと思っ
ているけど……。

でも……おかしく感じちゃった事がある。

数日間ずっと一緒に居て、遊んだから気が付いた事……。

クレリアちゃんは私といた間、一度もトイレに行っていない。

クレリアちゃんの部屋にもゲーム部屋にもトイレはあったけど一
つだけだし、私は何度も行ったけどクレリアちゃんは結局最後まで行
きたそうな素振りすら見せなかった。

後はスポーツ。

私が疲労で倒れていてもクレリアちゃんは汗一つ流さずに平然と
してた。

周囲のメイドさん達は気にしてなかったけど……あれは持久力があるとかそんな問題じゃなかった。

あれだけ動けば、オリンピックの選手だって少しは疲労を見せるはず。

そこまで考えた所で、少し体が震える。

彼女は優しいし、いい子だ。

だけど……私は幼い子供じゃない。

どう考えてもおかしい事くらい分かる歳だ。

「クレリアちゃん……」

私は彼女の名を口にする。

クレリアちゃんと遊ぶのは楽しい。

……この事はきつと心に残り続ける、そう感じながら私は眠りに落ちて行った。

千穂が泊まりに来た日から時は経ち、7月末。もうすぐバトルグラウンドコンシューマー世界大会が開催される。私は明日、アメリカに行く予定になっている。

日本には台風が近づいて来ていたが、飛行機が飛ばないと困るので少し遅れて貰った。

千穂は夏休みだが、それ程頻繁には遊んでいない。

彼女は今、課題や家族との旅行、友人との遊びに大忙しのようだ。ただ、電話だけはたまにしている、今も彼女からの電話に出て話している。

「クレリアちゃん、明日出発だよね？」

「ああ、向こうには一週間程滞在する事になる」

「気を付けてね？日本よりずっと危ないから」

「引率者もいるから平気だ」

設定上、私は十三歳の未成年であるため、保護者がついて来る事になっている。

保護者役はカミラにして貰う事にした。

「ご両親の都合がついたの？」

「いや、よく世話になっている親戚だ」

「そっか、ついて来てくれる大人の人がいってくれて良かった。子供が一人で行く訳にはいかないから、行けなくなる所だったね」

「私は平気だが、そうすると向こうの会社が何か言われるだろうな。人類の法律に引っかかるはずだからな。

「帰ったら教えてね？行つてらっしゃい」

「分かった、行つてくる」

そう言つて電話を切る。

「お母様、あの子……倉森千穂さんだったかしら？」

「そうだが、どうかしたか？」

隣にいるカミラが聞いてくる。

「あの子、恐らくお母様が普通じゃないと薄々気がついてるわよ」
気がついてる？

何故だ？

「……お母様、ゴールデンウィークのお泊りで彼女とずっと一緒に居たでしょ？」

「居たな」

「スポーツもしたわよね？」

「した」

「恐らくだけど、彼女はお母様が全くトイレに行かない事と、彼女が疲れて倒れる程に運動をしても平然としているお母様に疑問を持つたんだと思うわ。彼女から聞いた訳じゃないけど……疑問を持たれるとしたらその二つが思い浮かぶもの」

「なるほどな……それは確かに普通の人間とは言い難い」

「家にいる使用人達は違和感を感じない様になっているけど……彼女にはしていないかったでしょう？」

「していないな」

「トイレは離れている時間を多少作ればその間に行っていると勝手に思ってくれるかもしれないけれど、スポーツは明らかに違和感を感じると思うわよ……今度からは疲れた演技でもする？」

「わざわざトイレに行く振りをしたり、疲れた振りなどをする気は無い」

「……いいの？」

「やりたくない事をしてまで隠す気は無いぞ？」

「私達も色々出来る事はするけど、どうしてもばれたくない時はお母様が自分で何とかしてね？」

「ああ、その時は私が自分で何とかする」

「それなら安心だわ。明日はアメリカよね？泊まるホテルはこつちで良い所に変えておいたから」

「そうか、ありがとう」

翌日。

飛行機でアメリカにやってきた私達は、そのままホテルへと直行した。

宿泊先は高級ホテルの最上階か、落ち着けそうな良い所だな。

「明日の九時に出発するから、忘れないでね？」

カミラは私にそう言って冷蔵庫から酒を取り出した。

「分かった」

「この辺りは色々とおあるみたいだから、気が向いたら行って見たらどう？」

グラスに酒を注ぎながら言うカミラ。

「そうか、考えておこう」

観光用の地図などが欲しい所だな。

そんな事を考えていると、カミラが本を取り出ししていた。

「この本のここから……ここまでがこの辺りの店の案内と地図よ」

カミラはその本を私に見せながら説明した後、渡してくれる。

観光用の本を用意してくれていた様だ、カミラは気が利くな。

「ありがとう。これを参考にして行ってみる」

本を受け取り部屋の外へ向かう。

「気を付けてね。それと、あまり都市の中心から離れるとタクシーが捕まらないかもしれないわよ」

「分かった」

ホテルでタクシーを頼んだ私はまずは本に載っていたケーキ屋に行く事にした。

「ルーズローズに行ってくれ」

「ルーズローズですね」

運転手は目的地を確認し車を出す、流れる景色を窓から見ていると国の違いが感じられるな。

やがて目的の店の前に着き、私は多めに金を払いタクシーを降りた。

店に入りメニューを見ると、日本と大差無いケーキが並んでいる。……普通だな。

千穂は海外のデザートは派手な色であまり食べる気にならないと言っていたが、ここでは扱っていないのか？

私が店員に聞いてみると、最近はどういった色合いの物を出す店は減っているらしい。

注文したお勧めのケーキの味は悪く無かった、対応してくれた者にチップを渡し店を出る。

私はタクシーを拾い、今度は本屋へと向かう。

ホテルのタクシーを一日貸し切りしておくべきだったな。

目的地に着いた私は店を眺めた。

中々大きい店だ、広い上に三階建てらしい。

面白そうな本はあるだろうか。

私はそう思いながら時間をかけて本を見て行く。日本の本もそれなりの数がおいてあるな、言語は英語だが。

千穂の影響で漫画も最近は読み始めているが、そういった本はここで買わず日本で買おう。

一階を見て回り気になった本を買い、二階へ移動中に買った本をマジックボックスへ入れておく。

二階でも同じように見て回り本を購入し、三階へ行くとカフェがあった。

カフェでミルクティーを飲んでいる間にそれなりの人数に声をかけられた、大体が子供に見える私の事を心配した者だったが。

私は彼らの対応をしながら飲み物を飲み終えると、店の外に出て町を歩いて見て回る。

こうして町を歩き、人類と人類の築いた文明の姿を見る事も中々楽

しい物だ。

もし私が一人であったなら、ずっと人の世界を巡りながら興味を持った事に首を突っ込んで回っていたかもしれない。

娘や友人達と共に過ごす時間も気に入っている私は今の所そんな事をする気は無いが、過去には長い間放っておいた事もあった様な気がする。

こうして過去を思い出すと、記憶が薄れている事を感じるな。

長く記憶に残っている者達もいるが、それもやがて忘れて行くのかも知れない。

そんな事を考えながら街と人類を見ながら歩いて回り、裏路地に入ると私の前にパーカーを着た男が一人現れた。

「かね！カネー！」

その男は下手な日本語で私に叫ぶ。

「下手過ぎて聞き取りにくい日本語だ、もう少し練習しておいた方が良いと思う」

「……んだよ、英語話せんのか。話が早くていい、ガキ……金出せ」
そう言つて銃を向けて来る。

オートマチックハンドガンか。人類の武器の一つだが、驚くほど威力が無かったので覚えている。

「人類の武器で私に傷をつけるのは無理だと思うぞ？」

「何だこのガキ……イカれてんのか？……しかしお前、スゲエ美人だな……殺しちまうのは勿体ねえ」

そう話す男に私は尋ねる。

「一つ聞きたいんだが」

「あ？なんだよ？」

聞いてくれるのか。

「お前の様な者達は皆同じような事を言うが、何かを参考にしているのか？」

魔法人類の頃から大抵こういった男達はまず武器や立場を突き付けて脅し、それから私達の事を手に入れようとしていた。

あまりにも行動が似ている、何か関係があるのかもしれない。

「あ？この方法が楽だからやってんだよ。で……男なら美人を犯したいと思うもんだろ？が……」

彼は私の質問に困惑しながら答えてくれた。

つまり、人類も他者から奪う事を考えたのか。

魔法人類と人類は姿だけではなく、こういった所も似ている様だ。

そして、私を捕らえようとしているのは雄の生物的な本能のような物か。

私のこの外見が男の本能を刺激している……という事だろう。

「ありがとう、何となく分かった。礼として見逃そう、どこにでも行くの良い」

「は……？」

私がそう言っただけで彼を避けて歩き出すと、射撃音と共に私の頭へ弾丸が飛んで来た。

「ははっ！なめた口ききやがってガキが!!次は脅しじゃなく当てるぞ？殺しやしねえよ、連れて帰って楽しんでまないと……」

この男、言っている事とやっている事が違うな。

私が人類だったら死んでいたぞ。

「脅しだったんじゃないのか？」

私は弾丸を彼の足元に投げる。

「へ……？どう……なってるんだ？」

足元の弾丸が目に入ったのだろう。

男は戸惑ったような声を出しながら足元の弾丸と私を交互に見ている。

「脅しと言いながら私の頭に弾丸が向かって来たが……どういう事だ？」

「な……何なんだお前……!」

震える声でそう叫びながら後ずさる男。

「見逃すと言ったのに、わざわざ攻撃して来るとは」

「ひい……」

彼は怯えた表情を浮かべ、小さな悲鳴を残し消滅した。持ち主の居なくなつた銃が地面に落ち始めるが、地面につく前にその銃も消す。

今の私達は死体を残す様な殺し方をしていない。

残しておくとは人類の間でそれなりに大きな事件になるからだ。

完全に消えてしまった方が、行方不明として扱われ都合がいい様だからな。

私達が行つた解決出来ない殺人事件に余計な人員を使わなくて済むとも聞いている。

そろそろ帰るか。

何気なくここにやって来たが、この辺りはあまり治安が良い訳では無いようだ。

ゴミが多く散乱しているし、さっきの男のような人間も生息している。

処分する事になつたが、私が処分した事でこれから被害を受ける者がいなくなつたとも言えるな。

私は表通りへ出ると、タクシーでホテルへ戻つた。

人類を一人処分しホテルに戻ってから一夜明け、翌日。私達は午前中にゲーム会社へと向かい、チームを組むメンバーと共に説明を受けた。

彼らは私の表向きの年齢と姿に驚いていたな。本番まで練習をする事になり、現在は練習の合間の休憩中だ。カミラは練習が始まってから別行動している。

「いやあ……驚いたわ。一緒に居た女性がくれりあだと思っただら、隣の貴女がくれりあだだったなんて」
くすんだ金髪をショートカットにした女性が私の元へやって来て、親し気に話しかけて来る。

チームの中で彼女だけが女だ。彼女は私の年齢と容姿を気にして声をかけている様だな。

「彼女は叔母だ。今回、保護者としてついて来てくれた」

「まあ、貴女一人じゃ駄目よね」
そう言っって首をすくめる彼女、するとチームメイトの男性がやって来た。

「最初は何の冗談かと思ったけど……一緒にプレイして本人だっただけで確信したよ」

「正式に招待されているのよ？偽者な訳無いでしょ」

「同感だ。あんな反応するプレイヤーがその辺りにいる訳無いだろ……間違いなく彼女がくれりあだよ」

そう言いながら、別の男性がやって来る。

「でも、本名と同じとはね。誰も何も言わなかったの？」
彼女に千穂と似たような事を言われた。

「あまり本名はつけないのか？」

「そうだな……基本的にこういった名前は本名は避けるのが常識ではあるな」

私が尋ねると男性の一人が答える。

そうなのか。

その後大会の開催日まで毎日練習を行い、大会当日がやって来る。

「お母様、お疲れ様」

大会が終わった日の夜、ホテルでカメラに酒を出された。

備え付けの冷蔵庫にある物では無い、ルームサービスを頼んだのだろう。

私はあまり酒は好きでは無いが、美味しいと感じる物もある。

主にフルーツやクリーム、チョコレートなどを使った物だが……：世
界樹の実を超える物は無いな。

「ふむ。これはなかなか良いな」

「良かったわ、お母様の口に合う物があって……お母様は飲める物が少ないから」

「無ければ飲まないだけだ」

そう答えてもう一度口を付ける。

エキシビジョンマッチの結果は私達の勝利で終わった。

私達のチームを応援する者達も多く、会場は大いに盛り上がったと言えるだろう。

勝利後、その場でコンシューマーランキングの一位のプレイヤーとしてインタビューを受け、PC版を行う事を話しておいた。

帰る前にチームのメンバーに「会場の男共はくれりあに夢中だ」と言われ、どういう事かと尋ねると、笑いながら私の容姿のせいだと教えてくれた。

私は先日の男の言葉を思い出し納得した、大会には男が多かったからな。

その後ゲーム関係の雑誌や、インターネット上のサイトなどには私

の事が大々的に報じられたようだが、私の姿は掲載されてなかった。カメラに聞いた所、微笑みながら一言「手を回したわ」と答えた。会場の者達が私達を撮影していたにもかかわらず、全く私の姿は露出しなかった。

カメラが会場全体に魔法を使用していたからな。

それと、皆が私を見て驚いていた理由も判明した。

私の今の身長は130センチ程なのだが、現在の人間の基準だとそれは九歳前後の身長らしい。

十三歳にしては身長が低すぎた事が原因だった訳だな。

発育が悪いと言っておけばいいだろう。

一人暮らしの狭い部屋にキーボードを叩く音が響く。

俺はいつもの様にゲーム関係の情報を読んでいた。

「バトルグラウンドコンシューマー世界大会に一位のプレイヤーがゲスト参加ねえ……」

独り言を呟きながら記事を読み進めていく、途中でそのプレイヤーが怖ろしいほどの美少女であると書いてあった。

「……なんだよ。そんな事書いといて写真無いのかよ……」

その記事には肝心の姿が掲載されてなかった。

俺は検索欄に「2000年 バトルグラウンド 世界大会 美少女」と入力し検索をかける。

「……あれ？出て来ないな」

こういう時は大抵誰かが撮影していて、検索をかければそれらしい画像が出て来るもんだけど……。

結局、関係ありそうな言葉で何度検索してもそれらしい映像は全く出て来なかった。

「まさか一位のプレイヤーがあんな幼く美しい少女だったとは、驚いたなあ……」

彼女を見た時、俺は衝撃を受けた。

カメラマンとして様々な女性を撮影してきたが、あんな女性は初めてだ。

二次元と三次元は違う、それは誰もが知っている事だ。だが彼女には……何と言えば良いか分からないな。

……そう！二次元から違和感を無くして出て来たような美しさ……とでも言えはいいだろうか？そのような物を感じた。

気が付けば俺は彼女をメインに写真を撮り続けていたんだ。

「取り敢えず撮影した写真を厳選しよう」

これからの事を考えながら撮影した画像を確認する。

「うん……思った通り彼女は写っていないな」

彼女を撮影した画像は真っ暗だが、当然の事だ。

「さて……夕食の準備を始めるか」

そろそろ作り始めないと遅くなってしまう。

大会を終えて帰国してから時は過ぎ、九月に入った。

まだ日本には台風が訪れていているし、人類にとって残暑が厳しいと言える気温だ。

台風、地震、季節の変化などはいつの間にか地球で起きるようになっていたな……。

魔法人類がいた頃はそんな現象は無かったと記憶している。

イシリスも地球へと変わったのだろうな。

そんな事を思いつつ、いつもの様に日本の家で過ごしている。

帰宅後に始めたPC版のバトルグラウンドだが、コンシューマーよりも簡単にランキング一位になった。

PC版はコンシューマー版よりもより反射と操作速度の影響が大きかったからだ。

ゲームシステムという縛りが緩くなればそれだけ差が広がる。

ゲームの反応速度ギリギリに合わせて操作している私に対して、人間である彼らに勝ち目は無かった。

ただ、それでも無敵という訳では無い。

数での攻撃や遠距離からの広範囲攻撃、不意打ちなどでは負けていくからな。

千穂は今も変わらない。違和感を感じていても、彼女は私と友人関係が続けている。

今までの事を振り返ると彼女なら私の事を教えても問題無いかも知れないが、今の所その気は無い。

彼女が自分から知りたがるのなら教えるが、そうで無いのならまだこのままで良いだろう。

色々と考えながら本を読んで過ごしていると、電話が鳴る。

「私だ、どうした？」

私は電話を取り用件を聞く。

「あ、クレリアちゃん？」

「私の携帯で他に誰が出るんだ」

「そんな事分らないでしょ？一応だよ」

誰かが代わりに出る事はあり得るか。

「それで？用件は何だ？」

「あ、そうだね。良かったら12日の夜にお月見しない？」

「月見？」

「十五夜だよー。中秋の名月だね」

月見か、断る理由は無いな。

「いいぞ、どこでやる？」

私の家の敷地内ならかなり良く見えると思うが。

「私の家の庭か、大丈夫ならクレリアちゃんの家の庭に招待して

貰ったり……？」

後半を少し申し訳なさそうに言う彼女。

色々と世話になってしまっている、とでも思っているのだろう。

同じ人間相手ならともかく、私相手では要らぬ心配だ。

「では迎えに行こう。家族も連れて行きたければ連れて行くぞ？」

「いいの？じゃあ、聞いてみるからまた連絡するね？」

「分かった。来る人数が決まったら教えてくれ」

「うん、またお世話になっちゃうけど……」

「気にするだけ無駄だぞ？大抵の事は私にとって大した事では無いからな」

「……ありがと！楽しみにしてるね！」

その後、私達は他愛のない話を少しだけしてから会話を終えた。

私は月の屋敷の談話室で四姉妹、ジャンヌと共にゲーム機で交代しながらパーティーゲームをしている。

お母様が月の皆もプレイ出来るようにと用意してくれた物だ。

オンラインプレイは不可能だけれど、今の所は必要無いしね。

「あー!?ヨツバやめてー！」

「誰がやめるか、よっしゃ！一億貫い！これでミツハを抜いたぜ！」
プレイしているのは世界各地を巡り物件を買い、他のプレイヤーと駆け引きをしながら総資産を競う「この野郎伝説」と言うゲームだ。
私はゲームをプレイして騒ぐ彼女達を見ながらくつろぎ、ジャンヌも給仕をしながら空いた時間に見物したり会話をしている。

「ミツハちゃんとヨツバちゃんは楽しそうねえ」

「私達も敵だという事を忘れてるようですね」

騒ぐ二人を見ながら落ち着いたプレイを見せるフタバとヒトハ。

「今頃はお母様が私達がいる月を見ている頃ね……」

私はふと、呟いた。

「あ、知ってる！お月見だよね？そういう事も色々調べたんだ」

私の言葉に反応したミツハが声を上げる。

「地球から見ると綺麗ですものね、気持ちにはわかります」

「住んでいる私達からすると、庭を見られている様な物なのでは？」
フタバは地球からの月を美しいと感じて、ヒトハは自宅の庭を見ら

れていると感じているのね。

お母様はどう感じているのかしら？私の予想だとヒトハと同じように庭を見ている気分だったと言いきそうよね。

月見を行う日、千穂とその弟がやって来た。

名前は何と言ったか……春木……いや、春斗だったか？

妙に硬くなっているな、千穂は私の家の事を言っていなかったのだろうか。

「おおー凄い！ススキの草原だ！」

「姉ちゃんそんなはしゃぐなよ……！」

敷地の一部にススキの草原が作られ、月見団子とジュース、お茶、主に私用の牛乳、そして何故か酒が用意されていた。

当然の様に用意された酒は千穂によって禁止された、私も酒を飲む気は無かったので問題無い。

「クレリアちゃんに月の不思議な話をしてあげよう」

団子を食べ、飲み物を飲みながら三つの月を見ていると千穂がそんな事を言う。

「月は三つあるけど、あの一番大きい月だけ他と違う不思議な状態なの……なんだか分かる？」

「不思議な状態？」

「そう、分かるかなー？」

住んでいる私も特にそんな事は気が付かなかったが、しばらく考えていると千穂が言う。

「はい！時間切れー。正解は「あの月だけ見えている部分はずっと同じ」でしたー！」

その事か。

「他の月はバラバラなのに、あの月だけ公転と自転がぴったりかみ合っていて、常に同じ部分を地球に向けてるんだ。不思議だよね？」

「そうだな」

私がそうなるようにしたからだが。

「千穂は誰かがそうなるように操作した……とは考えないのか？」

「え？……あはは！夢のある話だけど、そんな事ある訳無いよー」
彼女は微笑みながら答える。

なるほど。不思議だとは思っても、それが操作された物だという考えは全く無いのか。

「ほら……春斗もクレリアちゃんとか何か話したら？」

「わ、分かってるよ……」

月の夜にススキに囲まれて飲み物を飲み、団子を食べて話をしていただけだが、これはこれで良い物だった。

ただ、月を見るとどうしても自宅の庭を見ている気分になる。

月見が終わった後にカミラにその事を話すと妙に嬉しそうだった、
どういう事だ？

10月に入り、日本では秋らしさが感じられるようになり始めた。そんな中、私は少し前まで中東に行っていた。

今でも戦闘が行われている貴重な地域だ、私は以前から時々この地域を見物している。

世界大戦の時もそうだったが、戦う生物の姿は見ていて面白い。

私は戦いが嫌いという訳では無いからな。

中東にも自宅はあるのだが、あまり使っていない。

その証拠に、その後わざわざ東京の自宅に戻り、リビングルームで皆とテレビを見ている。

《……南米の採掘場で灰白鋼（はいはくこう）の塊が発見されたのです。発見された灰白鋼は直径二cm程で、塊が発見されるのは大変珍しい事でした……》

科学番組で灰白鋼の事が話題になっていた。

灰白鋼とは、魔力を失って変質した魔法金属に人類が付けた名だ。

《この灰白鋼は世界各地の土壌に僅かに含まれているため身近に存在する物質で、使用用途は残念ながらありません。ただ、これだけ身近にありながら詳しい事は未だに解明されておらず、現在も灰白鋼の研究は行われています》

元魔法金属、人类的に言うなら灰白鋼。

これは人類が様々な物を分析出来るようになり始めた時に発見され、現在も研究が続けられている。

魔力を知らない現在の人類が、魔力喪失という原因に到達する日を楽しみに待ってしよう。

「クレリアよ」

「なんだ？」

珍しく自宅に来ていた信長がテレビを見ながら言う。

「この灰白鋼……魔力の喪失が原因ならば戻す事は出来んのか？」

「おお……！信長ちゃん、いいところついてるんじゃない!？」

ミツハが信長に言う、信長ちゃんと呼んでいるんだな。

「確かに彼の言う通り何か起きるかもしれませんが、今からやっただとしてもどれだけかかるか分かりませんよ?」

ヒトハはそう言うが、出来ない訳でも無い。

「ヒトハ、お母様と一緒に作った掌の世界を忘れてないかしら?」

「……失念しておりました」

カミラに指摘され、ヒトハは少し恥ずかしそうにしながら答えた。

「主様……その……掌の世界……とは、何ですか?」

「聞いた事ねえな……主様、教えてくれよ」

フタバとヨツバがそう言い始め、知らない他の者達も期待したように私達を見る。

「分かった。教えよう……掌の世界とは私とカミラ、ヒトハの三人で作りに出した広い空間を持ち歩く事が出来る魔道具だ。更に内部の時間の流れを自由に変更する事も出来る」

「空間を持ち歩く……だと?」

「時間の流れを変える?」

信長とジャンヌが呟き、他の者はどこか諦めた様な顔をしている。

「うん、知ってたよ私!主様達が滅茶苦茶だつて!」

「おいミツハ!失礼な事言うな!……まあ、私もちよつとそう考えちまつたけどよ……」

ミツハの言葉を注意するヨツバだが、彼女も似たような物だったようだ。

「二応、現時点で地球程度なら入れる事が出来る空間がある。更に広げようと思えば……恐らくどこまででも広げる事が可能だろう」

「お母様、その辺で。それはお母様でなければ出来ないわ」

カミラが私に声をかける。

「お前が僕の想像を超えている事など、とうに知っている。それで……現物は何処にあるのだ?」

しばらく考え込んでいた信長が聞いてくる。

「この屋敷の傍に小さな家があるのは知っているな?そこのリビングに飾つてある」

「え!?あれがそうだったんですか?綺麗な置物だとは思ってました

けど……」

フタバが声を上げる。

以前の家のリビングにはそれしか飾っていないからな、覚えていればすぐに分かるだろう。

「ああ！あの透明な球の中に黒い球が浮いてる奴か！そうだろ？ヒトハ姉さん」

「そうです。……貴女も見た事があるはずですよ、ミツハ」

ヨツバが思い出したように声を上げてヒトハに確認すると、ヒトハはヨツバに返事を返し、ミツハにも声をかけた。

「そんなのあつたっけ……？」

全く覚えがないようなミツハ、出入りしているのなら目には入っていると思うが。

「話が進まないから元に戻すぞ。掌の世界の内部を高魔力にして灰白鋼を入れた後、外部から時間設定を変更すればいいだけだ」

私は無理矢理話を戻す、確かにそれなら出来ると全員納得してくれたようだ。

そこで私はある事に気が付く。

「そういえば、作った後に実際に使った事があつたか？」

「……そう言えば……使って無かつたかも知れないわね」

「……恐らく使っていないかと」

私の問いにカミラとヒトハが答えた。

「二度使っておこう」

私は掌の世界を使用するついでに、灰白鋼の実験を行う事にした。

その後、すぐに私達は場所を月へと移し実験を開始する。

とはいっても掌の世界に小さな障壁を張り、魔力を満たした後に灰白鋼を入れて時間の設定を変えるだけだが。

侍女に灰白鋼を取って来て貰い、準備はすぐに終わった。

「これだけ？」

準備を終えた私にミツハが聞いてくる。

「そうだ。後は内部の時間の設定を変更するだけだ」

テーブルに置かれた掌の世界を皆が取り囲んで見ている中で私は魔法で操作を始める。

「設定はどうするか……少しずつ様子を見ながら行うか」

「人類の調べた結果が正しければ、魔法金属が出来てから数十億年程は経っている事になるのよね……」

そう話すカミラの言葉に私は答える。

「地球の歴史という物だな。魔法人類が居た頃の事は全く触れられていないが、私達も過ぎた時間を把握していた訳では無いから何も言えない」

この歴史が正しければ私に作られた娘達はともかく、私とカミラの寿命に終わりが無い可能性が更に濃厚になるだろう。

それでも「終わりが無い」と断言出来る時は恐らく来ないだろう。

私達にそれ以上の寿命があるだけ、という可能性は永遠について回る。

いつかその日が来た時、私は自身の寿命を知る事になる。

いつまで経っても来ない可能性も十分にありそうだが。

「では、一日で十億年経つようにしよう」

「ちよつと待つてお母様……そこまで出来るの？」

「……私は一日が千年や一万年程を想像していたのですが……」

カミラとヒトハが驚いたような表情でそんな事を言う、説明はしていた筈だが……忘れていたのだろうか。

「操作出来る事を話し忘れていたか？」

「いえ、話は聞いていたわ。ただ、そこまで出来るとは聞いて無いわよ?」

説明を忘れていた訳ではない様だ。

「説明が足りなかったか。完全な停止からかなりの範囲で設定出来るぞ」

「まあ……範囲が大きいのは悪い事じゃないわよね?」

「……そうですね」

カミラの言葉に、ヒトハは返事を返した。

「クレリア」

カミラ達と話していると、信長が私に声をかけて来た。

「何だ？」

「儂はお主と共に生きる事を選び、色々な事を知った。元人間として、数十億年という時がどれほどの物であるかよく分かる」

彼はそう言ってから、にやりと笑う。

「それほどの時を過ごし、今も平然としているお主達は、実に驚くべき存在よ。改めて度肝を抜かれたわ！」

そう言っただけで笑いながら去って行く、結果は見に行かないのか。

結局、時間の設定は一日で一億年にした。

翌日に灰白鋼を取り出すと、形状は変わってはいないが魔法金属へと戻っていた。

「これで灰白鋼は高濃度の魔力に長時間置いておく事で、元の魔法金属に戻る事が判明した訳だけど……」

カミラがそう話しているが、私としては掌の世界が問題無く使えた事の方が重要だ。

今まで使用試験をしていなかったのは失敗だったな。

「この先、何か大きな変化があれば分かりませんが、今のままでは自然に灰白鋼が元の魔法金属に戻る事は無さそうですね」

ヒトハは取り出された魔法金属を見ながら言う。

「どれ程の濃度と時間で戻るかは正確に分かっていないが、恐らくヒトハの言う通りだと思う。もっと薄い魔力と短い時間で元に戻るかも知れないが、これ以上調べる気にはならないな」

「もしも自然に元に戻った場合、魔法金属を巡って人類が争う姿が見えます」

ヒトハが突然そんな事を言う。

「どうだろうか」

私はヒトハにそう答えるが、確かにそうなりそうな気はする。

「地球に眠る灰白鋼が魔法金属に戻る可能性がある事が分かったし、お母様もこれ以上は興味が無いみたいだから……この事はこれでお終いかしらね」

「そうだな。これから私は地球へ行く、何かあったら連絡してくれ」

「分かったわ、行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃいませ」

月の皆に見送られて私は東京の自宅へと転移した。

私は現在、ある出土品の事に頭を悩ませている。

ある日……十数億年前の地層から完全な形の、明らかに人の手が入っているペンダントが出土したのだ。

それだけでも大事だったのだが、事態はそれだけで終わらなかった。

私はこのペンダントを持ち帰り分析をしたのだが……。

何一つ分かる事が無かったのだ。

本当に文字通り何も分からなかった……様々な検査をしてみたが検査機は反応を見せず、何も検出されない。

表面を少しだけ削ろうともした。

だが、何をしてしても傷一つ付かない。最後は自棄になり破壊する気で工具まで持ち出したが……結果は変わらなかった。

長年研究員として過ごしてきたが……この未知のペンダントはまるで魔法がかかっているように全てを拒絶している。

……オーパーツ。

脳裏にその言葉が浮かぶ。

しかし本当にそんな物が……？

私の中で様々な感情が混ざりあっていた。

「スチュアート研究員」

「何かね？」

そんな事を考えていると同じ研究員の仲間が声をかけて来る。

「例のあれだが……分析専門機関に持ち込んでみないか？もう俺達じゃどうにもならないし……どう考えても世界をひっくり返すような大発見だ。発見者として研究に参加させて貰えるかもしれないだろ？」

私はその言葉を黙って聞いていた。

確かに今の時点で既にあのペンダントは異常だ。

……恐怖すら覚える程に。

どう考えても常識の範囲を超えている。

「あと数日だけ考えさせてくれないか？」

「分かった……よく考えて、納得してからで構わない。お前が見つけた物なんだからな」

彼はそう言つて笑い、去つて行つた。

数日後、私はあのペンダントを分析専門機関に持ち込む事を決めた。

私は今日もイギリスの首相としていつもと変わらない日々を過ごしていたが、報告を読んでいると気になる物があった。

分析専門機関からの報告？

……未知の物質で出来たペンダントだど!?

私は写真を見る。

うーむ……素晴らしい。言葉に出来ない程に美しく精巧だ。

そう思いながら報告書を読み進めていく、するとこのペンダントの異常さが分かった。

私達の常識を超えた物……。

そう考えた時、私はあの方々を思い浮かべた。

私はこの事をあの方々へ知らせ、判断を仰ぐ事にした。

電話を取り連絡を取る……間違いなく関係していると思ひながら。

「イギリスで未知の出土品？」

日本の家にいる時にカミラがやって来たのだが、最初に言われた事は「イギリスで未知の出土品があった」という報告だった。

「ええ、首相が確認をして欲しいと連絡して来たわ」

「報告書と資料はあるか？」

「送つたらしいからすぐ届くわよ、途中は転移だし」

僅かに待つたが、すぐに侍女が届けに現れた。

今回はミツハか。

「確かに渡したよ、主様。じゃあねー！」

そう言うとすぐに何処かへ転移していった。

私は渡された報告書を読む。

そこには「金属のような銀色のチェーンに、空想上の生物であるドラゴンの様な姿が精密に掘られたペンダントトップがついている」と書いてある。

私は同封されている資料を取り出す、そこにはペンダントの写真が載せられていた。

「……これは人類に渡す訳にはいかないな」

「お母様、何だったの？」

飲み物を飲んでくつろいでいたカミラに資料を飛ばして渡す。

「あ……！お母様、これ……」

「私とクログウェルがルーテシアに贈ったペンダントだ」

あのペンダントはルーテシアが死んだ後、共に墓に納めていた。恐らく環境の変化で惑星へと飲み込まれた後も、私の保護魔法の効果で状態を維持していたのだろう。

私はすぐにイギリスに連絡させ、引き取る事と見返りとして経済的に多少便宜を図る事を伝えた。

そして最後に、イギリス側が納得しなくても受け取りに行く事を伝えると、すぐに了承してくれた。

「はあ!?忘れろと!?!」

私達がペンダントを分析専門機関に預けてからわずか数日で、何故か首相に呼び出された。

始めは私達の研究を支援してくれるのかと期待したが……彼から出た言葉はペンダントの事は忘れて欲しいという物だった。

仲間は彼に噛みつくが……。

「申し訳ないが、これは君達……いや……我々にどうにか出来る事

では無いんだ。納得は出来ないだろうが受け入れて欲しい」

「受け入れろだと……？仲間が見つけた歴史的発見だぞ?!はいそうですかと言うとでも思ってるのか!？」

「勿論ただ受け入れるとは言わない、君達には永続的に国の援助を受ける権利が与えられる」

「それは嬉しいが……!何なんだよ!スチュアート、お前も何か言え!」

「今までの資料や写真はどうなりますか？」

私は静かに首相へ聞く。

「全て破棄して貰う」

「どうしても無理なのですか？」

「私を困らせないでくれ……場合によっては君達の身の安全が保障出来なくなる」

申し訳なさそうな表情をして彼は言う。

その言葉を聞いて私は悟った、彼は出来るだけ穏便に済ませようとしてくれているのだと。

仲間も今度は嘸みつく事は無かった。

「分かりました。全ての資料とデータ、写真を渡して忘れます」

「……ありがとう」

彼が礼を言ってきたが……何かがおかしい……。

気になるのは彼の言い方と……雰囲気だ。

まるで……そう……何かに怯え、従っているような……。

はあ……何を馬鹿な……。

あのペンダントのせいで想像力が豊かになっているのかな……そんな映画のような事がある訳がない。

私はすぐに頭を切り替えた。

「私達に選べる選択肢は無いんでしょう?」

「……すまない。援助は間違いなく行う……どうか納得してくれ」

私達は今までの資料とデータ、写真を全て政府に渡した。

その後、私達には国の援助が付き自由な研究が可能になったが……いつまでも心が晴れる事は無かった。

私は月の家で回収したペンダントを見ている。

彼女の墓に埋めた時、そのまま彼女と共に無くなっても構わないと思っていたが……残っていたのなら持つておこうと思う。

ルーテシアの形見と言える物だからな。

「このペンダントを発見してくれた者達は？」

「国の援助を受けてかなり良い環境になっているはずだから、お礼としては十分だと思うわよ？」

私の問いにカミラが答える。

「そうか。恐らく彼らから強引に取り上げる形になっただろうからな、礼をしておかないと気分が悪い」

見つけた者達はそんな物よりペンダントが欲しいと言うかもしれないが、それは却下だ。

「そのペンダントはお母様が使ったら？」

カミラがそう薦めて来るが、私はあまりアクセサリが好きではない。い。

「機会があればつけよう」

「そう言っつていつまで経つても使わない気がするわね。出かける時位は何かつけて行ったら？」

「気が向いたらな」

「もう……似合うのに……」

そう言っつて残念そうにするカミラ。

そんなに残念か。

アクセサリを回収してから少し時が過ぎた現在、私はアマゾンの熱帯雨林にいる。

熱帯多雨林とも言うのだったか？

この場所は様々な生物が多く存在し、人類の手が殆ど入っていない。

たまにはこういった環境の散歩も良い物だ。

少しずつ伐採はされているようだからこの熱帯雨林もいつかなくなるかもしれない。

だが、今の所はまだ問題無さそうだ。

私は周囲の植物達を見ながら思う。

現在の地球の素材は錬金薬に向いていない。

作れない訳では無いが、その質はイシリス時代の物より大きく劣る。

だからといって採集しない、という事は無いのだが。

多岐に渡る素材の組み合わせと処理の方法は、素材が増えている事とわたしの技術の向上により今の所尽きる事が無い。

全く違う処理をしているのに似た様な物が出来る事も多いが……。

人類が作っている薬は、限られた素材と拙い技術の割に良い物を作り出していると思う。

だが、まだまだ人類が見つけている物は少ない。

新しい成分を発見し、技術を向上させればこの先も発展を続けるだろう。

……魔法技術を覚えれば大きく発展するだろうが、現状では難しいだろうな。

そんな事を思いながら私が熱帯雨林を歩いていると、こちらをうかがう気配を感じる。

この辺りだと、コヌカ族だろう。

「……白黒女か」

声が聞こえ、黒い肌の男が現れた。

彼らは他の人類から未接触部族と言われている者達だ。以前熱帯雨林を散歩している時に出会ったのだが、何故か彼らは今でも私を名前前で呼ばず「白黒女」と呼ぶ。

初めて出会った時。

彼らは私を見るなり警戒して攻撃して来たが、私も慣れているため

優しく無力化した。

それから彼らは、私が彼らの縄張りを歩いていても何もして来なくなった。

「何か用か？」

「……お前なら良い」

私があるのか聞くと、コヌカ族の男は一言答えて去って行った。

ただの人間だったら殺していたんだろうな。

彼らの部族以外にも世界には多くの未接触部族が居るが、科学の世界に生きる人類達は今の所彼らに何かをする気は無いようだ。

私が見た印象だと、未接触部族の人類と科学の世界に生きる人類は、野生の動物とペットとして飼われている動物程度の差があるように感じる。

生き抜くために必死な未接触部族の人類の方が肉体的にも精神的にも多少強いと思う。

ただ、科学の世界に生きる人類は色々な技術があるからな。

彼らが本気になれば余程の事が無い限り……例えば私が味方したりしない限り、部族側が減ぶだろう。

科学の世界に生きる人類がこの場所に手を出さないのは、ただそうするだけの価値がこの部族に、この場所に無いだけなのではないかと考えている。

もしも価値を見つけたのなら恐らく手を出さだろうな。

そう考えながら去っていく男の気配を見送り、私は散歩を再開した。

十月の半ばを過ぎたある日、千穂から電話が来た。

「今度友達と二人で少しだけ仮装してリズリーランドのハロウィンイベントに行こうと思うんだけど、良かったらクレリアちゃんも来ない？」

遊びに誘うために連絡してきたようだ。

「リズリーランド……確か千葉にあるアミューズメントパークだったか？」

「そうそう、どうかな？」

「その友人には私が来る事は話してあるのか？」

「うん、来るかもしれないとは伝えてあるよ」

アミューズメントパークか、特に興味が湧かないな。

「興味は無いな」

「……そっか。ねえ、クレリアちゃん……過ぎた時間は戻らないんだよ？興味が無くてもやってみたら、行ってみたら……新しい発見とか楽しさが見つかるかもしれない。やれる時にやっておかなきゃ……後悔するかも知れないよ？」

そう話す千穂の声は、とても穏やかだった。

彼女の言う事も何となく分かる。

不利益をもたらす存在を処分出来る時に処分しておく事と同じような物だろう。

時間を戻せば話が変わるだろうが。

本来、今の人類と文明は今だけの物だ、存在しているうちに色々やっておくべき、と言う彼女の言葉には納得出来る。

私は千穂の言葉を聞いて少し考えを改めた。

「分かった、私も仮装して行こう」

「仮装もしてくれるの!？」

「やれる時にやっておけると言ったお前の意見を採用する事にした、仮装しても良いイベントなのだろう？」

「うん！」

嬉しそうな返事だな。

「そうなる何の仮装をするかだが、何か決まりはあるのか？」

「うーん……あんまりエッチなものと危険な物の持ち込みは駄目だね。その他は特に無くて、本当に仮装パーティーみたいな物だよ」

「そうか、ではメイドに聞いてみる」

「困ったら連絡して？相談に乗るからね」

「分かった、ありがとう」

「じゃあまた連絡するね！」

そう言つて電話が切れた。

仮装パーティーか、私だけでは分からないから皆の力を借りよう。それからメイドに聞いたのだが、どこからか月の皆にも話が伝わり、月で私の仮装を何にするか会議が開かれて熱い論議が繰り広げられた。

その結果仮装は九尾の子狐が選ばれ、私とその仮装をする事を決めると、娘達は嬉しそうに仮装作りを始めた。

千穂とその友人と共にリズリーランドのハロウィンイベントに参加する事が決まってからしばらく経った。

仮装の内容も決まり、侍女達が私の衣装を作り始めているが完成する気配が無い。

色々とこだわっているらしい。

特にフタバとミツハが張り切っている様だ。

どの様な物を作ってくれるのか楽しみだな。

「二度くらいは撮影されるだろうな、恐らく千穂は撮ると思う。撮影自体は構わないが、現時点で私の顔が広まる事は避けたい」

月に帰って来ている私は、くつろぎながらカミラと話す。

「色々面倒な事になりそうよね。でも、私達がリズリーランド全体に認識障害をかけると千穂ちゃんともう一人の子に違和感が出るわ。まだ教える気は無いんでしょ？」

「そうだな」

「お母様が認識障害を使うのなら問題無いでしょうけど、私も一応こんな物を用意して来たわ」

「そう言いながらカミラが何かを手渡してきた。」

「これを着けるのか？」

「それなら違和感も無いし、みんな仮装の一部だと思うでしょう？」
渡されたのは鼻から上を覆う狐の面だった。

「顔さえ写っていなければ問題無いわ」

「そう言って笑うカミラ。」

「この面、魔道具だな」

「お母様は騙せないわよね、これはミツハが作った魔道具のお面よ。
紐無しでくっ付いて、激しく動いても剥がれないらしいわ」
ふむ、中々いい出来だ。

「ミツハも腕を上げたようだ、これは衣装も期待出来そうだな。」

「認識障害は使わず、この面を使う事にする」

「ありがとう、ミツハが喜ぶわ」

私が面を使う事を決めると、カミラはそう言って微笑んだ。

私の仮装衣装の製作が進む中、信長が戻って来た。

「確実では無いが、光秀が謀反を起こした理由が分かった」

彼は私に会うなりそう言う。

「そうか」

わざわざそれを言いに戻って来たのか？

「興味は無そうだな？」

「無いな」

「そう言うな、お前にも関係ある事だったぞ」
そう信長が言う。

「聞くだけなら聞くぞ?」

「では、聞くだけ聞いてくれ」

信長はそう答えて話し始める。

彼の話をすべて聞いた私は確認する。

「つまり光秀が私に惚れていて、お前がいる限り手に入らないと考
えた?」

「儂はそう考えている。奴の残した手紙が発見された時、お前に入
れ込んでいる事が分かる内容が書かれていた」

「彼にそんな素振りは無かったと思うが……私が気が付かなかった
だけか?」

深く探つていなかったのだからあり得る話だ。

「儂から見てもそのようには見えなかったな。奴の事だ……儂らの
前では表に出していなかったのだろう」

「私に男女の恋愛感情は存在しない。無駄な事をした物だ」

「それを先に伝えておけば奴も……いや、信じぬだろうな」

信長はそう言いながら、遠い目をする。

「確か彼には妻がいたよな?」

「妻は妻で愛していたようだぞ?」

「私を側室にしたかったのか」

「今の日本では難しいが、儂らの時代では特におかしな事では無い
からな」

「彼が謀反に走った理由が私である可能性がある事は分かった。愛
は人の判断能力を奪う物らしいからな、そんな事もあるだろう」

彼は私を手に入れようとして身を滅ぼした、どうなるかなど予想出
来ただろうに。

彼の妻と子供がどうなったかは知らないが、恐らく喜んではいな

かっただろう。

「伝えたい事は伝えた、儂はまた世界を回る」

「好きにしろ、必要な時にいればそれでいい」

ジャンヌと信長は友人だが「短命種の精神で長い時を生きる」と言う実験の被験者でもある。

十分な期間が過ぎるまでは本人が嫌がっても手放す気は無いが、終わったら出来る範囲で望みを聞いて自由にしてやろうか。

「その時には駆けつける、ではな」

信長は返事をする と 転移した、彼も今の世界を楽しんでいる様だ。

ある日、私の仮装衣装が完成したと連絡があった。

皆の前で着てみたのだが……これは日本の巫女服か？

「ご主人様……よくお似合いです！作ったかいはありました！」

フタバが絶賛しているが、私の知る巫女服と何となく違う。

「ミニスカートの紅白巫女服と白いニーソックス……やるわねフタバ」

カミラはそう言っ て 私 を 見る。

他の侍女達も微笑みを浮かべながら私を見ている。

「主様、こちらの下駄をどうぞ」

ジャンヌが下駄を持って来る、私は言われるままに下駄を履いた。

「ふふーん……これだけじゃないんだよなあー。主様、服に仕込まれている魔道具を起動してみて？」

ミツハが得意げに私に言う。

ふむ、スカートと襟にある物だな。

私は魔力を供給し魔道具を起動させる、すると皆の驚く声が聞こえた。

「鏡をどうぞ……主様」

珍しく少し齒切れが悪いヒトハが私の前に全身鏡を用意する。

鏡を見てみると、写っていたのは狐耳と九本の尾を生やした私の姿

だった。

黒い毛を基本に耳の先の辺りが白い狐耳と、同じく黒い毛を基本に先端付近が白い九尾の尻尾が違和感なく生えている。

「なるほど。この魔道具で耳と尻尾を作り出して制御するのか」

私は自分に生えた耳と尻尾を動かしてから触ってみる。

良い手触りだな。

「良い出来だ。これなら仮装として十分だろう」

そう言っただけは仮面をつける。

「準備は出来た、後は約束の日を待つだけだな」

その後すぐに着替えようとしたが全員に止められしばらく撮影されたが、娘達が幸せそうだったので私はしばらく付き合った。

私はカミラとヒトハにスカートで外出する時はスパッツを履くように強く勧められて以来、スカートでの外出時はスパッツを履いている。

この服でもそれは変わらず、スパッツを履くようになっていらい。

「お母様、仮装して行くのは東京リズリーランドで、日帰りなのよね？」

準備が整い、出発の日を東京の自宅で待っているとカミラが予定を聞いてくる。

「そうだ」

私が答えると、カミラが考えるような仕草を見せる。

「日帰りだとゆっくり出来ないし、近くに月下グループのホテルがあるから使ったらどう？」

「私は構わないが、私だけの判断で決める訳にはいかない。千穂に確認してからだな」

「当日の午前中までに決まればいいわよ、確保だけはしてあるから」
「分かった」

私の返事を聞くとカミラは転移して行った。
今は学校だろうから確実に話すには夜だな、私は夜を待つて連絡する事にした。

「はい、もしもし?」

「千穂、リズリーランドに行く事で提案がある」

「いきなり内容に入るねクレリアちゃんは……」

困ったような声で千穂が話す。

「忙しいなら後にするぞ?」

「忙しくはないけどね、提案って何かな?」

「日帰りの予定だったが、泊まりでも平気か?」

「え? まあ翌日も休みだし、予定も無いから平気だけど?」

「……私の叔母がリズリーランドの近くのホテルを使わないかと
言って来てな」

つい、カミラと言いたいそうになった。

「え!? 嬉しいけど……良いの?」

「問題無い、既に確保しているらしいからな」

「うえ!? もう用意しちゃってるって事!?!」

「そうらしい。断つても良いぞ? 向こうが勝手にやった事だしな」

「すでに用意していると聞かされて断れると思ってる?」

「千穂には無理だと思っている」

「……友達に聞いてみるから待つて? かけなおすから!」

そう言われ電話が切られた。

本当に断つても問題無いのだが、彼女は断れないだろうな。
しばらく待つていると千穂から電話がかかってくる。

「どうする?」

私は答えを聞く。

「友達も「お世話になります」だって」

「決まりだな」

こうして日帰りだったりズリーランドへの外出は、泊まりに変更になった。

リズリーランドへ出発する日の朝、私は車で駅へと向かった。車を降り、待ち合わせの場所へと向かうと、千穂ともう一人、女性の姿が見えた。

「あーこっちー！」

千穂が私に気が付き手を振る、女性は私の姿を見て少し動揺しているな。

「時間には間に合っているよな？」

「大丈夫、私達が少し早く来てただけだから」

彼女はそう答えてから、女性を紹介してくれた。

「クレリアちゃん、この子が私の友達で篠崎 美琴（しのぎき みこと）ちゃん。クラスは違うんだけど同級生だよ」

「篠崎美琴よ。よろしく、クレリアちゃん」

「クレリア・アーティアだ、よろしく、美琴」

千穂より少し背が高く、暗い茶髪をミディアムボブにしている。

少し落ち着きのある、大人びた雰囲気があるな。

二人とも今時の女子高生らしい服装をしていて、それぞれ荷物を持っている。

「乗る電車まで時間があるから、駅前のファストフードで朝ご飯にしようよ」

「そうしましよ、クレリアちゃんもそれでいい？」

千穂の提案に美琴が同意し、私に確認してくる。

「いいぞ、食べに行こう」

私は了承し、全員で駅前のファストフードへ向かった。

「そう言えば……私はファストフードで初めて食事をするな」
こういった店は、知っているが実際に食べた事は無かった。

「珍しいね、大抵は食べてるもんだけど……」
美琴がそう言いながら私を見る。

「あー、クレリアちゃんはそうでもおかしくないか……」

「何？千穂は何か知ってるの？」

私は二人が話している間に頼んでいた朝食セットを受け取る。

「席が埋まる前に早く行くぞ」

私はまだ話している二人に声をかけて席に向かった。

席に座ると、駅前が良く見える。

現在の人類の文明は魔法人類の文明よりも娯楽が多く感じる。

しかし、私が魔法人類の娯楽に興味を示していなかっただけで、実際は多く存在していたのかも知れないな。

「遅れたらいけないし、ぱつと食べちゃいましょう」

「そうだね、食べよ！」

美琴と千穂はそう言って食べ始める。

私も一口食べてみる。

「あまり美味くは無いな」

私がそう言っていると美琴が笑って言う。

「安いからね、こんな物よ。クレリアちゃん育ちが良さそうだし、そう感じるのも仕方ないかもね」

「お金が少ない私達には心強い味方なんだよねー」

「あんたはゲームにお金かけ過ぎてるからでしょ」

千穂の言葉に突っ込む美琴。

言われた千穂は自覚があるのか、美琴から目をそらした。

食事を終えた私達は、駅へと移動し電車に乗る。

日本最大級のアミューズメントパークであるリズリーランドへは交通が整備されていて、ここからだ乗り換える事無く行けるらしい。

電車は休日という事もあり、外出する人々でそれなり混んでいた

が、三人でボックス席に座る事が出来た。

「ねえ、二人はどうやって知り合ったの？」

席に座り荷物は足元へ、落ち着いた所で美琴が聞いてくる。

「ん？知り合ったのはゲーム屋さんだよ」

千穂がそう答えると美琴が驚いたように私を見て言う。

「え？あんたはともかく、この子がゲーム屋に居たの？」

「私がゲームに興味を持ち、初めて店に買いに行った時に出会ったんだ」

私がそう言うと、意外そうに私を見つめる。

「へえー……ゲームするようには見えないけど……人は見た目によらないわね」

「美琴ちゃん、クレリアちゃんはそれだけじゃないよ」

美琴に不敵に笑いながら言う千穂。

「何よ？」

「何と！ゲームを始めてからあつという間にバトルグラウンドの世界一位になつて……今もその地位を守っているんだよ！」

「ごめん千穂、何の事だかわかんない」

千穂が大げさに動きながら言うが、美琴には全く伝わっていないかった。

その後、千穂は美琴に詳しく説明し始めた。

「それって結構凄くないの？」

千穂の説明を聞いた美琴はそう言った。

「凄いだよ！」

「こんな小さな子が世界一位かあ……他の奴ら不甲斐なさ過ぎじゃない？」

「実際にクレリアちゃんのプレイ見たら、そう言えないと思う」

千穂は一瞬真顔になった。

「ふーん……そうだ。話は変わるけど、千穂はリズリーランドの衣

装に何持って来たの？」

「え？私は赤いフードで赤ずきんだけど？」

「まあそんなもんよね。私も魔女帽子だけだし……パーティーグッズのやつ」

仮装の度合いは自由だから何の問題もないだろう。

「クレリアちゃんも仮装してくれるって千穂から聞いたけど……何にしたの？」

「九尾の子狐だ。家の者が話し合って決めた」

「へー、いいんじゃない？似合いそう」

「確かにクレリアちゃんだと子狐だね」

二人はどんな物を想像してるのだろうか。

「二人とも、向こうに着いたらまずホテルにチェックインして、それからリズリーランドに行こう。三人で一部屋だが大きさは問題無いはずだ」

ハロウィンパーティー期間はいつでも仮装して良いようだから、明日も仮装して行く事になりそうだな。

「私達は用意して貰った側なんだし、狭くても文句なんて無いわ……ありがとうね」

「私はホテルの部屋が心配だけど……」

美琴は素直に礼を言ったが、千穂は何故か部屋の心配をしている。

狭くは無いから心配はいらないと思うが。

「どういう事？」

「色々あるんだよ……」

私はここで千穂が何を気にしているかが何となく分かった。

恐らく、千穂の考えている事と美琴が考えている事は真逆だろう。

月下グループの令嬢という表向きの私の立場を千穂は知っているからな、どんな部屋が用意されているか気になっているのだろう。

「大丈夫だ。普通の部屋だと叔母が言っていた」

「それはクレリアちゃんの叔母さんの普通でしょ？私知ってるんだからね。……今まで私の感覚で普通だった事なんてないもん」

「ちよつと千穂？どういう事よ？クレリアちゃん……もしかしてお

金持ちだったりするの?」

私と千穂の会話の内容から察した美琴が私に聞いてくる。

「金持ちではあるな」

「……そうなんだ。ちよつと覚悟しとこうかな……」

「ああ……美琴の覚悟が碎ける未来が見えるわあー」

千穂が嬉しそうに言う、楽しんでるようだな。

電車の中で話している内にリズリーランドの最寄り駅に到着し、駅に来ていた迎えのリムジンで移動した。

「千穂、普通のホテルは泊まる客にここまでしないわよね……?」

リムジンの中で少し身を固くした美琴が千穂に話しかける。

「私はもう慣れたかな……最初はクレリアちゃんと私達の感覚の違いに驚いてばかりだったけど。大丈夫!美琴もクレリアちゃんと友達になったんだからそのうち慣れるよ!」

千穂は全く変わらず平常心だった、ようやく慣れてくれたようだ。

「千穂が悟りを開いているわ……」

私はそんな二人の会話を聞きながら牛乳を飲んでいた。

「三人でもこの部屋は広すぎるわよ……」

カミラが用意してくれたホテルが高級ホテルとして有名な「ムーンホテル千葉」である事に驚いていた美琴は、最上階の部屋を見て呟いた。

「ホテルの部屋なのに私の家より広いんだけど?」

「美琴……これがクレリアちゃん達の普通なんだよ」

色々と感想を言う美琴の肩に手を置き、重々しく言う千穂。

用意したのはカミラだ、私自身はもう少し小さい部屋でも良い。

荷物をおいた後、部屋のソファで一度休憩をする。

「流石に驚いたわ……ホント何者なのよこの子？」
「教えて良い？」

「私は別に隠してはいないぞ？好きにすると良い」
千穂が言いたそうに聞いてくるので答えると、彼女は嬉しそうに言う。

「何と！クレリアちゃんは月下グループの御令嬢なのだ！」

「……え？月下グループってあの月下グループ!？」

「あの月下グループだよ！」

「うつそでしょ……？本物の……世界一のお嬢様じゃない。何でそんな子がアキバのゲーム屋にいたのよ……」

美琴は驚きながらも困惑の表情を浮かべる。

「偶然ってすごいよね！」

「調べた時、あの店が品揃えが良いと分かってな。自分で見て決める為にあの日、あの店に行ったんだ。出会いとは不思議な物だな」

これは本当にそう思う。

私はカミラや今までの友人達の事を思う。

最終的に私に敵対する者もいたが……私の正体を知ってもなお、変わらず接してくれた者達と過ごして来た時間は、現在の私に多かれ少なかれ影響を与えていると思う。

「きつと美琴にとっても運命の出会いだと思うよ？これからも色々な事をしようね」

そう話しながら美琴に微笑む千穂。

「まあ私は構わないけどね。この子、若いのに千穂より大人っぽいし?。」

「そんな事は……無い……はず。……そう言えば！クレリアちゃんは子狐の仮装なんだよね!?どんなの？狐耳のヘアバンドとか？」

やや無理矢理に話題を変えたように感じる。

「いや、服も用意して来ている」

「……クレリアちゃんの家の人達がそんな程度で済みます訳ないか」

「へー、じゃあかなり本格的な衣装なんだね。千穂も見えてないの?」
「うん。相談に乗るとは言ったけど、上手く決まったみたいだから

結局相談してないんだよね」

「リゾートランドで着替えるからすぐに分かる。そろそろ行かないと、朝早く来た意味が無くなるぞ?」

「……そうだ、千穂は準備出来てるよね?」

「大丈夫!」

「クレリアちゃんは?」

「問題無い」

「じゃあ行きましようよ、クレリアちゃんの仮装が楽しみになって来たわ」

「しゅっぱーっ!」

こうして私達はホテルの部屋を出てリゾートランドへと向かった。

フリーパスを買い腕に巻きつけ、リズリーランドの入り口に並ぶ。次々と入って行く人間達を見ながら待っているが、多くの者達はこの場所の雰囲気当てられて気分が高揚しているようだ。

それは私と共に来ている二人も例外では無く、千穂ははっきりと期待を表し、美琴も落ち着いているように見えてソワソワしているのが分かった。

「園内の所々に更衣室があるから、そこでクレリアちゃんは着替えてね?」

「私達もちゃんとして行くから安心して、私達は更衣室は要らないからもう準備しちゃうけど」

そう言つて荷物から魔女のような帽子を取り出す美琴。

千穂も丈の短い赤いフードマントを出して着ている。

「ぷっ!千穂、怪しい宗教団体みたいだよ?」

「赤ずきんですー!」

私は年相応に楽しそうにしている彼女達を眺める。

人類も魔法人類も、子供達はあまり変わらないな。

騒ぐ二人と共に、私は園内に入る。

「クレリアちゃん、入り口のすぐ傍に更衣室があるみたい……行こ!」

貰った園内の地図を見て千穂が私を呼ぶ、私はそのまま彼女について行った。

更衣室内で私は仮装衣装を取り出すと、着ていた薄手のセーターとフレアスカートを脱いでバッグに仕舞う。

耳と尻尾を出し入れする所を見せると騒ぎになりそうだから、出しっぱなしにしておこう。

衣装を着て魔道具を起動し、狐面を被る。

「大丈夫？手伝おうか？」

外から千穂の声がする。

「終わった、今出る」

私は外に出る、すると千穂と美琴の驚く声が響く。

「うわー！なにこれ可愛い！お狐様だー！」

「本当に凄いねこれ……きゃ!?耳と尻尾は動くの!?ふわふわだし

……やればここまで出来るんだね……」

騒ぐ二人に引かれ、周囲の客も騒ぎ始めた。

「うお!?なんだあれ!？」

「可愛いー！」

「凄い完成度……あんなの見た事無い……」

周囲が騒がしくなったので、私達は移動する事にした。

「二人とも、平気か？」

邪魔な荷物を預け三人で歩いている私達を、目にした人が立ち止まって眺めたり、写真を撮ったりしている。

「平気だよ？それよりも……写真撮らせて？」

「勿論だ」

千穂は通りすがりのカップルの女性に写真を頼み、三人一緒の写真を何枚か撮って貰った。

「俺、こんな凄い仮装初めて見たよ」

「本当に可愛いわ……私とも撮ってくれる？」

カップルは私達を撮影しながら感想を言い、女性が私と写真を撮りたがったので撮らせた。

「後は二人で撮ろう！」

千穂はそう言うのと撮影役を美琴に任せ、抱っこしたり後ろから抱きしめたりと言った写真を撮った。

「クレリアちゃん……私もいいかな？」

美琴がそう頼んでくる、断る理由は無いな。

「良いぞ」

「はい、こつち見て！」

千穂は笑いながら私と美琴のツーショット写真を撮影した。

私達は注目を集めつつも園内の店を見たり、仮装したまま楽しめる乗り物に乗っていた。

次の乗り物へ向かうと、複数の若者同士が争っているのを見つける。

「こつちが先に並んでたんだ！無理矢理入ってくるな！」

「私達はこの子に並んどいて貰ってたんだー。……ねえ？」

「どう見ても知り合いには見えないだろ！」

列の割り込みか？

「すまない……あの争いの経緯は分かるか？」

近くで見えていた女性に聞いてみる。

「え？ええ、あの男性のグループが並んでいる前に別の女性グループが割って入って来たの。それで先に並んでいた彼らは文句を言ったのよ、そしたら彼女達が彼らの前にいたあの女性が自分達の為に並んでくれていたって言い出して……」

視線の先には、どう見ても怯えているようにしか見えない女性が居る……本当に友人か？

「あ、クレリアちゃん！」

やがてリズリーランド側に連絡が行くだろうが、彼女達が居たら私達が乗るのに邪魔だ。

私はそのまま若者達に近づいていく。

「うわー！何この子！」

「仮装？すごいわこれ」

私を見た女達は声を上げるが私はそれを無視して言う。

「お前達、喧嘩ならよそでやれ、お前達がいると私達が乗るのに邪魔

だ

「何よこの子……私達は友達なのよ？」

「お嬢ちゃんの出番は無いわよー？」

そう女達は言い、離れる気配を見せない。

「その女」

「は、はい……」

私は彼女達に囲まれていた女に声をかける。

「お前は本当に彼女達の友人か？」

「ほんとだよねー？」

「アタシら親友じゃーん？」

女達はみんなそれぞれに何かを言っているが……。

違うな。

「お前達は少し静かにしろ」

「……っ!？」

突然女達が静かになる、周囲は急に黙った女達を不思議そうに見ていた。

「正直に答えろ。お前はどの女達と友人か？」

「ちっちち……違いますう！」

「そうか、ではこの女達はお前を利用して早く乗ろうとしたんだな？おい女共」

私が振り向いて言うと、彼女達は声が出せないまま身を震わせている。

「乗りたいのなら後ろに並べ、その気が無いのなら何処かへ行け」

私がそう言うと、彼女達は声を上げずに全員走り去って行った。

こんな所で子供の教育をする事になるとは。

「いきなり行っちゃうから心配したよ……」

絡まれた女性と、割り込まれた若者達に礼を言われて戻った私に、美琴がそう言ってくる。

「問題無いが、また注目されているな」

「堂々とあんな事したらそうなるに決まってるでしょ……私も心配したんだからね？」

向けられる視線は、感心した様な物と奇妙な物を見るような物が混ざっている。

私のような外見の者が行う事では無かったから、だろうな。

「取り敢えず、並んでこれに乗ろう」

私達は周囲の注目を浴びながら列に並び、乗り物に乗った。

すっかり辺りが暗くなるとパレードが始まる。

一般の者も飛び入りで参加出来るらしい。

「行くよー美琴、クレリアちゃん！」

参加出来るのと知っていて、千穂が黙っている訳がなかった。

「流石にこんな適当な仮装で混じるのは恥ずかしいんだけど……」

「そんなの関係ないよーほら、行こう！」

私と恥ずかしがる美琴は千穂に引張られてパレードに参加した。

結局、私達はそのまま長い間パレードに参加し続け、周囲の客も大いに盛り上がった。

その後、夜になり人が減った園内の更衣室で服を着替え、すぐに退園した。

「あー！楽しかった！」

「ちゃんと休むのよ？明日も行くんだから」

千穂はホテルの部屋に帰るなりソファ倒れ込み、美琴は荷物をいじっている。

「土産を買うつもりなら忘れないようにな」

「大丈夫ー」

買い物は明日の帰る直前にする事になっている。

「食事の前にお風呂入ろうかな……」

「美琴、ここのお風呂三人でも余裕の大きさだからみんなで入ろう

よ」

「ええ？わざわざみんなで入らなくてもいいでしょ……」

「せっかくだし入ろうよー。嫌なの？」

「嫌って訳じゃないけど」

「よし！クレリアちゃんお風呂入ろー？」

「分かった」

ソファに座り二人の会話を聞いていた私は、風呂に入る準備を始める。

「うわ……凄白いし……スベスベでプニプニだ……」

美琴が私の体を触って驚いたように呟く。

私の体は、外見は人間の子供だし、肌触りなどにも気を遣っているが、中身は謎の何かだ。

「凄いでしょ？」

「いや……ほんと凄いわ。可愛くて令嬢で体もこんな綺麗って……この先どうなるんだろうね？」

残念ながら、私はその気にならなければどれだけ時間が経とうと変わらない。

「そうだね。悪いけど、これはどんなアイドルでも相手にならないよね……」

「千穂、人には好みと言う物がある。私のような容姿がどうしても駄目だという者だっているはずだ」

そう言った私に、美琴が苦笑いして言う。

「あー、確かにそうなんだけどね……それでも大半の男はクレリアちゃんみたいな子が好みだと思うわよ？」

私の様な者が好きだと？それは何と言ったか……。

「そうか、ロリコンと言う奴だな？美琴は人間の大半がロリコンだと言うのか？」

「ぶっほっ！」

顔まで湯舟に沈めていた千穂から嘖くような音が聞こえた。

「いや!? そうじゃなくて!? 可愛くて肌が綺麗でスタイルが良い子が
大抵好きな物なのよ!」

慌てたように言う美琴だが、この体に対してスタイルと言われても
な。

「美琴はクレリアちゃんの将来を見てるんだよ。将来、私達と同じ
位の歳になった時はきつとモテモテだよ?」

「そうね、アイドルとか女優とかモデルとか……そういった物に絶
対誘われるよ」

「アイドルと女優とモデルか。もし本当に誘われる事があったなら
条件次第ではやってみてもいいな」

「え!? ほんとに!?」

「……クレリアちゃんはそんな事に興味無いと思ってたけど」

私の言葉に千穂は驚き、美琴は意外そうに言う。

「千穂が言っただろう? 興味が無くても新しい発見や楽しさが見つ
かるかもしれない、やれる時にやるべきだと。確かに今の文明と文化
は基本的には今だけの物だ。それならば、嫌で無いのなら気分次第で
やってみるのも良いと思ってな」

「おお……私の言葉が将来の大スターを生んだかもしれない……」

「言い過ぎよ……と言いたい所だけど。この子だからね……」

「とんでもない化け物を起こしてしまったかもしれない!」

「うるさい!」

化け物は当たっているな。

私はそう思いながらじゃれ合う二人を見ていた。

翌日。

朝食を食べて手早く準備を済ませた私達は、ホテルをチェックアウトして再びリーズランドへ行き、前日と同じように仮装をした。

千穂と美琴はもう見ているため私の姿に大騒ぎする事は無かったが、周囲は昨日と大体同じ反応だ。

今日は昨日見ていない所を回り、土産を購入し、夜になる前に帰る予定になっている。

「美琴、この置物どうかな？」

「こういうのって後で邪魔になって捨てない？」

二人は乗り物に乗る合間に店に寄り、買って帰る物を話し合っている。

「クレリアちゃん、これどう思う？」

「正直に言ってる？」

千穂と美琴が私にガラス細工の置物を見せて来る。

「本人が価値を感じているのなら構わないと思う」

「ほら、クレリアちゃんも構わないって言ってる」

「本人が価値を感じているなら」って言ったじゃない。それはいらなと思うって事じゃないの？」

よく騒ぐ子達だ。

しかし、楽しんでいる友人達をただ見ているのも悪くない。

「ただの置物では無く、向こうのガラスにしたらどうだ？ 実用的だぞ」

私は離れた所にあるガラスのコーナーに目を向ける。

「私もガラスは考えたんだけど、使っていると割れちゃうんだよね」

「置物も落ちたら割れると思うわよ？」

そういう事ならば少し友人として手を貸そう。

「ガラスが嫌な訳では無いのなら買えば良い。私が化け狐らしくおまじないをしてやろう」

「クレリアちゃんもこう言ってるし、グラスにしたら？まだ買わないけど私はグラスにする……私にもおまじないしてくれる？」

美琴が私を見て聞いてくる。

「いいぞ」

「ふふっ、ありがとう」

私達が会話していると千穂が言う。

「帰りまでに考える事にする！」

「……ねえ千穂、あの子迷子じゃない？」

「どこ？」

美琴の視線の先を見ると一人でベンチに座っている泣きそうな小さな男の子供を見つけた。

「そうかもな」

私はそう言って特に気にする事無く通り過ぎた。

「大丈夫？お父さんとお母さんは？」

「分かんない……」

声が聞こえ振り向くと、千穂が子供に話しかけている。

私は彼女達の所へ向かった。

千穂だからな、何となくこうなるのではないかと思っていた。

「迷子相談所かキャストに言えばいいかな……？私、行ってくるね！」

千穂はそう言って走ってどこかへ行ってしまった。

ここに居ればそのうち戻って来るだろう。

「うっ……ひぐっ……」

「あー……。私こういうの苦手なんだよね……。何か飲み物でもあげれば落ち着くかな……？」

「私が見ているから買って来い」

「……まあクレリアちゃんなら平気か……。じゃあちよつとだけ待っててね」

美琴がそう言って離れて行く。

「好きな動物はいるか？」

「ぐすつ……ゾウさん……ずずつ……」

私は周りから見えない様に手元を隠しながら子供に囁く。

「実は私は妖怪なんだ……手を見ている」

私は手の上に魔力で作った小さなゾウを作り動かした。

「わあ……」

子供は泣き止んでゾウを見ている、今の人類の子供にも効果があるようだ。

「おーい、買って来たよ」

美琴が戻って来たのですぐにゾウを消す。

子供は私を見ていたが、その表情に悲しみは無かった。

「はい、ジューズ」

「ありがとうお姉ちゃん」

「あれ？泣いてない？クレリアちゃん何かした？」

「少し子供をあやしたただけだ」

「自分も子供じゃん……」

美琴は笑いながら子供を挟むようにベンチに座る。

しばらくすると千穂がキャストを連れて戻って来た。

「この子ですか？」

「はい」

キャストが本人の名前や服装を確認している。

「名前と性別……服装などの特徴も同じ。大丈夫、今お父さんとお

母さんが来るからね」

そう言ってキャストが連絡を取る、やがて両親が来るだろう。

キャストは私達に丁寧にお礼を言い、後は任せて欲しいと言って来たが、肝心の子供が私の服を握って離さなかつたので親が来るまで待っている事にした。

やがてこちらに早足で向かって来る一組の男女が見えた。

「お父さん！お母さん！」

子供が突然立ち上がり走り出し、両親であろう男女は走り寄った子

供を抱きしめた。

「本当にありがとうございます」

私達に礼を言う両親と少し話していたが、お互いに予定があるだろうと分かれる事になった。

「もう迷子にならないようにねー」

「気を付けてね」

千穂と美琴がそう言うと言つて男の子が言う。

「妖怪のお姉ちゃん達ありがとうー」

「妖怪？」

「私がそういう事にしたんだ」

「ああ、なるほど」

少年の言葉に、子供の両親とキャスト、千穂と美琴も不思議そうにしましたが、私の言葉を聞いて納得した。

無事に迷子を両親に会わせた私達は、園内を歩きながら話す。

「こういう所で迷子はよくある事だから、二日も居たら一人位は見つけるよね」

「千穂がいて助かったよ、私じゃ上手く扱えないし」

「ふふん！」

千穂は得意げだ。

「千穂はすぐ行ってしまったが、あの場合子供の扱いに慣れている千穂が残り、美琴が連絡しに行った方がよかつただろうな」

「……確かにそうだね。今のお礼は無しで」

「ええっ!？」

私の言葉に納得した美琴が感謝を取り消し千穂が声を上げた。

それから私達は園内を巡り、今は不人気な、人が殆どいないエリアに来ていた。

「今のうちにトイレ行つところかな。人気のエリアだと込んでて入れなそうだし……」

「あー、そうだね……今の内に行つところか」

「じゃあ私はこのベンチで待ってしよう」

「おっけー、ちよつと待っててね」

「すぐ戻るよ」

そう言つてトイレに向かう二人を見送った。

「ちよつと、大丈夫？お父さんかお母さんは？」

「今トイレに行つている、すぐに戻つて来る」

リズリーランドへは親子連れなども多く、人が少ないエリアとは言つても心配して声をかけて来る者が多い。

悪気が無いのは分かるがここにいるとずつと声をかけられそうだ。

先ほど声をかけて来た夫婦が離れて行ったのを機に、私もトイレの傍に向かう事にした。

見知らぬ気配が五人、二人の傍に近寄っているからな。

「ちよつと!?どいてよ!」

「何なのよ、あんた達!」

「そう言うなよ、一緒にまわろうぜ」

「人を待たせてるつて言つたでしょ!」

千穂と美琴の声と知らない男の声か、もうすぐ帰るといふのに邪魔をするとは。

「千穂、美琴」

「クレリアちゃん駄目!誰か人を呼んで!」

「走つて!クレリアちゃん!」

私が向かうと五人の男に二人は絡まれていた、どんな場所でもこう
いった事は起こる物だな。

周囲に認識阻害の空間を作り出し、近寄って行く。

「おお!?なんだこいつ!?!」

「すげえ気合入ってんな!?!」

「可愛いじゃねえか……」

男達も私に近づいてくるが、気にせずと言う。

「お前達。すぐに二人を放すなら許してやるが、どうする?」

男達は顔を見合わせた後、笑った。

「その仮装で強くなったとでも思ってるのかな?お嬢ちゃん?」

「この子供も連れて行こうぜ、俺子供とやった事無いんだよ」

「この屑男!クレリアちゃんに手を出したら許さないから!」

「うるせえぞ!」

そう言っただけで暴れる千穂を殴ろうとする男だが、その拳は何かには
遮られる。

「つ!?いてえ!?何だ!?!」

「放す気は無いか」

その上、千穂を殴ろうとしたな?

「あ……」

男達は急に大人しくなり、二人を放すとフラフラと人気の無い方へ
歩いて行った。

「何……?どうなってるの?」

「クレリアちゃん!大丈夫!?!」

美琴は戸惑った声を上げ、千穂は私に声をかけて来た。

二人が居るから、この場は見逃そう。

『奴らを処分しておけ』

『かしこまりました、主様』

違和感を感じている二人だが、やがて考えても仕方ないと思っ
たよ
うで、元の調子に戻った。

その後、二人は友人達にクッキーを買い、家族用に人数分のグラス
を買った。

約束通り私は二人のグラスにおまじないをして、帰路についた。

二人と別れ家に戻った後、私はすぐにカミラを呼んだ。

「どうしたのお母様？」

「昨日と今日の私の行動で、何か問題は起きているか？」

「大丈夫ね。凄い完成度の子供の仮装者がいたって事はかなり広まっているけど、誰もどこの誰だか知らないわ」

かなり注目されていたが問題無かったか。

「あの五人は？」

「ああ、アレね……。色々やっていたみたいだし、消えても誰も何もしないとと思うわ」

カミラの雰囲気が少し変わる、怒っている様だな。

「何でそんな者達がリズリーランドに居たんだ？」

「獲物でも探してたんですよ。お母様に手を出して人生が終わったけれど、自業自得よね」

「そうか」

「この様子だと……。勿論、状況によっても変わるとは思うけれど、あの程度力を見せても大丈夫そうね。お母様が追い払った女達もお母様の仮装写真に色々と言っていたけど、それ以上は何も起きなかったわ。どんなに訴えても、ほとんど意味は無いみたい」

「誰も信じないのか？」

「証拠があつたとしても、作り物だと思われてその他大勢の「そんな事ある訳無い」という意見に埋もれて消えて行くみたいね」

「予想以上に問題無いようだな」

「かつては起きた現象を素直に受け入れて、私達を精霊や神だと考えて受け入れていたけど……。今じゃ誰も本当だと思わない様ね。映像や画像の加工技術が発達したのも理由かしらね？あまりにも現実離れた物は信じられないみたい」

「機会があればもう少し色々としてみるか」

「お母様の好きにして良いわよ？もし全部バレてもどうにかなるのは人類の方だし。気軽に暮らしていればいいと思うわ……なんかな……昔お母様が似たような事を言ったような気がするわね？」

「そうだったか？とにかく、これからも私の判断で好きなようにするでしょう」

「ええ、その為に今の環境を作ったんだもの」

カミラはそのまま私と紅茶を楽しみ、その日は泊まって行った。

数日後、千穂と美琴は仮装した私との写真をクラスメイトに見られ、質問攻めにあつたらしい。

月の拠点の談話室で私が侍女達と過ごしていると、カミラ、ヒトハ、ジャンヌの三人がやって来た。

「お母様、お話があるの」

「何だ？」

三人が雑談をするためにやって来たのではないと判断した他の侍女達が席を空け、空いた席に三人が座り話し始めた。

「以前話した児童養護施設と学校を作る計画を進めたいのですが……よろしいでしょうか？」

ジャンヌが私におずおずと言う。

「いつかやろうという話はしていたな」

「他の案はともかく、人間の子供達の成長に関わる児童養護施設と学校の計画は、早めに行っておいた方が良いと思ひまして……」

ジャンヌはそう話すが、本人が我慢出来なくなったのではないだろうか。

「私は金を出すだけだ。実際に計画の中心で動くのは児童養護施設側はジャンヌ、学校側はヒトハで間違い無いか？」

「はい」

二人は声を揃えて返事を返した。

「分かった、計画の実行を許可する。カミラ、あくまでこの二人が主体だが、侍女隊全員で手を貸してやってくれ」

「勿論よ、任せて頂戴。月下グループの計画として進めるから、人間の優秀な者達も助けてくれるわ」

「二人の好きなようにやると良い」

「感謝いたします……主様」

「ありがとうございます、主様」

許可を出すと、二人は微笑んで返事をした。

それから孤児の多い国のいくつかにフタバが話を持ち掛けて児童養護施設と学校を建設する許可を出させ、職員と保護する子供達の選

定を始めた。

大掛かりな計画ではあるが、月下グループとしての計画でもある為、大勢の人間達が動く筈だ。

手が足りないという事は無いだろう。

12月に入り、2000年も後僅かになった。

日本では季節は冬に入っている。

私は冬の町並みを楽しむために北海道の都市にも家を購入した。

小高い丘の上にあり、庭の雪景色と見下ろす町並みの雪景色を楽しめるので中々気に入っている。

沖縄辺りにも買おうかと思っただが、南寄り島と大差無かったのを見送った。

「雪化粧した町並みも良い物ね」

家の庭から見える町並みを見てカミラが言う。

雪が降り積もる中、人間らしく厚着をした私達は、雪景色を楽しんでいる。

「お二人共、そろそろお鍋が出来ますよ?」

娘の一人が私達を呼びに来る、昼食の準備が出来たようだ。

「二度戻ろうか」

「そうね」

呼びに来てくれた娘と会話しながら、私達は部屋へと戻った。

クリスマスは千穂と美琴と共に東京の家でパーティーをし、年越しは娘達と過ごすため理由をつけて断った。

「二年……たった一年かあ……」

「今まで長い時間を過ごしているのに……妙に一年が長く感じたわよね」

北寄り島で年越しをしている娘達がそんな会話をしている。
私も時間の感じ方が変わっている事は感じている。
人類と深く関わりながら過ごす様になったからかもしれない。
去年の冬と同じく炬燵に入り、みかんを摘まむ。

テレビから聞こえる除夜の鐘を聞きながら皆でのんびりしている
と年が明けた。

「明けましておめでとうございます」

娘達が私に声を揃えて言う。

「明けましておめでとう。今日はゆっくりしよう」

「こういう物ですからね、人類の文化は色々不思議です」

「朝になったらおせちを食べましょう、皆で作ったんですよ」

「それは楽しみだな」

私達は翌朝まで他愛のない会話をし続けた。

「明けましておめでとうございます、クレリアちゃん」

「明けましておめでとうございます」

「明けましておめでとう、二人とも元気なようで何よりだ」

2001年一月三日の朝、私達は明治神宮でお参りをするために集
合した。

駅へと移動する車の中であいさつし、それからは特にいつもと変わ
らないやり取りをして過ごす。

私達は全員洋服で和服は着ていないが、電車や街中では和服の人間
達を多く目にした。

「うわー、めっちゃ混んでる……」

「これでも三日だから少ないはずだけどね」

人の多さにげんなりした声を出す千穂と、これでも少ない方だと言
う美琴。

テレビで夏の海やプールを見た事があるが、人間の間水がある状
態だった。

あの状態の海やプールに好んで向かう人間の趣味は、私には理解出
来ないな。

目の前に広がる光景を見て、そんな事を思いながら千穂を見ると、
嫌そうにしている。

分かっていて来ているのになぜ嫌な顔をする。

「千穂、何故そんな嫌そうな顔をしているんだ？」

「だって滅茶苦茶混んでるんだもん……」

「分かってた事でしょ……」

千穂と美琴はそう言っている……何かおかしいな。

「二人とも。夏の海やプールで混んでいるのを知っていても行くの
は、混んでいるのが好きだからでは無いのか？」

「え!？」

「何言ってるの?」

驚く千穂と困惑の表情を見せる美琴。

「人間は混雑した場所で過ごすのが好きなんだろう?」

「それは無いと思う……」

「混みすぎて嬉しい人は殆どいないと思うよ?」

「そうなのか。では、何故混んでいるのが分かっているて行くんだ?」

「あー……混んでいて居心地は良くないけど、その時にしか出来な
い事をしたくないんじゃないかな?」

私の疑問に美琴が答えてくれる。

その時にしか出来ない事……なるほどな。

「みんな出来る事なら混んでない方が良いと思ってると思うけど、
そんな所は遠かったり高かったりするから……仕方なく行ってるん
だと思う」

千穂が補足してくれる。

人類はそういう趣味の者が多いのだと思っていたが、違う様だ。今しか出来ない事をしようとしているだけなのだな。

「まさかそんな事考えてるなんて、お嬢様はずれてるわね」

美琴が苦笑いしながら言う。

娘達が「私も完璧では無い」と感じられる部分とは、こういった所なのだろうか。

「今度の夏休みは私の家に来てみるか？」

「プライベートビーチとか？」

「日本じゃ難しいんじゃないかなかったっけ？」

私の誘いに千穂と美琴が答える。

日本でも私ならば用意出来るが、日本の海は一部を除いて透明度が低い。

以前、彼女達は透明な海のある場所に行きたいと言っていた筈だ。

「沖縄から東に行った所にある島の一つを私が所有している。そこなら誰もいないし海も透明度が高いぞ」

「そこに招待してくれるって事？」

美琴が期待を込めた声で言う。

「そうだ、お前達の都合がつけばいくらでも居ていい。ただ、やる事はやれよ？」

「行く行く！一緒に夏休みの思い出を作ろう！」

「……あんた、もうちよつと遠慮したら？」

「美琴、私に遠慮など無用だ。駄目なら最初から誘ったりしない」

千穂は他の者から見ると、私に甘えて都合よく使っているようにも見えるかも知れない。

しかし、私はその行動の根底に「一緒に沢山思い出を作り、寂しい思いをする事が無いようにしたい」という考えがある事を知っている。

彼女が私の誘いに遠慮する事無く乗って来るのはそういう事だ。

「美琴も一緒に行こうよ！三人の方が楽しいよ？」

「分かったわよ。クレリアちゃん、その時はお世話になります」

美琴はそう言って私に軽く頭を下げる。

彼女はまだ少し硬いな。

「では行くという事で進めるが、取り敢えず細かい話は後にしよう。まずは参拝だ」

「そうだね。じゃあ……美琴は反対ね」

「はいはい」

私は二人に挟まれ、手を繋ぎながら参道を歩き始めた。

冬も終わり、季節は春に入り始めた。

私は東京の自宅で児童養護施設と学校建設計画の進展を聞いている。

「中国やインドを始めとした、優先するべき国にまず児童養護施設を作る予定だったと聞いたが？」

私が聞いた話では間違いなくそうだったはずだ。

だが、今聞いた報告では優先する国には勿論、優先度の低い大国などにも既に孤児院が作られる予定だという。

「考えればこうなってもおかしくなかったのよね。問題は無いし、むしろ計画は早く進んだ訳だけど……説明するわ」

カミラがそう言うと、ジャンヌが後に続く。

「カミラ様、ここからは私達が。……発端は月下グループとして児童養護施設と学校の建設の計画を行った事でした。主様もご存じの通り、大国や重要な組織の上層部の一部は月下グループが月の庭園の表の姿だと知っています」

続いてヒトハが口を開く。

「……私達が月下グループとして児童養護施設と学校の建設計画を行っているのと知った各国から、「是非計画に参加させて欲しい、」と打診が来たのです」

そこまで二人が言うと、カミラが話し出した。

「二人の話した通り、各国が積極的に協力してくれたのよ。彼らか

らすれば、月の庭園が孤児の対応と教育まで行ってくれるという事だもの。そして私達なら失敗はまずありえない、私達に任せておけば全て解決する……そう考えたんだと思うわ」

カミラの後にヒトハが続く。

「日本を始めとしたそういつた方面に力を入れていない、または力を入れられない国々からは大歓迎でした。私達の児童養護施設を受け入れる際には法の改定や新法の設立を行う必要がある事も伝えましたが、どの国も長くは悩みませんでしたね」

「法とは？」

私はヒトハに問う。

「例としては……親が親としての役目を果たしていない場合、親権をはく奪出来るようにする、といった法ですね」

ヒトハが例を挙げて説明してくれた。

「育児放棄された子供を、子供が作れない夫婦などに預ける事が出来るようにする、という事で合っているか？」

「それだけではありませんが、合っております。法の変更作業は各国の首脳達の仕事ですので、何か問題が起きない限り私達が手を出す事は無いでしょう」

ヒトハと話をしているとジャンヌが声を上げた。

「主様。基本的には血が繋がっているだけの他人の下に居る子供達を、血の繋がりが無くても愛のある家族の下にゆだねるためですが……。場合によっては子供達の両親にも手を差し伸べる事をお許しただけませんか？」

「親にもか？」

「はい。愛していても不幸により環境が悪化し、自分達の下にいるよりは児童養護施設の方がよいと考え……預ける者達も居ます」

「成程な」

「もし主様が許していただけるならそういった者達にも手を差し伸べたいのですが……」

人間の親の感覚と私の感覚が近いかどうかは分からないが、私もここに居る娘達の親の様な物だからな。

私は敵対するか本人が望まない限り、今の時点では自分から娘達を手放す気は無いが、人の身ではそうは行かない事を知っている。

「許可する。お前達の判断で手を貸すといい」

「ありがとうございます」

私は彼女に許可を出す。

ジャンヌはこういった感覚は一般的な人間に近く、人類社会的には善人と言われるような部類だと思う。

深く探る気は無いが、内心では人類に神の慈悲を与える、などと考えているような気もするな。

2001年4月。

千穂と美琴は高校三年生となった。私達の関係は今も変わっていない。

基本的には千穂が私と美琴を誘い、三人で遊んでいた。しかし、二人には私以外の友人がいる。

ある時、私にばかり時間を使わない様に話をした。

その話をした時、二人共……特に千穂は強く拒否した。

だが、私が全く譲らなかつたため二人は渋々受け入れ、それ以降の関わりは以前よりも減った。

そんなある日。

私が東京の自宅で本を読んでいると、置いてある携帯に着信が入る。

「何か用か?」

「クレリアちゃん、今大丈夫?」

美琴からの電話に出ると、彼女はそう言った。

彼女もすっかり私に慣れて、こうして普通に電話してくるようになった。

「大丈夫だ」

「今度お花見しない?上野恩賜公園(うえのおんしこうえん)で」

「花見か……良いな。メイドに料理を作らせよう」

「私達も持つて行くから、少なくとも平気だからね?それと……」

「どうした?」

「安上がりな遊びばかりで悪いわね……お金のかかる遊びは学生にはきついよ。毎回クレリアちゃんに奢って貰うような真似はしたくないし……今更だけどバイトでもしようかと考えてるのよね」

美琴は以前に比べると大分言いたい事を言うようになった。

最近の私は娘達や友人達の安全の為に、出会った相手を多少探るようになっている。

人類は大抵の場合、何かしら悪意を持っているが、今の所私やその

周囲にそれが向いていた事は無い。

たとえ悪意を向けていても、行動に移さない限り咎める気は無いが。

そう、悪意を持つだけなら構わない。

持つだけならな。

「金をかければ良いという訳でも無いだろう。私も嫌いでは無いから問題は無い、三人だな？」

「うん、いつも通り私達だけだよ」

「それと、バイトはやめておけ。お前達は今年受験だろう」

「うん、そうよね。大人になれば嫌でも働く事になるんだし、それまでは自分を磨こうと思うわ」

彼女のその考え方は悪くない。

出来る事を増やし、自分自身の力を鍛える事はマイナスにはならないだろう。

「それで、いつ行くんだ？」

「天気も良さそうだし……来週の土日のどつちかに行こうと思ってるんだけど、大丈夫？」

「大丈夫だ、場所取りも任せておけ」

「場所取りは私達がするわ。私達が誘ってるのに、全部クレリアちゃんに任せるのは流石にね？」

「そうか。それで気が済むのなら任せよう」

「うん。正確な予定は決まったらまた連絡するから、じゃあね」

「分かった」

返事をして電話を切る。

私は侍女とメイドに来週の土日のどちらかに花見をする事、正確な予定はまだ決まっていない事を話しておく。

数日後、再び連絡があり土曜に行く事が決定した。

それから予定日まで彼女達は学校へ通い、私は自宅でのんびりと過ごした。

「主様と花見なんて嬉しいね」

「似たような事は月でも地球でもしただろう」

「それでも嬉しいんだ」

「そうか」

上野恩賜公園に向かう車の中で、大きな五段の重箱とクーラーボックスを膝にのせたヨツバが嬉しそうにしている。

料理は少なくするように言ったのだが、重箱が大きい。

これはメイド達が張り切って作り過ぎたからだ。

言った事を守れないのは問題だが、私達は人類がこういった生物である事を理解している。

本当に問題が起きそうな時は娘達が介入するだろう。

「ヨツバ、私の事はお嬢様と呼べ」

「あ。かしこまりました……お嬢様」

私に指摘され、言い方を変えるヨツバ。

やる時はやる子だ、大丈夫だと思いたい。

「私の友人二人と、周囲に多くの人間がいる。あまり大きな騒ぎは起こすなよ」

「任せといてくれよ」

今日のヨツバはいつもの侍女服では無い。

薄いピンクのゆったりとした長袖のセーターに黒いロングスカートを身に着け、ハイヒールの靴を履いている。

私は淡い青色のアシンメトリレースを使用したヘムラインワンピースに、やや明るめのベージュのショートブーツだ。

メイド達は私が派手な服装をあまり好まない事を知っているので、落ち着いたデザインの物を用意したらしい。

「美琴、公園に着いた。もうすぐ着く」

私は公園に入り、美琴に電話する。

千穂はたまに気が付かない事がある、私はこういつた時は美琴に連絡するようになった。

「クレリアちゃん？ええと場所はね……」

居る場所は分かっているが、私は彼女の案内を遮る事無く聞いた。そのまま私達は周囲の花見客の視線と感情を受けながら、二人が待っている場所へ移動した。

「居た、あそこだ」

「あの手を振ってる女性がお嬢様のご友人ですね」

侍女としての言葉使いになったヨツバが視線を向ける。

込み合う花見客の中で場所を取っている二人がいる、私を見つけた千穂が手を振っていた。

私は軽く手を上げて返事をし、向かって行った。

「ご苦労だったな」

「問題無いよ！」

「ここだけ空いてたのよね……何でだろ？」

私の言葉に答える二人、場所を取れないと中止になるからな。

ヨツバは荷物を下ろし、私の少し後ろに立つ。

「紹介しよう。私の侍女の一人であるヨツバだ」

「お嬢様の侍女しておりますヨツバと申します。どうぞお気軽にヨツバとお呼び下さい」

私の紹介で一步前に出て自己紹介するヨツバ。

問題無さそうだ。

「こ、こちらこそよろしくお願ひします！」

「お世話になります。よろしくお願ひします」

二人は立ち上がってお辞儀をする。

「綺麗な小麦色の肌……。背が高くて、美人で……。いいなあ」

「あれ？メイドじゃなくて……。侍女の一人？」

羨ましがる千穂と疑問を口にする美琴。

「メイドは主に家の仕事を行います、私達侍女はお嬢様の身の回りのお世話をする専属のような物です」

ヨツバがそう説明すると美琴が言う。

「なるほど。でも……。クレリアちゃんの侍女って全員こんな美人なの？」

「様々な者が居るが、ヨツバを美人だと感じるなら全員似たような物だと思う」

「そう……」

私の答えに美琴は気の抜けたような返事をした。

「さあ、準備をしますのでお花見を楽しみましょう？」

ヨツバがそう言って料理を並べ始める。

「美琴、私達も準備しよー！」

「そうね、そうしましょ」

二人もヨツバを手伝い、料理を並べ始めた。

「ではお嬢様、挨拶を」

準備が終わりヨツバがそう私に言って来る、挨拶か。

「では……」

「お嬢ちゃん達可愛いねえ！」

いきなり大声で割り込まれ、振り向くと、酔っ払った五十代程の太った男達の集団がいた。

まだ朝だが、もう酔っているのか。

「お嬢ちゃん達もおじさん達と一緒に……」

男達の一人が私の傍にやって来て私の肩に触れようとしたが、その腕はヨツバに掴まれた。

「おい、豚……。何触ろうとしてんだ……？」

「ひいつ!?!……いだだだだ!!」

男の腕を掴む手からは何かが軋むような音がする。

「主様の言葉を遮った上に触ろうとしやがって……!?!ぶち殺すぞ人間があ!!」

そのまま私に近寄って来た男を投げ飛ばし、他の男を巻き込んだ。

「大きな騒ぎを起こすなど言われてるからこれで勘弁してやる……!とつとと帰れ!!」

「ひあ!?!、殺される!!」

ヨツバが叫ぶと男達は一齐に逃げて行った。

「ヨツバ」

私がそう言うのとヨツバはびくりと震えて私の方を向く、彼女は不安そうな表情をしている。

「よくあれだけで済ませた、偉いぞ」

「っ!?!ありがとうございます!?!主様!?!」

不安そうな表情から一気に表情が変わり、嬉しそうに笑うヨツバ。

「その呼び方は減点だが」

「えっ!?!……あつ……」

私の事を主様と言っていた事を思い出したのか今度は落ち込むヨツバ。

侍女としてのヨツバはあまり持たなかったな。

彼女は私に何かあるとこの様に激昂するが、今日はよく我慢した。彼らを殺さなかったからな。

そう思っていると、周囲が静かになっていた。

辺りを見回すと、全員ヨツバと私を見て固まっている。

私がどうするかと思っていると、突然大きな拍手と歓声が起こった。

「凄かったぞ!?!ねーちゃん!?!」

「可愛い主様を守る騎士……!?!カッコいいよー!?!」

突然の大歓声を受けて、ヨツバは困惑していた。

あの程度は特に問題は無い様だ。

現にあの騒ぎがおさまった後、周囲の客が差し入れを持って来て料理と飲み物が増えた。

誰もがヨツバを褒め、異常だとは思っていないようだ。

「ヨツバさんはあれが素なんですね」

「かつこよかった！」

「二応侍女としての教育は受けてるから侍女らしくしようと思ったんだけどな……」

美琴と千穂に話しかけられて、ヨツバはもう普通に受け答えしている。

あの後、当然だが千穂と美琴に最初の態度が作った物だとバレたので、私はヨツバにいつものようにする様に言った。

四人で向かい合い、増えた料理と飲み物を食べながら会話をする私達。

「ヨツバさんが居ればクレリアちゃんも安全だね」

「そうね、今日について来てくれて助かりました」

「私もお嬢様と花見がしたかったし……大切な方だからな」

「いいねー。そういうの」

「でも、今まで侍女らしき人……というか……一度も誰かついて来た事無いわよね？」

美琴がそんな事を言う、ヨツバは何と答えるのだろうか。

「あー……それは……お嬢様が一人で行きたいと言えば私達はついて行けないんだ」

素直に答えたな。

「クレリアちゃん？出来るだけ誰か連れて行った方が良いよ？」

「同感だわ。クレリアちゃん可愛いから危ないわよ」

二人が私に言ってくる、何も知らなければそうなるか。

「気が向いたらな」

「ええ……？心配だなあ……」

「そつと後をつけられればいいんじゃないかしら？」

ついて来ていたら分かるぞ。
時々、姿を見せない様に私の付近に現れる侍女隊の者達が居る事
も、私は分かっているからな。

麦茶の入った紙コップに、桜の花びらが浮いている。私はその紙コップを持ったまま桜を見上げ、三人の会話を聞いていた。

花見を始めてからどれ程経ったか分からないが、太陽を見ると昼前である事は分かる。

「あ、皆が居る」

話していた千穂が声を上げる。

「本当ね、あいつらも花見に来てたんだ」

美琴も千穂が見ていた方へ目を向けて言う。

「友人か？」

「友人っていうよりはただのクラスメイトね。仲が悪い訳じゃないけど、遊んだ事は無いわ」

私の問いに美琴が答えた。

「こつちに来るから多分見つかると思う、大丈夫？」

千穂が私に聞いてくる。

「何がだ？」

「あまり大勢で集まったり、絡まれるのは好きじゃ無さそうだから……平気かなって思ってる」

私の心配をしているのか。

「構わない。ただ、場合によってはヨツバが躡ける事になるかもな」
そう言うのと千穂と美琴は苦笑いした。

「ん？あれ……篠崎と倉森じゃない？」

「え？ほんとだ」

「一緒に居る二人めっちゃ可愛くない!？」

「マジ!?!……うお!?!なんだあの二人!すげえ!」

そんな声が聞こえ、こちらに男女混合の集団がやって来た。

「二人もお花見に来てたんだ」

彼らの中にいる女性が声をかけてくる。

「この子達は誰!？」

「紹介してよ!」

いきなり騒がしくなったな。

「紹介するから静かにしてよもう……」

千穂と美琴は彼らに私達を紹介し始める。

「こちらの子がクレリア・アーティアちゃん、それでこちらの女性がヨツバさんよ」

「あまりちよっかいを出さない様に!ヨツバさんにぶつ飛ばされるわよ?」

そう紹介すると、彼らは何故か盛り上がり質問攻めが始まった。

「はいっ!質問です!クレリアちゃん何歳?」

「14だ」

設定上な。

「名前が日本人じゃないけど、どこの国の人?」

「名前はこうだが海外生まれの日本人だ」

「何処の学校に通ってるの?」

「自宅で勉強しているから学校へは行っていない」

私が答える度に歓声を上げる彼ら。

「好きな人はいる?」

「男女間の恋愛という意味であればいない。家族的な意味ならばヨツバ、友人としてならこの二人だな」

私のその答えに、千穂と美琴は驚いたような表情を見せたが、すぐに微笑んだ。

ヨツバも満面の笑みを浮かべている、間違いなく私の言葉が聞こえているな。

そのヨツバにも質問は飛んでいる。

「年齢はおいくつですか!？」

「二十三だよ」

「その赤い髪は地毛ですか？」

「そうだ」

「身長高いですね！何センチですか！」

「あー……確か百七十五辺りだったと思う」

「……胸大きいですね、何かやっています？」

「特に何もしてない」

「お仕事は何を？」

「お嬢様の侍女だ」

ヨツバのその答えに彼らは興味を示したようだ。

「そのお嬢様は誰ですか？」

「ここにいるだろ、クレリアお嬢様だ」

その言葉を聞くと今度は私がその事を聞かれる。

「クレリアちゃんって何者なの？」

「さあ、何者だろうな？」

隠す気は無いが、今あつたばかりの者に自分から話す気にはならな
い。

次々と質問が続く中、千穂と美琴が割り込んでくる。

「はい！もう質問は終わり！」

「これ以上は駄目だよ、どっか行きな」

「何だよ!?!いいじゃねーか！」

「そうだよ、一緒に花見しようよ」

「良いねそれ、お邪魔していい？」

「駄目だよ！」

「帰れ！」

二人と彼らが言い合いを始めた。

「お嬢様、どういたしますか？」

ヨツバが聞いてくる。

餌でも与えようか。

「お前達」

私がそう言うと、彼らは私を見る。

「実は料理が余っていてな。全員が座るだけの場所が無いから立つ

たままになつてしまふが……食べて行くか？」
その言葉に彼らは喜んで賛成した。

「良かったの？」

美味そうに料理を食べている彼らを見ると、美琴が声をかけて来た。

「構わない。実際に多く作り過ぎていた上に、貰い物まであつて食べきれなかつただろう？」

私が全て食べるのは明らかにおかしいからな。

正体を明かした後ならばいいと思うが、今の所はやめておく。

「まあそうだけど……」

彼らの中に私達に対して何かしようという者はいないようだしな。

男子の一部は千穂と美琴が気になっているようだが、残りは全て私とヨツバに気が向いている。

女子は私達に対する羨望や嫉妬があるが、それだけだ。

「学校で絶対に色々聞かれるよ……」

「はあ……面倒ね……」

二人はそう言つて嫌そうな顔をした。

彼らと一緒に写真を取りたいと言われたので集合写真を一枚だけ許した。

それから、彼らは去つて行つた。

余つていた料理は全て無くなり、夕方になる前に花見を終えて帰つた。

七月に入り、日本では夏休みまで一か月を切つた。

そんな中、私はスペインに来ている。

ここに来たのは気まぐれだが、どうやらこれからサン・フェルミン

祭という祭りが開催されるらしいので見てみる事にした。

泊っているホテルで白いワンピースに着替え、麦わら帽子を被って出かける。

聞いた話では、牛に人が追いかけられるのだという。

どんな物か近くで見えてみようと思いい、牛達が走る道のカーブの手前で直進してくる牛を見る事にした。

中には入れないので壁に掴まって見る事になるが、特に問題は無い。

エンシエロが始まり、奥から逃げる人を蹴散らしながら牛がやって来る。

この祭りが行われているのは様々な理由があるのだろう。

だが、脆い種族でありながら自ら自ら危機に陥りに行く彼らを見ていると、「無謀」という言葉が浮かぶ。

人間は死にたくないと考える者が多いと記憶しているが、中にはこういう者達もいるという事だな。

そう思っている間に、牛達が近づいて来た。

私はその牛達を見ていたのだが、一瞬、先頭の牛と目が合った。

すると突然その牛が急停止し、後ろから来ていた牛達が衝突して多くの牛が転倒した。

周囲の人間達の驚く声が聞こえる。

起き上がり再び走り出す他の牛達の中で、私と目が合った牛だけは起き上がった後も私を見ている。

やがて後ずさりをする、コースを逆走していった。

周囲の人間達はその様子を見て騒めいている。

時々、今の牛の様に私に対して極端な反応をする生物がいる。

大抵の場合は私が離れるまで動きを止める、逃げる、服従するの三通りだが、時々攻撃して来る事もある。

私はそれからしばらく祭りを見た後ホテルに戻り、チェックアウト

した。

今は人として行動している訳では無いので、周囲に気が付かれないように処理をしてから転移で移動した。

周囲には広大な草原が広がっている。

現在私がいるこの場所は、アフリカのサバンナと呼ばれている地域だ。

私は時々、こうして気まぐれに人類が少ない地域を見て回っている。

このサバンナは多くの生物達が生存競争を繰り広げている地域で、アマゾンの熱帯雨林と同じくあまり人類の手が入っていない地域と言える。

アマゾンもそうだが、この地域も人類は積極的に開発しようとしていない様だ。

魔法人類は全ての土地を開発し多くの生物を滅ぼしていたが、人類はこういった環境を残そうとしている。

他の生物を滅ぼす事自体は、何も問題はないと思う。

しかし、それによって起こる影響を理解せず、解決出来ないまま行えば、致命的な状況に追い込まれる可能性があるという事は魔法人類が証明した。

人類は今の地球の環境を壊さないように注意はしている様だ、このままならばまだまだ繁栄するかもしれない。

そして、この辺りは最初の人類が生まれた可能性のある地域の一つであるらしい。

魔法人類が絶滅した後には生まれた生物が、人類に至るまでを見て来た私だが、正確にどこの誰が最初の人類なのかは分からない。

私の基準では私が最初に人類だと感じた者が最初の人類という事になるのだが、どこに居たのかは覚えていない。

そんな事を考えながら、私は草原を歩く。

この地域は生物も多いが土地も広い。その為どこにでも生物がいる訳では無く、探さなければ生物に出会う事は少ない。

もし探すのなら水辺だろうか。

イシリスから地球になつた後、水無しで活動出来る生物と出会つた事は無い。

そんな生物は存在しない、と言う事は出来ないが、少なくとも私が出会つた生物は全て水が必要だつた。

だからまずは水辺に向かう事にする。

水辺ならば何も生物がいなかつたとしても、水を求めて何かがやつて来るはずだ。

私は近くの水辺の位置を調べると、歩いて向かつた。

到着した水辺にはシマウマと鹿……？いや、あれは違うか。

名前が分からないが、数種類の生物達が群れで水を飲んでいる。

恐らく草食なのだろう、お互いに気にはしているようだが危険は感じていない様だ。

私は水辺に歩いて近づいて行く、すぐ隣にまで来ても皆は逃げる事無く水を飲んでいた。

そのままシマウマを撫でてみる。

どうやらここにいる生物達は私に対して過剰に反応しない様だ。

撫でるのを止め、そのまましばらく群れを観察していたが、やがて彼らは水辺を離れて行つた。

私はそれを見送り、他の生物が現れるのを待つ事にした。

次に水辺に来たのは親子連れのサイだつた。

だが、子供がいるせいか私を警戒しているようだ。

刺激しない様に私はその場から動かなかつたのだが、親のサイは角

をこちらに向けて突進して来た。

向かって来る親サイが怪我をしない様に、優しく突進の勢いを抑え込み私の目の前で停止させて、声をかける。

「お前の子に手を出す気は無いぞ」

その間、親サイは私に近づけず暴れていたが、やがて諦めたのか我が子の元へ引き返していった。

サイの親子が水を飲んでいられるのを離れて見ていると、ゾウの群れが来ているのを見つけた。

以前、ゾウに似た姿をした生物がいた事をうつすらと覚えているのだが、今では人類からマンモスと名付けられていたな。

凍り付いた姿を見て、見覚えがあったので間違いないだろう。

私はサイの親子から離れ、ゾウの群れへと向かう。

彼らは私に気がついていようだ。

ゾウ達は近づくと私を見る事無く食事をしているが、私の動きを気にしている事は感じる。

だが、逃げる気は無いらしい。

もう少しで触れるほどの距離に来た時、群れのゾウ達が突然食事をやめて鼻を伸ばし、私の匂いを嗅ぐような仕草をし始めた。

「変な匂いでもするか？周りの者にはよく良い香りがすると言われているのだが……」

そう言いながら動かずにゾウ達に嗅がれていると、突然嗅ぐのをやめて再び食事を始めた。

警戒心が消えた。

敵意が無いと分かったのか？

私は目に付いたゾウの背中に飛び乗るが、それでも気にする事無く食事をしている。

「人間も、お前達のように判断出来れば無駄に死ぬ事も無いだろうな」

私はゾウの背中を撫でながら言う。

人間や生物の一部は、私が何もする気が無くても手を出してくるかな。

更に、人間の場合は私の外見に引き寄せられた上に甘く見る者が非常に多い。

そして死ぬ事になる。

以前も何処の国だったか忘れたが、店に入ったら強盗の真つ最中だった。

わざわざ「私に構わず好きにしてくれ」と言ったにもかかわらず、私にショットガンを向けて来たからな。

結局、その強盗はショットガンの暴発で死んだ。

銃口を私に向けなければ暴発などしなかったかも知れない。

奴は運が悪かった。

その後、私はしばらくの間ゾウの背に揺られながら読書を楽しんだ。

季節は本格的に夏になり、千穂と美琴の学校はもうすぐ夏季休暇に入る。

休日に話し合い、島へは夏休みの後半に行く事にした。

前半の内にやるべき事をやり、憂い無く島を楽しむという事らしい。

しかし、夏休みの前半は勉強しかないという訳では無く、高校最後の夏と言う事もあって色々行うつもりでいるようだ。

キャンプ、海水浴、肝試し、夏祭り、盆踊り、花火、プール。

三人で話した時にこれらの事はやりたいと千穂は言った。

その中でキャンプと海水浴、プールは島でも似たような事が出来るので前半の予定から省き、肝試し、夏祭り、盆踊り、花火大会。

この四つを前半の内にしようという事になった。

高校生の夏休み事情は知らないが、隣で聞いていた美琴の様子を見る限り簡単では無さそうだったな。

こここの所、私は常に東京の自宅で過ごしている。

夏休みに向けて、千穂や美琴と色々話し合っていたからだ。

そんなある日、美琴から電話が来た。

「どうした?」

「クレリアちゃん。前に決めた夏休みの前半の予定だけど、出来そうよ」

電話に出ると美琴がそんな事を言う。

「何かあったのか?」

「私達の学校って特に進学校って訳でも無いのにそれなりに課題があつたんだけど、今年から大幅に減るんだって」

「生徒の自主性に任せるようにしたのか?」

「詳しい事は説明されなかったけど、減る事は今日学校で言われたわ……みんな喜んでた」

「そうか」

「今までと比べたらかなり減ったわ。正直、前までの量だと大変だったから私も嬉しいわ」

「千穂も喜んでいるだろうな」

「あの子は「あと数年早くして欲しかった！」って言ってた」

「そうすれば遊ぶ時間が増えていた、という事か」

「その通りよ。まあ気持ちはわかるけど……」

メイドが飲み物を用意してくれた。

私は一口、飲み物を飲んでから聞く。

「お前もそう思うか」

「そりゃあね……ほとんどの生徒は多かれ少なかれ思ってるんじゃない？」

そういう物か、自分の能力を伸ばす事は悪くないと思うのだが。

「用意された物では無く、本人が伸ばしたい部分を伸ばせるように、という事かも知れないな」

「本当にクレリアちゃんは考え方が子供らしくないわね……もう慣れたけど」

「それは良い事だ」

「……それで、夏休みが始まったら千穂の家で泊まりこんで、課題を終わらせてしまおうって話になったのよ」

「そうか」

「それで……もしよかったらクレリアちゃんも来ない？」

「課題をするのだろう？私が行ってどうする」

「それだけじゃ息が詰まるし、せっかくの泊まりだからクレリアちゃんも呼ぼうって、千穂がね？」

「お前達が良いのなら私は構わない」

「じゃあ来て欲しいな」

「分かった、行こう」

千穂と美琴が夏休みに入ってすぐに、二人が課題を終えるための泊まりの日がやって来た。

何時来ても良い、と言っていたので私は午後から行く事にする。

「いらっしやーい！美琴はもう来てるよ！」

「世話になる。これは土産だ、家族で食べてくれ」

私は程よい値段の手土産を千穂に渡した。

「いつもありがとね。部屋に行っててー」

「分かった」

千穂の言葉に返事をして、私は二階へと上がり千穂の部屋へ入った。

「あ、クレリアちゃん来たね。こっちこっち」

「約束したからな」

部屋の中央付近に用意された小さめの丸い机に、教科書やノートが並んでいる。

私は美琴に誘導され、クッションに座った。

「進み具合はどうだ？」

「それがね……大幅に減った代わりに難しくなってるのよ。まあ、それでも多い頃より楽だけど、予定よりはかかっちゃいそうね」

「ただいまー。クレリアちゃん来たし一旦休憩にしよっか？」

美琴と話していると千穂が戻って来て美琴の正面へと座った。

「ちよつと前に休憩したでしょ？もう少しやるわよ」

「はい……まあ終わっちゃえば後は自由だしね、頑張りますか！」

「クレリアちゃん、もうちよつと待っててね」

千穂がやる気になって課題を始め、美琴も私に一言いうと課題を始めた。

私は二人の教科書とノートを見ていた。

数学か。

美琴が難しいと言っていたからどんな物かと思っていたが……妙に簡単だな。

「確かに量は減ったけどさ……難しすぎない？」

「ぼやいても終わらないわよ」

「分かってるよ……ねえ美琴、ここ分からないんだけど」

「どれ？……えっとこれは……」

ただこうして見ているだけでも良いが、少し手を貸すか。

「千穂、それは二つの公式を使えばいい。この例題と同じようにやってみろ」

「え？……ほんとだ……出来た……」

「嘘でしょ……？クレリアちゃんこの問題分かるの？」

美琴が驚いた表情で言ってくる。

「むしろお前達がなぜそんなに悩んでいるのかが分からないのだが」

「えー……」

私の言葉に静かに驚く千穂。

「そう言えば自宅で教育を受けてるって言ってたし……もうやっていた所だったのね」

「いや、初めて見た。だがすぐに分かったぞ？」

美琴の言葉に答えると二人は黙ってしまった。そして千穂が私の手を握って言う。

「分からない所を教えてください」

「クレリアちゃん……出来たら私もお願い」

「私に分かる所なら教えよう」

私は二人の勉強を見る事になった。

それから二人は確実に課題を進めて行く。

分からない所は私が教えながら、ある程度の量を終わらせた。

現在は休憩中で、千穂と美琴がパズルゲームで対戦している。

プレイしているのは「むによむによ」と言うゲームで、複数の色のついた「むによ」と言う何ともいえない表情をしたスライムのような物

体を、一定数以上つなげて消すゲームだ。

「このゲーム、結構面白いわね」

「良かった！美琴に合いそうなの探したんだ」

普段ゲームをしない美琴も中々気に入ったようだ。

「あ……負けちゃった」

「初めての割りに中々上手かったね、驚いたよー」

「これ気に入ったわ、買ってみようかな？」

「ほんと!?もし買ったならネット対戦しようね!」

「まだ買うって決めた訳じゃないから……はい、クレリアちゃん
美琴はそう言いながら私にコントローラを渡して来た。

「私はFPS以外はあまりやらないぞ?」

「という事はこれで……。クレリアちゃん！勝負だよ!」
急に勝負を挑んでくる千穂。

「うわ……勝てそうだからって……千穂、恥ずかしくないの?」

「だってFPSだとほとんど勝てないんだもん!」

たまにバトルグラウンドで対戦もしているが、千穂の勝率はとても低い。

彼女は勘違いしている。

FPSだから勝てないのでは無く、FPSだからこそ僅かでも勝てていたんだぞ。

「手加減はしないが、良いんだな?」

「かかってこーい!」

「すっげ……なにこれ……」

私達の対戦を見ながら美琴が呟く。

「クレリアちゃんおかしいよ!?!何それ!?!」

このゲームは十時キーの下を押すとむによを高速で落とす事が出来るのだが、私はずっと下を押し続けたまま次々とむによを組み上げて行く。

私にはこのゲームの速さなど速い内に入らない。考える時間など大量にあるし、様々な魔法を構築している私にはこの程度はパズルと言えない。

私は次々とむによを組み上げて全消しを繰り返す。

その結果、一分程で千穂は敗北した。

「う……嘘だ……」

千穂は仰向けに倒れて呟いた。

「勝てそうだからと挑んだ結果がこれだなんて……無様よね」

「うわぁーん!?!」

美琴に言われ、うつ伏せになり叫ぶ千穂。

「私がFPS以外をあまりやらないのはこうなるからだ。だが、運に大きく結果が左右されるゲームなら勝負が出来るぞ?」

そう言いながら千穂の頭を撫でる。

「……じゃあ今度はこの野郎伝説やる……」

月で娘達がやっていたゲームだな。

「分かった、今度やろう」

「うん……」

その後すぐに復活した千穂は、休憩を終えて美琴と共に課題を始めた。

夜になり、私達は風呂に入り夕食を食べた。

課題の続きは明日やる事にして、寝るまでの時間は自由に過ごす事にした。

ベッドの横に客用の布団を二組敷いて、寝る用意はしてある。

私達は全員、寝間着を着ている。

今はパジャマと言う事が多い様だな。

「クレリアちゃん」

私は布団の上で千穂の足の間に座り、後ろから抱きしめられたまま漫画を読んでいた。

娘達もそうだが、どうして私を抱きしめるのだろう。特に嫌という訳では無いので構わないが。

「あー……落ち着く……」

「私から見ると変態みたいよ?」

「この抱き心地と、仄かな良い香りが癖になる……」

「そんなにいいの?」

「美琴はクレリアちゃん抱っこした事無いの?」

「普通あまりしないわよ……。彼女大人っぽいから気が引けるし」

「じゃあ、はい」

「千穂は私を持ち上げると美琴の足の間で置く。」

「ちよっ!?千穂!」

私を渡され、慌てる美琴。

見知らぬ他人ならともかく、美琴ならば気にしない。

私はそのまま美琴に寄りかかり漫画を読む。

恋愛漫画という物を読んでいるのだが、全く意味が分からない。

「千穂。この漫画の主人公はこの男と夫婦になりたいのだろうか? 何でわざわざ嫌われるような事を言っているんだ?」

「え……? うーん……好きだけど素直になれない……みたいなの?」

千穂はそう言うが、人間である千穂にもあまり分かっていないようには見えないな。

「自分で嫌われる事を言って、後悔しているのかこの女は。何がしたいんだ?」

「ほら、幼馴染として家族みたいに過ごしてきたから……今更男女の恋愛に踏み出せないんだよきつと」

全く理解出来ない。

そんな事を内心で思っていると美琴が抱きしめて来た。

「その内クレリアちゃんにも恋愛が分かる日が来るよ。……その漫画みたいな気持ちではないかも知れないけどね」

億を超える時を経ても分からないままだが……そのいつかは来るか分からないぞ。

「……千穂」

「ん？何？」

私を抱きしめた美琴が、私の頭に頬を寄せながら言う。

「……この子凄く抱き心地良いわ」

「でしょー？」

私達は寝るまでの時間、他愛のない話をして過ごした。

翌朝。

目を覚ました私達は着替えて歯を磨き、朝食を食べた。そして、二人は課題の続きを始める。

「……私、夏休みの最初の内にこんなな課題やったの初めてだよ」千穂が課題をやりながら呟いた。

「私も流石にこんななやった事無いわね……」

美琴が呟きに返すと再び静かになり、文字を書く音だけが聞こえる。

私は千穂のベッドの上でそんな二人を見ていた、今は世界史と日本史か？

「歴史は色々と想像出来るから面白いわよね、色々と不思議な事もあるし」

美琴が突然そんな事を言い始めた。

「例えば？」

千穂が課題をしながら言う。

「ほら、壁画とか文字とか……。今でもテレビの特集とかミステリー系の番組で必ず取り上げられているじゃない？」

顔を上げて千穂に言う美琴。

「あー……あれねー。確かに誰でも不思議に思うよね」

それにつられて千穂も顔を上げて言う。

「謎のまま色々と仮説もあるけど、少なくとも捏造じゃないみたいだし」

「ちよつとわくわくするよね」

課題の手が止まっている、会話に意識が移ってきたようだ。

「二人とも、課題は良いのか？」

「……そうだったわね」

「……でも、クレリアちゃんもそういうの気にならない？」

美琴は再び課題に取り掛かり、千穂は私に聞いてくる。

「特に気にならないな」

「えー……夢が無いなあ」

千穂はそう言って課題へと戻った。

やがて時刻は十一時半を回った。

「んっ……はあ。難しかったけどやっぱり量がすごく減ってるから早いね」

「クレリアちゃんが教えてくれなかったらまだかなり残ってたと思うけどね」

千穂が背伸びびをして言い、美琴は私を見て言う。

「数学と古文だけだったが、役に立ったようだな」

「本当に助かったわ、ありがとうね」

私に微笑んで礼を言う美琴。

数学は簡単だったし見ただけで分かる古文も問題無かったが、世界の歴史など覚えていないから教える事が出来ない。

ただ、教科書にジャンヌと信長が載っていた事は納得した。

二人とも人間の時にそれなりの事をしていたからな。

「残りはどの程度あるんだ？」

「今やってるのが最後だね。やっぱり数学と古文がスムーズに終わったのが大きいよ、クレリアちゃんのおかげ！」

私の問いに千穂が笑いながら答える。

「お昼食べて休憩入れても、もう今日中に終わるんじゃないかしら」

「これさえ終われば後は遊ぶだけ……んふふ……」

課題の手を止めて言う美琴と、怪しげな笑いを洩らす千穂。

「忘れてる事は無いか？」

「大丈夫、千穂の後に私も確認したから」

「そうか」

「なんか引つかかる言い方だけど……抜かりはないよー！」

それから私達は昼食を食べるために一階に向かった。

「クレリアちゃん料理も出来るのね……完璧じゃない」

「驚いたけど、お母さんが嬉しそうだったなあ……」

昼食は久しぶりに私を作ってみた。

既に料理の腕は娘達に抜かれてしまったが、十分に美味しかったよ
うだ。

私達は千穂の部屋で食休みを取りながら会話をしている。

「私は掃除洗濯はやらない。料理だけだ、それに他の者の方が私より上手い」

「クレリアちゃんなら出来なくても問題無さそうだもんね。趣味みたいな物？」

ベッドに寄りかかっている美琴が私に尋ねる。

「そんな所だ」

「クレリアちゃんは料理以外に趣味はあるの？」

ベッドに伸びていた千穂が起き上がって聞いてくる。

趣味か。

……知的生命体の観察。

これを言うのはやめておこう。

「ゲームだな」

「あはは、そうだったねー」

「それ以外にはないの？」

私の言葉に千穂は笑い、美琴は他に無いかと聞いてくる。

「趣味とは違うかもしれないがピアノも弾く、弾けるのは一曲だけだが。後は、体を動かす事も嫌いでは無い」

「お嬢様っぽい趣味ね、それに運動も好きなんだ？意外かも」

「美琴、クレリアちゃんはお嬢様だよ？」

「そうだったわね。あまりお嬢様っぽくないから……ごめんね？」

「気にするな、どう思われようと構わない」

「今度ピアノ聞かせて欲しいな、いい？」

千穂はピアノに興味がある様だ。

「機会があればな」

その後もしばらくの間話していたが、やがて二人は残りの課題へと取り掛かった。

「終わったー!」

美琴が先に課題を終えてから二時間程が経った頃、千穂が声を上げた。

「千穂、お疲れ様。後は夏休みを楽しむだけね」

「やったー!!」

彼女達は嬉しそうだ、これから二人は夏季休暇を満喫するのだから。

「クレリアちゃんは夏の間、何か用事はある?」

美琴が私の予定を聞いてくるが、余程の事が無い限り私の予定は常に自由だ。

「特にないな」

「じゃあ近い内に水着買いに行こうよ、美琴も大丈夫?」

「大丈夫よ」

千穂が私と美琴に確認する、美琴は問題無い様だ。

「島に行った時の物か?」

「そうそう」

「いいぞ、一緒に行こう」

「じゃあ今日はご飯食べたらず早く寝ましょう? 数日夜更かししてるし……せつかくの夏休みに病気になるたら大損だわ」

「そうだね!」

二人は早めに寝る事にしたようだ。

さて、何か興味を持つような事が見つかるだろうか。

翌日。

買い物に行く日を二日後に決めた後、一度解散になった。

地球の家では無く月に帰った私は、久しぶりにグランドピアノが置いてある部屋へと向かう。

二人との会話で久しぶりに友人の曲を演奏する気になったからだ。今までは娘達にせがまれた時に弾く程度だった。

特に演奏する事が嫌いという訳では無いのだが、頻繁に弾いてはいない。

音楽室に入り、椅子に座ってピアノの上に手をかざす。

演奏するのは私が現在、唯一弾ける曲である「無貌の少女」という幻想曲だ。

そして私は曲を弾き始める。

始まりは穏やかに……しかし、やがて溢れるような旋律となる。

多くの転調を繰り返す全体的に速く密度の濃い曲で、当時の主流の曲とはかなり違う。

どちらかと言うと現代風の曲かも知れない。

この曲の作曲者である友人は、私が正体を見せると恐怖し、混乱したまま逃げようと地面を這っていた。

私はしばらく待っても変わらなければ、私の事を忘れさせようと考えた。

だが、しばらくすると彼は落ち着きを取り戻し「済まなかった。君が何者であれ、私の友人だと言う事は変わらない。何より……新たな曲の創造には、新たな何かを知る事が必要だ」と言った。

その後、彼は私と友人関係を続け、私の事を知りたがった。

そんな日々の中で彼は作曲に打ち込み、やがて私を題材に曲を書き上げたのだが……出来上がった曲は人間には弾く事が難しい難易度となっていた。

人間には絶対に弾く事は不可能……とまでは言わないが、弾くにはかなりの実力が必要だろう。

この曲を何の苦も無く弾けるのは、今の所は私や娘達くらいだと思

う。

私は当時、彼の自宅にあつたピアノでこの曲をよく友人に弾いて聞かせていた。

「無貌の少女」は私だけの為に作られた曲で、友人もこの曲を広める事は無かつた。

彼が作った楽譜も一つしか存在せず、それは私に贈られている。

しかし彼の死後「無貌の少女」は盗作され「霸王」と言う幻想曲として広まっていた。

最初は存在すら知らなかつた私だが、ある時「霸王」を聞く機会があり、その時に共通点が異常に多い事に気がついた。

その後、私は「霸王」を作曲した者に話を聞いた。

すると若い時に私が彼の家で弾いていた曲を聞いて感動し、大幅に難易度を落とし改編した曲を作った事を白状した。

その後、聞く事を全て聞いた私は、盗作した彼に対して何もする事無く立ち去った。

本人は罰を受ける事を覚悟していたようだが、彼は私達に手を出した訳では無い。

ただ、感動した曲の影響を受け、新しい曲を作っただけだ。

現代でも「霸王」は人気のある曲で、演奏会を始め、様々な所で使用されている。

更に「霸王」に影響を受けた曲も数多く作られていて、それらもクラシックの名曲として人気が高い。

私自身も、それらの曲を悪くないと思っている。

こういった経緯があり「霸王」は私達の間では姉妹曲とも言えるような位置になっている。

私に曲を作った友人が生きていたら何と言っただろうか。

「いい曲が増えた」と言っただけで、気にしなかつたかも知れないな。

やがて曲を弾き終わると、演奏を聞いて集まって来ていたフタバ、ミツハ、ヨツバの三人と侍女達が拍手をする。

「はあ……」主人様の演奏は何度聞いても素晴らしいですね」

「私も主様の演奏好きだよ！体がうずうずする！」

「音楽は普段あんまり聞かないけど……主様の演奏だけは何故か最後まで聞いちゃうんだよな……」

三人がそう話すと侍女達も口々に感想を言う。

今度は他の曲を覚えて弾いてみるのも良いかもな。

魔法人類の都市と遜色ない人の群れが行き交い、喧騒が街を飛び交う。

今は夏なので殆どの者が薄着で、日焼けした者も多くいる。

装飾品を大量に身に着け、動きにくそうな服装をしている者も多い、何かの訓練かも知れないな。

「まず水着を選んで買っちゃおう？」

「そうしましょ」

私は頭上で会話している千穂と美琴の言葉を聞きながら歩く。

現在、私達は街へ水着を買いに来ている。

千穂は半袖シャツに短めのスカート、美琴はタンクトップにデニムのショートパンツ姿だ。

この気温は人間達には辛いのだろう。

二人も他の人類も皆、汗を流している。

私は汗一つかかぬまま白のワンピースを身に纏い、麦わら帽子を被って歩いていた。

「大きい店だから見て回るだけで今日は終わるかもね」

「先に水着を買ってから、他を見て行きましょうか」

私は二人に手を引かれて進む。

そろそろナンパされるな。

「君達可愛いね、どこ行くの？」

「良かったら一緒に行かない？」

予想通り二人連れの男に声をかけられる千穂と美琴。

私はこの男達がこちらに意識を向けていたのを感じていたからな、こうなるだろうと思っていた。

「小さい子が居るので……ごめんなさい」

美琴がそう言って断る。

「小さい子の面倒も得意だから任せといてよ、こう見えて妹がいるんだ」

どう見えようと居る者には居るだろうな。

確認させてもらおうか。

……嘘だな。

この男に妹などいない。

「二人とも、この男達はやめておけ。妹がいるなどと嘘をつく人間だ」

「なっ……!?!」

男が声を上げた。

男本人も知らないような、生き別れた妹でも居ない限り嘘だろう。例え本当だとしても、千穂と美琴がついて行くとは思えないが。

「おいおい……お嬢ちゃん。何で嘘だと決めつけるんだ?……勘弁してくれよ」

妹が居ると言った男が私に言う。

「用事があるので私達行きますね、ごめんなさい」

「え、ちよつと……」

千穂がそう言って美琴と共に私を連れて歩き出す。

男達は戸惑った声を上げたが、千穂は無視して進んで行った。

「……もう少ししつこく追いかけて来るかと思って身構えていたけど……来なかったわね……」

「そうだね……その方が助かるけど」

私達は目的の店の前までやって来た。

入り口の傍で美琴と千穂がそんな事を話している。

彼らは私達を追いかけられない状態になって貰った。

とは言え、そこまで酷い事はしていない。

短時間だけ腹の調子を悪くしただけだ、もう回復している頃だろう。

「水着を見るのはこのビルの中の店だろうか?」

「そうよ、気を取り直して行きましょうか」

私が尋ねると、美琴がそう言って入って行く。

「このビルにある店は十代後半から二十代前半の女の子向けだけど、クレリアちゃんを着れる水着が置いてある店もそれなりにある筈だから平気だと思うよ」

ビル内を移動しながら千穂が私に話す。

私は水着にこだわりなど無い。

もしなければ、自分で作ろう。

「ねえ。今更だけど……ここで買わなくてもクレリアちゃんはもつといい水着が家にあるんじゃない？」

「あつ……」

美琴の言葉に千穂は歩みを止める。

「その反応……お前、気がついていなかったのか？」

私は千穂に尋ねた。

「そうだった……。でも一緒に買いに来たかったから……いいよね？」

「私はお前達を選んだ水着を着ようと思ってついて来たんだ。何度も言っているが、私は余程の理由が無い限り嫌な事はしない」

私がそう言うのと千穂は笑顔になり、美琴も微笑んだ。

「私達が可愛いを選ぶからね！じゃあこの店から見に行こう！」

そう言っただけ千穂が店へ私を引っ張って行く、元気な子だ。

それから二人と共に水着を見て回った。

二人はまず私の水着を選び始めたのだが、何故か私の水着を巡って千穂と美琴が対立した。

それなりの時間をかけて二人の意見がまとまった結果、私はフリルのついたピンク色のワンピースの水着を購入した。

そしてその後、二人は自分達の水着選びでも長時間悩み、千穂はオレンジ、美琴はブルーのビキニを購入する。

……正直、水着を選ぶだけで午後までかかるとは思っていなかったな。

「うわー！千穂、もうお昼過ぎてるよ!？」

「ほんとだ……クレリアちゃんもお腹空いたよね？ご飯食べに行こう?？」

近場で食事を済ませ再び店を見て回った私達は夕方には帰宅する事にし、道中も雑談しながら家へと帰った。

水着を買いに行った日から三日後。

私は買い物に行った日に、予定は好きなように決めて構わないという事を二人に伝えておいた。

現在の私は、東京の家でカミラとテレビを見ている。

簡単な情報収集だが、時々興味深い事が放送されている事もある。

《八月十五日は終戦記念日です、当日は毎年様々な催しが行われ……》

テレビでは終戦記念日の事を話している。

そう言えばCMで、当日に戦争を考える特番を放送すると宣伝していた。

「第二次世界大戦か、原子爆弾は人類の兵器としては中々の威力だったな」

「あの程度でも今の人類の身に余る威力だと思うけれどね」

私の言葉にカミラが答える。

確かに攻撃の威力に対して、防御が追いついていないかも知れない。

魔法人類も同じ様な状態だったと思いつながら考える。

人類が第二次世界大戦と呼ぶ戦争が終わって五十年以上が過ぎている。

当時、私達は関わる事は無く見ていただけだったが、その時に原子爆弾が使われた。

初めて知った時は、人類もあの程度の威力ならば出せるようになったのだと、その進化を喜んだ。

そして人類は原子爆弾、水素爆弾、中性子爆弾など、様々な爆弾を作り出した。

威力は人類の兵器の中では強力だが、放射能と呼ばれる地球の生物

に影響を与える物も発生させる。

当時は警戒し、私達に影響を及ぼすかどうか慎重に確認した。すぐに私達には何の影響も無い事が判明したが。

魔法人類の魔道戦略兵器を思い出させるこれらの爆弾だが、あちらは魔力を大量に使用するが、放射能を生まないので中々使える兵器だった様だ。

放射能は生物にとって危険だが、魔力も魔素も条件によっては危険な事が判明している。

ただ、現在も地球に魔力はほとんど存在しない。

魔素については、地球の生物が現在の魔素濃度で普通に生きているという事実から、恐らく問題無い。

時が経ち、更に濃度が上がる様な事があれば分からない。

だが、近い内に魔力や魔素の量が大きく変わる事は無い、というのが現在の私の予想だ。

何らかの理由で魔力や魔素が大きく変動した時、地球上の生物や植物がどうなるのかは分からない。

今までの実験から考えれば全て死ぬと考えてしまうが……以前の生物と今の生物は違う物だからな。

実験しようと思えば出来なくは無いのだが、今の所はこのまま世界を楽しもうと思っている。

現在、以前よりも地球の魔力は増えてはいる。

増えてはいるが、かなりの時間をかけて僅かしか増えていない。

このままであれば、地球全体の魔力がイシリス時代の様になるのは遙か未来の事になるだろう。

勿論、それまで地球が存在している事が前提の話だが。

「お母様、今の人類がこの爆弾で戦争を始めたらどうする？」

色々と考えていると、カメラが急に尋ねて来る。

「どうするとは？」

「止めたりする？」

止めるか止めないかを聞きたいのか。

「止める事は無い。自分達で作りに出した兵器で滅ぶのなら、それま

での種だったのだろう」

「んー……じゃあ地球が壊れるような大きさの隕石が衝突しそうな時は？」

「今までもそれはして来たが……私がまだ地球を必要としていれば、人類を見ていたいと思っっている内は助けるだろうな」

私も不注意で地球を消さない様に気を付けなければならぬ、流星に不注意で消してしまったら元に戻すつもりでいるが……。

「それじゃあ……他の惑星の知的生命体とかが侵略しに来たら？」

そう言えば、以前知的生命体がやって来た事があった。

あれから全く現れないな。

「実際に起こらないと何とも言えないが……もしも今起きたのなら、親しい友人は助けるが人類を救う事は無いだろうな」

「観察する対象が減ぼされてしまってもいいの？」

「規模が多少大きくなっただけで、国同士の戦争と大して変わらぬいからぬ。勝った方の知的生命体の観察に変わるだけだ」

相手が知的生命体では無く、ただ惑星を破壊するだけの何かであった場合は考え直すかもしれないが。

私の言葉にカミラは少し考えて言う。

「……惑星を一つの国と考えると隣国……と言う感じでは無くなるけれど」

「以前私達と出会った知的生命体がいただろう？彼らは恐らく惑星間で争っていたはずだ。規模によっては惑星一つが国の地域の程度、という場合もあるだろう」

どちらにしても、まともに宇宙に出られない現在の人類では勝ち目は無いだろうな。

そういえば、死体を一つ保存していた様な気がする。

「今の人類だと……滅ぼされるか飼われる未来が見えるわね」

カミラが憐れむような声色で言う。

「人類の持つ力によって未来が変わるな」

「その時はきつと私達の所にも来るわよね？」

確かに、地球に来たのなら月にも興味を持ち、やって来る可能性はあるだろう。

「友好的なら何の問題も無い」

「ふふ……地球に訪れた知的生命体が人類に手を出す前にお母様と敵対したら……人類は助かるかもしれないわね？」

カミラが笑いながら言う。

確かに私や眷属達に手を出すのなら話は別だ。

そうなった場合、私が返り討ちにならないければ人類は助かるかもしれない。

ある日、私は千穂と美琴の二人から肝試しに誘われた。
そして現在、私達は夜の墓地に居る。

「中々雰囲気あるわね……」

「そ、そうだね……」

二人はそれなりに怖がっているようだが、私にはただの散歩だ。
人類の間では霊や呪いなどの話が広がっているが、今まで私はそう
いった類の物に出会った事は無い。

大勢の死者や恨みだけでそのような事があるのなら、今頃世界は悪
霊が溢れ、呪いに塗れていると思う。

魂は存在しているが、存在する場所が違う。

説明は恐らく不可能だが、私のような存在が手を貸すのならともか
く、自然にこちら側に出て来る事など滅多に無いはずだ。

しかし、私は霊や呪いが絶対に存在しないと考えている訳でも無
い。

私はついさつき、自然にこちらに出て来る事など滅多に無いと言っ
た。

それはつまり、「滅多に無いだけで出て来ない訳では無い」という事
でもある。

地球にもまだ私の知らない何かが存在している可能性が残ってい
るし、様々な世界の中にはそういった存在が当然のように居る世界も
あるかもしれない。

ただ、今の所この辺りから異常は感じない。

「この墓地を回って、戻ってきたら終わりにしようか？」

「それでいいと思うわ。クレリアちゃんをあまり夜遅くまで連れま
わす訳に行かないし」

私を挟んで手をつないで歩く二人。

いつもより握る力が多少強いのはこの場所のせいだろう。

「クレリアちゃん大丈夫？怖くない？」

何でも無い様に美琴が言うが、私には明らかに怖がっている事が分かる。

「平気だ」

「そ、そう……クレリアちゃん凄いわね……」

美琴は私が本当に動じていないと分かったのか、驚いている様だ。

……私は、二人が恐怖を感じているという事は分かる。

分かるのだが、実際に恐怖という物を感じた事が無い私では、恐らく本当の意味で彼女達の気持ちを知る事は出来ないだろう。

「早く回って終わろう?」

千穂はそう言って少し早足になる。

二人は何故肝試しをしようと思ったのだろうか。

少し進んだ時、少し離れた所で物音がした。

その音で二人は動きを止める。

「ひっ!? な、なに……?」

「ね……猫かなんかでしょ……」

千穂と美琴がそう言いながら手を握り締めて来る。

私だから良いが、力を入れすぎだ。

音の原因は美琴の言う通り猫だ、私達の接近に気がついて逃げに行った。

「猫が私達を警戒して逃げただけだな」

「クレリアちゃん見えたの?」

「見えた、奥に走って行ったぞ」

「なーんだ、猫かあ……」

美琴の問いに私が答えると千穂がほっとしたように言い、私達は再び歩きだした。

「安心しろ、今の所この辺りに二人が考えているような存在はいない」

「え……?」

二人の声が重なる。

どうしたんだ?

……そうか。この言い方だとテレビでよく見る霊能詐欺師のよう

に聞こえるな。

「私は普通の人間より夜目が利くから今もそれなりに周囲が見えて
いる。目視で周りに何もいないのが分かるだけだ、別に霊能力がある
訳じゃない」

「そうなんだ……見えてるならそんなに怖くないかもね」

「クレリアちゃん全然怖がらないなあ……」

美琴の言葉の後に、千穂が呟いた。

「千穂、私を怖がらせたくて肝試しをしたのか？」

「……違うよ？」

千穂は下から見上げる私から目をそらす。

「結局私達が怖い思いしただけじゃない……全く……」

分かりやすい千穂の反応と美琴の言葉、これだけで感情を読むまで
も無く分かるな。

千穂は私を怖がらせたかったのか。

子供らしい悪戯だ。

私達はその後も何事も無く墓地を回り、ほつとしている二人と共に
墓地を後にした。

肝試しから二日後。

現在、私は月に居る。

世界樹の枝に座り人類の作り出した本を読んでいる所だ。

人類が本を作るようになってから新しい本を再び多く読めるよう
になったのは嬉しい事だな。

二人との次の予定は既に決まっていて、祭りに行く事になってい
る。

当日は二人とも浴衣を着て来るらしく、私も着て欲しいと言われた
ので当日は浴衣を着て行くこうと思う。

「ねえねえお母さん、今度は何しに行くの？」

私の隣に座っているミツハが私に聞いてくる。

今日は母と呼びたい気分らしい。

「次は夏祭りに行く事になっている」

私は本からミツハへ視線を移して答える。

「夏祭りかー、私達も皆と色々行ったよね。世界中でお祭りは毎年一杯やってるもん」

「お前達が人類の生活に想像以上に馴染んだからな。そうでなければ私一人で行っていただろう」

「お母さんとだったらどこでも一緒に行くよ?」

不思議そうな表情で私を見て言うミツハ、私はそんなミツハの頭を撫でる。

「私が人類の世界で過ごしているのは趣味のような物だが、お前達も楽しんでるようだな」

「うん!情報集めるついでに遊んでるんだー!」

嬉しそうに話すミツハ。

人類の世界で騒ぎになっていないという事は、娘達も上手くやっているようだ。

ミツハ達四姉妹は勿論、侍女隊の者は全員訓練しているため地球の生物より遥かに強い。

彼女達が今の人類相手に危機を迎える事は恐らく無いだろう。

何か彼女達の手を負えない事があれば私に話が来る筈だが、今の所はそのような事も無い。

「また一緒にどこか行こうね?」

「そうだな。全員同時には無理だろうが、いずれまた順番に何処かに行くか」

「やったー!」

そう言ってミツハは私に抱き着いてくる。

時と場所を選んではいるが、今では侍女隊の者達も侍女としては無く、娘として甘える様になって来た。

人間や他の生物の家族を見続けた事で、何か変化があつたのではないかと私は考えている。

彼女達に確認をしていないので本当の所は分からないが、それで良

い。

人類の文明などに対して私達が与えた影響は多くあるが、私達も影響を受けていると思う。

実際に、私は千穂の言葉で興味が無い事でも、嫌でないのなら場合によってはやってみようと考えを改めた。

彼女達とは長い付き合いになるかもしれないな。

千穂と美琴は私を本気で心配していて、私と過ごす事を好んでい

る。
特に千穂は私に違和感を感じているはずなのだが、それでも態度や感情に変化が無い。

美琴は今の所は何も感じていないようだが、これ以上長く共に居ると成長しない私に疑問を持つ事になるだろう。

そうなたら正体を伝えるつもりでいる。

友人のままでののか、友人では無くなるのか。

どうなるだろうな。

もし受け入れられなかった場合、他の元友人達と同じように私の事を忘れて残りの人生を生きて貰おう。

この事で娘達に「魔法で違和感を感じない様にしたらどうか」と提案された事があったが、私がやりたくないという理由で却下した。

何となくではあるが、人類の進化と発展が進むにしたがつて受け入れられない者が増えていく気がする。

以前は精霊などの類と思われ、簡単に受け入れられていたとカミラも言っていた。

人類は程度の差はあっても想像や空想をしているはずなのだが、いつからか理解出来ない存在や現象を目にしても認めようとしなくな

った。
科学が全てだと考えているからだろうか？

人類はまだ魔素や魔力を見つけていないからな。

そんな事を考えていると、ミツハは私の太ももに頭を乗せて目を瞑っていた。

彼女達は寝る事は無い。

しかし、こうやって甘える時は目を瞑り、寝ているように大人しくなる事がある。

こうすると落ち着くらしい。

私は大人しくなったミツハの頭を撫でながら、本へと目を移した。

軽快な祭囃子が流れ、提灯の明かりが夜の闇を照らす。

屋台が並び、多くの人間が浴衣を着て歩いている。

私達も今はその一部だ。

浴衣を着た私達は祭りへとやって来た。

二人から浴衣姿を称賛されたが、彼女達の方が良く似合っている。

今日やって来た祭りの規模はそれなりに大きく、楽しむには十分だ。

「見て回る前に軽く何か食べない？」

歩きながら千穂が美琴に言う。

「そうね……何にする？」

「クレリアちゃんは何か食べたい？」

千穂が私に尋ねて来る、そうだな……。

「たこ焼きが良いな」

「いいわね、そうしましょ」

「じゃあたこ焼きだー！」

私達が答えると二人は私を連れてたこ焼き屋へと向かって行く。

「たこ焼きニパツクね、毎度あり！」

「ありがとね、おじさん」

買ったたこ焼きを千穂と美琴がそれぞれ持ち、三人で分け合って食べる。

「ごく普通のたこ焼きだな、何も言う事は無い。

「あ。私……輪投げしたい」

たこ焼きを食べながら歩いていると美琴が言う、その視線の先には輪投げの屋台がある。

「私もやる！クレリアちゃんはどうする？」

「欲しい物が無いからやめておく」

「いらぬ物を手に入れてもゴミになるだけだ。

輪投げの屋台に到着すると、二人は料金を支払う。

「そこで見てて！私はあのぬいぐるみを手に入れる！」

「……私も狙ってみようかな」

千穂は気合が入っているな、美琴もつられて狙う気になったようだ。

「お、狙うのかいお嬢さん達！下まで輪を通さないとオツケーには出来ないよ？」

「やるよー！」

「やってみるわ」

出店の男に答えた二人は、景品に狙いを定めた。

狙っているのは奥にあるぬいぐるみか。

もしも取れた場合、小さいとはいえずと持って歩く事になるが、いいのだろうか。

「とうー……あー」

投げられる回数は三回、千穂の一投目は大きく外れた。

「じゃあ次は私ね……よっ……あ、惜しい」

美琴の一投目はぬいぐるみの傍を通り過ぎた。

投げ方が良くない気がする。

「二人共、放物線を描くように投げないと入らないぞ？」

輪に通すのだから上からでなければ通らないだろう。

「分かっているんだけど……難しい！」

「普段、輪投げをする機会がないからね……」

私の言葉にそれぞれ反応が返ってくる。確かに輪投げが趣味の者に出会った事は無いし、やっている所も見た事が無いな。

二投目の千穂はまたも外れ、美琴は当たりはしたが入らない。

三投目、千穂は暴投した。

「負けた……」

「……まあこんな物よね。クレリアちゃん、最後の一回やってみない？せっかく祭りに来たんだし」

美琴が私に輪を渡してくる。

「代わりに投げてもいい物なのか？」

「お嬢ちゃんが代わりに投げてても大丈夫だよ！」

店主に問うと答えてくれる、店主がそう言うのなら問題無いか。

「では、代わりにぬいぐるみを取ってやろう」

「クレリアちゃんも狙うのね、頑張って」

「仇を取って!」

美琴と千穂の言葉を聞きながらラインに立つ。

「お嬢ちゃん、小学生はもつと手前から投げられるよ」

「ここからで構わない」

店主の言葉にそう返し、輪を投げる。

私の投げた輪は綺麗な放物線を描き、ぬいぐるみに通った。

「おお……」

「すげー……」

「一回で通したよ……」

たまたま見ていた周囲の客の声が聞こえる。

「凄い!やったね!」

「ほんとに取った……」

「参ったなこりゃ……」

大喜びの千穂と呟く美琴、そして苦笑いの店主。

「はいよ、おめでとう。……お嬢ちゃん凄かったよ」

「ありがとう」

景品を受け取って私達はまた歩き出す。

私は景品を美琴に差し出した。

「え? 私に?」

「美琴の輪で取ったからな。ゲームとして楽しんだだけで、景品が

欲しい訳では無い」

「私も何となくやったただだから……千穂、これ要る?」

私から景品のぬいぐるみを受け取った美琴がそう言っただけで、千穂に差し出す。

「いるいる!ありがとう美琴!」

「取ったのはクレリアちゃんだけだね」

「クレリアちゃんありがとう!」

そう言いながら千穂は私を抱きしめた。

屋台を楽しんでいた私達だったが、途中で千穂と美琴の同級生数人と遭遇した。

そして共に回る事になり、現在は千穂と美琴を含む何人かが食事の買い出しに行っている。

その時、同級生の男の一人に声をかけられた。

「えつと……クレリアちゃん……だよね？」

見た目は優しく穏やかそうな男だな。

「そうだ」

「僕は葛城良平っていうんだ、よろしくね。それで……その、クレリアちゃんは倉森さんとよく遊んでいるんだよね？」

倉森？……ああ、千穂の苗字か。

千穂としか言わないので忘れかけていた。

「そうだな、よく遊んでいる。それがどうかしたのか？」

「何だか妙に大人っぽいなあ……。ええと、その……」

どうにもはつきりしないが、大体予想はついている。

「千穂の事が知りたいのか？」

「え？何で……？」

「わざわざ私に千穂の事を聞いて来れば、何となく予想がつく」

何より意識がずっと千穂に向けられている事を感じていたからな。

そして、私に対して特に何も感じていない、中々珍しい男だ。

「あつ……そうだね……。うん、倉森さんの事が知りたいんだ」

変な奴に教える気など無いが、こいつは中々良いかも知れない。

「分かった、教えてやろう」

「本当かい!?ありがとう!」

「千穂はいい子だ、真剣に想いを伝えれば真剣に答えてくれるだろう。頑張ってみる事だ」

可能性は十分あると思う。

「……うん。頑張るよ」

そして私は彼としばらく千穂について話をした。

「二人共、彼氏はいるのか?」

「え!？」

「いきなりどうしたの?」

祭りが終わった帰り道、私は二人に聞いてみた。

「そういつた事は聞いて無かったと思つてな」

「クレリアちゃんも興味出て来たのかな?……私はいないけどね」

千穂は居ないか、彼にも希望が出て来たな。

「私はいるよ?」

「いいなー」

美琴はいたのか。

関わりが薄い者なら気にしないが美琴の事だしな、後で少し確認しておこう。

「千穂も作ればいいじゃない」

「うーん、私を好きになってくれる人なんているかなあ」

私は一人出会っているが。

「そう言えば、千穂は好きな人とかは居ないの?」

美琴が千穂に尋ねる。

「……いるけど」

ほう、いるのか。

彼は駄目かも知れないな。

「千穂、好きな人居たんだ。告白してみたら?」

「……考えとく」

「所で……誰よ?教えてよ」

「ええ……?いやだよ……」

「誰にも言わないし余計な事はしないから、ね?」

「分かったよ、もう。……葛城良平君って言うんだけど……」

私はその名を聞いて千穂を見た。

互いの気持ちに気が付いていないだけか。色々と感じる事が出来ない人類はこういった事も多い。

「あー……彼か……穏やかで優しい感じだよね、彼」

「う、うん……そんな所が良いなって……」

「んー……私が見た感じだと、彼も千穂の事気になつてると思うんだけどね」

「良く分かったな美琴、その通りだ。」

「そうかなあ……?」

「そうだと思うけど?彼が千穂の方じつと見てるの見た事あるから、今日だってそうだったし」

「私とは限らないじゃん」

「いや、その時私と千穂しかいなかったし。それで千穂を見てたんなら間違い無いでしょう?」

「期待しちゃうからやめてよ、もう……」

「千穂」

「ん?なあに?」

私が声をかけると千穂は私を見る。

「告白しろとは言わないが、祭りのお話でもきつかけにして連絡先の交換くらいはしてみたらどうだ?」

私がそう言うと千穂は少し赤くなり小さい声で言う。

「今日……交換した……彼から言われて……」

「やったじゃん!」

あの男、行動が早いな。

良い事だ、お互い想っているのなら恐らく上手く行くだろう。

「千穂、お前達はきつと上手く行くよ」

「そうかな……?うん、頑張ってみる……」

私は二人の恋愛話を聞きながら家に帰った後、美琴の相手を調べるようにカミラに伝えた。

その時カミラに「娘に彼氏が居る事を知った父親みたいよ?」と言われた。

家族とまでは言えないが、それなりに大切な者である事は間違いない

い。
調べた結果、美琴の相手も十分にまともな男だったので問題は無さ
そうだった。

千穂に恋人が出来た。

相手は葛城良平。

祭りの日、私に千穂の事を聞いて来た男だ。

千穂と良平は連絡先を交換した後、順調に関係を進め恋人同士となった。

私は千穂と美琴が相手の恋愛が上手く行く様に、花火大会にはそれぞれの彼氏と行く事を勧めた。

二人はそんな事は気にしないと云っていたが、私の気が変わらない事を察した二人が折れる事になった。

そして花火大会が終わった後、私は二人から映画に誘われた。

「映画楽しみだね！」

「駅前にあるから降りたらすぐ行く」

私達は今、映画館のある駅に行くために電車に乗っている。

私が花火に行かないのなら、その代わりに五人で映画に行きたい、という事らしい。

「クレリアちゃん、初めまして。俺は鈴原太一って言うんだ、気軽に太一って呼んでよ」

私に話しかけている男が、美琴の彼氏である鈴原太一だ。

直接会うのは初めてだ。

見た目は軽そうで実際にも軽い男だが美琴を真剣に愛している事も、しっかりと芯が通っている事も私は知っている。

「クレリア・アーティアだ。よろしくな、太一」

「いいねえ……。可愛いし、その姿と大人っぽい雰囲気ギャップがたまらないぜ」

「ちよつと……!?!クレリアちゃんの事、変な目で見ないでよ！」

私の隣にいる美琴が太一に少しきつく言う。

私は千穂と美琴に挟まれて座っていて、その隣にそれぞれの彼氏が座っている。

怒られている太一だが、私には太一の気持ちが美琴にだけ向けられている事が分かる。

「美琴にしか気持ちを向けていないのによく言う男だ、そんな事だから誤解を受けるのだろう」

「なっ!? そんな訳ないだろ……俺は可愛い子が好きだからな」

「そうか、ではそういう事にしておいてやろう」

「……こりや参った。美琴から聞いてたけど……本当に見た目通りの歳なのか?」

苦笑いして話す太一。

「若いのに僕達より大人だよな、クレリアちゃんは。僕が千穂の事を聞きに行った時もすぐに理解して力になってくれたし」

「え?……良平、それマジ?」

良平の言葉に太一が驚いたように言うと、良平は大きく頷いて「マジだよ」と答える。

「あー! そうだよクレリアちゃん! 私、クレリアちゃんが良平から相談受けてたなんて知らなかったんだけど!」

珍しく千穂が「不機嫌です」と言わんばかりに声を上げる。

「言って無いからな。お前達が両思いだと知っていたから、あの時私は上手く行くと言っただ」

「もー。クレリアちゃんはー……」

少し恥ずかしそうに言う千穂。

「それに良平の人格に問題があったり、千穂の事を大して思っていないければ、私は千穂の事を教えたりはしなかった。下手な男に教えれば面倒な事になるのが目に見えているからな」

「僕はクレリアちゃんに値踏みされてたのか……」

良平も苦笑いになる。

「なんかあれみたいよね。ほら……娘に彼氏が出来た父親」

「あー……」

美琴の言葉に三人が声を上げる、それはカメラにも言われた。

「話題になってるだけあって面白かったね」

「そうね」

帰りの移動中、私達は見た映画の内容を思い返したり、感想を話したりしていた。

内容は一人の日本人の少女が日本の神々の世界に飛んでしまい、元の世界に帰るために神の世界で暮らす……という物だ。

地球には神が存在しないが、私が覗いた別の世界には自称神や、実際にその世界の知的生命体に神と呼ばれている者もいた。

私は自分が神だと思われる事に大して興味は無いが、他者から神だと思われたい者達も居るといふ事だな。

相手が神であろうと私達に手を出してくるなら、殺す事は変わらないが。

映画に登場する日本の神々は様々な姿をしているが、私は事前情報によってその神の中の一人に注目していた。

この作品の中に、黒いワンピース風の和服を着た、黒髪の少女の姿をした神が登場する。

その神は様々な神話を渡り歩く放浪の神として登場していたのだが、娘達の情報によるとこの神のモデルが私らしい。

主人公を見守り、気まぐれに導く存在で、メインキャラクターの一人のようだった。

意識して見ていると、作中の行動や登場する逸話に多少思い当たる事がある。

過去の私の行動が、現代にまで残っているのだろう。

考えてみれば、僅か数千年程前の出来事の筈だからな……残っていてもおかしくは無いか。

「作り話だと分かっているても、神話とか過去の謎とかの話はわくわくするよね」

良平が微笑みながら話す。

「まあ、夢はあるわよね」

美琴がそう答えると、太一が続く。

「あの黒い髪の少女の神様も、実際に居たって記録が残ってるみたいだぜ？まあ……その記録自体が作り話なんだろうけどな」

「でもさ……あの黒髪の神様も世界の謎の一つなんだよね。記録が残ってるのは勿論、神として記録に残らなくなった後も似たような容姿の不思議な少女の話は各地にあるらしいし？」

千穂がそんな事を言う。

「テレビで特集してるのを見た事あるけど……千穂、アンタ妙に詳しいわね？」

美琴が尋ねると千穂は照れた様に言う。

「前にそういうのに嵌っちゃって、色々調べたの……へへ……」

「アンタらしいわ……」

美琴が呆れた声を出す。

「でも、調べたら面白かったよ？世界中の神話とか壁画とか……とにかく色々な所にこの少女の神様だけが、ほぼ共通した姿で登場してるの。だから他の神々は創作だけど、この少女の神は本当にいたんじゃないかっていう説があるんだよ！」

話し終わると皆が静かになった。

「皆……？どうしたの？」

千穂が不思議そうに言う和美琴が言う。

「千穂が賢そうに見えるわ……」

「何それ!？」

美琴の言葉に千穂は声を上げた。

「ごめん千穂、何か違和感が凄くて」

美琴が千穂に謝ると千穂が不貞腐れながら話す。

「もー……でもどう考えてもおかしいのは本当らしいよ？世界中に同じ様な姿の神様が残っているなんて、普通に考えて変じゃない……」

過去の私の話を友人から聞く事になるとは。

「まあ、大学とかで歴史を学べばもっと詳しく分かるかもしれないね」

良平はそんな事を言いながら千穂をなだめる。

「なあなあ……もしかしたらその神様は今も何処かにいるかも知れないぜ？」

「何言ってるのよ……」

にやつきながら言う太一に美琴が呆れたような声を出す。

「いや……だつてさ？時代が違うのに似た姿が残ってるのなら、ずっといたつて事じゃん？なら今もいてもおかしくないだろう？」

「うーん、まあ……そうかもね」

この子達は隣に本人が座っていると思っていないだろうな。

私の正体を知れば、思い至るかもしれないが。

「じゃあねクレリアちゃん、俺は美琴を送って行くから」

「しつかり送り届けろよ」

「分かりましたお義父さん……いてっ」

美琴が太一の頭を叩く。

「何言ってるのよ……。じゃあ帰るわ、またね」

「じゃあな」

美琴と太一は私達に挨拶をして、並んで帰って行った。

太一にとつては遠回りらしいが、しつかり送り届ける様だ。

やはり根はしつかりとしている。

「クレリアちゃんは大丈夫？」

良平が心配そうに言うが、何の問題も無い。

「平気だ、私は迎えが来るからな。お前は千穂を守る事に専念していろ」

「……うん、わかった」

「何か恥ずかしいなあ……」

そう言いながらも、結局迎えの車が来るまで千穂と良平は私と共に待ち続け、私が迎えの車に乗り込んだのを見届けてから帰って行った。

夏休みは後半に入り、二人を島に招待する日が訪れた。現在、私達は電車で空港へと向かっている。

事前に必要な荷物は島へと送ってあるので、持って行く物は移動する間に必要な物だけで良い。

その為、私達はかなり身軽な状態で電車に乗っている。

「綺麗な海！楽しみだなー！」

「私も楽しみ、透明度の高い海なんてテレビでしか見た事無いし」

「二週間の内の二日はキャンプをして過ごし、残りの五日は家に泊まる。分かっているな？」

楽しそうにしている二人に、念の為に確認をしておく。

「うん！キャンプも海水浴も出来るなんて幸せ！」

「千穂、今からはしゃぐと島で遊ぶ体力が無くなるわよ？」

千穂は落ち着かない様子で体を揺らし、美琴も落ち着いているように見えるが内心は高揚しているようだ。

そんな二人と会話しながら、移動時間を過ごす。

空港へ着いた私達は、待機していたメイドに旅客機へと案内された。

「クレリアちゃん、搭乗カウンターに行かないの？」

美琴が疑問を口にする。

「島へは私の旅客機で直接行く」

「昔、石油王が同じような事してるのテレビで見たわ……」

私が美琴の疑問に答えると落ち着いた声で返事が返って来た、すっかり慣れたようだな。

やがて準備を終えている旅客機が私達の視界に入り、タラップの隣に侍女が控えているのが見えた。

「内装は過ごしやすいように変えてあるから快適だと思う」
「ねえ、クレリアちゃん……私達三人だけであれに乗るの？」
千穂が私の方を向いて尋ねて来る。

「そうだ」

用意されているのは人類が使っている一般的な大型ジェット旅客機だ。

内装は変更してあるが、魔法的には手を加えていない。

「はー、疲れが取れる……」

「お金持ちの家のリビングみたいな機内ね……」

ソファに座りだらける千穂と、座ったまま周囲を見回している美琴。

「主様、何かお飲み物をお持ちいたしましょうか？」

「牛乳を頼む」

「かしこまりました」

この旅客機に居るのは私達と侍女隊の者のみだ。

「倉森様、篠崎様。何かお飲み物をお持ちしましょうか？」

二人に侍女が聞く。

「えっと……じゃ、じゃあコーラをお願いします！」

「私は……レモンティーをお願いします」

「かしこまりました」

そう言うのと侍女達一礼し去って行く。

「みんな凄い美人だね……」

「彼女達はクレリアちゃんの侍女さんのよね？」

千穂と美琴が言う。

「そうだ」

「以前ヨツバさんには会った事あるけど、何人位いるの？」

「六十五人だな」

私が答えると、二人が顔を見合わせた。

「多いのかな？少ないのかな？」

千穂はそう言つて首をかしげる。

一人一人の能力が高いので、私は十分な数だと思っている。

「いや、多いでしょ……クレリアちゃん一人に対して六十五人居るのよ？」

美琴は呆れたように千穂に言う。

「そうだよね……なんかよく分からなくなつてたよ」

地球上にある私の家で雇っているメイドなどを合わせると、そこそこの数になるだろうな。

島に着くまでの約二時間半、私達はのんびりと機内で過ごした。

島へと到着した私達は旅客機から下り、車に乗り換えて森の中の広場にやつて来た。

川も近く、キャンプをするのに丁度良い場所だ。

必要な物は事前に用意されているが、テントの組み立てや火起こし、食事の用意などは私達で行う。

「これからどうする？私としては早い内にテントを設営したいと思うけど……」

美琴が私達に尋ねる。

「そうだね、先に設営しようよ！」

二人の意見は同じ様だな。

「分かった」

問題は無いので私も了承し、協力してテントの設営をする事にした。

それ程時間はかからず、広場に大きなテントと大きめのタープが完成した。

「出来た！」

「大きい割に設営が簡単だったわね。やった事の無い私達でもなんとかなったわ」

二人は完成したテントとタープを見て言う。

「簡単な物を用意させたからな」

「あ、そうなんだ。クレリアちゃんありがとう！」

「ホント助かったわ」

「用意したのは侍女だ。礼は彼女達に言ってくれ
今回の為に色々を用意してくれたからな。」

「次はどうする?」

私が次の行動を二人に任せると、美琴が答える。

「次は食事の用意をしましょう、手分けしてカレーを作るわよ」

「よーし!やるぞー!」

妙に気合の入っている千穂を横目に、私は調理器具と材料を取り出して準備を始めた。

「千穂……皮を剥いて切る位は出来るわよね?」

「失礼な!最近料理の勉強を始めたから、それ位出来るもんね!」

千穂は料理の勉強を始めたのか。

「へえ……彼の為?」

「そうだけど……美琴だっしてしてるでしょ?」

千穂は恥ずかしそうにしながら美琴に言う。

「まあ、私もしてるけど……」

目をそらしながら答える美琴。

「考える事は一緒だね!」

「……そうね」

笑ってそう言う千穂に、美琴は少し照れたように答える。

「二人には、私と同じ位になつて欲しい所だな」

私がそう言うと、二人は困ったような顔をする。

「分かって無いみたいだけど……クレリアちゃんはかなり料理上手いからね?」

「それは無理です!」

呆れたように言う美琴と何故か敬語で言い切る千穂。

「侍女達の中には、私を超える者もいるぞ？」

「え……？クレリアちゃんよりも上が居るの……？」

「侍女さん達、凄いね……」

私の言葉に、驚いたように呟く二人。

二人は騒ぎながらも料理を続けたが、カレーは無事に完成した。

「あー、美味しかったー」

「クレリアちゃんおかげで美味しかったわね」

食事を終え、キャンプファイヤーを囲んで話す私達。

周囲はすっかり暗くなっている。

「材料もそれなりにいい物だからな」

「クレリアちゃん家のそれなりに良い物って……聞くのが怖いんだけど」

「確かに……」

千穂と美琴はそう言っているが、微笑みを浮かべている。

「詳しく言うのはやめておこう」

「その方が精神的にいいかも知れないわね」

そう言って美琴は目の前の炎を見る。

私が虫や動物の鳴き声、火が燃える音を聞きながら空を見上げる

と、空には三つの月が輝いていた。

「美琴はさ……進路はどうするの？」

突然千穂が呟く。

進路か、彼女達にとっては大きな選択だな。

「私は小学校の教師を目指そうと思ってる……だから大学はそれを前提に考えてるわ」

厳しくも優しく千穂を見守っている美琴なら向いているかも知れないな。

「そっか……私は保育士になりたいと思ってるんだ。大学もそっち

方面で選ぶつもり」

「なるほど……まあ、千穂には向いてるかもしれないわね」

私に対する今までの反応からも分かる様に、千穂は優しさと行動力がある。

叱らなければならない時は叱る事も出来るし、向いているかも知れない。

「クレリアちゃんは将来どうなりたいとか……ある？」

千穂が私に聞いてくる。

「どうなりたいかは分からない。ただ……嫌でない事ならば場合によつては経験してみるのも良いかも知れない、とは思っている」

これは、千穂の言葉を聞いて少し考えを改めたからこそ思った事だ。

結局その時の気分次第だが、全く気にしていなかった今までは違う。

「いいんじゃない？クレリアちゃんはまだこれからだし、焦る事無いわよ」

「そうだね。色々とやってみれば良いよ」

美琴と千穂はそう言って笑う。

「……クレリアちゃんは、月下グループは継がないのよね？」

突然、美琴が私にそう尋ねて来る。

「そうだな。以前話した通り、月下グループは別の者が継ぐ事になってる。元々私はグループを継ぐ気が無いし、血縁がなければ継げないという訳でも無いからな」

私が答えるとしばらく二人は沈黙する。

「私達も夏が終わったら本格的に勉強を始めるつもりだからきつと今迄の様には遊べないと思う……」

千穂は暗い暗い表情になる。

「そうね、大学に行き始めたらあまりクレリアちゃんとも会えないわね……」

美琴も気にしているのだろう、千穂ほどではないがその表情は暗い。

「会う事が無くても友人である事には変わりはない、気にするな」
その気持ちは嬉しいが、私の事を心配して自分の事を疎かにするのは問題だ。

「千穂。電話だって出来るし、一生に離れ離れになる訳じゃないのよ?。」

「うん、そうだね。……ごめんね?ちよつと暗くなっちゃった」

「まあ……私も考えてはいたから」

「大学に入って落ち着くまでは自分の事を優先しろ」

私は二人にそう言うておく。

それから二人が眠くなるまで私達は話をして過ごした。

翌朝。

目を覚ました二人と共に簡単な朝食を作り食べ終えた。

「今日は予定通りに探索かな？」

食後にのんびりしていると、千穂が言う。

「そうだな、弁当を持って島の森の探索をする」

この島は家や飛行場、港、プライベートビーチなどは作られているが、それ以外はあまり手を加えていない。

野生動物も多く生息していて、島の大部分は森林だ。

「しつかり準備して来たわ。もう着替えて出発する？」

美琴がそう言って私を見る。

二人共行きたくて仕方ないようだ。

「では、すぐに着替えて出発しようか」

私は二人の希望に答える事にした。

「わかったわ」

「よし、じゃあ準備しちやおうー」

すぐに行く事を伝えると美琴は頷き、千穂はテントに引っ込んだ。私と美琴もそれを追ってテントに向かう。

私達は侍女から弁当を受け取り、準備を終えて森へと入って行く。荷物のほとんどは千穂と美琴が持ってくれている。

「少し入っただけで大自然ね……」

美琴が周囲を見回しながら呟く。

「この島の森には手を加えていないからな、野生動物も多く生息している」

私が島に持ち込んだ動物達が生態系を構築し、今も島で暮らし続けているからな。

「それって危なくない？大丈夫かな……」

千穂は不安そうに声を漏らす。

「私が居る限り問題は無いと思うが、二人にそんな事は分からないからな。」

「私達が進む道は管理されているし、奥まで行かなければ危険な生物は居ない。それに、私も一度も出会った事は無いから平気だ」

「こう言っておけば大丈夫だろう、元々二人に危険そうな生物を近づける気も無いしな。」

「それなら平気ね、早く行きましょ？」

美琴がそう言って歩きだし、千穂と私も歩き出す。

「ゆっくりと、私達は森の中を進んで行く。」

「二人とも、あの木の上に鳥が止まっている」

「どこ……？」

「……分からないわね」

私の指差した方向へと目を凝らす二人、しかし全く見えていないようだ。

「この双眼鏡を使うと良い」

私は双眼鏡を美琴に渡す、美琴は双眼鏡を使い私の示した方を見る。

「……どこ……？」

「こつちだ、一本だけ真横に伸びている枝の根元を見る」

美琴の頭を鳥の居る方向へと向ける。

「……あつ……いた……綺麗な色ね」

「……美琴、私にも見せて」

いつもより声を抑えて話す千穂。

「はい、このまま覗けば見えるはずよ」

双眼鏡の位置を固定したまま千穂と交代する。

「どれどれ……おお、派手だねえ。名前は何て言うんだろう？」

「分からない」

「クレリアちゃんでも流石に分からないかー」

「私が何でも知っているとと思うな。私が知っている事など僅かだ」
知らない事は数える気にもならない程に存在する筈だからな。

「千穂……いくらクレリアちゃんでも何もかも分かる訳無いでしょ？……でも、クレリアちゃんよくあの鳥を見つけたわね？」

私と千穂の会話を聞いた美琴は呆れた声を出した後、双眼鏡を使わなければ見えなかった鳥を見つけた私に感心した様な言葉を掛けた。

「他の者より夜目が利く事は以前に話したと思うが、私は視力自体もかなり良い」

「凄いわね。確か……何処かの原住民は視力が高いと聞いた覚えがあるけど……クレリアちゃんは原住民だったの？」

私を見て言う美琴。

「違う」

「あははーごめんごめん……でも凄いののはほんとだよ？」

私が答えると笑って謝る美琴。

違うと答えたが、原住民でも合っているかも知れない。

この惑星地球……イシリスで目を覚まし、それから現在までこの惑星を見続けているのだから。

「クレリアちゃん、双眼鏡返すね」

千穂が私へ双眼鏡を差し出してくる。

「あんたまだ見たの？」

「見ただよ？だけど飛んで行っちゃった……」

「まだ使いたいのなら持っていてもいいぞ？」

「そう？それなら使わせて貰おうかな」

千穂はそう言って双眼鏡を首にかける。

「そろそろ先に進みましょう？」

美琴の言葉で、私達は再び歩き始めた。

その後、私達は森の中で弁当を食べて、行きとは違うルートを通り植物や動物を見ながら戻った。

行きも帰りも危険な動物が現れる事は無く、普段あまり見る事が無い環境と動植物を見た二人は満足そうだった。

テントに戻った後はバドミントンを三角形を作って行つた。

事前に勝敗は無いと言っておいたにも関わらず、二人は張り合っていたな。

バドミントンの後、休憩の時間を十分に取ってから今日の夕食であるバーベキューの準備を始める。

「串に刺す場合は食材を混ぜて刺さず、同じ物を刺すようにしてくれ」

「そうなの？イメージだと色々刺してある感じだけど……」

私の言葉に千穂が言う。

「それぞれ火の通りが違う事は分かるな？バラバラに刺して焼くとどれかが生焼けだったり、逆に焼き過ぎたりする事になる。見た目は確かに色々刺してある方が良いだろうが、私は味が落ちるのが嫌だからな。どうしてもやりたければ焼き終わった後に刺しなおして保温すると良い」

「……バーベキューと言えば色々刺さった串のイメージしかなかったけど、言われてみれば……何で気がつかなかったのかしら？」

美琴は納得したのか不思議そうに言う、染みついたイメージは中々変わらないという事だ。

食材の用意を二人に任せ、私は焼く準備をする。

炭を用意して組み上げ、バーナーで火をつけた。

「クレリアちゃん、大丈夫ー？」

「大丈夫だ」

頻繁にこちらを気にする二人、私を子供だと思っっているのだから心配にもなるか。

しばらくバーナーを使い、炭に火が移ったら団扇で風を送り全体が燃焼するのを待つ。

そして十分に燃焼したら更に炭を加えていく。

加えた炭も十分に燃燒したら次に強火、中火、保温用と火力を分ける。

「準備出来たよー」

焼く準備が整った直後、丁度良く二人が準備を終えてやって来た。虫などが付かないように用意しておいた透明なケースの中に、串に刺さった食材が入っている。

周囲は大分暗くなっているが、明かりは用意しているのでテント周りはかなり明るい。

「火の準備は出来てるみたいね。ちよつと食材を処理するのが遅くなっちゃったけど、待たせちゃった？」

美琴がそう言ってケースをテーブルに置く。

あれだけ頻繁に私の様子を見ていれば遅くもなるだろうな。

「いや、丁度終わった所だ。左から強火、中火、保温用だ、焼け具合に合わせて変えていけ」

「凄い！プロみたい！」

千穂はそう言つて驚いているが、プロなど居るのだろうか？

テレビでこのやり方を覚えたのだが……その時に実演していた者がバーベキューのプロだったのかも知れない。

「二人の好きそうなタレも色々を用意してある、好きな物を使うと良い」

私は野菜や肉、キノコなどの串を焼き始める。

串に刺していない食材も取り出して網に置く。

「焼き終わった物は保温用の場所に置いておくからそれ以外に手を出すなよ？腹を壊すぞ」

「分かったー！」

「千穂、私達も交代して焼くんだからね？」

食べる気満々の千穂に美琴が釘をさす。

私達は時々焼くのを交代しながら、バーベキューを楽しんだ。

バーベキューを終えて後は寝るだけだったのだが、二人が花火を用意していたので一緒にやる事になった。

「花火大会……今度は一緒に行こうね？」

「気が向いたらな」

私は千穂に答える。

四人で行った花火大会で仲は深まったと聞いたが、それでも私に来て欲しかったという気持ちは変わっていないようだ。

私達はテントから少し離れ、暗い所に移動する。

暗くないと花火は魅力が半減してしまうからな。

花火に火をつけると、様々な色の光が噴き出る。

魔法で簡単に出来る事だが、魔法の使えない人類にはとても魅力的に見えるのだろう。

美しく人気のある夏の代表的な娯楽の一つだ。

こうした人類の小さな花火や打ち上げ花火も悪くは無いが、やはり魔法には敵わないと感じるな。

「見て見てー」

千穂が花火を両手に持って回っている。

「綺麗だけど……目を回すわよ？」

「大丈夫ー」

美琴が忠告するが千穂は回り続けている。

花火は燃え尽きるのが早いから平気だろう。

そう思っただけしばらく見ていると、持っている花火が燃え尽き、彼女が戻って来る。

「ほら、平気だった」

そう言っただけまた新しい花火を手を取った。

「また回るの？」

美琴が笑いながら聞く。

「やめとく、やり過ぎたらほんとに目が回りそうだし……」

千穂は時々幼い子供の様な事をするが、しっかりと考える事も出来る子だ。

まあ、保育士になろうという者が子供では話にならないからな。

出会ってからまだあまり時間は経っていないが、二人の事はそれなりに分かるようになっていっていると思う。

最後に線香花火の耐久勝負をして勝利した私は二人が寝ている間、世界樹と念話で語り合って過ごした。

翌朝。

二人が起きた後、皆で朝食を作り食事をする。

その後、テントなどを片付け侍女の迎えを待つ。

しばらくしてやって来た侍女に後を任せ、私達は車で家に向かった。

「お帰りなさいませ、主様」

車を降りて家に入ると、侍女が並んで迎えてくれた。

「二人を部屋まで案内してやってくれ」

「かしこまりました……倉森様、篠崎様、こちらへどうぞ」

「よろしく願います！」

「お世話になります」

案内しようとする侍女に頭を下げる二人。

そんな二人の様子を見て微笑んだ侍女は、二人を部屋へと連れて行った。

あの様子ならば、侍女達も彼女達の事を悪く思う事は無いだろう。

そう思いながら私はいつもの談話室へ向かい、ソファに座る。

部屋に居た侍女が飲み物を飲むかを聞いて来たので、牛乳を頼んだ。

そう言えば……この家に人間が入ったのは初めてかも知れない。

ジャンヌと信長が来た時は人では無かったからな。

「お帰りなさいませ、主様」

部屋にやって来たヒトハとフタバが声を揃えて私に挨拶をする。

「ご友人はもうすぐいらつしやいます」

そう言つて微笑んだヒトハの隣では、フタバが微笑んでいる。

「お前達も気に入つた様だな」

「直接会うのは初めてでしたが……良い子達でした」

「実際に会つた事で、どんな子達なのか良く分かりましたね」

ヒトハとフタバはそう言つて私の近くに座る。

私は娘達と話をしながら二人を待つ事にした。

「へー、ヒトハさんが最初の侍女だったんですか」

「最初は主様とカミラ様、私の三人で生活していたのです」

「途中からフタバさんや他の皆さんも雇われたんですね」

「そうですね、時期に差はありますけどね」

談話室で千穂、ヒトハ、美琴、フタバの四人が集まって雑談をしている。

あれからすぐに千穂と美琴は談話室にやって来た。

そして四人はすぐに打ち解け、こうして話に花を咲かせている。

ヒトハの話している内容は大体間違っていない。

私とカミラとヒトハだけだった時期もあるし、途中からフタバ達が増えたのも間違っていない。

違うのは雇われたのではなく、私が作ったという所だな。

私は彼女達の会話を聞きながら牛乳を飲んでいる。

娘達と友人達の仲が深まるのは良い事だ。

そうだ、今の内にこれからの予定を伝えておくか。

「千穂、美琴。今日は一日のんびりと過ごし、明日は海に行こうと思っているが……どうだ？」

「クレリアちゃんに任せるよー！」

「我が儘を言って手を煩わせるのは嫌だしね」

二人は私を見て答えた。

「ではこのまま予定通りにしよう」

「あ……ごめんね？クレリアちゃんの事を放って置いて、侍女さん達とばかり……」

突然、申し訳なさそうに千穂が表情を変える。

「謝る事は無い、私は侍女達と二人の仲が良い事に安心している。東京にある自宅では彼女達に滅多に会う事は出来ない、今の内に好きなだけ話しておくといい」

「クレリアちゃんの言葉に甘えておくわね」

私の言葉に美琴が返事を返す。

今でこそこうして素直に聞いてくれるが、最初は二人に「本当にそう思ってる?」や「正直に言ってる?」などと散々確認された。

しばらくすると私が本当に平気なのが分かって来たのか、徐々に私の言葉を信じるようになった。

「昼食が終わったら自由に家の中を歩き回っても構わない、迷ったら通りかかった侍女に聞け」

「クレリアちゃんは一緒に行けないの?」

美琴がそう尋ねて来るが、特に問題は無い。

「構わないぞ、私と行きたいのなら一緒に行こう」

「やったー!じゃあご飯食べたら行こう!ほら、クレリアちゃんも一緒に話しよう?」

千穂は私に微笑んで言う。

昼食まで彼女達の会話している姿を見て過ごそうと思っていたが、私も会話に混ざる事にした。

「千穂……結構食べてたけど……お腹平気なの?」

「大丈夫!」

昼食を終えた私は、二人と共に家を回っていた。

「ここは音楽室だ、今はピアノがあるな」

しばらく歩き回り、音楽室前にやって来た。

「こっちの家にも音楽室があるのね……あつ……」

美琴が話している途中で声を上げた。

「どうした?」

「クレリアちゃん。もし良かったらピアノ聞かせて欲しいんだけど

……駄目かしら?」

美琴がそう言うと、千穂も思い出したのか声を上げた。

「あつ!そう言えば前に機会があれば、みたいなこと話してたよね!私聞きたいな……お願い!クレリアちゃん!」

確かにそんな事も言ったような気がする。

ピアノを弾いて聞かせるくらい何の問題も無いな。

「良いぞ、中に入ろう」

それなりに広い音楽室の一角に、グランドピアノが置いてある。

このピアノは高価な物では無いが、音質が気に入ったので使っている。

「おー！グランドピアノだ！」

千穂がピアノを見て声を上げた。

「何でそんなに驚いてるのよ、学校の音楽室にもあるじゃない」

「それはそうなんだけど……普通、家には無いよね？」

「確かにそうね」

話をする二人を置いて私はピアノを弾く準備をする。

「二人とも好きな所で聞くといい」

私が声をかけると二人は私の両隣に立った。

「何を弾いてくれるの？」

千穂が私に問いかけて来る。

「以前言ったと思うが、私は一曲しか弾けない。「無貌の少女」と言う幻想曲だ」

「聞いた事無いわね、あまり有名じゃないの？」

美琴が私に尋ねる。

「この曲は私の友人の作曲家が、私をイメージして作ってくれた曲だ。だから私と身近な者達以外は知らない」

「なるほど……クレリアちゃんだけの曲なのね」

「そうなる」

「自分の曲があるなんて凄いね……早く聞いてみたい」

「分かった」

千穂に頼まれた私は弾く姿勢となり、そつとピアノを弾き始めた。

曲を弾き終わると千穂と美琴が涙を一筋流したまま放心していた。

「二人とも、大丈夫か？」

感情が高まった時に人間が涙を流す事は知っている。

しかし、私の曲に何か感じる物があったのだろうか？

「何と言えればいいかな……。誰にも理解されない悲しみ……。みたいなの？」

「あまりこういうのは分からないんだけど、孤独……の様な物を感じたわね」

尋ねてみると、千穂と美琴はそう言いながら手で涙を拭う。

「私は良い曲としか感じないが、感じ方は人それぞれだ。二人はそう感じたのだろうか？」

「うん……。凄かったよ」

「まさか泣くなんて……。恥ずかしいわね……」

この曲は作曲した友人が抱いた、私へのイメージだ。

友人は私に、誰にも理解される事の無い永遠の孤独を感じたのかも
しれない。

しかし、私は今までそのような物を感じた事は無い。

娘や友人が居なくても、この世界が無くても、恐らく孤独や悲し
みを感じる事は無いだろう。

だが、楽しいと感じる事は出来る。

私は今の生活を楽しんでいて、と言えらると思う。

「気に入ってくれたようで何よりだ、友人も喜ぶだろう」

「曲も凄かったけど、クレリアちゃんの演奏も凄かった！手が
ガーンって動いてて凄かったよ！」

「……この曲、物凄く難しいんじゃないかしら？」

興奮した様に凄いを連発する千穂と考え込む美琴、この二人は反応
が全く違うな。

「演奏も終わったし他に行こうか」

「……あの、クレリアちゃん……？」

席を立った私に美琴が声をかけて来る。

「どうした？」

「……もう一回いい？」

「私ももう一回聞きたい！」

どうやら聞き足りないらしい。

「分かった。こういうった機会が無ければ弾く事もあまり無いからな、お前達が満足するまで弾こう」

「やったー！」

「ありがとう、クレリアちゃん」

それから私は5回演奏し、二人が満足した後、音楽室を出た。

ある程度家の中を回り再び談話室に戻って来た私達は、夕食までのんびりと過ごす事にした。

明日になればこの二人は海ではしゃぐだろう、今日は体を休めた方が良い。

「ねえねえ、夕食が終わったら皆でカードゲームでもしない？出来れば侍女さん達も一緒に……クレリアちゃん、大丈夫かな？」

千穂が私に確認する。

「構わない。夕食後、時間が空いている者達の中で私達とカードゲームをやりたい者が居たら談話室に集めてくれ」

私は千穂の提案を受け入れ、侍女に指示を出した。

「かしこまりました、主様」

侍女は部屋にある内線で内容を伝えていますが、これは人間である二人へ見せているだけだろう。

地球の屋敷に居るのは人間のメイドなので当然内線を使うが、人間が居ないこの島では基本的に連絡は全て念話だ。

私わざわざ侍女に頼むのは彼女達にそうして欲しいと頼まれた事があるからだ。

当然だが緊急時はそのような事はしない。

「主様、あの二人が来てるんだって？」

「主様の友達を見に来たよー！」

部屋に入って来たのはヨツバとミツハだ。

二人はそのままこちらにやって来て、空いている場所に座った。

「ヨツバさんお久しぶりです!」

「お花見の時以来ですね」

二人はヨツバに挨拶する。

「こちらの子は?」

千穂がミツハの方を見て言う。

すると、ミツハが自己紹介を始めた。

「二人とも初めまして。ヨツバの姉!のミツハだよ!」

姉を強調するミツハに二人は驚いた表情をする。

「え!?ヨツバさんのお姉さん!?!」

「嘘でしょ!?あつ……失礼しました」

千穂と美琴は思わずといった様子で声を上げた。

二人が驚くのは無理も無い。

ヨツバは身長が175cm程あり、見た目も完全に成人女性だが、ミ

ツハは身長が142cmで見た目は中学生程にしか見えない。

「残念ながら、本当に姉なんだよ……はあ……」

溜息を吐くヨツバ。

ミツハはニヤニヤしてそんなヨツバを見ている。

「事実を変えられないから……ねー?ヨ、ツ、バ?」

「ミツハてめえ!」

「きゃー!逃げろー!」

二人はろくに会話もせず、そのまま部屋の外に行ってしまった。

「……今のでなんとなく関係が分かったわ」

美琴が呆然としながらも口を開く。

「二人には言っていないなかったかもしれないが、ヒトハ、フタバ、ミツ

ハ、ヨツバは姉妹だ」

「姉妹かなー?とは思ってたんだけど……名前からすると、もしか

してヨツバさんが一番下なのかな?」

千穂が微妙な表情のまま聞いてくる。

「そうだ、ヒトハが長女で後は名前の順番だな」

「こんな姉妹もいるのね……。クレリアちゃんも色々と凄いし……」

不思議よね、人間って」

美琴がそう呟く。

このまま共に居ればいつか二人にも私達の事を話す時が来るだろう。

それまではそう思っていてくれ。

二人が寝静まった深夜、私は談話室で本を読んでいた。

「お母様、夜は盛り上がったみたいね」

私の元にかミラがやって来た。

「そうだな、あれほど集まるとは」

夕食後のカードゲームには、四姉妹を含め二十七人の侍女が集まった。

私と千穂と美琴を入れて合計三十人、予想以上に集まったためババ抜きでのトーナメントが行われた。

「誰が勝ったの？」

「サクラだ」

優勝したのは侍女隊の一人であるサクラという娘だ。

彼女に優勝賞品として何か欲しい物は無いかと聞くと、私の一日専属侍女になりたいと答え、彼女はその権利を得た。

そんな物で良いのかと思ったが、本人が喜んでいる様だったので何も言わなかった。

「ババ抜きは運の要素が強いものね」

かミラは微笑みながらそう言うと、侍女に酒を頼んだ。

実際には多少技術もあるらしいが、それでもほとんど運らしいな。

現在世界に存在するトランプ、オセロ、サイコロなどを始めとしたいくつかの物は、以前に友人が面白い遊戯を作ろうと悩んでいた時に教えた物だ。

最初に考案したのは魔法人類だが、人類でも作製可能な物だったので教えた所、世界中に広がった。

友人達は考案者として私の名を出すべきだと言ったが、元々私が考案した訳では無い事、名を広めたくない事などを説明し、ゲームは友人の名で広めて貰った。

その為、人類の間では考案者はその友人達になっている。

「明日は海よね？」

カミラは用意された酒を一口のみ、私に尋ねる。

「そうだ、クルーザーに乗せて島の周囲を回ろうとも思っている」

「いいわね。運が良ければイルカやクジラにも会えるでしょうし」

「会えるだろうな」

「ふふっ……そうね、お母様がいるものね？」

カミラと共に明け方まで過ごし、私は部屋に戻った。

翌日、私達は海へとやって来た。

「海だー！」

「凄く綺麗……」

千穂は叫んで海に突っ込み、美琴も後に続いて海へと入って行く。

侍女達は私達と共に浜辺に到着すると、素早く準備を始めた。

今日は全員いつもの侍女服では無く、水着を着ている。

「底が見えるわ……テレビでも見たけど、実際に見ると感動するわね」

「しよっぱいー！」

美琴は感動しているようだが、千穂は何をしているんだ。

「当たり前だ」

「へへへ……」

私の言葉に恥ずかしそうに笑う千穂。

「千穂、海のしよっぱさや味は場所によって違うらしいわよ？」

「え？ホントに？」

美琴の情報に反応する千穂、確かにカミラも料理に合わせて塩を変えていたな。

そんな話をしている間に準備を終えた侍女達が海へと入って来た。

常に数人の侍女を残し、交代で遊ぶ様だ。

「主様、共に楽しませていただきます」

「私達が遊んでいるのを、ただ見ていると言う気は無いからな」

「ありがとうございます」

波打ち際で侍女達と会話を交わす。

「娘達と海で遊ぶのも久しぶりだ……楽しむと良い」

「はい……お母さん」

彼女達は微笑み、思い思いに遊び始めた。

二人を見れば少し離れた所でそれぞれ侍女から浮き輪を受け取っていた、忘れていたのを持って来て貰ったのだろう。

私は手前に居る美琴の元へ向かう。

「美琴、私は少し泳いでくる」

「大丈夫？」

美琴は心配そうだな。

「大丈夫だ、侍女達も居るしここは遠浅だからな。お前も一緒に来るか？」

「そうね、私も行くわ。千穂ー！私クレリアちゃんと泳いでくるねー！」

「待ってー！私も行くー！」

離れた所で浮き輪で浮いていた千穂がこちらへやって来る。

「では行こう」

私達はまとまって沖の方へと進む。

少しずつ緩やかに深くなり、十分な深さになった所で私は潜った。

「おお……海が透明だからクレリアちゃんが泳いでるのが良く見える……」

「泳ぐの上手なのね……長い黒髪がなびいて人魚みたい……」

泳いでいるが、私には二人の声が聞こえる。

人間の泳ぎ方もたまには良いな。

二人も浮き輪を使いながら海上を泳いでくる、私は一旦浮上して彼女達を待った。

途中で侍女達も合流し、しばらく皆で海の生物を見たりしながら泳いでいると、呼んでおいたウミガメがやって来た。

私が意識を向け再び呼ぶと、ウミガメは私の方へ近づいてくる。

「皆、こつちにウミガメが来る。きつと一緒に泳げるぞ」

「ほんと!?どこどこ!」

「千穂、こつちに来てるわ!」

ウミガメはそのまま私達の間に入ってくる。

「うわー!一緒に泳いでるよ私!」

「凄いわ!最高!」

ウミガメに掴まって泳ぐ事が出来た二人は嬉しそうだ。

しばらく楽しんだ後、私は二人にそろそろ開放するように言う。

私が二人から解放されたウミガメの頭を感謝を込めて撫でると、
ゆっくりと離れて行った。

「主様、一度戻って休憩しませんか?」

侍女の一人がそう言うて来る、二人の事を考えて提案してくれたの
だろうな。

私達は海から上がり、ビーチチェアに座りながら飲み物を飲んでい
る。

「運がよかったね!ウミガメと泳げるとは思ってたよ!」

「そうね、私も興奮しちゃったわ。クレリアちゃん、この辺りにウミ
ガメはよく来るの?」

「それなりに珍しい事だ、運が良かったな」

質問に答え、私はスポーツドリンクを飲んだ。

実際には呼んだ訳だが、そんな事はどうでも良い事だろう。

その後、ビーチバレーで侍女達が激闘を繰り広げ二人が驚いたり、
砂浜に砂の山を大量に作って砂遊びをしながら過ごし、一日が過ぎて
行った。

家に戻るとすぐに風呂に入り夕食を終え、談話室に私達は集まった。

「二人共、体調は大丈夫か？」

「うん、平気だよ」

「私も大丈夫」

二人の体を調べたが問題は無い様だな。

「明日は二人が良ければクルーザーで少し沖へ行こうと思う」

「行きたい！」

「船酔いしないか心配だわ……」

千穂はいつも通り興奮気味に答え、美琴は船酔いの心配をしている。

感じ取った事があるので船酔いが辛い状態である事は何となく分かっている。

辛いという感覚も私は直接感じた事は無いため、「何となく」という表現にしかならない訳だが。

「美琴さん、当日酔い止めの薬をお渡します」

そばに控えていたヒトハが美琴に声をかける、いつの間にか名前呼びになっているな。

「ありがとうございます」

『用意しているのか？』

私は念話でヒトハに問う。

『いえ、偽物です。これを飲んで頂いて魔法で船酔いを起こさない様にすれば、薬の効果だと思いでしよう』

そういう事か。

「美琴、どうする？ 駄目なら無理に行かなくても構わないぞ？」

「薬も用意してくれるみたいだし。それに……滅多に出来ない事だから、行かなかつたら後悔しそう」

私の確認に美琴が答える。

少ない機会を活かすのは悪い判断では無いと思う。

「運が良ければイルカやクジラも間近で見られるぞ」

「うわー！美琴！イルカとクジラだって！」

「……やっぱり行かなかつたら後悔するわね。絶対行くわ……」

私の言葉に千穂は大喜びし、美琴は心を決めた様だ。

「千穂、今日は明日の為に少し早めに寝ましょ。体調を崩したら悔やみきれないわよ?」

「そうしよつか……寝れるかなあー?」

「あんたは寝れるでしょ」

「へへ……凄い?」

「……凄いと思うわ」

しばらく私達は会話をしていたが、明日に備えていつもよりも早く二人は眠りについた。

翌日、私達はクルーザーに乗り沖へと出た。

クルーザーには乗員として侍女達も乗り込んでいる。

「気持ちいいねー」

千穂はそう言って伸びをした。

「クルーザーで海に出て晴れた空と綺麗な海を見る……贅沢よね」

美琴も気持ちよさそうに目を瞑り、風を感じている。

彼女には出発時に酔い止めの薬と言って偽薬を飲んで貰い、魔法で処置している。

出発前に美琴に酔う事は嫌なのかを聞いた所、嫌だと答えたのでいいではあるが二度と酔わない様にしておいた。

私はくつろぐ二人を横目に、イルカが居る場所を探し出した。

その位置を、操舵している侍女に念話で伝える。

「イルカとかクジラとか、何処かに居ないかなー」

「居たら嬉しいけど……そう簡単に見つかるかしら？」

二人は水平線を見ながら話をしている。

「よく見る事が出来るポイントに向かっているから、運が良ければ居るかもな」

居る事は確認しているから、二人がしっかりと周囲に注意していれば見つける事が出来るだろう。

しばらく海上を進み、イルカが居る場所へやって来た。

イルカ達はクルーザーの傍に居るが、二人は気付くだろうか。

そう思っていると、海を見ていた美琴が声を上げる。

「あつー！居たー！いたよ千穂ー！」

「えっ!?どこどこ!?」

千穂が美琴に走り寄る。

「そこー！一緒に並んで泳いでる！」

少し離れた海面を指さす美琴、そこには三匹のイルカが並走していた。

「うわあ……並んで泳いでるー！」

「可愛いわね！」

二人は興奮して声を上げている。

私がイルカを見るために二人の隣に顔を出すと、イルカ達が跳ねた。

「凄い凄い！」

「凄いわー！」

二人は同じような事を口にして大騒ぎしている。

そんな中で、イルカ達の意識は私に集中していた。

かなり私の事を気にしているようだ。

私から何かを感じるのだろうか？

彼らは私を気にしながら並走していたが、しばらくするとクルーザーから離れて行った。

「行っちゃった……」

「そうね……」

二人は余韻に浸っているのか、イルカが去って行った方をただ見ている。

「見れてよかったー、ウミガメとも泳げたし、後はクジラだね！」

「会えるかは運だけど、出来れば会いたいわよね」

「今ならクジラにも会える気がする！」

「ウミガメとイルカに会えてる時点で運は良い方だと思うわよね、クレリアちゃん？」

美琴が私に尋ねて来る。

「そうだな、一日で会えたのは運が良いと思う」

タイミングが悪いと中々会えない事もあるらしいからな。

「でも、会いたいわね」

「クジラにも会えたら一回でウミガメ、イルカ、クジラに会えたって自慢出来るね！」

周囲を見渡ししていた千穂はそう言つて美琴を見る。

「それは確かに、誰かに話したくなるわよね」

美琴は千穂にそう言つと、期待した表情で周囲を見始めた。

私は周囲を探り、クジラを見つける。

操舵している侍女にクジラ的位置を伝えと、クルーザーはそちらへ移動を始めた。

これで二人の希望は叶うだろう。

しばらく移動すると、クルーザーはクジラ達が居る場所の付近へ到着した。

子供のクジラは気にしていないようだが、大人のクジラ達は既に私へ意識を向けているな。

「二人とも、クジラはあそこにいるぞ」

「居たの!?!」

「どのあたり?……分からないわね」

二人は私の所へやって来たが、まだ見えない様だ。

「もう少し待てば見えるようになるだろう」

「あつ、そつか。クレリアちゃん目が良いんだもんね」

千穂は海へと目を向けた。

「あつ……いたわー!」

やがて美琴が声を上げた。

「あそこー!」

彼女が指をさした方向にはクジラの群れが小さく見えている。

「次は私が見つけるつもりだったのにー!」

「別にいいじゃないそんな事」

「良くないー!見つけたかったー!」

「小さな子供じゃないんだから……」

そう言い合いながらも、視線はクジラへと釘付けの二人。その後、彼女達はクジラの潮吹きを見て騒いでいた。

二人はイルカとクジラを見るという目的を達成し、クルーザーで昼食を取ってから島へと戻った。

一週間の滞在期間が終わると、二人は満足して帰って行った。現在、私は島に残って過ごしていた。

ソファに座り、飲み物を飲みながら周囲に居る侍女達に声をかける。

「千穂と美琴は大分お前達と打ち解けたようだな」

「いい子達でしたね。「今時の子」といった感じですが、しっかりしていますし」

私の言葉に侍女達の一人が笑って答える。

今までそれなりの数の人類と友人になっているが、私達に媚びたり、悪意を向ける者は少ない。

私が友人に選んでいるのだから当然かも知れないが……そういった理由もあり、娘達に嫌われる事も少ない。

「出来れば悪い方向に変わらないで欲しい所ですね」

別の侍女が心配そうに言う。

彼女が今言ったように、途中で性格や考え方が変わる者も居る。

変わる事自体は構わない、どう変わろうと私達が気に入れば何も問題は無く、友人のままでもいいだろう。

ただし……私や娘達、親しい友人達に手を出そうとした者はその時点で友人ではなくなる。

私達を利用するという程度ならば、私達の事を忘れさせて放置する様になっている。

更に、手を出した場合は、特別な理由が無い限り殺す事になる。

だが、わざわざ苦しめる様な事はしない。

これは魔法人類がいた頃から変わっていないと思う。

私は生物が苦しんでいる所を見て喜ぶ趣味は持っていないからな。カミラは多少そういった嗜好を持っているが、私は娘達の考えは出

来るだけ大切にしていってやりたいと考えている。

勿論、私の邪魔にならない範囲での話だが。

それに、カミラは非の無い相手にそういった事をした事は無い。

今までそういった事をされていたのは、私達に手を出し彼女の怒りを買った者達や、彼女に直接手を出した者達だ。

人類は情報などを得る為に拷問をする事もあるが、私の場合は相手を深く探れば済む。

ある程度の力が無ければ、相手は情報を知られた事さえ気がつかないだろう。

そうになると私には趣味以外に特に拷問をする理由が無い訳だが……今の所はそんな趣味も無い。

この先そうしなければならぬ状況になる事があれば、やってみようと思う。

「牛乳をもう一杯貰えるか?」

「かしこまりました」

侍女の一人が私の声に反応し準備をしてくれる。

「お考えはまとまりましたか?」

別の侍女が微笑んで声をかけて来た。

どうやら私が考え始めたのを察して声をかけないようにしてくれていたようだ。

「大した事は考えていない」

「そうですか」

彼女は穏やかな口調で答えて隣に座る。

私は飲み物を飲みながら、周囲の侍女達との会話を続けた。

夏が終わり、秋は足早に過ぎ去り、冬が訪れる。

秋の時点で千穂と美琴は大学入試の為の準備が本格的に始まり、遠出は秋に三人で紅葉を見に行つた程度で、他は近場かそれぞれの自宅で遊ぶようになった。

冬に入った時、私は二人に勉強に力を入れるように話し、遊ぶ機会は更に減つた。

時々電話で話をしているので、それほど会っていないという気はないが。

大学入試日は一月二十日らしい、現在は12月なので一か月を切つている事になるな。

二人の大学は別々になつたが、公共交通機関があるので行き来するのにあまり時間はかからないと聞いている。

ヒトハを中心に計画が進行している新しい学校が出来ていれば、二人が私達の学校に来る可能性があつたかも知れない。

年末はいつもの様に娘達と過ごし年が明け、西暦は2002年となつた。

久しぶりに会う二人と共に初詣に行き、混み合う神社の中を手を引かれて歩く。

私は二人の様に神に祈る事は無いが、二人と初詣に行く事自体は嫌いでは無いからな。

初詣を終えた後、私達は適当なファミリーレストランで食事をしながら話をしていた。

「二人とも、今日は何も用事は無いのか？」

「うん、今日一日は空けといたよ。会うのを楽しみにしてたんだから」

「私も、せっかくクレリアちゃんと会うんだし
少しだけ雰囲気が変わった二人が笑う。

私と会うのを楽しみにしていたのか。

随分と懐かれたが、悪い気はしない。

「大学は問題無く行けそうか？」

「今の所、千穂も私も十分に合格出来る判定ね」

「うん、このまま行けば合格出来ると思う」

二人とも自信のある表情をしている、どうやら問題は無さそうだ。

「そうか、それでも実際に合格するまでは気を抜くなよ」

「分かってるわ、大丈夫よ」

美琴が私に微笑んで答える、千穂は飲み物をストローで吸いながら
頷いている。

久しぶりに直接会った事もあり会話が弾んだ。

結局、時間が遅くなりこの日は泊まって貰った。

今日は一月二十七日の日曜日。

一週間前に大学入試を終えた私達は、久しぶりに二人で買い物に出
かけた。

本当はクレリアちゃんも誘いたかったけど、連絡が取れなかった。

今までもこんな事はたまにあった、また電波の届かない所に居るの
ね。

「あー！やっと受験から解放されたー！」

隣を歩く千穂が嬉しそうに背伸びをする。

「これからも勉強しないと夢は叶わないわよ？」

「そうだけど今日は勘弁してー」

私の言葉に千穂は苦笑いする。

確かに今日くらいは羽を伸ばしても良いわよね。

私は高校に入学してすぐに千穂と友達になった……正確に言うと
千穂が強引に友達になりに来ただけだ。

……一緒に過ごす内に私は千穂の事を気に入ってしまった、そしてどんな時も変わらない明るさに助けられた。

多少周りから浮いていた私がこうして楽しい高校生活を送れたのは……千穂が私を支え、変えてくれたから。

この子はきつと何も考えずにやっただらうけどね。

私が彼女に本心を言う事はきつと無い。

恥ずかしいから……でも私と千穂の関係はこれからもきつと変わらない。

大人になり、結婚し、子供が出来ても……家族ぐるみでずっと一緒にいれる、何となくそんな事を感じてる。

「クレリアちゃんも来れたらよかったけど……きつと海外だろうし。また今度三人で改めて来ようかな……ね？美琴？」

「今度は三人で合格祝いをしたいわね」

「あつ！それいいね！」

クレリア・アーティアちゃん……とても綺麗で優しい、でも何処かおかしな女の子。

始めに会った時は違和感が凄かった……あの見た目であんな話し方だし。

なんだかんだと友達になって、とんでもない大金持ちである事が分かった。

お金があれば自由に生活出来る、それだけならうらやんでいたかも知れない。

……でも、私は彼女に同情していた。

二人の時、千穂から話された事……。

彼女の両親は、彼女に会う事無くお金だけを与えていた。

忙しいのは分かる……世界最大のグループである月下グループのトップなのだから。

でも……どんなに大人っぽくても彼女は子供だ。

一番親の愛が必要な時期に放置されて良い影響がある訳無い。

幸いな事に叔母さんや雇われたメイドさん達、侍女さん達が彼女の心を守っていたけど、それが無ければきつと彼女は歪んでいただろ

う。

千穂はそんな彼女と事あるごとに関わった。

私は気がついていたらわよ？

かつて私が彼女に救われたように……千穂はクレリアちゃんの心を救おうとしているのだと。

クレリアちゃんはそんな物必要無いと言いそうだけど……私が今幸せのように、彼女も幸せになっていると信じたい。

「美琴ー？おーい？」

千穂の声に私は俯いていた顔を上げた。

いけない、考え込んでしまっ……た……。

顔を上げた私の目に映ったのは少し離れた所で私に振り返り笑う

千穂と……その後ろから突っ込んでくるトラックの姿だった。

「千穂っ！」

「ふえ？」

私は叫んで駆け出した、千穂はまだ気が付いていない。

トラックは止まる気配を見せない。

雪に足を取られながら、私は千穂を力の限り突き飛ばした。

「あ……」

そして迫るトラックの車体が、私に突っ込んだ。

私は現在世界樹の枝の上に居る。

地球では千穂と美琴の大学入試が一週間前に終わった所だ。

今頃彼女達は羽を伸ばしているだろう。

『それでさー、ボクも移動出来るようにならないかなー？って』

「体が欲しいと言う事か？」

『そうそうー！こう……意識だけを移して……操り人形みたいな感じで？』

確かに世界樹はここから移動する事が出来ない、自由に世界を見て回れる体を欲しがるとも分かるな。

「考えておこう、いつになるかは分からんが」

『数億年なら待つよー、今の状態が嫌って訳じゃないしね』

「そうか。もし本格的に作る時はお前の意見も聞こう」

『おー！優しい！ありがとね、おかーさん！』

「私はお前の母では無い」

『義理の母ってやつだよー』

「呼びたいなら好きにしろ」

『うん、気が向いたら呼ぶからねー』

そう言うのと他の者と念話し始めた、こいつは全く変わらないな。

『お母様、今大丈夫？』

『どうした？』

カミラからの念話に答える。

『篠崎美琴さんが交通事故に遭ったわ』

美琴が？

『それで？』

『今日、二人で道を歩いていたら所に雪で滑ったトラックが突っ込んだみたい。千穂さんを庇って美琴さんが轢かれ、右腕と両足を失い植物状態よ』

『そうか』

娘であるカミラや侍女達には念の為の対策がしてある。

カミラの服であったり、侍女達の体の放棄などがそうだ。

しかし彼女達には何の対策もしていない。

二人は大切な友人と言えるが、それでも友人でしかないからだ。

息子や娘である、という感覚は私の感じ方次第で……とても曖昧だ。

ルーテシアの事は娘の様に感じていたが、ケインやミナは友人止まりだった。

この差が何なのかは今の所、私にも分からない。

『お母様の友人だし、一応こちらで手をまわして大病院の個室に入院させてあるけど……どうする？』

カミラの声で意識を切り替え、返事をする。

『私は千穂に借りがある』

『えっ……そうなの？』

カミラが意外だと言いたげな反応をする。

『以前、何も分からなかった私にお勧めのゲームを選んでくれてな』

『あら、それなら借りを返さないといけないわよね？』

『当然だな』

何故か嬉しそうな声色のカミラに、私は言葉を返した。

断られたらまた別の機会に借りを返すでしょう。

暗い部屋で、一人の少女がうずくまっている。

その表情は生気を失っていた。

数日食事を取っていないが、それ以上の時が過ぎたように衰弱して見えた。

暗い部屋で自分を責めながら過ごし、限界を迎えて眠れば血まみれの美琴が現れ飛び起きている。

「千穂……う？」

扉の外から声が聞こえる、だが少女は何の反応も示さない。

「お願い……せめて何か食べて……貴女が死んでしまうわ……」

「死」という言葉を聞いた時、全く動かない少女の瞳から涙が溢れ出す。

扉の外にいる彼女の母親は、声を殺して泣き崩れていた。

私は美琴が入院している病院の部屋へとやって来た。

中に入ると千穂の交際相手の葛城良平と、美琴の交際相手の鈴原太一が眠り続ける美琴の傍に座っていた。

「良平、太一」

私が呼び掛けると二人が振り向いた。

「クレリアちゃん……」

太一が呟く。

中々酷い顔をしているな。

「千穂はどうした？」

二人の隣に移動しながら問いかける。

「……部屋に閉じこもってる。食事も取らず……誰にも会おうとしないんだ……」

良平が俯き、暗い表情で答える。

太一程ではないが、彼も中々に顔色が悪い。

千穂は引きこもっているのか。

私は彼らから、機材につながれた美琴に目を移す。

カミラの報告通り片腕と両足が無く、脳にも障害が発生しているよう
うで意識も無い。

この先はまだ分からないが、少なくとも今の人類ではこの状態から
回復させる事は不可能に近いだろう。

「俺は美琴と結婚するつもりだったんだ……」

そう考えていると、突然太一が呟く。

「美琴も冗談だと思ったかもしれない。普段が普段だからな……で
も……本気だったんだっ……!」

美琴を見つめたまま歯を食いしばり、拳を握り締める太一。

良平はそんな太一に何も言えないまま俯いていた。

「私は千穂の所に行く」

すると、太一が涙を流したまま私に言う。

「クレリアちゃん、彼女を助けてくれ。美琴が命懸けで助けた……」

俺達の親友なんだ……」

俯いたまま太一の言葉を聞いていた良平が顔を上げる。

「僕じゃ駄目だった……家族の呼びかけにも反応してくれなかつ
た。でも、クレリアちゃんなら……話をしてくれるかもしれない」

「分かった」

私は二人に答えて、千穂の家に向かった。

どれだけの時間が過ぎただろう……。

お父さんお母さん、春斗……良平。

皆こんな私を心配してくれているけど……もういい……。

ごめんね、美琴。

ごめんなさい……みんな。

私は引き出しからカッターナイフを取り出し、首に当てる。

その時、クレリアちゃんの姿が脳裏に浮かんだ。
クレリアちゃんは海外かな……きっと彼女も私に会いに来るだろう。

私が死んだら彼女にショックを与えてしまうかもしれない。
でも……ごめんねクレリアちゃん……私を許して。

意を決して、私は首に当てたカッターナイフを思いっきり引……く？

……？あれ？カッターナイフが動かない……？

私がいくら手を動かしてもカッターナイフは空中に固定されたように動かない。

「どうなってるの……？」

思わず手を離すと、カッターナイフは空中に浮いたままだった。

「どうなってるの!?!」

勢いよく立ち上がった私の目に、部屋の時計が映る。

……時計の秒針が止まっている？

その瞬間、私の脳裏に「時間停止」という言葉が浮かんだ。

「何が……起きてるの……？」

私は家族の事が気になった。

何かが起きている……そう思った私は部屋を飛び出しリビングへと向かった。

「そんな……」

両親と弟は生活の途中で止まっていた。

ただ……全員暗い表情をしている。

私はその表情を見て胸が痛くなり、ゆつくりとその場に崩れ落ちた。

しばらく動かない家族を見ていた私は、何とか立ち上がり自分の部屋に向かう。

電話……は……駄目だ。

きつとみんな止まってる。

じゃあどうする？

ぐちゃぐちゃになった思考のまま自分の部屋に入った私は、彼女の姿を見た。

「クレ、リア……ちやん？」

私が人間では無い事を分からせるには人類の常識ではありえない事を見せるのが一番手っ取り早い。

千穂が自殺しようとしているのを確認した私は、家の中だけに限定して彼女以外の時間を止めた。

これで私が解除しない限り止まったままだ。

やがて混乱し部屋から出ようとしたので扉を動くようにする。

すると、彼女はそのまま部屋を出て行った。

当然、家族も止まっている。

美琴の現状に潰されそうになっていた千穂も、あり得ない体験に僅かだが持ちなおした様だ。

どうやら千穂は自分の部屋に戻るようだ、出迎えてやらないとな。

「クレ、リア……ちやん？」

千穂のベッドに座っていた私を見て彼女は呆然とした表情で私の名を呼んだ。

「大丈夫!?!おかしな事が起きてるの……無事でよかった!」

千穂は私に抱き着いて来た。

この期に及んで私の心配か。

私は彼女の頭を撫でてからゆっくりと引き離す。

「落ち着け、何も問題は無い」

「え……?どういう事?そういえば……クレリアちゃんは何で動け

るの？それに……どうやって私の部屋に来たの？」

戸惑う千穂。

「今起きている事は私がした事だ」

「……クレリアちゃん？」

千穂は何を言っているのか分からないと言いたげな表情で私を見る。

「カッターナイフやお前の家族が止まっているのは私が時間を止めたからだ」

私の言葉に、千穂はゆつくりと私から離れる。

「何を……言っているの？」

「異常な身体能力、無尽蔵とも言えるスタミナ……他にも色々疑問に感じる所はあったのではないか？」

彼女は更に後ずさる。

「お前は薄々感じていたはずだ……私が人間では無いと」

私が座った姿勢のまま宙に浮かぶと、彼女の体が震え始める。

「あ……クレリア……ちゃん？」

大丈夫だろうか？

出来るだけ穏やかにしておこう。

「千穂、私はお前に借りがあるんだ」

私は出来るだけ優しく話しかける。

「借り……？」

「そうだ、何も分からない私にゲームを選んでくれただろうか？」

「あ……」

「怖がるなど言っても難しいかも知れないが……人間でなくても、私はお前達と過ごした私だよ」

彼女の体が再び震える、先程の震えとは何かが違うように感じる。

「私は様々な力を持っているが、その中には治癒の力もある」

千穂が目を見開く。

「千穂……私はお前に借りがある、望むのなら借りを返そう。お前は私に何を望む？もし本当に死にたいのなら今すぐ楽に殺してやるが……お前はどうしたい？」

本当に死が望みなら止める気は無いからな、楽に殺してやろう。すると彼女は突然私に抱きつき、大声で泣き始めた。

しばらく彼女は泣き続け、そのまま酷い涙声で私に呟いた。

「お願い……クレリアちゃん……美琴を……美琴を助けて……」

「分かった」

私は千穂の頭を優しく撫で、彼女の心からの願いに答えた。

「検査入院だって、参ったわね」

美琴が苦笑いして言う。

私と千穂、太一、良平の四人は美琴の見舞いに来ていた。

千穂を庇った美琴は軽傷を負い、念の為検査入院をさせられている

……と言う事になった。

彼女が植物状態であった事を覚えているのは、人間の中では千穂だけだ。

「軽傷で良かったよ。交通事故に遭ったって聞いた時は怖くて仕方なかった……」

「心配した？」

「当たり前だろ！俺はお前と結婚する気でいるんだぞ!!」

「え……?」

「あつ?!いや……これは違うー!いや違わない……!」

太一は美琴と話しながらプロポーズの様な事を言った。

顔を赤く染め必死に言い訳を繰り返す太一に美琴も顔を赤くして俯くが、一言「私も」と答えた。

二人が恋愛漫画の様な事をしているのを見て、千穂は涙を零している。

無理も無いか、本来なら美琴は意識を取り戻す事無く死んでいたはずなのだからな。

「千穂!?!どうして泣いてるの!?!大丈夫!?!」

良平が泣いている千穂をみて驚く。

「美琴が生きて話してる……」
泣きながらそう言った千穂に、美琴が言う。

「え……？大げさよ……そこまで大きな怪我じゃないわよ？」

「美琴は運が良かったんだよ……もしかしたらもつと酷い事になっていたかもしれないんだよ？」

「それは……まあ、そうね」

そう答える千穂の表情に何かを感じたのか、美琴は困ったような顔を
をして答える。

「良平」

「なに？千穂」

「ありがとう……」

「ん……？どういたしまして？」

千穂の感謝に良平はよく分からない顔をして答えた。

彼も色々と頑張っていた様だからな、千穂は彼が覚えてなくても礼
を言いたかったのだろう。

その後、千穂は美琴に抱き着いてしばらく離れなかった。

三人はいつもと千穂の雰囲気が違う事に気が付いたようだが、不思議
そうにするだけでそれ以上気にする事はなかった。

病院から月に帰り、くつろいでいるとカミラがやって来て私に声を
かけて来た。

「お母様、あの二人はどうなったの？」

私は事の顛末をカミラに話す。

「なるほど、美琴さんは助かって……千穂ちゃんは私達の事を知っ
たのね」

「以前から千穂ならば問題は無いと考えていたが、間違っていないな
かったな」

「まだ出会ってからあまり時間は経っていないわよね？二年も経つ
てないんじゃないかしら」

「出会ったのは千穂が高校二年生になった頃だったと記憶している。改めて言われると、千穂はよく私達を受け入れたな」

「時間だけが全てじゃないって事ね」

「そうかも知れないな」

「……お母様は、借りが無かったら美琴さんを助けなかった？」

カミラがいきなりそんな事を聞く。

「助けただろうな」

私は即答した。

多少知っているだけ、という程度なら何か理由が無い限り助ける事は無いだろうが、美琴はそれなりに付き合いの長い友人だ。

「やっぱりね……お母様、自分で気づいてる？」

「何にだ？」

「友人に危機が訪れた時は、必ず何かしらの理由をつけて助けている事よ」

「そうだったか？」

「そうよ？更に言っておくと一人二人じゃなくて、今まで友人だった者全員。どうにもならない事があつた時は何か理由をつけては助けているわ」

カミラがこう言っているという事は事実なのだろう。

「私は元々、友人に対しては多少は手を貸す気であるから問題は無いな」

「お母様の多少は人類から見ると奇跡に見えるでしょうけどね」

カミラは微笑みながら言う。

また私を神だと言う者が出てきたりしないだろうな。

「私にとつては簡単な事だからな。簡単な手助けで友人が大いに幸せになるのなら、悪い事では無いだろう？」

「そうね。今までもお母様の友人は私達も気に入る子が多かつたし……幸せになってくれるならその方が良いわね」

私はふと、ジャンヌの事を思い出す。

彼女は人類の判断基準で不幸と言える者達は世界中に無数に存在する、と言っていた。

恐らくその者達を少しでも助けるために彼女は児童養護施設の計画を進めているのだろう。

彼女は狂信者だが、今も聖女として名を残しているだけの事はある。

私ではいつまで経っても思いつく事は無かったかもしれない。

そんな事を考えながら、私はしばらくカミラとの会話を楽しんだ。

美琴が交通事故で軽い怪我をしてからは特に何も起こる事は無く、千穂と美琴が大学に合格した。

それから時が流れ、西暦は2003年に入る。

大学に入学してから一人暮らしを始めた二人は、中々忙しくしているようだ。

ただ、良平と太一も大学に進学しており、それぞれ同棲しているの
で正確には千穂も美琴も一人暮らしでは無い。

四人からは今も時々連絡が来るが、実際に会って遊ぶ事はほぼ無くなつた。

自分達の人生の方向を定めた四人は、順調に歩みを進めている。

四人の中で唯一私達の正体を知っている千穂は、私に対して少し甘えるような態度を取るようになっていた。

美琴を始めとした三人には「子供に甘えるなんて」と多少呆れられていたが。

千穂はどうやら姉が欲しかったらしい。

姉が欲しいのなら侍女も居ると思うのだが、妹と姉を兼ね備えた私
が良い様だ。

私の推定年齢を考えると姉どころではないと思う。

日々四人が大学や私生活で忙しくしている中、私は現在メキシコに
来ている。

特にこの国に来た理由は無く何となくやって来ただけだが、目的無
く人類の世界を彷徨うのも嫌いでは無い。

この国に来てまだ二日目という事もあり、今は昨日に引き続き昼の
街を散歩している。

町並みや住んでいる人類達を眺め、店などを覗きながら歩いて満足
した私は、そろそろ裏路地に入る事にした。

表通りから薄暗い路地に入り進んでいると、途中の横道から複数の
話し声が聞こえる。

私が声の方へ近づいて行くと、複数の男が一人の女を解体していた。

「おい……」

私に気が付いた男達の一人が声を上げた、周りの男達が次々ところらへ振り向く。

「私は通りかかったただけだ、気にせずに続けてくれ」

そう言っただけで私は彼らの隣を通り過ぎたのだが、彼らの中の一人が背後から襲って来た。

私は襲って来た男が私に到達する前に、首を折って処理する。

消滅させず殺したのは、「こうなりたくなければやめておけ」という他の者への警告でもある。

首を折ったのは噴き出る血で周囲が汚れないという理由がある。

カミラや信長などは「場合によっては派手に殺す事も有効」と言っていた。

だが、私はその辺りの事は特に考えておらず、その時の気分次第だ。突然倒れ痙攣する仲間を見て、僅かな動揺が生まれた彼らに私は言う。

「気にするなと言っただろう、なぜ話を聞かない。まさかとは思いますが、言葉が分からないのか？」

私は今もこの国の言語で話しているし、表通りの者達には通じたのだが。

そう思いながら言うと、一人を除いた全員が襲い掛かって来た。

通じていないのか無視しているのかは分からないが……どちらにしても会話は出来ない様だ。

そう考えている間にも、男達は私に近づく事も出来ず次々と首が折れて倒れて行く。

全員が死んだ後で残っていた男を見ると、小さく悲鳴を上げすぐに逃げてしまった。

あの男は私に襲い掛かって来た訳では無いから特に何かする必要は無いだろう。

人間には様々な者がいる、中には会話が出来ない者もいるという事

だな。

私はそう思いながら襲い掛かって来た者達の死体を処分し、散歩を再開した。

数日後。

私が街を散歩していると、複数の人間が私の後を付けて来ているのが分かった。

相手は気付かれていないと考えているようだが、相手が悪かったな。

それから人気の無い所に行くと、すぐに尾行者達が襲い掛かって来る。

私はすぐに無力化すると、情報を貰って処分した。

どうやら数日前に私が処分した男達は麻薬を扱っている組織の者達だったようだな。

あの時、一人だけ逃げた者から私の事が知られたらしい。

彼らに指示を出していた者の情報を得た私は、すぐにその人間も処分した。

それから数日が過ぎたが狙われる事はなくなり、現在は問題無く過ごしている。

今日はどうしようかと考えながら当ても無く街中を歩いていると、私の前方に止まっている車の中からスーツを着た男が一人現れ、私に話しかけて来た。

「突然失礼いたします。貴女にお会いしたいという方からの命を受けてまいりました……どうか御同行をお願いしたい」

意識を向けられていたのは分かっていたが、これほど丁寧に誘われるとは思っていなかった。

「随分と丁寧だな」

「失礼な真似はするな、と言われてはいますので」

「私の言葉にそう返す男。」

特に用事がある訳でも無い、ついて行ってみるか。

「分かった。ついて行こう」

「ありがとうございます。ではこちらへ……」

私が乗り込むと、車はすぐに走り出した。

私が自宅のプールから上がった時、部下が報告を持って来た。

幹部の一人が行方不明になったらしい。

そして、監視カメラに実行犯と思われる人物の映像が残っていると
いう。

だが……どうにも部下の歯切れが悪い。

普段は歯切れのいい部下が言い淀んでいる事に疑問を感じた私が
聞いただと、その監視カメラの映像を見て欲しいと言う。

まだ私に歯向かう馬鹿が居るとは……どちらにしても私達に手を
出したのだ、簡単に終わらせる気は無い。

そう考えながら部下に見る事を伝える。

さて……私に喧嘩を売った馬鹿の顔を見せて貰おうじゃないか。

……これは部下の歯切れが悪いのも納得だ。

映像ではいきなり黒髪の……気に入らないが怖ろしく美しい少女
が部屋に現れて何か会話をした後、幹部が消えている。

文字通り突然消えたのだ。

少女もその直後に消え、この後に部下が入ってくるまで何も映って
はいなかった。

外から侵入した形跡もない。

幹部が消えた事に気がついた部下から事が明るみになり、監視カメラの映像を確認するまで誰も気がつかなかった。

もうすぐ庭園の方が訪れると言うのに……面倒な事になった。

……待てよ？

こんな事が出来る人間が居るか？

……私はある可能性を考える。

この少女が……庭園の方の関係者だったとしたら……？

あの方達にとって私達など大した存在では無い、庭園の関係者に手を出したとなれば簡単に消されてしまうだろう。

どんな時でもあの方達の事には最大の注意を払うべきだ。

もし違えば、その時に処理すればいい。

私が今の地位にいるのはあの方達の力添えがあったからなのだ。

見捨てられるだけならともかく、怒りを買えば……その時点でお終いだ。

幸い顔は分かっているし、あの美貌だ……探せばすぐに見つかるだろう。

私は部下に彼女を探し出し、丁重に招待するように指示を出した。

それから数日、予想通り彼女はすぐに見つかった。

そして現在……私は部下を下がらせ彼女と二人きりで対面している。

「始めまして。私はアンドレア・ペレス……ガロアカルテルのボスよ」

「丁寧にありがとう。私はクレリア・アーテシアと言う」

私はその名を聞いた瞬間、関係者だと分かった。

アーテシア姓は庭園の方の物だ、あの方がそれ以外には存在しないと言っていた。

私は自分の判断が正しかった事を確信し、頭を下げる。

「庭園の関係者の方ですね、どうか御無礼をお許しください」

「お前は月の庭園を知っているのか」
間違いない……!」

私は庭園としか言っていない、にもかかわらず正しい名前を知っている。

その時、部屋がノックされた。

「来客中だ!後にしろ!」

私はいら立ちを抑えながら言う。

「ボス……あの方です」

庭園の方が来た!?!……何故!?!予定は今日ではない筈!?!

私は思わずクレリアと名乗った少女を横目で見ると

「入って貰いなさい」

このクレリアという少女も関係者である事は間違いない。
ならば会わせても問題無いはずだ……。

「アンドレア、急だけど確認したい事があるの」

そう言いながら、あの方……マギ様が現れる。

「……あ、主様!?!」

衝撃の映像だった。

あの方が……マギ様がクレリアと名乗った少女に跪いた。

「主様」 マギ様はそう言った……つまり彼女は……。

「何故ここに居る?」

クレリア様がマギ様に尋ねた。

「この組織は私達の資金提供元の一つです」

「そうか。私はもう行く、後は任せなさい」

「かしこまりました」

マギ様が答えると、クレリア様は突然消えた。

クレリア様が姿を消すと、マギ様がゆっくりと立ち上がる。

「座りなさい」

「はい」

私はマギ様の言葉に従いソファに座った。

「貴女が主様と知り合いだとは思わなかったわ、いつ知り合ったの?」

……いつもよりマギ様の雰囲気柔らかい気がする。

この方達に嘘など通用しない……私は会う事になった経緯を正直に話した。

「……なるほど」

私は内心で死を覚悟していたが、マギ様は特に怒っているように見えない。

「……お怒りにならないのですか？」

「手を出した人間には怒っているわよ？でも、もう主様が処分したようだし……殺された者達の独断なのでしょう？」

「勿論です」

私は即答する。

「配下が勝手に動く苦労は私も知っているわ。それに……主様が何もせず帰ったという事が、貴女に問題が無い何よりの証拠ですから」

「その……主様と言う事は……」

恐る恐る尋ねる私に、マギ様が答える。

「貴女の予想通り、あの方が月の庭園の支配者よ」

その時、私は今回の判断が人生において最高の物だったと確信した。

「主様に会える人間はそう多くないわ、光栄に思いなさい」

そう言つてマギ様は微笑む……やっぱりこの方も美しいな。

「恐ろしいほどに美しい少女でしたが……」

「勿論人間では無いわよ？人類の想像を超えた存在、いえ……私達の想像も超えていますね」

マギ様がそこまで言うクレリア様……あの少女の様な体に一体どんな力があるのだろうか？

「そうだ。主様が居たから後回しにしたけど、確認したい事があるのよ」

「何でしょうか？」

私は勝った……！破壊を回避した！

内心の歓喜を隠したまま私は気を引き締め、マギ様との会話を始めた。

カミラに念話で聞いた所、ガロアカルテルはそれなりに大きい麻薬カルテルらしい。

他にも複数の薬屋と繋がりを持ち、資金源にしているそうだ。

私は娘達の活動には関わっていないが、多少は知っておいた方がいいのだろうか。

今回、彼女に対して何かするつもりは無かったが、今までに娘達の組織を消していた事もあったかも知れない。

娘達はいつも私を優先してくれるので問題は無いと思う。

だが、私が許せる範囲であれば娘達の都合に合わせても構わない、とも思っている。

私は食事をしつつカミラと念話し、そんな事を考えていた。

『カミラ、他にも聞きたい事がある』

『何?』

私は今までの行動で何か問題は無かったかを聞いた。

『無くなっても問題無い組織だから問題無いわ、本当に必要なら事前にお母様に潰さないようにお願いするし。それに……お母様が消すと判断したのならその判断に従うわよ?』

どうやら本当に大した事では無い様だな。

それに今までそんな事は一度も頼まれた事が無い。

つまり、どこが無くなっても問題無いという事か。

『そうか』

『ええ』

『問題が無いのならそれで良い』

『よかった、まだ何かある?』

『今の所は無い』

『そう、じゃあまた何かあったら連絡してね?』

『分かった』

私は返事をして念話を切り、食事に集中した。

2004年の秋。

私は千穂、美琴、良平、太一の四人と久しぶりに会う事になり、共に動物園に来ていた。

四人は現在二十一歳……だった筈だ、人類社会ではもう大人という扱いだな。

世界各地で様々な生物を見ている私だが、動物園には始めて来た。ここに居る生物達は私にどんな反応を示すだろうか。

「順路があるからその通りにまわりましょ、その方が見落とさなくて済むし」

「オツケー」

美琴の言葉に太一が答え、遅れて千穂と良平も了承の返事を返している。

「分かった」

私も返事を返し、順路へと進んでいく。

それからいくつかの生物を見て回ったが、どの生物も私に意識は向けるが大きな反応は示さなかった。

ここの生物はサバンナやアマゾンなどにいる生物よりもかなり警戒心が低い気がする。

「クマだー!」

千穂がクマを見て声を上げる。

「なんていうクマなのかな?」

良平の疑問に表示を見た太一が答えた。

「えーっと……エゾヒグマって言うらしいぜ」

「野生で出会ったら死を覚悟するけど、こうして見る分には可愛いわよね」

美琴はそう言つてクマを見ている。

見られているエゾヒグマは、私から意識を外さないようにしている。

歩き回つて視線を合わせないが、かなり緊張している事が分かるな。

私達はしばらくエゾヒグマを見ていたが、やがて次の生物へと移動する。

その時、エゾヒグマの緊張が和らぐのを感じた。

順路を回り生物を見て回つたが、一部の草食生物や小型の生物はかなり怯えていた。

姿を現さなかったり角に集まって動かなくなつたりしていたため、美琴達を含め周囲の客は不思議そうにしていたが、千穂だけが私を見て苦笑いしていた。

そして次はライオンだ。

大きい猫の様な生物だが、触り心地は猫の方が良いと思う。

「寝てるねえ……」

「寝てるね」

千穂と良平が話している。

二人が言う通りライオン達は寝ていた、私が見ていても寝たままだ。

私は少しだけ寝ているライオン達に意識を向ける。

すると寝ていたライオン達が突然飛び起きて腹を見せた。

「な……何？」

「どういう事……？」

美琴達と周りの客がざわめきだす。

私はライオン達を落ち着かせてから次の生物へと移動した。

その途中、千穂から「こつそりと」あまりいじめないであげてね？」と言われた。

警戒心が低い様だったので少し試してみたが、意識を少し向けただけでああなるとは思っていなかった。

その後も残りの生物達を見たが、私を意識はする物の特に目立った行動は起こさなかった。

そんな中、ゴリラは明確に私に意思を示した。

ギリギリまで私に近寄ると、食べる前のリンゴを投げ渡して来たのだ。

彼の気配から察するに、恐らく私へ捧げ物をするような意味合いの行動だろう。

私は受け取ったリンゴを彼の前にかじった、美琴が驚いてやめるように言ったが気にせず食べ続けた。

それを見ると彼は安心した様に離れて行った、きっと彼の中では大事なことだろう。

千穂はそんな私の事を苦笑いして見ていただけだったが、私は三人から……特に美琴から「何で食べたの!?!汚いでしょ!?!」と叱られる事になった。

途中で千穂が間に入り説教は終わったが、美琴は全く反省の色が見えない私を見て呆れていたな。

動物園から出た後は早めの夕食を皆で食べ、千穂と良平、美琴と太一はそれぞれ自宅へと帰って行った。

食べたリンゴは大分酸味が強かったな。

特に大きな出来事も無く三年程が経ち、私達は西暦2007年の春を迎えた。

千穂と美琴はそれぞれ保育士と小学校教諭に、良平と太一はそれぞれ雑誌編集者と俳優になっている。

太一は本来別の仕事をしようと考えていたようだが、町でスカウトされた事をきっかけに俳優の道を考えた。

そして彼がその事を美琴に相談した所、美琴が「やってみたいのなら止めない」と答えたため決心したようだ。

千穂と良平はかなり驚いていたな、美琴も「相談された時は驚いた」と言って笑っていた。

そして太一は本名のまま俳優として活動を始めた。

本名での活動は珍しいらしいが、全くいない訳でも無い様だ。

こうして友人達の環境が変化する中、私達の方にもそろそろ変化が訪れる。

来年の春に月下グループによる各国の児童養護施設と学校が始まる予定になっているからだ。

ヒトハとジャンヌの報告では、建物は簡単に作れても良い人材は中々集まらないらしい。

その為時間をかけて少しずつ進める方針に変更したそうだ。

ある日、私は東京の家で四人を待っていた。

事前に私は四人に全員で集まって欲しいと頼んでおいた。

それから全員が時間を調整して今日に決まり、これから集まる事になっている。

集めた理由は私の正体を三人に話すためだ。

話すきっかけになったのは千穂から言われた「皆がクレリアちゃんに疑問を持ち始めたよ」という言葉だ。

そろそろだとは思っていた。

人間で言えば育ち盛りであろう小さい子供が、何年経っても全く変わらなければ疑問の一つも感じて当然だろう。

その事を千穂に話すと彼女は「むしろ今まで平気だった事が凄いかも？」と言っていたな。

とにかく、これ以上長く付き合うのならば話しておいた方が良いだ

ろう。

もちろん魔法で気にしないようにする事も出来るのだが、私は出来るだけ友人にそんな事はしないつもりでいる。

正体を知った上で友人で居て欲しいという私の我が儘なのだが、今の所は変える気は無い。

駄目なら私の事は忘れて貰うとしよう。

私は四人が眠りに着いた後、リビングでくつろいでいる。

結論から言うと皆は私を受け入れてくれた。

正体を話し証拠を見せた後、千穂が既に知っている事を知った三人は私に恐怖を感じながらも千穂の心配をしていた。

取り乱す事は無かったが、私を見る目は明らかに変わっていたな。

そんな中、千穂が今まで一緒に過ごした時間は何だったのかと話す。

気まずそうな表情をした皆に、千穂はある事を伝える。

それは美琴を救った事だ。

だが、彼らはその事を覚えていない。

信じられないというような様子の三人に、千穂は「あの時の写真を一枚でも撮っておくんだった」と言っとうなだれた。

自殺するまで追い詰められていたあの時の千穂に、そんな事を考える余裕があったとは思えないが。

私は四人にその時の様子を見たいのなら見る事は出来ると伝えた。

千穂は「撮影してたの!？」と驚いていたが、撮影などしていない。時間操作と遠視魔法を使って過去を見せるだけだ。

一度は三人から消した記憶だが、それで私を受け入れる可能性があるのなら見せてみようと考え、提案した。

すると三人は「証拠があるとと言うなら見たい」と了承してくれた。

そして私は美琴を救うまでの全てを見せた。

私と千穂は少し離れて座り、三人には並んでソファに座って映像を

見て貰う。

手足を失い植物状態になった美琴、その隣で悲しむ酷い顔をした太一と良平、自殺しようとした千穂の様子……それらを会話も含めて全てを見せる。

三人は映像の中の自分達が間違いなく自分達であると感じたようだった。

見終わった後で、三人は美琴の見舞いに来た時の千穂の様子を思い出し、千穂にあの時の事を問いかけた。

そしてその問いの答えを聞いた三人は、千穂がこの事を知っていたからあのような反応をしたのだと理解した。

その時、既に三人から私への恐怖は跡形もなく消えていた。

見せたのは正解だったな。

それから美琴は泣きながら私をきつく抱きしめて離さなくなり、その状態のまま良平と太一から泣きながら何度も感謝され、更に千穂からも改めて感謝された。

それから落ち着いた三人と色々と話をし、ある程度三人の疑問にも答える事にした。

皆が質問をしては私の答えに驚くという事を繰り返して時が過ぎた為、泊って貰う事にした。

三人は眠る前に「色々と価値観が変わりそう」と言って苦笑いしていたな。

隣でその言葉を聞いた千穂も頷いていた。

私は今日の出来事を思い返ししながらメイドが用意してくれた飲み物を一口飲む。

どうやら現在の人類の常識の中で生きている者が私の事を知ると、多少の影響がある様だ。

今までの友人達の中にも私の事を知った後、色々と価値観が変わっていた者が居たのだろうか。

会話をしている内に人でなくとも私は今までと何も変わらないのだと理解してくれた様だし、私の正体を知っても友人でいてくれる貴重な友人が増えた事は嬉しいと感じている。

今後、彼女達が敵対するような事が無い限り私から関係を切る事は恐らく無いだろう。

さて……今日は皆が起きるまでこのまま本を読みながら過ごそうか。

私はマグカップに残った牛乳を飲み干すと、本を取り出した。

友人達に私の正体を伝えてから三年程が経ち、西暦は2010年と
なった。

2008年には児童養護施設と各学校が稼働を開始している。
色々行っている様で、運営は中々上手く行っているらしい。

千穂と良平、美琴と太一は去年結婚し、千穂は葛城千穂に、美琴は
鈴原美琴となった。

結婚し日々を忙しく過ごす四人だが、一年に一度は必ず全員で私に
会いに来てくれる。

この様に私と友人達の関係は今も良好だが、最近美琴から叱られ
た。

美琴が私に会いに来た時、彼女が少し前に初めて酒を飲んだらしい
のだが全く酔わなかったという話をした。

あまりにも酔わないので不安になり医者に行ったが、原因不明と診
断され不安になっていると。

その時、私は以前に彼女の酔いをまとめて無効化していた事を思い
出し、それを話した。

話を聞いた彼女は「乗り物酔が無くなった原因がクレリアちゃん
だったなんて……」と、脱力した。

私が「当時は話す気が無く、正体を明かした後は伝えるのを忘れて
いた」と言うと、やや怒った彼女に叱られた。

「今考えればクレリアちゃんが怪しかった」と眉間を押さえ、「意識
しなければ気がつかない物ね」と言い思い至らなかった自分を恥じ
……最終的には「役に立っているので感謝してる」と笑っていた。

他の三人も美琴からこの話を聞いた時は苦笑いしたようだ。
そして現在。

私は月下グループの作った大学の一つに来ていた。

月下グループ運営の学校が出来てから、時々私は大学の公開講義を
聞きに来ている。

人類ならではの考え方など、現在の人類の様々な部分を垣間見る事

が出来て思っていたよりも面白かったからだ。

今日もヒトハから特別公開講義が開かれると聞いてやって来た。

今回、大学側は興味を引きやすい世界の謎についての講義をするらしい。

大学の広い講堂にやって来たが、まだ人はまばらだ。

一番前に座る為に早めに来たからだろうな。

私が見やすい席に座ると、スマートフォンが震え始めた。

私はポケットからスマートフォンを取り出す。

最近、急速にスマートフォンの売れ行きが伸びている様だ。

私も友人の連絡用にこうして所有している。

確認すると千穂からのメールだった、今度の休みに私と会いたいらしい。

私は問題無い事を入力して送信する。

それから講義が始まるまで、手提げバッグから取り出した本を読みながら待つ事にした。

しばらくすると講堂は満員になり、講義が始まる時間がやって来た。

現れた教授は自己紹介などを手早く終え、本題に入り始める。

「今回の特別公開講義は、壁画の少女についてです……現在までに分かっている事を説明と考察を交えてお話します」

壁画の少女か。

正面の壁に、プロジェクターで大きく「壁画の謎」と表示される。

「この謎は、現在世界各地に残されている文明の壁画に関する事で、各地の壁画に同一の存在だと考えられる存在が描かれている……という物ですね」

彼は一拍空けて続ける。

「テレビなどで特集が組まれる事もあるので皆さん知っておられるかも知れませんが……この当時、世界中の文明は他の文明を知らず、

交流は無かった事が分かっています。しかし……発見されたそれだけの文明の壁画に、同一と思われる存在の姿が描かれているのです」
画像が切り替わり、複数の壁画が比較された画像になる。

その画像には、それぞれの文明の名が表記されていた。

「これは同年代の各文明の壁画を比較した物です。ご覧の様に、この黒い少女の姿が全ての文明の壁画に描かれています。そしてこれらは……王や他の神を超えた存在として描かれています」

教授は映像に現れたポインタで、各所を指し示しながら説明をする。

「2001年に公開され高い人気を得た「緋色の神隠し」のメインキャラの一人である、放浪の神のモデルになったのがこの壁画に描かれている少女である事は有名な話ですね。……後程改めて説明しますが、これより後の各時代の神話にもこの神は登場しています」

あのキャラクターか、覚えているぞ。

「この神は、現在最も古い神であると考えられています。その他にも「当時、本当にこの少女の様な何かが存在して各文明を渡り歩いてきた」という仮説などもあります。残念ながら決定的な証拠は見つかっていません」

残されている証拠が、本当なのか当時に作られた創作や捏造なのか判断出来ないだろうからな。

「そして、もう一つ彼女に関係しているだろうと言われているのが……文字です。極僅かですが……このように現代でも使われている物と全く同じ字体、同じ意味の物が当時既に存在していました」
画像が切り替わり文字を比較した物が映し出される。

「この文字も同じ物が様々な文明に残されています。調べた所、この文字は神や精霊の文字として特別な物だった……と考えられています。これらの現代まで残っている文字は、彼女が各文明に伝えたのではないかと言われています。この説が正しければ、現在の私達の言葉や文字の一部は、この時代に彼女が伝えた物をそのまま使っている事になる訳ですね」

……恐らくこれは私だな、当時この言葉を使っていたのは私達だけ

だったはずだ。

教えたのも何となくだが覚えがある。

「過去には「現代から過去にタイムスリップした人間が居たのでは無いか」などという仮説も出しましたが、今では完全に否定されています」

彼は聞いている私達の方を向いて言う。

「現実にごうして証拠が残っている以上、何かがあったのは間違いありません。世界各国で行われた検査の結果、これらの作られた年代は間違いなく、捏造はまずあり得ないと考えられています。こうして、今も少女の謎を始めとした世界の様々な謎の解明に向けて、研究が続いているのです」

それからも次々に各地に残されている私の様な姿が残された証拠の映像と、それに関連していそうな物の話が続く。

教授の話ではこれでも時間内に収めるために減らしているらしい。

「……そして、これほどに各地で崇められていたこの名も分からない少女の姿をした神は、ある時期を境に全く人類の歴史にその姿を見せなくなります。それは現在まで続いてますが、今は新しい可能性が見つかっています」

そう言って教授は画像を切り替える。

「これは1500年代後半、織田信長が力を持ったいた頃の信長を描いた物ですが……ここに描かれているこの少女が、様々な壁画や神話に出て来た少女なのではないかと見られ始めているのです」

流石にこれはまだはつきりと覚えている。

しかし、私はおかしな事をした覚えが無い。

「新しく見つかった文献を調べた所、この少女の事が書かれています。恐ろしいほどの美貌を持ち、時が過ぎても姿が変わらず、重い武器を軽々と振り回し、常人には理解出来ない事を言っていた。……おおよそこのような事が書かれています」

……周りからはそう見られていたのか。

「これは五百年程前の事です。もしこの少女がかつて崇められていた少女の姿をした神であるなら、五百年など僅かな時間でしよう。……もしかすると彼女は今もこの世界に存在し、どこかで暮らして居るのかもしれませんが……。と言う事で！本日の講義を終了したいと思います……本日はありがとうございます！」

彼がそう言うのと拍手が起こる、私も一緒に拍手をした。

言われればうつすらと思いい出す事が多すぎる。

私が今までして来た事は世界中に残されていて、それらの謎を解明しようとする者達がいるのか。

本気で正体を隠そうとすれば、正体を知られる事はほぼ無いと思う。

だが、その為に我慢したり楽しみを減らす気は無い。

正体を突き止める者が現れるならそれはそれで構わない、むしろ話をしてみたいと思う。

状況と相手の出方によつてはその後に消えて貰うが。

講堂を出て先程の講義の事を考えながら歩いていると、声をかけられる。

「お嬢さん、一人なのかい？」

振り向くと一人の男が私を見ていた、三十代前半程だろうか？

ここの学生なのか、職員なのか、また別な立場なのかは分からない。

「お父さんかお母さんはいないのかな？」

彼は私に近づくとしゃがんで目を合わせて来る。

どうやら本気で心配しているようだ。

「問題無い、私はこう見えても23歳だ」

「えっ……っ？」

彼は驚いた表情を見せた。

私は成人した人間の中にも私ほどの身長の方が居る事を知ってか

らは、仮の年齢を名乗る事になっている。

2000年の時点で十三歳という事になっていたので、現在は二十三歳だ。

「お嬢さん……それは流石に無理があるよ？」

笑いながら言う彼に、私は運転免許証を取り出した。

これは年齢を聞いた人間が答えた年齢をまず信じる事は無いから、とカミラから持っておくように助言された物だ。

このために実際に車の運転も覚えた。

車の運転は随分簡単だったな、少なくとも昔乗った魔道飛行船よりは簡単だ。

「……本当に23歳？」

彼は私に見せた免許証と私の顔を交互に見ながら呟く。

「この免許証が偽物に見えるのか？」

間違いなく本物の運転免許証だ、偽造ではない。

私の情報はしっかりと人間として国に記録させた。

これは必要無くなれば消すし、変える必要があれば変える。

「いや……失礼した。成人女性でも背が低い方がいるという事は

知っていたが……実際に見たのは初めてだ」

「気にするな、その反応はもう慣れている」

魔法人類の頃からだからな。

「では私は行く。心配してくれた事には礼を言う、ありがとう」

「あ、その……一枚撮影しても良いですか？」

いきなり撮影を申し込まれた。

今まで隠し撮りしようとする者は多くいたが、こうして確認を取る者は珍しい。

私は丁寧に撮影許可を求められた場合は、相手次第で許可している。

「良いぞ」

彼は問題無いと判断した私は、許可を出した。

言った通り一枚だけ撮影した彼は、私に丁寧に礼を言ってから離れて行く。

歩き始める私に、彼の眩きが届く。

「……あの美しきは忘れられないかもしれないな」

彼と別れた私は大学を出て帰る事にした。

家に帰った私は談話室で今日の講義の事を思い返していた。

講義の影響で過去の事をうつつすらと思い出したからな。

千年程前まで人類は私の事を精霊や神だと思っていた事は覚えて
いる。

各地の壁画や文字で私の事が残されている事は、何となくそんな事
を覚えていたような覚えはある。

しかし世界各地であれだけの数が残っているとは思っていなかった。
た。

確かに、あれだけ様々な時代に似たような姿と文献が残されていれ
ば誰でも関係を疑う。

私は程度の差はあれ、確かに様々な文明に関わっていた。

それ以降も新しい文明が出来たり、国が出来たり……興味を引く事
にはその度訪れて関わっていたと思う。

様々な年代の王などに妻になって欲しいと言われた事も、数え切れ
ない程あった。

相手が友人であった場合は大抵断っただけで問題無く終わったが、
時には強引な手を使おうとした者もいる。

噂で興味を持った者達が、町で楽しむ私を兵を使い捕らえようとし
た事もある、当然返り討ちにして終わりだったが。

しつこい者には死ぬ事になる事を伝え、それを無視した者を全て処
分した事もあった。

その時は多少国が荒れたが、人類の歴史にはよくある事だろう。

こうして話を聞いた時に思い出すだけ良い方だと思う、この分だと
完全に忘れている事もかなりありそうだ。

「主様。本日はご友人のドラマが放送される日ですが、ご覧になり

ますか？」

侍女隊の一人が私に報告してくれた。

今日だったか。

美琴の夫である太一は現在では主演を任されるほどになっている。友人達や妻である美琴も大抵見ているらしい。

太一は妻に見られる事は少し恥ずかしいが、見られる事自体は嬉しいと言っていた。

「見る。時間が近くなったら教えてくれ」

「かしこまりました」

私は返事を返すと良平が編集をしている雑誌を読み始めた。

人混みで幼い僕は泣いている、リズリーランドで親とはぐれ不安だったんだ。

そんな僕を助けてくれたのは二人のお姉さんと……もう一人……。仮装をした狐面の少女。

彼女が泣く僕に好きな動物を聞いて来る……僕はゾウと答える。

すると彼女は自分が妖怪だと言い、何も無い所からゾウを作り出して見せた。

喜び泣き止んだ僕は、その後両親と再会する事が出来た。

両親に抱かれ去って行く僕は……ずっとその少女を見ていた。

「……久し振りに見た」

目を覚ました僕はそう呟いて枕元のスマホを見る。

7時12分……普段なら不味い時間だけど今日は日曜日だ。

「まあ……忘れられるわけないよね……」

十年前、リズリーランドで迷子になった僕は一人の少女に出会った……その少女が今も忘れられない。

別に好きだったと言う訳じゃない……いや、少しはあったかもしれないけど。

今の僕には交際している女性が居るし……あの子もきつと恋人を見つけているだろう。

彼女を忘れられないのは初恋だからとか、そういった理由じゃない。

僕はその時彼女が見せてくれたゾウの事が気になっているんだ。

あの事は、はつきりと覚えている。

子供だったあの時は何の疑問も抱かなかった……でも今思い出すと……。

……本当に何もなかった。

何も彼女は持っていなかったんだ。

そうだとしたら、あのゾウは一体どうやって出したのだろうか？

彼女は自分を妖怪だと言った。

もしかしたら本当だったんじゃないか……と今でも思ってしまうんだ。

両親、友人、彼女にも話したが誰も本気にせず「小さかったから記憶が何かと混ざってるんだ」と言われた。

そんなはずはない……と思うんだけど。

「もし会えたら、聞いてみたい……僕の記憶が正しいかどうか」

でも、彼女は仮装して仮面まで被っていたから、手掛かりと言えるような物は無い。

あるのは当時の彼女の仮装の画像だけだ。

当時、かなりの来場者が異常なほど完成度の高い彼女の仮装に驚いたらしく、画質は悪いが無断で撮影したであろう画像がネット上で簡単に手に入った。

今でもその素晴らしい完成度はコスプレイヤー達の話題に上がっているらしい。

まあ……何が何でも会いたい訳じゃないし、本気で探したりもしていない。

……流石にそんな時間は無いからね。

彼女は僕と同じ位の年齢に見えた、今の僕が二十歳なのだから大体同じくらいのはず。

大学に居るのか働いているのか……もしかしたら主婦になってい
るかも知れないけど。

ただ、いつか……何処かでまた会えたらいいなと思う。

私は娘達との時間も大切にしながら、特に問題無く日々を過ごしていた。

そんな2012年の夏のある日、珍しく一人で千穂が家にやって来た。

しかし、どこか元気が無い様に見える。

「千穂、何かあったか？」

正面に座る千穂に問いかける。

「え？何も無いよ？」

嘘だな。

読み取るまでも無く分かる。

「話せる事ならば話してみろ、聞くだけは聞くぞ」

「クレリアちゃんには隠せないかあ……」

千穂は苦笑いして言う、話し始めた。

「実は……良平の仕事が忙しくてずっとすれ違つて……」

「それほど忙しい物なのか？」

「うん……家でも全然二人の時間が無いんだ……」

だから元気が無いのか。

「子供も欲しいし、一緒に居る時間も欲しいけどこのままじゃ……」

頑張つてる良平に無理も言えないし……」

「時間に余裕が持てる仕事に変える気は無いのか？」

「そう思つても忙しすぎて探す事も出来ないし……それに、絶対に次が見つかるとは限らないでしょ？だから思いきれないというか……」

「本人は出来るなら変えたいと思つているのか？」

「……多分」

確か良平は中々に優秀だったな。

「千穂、ちよつと考えさせてくれ」

「え？うん」

私は千穂に断ってからカミラに念話する。

『カミラ、今平気か?』

『大丈夫よ、どうしたの?』

『良平の事は知っているな?』

『ええ、千穂ちゃんの旦那さんよね』

『千穂との時間が全く取れないから転職したいらしい。彼の性格と能力は大体把握しているだろう?』

『お母様の友人は全員調べているから分かっているわよ。彼なら……月下グループの運営している大学の事務員はどうかしら?』

カミラは少し考えた後に言う。

事務員か、良いかも知れない。

『事務員に空きがあるのか?』

『埋まってるわよ?でも、増員する予定だからそこに入って貰おうかと思つて。良平くんの性格と能力なら合つてると思うわ』

『いつからになる?』

『もしその気があるなら2013年の春からになるわね』

ふむ……それなら問題無さそうだな。

『分かった、話をしてみる。良平が引き受けた場合は任せていいか?』

『いいわよ、もし来てくれるなら一人探す手間が省けるもの。詳しい話を聞きたいなら人を送るわ』

『分かった』

カミラの言葉に返事を返し、念話を切る。

『千穂、カミラと話し合ったのだが……』

『あ、念話してたんだね』

すっかり慣れた千穂が言う。

『月下グループの運営している大学の事務員が増員されるらしくてな、その気があるのなら雇う用意があるぞ?』

『え?でも……』

『説明を聞いてから断つても構わない。本人に聞いてみてくれ』

『うん、聞いてみる……でもなんか……んー』

千穂は何か考えている様だ。

「何か問題でもあるのか？」

「縁故採用って事なのかなって……」

「千穂、私達は使えると判断したから誘っている。友人関係はあまり関係無い」

私がそう答えると、千穂はきよとんとした表情をした後に苦笑いを浮かべて言う。

「……少しは関係するんだ？」

「長い付き合いの中で、能力と性格を把握している友人の方が色々決めやすいのは当然だろう」

「ありがと、クレリアちゃん」

「こちらとしても一人探す手間が省ける」

「私達はどうすればいいのかな？」

「説明のために人を送る。受けるかどうかはその後に聞く事になるな」

「うん、分かった」

千穂から良平の仕事の事を聞いてから一か月が経ったある日、千穂と良平が揃って私の家を訪れた。

「クレリアちゃんありがとう。僕は決めたよ」

良平はカミラが送った人員から詳しい話を聞き、転職を決めたと話した。

今の仕事は引継ぎを終えた後、退職するという。

そして来年の春まで千穂の代わりに家事などをこなしつつ改めて勉強しなおし、大学の事務員として働く事にしたようだ。

「お前のおかげでカミラは一人分探す手間が省けたと言っていた。感謝の気持ちがあるのなら力を発揮してくれ」

「頑張らせて貰うよ」

「後、千穂と子供の事もしっかり考えるように」

私がそう言うと、良平は勢いよく千穂を見た。

「クレリアちゃん、何で言うの……」

千穂は顔を赤くしたまま文句を言っただけ。

「話してなかったのか？」

私がそう言うと良平が千穂に話しかける。

「千穂……子供が……？」

この言い方は紛らわしかったか？良平が勘違いしてしまった。

「違う違う！まだ出来てないよ！ただ……欲しいのに良平が忙しくて作りたいって言えなくて……」

そう答える千穂を抱きしめる良平。

「ごめん……」

「いいよ、これからは平気でしょ？」

「うん……約束するよ」

私はそんな二人を見ながら牛乳を飲んでいた。

友人が幸せなのは良い事だ。

私はクレリアちゃんの家の車で駅まで送って貰う事になった。

運転手は侍女の一人で、リンさんというらしい。

私達は移動中にリンさんと話をしていたが、その中でクレリアちゃんの話題になった。

「クレリアちゃんは色々と僕達を助けてくれて……恩も返せない程にあるんです。今回の事だってそうです」

夫である良平が真剣な顔で話す、私も良平に続いて言った。

「美琴を助けてくれて……私達全員の人生を良い方向へと向けてくれたのに、私達は何も返せていないんです。……リンさんはどうしたらクレリアちゃんが喜ぶか分かりませんか？」

するとリンさんが言う。

「皆さんが今と変わらず主様と友人で居る事が何よりの恩返しだと思います」

「そうなんですか……?」

良平がそう答えると、リンさんが話し出した。

「主様の持つお金やお力があれば、どの様な状況であつても簡単にひっくり返す事が可能です。……友人であつた者達がそれを知り、変わつてしまった事も一度や二度ではありません。突然媚びへつらうようになり甘い汁を吸おうとする者や、私達を手に入れようとする者……私達が救つた者が主様の大切な者の命を奪おうとする事もありました」

……信じられない。

救われておきながら恩人の大切な人の命を奪おうとするなんて……。

私は人の醜さを感じて黙つてしまった、良平も何も言えずに顔をしかめている。

「主様は手を出して来た者は処分し、それ以外の者達からは記憶を消し関わりを断ちました……主様と私達にとって、それはもう友人とは言えませんでしたから」

「処分」という言葉に心がざわつく。

それはつまり……そういう事だよね……?」

……でも、少しだけ気持ちがかかるような気がする。

私だつてそんな人達を友達だなんて思わないし、何より私はクレリアちゃんの家族への思いの深さを知っている。

そんな彼女が家族の命を狙われて許す訳が無いよね……。

私だつて、もし家族が殺されたら……どうなるか分からないし。

考え込む私達にリンさんが言う。

「主様が皆さんを助けたのは、友人であつたからです。主様の事を知つても、恐れる事も利用する事も命を狙う事も無い……変わる事無く、ただ友人で居てくれたあなた方だからこそ主様は手を差し伸べた。私は皆さんがこれからも主様の友人でいてくれる事を心から願っています」

「……勿論ですよ。本当の年齢じゃ比べ物になりませんが……僕にとって彼女は妹みたいな子ですから」

良平もそう感じてたんだ、多分美琴と太一も同じ様に考えているんだろうな。

そう思いながら、私は本心を答える。

「友人を辞める気は無いですよ。私にとってクレリアちゃんは頼りになる姉であり……放っておけない妹ですから」

良平と私が微笑んで答えると、リンさんは穏やかな声で一言「ありがとうございます」と言った。

2013年の夏。

千穂と美琴と共に昼食を終えた私は現在、二人と都内を歩いていた。

「そうだ。少し前に弟が婚約したって連絡して来たんだよね」

話しながら歩いている時、千穂がそんな事を言う。

千穂の弟……そういえば居たな。

元々あまり関わりが無かった上に、千穂が大学に入った時に一人暮らしをするようになった事で家に行かなくなり、会っていないかった事を思い出した。

「へえ、春斗君結婚するんだ。確か警察官なんだっけ？」

「うん、神奈川で警察官してる。今度実家に婚約者と挨拶に来るって言ってた」

美琴の言葉に答える千穂。

結婚するのなら私も祝儀を出すか。

「結婚式に出る気は無いが、祝儀くらいは出そう」

「クレリアちゃん私達の結婚式にも出てくれなかったよね……出て欲しかったのに」

「見てはいたぞ」

出席はしていないが、遠視で式は見ていた。

「もう……ご祝儀は良いけど、金額には気を付けてよ？」

溜息を吐いた千穂が祝儀について注意をしてくる。

「そうね、千穂から聞いたわよ？昔、千穂の実家に泊まりに行った時に億の値段が付くワインを持って行ったんでしょ？」

私は美琴に言われて思い出す、千穂の両親に返されたワインの事か。

「泊りの土産に持って行く物では無かったかも知れないな」

今思えば、値段の上限を決めておくべきだった。

反省しよう。

「両親からその事を聞いた時はもう色々とクレリアちゃんの手を知った後だったから驚かなかったけど……普通はあり得ないからね？」

千穂が呆れたように私を見る。

「今は大丈夫だ、祝儀は五十万程にしておく」

「多いから」

千穂と美琴の言葉が被る。

「二人がそう言うのならもう少し減らそう」

私は笑う二人と共に街を歩いていく。

「ふう……」

僕は息を吐き、顔を流れる汗をタオルで拭く。

夏用とは言えスーツで真夏に外に居るのは辛い。

こうして時間を見つけては街へ出てアイドルの卵を探しているけど、早々逸材など見つかる物じゃない。

近くにあった自販機でペットボトルのスポーツドリンクを買い、半分ほど一気に飲む。

僕もこの業界でそれなりにアイドルを成功させてきた。

何というかこう……見た時に何となく感じるんだ、この子は行けると。

多少でもそう感じた子はそれなりに良い結果を出すけど、そう感じる子はとても少ない。

そのせいか僕は担当する人数はあまり多くないが、担当した子はあの程度は必ず成功する、と評価されている。

……僕は常に担当のアイドルには出来るだけの事はすると決めている。

感覚が行けると感じているのに上手く行かなかった時は大抵の場合、僕がやり方を間違っている。

その場合はやり方を変えて一番合う物を探すんだ。

上手く行った時も、もつと魅力を引き出せる方法があつたんじやないか……と考えるけどね。

ふう……今日は後一時間くらいしたら帰ろう。

そう決めて残りのスポーツドリンクを飲み干し、ゴミ箱に捨てる。

そして再び、街を歩き交う人々を眺めた。

可愛い子、綺麗な子、スタイルが良い子……。

見た目も重要だが、それだけじゃアイドルとして成功しない。

目で見える以外の何かを感じる子を探すんだ。

駄目だな……。

色々な子が居るがどの子も今ひとつピンとこない。

もう無理かな。

まあ、そんな資質を持つ子がそこら中に居たら苦労はしないけどね。

今日はここまでにしようかな……一度事務所に帰らないといけな
いし。

腕時計を見て視線を戻した瞬間、大人の女性二人に挟まれたワン
ピース姿の少女が目に入った。

それは麦わら帽子を被り、長い黒髪をなびかせた少女だった。

白く美しい肌……そしてその感情の無い美しい横顔を見た時、理解

不能な凄まじい感覚が体中を駆け巡り……見惚れてしまった。

彼女はそのまま固まる僕の目の前を通り過ぎ、離れて行く。

「……っは!? ふーっはーっはー!」

息苦しさを感じた僕は大きく息を吸う、知らない内に呼吸を止めて
いたみたいだ……。

彼女の歩いて行った方を振り向くと、彼女が人混みに消えて行きそ
うになっていた。

逃しては駄目だ……!

僕は離れて行く彼女達を追いかけた。

「すいません。お話を聞いて頂きたいのですが……少しだけお時間をいただけませんか？」

私達の前に突然スーツの男が走って来て行く手を阻み、声をかけて来た。

「何ですか？」

「ちよつと……相手にしない方がいいわよ」

普通に返事をする千穂と、相手にしない様に言っただけで通り過ぎようとする美琴。

この男はさつき私に意識を向けていた男だな、悪意は感じないから話くらいは聞いても良いか。

「話くらいは聞いてやろう、この男に悪意は無さそうだ」

「……クレリアちゃんがそう言うなら私は構わないわ」

私がそう言うと、美琴が立ち止まった。

「ありがとうございます」

男は礼を言っただけで懐から名刺を取り出し、私達にそれぞれ手渡した。

そこにはフラワープロダクションのプロデューサーと言う役職と、

篠原 京介（しのぎき きょうすけ）という名前が書いてあった。

「フラワープロダクションって確か女性がメインの芸能事務所よね？」

美琴が名刺を見ながら言う。

声をかけて来たという事は私達の誰かをスカウトしようとしている訳か。

「はい。芸能界に興味はありませんか？お子様は素晴らしい才能を秘めていると感じました……いかがでしょうか？」

お子様？

……私の事か。

確かにそう見えるだろうな。

千穂と美琴はお子様という言葉に苦笑いした。

「彼女は子供ではありませんよ？26歳の大人です」

「……は？」

千穂の言葉に、京介は間抜けな声を上げた。

「申し訳ありませんでした」

彼は免許証を私に返して謝った。

その後、私達は近場のカフェの隅へと座り、それぞれ自己紹介をして少し話をする事にした。

そして、間違いなく26歳であるという証拠を見せた。

「気にしていない。今までも言葉だけで信じてくれた者は少ないし、免許も年齢を証明するために持っている」

私は免許証をしまいながら答える。

「昔から一緒に歩いてると姉妹か母娘だと思われたもんね」

「親戚の子供の世話をしているとかわれたりね」

「……僕も免許証を見なければとても信じられませんでしたね」

千穂と美琴がそう言うのと、京介も私を見ながら呟く。

「残念だが私は子供では無い。これは返しておく、もう用はないだろう？」

私はそう言って名刺を返し、席を立つ。

「待ってください」

京介は静かに、だがはつきりと言葉を発した。

「確かに子供だと思い、声をかけました。ですが貴女をスカウトしたい気持ちは変わりません」

私は彼を見る。

嘘は言っていない……本当に私をスカウトしようとしているようだ。

「どうかお話だけでも聞いていただけませんか……？」

「今は友人と過ごしている途中だ、別の日になら話くらいは聞いてもいい」

「ありがとうございます」

私の言葉に彼は嬉しそうに礼を言った。

それからスマホの番号を交換し、後日改めて会って話す事になった。

数日後。

京介から都合のいい日に来て欲しいと頼まれた私は、連絡を入れてからフラワープロダクションへとやって来た。

私がスカウトされた事に対して美琴はそれほど反応を示さなかったが、千穂は私が芸能界に入るかもしれないと嬉しそうだったな。

プロダクションに着いた私は受付に京介の名刺を出し、今日約束がある事を話した。

するとすぐに応接室のような所に案内され、そこにはすでに京介が居た。

「本日はわざわざお越しくださってありがとうございます」

「了承したのは私だ、問題は無い」

「……では早速ですが、お話をさせていただけます」

それから色々と熱心に話す彼、どうしても京介は私をデビューさせたいらしい。

「そういった世界は若い方が良いのではないか？」

話の合間に私は質問を挟む。

「確かに若いという事は大きいですが、クレリアさんはどう見ても子供にしか見えませんし……何より別格の美しさをお持ちです。貴女であればデビューしても問題は無いでしょう」

私の問いに真剣に答える京介。

「年齢はこのまま公開するという事か？」

二十六歳が既に偽装だが。

「事務所の方針として年齢を変更する事はありません、流石に明らかに無理な年齢にはしませんけどね。しかし貴女なら逆にその実年齢

と見た目のギャップが売りになるでしょう」

「そういう物なのか」

全く分からないな。

「はい。もしデビューして頂けるなら後にクレリアさんと相談させていたでいて、正式に方針を決定したいと思います」

芸能界に入る事自体は特に嫌では無い、やって見なければ分からない事もある筈だからな。

「芸能界に入る事自体は構わないが、私は敬語を使わないし誰に対しても態度を変えるつもりは無い。それに嫌な仕事はやらないし年末始に仕事はしない、家族との時間を優先するからな。……これらを認められるのか？」

「それは……」

京介は難しい表情を浮かべて考え込む。

芸能界がどんな所かは知らないが礼儀が必要無いという事は無いだろうし、予想だが仕事を選ぶ事なども難しいと考えている。

私は我が儘だからな、無理なら私の事は諦めろ。

「この条件を認めて貰えるのなら、やってみても良い。もし無理だと言うなら諦めて欲しい」

「……社内で検討します。しばらくお時間をいただけますか？それと簡単な履歴書を書いて頂きたいのですが……」

「分かった」

その日はそれで解散となった。

帰宅後、私はカミラに履歴書の書き方を教わって作成し、フラワープロダクションへ送付した。

さて、どうなるだろうか。

フラワープロダクション会議室で、僕はクレリア・アーティアさんの事について話をしている。

「……本当に26歳なのかね？」

「はい。免許証も確認しています」

履歴書を見た皆さんは疑問を持っていているようだけど、気持ちはよく分かる……僕もかなり驚いたから。

「確かに美しい……これ程の女性は今まで見た事も無い。だが……礼儀正しくする気が無く、仕事も選ぶ……更に年末年始は仕事をしないと云うんだね？」

上司の皆さんの表情は厳しい。

……それはそうだろう。

どの業界であろうと礼儀は大事だし、変な仕事を持って来るつもりは無いが仕事を選ばれるのも困る。

更には年末年始は仕事をしないと云う。

こんな事を今まで要求して来た人はいなかったから正直困っている、困っているんだけど……。

僕はもう彼女を担当するつもりでいる、僕の中では採用は決まっている。

上の皆さんが駄目だと言うなら、何としてでも説得するつもりだ。彼女は間違いなく成功する、僕の勘が暴れている……逃せばこれ以上の逸材はもう現れない……そう思ってしまう。

「その辺りは基本的にソロで活動させて、スタッフや共演者にはプロダクションの指示で常にキャラを保っている……という事にしようと考えています。年末年始はこちらで何とか調整します」

「もうそこまで考えているのか……上手く行くと思うか？」

別の上司がそう云って僕を見つめる。

僕は上司と目を合わせたまま、彼女と話して感じた事を話す事にした。

「これは話してみても感じた事です……確かに彼女は礼儀が無く、

誰に対しても本当に態度を変えないと思います。しかし、特に高圧的な訳ではありませんし、何というか……それが自然な事であるようにあまり気にならないんです。僕も最初から敬語など使われませんでした。気がせずには会話をしていました」

そう、子供だと思つて話していた時も……彼女の話し方は変わつていなかった。

だけど何故か気にならなかったのだ。

「……なるほど」

「何より彼女を見た時、今までとは全く違う感覚を感じました……しばらく呼吸が止まる程に」

これから先あの感覚を感じる事はきつと無いだろうな……。

「それ程か……」

「篠原くんの例のアレか……最初は疑っていたが、今では私達もその感覚を信じているよ」

「ありがとうございます。……どうか彼女の要求を認めていただけませんか？出来るだけの事はします、僕はどうしても彼女を育ててみたいんです」

僕は一度頭を下げた後、顔を上げて上司達を見つめる。

「……君がそこまで言うのなら認めよう」

上司は長い沈黙の後、そう言った。

「ありがとうございます！」

僕は彼女とトップアイドルを目指せる喜びをかみしめながら礼を言った。

「ただし！目に余る問題を起こし改善しない場合は当然解雇するし、君にも責任を取ってもらう……それでもいいか？」

「はい。覚悟の上です」

僕ははつきりとそう答えた、きつと彼女は大丈夫だ。

「……そうか。では彼女の提案を受け入れ、フラワープロダクションに所属させる事を認めよう」

「ありがとうございます！」

会議室を出た僕はすぐにスマートフォンを取り出した。

早速彼女に連絡をして時間を取って貰い、現在の彼女の實力を確かめなければ。

私の出した条件が許可された、という連絡が来た。

無理だと思っていたが、プロダクション側は私に大分期待している様だな。

ついでに次の予定も聞いた、今の實力を見るためにプロダクションに来て欲しいらしい。

時間がある日を聞かれたが、いつであつても大抵は問題無いと答えた。

連絡を終えた後、娘達にはフラワープロダクションでアイドルになる事を伝えた。

娘達の意見は様々で、私なら簡単にトップアイドルになれると言う者もいれば、私と人類の感覚の違いで何か起きそうだと考える者もいた。

それから娘達は年末年始はどうなるのかと尋ねて来たが、私が年末年始は仕事はしない事を話すと全員安心した様に微笑んでいたな。

娘達は何かあつたら協力すると言ってくれた。

それを聞いた私は娘達に礼を言い、しばらく共に時を過ごした。

現在、私はフラワープロダクションの前に居る。

車を降りてプロダクションに入り、受付でダンススタジオの場所を聞く。

途中ですれ違う者達が私を見て来るが、いつもの事だ。

扉をノックし、返事を待つ。

「どうぞ」

私がダンススタジオに入ると、そこには一人の女性がいた。

「……あなたがクレリア・アーティアさん？」

何やら驚いているな。

「そうだ」

「始めまして、ダンスインストラクターの畑野 麗香（はたの れい）かよ。これから少し動いて貰って貴女の実力を見るから」

ダンスか……やり方さえ覚えれば苦労は無さそうだが、やってみないと何とも言えないな。

「よろしく頼む」

「それで、事前に伝えておいた物は持って来た？」

「Tシャツとジャージ、ダンスシューズ、タオルと飲み物だったな？
持って来たぞ」

軽く持ち上げた鞆を見て麗香は頷く。

「向こうに更衣室があるから着替えて来て、急いでね」

「分かった」

更衣室に向かい手早く着替え、鞆を隅に置いてから麗香のもとに向かう。

「じゃあ、簡単な物からやって見ましようか。私が手本を見せるから、まずは真似してみて？アドバイスはするから出来るだけやってみて頂戴」

「やってみよう、手本を見せてくれ」

私が答えると、鏡になっている壁の前で麗香が簡単な短いステップを見せてくれる。

麗香に促され、私はそれを真似してみる……特に問題無いな。

「初めてにしてはいいわね、どこまで出来るか少しずつやってみよう」

「分かった」

「はあ……はあ……嘘でしょ……？」

私の目の前ではクレリアさんが激しく踊っている。

始めてから少しずつつ難易度を上げて行っただけだけど彼女はそれを苦も無くこなし続け、今は私の全力のダンスまでこなしている。

私と同等……いえ、しつかり評価しないと。

……悔しいけれど私よりも遥かに動きが良い。

文句のつけ所が見当たらないわ……。

それに全く疲れも見えない……何なの彼女は……？

プロデューサーから実力を見て欲しいと頼まれて来たけれど……

普通じゃないわ。

「はいーそこまでー！」

私は内心を押し殺してダンスを止め、彼女に尋ねた。

「クレリアさんはダンスを小さい頃からやっていたの？何処かで活

動していた事は？」

彼女の本当の年齢はプロデューサーから聞いている、これだけの力があるのなら幼い頃から何かやっていたに違いない。

「ダンスは今日が初めてだな、活動していた事は無い」

「……嘘つかないで頂戴。あれだけ出来て初めてな訳が無いでしょ

う？何で嘘をつくの？」

「嘘はついていない。信じられないなら信じなくてもいいが、調べれば分かる事だろう。こんな事で嘘をついてどうするんだ？」

……確かにそんな嘘についても意味なんて無いわね。

それに彼女程の実力者がどこかで活動していれば間違いなく話題に上がるはず……でも、そんな話は聞いた事が無い。

本当に初めてなの……？正直ダンスの技術もスタミナも十分……

いえ、十分を通り越して異常だわ。

彼女の実力に軽い畏怖を感じながらも、私は彼女の限界がどこにあるのかが気になっていた。

「大分踊ったけれど、クレリアさんの限界はどこにあるの？」

私がそう言うと彼女がスポーツドリンクを手に取りながら言った。

「何処にあるのだろうか」

平然と答える彼女。

私は彼女のその言葉に何も返す事が出来なかった。

彼女は恐らく……本当に分かっていない、それはつまり……。

「一つ……聞いても良いかしら？」

「何だ？」

「今迄……限界を感じた事はある？」

「無い」

その言葉を聞いた時、世界には常人では理解出来ない才能と力を持った者が居るのだと悟った。

こんな人間が……本当に居るのね。

冷静にそんな事を考えながらも、私の体は熱くなっていく。

真の才能と力をこの目で見る事が出来た事、その存在が新人としてフラワープロダクションに来た事を嬉しく感じている。

プロデューサーにすぐに今回の事を報告しないと……。

私はそう考えながらレッスンを終えた。

私はプロダクション内を次の目的地へと移動しながら考える。

麗香は間違いなく私がおかしいと思っっているだろうが、恐らく凄い人材で納得して収まるだろうと考えている。

あまりやりすぎると不信感を持たれると思うが、あの程度ならば問題無い様だ。

この後は発声だ。

ダンスの時間が少し長引いたが、予定の時間には間に合った。扉をノックすると返事があり、私はリハーサルスタジオへと入った。

「初めまして、私はボイストレーナーをしている花川 桜（はなかわ さくら）と言います。あなたがクレリア・アーティアさんね？」

黒い髪を三つ編みにした、太めのふんわりとした雰囲気的女性が私を迎えてくれた。

「そうだ」

「聞いていた通りの見た目だから一目でわかったわ、可愛らしいわ

ね……本当に26歳なの？」

「本当だ、その辺りは京介も確認している」

「凄いわねえ。……さて、プロデューサーさんに聞いてると思うけれど、今日は現在のあなたの実力を確認しますね？」

「よろしく頼む」

「よろしくね。じゃあ、ピアノの音と同じ高さで声を出してみてください
ださいね」

「分かった」

同じ高さの音を口から出せばいいだけか、問題無さそうだ。

「じゃあ順番に行くわよ……この音」

私はピアノの音に合わせて声を出してみる。

「……次」

ピアノの音に合わせて声を出していく。

「良いわね」

ピアノを弾いていたからか、こういった事はそれなりに分かるな。
しばらく指示通りに声を出した後、そのまま帰って良いと言われた
ので待機させておいた迎えを呼び出して帰った。

クレリアさんが退室した後、私は彼女の实力に興奮していた。

「声質も素晴らしい……でも、それよりも注目するべき所がある
わ！」

それは彼女の音域。

彼女は人の可聴域全ての音が出せていた。

つまり、10から11オクターブの声域を持つ事になる。

生理的には可能であるという話は聞いた事があるけれど……本当に
にいるなんて！

平然と低音から高音まで出したから驚いたわ。

それに全く音が外れない……ピアノを弾けると言っていたけど、そ
の影響かしら。

素質はこれ以上無い、と言える程ある。
トレーニングでどこまで行くのか……期待が膨らむわね。

僕はクレリアさんに関する報告をデスクで読んでいた。

麗香さんと桜さんをお願いして、それぞれ彼女のダンスと歌が現時点でどれほどの物なのか確かめて貰ったんだけど……予想を遥かに超えた結果になった。

ダンスは僅かな時間で麗香さんを超えてしまい、歌の方も恐らく人類初の声域保持者だと言う。

特に麗香さんの報告書には「真の天才とは彼女の事だ」と記載されている。

凄まじい才能に体が震え、気持ちが高まっているのを感じる。

彼女が歴史に名を残すアイドルになる事は疑いようが無い。

だが、それは僕が足を引つ張る事が無ければの話だ、さて……彼女の足を引つ張らない様に僕も色々やらないとね。

報告を読み終わると、僕はこれからの事を考え始めた。

ダンスと歌のテストの様な事をしてから三日後、私はフラワープロダクションへと呼び出された。

今後の方針と予定を決める話し合いをしたいと言う。

言われた時間より少し前に来たが、プロダクション前には京介が待っていた。

私は車から降り、夏の気温を感じながら京介の所へ向かう。

「おはようございます。クレリアさん」

「おはよう」

仕事などの場合は時間に関係なく「おはよう」と言う事は聞いてるので、彼に合わせて挨拶をする。

「早速ですが会議室を取っているので向かいますね」

私達はフラワープロダクションに入って行った。

私達はフラワープロダクションの一室で座っている。

「今日はクレリアさんのこれからについて話し合いますが、その前に……クレリアさんがこちらに時間を合わせてくれるのは助かりますが、無理はしていませんか？」

京介は私の事を気遣っている様だ。

ふむ……これは私の表の立場をある程度話してしまった方が良くかも知れないな。

彼もこういった世界に居るのだから口は堅いだろう、もし言いふらすようならこちらも相応の対応をすればいい。

「京介には話しておくが、私は金に困る事は無く、時間に追われる必要も無い立場にいる」

「それは……お金持ちと言う事でしようか……？」

私の言葉に彼は困惑した表情で聞いて来る。

「月下グループの一族と言えれば分かるか？」

そう言った瞬間、京介の顔が驚きに染まる。

「それは……問題は無いのでしょうか？」

ただでさえ丁寧だった彼の口調が、より堅苦しくなるのを感じる。

「敬語は必要無い。家族には既に芸能界に入る事は話してあるし、応援されているから問題無い」

「そうですか。わかりま……分かった。それなら問題は無さそうだね」

私の視線を受けた彼は言葉を崩し、私にばれない様に溜息を吐く。その後、彼は口元に手を当ててやや俯き、話し始める。

「だけど……この事は誰にも知らせない方が良いかな。月下グループの力で優遇されていると思われるかもしれない」

「そうかもな。その辺りの判断はお前に任せるよ」

「デビューして十分に人気を得た後になら問題無いと思う。この事実を使うかはまだ分からないけど……今は上層部にも秘密にしておいた方が良いかな……」

彼は顔を上げて私を見た。

「これを知れば上層部はきつと利用すると思うし……あ、悪い意味じゃないからね？……それに、僕はクレリアさんの実力だけで全く問題無いと考えているから、使いたくないんだ」

「そうか」

「取り敢えずその事は誰にも話さないで欲しい、聞かれたら誤魔化してくれないかな？」

「宝くじに当たった事しておく」

「大丈夫かな……」

私の返事に不安そうな顔をした京介だが、すぐに真剣な表情に戻る。

「さて……予定外な事があつたけど、ここからは最初に話した通りこれからの事を話しておくよ」

京介から伝えられたのは既にデビューは決定していて、2013年中にシングルを出す予定である事。

曲のイメージは出来るだけ私の性格や雰囲気合った物を用意するつもりでいる事。

歌でファンを獲得して行き、ライブが出来る様になったら、ダンスで更に上を狙っていく事。

時間がある時は出来るだけプロダクションに来てダンスや歌の自主練習をして欲しい事、など聞いた。

私は時間的には何もなければ毎日来られるのだが、やりすぎると違和感があるだろうか？

「毎日来てても問題無いのか？」

そう尋ねると、京介は少し考えてから答える。

「うーん……こちらが組んでいるレッスンの日以外に自主練習している子も結構居るから、他のアイドル達と共同でスタジオを使う事になるけど、それでもいいなら自由に自主練習用のスタジオを使って構わないよ。ただし、絶対に無理はしない事。インストラクターや僕が止めたら素直に聞く事、これは守って欲しい」

アイドル候補達が潰れては困るだろうからな、その辺りは当然気を

遣うか。

「分かった」

「もちろん練習以外でも来て構わないからね」

「そうか」

私がそう答えると、京介が次の話を始めた。

「クレリアさんの話し方はこちらで指定した事にしておいたから」

「どういう事だ？」

「クレリアさんは誰に対しても態度を変えないでしょう？それに対する対策かな。クレリアさんの意思では無く、プロダクションの方針として常にキャラを作るようにしている……という事にしたんだ」

「無理がありそうだが」

「アイドルがキャラ付けをする事は珍しくは無いよ。ただ、オフでも常にキャラを維持するのは珍しいかも知れないね。でも、これでクレリアさんはそのままできっと大丈夫なはず」

私の態度で私が不利益を被らない様に考えてくれた訳か。

「手をまわしてくれたのか、ありがとう」

感謝するなら態度を変えて欲しいと思っっているかも知れないが、私は態度を変える気は無い。

上手く行くと良いな。

「どういたしまして」

私の言葉に京介は笑った。

正式にフラワープロダクションに所属した私の担当プロデューサーは京介になった。

所属してから私は頻繁にフラワープロダクションに来ていたが、京介は私が訪れる度に会話の時間を取り色々話をしていた。

「京介は私とよく話しているが、何か目的があるのか？」

プロダクション内のカフェで話している私は、正面に居る京介に問う。

「勿論、クレリアさんがどういった人なのか知る為だよ。曲やダンスも出来るだけクレリアさんのイメージに合った物にしたいからね」なるほどな。

「それで？今までで何となく分かったか？」

「んー……自分にとつて大事な事は決して譲らず、邪魔したりする相手には容赦しない感じかな？でも、気を許した相手にはかなり甘い。まだあまり付き合いは長くないけど……どうだろう？思い当たる事はあるかな？」

「あるな」

私は分かりやすいのだろうか。

大体合っていると思う。

そういえば、千穂達が言っていたな。

私は不愛想で近寄りがたい雰囲気を持っているが、一度分かるようになれば色々と分かりやすい……と。

誰もがそう感じるとは限らないが、少なくとも現在の友人達がそう感じている事は確かなようだ。

それでもこの短期間でここまで言い当てられるとは、素晴らしい観察眼……と言えば良いのだろうか？

「あと、僕から見るとクレリアさんは……キャラ的に言えば、何があつても冷静な無表情系かな」

色々と考えていると、京介が再び話し出した。

表情の変化が乏しいのは自覚しているが、無表情では無い筈だ。

「何があつても冷静という部分は合っているかも知れない。だが、私は笑ったりもするぞ？実際に家族と居る時は笑っている、表情があまり大きく変化しないだけだ」

「クレリアさん、そういう人を一般的には無表情と言うんだと思う」私は無表情では無いと思うのだが、人類的にはそうなってしまう様だ。

「そうなのか、ではその冷静な無表情系で売り出すのか？」

「今の所そのつもりだけど……クレリアさんは今の状態が素だよな？」

京介はそう言って手元のコーヒーを一口飲む。

「今更何を確認しているんだ？」

「うん、そうだよね……全くブレないし本当にそれがクレリアさんの素なんだね」

突然、今更な事を確認してくる京介に答えた私は、コーヒーミルクを口にする。

仄かな甘さと程よい苦みが口に広がる。

「……さて、僕はそろそろ行くよ。他の子の様子も見ないといけな
いから」

「分かった、私はダンスの練習をしてから帰る」

「何か予定が変わる時は連絡するからね」

そう言って京介はカフェを出て行く。

飲み物を飲み終わったらスタジオに行くか。

そう思いながら残っているコーヒーミルクを飲んだ。

カフェを出てダンスの練習をするためにスタジオに行くと、数人が分かれて練習をしていた。

全員、動きを確認しながら汗を流している。

私は更衣室でトレーニングウェアに着替えた。

そして鏡の前へ立つと、以前映像で見たダンサーのダンスをコピーして踊り始める。

フラワープロダクションに所属してから私は家で様々な映像を見た。

今までやった事は無かったが、ダンスや歌の技術を覚えるのは簡単だったな。

元々、人類と能力が大きく違う私はダンスは簡単だろうと予想していた。

問題があつたのは歌の方だ。

声自体は出したい様になるので問題は無かったのだが、トレーナーが言うには私の歌には感情が入っていないらしい。

私に喜怒哀楽の内、哀の感情が存在しない事は気がついていたが、それ以外の感情はある。

しかし、それらも全く入っていないらしい。

原因は分からないが……私は歌に感情が入りにくいらしいな。

トレーナーは「感情の無い歌声も武器になる」と言っていた。

だが、出来るなら出来た方が良いのは間違い無いだろう。

そんな訳で、今は東京の自宅にダンスと歌を練習するスタジオをそれぞれ作らせている。

完成したら歌に感情を入れる訓練をする予定だ。

そんな事を考えながら、私は途中からアクロバットを混ぜて行く。

初めて見せた時は麗香も京介も驚いていたが、行っているのは人類が出来る範囲の動きだ。

人類の限界を超えている訳では無いのだから問題無いだろう。

ただし、京介から「歌いながら踊る場合はそこまでしないよ」と言われたので、この先も行う事は無いかも知れない。

私や娘達からするとこれでも児童戯に等しいが、人類は違うという事も理解している。

実際、先程からかなり注目されているようだからな。

この辺りでやめておこうか。

私が練習中に突然凄い美少女が入って来た！

思わず二度見しちゃったよ……。

幼い子供の筈なのに、美しさのせいなのか人を寄せ付けない雰囲気を感じる……。

気が付けば、他の練習していた子達も彼女を見て固まってる。

あれだけの美貌だもん……分かるよ、その気持ち。

トレーニングウェアに着替えた彼女は鏡の前に立つとダンスを踊り始めた。

私は見とれてしまった……。

技術、キレ、動きの正確さ……何もかも完璧としか思えなかった。

いつもダンスを見てくれている先生よりも……ううん……今まで見た誰よりも凄いと感じた。

しばらく踊っていた彼女だが、やがてダンスに様々なアクロバットが追加されて行く。

何その動き!?

結局……私は彼女が踊り終え、服を着替えて出て行くまで……練習もせずただその姿を見ていた。

私はその後、彼女が最近スカウトされた新人のクレリア・アーティアさんだと知った。

更に彼女が26歳だという事を知る。

……今まで生きて来て最大の衝撃だった。

自宅に帰り、月へと移動した私は娘達と浜辺で夕食を取っていた。カミラと四姉妹は私の前で串焼きを食べながら語り合い、他の娘達やジャンヌも交代で会話に入り楽しんでいる。

信長は今も地球にいるようだ。

「お母様、聞きたい事があるの」

娘達を見ている私に、カミラが話しかけてくる。

「何だ？」

「アイドルになったという事は、場合によっては顔と名前が世界中に知られる事になる訳よね？それでも構わないの？」

以前の私であればまずしなかつた事だ、カミラが尋ねて来るのも当然か。

「確かに以前までそういった事は避けて来たが、それでは出来ない事もあるからな。人類だと思われたままであれば、顔と名が売れる程度は気にしない事にした。いざとなれば姿を消して数百年も経てば人類は忘れるだろうし、例え誰かが覚えていたとしても同一の個体とは思わないだろう。何か気になる事でもあるのか？」

「いいえ、念の為に聞いておきたかっただけ。……デビューして有名になった時は、お母様の正体を知っている一部の人間が驚きそうね……ふふっ」

カミラは楽しそうに笑っている。

そう言えば、一部の人間は私の事を知っているのだったな。

カミラの言う通り、もし人気が出る様な事があればかなり広く私の事が知られる筈だ。

そして、それがその人間達に届いた場合、恐らく私だと気付くだろう。

「まあ……私達の正体を知っている人間達も余計な事はしなないと思うから、お母様はアイドルを楽しんで頂戴」

私が考えていると、カミラが微笑んで言う。

「ありがとう、お前達もやりたい事は出来ているか？」

「結構みんな好きなように過ごしてるわよ？問題は起きそうになってもしつかり処理しているし」

「そうか。改めて言うまでもないかもしれないが、手に負えない時はすぐに私に知らせるようにな」

「ええ、その時はすぐに連絡するわ」

「主様！カミラ様！一緒にゲームしようよー！」

ミツハの声が聞こえ顔を向けると、娘達が私とカミラを見ている。

「行くか」

「そうね」

私とカミラは顔を見合わせて言葉を交わし、彼女達の輪の中に入っ
て行った。

フラワープロダクションに所属してから約二か月が過ぎ、九月に
入った。

自宅のスタジオが完成してからは、そこで主に歌の練習を行ってい
る。

現在は宣伝材料用写真などの撮影も終わり、フラワープロダクショ
ンのホームページに私のプロフィールが作られている。

八月に入ってデビュー曲が完成すると、周囲が本格的に動き始め
た。

練習で初めてデビュー曲を歌った時、私の歌声に文句のつけ所は殆
ど無かったらしく、細かい調整のみですぐに収録へと移った。

それからジャケットの撮影やミュージックビデオの撮影などを行
い、その映像の一部はyoutube（ニューチューブ）にも投稿さ
れた。

デビュー前の宣伝活動の一環らしい。

私のデビュー曲は「ヴァイオレンス」と言う。

イメージとしては、立ちふさがる敵を楽しみながら力で薙ぎ払い進
む少女の姿を歌っている曲……だろうか。

「どうやら私は周囲から大分攻撃的に見られているらしい。そんな事は無いと思うのだが。」

この様に最近色々忙しく、暇があつたのは最初の一月程だけだったな。

この二か月の間に大きく準備が進み、デビューシングルが発売される2013年9月19日が近づいていた。

現在、私は久しぶりに自宅で友人達とくつろいでいる。

「本当にアイドルになるなんてね……昔、千穂が話していた事が本当になるなんて思わなかったわ」

コーヒーを飲みながら言う美琴。

「クレリアちゃんが芸能界入りかー。俺と共演する事もあるかもな」

美琴の隣で私を見ながら太一が言う。

「ニューチューブにあつたミュージックビデオ見たよ！凄かった！」

「千穂、興奮しすぎ……まあ僕も凄いと思ったけどね」

興奮している千穂をなだめながら話す良平。

「ありがとう」

私は牛乳を飲みながら答える。

「凄く話題になってるよ？並ぶ者が居ない世界最高の美貌と、驚異の歌声を持つ新人がデビューするって」

千穂がそう言うと、三人は頷いている。

「そうか、それならばある程度は人気を得る事になりそうだな」

「ある程度……って、クレリアちゃん自分のミュージックビデオは見てないのか？」

太一が私に聞いて来る。

「自分の姿に興味は無いからな」

「普通は気になって仕方ない筈だけど……クレリアちゃんだから」

なあ……」

私の言葉を聞いた太一が苦笑いしながら言う。

「クレリアちゃんは今まで歌を歌った事が無かったのよね？歌ってみた感じはどう？大変だった？」

美琴の質問に、私は感じたままを話した。

「大変だと感じる事は無かった、やって見れば特に苦勞無く声は出たからな」

「クレリアちゃんは歌も簡単かー」

千穂が何処か納得した様に言う。

「ただ、何も問題が無かった訳でも無い」

「そうなの？」

「苦勞したと言えるのは、歌に感情を入れる事だな」

「なるほど、感情ねえ……」

歌に感情が入っていないと言われてから私は自宅のスタジオで訓練を繰り返し、歌に感情がある程度入れる事が出来るようになった。

それでも薄いらしいが「それが良い」と喜ばれたな。

だが、今でも恋愛感情や悲しみ、苦しみなどを表現する歌には感情を入れる事が出来ない。

男女間の恋愛感情や、悲しんだり苦しんだりする感覚を他者から感じる事は出来る。

しかし、感じる事で何となくは分かってても、元々それらは自分の中に存在していない物だ。

恐らくだが、私が本当の意味でそれらを理解していない事が原因では無いかと思っている。

特に恋愛感情は今まで多くの恋人達や夫婦と関わっているにも拘らず、未だに分かっていないからな。

私が特に分かりたいと思っていないからかも知れないが。

その様な状況の為、私は基本的に感情を入れる事が出来る歌を歌う事になった。

感情が入っていないなくても良いのなら、今後恋愛などを題材にした歌を歌う事もあるかもしれない。

そういった感じの事を簡単に話すと、良平が穏やかな声で言う。

「クレリアちゃんも苦手な事があるんだね」

「私は完全無欠という訳では無い、苦手な事もあれば苦勞する事もある」

「例えばどんな事？」

「恋愛相談だな」

私がそう答えると、良平は不思議そうな顔をする。

「クレリアちゃんは僕と千穂の仲を助けてくれたよね？」

「人との生活の中で数多くの恋愛を見て来たからな、それを参考にしているだけだ」

「そう言えば、前にクレリアちゃん言ってたね『人間に近い感情を持つていても同じでは無い』って」

「そうだ。私達がどんなに人の様に見えたとしても、実際は人では無いという事を忘れるなよ？こうして穏やかに過ごしている内は分からないかもしれないが、決定的に違う部分が存在する筈だからな」
私がそう言うと、黙って聞いていた千穂が割り込んでくる。

「そんな事どうでもいいよ……私はクレリアちゃんの事が大好きだからね」

彼女は微笑みながらそう話した。

「私だっけそうよ？」

美琴もそう言っただけで微笑む。

微笑む彼女達から感じる気配は、とても穏やかな物だった。

【必見】 凄いアイドル見つけた

1：名無しのアイドル好き

凄い新人を発見してしまった。

nyutube

2：名無しのアイドル好き

新人？

3：名無しのアイドル好き

ニューチューブにミュージックビデオが投稿されてる新人の子
じゃね？俺も見て即ファンになった。

4：名無しのアイドル好き

クレリアちゃんだろ？ここ以外でも結構話題になってるぞ？

5：名無しのアイドル好き

今見てる。何この子？可愛すぎるんだけど？歌もダンスも顔も最
高とか……最高かよ！

6：名無しのアイドル好き

ただし無表情である

7：名無しのアイドル好き

馬鹿野郎！それが良いんだろうが！そのまま踏まれたい！

8：名無しのアイドル好き

お巡りさんこいつです。

9：名無しのアイドル好き
あ、俺がお巡りさんなんで

10：名無しのアイドル好き
警察の闇を見た

11：名無しのアイドル好き

奴は同業者に任せよう、一応書いておくと彼女は……。

フラワープロダクション所属の新人アイドル。

無表情のクール系。

今までのアイドルを遥か彼方に置き去りにする美少女。

ミュージックビデオで分かる通りの人を引き付ける声質、圧倒的な歌唱力とダンス。

デビュー曲は「ヴァイオレンス」、2013年9月19日発売予定。
あつという間に日本のアイドル界でトップになり、世界へと羽ばたき伝説になる。

12：名無しのアイドル好き
最後w

13：名無しのアイドル好き
最後願望じゃねえか

102：名無しのアイドル好き
デビュー曲並んどかないと買えなくなるかな？

103：名無しのアイドル好き
流石にそれは無いんじゃない？

104：名無しのアイドル好き

分からんぞ？今凄い勢いで知名度が上がってる。まだ発売まで時間があるからどこまで広がるかも不明だし、もしかするともしかするぞ。

105：名無しのアイドル好き

マジか……

106：名無しのアイドル好き

この子をスカウトしたプロデューサーとここまで力を入れて宣伝したプロダクション有能。

107：名無しのアイドル好き

いつから所属してたのかは知らないけどあの容姿と実力ならプロダクション側も力入れるだろ、俺だってそうするわ

108：名無しのアイドル好き

その事なんだけど情報があつてな？

109：名無しのアイドル好き

どの事？

110：名無しのアイドル好き

所属した日の事。彼女を知っている他のアイドルのブログに書いてあったけど、スカウトされたのは今年の七月あたりらしいぞ

111：名無しのアイドル好き

はあ!?!じゃあまだ二か月くらいしか経ってないのかよ!?

112：名無しのアイドル好き

所属した年、間違えてるんじゃないかね?本当は去年とかさ……それでも

すごいけど

113：名無しのアイドル好き

いや、ブログで突っ込まれてたけど今年で間違いないって書いてたよ

114：名無しのアイドル好き

嘘だろ？……ひよつとしてどこかで活動してた？

115：名無しのアイドル好き

そう思っただけも調べたけど……あれだけ目立つ容姿なら少なからず話題になるはずだろ？でも何も見つからないんだよな

116：名無しのアイドル好き

じゃあ二か月であそこまでになったか、元からあれだけ出来たって事か……？

117：名無しのアイドル好き

フラワープロダクションには時間の流れが違う部屋があっただろ？

118：名無しのアイドル好き

そこでは一日で一年の……

119：名無しのアイドル好き

そしたら彼女は成長して大人になってるな。

120：名無しのアイドル好き

数年なら変わらないかもしれないだろ！

121：名無しのアイドル好き

子供だからこそ数年で大きく変わるんだよ

122：名無しのアイドル好き
彼女の实力が謎になってしまった

123：名無しのアイドル好き
ギフトッドとかじゃね？

124：名無しのアイドル好き
何それ？

125：名無しのアイドル好き
えつと……：先天的に平均より、顕著に高度な知的能力を持っている
人のこと。または先天的な平均よりも顕著に高度な知的能力を指す
……とウイクペディアには書いてある。

126：名無しのアイドル好き
生まれつき頭がいい子供じゃなかったっけ？

127：名無しのアイドル好き
一応色々な分野に居るらしいけど……歌やダンスにもあるかは知
らん

128：名無しのアイドル好き
もしあったとしても歌とダンスの両方についてあるんですかねえ
……？

129：名無しのアイドル好き
容姿もギフトッドである可能性も……？

573：名無しのアイドル好き
衝撃の情報が公式に公開されたぞ！

574：名無しのアイドル好き
お、どうした？

575：名無しのアイドル好き
クレリアさんの年齢だ

576：名無しのアイドル好き
何で急にさん呼びw

577：名無しのアイドル好き
26歳だった

578：名無しのアイドル好き
は？

579：名無しのアイドル好き
クレリアさんは26歳だった

580：名無しのアイドル好き
マジ……？

581：名無しのアイドル好き
今見たらマジだった！公式に年齢追加されてんじやん！

582：名無しのアイドル好き
いやいやいや！あの見た目で26はねえよ！二次元かよ!?

583：名無しのアイドル好き

クレリアさんはロリババアだった？

584：名無しのアイドル好き
ぶち○すぞ

585：名無しのアイドル好き
表記間違い……？

586：名無しのアイドル好き
間違いじゃないっぽい。

587：名無しのアイドル好き
でもこれで謎が解けた、子供の頃から歌とかダンスとかかしてたんだな。それでもおかしい実力である事は変わらないけど。

588：名無しのアイドル好き
あーなるほどね。俺達子供だと思ってたからな、26なら納得……
出来無くもない……かな？

589：名無しのアイドル好き
年齢に対して何か他に無いのかロリコンども

590：名無しのアイドル好き
正直あそこまで美少女だと実年齢はどうでもよくなる

591：名無しのアイドル好き
それな、リアル二次元キャラじゃん

592：名無しのアイドル好き
しかし実際彼女のあの姿はどういう事なんだ？

593：名無しのアイドル好き

一応年をとっても成長しない病気はあるけど……それとは違うように感じるんだよな

594：名無しのアイドル好き

違うとは？

595：名無しのアイドル好き

病気の人はどうしても体のバランスがおかしくなるんだけど……クレリアさんは綺麗すぎるんだよな。上手く言えないけど本当に二次元キャラのロリババアそのままに見える、人としては美しすぎるんだよ。

596：名無しのアイドル好き

何となくわかるわ。成長してあの姿になったんじゃないよ、あの姿で完成されたままずっと生きてる感じ。

597：名無しのアイドル好き

二次キャラがそのまま三次元化した状態。

598：名無しのアイドル好き

そのままは気持ち悪いだろ、二次元の魅力を残したまま三次元に出て来たと言え

599：名無しのアイドル好き

何か納得した

818：名無しのアイドル好き

俺ミュージックビデオループしてるわ

819：名無しのアイドル好き

これだけ完璧な26歳の美少女を見て世の女達や他のアイドルは
どう思うのか

820：名無しのアイドル好き

いじめが起きそう

821：名無しのアイドル好き

そんな事する訳無いだろ

822：名無しのアイドル好き

意外とドロドロらしいぞ？

823：名無しのアイドル好き

売り出し方を見る限り彼女はクールで精神強そうだけど、多分キヤ
ラ付けだろうし本当はどうだか分からないから潰れないと良いな

824：名無しのアイドル好き

せやな、プロダクション側がしっかり守ってくれればいいけど。

825：名無しのアイドル好き

これだけの才能をそんな事で無くしたくないだろうから大丈夫だ
ろ

826：名無しのアイドル好き

この見た目で26とかキモイ

827：名無しのアイドル好き

あ、アンチさんちわつす

828：名無しのアイドル好き
彼女のアンチは少ないらしいけど、ゼロじゃないからな

829：名無しのアイドル好き
他のアイドルのファンとかが「敵を知る為」とか言つて調べて彼女の魅力に引っかけかかっているらしいし、恨みは買っているかも

830：名無しのアイドル好き
わろたw

831：名無しのアイドル好き
それ以外にも興味を持った人がどんどん増えてて既に検索ランキングに入ってる。

832：名無しのアイドル好き
マジで入ってるやん、まあ見た目と年齢のギャップ凄いな

833：名無しのアイドル好き
検索に「ク」って入れたら「クレリア 情報」とか「クレリア 年齢」とか出て来たわ

834：名無しのアイドル好き
これからの活躍が楽しみだ。個人的にはラブソングとかも歌って欲しい。

835：名無しのアイドル好き
テレビに出たらどんな性格か分かるかな？普段は普通なのか、本当にクールで無表情なのか。

836：名無しのアイドル好き
どっちも捨てがたいが俺としてはあのままが良い、キャラ付の偽物

じやなく素であの方が良い。

837：名無しのアイドル好き

多くのアイドルはファンに愛想を振り撒いてるからな、一人くらいこんなアイドルが居てもいい。

838：名無しのアイドル好き

新しいアイドルの道を開拓したのか

839：名無しのアイドル好き

一応以前にも似たような路線のアイドルはいたのよ、人気出なくて消えちやっただけ。

840：名無しのアイドル好き

今思えば彼女には何もかも足りてなかったんだな、実力と美貌がクレリアと同じくらいあれば売れてただろ

841：名無しのアイドル好き

辛辣う！

842：名無しのアイドル好き

そのアイドル知ってる、俺は中途半端な感じで駄目だったな。キラがブレてなければもう少し行けたかもしれないけど

843：名無しのアイドル好き

顔と実力があればマイナスもプラスに変わる

844：名無しのアイドル好き

アイドルは見た目と実力だから仕方ない。

845：名無しのアイドル好き

アイドル以外も見た目と実力やぞ、性格悪すぎたら分からんけど

846：名無しのアイドル好き
俺達にも見た目と実力があれば……

847：名無しのアイドル好き
やめろ、死にたくなるだろ

848：名無しのアイドル好き
クレリアちゃんならきつと追い打ちをかけてくれるぞ！

849：名無しのアイドル好き
今のイメージだけだと凄く言いそう。

850：名無しのアイドル好き
俺達はほら……性格は良いから……

851：名無しのアイドル好き
真のファンはアイドルに恋人が出来ても祝福出来る者だ

852：名無しのアイドル好き
無理だわ、851のファンやめます

853：名無しのアイドル好き
俺もやめます

854：名無しのアイドル好き
俺も

855：名無しのアイドル好き
俺も

856：名無しのアイドル好き
まさか851はアイドルだった……？

私がデビューしてから約一か月が過ぎた。

10月になり、季節は夏から秋に変わりつつある。

アイドルとしての私の人気は悪くない様だ、京介からは今までに無い素晴らしいスタートだと聞いている。

事前の宣伝効果があつたのか、デビュー曲が発売された当日に店頭を用意していた分はあつという間に売り切れたらしい。

そして買えなかつた者達が騒ぎを起こし、それがニュースに取り上げられた事で更に知名度が上がる事になった、と関係者が言っていた。

予想外の出来事で想定よりも知名度が上がる事になったが、そのおかげで発売から今まで日本の音楽ランキングで一位を取り続けている。

この結果に、関係各所は大喜びしているようだ。

デビューして一か月でそれなりの知名度を持つ事になった私は、自分が人類にこれほど受け入れられるとは思っていなかったため内心では少々驚いている。

ファンが私の事を人間だと思っているからこそその反応だとは思いますが……千穂は「当然の結果！」と胸を張っていたな。

現在、私は当選したファンとの握手会の準備中だ。

スタイリストのされるがままになり、色々と整えて貰っている。

私は今日一日で一部千人のファンとの握手を、休憩を挟みながら十回行う。

つまり、合計一万人と握手をする事になる訳だな。

京介の話によると、実際は一万人の制限をかなり超える応募があり、会場でも当選しなかつた客との問題が少々あつたと言う。

握手の為になぜそこまでするのか私には理解出来ないが……きつと彼らには大きな意味がある事なのだろう。

私は握手会の話がされた時、今後のサイン会の為にサインを作って

おいて欲しい、とも言われていた。

今回の握手会でサインをする予定は無いが、既に崩した日本語表記の私の名前に極簡単な魔法回路を組み込んだサインを作っている。

勿論、このサインは実際に効果を発揮する。

魔力を持つ者が魔力を通せば文字が輝くように作ったが、いつか輝く日が来るのだろうか。

「……プロデューサーさん。やっぱりメイクはしない方が良いと思います」

色々と考えながらされるがままになっていると、私の隣にいるメイク担当の女性が京介に話しかけていた。

「そうですか……わざわざ来ていただいたのに申し訳ありません」

「いえ、それは構わないのですけど……凄いですね彼女。本当に26歳なのかと疑います、今までこんな美少女見た事無いですよ。何より……すっぴんがメイク後を上回っているなんて……初めての経験です」

彼女はそう言いながら私のメイクを落としていく。

「彼女はメイクでこれ以上美しくするのは無理だと思います。出来るとしたら雰囲気を少し変える事くらいでしょうか、ワイルドにしたり、優しそうにしたり……」

「なるほど……。今回はこのまま行く事にしますが、その時はまた力を貸していただいてもよろしいでしょうか？」

京介は彼女の話聞いて、納得した顔をしながら答えている。

「もちろんです。クレリアさんような方は興味深いですから」

特に化粧に対して興味が無い私は、黙って二人の会話を聞いていた。

やがて予定の時刻になり、握手会が始まった。

「これから応援しています！」

「ありがとう」

「あ、あの……大好きです！」

「好意を向けられるのは嫌いでは無い」

「……惚れました」

「そうか」

「クレリアさん！貴女を愛しています！結婚してください！」

「断る」

こうしてファン達からかけられる言葉に答えて行き、ひたすら数を消化していく。

向けられる感情は、男の場合は多くが恋愛感情や欲望などだった。

中には殺意を持った者も居たが、思うだけなら好きにすると良い。

女の場合は好意や憧れが多かったが、中には嫉妬や恋愛感情を持つ者達も居た。

そしてこちらにも殺意を持つ者が居たが、手を出してこないのなら特に思う所は無い。

人数は居ても、向けられる感情やかけられる言葉に大差は無かった。

悪意を持っている者達も口では応援をしていたな。

恐らく、あの場で正直に内心を言ってしまうかどうか、大体想像がついていたのだろう。

ファンと、一部のファンとは言えないような者達との握手会は周囲の協力もあり、特に大きく荒れる事無く終了した。

握手会を終えてからしばらく過ぎたある日、私は京介からフラワープロダクションに来て欲しいと連絡を受けた。

プロダクションに到着し複数ある会議室の一つに入ると、京介と見覚えのないスーツ姿の女性が居た。

「待ってたよ、座って」

席を促された私は二人の正面へと座る。

「紹介するよ、彼女は高野綾子（たかの あやこ）さん。これからク

レリアさんのマネージャーを務める事になった」

「高野綾子です。これからクレリアさんのマネージャーとして頑張らせていただきます」

彼女は立ち上がって一度頭を下げ、私をしっかりと見ながら言う。穏やかそうな印象を受ける女性だな。

「クレリアだ、これからよろしく」

挨拶を終えた彼女が座りなおすと、京介が話を始めた。

「これから行動を共にする事が多いだろうから仲良くして欲しいかな。高野さんはクレリアさんの一つ下で、年も近いから話しも合うと思う」

「京介、彼女には何を話してある？」

私は京介に確認する。

「クレリアさんの所属条件の話はしてあるよ」

なるほど、私が月下グループの関係者だという事は言っていないのか。

「そうか、苦勞を掛けていると思うが取り消す気は無いからな。上手くやってくれ」

「条件を飲んだのはこちらだからね、任せてくれ。でも、わざわざ敵を作るような事はしないでくれよ？」

京介が釘を刺すように言ってくる。

「少なくとも私からそういった事をする気は無いが……相手がどう捉え、何をしてくるかによるな」

「何だか不安だな……まあ、問題が起きない様に高野さんをマネージャーにした訳だしね。高野さん、これから彼女をよろしくお願いします。もし何かあれば、すぐ僕に連絡を下さい」

「分かりました」

「よし……クレリアさん、後は綾子さんに話を聞いて。僕は別件に出ないといけないんだ、また後でね」

彼女の返事を聞いた京介はそう言って部屋を出て行き、部屋の中には私と綾子だけが残った。

「クレリアさん、改めてよろしくお願いしますね」

綾子は微笑んで言う。

彼女は私に対して特に悪意は持っていない様だ。

「よろしく頼む。所で、早速頼みがあるのだが聞いてくれるか？」

「はい、何ですか？」

「敬語はやめてくれ。名前も呼び捨てで構わない」

「それは……分かりました。……クレリアがその方が良いというのならそうするわね？」

良いな、私の頼みにすぐに対応した。

そういえば京介も対応は早かったな。

大抵の場合は戸惑い、こうはいかないのだが……業界関係者だから、だろうか。

「何かあれば何時でも遠慮なく言ってくれ、聞くだけは聞くぞ」

「それはこれから追々話す事にするわ」

私の言葉に、苦笑いしながら彼女は言う。

「そうか。これで今日の話は終わりか？」

「いえ、まだあるわ。これからのスケジュールについての話をするわね」

「分かった、頼む」

綾子からこれからの仕事についての話が行われる。

彼女の話によると、この一か月で急激に知名度が増したせいかわりに仕事が入っているという。

「二応こっちでも仕事は選ぶようにするけど、駄目な時は出来るだけ早く言ってね？」

ある程度仕事の話をした後、綾子が確認するように言った。

「そうしよう。ただ、今の所は特に断るような仕事は無いな。他のアイドルの事は知らないが、これらはよくある仕事なのだろう？」

「そうね。よくある仕事だから、特に問題は無いと思うわ」

「問題のある仕事とはどのような物だ？」

「問題と言うか……貴女のイメージや能力に極端に合わないような仕事の事ね。例えば……クレリアは笑いを誘うのは無理よね？」

「なるほど」

それは私が出たら失敗しそうだ。

しかし、念の為に私の所まで持って来なかった仕事も簡単な一覧表などで見せて貰おうか。

彼女達が駄目だと感じてても、私がやってみたいと思う物があるかもしれない。

「取り敢えず10月は数回のサイン会と複数の雑誌の取材、11月にはいくつかの歌番組への出演があるわ。まだ慣れていないだろうから今年はこの程度に抑えたけど……恐らく来年は急に忙しくなると思うわ。覚悟しておいてね?」

「私は平気だ。むしろお前達の体調の方が問題だと思う」

不眠不休で活動出来る私に、人の身について来られるとは思えないからな。

「私は平気よ。それより……貴女の肉体的、精神的な負担を減らすのも私の仕事だから。辛い時は無理しないでしっかり話してね?」

この先、私の体と精神に負担がかかる様な事があるだろうか。

勿論、やってみなければ分からない、分からないが……恐らくこの先、肉体的、精神手な事について相談をする事は無いのだろうな、と思いつつ、彼女に返事を返す。

「分かった。お前も体調に影響が出ない様にしろよ?」

「ふふっ、ありがとう」

彼女は微笑みを浮かべながら礼を言う。

こうして、彼女は私のマネージャーとして活動する事になった。

【現在人気急上昇中の新人アイドル！クレリアさんへのインタビュー！】

——いきなりで申し訳ありません。これは聞いておきたいのですが……本当に26歳なのでしょうか？

——本当だ。国にも登録されているし、免許証も持っている。

——アイドルデビューされたきっかけは？

友人と街を歩いていたら現在のプロデューサーにスカウトされた、彼も最初は私を子供だと思っていた。

——実際にアイドルになってみて驚いた事がありますか？

皆が私の事をこれほど受け入れてくれるとは思っていなかったから少々驚いたな。

——アイドルになって大変だと感じた事は何ですか？

今の所、大変だと感じた事は一度も無い。

——好きな食べ物と飲み物は？

私が美味しいと感じる物と牛乳。

——嫌いな食べ物は？

私が不味いと感じる物。

——得意な事は？

運動。

——苦手な事は？

恋愛関係。

——好きな異性のタイプは？

恋愛感情が無いので答えられないが、友人としてなら何があっても変わらず友人で居てくれる者だな。

——クレリアさんの歌やダンスは素晴らしいですが、以前からトレーニングをしていたのですか？

いや、フラワープロダクションに所属してから初めて歌い、ダンスをした。

——2013年7月に所属してから初めて歌い、ダンスをしたという訳ですか？

その通りだ。今までそのような事はしなかったが、やってみれば簡単だった。

——これから更に人気が上がると思いますが、これから先やってみたい事がありますか？

他のアイドル達がやっている事は勿論、今まで誰もやっていないような事も一度くらいはやってみたいと思っている。

——これからの目標などはありますか？

目標は特に無いな。ただ、行ける所までは行こうと思っている。

——最後にこれを読んでいる読者の方に何か一言特に無い。

【クレリアさんについて語るスレ】

10：名無しのアイドル好き
クレリアのインタビュワーたるw

11：名無しのアイドル好き
特に無いw

12：名無しのアイドル好き
大変だと思ふ事も無く、やったら簡単だったとか……何だこの圧倒
的強者感……

13：名無しのアイドル好き
大雑把な好き嫌いと恋愛苦手アピール、徹底したキャラ作り好き

14：名無しのアイドル好き
全くブレないな……だがそれが良い。

15：名無しのアイドル好き
プロデューサーも最初は子供だと思つてたんだな

16：名無しのアイドル好き
あの姿見て26だと思ふ方がおかしいだろ

17：名無しのアイドル好き
だよなあ……

18：名無しのアイドル好き
俺も牛乳好きだよ

19：名無しのアイドル好き
そうか（無関心）

20：名無しのアイドル好き
自分を受け入れてもらえると思つて無かつたとか、悲しい過去の匂いがする

21：名無しのアイドル好き
悲しい過去（という設定）

22：名無しのアイドル好き
恋愛関係全般が苦手とか、恋愛感情が無いっていうのはやっぱり配慮してらんやろな

23：名無しのアイドル好き
恋愛はアイドルにはやっぱり難しいよな。好きなアイドルに彼氏がいたらちよつと……つてなるし

24：名無しのアイドル好き
本当のファンとは……

25：名無しのアイドル好き
それはもういい

26：名無しのアイドル好き
性格はともかく、やつぱりかわいいんだよなあ。あの姿だけで全部許しそう……というか許す。

27：名無しのアイドル好き
きつと裏では彼氏とかいるんだろなあ、下手すると既婚者である可能性もあるぞ

28：名無しのアイドル好き
うーん……プロダクション側が許すかなあ……？そんな危ない橋

渡らせないと思うけど

29：名無しのアイドル好き
もし居たらそいつはロリコン

2013年の11月に入っても、私の人気は上がり続けている。
現在、私は歌番組で歌う準備をしている。

サイン会や雑誌の取材などをこなしつつ、こうしてテレビにも出るようになっていた。

今回は同じフラワープロダクションに所属しているアイドル三人で結成された「シーレーン」と言うアイドルグループも出演している。
本番前に少し話す機会があったが、表面上は人当たりの良いアイドルとして私と話していた。

本心では私の事をあまり良く思っていないようだが。

「本番お願いしまーす！」

準備が終わった事を知らせる声とする。

私がステージへと上がると、合図が行われ伴奏が始まり……私は歌い始めた。

「いや、ほんと凄いなクレリアさんの歌は！普通は生で歌うと質が下がる物なんだけど……君は本当に変わらないね！」

番組が終わった後、私は歌番組のプロデューサーに称賛の声をかけられていた。

このプロデューサーの言っている事に間違いは無い、私は意識して行わない限り何度歌っても質がブレる事が無いからだ。

「ありがとうございます」

私の代わりに綾子が礼を言う。

「これからまだまだ新曲を出すんだよね？その時はぜひ来て貰いたい」

プロダクション側が手をまわした成果は確実に現れていた。

最初は問題視されたが、プロダクション側の方針だという事が周知され浸透すると、そういうキャラなのだ判断された。

勿論、今でも「収録外では礼儀正しくしろ」という者は多いが「そういう事はプロダクション側へお願いします」と綾子に言いくるめられていたな。

私はシーレーンから向けられる憧れと嫉妬が混ざった感情を感じながら、綾子と番組プロデューサーの会話を聞いていた。

それから私は順調に仕事をこなし、12月12日にセカンドシングルとなる「ポーカーフェイス」が発売された。

無表情な少女が、心の中で家族や友人との日々を楽しんでいる姿を表現した曲らしい。

友人達は私の現在をよく表している曲だ、と言っていたな。

幸いな事にこのセカンドシングルも大いに売れ、ファーストシングルに続きランキングの一位を独走した。

その後もテレビ番組などの仕事をこなし続け、知名度と人気は上がって行く。

そして、この頃から業界内での私の扱いが大きく変わり始める。

プロダクションの方針という隠れ蓑と想定以上に世間に受け入れた事でほぼ問題は無くなっていたのだが、更に効果があったのは急激な人気の上昇だった。

急激な人気の上昇に伴うファンの増加と、ファンの増加に伴う売り上げの増加。

そこから想像出来る今後の更なる活躍への期待が、業界関係者の口を塞いだ。

その結果、私に口出しして来る者が居なくなってしまった。

人類の趣味が多様多様な物である事は知っているが、私の受け答えが多くの人類に気に入られるとは。

今もファンは増え続けていて、シングルの売り上げも伸び続けている。

カメラを始めとした娘達は、私の外見が人類にとって非常に好ましい物であるという事と、並ぶ者が居ない実力がある事。

この二つが人気に大きく影響しているのではないかと、言っていた。

現在テレビ出演に押されて雑誌などの仕事は減っているのだが、私は水着を着る仕事が一回も無かった事に気が付いた。

綾子に理由を尋ねた所「やりたい訳では無いでしょ？」と言われ理由を説明される事は無かった。

私は特に追及する事無く引いた。

やりたいと思っていなかった事は確かだし、何より綾子が追及されたくない様だからな。

2013年の年末が近くなって来たある日、私は京介に呼ばれてフラワープロダクションへやって来た。

人気の上昇に伴い、フラワープロダクション内の私の立ち位置は以前と大きく変わっている。

簡単に言うと、周囲が新人扱いをしなくなった。

更に言えば、プロダクション内でも善意や悪意を向けられる事が増えた。

私は向けられている感情を感じながら、京介と綾子が待っている会議室へと向かう。

「いらっしやい。さて、早速だけどクレリアさんのこれからの新曲

のリリースについて話をするよ」

会議室の椅子に座ると京介が口を開いた。

「年末年始は約束通り仕事は入れていないけど、年明けからは一月に一曲、場合によっては二曲リリースしていく」

「分かった」

「クレリア、大丈夫？」

綾子が心配するが、全く問題無い。

「ファーストシングルもセカンドシングルもすぐに納得の行く完成度に出来ただろうか？時間も大してかからないから問題は無いい」

私がそう答えると、京介が微笑んだ。

「心強い言葉だね。……実際、この方針に決まったのはクレリアさんが新しい歌やダンスを短時間で高い完成度でこなせる事が理由なんだ」

「今までクレリアは疲れを見せた事は無いし、とてもスケジュール調整が楽だけど……やってみてきつかったら言っただけ、急なスケジュール調整でも何とかして見せるわ」

綾子が念を押す様に言っただけ。

「ありがとう、その時は頼んだ」

「任せて」

私の言葉に、綾子は力強く答えた。

「私自身は本当に全く問題無いが、今の彼女達にそんな事が分かる訳も無い。」

彼女は私が無理をしているのではないかと事あるごとに私を気遣い、問題が無いかを聞いてくる。

そこまで気にかけてくれる事は感謝しているが。

今はこうだが、もっと付き合えば本当に問題が無いのだと分かってくれるだろう。

千穂と美琴も似たような物だったからな。

「続きを話そうか。持ち歌を増やした後は、単独ライブの開催とファーストアルバムの発売を予定しているよ」

ライブとアルバムか、体力的に限界が無い私ならどれだけ長くても

ライブは可能だな。

「ライブは日本武道館や東京ドームも視野に入れているよ」

「その辺りは任せる、何人いようと私がやる事は変わらないのだから？」

私がそう言うのと二人は笑った。

「いやあ……本当にクレリアさんは度胸が凄いなあ……僕の方が緊張する事になりそうだ」

「私もクレリアと色々な現場に行っていますけど、彼女が緊張しているのを見た事ありませんからね……いつも私の方がハラハラして見えますよ」

緊張か……相手から感じる事はあるが、私自身はした事が無いな。

「京介、何かあったか？」

ある日、打ち合わせの為にフラワープロダクションにやって来た私は、京介の様子を見て問いかけた。

「……なんでそう思う？」

「お前、意外と顔に出るんだな」

読み取るまでも無く分かるぞ。

「例の件ですか？」

隣にいる綾子も思い当たる事があるのかやや暗い表情で言う。

「何か問題があるのか？」

「まあ……だけど、これはクレリアさんに関係する問題では無いから」

京介は軽い口調でそう言うが、表情は暗い。

「そうか」

その話はそこで終わり、私のこれからの今後についての話を始めた。

その後、一通り話し終えた京介は部屋を出て行った。

「はあ……」

残された綾子が溜息を吐く。

「何があつた？」

「いえ……クレリアに言う事では……」

「関係が無いと言うのなら他の者の前では隠し通せ。京介は表情に出ている意味が無かったが、溜息は吐かなかつたぞ」

「……ごめんなさい」

綾子は申し訳なさそうな顔をして目をそらした。

「私のマネージャーとしての仕事に影響が出ないのなら構わないが、その様子では微妙な所だな。……取り敢えず話してみろ、私は立场上どの様な話でも気にしないし、誰かに話したりもしない」

「立场上……って、クレリアってアイドルになる前は何してたの？」
そらしていた目をこちらに戻す綾子。

京介からは相手を選んで話す様に言われているが、彼女にならもう話しても構わないだろう。

「私は月下グループの人間だからな、場合によっては手を貸しても良いぞ」

「ええっ!?!」

私の言葉で綾子は珍しく大声を上げた。

「あの月下グループ!?!……本当に?」

「本当だ、京介は知っている」

「何でアイドルに?」

「やってみる気になったからだ」

「……なるほど。やる気は大事よね」

綾子は一応納得したようだ。

「きっかけは以前友人から薦められた事だ、その時から機会があればやってみても良いと思っていた。それから時が経ち、京介に声をかけられた」

「そのお友達を見る目があつたのね。今の人気を見ればそれは明らか

かでしょう、今のクレリアを見て喜んでるんじゃない?」

「今でも時々会うが、偉そうに胸を張って『当然だ』と言っていたよ」

「あはは!……いいお友達ですね」

「そうだな。彼女達は私の正体を知っても友人で居てくれた」

「……ああ、月下グループの人間だと分かればすり寄ってくる人もいるわよね」

私が言っているのは人では無いと言う事だが、綾子は月下グループの事だと思っている様だ。

問題は無いし、そのまま勘違いして貰おう。

「それで、何があった?」

綾子はどうするべきか悩む様子を見せたが、心を決めたのか話し始めた。

「実は……シーレーンの事なのよ」

ふむ……彼女達に何かあったのか。

綾子は話し始める。

少し前、フラワープロダクション所属のアイドルグループであるシーレーンはある番組に出演した。

それは勝ち抜きのアイドルトーナメントの様な物で、優勝者はスポンサーから仕事を貰える、という物だったらしい。

問題が起きたのは決勝戦の優勝判定。

明らかにシーレーンが優勢にであったにもかかわらず、優勝は相手のアイドルグループだったという。

もしも僅差であったのなら、審査員の考え方次第で負ける事はあり得るだろう。

ただ、その時は圧倒的とは言えないが、誰が見てもシーレーンが優勢であったらしい。

判定がおかしいのではないかと感じたシーレーンのマネージャーやプロデューサーも抗議したそうだが、結果は覆らなかった。

更に放送された番組の内容は編集されており、相手のアイドルが優勢に見えるようにされていたと言う。

スポンサーは大企業で、あまり騒ぐとフラワープロダクションに仕事が無くなる可能性もある。

その為、泣き寝入りするしかなくなった……という事らしい。

京介は直接関係した訳では無いが、シーレーンのメンバーと担当プロデューサー、マネージャーの頑張りを知っていて、どうにも出来ない現状に苦悩していると言う。

そして、こういった事は特に珍しい事では無いという。

綾子から話された内容はこのような物だった。

仕事を貰う立場ではどうにもならないかも知れないな。

「それで？その企業の名前は？」

私は取り敢えず問題の企業の名を聞いた。

その言葉を聞いて、綾子は固まってしまった。

「どうした？」

「……えつと……」

急に言葉に詰まり、言おうとしない。

その様子を見た私は、ある可能性に思い至る。

「綾子、正直に答えろ。問題の企業は、月下グループ傘下の企業か？」

しばらく沈黙が降りた。

「ええ……そうよ」

綾子は小さい声で肯定する。

いきなり綾子が話さなくなったのは私が月下グループの者であり、問題の企業が月下グループの傘下だったからか。

「なるほど。その企業の名前を教えろ」

「え……？ええ……分かったわ」

私は綾子から問題の企業の名前を聞き出し、その後は別の話をした。

帰りの車内で私はカミラに念話をする。

『カミラ、話がある』

『どうしたの？』

私は綾子から聞いた話を簡単にカミラに伝えた。

『……確かにその企業はうちの傘下に入っているわね。出来るだけ問題を起こすような人間は省いているけれど……全員良い人材で揃えるのは流石に難しいのよね』

確かに月下グループに所属する全ての人員を選別して選ぶのは難しそうだ。

グループ関係者の総数は知らないが、相当な人数である事は予想出来る。

『侍女隊が動き始めたから後は任せて。でも……シーレーンだったかしら？友人では無いのによく助ける気になったわね』

『私を担当しているプロデューサーとマネージャーに悪影響を与え

ている上に、問題の企業が月下グループの傘下だったからな』

『ああ……そういう事ね。でも、企業についてはお母様が気にする事無いわよ？』

『企業はついでだ。問題は京介と綾子の方だな、この二人に影響が無ければ何もする気は無かった』

『自分の担当でなくても、同じフラワープロダクションの仲間って事ね』

『だとしても、他のアイドルの問題にあれ程反応するとは思っていなかったな』

『お母様はそんな人間も嫌いじゃないわよね？』

確かに私は相手が誰であろうと純粋な好意を向けられて嫌な気分はしないし、仲間や家族を大事にする者も嫌いでは無い。

関係無い事に気を取られて本来の役割をおろそかにするのは問題だと思うが、今まで過ごした時間であの二人の事はそれなりに気に入っている。

『これからプロダクション内で何かある度にあの二人にまで悪影響が出るのは避けたいな』

『お母様の事だから、もうあの二人も友人に入っているんでしょう？』

『そうだな』

カミラにはバレているな。

いや、既に近しい者達にはバレているか。

ジャンヌには「慈悲深い」と言われ、信長にも「存外人間らしい」などと言われていたのを思い出した。

他にも信長は私の事を「人間の皮を被った神秘」や「穏やかさを纏った破滅」など、色々好き放題に言っている。

その度にジャンヌと強制的に模擬戦になっているが。

信長はどんなに軽口を言っているも、私達を侮る事が無い。

彼はこれまで過ごした時間で、私達が敵対しなければ穏やかである事を知った、と言っていた。

その後、私達がどんなに大人しく優しく見えても、決して相容れな

い種としての違いと、隔絶した力の差が存在している事も知っている、と言っていたな。

『取り敢えずこの問題はこちらで解決しておくから、もう平気よ』

『ありがとう、任せる』

『任されたわ』

私はカミラの言葉を聞いた後、念話を切った。

綾子からシーレーンの話を聞いてから約一か月が経った。

私は新曲の練習やテレビ出演などをしながら過ごしていたが、今日は自宅でテレビを見ている。

そこにはシーレーンが勝ち取ったコマーシャルが流れていた。

どうやらシリーズ構成されているようで、この後も引き続きこのコマーシャルの仕事が決定しているらしい。

その後、娘達があつという間に事実関係を調べ上げ、関係者を処分し問題は解決した。

処分と言っても殺した訳では無く、罰を受けさせ「次は無い」と釘を刺したらしい。

それに合わせて番組側は判定にミスがあつたと謝罪し、シーレーンが優勝である事を報告。

報告からしばらくは色々荒れたようだが一か月も経たない内にそれらも収まり、裏では話されていても公に話題に上がる事は無くなった。

シーレーンと競った相手のアイドル達はこの件に関わっていない事が分かっているので、現在も活動を続けている。

聞いた話だが、彼女達は優勝した時にかなり驚いていて、その驚きは演技には見えなかったらしい。

実際、彼女達は一度「優勝は間違いでないか」と確認していた様だ。カミラ達はテレビ局などの関係者にも責任を取らせた。

この内、公になった物は番組の判定ミスだけで、他の関係者は内部

で処分されている。

関係各所では突然の人事が多数行われているかも知れない。

ある日、私は京介から呼び出され仕事の話をしていただけのだが、最後に話したい事があると言われた。

「クレリアさん、シーレーンの事で何かしたかな？」

私は隣に座っている綾子を見た。

「……ごめんなさい。クレリアにシーレーンの話をしたのか問い詰められてしまって」

申し訳なさそうに謝ってくる綾子だが、口止めをした覚えもされた覚えも無い。

「気にするな。お互いに口止めなどしていないし、京介なら問題無いだろう」

その言葉を聞いた京介が私に問いかける。

「という事は……何かしたのかな？」

「何となく分かっているのだろうか？問題を起こしたスポンサーの企業が月下グループの傘下だったからな、改善させただけだ」

私の表向きの立場とあの企業の所属を知っていれば、私が何かしたという考えに行きついてもおかしくはないからな。

京介はしばらく黙り込んだ後、口を開く。

「ありがとう、僕ではどうにも出来なかった」

「月下グループ傘下の企業が原因だ、感謝される事では無い」

「それでもだよ」

「分かった。その感謝は受け取ろう」

京介はその言葉を聞いて、肩の力を抜いた。

「あっ！私もお礼を言わないと……ありがとう、クレリア」
突然綾子が姿勢を直し、私に礼を言う。

「実際に動いたのは私の家族だ、二人の感謝は伝えておこう」

「クレリアの頼みとはいえ、よくここまで動いてくれたわね……」

「私はグループの事に関わっていないが、家族からは信頼されている様だからな」

「それだけ信頼されているのにクレリアがグループの事に関わっていないのはなんでなの？」

「私がグループの事に関わっていないのは、家族全員が私に対して好きな事して過ごして貰いたい、と考えているからだ」

「……それって溺愛ごされているって事なんじゃない？」

「嬉しく思っている」

私がそう答えると、二人は笑っていた。

その後、私は帰宅し正月休みへと入る事になる。

今回も娘達と共に年を越し、2014年を迎えた。

現在私は初詣を終え、千穂、美琴夫婦と共に私の家で新年会の様な事をしている。

酒は無しなので食事会の方が近いかも知れない。

「クレリアちゃんは凄く人気出たよね、私には分かってたけど！」
皆は色々と話していたが、話題が私のアイドル活動の事へと移った。

千穂は変わらず保育士として働いている、優しく子供思いだと信頼されている様だ。

そんな彼女はそろそろ子を作ろうという話になっているらしく、妊娠後は退職し専業主婦になる予定らしい。

「そうね、テレビとかでもよく見るようになったし……曲も全部買って聞いているわよ」

美琴は小学校教諭として今も働いている、厳しくも優しい先生として生徒に慕われているようだ。

彼女もそろそろ子を作ろうと考えている様で、千穂と同じく妊娠後は専業主婦になる予定らしい。

「本当にクレリアちゃんは歌もダンスも凄いよね」

良平は雑誌編集者から月下グループが運営する大学の事務員に転職し、千穂との時間を取り戻した。

仕事にも慣れ収入も悪くない額を得ているので、子を作りたいという千穂の願いに答える事にしたようだ。

「クレリアちゃんが芸能界に入ったから一緒に仕事する事もあるかと思ってたのに……まだ無いんだよね……」

太一は俳優として一定の人気を得ている。

収入的にも全く問題無いため、美琴に子を作り専業主婦になつてくれないかと相談し、美琴が了承したようだ。

彼はどんなに仕事が忙しくても私と会う機会には必ず参加する。

愛する妻を救ってくれた事と、それによって皆の関係の崩壊を防いでくれた恩は一生忘れる事は無いそうだ。

他の三人も色々之恩を感じている様で、太一と同じく定期的に私に会いに来る。

「ドラマなどの事を言っているなら私が演じる気が無いから難しいぞ。演じる事無くそのままでもいいのなら出て構わないが」

「この先も無理かもなあ……」
がっかりしている太一に、良平が声をかける。

「非日常的なドラマとか映画ならもしかするかもね。後は作品内で「アイドルのクレリア」として出演するとか……」

「アイドルのクレリアとしてならありそうだな」

そんな事を話している良平と太一に千穂が割り込んでくる。

「クレリアちゃんはまだまだ人気が出るだろうし、出て貰うための作品が作られたりするかもよ？後は色んな所とコラボしたり！」

「今までもそういういった事はあるし……むしろ人気のあるクレリアちゃんならコラボ企画は沢山来そうよね」

美琴も千穂の言葉に乗ってくる。

「私が断らなければ、この先そういういった事もあるかもしれないな」
「絶対ある！」

千穂は胸を張って言い切った。

「そうだ、クレリアちゃんに歌の事で言っておきたい事があるんだった」

太一が私の方を向く。

「どうした？」

私が答えると彼は言う。

「クレリアちゃん歌ってる時ブレス入れて無いでしょ」

「ブレス？」

「息継ぎだよ。クレリアちゃんは呼吸が必要無いから……普段は呼吸しなくても気にする奴は居ないかも知れないけど、いつかおかしいと思われるかも知れないぜ？」

なるほど、そう言えば呼吸音が入っている歌もあるな。

「息継ぎか……忘れていたな、次からは息継ぎを入れてみるか」

「既に二曲歌ってるから、全くブレスが無い事に気が付かれてるかもしれないけどな」

太一がそう指摘するが、特に問題は無いだろう。

「大丈夫だ。出している二曲の息継ぎに気が付かれても、色々手
段はあるからな」

「こういう言葉を聞くと、改めてクレリアちゃんがファンタジー世
界の存在だと感じるわね……」

私と太一の会話を聞いていた美琴が苦笑いしながら呟く。

「美琴、人類は様々な事をファンタジー扱いしているが、全てが空想
上の存在では無いぞ」

「……問題無いなら聞かせて欲しいんだけど」

美琴は私の話に興味を抱いたようだ。

「何々？私も聞きたい！」

「何かあったの？」

そこに千穂と良平も混じって来た。

「クレリアちゃんが、人類がファンタジー扱いしている事全部が空
想上の存在では無いって言うのよ」

「本当の事があるの!?!」

「クレリアちゃんがいるし、そんな事もあるのかなって僕も想像し
た事はあるから……聞いてみたい、ワクワクするよ」

「俺も是非聞いてみたいね。クレリアちゃんが話してもいいなら、
だけどな」

美琴の言葉に反応し三人も興味を持った様だ。

「話すのは構わないが、誰にも……いや、誰に話しても問題無い。本
気にされないだろう」

「だろうなあ……」

そう言った私に太一が同意する、他の三人も同意見らしく頷いてい
た。

聞くならしつかりと聞きたいという事で、私達はまず新年会を終えた。

その後、飲み物が用意されたテーブルを挟んで、片側のソファには私、反対側のソファには四人が座る。

「さて、まずは何から話そうか……」

「はい！魔法を見たいです！」

私は何から話そうかと考えていると、千穂から魔法が見たいと言われた。

「魔法は見せていなかったか？」

「時間を止めたのは見たけど……魔法としては何か違うかなって思ってる」

千穂はそう言う。

時間の操作の方が千穂が想像していると思われるゲームの様な魔法より高度なのだが、彼女には分からないからな。

もつと一目でわかる様な分かりやすい物が見たいのだろう。

それなら始めて魔法に触れる者に見せている簡単な魔法らしい魔法を見せよう。

私は人差し指を立て、四人の前に差し出す。

「この指先の辺りを見ていろ」

そう言うと四人は私の指先をじつと見る。

「あっ!？」

千穂の驚く声を聴きながら、指先に水球を作り大きくしていく。

「すっげえ……」

「これは……凄いとしか言えないね……」

「これ……本物の水なの？」

かなり驚いている事が分かる。

今の人類には無い力と技術だからな。

「本物の水だ。今で言うミネラルウォーターの様な物だ」

「これ……触っても平気？」

千穂が身を乗り出して見ながら恐る恐る聞いてくる。

「平気だ、そのまま口を付けて飲んで問題無いぞ」
「飲む……。い……行きます」

千穂は恐る恐る水球へ口を近づけ、水を飲む。

「ぶはっ……なにこれ!?冷たくて凄く美味しい!」

そう言つて騒ぐ千穂、それを見た美琴が手を上げる。

「わ、私も飲んでみたい」

「良いぞ」

私は水球を指先から美琴の目の前へと移動させた。

「きゃあ!」

美琴は驚いて叫び声を上げる。

「そこまで驚くとは思わなかった」

「ちよつとクレリアちゃん!?やめてよね!」

私の言葉に怒る美琴。

「動かす事も出来るのか!」

嬉しそうな声を上げる良平。

「当然だ、技術があれば色々出来る。美琴、もう動かさないから飲んでみる」

「もう……んっ……」

美琴は目の前の水球に口を付けて水を飲む。

「ふう……。これ……。冷たいだけじゃなくて水自体が美味しいのね」

「私の感覚なので最高とは言えないかもしれないが、それでも出来るだけ美味しく作っているからな」

「という事は……純水とかも作れるの?」

「やろうと思えばな」

私は美琴の疑問に答える。

それから太一と良平も水を飲み、確かに美味しいと納得していた。

全員が体験し終わると私は水球を消し、四人に話をする。

「さて……お前達に見せるにあたって一番安全に体験出来る水の魔法を見せたが、魔法は扱いを間違えると非常に危険な物だ。火であれば周囲を焼き尽くし、土であれば大地を崩壊させ、風であれば様々な

物を吹き飛ばし切断する。更に凍らせたり電気を起こす事も出来る」私の言葉に四人は喉を鳴らす。

「創作物の中でも魔法で戦い、殺しあっているだろう？魔法は便利だが、基本的に危険な物だという事は覚えておいて欲しい」

使う事が出来ず、私と会うまで実在する事を知らなかった四人に言う必要は無かったかも知れないが……危険な物であるという事だけは教えておく事にした。

「……クレリアちゃんの言っている事、何となくわかる気がするわふと、美琴が呟く。

「そうだね。私はよくゲームをしてたからよく分かるよ……ゲームの様な魔法も出来ちゃうって事だよな？」

「実際はそれ以上だな。魔法人類が使っていた魔法は今のゲームに出て来る魔法よりも危険な物が多かった」

「……ん？ちよつと待って……その、魔法人類ってなんだい？」良平が不思議そうに聞いてくる。

「ん？……ああ、お前達人類が生まれる前に存在していた人類だ」「はあっ!？」

私の言葉に太一が変な声を上げた、他の三人も今まで見た事の無い表情をしている。

どうしたんだ？

「え……？流石に冗談よね？人類より前に別の人類がいたの……？」

「で、でもクレリアちゃんがわざわざそんな嘘言う訳……」

「太一……どうしようか……」

「どうにもならないよなあ……」

四人はかなり驚いているようだが、そこまで驚く事だろうか。それからしばらく黙り込んでいた四人だが、美琴が尋ねて来る。

「……詳しく聞いても大丈夫？」

「大丈夫だ」

何かあった時、最初に落ち着きを取り戻すのは大体美琴だな。

「千穂！ほら太一も！良平くんも聞きたくないの!？」

美琴は三人に声をかける、その声で三人は気を取り直した。

「聞く、ここまで聞いてやめたら後悔しそうだもん」

「同感だな」

「そうだね。流星に聞かないという選択は出来ないかな……」

全員聞く気になった様だ。

「そうか、では話そう」

私は過去を語る。

今の人類の起源となる生命の誕生より更に前、私が知的生命体が居ないこの星で過ごしていた事。

知的生命体が生まれる事を期待して休止状態のまま約一万年を過ごし、目が覚めた時には魔法人類がいた事を話した。

「何十億年前なんだよ……」

太一が呆然としながら呟く。

「私達も正確な時間を把握していないから分からない。今の人類の説を信じるなら、四十億年以上前の事になると思う」

「え？じゃあ……クレリアちゃんは四十億歳以上って事かい？長く生きていると聞いてはいたけど……流星にこれ程だとは思って無かったかな……」

良平は疲れたような表情をしている。

私達は魔法人類が何年存在していたか分からないし、新しく生まれた生命がどれだけの時間をかけて人類になったかも知らない。

更に言えば、あの頃の一年が現在の一年と同じであるのかも分からない訳だが……特に興味は湧かないな。

「それからクレリアちゃんはどうしたの？」

千穂が続きを促す。

その表情はとても楽しそうに見える。

「忘れている事も多いと思う。それを覚えておいてくれ」

四人は無言で頷く。

「二万年の休眠を終えた私は、魔法人類と接触した。最初は言葉が通じなくてな……」

ンミナの事はまだ覚えている。

記憶にある限り、初めて親交を結んだ知的生命体だからな。

それから私は覚えている出来事を話し続けた。

恐らく忘れている事も多いだろうが、記憶に残っている事を話した。

「今の創作によく出て来るエルフやドワーフの原形が魔法人類だったなんて驚きだな……」

「私はカミラさんがクレリアちゃんに負けない程に長く生きてる事に驚いたわ」

「神と巫女か……今の人類も過去の魔法人類と似たような事をしてるんだね」

「聞いてみたら思った以上にファンタジーだった！」

ある程度話を聞いた後、四人は口々に感想を言った。

「そうだ、写影が残っているから見てみるか？」

「写影……?」

良平が呟く。

「今で言う写真だな、魔法人類の技術で作られたものだ」

「見る見る！」

千穂が食いついてきたが、他の三人も期待したような表情をしている。

「これだ」

私はマジックボックスから全員が集合した写影を取り出して見せた。

「……色々と聞きたい事があるんだけど……」

「この怪獣は何なんだ……?」

美琴の困惑した様な言葉の後に、太一が呟く。

「順番に説明しよう。これは当時、私が住んでいた島の家の前で撮った物だ。私とカミラは分かるな?その反対側に居るのが森人であるルーテシアだ。そして私の隣で浮いている球体がヒトハだ」

「ええ!?これがヒトハさん!?!」

突然千穂が叫ぶ。

「いやいや!?人間じゃない事は知ってるけどヒトハさんは人型だろ!?!」

太一が大声で話し、他の二人も写影を凝視している。

「ヒトハを含めた侍女隊の皆には、私が肉体を用意したからな。本体は全員あの球体だ」

私の言葉で部屋が静寂に包まれる。

大分長い時間黙っていた四人だが今回最初に復帰したのは千穂だった。

珍しいな。

「えつと……侍女隊の皆の本体が写真に……あ、えつと……写影……に写っている球体で?……クレリアちゃんが肉体を用意した?」
多少混乱気味に言う千穂。

「私が彼女達に現在の体を作り、本体はあの体に収納されている。だから彼女達は私にとって娘のような存在だ」

「……はえ?」

千穂らしい間抜けな声が漏れた。

四人はそれからしばらく唸っていた。

あまり話が進まないな。

「……この怪物は？」

四人は気持ちに折り合いがついたのか復活した。そして疲れたような、しかしどこか楽しそうな美琴が写影を指さして言う。

「彼女は黒竜クログウエルと言う。高い知性と、当時のカメラと同等の実力を持っていた友人……友竜だ」

「……竜!? ドラゴン!? ふわあ! 本物!？」

千穂の勢いが凄い。

大人になつてあまりやる暇が無くなつても、ゲーム好きは変わつて無いからな。

「彼女……女なのね……」

表向きは落ち着いている様に見える美琴がそう呟いている。

「本当に昔はドラゴンがいたのか……」

「はあ……楽しいけど精神衛生上よろしくないな、こりゃ……」

良平と太一は写影を見て脱力している。

「でも……今いないという事は、亡くなつたの……?」

美琴が私を気遣う様な口調で聞いてきた。

「いや、クログウエルはだいぶ昔に別な世界へ行きかけたので、知的生命体が居ない世界に送った」

私がそう言うと、突然四人が無表情になる。

「……今、別な世界つて言った?」

騒いでいた千穂が、静かに聞いて来る。

「……以外にも色々与世界は存在しているぞ? 私もまだ行った事は無いが、神の様な何か居たり、独特な法則が存在していたりする。まだ地球での楽しみは尽きないが、いつかは行ってみるつもりだ」

私がそう話すと、四人はソファに身を預けた。

「もう駄目……頭痛い……」

美琴がそう言つて頭を抑えた。

他の三人も同様だ。

まだ話が終わっていないのだが……。

「今日はもう許してえ……」

話を聞かないのかと尋ねると、千穂が呻いた。

この日はこれで話は終わりになり、翌日四人は帰って行った。

年が明け、2014年1月10日に三番目の新曲である「雪月花」が発売された。

この曲は男性の幼馴染からの愛が理解出来ない女性の姿を歌ったラブソングだ。

作成時に私の恋愛に対する反応が参考にされたらしい。

この曲も一位を取る事になり、三曲連続初登場一位となった。

そしてその頃には、私は次の曲の練習へと入っている。

各局の音楽関係の番組に出演し、その他には初めてトーク番組にも出演した。

マネージャーから話してはいけない事などを聞き、他は好きなように話して良いと言われたので思った様に話した。

司会や周囲のメンバーが上手く私を誘導してくれたので収録は問題無く終わった。

共演者達も私に敵意は無かったし、話しやすいように気を遣ってくれていたようだ。

全員多少疲れていたようなので、私の差し入れを渡す様に指示しておいた。

どうやら私に悪意を持つ者はやんわりと共演拒否しているらしいが、その辺りは好きにすると良い。

現在、私は番組の収録でスポーツテストに挑む直前だ。

番組の趣旨としては「いつも素晴らしいダンスを見せてくれるクレリアさんの実力を確かめたい」という事らしい。

他には複数のお笑い芸人と俳優、後は引退した陸上選手が出演して

いる。

私以外は全員男だが、それに対してどこまで私が迫れるか、という事らしいな。

今回、私は明らかに人では無いような記録を出す気は無い。

上手く調整しよう。

「さて！芸能人スポーツテストが始まりました！皆さん自信のほどは？」

並んだ私達に順番にアナウンサーがコメントを求める。

「お笑いも体力勝負などがあるんで！行けると思いますが！」

「僕は役作りなんかで体も鍛えていますので……勝ちます」

「元選手としては負けたくないですね、頑張ります」

全員が順番に意気込みを語り、最後にアナウンサーが私のもとへとやって来る。

「最後は現在人気急上昇中の売れっ子アイドル、クレリアさんです！さて……クレリアさんは運動が得意と聞いております。音楽番組などで毎回素晴らしいダンスを見せていますが、今回の自信のほどはいかがでしょうか？」

「世界記録は抜かない様に気を付けたいと思う。少なくともアレ等に負ける気は無い」

私は共演者のお笑い芸人達をあえて「アレ」と呼んだ。

お笑い芸人である彼等に対する扱いはこれで良いだろう。

彼等もそれを望んでいる。

「アレ呼びわり!?絶対に負けなですよ！」

「頑張ると良い」

騒ぐ彼らに一言告げる。

「クレリアさんはいつもの様に外見にそぐわぬ圧倒的強者感が出ておりますね。さて！最初に行うのはこちら！」

一通り芸人が騒ぎ、アナウンサーが番組を進行する。

最初に行うのは50m走か。

今回、私は全競技最後に行うと聞いている、メインは私の結果らしいからな。

「嘘お!？」

最初に走ったお笑い芸人は10秒台と言う酷い結果を出し、リアクションをして笑いを誘っていた。

私は人類の「お笑い」という物は全く理解出来ないが、彼らの努力はある程度分かっている。

恐らく彼はもう少し速く走れる筈だ。

私に気を遣ったか、そうするように言われていたのだろう。

その気遣いには感謝するが、恐らく意味は無いと思う。

「これはかなりいい記録だ!」

次の俳優は7秒前半だった。

「これは早い!」

私の前の元陸上選手は6秒前半だった、私は何秒にしようか。

「クレリアさん」

もうすぐ私の番という所で、綾子が話しかけて来た。

「何だ綾子?」

現場ではさん付けで呼ぶ綾子に、私は返事を返す。

「怪我だけは注意してくださいね?」

「分かった」

「本当にお願ひしますよ?」

彼女は念を押す様に言う。

「大丈夫だ」

確か世界記録は5秒50前後だったはずだ。

一秒以上は遅くしておこう。

「では、クレリアさんお願ひします」

私は用意を整え、合図とともに走る。

記録は……6秒55。

上手く行ったな。

「早い!これは早い!クレリアさんまさかの大記録!6秒55です!」

「驚いた……女性としてはかなり早いですよ」

アナウンサーが騒ぎ、元陸上選手が話している。

スタッフも綾子も驚いているようだが、違和感は感じていない様だ。

それから共演者やスタッフから称賛され、次の種目へと移る事になった。

「次は握力測定です、先程と同じ順番で行います。男性の平均は50kgw、女性の平均は30kgwとなっておりますね」

計測器を握るだけなのでこれは早かった。

芸人が37kgw、俳優が42kgw、元陸上選手が63kgwだった。

握り潰す気は無い、上手く調整しよう。

「さて、先程の50m走で驚きのタイムを出したクレリアさんの握力は果たしてどうなのか……それではどうぞ！」

私は数値を見ながらそつと力を入れ、30辺りになった所で止める。

「結果は……30kgw！クレリアさんは普通の女性でした！」

「どういう意味ですかそれ！失礼ですよ！」

アナウンサーと芸人の掛け合いもあつたが、特に問題無く終わった。

「続いては反復横跳びです、20秒間に1mの幅の3本の線を踏んだ回数を点数としてカウントする事になります。そして評価の目安がこちらです」

図を見せながらアナウンサーが話をしている。

芸人の評価は「劣っている」、俳優は「普通」、元陸上選手は「やや優れている」だった。

私は表を見て年齢に合わせた「優れている」回数を行い、称賛されて終わる。

次はハンドボール投げだ。

3人の記録は17m、22m、29mだった。

私はこれ以降の種目の全てを平均辺りの記録で統一し収録を終えた。

何でもやってみようと決めた時点で分かっていた事だが……実際

にやってみると面白い事もあれば、最初のイメージのまま終わる事もある。

次の仕事はどうだろうな。

「クレリア、走るの早いわね……」

収録を終え帰る車の中で、綾子が運転しながら口を開く。

「まあな……話を变えるが綾子、頼みがある。聞いてくれるか？」

これからの事も考えると、京介と綾子にはそろそろ私の事を話しておいた方が良さだろう。

さて、この二人はどう出るだろうか。

「いいけど……どうしたの？」

「時間を作って京介と綾子の二人で私の家に来て貰いたい。話しておきたい事がある」

「……分かったわ。出来るだけ早く行くから」

綾子は何も聞かずに了承してくれた。

「ありがとう」

10日後、京介と綾子が私の家へとやって来た。

「クレリアの家、凄いわね……」

「住所は知っていたからここだという事は分かっていたけど、確かに凄いわね」

綾子が周囲を見回しながら言うと、京介は落ち着いた口調で答えた。

この家は敷地が広すぎて周囲からは個人の家だと思われていないらしいな。

ソファに座るとメイドが手早く飲み物を準備し始める。

対面している私と二人の前に飲み物を用意した後、メイド達は退室していった。

「それで……話しておきたい事とは？まさかとは思うけど……アイドルをやめたいのかな？」

京介は用意された飲み物に手を付けず、真剣な表情で問いかけて来る。

「いや、私はアイドルをそれなりに楽しんでいる。まだやめようとは思っていない」

「じゃあなんなの？改まって話したいなんて言われたから……私もつきりやめたいのかと……」

綾子も真剣な表情をしている。

わざわざこういった席を用意した事で、気軽な内容では無いと感じているのだろう。

「二人がどう判断するかが分からないからな、こうして場を整えた」

「……分かった。何を言われても動じずにしっかりと判断するよ」

「私も心の準備はして来たわ、やめると言われると思ってたから」

二人も話を受け止める準備が出来ているようだ。

「そうか、では話そう。私は人では無い」

途端に二人の顔が困惑に変わる。

「私は人類では無いんだ。この惑星で長い時を過ごして来た『何か』だ」

二人はどう反応していいか分からないようだ。

無理も無いか。

担当のアイドルから話をしたいと言われ、覚悟を決めて聞けば、そのアイドルが自分は人間では無い何かだと言いだしたのだから。

「勿論、話しただけで信じて貰えるとは思っていない。だから証拠を見せよう」

私は自分の前にある牛乳をコップから持ち上げた。私の前に牛乳で出来た綺麗な球体が浮いている。

「なっ!?!」

京介は声を上げ立ち上がり、綾子はソファの背もたれに張り付いている。

「う……嘘よ……。て、手品でしょ？そう……ドッキリ番組！」

綾子はそう言うが、どこからもドッキリ成功などと言葉がかけられる事は無い。

やはり、やんわりと私が人では無いという事を伝えるには危険の少ない水系統が良い。

火だと大抵の場合、怯えてしまうからな。

「受け入れるのは難しいかも知れないが、私もこの力も存在するんだ」

私は牛乳を使って「現実だ」と文字を描き、牛乳をコップへと戻した。

「私を受け入れる事が出来ないのならば帰って構わない、危害は加えない事も保障する」

その代わり話の内容は忘れて貰うが。

二人が今の私の言葉をどう受け取るかは分からない。

私の正体を知った途端に、私に対する感情が裏返る事もあるからな。

話す私を京介と綾子は身を強張らせ、恐れる様な表情で見つめていた。

私はその視線と、強い恐怖と混乱の入り混じった感情を受けながら牛乳を飲み、本を取り出して読み始める。

どこからともなく本が出て来るのを見た二人が動揺するのを感じたが、私はそのまま本を読み続けた。

私が本を読み始めてどれだけの時間が経っただろうか。

二人はいまだに帰る事は無く私を見ていたが、その感情は落ち着きを取り戻し始めている。

やがて京介と綾子は顔を見合わせ、その後京介が意を決したように口を開いた。

「クレリアさんは……一体何者なのでしょうか？」

気付いているのかいないのか、自然と敬語になっている京介の問いに、私は本から顔を上げて答える。

「私の事を初めて知った者は大抵その質問をするが、その質問には

『私にも私分からない』と答えている」

「え……?」

私の答えを聞いた綾子が声を上げた。

「私は私は何であるかを知らないし、今は特に知りたいとも思っていない」

「そう……ですか……」

京介はどう反応すれば良いか分からない、といった表情で呟く。

こうして私が普通に受け答えしているせいか、二人も十分に落ち着きを取り戻した様だ。

二人から私を拒絶する様な気配も感じない。

このままならば私の正体を知る友人が増えるかも知れないな。

「僕がクレリアさんに感じた強烈な感覚は、何だったんでしょうか……?」

京介が私に尋ねる。

「何に反応したのかは知らないが、恐らく京介は人類の中でも特殊な方なのだろうな」

「……人外の魅力だったのでは?」

京介の言葉を聞いた綾子がポツリと言った。

時間をかけて会話を続けた結果、二人は私を受け入れてくれた。私に対する敬語はやめてくれなかったが。

「……そういえば、クレリアさんの家族も……やはり?」

思い出したように京介が問う。

「全員人間ではない。表向きの月下グループの人員はすべて人間だが、支配しているのは私の娘達だ」

「お子さんが居るんですか!?!」

綾子が声を上げる。

「人類のような関係の娘ではない、義理の娘のような者達だ」

「なるほど……義理ですか」

納得したのか、彼女はそれ以上その事について触れる事は無かった。

それから私達は以前の様に会話をしていたが、途中からいつの間にか仕事の話が変わった。

仕事の話が終わった時にはかなり時間が経っており、二人は「仕事が残っているから」と言って帰って行った。

「プロデューサー」

「何です?」

帰りの車の中、綾子が京介に話しかける。

「私、自分の人生にこんな事が起こるなんて思ってませんでした……」

「……僕もです」

それからフラワープロダクションに着くまで、二人は一言も話す事は無かった。

私が二人に正体を教えてからも、アイドルとしての私の活動は変わらない。

表向きは人間である為、人間に可能な範囲でスケジュール調整をして貰っている。

様々な仕事をこなしながら、裏で私に手を出そうとする関係者を社会的に葬ったり、他のアイドルの嫌がらせや勝負を正面から叩き潰したりして過ごした。

新曲もかなり短い間隔で発表した。

最初はあまりにも早い間隔のリリースに「歌やダンスの出来に問題は無いのか」と危惧されたが、京介が完成度を見せつけ関係者を納得させた。

前例が無い新曲のリリース速度が話題になり、私の知名度と人気は更にながって行く。

一方、業界内部では「私の逆鱗に触れると相手が誰であつても潰される」という話が広まっていた。

現在では芸歴の長い……いわゆる「大御所」と言われる者達や大手事務所、大企業からも相応の対応をされるようになっていく。

そのせいも、同じフラワープロダクションのアイドルや他のプロデューサー達から壁を感じるようになった。

私は相手が手を出して来なければ何もしないが、私の気分を害せば自分達もどうなるか分からない、とでも思っているのかも知れない。

出演している番組を見た友人達や視聴者からは「扱いが新人アイドルじゃない」とよく言われている。

カミラから聞いた話だが、各国のトップは私がアイドルとして表に出ている事に気が付いていた様だ。

日本の月の庭園関係者はすぐに気が付いていたが、他国もかなり早い段階で気が付いていたらしい。

各国は私関係の事を最重要機密と考え出来る限り動きを把握しようとしている、とミツハが言っていたな。

何もしない様に伝えているので、現在に至るまで各国はアイドルクレリアに対して動きを見せていない。

アイドルとして日々活動し、2014年の7月に入った。

私は京介に大事な話があると呼び出され、綾子が迎えに来た。

どこか浮かれている綾子と共にフラワープロダクションの会議室に入ると、待っていた京介に早速話をされる。

「ライブが決定しました」

綾子が浮かれていたのはこれが原因か。

「いつだ？」

「2014年12月24日です」

「確か……クリスマス・イヴの日だったか？」

「そうです、ライブ前までにリリースされた曲を全て入れる予定ですが……大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だ」

「初ライブでドームですよ！しかもソロライブ！」

「そうか」

「凄さが分かって無いですね!？」

珍しく騒ぐ綾子をよそに、私は京介と話を進めた。

ライブの告知は大々的に行われた。前売り券はあっという間に売り切れ、中には高値で転売する者もいるという。

最近私の評価を見た事があるが。

飛び抜けた美貌。

変化する七色の声質。

歌とダンスの圧倒的な完成度。

魅了される独特の雰囲気。

今後超える者は居ないであろう最高のアイドル。

大体はこのような評価だった。

正反対の意見もあるが、全ての者に好かれるのは何かしらの力を使わなければ難しいだろうな。

ライブの決定を伝えられた日から時は過ぎ、2014年12月24日。

ライブが始まった。

「よく来てくれた、楽しんでいくと良い」

私の言葉に盛り上がるファン達。

大観衆の前で歌い、踊る私に、ドームに集まったファンの感情が押し寄せる。

この数の人間の感情が私に集まる感覚は初めての経験かも知れない。

今の私はアイドルだ、ここにいるファン達の好意に答えよう。

私の初ライブは大成功を収め、その後年末ギリギリまでぎっしりと詰まったスケジュールをこなした。

年末年始を家族と過ごしていた時、人気があるにも関わらず私が年末の歌番組に出ない事が話題となる。

そしてこの際、私が契約時に年末年始の時間は家族に使うとフラワープロダクション側に認めさせていた事が漏洩し、プロダクション側はそれを事実だと認めた。

プロダクションの上層部は勿論、京介と綾子もかなり焦ったようだが、予想以上に世間の反応は穏やかだった。

ファンや世間がどう受け取ったのかは知らないが、あまり荒れる様な事は無く鎮静化する事になる。

しかし、この事でプロダクション側はかなり肝が冷えたらしく、一段と情報漏洩に気を配る様になった様だ。

2015年になり、年始の気配も消えた1月中旬のある日、私は新作ゲームの仕事を依頼された。

タイトルは「スカイレゾナンス」と言う。

ゲームステーション4やミイラーなどの家庭用ゲーム機用に開発が進んでいるゲームで、地球に似た架空の世界で起きている戦争のゲームらしい。

現在、私はその仕事をするにあたって綾子と話を聞く所だ。

「では、（ん）説明します」

ゲームのプロデューサー達が色々と説明を始める。
なるほど。

戦争をしている各国にはそれぞれ歌姫が存在し、その歌の力を使って戦争を助けている……という設定か。

歌で広範囲に補助魔法をかけている様な物だろう。

私の仕事は、オープニング曲と私が歌姫を務める勢力の曲、この二曲の新曲を歌う事。

その他には、今まで出して来た曲のいくつかをアレンジして収録するようだ。

別の国の歌姫は全員ゲームオリジナルキャラクターで、声優が担当している。

そしてプレイヤーはその中から国を一つを選び、その国の歌姫と絆を深めながら物語を進めて行く事になるという。

恋愛はかなり難しいな、全く恋愛感情が分からないままでいいのなら出来なくは無いが。

私が恋愛関係は難しいかも知れないと言うと「話は聞いています。クレリアさんの国のルートは他の国のルートとは違い、そういった要素はありません。いつものクレリアさんのままで出演して頂ければ問題無いと思います」と言われた。

それから私のルートの話の流れを伝えられ、私は納得する。

その後、説明を全て聞き終えた私達は開発元を後にした。

プロダクションに帰ってからすぐに自宅に帰らず、休憩室で綾子と雑談していた私達だが、突然彼女が苦笑いしながら私に言う。

「クレリアさんの事知ってから番組で超常現象とか霊能力とかを見た時に、もしかしたら……っていう気持ちで見るとなっちゃうかもしれないよ」

「私もテレビで見た事はあるが、恐らく偽物だぞ。今の所、特に違和感のある現象を感じた事は無い。何かあった場合は魔力関連を疑った方がいいと思う」

「そうなんですか……。あの、言い伝えられたりしている昔の不思議な出来事の中には、本当の事もあったんでしようか?」

「今の地球では自然に魔力が何らかの現象を引き起こす事は難しい。ただ、過去の人間達の中には僅かに魔法を使えた者達も居る」

「やっぱりそういう人間もいたんですね? 問題無いのなら教えて欲しいです、歴史上の人物だったりしますか?」

彼女は表面上落ち着いて見えるが、内心は興奮気味だな。

「そうだな、多くの人が知っているとなると……ジャンヌか」

「ジャンヌ……ジャンヌダルクですか!? オルレアンの乙女の!?」

隠しきれなくなった興奮で綾子が大声を出した。

「落ち着け。ジャンヌは地球に残っている僅かな魔力を使い、無意識に魔法を使っていた」

「歴史には天使を見て言葉聞いたとか、軍を勝利に導いたとかありますけど……それは本当ですか?」

「本当だ。天使はジャンヌが無意識に魔法で作りに出した物で、軍の方は広範囲に簡単な強化魔法を使っていた」

「えっ……天使を自分で出してたんですか?」

「信仰心のあまり無意識に行っていた様だ。彼女は今の人類にしてはかなり魔法を使いこなしていたと思う」

広範囲への強化魔法も使っていたからな。

「貴重な才能の持ち主だったんですね……」

「今では私を神と崇めて侍女隊の一員として過ごしているが、人を辞めても信仰心は変わっていないな」

「え？……どういう事です？」

「ん？」

私と綾子は顔をあわせて見つめ合う、すると綾子が恐る恐る口を開く。

「クレリアさんの言い方だと今も生きてるように聞こえるんですけど……」

「生きていますぞ。ある場所で私の侍女として暮らしている」

「生きてるんですかあ!？」

興奮し大声で叫びながら立ち上がる綾子。

「体は既に人では無いが、精神は間違いなく人であった彼女のままで」

「ジャンヌダルクが生きてる……クレリアさんならそういった事も……」

俯きブツブツと呟く綾子、しばらくそつとしておいてやろう。

しばらく待つていると、彼女が顔を上げた。

回復が早かったな。

こういった事はもう初めてでは無いし、慣れたのだろう。

「あのー……ジャンヌさんに会えたりしませんか？」

「歴史上の人物に会いたいのか？」

そう言うと、綾子は少し恥ずかしそうにする。

「それもあるんですが……実はドゥーム・ナイトワールドと言うゲームにジャンヌが出てまして。一番好きなキャラなんです……」

「本人とそのゲームのキャラは別物だと分かっているか？」

「分かっていますよ？ただ……本人が生きてると知ったらやっぱり会いたいじゃないですか」

「そういう物か」

「はい……ちなみに……他にも誰かいたりします？」

彼女は探るように私を見て来る。

「後は信長だけだな」

「織田信長ですか!?!本能寺の変で死んだんじゃなかったんですね! そういえば死体が出なかったって……! こういう事ですか……!」
再び興奮する彼女。

「ふう……その……」

突然落ち着いた彼女が、すぐるような視線を向けて来る。

「分かった。その内二人に合わせてやる」

「本当ですか!?!やったー!」

私の為に色々としてくれているからな、この程度の願いは叶えてやろう。

それから綾子はより一層やる気を見せた。

私はスケジュール通りに仕事をこなしながら、ジャンヌと信長を綾子に合わせる準備を整える。

そして、綾子と二人を私の家で合わせる日がやって来た。

「わ、私おかしくないですかね?」

私の隣に座り、いつもよりも更にも身に身だしなみを整えたように見える綾子が不安そうに言う。

「大丈夫だ」

「そ、そうですか」

するとメイドに連れられた男女が部屋に入ってくる、ジャンヌと信長だ。

「は、初めまして!高野綾子と申します!今日は会っていただけて嬉しいですよ!」

目の前に来た二人に挨拶する綾子。

「始めまして綾子さん。私はジャンヌダルクと言います」

「綾子か、いい名だな。儂は織田信長と言う」

「三人ともまずは座れ」

挨拶を終えた所で私は座るように促した。

「は、はい……」

「かしこまりました。主様」

「うむ」

三人は返事を返すと、私の横に綾子、その反対側にジャンヌと信長が座る。

すると控えていたメイド達が素早く飲み物と菓子の用意をしている。

準備を終えたメイド達は私に頭を下げ、部屋を出て行った。

「綾子さんは主様のアイドル活動を支えてくれているそうですね」

「は、はい」

ジャンヌの言葉に緊張しながら答える綾子。

「綾子、そう緊張するな。俺らはクレリアの友人であるお主に危害は加えん」

「は、はい」

同じ事しか言わない綾子。

駄目だなこれは。

「二人とも、彼女が慣れるまで待つてやってくれ」

「構いませんよ」

「分かった」

ジャンヌは微笑み、信長は炭酸飲料を飲む。

信長は普段世界を回っているせいか、随分と現代に馴染んでいるな。

一度慣れてしまえば簡単に綾子は二人と打ち解けた。

人当たりが良く、性格も穏やかな彼女を二人も気に入ったようだ。

「まあ……信長、こんなに可愛らしくなっちゃってしまっただけ」

ジャンヌがそう言いながらスマートフォンを見ている。

ドウム・ナイトワールドに出ている信長は女になっていると綾子が話し、見てみたいとジャンヌが頼んだのだ。

「これが……儂だと……」

信長が絶句している。

私も以前に見せて貰ったが、あのゲーム内の信長は洋服と着物を合わせたような服を着た黒髪の少女になっている。

「ええと……このゲームに登場する場合、大抵女性化されるので。

その……申し訳ありません」

何故か謝る綾子。

「こちらの信長でしたら主様の侍女に出来ますね」

「このゲームがそうなだけで、男のままのゲームもたくさんありますから……」

衝撃を受けている信長にジャンヌと綾子が声をかけている。

「……儂は人としてはとうに死んだ身だ、どう扱われていようと構わぬ」

「そう言う割には大分驚いていたようだけど？」

ジャンヌは信長に言う。

「……何故儂がこのような扱いをされているのだ？」

信長の言葉に綾子が答える。

「戦国時代で最も有名な人物の内の人だからだと思います、現代の人から見ても貴方は魅力的なんですよ」

「わざわざ女にする必要は無いだろう……」

「それはその……その方が受けが良いというか、なんと……」
信長と綾子の会話をしているとジャンヌが話しかけてくる。

「主様、このゲームに主様は出ないのですか？」

「この作品は英雄達が登場する物だから難しいだろうな」

「……主様は無理だと？」

ジャンヌはそう言っつて私を見た。

「ゲームの方針に合わないだろう、私は英雄ではなくアイドルだぞ」
「なるほど……確かに本来の主様ならばこの程度の争いには出ないでしょう。しかし、アイドルとしてなら可能なのでは？」

何となく話が噛み合っていない気がする。

ジャンヌの中では私は唯一神だ、つまり「本来」というのは神としての私の事だろうな。

「アイドルは英雄とでも言うつもりか？」

私がそう言うと、ジャンヌは軽く首を横に振る。

「いえ、そういう訳では無いのです。綾子さん、聞きたい事があるのですが」

信長と話していた綾子がジャンヌの言葉に振り返る。

「どうしたんですか？」

「こういったゲームもアイドルとのコラボレーションはあるのですか？」

「残念ながら……大体が他のゲームや企業との物で、現実のアイドルとコラボレーションする事はまずありませんね」

「そうですか……しかし、主様なら可能なのでは？」

ジャンヌのその言葉に、綾子が考えるような仕草をする。

「確かに……クレリアさんなら可能かもしれません」

「そうでしょうか？私が出ていて主様が出られない訳がありませんからね」

「お前は人類の歴史に名を残した人間だっただろう、私はただのアイドルだぞ？」

そう話す私に、綾子が言う。

「一般的なアイドルであれば難しいでしょう、ですがクレリアさんは明らかに今までのアイドルと違います。これから更に人気が高まり、多くのユーザーが望むようになればあり得るかも知れません」

「そうです。それに主様なら歴史に名を残すアイドルになるでしょう」

ジャンヌが嬉しそうに綾子に続く。

「話が来れば考える」

「その時は一緒に戦えますね、主様」

ジャンヌは嬉しそうに話している。

彼女の中ではもう決まっている事なのだろうか。

「もしも私がキャラクターとして出た場合、敵になる可能性もある。

それは分かっているか？」

「……あっ」

私の言葉にジャンヌは声を上げた。

【美しい】クレリア様について語るスレ 【最高】

1：名無しのアイドル好き

クレリア様の初ライブ最高だった！

2：名無しのアイドル好き

ホントな！

3：名無しのアイドル好き

俺チケツト買えなかった……

4：名無しのアイドル好き

転売する奴が悪いんだよ、○ね

5：名無しのアイドル好き

それはそうだがここで書く事ではない

6：名無しのアイドル好き

実際どうだった？じかに見て聞いた感想は？

7：名無しのアイドル好き
凄かった！

8：名無しのアイドル好き
ライブブルーレイ出たら絶対買うわ

9：名無しのアイドル好き
俺が一番驚いたのは、どの歌もCD音源と変わらなかった所だな。
テレビで聞いて感じてた事だけど、ライブで全曲は正直驚愕した。

10：名無しのアイドル好き
私もそう感じた、全然変わらなかった

11：名無しのアイドル好き
口パクなんじゃね？

12：名無しのアイドル好き
新参か？その疑惑は解決してるぞ、生放送で証明してた

13：名無しのアイドル好き
あれだけ動いてて涼しい顔で最後まで完璧にこなしてるのが信じ
られん

14：名無しのアイドル好き
俺もそう思うわ、どんな体力してるんだ？

15：名無しのアイドル好き
そんな事よりあの歌声とお姿が尊い

16：名無しのアイドル好き
わかる

213：名無しのアイドル好き
クレリアって本当にあのままの性格なの？

214：名無しのアイドル好き
様をつけるよ

215：名無しのアイドル好き
本当にあのままの可能性が高いんじゃないかな。プロダクションの方針で常にあのままにさせてるって話だけど、あまりにも自然過ぎるって本当はあれが彼女の素で、プロダクション側がフォローしてるって話もあるし

216：名無しのアイドル好き
フォローって何を？

217：名無しのアイドル好き
新人がずっとあの態度だったらどう考えても不味いだろう？

218：名無しのアイドル好き
把握

219：名無しのアイドル好き
あの態度をプロダクション側がキャラとして維持させてる事にして、問題にならないようにしたって事？

220：名無しのアイドル好き

まあそんな感じ

221：名無しのアイドル好き

無表情だし色々ときつぱりしてるし、多少……いや、かなりバツサリ切るけど嫌いじゃないぜ

222：名無しのアイドル好き

言ってる事自体はかなりまとまどだし、意外と優しいよな。時々理解出来ないズレた事も言うけど

223：名無しのアイドル好き

顔のおかげかも知れない。考えてみる、同じ事を不細工がやってたらどうする？お前らどうせ責めるだろ？

224：名無しのアイドル好き

どうしよう否定出来ない

225：名無しのアイドル好き

そんなことない！

226：名無しのアイドル好き

動揺して打ち間違ってるぞ

227：名無しのアイドル好き

歌、ダンス、容姿、性格、総合的に見て……史上最高です

228：名無しのアイドル好き

過剰評価と言えない所が凄いよな

647：名無しのアイドル好き
クレリアちゃんて英語の発音めっちゃいいよな

648：名無しのアイドル好き
そりやそうだろ、日本人ではあるけど生まれは海外らしいし

649：名無しのアイドル好き
それどころか複数の言語を話せるからな、テレビでいろんな国の言葉話してた

650：名無しのアイドル好き
俺もテレビで知ったわ

651：名無しのアイドル好き
合法ロリで美人でスレンダーで肌が綺麗で歌上手くて運動神経も良くて頭も良いとか……盛り過ぎじゃないですかね？

652：名無しのアイドル好き
無表情って言う欠点があるだろ

653：名無しのアイドル好き
無表情が欠点な訳無いだろ！

654：名無しのアイドル好き
実際、俺達の妄想の中のアイドルに近いよな

655：名無しのアイドル好き
表情豊かな方が好き

656：名無しのアイドル好き
じゃあ表情は豊かだけど、不細工でデブで肌が汚くて歌が下手で運

動音痴で頭が悪い女が良いんだな

657：名無しのアイドル好き

無表情は欠点じゃないですね。というか、そんなのがアイドルになれる訳無いだろ！

658：名無しのアイドル好き

その比べ方だったらそうなるに決まってるだろ！汚いぞ！

659：名無しのアイドル好き

そうは言うけど、実際これだけ揃ってる女性がどれだけいると思う

？

660：名無しのアイドル好き

クレリアさんが初めてです

661：名無しのアイドル好き

だよな、俺もそうだ

662：名無しのアイドル好き

私は女だけど彼女に惚れました

663：名無しのアイドル好き

まあ、恋愛は自由だから……

ジャンヌと信長を綾子に会わせた後も、私は順調に仕事をこなしていく。

私は歌やダンスを短期間で完成させる事が出来るので余裕があるが、本来は人気が出れば出る程スケジュールが詰まり、自由が無くなって行くらしい。

新曲のリリースは月に一曲程に落ち着き、テレビ出演も増えた。そして、最近海外でも人気が出始めている。

私がマルチリンガルである事が知られてから、テレビなどで様々な言語で話す機会が増えたのだが、それらがニューチューブに投稿されているらしく、そこから海外の人気に火が付いたのではないか、京介達が話していたな。

音楽番組中心の私のテレビ出演で、京介と綾子が困る仕事の一つにドツキリ番組がある。

番組の性質上ドツキリだと言っては意味が無いのだが、私にドツキリは効かない。

誰かがいれば気が付くし、例えば気配感知を遮断し突然何かが出て来たとしても、私は出てきた瞬間に対象を確認し判断してしまうので意味が無い。

私に視聴者が望むような反応は出来ないと二人も勿論知っている。それでも出て欲しいと番組側に頼み込まれ、私も嫌な訳では無いので「望むような反応は出来ない可能性が高い」という事を伝えた上で出演した。

後日、その番組は放送されたのだが……行われたドツキリに対して完全に無反応な私に困惑する仕掛け人の芸人に、飲み物を薦める私の姿が好評だったらしい。

更に何を思ったのか、何をしても驚かない私を反応させようと言うコーナーまで作られる事になり、人気が出た。

内容は京介と綾子が問題無い事を確認させているので、顔にパイナドが飛んで来る事は無い。

私の反応が好評だったという事実を知った時の方が、驚いたという意味では上だったかも知れない。

中々良かったのは旅番組だ、他のメンバーに振られた話に受け答えしながら旅先を楽しんで終わった。

グルメリポートなどもあったが、娘達の料理を超える物は無かったな。

中には私の口に合わない事もあったが、そういった時には助言をした事もある。

あくまでも私の個人的な考えでの助言だが、後日売り上げが大幅に上がったと局に礼が届く事もあった。

それからしばらく時間が経つと、ゲーム関係の仕事も動き始める。

スカイレゾナンスで歌う二曲の内、オープニング曲が完成し収録が行われた。

その際にスカイレゾナンスの音楽プロデューサーから色々曲のイメージの要望があり、収録に多少時間が掛かる事になった。

いままでの曲も同じ様な事をしたが、あれ程細かくは無かったな。深いこだわりがあるらしいが、そういった姿勢は嫌いでは無い。

こうしてオープニング曲は収録され、完成した。残りは勢力曲である新曲とアレンジの収録、それからコマーシャルの撮影だな。

仕事は多くなっているが、私は基本的に京介と綾子が用意したスケジュールに沿って仕事をこなすだけだ。

会議や打ち合わせの場合は私も色々話す事になるが、いつ会議や打ち合わせを行うかも全て二人が調整してくれている。

そう考えると、本当に忙しいのは二人の方だと思う。

倒れられても困るので、私は以前から暇を見つけては差し入れをし、時々回復魔法をかけている。

二人には休む時間を作るように言っているが、あまり休めてはい

ない様だ。

私が色々早く仕事をこなしてしまおう為に忙しいのではないかと考えて尋ねた事もあるが、問題無いという返事が返って来た。

人類の限界がどの辺りなのかは分からないが、私が回復する前の二人はかなり疲れている様に見えた。

あのままでは近い内に倒れていたのではないだろうか。

友人や娘達との時間を大切にしつつ、様々な仕事をこなしている内に数か月が経ち、7月に入った。

現在、私は地球の自宅にやって来た娘達とくつろいでいる。

「そこにカウンターが決まったんだよ！」

「本当にヨツバは格闘技が好きですね」

ヒトハに熱く試合の事を語るヨツバ。

話を聞いているヒトハはしっかりと返事をしているが、ヒトハ自身は格闘技にあまり興味が無い。

ヒトハにとつて……いや、ヒトハだけは無いな、私達には人類間の戦闘は赤子が喧嘩している様な物だ。

命を懸けて戦う者達の事を貶める気は無いが……実際に大人と赤子以上の差がある。

私達と人類の間にあるこの差は、今の所はどうにもならない。

いつか人類がその差を大きく縮める日が来るかもしれないが、それはまだ先の事だろう。

「カミラお嬢様、近い内に一緒にお料理をしませんか？」

「良いわよ、またフタバの腕を見せて貰おうかしら。何を作るつもりなの？」

ヨツバ達の横では、フタバがカミラと料理の話に花を咲かせ始めている。

すると、そんな娘達の姿を見ている私の隣でテレビに夢中になっていたミツハが声を上げる。

「あーこれ主様が出てるゲームでしょ!？」

テレビを見ると、今日から放送されているスカイレゾナンスのコマーシャルが流れていた。

ミツハの声で娘達は話を中断し、テレビを見始める。

オープニング曲がオフボーカルで流れ、ゲームのカットが次々と映されて行く。

同時に女性声優のナレーションによって世界観が説明される。

《……そして長く続く戦争は、ある歌姫と一人の青年によって変化の時を迎える》

ナレーションに合わせて各勢力の歌姫達が現れてから暗転し曲が途絶え、私の言葉が流れる。

《大切な者を守りたいのなら戦え》

そして画面に大きく「2016年7月発売予定」と文字が表示され、コマーシャルは終わった。

収録された私のあの言葉は紛れも無い本心だ。

もしもこのゲームのような状況になった場合、私は恐らく全く同じ事を言うだろう。

このゲームは発売までまだ丸1年近くあるが、それまでずっとこのコマーシャルが流れる訳ではない。

別のコマーシャルも用意すると言われているからな。

「むー、主様が殆ど出てないじゃんかー!」

ミツハが不満そうに言う。

「これは作品に興味を持って貰うための映像で、私のプロモーションビデオでは無いからな」

「知ってるけど、なんかヤダ……」

そう言っただけで不機嫌になるミツハ。

こうして私の前で不機嫌になってくれるのは良い傾向だな、今も少しずつ娘達が変わっている証拠だ。

「ゲームでは私のルートもある、それを選べば私がメインで登場するぞ」

「これ買おう!」

私の説明にミツハは購入を決めたようだ、彼女は元々ゲームを気に入っているからな。

「主様が出るから、私もやるつもりでいる」
ヨツバが真面目な表情で言う。

彼女はどちらかと言うとゲームをしない方だが、私が出ている事で興味を持っているようだ。

「ミツハちゃん、買ったなら私にもやらせてくれる？」

「いいよ！一緒にやろー！」

フタバがミツハに頼むと、ミツハは楽しそうに答えた。

「私もやってみようかしら、ヒトハもどう？」

「お供いたします」

カミラとヒトハもやる気のようにだ。

「ゲームが面白いかは分からないぞ？」

私がそう言うのと、娘達はつまらなくても一度は最後までやると答えた。

その後、スカイレゾナンスのコマーシャルはそれなりに良い評価を受け、ゲームに対する期待も高まったようだった。

8月に入り、ファーストアルバムである「オーパーツ」が発売され、初登場でアルバムランキング1位を取った。

今では1位になった事に周囲も大して驚かず、それが当然の様な反応になっているらしいな。

そんな中、プロダクションの発案で新しい活動が始まる。

国内の知名度は十分に高まったと判断し、マルチリンガルである事を武器にリリース済みの曲を様々な言語で歌い、販売しないかと提案を受けた。

これはCDでは無く、ダウンロード販売のみになるという。

理由は「どの言語がどれだけ売れるか分からないから」という事らしい。

これが想定以上の大きな反響を呼んだ。

完璧な発音と、その言語数に世界中が驚愕し、海外のファンが激増した。

ファンによると、どの言語も発音が素晴らしい事と、自分達の母国語で完璧に歌ってくれている事が嬉しいようだ。

その他には、日本の音楽だからと敬遠して聴かず、私の事を今まで知らなかった事を後悔しているような反応も多かった。

こうして、各国に多くのファンが生まれる事となる。

そして、再び日本語の私の曲の売り上げが爆発的な勢いで伸び始めた。

調べた所、各国のファン達は自分の母国語の歌を聞いて、オリジナルとも言える日本語の曲も聞いてみたいと考えたらしい。

この予想以上の反響に、嬉しくもあり困つてもいるのはプロダクション側だ。

やってしまった以上、恐らく次からの新曲は多言語でのリリースを期待されるだろう。

プロダクション側としては続けるつもりは無く、私の強みを生かした一度きりのサプライズの様なものだったらしい。

ファンからの期待はあったが、私に大きな負担がかかるという事でプロダクション側は批判覚悟で日本語のみに戻そうとしていた。

私はその時、京介と綾子に問題は無いか聞かれ、問題無いと答えた。するとその後、多言語でのリリースが正式に決定した。

京介と綾子は自信にあふれた様子で問題が無い事をアピールしたようだ。

私自身が問題無いと言っている事と、二人のあまりの自信に押しきれ、上も「そこまで言うのなら」と了承したようだ。

担当アイドルの事を考え無理をさせない、という信用がある二人が言ったからこそ、上も納得したのである。

二人は私とその程度でどうにかなる事は無いと知っているからな。私の許可さえ出れば自信も出るだろう。

むしろ、更に二人が忙しくなるだけだと思う。

私は二人が多少楽になるように、一度に複数の言語での収録を行い、短時間で全ての曲の収録を終わらせた。

関係者は驚いていたな。

私が短時間で完成度を上げられる事は知っている筈だが……。

一つ一つを短時間でこなせば、まとめて行ってもそれ程時間がかからないのは当然だろう。

2016年3月のある日。

現在、私の家には葛城夫妻と鈴原夫妻が訪れていた。

「それで、私に報告したい事とは何だ？」

「直接言いたくて遅れちゃったけど……私と美琴、妊娠したんだ。今は三か月だよ」

私の言葉に千穂が答える。

そう言えば以前、子供を作りたいと言っていたな。

「欲しいと話していたのは数年前だったと記憶しているが」

「いざ作ろうと思うと色々あつてね、結局三年程経ってしまったよ」

私の言葉に良平が苦笑いして言う。

「美琴も千穂も同じ時期に妊娠してるんだよな……なあ、良平？」

太一がそう言つて笑い、良平を見る。

その視線を受けた良平は恥ずかしそうに頬をかいた。

「千穂、美琴、妊娠おめでとう」

「ありがとう」

私の言葉に微笑み、声を揃えて答える二人。

この二人も母になるのか。

「二人は予定通り専業主婦になるのか？」

「うん。妊娠が分かった時に話はあるから、やる事をやったら退職だね。美琴もそうでしょ？」

「そうね、私も近い内に退職するわ。復帰は今の所考えてないわね……ふむ、今の所二人の体調は悪くない。

胎児も問題無い様だ。

私は会話しながら二人の状態を確認する。

妊娠中は色々あるからな、この子達は問題無く生まれるだろうか。

二人の妊娠報告を受けてから約四ヶ月。

7月20日に私が出演しているゲーム、スカイレゾナンスが発売された。

最初の予定ではテレビコマーシャルだけだったのだが、私の人気上昇するにつれてゲームに対する注目が高まった。

ゲーム制作側はこれを受けて大手動画サイト向けにもプロモーションビデオを作る事を決定し、私はその話を受けた。

作られたプロモーションビデオも十分に作品をアピール出来たよ
うで、近年稀に見る初回販売数を記録したそう。

歴代の名作には及ばない物の、現在では十分過ぎる販売本数らしい。

制作側が「初回生産本数をもっと増やすべきだった」と嘆く程には
売れてるようだな。

その中には私の娘達も居る、ヒトハ、フタバ、ミツハ、ヨツバの四
姉妹が予約をして発売当日に手に入れていた。

同じ場所に住んでいて四つも同じ物を買ってどうするのかと思っ
たが、一つでは全員がプレイするのに時間がかかると言われ納得し
た。

現在は月の拠点で四つのグループに分かれて遊び、情報交換をして
いるらしい。

【スカイレゾナンス】クレリア様を応援する【発売！】

1：名無しのアイドル好き

スカイレゾナンスおもしろー！流石クレリア様だ！

2：名無しのアイドル好き

詳しく

3：名無しのアイドル好き

まず普通にゲームとして面白い

かなり作り込まれてて、戦闘機が好きなの人も喜ぶと思う。更にそこに歌姫という要素が加わってる

4：名無しのアイドル好き

俺もやってるけどこれ良いな

歌が邪魔なんじゃないかと思ったけど気分が高まる

例えると…あれだ、映画とかアニメのクライマックスでたまにある、歌が流れている中で戦う感じ。

5：名無しのアイドル好き

常に歌うんじゃないかって、ここぞと言う時に歌って貰って強化を得るのがいい。

6：名無しのアイドル好き

機体の購入、改造とか、歌姫育成とか、中々ボリュームがあるな

7：名無しのアイドル好き

ゲーム内のクレリア様のモデルより実際のクレリア様の方がお美しいんだけど、不具合ですかね？

8：名無しのアイドル好き

不具合な訳無いだろ

9：名無しのアイドル好き

実際、二次元のキャラより可愛い三次元女性って初めて見たんだけど、彼女どうなってんの？

10：名無しのアイドル好き

美しさが次元を突破してるんだろ

11：名無しのアイドル好き

ゲームの面白さはクレリア様じゃなくて製作側の努力なんじゃないですかね

249：名無しのアイドル好き

なるほど、駆け引きの要素もあるのか

250：名無しのアイドル好き

ある。普段はそれぞれ自分の歌姫の歌が流れるんだけど、歌でも戦いを仕掛ける事が出来て、勝っている歌が大きく流れて効果が高く、負けている方の歌が小さくなって効果が低くなる。この部分は歌姫の育成次第な

251：名無しのアイドル好き

スルーしてたけど買ってみるかな

252：名無しのアイドル好き

戦闘機での戦闘が好きの人、アニメの様な戦いが好きな人には間違いないとお勧め

253：名無しのアイドル好き

ゲーム用にアレンジされたクレリア様の曲も良い

254：名無しのアイドル好き

それもだけど、他勢力の歌も良いの多いよな。歌の上手い声優使ってるだけある。

255：名無しのアイドル好き

クレリア様の曲のアレンジとオープニング曲とゲーム内の新曲はゲームのサウンドトラックとセカンドアルバムのどっちに収録されるんだろう

256：名無しのアイドル好き

アレンジとオープニングはサウンドトラックじゃね？んで、新曲はアルバム

257：名無しのアイドル好き

どっちも買えばいいんやで

258：名無しのアイドル好き

せやな

523：名無しのアイドル好き

今更だけど、みんなどの勢力最初にやってる？

534：名無しのアイドル好き

お前、ここが何処だか忘れてるのか？

535：名無しのアイドル好き

ゲームのクレリア様のセリフ来たー！

536：名無しのアイドル好き

クレリア様ルートに決まってるだろ！

537：名無しのアイドル好き

だよな

538：名無しのアイドル好き
ごめん俺他のルートやってるわ

539：名無しのアイドル好き
まあ他にも魅力のあるキャラは居るし……（震え声）

540：名無しのアイドル好き
俺、クレリア様に敵は確実に殺せって言われてるんだ

541：名無しのアイドル好き
あのさ、俺は迷ってクレリア様ルートと別のルート同時にやってる
んだけど……クレリア様のルートだけ何か違う？
他だと恋人っぽくなるのにクレリア様ルートだと皇帝と下僕っぽ
いんだけど

542：名無しのアイドル好き
マジで？俺クレリア様ルートしかしてないからこのゲームマゾ向
けなんだと思ってた

543：名無しのアイドル好き
クレリア様は恋人相手でも対応変わらなそう……って言うか恋人
作る気あんのかね？

私がかくつろいでいる前で娘達がスカイレゾナンスをプレイしてい
る。

娘達は私のルートをクリアし、他のルートを進めているようだ。

「何か主様のルートと全然違うね？」

ミツハがプレイしながら言う。

「恋人になるのかよ、興味無いんだよな……」

その言葉に隣で見ていたヨツバがどうでも良さそうに答えた。

私には存在しない男女間の恋愛感情だが、娘達には自然と生まれるかも知れない。

そう期待しているのだが……この様子ではまだ無理なようだ。

「これ、他のルート全部こんな感じなのかな？」

ゲームを一時停止したミツハがヨツバを見て言う。

製作側から聞いている話では私だけが特殊らしいからな。

「そうだったら私はもう止める、主様のルートだけで満足だし」

ヨツバはそう言いながら飲み物を飲んでいる。

「私は取り合えず全部やるー」

そう言ってミツハはプレイに戻った。

私もプレイしてみたが、ゲームとしては中々面白いと思う。

戦闘機での戦闘だが、レーダーに映っていない相手の位置が把握しにくいのはFPSに近い物を感じた。

ルートは自分以外を選んだが、歌姫との恋愛は全く興味が湧かなかったな。

友人ルートがあればよかったのだが、聞いた所によるとゲームのプレイ人口が大分男に偏っているらしく、どうしてもこういう方向になるらしい。

ある日、東京の自宅でくつろいでいると千穂から電話が来た。

「クレリアちゃん、ゲームやったよ！スカイレゾナンス！」

少し興奮した千穂の声が聞こえて来る。

「そうか」

「面白いゲームだね、続編に期待しちゃう」

「かなり売れた様だから本当に作るかも知れないな」

「クレリアちゃんのルートのクレリアちゃんは……クレリアちゃんだったね」

「そのまままで良いと言われたからな」

「続編が出たらクレリアちゃんもまた出るかも？」

「続編に同じキャラクターとして登場する事などあるのか？」

「結構あるよ？続編で前作キャラが登場して、主人公に手を貸したりするゲームも結構あるし。クレリアちゃんが遊んだゲームの中には無かった？」

プレイしたゲームの中にそんな描写があっただろうか？

「覚えていないな。しかし、そういう事ならば再び声がかかる可能性もある訳か」

「特にクレリアちゃんは表向きには年を取っても見た目が変わらな
い病氣、みたいな設定だったよね？それなら続編にそのままの姿で登
場しても平気そうな気がしない？」

「なるほど」

ゲーム内の私が現実の私と同じ様な設定なら、また出て来ても問題
無い訳だ。

「まあ、ゲーム自体が面白かったからクレリアちゃんが出なくても
私は買うけど」

「面白いなら当然だな」

「美琴はクレリアちゃんが出てるから気にはしてたみたいだけど、
元々あまりゲームしないからね」

「無理に薦めるなよ？」

「分かってるよー、私ももうお母さんになるんだしね」

彼女は穏やかな声で言う。

私は娘達に声をかけられるまで、しばらく電話で千穂と雑談をし
た。

私のアイドル活動は特に大きな問題も無く進んでいる。

京介と綾子が仕事を選び、人間のこなせる範囲に収めてくれているので、周囲に違和感も与えていないだろう。

複数の言語で歌を歌い始めた私は、日本でのライブだけでは無く海外でのライブなども頻繁に行い始めた。

新曲のリリースは複数言語での収録である事と、他の仕事が増えた事で数か月に一曲となった。

これは私の問題では無く、周囲の仕事が追い付かないからだ。

こうしてリリースした曲は全て、世界中でランキングのトップを独占している。

人気は上がり続け、世界中にファンが増え続けた。

行ける所まで行くつもりでいたが、一体どこまで行くのだろうか。

私は魔法人類が居た頃から容姿を褒められる事が多かったが、特に気にはしていなかった。

しかし、こうして多くの人類が私の容姿に夢中になっている事実を確認すると、私の容姿がこれだけの影響を与えているという事実にも少の驚きを感じる。

今まで気にしていなかった私の容姿の影響の大きさを、ある程度知る事が出来たのは良い事だと思う。

ただし、多くの人類に私の容姿が好ましく見えても、美的感覚が大きく違う種族には嫌われる事もあるだろう。

実際に人類の原住民の中には私の容姿を好まない者達がいたからな。

リリースした曲がランキングトップになっている事から分かる様に、私の歌う感情の薄い、一部の感情が抜け落ちている歌も世界で高い評価を得ている。

感想は色々であるが、大体「歌によって変わる声質と驚異的な声域、苦痛や悲しみなどの負の感情を感じさせない歌声が良い」というよう

な事を言われている。

ある関係者の話では、一般的には負の感情をテーマにした曲は感情を込めて歌う物らしい。

全く方向が違う私の歌が受けたのは、そういった事に負けずに生きて行くという意思を感じる所なのでは無いか、と話していた。

私はその話を聞いた時に、その様な意図は全く無いと答えた。

しかし、その答えを聞いた関係者は「例えクレリアさんにその様な意図が無くても、聞き手側がどう感じるかが問題なんですよ」と言っていたな。

収録する際、聞き手側がそう感じるように私に要望を出していたのなら、見事としか言えないな。

様々な事が出来る私だがこの件に関して「同じ事が出来るか」と言われれば「難しい」と答えるだろう。

海外でも人気が出た後は日本を始めとした世界各国のテレビ出演の依頼も以前より遥かに多く来ているし、映画の話も来ている。

ますます仕事が増える中、私は京介と綾子の事を考えていた。

私の魔法で体調は維持していたが、それでも二人は人間だ。

仕事が多すぎる事で流石に手が回らなくなるのではないかと思い、対処しようかと考え始めていたのだが、私が動く前にプロダクション側が動いた。

プロダクションから京介と綾子にサポートが用意される事になり、今後はサポートが様々な雑務をこなして二人を支える事になった。

それが間接的に私の仕事のサポートをする事になるという訳だ。

友人達は皆、私の人気を喜んでくれている。

千穂は満足げな表情で頷き、美琴は「正直ここまで行くとは思って無かった」と言っていた。

良平は喜びながらも「無理をしない様に」と言い、太一は「あつという間に俺より有名になったな」と苦笑いしていた。

千穂と美琴は妊娠中の為、最近は私が夫婦の自宅に行き、会話をしつつ母子の様子を見ている。

忙しいのに来ていて平気なのかと心配されたが、私が「時間など作ろうと思えば作れる」と答えると納得してくれた。

私がアイドルとして有名になり始めた頃、友人達にも一時期だが影響が及んでいた。

私の写真を持っている元クラスメイト達や同級生などが、次々と四人に連絡を取って来たからだ。

現在はもうそのような事は無いが、当時の四人は苦笑いしながら「自分達も皆の立場だったら同じような事をしてたかも知れない」と話していたな。

そう言えば、以前バトルグラウンド関係でも何かあったと耳にしたが、それ以降何も聞かないな。

私は現在、フラワープロダクションでの会議を終え、休憩室でくつろいでいる。

「クレリアさん!?!お疲れ様です!」

「お疲れ様です!」

すると、通りかかった新人のアイドル達が私に挨拶をして来る。

「お前達か」

「あの、少しお話しても良いですか?」

「良いぞ」

私がそう答えると彼女達も椅子に座る。

フラワープロダクションに所属した初期はその外見と話し方で遠巻きに見られ、人気が出てからは不穏な噂で遠巻きに見られていた私だが、今では慣れたのか良く話しかけられる。

新人達も必ず挨拶に来るし、こうして話をしたいと言って来る者達も増えた。

どういう事かと思っていたのだが……どうやら今まで私に余計な

事をしてくる者達を退けた事で、他のアイドル達も結果的に救ったようだ。

確かに京介と綾子から相談され、気まぐれに多少手を貸した事もあったな。

それがいつの間にか広がり、私は他のアイドル達から「業界の魔の手から守ってくれる心強い先輩」と思われるようになっていた様だ。基本的にアイドルは若い者達が多い。

その中に見た目は幼くとも、実年齢が30近い大人のアイドルがいれば頼りたくなる物らしい。

私は誰でも助けるといふ訳ではないのだが、悪意無く純粹に先輩として慕って来る新人達に多少甘くなっている、という自覚はある。

「クレリアさんはもう食レポとかはやらないんですか？」

彼女達の一人がそう聞いて来た。

「難しいだろうな。今は歌関係の仕事が多く、海外に行く事が多い。食事は嫌いでは無いのだが、そういったテレビ関連の仕事は優先度が低くなっている」

「そうなんですか……好きだったんですけどね、クレリアさんの食レポ」

「私も！絶対に素直に美味しいと言わないのが面白くて！」

「クレリアさんが「悪くない」って言った料理は美味しいって評判になってるもんね！」

そう口々に言う彼女達。

「クレリアさん、テレビで言っていましたもんね？」

「何の話だ？」

私は質問に心当たりがないので聞き返した。

「ほら、どうして美味しいって言わないか聞かれた時に「今の所、美味しいと言えるのは家族の料理だけだ」って言ったじゃないですか」確かにそんな事を言った覚えがある。

「それは間違いない。私は今も家族の料理が今まで食べて来た中で一番美味しいと思っている」

あくまでも私の感想だが。

「やっぱりそうなんです。私……クレリアさんの事、正直ちよつと苦手だったんですけど……あの放送で好きになりました」

彼女はそう言いながら微笑んで私を見た。

他の者達も微笑みを浮かべて私を見ている。

何となく年下を見る様な視線と気配を感じるな。

彼女達は私の年齢を知っている筈なのだが……それでもこの見た目ではこうなるのか。

家族の料理の発言に関してだが、恐らく彼女達は私の言葉の意味を誤解している。

私が家族の料理を美味しいと評価しているのは、家族が作っている事が理由では無い。

未だに、迷う事無く美味しいと言える料理を作れる者が娘達以外に居ないだけだ。

誰が作ろうと美味しい物は美味しく、不味い物は不味い。

様々な要因である程度感じ方が変化したとしても、それが評価に入る事は無い。

「お前達、一応聞いておくが何か予定は無いのか？私と話をしている遅刻した、などと言う様な事にはなるなよ？」

新人が意味も無くここにいるという事は無いだろう。

私は念の為、彼女達に聞く。

「あ……そうですね。そろそろ行きます」

「お話し出来て嬉しかったです」

「またよろしくお願いします」

私の言葉に、全員が次々と挨拶をして去って行く。

あの位の年の人類はとてにぎやかだな。

私はそう思いながら彼女達を見送った。

ふと、今でも騒がしい娘達の事を思い出すが、彼女達は人類では無いからまた別だろう。

「少し遅れるから待ってて欲しいって」

会議室にいる少女達の一人が電話を切って言う。

「そっか、じゃあしばらくゆっくりしてようよ」

少女達は雑談をし始める。

「今日はクレリアさんと会えるなんて思わなかったから驚いちやっ
た」

「そうだね、ちよつと前まで海外に行ってたから無理だと思ってた」
プロダクションの会議室で少女達が雑談を始める。

「ホント可愛いわよね。あれで三十手前って……」

「真似しようと思っただけ出来ないね……」

「始めは見た目と話し方のギャップが凄く驚いたし、笑わない
からちよつと怖く感じたけど……実際は優しいよね」

俯き気味の少女が言う。

「それに色々と悪い人達をやっつけてるって聞いたし……嫌ってる
人はただの嫉妬なんじゃないかなあ？」

別の少女が椅子に寄りかかりながら話す。

「歌もダンスも容姿も最高だからね……嫉妬もするでしょ。でも、
私達を始めとした新人アイドルが増えた原因は間違い無くクレリア
さんだと思うよ？」

そう言った少女を他の少女達が見る。

「それはそうかも……私はアイドルになるか迷ってたんだけど、決
断したきっかけはテレビで見たクレリアさんだったし」

「私はクレリアさんのファーストライブにも行ってるけどね」

「えー!？」

しばらく黙って聞いていた少女がそう言うと、全員が声を上げた。

「伝説の始まりって言われてる、あのファーストライブ!？」

「そうよ、クレリアさんの最初のファンは私よ」
得意げにそう語る少女。

「最初ってどういう事なの?」

「私はクレリアさんがデビューする前からファンなのよ」

「事前PVの時って事?それだったら最初とは言えないんじゃない

？」

そう一人の少女が言うが、彼女は首を横に振る。

「違うわ、私がクレリアさんのファンになったのは2010年よ」

「2010年……？クレリアさんはプロダクションに入って無い頃だよね？」

そう尋ねられた彼女は語り始める。

「今でもはつきり覚えてるわ。2010年にパパが大学から帰って来た時、構内で凄い美少女に会ったと話をしたの」

「あ！もしかして！」

察しの良い一人が声を上げる。

「まあ分かるわよね……。その時パパはその人を撮影していて、見せて貰った写真が……。当時23歳のクレリアさんだったのよ」

「そんな事、本当にあるんだ……！」

皆、驚いた表情をしている。

「……パパさん隠し撮りしたの？」

「する訳無いでしょ!?!……。パパが頼んだら嫌がる事無く撮影させてくれたらしいわ。そして……。それを見た私は衝撃を受けた、あんなに綺麗な女の子が居るんだって」

「その時にファンになったのね？」

「そうよ。聞いた当時は23歳だって知らなかったから、少し後にパパから年齢を聞いて混乱したけど」

「混乱する気持ちは分かるわ」

「PVを見た時、すぐに彼女だと気づいたわ。だって、見た目が全く変わってないんだもの」

「……本当に昔から姿が変わってないのね、クレリアさん」

「当時の写真をパパに頼み込んで貰っているんだけど、今と見比べても違いが分からないわよ？それに……」

彼女はクレリアの事を嬉しそうに語り始める。

「これは……。本当に最初のファンかも知れないわね」

一人がそう呟くと、周囲の少女達が頷いた。

2017年1月。

いつもの様に年末年始は娘達と過ごした。

海外からは「年末年始に自分達の依頼した仕事をしないのなら、どうなっても知らない」と言っただけで来た者もいた様だが、当然断った。

その際、相手に「何かするつもりなら、どうなっても知らない」という意味合いの言葉を伝えて貰ったが、どうなるだろうな。

年始も終わり、私は再び活動を再開する。

現在、私は見慣れたフラワープロダクションの会議室で、二人と話をしている。

「ゲームの仕事か」

「はい」

ある程度話もまとまった所で京介と綾子が話したのは、新しいゲームへの出演依頼だった。

「相手側は私の事を分かっているのか？」

「そこは問題ありません、スカイレゾナンスの件で業界で有名になっただけですから」

「そうか」

「説明しますね」

綾子がそう言って説明を始める。

「ゲームの名前は「学園幻想怪奇譚」と言います」

「学園と言う事は現代か？ いや、そうとも限らないか」

私が口を挟むと綾子が答えてくれる。

「現代では無い学園物もありますが、この作品は現代日本が舞台です。異世界へと繋がった世界から怪物が現れ、主人公は戦いに身を投じます」

「素直に警察に助けを求めれば良いと思う」

私がそう言うと、二人は苦笑いする。

「その部分に関しては何理由があるんです。設定では素質がある人間にしか怪物は見え、怪物が関わった事件は怪死事件として扱われ、警察も良く分かっているじゃないんです」

「そういう事か」

綾子の説明で私はある程度納得した。

見えていれば問題無かったのだろうが、見えないのなら話は別だ。人類の常識の外の存在を、見て確認出来ない相手に認めさせるのは難しいだろうな。

「こういったゲームを見ると、時々不安になる事がありますね」

突然京介がそんな事を言う。

「何故だ？」

私がそう尋ねると、二人が私を見る。

「僕達はクレリアさんの事を知っていますからね。いつか突然、創作が現実になるのではないか……そう考えてしまいますよ」
なるほど。

私のような存在を知ってしまえば、他の物が絶対に存在しない、などとと言える訳が無いか。

実際、私が様々な事を頭から否定しない理由の一つは「私が存在している事」なのだから。

「そうだな。私がこうして存在している以上、そのような事も絶対に無いとは言えないだろう」

「私もスマートフォン等でゲームをしている時に、ふと思えますよ。こんな世界も何処かにあるのかも知れないって、ただ……」

綾子は微笑みながら話をしていたが言葉を切り、少し不安そうな表情になる。

「何も知らなければ絶対に無い事だと思い、ただ夢を見ていられたと思いますけど……今では重さが違うといえますか……」

辛いという訳では無さそうだな。

「私の正体を知っている事が問題なら忘れさせる事も出来るが、どうする？」

「いえ、それは必要ありません。確かに不安ではあるんですが……どこか、ワクワクもしているんです」

私の言葉を真つ先に否定する綾子。

不安だが期待もしている、という事だろうか？

「それは分かる気がします。僕も不安に感じる一方で、今まで創作でしかなかった事が本当にどこかにあるのではないかと……気持ちが高揚するのを感じますからね」

京介はそう言って笑う。

創作の様な世界か……。

「あるかも知れないな」

私は二人を見て言う。

「え……？」

すると、二人は私を見て声を漏らす。

「人類が考えている神の様な存在がいる世界や、地球とは全く違う法則で成り立っている世界の存在は数多く確認しているからな。時間をかけて探せば二人が思い描いたような世界も見つかるかも知れない。少し探して見るか？」

私の話を聞くと、二人は引きつった表情を浮かべた。

その後、二人はかなり動揺し「本当に他の世界があるとは思わなかった」と、少し震えた声で言っていた。

二人は他の世界がある事を予想していた。

その予想が見事に当たったというのに、何故あれ程に動揺するのだろうか？

その後、今後の仕事の話に移ったのだが……いつもより時間がかかったな。

仕事の話を終えて自宅に戻った私は、風呂に入りながら今日の二人の事を思い出す。

明日会う時には元に戻っていると良いが。

そう思いながら、ゆつくりと風呂を楽しんだ。

ある時、久し振りに雑誌の取材を受けた。

その際、以前バトルグラウンドのトッププレイヤーであった「くれりあ」との関係を探ねられ、私はそれが自分である事を認めた。

質問した側も本気では無かったしく慌てていたが、そのまま使用され雑誌が発売。

かなりの数のファンとゲーム好きの間で私が「くれりあ」である事が知られ、しばらく話題となる。

そしてその話はファンの間に浸透し、世間にも私がゲーム好きであるという認識が広まった。

以前スカイレゾナンスに出演している上に、発売前の学園幻想怪奇譚にも登場するという話も広まっていた為、私のゲーム好きという印象は完全に世間に定着してしまった。

ゲームは嫌いという訳では無いが、堂々と好きと公言出来る程では無いと思う。

その事を京介と綾子に話すと「世界ランクのトップに長年君臨していた貴女が、今更そんな事を言っても誰も信じない」と言われた。

それからゲーム関係の仕事が急に増えたらしい。

ただ、今は歌に力を入れているため予定が合わず、今回は全て見送った様だ。

ある雨の日、ファーストライブブルーレイ発売の話在京介から伝えられた。

京介が言うには、私の人気が高まるにつれ、フラワープロダクションに「ファーストライブのブルーレイは出ないのか?」という問い合わせが増えて来ているという。

人気が出始めた頃から多少そういった問い合わせはあったらしい

が、流星に無視出来ない状況になり発売を急遽決定したという。

既に予約を開始しているが、予約状況はかなり良いらしい。

一部のファンからは「遅すぎる」や「他のアイドルは出してるのに何でクレリア様のは作らなかつたんだ」と多少の批判を受けたらしいが、ファンが待ち望んでいたファーストライブブルーレイの発売の喜びの声でかき消されたらしい。

現在、私は月の談話室でくつろいでいる。

始めは私の所に集まって話していた娘達も、今ではそれぞれに会話をしていた。

「クレリア」

呼びかけられた声に振り向くと、信長がいた。

「ここに来るとは珍しいな」

信長は大抵地球にいるし、月にいても談話室へ来る事は少ない。

「儂とて来る時は来る」

そう言いながら私の正面に座る。

「何かあったのか？」

私がそう尋ねると彼は不思議そうに言う。

「何か無ければ来てはいけない訳では無いだろう？」

「そうだな」

珍しく来たから何かあったのかと思ったが、それなら念話でも済む話だ。

本当にただ気まぐれに來ただけなのだろう。

それを咎める気はない、私も気まぐれに色々としているのだから。

「大人気だな」

彼はそう言うと、マジックボックスから日本酒らしき物を出して飲み始めた。

「アイドルの事か？」

「うむ、まさかお主があのような事に興味を持つとは思わなかつたぞ」

酒を置き、信長が私を見る。

「今の人類と文化は今だけの物だからな、色々やってみようと思っただ」

「確かにそうだ！……世界は儂が人であった頃から大分変わった。これからも変わるのだろうか」

彼はしばらく笑い、それから遠くを見る様な目をした。

「あら？珍しいわね。貴方がここにいるなんて」

そう言いながらカミラが歩いて来る。

「カミラか……クレリアにも言われたぞ」

「言われて当然よ。貴方滅多に談話室に……いえ、それどころか月にも殆ど居ないじゃない」

カミラは私の隣に座り、侍女に飲み物を頼む。

「儂がどこに居ようと大して変わらんだろう。転移も出来るし念話もある、事によってはこ奴に強制的に呼ばれるのだ」

そう言って私に目を向ける信長。

「その通りだ」

私はこちらに視線を向けた彼に言う。

「そろそろ念話で言おうと思っていたのだけれど、居るなら丁度いいわ。信長に聞きたい事があるの」

「何だ？」

信長は視線をカミラに移す。

「貴方、ずっと地球を旅して回っているけど……すっかり誤魔化しているわよね？」

「……余計な真似はしておらんぞ？」

「そう……姿の変わらなない東洋風の男は貴方では無いのね？」

信長は少し考える仕草を見せると、カミラに言う。

「儂は、何か見落としていたのか？」

「どこで誰が見てるか分からない物よ？人に紛れて過ごしていれば、なおさらね。これ位はかまわないけれど、出来るだけ気をつけなさい」

「分かった、気を付けよう。儂とした事が……ぬかったな」

その言葉から、悔いる様な気配を感じる。

「何言ってるの、ここでは貴方は子供の様な物よ？多少失敗しても、私達が何とかするわ」

「……そうであったな。世話をかけた」

信長はそう言つて酒を飲む。

「信長が人では無いと知られても、私達には問題無いと思うが」

私がそう言つと、カミラが私を見て話し出した。

「問題はあると思うわ。信長の存在が知られると、恐らく人類は今まである訳が無いと思ひ込み、全く考えていなかった事を考え始めるようになるわ。そんな中でお母様が今までの様に行動すれば、誰かがお母様も同じような存在なのでは無いか、と考える筈よ」

なるほど、そうかも知れない。

「クレリアの異常性が認知されやすくなるか？」

信長がそう言つと、カミラが答える。

「そうよ。お母様が人類の中で人として過ごすには、私達のような存在がいるという事を知られ過ぎてはいけない。噂や都市伝説程度ならいいけれど『そういった者がいる』と人類に認知されたらお母様が動きにくくなってしまふわ」

「儂から見るとクレリアの活動は人間離れしていると感じる所もある。しかし、人類の間でそういった者の存在が信じられていないからこそ、誰もが考えず、気にしない……そういう事か？」

「そんな感じね。まあ……実際は人類に知られようとお母様が良いと言ふならそれでいいのよ。ただ、それをお母様が望まない内は出来れば避けたいの」

カミラは色々と考えてくれている様だな。

「カミラ」

「何？お母様」

私は立ち上がると、久しぶりに彼女の頭を胸に抱き寄せ、頭を撫でた。

「ありがとう」

「……うん」

「そういえば、親愛は存在すると言っていたな。外見的には逆だが……こうしている時は仲睦まじい母娘にしか見えんな」
カミラを抱いている私に、信長の呟きが聞こえた。

私のファーストライブブルーレイは無事に発売された。発売直後から驚異的な売り上げを出し、今も更新されていると報告を受けている。

プロダクション側は今の人気からある程度予想していたようだがそれを上回ったらしく、今後塗り替える事が出来るか分からない様な記録が出ていると言っていた。

そして、私がアイドルとして活動している間も世界の時は進み続ける。

現在、私は病院の分娩室に居る。

目の前では美琴が出産の真つ最中だ。

2017年9月9日の早朝に「美琴に陣痛が始まった」と侍女から連絡があった。

太一はどうしても外せない仕事で不在だったため、私は念の為に侍女の一人を付けておいた。

本人は少しの間くらい平気だと言っていたが、どうやら間違っていないかった様だ。

「呼吸を整えて！」

「ううう……ああああ！」

看護師の言葉に叫び声で答える美琴。

「旦那さんに連絡は？」

「しました。向かっているようですが、到着前に生まれそうですね」
冷静な医師と看護師が会話している。

私は姿を消して分娩室で様子を見ているが、美琴から大きな不安を感じている事が分かる。

太一がいな事が影響しているのかもしれない。

私は姿を消したまま、そつと美琴の手を握る。

すると彼女は一瞬、痛みを忘れた様な表情で握られた手を見た。実際に痛みが無くなった訳では無い。

痛みを無くす事自体は出来るが、以前友人に「出産の痛みは出来るだけ消さないように！」と叱られてから行っていない。

私は耳元で囁く。

「太一はこちらへ向かっているから安心しろ」

「あ……りがと……うう……」

彼女はかすれた声で呟く、叫び過ぎたのだろうな。どうやら不安は消えた様だ。

私は生物の出産には多少の思い入れがある、私が生命と魂を知る切っ掛けとも言える出来事だからな。

美琴は私の手を握り締めながら出産した。

その後、太一が息を切らしながら到着し二人共喜びを爆発させていた。

私はそんな二人に言葉をかけてから家に帰った。

美琴が出産を終えてから七日後の9月16日の夜。

今度は千穂が陣痛に襲われた。

陣痛が起きた際、千穂の元には良平がいたので病院へ連絡し、共に病院へ向かった様だ。

私は美琴の時と同様に、分娩室で姿を隠して様子を見ている。

「痛い！痛い……！良平！」

「旦那さんは声をかけてあげて下さい」

「千穂！傍に居るから！頑張つて！」

叫ぶ千穂に声をかけるように看護師に促され、必死に声をかける良平。

「千穂、お前も赤子も健康状態は良好だ、安心して生むと良い。良平、お前が折れれば千穂は抛り所を無くす、心を強く保て」

「はっ……はっ……クレリア……ちゃん？」

「傍に居てくれたみたいだね……」

「うん……」

私が周囲に聞こえないように不安そうな二人へ声をかけると、二人は見つめ合って表情を緩めた。

千穂の方は痛みで辛そうだが、それでも二人に在った不安は消えた。

それから千穂も問題無く出産を終えたが、生んだ時には日を跨ぎ17日になっていた。

その後特に何かが起こる事は無く、二人と赤子達は無事に退院した。

千穂と良平の子は女、美琴と太一の子は男だった。

子供は葉子、健太と名付けられ、大切にされている。

2017年12月16日には学園幻想怪奇譚が発売された。

ある程度の時が経った今も、売り上げは悪くない様だ。

娘達は私の関わっている物は手に入れていて、このゲームも予約購入していた。

ゲーム業界では私が出るゲームは売れると言われ始めているようだが、それは関係無いと思う。

学園幻想怪奇譚について語る

1：名無しのゲーム好き

発売からそれなりに経ったし語ろうぜ

2：名無しのゲーム好き

面白い、仲間も個性があるし、ストーリーも良かった。

3：名無しのゲーム好き

クレリアはクレリアのままだったな。

4：名無しのゲーム好き

演技が出来なくてそのまま登場してるってマジ？

5：名無しのゲーム好き

あの性格と反応が素なのは間違い無い筈だから……演技が出来ないのか、そのまま出て欲しいと言われたのか……その辺はよく分かんね。

6：名無しのゲーム好き

他の仲間キャラが色々起こる出来事に対して驚いてるのに、一人だけずっと反応変わらなくてワロタ

7：名無しのゲーム好き

彼女らしいって言えばらしいけど、これで良いのか？

8：名無しのゲーム好き

素晴らしい売り上げ成績が全てを語ってる

9：名無しのゲーム好き

まあ売ればいいよな。今までこんなキャラ居なかったし、それが良かったんじゃない？

10：名無しのゲーム好き

世界の破滅を目の前にしても大して気にしないクレリア様……流石です

329：名無しのゲーム好き
ずっと思ってたんだけど、クレリアが歌で強化とかするのは分かるけどさ。ダメージ与えるって事はめっちゃ音痴に歌ってんのかな？

331：名無しのゲーム好き
音波的な物じゃね？それか不思議パワー

332：名無しのゲーム好き
不思議パワーとは一体……

333：名無しのゲーム好き
クレリアなら不思議パワー使っても驚かんな

334：名無しのゲーム好き
せやな

335：名無しのゲーム好き
ネタばれになるけど、クレリアは予想通り恋愛系のエンドは無かったな。

336：名無しのゲーム好き
徹底して恋愛要素を排除してるよな

337：名無しのゲーム好き
俺的には全然かまわないけどな。アイドルなんだから無い方が良いのは間違い無いだろうし

338：名無しのゲーム好き

女主人公だと若干百合っぽいエンドあったな

339：名無しのゲーム好き

もしかしてクレリアは同性愛者？

340：名無しのゲーム好き

それはそれでいい

ある冬の日の午後。

私は静かな公園を千穂、美琴と共に散歩している。

二人が押すベビーカーで寝ている葉子と健太は、問題無く成長している様だ。

出産後、初めて私が二人の家に行った時は出産時の事を感謝された。

電話で既に感謝はされていると伝えたが「直接感謝の言葉を伝えなかった」と言われたのでそれ以上は何も言わない事にした。

「赤ちゃんを育てるのは想像以上に大変だわ……太一も協力してくれてるから何とかなってるけど」

「私も良平がいなかったらと思うと……でも、可愛いよね」

「まあね……」

二人は初めての育児で大分疲れているようだな。

「限界を迎える前に相談しろ、多少ならば手を貸そう」

「クレリアちゃんは赤ちゃんの面倒見れるの？」

そう尋ねる千穂に私は答える。

「私がどれだけの赤子を見て来たかと思っている。実際に生んだ事は無くても、子守りの経験だけならどの人類よりもあるぞ」

「あー……なるほど」

私の言葉を聞いて美琴が声を上げる。

「クレリアちゃんは人間なんか相手にならないベテランさんだった……っ。」

千穂は驚きの表情で私を見た。

「そういう事だ。どんな事でも助けるといふ訳では無いが、最低でも助言はしよう」

「ありがとう、心強い相談相手がいると気が楽になるわ」
そう言っつて美琴が微笑む。

その雰囲気と表情は、これまで見て来た母親達と良く似ていた。

私は公園内のベンチに座り、授乳する二人を見ていた。

今は授乳服と言う専用の服が販売されている。

二人もこの授乳服を着ているが、見た目は普通の服にしか見え無い。

それが良いらしいが、私は今もファッションにあまり興味が無いので特に言う事は無い。

私は装飾過多な服が好みでは無いため、アイドルとして着ている衣装は一般的なアイドルと比べ大人しい。

それでもまだ装飾が多いと感じてはいるが、その辺りはアイドルをするのなら避けては通れない様だ。

「大人気のクレリアちゃんがこうして公園を歩いても全く騒がれないなんて、魔法って便利だよな」

千穂が授乳しながら美琴に話しかける。

「そうね、もし見つかつたら大騒ぎだよ」

私が外でも問題無く過ごす事が出来ているのは魔法を使っているからだな。

そのせいか、世間からはプライベートが全く不明なアイドルと言われている。

世界の大半が私の事を知っているにもかかわらず、目撃情報が全く

無いのだから当然かもしれないが。

「友人と過ごす時間を邪魔されたくはないからな」

私の言葉に、二人は乳を飲む我が子を見ながら答えた。

「健太がいる時に騒がれると困るから助かるわ」

「そうだね。うるさいと葉子も泣いちやうと思うし」

現在の二人の中心は我が子のようだ。

今まで見て来た母親達も大体そうだったな。

授乳を終えると、私達は帰宅する事にした。

赤子に無理をさせないためだ。

二人と別れた後、私は彼女達が問題無く自宅に到着したのを確認し、遠視を切った。

年が明け、2018年の1月に入った。

アイドルとしての活動も五年目になり、人としての年齢も30を超えているが人気は衰えていない。

見た目が若ければ実年齢はあまり関係無いらしいな。

一部のファンには「合法ロリ」や「ロリババア」等と言われているようだが。

年齢はともかく、性別は存在しないので婆では無い。

現在、私はフラワープロダクションでいつもの様に京介、綾子と話をしていた。

「今年はデビューしてから五年目という事で、五周年記念ライブツアーが予定されています」

京介がいつもの様に説明してくれる。

「いつものライブと何か違うのか？」

「やる事自体は変わりません。ただ、一回のライブの時間が多少長くなり、ツアー期間が伸びます」

「その程度なら問題は無いな」

ライブが一年だろうと百年だろうと、私には関係無いからな。

「人間であればかなりきつい事なんですけど……クレリアさんからすれば大した事では無いでしょうね」

京介は苦笑いしながら話す。

「困る事は別にあるからな」

「恋愛関係とファクション関係ですわね」

「そうだ」

「アイドルでファクション関係が気にならないのも珍しいですけど……それは人間の女性の話ですわね」

私を見ながら綾子が口を挟む。

「いつかフアツション関係に興味を持つ時が来るかもしれないが、少なくとも今は何も思う事は無いな」

「恋愛関係は、私達としては助かりますけど」

綾子達からすれば、担当しているアイドルの男女関係に一切気を使わなくて良いのだから楽だろう。

「フアツション関係に関しては興味が無いだけで分からない訳では無いが、男女間の恋愛感情に関しては分からないままだ。分かるようになる可能性は絶望的と言える程に低いかも知れない」

「それが良い事なのか、悪い事なのか……人間の私には分かりませんけど……」

綾子が申し訳なさそうな表情をして言う。

「好意を向けられる事自体は嫌では無い。しかし、そういった感情を向けられても私には理解出来ないからな。……そう言えば、京介からは感じる物はまた別な物だな」

彼から感じる感情は、人間の雄や友人から向けられる物とは違う。

「担当アイドルにそういった感情を抱くのはプロデューサー失格です。僕は担当アイドルに愛情を持つてはいますが、それは男女間の物とも友人に対する物とも言えないと思います。……さて、時間もありませんし……そろそろ続きを話しましょうか」

京介は途中で腕時計を見てそう言うと、話を進めた。

その後、色々と仕事についての話し合いを行い、後はいつも通りあの二人の手腕に任せる。

今回は新しいゲームの仕事が入った。

「剛拳」と言う、3D対戦格闘ゲームだ。

娘達は恐らくこれも買うのだろうか。

今年行われる私の五周年記念ライブツアーの期間は、約三か月だ。デビューした月である九月を挟み、八月から十月にかけて行う事に

なっていて、既にライブツアーに向けて周囲は動き始めている。
そんな中、私は仕事で剛拳のモーションキャプチャーを体験する事になった。

現在、私は専用の服に着替え、広いスタジオで説明を受けている。
「動いて頂くと分かりますが、クレリアさんの動きがそのまま正面のスクリーンに表示されているキャラクターの動きになります」
スタッフの言葉を聞いて、軽く手を振ってみる。すると正面のキャラクターも同じように手を振った。

足を上げると、キャラクターも足を上げる。

この服は私の動きを把握する為の物なのだろうな。

私が着ているこの服は体にフィットした黒に白いラインが入っている服で、所々に丸い物が付いている。

「では、今回のクレリアさんのモーションキャプチャー体験は剛拳の初回特典映像に使う事になりますので」

「話は聞いていますので問題ありませんよ、本日はよろしくお願いします」

軽く手足を動かしながらスタッフと綾子の会話を聞いていると、声がかかった。

「クレリアさん、少しだけ指示に従って動いてみて下さい」

「分かった、世話になる」

それから私は指示に従い、座ってみたり、軽く飛び跳ねたりと、様々な動きを行った。

「それでは、クレリアさんの好きな様に動いてみて下さい」
ある程度動いた後、スタッフからそう告げられる。

「では、そうさせて貰おう」

「では、そうさせて貰おう」

クレリアさんはそう答えると、いきなりバク転をした。

「おー……」

思わず感嘆の声を洩らす。

いきなりバク転した彼女を見て、周囲からも声が上がっている。ここではこれくらい出来る人はよく見るけど、アイドルで軽く出来るのは凄い方なんじゃないかな？

そう思っている、今度は前宙をする。
やるなあ。

「凄いですねークレリアさんー！」

周囲で見ていた女性スタッフが声をかける、彼女はクレリアさんの大ファンだから見れて嬉しいだろうな。

俺も彼女のライブを見た事あるけど……ライブじゃこんな動きはしないから、これ程運動神経が良いとは知らなかった。

しばらくすると、誰も何も言わなくなった。

彼女の動きが段々とおかしくなり始めたからだ。

専門のプロでも難しそうな動きを軽々とこなす彼女……色々と凄いアイドルであるとは思っていたけど、想像を超えている。

「クレリアさん、そろそろ……」

「分かった、あと一つ試したら終わる」

誰もが見入る中、彼女のマネージャーさんが声をかけた。

最後に何をするつもりなんだろう？

そう思い、俺は更に注目したが、彼女は暫くただ立っているだけで特に何もせずキャラクターの方を見ていた。

「ありがとう、今日は楽しかった」

すると、突然彼女は私達に礼を言いマネージャーの所へ向かう。

そしてその後、彼女は後片付けと挨拶を行い帰ってしまった。

……何だったんだ？

そう思いながら、これからの仕事の事を考えていると、スタッフ達から声が上がった。

「何だ？警告が出てる」

俺は彼らの元に向かい、声をかける。

「どうした?」

「ん? ああ、キヤプチャーソフトに警告が出ただけだよ。でも……この警告は初めて見るな」

「何の警告なんだ?」

「ちよつと待ってくれ」

俺が尋ねると彼が調べ始める。

「分かった。対象のモーションを認識出来なかった時に出る警告だな」

「何で今、それが出てるんだ?」

「んー……分からないな。ちよつと確認した方がいいかも知れない」

それから調べたが特に問題は見つからず、原因は謎のままになった。

クレリアさんが何かしたのかと思ったが、彼女は何もせずに戻っているし……。

まあ……何かがあったんだろう。

俺はそう考え、次の予定をこなすために移動を始めた。

私は帰りの車内で考える。

綾子に声をかけられた後、最後に少し速めに動いてみたがキャラクターが同じように動く事は無かった。

反応出来る速度は大分低い様だ。

「体験した感想はどうですか?」

綾子が運転しながら話しかけてくる。

「新しい技術を体験するのは中々面白かった」

魔法人類にこういった技術は存在しなかったからな。

「私は魔法の方が面白いと思いますけど……」

「魔法が面白い物である事是否定しないが、今の私は人類の先に期

待している」

以前譲って貰った宇宙を航行可能な戦艦は、魔法を使用する物では無かった。

あの艦に使われている技術と人類の使う技術が同系統の物かは分からないが、私はかなり近い物だと考えている。

もしそうならば、いつか人類も彼らの様に生まれた惑星を離れ、宇宙に広がるかも知れない。

「人類の先……ですか？」

人類の技術について考えている私に、綾子が言う。

「そうだ。私は興味を持っている間は、人類の進化と繁栄を見続けようと思っている」

「それは……そうですね……未来の人類は一体どうなっているんでしょうか……」

綾子は何かを言いかけ言葉を切り、未来を思う言葉を口にした。

「気になるのか？」

私はその事を指摘せず、尋ねる。

「それは、気になりますよ……。多くの人は一度くらい考えた事があると思いますよ」

「その辺りの感覚は私と似ているのかも知れないな」

知的生命体の進化と繁栄、衰退を見るのは中々面白い。

その上長く楽しめる。

人類も自身の未来に期待しているのだろう。

それからプロダクションに帰るまでの間、私は綾子との雑談を楽しんだ。

長く続いたクレリアさんの五周年記念ライブも終わりに差し掛かっている。

スタッフとして三か月の間クレリアさんのライブツアーについて回ったけど、彼女は今世紀最高のアイドルと言っても過言じゃない。きつとこのライブツアーは伝説になるんだろうな。

……最初に聞いた時は無茶だと思った。

一つ一つのライブ時間を伸ばした上に、回数も、期間も伸ばすと言われたんだから無理も無いと思う。

いくらクレリアさんの体力が凄くても、多くの関係者は思ったはずだ。

「最高のアイドルに無茶をさせて潰すつもりか」……と。

でも、まさかあの本人が説得しに来るとは思わなかった……。

突然会議に現れた彼女は、プロダクション側の独断では無く、自分が問題無いと判断して引き受けた事を話した。

本人にそう言われては私達も引き下がるしか無く、予定通り五周年記念ライブは実行された。

今となつては無駄な心配だったと思う。

むしろハードスケジュールで、私達の方が危なかった……。

クレリアさんの差し入れが無かったら、私達は今ここにいなかったかも知れない。

気のせいかも知れないけど、クレリアさんの差し入れを食べた後は妙に調子が良かった気がするんだよね。

彼女は今まで、全てのライブで最高と言えるパフォーマンスを發揮している。

この無謀とも言えるライブツアーでもそれは変わらず、まるで疲れなど無いかの様に常に最高のステージを見せてくれていた。

この先、これ程のアイドルが現れる事があるのだろうか？

そう思ってしまう程に彼女は凄い。

女である私でも魅了される美貌、歌声、ダンス。

そして、その外見とは裏腹な男らしいとも言える性格と歯に衣着せぬ物言い。

まあ……空気を読めないと言えばそれ迄なんだけど。

でも、言いたい事を言えずに心の内に閉じ込めていた私には、彼女の歯に衣着せない言葉は爽快に映った。

恐らく私以外もそう感じたんだと思う。

そうじゃなきゃ全世界でこれほど彼女が支持される事は無かったんじゃないかな？

……やっぱりそんな事は関係なく人気は出たね……うん。

彼女は独特の感性を持つているけど、言っている事はそれ程おかしな事では無かったし……そういう所も受け入れられた理由なのかも。

勿論、中には全く理解出来ない事もあったし、共感出来ない事もあったけど……。

彼女に対する一般的なイメージは、ぶっきらぼうで冷たい、といった物が多いと思う。

でも、長く関わっていると……何と言うか……。

そう……未熟な孫を諭す祖母の様な……そんな雰囲気を感じる事があるんだよね。

まあ私がそう思っているだけだし、そんな事を感じるのは失礼なのも分かってる。

彼女はまだ30代前半だし、結婚もしていなければ子供もいない。

今度の休みは一度実家に帰ろうかな……。

今も目の前で休憩している彼女を見るとそんな気持ちが湧いて来る。

失礼かも知れないけど、クレリアさんはいいお母さんになりそうだよね。

三か月に渡った五周年記念ライブツアーは問題無く終了し、私は自宅できつろいでいる。

ツアー期間中は私よりも周囲の人員の負担が大きかったように感じるな。

念の為、ライブツアーが失敗しないようにスタッフ達を少し手助けしたが、その判断は間違っていなかったと思う。

大きなイベントであったツアーが終わった事で、一度仕事は落ち着いた。

近い内に残っているのはゲーム関係の仕事だけだ。

少しずつゲーム関係の仕事が増えている気がする。

今回のゲームはアイドル育成ゲームで、名前は確か……「アイドルストーリー」という名だった筈だ。

どうやら私の立ち位置は育成対象では無く、隠しライバルという扱いらしいが。

更に私の実力をゲーム内で再現する為に、近い内に簡単な能力測定をする事になっている。

これはある程度人類の範囲内で納めておけば問題は無いだろう。

アイドルストーリー開発会社の会議室で、社員達が集まり話し合いをしている。

「この結果は……本当なの？」

「間違いありません。多くのスタッフが見ている中で出した結果です」

「彼女は今世紀最高のアイドルと言われているけど、この結果を見ると納得出来るね……」

彼らの声には隠しきれない困惑の色が含まれている。

「結果から分かると思いますが、実際に見ると良く分かりました。

……彼女が人類最高の才能を持っている事は間違い無いと思います」

「それで……どうするんだ？」

その言葉の後、しばらく無言の時間が過ぎる。

「……ゲーム内での能力の事ですね？」

「クレリアさんの実力を再現する、という契約をしている以上……今変更は出来ません」

「……こちらの方針を変更するしかないでしょう。能力次第で勝てるようにする予定でしたが、現在のトップアイドルにプレイヤーが育てたアイドルで力試し出来る……という方向にしようかと考えています」

社員の一人が静かに話す。

「プレイヤーが絶対に勝てない相手をゲームに出す事になるとは……」

別の社員が眉間に手を当てながら言う。

「……これ程とは想定していませんでしたからね」

「既にクレリアさんが本人の能力を再現した状態で登場する、と宣伝もしてしまいましたし……こうするしかないと思います」

「ふう……。詳しい事はまた検討するとして、取り敢えずその方向で進めましょう」

「はい、では次ですが……」

社員達の会議は続いて行く。

五周年記念ライブツアーが終わり、約一か月程が過ぎたある日。東京の自宅でくつろいでいる私のもとにジャンヌがやって来た。

「よく来たな」

「お邪魔します、主様」

「膝きながら挨拶をするジャンヌ。」

「座ると良い」

「はい」

私がソファに座るように促すと、彼女は私の対面に座る。

「本日は主様に協力を頼みたく、やってまいりました」

今日は用があるようだ。

娘達は特に用が無くても私に会いに来る。

それはジャンヌも同じで、他愛もない話に花を咲かせたり、時には共にゲームをプレイする事もあった。

たまに信長もやって来るが、ジャンヌや娘達と比べるとかなり頻度は低い。

「話せ」

「はい、ではまずこちらをご覧ください」

そう言っただけでジャンヌは懐からスマートフォンを取り出し、操作してから私に見えるようにテーブルへと置いた。

「……これがどうした？」

スマートフォンには「今世紀最高のトップアイドル遂に参戦！近日公開予定！」という文字が映っている。

これは綾子がやっている「ドゥーム・ナイトワールド」の告知画像だな。

この仕事を了承したのは一昨日だったはずだが、事前に告知の準備だけはしていたのだろうか。

「これは主様の事だと考えておりますが……間違いないでしょうか？」

「そうだ。一昨日、話があつて了承した」

「やはり！これで主様と肩を並べて戦えます！」

突然興奮するジャンヌ。

「訓練でも時々共闘しているだろう」

「そこまで喜ぶ事だろうか。」

そう思いながら私は話の続きを促す。

「ジャンヌ、本題を話せ。協力とは何だ？」

「……申し訳ございません」

私の言葉に、彼女は落ち着きを取り戻す。

「実は……主様もこのゲームで私と共に戦っていただけなのかと……」

「それをわざわざ言いに来たのか？念話や電話で一緒にやりたいと言えればいいだろう」

私がそう言うと、ジャンヌは姿勢を正して話す。

「主様に協力していただくというのに、その様な真似は出来ません」
今まで散々一緒にゲームをしているのだが……彼女の中では別な
事の様だ。

私はその事に対して特に何か言う気は無い、彼女には彼女の基準が
あるのだから。

「構わないぞ」

私は彼女の誘いにのった。

プレイするゲームが違うだけで、今までと何も変わらないからな。

「ありがとうございます！では早速インストールしてフレンド登録
を……！」

彼女は聖女のような微笑みを浮かべて早口に手順を説明し始めた。

「分かった」

こうして、私はジャンヌと共にドゥーム・ナイトワールドを行う事
を決めた。

数日後、ジャンヌから私の参戦を聞いた娘達もプレイを開始し、
ドゥーム・ナイトワールドのフレンド欄はジャンヌと娘達で埋まっ
た。

ジャンヌがアプリゲームで遊ぼうと誘って来た日から時は過ぎる。2018年12月28日には「剛拳」が発売され、話題となった。その話題の中心となったのは、剛拳に登場した私がモデルのキャラクターだったらしい。

どうやら、背が低いため一部の攻撃が当たらない上にキャラ性能も高い、という事で「ゲームバランスが悪い」、「最屑」といった意見が寄せられ、インターネット上でも批判が起きたという。

それに対して剛拳の開発元は「クレリアさんご本人の能力を考えると、あれ以上弱くは出来ない」と発表したという。その発表によって更に騒ぎは大きくなった様だ。

しかし、初回特典映像である私のモーションキャプチャー体験映像の一部がニューチューブに投稿された事で、騒ぎは終わったという。これらは全て後から聞いた事で、当時の私はまったく気にせず過ごしていた。

剛拳について語る

1：名無しのゲーム好き
皆で剛拳について語ろうぜ。

2：名無しのゲーム好き
毎回、登場する度に話題を作る今世紀最高のアイドルさんについて言いたい。

今世紀どころか人類史上最高だよ。

3 : 名無しのゲーム好き

初回特典映像見た時合成だと思ったわ

4 : 名無しのゲーム好き

公式が加工して無いって断言したからな

5 : 名無しのゲーム好き

アイドルってあんな無茶苦茶な動きするもんだっけ……？

6 : 名無しのゲーム好き

彼女はアイドルじゃなくて超人だから…… (震え声)

7 : 名無しのゲーム好き

何なのあれ？所々CG使ってるような動きしてたけど……重力どころ行った？

8 : 名無しのゲーム好き

クレリア様にとって重力など飾りよ

9 : 名無しのゲーム好き

実際の所どうなの？

10 : 名無しのゲーム好き

体操で一応良い所まで行った俺の意見だと、理論上人類にも出来る動きだと思う

11 : 名無しのゲーム好き

理論上？

12 : 名無しのゲーム好き

普通はまず出来ない

13：名無しのゲーム好き
彼女はやってるけど

14：名無しのゲーム好き
あんまり詳しくない人は凄いで終わると思うけど、詳しくければ詳しいほど彼女がどれだけおかしい動きをしているか分かると思う

15：名無しのゲーム好き
へえー、でも普通に出来る動きなんでしょ？

439：名無しのゲーム好き
何度見ても凄いなこれ、アスリートより凄いなじゃね？

440：名無しのゲーム好き
今更だけど「クレリアさんご本人の能力を考えると、あれ以上弱くは出来ない」っていう公式の言葉は本当だったんだなって

441：名無しのゲーム好き
剛拳自体がリアル系の格闘ゲームだからな、特典映像みたいな動き
されたら困るだろ

442：名無しのゲーム好き
あのまま使ったら一人だけゲームが違う状態になるな

443：名無しのゲーム好き
あれを見る限り、本人も相当強いんじゃないか？それこそ並の格闘
家じゃ勝てない程

444：名無しのゲーム好き

プロの格闘家を舐めるな、動けるだけの素人じゃ無理だよ

445：名無しのゲーム好き

いつもの表情でサクッとプロを倒す彼女が想像出来て怖い

446：名無しのゲーム好き

雰囲気だけならラスボスだからな

447：名無しのゲーム好き

特典映像見てないのかよ。あれ見て雰囲気だけって言うならお前
おかしいぞ

448：名無しのゲーム好き

彼女は裏ボスだから

449：名無しのゲーム好き

可愛くて男らしい上に強いとか最高かよ……結婚したい

450：名無しのゲーム好き

なお本人は恋愛に欠片も興味が無い模様

2018年の年末も私はいつもの様に娘達と過ごした。

2019年に入った後、1月はライブで世界各地を回っているだけで過ぎ、既に2月に入っていた。

そして現在。

私はプロダクションの会議室にいた。

「これで音楽関係の事は終わりです、次はゲームの仕事の話をしま

しょうか」

京介がそう言いながら資料の一部を片付ける。

「今度は何だ？」

「以前出演したスカイレゾナンスの続編です」

京介がそう言うのと、彼の隣にいる綾子が説明を始める。

「タイトルは「スカイレゾナンス・インフィニットブルー」と言いま
す。制作は既に発表されていますが、詳しい情報はまだ公表されてい
ません」

「本当に続編に呼ばれたな」

「今回、再びクレリアさんに声がかかったのは、人気投票で一位だっ
たからですね」

「そうか」

「……クレリアさん、人気投票の結果は見ましたよね？」

そう言えば見た様な気がするな。

「今、思い出した」

私がそう言うと、綾子が少し怒った様な、呆れた様な表情で言う。

「もう……アイドルなんですからその辺りは気にして下さいよ
……」

「気にしない私だったからこそ、ここまできたのではないか？」

「う……それは、まあ……そうかも知れませんが」

私の言葉に口ごもる綾子。

「人気の事など気にしない自由な態度と言動がファンの心を掴んだ
のでしょうね」

私達の会話を聞いていた京介が言い、更に付け加える。

「後は、第一印象が良かった事が大きいと思います」

「第一印象か……」

「クレリアさんは文字通り、人外の美しさですからね」
微笑みながら語る京介。

「私も今ならばどういいう事か分かる」

「残念な事です……同じ事をやっても、見た目によって大きく効
果や受け取り方が変わります」

「そうだな」

私も長い間理解出来なかったのだが、今では人類が外見の影響を大きく受ける事に気が付いている。

「外見が好みであれば好意的に受け取られ、好みでなければ反感を買う、という事だろう?」

「そうです。外見だけが全てだと言う気はありませんが……クレリアさんがここまで美しくなければ、これ程に支持される事は無かったですでしょう」

「この姿は私が目を覚ました時から全く変わっていないし、今ではすっかり定着している。この姿が原因で巻き込まれる事もあるが、今更多少の弊害がある程度で姿を変える気にはならないな」

「……え?……姿を変えられるんですか!?!」

私の言葉を聞いていた綾子が声を上げた。

「変えられる」

「何で言ってくれなかったんですかあ!?!」

何やら悲しそうな表情だが、興奮し始めている事が分かる。

「特に理由は無いな」

「早く言っして下さいよ!それが可能なら誰にでもなれるって事ですよね!?!どんなキャラにでも!」

私の答えに、綾子は興奮したまま言う。

大体何を言いたいかわかる辺り、私も知識がついて来たな。

「綾子が言いたいのは、私がいれば二次元のキャラクターを現実で見ることが出来る……という事だな?」

「その通りです!クレリアさんお願いします!なって欲しいキャラクターがいます……!」

「断る」

「そんな!?!」

「僕も驚きましたが……クレリアさんですからね」

私に頼み込む綾子を見ながら、京介が呟いた。

私は京介と共に興奮する綾子を落ち着かせ、仕事の話を再開した。

「スカイレゾナンス・インフィニットブルーは、前作から数十年後の物語です。クレリアさんは「加齢で姿が変わらない特殊な病気」という設定で、前大戦を戦い抜いた元歌姫として登場します」

落ち着いた綾子が説明をしてくれる。

「詳しい話は別の日に制作側の方を交えて行いますが、今回は今作の主人公達の手助けですので、新曲などはありません」

「声を入れるだけで良い訳か」

「はい。今回も台本は確認して貰い、クレリアさんの意見をもとに違和感が無いように調整するそうです」

綾子の説明の合間に、京介が口を開く。

「本来はこちらが合わせる事だと思えますが……クレリアさんの場合は例外ですね」

「向こうが苦労している事は私も何となく分かるが、それでも良いと言ったのは向こうだからな」

「まあ、そうなんですけどね。そこまでするのは珍しいという話です」

私の言葉を聞いた京介が、やや苦笑い気味に言う。

「恐らく、クレリアさんの人気がこの先もっと上がると踏んで、多少無理をしてもつながりを持ちたかったのでしょうか」

そう話す綾子に、私は尋ねる。

「綾子はまだ人気が上がると思うか？」

現時点でもかなり知られていると思うが。

「もちろんですよ。実際にクレリアさんに持つて行く仕事は少ないですが、依頼は凄まじい量ですからね？時間が取れない事と、演技が出来ないので映画などの出演は全て断っています。今までどれだけ話があった事か……」

溜息を吐く綾子、そんな綾子を見て京介が話しかける。

「お互い大変ですね」

「人気がある事は嬉しいですけどね」

そう言って、二人は笑った。

2019年3月。

現在、私は東京の自宅でパソコンを操作している。見ているのは私の公式ホームページだ。

アイドルのクレリアはプロダクション側の意向でファンレターを受け付けない事になっている。

膨大な量になり関係各所が混乱するかららしい。

その事に対してファンからの声もあり、公式にメッセージを書き込めるホームページが開設される事になった。

会員のみが書き込める、1日に一度しか書き込めない、などの制限はあるが、時々私が読むという事になっている。

プロダクション側が管理し、怪しげな書き込みや会員はすぐに削除されているため荒れてはいない様だ。

私がメッセージを素早く読んでいくと、応援から歌の方針のリクエスト、体の心配など、様々な書き込みが溢れている。

開設されて間もない筈だが、すでにかかなりの量の書き込みがあるな。

こうして読んでいる間にも次々と書き込まれているため、全て読み終わるといふ事は無さそうだ。

プロダクション側からは時々書き込んだり、返答をして欲しいと言われているが、あくまでも私の気が向いた時だけで構わないという。

私は「読みはするが、書き込むかどうかは分からない」と言ったが、答えは「自由にして構わない」という物だった。

どうやらプロダクション側は読むだけでも構わないと考えていて、私を書き込む事は初めからあまり期待していなかった様だ。

ここに書き込んでいる者達は、私を読むというプロダクション側の言葉を信じて書き込んでいるだろう。

実際にこうして読んでいるのだから嘘では無いが、書き込んでいる者達にそれを知る手段は無い筈だ。

私が何も反応しなければ、私が読む事無く放置していても気が付かないのではないだろうか？

そう思いながらしばらく書き込みを見ていたが、特に興味を引く物は無かった。

私はしばらく読み続けた後、パソコンの電源を落として談話室へと向かった。

神奈川の自宅で、俺は後輩達と軽い飲み会をしている。

「春斗さん、今度一緒にキャンプ行きましようよ」

高校の後輩である池端 潤（いけはた じゅん）が俺に言う。

「良いわねー。結婚してからそういう機会が減ったから、たまには行きたいわね」

その言葉を聞いて、俺の隣で妻である奈美（なみ）が嬉しそうに話す。

「あの……私、キャンプは子供の頃に数回行った程度で良く分からないです……」

申し訳なさそうにそう言ったのは潤の妻である涼子（りようこ）だ。

「潤に教えて貰って無いの？じゃあ私に任せなさい！涼子ちゃんにしっかり教えてあげる！」

そう言ってビールを飲んでいるのは俺の後輩で、潤の同級生でもある茂木 美代子（もぎ みよこ）だ。

男の様に気楽に付き合える彼女は、独身だ。

性格も顔も悪くないと思うが、どうにも上手く行かないみたいだな。

「美代子、飲みすぎるなよ？飲み会と言ってもメインは酒じゃないぞ」

「分かってますよ先輩。ちょっと飲みたい気分なだけです」

俺の言葉にこう答える美代子、これは……。

「美代子、もしかしてまた振られたのか？」

潤がそう言うと、飲んでいた美代子の動きが止まる。

「うん」

平坦な声でそう答える美代子。

「美代子ちゃん可愛いし、性格も悪くないのに何で上手く行かないのかしら……?」

奈美が不思議そうに言う。

確かにその通りだけど、男受けするか、と言われれば首をかしげるしかない。

俺の勘では、男から友人扱いされているんだと思う。

「あの、美代子さん……きつといい男性が見つかりますよ」

「涼子ちゃんありがとー！私負けないよー！」

涼子の言葉に美代子は明るくそう答えた。

なんだかんだいって、今のままでも幸せそうなんだよな……。そんな事を思っていると、つけっぱなしのテレビから声が聞こえる。

《クレリア、ニューシングル発売……》

「あ、ニューシングル買わないと」

「当然よね」

CMに気が付いた潤と美代子がそんな事を言っている。

クレリアさんがこんな有名になるなんて……。いや、彼女なら当然か……。姉貴が言った通りだった訳だ。

ここにいる四人は、全員彼女のファンだ。

……勿論、俺もだ。

「いつ見ても30超えてるように見えないわよねー」

美代子がビール片手に言う。

「女性の理想ですよね……。いつまでも変わらない美しさって」
テレビを見ながら、涼子が話す。

「彼女には彼女の苦勞がきつとあるはずよ。彼女のあの姿は病のせいだもの」

奈美がそう言いながら、俺に料理を取り分けてくれた。

「苦勞か……。想像出来ないな」

俺はビールを口にしながら当時を思い出す。

「子供の頃に一緒に遊んだけど……。当時から苦労なんて全部吹き飛ばしてしまうような性格だったから、何とも思っただけかも知れないよ?」

そう言っただけで顔を上げると、四人が俺を見て口を開けていた。

そして俺は口にした事を思い返す。

……あつ!?

やってしまった……。!

今まで誰にも言っただけでなかったのに……。彼女と面識がある事を言うてしまった!

「ど、どういう事!？」

「クレリアさんとお知り合いなんですか!？」

「奈美さん!知ってたんですか!？」

「し、知らないわ!今までそんな事は一言も……。!」

美代子、涼子、潤、奈美が次々に俺に詰め寄り騒ぎ出す。

「詳しく聞かせて!」

「あの……。お話し聞かせて下さい」

「春斗さんお願いします」

「あなた、私も興味があります」

俺は四人から迫られ、降参して話す事にした。

「……。特に面白い話じゃないよ?」

それ程ある訳じゃないが、俺は彼女との思い出を語った。

「へえ、お姉さんの友達だったんですか」

潤がそう言っただけでビールを一口飲んだ。

「ああ」

「お姉さんはクレリアさんとうちで出会ったんですか?」

「秋葉原のゲームショップにいた彼女に姉貴が心配になって声をかけたらしい」

俺は潤の質問に答える。

「クレリアさんがアキバのゲームショップにいたの……？」

美代子が微妙な顔で言う。

「彼女がバトルグラウンドの世界ランク一位だったのは知ってるだろ？その時にバトルグラウンドを買ったらしいよ」

「春斗さん質問！」

美代子が手を挙げて声を上げた。

「何だ？」

俺はそう言つて酒を口に運ぶ。

「春斗さんの初恋つてクレリアさん？」

「ぶっ！？」

「うわっ!？」

むせた拍子に潤に酒が飛ぶ。

「ごほっ！悪い、潤」

「いえ、大丈夫です」

奈美が飛んだ酒を拭いてくれるが、こちらをチラチラと見ている。

……どうするか。

初恋かと聞かれれば……初恋だ。

出会った当時はかなり年下だと思つていたが……あんな美人を見て惚れない方が難しいだろうが。

「春斗先輩、誰にだつて初恋はありますつて。それに、今は奈美さん一筋なんですよ？」

「当然だ」

そう言つと、酒を拭き終わった奈美が嬉しそうに微笑み、隣に座つた。

「思い出ですよ、思い出ー。聞かせて下さいよー」
仕方ない。

「……確かに俺の初恋は彼女だった。考えてもみろ、男女を意識し始めた一番多感な時期に、彼女が来たらどう思う？」

「ああ……」

俺の言葉に男である潤が声を漏らす。

彼なら分かるはずだ。

「彼女は今でも美しいですし……同じ女性から見ても魅力的ですかなね……」

涼子が控えめな声で話す。

俺を援護しようとしてくれていたのかもしれない。

奈美は黙って俺の話を聞いている。

「アプローチしなかったんですか？」

美代子がさらに突っ込んでくる。

「アプローチか……」

「若かった当時の俺にそんな事出来る訳ないだろ……。それに、今思い返すと彼女は本当にそういった事に興味を持ってなかったと思う」

誰に対しても全く態度が変わらなかつたんだよね……。単に好みの男がいなかっただけかも知れないけど。

「今でも同性愛者とか、裏では誰かと付き合ってるとか言われてますよね」

「言われてるな。ただ……」

「ただ？」

「いつ頃だったかな……。姉貴の雰囲気が変わった事があつたんだ。それからの姉貴は……。度胸が付いたというか……。何かあつてもあまり驚かなくなった」

「やっぱりクレリアさんが同性愛者で、何かされたんじゃない？！」

美代子が身を乗り出して言うが、きつと違う。

「違うと思う。なんて言うか……。そんな感じじゃなかつたんだ。上手く説明出来ないけど、そういう物じゃなかつたと思ってる」

「あの……。お姉さんはそれからどうしてるんですか……？」

話を聞いていた涼子が尋ねて来る。

「ん？姉貴は結婚して子供もいる、今では仕事を辞めて専業主婦をやってるよ」

「普通ですね……？」

「クレリアさんとは友達だけで、こっちは一般家庭だぞ？驚くよ

うな事になる訳無いだろ……」

「春斗さん。『こっちは』っていう事はクレリアさんは違うんですか？」

俺の言い方が引っかけたのか潤が疑問を口にする。

ん……まあいいか。

「彼女は月下グループの御令嬢だよ」

俺の言葉の後、四人の驚く声が部屋に響いた。

ある日、私はフラワープロダクションで仕事の説明を受けていた。

「歌って欲しいと？」

私は京介に確認する。

「はい」

内容は、私が出演するスカイレゾナンスイنفイニットブルーについての話だ。

現在制作中の作品だが「未熟な歌姫の力を目覚めさせるため、共に歌うシーンを追加したい」と話が来ているらしい。

「二人で活動していたのはデビュー時に余計な問題を引き起こさないようにする為でしたが、現在はクレリアさんの事を知らない人は殆ど居ませんからね。かなり以前から問題無いと思っていましたので解禁です」

「私は誰かと歌うのが嫌な訳では無いからな、お前達が問題無いと言うのならそれでいい」

「では引き受けるという事で……綾子さん、後でスケジュールの調整を行いますよう」

「はい、とりあえず今日の予定を消化しなければいけませんからね。クレリアさん、行きましよう」

「分かった」

私達は部屋を出て、今日の予定の消化へと向かった。

「彩ー?どうしたの?そんな思いつめた顔して」
とあるマンションの一室で数人の少女達が集まっている。
彼女達は全員声優の卵で、時間を作ってはこうして仲の良い同期で
集まって騒ぐ事はよくある事だった。

「う、うん。デビューの事で……」

彩と呼ばれた少女は長い黒髪を弄りながらそう答える。

「緊張するのは分かるけどさ、私達の中で最初にデビュー出来るんだから悪い事じゃないでしょ?」

声をかけた少女がそう言うと、彩と呼ばれた少女は俯いた。

「なんかおかしいわね。彩は普段は弱気だけど、仕事の事でこんなに弱気になる事なんてなかったのに……」

「確かに」

「いざとなったら私達の誰より度胸あると思うんだけどね」

「むしろテンション上げて喜びそうなものだけ」

別の少女がそう言う周囲に座っている少女達が口々に言う。

「……何かあったの?」

一人が心配そうに尋ねると、彩が顔を上げる。

「あの……聞いてくれる?」

「当然よ、仲間のデビューだもん。ね?みんな?」

「勿論」

「話してすつきりしちゃいなー」

皆のその言葉を聞いた彩は話し出す。

「ありがとう……皆は私がゲームのヒロイン役になったのは知ってるよね?」

「そりゃ知ってるわよ、いきなり有名なゲームのヒロインだもんね。
あのクレリアさんだって出るじゃん、上手く行けば会えるかもしれないよね?それに……」

「はいはい、黙って聞きましょうねー」

クレリアの話をし始める少女を別の少女が止める。

「その、歌の事で……」

「歌の事？」

一人がそう聞き返す。

「あのね、ゲームの中で二人で歌うシーンが追加されるっていう話があつてね？」

「良かったじゃん、何か問題でもあるの？」

「相手の了承があるまでは正式に決まらないからって、相手も教えて貰えなかったんだけど……昨日連絡があつて」

「……駄目だったの？」

気遣うような声で聞かれた彩は首を横に振る。

「違う……相手が受けてくれたって連絡で……その……あ、相手が……」

「相手が？」

「く、クレリアさんだったの……」

彩がそう言った後、部屋が一瞬静寂に包まれ、それから全員の驚く声が部屋に響き渡る。

「嘘!？」

「デビュー作でクレリアさんとデュオって事!？」

「何でそうなったのよ!?!クレリアさんはソロしかやらないんじゃないの!?!」

騒めく少女達。

「わ、私だって分からないよ……!」

半泣きになりながら言う少女。

その日は一日中その話題で持ちきりになった。

最終的に「決まっちゃった物は仕方が無い」と開き直り、出来る限り歌のトレーニングをしよう、という事になったのは彼女の強さの現れだろう。

2019年4月に私が登場するゲーム、「アイドルストーリー」が発

売された。

通称アイストと呼ばれるようになったこのゲームは、主人公がプロデューサーとなり担当するアイドルをトップアイドルに導くというゲームだ。

プレイヤーとなるプロデューサーの性別も選べるらしい。私が出るので娘達も買ったらしいが、ゲームに文句をつけていたな。

全員が私をプロデューズ出来る物を期待していたらしく、それが出来ない事が気に入らないらしい。

娘達には散々な評価を受けたアイドルストーリーだが、他のユーザーには好評の様で売り上げは上々の様だ。

ある日、私は会議室で京介と綾子を待っていた。

呼び出されプロダクションに来た私だが、いつも私に来る前に来て待っている二人が今日はいなかった。

すぐに別の者から待っていて欲しいという伝言を受け、待っているのだが……いまだに現れない。

同じプロダクション内に居るのは分かっているが、何やら集まって話し合っている様だ。

何かあったか？

私はそう考え、二人がいる会議室の会話を聞いた。

「……クレリアさんが月下グループの御令嬢だという話が拡散している」

「これはどういう事かね？事実なのか？」

「君達は知っていたのか？」

……なるほど。

私が月下グループの令嬢である事が何処から漏れたのか。

あの二人はこの事で話を聞かれている様だ。

プロダクション側にとっては大事だったのだろうか。

話を聞くのをやめた私は、大人しく二人を待つ事にした。

「お待たせしました、クレリアさん」

「長く待たせてしまつてごめんなさい」

一時間程経つた頃、京介と綾子がやって来た。

「気にするな、この程度は待った内に入らない」

今は時間をじっくりと感じているが、本来ならば人類とは時間の感覚が大きく違うからな。

「大した事ではありませんが、少し問題が起きてしまいました」

京介がそう話ながら書類を取り出す。

「私の表の立場が拡散しているようだな」

「なぜ……？いえ、クレリアさんにとっては簡単に分かる事でしょうね」

京介は驚いた表情をしたが、すぐに納得した様に言う。

「どこから漏れたんでしようか？」

綾子がそう言いながら考えこむ。

特に隠している訳では無いが、人類に対する私の設定を知っている者はそれほど多くない。

漏れるとすればその辺りからだろうな。

「確認しておくが……以前ならともかく、今なら問題無いのだろう？」

私が尋ねると、京介は落ち着いた様子で話す。

「時期を見てこちらから広めたかったです……広まる事自体はもう問題ありません」

「多くは無いですが、芸能人の中には有名人や権力者の関係者もいますしね」

京介の言葉の後に、綾子がそう付け足した。

「そうか、ならば放つて置こう」

「こちらでも何か考えます」

私の言葉に京介はそう返し話を換え、それから特にこの事について話し合う事は無かった。

その後、今回の事について娘達が調べてくれた。

どうやら千穂の弟が、周囲の者達に話してしまった事で広まったらしいな。

本人達は広めてしまった事を自覚して落ち込んでいるらしい。

彼らへの対応をどうするか聞かれたが、特に口止めしていた覚えも無いため特に何もしなかった。

やった事といえば、千穂から弟に「何も問題無い」と伝えて貰った事くらいだな。

私が月下グループの令嬢だという事に対する世間の反応はそれなりに大きかったが、騒ぎ自体は既に治まっている。

娘達から聞いた話では、この影響で芸能界の裏が今までに類を見ない程に大人しくなったらしい。

私が手を出して来た者達を次々に処分していたので元々そこまで問題は無くなっていたのだが、私の裏に月下グループがいる事が明らかになった事で更に余計な事をする者がいなくなった様だ。

実際は私とその周囲に手を出さなければ何をしようという気にならないのだが。

5月に入り、そろそろ春も終わりを迎えようとしているある日。

私は自宅でスマートフォンを操作していた。

つい先日、ドゥーム・ナイトワールドのイベントと私のキャラクターが実装されたからだ。

「主様、私がアドバイスを致します」

隣に座っているジャンヌがそう言ってくる。

「このイベントを進めれば良いのだろうか？」

私はジャンヌに尋ねた。

「はい。高難易度の方が早く手に入れますが、低難易度でも時間がかかるだけで主様のキャラは手に入ります」

「そうか」

私はそう答え、イベントを進める。

このゲームはフレンドのキャラクターを援軍として使用出来る事と簡単なチャット程度しかフレンドと出来る事が無く、基本的には一人でプレイする物だ。

一緒にプレイをしたいといったジャンヌだったが、私がプレイしているのを隣で見ているだけで良かったらしい。

彼女から「どうか私をお使い下さい」と頼み込まれたため、手に入ったら使うと約束したのだからまだに手に入っておらず、ジャンヌは残念そうにしていた。

そんな彼女は実装直後に一気にイベントを終わらせて私のキャラを手に入れ、お気に入りしているようだ。

娘達も順調に私のキャラを手に入れているという。

「何故主様がこの程度の実力になっているのでしょうか……」
しばらくプレイしていると、突然ジャンヌが言う。

「気になるか？」

「正直に申し上げると……主様がこのような雑魚共と同等に扱われているのが気に入りません」

不機嫌そうな表情を浮かべて話すジャンヌ、その言い方では自分も雑魚という事になるが。

「これはゲームだ、バランスが悪くなれば色々問題が起きる。それにこれはアイドルの、人類が見ている私の姿だ」

私の正体を製作側は知らない、例えば知ついてもゲームなのだからこうなる事は何となく予想出来る。

「主様の力そのまま実装してしまったら、全て一瞬で終わってしまいます」

そう言いながら現れたのはヒトハだ。

「ヒトハ様」

「様はいらないと言いましたよ?」

「そうでした……ヒトハ、何か問題でもありましたか?」

ヒトハの指摘を受けて言い方を変えるジャンヌ。

「何も問題はありませぬ。主様と過ごそうと思っただけです」

そう言いながら私の隣に座るヒトハ。

「ヒトハは気にならないのですか?」

「何がです?」

「主様の扱いの事です」

「好きな様にさせておきなさい、他者が何を言おうと力の差が変わる訳では無いのですから」

「そうですが……」

何となく不満そうな表情を浮かべるジャンヌ。

「場合によっては容赦しませんが、主様も言ったようにこれはゲームで、バランスを取らなくてはならない物です。その辺りは貴女も理解しているのでしょうか?」

「……勿論です」

「主様は実害が無ければ何を言われようと、どう思われていようと気にしない事が多いですからね」

「主様のお心の広さには感服いたします」

ジャンヌはゲームバランスを取る必要がある事を理解しているが、私がここまで弱体化されている事が気にいらないのだろう。

私は頭上から聞こえる二人の会話を聞きながら、黙々とクエストを進めた。

私は自宅でソファに座っている。

私の隣では、長い黒髪の大人しそうな少女が荷物を取りだしていた。

彼女の名は、水瀬 彩（みずせ あや）。

彩はスカイレゾナンスインフィニットブルーのメインヒロインを演じている新人の声優だ。

初めて顔を合わせたのは二か月ほど前の事。

彼女は緊張していたのかミスを繰り返し、その結果予定の時間を大幅に超えた。

念の為に丸一日時間を取っていたので問題は無かったが、その日の仕事が終わった後に彼女は目を潤ませ、歯を食いしばりながら私に謝り、関係者にも謝って回っていた。

謝るだけなら大抵の者が出来るだろう、人類では本心なのか表向きだけなのか判断する事は難しいと思う。

しかし、私は彼女が本気である事が分かる。

予定の時間を大きく超えてしまった事に対する申し訳なき、上手く出来なかった自分への嫌悪、もっと練習をするべきだったという後悔、私への好意。

色々と混じっていたが、全て偽りの無い本心だった。

落ち込んでいた彼女に周囲の者達は「新人にはよくある事だ」と声をかけて励ました。

その励ましを受けてすぐに彼女は明るさを取り戻したが、それは表面上だけで内心は何も変わっていなかった。

彼女の調子が悪いままではこちらにも影響を与えようと考えた私は、彼女を夕食に誘い精神状態を回復させたのだが……それから仕事の度に彼女は私に話しかけてくるようになり、やがて仕事以外でも連絡を取り合うようになる。

初めて顔を合わせてから僅か一か月程で彼女は私にかなりの信頼

と親愛を向けて来る様になり、懐いた。

私は特別な理由が無い限り好意を向けて来る相手は無下にする気は無いので、そのまま付き合いを続けていた。

そして更に一か月程が過ぎた現在、私の彼女への認識は友人へと変わっている。

「クレリアさん、クッキー作って来たんです。一緒に食べませんか？」

彼女が穏やかな微笑みを浮かべる。

「貰おう。飲み物は何にする？」

「紅茶をお願いします」

控えめな声で言う彼女。

普段はかなり大人しい少女だが、役に入れば別人のように演じる事が出来る。

これは才能と重ねた努力の成果だろうな。

現時点で、彼女の声優としての評価は悪くない。

そして、これから更に成長する事だろう。

メイドが紅茶を用意した後、彩が作ってくれたクッキーを齧りながら私達は雑談を始める。

彼女は声優、私はアイドル……とは言っても最近ではアイドルよりも歌手寄りだが。

立場は違うが、彼女は私を目標にしていると明言している。ゲーム内で二人で歌う事になった為、彼女は歌のレッスンを以前より更に積極的に行っているらしい。

私の歌を隣で聞いた後から、私に対してより一層の憧れを持った様だ。

歌に力を入れるのは悪くないと思う、声優も歌う事は多いらしいかな。

予定では歌を収録するのは可能な限り後に回されるという。

これは彩が出来るだけ実力をつけてから収録し、より良い出来る、という意図があるのだろう。

確かに今の段階では私が彼女に合わせなければならず、歌の完成度はかなり低くなる。

出来るだけ後に回す事には賛成だ。

今日彼女が私の家に来た理由の一つは、ボイストレーニングの自主練習の為でもあるからな。

好きだけ練習すると良い。

クレリアさんの自宅でレッスンをしている私は休憩を挟む事にした。

飲み物を一口飲み、今までの事を思い返す。

初めて会った時は緊張のあまり皆さんに迷惑をかけてしまった。

皆さんは励ましの言葉をかけてくれたけど、心の中は重く暗いまま……。

私は場の空気を悪くしない様に、重い心を隠し必死に笑顔を浮かべて明るく振る舞ったけど……クレリアさんには通じなかった。

その日の夜に食事に誘われ心の内を見抜かれた、あれは驚いたなあ。

我慢出来ず不安を全て吐き出した私を、クレリアさんは何も言わず受け止めてくれた。

私はこの日以降、クレリアさんをますます尊敬し好きになり、仲良くなりたくて全力でアプローチをかけたんだ。

その行動が実を結び、一か月が過ぎた頃にはプライベートで連絡を取り合い、時々外で会うようになった。

そして今ではクレリアさんの自宅に招かれるようになり、私の事をハッキリと「友人」と言ってくれるようになったの！

……クレリアさんはとても綺麗だ「年齢など関係無い」と言わんばかりの容姿、男らしいとも言える言動、女性でも本気で好きになる人

が居るのも分かる気がする。

そして驚くべきはその歌声。

高音から低音まで全ての音域を自由自在に操り、歌によって声の質まで変わる。

初めて間近で聞いた時は聞き惚れた。

それと同時に「自分がこの人と共に歌う」という今までに無い重圧がのしかかったのを覚えている。

今の自分では足を引つ張る事しか出来ない。

そう思い、私は今までよりも更に歌のレッスンに力を入れた。

せめて足を引つ張らないようになりたい。

今の私に出来るのは収録まで出来る限り力を付ける事だけ。

「もつとやりたいけど……今日はここまでにした方がいいかな……」

私はそう呟く。

やりすぎても喉を傷めるだけ……無理しない様にしないと……焦ったら駄目。

私は立ち上がると、クレリアさんの所へ向かった。

【クレリア】アイドルストーリー会議【伝説は強い】

1：名無しのゲーム好き

クレリアさん強すぎい！

2：名無しのゲーム好き

「伝説に挑め」っていうやつだろ？

3：名無しのゲーム好き

ネタばれか

4：名無しのゲーム好き
もう攻略サイトには載ってるぞ

5：名無しのゲーム好き
どれだけ自分の担当アイドルを育ててもクレリアさんに勝てない
んだけど……

6：名無しのゲーム好き
絶対勝てないようになってるんじゃない？

7：名無しのゲーム好き
スコアアタック感はある

8：名無しのゲーム好き
本人の実力を再現したらあんなったって公式に書いてある

9：名無しのゲーム好き
流石に盛り過ぎだろ

10：名無しのゲーム好き
ライブ中、ずっとダンスしながらCD音源みたいに完璧に歌い続ける彼女を見てる俺は納得出来た

11：名無しのゲーム好き
分かる、五周年記念ライブツアーの時に思い知った。

12：名無しのゲーム好き
制作者インタビュー見た奴いないの？最初は隠しライブで強いけど勝てるようにしようとしたらしいけど、彼女の実力を反映したらゲーム中のキャラじゃ勝てなくなっ、力試してみたいな位置になっ
たって言ってたぞ。

13：名無しのゲーム好き
調整すればいいだけじゃん、他のアイドルの能力上げたり

14：名無しのゲーム好き
確か、実力の差をかなり忠実に再現してるって言ってたな

15：名無しのゲーム好き
一般的なアイドルとクレリアさんの実力差が無理ゲーにつながったと……？でもゲームの他のキャラは架空のアイドルだし調整しても良かったような気がする。

16：名無しのゲーム好き
そうかもね

17：名無しのゲーム好き
いくら何でも差があり過ぎるだろ

18：名無しのゲーム好き
剛拳の特典映像見るとそんなに間違ってるように感じる

19：名無しのゲーム好き
確かに

20：名無しのゲーム好き
あの体のどこにあんな力があるんだ？

21：名無しのゲーム好き
女子力を見た目では分からないからな

22：名無しのゲーム好き

女子力ってそういう物だっけ……？

2019年の6月以降、私の活動の中心は歌へと移った。アイドルとしてプロダクションに所属しているが、やっている事は歌手に近くなっている。

嫌な訳でも、特に興味がある訳でも無かったアイドル活動だったが、やってみれば十分に楽しめたし、ダンスや歌も学ぶ事が出来た。そろそろ引退するか。

そう考えた私は、アイドルを引退する事を京介と綾子に話した。二人は驚いたようだがすぐに「貴女が決めたのなら」と受け入れてくれた。

プロダクション側はかなり難色を示したが、私の気が変わる事が無いと知ると渋々受け入れ、2020年の9月で引退する事が決まる。それからすぐに、娘達や友人達にも話した。

元々私が好きな様に過ごす事を望んでいる娘達や、私の正体を知っている友人達は特に何も言う事は無かったのだが……彩だけは違った。

「引退しないで下さい」

引退する事を電話で伝えると、彼女は練習を中断し私の家へとやって来た。

現在、私は彼女に引退をやめるように説得されている。

「もう決めた事だ、余程の事が無い限り続ける気は無いな」

「じゃあ余程の事を起こして下さい……」

「今の所、自分で起こす気は無い」

「何で引退するんですか……人気の絶頂とも言える状況なのに何故……？」

何故……か。

「十分楽しんだから……だろうか？」

そうしようと思ったただけだからな、何と言えればいいのか分からない。

すると、彼女は寂しそうな表情をする。

「……もつと楽しい事があるかも知れないじゃないですか」

「もつと楽しい事か……」

そう答え、しばらく考えるが……やはり気持ちは変わらない。
私が終わりだと感じている、これが全てだろう。

そう簡単にこの気持ちが変わる事は無いと思う。

そして、気持ちが変わる様な出来事など早々起こる訳も無い。
彩が余程の事を起こす事が出来るかと言えば、それも難しい。

「私の中では区切りがついてしまっている」

「そう……ですか」

目を伏せる彩。

私は今まで飽きるという事を気にする事無く過ごして来た。

一度興味を持ち関わった場合、私は何か変化するか、終わりを迎えるまで関わり続ける事が多い。

ただ、まだ何も変化が無いにもかかわらず、関わりをやめてしまった事も確かにあった。

興味を持つていた対象から、突然興味が消失する感覚。

これが「飽きる」という事なのだろう。

現在、私は人類の世界を楽しむ時間と娘達との時間、この二つを多く取っている。

その為、魔法や錬金術の実験、新たな技術などの開発は以前の様に頻繁には行っていない。

今まで飽きる事無く続けて来たが、これらの事もいつか飽きる時が来るのだろうか。

私は、そんな事を考えながら彩をなだめていた。

飽きる事を自覚した所で、特に何かが変わる訳では無い。

世界にはまだまだ興味深い事や、面白そうな物が溢れている筈だ。

ふと「長い時の果てで全てに飽きた時、私はどうするのだろうか」と考えたが、すぐに考える事をやめた。

それはその時に考えればいい。

あの日、説得する事を諦めた彩は「アイドルを引退しても友達でいて下さい」と涙目で訴えて来た。

私が「何も問題の無い友人をその様な理由で遠ざける気は無い」と答えると、彼女は安心したように笑顔で帰って行った。

「お嬢様、ご友人のお宅に向かう予定では？」

思い返していると、メイドの一人から声をかけられた。

そうだな、そろそろ出発しよう。

「美琴の家に行く」

「かしこまりました、準備は出来ております」

千穂は子供を連れて行くと言っていた、恐らく既に向かっているはずだ。

マンションに到着した私は、オートロックを開けて貰い部屋に向かう。

「いらっしやいクレリアちゃん」

扉を開けて美琴が顔を出す。

「久しぶりだな」

「電話で話はしてるけど、こうして会うのは久しぶりね」

会話をしながらリビングへ向かうと、千穂が飲み物の準備をしていた。

テーブルの上には菓子がおいてある。

「クレリアちゃん久しぶり！自分の家だと思ってゆっくりしてね！」

「アンタの家じゃないでしょ」

変わらぬ二人の会話を聞きながら席に着く。

視線を動かすと、少し離れた所で子供が二人、遊んでいた。

「子供達は元気そうだな」

私がそう言うと二人は子供達の方を見る。

「元氣過ぎるくらい元氣よ」

「元氣が無いより良いでしょ?」

「ふふっ、そうなんだけどね」

千穂の言葉に、美琴は柔らかく微笑んで答える。

「初めての子育てで色々大変だけど……幸せだよ」

「私達は夫が結構気を遣ってくれているから楽な方らしいわよ?」

それから二人は私に色々話を始める。

私が見て来た過去の母親達と似た様な事を話す二人の姿を見て、母

親の話題は今もあまり変わっていないのだと感じた。

「ねえ、クレリアちゃん」

千穂が私を見て言う。

「何だ?」

「アイドルをやめた後はどうするつもりなの?」

「アイドルになる前の生活に戻る」

「それだけ?」

「それだけだ」

私がそう言うと、美琴が口を開く。

「これだけ知られたら、かなり長い間人類の中に残ると思うけど

……大丈夫なの?」

「これは今までの経験からの予測だが、数百年以内にそういった物は消えると考えている。多少長く残っていたとしても、一万年ほど経てば恐らく誰も覚えていないだろう」

「ああ……そうだった。時間の感覚が全く違うの忘れてたわ」

「あの時以来見てないから忘れそうになるけどね」

そう呟いて飲み物を飲む二人。

千穂の言う「あの時」とは私が皆を集めて正体を話した時の事だろう。

「あー!」

突然、泣き声が聞こえた。

私の子供達の方を見ると、葉子が健太の玩具を持っている。

健太の持っていた玩具を葉子が横取りしたのだろう。

「あらら」

千穂と美琴は席を立ち、子供達のもとに向かう。

「二人共」

私が声をかけると二人は頷く。

分かっているなら良い。

子供はああいった事を繰り返して学んで行く様だからな。

その後、反発したり駄々をこねたりしていた子供達だったが、最終的に葉子は謝り、健太は玩具を葉子に貸した。

二人がそれぞれの母親の上に座って絵を描いている。

私達はそのまま会話をしていたが、千穂が葉子の絵の中に真っ黒な人型が描かれている事に気が付く。

「葉子、これはだーれ？」

千穂が黒い塊を指さして尋ねると、葉子は「おねーちゃー！」と答えた。

「そう、上手ね」

千穂が微笑んで葉子の頭を撫でた。

撫でられている葉子は笑顔で千穂を見ている。

「おねーちゃ、くろー！」

葉子はそう言って私に手を伸ばす。

この子供達はある時期から私を姉と呼ぶようになっていた。

絵の中の私が黒いのは、二人の家に来る時はいつもの黒いワンピースで居る事が多いからだと思う。

髪も黒いし服も黒い、幼い子供が黒い塊として描いてもおかしくは無い。

そう思いながら葉子の手を取る。

「健太、これは何？」

美琴も息子に何を書いたか聞いている。

「……ねーちゃ……」

全く同じ答えが返って来た。

「じゃあ、お姉ちゃんに見せてあげて？」

そう言われると、母親の言う通りに健太は私に絵を見せて来る。

「二人共、良く描けている」

葉子は真っ白な紙に千穂、美琴、葉子、健太、私の五人が子供らしく書かれているのだが、健太の絵は少し違う。

絵自体は、葉子とそれほど変わらないカラフルな子供らしい絵だが、健太は白い余白も私達の姿も、まとめて灰色で上書きしている。そのせいか多少絵が崩れているな。

幼い子供にはよくある事だ。

雲を青く塗ったり、人を緑に塗ったり、自由に描く子も居た。

「健太、おしっこ行く？」

私が絵を見ながら考えていると、美琴が健太に問いかける。

健太は頷き、膝から降ろして貰うとおまるへ向かった。

「葉子のトイレトレーニングもそろそろ始めようかな」

その様子を見ていた千穂が膝の上に居る娘を見て言う。

「千穂がそう思うのならそれで良いだろう。一応言っておくが……

他の子供に引っ張られて見誤るなよ？色々とな」

「うん、気を付けてるよ。私達子育てでもクレリアちゃんに助けら

れてるなあ……」

そう言いながら、千穂は葉子の頭を撫でる。

「私は友人に助言しているだけだ」

しばらくすると、トイレを終えた健太を抱いて美琴が戻って来た。

「死にかけてた私を助けてくれたしね……私がここに居れるのはクレリアちゃんのおかげよ」

椅子に座った美琴は、私を見て言う。

「千穂には借りがあつたからな」

「カミラさんに聞いたわよ。そんな理由が無くても助けるつもりだったって」

「自覚は無かったが、私は過去の友人達も全員助けているらしいな」
「そうなんだ……ありがとう、クレリアちゃん」

そう言って美琴は笑う。

それは分からない者が聞けば、ただの感謝の言葉でしかない。

だが、私は千穂や美琴の言葉にどれだけの感情が乗せられているのかが分かる。

真つ直ぐに向けられる深い感謝と親愛を感じる事が出来た。

私にとって、言葉自体はそれほど重要では無い。

乱暴でも、言葉になっていなくても、向けられている感情で分かるからだ。

「友人に少し手を貸す事は、おかしな事では無いだろう？ 私が簡単な手助けだと感じているのだから気にするな」

私はそう答え、考える。

あの時の千穂から感じたのは「美琴を救いたい」という想いだけだった。

最後の魔法人類となった彼の母親には及ばない物の、かなり強い感情の発露だったと言える。

恐らく、私がこの二人の友人でなかったとしても助けていただろう。

友人である美琴をあれ程に思えるのなら、娘である葉子が目の前で危機に陥った時はどうなるのだろうか？

見てみたいという気持ちはあるが、その様な事はしないし、無い方が良い。

「クレリアちゃんには少しの手助けでも……私達にとっては奇跡なのよ」

美琴は目を細め、微笑み……小さな声でそう言うと、息子を優しく抱きしめた。

菓子を全て食べ終えしばらくのんびりと会話を続けていたのだが、突然子供達が本を読んで欲しいと言い始め、今は千穂が子供達に本を読み聞かせている。

読んでいるのは「かぐや姫」だ。

このかぐや姫だが、娘達は私の事だと考えている様だ。

私は全く覚えが無かったのだが、多くの男達から求婚されては断っていた時期があつた事を娘達の内の五人が覚えていた。

ただ、彼女達の記憶に無い事まで描かれている為「物語にする際に色々書き加えたのではないか」と言っていたな。

私としては、それだけでは私がかぐや姫だとは言えないと思ってる。

他にも似た様な者が居たかもしれないからな。

「どうしたの?」

黙っている私を見て、美琴が尋ねて来る。

「娘達がかぐや姫は私の事だ、と言っていた事を思い出していた」

「え!?……まあ、クレリアちゃんの美しさなら分かるけど……」

「以前、多くの男から求婚されていた時期があつた事を娘達の一部が覚えていた様だな。可能性が無い訳ではないが、私は完全に忘れてる」

「クレリアちゃんがかぐや姫だと言われたら……私は納得するか
な」

美琴はそう言いながら私を見ている。

「私は、多くの男から求婚されている私以外の女性の話を基に創作したと考えている」

「どちらにしても、もう分らないのよね?」

「分かるか分からないかで言うなら分かるが、する気は無いな」

「……どういう事?」

書いた本人を呼び出せば良い。

ただ、相手が特定出来ているならともかく、書いた本人を一から探すのは多少手間がかかる。

過去を見る事も可能だが、興味の無い事にそこまでする気は無い。そう伝えると、美琴は「まあ、深く考えないから大丈夫」と言って話題を変えてしまった。

その後、遅くならない内に千穂は帰宅し、私は残って夕食を共にした。

夫である太一は洗い物を引き受けたり、美琴が手を離せない時には娘の面倒を見たりしていた。

彼が妻と娘に向ける愛情は本物だろう、十分に良い夫だと言えると思う。

穏やかな家族の気配を感じながら時を過ごした私は、帰る直前に二人から泊って行かないかと提案された。

特に問題は無かった為、その日は泊まる事にした。

私が引退するという事がプロダクションから発表されると、その情報は瞬く間に世界中に広がり、しばらくの間テレビやネットを騒がせた。

ネット掲示板の主な物は、私の引退を嘆くファンの集いと引退理由の考察だったようだ。

公式の掲示板は引退しないで欲しいという書き込みで一時的にサーバが機能不全に陥った他、プロダクションに手紙やメールなどが大量に送られ関係各所に負担がかかったらしい。

これはまだ大人しい方で、私の引退に反対するデモのような真似をする者達や自殺者が出たりと、中々に騒がしかったらしい。

私自身は、周囲の関係者などに色々と言われる程度で、それ以外は今までと特に変わらない。

京介と綾子に頼まれて、一度だけ引退表明の記者会見を開いたが、やった事はそれだけだ。

【悲報】クレリア引退について語るスレ

323：名無しのアイドル好き
マジでシヨックなんだけど……

324：名無しのアイドル好き
俺はこれからどうやって生きて行けばいいんだ……

325：名無しのアイドル好き
自殺なんてするなよ？彼女は喜ばないぞ

326：名無しのアイドル好き
あれはマジでビビった、しかも結構な人数なんだよな

327：名無しのアイドル好き
ニュースで見てドン引きしたわ

328：名無しのアイドル好き
ホントな……気持ち分かるが

329：名無しのアイドル好き
お前……やるなよ？

565：名無しのアイドル好き
まだまだこれからののに……どうしたんだろう？

566：名無しのアイドル好き
会見では十分に楽しめた、満足したって言ってたけど何か他に理由
がありそう

567：名無しのアイドル好き
結婚とか、妊娠とかな

568：名無しのアイドル好き
興味無いのはやっぱりフリだったのか？

569：名無しのアイドル好き
何を言っても推測だからなあ……

570：名無しのアイドル好き
誰か情報無いの？

571：名無しのアイドル好き
彼女ってこれだけ世界中で知られてるのに、町中で見た報告が全く
無いんだよな

572：名無しのアイドル好き
どういう事？

573：名無しのアイドル好き
プライベートが全く不明なんだよ。公の舞台以外で誰も彼女を見
てないし、クレリア本人もそういつた話はした事が無い。

574：名無しのアイドル好き
確かにそんな報告見た事無い……ワールドクラスのボツチって事
かな？

575：名無しのアイドル好き
自宅にいる事は間違い無いだろ

576：名無しのアイドル好き
そうだな。水瀬彩がクレリアの家遊びに行っちゃって言うてるし

577：名無しのアイドル好き
誰？

578：名無しのアイドル好き
新人声優。まだ発売されてないけど、スカイレゾナンスシリーズの「スカイレゾナンスインフィニットブルー」のヒロイン役がデビューになる。

579：名無しのアイドル好き
へえ、新人がクレリアの家に行くような関係になつてんのか。元々知り合いだったのか？

580：名無しのアイドル好き
彼女のツイッターを見た限りじゃそんな感じじゃなさそう

581：名無しのアイドル好き
クレリアもあのゲームに出てるし、そこで知り合つたのか？

582：名無しのアイドル好き
デビューからクレリアと絡めるなんて嬉しいだろうな

583：名無しのアイドル好き
緊張して吐いてそう

584：名無しのアイドル好き

流石にそれは無い……無いよな？

585：名無しのアイドル好き
もし本当にそうなってても流石にそれは報告しないやろ……

586：名無しのアイドル好き
あの会社はホント良い判断したよな

587：名無しのアイドル好き
それな。比較的早い内にクレリアと契約したからな、他の所はいくら出したのやら……。

588：名無しのアイドル好き
今だったらかなり積まないと受けてくれんだろ……

589：名無しのアイドル好き
好きなゲームだったらタダで引き受けそう

590：名無しのアイドル好き
最低限の事は守ってるっぽいけど、基本自由だからな。信じられるか？アイドルだったんだぜ彼女

591：名無しのアイドル好き
それが良いんだよ

私が引退を発表して世間を騒がせたが、やがてその騒ぎも消える。引退を表明してから私のアイドル生活が変わる事は無く、時は流れて行った。

「クレリアさん、お疲れ様でした」

私の自宅のリビングで、京介と綾子が声を揃えて言う。
現在は2020年9月30日の夕方、私のアイドル活動はもうすぐ終わる。

最後の仕事を終えた私は、二人を家へと招待した。
他の関係者との挨拶やお別れ会などは既に終えている。

この二人が帰れば、私が約7年所属したフラワープロダクションとの関わりは終わる。

……二人には何か礼をしようか。
そう思い立ち、私は二人に返事をする。

「ありがとう、二人には世話になった。礼として何か一つだけ、私が許す範囲で望みを叶えようと思うが……何が良い？」

私がアイドルとして問題無く過ごせたのは二人の努力があったからだ。

友人としても仕事のパートナーとしても、良い関係を築いていたと思っっている。

二人は私の言葉に喉を鳴らしている。
今更緊張してどうする。

「……僕は要りません。クレリアと言う最高のアイドルのプロデューサーが出来た……それだけで十分です」

「そうか、では保留にしておく。もし何かあった時は連絡してくれ、絶対解決出来るとは言えないが話は聞こう」

「分かりました。その時は遠慮なく頼らせて貰います」
私はその言葉を聞いて綾子へと視線を移す。

「綾子は何かあるか？」
「ええと……その……どうしましょう？」

「私に聞くな」
綾子の望みを叶えるのに、何故私に尋ねる。

「では、綾子も保留で良いか？期限は無いからじっくり考えろ。出来ない事もあるだろうから、いくつか候補を考えておけよ」

これは文字通り期限は無い。
決めずに死んだ場合は、一度は呼び出して望みを聞く気である。

「分かりました……考えておきます」

雰囲気からすると、綾子は何か望みを言う気があるようだ。

それから夕食を取りながら今までの昔話をして、今までまったく話される事の無かった彼らの努力と苦労などを聞かせて貰った。

夕食後も話題は尽きる事が無く、私は二人に泊まる事を薦めた。

明日も仕事があると言い難色を示した二人だったが「翌朝に転移で送る」と話すと、苦笑いしながら了承してくれた。

そして翌朝に二人をそれぞれの自宅へと転移させ、私のアイドルとしての生活は終わりを迎えた。

アイドルを引退してからの私の日々は、アイドルになる前と特に変わらない。

私は気まぐれに世界各地を訪れたり、娘達や友人達と過ごしたり、訓練をしたり研究をしたりして気の向くままに過ごしている。

人類の世界では、私が引退してからそれほど経っていない事もあり、ランキングなどでまだ私の曲がトップを独走している様だ。

しかし、やがてそれも消えて行くだろう。

私は一般的なアイドルが行っているグッズの販売をほとんど認めなかった。

当初、この事でプロダクション内で色々であった。

だが最終的に京介が同意した為、私のアイドルグッズと言える物はサイン位しか無い。

京介は上層部に「グッズなど必要ありません」と言い切っていたな。私がサインした色紙は誰も売ろうとしないらしく、現在ではそれなりにプレミアがついていると聞いた。

更に、私の引退後に色々動き始めた者達も居たらしい、フィギュアといわれる人形を作っている者達だ。

「ライブでの姿を再現した物を作り、販売する許可が欲しい」と話が来た事を京介から伝えられた。

これに反応したのが、カミラを始めとした娘達だった。

娘達曰く「お母様に似た人形が人類に弄ばれるのは嫌」らしく、どちらでも良かった私は娘達の気持ちを汲み、許可を出さなかった。

他にも、同人誌という物について綾子から話された事がある。

綾子は公式には禁止にしても、間違いなく私の性的な同人誌が発売されると考えていたらしい。

しかし蓋を開けてみれば、全くそのような事は無かったという。

彼女は「クレリアさんの人気を考えれば無い方がおかしいのですが……」と言って首をかしげていたな。

その後、カミラにもその話をしたのだが、彼女は「そうなのね」と言っただけに微笑んでいた。

彼女が何かした事は分かったが、咎める気も無いので私はそれ以上何も聞かなかった。

ある日、商店街を散歩していた私は、目に付いた定食屋に入った。

「いらっしゃいませー」

店員の声を聞きながら空いている席に座る。

認識障害をしているため、周囲に騒がれる事は無い。

私は街を見て歩いている時にこうして時々目に付いた店に入る事がある。

珍しい料理があったり、予想以上に良い味をしている事があるからだ。

何を頼もうかと考えながらメニューを見てみると「欲張り色々セット」という物が目に入る。

「聞きたい事があるのだが、良いか？」

私は店員を呼び止めた。

「はい、何でしょうか？」

「この『欲張り色々セット』というのはどの様な物だ？」

「これは当店のお勧めを盛り合わせにしたセットですね。ご家族連れや大人数のお客様を対象とした、皆様で色々な物を食べられるようにと用意した物です」

なるほど。

「これを一つ頼む。後、牛乳はあるか？」

「えっ？あ、はい。牛乳はございますが……このセットはご説明した通り、複数のお客様で召し上がる事を想定していますので……お一人で注文するのはやめておいた方が良くと思います」

店員は控えめに忠告してくれる。

「忠告してくれた事には感謝するが、これを頼む」

私は問題無いからな。

「……かしこまりました。残されてもお持ち帰りは出来ませんのでご了承ください」

「分かった」

微笑んでいるが、内心では多少呆れているようだ。

その後、私はその料理を全て食べきった。

途中から他の客と店員の視線と驚いた気配を感じていたが、そのまま料金を払って店を出た。

味はそこそこだったな。

私がこの児童養護施設にやって来て約三年……。

明日、私は本当の両親のもとに帰る事になる。

すっかり慣れたベッドの中で、私は三年前の事を思い出す。

私の家はとても貧しかった、幼かった私の病気を治すために多額の借金をしたからだ。

しかし、当時13歳だった私はそんな事は知らなかった。

いつも「何で家は貧乏なの?」、「私もみんなと同じ物が欲しい!」と

我が儘を言っていた。

すると両親は悲しそうな、申し訳なさそうな顔をして謝るのだ。

そんなある日、一人の女性が私達の家へやって来た。

女性は私を児童養護施設へ引き取るために話をしに来た様だった。

その話を聞いた両親は大反対した。

あの時、幼いながらに嬉しかった事と、両親と離れたくないという気持ちを強く感じた事を覚えている。

そして、女性と両親の会話を部屋の外で聞いていた私は、両親が隠していた真実を知る事になる。

「現状を見る限り、あなた方が娘さんを十分に養育出来るとは思えません」

「大丈夫です、節約をすれば何も問題は……」

「この状況で、これ以上何処を節約するのです？」

「ぐ……」

お父さんのうめき声が聞こえる。

「何か勘違いしていらつしやる様ですが、彼女を引き取る事は決定事項です。この事に関してあなた方が出来る事はありません」

「そんな勝手な！」

お母さんが叫ぶ。

「あなた方夫婦の事は調べています。幼い娘の病気を治すために少々怪しい所から多額の借金をした事も、その返済に追われて限界が近づいている事も」

え……？

私の病気……？

「病気が完治しても、今の状況がこれ以上続けば彼女は碌な事にはならないでしょう……傍に居る事に固執して彼女を不幸にするのですか？」

「う、うう……」

「こちらに引き渡していただければ、十分に整った生活環境で教育を受ける事が出来ます」

何か話しているけど耳に入らない……。

貧乏なのは私を助けたから……？

そう考えた途端、今まで両親に言って来た言葉が自分に重くのしかかる。

何で貧乏かって？

……私を救ったからだ。

みんなと同じ物が欲しい？

……命を救われ、愛されていてそれ以上何を望む。

私は部屋の外で涙を流しながら、しばらく呆然としていた。

そして……私は心を決め、扉を開き部屋に入った。

「恵!?!」

「き、聞いていたの?」

両親は驚くが、私は決意を口にする。

「お父さん、お母さん……私行くよ」

その言葉を聞いた女性が微笑んで言う。

「良く決心してくれました、強引に連れて行くのは心が痛みますからね」

そう言って女性は微笑んでいる。

「恵……ごめんな……辛かっただろう」

「私達はあなたと離れたくなかった……でも……それは間違いだった……」

「そんな事無い!」

私は我慢出来ずに叫んだ。

身を削りながら見捨てる事無く私を育て、愛してくれた二人に……そんな事を言われたくない。

「私は幸せだ!愛されてるってわかるから!」

お父さんとお母さんは泣きながら私を抱きしめてくれた。

「では、今後の話をしましょうか」

しばらく泣いていると、女性の言葉が聞こえた。

「今後……?」

お父さんがそう呟き、私達は彼女を見る。

「娘さんは預かりますが、あなた方の経済状況が改善し審査に通れば、彼女を引き取る事が出来ます」

「しかし私達は……」

「あなた方にはこちらで適性のある仕事を斡旋いたします。生活が安定したその時は、娘さんを迎えに行くの良いでしょう……ああそれと、あなた方が借金をした消費者金融はもう存在しません。今後は我々に適正な金額を返済して頂きます」

「え……？」

「本当ですか……？」

両親は呆然とそう呟いていた。

彼女の言っている事の意味は分からなかった。

だけど、幼い私にも分かった事がある……彼女は私達を救いに来たんだ。

私は涙を流しながら、号泣する両親に抱きしめられていた。

その後、すぐに児童養護施設に移った私は、徐々に健康的な体つきになって行った。

私がどれ程痩せていたのか、初めて知った時は驚いたな……。

あつという間に皆と打ち解け、ここでの生活が好きなり……私には目標が出来た。

それから私は猛勉強した。

力をつけてお金を稼ぎ、両親に恩を返すために。

幸い、私が入ったこの児童養護施設は教育にも力を入れていて、やる気と能力があればいくらでも学習出来た。

私が勉強に励んでいた三年の間、両親は頻繁に私の様子を見に来てくれた。

自分達も大変な筈なのに会う度にまず私の心配をして、その後に分達の現状を話し……最後にはいつも「必ず迎えに行く」と言ってくれた。

そして……その言葉を裏付ける様に、会う度に両親の状況は少しずつ改善して行った。

私との生活を取り戻すため、両親も一生懸命努力してくれている……私はそれがとても嬉しかった。

そして……現在。

私は能力が認められ、成人後は月下系列の会社に就職する事が内定している。

内定が決まっているからと、油断するつもりは無い。

能力が要求に届かなければ、取り消される可能性もあるから。

だけど張りつめ過ぎた糸はいつか切れる……程よく力を抜かないとね。

少し前、あの時やって来た彼女と一度だけ話す機会があった。

お礼を言った私に、彼女は「貴女が優秀そうだったから助けただけ、そうで無ければ助けていない」と言った。

私は、それを聞いても特に嫌な気分にはならなかった。

使えなければ見捨てていたと言われた様な物だったが、そんな事はどうでも良かった。

たとえば彼女にどんな打算があらうと、私達は救われたのだから。

俺は親父に捨てられた。

児童養護施設に入ったのは2010年、当時の俺は12歳だった。

あの頃の俺は荒れていて、将来はヤクザにでもなるんだろうと思つてたな……。

だけど、児童養護施設の奴らは優しかった。

俺は最初は受け入れなかった。

いつか裏切られると思つていたからだ。

だけどこの奴らは違つた……どんなに邪険にしても優しい言葉をかけ、心配し、叱つて来た。

そんな日々を過ごしている内に、いつの間にか俺は皆に心を開いていたんだ。

それからは皆とも仲良くなったが、その中でも特に仲が良かったのが目の前にいる同い年の忍（しのぶ）だ。

「秋広（あきひろ）」。せつかく飲みに来てんのに何で難しい顔して

んの？」

児童養護施設に居た皆とは今でも付き合いがある。

もう一人来る予定だったんだが都合が悪くなってしまったらしく、今日は彼女と二人で飲みに来ていた。

「ああ、悪い……昔の事考えてた」

「アンタ荒れてたもんね。暴力を振るったりはしなかったけど、口が悪いし、サボるし……お母さん達が『久しぶりに手がかかる子が来た』って笑って言ったの覚えてる」

そう言っただけは明るく笑う。

「自覚してるよ……」

忍の本当の両親は死んでいて、俺より前にあの児童養護施設に入っていた。

彼女の言うお母さん達とは、俺達を育ててくれた施設の職員のことだ。

俺にとっても本当の母さんと同じ位に大事な人達だ。

あの施設の職員達は夫と子供に先立たれ一度希望を無くしていたり、子供が欲しくても様々な事情で子を授かれなかった……など、色々であった女性が多いという事を施設を出てから知った。

その時、母さん達が俺達を本当の子供の様に大切にしてくれていた理由が分かって泣いちゃった。

俺達が親の温もりを求めていたように……彼女達も子の温もりを求めていたんだ。

「今の施設の様子はどうか？」

忍は施設を出た後、すぐに俺達が居た児童養護施設に就職している。

「んー。特に変わらないよ？新しくやって来る家族をみんなで癒して幸せにしてる」

「そっか」

俺はそれを聞いて安心する、あの施設を巣立った仲間の中には、大企業のお偉いさんになっている者もいる。

そういった仲間達が援助しているから、あの施設に居る子供達は下

手な家よりずっと良い生活が出来てるんだ。

俺も少しだけど援助してるしな。

「そっちはどう？上手く行ってる？」

「そうだな……大変だけどやりがいはあるよ」

俺はあまり優秀じゃなかった、だけど母さん達が俺に向いている事を一生懸命探して見つけてくれた。

今、俺は建設会社の現場で働いている。

社長が同じ施設の出身だった事もあり良くしてくれるし、なにより大きな男だ……俺は一生ついて行く。

「上手く行ってるみたいで良かった……しかし、随分良い体格になったわねー」

忍は俺の体をぺしぺし叩く。

俺の体格は巢立つ前より更に逞しくなっていた。

「まあ、鍛えてるし……俺の仕事は体が資本だからな」

酔いすぎないように抑えて飲み、忍を送ってから少し体を冷まそうと外をぶらつく。

ふと道端の浮浪者を見て、俺は動きが止まる。

「親父……？」

自然と言葉が口から零れた。

ボロボロの服を着た痩せこけた男。

記憶とあまりにも違う……でも分かる。

間違いない、俺を捨てた親父だ。

「誰だ兄ちゃん……ん？……ん？……ん？」

親父は俺をじっと見つめていたが突然声を上げた。

「おまえ……秋広か！」

「違う」

俺は咄嗟に嘘をついた。

「いや！間違いねえ！秋広！金出せ！」

そう言つてニヤつきながら睨んでくる親父だったが……俺の心は静かだった。

親父はこんなに小さかったか？

俺を殴っていた親父、あの時は勝てる訳ないと思つた……でも今は……。

「俺を哀れんだ目で見るとなあ！」

表情に出たのかな……いきなり親父が激昂して襲い掛かつて来たが、相手にならない。

「ぐあつ……」

軽く避けると、親父は転んで呻く。

母さんが事故で死ななければ……違つたんだろうか……？

あの施設に来た時点で、親父と俺は無関係になつていと説明を受けている。

俺は親父……いや……ただ血がつながっているだけの男を見下ろすと、何も言わず背を向けた。

「おい!? 放つておく気か!? 俺はお前の親だぞ！」

その言葉に顔だけを向けて、かつて父親だった男に言う。

「俺の親は……家族はお前じゃない」

俺の家族は……死んだ母さん、そして施設の母さん達と施設の仲間達だ。

言う事と言つた俺は振り返る事無くその場を去つたが、男が追つて来る事は無かつた。

ある日、綾子が我が家にやって来た。

もう彼女はマネージャーでは無いので、今では友人として連絡を取り合っている。

「クレリアさんが引退してから、何だか疲れが溜まりやすくなった気がしますね」

そう言いながら、珈琲を飲む彼女。

現在綾子は誰の担当もしておらず、事務の様な仕事をしている。

仕事量は私のマネージャーであった頃と比べ物にならないほど少ないが、体調はあまり良くない様だ。

「そうだろうな」

以前は私が会う度に体調を整えていたからな。

その機会が減れば影響も出るだろう。

「何か心当たりが？」

綾子が尋ねて来る。

「今までは私が会う度に回復させていた」

「……クレリアさんのマネージャーとして激務をこなしていたにもかかわらず、妙に体調が良かったのはそういう事ですか。クレリアさんが何かやっているのでは無いかと思った事もありましたけど……当たっていたんですね」

彼女はそう言って苦笑いする。

「私が引退し会う機会が減った事で疲れが溜まり、影響が出始めたのだろうな。会った時は回復させていたから、私の家に来た後は体調が良かった筈だ」

「今思えば……確かにそうでした……」

綾子はそう言って何やら考え始めた。

彼女をそのままにして牛乳を飲んでみると、綾子が口を開いた。

「クレリアさん……お礼の話しなんですけど、言っているいいですか？」

「良いぞ。私に可能で、許せる事なら叶えよう」

綾子は佇まいを整えて言う。

「私は、ずっと健康なまま生きたいです」

「ずっと健康なまま生きたい、か……。」

綾子がそんな望みを言うとは予想外だな……。

「本気か？」

「はい。あの……一応確認したいのですが、健康には疲れず、病気に
ならず、怪我もしないという事になりますか？」

「なるな。どれか一つでも欠ければ健康とは言えないだろう？」

「良かった、駄目だったら考え直すかと思っていました」
微笑んで答える綾子。

なるほど。

彼女は永遠を望むか。

しかし、それだけだと閉じ込められた場合に無力になるな。

肉体は被害を受けなくても精神は別、という問題もある。

恐らく、ある程度の力が無くては自由には生きられないだろう。

「綾子」

「はい」

「その望みは可能だが、それだけでは問題が起きるかもしれない」

「そうなんですか？」

「そうだ。お前のその体の事を調べるために捕らえようとする者達
が現れるかも知れない」

「あ、確かに……病気はともかく、怪我をするような状況になった
時、無傷だったら怪しまれますよね」

「だからそれを自力で蹴散らせるだけの力もつけた方が良いと思
う」

「必要でしょうか……？」

綾子が首をかしげる。

「恐らく必要になると思うぞ？」

「そうですね……」

「後は食事だ。食べなくても問題の無い状態になるが、食事自体は
出来るようにしておく」

「え？」

彼女が突然声を上げた。

「ん？何だ？」

「食べなくても平気になるんですか？」

「当然だ。常に健康であるという事は、栄養失調などにもならないと言う事だ。つまり、食事は不要になる」

「ああ、そういう事になるんですね……」

私の説明に、綾子が戸惑った様に言う。

「後は精神的な問題だな。今の綾子のまま、永遠を生きるに耐える精神構造に変えても良いが……どうしたい？」

「え、永遠!？」

何故か綾子が慌てだす。

「クレリアさん！違います！私は永遠を生きたいなんて思ってます！」

「どういう事だ？ずっと健康なまま生きたいのだろうか？」

「……あつ!?そうじゃありません!『ずっと』というのは『寿命で死ぬまでずっと』という事で、永遠の事ではないです……」

慌てふためき、申し訳なさそうに言う綾子。

なるほどな。

それらしい欲求を全く持っていない彼女が、永遠を望むと言った時はどんな考えの変化があったのかと思ったが……私の勘違いか。

「私は綾子の『ずっと』を永遠と考えていた。本来の望みは『寿命で死ぬまでの間ずっと健康で居たい』という事で良いか？」

「そうですね……ごめんなさい、もつとしっかりと言うべきでした」

「私以外ではそう起きない行き違いだ、気にするな」

私は既に、自分には寿命が無いのでは無いかと思いつているからな。

人間などの寿命が存在する種族同士であれば、永遠という考えは始めから存在しない筈だ。

相手が私であった為にこうなった訳だな。

行き違っている事に気がついて良かった、望んでもいないのに彼女

を不老不死にする所だったな。

まあ、戻せば何の問題も無いのだが。

「この機会に細かい所を聞いておこう、どうしたい？」

「ええと……それは具体的にはどのような？」

私は、このままだとどんな病気にもかからず、何に巻き込まれても怪我をせず、どんな環境でも問題無く生活出来て、食事を必要としな
い上に疲れる事も無い状態になる、といった事を説明した。

「凄いですね……漫画の主人公みたいです」

「排泄の有無はどうする？」

「……無しでお願いします」

綾子は少し頬を染めて言った。

「気を付けるべき事もある」

「先程クレリアさんが言った状況の事ですね？」

「そうだ。このままだとお前は明らかに死ぬような事が起きても無傷のままになる。それを他者に知られた場合、恐らくお前は化け物だと思われるだろう」

彼女は私の話を黙って聞いている。

「細かい事を言えば……健康診断の採血なども受けられない、針が通らないからな」

「あつ……アイドルになったばかりの頃、クレリアさんが健康診断の書類を外部から持って来たのって……」

彼女はそう言って私を見た。

「診断書を偽装するためだ」

「そういう事だったんですね。健康診断を受けないという訳にはいきませんし……どうしましょう」

彼女は悩み始めた。

「その度に私達が手をまわしても構わないが、調整する事も出来るぞ?」

私は悩む彼女に言う。

「調整……ですか」

「例えばだが、肉体の強度は変更せずそれ以外を付与する、といった

事も出来る」

「……なるほど」

「ただし、この場合は肉体の強度は変わっていない。注射の針も刺さるし相応の怪我もする、当然死ぬ事もある」

「……なるほど」

綾子は同じ返事を繰り返し、考え込んでいる。

答えが出るまで待ってしよう。

そう思い、私は本を取り出した。

私は今まで生きて来た中で一番悩んでいた。

クレリアさんがファンタジー世界の存在であった事を知ってから、私は色々と変わった。

今まで接して来た漫画、アニメ、ゲーム、これらの物をフィクションだと、絶対に存在しない物だと考えられなくなり……自分が小説の中に、物語の中に居る様な感覚が消えなくなった。

そして彼女がアイドルを引退した時、驚くような提案をされる。

《礼として何か一つだけ、私が許す範囲で望みを叶えようと思うが……何が良い？》

あの時、私は一瞬思考が止まってしまったわ……。

プロデューサーはすぐに断ったけど私は素直にお礼を受け取ろうと考え、保留になった後もどうするかを考えていた。

元々サブカルチャーに嵌っていた私は妄想を広げ、異世界転生で逆ハーレム、などという事まで考えたが……すぐに舞い上がって転生を考えた自分の行動に悶えてしまった。

私は可能であっても異世界転生などしないだろう……親、友人、プロデューサー、そしてクレリアさんから離れたくないと思っただけだから。

落ちていた私はそれから実用的な事を考え始め、最終的には健康を望む事にした。

ちよつと行き違つて不老不死にされそうになつたけど……気がついて良かった。

クレリアさんが何をどこまで出来るのか知らないけど、不老不死には出来るみたい……この分だと異世界転生も出来そうな気がする。

それはそれとして……現在悩んでいるのはどの辺りまで変えるかだ。

何があつても怪我をしないのはとても魅力的だ。

ただ、バレたら化け物扱いは必至……。

そうならないように生活すればいいんだけど……事故に巻き込まれるのはどうにもならないだろうし……。

ああー、どうしよう……。

もつといい感じの方法は無いかしらね……。

……あ。

私は思い浮かんだ事を、本を読んでいるクレリアさんに聞いた。

「クレリアさん……例えばですけど……普通に怪我はするけど、致命傷にならないようにしたり……出来ますか？」

「出来る」

クレリアさんから肯定の言葉が帰つて来る。

これは行けるかもしれない！

こんな機会はまだ二度と無いもの！妥協したくないわ！

彼女は私に確認した後、再び考え始めた。

好きなだけ考えると良い。

それからしばらく経ち……綾子が言う。

「では……怪我はしても絶対に致命傷にならず、治りが通常よりも早くなるようにして欲しいです……可能ですか？」

「可能だ」

なるほど、無傷では怪しまれるからか。

永遠に生きるのなら問題のある状態だが、百年程の短期間ならばこ

の位が丁度良いのかも知れない。

「では確認しよう。疲労、病気、排泄を無効化、飲食も不要だが食事自体は可能。怪我はするが致命傷にはならず、怪我の治癒能力を向上する……これで良いか？」

「はい……何だか、パソコンのオプションを選んでもる気分ですね」
苦笑いしてそう話す綾子。

彼女が選んでいるのは体のオプションだが、確かに似ているな。

「そうだ、忘れていたが睡眠はどうする？寝なくても問題は無いが、寝る事は出来るようにしておくか？」

私達には必要無いが、今までずっと睡眠をとっていた綾子には必要かも知れない。

……そう言えばカミラも最近は寝なくなっているな。

「そうですね……では、それをお願いします」

カミラの事を思い出していると、彼女が答えた。

「よし、決まりだな。ではこれから変更するが……構わないか？」

私がそう言うと、綾子は喉を鳴らす。

「はい……お願いします」

「分かった」

私は彼女の体を作り変え、要望通りに変更する。

「終わったぞ」

「……え？」

呆けた表情の綾子。

今の私は娘達の体を作っていた当時の私ではない。

以前は時間をかけていた事も、今では素早く行える。

初めて見る存在ならまだしも、見慣れた人類の肉体の仕様変更程度ならば時間はかからない。

「変更は終わった、恐らく今まで感じていた欲求や感覚に変化がある筈だ。意識してみろ」

綾子は目を瞑り、確かめている様だ。

「凄い……今まで感じていた疲れや軽い空腹感、色々な嫌な感じが消えて、最高に調子が良いわ」

そう呟いて、彼女は自分の手を見つめている。

そこで私はもう一つ説明を忘れていた事を思い出した。

「綾子、すまないが説明を一つ忘れていた」

「え？」

彼女は私の言葉に反応しこちらを向いた。

「子供は作れるが、生まれてくる子に綾子の能力が受け継がれる事は無い。それを忘れていた、悪かったな」

「あ……」

綾子も忘れていたようで、目を見開いて声を上げた。

「これに関しては能力を引き継がせたい、という要望は聞けない。あくまで綾子への礼である事と、人類の進化に大きな手を加える事になるからだ」

「私もすっかり忘れていましたが……異論はありません」

特に問題はない様だな。

「これで綾子の要望通りになった訳だが、力や反射神経などは変わっていない。その辺りは注意しておけ」

「大丈夫ですよ、いつもと同じ生活をするだけですから」

そう言っ綾子は微笑む。

「何か問題があれば私に連絡しろ」

「分かりました……クレリアさん、ありがとうございます」

それからいつもの様に過ぎ、遅くならないうちに彼女は帰って行った。

2020年の10月に、私と彩が出演している「スカイレゾナンス インフィニットブルー」が発売された。

制作側の問題で一度発売が延期され10月に伸びたが、無事に発売された様だ。

「発売の延期の報告を受けた時、彩は「歌の練習時間が増えた」と喜んでいたな。

恐らく、彼女は歌の完成度を上げるために時間が欲しかったのだろう。

発売直後の売れ行きは、今の所は好調らしい。

それから一か月後の11月。

ある日、突然彩が私の家にやって来た。

かなり落ち込んでいる様に見える。

私が感情を感じ、心を読む事など関係無く、誰でも一目見ただけで分かる様な状態だ。

「何があつた？」

「クレリアさん……」

ソファに座る彩に問いかけても私の名を呼ぶだけで、俯いて動かない。

しばらく様子を見てみると、彼女が黙ってスマホを差し出して来た。

見ろと言う事か？

私は彼女の差し出したスマホを見る。

「これが原因か」

彩が見せて来たのは、インターネット上に存在する電子掲示板だった。

そこに書かれていたのは、私と彩が共に歌った歌への批判。

「下手」、「クレリアさんだけに歌って欲しかった」、「クレリアの足を引つ張るな雑魚」、「期待して購入したけど、ヒロインの歌にがっかりした」など、ほとんどが私では無く彩の歌への酷評だった。

「他の掲示板でも酷評ばかりだった」とも書いてあるな。

彼女は私と歌う為にかなり努力していたと思う。

勿論、実力不足である事も間違い無いが、ヒロインが最終的に一人で歌った時の歌声は悪く無かった。

ここまで酷評される出来だったかと問われれば、私は否定するだろう。

しかし、ユーザーには納得出来る物では無かったらしい。

多くの者は彼女の歌を受け入れなかった。

「私の歌は駄目でした……」

彼女は小さく呟いた。

「もう、歌わない方が良いのかな……」

泣いてはいないが、その声は震えている。

「お前はまだ成長する。私には届かないかもしれないが、世界の上位に入る事が出来ると思う」

「……本当ですか？」

私にすぎるような目を向ける彩。

「本当だ」

今、彼女に言った事に嘘は無い。

私には何となく分かるからな。

ただ、彼女が本格的に実力を発揮するにはまだ時間がかかるだろう。

「お前はまだ新人だ、この一度で諦めるのは惜しいと思う」

酷評している者達は、彩が新人だという事を知らないのだろうか。

そもそも、新人でもっと酷かった者達は大勢いた筈だが……なぜ彼女だけがこうなった？

……私と共演したからか？

ふとそんな事を考えたが、今更考えても意味は無さそうだ。

今は彼女を何とかしよう。

かなり落ち込んでいる彼女だが、私が励まさなくてもきつと立ち直ると思う。

弱音を吐いてはいるが、諦めるような気配を全く感じない。最終的な答えは彼女の中で既に決まっている筈だ。

無意識だと思いが、彼女は背中を押して欲しいのだろうか。

「クレリアさんは私の憧れなんです……」

私がそう思っていると、彩が話し出す。

「初めて生の歌声を聞いた時、心が……魂が震える様な感覚を覚えました」

彼女は随分と私の歌を気に入っているようだ。

「クレリアさんがそう言ってくれるなら、歌を続けたい……でも……今はもう……」

彩はこういった事に対して弱いのだろうか？

いや……そうおかしい事では無いか。

普通に暮らしていた彼女は、今回の様に大勢から酷評される事など無かったのだろう。

彼女が自分の気持ちに気が付ける様に、一押しするか。

「レコーディングの用意をしてくれ」

私はメイドに準備を頼む。

「彩、ついて来い」

レコーディングスタジオでメイドが準備を終えた後、私は歌う為にマイクの前に行く。

「彩、努力は必ず報われるという訳では無い。しかし、お前の努力は間違い無くお前を成長させていた」

彩は黙って聞いている。

「私はこれから、将来お前が辿り着くであろう終着点を聞かせる」

「え……？それはどういう事ですか？」

「まずは聞いてくれ」

「……分かりました」

彩は戸惑っていたが、私の言葉に頷いて聞く姿勢になった。しばらく無音の時間が過ぎると、彩がゲーム内で歌った曲が流れ……私は歌い始めた。

クレリアさんが歌い始めた時、私はどんな顔をしていただろう？
きつと驚いた顔をしていたんだろうな。

私がそんな顔をした理由……。

それは……彼女の声が、何度も聞いた聞きなれた声……私の声そのものだったから。

でも、私の意識はすぐに歌へと移ってしまった。

これ以上は無い……そう感じてしまう完成度。

自分の声だというのに聞き惚れた。

これが……私が辿り着く終着点……？

将来、私がこれ程の歌を歌える？

今は無理だと思えない……。

聞きながらそう思い、ハツとする。

……今は無理？

あはは……これじゃ、いつか可能みたいな言い方よね。

でも……クレリアさんは私が将来、こうなれると信じて歌ってくれた。

そう思うと、私の心に一気に熱が入って行くのを感じる。

歌いたい……彼女のよう世界を魅了する歌を……。

そう強く思った時、クレリアさんが私の熱くなった心を見透かしたようにこちらを見た。

ああ……彼女はまるで見えているかの様に私の心を見透かしてくる。

もう迷わない、立ち止まらない。

私はそう誓って、最高の私の歌を聞き続けた。

私は歌を終えると彩の元に向かう。

途中で彼女の気配が変わったのは分かっていた。

「クレリアさん！ありがとうございます！」

走り寄って来た彩がそう言っつて勢い良く頭を下げた。

「この歌のデータは彩に譲る。いつの日か、お前が今日の歌を超える事を期待している」

私がそう言うと、彼女は力強い表情を見せる。

「はい……私は、貴女の私を超えて見せます！」

彼女からは今まで以上の意志を感じた。

もう大丈夫だろう。

彩に歌を聞かせてからおおよそ一か月が経ち、2020年の12月に入った。

あれから彼女は酷評をもともせず、声優として、歌手として実力をつけるために活動している。

今の彼女は忙しそうだが、以前よりも更に充実している様に見える。

そんなある日、綾子から体について会って話したいと連絡があった。

私は了承し、彼女が私の家に来る事になった。

「何か問題でも起きたか？」

私は正面に座る綾子に聞く。

「それなんです……治療力に問題がありました」

「話してくれ」

「はい……その、治癒力が高すぎて……駄目なんです」

「すぐに治る事が問題だと?」

「はい。数日前、料理中に手を切ったんです……かなり深く」

ふむ……相応の痛みはあるだろうが、問題無い筈だ。

そう思いながら彼女の話の続きを聞く。

「すぐに血を洗い流したんですが……傷口が目に見える速度で治ったんです」

彼女の言いたい事が何となく分かった。

「今の治癒速度ではいざと言う時に目立つ、という事だな?」

「はい」

確認する私に答える綾子。

「もしも大怪我をした場合、血塗れで見る見るうちに傷が治ったら……無傷の時と似た様な扱いになりそうで……」

申し訳なさそうにそう話す綾子。

「分かった、調整しよう」

「良いんですか?」

そう言ってくる綾子だが、なぜ駄目だと思ったのだろうか?

「私はお前の望みを聞くと言った。お前の望むようになっていないのなら調整するのは当然の事だ」

「……ありがとうございます」

それから綾子の話を聞いて「治りはとても速いが異常では無い」治癒力に再調整した。

その後はいつもと同じように話をしながら過ごし、彼女が帰る前にまた何か問題があれば言うように伝えた。

現在、私は北寄り島で娘達と2020年の年末を過ごしている。

娘達は私と話したり、ビデオゲームで対戦したり、テーブルゲームをしたりと、思い思いに過ごしている。

「こうして過ごすのは何回目かしらね」

炬燵に入っているカミラが言う。

「いつの間にか毎年の恒例になってたね」

娘達の一人がカミラの言葉に答える。

私はその会話を聞きながらみかんを剥き始めた。

「私の個人的な意見だけけど……定期的にお母様と過ごす機会を作るのはとても良い事よね」

カミラがそう言うと、周囲からも肯定の言葉が聞こえる。

「お母さん、ミカンちよつと頂戴?」

近くに座っている娘が言う。

「良いぞ」

私はそう言ってみかんを分けて渡す。

「ありがと、お母さん」

「あ、私もみかん欲しい。誰か取ってー」

ビデオゲームの順番待ちをしていた娘がそう言いながら手を挙げる。

「私のあげる、行くよー?」

「ありがと!」

娘の一人がみかんを投げると、彼女は綺麗にキャッチした。

「みかん触った手でコントローラーは触らないようにしてよね?」

「平気だよ?」

「前に触ったの覚えてるからね?」

「魔法で綺麗にするから……」

私は娘達を眺めながら、みかんを食べていた。

2031年8月。

私がアイドルを引退してから約11年が過ぎ、アイドルとしてのクレリアは既に過去の存在となった。

ただ、人類の間で色々と記録を残した事で伝説のアイドルとして人々の記憶に残り、現在でも時々名前が出て来る。

ある日、私は千穂に呼ばれて彼女の家にやって来た。

「クレリアお姉ちゃんーいらっしやいー!」

私を迎えた黒髪の少女は、葛城葉子。

千穂と良平の娘で、もうすぐ14歳になる筈だ。

「姉貴、来たのか」

家に入ると、暗い茶髪の少年がゲームをするのを止めて言った。

彼は鈴原健太。

美琴と太一の息子で、この子ももうすぐ14歳の筈だ。

「またそんな呼び方して!せめて姉さんにしなさいって言うてるでしよー!」

「うるせーな……姉貴がそれで良いって言うてんだからいいだろ」

葉子と健太は言い合いを始めた。

二人のこうした言い合いや喧嘩はいつもの事だ。

この11年の間に葛城、鈴原の両家は家を買ひ、引っ越しをしている。

その結果、両家は近所に家を構える事になり行き来が楽になった。

そして、この二人がお互いに好意を持っている事もあり、大抵の場合どちらかの家にもう片方が居る事が多い。

夏休みである現在は二人共ほぼ毎日どちらかの家で過ごしている様だ。

「二人共、千穂と美琴は何処だ?」

騒がしい二人にそう問いかける。

「俺んちでお茶してると思う」

健太がそう言つて立ち上がる。

彼の家は葛城家の正面にあるのだが、千穂と美琴は彼らを二人きりにしようとしているのだろう。

千穂は何故私を呼んだのだろうか。

「クレリアちゃんいらつしやい！」

振り返ると千穂が笑つて立っていた。

出会った頃に比べるとだいぶ老けたが、それでもこの笑顔はあの頃と変わらない様に感じる。

「呼ばれたから来た」

「ありがと。この二人が会いたいつてうるさくてねー」

「ちよっ!?お母さん!」

「俺達はそんな事言つて無いだろ!」

千穂の言葉に、飲み物や菓子を用意していた二人が声を上げる。

「えー?私が色々用意しようとしたら『自分達でやる』つて……」

「お母さんはもう戻つて!」

「おばさん!?何で言つちやうんだよ!」

二人は千穂の言葉を遮つて顔を赤くするが、お前達からの好意はずつと感じているから隠しても無駄だぞ。

「クレリアちゃん。私は戻るから二人をよろしくね?」

「任せろ」

私の言葉に微笑んで、千穂は戻つて行った。

そしてしばしの静寂が訪れる。

「……姉貴、取り敢えず座つてよ」

気を取り直した健太に促され、私は席に着く。

「二人とも私に会いたかつたのか」

「ちよつと!もうやめてよー!」

「言つてないつて!」

二人は恥ずかしそうにしているが、友人の子供達に好意を寄せられて悪い気はしない。

それに、友人の教育が良いのか反抗期も無く良い子に育っていると思う。

親が良くても子供がどうしようもない場合もあるからな、当然逆もあるが。

大抵の場合、親の接し方や教育、環境が原因で子供の性格が変質する事が多いが、稀にそのような事に関係無くどうにもならない子供や、どうにもならない環境でも影響を受けない子供もいる。

「私は嬉しく思っている」

「……うん」

「おう……」

私の言葉に、二人は返事をして黙ってしまった。

「このっ!? 健太に負けるか!」

「葉子はこれが苦手だからな!……貰った!」

しばらく話をしていた私達はゲームをする事になった。

ゲーマーである千穂の影響を受けた二人はゲーム好きになっていく。

しかし、運動が嫌いかというところでもなく、体育ではそれなりの成績を収めているスポーツをして遊ぶ事もある。

張り合う二人を見ながら、私は最近の事を考えていた。

私がアイドルを引退してから10年以上が過ぎ、再びアイドルが増え始めた。

それから数年の間、新しいアイドルはあまり現れなかった。

京介と綾子が言うには、原因は私と比べられてしまい酷評をされる事が増えた事、だった様だ。

私の事が過去となり、ようやくそういった事が無くなって来たらしい。

この子達は私が以前アイドルであった事を知っているが、幼い頃から会っているため全く気にしていない。

彩は既に声優、歌手として成功し、その地位を不動の物としている。その歌声は度々私と比べられ、私を超えたと言う者も存在したが、

彼女はテレビの全国放送や雑誌のインタビューで「未だに彼女を超える事は出来ていない」と発言している。

彼女の手元にはあの時のデータがある、彼女のあの言葉はそれと比べた時に感じた正直な感想だったのかも知れない。

京介と綾子は結婚した。

……この言い方は誤解を招くか。

京介は引退した元担当アイドルの女性と結婚し、今もプロデューサー業を続けている。

綾子は業界外の一般男性と結婚し、しばらく仕事を続けていたが、妊娠の判明を機に専業主婦となった。

子供が大きくなった頃に仕事に復帰するかは、夫と話し合って決めると言っていたな。

「うあー負けたあ……」

「よっしー……姉貴、俺と対戦しようぜ」

色々と思いついて返していると、葉子との勝負を終えた健太が私に挑んで来た。

「どの程度強くなったか見てやろう」

「今度こそ勝つー」

気合を入れる健太。

「私は健太が完封負けする方にかけるわ……お姉ちゃん、私の仇を取って！」

葉子は敵討ちを頼んで来るが、私は普通に戦うだけだ。

それから僅か数分後、私は健太に完封勝利した。

健太は葉子に慰められていたが、彼女の表情は笑っていたな。

葉子は好意を寄せている異性である健太に対しては最終的に甘くなる。

そして健太も、好意を寄せている異性である葉子に強く当たる事は無く、最後には受け入れる。

何事もなければ、このまま夫婦になるかも知れないな。

……んん……朝か……。

俺は朝日が差す部屋で目を覚ますと上半身を起こし、着替えるためにのっそりと動き始める。

まあ……今は夏休みの真っ最中だから焦って着替えたりしないでいいんだけどな。

今日は宿題でもするか……。

そう思いながら伸びをする。

俺はほぼ毎日幼馴染である葛城葉子と過ごしている、夏休みに入ってもそれは変わらず大抵一緒にいる。

物心ついた時からずっと一緒にいるけど……最近妙にあいつが気になる……。

傍に居るとなんか変な気分になるんだよな……。

そんな事を考えながら着替えていると、突然目の前が薄暗くなる。

っ!?

なんだ!?

俺は目をこすり、瞬きをする。

しばらくそうしているとフツと視界が元に戻る。

「え?!何なんだ……?」

痛くもなんともないけど、急に視界が薄暗くなったぞ……?」

「……母さんに言おう」

俺はすぐにそう決断した。

それから俺は、母さんに起きた現象を説明した。

母さんはすぐに俺を眼科へと連れて行き、検査を受けたんだけど……。

「異常はありませんね……」

「先生、何か分かりませんか?」

目の前で母さんと医者が話し合っている。

検査結果は健康そのもの、何の問題も発見されなかった。

それに納得出来ない母さんは、色々と話しているみたいだけど……医者にも見当がつかないみたいだ。

「何とも言えません……視界が暗くなる原因は色々ありますが、検査では全て問題ありませんでした」

「そうですか……」

「神経内科や脳神経外科にもかかって頂いた方が良いと思います。そちらが原因である可能性もありますから」

「分かりました、そうします」

「紹介状を書きますので」

「はい、ありがとうございます」

どんだん話は進んで行って、他の所にも行く事になってしまった。

数日後。

紹介状があつた事でスムーズに検査を受ける事が出来たけど、結果は全て不明。

視界が薄暗くなる現象は続いている、しかも頻繁に起きる様になって来た。

このままじゃ危険な事はよく分かる、全く見えない訳じゃないけど、まともに行動出来なくなりそうだ……。

父さんも「原因不明の目の異常」という報告を受けてすぐに帰って来た、母さんと色々話し合っているみたいだ。

「健太……大丈夫だよな？」

俺の部屋に一緒にいる葉子が不安そうに言うけど、俺にも何が何だか分からないんだよな。

痛くないだけマシかも知れないけど、こんな事になるなんて……。

「分からない……色々検査したけど問題無いみたいだし、原因が分からないんだよ……」

「そんな……」

いつも元気な葉子が、こんな風になるのを見るのは初めてかも知れない。

お互い言葉を無くし、静寂が訪れる。

いつも騒がしい俺達だが、原因不明の病気になった状態で騒ぐ気にはならなかった。

「健太、下に来てくれ……話がある」

突然扉の外から父さんの声が聞こえた。

「分かった、今行くよ」

俺がそう答えると、父さんは下へ降りて行った。

「私も行って良い？」

立ち上がり、下に行こうとすると葉子がそう言って来る。

「多分大丈夫だろ」

俺はそう答えて葉子と共に下へ降りて行く。

「久しぶり、大変みたいだね」

「葉子も来たのね。まあ、来なかったら連れて来るつもりだったけど」

下に降りると何故か良平おじさんと千穂おばさんも居て、声をかけて来る。

「お父さん？お母さん？」

「……二人共座ってくれ」

父さんに促されて俺達は席に座る。

「今の検査で問題が分からないなら、俺達が取れる方法はもう一つしか無い」

「また頼る事になるのは心苦しいけど、息子の事だもの……頼るしかなかったわ……」

「やれるだけの事はやってみただから、その後に頼るならきつと平気だよ。それで……来てくれるって？」

「ええ……いつも通りの反応だったわ。それと……この子達にも自分の事を話すって」

「この子達なら平気だろ」

親達は良く分からない事を話している。

「二人共、これから貴方達が良く知っている人が来るから……出来れば受け入れてあげて？」

「は……はい……？」

千穂おばさんの言葉の意味が分からず、中途半端な返事をしてしまった。

葉子も首をかしげている。

そのまましばらく待っていると、部屋の扉が開き彼女が現れた。

ある日、東京の自宅でいつもの様に過ごしていると美琴から電話が来た。

「何だ？」

電話に出て用を聞く。

「こんにちはクレリアちゃん……」

美琴はそう言った後、黙ってしまう。

おかしい。

いつもなら挨拶をした後、すぐに用を言う筈だ。

「何があった？」

私がそう聞くと、美琴が話し始めた。

息子の視界が突然薄暗く染まるようになった事、色々な検査を受けさせたが健康そのもので原因が分からない事。

そして、頻繁に視界が暗くなる様になったため、日常生活に支障が出始めているという。

息子を救いたいのが現代医学では何も分からず、残る希望は私だけ。

また私を頼る自分をどう思ってくれても良いから助けて欲しい……と震える声で話した。

大切な者の為にやれるだけの事を行い、可能性があるのならなりふり構わずに行動する事は私としては好感触だ。

ただ、そこまで気にする必要は無いな。

未だに私の事を大切に思っている美琴からの頼みだ、この程度なら断る気は無い。

「いつ行けば良い？」

「明日の14時に……お願い出来る？」

「近い者を集めておけ。見てみなければ分からないが……どうなるにしても、身内は知っておくべきだろう」

「分かったわ……」

「健太と葉子には明日私の事も話す。少し早いかも知れないが、どうなっても文句を言うなよ」

「クレリアちゃん！」

そう伝えて電話を切ろうとすると、美琴が大きな声を出す。

「何だ？」

「ありがとう……」

「大した事では無い」

泣き声になった美琴の言葉に答え、電話を切った。

翌日の14時少し前。

美琴の家にやって来た私は、そのままリビングへと入る。

「お姉ちゃん……？」

「姉貴……？」

二人の言葉を聞き流し、私は空いている席に座った。

「クレリアちゃん、来てくれてありがとう」

座った私に美琴が頭を下げる。

「その感謝は治った時に向けてくれ」

美琴は既になんかかなると安心して始めている。

これは私に対する信用と信頼から来る物だと思いが、私が絶対に治せるといふ保証など無いんだぞ。

「早速見よう。健太、そのまま楽にしている」

「え？……う、うん……」

私は健太を調べ始める。

視界が暗くなるのだから、まずは目からだな。

「お姉ちゃんってお医者さんだったの？」

葉子が私にそう問いかける。

「今は黙っていなさい」

千穂が葉子を叱るが、何も問題無い。

もう原因は判明したからな。

現代医学では不治の病かも知れないが、魔力的に見れば軽い症状だった。

「医者では無いよ。私は本当は魔法使いなんだ」

「え…………？」

「は…………？」

私の言葉を聞いた二人の心中は、表層だけ感じても乱れているのが良く分かった。

「お姉ちゃん、何言ってるの？…………お母さん？」

葉子は母親である千穂を見るが、彼女は真剣な顔で頷くだけ。それを見た葉子は俯いて黙ってしまった。

「魔法使いつて…………姉貴、中二病じゃ無いんだから…………」
そう話す健太に、美琴が言う。

「健太、本当よ。クレリアちゃんは魔法使いなの…………昔、私の命を救ってくれた…………優しい魔法使いなのよ」

優しい？

まあいい、美琴は子供達が私を受け入れる事を願って言っている様だからな。

健太は私を見たまま呆然としている。

親から真面目にそんな事を言われて混乱している様だ。

しかし、二人からは私に対する悪意や拒絶の気配はしない。

この様子なら問題無いかも知れないな。

「全員聞け、これから説明をする」

私がそう言うと、全員の意識が私に向いた。

そして私は極簡単に健太の状態について説明を始めた。

健太の目は魔力が見えている事、治せる事、詳しい事は言わず、この二点だけを簡潔に話した。

「良かった…………」

説明を聞いた美琴は涙を滲ませ、太一も脱力したように椅子に身を預けている。

「これから治すが、健太に聞いておきたい事がある」

「な、なに…………？」

「魔力が見えるのはお前自身の力だ。残すか、完全に消すか選んでくれ」

「残すか……消すか……」

「残す場合、治療後に訓練をしなければならぬが、自由に魔力を見る能力を得られるだろう。消せば視界が暗くなる事は無くなるが、魔力を見る事は出来なくなる」

健太は必死に考えている様だが、焦る事も無い。

「もしも考えがまとまらないなら落ち着いて考えてからでも良い。視覚化された魔力で視界が薄暗くなるだけで、放っておいてもそれ以上問題が起きる事は無いからな」

「いや……姉貴、消してくれ」

健太は私を見て言う。

「良いんだな？」

「うん、正直混乱はしてるんだけど……俺はそんな力要らないし。いつもの様に皆と……葉子と一緒に毎日を過ごしたい」

葉子の事を話すあたりで二人の顔に赤みが差した。

「それに、見えた所で何か出来る訳じゃないんだろ？」

「そうだな、お前は見えるだけで使う事は出来ない」

「なら見えても邪魔なだけだよ、消してしまっただ方が良いと思う」

「そうか、では能力は消す。今から治すが構わないか？」

「お願いします」

珍しく丁寧な健太の言葉を聞き、私は健太の目を治した。

その後、治療を終えた私が帰ろうとすると、健太と葉子に引き止められ質問攻めにあつた。

ある程度私の事を教えた後も、この子達は私を恐れる事は無く「凄い！魔法みたい！」と大喜びし、しばらく興奮したままだったな。

千穂達は二人があっさり私を受け入れた事に対して、苦笑いしながらも喜んでいたが、美琴だけは二人の言葉に「みたいじゃなくて魔法なのよ」と言っていた。

二人は両親から私の事を他言しないように言われていたが、この子

達が勢いで誰かに私の事を話す可能性はある。

恐らく話した所で誰も本気にしないだろうが、もしかするとそれで何か面白い事が起きるかもしれない。

「お姉ちゃん！何か魔法を見せて欲しい！」

「俺も何かみたい！良いだろ姉貴！」

ある日、二人がそんな事を言つて来た。

私の事を教えた時はあっさりとした私の事を信じたので実演していなかったのだが、実際に見てみたいと思つたようだ。

そして、私が千穂の家に来た事を知つて押しかけて来た、という訳だ。

「こら！クレリアちゃんに迷惑かけないの！」

千穂が叱るが、二人は不満そうだ。

二人の気持ちは分かる。

興味を持ち、夢中になる事は私もあるからな。

「二人が飽きるまで、色々を見せてやろう」

「やった！」

二人の声が揃う。

「ごめんね。クレリアちゃん……嫌だったら断つてね？」

申し訳なきさそうに言う千穂に私は今まで何度も言つて来た言葉を返す。

「私はやりたくない時は何を言われようとやらない。お前も良く分かっているだろう？私が断らないという事は、そういう事だ」

私はこの二人に色々を見せてやる事を嫌だと思つていない。

「あはは、そうだったね。じゃあお願いね？」

千穂は私が伝えたい事を理解したようで、微笑んで言った。

「分かった」

私はそう答えると、二人を連れて葉子の部屋に移動した。

「うわー！凄いい！」

「マジでゲームの魔法だな！」

今までと同じ様に魔法の危険性を説明した後、水球を見せる。

二人は宙に浮くハンドボール程の大きさの水球を見て興奮している。

「見せるのは水だけだ、分かっているな？」

私がそう言うと二人が答える。

「十分だよ姉貴！凄いなこれ！」

「綺麗だね……宝石みたい」

二人共楽しんでいる様だ、始めて魔法に触れる者は大抵これで満足しているからな。

危険をしつかりと伝えている事も理由かも知れないが。

「これはただの水だ、触っても問題無いし飲む事も出来るぞ」

「マジで!?!」

「私触ってみたい！」

二人は私の言葉に食いついてくる。

そして葉子が人差し指で水球に触れる。

「冷たい……あれ？指が濡れてない……？」

葉子が自分の指を見て、目を丸くしながら呟く。

「付着しないように操作しているからな」

私はそんな彼女の疑問に答えた。

「姉貴、それって飲んでも平気なのか？」

「大丈夫だ。今はこの水球から分離されると制御から解放されるようにしているからな」

「よしーじゃあ行くぜ！」

健太の疑問に答えると、彼は躊躇せず水球に口をつけた。

「何だこれ……？すげえ美味い……」

今まで飲んだ者達も皆、同じ様な反応をしていたな。

「成分はミネラルウォーターの様な物だからな」

「私も飲む！」

葉子が水球に顔を突っ込もうとする。

「濡れる事は無いが呼吸が出来なくなるぞ」

私はそう言ったが、彼女はそのまま顔を突っ込んで水を飲んだ。

「ホントだ！美味しい！」

そう言ってもう一度顔を突っ込む葉子。

「ずるいぞ！俺も飲む！」

葉子の行動を見て、健太も反対側から顔を突っ込む。

元気な子達だ。

葉子と健太に私の正体を話してから約四ヶ月程の時が流れ、203年の2月に入った。

現在、私は千穂の家に訪れている。

隣には美琴も居り、子供達がある程度成長してからはこうして三人で語らう事も多くなっていた。

「あら……？いつも帰って来る時間はとつくに過ぎてるのに……今日が遅いわね……」

私と雑談していた千穂が時計を見て言う。

「健太が遅くなるって言ってたから、葉子ちゃんも待ってるんじゃないかしら？」

そう美琴が千穂に話す。

「こういう事はよくあるのか？」

私は二人に尋ねる。

「そうだねー。時々遅くなるけど……それでも門限は守ってるから何も言っただけよ」

「あまり厳しくし過ぎても良くないでしょうし、私も門限を守っている内は何も言わないわね」

「そうか」

そのまま私達は会話を続けていたが、突然家の電話が鳴る。

「はいはいー」

そう言っただけで電話に向かう千穂。

「……え？帰ってないけど……どうしたの？」

千穂の言葉が聞こえるが、何かあったか。

私は電話から聞こえる声を拾う。

「俺が遅くなるから待っててくれるって言ってたんだけど、どこにもいないんだー」

「……健太君は今どこに居るの？」

「学校の校門前！家にも帰って無いならどこに……」

「他の友達の所はどう？」

「まだ聞いて無い……」

「それなら私も連絡してみるわ」

「きつと何かあったんだ……葉子が約束をしているのに何も連絡せず居なくなるなんておかしい！」

健太の叫びを聞き、千穂の体が強張る。

私は彼女から不安が滲み出て来るのを感じた。

「分かった、後は私達に任せて帰って来て」

「でも！」

「貴方にまで何かあったらどうするの！帰りなさい！」

千穂が叫んだ声に美琴が反応した。

私は会話を聞きながら感知を日本全域に広げた、流星に国外には出ていないだろう。

勿論、見つからなければ地球全体に広げるが。

「千穂！どうしたの！？誰からの電話だったの！？」

千穂の上げた声に不穏な気配を感じたのか、美琴が電話をしている千穂の所へやって来る。

「……健太君から。一緒に帰る約束をしてたのに、葉子が居ないって……」

「それって……！」

「まだ分からない……でも、警察に連絡しておかないと」

「すぐに動いてくれるかしら……」

「難しいと思うけど、しないよりは良いわ」

私がかここにいるのに二人が警察に頼るのは、私が安易に頼って来る者を嫌うと知っているからだろうか。

くだらない事ならともかく、家族に危険が迫っている可能性があるのなら話くらいは聞くが。

まあ、そんな彼女達だからこそこうして今も共に居る、という所もあるな。

私は既に彼女の居場所も無事である事も分かっている。

ただ誘拐され、監禁されているだけだ。

それ以外には特に何もされていない事も確認した。

さて……手を出した者達は処分するとして、まずは助けてしまおう。

そう考えた私はすぐに行動に移す。

遠隔で葉子を眠らせると、この場に転移させた。

「二人共、警察には連絡しなくて良い。健太に葉子は無事だと伝えてやれ」

私の言葉で振り向いた二人が眠っている葉子を見た。

千穂が内心で喜びと感謝を爆発させ私に飛びついて来る。

私が何も言わず助けた事で、娘が何か問題のある状況に居た事を悟った様だ。

「グレリアちゃん……あいがどう……」

「美琴、千穂は泣いていて使い物にならない。健太に連絡しろ」

私は彼女にしがみつかれながら美琴に言う。

「今……連絡するわ……」

完全に泣いている千穂の代わりに、目が潤んでいる美琴に連絡させた。

あの子達は既に私の大切な者に入っているからな。

友人やその身内がこういった事に巻き込まれる事は今までもあった。

当然、守るべき者は守っているが見捨てる時もある。

例えば友人の身内であっても私の「守る対象」に入っていないければ何もしない。

その時の友人の反応も様々だ、「見捨てられて当然だ」と潔く諦める者もいれば、「どうして助けてくれなかった」と私に詰め寄り責め立て、関係が終わる者もいる。

複雑な感情に長く悩む者もいたな。

中には私を恨み復讐して来た元友人も居たが、そういった者達はすぐに処分した。

そんな事を考えている内に千穂は私から離れ、葉子を抱きしめていた。

「葉子は寝ているだけだから安心しろ。私は少し出かけて来る」

私が葉子を抱きしめている千穂に言うと、彼女は小さく頷いた。それなりに長い付き合いだ、私が何をするかは分かっているのだから。

私がやって来たのは周囲が高い壁に覆われた一軒家だ。

ここに葉子は捕らえられていた。

玄関先にあるボタンを押す。

今家に居るのは5人だな。

そう思いながら待っているとインターフォンから声がある。

「どちら様ですか？」

「お前達が誘拐した少女の友人だ。私の大切な者に手を出したお前達五人には報いを受けて貰う」

「何の事だかわかりませんが……貴女はどなたです？見覚えが無いですが」

私の姿は見えているだろうが、現在の私には認識障害がかかっている。

例え彼等がアイドルとしての私を知っていても、今は気づく事は出来ないだろう。

「そうか、では報いを受けろ」

「はあ……取り敢えずお話くらいは聞きましょう、どうぞお入りください」

相手がそう言った後、インターフォンが切れて入り口のロックが外れた。

「それで？我々が誘拐をしたと言いましたが……どうしてそんな話に？」

私は広い部屋に案内され、一人の男と話している。

部屋の外には他の男達も居る様だ。

「聞きたい事がある。彼女を誘拐したのは偶々か？それとも以前から狙っていたのか？」

私がそう言うと、男は溜息を吐いた。

「お嬢さん……そもそも私達は誘拐なんてしてないんです。これ以上疑うなら警察に連絡しますよ？」

そう言えば引き下がるとでも思っているのだろうか？

「呼びたいのなら呼ぶと良い。その時には隠してある地下の部屋も見えて貰おうか」

「……入って来い！」

私の言葉を聞いた途端、男の顔つきが変わり声を上げる。すると部屋の外にいた男達が入ってくる。

「何でしょう、兄貴」

「この娘を地下に連れて行け」

「……へい」

男の一人がそう言っ私に手を伸ばし……私に触れる前に頭が落ちた。

「っ!？」

男の頭が落ちたのを見て、周囲の男達と座っている男が目を見開いた。

「何だこのガキ！」

男達は短刀と拳銃を取り出したが、次の行動を起こす前に頭が落ちる。

「声を上げなかったのは中々だ、大抵の者は混乱して騒ぐからな」
その様子を汗を流しながら見ていた男に、私は声をかける。

だが彼は何も言わない。

私は何も言わない男に更に言葉を投げかける。

「私を見た目で判断し、甘く見ていたな？」

すると男は絞り出すような声で呟いた。

「らしいな……」

「数少ない私が守る者に手を出すとは、運が無かったな」

「……お前達もタダじゃ済まんぞ?」

「そうなのか?」

「お前の顔もカメラに写ってるし、あの女の子の家も分かってる……何より……俺に何かあれば東堂会が黙っちゃいねえ」

私は映されても映っていないと思うが、葉子の家が知られているのは問題だな。

「東堂会か……」

聞き覚えが無いな。

「お前が誰に喧嘩売ってるか分かったか?」

にやつきながら言葉が続ける男だが、相手の事が分からない。

「諦めな、もうどうしたってお前じゃ……」

言葉の途中で男の頭が落ちる。

私は座ったままこれからの事を考えた。

その東堂会という所のトップに話をつけておけば良いだろう。

場合によっては丸ごと消えて貰う事にしよう。

そう決めた時、ふとある事を思い出す。

以前、乗り込んだ組織が娘達と関わりを持っていた事があった。

カミラに東堂会を調べて貰おう、もし娘達に関係があるのならスムーズに話をする事が出来るかも知れない。

私は残っていた死体を消し、この場を後にした。

一度自宅に帰った私は、カミラに念話する。

『カミラ、東堂会という名に聞き覚えはあるか?』

『え?……東堂会は東日本最大の暴力団だけど。こいつらが何かしたの?』

『恐らく下つ端だろうが、葉子を誘拐した。あの子の周囲の情報も知られている様だ』

『数多くいる人間達の中からお母様の友人を選ぶなんて運の無い事ね。それで、もう助けているのよね?』

カミラはため息をついて言う。

『当然だ。後はあの子達の周囲に奴らが手を出さないようにしておきたい、組長の居場所を調べてくれ』

『丸ごとは潰さないのね?』

『そうだな、少し頼みたい事もある』

『分かったわ、東堂会は私達と関りがあるからその頼み事も含めてこちらでやってもいいけど?』

予想はしていたが、つながりがある様だ。

『いや、私が直接話す。トップに会えるように手配をしてくれ』

『それなら今日でも平気よ?もし行くならこっちに来てくれると助かるわ』

『では行く』

私は念話を切って月へ転移した。

私がカミラへ話をしてから約二時間後。

私とヒトハは、千葉県の東堂会組長宅に来ている。

家の和風な外見と合わない洋風の部屋に案内されると、ソファに緊張した表情の男が座っていた。

恐らくこいつが、事前に聞いていた東堂会現組長、東堂 泰虎（とうどう やすとら）だろう。

大分ヒトハに怯えているようだが、娘達が何かしたのだろうか。

「月の方……お久しぶりです」

立ち上がり、独特の礼をしながら挨拶をする泰虎。

「久しぶりですね、今日は大切な方を連れてきました。くれぐれも粗相の無い様に」

一緒に訪れたヒトハが冷たく言い放つ、私に甘えている時と全く違うな。

「……はい。どうぞお座りください」

私は彼を観察する。

……何処にでもいる普通の男だな。

しかし、娘達の事を知っているのなら見た目通りの男では無いのだろう。

私達が席に座ると、いかにもヤクザらしい男が飲み物を持って来た。

「それで……今日はどんな御用で？」

飲み物を持って来た男が去り、私達だけになると泰虎が話を促す。

「貴方の所の人間が庭園の支配者である主様の友人を誘拐しました。彼女と彼女の周囲に居る者達の情報も送られている筈です……調べなさい」

娘であるヒトハの事は深く読むつもりは無いが……そんな事をしなくても怒っている事が分かるな。

「お待ちください……すぐに調べさせます」

その言葉を聞いた泰虎は顔色を変えると、人を呼び調べるように言った。

支配下にある人類と関わる時、ヒトハはこうなるのか。

話が穏やかな内容では無いのでこの様な感じだが、普段はもつと穏やかな雰囲気かも知れない。

そこまで考えた時、私はふと「授業参観」という言葉を思い出した。

それから調べがつくまでしばらく私達は黙って待っていた。

泰虎は萎縮し、汗をかき、居心地が悪い様だ。

更に、かなり私の様子を気にしている事が分かる。

直接見る事はしないが、意識は頻繁にこちらに向いている。

気にはなってるが、ヒトハにも私にも聞けない……という状態だろうか。

やがて調べがつき、誘拐を実行した者達の詳細と指示した者達の事が明らかにになった。

「この方にはもう手を出しません、手を出した連中もこちらで落と

し前をつけます。どうかお許しただきたい……」
彼は土下座して許しを請う。

「……これから主様がお話になられます」

ヒトハの言葉に、泰虎は土下座のまま沈黙を続ける。

「確かこれは……言葉を待っている状態だったか？」

「主様……どうぞ」

ヒトハからそう促され、私は話し始める。

「今回の事に関してだが……直接手を出した者は既に処分している。それ以外にこの件に関わった者達をお前が処分し、これから言う事を守るのなら、私はこれ以上お前達に何かをする気は無い」

私が話し始めると、彼に激しい動揺が生まれた。

彼の様な反応はこれまでに何度か見ている。

今、彼は私がヒトハが言う「主様」だと気がついた。

私が娘達をまとめている事を知ると、老若男女問わず大なり小なり心を乱す事が多い。

自力で私が彼女達の言う支配者、主だと思に至る者にはまだ出会っていない。

この男は、私の事を経験を積むために連れて来られた見習いの類だと思っていたようだ。

「お前が守る事は、得た情報を破棄する事と、葉子とその周囲をある程度守る事……この二つだ」

話が終わっても、泰虎は土下座の体勢のまま固まっていた。

「返事はどうしたのですか……？」

ヒトハが怒気を滲ませながら声をかけるが、断るならばそれでも良かった。

それなりの対応をするだけだからな。

「分かりました……」

そう思っていると、彼は頭を床に付けたまま搾り出す様な声で答えた。

「ヒトハ、もう良い」

「かしこまりました」

私が声をかけるヒトハは普段の気配に戻る。

人類は殺気、威圧、気当たり等の名をつけているが、私達にも似た様な事は出来る。

ヒトハは加減が上手いが、注意しなければ耐えられずに相手が死んでしまう事もあるので注意が必要だ。

「私は葉子達の所へ行く、後は任せた」

「かしこまりました、主様」

ヒトハとうずくまっている泰虎を残し、私は千穂達のもとに轉移した。

「クレリアちゃん！」

千穂の自宅へと戻った私を見て、千穂と美琴が同時に声を上げた。

「戻ったぞ」

「何処に行ってたの？」

千穂が尋ねて来る。

「健太が戻ったら葉子を起こす、それから説明するから待っている」
やがて健太が家に戻って来た。

全力で帰って来たのだろう、息を荒らげ説明を求める健太を「まずは葉子を起こしてからだ」と言って落ち着かせた。

それから私は彼女の部屋に向かい、部屋で寝ていた彼女を起こす。

「ん……っ!？」

目覚めた葉子は飛び起きて周囲を見回し、私を見つけた。

「お姉ちゃん!!」

彼女は私に勢いよく抱き着き、声を殺して泣いた。

そんな葉子からは恐怖と、それ以上の安堵を感じる。

いくら強気でもまだ子供だ、誘拐されていた時間は僅かだったが、それでもかなりの恐怖を感じていたのだろう。

いや……これはこの子に限った話では無いか。

稀に例外も居る様だが、人間は普段と大きく異なる環境に置かれた時、年齢や性別にかかわらず不安や恐怖を感じる様だからな。

私はそんな事を考えながら葉子の頭を撫でていた。

「もう……大丈夫……」

しばらくすると葉子の小さな声が聞こえた。

私が撫でるのを止めると、葉子がゆっくりと体を離す。

「今日あった事について皆に話をする、お前も来い」

「……ん」

葉子は涙を拭いて私について来た。

一目で泣いていた事が分かる顔だ、他の皆にも気付かれるだろうな。

そう思いながら階下へと降りる。

その後、皆の前にやって来た葉子を千穂、美琴、健太が抱きしめ、再び葉子が泣き始めてしまった。

私は牛乳を飲みながらその様子を眺める。

取り敢えず全員が落ち着くのを待つ事にしよう。

皆が落ち着きを取り戻した後、私は今回の事を簡単に説明した。

「そう……もう安全なのね」

話を聞いた美琴は、安心した様に息をつく。

「話についてはいるからな」

「葉子は以前から目をつけられていたのね？」

千穂が私に尋ねる。

「そうだ。東堂会には葉子の周囲の情報が渡っていた、調べた後に計画的に誘拐されたと考えて問題無いだろう」

「何で葉子が……？」

「目をつけられた事自体は偶然で、特に理由は無かった様だ」

「そう……」

千穂は眉をひそめる。

「世界中で起きている誘拐の一つが、偶然葉子に降りかかった、そう考えて問題無いと思う」

今回の事はただそれだけの事。

世界中に存在する犯罪の被害者やその周囲の者達も、恐らく千穂と似た様な事を考えている事だろう。

「俺を守る」

突然、黙って聞いていた健太が呟く。

「もう二度とこんな目に合わせない」

静かに語る健太からは、葉子を守るといふ強い意志を感じた。

「健太……ありがと……」

葉子は嬉しそうに微笑んで言う。

穏やかな雰囲気になりかけたが……突然千穂の雰囲気が変わり、葉子に話しかけた。

「さて……葉子。私は話したわよね？出来るだけ一人にならない、人気の無い所には行かない、知らない人について行かないって……忘れちゃった？」

明らかに怒っている。

先程までの姿が嘘のような変貌ぶりだな。

「……ぶめんなさい」

葉子は俯いて謝った。

説明中に何があつたのか聞いた所、葉子は一人で待っていた時に、男に助けを求められついて行ってしまったという。

困っていると思ひ手を貸そうとしたのだろうが、それが仇になつた。

私はそんな彼女の在り方に何も言う気は無いが、上手く悪意を隠す者はあらゆる場所に数多く存在する。

いつかはこの子達もそれらを見抜く事が出来る様になるだろうか？

千穂に叱られている葉子を見ながら、私はそんな事を考えていた。

葉子の誘拐が解決してから時が過ぎ、4月になった。

現在、私は彩の自宅に居る。

「最近、またクレリアさんと比較されるんです」

「お前の歌は以前に私が聞かせた歌に近くなっているからな」
彩の自宅のリビングで私達は会話している。

「今でもあの歌は聞いてますから良く分かります……私の歌は未だに貴女に届いていない」

「それだけに固執するなよ？」

私がそう言うと、彩は微笑む。

「分かっています。今まで私が無理をしていた事は無いでしょう？」

「若い頃はそれなりにしていたと思う」

「……30近くなったからでしようか？あまり覚えていませんね」

私の言葉に、彼女はそう言ってとぼけた。

若い頃の彼女より、今の程よく砕けた彼女の方が色々と上手く行っていると思う。

「今のお前は楽しそうだな」

「そうですか？若い頃も楽しかったですけど……」

「確かに若い頃のお前も楽しそうだったが、何処か不安定で十分に楽しめていない様だったからな」

私はそう言つて飲み物を飲む。

「ふふっ……年を取れば皆、ある程度は落ち着きますよ。でも、そう見えていましたか……クレリアさんには隠し事が出来ないですね」

彼女は嬉しそうに言う。

「普段は深く読み取らないようにしているから隠そうと思えば隠せるはずだ。ただ、確かにその気になった私から思考を隠し通すのは難しいかも知れないな」

私がそう答えると、彼女はコーヒーを口にした。

「私は今の所、意味も無く友人を深く探る気は無いが……証明は出来ないからな」

結局は私の気分次第でどうにでも出来る事だ。

つまり、最終的に相手が信じられるかどうかで決まると思う。

「貴方になら知られても問題無いですよ？信じていますし」

「そうか」

彼女は私の正体を知った後も、気を許してくれている。

初めて出会った時に彼女の心を理解したのは私の能力による物であり、当時の行動が彩の為に行った物では無いという事が分かってもお、彼女の私への好意は変わる事がなかった。

「クレリアさんが引退してからもう十年以上が過ぎたんですね……」

ふと、彩が手元のカップを見ながら呟いた。

私はその事に対して特に何も言わず、飲み物を飲む。

「貴女が作り上げた記録は、この後もずっと塗り替えられる事は無いと言われていきますよ?」

「そうか」

その記録や映像などもしばらくは残るのだろうか。

「今も世界中にファンが残っていますし……気が向いたら一回限りの復活ライブでもしてみたらどうですか?」

彩はそう言いながら、手元のカップから私に視線を移す。

「気が向いたらな」

「もしやるのなら人として生きている期間内にやらないといけませんね。全人類に正体を明かす気は無いんでしょう?」

「今の所その気は無いが、絶対に知られたくない訳でも無いな。今後、突然気が変わる可能性もある」

「んー……クレリアさんのあの人気を見ると、正体を知られても問題無さそうですね。特に日本人はそういった事に直ぐ適応しそうです」

「あれは私が人間であるという前提の物だ。人では無い何かである事を知り、気まぐれで人類を地球ごと消す事が出来ると知った後では同じようには行かないだろう」

私の言葉に彩は少し考えるような仕草をしてから言う。

「平気だと思いますけど……私は信用も信頼もしていますよ?」

「お前の様に全てを知っても平気な者はいるにはいるが、それは極僅かだ。人類規模では難しいと思うぞ?」

「そうですか? 貴方が長い間人類を滅ぼさずに過ごしている事実とアイドルとしての人気があれば、何とかなるような気がしますけど……」

彼女はそう言うが、恐らく上手く行かないと思う。

「私は人間では無いが、それでも今まで人類を見て来ている。肌の

色、宗教、国……挙げればまだまだあるが、その程度の違いで争っている人類が私を受け入れる事は難しいと考えている」

「……無理でしょうか？」

「恐らくな」

私がそう答えると、彩は溜息を吐いた。

「では、いつか人類が変われば……」

そう言っつて私を見る彼女の表情は「正体を明かすのか？」と語っていた。

「可能性はある。だが、現在の目的は過度に私の影響を受けていない人類の世界を楽しみ、進化を観察する事だからな」

「スケールが大きな趣味ですね……私には良く分かりません」

「人類はまだ生まれただばかりの赤子の様な物だと思っている。これから先、どこまで成長するのか楽しみだ」

魔法人類が繁栄してしていた期間を把握していない為、現在の人類と比べてどちらが長く存在しているのかは分からない。

ただ、本格的に宇宙に進出していないのならどちらにしても同じ様な物だろう。

「赤子ですか……テレビでも『人類はまだ赤子の状態だ』と言っつていたのを聞いた覚えがありますね」

「自覚があるのは悪い事では無いと思う」

彩はそう話す私を見つめ、短く息を吐いた。

「どうした？」

「いえ、何とも言えない気分になりました」

「そうか」

それから二人で料理をしたり風呂に入ったりして過ごし、一晩泊つて翌日の朝に帰宅した。

2032年10月。

私は葛城、鈴原の両家から誘われてキャンプへとやって来た。

「中々良い所だね」

「そうね」

千穂と美琴がそう話しながらロッジへと入って行く。

良平と太一は色々な道具を借りに行っているので、今は居ない。

この様に必要な物を全てキャンプ場側が用意してくれる事を「手ぶらキャンプ」と言うらしいな。

「葉子！周りを見に行こうぜ！」

「元気ねアンタは……行くのはいいいけど何か手伝わなくて良いの？」

ロッジ前の人場で話す二人に私は声をかける。

「気にせずに行って来い。ただし、2時間程で戻って来ないと昼食が無くなると思う」

私の言葉に健太が振り向く。

「それは嫌だな……じゃあ、姉貴は行かないのか？」

「私はここでのんびりするつもりだ」

「そっか、行こうぜ葉子！」

「はいはい……じゃあ行ってくるね、お姉ちゃん」

葉子は呆れたように健太に返事を返すと、私を見て言う。

「行って来い」

走り出す健太とそれを追う葉子を見送り、私は庭の椅子に座って本を読み始めた。

しばらくすると良平と太一が戻って来る。

「あれ、クレリアちゃん一人？皆は？」

太一が声をかけて来る。

「お前達の妻はロッジの中だ、子供達は周囲を見に行った」
私がそう答えると、良平が苦笑いして言う。

「あの子達、昼までに戻って来るかな……」

「戻ってこなければ昼食は抜きだと言ってある」

「あはは！なら安心だな！」

太一はそう言って昼食に使う道具を用意し始めた。

「太一、食材はロッジの冷蔵庫に入っているんだったよね？」

良平が太一に確認するように言う。

「そういう事になってる。多分二人が下準備してると思うぜ？」

「じゃあ僕達はこっちの準備に集中しようか」

その後、食材の下処理を終えた千穂と美琴が合流し、大人組はそのまま庭で話を始めた。

「ロッジのあるキャンプ場は始めて来たよ、太一は来た事はあるの？」

「いや？俺も初めてだぜ？どうしようか迷っただけだよ……若い時ならテントでも平気だろうけど、今は皆ゆっくり寝たいだろ？」

太一はそう言って笑う。

「キャンプかー。思い返すと学生の頃にクレリアちゃんとした後、一度もしてないかも」

「そうね……私もあの時以来だわ。健太が小学生の時に一度くらいは行けばよかったかしら」

千穂と美琴の会話も聞いていたのだろう、良平と会話していた太一が千穂に尋ねた。

「二人が学生の時に行ったのって、俺達も前に行ったあの島だよな？」

「うん、そうだよ。あの時は子供達が小さかったからキャンプはしなかったけど、あの島の森の中でしたんだよ」

私は友人達に子供が生まれた後に、全員を島に招待している。

当時、子供達は3歳か4歳だった筈だ。

私が居たので特に問題は無かったと思うが、あの時は彼女達の判断に任せ、キャンプをせずに島の屋敷で寝泊まりした。

「もう少し子供達が大きくなっていれば色々と出来たと思うけどね」

良平が微笑みながら言う。

「ではもう一度行くか？」

私は皆に尋ねた。

「そうね……あの子供達が行く気になつてくれれば行きたいわね」

「大丈夫じゃないか？クレリアちゃんの島だし、あいつらが行きたがらないって事は無いだろ」

美琴の返事に対して太一が口を挟む。

長い間、遠慮したり感謝の言葉を頻繁に言っていた友人達だが、今ではすぐ話に乗るようになっていた。

皆、私が向けられている感情を感じ取れる事を知っている為「必要以上の感謝の言葉は意味が無い」という事を理解してくれている。

「時期はお前達に任せる、決まったら連絡しろ」

「大分先になりそうだな、ドラマの撮影があるし」

「その辺りはまた話し合つて調整するとして、今日は楽しみましょうよ」

私は会話をしながら、子供達がこちらに向かって来ている事を感じていた。

昼食を終えた私達は外で遊んで過ごし、夕食はロッジ内で食べた。

現在はロッジのリビングで全員が集まり、ボードゲームをしている。

「えーと……小学校に入学、全員から祝い金500ドルを貰う………
だつて！ハイハイ、皆500出してー」

私達がやっているのは「人生バトル」という人生を体験するボード

ゲームだ。

「まあ、まだ先は長いからね」

「そうだな」

皆、口々に反応を返しながら500ドルを千穂に渡す。

「次はクレリアちゃんの番だよ」

「では回すぞ」

私はゲームに付属しているルーレットを回す。

……6か。

6マス進み、私は書いてある内容を読む。

「スマホの充電が切れそう、充電の為一回休み……か」

「姉貴、ここで一回休みかよ。運悪いな」

健太がそう言って笑う。

「小学校に入学する前の子供にスマートフォンを持たせて、使いこなせるのだろうか」

「あはは！確かにそうかもね！」

私の言葉を聞いた千穂が笑う。

「あ……でも、私が幼稚園の頃に持つてる子いたような……？」

葉子が思い出したように言う。

「そういう親も居るみたいね、うちは中学校に入ってからだっただけ」

「アプリで居場所が分かる物とかもあるし、持っているだけでも意味はあるんじゃないか？」

ゲームを進めながら、美琴と太一はそんな話を話していた。

色々と話をしながらゲームは進み、そろそろ誰かがゴールするだろうと思いはじめた時、私は魔力の動きを感じて上を向いた。

「お姉ちゃんどうしたの？」

突然上を見た私に違和感を感じたのか葉子が声をかけ、皆の視線が私に集中する。

「何で上見てんだ？」

全員不思議そうにしながら上を見ている。

「クレリアちゃん？」

千穂が上を見ながらそう声をかけた瞬間に、突然天井近くに見覚えのない赤い魔法陣の様な物が現れた。

同時に、私はこの魔法陣の様な物を停止させる。

「何だ!？」

「こつちに来なさい！」

全員が身構え、千穂と美琴は慌てて子供達を引き寄せる。

しかし、私が止めているので何も起こる事は無い。

「く、クレリアちゃん……これは……」

何も起きない事を理解したのか、戸惑いながらも良平が声をかけて来る。

この間も私はこの魔法陣の様な物を解析し調べていたが、随分単純な作りだな。

「落ち着け、もうこの魔法は発動しない」

「魔法……?どうなってるの?」

千穂が聞いてくる。

彼女達には伝えておくべきだろうな。

「分かった事は教える、取り敢えず落ち着け」

私はそう言って停止させていた魔法陣を消し、皆に話をする事にした。

「消えた……。クレリアちゃん、さっきのは魔法なのよね？」

美琴が私に尋ねて来る。

「魔法だな。しかし、私達が使用している物と差異がある」

「別の魔法って事？」

「そうだ、基礎の構成が違う物……つまりこの世界で私が使っている魔法ではなく、別世界の魔法という事だ」

「姉貴!ちよつと待ってくれ!」

健太が焦ったように声を上げた。

「どうした?」

「姉貴が魔法使いなのは分かってるけどさ……その、別世界が本当にあるって事か？」

「ある。人類の間で空想だと言われるような存在が実在し、様々な法則を持った多数の世界がある事は私が確認している」

私が答えると、健太は黙ってしまった。

「ねえ、お姉ちゃん……」

今度は葉子が口を開いた。

「何だ？」

「その……その世界のどれかに、世界を行き来が出来る様な力があつたらさ……私達の世界に攻め込まれるような事も……あるって事……？」

よく気が付く子だ。

「葉子の考えは正しいだろうな。世界が数多く存在している為に今まで選ばれる事が無く、何も起きていなかったのだと思うが……今この瞬間に別の世界から侵攻される可能性も無いとは言えない」

「そんな……」

葉子は泣きそうな声で呟く。

「今、実際に手を出されただろう」

そう言うのと、親である四人が表情を歪めた。

「あの魔法陣は対象を強制的に指定の位置に移動させる物だ」

「それって……誘拐じゃないか!？」

私の言葉に良平が反応する。

「その通りだ。更に言えば、あの魔法は召喚された対象に制限をかける効果があった」

「制限？」

「召喚者の命に逆らえなくなる効果だ。お前達に分かりやすく言うと、召喚した相手を奴隷化する物だ」

「なっ!？」

奴隷と聞いて、全員が驚いた様だ。

「じゃああれか!?!この魔法を使った奴は俺達を無理矢理呼び寄せて奴隷にするつもりだったって事か!?!」

太一が叫んだ。

「お前達では無い、狙われていたのは健太だけだ」

「俺!？」

自分が狙われていたと聞いて、健太が声を上げた。

「詳しくは省くが、あの魔法は様々な世界から一定の条件を満たした者を無作為に選んで召喚するように構成されていた。それに健太が引つかかったという事だ」

説明を聞いて太一と美琴は勿論、全員が怒りを表している。

「クレリアちゃんが居なかつたら健太は別の世界に誘拐されて奴隷にされてたって事か……」

怒りを滲ませて言う太一。

「許せないけど……そんな相手にどうやって対抗すれば……」

美琴が眉をひそめながら呟く。

「強制的な召喚を無効化するようにしておくか?」

「え!？」

「そんな事出来……るのよね……クレリアちゃんがそう言うのなら」

「そうだね、クレリアちゃんは出来ない事は出来ないって言うし……」

私が彼女達に強制的な転移を無効化する様にするかを聞くと一瞬驚き、すぐに落ち着いた。

「子供達だけでもお願い……私達じゃ何をして抵抗出来無いと思うから」

美琴はそう言って、悔しそうにしている。

確かに魔力を使用出来ない彼女達に抵抗する術は無いな。

「分かった」

私は彼女の言葉を聞き、転移無効化を全員に施した。

あれから皆は気を取り直して楽しんでる。
子供達はしばらく元気が無かったが、大人四人は切り替えが早かった。

私との付き合いが長いからな、精神が強くなっている様だ。

友人達とロτζジで過ごしながら、私はカミラへ念話を繋いだ。

『カミラ、私はしばらく別の世界に行く』

『……何かあったの?』

帰って来たカミラの声は真剣だった。

『健太が他世界の魔法で強制転移させられそうになった』

『ああ、あの子ね。……今までも地球上でそんな事があったのかしら?少なくとも私達の情報にそれらしい物は無かったけれど……』

『恐らく今回が初めてだろうな。健太を狙った魔法は、数ある世界の中から条件に適合した者を無作為に選ぶようになっていた。私が調べた限りでは世界は無数に存在していて、その中には知的生命体が居る世界もある。それらの中から地球の人類が選ばれる確率は相当低い筈だ』

『今回、その低い確率に当たった……という事?誰かが意図的に狙った可能性は無いの?』

『魔法の構成を見る限り、そういった物である可能性は低いと思う』
『そう、それなら一先ず安心かしら。それで、お母様はその魔法を使った相手に会いに行くつもりなのね?』

『そういう事だ。他者を誘拐し奴隷にする事自体は構わないが、私の周囲に手を出したからには放って置く気は無い』

取り敢えず今の所は殺す気は無いが、相手次第だな。

『転移先の特定は?』

『既に終わっている』

『まあ、お母様ならしているわよね』

『無防備なまま魔法の構成に組み込まれていたからな』

『……それ本当？お母様が見たから無防備に見えた……という訳じゃないの？』

『本当に何も処理されていない、完全に無防備な状態だった』

『相手の力量によつては探知される事もあるのに、何もしていない……？』

警戒するような声色で話すカミラ。

『私は違和感を感じるが、カミラはどう見る？』

本来、魔法の構成は他者に簡単に解析されないように手を加える物で、完全に無防備な構成など殆ど見る事は無い。

『そうね……そんな重要な情報をそのままにしておくなんて明らかにおかしい。何か別の理由がある可能性も考えておいた方が良いと思うわ。例えば……実力の偽装とか』

『なるほど、あえて無防備にしている？』

『あり得ると思うわ』

あの魔法は強制転移魔法としてはかなり稚拙な出来だったが……油断を誘う為ならば納得出来る。

相手は最低でも「魔法の構成から転移先の世界を探し出せる」程度の実力がある者に来て欲しいと考えているのかも知れない。

もしこの考えが正しければ、あの転移魔法は「一定の条件を満たした者を他の世界から強制転移させ隷属させる」という効果以外に「魔法に残された情報から転移先の世界へ来られるだけの実力持つ者を誘い込む」という目的もあったのかも知れない。

『転移先には慎重に侵入する事にする』

出来るだけ気が付かれないように転移する事にしよう。

あの魔法では相手の実力を測る事が出来ないからな。

本当に実力が低いのなら特に問題は無い。

しかし、そうでない可能性がある。

大きく動く前に情報を集めておいた方が良いだろう。

『そうね……その方がいいわ。魔法を使用した相手が何らかの準備をして待ち受けている可能性もあるもの』

カミラも賛成の様だ。

『私が向こうにいる間にこちらで何かあった時は念話してくれ。通常の念話が使えない場合は、私の構成物を通して念話しろ』

『分かったわ、すぐに行くの?』

『この後、千穂達と話してから行くつもりだ。娘達への連絡はカミラに任せる』

『分かったわ。でも……場所を特定して転移で行き来が出来る様になつたら、他の世界でもただの外出とあまり変わらないわよね?』

『確かにそうだな』

『ふふっ、気を付けてねお母様……行ってらっしゃい』

カミラは少し笑うと、いつもの様に言葉をかけて来る。

『行って来る』

私は返事をし念話を切る。

そして皆を集めた。

「クレリアちゃん。もしかして、召喚の事で何かあったの……?」

話があると皆を集め、全員が揃うと、美琴が不安そうに聞いて来る。

「いや、それはもう問題無い。ただ、これから私が行う事について一応当事者のお前達には話しておこうと思つてな」

「何をするの?」

「私は今からあの強制召喚魔法の召喚先が存在する世界へ行く」

私の言葉に、子供達の表情が驚きに変わる。

「……何しに行くの?」

一方、付き合いの長い千穂達はそれほど動じる事は無く、すぐに質問してくる。

「少し話をしようと思つている」

地球を転移対象から除外するのなら、話だけで終わらせても良い。

断つたり、私に何かするようならばそれなりの対応をするつもりだ。

相手の出方次第だな。

「すげえ！本当に異世界に行くのか！」

突然健太が声を上げ、目を輝かせた。

「健太……あんた、行きたいとか考えてないわよね？」

「何考えてるの!?お姉ちゃんが居なかったら誘拐されて奴隷にされてたんだよ!？」

美琴が低い声で問いかけ、葉子が声を荒らげた。

「待って!?別に行きたい訳じゃ無いから!」

二人からの圧に、彼は慌てて否定した。

「絶対にクレリアちゃんに頼んだりしちや駄目よ!？」

「……お願いだから、いきなり居なくならないですよ？」

二人の言葉を聞いた彼は、頭を掻きながら言う。

「姉貴の説明を聞いた後で行く気になる訳無いだろ……皆とも別れる事になるし……」

流石に、彼も他者を誘拐し奴隷にする様な世界には行きたくない様だ。

何より、家族や葉子と離れたくないらしい。

「たださ……姉貴に魔法があると教えられて、異世界があると知って『本当に行けるんだ』って思ったら……テンションが上がったって言うか……」

行きたくは無いが興味はある、という事だろうか。

「お袋や葉子は分かんねえかもしれないけど……千穂おばさんなら分かるだろ?」

健太は言葉に詰まり、千穂に話を振る。

「分かるわ、きつと美琴も分かってるよ」

「ちよつと千穂……」

「昔、クレリアちゃんから色々話を聞いた時……美琴は一度もワクワクしなかった?」

美琴は千穂を止めようと口を開くが、続く言葉を聞いて黙り込み……溜息をついて口を開く。

「……ワクワクしてたわね」

「でしよー?」

千穂はそう言って笑う。

「……でも、危険な事に自分から飛び込むような事はしないので？」
そう言いながら、美琴は健太の頬に手を当てる。

「そんな事する気は無いけど……」

「けど？」

「どうしても見過ごせない理由があったら飛び込むかもしれない」
真剣な表情でそう言う健太は、太一によく似ていた。

恐らく美琴も同じ様に感じた筈だ。

「……貴方が心からそう思った時は……そうしなさい」

息子の顔を見た美琴は一瞬息を呑んだ後、微笑みを浮かべて言う。
その時私が感じた彼女の感情は、嬉しさと悲しさが混じった物だった。

「うん……我が子ながら良い男に育ったな……それにしても、俺達の妻は色々強いと思わないか？」

「そうだね……昔からクレリアちゃんと一緒に過ごしていたから、かな？」

全く会話に入る事の無かった良平と太一は、妻と子供達のやり取りを見守りながら二人で会話していた。

少し話が長引いたが、そろそろ転移しよう。

「話は終わりだ、私は向こうの世界に行く」

私がそう言うと、全員が私に注目した。

「この事はカミラさん達は知ってるの？」

「もう話してある」

「そう」

私は美琴にそう答え、転移をしようとする。

「気を付けてね」

「勿論だ」

私は千穂の言葉に答え、目的の世界へと転移した。

転移すると、景色が見覚えの無い樹々が生い茂る場所に切り替わった。

地球では感じる事が無くなった濃い魔力を感じる。

私はすぐに知覚を広げた。

……特に脅威になる様な物は無さそうだ。

様々な植物が生え、生物も居るが……こちらには気が付いていない。

大気は……地球と大差無い様に感じる。

気温もあまり変わらないが、この世界の気候がまだ分からないのでこの辺りだけかも知れないし、これから変化があるかも知れないな。

取り敢えず今は問題無いと判断し、周囲を見渡す。

周囲は深い森に覆われていて薄暗い。

時々獣の声や虫の音が聞こえ、風によつて樹々の葉が僅かに揺れている。

この世界には知的生命体がいるはずだ、その辺りから情報を得てみよう。

私はそう考え、行動を開始した。

この世界に居るであろう知的生命体から情報を得ようと決めた私は現在、知覚をある程度広げたまま適当な方角へと徒歩で移動している。

認識障害は使っているが通用するかが分からないからな、ある程度慎重に動いておいた方が良さだろう。

周囲を調べている内に感じた事だが、この辺りは森の規模に対して動物や虫が少ない気がする。

私の感覚なので、この世界ではこれが普通なのかもしれない。

こうして周囲を調べながらひたすら一方向に歩いていると、森の切れ目から光が差し込んでくる。

今は日中なのだろう。

しかし、思い込みは良くないな。

この世界が地球と同じような法則だとは限らない。

少なくとも現時点では地球と大きな差異は感じないが、その事は念頭に置いておこう。

そう思いながら森の切れ目で足を止め、空を見てみる。

これだけ空が明るいのなら、この世界も太陽の様な恒星の影響を受けているのかも知れない。

今の所、太陽の様な物を森の切れ目から確認する事は出来ないが、代わりに月の様な惑星が見えている。

地球にある月と比べるとかなり小さいが、とても滑らかで何処か人工的な印象を感じる惑星だ。

そんな事を考えながら再び歩き始めると切れ目は樹々に覆われ、再び周囲が薄暗くなる。

娘達と友人達には既に十分な対策をしているので急ぐ必要は無い。場合によっては即座に動くが、今の所はこのまま慎重に進む事しよう。

私が歩きながら感知範囲を少しずつ広げ続けていると多くの知的生命体らしき反応を見つけた。

話している事は理解出来るな。

言語が理解出来るなら話し合いも可能かも知れない。

そう思いつつ観察する。

……武装し、かなり統率のとれた動きをしている。
恐らく兵士だろう。

姿も人類に近い、髪の色や目の色、肌の色も大きく違わない。
ただ、一目で分かる大きな違いがある。

それは彼らの額だ。

彼らの額には小さな宝石のような物が埋まっていて、見た目は地球の宝石の様に見える。

更に個体ごとに色、形、大きさが違う様だ。

それさえなければ地球人だと言われても分からないだろうな。

精々「髪は染めているのか？」と聞かれる程度だろう。

しかし、彼らの種族が強制転移魔法を使ったのだろうか？

彼らから感じる魔力から推測すると、それだけの魔法を行使出来るとは思えないのだが……。

取り敢えず、ここから会話を聞いているだけでもある程度の情報は得られた。

彼らには「聖朱族(せいしゅぞく)」という敵対している種族がいる様だ、そして魔神と呼ばれる信仰対象がある事も判明した。

更に、彼らは統率が取れているにもかかわらず、お互いに明確な上下関係が存在しない様だった。

現在の関係は「兵として行動している間の関係」で、本来はあまり上下関係を気にしないのかも知れない。

このままある程度情報を集めて離れても良いが……どちらにしても最後には話し合う事になるだろうからな。

丁度良い人数が居る事だし、彼らが私に対してどの様な反応を示すのか確認する為に、一度姿を見せてみよう。

私はそう考え、彼らの進行ルートに先回りして待つ事にした。

移動を続ける俺は、戦場を思い口元を引き締めた。

……憎き聖朱族に後れを取る訳にはいかない。

今も各地で大規模な戦争が行われている。

今回の作戦は戦況を少しでも有利にする為の物だ。

必ず成功させる……！

実戦を経験した事で、俺は自分の実力不足を痛感した。

戦闘技術、身体能力の向上……二重詠唱の練度もまだまだ上げたいが……もう時間は取れないな。そう思いながら視線を動かすと、周囲には隊列を組んでいる仲間がいる。

普段は上下関係など無い俺達だが……戦闘時は別だ。バラバラに挑んでも聖朱族に勝つ事は出来ない。

我らの神を否定し、滅ぼそうとする奴等を皆殺しにするまで俺達に安寧は訪れない。

それは一族の総意だ、その為にわざわざ他の世界から使える道具達を集めている。

あれはかなり良い。

強力な上に逆らわず、戦えなくなっても使い道がある。

俺達は仲間を犠牲にしたくない……出来る事なら全て集めた道具で戦争を行いたい所だが、現実はどう上手くいかない。

更に大きな問題もある。

それは奴らも同様に道具を集めているという事だ。

この状況だと……多分、俺の代でも戦争は終わらないだろう。

俺は道具を呼び出す詳しい方法を知らないが……もつと大量に道具を集められたら、犠牲を出さずに奴らに勝てるかも知れないのにな。

「全体！止まれ！」

その時、突然停止命令が下り、俺達は動きを止めた。

……まだ目的地じゃない筈だ、何かあったのか？

俺はそう思いながら、再び移動の命令が出るのを待っていた。

「全体！止まれ！」

集団から声が聞こえた。

斥候が私を発見したのだろう。

かなり距離を取り、集団は停止している。

私がしばらく相手の反応を待っていると、集団からの敵意と殺意が増していく。

……何故だ？

そして、集団の周囲の魔力が僅かに濃くなり、黒い輝きが見えた。これは……彼らが魔力を黒い光として周囲に放射しているのか？

状況を確認し、そう考えた直後……集団から複数の鋭利な氷塊が放たれた。

召喚魔法を使うのだから、攻撃にも使うのは当然か。

しかし、一言も言葉を交わさず攻撃に移るとは。

それが悪いとは思わないが、どうするか。

そう考えながら私は転移で彼らの間近に移動し、言葉をかける。

「話を聞いて欲しい」

私が声をかけると、彼らは殺気を放ちながらそれぞれに行動し始めた。

近接、遠距離 援護、それぞれ役割が決まっている様だ。

近接攻撃を仕掛けて来る者を素手で捌きながら観察していると、彼らが口を小さく動かしているのが見えた。

音を拾って見ると、どうやら小声で言葉を呟いている。

独特の発声だ。

すると、私の死角を狙うかの様に炎の矢が発生した。

なるほど、これが彼らの魔法詠唱なのか。

詠唱は独特だが……威力はそれほどでも無いな。

私に放たれた魔法を掻き消し、彼らの力量を計る。

一般的な魔法人類よりは威力も出ているし構成も悪くないが……ん？

私は周囲からの攻撃を全て無効化しながら、彼らの魔法に注目する。

……時々魔法構成が二重になっているな。

中々面白い事をする。

元々ある程度の情報を得るつもりだったが、この事も聞いてみよう。

その時、離れていた者達が準備していた魔法が発動した様だ。先程まで私を牽制していた者達が少し距離を取った。すると上空から私に一筋の雷撃が落ちて来る。

私はその威力を確認してから無効化した。

中々の威力だ。

少なくとも今までの魔法攻撃に比べれば格段に良い。

格段に良いが、この程度では私には届かない。

彼等が私に殺意を持って攻撃しているので戦っているが、本来は気にする程の物では無いからな。

せめて惑星を破壊する程度の威力があれば、多少は気にするのだが。

もしくは……地球の創作物に出て来る者達のように、特殊な能力があれば戦闘らしい戦闘になるかも知れない。

その後、彼らは周囲を気にしない戦闘に切り替えたらしく、周囲が更地になって行った。

カミラから「お母様は相手の実力を測る時に自分を基準にしない方がいいわよ」と言われてから、私は魔法人類を基準に考える事が増えた。

彼女が言うには、他者と私を比べる事は「一センチメートルの距離を一光年の物差しで測っているような物」らしい。

私は「流石にそこまでの差はないだろう」と言ったが、彼女は微笑みながら「どうかしらね？」と答えるだけだった。

彼らの魔法戦闘能力は魔法人類と比べるとかなり高い。

魔法構成は二種類。

通常の構成と二重構成の物だ。

更に、二重の魔法は単発だが、通常の魔法は詠唱を挟まず二回発動している事も分かった。

私の推測だが、彼らはあの独特な詠唱によって魔法の「増幅」と「連

続発動」を使い分けられるのではないだろうか。

戦闘の影響で荒れた大地で考えながら佇む私に、彼らからの強い敵意が向けられ続ける。

「もう良いのか？」

私は彼らに声をかけるが、誰も口を開かない。

実戦でどの程度の実力があるのかを確認する為に様子を見ていたのだが……これ以上は何も無いのか？

彼らが召喚魔法を使うのなら、切り札や奥の手があるのであるのではないかと考えていたのだが……。

これ以上は無駄かも知れないな。

私は全員の手足を拘束し、魔法を封じた。

すると地上に居る者達は身動きが出来ず転倒し、飛行していた者達は墜落する。

こうして彼等は全員大地に転がる事になった。

私は無力化した彼らに近づく。

彼らの感情は変わる事は無く、ずっと私に強い敵意と殺意を向けている。

この状態で話し合いは出来るのだろうか。

「色々この世界の事を聞かせて欲しい」

そう言つて一人の男に目を向ける。

男は殺意を隠そうともせず私を睨みつけて来る。

なぜここまで敵意を向けられているのだろうか。

「何故私にここまで敵意を向ける？」

問いかけてみるが、彼らは黙つたままだ。

私の言葉に反応して変化する彼らの感情を見る限り、言葉は通じていると思う。

だが、彼らは私と話す気が無い様だ。

こういった状況になった時、大抵の場合は拷問を行つて情報を聞き出すのだろうか……私には対象を傷付けず情報を得る方法があるからな。

私は黙つたままこちらを睨む彼らの知識を深く探つて行く。

この方法は対象を傷付けないが、本当に何も出来ないのかと言えばそうではない。

安全と言えるのは私に十分な実力があり、傷付ける気が無いからだ。

本来ならば色々行う事も出来るという事だな。

その為、一定以上の実力を持たない者が同じ事をした場合は安全とは言いがたく、相手の精神に望まない影響を与えたり、場合によっては破壊してしまう可能性がある。

他者がこの方法に手を出そうとした場合、私は使用する前に十分に実力を付ける事を薦めるだろう。

こうして色々と考えている間も、私は役に立ちそうな情報を探す。

……彼らは魔竺（まじく）族というのか。

なるほどな……。

私にここまで敵意があるのは、彼らが自分達以外の種族を認めておらず、すべて排除するべき敵だと考えているからか。

彼らは魔神の僕として全員が平等であるという考えを持ち、敵対する聖朱族と長年争い続けている様だ。

魔法を使う際に彼らが体から放っていた黒い光は「魔力紋」と呼ばれ、使い手が強力であればあるほど強く大きな光を放つ、という事らしい。

私には本来戦闘に回すべき魔力を意味も無く放射して捨てている様にしか見えなかったが、何か意味があるのだろうか。

何か譲れない理由があるのなら止めないが、出来ればやめた方が良いと思う。

気になっていた魔竺族の独特な詠唱は、特殊な声帯を持っている彼ら独自の物で、魔法の威力を二倍にまで上昇させるか二連続で発動するかを選べるが、二連続の場合は同じ魔法のみ可能で別々の魔法は不可能な様だ。

他にも棄獣（きじゆう）と呼ばれる召喚した異世界人を使った兵器の事や聖朱族が用いる廃器（はいき）という存在。

この世界がドーンラグルと呼ばれている事や二種族が大陸を二分し、国境での争いが絶え無い事、現在も大規模な戦争が行われている事、戦士と衛士という役割の違いなどが分かった。

そして肝心の召喚魔法についてだが、彼らの種族も敵対種族である聖朱族も他の世界から戦争の道具として異世界の知的生命体を集めているという。

自分達に服従するのなら、他種族を「道具」として許容出来るのだろうか？

彼らはそれ以上役に立ちそうな情報を持っていなかったが、手掛かりはあった。

どうやら魔竺族の召喚は魔法に長けた者達が「スピナウ」という都市で行っているらしい。

都市の場所も分かったが、それ以上有用そうな情報は無かった。

「ありがとう、十分に情報は得られた」
彼らは私の言葉に眉をひそめたが、その直後に全員消滅した。

この世界で初めて出会った知的生命体である魔竺族から情報を得た私は、彼等を処分してスピノウへと向かっている。

彼らに見つかるほぼ確実に敵対する事が分かった。

認識阻害は有効だったため、以後は認識阻害を使用したまま空を飛ぶ事にする。

はつきりと覚えていないが、初めて会う種族に何事も無く受け入れられる事はあまり無かった気がする。

初めて会った相手に警戒するなどは言わないが、戦う事無く友好を結べる様な種がもつと居ても良いと思う。

しかし、私は何処かで戦いを避ける事はあまり出来ないのだろうか、とも感じている。

それは力が他者との関係を決める最も簡単な方法だと感じているからだ。

……こういう事を考えているから娘達から色々と言われるのだろうか。

そう思いながら、私はドーンラグルの地を見渡した。

眼下に広がる広大な森、高い山、大きな川……こうして上空から世界を見てみると、かつてのイシリスを思い出す。

やはり生命体が少なく感じるが、これから増えるのかも知れない。確か、私が魔法人類に出会う前もこの様な環境だった筈だ。

この先、魔竺族と聖朱族がどう動くかは分からないが、何事もなければやがて生命が溢れる世界になるのではないだろうか。

しばらく飛んでいると、遠くに目的地が見えて来た。

得た情報が正しければあの都市がスピナウだろう。都市の上空へ到着した私は、眼下に広がる町並みを見る。石で出来ている建物が並び、建物は高くても三階建て程度の物だ。ほぼ円状の都市を東西南北に伸びた大通りが分割している。上から見ると、円の中央を通して十字に線を引いている様な状態だな。

じつくりと町並みを眺めていると、ふと気が付く。城の様な、目を引く変わった建物が全く見当たらない。

今までどの種族の文明にもそういった建物があつたのだが、彼らの都市には無いのだろうか。

そこまで考えた時、私は彼らは魔神の僕として平等、という情報を思い出す。

彼らの社会には王や貴族といった「身分」が存在しないのかも知れない。

私は現在、認識阻害を維持したまま都市に入り込んでいる。

都市に住んでいる彼らの様子は普通だ。

魔法人類や人類等と特に変わらず、語り合い、笑いながら暮らしていた。

実際に生活する魔竺族を見ていて分かった事は、彼等が仲間に対しては異常に寛容だという事だ。

私が今まで見て来た種族は、同種族であつても大なり小なり衝突があつた。

だが、彼らにはそれが全く無い。

表面上は普通に会話し、軽口も言っているのだが諍いは全く起こらず、外部から都市を守る兵らしき者達は居ても都市内部に兵らしき者はいない。

そういった種族だ、と言つてしまえばそれまでだが……どこか違和感を感じる。

「お前、どつちに配属になった？」

「戦士になったよ」

私の耳に、二人の魔竺族の会話が入ってくる。

一人は若く、もう一人はそれなりに年を取っている様だ。

「そうか……そうなると衛士の俺とはあまり会えなくなるな」

「そうだな、訓練を終えたら初任務に行くからもう会えないかもな」

「都市の事は任せろ、安心して戦ってくれ」

「おう、任せたぜ。俺は奴らを殺して殺して殺しまくって来るから

さー」

「お前ならやれる！死にかけても道連れにしてやれ！」

「任せとけ！一人でも多く殺してやるよ！」

明るい声で話していた二人は、笑い合いながらその場を離れて行く。

情報にあった戦士と衛士の話をしていたな。

明らかに年上に見える男と恐らく新兵である若者の間にもあるのは仲間意識だけで、特に上下関係があるようには見えない。

やはり身分差は無さそうだ。

更に、先の戦闘で好戦的な者が多いのではないかと思っていたのが、どうやら種族全体が好戦的な様だ。

侵入してからこうして複数の会話に聞き耳を立てていたのだが、どうやら彼等は知的生命体としてかなり珍しい部類の特徴がある。

その特徴とは「死に対して何も感じていない」という事だ。

地球の生命体は基本的に命の危機に敏感だ、可能な限り死を遠ざけ回避しようとする。

例外もいるが、それは全体から見れば極僅かしか居ない。

かつて地球には命を懸けて戦う事に価値を感じ、嬉々として戦う部族がいた。

だが彼等は死を理解し、命を称え、その上で全てをかけて戦っていた。

そして、その部族の中にも戦いに価値を感じない者達が一定数存在していた。

だが、この魔竺族は彼等とは違う。

誰一人死を気にしておらず、長い間聖朱族と争っている明確な理由を誰も知らないまま戦っている。

更に、これはまだ私が見つけていないだけかも知れないが……例外が存在しない。

私が見て来た地球の生命達は多種多様な複雑さを持ち、様々な例外が存在し、予想の出来ない変化をしていた。

そちらを見慣れているせいか、私には彼らが規格製造された量産品の様に見える。

この世界の生命はこの様な物なのだろうか？

その後も私は都市内を歩き回り情報を集めた。

ある程度集めると得られる情報は同じような物となり、目新しさが無くなって行く。

そこで情報収集を一時中止し、実際に召喚魔法を使った魔竺族の魔法使いを探して接触する事にした。

私は知覚を広げ、高い魔力を持つ者を探る。

魔竺族の中で魔法に長けた者達が魔法を行使しているらしいので、すぐに見つかるだろう。

……いないな。

あれから私は知覚を広げて魔竺族の魔法使いを探しているのだが……高い魔力を持つ者が見つからない。

他の者達より多少魔力が高い者達はいたが……恐らく彼等では無い。

あの程度で「魔法に長けた」と表現される事は無いと思う。

仮に彼らが情報にあつた魔法に長けた者達であつた場合、疑問が生まれる。

あの召喚魔法は稚拙であつたが、それでも他の世界から対象を強制的に転移させ隷属出来るように構成されていた。

今まで見て来た魔竺族が、あの召喚魔法を行使出来るとは思えない。

しかし実際に召喚が行われている以上、使用した者が居る筈だ。

ここに居ないのであれば別の場所に居るか、あるいは既に死んでいるのかも知れない。

他にも、私の知覚を欺ける実力者が紛れている可能性もある。

そう考えながら探し続けていると、珍しい状態の魂を見つけた。

……複数の魂と意識が一つの肉体に宿っている。

どうやら肉体がかなり弄られている様で、数も多い。
地球では見た事の無い状態だ、中々興味深いな。
搜索の途中だが……直接見てみよう。

私は高魔力保持者の搜索を中断し、発見し興味を持った珍しい状態の生命体に会いに来た。

知覚によつて同じ状態の個体が多くいる事は分かっているが、まともな状態の精神が宿っている個体は非常に少ないな。

対象の状態を確認しながら格納庫の様な場所に入ると、並べられた彼ら、彼女らが目に入る。

魔竺族がいない事は確認している、恐らくここは保管庫なのだろう。

見た目は創作に出て来る魔物や魔獣の様な印象を受ける姿だが、大きさも形もそれぞれ全く違う。

私はその中で見つけた自我を維持している「彼等」に近寄った。

……一体どれだけ時間が経っているのだろうか……。

学園にいた俺は突然光に包まれ、目が覚めたら異世界だった。

夢のような状況に喜んだが、それは僅かな時間だけ。

俺はすぐに奴隷にされ、戦いを強制されて生き抜く為に戦い続ける道具にされた……。

腕が四本生えた人間の様な相手を……殺して、殺して、殺して……殺し続けた。

自殺する事も出来ず心をすり減らしながらも戦い続けていられたのは、同じ境遇に陥った三人の仲間が居たからだ。

戦いで死のうと考えた時も、皆を残して逝けないと踏みとどまれた。

いつか戦いが終われば……そんな事を何処かで考えてもいた。けど……いつまでも戦いは終わらず、道具として殺し合う日々が続き……その日がやって来た。

……あの日。

俺達の人としての最後の日……前日に二人の仲間が戦えなくなり何処かに連れて行かれ、俺達も状態は最悪だった。

敗走し、瀕死の友人を抱えて戻った俺が意識を失う直前に聞いた言葉は「もう使えん、棄獣に回せ」だった。

そして……気が付いた時はこの体だった。

意識はあるけどこの体は言葉を話せない。

こんな事になった俺の唯一の救いは、共に戦った仲間の意識もこの体の中にある事だ。

異世界だからな……そんな事も出来るんだろう……。

『一（はじめ）？大丈夫？』

俺の意識が乱れているのを感じたのか、エリノーラが心配してくれる。

『俺達は変わってやれないからな、何でも話してくれ』

『そうね、内側から二人を出来る限り助けるわ』

ハオとヌヌも言葉をかけてくれた。

『大丈夫だよ、今更何があつたつてどうつて事は無いさ』

『そう……今更強がったりしらないと思うけど、疲れたら無理しないで代わってね？』

エリノーラが優しい声でそう言ってくれる。

『ありがとう』

弱さや格好悪い所なら、こうなる前にお互いに嫌という程見せあつた。

俺達に壁なんて一切無い、今では同じ体に居るしな……。

この体が滅びれば、きつと他の皆も今度こそ死ぬだろう。

絶対に生き残る。

そう心に決め、俺は……俺達は今も生きている。

ふむ……男女二人ずつ、合計四人の魂と精神が存在しているな。
元は個別の人間の様な知的生命体だった様だ。

あの魔法で召喚されたのだろう。

私は宿っている魂と精神を確認しながら、内部で会話している彼等に近づく。

そして、静かに話しかけた。

「聞こえるか？」

肉体は全く反応しなかったが、宿っている彼等の精神が反応した。
耳は普通に聞こえる様だ。

『誰かいる！』

『私にも聞こえた！』

『誰だ？魔竺族じゃないよな？』

『あいつ等はこんな事しないものね』

『誰だつていい、あいつ等より悪い事なんてそう無いだろ』

『そうね……それより、何とか反応を返したいけど……』

『無理だ……この体は声も出ないし、命令が無いと自由に動かせる
しない』

『せっかくあいつら以外の誰かがいるのに……！』

彼等が騒いでいる、声が違うのは肉体があつた頃の影響を受けているからだろう。

しかし、その方が分かりやすくいい。

取り敢えず聞こえている事を伝えておこう。

「お前達の会話は聞こえている」

『聞こえているの!?!』

私の言葉に女性が反応する。

『……お前は誰だ？名前は何だ？』

彼等の中の一人が警戒するように問いかけて来た。

この世界で色々と経験したのだろう、すぐに混乱は無くなり全員が
落ち着いている。

「私はクレリア・アーティアという」

『お……おう、ありがとう』

「何故動揺する」

『いや……素直に答えてくれるとは思ってなかった』

「こちらの世界ではわざわざ隠す必要は無いからな」

『こちらの世界……？あんた！別な世界から来たのか!?!』

『ちよつとハオ、先ずはこつちも自己紹介しなきや。向こうはしつかり答えてくれたのよ?』

大声を上げる男性を諭す女性。

『悪い……自己紹介するよ』

こうして四人は自己紹介を始めた。

私は自分の事を別世界の魔法使いだと説明し、彼等の事を聞いた。最初に会話していたのは東山 一（とうやま はじめ）とエリノーラ。

私が会話を聞ける事に驚きの声を上げたのがヌヌ・ラ・レスデル、私の名前を聞いて来たのはリン・ハオユーというらしい。

この状態になる前、東山とリンは男性でエリノーラとヌヌは女性だったという。

出身を聞くと、東山は西阿須（にしあず）国。

エリノーラはマニサル。

リンはツイツイー。

ヌヌはジャフレ・ラ・デラの住人らしい。

すべて聞いた事が無い名だ。

それぞれ違う世界から誘拐されたのだろうか。

彼等が誘拐された他世界の住人だという事は会話の内容からも明らかだったが、魂を見れば更に良く分かる。

同じ世界で生まれた魂は基礎構造が同じである、そう私は判断している。

多少他の部分が変質する事もあるが、同じ世界で生まれた魂の基礎が変化した例は見た事が無い。

その為、私は今の所、「同世界で生まれた魂の基礎は全て同じ物となる」と考えている。

四人の魂はそれぞれ基礎が違い、そのどれもがこの世界の生命体と一致しなかった。

彼等はそれぞれ別の世界から来たと考えて問題無いだろう。

「東山が主人格か」

『ああ、俺が一番適性があつたんだと思う』

自己紹介を終えた後、私は彼等に現在の状態を聞いていた。

『そして、私が副人格よ。一が辛い時は、一時的に私がこの体を動かしているわ』

『俺とヌ又は残念ながら体を動かす事が出来ない……出来てりやこの二人だけに辛い思いをさせなくて済んだのによ……！』

『そうね……』

暗い声をだすリンとヌ又到東山とエリノーラが声をかける。

『二人が……皆が居てくれるから俺は戦えてるんだ。エリノーラだつてそうさ』

『そうです、皆で生き抜くって誓ったでしよう？』

『おう……最後まであがいてやろうぜ』

『私も諦める気なんて無いわよ』

彼等の感情には憎しみと怒りが満ちているが、それ以上に生き抜くという強い意志を感じる。

これ程の意思を持つ者は珍しい。

きっと最初は脆く、幾度も壊れかけただろう。

その度に支え合い、乗り越え……強靱な精神を作り上げた。

もし、彼等の内の誰かが欠けていたなら、こうはいかなかったかも知れない。

『あの……クレリアさんは他の世界の魔法使いなんですよね?』
内心で色々と考えているとエリノーラが問いかけて来る。

「そうだ」

『どうしてこの世界に来たんですか? あっ……無理に聞く気は無い
です。もし良ければ聞きたいな、と……』

慌てて言い訳をするエリノーラ。

話しても構わないか。

「私の友人の息子がお前達のように召喚されそうになってな。文句
を言いに来た」

『あれを防いだんですか!』

「ある程度知識と技術があれば対抗手段はある」

『こちらで過ごす内に魔法の事も知りましたけど……あれってかな
りの大魔法ですよね? 確か……そう! 私達が誘拐されてこちらに来
た時、周りに沢山それらしい人が居ましたし、一人では難しいので
ないでしょうか……?』

複数の魔竺族……。

「それは間違い無いか?」

『はい。後、全員疲弊している様に見えました。その後の出来事で
それ所じやなくなつて、今まで気にもしていなかつたんですけ
ど……』

『ああ、そう言えば……俺も覚えてるよ。間違い無い筈だぜ』
リンもエリノーラの言葉に同意する。

大人数で行う……。

そうか、儀式魔法の様な物か。

……儀式魔法の事などすっかり忘れていた。

私は高い魔力を持つ個体を探していたが、もしそうであるなら話が
変わる。

魔力の大小と魔法技術は別の物だ。

人数を揃えたり、道具や設備などで魔力を確保するなら個人に高い
魔力は必要無い。

彼等の情報に在った「魔法に長けた者」とは魔力が高い者では無く、

魔法技術が高い者という意味だったのかも知れない。

これは儀式魔法の事を失念し「魔法に長けた者」を魔力が高い者であると勝手に思い込んだ私の落ち度だ。

「ありがとう、助かった」

『どういたしました?』

礼を言った私に不思議そうに返事をするエリノーラ。

気付かせてくれたエリノーラに感謝しよう。

ふむ……言葉で感謝するだけでは足りないか。

『ずっと黙ってるけど、どうかしたの?』

黙っている私を気にしてヌヌが言葉をかけて来る。

「エリノーラの話で思い出した事が役に立ちそうだ。ありがとう」

『それは良かったわ』

私の言葉にエリノーラは嬉しそうに答えた。

「本人が思っている以上に役に立った。礼として何でも、とはいかないが私に可能な範囲で望みを叶えるが、どうだ?」

『望みって言われても、私達はこんなだからね……その気持ちだけで嬉しいわ……』

悲しそうに言う彼女。

そこで私は実現可能な事の中で、彼等が一番望みそうな内容を口にする。

「例えば……四人を以前の姿に戻し、誘拐された直後の元の世界に送る事も可能だぞ?」

『え……?』

エリノーラと他三人の声が重なった。

この環境に揉まれた精神でも流石に動揺したのか四人はしばらく黙っていたが、やがて又々が小さな声で言う。

『信じられないわよ……そんな話……出来る訳無いわ』

彼女の精神はそんな事など出来ないという否定と、「もしかしたら」という期待が激しく渦巻いていた。

「出来る。お前達は魔法の事がある程度学習したようだが、魔法は奥が深い」

『……だとしても、体を戻すとか、元の世界の過去に戻すとか……そんな事本当に魔法で出来るのかよ……?』

リンも又々と大して変わらない精神状態のままに問いかけて来る。

「二定以上の魔力と魔法技術、そして私の力があれば可能だな」

魔法だけでは難しい事もあるからな、その辺りは魔法とは異なる私の力が必要になる。

『魔法と……クレリアさんの力……?』

『クレリアさんは魔法以外にも何か力を持っているの?』

東山が呟き、エリノーラが尋ねて来る。

「詳しくは言わないが、今お前達に提案した事が可能なだけの力はある」

『そんな事が出来るなら……クレリアさん……クレリア様はまさか……異世界の主神なのでしょうか?』

エリノーラは突然そんな事を言い始める。

「様は必要無い……確かに信仰対象となった事実もあるが、私は神では無いな」

『そうですか……本物の神と言葉を交わす事が出来たと思ったのですが……』

私の返答を聞くと彼女は残念そうな声色で言うが、内心では私の否定をあまり信じていない様だ。

『以前なら素直に信じて喜んでたんだらうけどな……』

リンがそんな事を呟いた。

『クレリアさん、俺は貴女が嘘を言っているとは思ってない。だけど俺は……俺達は素直に信じる事が出来ない、出来なくなってしまう。……だから証拠が欲しい』

東山は真剣な声でそう言った。

「証拠は見せる事が出来ないが、一つだけ正直に答えてくれないか？」

『……なんだい？』

彼の言葉に答えず質問した事で不信感を持ったのか、彼は少し低い声で答えた。

「実際に出来るかどうかは別として、戻れるなら戻りたいか？」

私がそう言うのと四人から怒りと悲しみが溢れ出す。

『戻りたいに決まってるだろ!? 訳も分からず連れて来られて殺し合いを強要されて!! 終いにはこの姿だ!! 皆が居なかったらとつくに死んでた!!』

外部に聞こえていたら建物中に響く様な声で叫ぶ東山。

強い感情の発露を感じながら、私は四人の言葉を聞いた。

「では、こうしよう」

叫ぶだけ叫び、黙ってしまった四人に私は話しかけた。

『……何?』

エリノールが少し敵意の籠った言葉を投げかけて来る。

「お前達がどうしたいのかも聞けたからな。礼として今すぐお前達を以前の姿に戻し、元の世界に送る事にする」

私はそう言いながら他者に感知されない為の対策を施す。

『えっ!?!』

『嘘だろ!?!』

『ちよっと待って!?!』

三人の驚く声が重なって聞こえる。

その声を聞きながら、私は準備を進めて行く。

向こうの世界や宇宙に出来るだけ影響を残さないようにしておきたいからな。

『今すぐだつて!?!』

東山も焦つたような声を上げた。

この世界には魔竺族と聖朱族以外に何か居そうだからな、出来る時にやっておく。

「信じなくてもいいぞ」

よし、準備は整つた。

『……本当に……出来るのか?』

「向こうで判断するといい」

『待つ……』

次の言葉を言い切る事無く、一体の棄獣が静かにこの世界から消滅した。

四人を元に世界に戻した後、私はこの世界について考える。

私が魔竺族、聖朱族の二種族以外に何か居そうだと感じたのは、棄獣と召喚魔法の存在だ。

この二つだけ技術が突出し過ぎている。

もしかすると、聖朱族側にある廃器と呼ばれている存在も似た様な物なのかも知れない。

棄獣に施されていたのは魂を傷付けずに別の肉体に移すだけの簡単な物だったが、それでも魂を扱えている事は事実。

召喚魔法と比べて、どちらがより難しいかは内容と個人の得手不得手によるが……少なくとも私が見て来た魔竺族ではどちらも可能だとは思えない。

私は魔竺族と聖朱族、それぞれに突出した魔法技術を持った者が居ると考えていた。

しかし、僅かとはいえ魂に手を出しているのなら……彼等の中に技

術を隠している者が居る可能性よりも、彼等に力を貸している第三者が居る可能性の方が高いと考える。

出来れば一度、実際に召喚が行われる所を見ておきたいな。そう思いながら、私はこの場を離れた。

翌日、私はスピノウで魔力の高まりを感じた。

これは……召喚魔法を使う為の物か？

それとも別の理由か。

私は確認する為、魔力が集まっている場所へと向かった。

認識障害を行い現場へ訪れると、床に描かれた魔法陣がある大きな部屋に大勢の魔竺族が居た。

全員、目を閉じて一定の間隔で並び、床の魔法陣を囲んでいる。

昨日の今日で運が良い。

しかし、あの時の物とは魔法構成が少し違う。

という事は……健太は聖朱族側の召喚魔法に選ばれたのだろうか。

そんな事を考えながら観察していると、魔竺族の一人が口を開いた。

「大いなる我らの神よ。今ここに我らの力を捧げます」

そういった後、その魔竺族も目を閉じる。

このままでは魔力が足りない筈だが……どうするつもりなのだろうか。

そう思いつつ見ていると、突然魔法陣に魔力が満ち……魔法が発動する。

魔法陣の周囲は光に覆れていたが、私には魔法陣中央に五人の人型生命体が現れるのが見えていた。

やがて光が消え周囲の魔竺族が動き出すが、私は既に別の事に意識

を向けていた。
見つけたぞ。

騒ぐ被害者達の声を聞き流し、私は次の目的を決めた。

魔法陣に魔力を送り込んだ存在に会う事にした私は、召喚現場からすぐに離れた。

送り込んで来た魔力をもとに相手の位置を特定したのだが、どうやら相手は惑星ドーンラグル付近の宇宙にいる様だ。

隠蔽はしていない様だから、感知を宇宙にまで広げていれればすぐに発見出来ていたな。

健太を狙った召喚魔法では無いが、効果は同じだったのでこちらも地球を除外した召喚魔法に変更して貰おう。

素直に聞き入れてくれると話が早いのだが、どうなるだろうか。

あら……下僕が助けを求めているわね。

目を閉じ、彼等の祈りを感じ取る。

良いでしょう……魔神であるこの私の力を貸してあげましょう。

忌々しい聖神と聖朱族を滅ぼす為ですものね。

さあ……私のために戦って死になさい。

それがお前達の存在理由よ。

力を貸した後の彼等の様子を見ると、突然前方に気配が生まれる。

何かが来た……？

「……何者ですか？」

「お前が魔巫一族に力を貸している存在か？」

目を開けると、忌々しいほどに整った顔をした子供がこちらを見ていた。

ここに来るとはそれなりに出来るようですね。
あくまでそれなりのようですが。

転移で移動すると、地球の人類に似た容姿をした女が目閉じて微笑んでいた。

私が認識阻害を解除すると気が付いたようで、こちらに声をかけて来る。

「……何者ですか？」

「お前が魔竺族に力を貸している存在か？」

私がそう問いかけると、女はゆっくりと目を開け、こちらを見た。

ふむ……今の時点では大した力は感じないな。

「ここに誰かが来るなんて初めてね。どうしたのかしら？」

余裕のある態度だ、自分が圧倒的に格上だと疑っていないのだろう。

「魔竺族が使用している召喚魔法はお前が教えた物か？」

「そうよ。素晴らしいでしょう？数ある世界から使えそうな物を集める物よ」

「特に素晴らしいとは思わないが、その事で話がある」

「はあ……私の作った魔法のすばらしさが分からないなんて愚かな子ね……そうだ！私が教えてあげるわ！」

落胆した様な様子を見せた女だが、突然私に色々と語り始めた。情報を提供してくれるのなら聞いておこう。

あの召喚魔法を素晴らしいと評価する彼女の考えは理解出来ないが、何か理由があるのだろうか？

単純に、魔法が得意では無いのかも知れないな。

ならば地球を除外し、効率を良くした構成を薦めてみるか。
断る事を許す気は無い。

健太もあの四人と同じ目にあっていた可能性が高いからな。

それからしばらくは誇るように魔法について語ったが、やがて話は身の上話へと変わって行った。

彼女は魔神で、気が付いた時には聖神というもう一人の神の様な男とドーンラグルを管理していたという。

しかし聖神とは気が合わず、やがて分かれてそれぞれに世界を管理するようになったらしい。

それからしばらくはただ世界を見ていたらしいが、あまりにも何も無い事に飽きてしまい、彼女は魔竺族を作り出した。

その後、自らが作り出した魔竺族を見ていた彼女は、同時期に聖神が聖朱族を作り出していた事を知る。

やがて聖神を滅ぼして真のこの世界の管理者になろうと考え始め、魔竺族と聖朱族を争わせている……と言う事らしい。

流石に、ここまで色々と話すとは思っていなかった。
もし彼女が格上だったとしても油断が過ぎると思う。

「聞きたい事があるのだが、良いか？」

「何でも聞きなさい、貴女にでも分かる様に教えてあげるわ」
私の言葉に彼女は優しく答えた。

「聖神と聖朱族を滅ぼしたいというのは本気か？」

そう聞くと、彼女はこちらを馬鹿にしたような口調で言う。

「貴方は何を聞いていたの？本気に決まっているでしょう」
そうするとますます良く分からないな。

「では、何故直接手を出さない？」

「何言ってるの？」

彼女は不機嫌そうな表情を浮かべて言う。

「お前が直接聖朱族を攻撃しないのは何故だ？聖神の居場所を知っているならば、何故直接殺しに行かない？」

彼女の話を受ければ多くの者が今の私と同じ疑問を抱く筈だ。

「そこまで分かっているが何故自ら動かないのか？」と。

「これだから下等な者は駄目ね。そんな事出来ないわよ」

その返しに違和感を感じる。

「何故出来ない?」

「出来ない物は出来ないのよ」

呆れたように言う彼女。

「試した事はあるのか?」

「……そんな事しないわ、不可能なのだから」

少し苛ついて来ている様だが、返答がおかしい。

「試してもせずに何故そう言い切れる?」

「何なのよアンタ!? 慈悲を見せて付き合つてやったのに訳の分からない事を聞いて来て! これ以上その話をするなら殺すわよ!」

突然、彼女の機嫌が一気に悪くなる。

ふむ……明らかにおかしいが、彼女が誰に何をされていようとこちらの目的を達成出来れば構わないか。

「分かった、もうやめておこう」

「それで良いのよ、死にたくなければ言葉には気を付けなさい」
まだ不機嫌だが、取り敢えず悪化する事は無くなったな。

「話は変わるが、本来の目的を話したい。聞いてくれるか?」

「何よ」

「魔竺族に使わされている召喚魔法を変更して貰いたい」

「あら、どうして欲しいの?」

「私の用意した構成を使ってくれ」

「へえ……私に使って貰いたいのか? 私以上の物を用意出来るなら使つてあげても良いわよ?」

そう言つて彼女は微笑む。

「では実際に構成を組むから見てください」

私は地球と人類の事を特定出来ない様に調整した召喚魔法を彼女にも分かる様にゆつくりと組み上げて行く。

組み上げていく途中、彼女から怒りと焦りのような感情が滲みだして来た。

「この構成を使つて欲しい」

彼女にも知覚出来るように組み上げた構成を見せて言うと、彼女は

不貞腐れたように口を開く。

「嫌よ。何で私がそんな事しなくちやいけないの」

彼女の思考から伝わって来るこの感情は……。

「出来るならやって欲しい」

「嫌だっって言ってるでしょ」

……間違い無い。

「お前……やりたくないのではなく、出来ないのだな？」

私がそう言うと、彼女の心から憎悪が溢れた。

「調子に乗るなよガキが……」

突然言葉使いが変わったな。

こちらが本性か？

「これが出来ないのならお前でも使えるように改良しよう、それを使ってくれば良い。もし望むなら少しだけ魔法の手ほどきもするが……どうする？」

いきなり出来ない事をやれという気は無いし、敵対したい訳でも無いからな。

「下等生物があ！神である私をコケにして生きて帰れると思うなよ！」

突然彼女の表情が変わり、体から魔力が溢れる。

黒い輝きが迸り、周囲に吹き荒れた。

普段は力を抑えているのか。

しかし、それでも今の彼女は地球がイシリスであった頃のカミラよりは強い、という程度だ。

「魔力紋だったか？それは魔力の無駄だ、止められるなら止めた方がいいぞ？」

そう言った瞬間。

「死ぬ」

彼女はそう言ってこちらに掌を向け、赤黒い塊を放った。

私は至近距離から放たれた攻撃を測定、分析する。

魔力を破壊や消滅の力に変えているのかと思ったが、これは一般的な魔法と同じだ。

構成を始め、圧縮、集束……他にも色々甘い。

魔法の実力が全てだと言うつもりは無いが、仮にも神を名乗る者がこの程度で良いのだろうか？

これでは普段私が使用している障壁も破れないと思うが、念の為に心構えはしておこう。

そう考えながら、私は障壁で彼女の攻撃を受ける。

着弾した赤黒い塊は膨張して爆発し、周囲を吹き飛ばしていく。

爆発の色が違うが、こちらの炎は赤黒いのだろう。

「神の慈悲にも限界があるのよ？」

そんな魔神の声が聞こえてくる。

他の世界にも神を名乗る者が多く存在する事は分かっているが、全員がこの程度では無いと思いたい。

やがて黒い炎が消え、何事も無く立っている私を見た魔神の顔が歪む。

「……少しはやるようね」

再び攻撃を放つ構えを見せる魔神。

もし本当に神だったとしても、それは「神という名の種族」というだけの事。

私には数多く存在する種族の内の一つとしか思えない。

こいつは地球がイシリスと呼ばれていた頃のカミラよりは強いと感じるが、現在の娘達と比べるとかなり弱い。

そう考えた直後、周囲は光に包まれた。

乱れた念話の悲鳴が響き渡る。

どういう事だ……？

私は内心で少し驚いていた。

『アアアアアア……アア……』

やがて爆発がおさまり、彼女の悲鳴が小さくなって行く。

人間の焼死体のような見た目になったが、まだ生きている。

『な……何……が……？』

全く動じていないのは、この程度の障壁は問題にならないからだと思っていたのだが……本当に気が付いていなかったのか。

『二度目の攻撃の後にお前を隔離しておいた……そうだ、転移なども無駄だと思うぞ』

苦痛と困惑が混じった魔神の言葉に、私は説明しておく。

『……そんな』

実際に彼女は逃げようとしたが、何も起こる事は無かった。

『本当に気が付いていなかったのか』

何か手があるのかと思っていたのだが……。

感じた以上の力や、何かしらの能力を持っている者はあまり居ない、という事かも知れないな。

そう思いながら目の前の魔神を見る。

『ぐ……う……』

私に対する強い悪意を感じる。

しかし彼女は満足に念話する事も出来なくなっている様で、かすれた呻く様な念話を最後に何も言わなくなった。

「ん？……あいつ何であんな力出してんだ？」

俺はあいつ……魔神が力を開放しているのを感じて呟いた。

「おいおい……全力じゃねえか……どういう事だ？」

聖神としてあの魔神と共に生まれてから大分経つが、お互いに全力を開放する事なんて今まで無かった。

そう思いながら、俺は久し振りに魔神の姿を遠視する。

「へえ……」

俺は見えた光景に笑みを浮かべる。

あの魔神が無残な姿に変わり、瀕死になっていた。何をやったか知らねえが、しくじりやがったな？

馬鹿め、そのまま消えちまえ。

ん……？

俺は魔神のすぐそばに誰かいる事に気が付いた。

誰だありや？

黒髪の……あれは魔竺族でも聖朱族でもねえな。

そう思っていると、その黒髪がこちらを見た。

「ほう……」

思わず声が出た。

寒気がする程の別嬪じゃないか……凄いなこれは……。

しかしこいつ……まるで俺が見ているのが分かっているように目を合わせて来るな。

力は感じねえ……俺達は勿論、聖朱族や魔竺族にも及ばない。

魔神の奴、つまんねえ罠にはまって自爆でもしたのか？

……向こうに行つて魔神を始末して、あのガキは俺が可愛がってやるか。

俺はしばらく考えてそう決める。

そういえば……奴の所に行くのは初めてだな。

そんな事を考えつつ、俺は魔神の住処に移動した。

聖朱族と魔竺族の争いを見ていた僕は、魔神に異常が起きた事を感じる。

どうしたんだろ？

僕は争いを見るのをやめ、魔神の方へ視点を移す。

……なにあの子。

僕が見たのは死にかけの魔神とその前に佇む黒髪の子供だった。子供……？どうやって魔神の住処に入って来たのかな。

僕は子供に手を伸ばし……ん？

何かに阻まれた？

あれ？……おかしいな。

そう思った瞬間、僕の表面が激しく波打つ。

『ヒッ!』

僕はすぐに手を引き、知覚を遮断した。

……アレは何だ!?

手を通して一瞬アレの魔力を感じた……。

何だあの量は!?

限界が見えない膨大な魔力……どこからあんなモノがわいて来たんだ!?

不味い……アレは僕が調べようとした事に気がついていた……。

きつとわざと見せたんだ……!

底の見えない魔力を見せて僕に警告したんだ……「止めておけ」と。あいつらアレがどれだけおかしい存在なのか感じる事が出来てないのか!?

だから手を出したんだな!

馬鹿な事を……!

お前らでアレを何とか出来る訳無いだろ!

そう作ったのは僕だけどころな事になるなんて……!

あんなの僕じゃどうにも出来ない。

ど、どうしよう!?

と……取り敢えず、聖神の行動制限を変更して……向こうに行くよ
うに……!

よし……時間稼ぎにもならないだろうけどやらないよりいい。

後は……引きこもるしかない。

そう決めると、全力で防御を固め始めた。

でも……きつと僕の場所もバレてる。

どうか来ないで……見逃して……!

私は今、笑っているのだろうか。

聖神と思われる存在の位置も分かったが、こいつはあまり時間をかけずに対応しよう。

それよりも……もう一つの存在の方が重要だ。

その存在に私は興味を抱きつつある。

今、私を調べようとした力……あれは恐らく知覚領域に近い物だ。すぐに引っ込んでしまったが。

私と似た様な力を使う者に初めて出会った。

さっさとやる事をやって会いに行こう。

『まだ……わ、たしは……』

隔離障壁の中で苦しそうに呟いている魔神を手早く消滅させた私は、残った聖神の所へ行こうとしたが……どうやら向こうから来た様だ。

『ありや？ 魔神の奴、殺されちまったのか』

現れたのは地球に居たら強面と呼ばれそうな顔をした、筋肉質な人間の男の様な姿をした存在だった。

『おいお前、奴を殺した礼に俺が可愛がつてやるよ』

『礼をしてくれるのなら頼みたい事がある』

当初の目的を果たそうと、私はそう問いかける。

『いいから俺の物になれ。それが礼だ』

話を通じないのか？

最後に確認はしておくか。

『お前は私の頼みを聞く気は無い、という事で良いか？』

『ん？ まあそういう事だ。この世界の唯一神になった俺がお前を飼ってやると言ってたんだ、とつと足を舐めろ』

ならばすぐに……いや、やはり聞いてみよう。

『お前は唯一神と言っているが、あの惑星に居る存在の事は知っているか?』

私はそう言いながら遠くに見える惑星を指さした。

『……何言ってるんだお前?』

知らないか。

『私はお前達の生死に興味は無い、私に構わないのであれば見逃すが……どうする?』

『駄目だ、お前は俺の物にする。嫌なら俺を殺すなり閉じ込めるなりしてみるんだな』

諦める気は無いか。

『そうか、せめて苦しめないようにしよう』

私はこいつの構成を分解する。

『おいおい、俺に勝て……』

恐らく聖神であろう人型の存在は、世界に溶けるように消滅した。

少し処分の方法を変えてみたが中々悪くないな。

もう召喚魔法が使われる事は無くなっただろう。

これで当初の目的は達成した。

では……会いに行こうか。

私は惑星ドーンラグルから見えていた惑星へとやって来た。

地表に降り立った私は地面に目を向ける

本体は地下……惑星の中心に居るな。

恐らく、この惑星は本体を守る防壁の様な物なのだろう。

『聞こえるか?』

私は念話で中心にいる存在に声をかける。

反応が無い、やり過ぎそうとしているのかも知れないな。

多少強引に行くか。

そう考えた私は、足元の地面を消滅させながら中心へと落ちて行っ

た。

そのまま自由落下している途中に、声が聞こえた。

『来ないで……来ないで！』

幼い子供の様な、男とも女とも判断出来ない声が聞こえる。

『ごめんなさい……ごめんなさい……』

……何故怯えているんだ？

『消えたくない……！』

敵だと思われるのだろうか。

『落ち着け、私はお前と話したいだけだ』

『来ないで……』

泣きそうな、懇願するような声がする。

すっかり怯えていて話にならない。

直接会って話せば危害を加えないと分かって貰えるだろうか。

しばらく降下を続けると突然広い空間に出た。

周囲を見渡すと、中心らしき場所が遠くに見える。

私は自由落下を止め、そちらへと向かう。

中心部と思われる場所に着いた。

そこには私の障壁とは違う障壁が球状に張られていて、その中にソフボール程の大きさの銀色の球が浮いている。

その球の表面は時折波打っていたが……恐怖に震えているのだろうか？

『聞こえるか？……私は話に来ただけだ』

魔神や聖神との関係がどういう物であるかは大体予想しているが、こういった事は本人……人では無さそうだが、本人から聞くのが一番だからな。

反応は帰って来ない。

さて……どうするか。

そう思いながら時々波打つ銀の球体を見る。

しばらく此処に居よう、その内慣れてくれるかも知れない。

ある程度の時を待っていたのだが、未だに反応が無い。

……あまり時間をかけると今の友人の寿命が尽きてしまうな。

少し強引だが、私が敵では無いと分からせようか。

私はこの子の周囲の障壁に干渉し始める。

『いやあ……いー』

銀色の球体は必死に抵抗しているが、私にはあまり効果は無かった。

破ろうと思えばすぐに破れるのだが……それでは余計にこの子が混乱するかもしれない。

『うう……うう……』

……この方法でもあまり変わらないかも知れないな。

この子から湧き出る恐怖を感じながら、私はそんな事を考える。

そして、障壁を半分ほど無効化した時。

『いやあああああー！』

突然の大きな叫びと共に、この子から魔力が溢れ出した。

私は内心で驚く。

この子の魔力は現在のカミラ達よりも強力だ。

……やはり居る所には居るのだな。

『アアアああああアアー！』

そう思っている間に魔力が変化し、周囲の空間が歪みだす。

それは急激に広がると残っていた彼女の障壁を消し飛ばし、外側の

惑星部分を削り始める。

中々の威力だ。

……私の障壁も今のままでは持たない。

そう判断した私は、自身の障壁を強化しながら声をかけた。

『やめろ、周囲の惑星を消し飛ばす気か』

私は魔力を放出し同じ様に変化させると、そつとこの子の力を相殺して抑え始める。

『あ……あう……？』

『怖い思いをさせたな』

銀色の球体にそつと手を伸ばし表面を撫でた。

触り心地は金属のようだが柔らかく、温かい。

『あ……』

すると小さな声と共に魔力が減り始める。

やがて空間の歪みも消え……静寂が訪れた。

大人しくなった銀色の球体は沈黙を続けている。
言葉を話せる事は既に確認しているが動きが無い。

『あの……僕に何かするつもりで来たんじゃないの?』
どうしようかと考えていると、こちらの顔を窺うような声が聞こえて来た。

『今の所は危害を加える気は無い』

『い、今の所……?』

私の言葉を聞いて、球体の表面が波打ち始める。

『お前が私と私の周囲に手を出さないのなら何もしない』

『そんな事する訳無いよ……勝てる訳ないもん』

『私はクレリア・アーティアと言う。お前は何と言う名だ?』
名を名乗り、この子の名を聞く。

『え?僕は僕だよ?』

この子……僕と言っているし男扱いで良いか。

彼は、それが当然の様に答えた。

『名が無いのか?』

『そうなの?』

名前が無いと呼びにくいな。

惑星ドーンラグルに似せて……ドローで良いか。

『ではお前の名はドローだ』

『ドロー?ドロー……うん、そうする……』

ドローは素直に受け入れてくれた。

この名が嫌になった時は、自分で新しい名を名乗れば良いだろう。

ドローの恐怖と警戒が薄くなった所で、私は話をする為に周囲に地球に似た環境を作り、椅子とテーブルを出した。

私は声を出して話し始めたが、彼は発声が不可能だった。

念話で良い事を伝え、会話を続けて貰う。

彼が言うには、気が付いた時には既に惑星ドーンラグルの周囲を回っていたらしい。

それから彼は身の安全を守るため、宇宙に漂っていた物を材料に外殻を作り、現在ののような状態になったという。

そして一人で長い間、惑星ドーンラグルを見て過ごしていた。

やがて、変わらない現状に飽きた彼は、試行錯誤して二つの存在……後の魔神と聖神を作る事に成功する。

しかし、苦勞の末に作り出したその二体も、最初はただ世界を見ていただけで何もしなかったという。

これでは作る前とあまり変わらない。

どうしようかと思っていた時、作った二人が魔神、聖神を名乗るようになり、それぞれ魔竺族と聖朱族を作って争い始めたらしい。

それを見たドーナは大喜びし、今まで彼等の争いを見て過ごしていたのだが……そこに私が現れた。

聞いた話はこの様な物だった。

彼は突然現れた私の事を調べようとして遮断された際、私の底の見えない魔力を覗いてしまい今まで感じた事の無い感情が生まれたという。

「怯えていたのはそれが原因か。それは恐怖という物かも知れない」

『恐怖……？』

「私も詳しくは分からないが、恐らくそうだと思う」

今まで自分以上の相手を見た事が無かった為に、私の魔力を見て恐怖を覚えたのかも知れない。

その後、彼と話したが、彼は私と似た様な力を使いはするが私に近い、という訳では無かった。

私に無い感情が存在し、魔力を生みはするが総量は少なく、体も金

属の様な液体で出来ている。

多少共通していると言えなくもない部分があるが、全く別の種だろう。

しかし……大した技術も無く、知識も少ない状態で魔神と聖神を作り出しているのだから将来は有望だと思う。

この先、私に匹敵するかは分からないが……少なくとも現時点で娘達よりも保有魔力が多い。

つい先ほど生み出す魔力が少ないと評価したが、それは私と比べた時の話だ。

暴走した時の発生魔力を娘達と比べると、かなりの量を出している事が分かる。

「そうだ。まだ聞いていなかったが、魔神達が使っていた召喚魔法はお前が教えた物か？」

『……召喚魔法？あの何か呼ぶやつの事かな？』

「そうだ」

『僕はあの二体に何も教えてないよ？』

どうやら嘘では無い様だ。

この件に彼は無関係か。

今の所は私と敵対する気も無い様だし、彼に何かするのはやめておこう。

『あの二体が何かしたの？』

彼は不思議そうに聞いて来る。

「私がここに来た理由を話しておこう」

『あいつら何やってるんだよお……』

私の話を聞いたドローは、球体の表面を揺らめかせ情けない声を出す。

「話し合いで解決するつもりだったが、聞き入れてくれず殺そうとしてきたので処分した。お前には悪い事をしたが、躰が悪かったと諦

めてくれ」

『平気、元々暇潰しに作った物だから……』

ドーラにとつてもそこまで大事な存在では無かった様だ。

『あの……ごめんなさい』

突然謝つて来るドーラ。

『どうした？』

『召喚魔法の事……僕も知ろうと思えば知れたのに、気にしないで放つて置いたから……』

「気にするな」

『でも……』

見た目では分からないが、意識をこちらに向けているのが分かる。私にその事で何かされないか不安な様だ。

「私と出会う前にそれを知った場合、お前はもうどうしたと思う？」

彼は私と出会ったからそう考えている筈だ。

出会う前であればきつと何も思わなかっただろう。

『……知つても何もしなかったかも？クレリアさんみたいな存在が居るなんて思つてなかったし……』

「何度か言っているが、お前が敵対しない限り私は危害を加える気は無い。もう気にするな」

『ん……分かった』

彼はあの二体を作った事を少し後悔している様だった。

私は後悔もしない様なので良く分からないが、起きてしまった事を後悔してもあまり意味が無い事は知っている。

そもそも、私にとって多くの現象は不可逆では無いからな。

私は常に、何処かに私を超える力を持つ何か居ると考えているのだが、誰もがそう考えている訳では無い。

魔神と聖神の様に、自分こそが頂点であると思ひこむ者もいるだろう。

『これからどうしようかな……』

そんな事を考えていると、ドーラが呟いた。

「どういう事だ？」

『僕、今のドーンラグルの状況に飽き始めてたんだ』

「知的生命体の観察に飽きたのか？」

私はそんな事は無いが……彼には合わなかったか。

『今まで魔竺族と聖朱族を見て来たんだけど……あいつら戦争しかないんだもん。それ以外はただ普通に過ごすだけだし……』
なるほど。

魔神と聖神に作られたあの二種族はお互いを滅亡させる事しか考えていない様だからな。

『また何か作ろうと考えてはいたんだけど……ねえクレリアさん、何か良さそうな物を知らない？』

良さそうな物か……そう言えば、可能になったが本格的に試していない物があつたな。

「自由に進化する生命体の作り方、などはどうだ？」

これは地球の生物の進化を見続けた結果生まれた物だが、ドーンラグルの環境ならば可能な筈だ。

彼に使って貰い、その結果によっては改良しよう。

『それってどんなの？』

「周囲の環境や経験などによって多様に変化し、進化して行く生命体だな」

『そうするとどうなるの？』

「様々な生態を持つ世界が生まれる可能性がある。更にそれらが知的生命体になり、様々な物を作り出したり新しい何かを発見したりするかも知れない」

『なんか楽しそう！』

興奮した様な声を出し、丸い体を震わせるドーナ。

言っている事を全て理解している訳では無いと思うが、興味を持った様だ。

「しかし、絶対に上手く行くとは言えない。時には滅びてしまう事もある」

『え……？？そうなんだ……もしそうなっちゃったら終わりなの？』

「いや、まだ興味が残っているのなら何度でも作り直して試すと良

い。そうすればいつかは知的生命体に辿り着くかも知れない」

『そっか！何度も試せるんだ！』

「時間はかかるが、今の二種族を見ているよりは楽しめるだろう。少なくとも私は飽きる事は無かった」

『なるほどー』

「どうだ、やってみるか？」

『やるー！』

「よし、では教えよう」

元気に答えた彼に、私は自由に進化する生命体の作り方を教える事にした。

事前にこの生命の作り方は本格的に試していない事を説明し、彼も了承したので色々教え始める。

『全部僕が決めて、完成された物を作ったから駄目だったって事かあ……』

「制限を付ければ付ける程、多様性は無くなる。過剰に管理すると変化が起きなくなるからな」

ドーラは私の教えを次々に吸収し技術と知識を高めて行ったが、教えたのは基礎的な事だけだ。

あまり深く教えていると、以前の様に帰った時には友人が寿命で死んでいる……という事になりかねない。

基礎さえ押さえておけば、彼の努力次第で応用も出来る。

『ドーンラグルの環境も合わせて整えた方が良い？』

「私にはどちらが良い、とは言えないな」

『何で？』

「お前がどうしたいかが基準になるからだ」

『そうかあ……』

「これはあくまでも参考だが……最初に作る生命は現在の環境に適応させて作り、それ以降は生命の変化に任せる……というやり方がある

る」

『ふんふん……』

「これは私の居る地球という惑星の生命の進化に近い方法だ」

『へえー。今、その惑星はどんな感じなの？』

「知性を持つ生命体が溢れている。同じ惑星に在りながら多様な文化を持ち、様々な物を見つけ、作り出し……今も発展と進化を続けている」

『おおー！凄いい！』

「進化の過程で、どうしても生き残って欲しい場合は少しだけ手を貸すのも良いだろう。実際に私も手を貸した」

『なるほど……』

「しかし、どういったやり方をするにしても、手を加えすぎると進化の可能性や方向性が狭まる、という事は覚えておいた方が良いでしょう」

『むー……』

彼は悩むように唸る。

「私は行わなかったが……上手く行かなければ一度滅ぼしてやり直す、という事も出来る」

『……うーん』

ドーラはまだ唸り続けている。

「お前には一通り基礎を教えた、今後どうするかは自由だ。すぐに生命を作り始めても良いし、更に手を加えて自分なりの何かを見つけても良い。勿論、作りたくなければ作らなくても良い」

何もせずドーンラグルの周囲を回り続ける、という選択を今の彼が選ぶ可能性は低いと思うが、どうなるかなど分からないからな。

『まずはやってみようかな』

唸りながら考え込んでいた彼は、そうやって体の表面を緩やかに波打たせた。

「そうだ、話は変わるが……お前は戦闘訓練はしないのか？」

彼は魔力は多いが、話を聞いた限り戦闘経験が無い。

今回は問題無かったが、今後私の様な何かに襲われればどうなるか

分からない。

『戦闘訓練かー、どうやってするの?』

「やる気があるのなら、私が相手になろう」

『……一瞬で僕が負けるだけじゃない?』

何となく拗ねた様な声色で話す彼。

「訓練の時はそのような事はしない」

『……じゃあその時はお願い。でも今はやめとく』

「そうか、ではその気になったら言え」

無理強いする気は無いからな。

ドーラに様々な技術の基礎と知識を教えながら過ごし、初めてこちらに来てから二年程が過ぎた。

地球の友人達の事を気にしていたからこの程度で済んだが、以前の私なら数千年、数万年は過ぎていてもおかしくはなかったと思う。

そう考えると、私も成長……と言って良いのかは分からないが、変わっているのだろう。

ドーラの周囲に作った地球の環境を再現した空間もすっかり定着し、彼は私が作った台座に乗ったまま日々を過ごしている。

そして知識と技術を教える合間に私は彼に許可を取り、彼の体を調べたりもしていた。

その結果、彼の体は見た事の無い魔法金属と魔素が結合した物で魔力より魔素の割合が多く、初めて見る構成をしている事が判明する。

更に、彼は大きさの割にかなり重い。

私に会う以前、彼は環境に関係なく自力で浮いていた為、彼自身に自覚は全くなかった様だ。

台座に彼が初めて乗った際、台座が重量に耐えきれず圧壊しそうになり、即座に私が補強した事は記憶に新しい。

ここまで調べた結果から、彼の体は液体魔素重金属生命体……と言える様な物であると判断した。

もつと時間をかければ色々分かるかも知れないが、私はこの二年間で満足している。

またいつか気が向いた時に調べさせて貰おう。

『クレリアー！来て！…こんなの作ってみた！』

私が色々な事を考えながら飲み物を飲んでいると、そんな声が聞こえて来た。

「今度は何を作った？」

彼の所へ行き声をかけると、空中に小さい半透明な塊が浮いていた。

「これは何だ？」

『粘液生命体！』

なるほど、スライムの様な物か。

『これくらい単純な物の方が安定するから作ったんだけど……何か僕に似てるよね？』

「近いかも知れないな」

液体に近く不定形な部分は近いと思う。

色と持つ力は全く違うが。

そう思いながら彼に教え始めた二年前を思い出す。

最初の頃、彼の作り出した生命体は形にもならなかった。

しばらく後、それらしい単純な生命体にはなった物の、数秒後に溶けて汁になった。

次は、時間経過で体が少しずつ崩れて消えた。

増殖出来ずに全滅してしまったりもした。

それから約二年が経過した現在、彼は安定した生命体を作れるようになっていた。

私の技術と知識を教えているとはいえ、約二年でここまで出来た彼は覚えが早いと言えるかも知れない。

掌の世界を使えば短時間で全てを教える事も出来たのだが……結局は使わなかった。

理由は彼にある。

私に教えを受けている間に、彼は試行錯誤する事に楽しみを見出した。

彼は私の教えを受けながら『あの二人を作ろうと試行錯誤していた時も楽しかったのかもしれない』と言った事があったのだが、それは間違いでは無かったらしい。

そして途中で掌の世界を思い出した私が彼に説明した時、彼は使用を拒否し、私はその言葉を聞き入れた。

彼から楽しみを奪う気など無かったからだ。

そんな事を思い出していると、浮いているスライムが体をこちらに伸ばしていた。

私を捕食しようとしているのだろうか。

『あつ……こら！クレリアを食べようとしてるでしょ!?!』
彼がそう言うと、スライムの体が球体に戻る。

強引に戻された様だ。

丸くされたスライムの体の中に、僅かに色合いの違う球体が浮いている。

恐らくあれがスライムの核だろうな。

「これをばら撒くのか?」

『うん、まずはこれで試すつもり』

私は会話しつつ、スライムを調べる。

「ふむ……問題は無さそうだ。魂は無いが、上手く行けば進化の過程で自然と生まれるだろう」

『魂の扱いは今も全く理解出来ないんだけど……。僕が作った魔神と聖神はちよつとだけ出来たのに……。あいつ等のそこだけは凄かったと思ってる』

彼のその言葉を聞いて、既に消えたあの二人を思い返す。

聞くのを忘れたまま処分してしまったが、魂を扱っていたのはあの二人らしい。

ドーラが見ていたと教えてくれた。

少し彼に魂の扱いを教えてみたのだが、あの二人への評価が一部変わる程度には難しかった様だ。

娘達もドーラも、魂を扱う感覚が分からないと言っている。

扱える者と扱えない者の違いは何処にあるだろうか。

そんな事を考えた後、私は彼との会話に戻り尋ねた。

「今地上にいる種族はどうするつもりだ?」

『何もしないよ?放って置けばそのうち滅ぶでしょ』

「そうか」

必要無いと即座に処分されるよりは良いのかも知れない。

さて……彼の最初の生命体も決まった様だし、私は地球に帰ろう。

「ドーラ、私は向こうに帰ろうと思う」

『……うん』

寂しそうな声を出すが、これは彼も納得した事だ。

こちらで長い時間を過ごす気は無い、向こうにも友人が居るからな。

百年程の寿命しかない友人達だ、もう少し共に居ようと考えている。

「いつになるかは分からないが、また様子を見に来るつもりだ」

『あんまり遅くならないでよ？僕だっていつまでこのままで居られるか分からないんだから』

少し不貞腐れた様な声で言うドーラ。

本来、彼はここに留まる事無く何処かへ行く事も出来る。

本人はその事を全く考えていなかった様で、私に指摘された時は恥ずかしそうに表面を波打たせて震えていたが。

その辺りは気を付けておこう。

あまり長い間放って置くといつの間にか惑星ドーンラグルが消滅していて、ドーラも寿命が尽きているか何処かへ消えている……などという状況になるかも知れない。

「生命の進化が上手く行けば、私がない事など気にならなくなるかも知れないぞ？」

『どうかなあ？それとこれとは別な気がするけど……』

彼から離れたくないという気配を感じる。

「どうなるかはいざれ分かる」

『そうだね。じゃあ……またね？』

「またな」

私はそう答え、月へと転移した。

「向こうで判断すると良い」

そう彼女が言った直後、俺は意識を失った。

「……うや……ま……」

誰だ……うるさいな……。

「おい！東山！」

「っ!？」

はつきりと聞こえたその声に飛び起き、俺は周囲を見る。呆れた目をする女子と苦笑いを浮かべる友人達が見えた。

「東山……随分と疲れているようだな？ん？」

すぐ隣で俺を見て微笑む先生。

笑ってるけど、怒ってるのが分かった。

「あっ……いえ、すいません……」

そんな先生に、混乱しながらも素直に謝る。

周囲から小さく笑い声が聞こえた。

「次寝たら反省文だぞー」

そう言いながら先生は離れ、授業が再開された。

だけど授業など全く頭に入らない。

授業を聞くふりをしたまま、俺はずっと自分の体験を思い返していた。

あれは夢だったのか……？

違う……あれは間違い無く現実だった……。

初めて敵を殺した時の手ごたえ、血の匂い、断末魔。

刺された時の衝撃と激痛……仲間が瀕死になった時の悲しみ。

俺達を道具のように扱う奴等を感じた怒りと憎しみ。

仲間達と過ごす、僅かな安らぎ。

そして、俺達が出会った……異世界の魔法使い。

全て……現実だ。

放課後。

久しぶりに見る友人達の誘いを断り、俺は一目散に自宅へ帰った。

「ただいま！」

そう叫んでリビングに向かうと、もう会えないと思っていた母と妹が居た。

「お帰りなさい」

「おにいお帰りー」

変わらない二人がこちらを見ている。

俺は涙をこらえる事が出来なかった。

「ちよつと? どうしたの?」

「え!? おにい何で泣いてんの!? ちよつと……やめろー!」

泣きながら二人を抱きしめる俺。

不思議そうにしながらも逃げる事無く頭を撫でてくれる母と、嫌がって暴れる妹。

退屈だと感じていた平和な日々が、どれだけ素晴らしい物だったのかを思い知った。

母と妹に本気で心配され誤魔化した後、自分の部屋のベッドに寝転がる。

……このベッド、こんなに気持ち良かったかな。

あまりの心地よさにすぐに眠気が襲って来る。

そんな中、思い出すのは……彼女の事。

声からすると少女だと思う。

でも、今はそんな事どうでも良い。

「本当だった……」

俺はそう呟く。

正直、疑っていた、出来る訳が無いと諦めていた。

それでも何処か……期待していた。

……向こうで判断すると良い、か。

彼女の最後の言葉はハッキリと耳に残っている。

俺がこうなっているのなら……皆もきつと同じ筈。

閉じた眼から涙が再び溢れて来る。

「クレリアさん……」

薄暗い部屋で言葉を口にする。

「貴女の言った事は本当でした。もう、届かないけど……俺達を救ってくれて、ありがとう」

涙声で酷い声ではあつたけど、彼女にそう感謝を告げて……俺は安らかな眠りに落ちて行く。

眠りに落ちる直前、彼女の「気にするな」という声が聞こえた気がした。

私が月の世界樹の前に転移すると、すぐにのんびりとした世界樹の
声が聞こえる。

『お、帰って来た。おかえりー』

「ただいま、お前は変わり無いか？」

『特に無いかなー』

「そうか、それなら良い」

私は世界樹と会話しながら家へ歩いて行く。

「お帰りなさいませ、主様」

家に到着すると、侍女隊の者が全員待機していた。

世界樹が知らせたのかも知れないな。

「ただいま、皆元気か？」

「問題無く過ごしております」

「そうか」

会話をしながら談話室へ向かうと、カミラが待っていた。

「お帰りなさい、お母様」

「ただいま」

二年など私達にとっては長い時間では無い。

私を迎えようという気持ちも勿論あるだろうが、恐らく向こうで何
があったかが気になるのだろう。

「あつちで何があったか聞かせて欲しいわ」

そう言う彼女の目は、少し楽しそうに見えた。

「構わないが、少しだけ待ってくれ。やっておきたい事がある」

私はカミラの言葉に答えながらソファに座る。

「分かったわ」

そう言って飲み物を飲み始める彼女を横目に、私は向こうで元の世

界に戻した4人の確認を行う。

4人の位置は既に把握しているから簡単だ。

問題は無いだろうが、礼だというのに失敗していたら話にならないからな。

私は少し時間を飛ばしながら全員の様子を確認したが、問題無く戻っている。

4人とも私に対する礼を口にしていたので、全員に「気にするな」と言っておいた。

恐らく、この先彼らと出会う事は無いだろう。

そう思いつつ確認を終える。

「待たせたな、向こうでの話をしよう」

そう言つてカミラに目を向ける。

「楽しみだわ」

すると彼女は嬉しそうに微笑んで言った。

「魔竺族と聖朱族、そして魔神と聖神……ね」

ある程度話して一息つくくと、カミラが呟く。

「早い段階で違和感を感じてはいたが、彼等は作られた者達だ。作った存在にも会って来た」

「聞いた感じでは作られた者達はかなり弱いみたいだけど、作れるだけでも凄いわね。それで……作った存在は何処に居て、どんな奴だったの？」

カミラは楽しそうだ。

「惑星ドーンラグルの周囲を回っている月の様な小さな衛星があったのだが、その中に隠れていた。ソフトボール大の球体の……液体魔素重金属生命体、とでも言える様な存在だったな」

「お母様を知っているから、その程度じゃ驚かないわね」

「そうだな。しかし、彼は今までの知的生命体とは少し違った」

「何か特殊な能力でもあったの？」

「彼は私の知覚と似た様な力を使い、少ないが魔力を生み出す事が出来る」

「お母様と似た力を持つてるの!？」

カミラが珍しく僅かに声を大きくする。

私の特性に近い力を持つ存在が見つかった事に驚いたようだ。

「更に、彼……ドローと名づけたが、ドローは魔法の技術も知識もほとんど持っていないかった」

「え……？ちよつと待って？そのドローが魔神と聖神を作ったのよね？」

「それは間違い無いだろう。彼が二人の行動を制限していたし、嘘もついていたかった」

「知識も技術も殆ど無いのにどうやったの？」

「試行錯誤を繰り返した形にしたそうさ」

「……凄いわね」

先程「作れるだけでも凄い」と発言した彼女。

だが、彼が僅かな知識と技術で魔神と聖神を作り出した事を知り、漏らした言葉は先程とは重さが違うように感じられた。

「それだけでは無い。初めて接触した際に、彼は恐怖から力を解放し周囲を消し飛ばそうとした」

「彼自身もかなり強いという事ね？」

「そうさ。魔力量とあの時の力を見る限り……能力だけならカミラより上だと思おう」

「そう、私よりも……」

カミラは俯き何かを考えている様だが、悲観的になっている訳では無さそうさ。

「ただ、彼は戦った事が無いらしい」

私がそう言うのと、彼女がこちらを向いて話し出す。

「はあ……私もまだまだね。お母様に育てられて強くなったけれど、生まれつき強い存在がいる可能性を忘れていたわ」

そう言った後、彼女は頬杖をついた。

「カミラよりも上と言ったが、彼は戦闘に関する知識と技術は勿論、

経験もカミラに遠く及ばない。実際に戦えばカミラが負ける事は恐らく無いと思う。今後ドーラが知識と経験を積みめばどうなるかは分からないが」

「訓練の時間を増やす事にしたわ、出来ればお母様に相手をして欲しいのだけど」

そう言っただけ私を見るカミラ。

最近落ち着いていたが、また火がついたか。

「分かった。可能な時は付き合おう」

「じゃあ早速……！」

「まず千穂達に話をしてからだ」

私は彼女の言葉を遮って言う。

「……そうね。当事者だしきつと気になっていると思うわ」

表情は変わらないが、何か違和感を感じる。

子供の頃の様な反応をしてしまった事が恥ずかしいのかも知れない。

「全員に一度で説明する為に時間を合わせて貰おう」

そう言っただけボックスからスマートフォンを取り出した私は、千穂に電話をかける。

「マジックボックスにスマートフォンを入れたら、持っている意味が無いわよね？」

「向こうの世界に行くので入れておいただけだ」

「ああ、確かにその方が良いわね」

カミラに言った言葉は嘘では無いが、この話をしなければ取り出すのを忘れていたかも知れない。

結果的に気がついたのだから問題は無いだろう。

私はそう思いながら、電話から聞こえる千穂の言葉に答えた。

こちらに帰って来てからおよそ一か月後、私は葛城、鈴原家族を自宅へと招いた。

呼び出したのは今回の事を説明するためだ。
テーブルを挟んだ私の正面には両家族が並び、全員がこちらを見ている。

「約二年ぶりだが、皆元気そうで何よりだ」

私がそう言うのと、千穂が口を開く。

『少し話してくる』みたいな雰囲気を出掛けて二年も戻ってこないなんて思ってたなかったけど……カミラさんに聞いたよ？何かに夢中になると時間を気にしなくなる……って」

「そういう事もあるが今はお前達がいるからな、元々向こうに長居する気は無かった。そうで無ければ数千年から数万年は過ぎていたかも知れないが」

「おお……相変わらず俺達の間感じゃ訳が分からねーな」

私の答えに太一が苦笑いして言う。

「私達はそれが冗談じゃないって分かってる分、なおさらよね」

美琴が落ち着いた様子で話す。

「私達の事を気にかけてくれたんだね」

「当然だ」

微笑みを浮かべながら言った千穂の言葉に答え、私は話を進める。

「さて……今回の事について当事者であるお前達に説明しよう」

私の言葉に全員の表情が引き締まり、緊張が高まったのを感じた。

「つまり……ドーラさんが暇潰しに作った二人と……その二人に作られた人達が原因だったという事かい？」

大まかな話を聞いた良平がそう尋ねて来る。

「そうだ」

「どんな扱いをされていたか、詳しく聞いても良いかな？」

「召喚された異世界の者達は戦争の道具として使用され、戦えなくなつた後は兵器の材料にされていた」

そう話すと全員の表情に嫌悪感が滲む。

「ありがとう姉貴……俺……そんな所に連れて行かれる所だったんだな」

健太は自分がどんな所に連れて行かれそうになっていたのかを知り、助けた私に心から感謝している様だ。

「もう原因となった者達は居ない。強制転移を無効化する魔法もかけているから、私の守りが破られない限り問題は無いだろう」

すると葉子がふと、思いついたように言う。

「お姉ちゃん……あの……もしかしてなんだけど……無効化出来るならわざわざ行かなくても良かったんじゃない？」

「あつ……」

彼女の言葉に、私と葉子を除いた全員が声を上げた。

「そうだな。本来ならば、わざわざ行く必要は無かっただろう」

言いたい事は分かるが、それは関係無い。

「じゃあ何で……？」

葉子が私にそう問いかける。

「私の周囲に手を出した者を放置しておく気が無いからだ……意味は分かるか？」

彼女は私の言葉を聞くと何も言わず俯き、黙ってしまった。

「……ゲームのシーンにあるでしょ？」

すると、突然千穂が話をし始める。

「お母さん？」

突然始まったゲームの話に、葉子が不思議そうに声をかけた。

「倒した敵に情けをかけて助けたせいで、主人公の大切な人が死ぬ……見た事あるよね？」

「ある……」

「クレリアちゃんはそうならないように、敵に甘さを見せないのよ」以前そんな話を千穂にした覚えがあるな。

千穂達は私がしていた事を知っている。

それでも私に対して忌避感を見せないのは、彼等の私への信用と信頼の証だ。

恐らく、その現場を見ていない事も影響しているのだろう。

私がして来た事を実際に目にしたとしたら、心が揺らぐかも知れないな。

それからしばらく沈黙が流れたため、私は話を進める事にした。

「ドーラについては今の所は問題無い筈だ」

「異世界の……なんて言えばいいんだろうな。神？超越者か？」

太一がそんな事を言う。

「好きに呼ぶと良い」

「まあ、クレリアちゃんと友達になったのなら大丈夫よね？」

美琴はそう言うが、あくまでも今の所だ。

「ああいった存在は人類とは違う考え方や価値観を持っている可能性が高いと思う」

「でも、今は平気なんですよ？」

「私が相手だから大人しい、という可能性もある。例えばの話だが……私と自分以外は全て材料、といった考えを持っている、もしくは持つようになるかも知れない」

彼の性格を考えるとそうなる事は恐らくない……と思う。

しかし、時が経つ事でどんな変化があるか分からないからな。

「怖い……」

葉子がそう呟くのが聞こえた。

今の彼女の心には好奇心は無く、未知への恐怖と不安だけがある様だ。

自分達が暮らしている現実が、想像よりも遥かに危険である事が分かったからだろうか。

それでも葉子は、彼よりも危険な筈の私に全く恐怖を抱かず好意を向けていた。

更に、皆も同じ様に全く私を恐れていない事が分かる。

親子揃って随分気に入られたが、友人の気持ちを無下にする気は無
い。

「お前達はいつも通り暮らしていれば良い」

「……うん。お姉ちゃんありがとう」

まだ不安が残る微笑みを浮かべる葉子を見ながら、私はこれからは

友人にも事前に対策を施しておくべきか、と考え始めていた。

その後、伝える事を伝えた私は皆に一泊して貰い、翌日の午後に家に送り届けたのだが……一つ気になる事があった。

それは健太と葉子の様子が二年前と違う事だ。

私と親への対応はそう変わらないのだが、葉子と健太のお互いに対する行動が以前と大分違う。

以前は殆どの時間を共に過ごしていたが、昨夜は顔を合わせても口数が少なく、すぐにどちらかが距離を取っていた。

私はこの二年の間に、二人の間で何かがあったのだと考えている。

お互いに向けている好意は変わっていない様だが、葉子には罪悪感が、健太には僅かな怒りと大きな悲しみが混じっていたからな。

2034年11月。

秋の終わりが近づいた、ある日の昼下がりに。

千穂、美琴の二人と共に出かけていた私は、途中で見かけたカフェで飲み物を飲みながら葉子と健太の事を聞いてみる。

「私達にも分かるんだから、クレリアちゃんにも当然分かるわよね……」

美琴が困ったような顔をして言い、更に続けた。

「去年の春頃だったかしらね？いつも一緒に学校から帰って来たのに、別々に帰って来たのよ」

「登校もいつも一緒だったのに、あれからずっと別々なんだよねー」
困った様に千穂が言う。

「お互いに好意を持っているのは間違いない筈だが」

「あ、やっぱりあの子達両思いだったのね」

美琴が私の言葉を聞いて納得している。

恋愛感情による一時的な物なのだろうか？

そうだとしたら私に出来る事はあまり無さそうだな。

「お互いに好意を持っているのにこうなるとは……やはり恋愛とは不思議な物だな」

「確か、クレリアちゃんは私が学生の頃を買ってた少女漫画を読んだよね？」

私に千穂が問いかけて来る。

「読んでいたな。登場人物の行動を理解出来なかった事を覚えてる」

「あんな感じで素直になれないか、すれ違ってるんだろうね」

「好きなら好きと言えればいいだろう」

「相手の気持ち分からないまま、自分の想いを伝えるのは怖い物なんだよ？」

恐らく私に恐怖は無い、残念だが千穂の言っている事は今後も分からないままかも知れない。

「駄目でも特に問題は無いだろう?」

相手が欲しいのなら、また別の者を見つければ良いだけだと思うが……。

「やっぱりクレリアちゃんには分からないかあ……」

そう言つて苦笑いする千穂。

「ねえ、クレリアちゃんは私と美琴の事好き?」

千穂が突然そんな事を聞いて来る。

「好きだな」

何故今更そのような事を聞いたのだろうか。

「私も好き、勿論友人としてね?」

「そうだな」

二人は友人だ、娘だと思つてはいない。

「……この二人みたいな素直さが、少しでもあの二人にあれば良かったんだけどね」

私と千穂の会話を聞いていた美琴が、そう呟いていた。

それから一か月ほど過ぎたある日の事。

私は葉子に誘われ、買い物に出かけていた。

時々、葉子や健太と遊ぶ事があるのだが現在も二人の関係は変わっていない。

お互いに気まずいのか遊ぶ時は常にどちらか片方だけで、以前のように三人で遊ぶ事は無くなっている。

「お姉ちゃん!今度はあっち行こう!」

楽しそうにしている葉子だが、感じられる感情には常に影がある。健太の事が気になっているのが良く分かるな。

「お姉ちゃん……ちよつといいかな?」

食事の為に寄ったファストフード店の隅でいつもと変わらない味の照り焼きハンバーガーを食べていると、正面に座っている葉子から声がかかる。

「何だ？」

私が返事をするると葉子は俯き、何も言わない。

「健太の事か？」

そう言うのと彼女の体が軽く跳ね、驚いたように顔を上げた。

「何で……？」

「今の状態に気がつかないと思っていたのか？ 千穂と美琴も気が付いている。原因が去年の春頃にあった事もな」

再び沈黙する葉子。

「話したい事があるなら話せ。役に立つかは分からないが聞くだけは聞こう」

その後、葉子から聞いた話はこのような物だった。

ある日、学校の友人達から常に健太と共に居る事について聞かれ、お互いに好き合っているのかと尋ねられたという。

健太に思いを寄せていた葉子は知られる事を避けるために慌てて否定し、常に傍に居る健太の行動に対して「迷惑している」と言ってしまうたらしい。

この事は直接本人に聞かれる事は無かったが、ある時健太の耳にその話が入り、皆の前で聞いただされてしまった。

二人きりの時ならば否定出来た葉子も、大勢の前ではどうしても言えずに肯定してしまったという。

それから健太は葉子から距離を取るようになり、葉子は肯定した時の健太の表情がいつまでも心に残っているという。

そして彼女は自己嫌悪から身動きが出来なくなり、関係が改善しないまま現在に至る……という事らしい。

しかし……幼い頃から共に過ごしていながらその程度でここまで距離が空くとは。

私は今、感情が原因で予想外の出来事が起きる、という実例の一つを見ているのだな。

見ている私としては相変わらず理解不能だが。

私はそう思いつつ彼女に言う。

「本心を話せば良いだろう」

友人か健太のどちらかに本心を言えていれば何の問題も起きなかつた筈だからな。

「……言えなかつたの。それに……もう私の事を嫌いになつてるかもしれないし……」

健太の葉子に対する感情は今も変わらない……いや、むしろ大きくなつてはいるのだが、彼女にそれを知る術は無い。

「そうか、では諦めろ。後悔しないと良いな」

その言葉を聞いて彼女の体が強張つたが、私はそんな彼女に続けて言う。

「思つてもいない事を言うからこうなる」

「どうしよう……」

泣きそうな声を出す葉子。

「二人きりなら素直になれるのだろうか？無理矢理にでも連れて来て本心を話せ」

お互いに好意を抱いているのならこれだけで問題無い筈だ。

「でも……」

いつもの様子が嘘の様に弱気だな。

「私はお前と似た様な状況になつた者達を数多く知っているが、諦めた者の多くはその事を多かれ少なかれ後悔していた。お前もそうになりたいのか？」

「後悔は、したくない……」

「ならば行動してみろ。いつもの気の強さはどこへ行つた」

彼女はスカートを握り締めた。

「無理強いする気は無い、よく考えてみる事だ」

どうなるかはあの2人の選択次第だな。

現在、私は自宅でバトルグラウンド3をプレイしている最中だ。アイドルになる前にバトルグラウンドで使用していたアカウントは既に削除している為、現在は新しいアカウントを使用している。あのアカウントはアイドルクレリアであると判明している為、プレイするとファンが群がりゲーム所ではなくなってしまったからな。私がプレイしていると知られてからバトルグラウンドの売り上げとプレイ人数は爆発的に増え、一時期はプレイが困難になっていた事もある。

続編も順調に発売されていて、現在は3に到達している。

「カミラ様、配置につきましたがここからでは死角が生じます。千穂さんをこちらに回せるでしょうか？」

ヘッドセットからヒトハの声が聞こえる。

「分かったわ、千穂ちゃんはヒトハの指示に従って死角をカバーして頂戴。お母様は狙撃位置から周囲の状況を引き続き確認して」

「オッケーー！」

「分かった」

私はカミラの指示に従い双眼鏡を覗くと、フタバ、ミツハ、ヨツバの三人が操作するキャラクターが見える。

「ミツハ達の分隊も配置についての様だ」

「敵分隊をやり過ぎてこちらとぶつかった後に強襲させて」

そう言った後、カミラは千穂に指示を出し始めた。

私はミツハに通信を繋ぐ。

「ミツハ、敵分隊をやり過ぎて、こちらとぶつかった後に強襲しろ」

「はい」

緊張感の無いミツハの返事が返って来る。

そのまましばらく待機していると、敵の分隊が現れた。

「二時の方向、2分隊」

私は即座にカミラに報告する。

「ミツハに連絡、処理はミツハの分隊に任せるわ。私達は足止めと注意を引く事に力を入れるわよ」

「了解……ミツハ、二分隊居る。こちらで気を引くから攻撃は任せ

た」

「りようかい、こっちは主様の為につてフタバお姉ちゃんとヨツバがやる気満々だよー」

「任せたと伝えてくれ」

そう言つて通信を切る。

さて……そろそろぶつかるな、援護しよう。

「見事な勝利でしたね、ご主人様」

フタバが微笑みながら私に飲み物を出す。

千穂は自宅からだが、私達はゲーム部屋で全員揃つてプレイしていた。

見事に勝利しプレイを終了した後、現在は全員で談話室に移動し先程の戦いについて話している。

「カミラ様も隊長に向いてるよな。主様とはまた違う感じだ」

ヨツバがそう言つて笑う。

元々ゲームが好きなミツハはともかく、戦闘訓練が大好きなヨツバがFPSに興味を持ったのはいつだったか。

中々気に入ったらしく今では彼女が唯一好んでプレイするジャンルとなったが、皆が驚いたのは大雑把で力押しする傾向が強いヨツバが、ゲームではサイレントキルを好むようになった事だった。

フタバは初めはミツハに付き合つてプレイしていたのだが、ミツハが好んで行つていたナイフキルが気に入ったようで、今ではミツハと共に潜伏してナイフで処理するのがお気に入りになっている。

ヒトハは全体の補佐の様なプレイだ。

見逃しがちな細かな情報を把握し、貢献している。

「カミラは実際に皇帝をしていた事もあるからな。私より遥かに適性があるだろう」

「お母様は色々考えはするけれど、基本的には力で蹂躪する方が好きよね」

カミラはそう言って微笑む。

「私は話し合いで間に合うのならそれで良いと思っているぞ。」
どうするかはその時の状況次第だと思う。

何らかの理由で急いでいるのなら、長々と交渉せずに力を使い短期間でねじ伏せた方が良い場合もあるだろう。

「なんだかんだ言って主様も戦うの好きだよな！」

ヨツバが満面の笑みを浮かべて言う。

「私はヨツバちゃんがサイレントキル出来るとは思ってたわ」
「私はヨツバちゃんがサイレントキル出来るとは思ってたわ」

フタバが微笑みを浮かべたままヨツバに話しかける。

「最初は色々言われたからなあ……フタバ姉さんも微笑みながら驚いてたよな」

話しかけられたヨツバは、フタバの方を見ながら言う。

「驚くわよ、普段の戦闘訓練を見てたらそんな事すると思えないもの」

いつもの微笑みを苦笑い気味にしながら答えるフタバ。

「でも戦闘訓練では変わらないんだよねえ……何で実際の戦闘では出来ないのさ」

二人の会話を聞いていたミツハが呆れたような声で言う。

「何でだろう？」

不思議そうにするヨツバの答えにフタバはいつもの微笑みを返し、ミツハは呆れたような表情をしていた。

年が明け、2035年。

年末年始を娘達と過ごした後、私は葛城、鈴原の両家と初詣に行ったのだが……健太と葉子の様子がまた変わっていた。

「交際を始めたのか」

そう言って歩きながら後ろを振り向くと、お互いに顔を赤らめながらも腕を組み、べったりと寄り添った二人が居る。

そのまま二人の様子を見てみると、私の隣を歩く美琴が口を開いた。

「12月24日のパーティーに健太も参加したんだけどね。その時に葉子ちゃんが無理矢理自分の部屋に連れて行ったのよ」

「なるほど」

私はそう言って正面を向く。

葉子は行動する事にしたのか。

「それで、戻って来た時にはあぁなってたわ」

「そうか」

「……クレリアちゃん何かした？」

反対側に居る千穂が尋ねて来る。

「葉子に相談された」

「そっか……。ありがとう、あの子の力になってくれて」

「動けない者は誰が何を言おうと動けない。行動出来たのは彼女自身
身の強さだ」

そう言うと二人は微笑んだ。

「あの二人が長く続いてくれたら嬉しいけど……」

そう呟く美琴に、私は言葉返す。

「どうなるかは二人次第だ」

心変わりして離れた者達も多くいたからな。

「えーっと……『フラワープロダクション クレリア』つと……」
そう呟きながら検索する。

私がこのアイドルを知ったのは、歌番組で伝説として紹介されていたのを見た事がきっかけだった。

活動していたのは10年以上……正確には14年位？とにかくそれ位前らしいけど、今もその歌声、姿、ダンスは人々の心を引き付けているという。

確かに凄いとは思ったけど、この時点では伝説と言っても大した事は無いと思っていた。

テレビは大げさに言うし。

一緒にその番組を見ていた両親は当時を知っていて、彼女のファンだった。

二人は彼女のファンであった事がきっかけで交際し、結婚したという。

……それはどうでも良いかな

彼女のファーストシングルを持つていたから聞かせて貰ったけど、これほどの歌声を持つアイドルが実在したという事に驚き……気が付けば私もファンになっていた。

そしてもっと彼女の事を知りたくなった私は、こうして調べている訳だ。

表示された検索結果を見ると、ウィクペディアにクレリアのページがあった。

ここなら色々と書いてあるよね。

私は目を通し始める。

〈クレリアは2013年9月19日から2020年9月30日までの約七年間活動していたアイドル兼歌手である。〉

所属はフラワープロダクション。

2013年9月19日にファーストシングルである「ヴァイオレン

ス」をリリースしデビュー。

変化する声質、圧倒的な歌唱力とダンス、怖ろしい程の美貌、独特の感性や歯に衣着せぬ物言い幅広い世代からファンを生んだ。》

確かに凄かった、何もかも。

両親が世界中のファンから伝説と言われているファーストライブブルーレイを持っていたからそれも見せて貰ったけど、今のアイドルとは比べ物にならなかったし、この評価も納得出来る。

私は続きを読み始める。

《デビュー当時、彼女は26歳であり……》

えっ!?

私はそれを見て固まった。

26歳!?

……取り敢えず読み進めよう。

《デビュー当時、彼女は26歳であり、その外見と実年齢のギャップで世間を騒がせた。》

そりや驚くよ……ライブのブルーレイの姿は完全に子供だったし。

《後に、彼女は特殊な病気を患っており加齢による外見の変化が殆ど無い、と公式に発表された。

実際に彼女の容姿はデビュー当時から引退までの間、殆ど変わっていない》

病気かあ……引退はその辺りが関係してたのかな。

あ、説明の横にデビュー当時と引退前の画像が載ってる。

ライブのブルーレイを見て分かってたけど、やっぱり超美少女だよ
ね。

だけど……これ間違って同じ画像載せてない?

私はモニターに近づいて二つの画像を見比べる。

……背景が違うから、一応別の写真だと思う。

でも、本人だけコピーしたみたいに同じなんだけど。

……ん?

そう思っただけだと小さく注意書きがある事に気が付く。

《※掲載ミスではありません。間違い無く、デビュー当時と引退直

前の画像です。》

指摘されたんだろうなあ……。

《彼女のグッズと呼ばれる物はほとんど存在せず、サイン会で書いたサイン色紙が唯一のグッズと言える程である。》

作ったら凄く売れたと思うんだけど……勿体無い。

《デビュー当時から独特の感覚を持ち、愛想を振りまくという事をしなかった彼女は、雑誌の取材を受けた際、読者に対して言葉を求められ「特に無い」と発言しそのまま掲載された。》

ええ!?

……それは良いの？

うーん……今までに無いという意味でなら良い、のかな。

《ダンスを見れば分かると思うが彼女は運動神経が抜群だった。とある番組のスポーツテストの50メートル走で6秒55を記録した事からもその能力の高さが分かるだろう。》

へー……。

かなり早いんじゃないこれ。

……ん？まだ続きがある。

《最近になり、走り終わった彼女が全く息を切らしていない事が判明。

放送された映像と、当時の関係者からも確認が取れている為、間違い無いと思われる。

しかし、現在は彼女が無尽蔵とも言える様なスタミナを持っているという事は有名な話だ。

その為、誰一人スポーツテスト程度でどうにかなるとは思っておらず、世間はただ納得しただけに終わった。》

ええ……？

どんな練習したらそうなるの？

私は何とも言えない気持ちになりながら読み進める。

《とあるテレビ番組に出演した際、同番組に出ていた評論家を正面から論破し話題になる。

そしてそれから僅か数日後に、その評論家は児童買春が判明し逮捕

された。

ファンの間では彼女が何かをしたのではないか？という噂が流れたが、それを裏付ける証拠などは一切存在しない。》

その評論家は最低だね。

んー……これ彼女に関係あるのかな。

《未確認の情報だが、彼女がデビューしてから業界関係者の部署移動や退職が増えた、との報告もある。》

それは流石に無関係でしょ。

《確定情報では無いが、芸能界の大物や大御所と言われる芸能人達から丁寧に挨拶をされていたという話もある。詳しくは「こちら」を参照。》

むう……。

見たいけど順番に読んで行きたいから我慢しよう。

《家庭用ゲームソフトやソーシャルゲーム等とのコラボレーションも複数行っていた。現在もサービスが続いている「ドゥーム・ナイトワールド」では一定の期間ごとに復刻で彼女のイベントが行われており入手が可能である。》

後でちよつとやってみようかな？

なんだか読んで楽しくなってきた。

《彼女は多くの言語を操るマルチリンガルであり、それを生かした展開をして行く事になる。詳しくは「こちら」を参照。》

……頭も良いんだ。

んー、気になるけどこれも我慢、読み進めよ。

《彼女は度胸も凄かった。

ドッキリ番組に出演した際、ドッキリに対して完全に無反応であった事からもその事が分かる。

その際、「全く反応が無い事に困惑する仕掛け人の芸人に対し飲み物を薦める」という彼女の行動が笑いを誘い、彼女の新しい一面として好感を得ると共に、彼女の感性が一般人とかなりズレている事が判明した。》

「ふうっ……」

私は思わず笑ってしまった。

この映像ニユウチューブに無いかな？

後で探してみよう。

《マルチリンガルである事を武器にリリース済みの曲を様々な言語で歌い、世界中から絶賛を受ける。》

この事がきっかけとなり、これ以降リリースされる曲は全て多言語となった。》

あ、これがさっきの事かな……え!?

何よこの対応言語数!?

凄い……人ってこんなに話せる様になれる物なの？

《彼女は当時アイドルとして当然だと考えられていた可愛らしさなどを前面に押し出した曲を出さず、コマーシャルなどにも一切出なかつた。》

それは引退まで変わる事無く、今までのアイドルのイメージを粉々に叩き壊した。

彼女の引退後、彼女を真似て可愛らしさ以外を売りにしたアイドルも現れたが、彼女の人気には遠く及ばず消えている。

それからアイドル業界は約十年の間、停滞する事になった。

※確実では無いが、彼女は演技が壊滅的に出来なかつた、という情報もある。》

クレリアと真似をしようとした他のアイドルじゃ色々の違い過ぎたんだろうな……。

あれは彼女だから出来たやり方だつたんだと思う。

演技が駄目だつた？

何でもこなせそうだけど、確かに彼女が恋する乙女や元気な少女を演じている姿が想像出来ない。

《グルメ系番組に出演した際、頑なに美味しいと言わない事が話題になる。》

しかし彼女が「悪くない」といった店の料理は本当に美味しく、彼女の舌が本物である証明となった。》

ほほう……。

《余談だが、とある取材でどうして美味しいと言わなかったのかと聞かれた際、彼女は「今の所、美味しいと言えるのは家族の料理だけだ」と答えている。》

良い人じゃん!?

昔なんかあったのかな？

悪いけど、私は店と比べてお母さんの料理の方が美味しいとは言えないなあ……。

《2018年12月28日発売の「剛拳」にプレイキャラクターとして登場し、格闘ゲームファンの間で話題になった。》

人気出て来るとこういうの増えるよね。

《当時、彼女のキャラクターの強さに批判が起きたが、初回特典映像である彼女のモーシヨンキャプチャー体験映像の一部がニユーチューブに投稿された事で、騒ぎは終わった。その動画は「こちら」を参照。》

動画なら見てみようかな。

……え？

なにこれ……？

CGじゃないの？

《映像特典について開発元は間違い無く手を加えていない映像だと発表し、加えて「クレリアさんご本人の能力を考えると、あれ以上キャラクターを弱く出来なかった」とも発表した。》

これは……いや、でも……出てるし……。

私は驚きを残したまま読み進める。

《ファンが書き込めるクレリア公式ホームページが開設。登録したファンが一日に一度書き込める物だった。本当に見ていたかは不明だが「クレリアが書き込みに答えてくれた」という声もある為、読んでいたと考えられている。》

※現在、そのページは閉鎖されているため確認は出来ない。》

……書き込みの量凄かったんじゃないかな、これ。

《2019年4月5日に発売された「アイドルストーリー」において、クレリアがアイドルとして登場した。》

しかし、彼女の實力を反映させた結果、誰も勝てない仕様になり「伝説に挑め」という、スコアアタックの様な力試しミッションとなった。」

何で調整しなかったんだろ？

きつと理由があったんだろうけどね。

《2019年4月下旬。クレリアが月下グループの令嬢であるという情報が拡散し、プロダクションと本人が事実だと認めるという出来事があった。

現在も様々な分野で多大な影響力を持つ月下グループの後ろ盾がある事が判明した彼女だったが、当時既に世界最高のアイドルとして名を知られており、彼女の背景はアイドル活動に影響を与えていなかったと考えられている。

彼女の担当プロデューサーは取材に対し「知っていたが、そんな物に頼らなくても彼女は頂点を取れると確信していた」と話している。》

「マジ!？」

思わず大声を上げてしまった。

あの月下グループ!？」

あー……そりや色々な人が大人しくなる訳だわ……。

月下グループに睨まれたらそりやヤバイですよ。

何、この完璧超人。

本当に人間なんですかね？

軽い嫉妬を覚えつつ、読み進める。

《友好関係は浅く広い様子だったが、例外も居た。

特に仲が良く有名なのは大物声優兼歌手の水瀬彩である。

新人声優であった水瀬彩はデビュー作である「スカイレゾナンスインフィニットブルー」でクレリアと共演し意気投合。

後にクレリアの自宅に招かれる程の仲となったという。

この事は当時の水瀬彩のブログにもハッキリと書かれている。》

へえー……。

あの水瀬彩が新人の時に世話してたんだ。

《歌において度々クレリアとどちらが上であるか、という事が議論

されるが、本人は取材に対して「未だに彼女を超える事は出来ていない」と答えている。》

確かに……クレリアの方が上かなあ。
さて、そろそろ終わりが近いかな？

《こうして今後書き換えられない様な多くの記録と伝説を残し、2020年9月30日に彼女は引退した。》

七年で引退かあ……まだまだ人気があったのに勿体無いなあ。
でも……きつと病気で限界だったんだろうな……。

《引退後の2021年に歴史上最も偉大なシンガー100人に日本人として初めて選ばれる。

そして歴代の名シンガーを抑え一位という大記録を残し、その伝説を不動の物とした。》

今まで読んで来た内容と残した記録を見たら、納得するしかない。
もう少しあるから読もう。

《世界に知られている彼女だが、謎の多い人物でもあった。
例を上げると、あれだけ目立つ容姿であるにもかかわらず街中での

目撃報告が一度も無い事、などが上げられる。》
一度も目撃されてない……？

どういう事？

《彼女が引退し10年以上が経過したが未だに街中での目撃報告は無く、一部のファンの間では「引退時には余命僅かであった」という説だけで無く「妖精であった」、「女神であった」などという説まで出ている。

彼女のあの美貌と功績を見ればそう考えてしまう気持ちも分かるが、彼女は間違い無く人間である。

余命については我々が知る術は無い。》
そりゃ人間でしょうよ。

でも、病魔に侵されたまま限界まで活動していたのなら彼女はもう

……。

《当時彼女を担当していたプロデューサーとマネージャー（名前は伏せさせていただく）に話を聞こうとする者もいたようだが、口を閉ざし何も語ろうとしなかったという。

引退したアイドルの個人情報流す事など許される訳が無いが、極稀に月下グループの影がちらついていたという噂もあり、現在彼女の事を尋ねる者はいない。》

「うわあ……」

私は思わず声を上げる。

まあ、身内の事を強引に探ろうとしたら怒るよね。

《更に、彼女の歌は媒体を通しているか否かで大きく感じ方が違う事でも有名である。

販売されている彼女の歌は確かに素晴らしい。

しかし、ライブで歌声を聞いた者達の多くが「直接聞く彼女の歌は心と魂を揺さぶる」といった内容の話をしている。

ライブの方が会場の熱や歌声をダイレクトに感じる事が出来るのは当然だが、どうやら彼女のライブはそういったレベルでは無いらしい。

彼女のライブ映像は多く残っており、それらを見ても十分会場の熱を感じる事が出来るのだが……それすらも到底及ばない何かがある様だ。

何故、そこまで感じ方が変わるのか？

理由や原因は未だに分かっていないが、彼女が引退し姿を消した今となつてはもう二度とあの歌声を聞く事は出来ないだろう。

運が良ければ一度きりの復活ライブなどがあるかも知れないが、可能性は低いかも知れない。

当時ライブで彼女の歌を聞いた者は幸運だったと言える。》

見せて貰った彼女のファーストライブは、凄いの一言だった。

……あれと比べて「到底及ばない」と言われる歌声……想像出来ないや……。

《彼女には色々な噂があるが、正体が何であつても人類史上最高の

アイドルである事は間違い無いだろう。

引退した彼女が、現在も存命で幸せである事を祈る。》

「はあ……」

ウイクペディアを読み終えた私は思わず溜息を吐いた。

何か彼女の伝説一覽みたいだったなあ。

売り上げ数とか、PVの再生回数とか……。

私は背もたれに身を任せて思う。

人類史上最高のアイドル……か。

彼女の事を知る前に読んでいたら、鼻で笑ったかもしれないけど……。

様々な記録は誰もたどり着けると思えない様な物が並んでいる。

彼女が引退してから10年近く人気アイドルが現れなかったのも頷ける。

誰だって彼女と比較されたく無いし、世界の人々も彼女を知っている。

きっとファン達も他の誰かの歌じゃ満足出来なかったのかも知れない。

でも……。

歌声や美貌にばかり気を取られているけど……ウイクペディアに書かれていた数々の逸話が全て本当だとしたら、度胸があるとか、身体能力が高いとか、そんな次元の話なのかなあ？

どんな状況でも堂々と思った事を言えるのは、まあ背景を考えれば分からなくはないんだけど……。

ライブツアーで連日メドレーで休む事無く踊り、歌い続け……全日程を問題無くやり切る事は本当に可能なのかな……？

スタッフが先に潰れそうになってたらしい……。

もしかしたら……本当に彼女は。

「……なーんてね。ないない」

そうやって私は背伸びをする。

ここは現実だ、夢の世界じゃない。

ファンになった事だし、両親に頼んで色々見せて貰おつと……サイ

ンとか持つてるのかな？

流石に当時の放送は無いかなー。

有料チャンネルならあるかな？

あ、後でニコウチューブも確認しなきゃ。

私はそんな事を考えながらPCをシャットダウンし、部屋を出た。

葉子と健太が交際を始めた事を知ってから時は過ぎ、2035年の9月に入った。

あの二人は順調に交際している。

二人が幼い頃から想い合っていた事を知っている私から見れば、最も確率の高い結果になったただけだ。

両者の保護者達もこの関係を喜んでいたので、このまま気持ちが変わらなければ二人が共に居る事に障害は無いだろう。

あれから私は、二人に子作りは計画的に行う様に話をしておいた。以前は子は種族全体で育てる存在であったが、最近の人類社会はそうでは無い。

現状のまま子を作れば、二人はかなりの苦勞する事になると思う。

その話をした時、二人はかなり動揺していた。

反応から察するに、もしかすると既に交尾していたのかも知れないな。

私は今までの経験から、一般的な親子が生殖に関する内容を話題にする事は殆ど無いと知っている。

初めてそれを聞いた時は何故種の存続にかかわる話を避けるのかと思っただが、人類が減少する事無くここまで増えている事を考えると特に問題は無いのだろう。

いずれ効率的に繁殖する技術が生まれるかも知れないが、それまでは人類が生まれた頃から変わらぬ方法で増えて行きそうだ。

現在、私は東京の家でテレビを見ているのだが……こうして過ごしているというアイドルは忙しかったのだと思う。

当時は移動や仕事で殆ど家に居なかったからな。

《今月、国際連合総会の通常会が開催されました……》

テレビではニュースが流れていた。

国際連合か。

確か……国際平和と安全の維持、経済・社会・文化などに関する国際協力の実現を活動目的とした人類の国際組織……だったか？

第二次世界大戦を反省して設立された、と聞いたような気がするが……あまり覚えていないな。

私はこういった人類の動きをあまり把握していない。

世界の情勢は娘達の方が詳しいが、あの世界大戦の事はまだ覚えていない。

私としてはそれなりに楽しめた出来事だった。

次も見物させて貰おうと考えているが、人類が嫌だと言うならそれでも構わない。

故意に大戦を起こす気は無いし、平和ならば平和なりの楽しみがある。

ただ、私は人類がこのまま進化、発展し続ければ、再び争いが起きるのではないかと考えている。

魔法人類にも安定して発展していた時期はあったが、その時の彼等は自らその状況を手放し争い始めていたからな。

現在の人類が同様の事を行う可能性は十分にあるだろう。

私はそんな事を考えながらデザートを口にした。

某日某所にて、ある条件を満たしている国家の代表が集まっている。

国際連合総会の通常会が終わっても、一部の国の代表には次の会議が存在していた。

内閣総理大臣である私も、日本国の代表として参加している。

この部屋の中には私達以外居ないが……建物全体を軍が守り、扉の外には重装備の兵士が複数配置されている。

「では、主要国連盟会議を開始する」

議長であるアメリカ合衆国大統領……おっと、ここではただのアメリカの代表だ。

気を緩めてはいけない。

アメリカ代表がそう宣言すると、まずイギリス代表が話し始めた。「月の庭園の方々に関しては、去年と同じく大きな動きは見せていませんね」

すると次々と各国の代表達が口を開く。

「突然何をするか分からない方々ですから……アイドルの件は驚きましたよ」

確かにあれには驚いた、我が国でクレリア様がアイドル活動を始めるとは思っていなかったからね。

「私も驚いたよ。おかげで書類を数枚駄目にした」

「あれは大きな動きと言ってもよいでしょう。ですが、我々には何も要求してこなかった……いや一つだけありましたね」

「手を出すなど言われましたな」

「尻拭いをしなくても良いと言われたんだ、良い事だろう。奴等も自分で尻は拭ける様だ」

ロシア代表がそう言うと、他の代表達が黙った。

「口が過ぎるぞ」

フランス代表がそう言うが、ロシア代表は止まらない。

「我々はいつまでも奴等の下に居るつもりは無い」

「……過去に何があったのか知らない訳ではあるまい?」

アメリカ代表がそう問いかける。

「知っている、だが我々なら敵では無いだろう」

「……原子爆弾と同等の威力を持つ攻撃を気軽にまき散らす相手に勝てる?」

当時の指導者達を強制的に集めてカミラ様がその力の一部を見せた事があったらしい。

確か、核実験として処理したんだっただか?

「勝てる!」

その根拠の無い言葉に、周囲からため息が漏れる。

私も溜息を吐いた。

無理に決まっているだろう……。

「二応聞いておくが……どうやってだ？」

「あのメイド服の連中を拘束し、奴らのトップを引きずり出す」
馬鹿か!?

……はっ。

思わず内心で罵倒してしまったが……他の国の代表も似た様な事を思っているだろう。

ロシアの代表は以前からあの方達が居る事を嫌っていたが……恐らくもう駄目だな。

私達に対して優位を取るために言っているのかも知れないが、そんな事が出来るのなら過去の代表がとづくにやっている。

正体を世界に広めようとした国が一つ解体されているのに、なぜそんな事をしようと考えられるんだ。

そして何よりその方法が不味い……不味すぎる。

彼女達はクレリア様の侍女だ。

そして、あの方は身内を大事にしている。

彼女達を拘束する事などまず出来ないと思うが、手を出したという事実があの方に伝われば何が起きるか分からない。

一国が独断で起こした事の責任を世界に対して求める様な方では無いと思うが、絶対では無いんだ。

下手をすればあの核の様な攻撃が世界中を襲う事になってもおかしくないんだぞ……。

「無理だ、彼女達は突然現れ突然消える。ジャパンアニメーションの登場人物の様な存在だぞ？」

そう言ったのはドイツの代表だ。

「消える前に拘束すればいいだけだ」

色々と忙しいというのに、勘弁して欲しい。

「……やるのは構わないが、我々を巻き込まないでくれよ」

イタリアの代表がそう言い捨て、体の向きを変えてしまった。

もう話す気が無い様だ。

まあ……気持ち分かる。

「先程から何も言っていないが……貴方はどうお考えかな？」

ロシア代表が私にそう問いかけて来た。

面倒な……。

「私としては月の庭園に敬意を表し、今後もこの関係が続けて行きたいと考えています」

正直な所、あの方達がいてマイナスになるような事は殆ど起きていない。

稀に無茶な事を要請されるというが、百年程前から現在まで特にそういう事も無い。

にもかかわらず、あの方達の隠れ蓑である月下グループは現在も世界中で活躍している。

もしも何かを要請された場合、私は日本国の内閣総理大臣として可能な限り応えたい。

そう思う程に、あの方達は日本に……人類に貢献しているのだ。

「日本は奴らのお気に入り様だからな、色々と優遇されているんだらう？」

そう言って私を見るロシア代表。

こいつ、本当にそんな事があると思ってるのか？

他の国はきつと「そのまま日本にいてくれ」と思ってるぞ。

「その様な事実はありません。あの方達は人類に平等なのでしよう」

これは間違い無い筈だ。

ただし……それは「平等に興味が無い」という意味だと思うが。

あの方達にとって人類など意思の疎通が出来る愛玩動物……いや、これも間違っているか？

愛玩動物なら少なくとも常に気にするし、可愛がる筈だからな。

あの方は私達人類から見ても、とても理性的で、寛容だ。

更に、圧倒的上位存在であるにもかかわらず、私達に対して一切高圧的な態度を取らない。

だが……恐らく人類に何の感情も抱いていない。

……前総理に連れられ謁見した時、心底どうでも良さそうに私を見ていたのを今もハッキリと覚えている。

そんな人類の国家など、あの方達にとっては野に散っている動物の群れの様な物だ。

そもそも、現在の状況は人類が世界に勝手に住み着き、所有権を主張しているに過ぎない。

人間だって軒下に子猫が住み着いた時、極端に猫が嫌いかアレルギーでもなければ、積極的に攻撃したり追い払ったりはしないだろう。

そして、何とも思っていないければ何もしない。

……きつと、そういう事だ。

ただ……そうすると月下グループとして人類に貢献している事や、アイドルとして人気を獲得していたのはどういう事なのかと考えるしまう。

かつての私はその事を考え……人ならざる方の考えを読む事など不可能だと諦めたのだ。

案外、ただやってみただけなのかも知れない。

「……どうだかな」

彼を見ながら色々な事を考え黙っていると、そうやって彼は視線を他に移した。

こいつ……ひよつとしてあの方達の恩恵が欲しいのか？

……無駄な事を。

ロシアの暴走で何か問題が起きなければいいのだが……。

いざとなれば主要国連盟でロシアを動けない様にするしか無いか。

私は内心で盛大な溜息を吐きながら、会議を続けた。

2036年1月。

現在、私は都内のマンションのリビングに居る。
家主である彩に招待されたからだ。

「クレリアさんは本当に変わりませんね」

見慣れた皺の増えた顔で微笑み、彩が言う。

「彩は老けたな」

「ちよつと!?そろそろ気にしてるんですからね!」

声を大きくする彩だが、彼女は全く怒っていない事が分かる。

むしろ、そういつたやり取りを遠慮無く出来る事が嬉しい様だ。

「クレリアさん……私、結婚しようと思うんです」

落ち着きを取り戻した彼女が、突然静かに、真剣な声で言う。

「そうか」

「とても良い人なんです、私の事を大事にしてくれて……少し前に
プロポーズされました」

「それは良い事だ」

「私はクレリアさんが好きですけど、クレリアさんは私の事をどう
思っていますか?」

彩が突然そう言って来た。

「好きだな」

彼女の事は気に入っている、十分に『好き』だと言えるだろう。

「……私達は親友ですからね」

そう言って彩は笑う。

「そうだな」

「結婚式には来てくれますか?」

「行く気は無い」

「何ですか!?!」

彩が驚き、声を上げる。

「興味が無い」

「ええー……」

呆れたような顔をする彼女。

「その代わりと言っては何だが、もしお前が出産する時が来たら問題が無い様に見ておこう」

その後も彩から出席して欲しいと頼まれたが、私が折れる事は無かった。

「あら……お母様、彩ちゃんの所に行っていたんじゃないの？」

自宅の談話室で本を読んでいると、カミラがそう言いながら隣にやって来た。

「少し前に帰って来た」

「あの子もすっかりお母様に慣れたわね」

「そうだな。ただし、いつでも敵になる可能性は残っている」

「……今までもあった物ね」

カミラはそう言って少し寂しそうな表情を見せる。

「今更処分するような事にはならないと思うが……どうだろうか」

彼女が手を出して来るとは思えないが、それでも絶対に無いとは言えない。

「お母様は相手が誰でも変わらないわね」

「当然だ」

誰であろうと敵になるのなら容赦はしない。

生かしておく理由が無い限りはな。

私の「どんな敵であろうと残しておいて良い事は無い」という考え自体は今も変わっていない。

人間が気にもしない足元の小石で大怪我をする事がある様に、残しておいた事で何か大きな問題が起こるかも知れないからな。

当然、残していなかった事で大きな問題になる可能性もある訳だが……どちらかを選ぶのなら私は処分する方を選ぶ。

封印保存という手もあるが……今の所、珍しい個体以外に行く気は

無いな。

この様に基本的に敵は消す方針の私だが……最近例外を作った。それは起こる問題の影響が私だけで済む場合だ。

つまり、私の娘達や友人達に直接被害が出ない状況ならば敵を生かして解放する事も考えている。

そうする事で、相手が私の意表を突く様な事を行ってくれる……かも知れない。

あまり期待はしていないがやって見なければ分からないし、続けていけばいつかは何か起きる可能性がある。

その結果「力及ばず私が消える」といった結末を迎える事があるかも知れないが、その時はそれでも構わない。

そうなる可能性があるかも知っていないながら、その行動を取ったのは私自身なのだから。

油断し、戯れに見逃し、最後には力を付けた相手に討たれる。

よく目にする内容だが、私も同じ事になるのだろうか？

実際にその様な相手が現れた時、私がどのような行動をするか想像出来ないな。

もしも私が消された場合、娘達は悲しむ可能性が高いだろう。

しかし、自暴自棄になるような事は無いと思う。

もしかしたら、娘達……特にカミラとヒトハは私を超え、私を消した相手を消しに行くかも知れないな。

「お母様、なんだか楽しそうね？」

そんな事を考えていると、カミラに声をかけられた。

「お前達の事を考えていた」

「……どうしたの急に？」

「お前達が私を超える時が来るだろうか、と思つてな」

「それは……難しいんじゃないかしら……お母様は今も強くなり続けてるわよね？」

「お前達も同じだろう」

「私達よりもお母様の方が強くなるのが早いのにどうやって追いつくのよ……」

私は自分の力を高め続けているが未だに限界は見えず、制御出来ないなどの問題も起きていない。

娘達も強くなっているが、私と比べると微々たる物だろう。

確かに、これでは通常の方法で私を超える事は難しいかも知れないな。

だが、その差を覆す可能性が私達の手元にはある。

「掌の世界を覚えているか？」

「あ、確かに……あれなら条件次第でお母様を超える事も出来る……のかしらね？」

カミラは小さく声を上げ、言う。

「私を超える成長限界を持ち、寿命や精神的な問題が無いのなら恐らく可能だ」

倍率を変更し、掌の世界で長い時間鍛え続ければ……恐らく私を超える事も出来ると思う。

「以前使ったのは……魔法金属の実験の時だったかしら？」

「あれから使用していない筈だ、現在の内部環境は実験当時のままだろうな」

「誰か使うかしら？」

「聞いてみたらどうだ？もし誰かが使うのなら環境を整えるぞ？」

「じゃあちよつと待ってね……」

そう行つてカミラが黙る。

恐らく全員に念話をしているのだろう。

「……今のままが良いらしいわ」

今更だが、念話は便利だな。

「そうか」

ヨツバ辺りは喜んで食いつくと思っていたが。

「全員、こうしてお母様と……皆で過ごしている今を気に入っているみたい……私も含めてね」

「戻ってくれば良いだろう。出入りは自由だぞ？」

「時間差のせいで、こちらから見ると一瞬で戻つて来ては甘えて来る事になるわよ？それも連続で」

「なるほどな」

会いたければ一定時間で出てくれば問題無いが、私から見ると内部との時間差で僅かな時間で娘達が戻って来て甘えて来る事になる。

そして、それを絶え間無く連続でされる訳だ。

娘達もそれに気が付いたのだろうか。

「私が会いに行けば良いのではないか？」

「……確かに。ちよつと待つて」

カミラはそう言つて再び念話をしている。

「……拒否されたわ」

「何故だ？特に問題は無いと思うが……」

「それでも今のこの環境が良いらしいわ。後、お母様にわざわざそんな事はさせられないつて」

私は特に気にしていないが、彼女達がそう言うのなら無理強いはいない。

「では、今の所はこのままで良いか」

「そうね……」

カミラは何か思う所がある様だ。

「どうした？」

私が尋ねると、カミラは静かに答える。

「……この判断を後悔する事が無ければ良いな、と思つて」

後悔か………どういった物かは分かるが、私は反省はしても後悔をした事は無いな。

「他者に敗れた場合か？」

恐らく当たっている筈だ。

「分かつちやうわよね………きつと、あの時鍛える事を選んでいれば………と思つた筈だわ」

「それを考えるときりが無いぞ」

私は今も力を付ける事は重要だと考えているが、現在は力の開発と強化に使う時間を減らしている。

他の物にも興味が湧いているからな。

興味がある物が全て無くならない限り、もう以前の様な事はしない

だろう。

「分かっているんだけれど、どうしてもね」

カミラはそう言って苦笑いを浮かべた。

割り切れない者には、いつまでもついて回る問題かもしれない。

一週間後。

私は再び彩から誘われ、昼過ぎに彼女のマンションにやって来た。

「クレリアさん、いらっしやい」

彩に迎えられ、部屋へと入る。

「結婚式の事……考え直して貰えませんか？」

私がソファに座ると、色々と用意をしながら彼女が言う。

「考えを変えれると思うか？」

そう言うと、彼女は軽いため息をついた後、苦笑いして言った。

「思いません」

「分かっているじゃないか」

トレイに飲み物と菓子を乗せて戻って来た彼女は、ソファに座り並べ始めた。

「貴女が意見を変える事はまず無いと分かっていますけど、後一度だけ頼んでみようと思ったんです」

並べながらそう言った彼女は少し残念そうな表情だったが、すぐに気を取り直した。

「どうぞ、ミルク多めですよ」

そう言いながら彼女はミルクティーを私の前に置く。

一口飲むと、ここ数年変わらない味がする。

「いつもの味だな」

その言葉を聞くと、彩が笑って言う。

「私の好きな紅茶ですからね、今の所は他の紅茶に変える気は無いですよ。クレリアさんにはいまいちかも知れませんが」

「普段私が飲んでいる物とは違うが、これも悪くないと思っている」

「それなら良かったです。あ、今日のお菓子は新しく買ってみた物なんですけど……」

今日彩が私を誘ったのは結婚式の出席についてももう一度聞く為で、それ以外に特に用は無かったらしい。

更にその答えも予想していたので、実際はただ私と話したかっただけだった様だ。

私はそんな彩と、夜まで穏やかな時間を過ごした。

時は流れ、2037年7月。

彩は先月結婚し、姓が水瀬から三代（みしろ）に変わった。彼女は今の所、子供が出来ても仕事を辞める気は無い様だ。仕事の際は旧姓の水瀬を使用して活動すると言っていたな。

夫は、三代 達彦（みしろ たつひこ）と言う男で、月下グループの企業に勤務している。

それなりに給料も良く、人類基準で見ても人格は悪くない。彼の事を調べるのは楽だったとカミラが言っていたな。

彩が結婚してから、私は彼女の家にあまり行かなくなった。新婚の時はある程度放って置いた方が良い、という過去の経験からの配慮だ。

彼女はいつ来ても良いと言っていたが、しばらくはあまり行かない事にする。

そして、健太と葉子の交際も順調の様だ。

喧嘩をする事もあるらしいが、葉子が以前よりも気持ちを隠さずに健太に伝える様になった事で、長く引きずらなくなつたと聞いている。

それに合わせて健太も素直に気持ちを伝えるようになり、かなり関係は良好らしい。

「お母様、謁見をお願いして良い?」

そんな事を考えていると、近くに座っていたカミラが声をかけて来た。

「今回はどこだ?」

「ロシアよ」

「確か、北の方の国だったな」

「ええ、今回はこちらの都合で変わって貰ったわ」

恐らくその国の者が何かを行おうとしたのだろうな。

「そうか、準備が出来たら呼んでくれ」

「すぐに呼び寄せるわ……あ、謁見に来る新しい大統領が謝罪すると思うから、受け入れてあげてね」

「分かった」

その後ロシアの新大統領とあったのだが、彼は酷い顔色のまま震える声で謝罪した。

彼が本気で謝罪している事が分かったので私は謝罪を受け入れ、僅かな時間で謁見は終わった。

「今回の交代は前大統領の行動が原因なのよ」

謁見後、月の談話室でくつろぐ私にカミラが言う。

「そうか」

カミラが強制的に国のトップを交代させたのだから、そんな所だろうと思っていた。

「あれは侍女を拘束し人質にして、お母様を引っ張り出そうとしたのよ」
なるほど。

「実行される前に止めたけれど、例え実行されていても意味は無かったでしょうね」

「だろうな」

「こういった考えをしない様に色々としていたのだけど、駄目だったみたいだわ……」

残念そうな声を出すカミラ。

現在の人類の力で侍女達を拘束する事など、力の差を埋める何かが無ければ不可能だ。

彼女達はその気になれば、人類は侍女一人に抵抗らしい抵抗も出来ず滅ぼされる事になるだろう。

「ある意味、私は前大統領を救ったと言えるわね。もし実行していたらそれ相応の処分をする事になるもの」

カミラはそう言って微笑む。

「確かに」

結果的にそうなったただけだが、問題を起こす前に処理した事で前大統領の処分が重くならなかった……と言う事だろう。

「例え平気でも、妹達に手を出されるのは不愉快だし……今回は各国の代表からも報告があつたのよ」

「娘達からの報告だけでは無かつたのか？」

「ええ、今回は各国からも報告があつたわ」

「……どういう事だ？」

「複数の国から報告があるという事は、ロシアは隠す気が無かつたのか？」

「その事についても分かっているわ。人類の組織の一つに、私達の事を知っている国の代表が所属している『主要国連盟』というのがあるのだけれど……」

「その辺りの事に興味は無い」

「もう……それで、その主要国連盟が行っている会議で色々と言っていたらしいわ」

カミラは少し呆れた顔をした後、続きを話してくれた。

「それならば参加していた国の代表は知っていて当然か」

「ロシア前大統領は問題無いと思つた様だけど、他の国はそうは思わなかつたみたいね。不味いと思つたのか、ロシアを除く全ての参加国が報告して来たわ」

「見捨てられたか」

「お母様の怒りを買うだけだと考えたんでしょうね、責任を問われるような事にならない様に報告したんだと思うわ」

「無関係な国に責任を問う気は無いぞ？」

「もし実行されていたら何かしらの報復はするわよね？」

「当然だ」

何もしない、という選択肢は無い。

「彼等はそれに万が一にも巻き込まれなくなつたのよ」

「確かに……巻き込まれない様に手を打っておくのは大切だな」

私も似た様な事を考える時はある。

それを思えば、出来る限り被害を避けようとする彼等の行動も理解出来る……出来ている筈だ。

そんな事を考えていると、カミラが続きを話す。

「それでね？この報告があつたのは少し前の事で、その時点で計画は解体、本人の処分も終えて交代を待っただけだったのだけれど……」
そこで言葉を切るカミラ。

「何かあつたのか？」

「次期大統領の事で少し揉めてたらしいわ。こちらとしてはその辺りに手を出す気は無いから放つて置いたのだけど、最近ようやく決まったの。それで今回謁見をお願いしたのよ」

「なるほどな……この様子だと、人類が私達の支配から逃れようとするのはもう少し先になりそうだな」

「……そうなると思う？」

彼女が小さな声で尋ねて来る。

「恐らくな」

いつになるかは分からないが、いつかそうなると思つている。

「抑える所を抑えているのは間違い無いわ。でも、それ以外は特に厳しく縛つていない筈だけれど……駄目なのかしら？」

カミラは困つた様な表情をして言う。

「今は良くても、ある程度力を付ければきつと人類は不満を持つと思つ」

「ああ……『これ程の力を持った私達なら奴等を滅ぼせる』とか『奴等の力を手に入れれば我々は更なる力を得る事が出来る』とか言い出しそうよね」

そう言いながら苦笑いするカミラ。

「私は記憶にないのだが、魔法人類が私達に敵対した理由は何だったか覚えてるのか？」

「何だったかしら、覚えてないわね……そもそも聞いていたかしら？」

カミラも知らないか。

「完全に忘れてるから何とも言えないな」

この話はそれで終わり、私達は別の話をし始めた。
やがて娘達も合流し始め、談話室は賑やかになって行く。

ある雨の降る日、私は東京の自宅でノートパソコンを使い「ニューチューブ」という動画共有サービスを見ようとしていた。

このニューチューブは世界最大規模の動画共有サービスで、ユーザー数もそれに相応しい数がある。

存在自体は私がアイドルをしていた時に世話になっていたのを知っているが、今までしつかりと見た事は無かった。

運営会社は月下グループの関連会社の様だが、こうした規模の大きな会社や企業は多かれ少なかれ全て月下グループに関係があるらしい。

そう考えながらトップページを開くと、様々な動画のサムネイルがいくつも並んで表示された。

私は画面上部にある検索欄に「クレリア」と入力し、検索を開始する。

すると、すぐに今まで出した私の曲のプロモーションビデオや今までに行つて来たライブの映像などが一覧になって表示された。
妙に多いな。

私はデビュー曲である「ヴァイオレンス」のプロモーションビデオを探したのだが、似たタイトルの物が複数ある。

……なるほど、投稿者が違うのか。

良く見てみると、公式の他に個人的に投稿している者達が多くいるようだ。

私は公式のプロモーションビデオを探し出し、選択した。

やや装飾の多い衣装を着て歌い、踊る私の姿が流れる。

初めてじっくりと見たが……感想は特に無いな。

私は流れていたプロモーションビデオを最後まで見た後に、「動画再生回数やフラワープロダクション公式チャンネルの登録数も大幅

に記録を更新している」と聞いていた事を思い出す。

再生回数とチャンネル登録者数を探すと、動画のほぼ真下に表示されていた。

動画再生数は約627億回、チャンネル登録数は約2億人の様だ。現在のフラワープロダクションは私の影響で芸能事務所として最手になっていく様だが、必要以上に規模を広げてはいないらしい。理由は聞いていないし、興味も無いが。

そんな事を考えながら、私は表示されている数字を見る。

比較対象が無いとこの再生回数と登録数がどの程度の物なのか良く分からないな。

私はトップページに戻り、機能を探す。

動画を並び替える事が出来るはずだ。

すぐにその機能を見つけた私は、ニユウチューブ全体の動画を再生回数順に並び替えてみた。

……上位には私のプロモーションビデオしかない様だな。

そう思いながらスクロールして見て行くと、他の動画を見つけた。

この動画の再生回数は52億回ほど、チャンネル登録数は1900万人ほどか。

再生回数順で並び替え、私のプロモーションビデオ以外で最初に出て来た物なのでこれが以前の上位の数字だと考えて良さそうだ。

これだけの差があれば話題に上がるのも無理は無いかも知れない。

私はマウスを操作してトップページに戻る。

この機会に他の動画も見てみよう。

丸一日かけて色々な動画を見続けたが、中々悪くないな。
……もつと早く見ておくべきだったか。

全く見る気にならない物も多かったが、投稿者が色々な事を行う動画類……主にゲームなどの実況プレイ、「弾いてみた」、「歌ってみた」、「踊ってみた」や、物作りなどの動画は問題無く見る事が出来た。
予想以上に楽しめたな。

普段から魔法人類や人類などの知的生命体を観察している私に、他者が何かをしている動画は相性が良かったのだろうか？

様々な「やってみた」動画の中にはアイドルクレリア関連の物も多く存在していた。

それらの動画に出ていた者達のダンスや歌はまだまだの出来だが、皆楽しそうにしていたな。

私がアイドルとして行っていた歌やダンスは人類でも鍛え上げれば出来る範囲に収めているので、やろうと思えば同じ事は出来る筈だ。

友人達も「出来る人は現れるかも知れないね、多分……」と言っていたからな。

無理だとは思っていない様なので問題無いと思う。

そんな数ある投稿動画の中で私の目を引いたのは、二次元のキャラクターを使つて動画を投稿している者達だ。

彼女達の事が何一つ分からなかった私は、飲み物を用意していたメイドに尋ねる。

すると、すぐにそういった事に詳しいメイドを連れて来てくれた。彼女の話聞いた所、彼女達はイラストや3Dモデルの仮想キャラクターを自分の分身として使用し活動する「バーチャルニューチューバー」と呼ばれる者達で、一般的には「バイチューバー」と呼ばれている様だ。

その際、明らかに男性のバイチューバーが少ない事をメイドに聞いて

みると「ブイチューバー」業界は女性が主流で、男性はあまりいません」という答えが返って来た。

更に、3Dモデルが人の様に動いている事についても聞いた。

専用の機器を使用し、演じる人間の動きに連動させてキャラクターを動かしているという。

アイドルの時に特徴的な服を着てキャラクターを動かした事があるが……あれと似た様な物だろうか。

色々と聞いた後、私は飲み物を一口飲む。

正面には色々と説明をしてくれたメイドが姿勢を正して座っている。

話を聞きたいので座って貰っているが、普段の彼女達はこうして私と座る事は殆ど無い。

「大体聞いたが、まだ聞きたい事がある」

私は飲み物を置くとメイドに問いかける。

「はい、何でしょうか？」

「彼女達が自分自身では無く、キャラクターを使っているのは何故なんだ？」

「私の考えになりますが……良いでしょうか？」

「良いぞ、是非教えて欲しい」

「では……まず、容姿が良い仮想キャラクターの方が受けが良い事が多いからです」

「容姿か……今なら理解出来る」

アイドルになった時に外見が人類に与える影響の大きさを知ったからな。

「他には……年齢を秘匿出来る、顔を出さないなので本人に様々な被害が及びにくい、緊張が抑えられ大胆になれる、などの利点がありますね」

「年齢、被害、緊張か……」

年齢と被害の事は良く分からないが、今までに見て来た新人アイドル達が緊張から失敗している様子は幾度も見ている。

彩も最初は緊張から失敗していたからな、それを抑えられるという訳か。

「後は……大胆になる事で本人の個性が出しやすい事でしょうか」

「匿名性の高さが本人らしさを表に出しやすくしているという事か？」

「はい、私が思いつく大まかな利点はこの位ですね」

「まとめると……年齢や容姿に不安のある者達の問題を解消し、動画を公開する上で起こりうる問題の対策も出来る。更に本人の実力も発揮しやすくなる、という事で良いか？」

「年齢や容姿については必ずしもそうだとは言えませんが、単純に顔を出したくない場合もありますので」

彼女は私の言葉に訂正を入れる。

「そうか」

「他は大体仰る通りだと思います」

「他に何か情報はあるか？何でも構わない、知っている事を話してくれ」

私がそう言うと、彼女は語り出した。

「かしこまりました、では私が知っている事をお話いたします。

……後にバーチャルニューチューバーと呼ばれる存在の先駆けが現れたのは2030年の事で……」

「熱くなって話しすぎてしまいました……申し訳ありません……」

バーチャルニューチューバーの歴史の様な物を話してくれたメイドが、目の前で身を縮めている。

「気にするな、話してくれてありがとう」

バーチャルニューチューバーの先駆けである「バーチャルアイドル」が生まれた原因は私だったのか。

彼女の話では「現実の女性ではクレリアを超える事は不可能」と考えたある女性が「これなら勝ち目があるかも知れない」と考えて行った事だったらしい。

その女性は既に引退し現在はどうしているか分からないらしいが、彼女が切り開いた道を今も歩き続ける者達がいる。

それが、現在数多くいるバーチャルニューチューバー達だ。

様々な分野の数字を見ると、現在も誰一人私に届いておらず、彼女の目的は今も達成されていないらしいが……バーチャルニューチューバーという新しい存在が生まれるきっかけを作ったその女性の発想と行動は称賛に値すると思う。

「お前は随分詳しく知っていた様だが、今話してくれた事は人類にとつては常識なのか？」

そう尋ねるとメイドは首を横に振り、答える。

「いえ……私が知っているのは好きだからで、間違い無く一般的とは言えないと思います」

「そうか」

色々話を聞く事が出来た、そろそろ彼女を解放しようか。

そう思っていると、彼女が口を開いた。

「あの……お嬢様はブイチューバーに興味がおありなんですか？」

彼女そう言いながら、何処か期待したような表情で私を見る。

興味か……。

「それなりにあるな。ああいった動画や放送は私と相性が良い様だ」

あくまでも見る側での話だが。

「では……その……お嬢様に提案して良い事では無いと思いますが……あの……」

彼女は言いにくそうに口ごもる。

「何だ？聞くだけなら聞くぞ？言ってみろ」

私がそう促すと、意を決した様に彼女は叫んだ。

「……私と一緒に放送に出て頂けませんか？」

「私がか？」

「はい、可能でしたら是非」

自宅のメイドに出る側に誘われる……今までに無かった事だな。

……ん？

という事は……。

「お前はブイチューバーなのか？」

「恥ずかしながら……天津 凧（あまつ なぎ）という名前で、バーチャルニューチューバーとして細々と活動しております」

自宅のメイドの中にバーチャルニューチューバーがいた様だ。

ただ、名前に聞き覚えが無い。

色々と見ていた時もその名前は無かった。

恐らく、あまり人気がある方では無いのだろう。

「そういった事を禁止した覚えは無いからな。この家の情報を洩らさなければ自由時間に何をしていようと構わない」

「カミラ様からは『情報漏洩が無ければ構わない』と言われております」

「気を付けろよ？ 場合によつてはかなり厳しい処分を受ける事になる」

カミラが許すとは思えないし、私も許す気は無いからな。

「はい、心得ております。危険な情報を漏らさないのはブイチューバーとしての常識ですので、今の所は問題御座いません」

「そうか」

私がそう答えると、彼女はこちらをうかがう様に言う。

「それで、お嬢様……先程のお話は……」

一緒に出るとい話か。

「良いぞ」

その言葉を聞いた彼女は一瞬動きを止め、やがて表情が驚きへと変わって行く。

「ほ、本当ですか!? ありがとうございますー」

興味が無かった訳では無いし、嫌な訳でも無いからな。

私がアイドルのクレリアだと知られる可能性もあるが、引退して既に10年以上が過ぎている。

現在なら声だけでアイドルのクレリアだと気付かれる事も恐らく無いだろう。

もし知られた場合、彼女の放送に問題が起こるかも知れないが……東京の自宅に居るメイド達は私がアイドルだった事を知っている。

彼女はそれを承知で誘って来た、つまりその辺りも想定している筈だ。

まあ……例えしていなくとも彼女に罪は無い。

私が共に居る以上、問題にはされないのだから。

「私はお前の隣で見ているだけで、あまり話さないかもしれないが……それでも良いのか？」

「十分です。あつ、でも……時々当たり障りの無い話を振るので、出来れば答えて頂ければ……」

「分かった。答えない事もあると思うが、出来るだけ答えよう」

申し訳なさそうに話す彼女にそう言うと、彼女は笑顔を浮かべて「ありがとうございます！」と礼を言った。

現在、私は自宅の敷地内に用意されている彼女の家の配信部屋で待機している。

その後、私はまず彼女の正式名称を聞いた。

私は彼女の事を「数年前にやって来た家のメイドの一人」としか認識していなかったからだ。

そんな私に、彼女は苦笑いしながら色々と話してくれた。

彼女の名は、嵐山 風香（あらしやま ふうか）。

風香は以前家に居たメイドの娘で、幼い頃は母と共に屋敷の敷地内にある家に住んでいたと語った。

父親の事を聞くと、彼女が生まれて一年程経った頃に事故死したらしい。

それから母と共に過ごし、彼女が14歳の頃に母親はメイドを引退し敷地から出たが、その時既にメイド養成所に通っていた彼女はここに残る事を許されたという。

その後、彼女は21歳で並み居るライバルに打ち勝ちこの屋敷のメイドの一人として採用された。

現在、彼女は24歳らしいが、メイドの仕事と動画配信をしつかり両立している事からもその優秀さが垣間見える。

「お嬢様」

そんな事を考えていると、配信準備をしていた私服の風香が私に声をかけて来る。

「準備は終わったか？」

「はい」

「それで、私はどうすれば良い？」

「私が紹介いたしますので、簡単に挨拶をして頂ければ。後は私が振りますが、慣れてきましたらお嬢様のご自由にどうぞ」

「分かった」

「では始めます……こんばんはー！完璧メイドの天津 凧です！」

少し黙った後、突然風香の雰囲気が変わる。

画面では彼女に声に合わせて、アバターである天津 凧が動いたり表情を変えたりしている。

容姿は金髪をポニーテールにした碧眼の犬耳メイド少女だ。

：こんばんわ

：こーん

：きた！完璧メイド（笑）！

：なぎちゃんこんばんは

コメント欄に次々とコメントが書き込まれる中、私は目に付いた物を読んで見る。

凧は完璧メイドと言っている様だが、反応を見ると本気にされていないようだな。

風香に何故犬の獣人なのか聞いた所「私の中では、メイドは何となく犬のイメージなのです」と言われた。

犬の従順さが主に仕えるメイドと被るのだろうか？

私はアバターをじっと見つめる。

混血が進んだ獣人なら耳と尻尾だけが特徴として現れる事も十分あり得る事だ。

実際に似たような特徴の獣人も多くいた気がする。

かつて存在していた獣人達を思い返している間に、話は進んで行く。

「さて……今回は私だけじゃないんです！」

：お？

：誰かいるの？

：誰だ!?

：まさか彼s……

彼女の言葉にすぐに反応が返って来る。

「何と！私がお仕えしているお嬢様が出る事を了承してくださいま

した！」

：お嬢様!?

：お嬢様（リア友）

：なんちゃってメイドにお嬢様が居るのか……（困惑）

「本物だから!?失礼の無い様にね！」

彼等が本気にする訳が無いな。

「配信を見ている者達、凧のお嬢様だ。今日はよろしく頼む」

：!?

：すげえ良い声!

：よろしくお嬢!

：お嬢様!

：声めっちゃいい!

：声は女の子なのに話し方がなんか凛々しい?感じだな

次々とコメントが流れて行く。

「今回はお嬢様に見て頂きながら新しいゲームをやって行くよー」

：いえーい!お嬢様見てるー?

：お嬢様もプレイするの?

「どうしましょう……お嬢様もプレイいたしますか?」

風香……いや、今は凧である彼女が聞いて来る。

取り敢えず聞く事を聞いておこう。

「私は何をやるのかを聞いていないが?」

「あっ……」

：早速やらかしてて草

：大丈夫?クビになったりしない?

：お嬢様の悪意の無い疑問がポンコツメイドを襲う！
：これはポンコツ

彼女の緊張具合からすると本当に忘れていたのだろうか。

「申し訳ありません、お嬢様との配信で緊張していたようです」

「気にするな、いくら優秀でもお前は人間だ。緊張する事もあるだろう」

：お嬢様優しい

：これは理想の上司

：お前は人間って言った？

：言い回しからそこはかとなく感じる人外感

：この子配信では結構ポンコツなんですよお嬢様

：容赦の無い報告で草

言い回しに反応している者も居るが、この状況ならば全て設定で済むから問題は無い筈だ。

「普段は完璧なんですー!」

コメントには「ご主人様にポンコツがばれたw」「必死w」「可愛い」などの書き込みがされている。

「ここでの姿がどうであれ、私の屋敷で三年間メイドとして問題無く働いているからな。彼女が優秀な事は間違い無い」

私の言葉に、彼女が驚いた表情で私を見る……そして。

「お嬢様……ありがとうございます」

嬉しそうに微笑みを浮かべ、そう言った。

：すげえ感情のこもったありがとうございますでございますだ……

：ワンチャン本物の可能性が？

：演技だったらそれはそれで凄いな

：本当になぎちゃんメイドだったの!?

：三年か……今何歳なんだろう？

・本物のメイドって何歳からなれるんだろうな

「んんっ……さて！お嬢様に今回のゲームの説明を致します！」

・お、復活した

・この程度やらかしには入らないからへーきへーき
・お嬢様だけじゃなくて俺達にも説明してください

「今回やるのは『白狼』です！」

・おおー！

・昨日発売した新作じゃん！

・これって配信しても良いんだっけ？

「大丈夫です。配信出来る事は確認していますので」

「これはどういったゲームだ？」

私が疑問を口にする、彼女が説明を始めた。

「これは高難易度が売りのアクションアドベンチャーゲームです
ね」

「なるほど」

「事前の情報では、日本の戦国時代の様な世界で『白狼』と呼ばれる
忍びの主人公が、主の為に戦う……といった内容の様です」

「戦国時代と聞くと信長を思い出すな」

「かなり有名ですからね」

・まあ、戦国って言うと大抵出て来るね

・死体見つかって無いんだよな

・光秀の謀反の理由も謎のままなんだよなあ

私が思い出した理由は身近にいるからで、光秀の謀反は私が原因で
ある可能性が高いが、言った所で意味は無いだろう。

「さてーでは始めましょうー」

凧が声を上げてゲームを起動する。

：初見だから楽しみ

：見て面白そうだったら買うわ

：俺は発売日の朝に買って今も配信見ながらやってるけど……難しいわこれ

：事前情報ではかなり難しそうだったね

コメントが流れる中、オープニングムービーが流れる。

……なるほど、幼い主君を守り抜く訳か。

「言い忘れていましたが、このゲームはマルチエンディングらしいです」

ムービーが終わりタイトル画面になると、凧がそう捕捉した。

：結構重要な事を言い忘れるポンコツメイド

：安定のガバ

「プレイ中の判断で結末が変わるという事か」

「そうです」

凧はそう言いながらゲームを始めた。

：周回確定

：全部のエンディング目指して欲しい

私は流れるコメントを読みつつ、凧のプレイを見守る。

主人公らしき男が牢の様な場所に座り込んでいるが、天井に開いている小さな穴から手紙と鍵が投げ込まれた。

「ここは牢獄ですかね？手紙の内容からすると、まずは主君に会いに行くのでしょうか」

：牢屋スタートか

：洋ゲーで良くあるやつ

「む、敵が来ましたね」

少し進むと武装した農民の様な敵が出て来た。

風は簡単にそれらを切り倒していく。

「意外と簡単ですねー」

：最初の雑魚を倒していい気になるメイドの姿がこちらです

：それチュートリアルな敵だぞw

雑魚を切り倒してある程度先へ進むと、それなりの装備を纏った侍が出て来た。

：でた！そいつが最初はキツイ！

：初プレイのプレイヤーを突然絶望に叩き落とす敵

既にプレイしているであろう視聴者からコメントがある。

「まだ行けますよ……ん？戦闘説明ですか」

私も一緒に読んだが、どうやら通常攻撃の他に相手の攻撃を弾いていなし、相手のバランスを崩す事で致命の一撃を入れる事が出来る様だ。

「なるほど、弾くんですね……来い！」

：威勢だけは良いんだよね……

：なぎちゃんあんまりこういうの得意じゃないよね？

「……でいなしつ……あつ!?一撃で減り過ぎじゃない!?いったん離れ……うわ、追って来る!?!」

全く弾けずに攻撃を受け、逃げようとするも敵が何処までも追いかけて来る。

「待って!?!ああ!?!他の敵が……あー!?!」

そして、逃げた先に居た農民の様な敵と侍に囲まれあっさり殺された。

：草

：初見は大体こうなる、俺もやった

：結構タイミングシビアじゃね？

：戦いは数だよな

：刀で斬られると人は死ぬんだから、ダメージは大きくて当然だよなあ？

：昔、斬られると即死する侍ゲーがあつてな？

「これは逃げようとする余計酷い事になりますね……」

彼女が再開地点で復活しながら言う。

：敵前逃亡など武士の風上にもおけぬ！

：この主人公は忍者だから……

：逃げると余計酷くなるとか鬼畜だわ

こうして彼女は再び挑戦し始めた。

「お嬢様……代わっていただけませんか？」

：泣きが入ったw

：お嬢様に頼ろうとするメイドがいるらしいっすよ？

：1000回負けてからが本番だから

：二時間か、まあまあ頑張った

あれから時々私に当り障りの無い話題を振りながら二時間近く挑んだが全く勝てず、遂に私に交代を頼んで来た。

「余裕で勝てると思うが、私が殺して構わないのか？」

…凄い自信

…これは主従でポンコツの流れ……

…お嬢様のゲームの腕はいかほどか……

…頑張ってお嬢様！

「仇を取って下さい！」

「分かった」

運が絡まない反射速度と操作の正確さが物をいうゲームは、全く知らなくても問題無い。

人類の速度に合わせて作られているので最初から遅い上に、今回は彼女のプレイを何回も見ている。

既に攻撃パターンも弾くタイミングも全て分かっているからな。

この状況で負ける事は難しいだろう。

「ここからプレイヤーはお嬢様です、皆さん応援よろしくお願いします」

…なぎちゃんの仇を取ってくれ！

…お嬢様が難易度にブチ切れたらどうしよ

…その場合、メイドがクビになります

「クビにはならないよー！」

そんなやり取りを横目に、例の侍の元へ向かう。

次々と攻撃を弾き、その間に斬撃を加えて行く。

「ええ……？」

隣で風香が変な声を上げた。

…うっそだろおい!?

…全部弾いてる!?

…初見だよな……？

…発売は昨日だぞ？

…一日やつてもここまで上手くならないだろ……どうなってんだ？

…でもやってるし……

…お嬢様はメイドとは格が違った……

あつという間に相手がバランスを崩し、致命の一撃を入れる。

「終わったぞ」

「あ、はい……」

…すげええええ!!?

…マジで倒した!

…しかもノーミスじゃね？

…倒すのはやつ!

…このお嬢様一步も動かずに弾きと攻撃だけで倒したぞ……

…なぎちやんが呆然としてる

…そりやそうだろ……

…気がついたら口開けて見てたわ……

「あの……お嬢様？」

「何だ？」

「このゲーム初めてですよね？」

…お嬢様を疑うというメイドとしてあるまじき所業w

…気持ちは分かるけどなw

…この辺り切り抜き確定だろw

「初めてだ」

「何でこんなに上手いんですか？」

「お前のプレイを見ていたという事もあるが、一番の理由はこのゲームの速度が遅い事だな。この程度なら相手の動きを見た後からでも間に合う」

：驚愕の理由！
：このゲームには速さが足りないらしい……
：お嬢様何者なんだ……？
：ただ言ってるだけなら凄いつすね、で流すんだけど……
：たった今俺達もパーフェクトキルを見てるんだよなあ……
：超人過ぎる

コメントが凄まじい勢いで流れて行く。
私は自分のプレイは見る気にならないだろうな、やはり風や他者のプレイの方が見ていて面白いと思う。

「この敵は復活するんでしょうか？分かる方いませんか？」
突然風が視聴者に尋ねる。

：雑魚扱いだから休憩すると復活するよ
：何度でも出て来る

「お嬢様……申し訳ありませんが、私が倒すまで進まなくても良い
でしょうか？」
コメントを読み、そう尋ねながら私を見る風香に私は答えた。
「納得出来るまでやると良い、私はお前のプレイを楽しませて貰う」

：よく言った！
：それでこそ風よ
：お嬢様かけえ
：見守ってるぞ！
：このハイスペックお嬢様の下で働けるとか羨ましい
：このお嬢様は美人（確信）
：寝る時間までは付き合う

視聴者からの応援を受け、彼女は更に一時間半ほどかけて侍を殺し

た。

風が侍を殺し初回の配信が終わった後、私は風香の部屋でくつろいでいる。

「風香、メイド仲間に出演を頼んだ事は無いのか？」

私は正面に座る風香に、ふと思った事を尋ねた。

「一度は頼みました。ですが……生配信で失言をしてしまうと、必死に努力して勝ち取ったこの屋敷のメイドという立場を失う可能性がありますからね。そんな危険を冒してまで出てくれる仲間はいませんでしたね」

ふむ……私の屋敷に居るメイドが失言をするとは思えないが、危険が伴う行動を避けるのは知的生物としては一般的な反応だろうな。

「そうか」

「無理強いはしていませんし、仲間達におもう所もありませんのでご安心を。私も相手の立場であれば断っていると思います」

現在は配信時の勢いが無くなり、屋敷のメイドの風香になっっている。

「雇い主にも等しい私に声をかけたのは何故だ？」

「お嬢様は色々予想出来ない方だと聞いていましたので……もしかしたら、と思ひまして」

微笑んで彼女はそう答えた。

「なるほど」

「流石に実際にお誘いするのはかなりの思い切りが必要でしたが、お嬢様が話す様に促して下さいだったので助かりました」

彼女は胸元に手を置きながら静かに息を吐く。

「私は大抵の場合、聞くだけは聞くぞ？」

「分かっているとお嬢様を誘うのは覚悟が必要でした。それに、内心では十中八九断られると思っていましたし……駄目で元々でお誘いしたのです」

「僅かな可能性であったとしても、時には上手く行く事もある」

人類の中で、僅かな可能性にかけて実際に努力し行動が出来る者は

そう多くないだろう。

多くの場合、「どうせ上手く行かない」と諦めるのではないだろうか。

「とても楽しかったです。お嬢様……また、出て頂けますか？」

「良いぞ」

「ありがとうございます……！」

再び出演する事を約束すると、彼女は控えめに歓喜を現した。

【バーチャルニューチューバー情報交換掲示板】

1：匿名の名無し

皆からの報告を待ってるよ！

どんどん情報を共有しよう！

2：匿名の名無し

昨日見たブイチューバーの配信に来てたゲストが凄かったよ。

一年以上やってる個人勢。

切り抜きと生配信アーカイブのリンク貼つとく。

「nyutube／XXXXXXXXX－XXX」切り抜き

「nyutube／XXXXXXXXX－XXX」生放送

3：匿名の名無し

見てみるわ

4：匿名の名無し

俺も見してみよ

5：匿名の名無し

生配信見てたけど、マジで凄かった。

6：匿名の名無し

俺も見てた

普段見てなくて、たまたま見ただけなんだけど幸運だったわ

7：匿名の名無し

今切り抜き見てるけど、何だこのお嬢様……すげえ。

8：匿名の名無し

これって相手の攻撃にタイミング合わせて弾くんだったよな？
いくら序盤でも初見で出来る事じゃないだろ。

9：匿名の名無し

見てから反応出来るってなんだよ……バトル漫画ですかね？

10：匿名の名無し

発売したばかりのゲームだから、練習してるとは思えないしなあ

……

11：匿名の名無し

練習してても一日でここまではいかないだろ……

12：匿名の名無し

彼女の言葉を信じるなら能力に任せたり押しという事になるんだけど……出来るもんなのか？

13：匿名の名無し

実際にお嬢様がやってるし、出来るんだろ

14：匿名の名無し

この子……天津風だけだ。

前にちよつと見た事あるけどお嬢様がいた方がずっといいね。
生き生きしてる様に見える。

15：匿名の名無し

ソロだと実力が発揮できないタイプだったのか

16：匿名の名無し

多分だけど、このお嬢様だからじゃないかな？

何と言うか……彼女の言葉使いや態度がお嬢様に対しては本気に
感じるんだよ。

主従って言うのもただの設定じゃないかも知れない。

17：匿名の名無し

天津 凧の中身が本当に良い所のメイドで、本物のお嬢様と配信し
てるって事？

18：匿名の名無し

それは無いわ

19：匿名の名無し

本当かも知れないだろ!?!夢をもとうぜ!

20：匿名の名無し

俺はなぎちゃんがいつもと違ってプロっぽい感じだと思ったんだ
けど。

21：匿名の名無し

何でそう思ったの？

22：匿名の名無し

俺はよくメイド喫茶に行くんだけど、アキバとかにあるメイド喫茶

のメイドと明らかに違うんだよ。

確かに色々とメイドらしくない所もあるけど、それはプライベートだからなんじゃないか？

その証拠に、お嬢様に対して時々見せる言葉使いは穏やかで必要以上に主張せず、敬意がこもった言葉に聞こえる。

そっちが本当のなぎちゃんだと思ってるが……。

何と言うか……「選ばれた一流のプロフェッショナル」のように感じるんだよな。

23：匿名の名無し

めっちゃ語ってて草

24：匿名の名無し

正体なんてどうでもいいよ。

面白ければ見る、つまらなければ見ない、それだけ。

25：匿名の名無し

まあ、下手に探って辞める事になったりしたらお互いに良い事無いしな

26：匿名の名無し

彼女達の方から言うなら良いけど、俺達からそういうのはやめておくのが礼儀だろ？

27：匿名の名無し

でも気になる

28：匿名の名無し

気持ちは分かる

あれから私は風香の家に訪れるようになった。

彼女はほぼ毎日何かしらの生配信をしているが、私が出るかはその時の気分次第だ。

同じ部屋に居ても全く話さず、ただ見ているだけの場合もある。

今日は風がプレイしている「白狼」の第三回目を行うという。

「こんばんは！完璧メイドの天津 風です！今日は白狼の第三回をやって行きます！」

：こんばんは！

：切り抜き見てきました、今日はお嬢様は居ないんですか？

：果たして今回であのボスを倒せるのか……

次々にコメントが流れて行く。

今日の配信準備中に、風香が以前より配信を見に来る人数が増えたと言っていたな。

「前はボスまで行きましたが時間切れでしたね。後、お嬢様はいつも私と同じ部屋に居ますが、参加するかはお嬢様の気分次第です」

：いるのかw

：お嬢様！メイドを助けてあげて！

：でも、お嬢様が蹴散らしてもなぎちゃんは結局自分で倒すまでやるんでしょ？

：スーパープレイを見せてくれー

「お嬢様が見守ってくれているので、今日も気合入れてやりますよ！」

：下手するとクビだしな

：ポンコツメイドを優しい目で見守るお嬢様

「ゲームが下手なだけでクビにはなりません！さて……ボスに行こうと思っていたんですが、前回の配信中に取り逃している物があると指摘されていたので、それを先に取りに行こうと思います。ボス戦が楽になるかも知れませんかね」

：そういえば取り逃してたね
：勝つために準備を整えよう

そう話しながらマップを移動していくが、道中の谷を越えようとジャンプした所で狙撃され、谷底に落ちた。

「うわああああ!？」
風が落ちて行くキャラを見て叫んだ。

：お見事！
：ええ……前回平気だったやん……
：（お嬢様からの無言の圧力）

圧力などかけていない。

「何でお嬢様が居る時に当てるんですか!？」
そう言いながら再び同じルートを進み始める風。

：敵「お嬢様が見てるんで……」
：草
：敵もお嬢様の前で良い所を見せたいのかよw

「もう失敗はしません！」
そう言った彼女はその後、失敗する事無く取り逃していたアイテムを集める。

：これは出来るメイド
：有言実行！

：沼らなくて良かったね

「よーしー！じゃあボス戦行きますよー！」

一度セーブポイントに戻った風は、先程とは違う道を進んで行く。少し進むと広い場所に到着し、横の崖から馬に乗った侍が現れた。

「まずは馬！」

多少の被弾はあったが、馬を倒す彼女。

：おお！馬やれた！

：ここまでは前回の終わりに行けてたな

：腕がなまって無くて良かった

「ここからが本番です！」

そう言って挑んだが……まだ攻撃パターンや弾くタイミングが分かかっていない様で、動きが悪い。

「あつ……」

私がそう思っている間に風はあつけなく敗北した。

：全然持たなかったw

：ドンマイ！

：新しい敵が出る度にこうやって死に覚えるゲームだから……

「まだまだこれからですよ！」

そう言って気合を入れる風は、再びボスの元へと向かった。

「あああー！勝てない……」

それから三時間後。

少しづつ上達はしているが、どうしても止めを刺す事が出来ずに惜敗が続いていた。

…さっきのはマジで凹みそう

…あと少して止めだったのにな

…これ、お嬢様も同じ部屋で見てるんだよな？

…三時間メイドの頑張りを見守り続けるって……お嬢様優しすぎない？

「風、助言は必要か？」

私は風にそう問いかける。

…うおお!?

…お嬢様が動いた！

…これで勝てる！

私が一言話しただけでコメントが増えたな。

「お願いします、お嬢様。勝てるのなら何でもやりますよ」

…なんでも？

…今何でもって言った？

…まず上着を脱ぎます

…脱がそうとすんなW

「では助言をしよう。お前が対応出来ない敵の薙ぎ払いと突きだが、予備動作が僅かに違う」

…マジで!?

…どこが？

「………違いましたか？」

「違う。武器を構える所までは同じだが、突きの時はその後に腰が僅かに落ちる」

「確認してみましよう」

彼女はそう言うのと再びボスの元へ移動し始める。

：違ったっけ？

：同じに見えたけど……

：俺も確認してみよ

それから彼女はボスと戦闘を開始したが、攻撃はせずに回避と防衛に専念し、動きだけを見ていた。

そして、しばらく見ていると声を上げる。

「あっ!?!分かりました！確かに落ちてます！……一瞬ですけど」

：見えた！見えたけど気がつくかこんなもん！

：お嬢様に言われなかったら意図的だと気が付かないぞ……

：ホントに一瞬じゃねえか!?!見間違いかと思うわ！

：作った奴気がつかせる気無いだろw

：これ画質悪かったら配信画面じゃ分からなかったな

気がついた視聴者達のコメントが流れて行く。

「お嬢様、いつから気がついていたんですか？」

「最初に薙ぎ払いと突きを見た時だ」

「……お嬢様ですからそういう事もありますよね」

そう言いながらも、彼女の表情は驚いている。

：うそやろお嬢!?

：それって、一度見ただけで気がついたって事か……??

：お嬢様はこのゲームは速度が遅いつて言ってたし、それだけの動体視力があれば普通に分かるのか……??

「これで被弾は減り、攻撃する機会も増える筈だ。惜敗していた今の状態なら問題無く勝てるだろう」

「はい！これなら余裕で行けます！」
彼女は改めてボスへと挑んだ。

前回の配信は風がボスを殺した所で終了した。

風香から聞いた話によると前回の配信も切り抜きされ、投稿されているらしい。

それから今後の配信予定の話聞いた。

彼女は普段様々なゲームをやっているが、今回は白狼をクリアするまで他のゲームの配信は行わない様だ。

理由を聞くと、彼女は「あまり期間を空けると腕が鈍っていつまでもクリア出来ないかも知れないので」と答えた。

彼女は毎夜配信を続け、休日には長時間の配信も行った。

そして現在、ゲームは最終局面に入っている。

「この感じだと、そろそろラスボスでしょうかね……」

：良くここまで来れたよな

：最初はあるなにポンコツだったのに……成長したな

：これが最後だよ

ゲーム内では燃え盛る城下町が見える丘で、主人公と一人の男が対峙している。

「続けていればそれなりに慣れてきますからね」

彼女がコメントに言葉を返す。

やがてムービーが終わり、戦闘が始まった。

「さて、恐らくこれが最後……最後ですかね？今日で終わらせるつもりでやって行きますよ！」

翌日の夜。

風香は白狼の配信を行っている。

前回は配信終了時間の10分程前に止めを刺し、喜んだ直後に第二形態がある事が発覚し敗北、配信を終了した。

最後の敵である事は間違い無い様なので、今回で終わる可能性は高い。

「さて！・前回、第二形態がある事が判明した訳ですが……今回の配信中に倒します！」

：あの時のなぎちゃんの反応は笑ったw

：「嘘でしょー!?!」って叫んでたなw

：ギリギリでようやく倒したと思った敵が更に強くなって回復するとか鬼畜ですわw

：がんばれ！

：ここまで来たんだ、倒そうぜ

風はコメントを見た後、ボス戦へと挑み始めた。

ボス戦へ挑み始めてから約四時間後、遂に風は第二形態のボスへ致命の一撃を打ち込んだ。

「やったー！やったあ！」

コントローラーを置いて喜ぶ風。

：きたー！

：長かった戦いがついに終わる……

：最後油断しないで！もう一回入力あるよ！

「えっ!?!……あっ!?!」

入力が残っているというコメントを見たのだろう、風が慌ててコン

トローラーを握ると、再入力指示が出たのはほぼ同時だった。

「危なかった……これで最後！」

：いけえー！

：止めを刺せ！凧！

凧は指示されたボタンを入力し、ボスに止めを刺した。

「流石にもう無いよね……？」

そんな心配をする凧をよそにムービーが流れ、やがてエンディングが流れ始めた。

「終わったー！」

：お疲れー！

：クリアおめでとー！

：これはノーマルエンドかな？

：さて、別エンドを目指して最初から始めようか

「取り敢えずエンディングを見ましよう」

クリア出来た事が嬉しいのだろう、明るい声で彼女はそう言った。

エンディングが終わり、彼女はプレイの感想を話し始める。

「難しかったです、とてもやりがいのある面白いゲームでしたね」

：お嬢様の力も大分あるけどな

：たまに手助けしてたけど、声出さないだけで毎回いたのかな？

：その辺どうなのなぎちゃん

「お嬢様はいつもいらっしやいました、見ていただけの時があるだけですね」

：お嬢様も意外と暇なんやね

：仕事とかはしてないの？

：何歳なんだろう

「そういう事は教えられません。お嬢様の許可があれば別ですが……」

その辺りを許可なく話せば処罰の対象になる恐れがある為、彼女も話せない事を明言する。

：お嬢様次第か

：そら上司？なんだからそうよ

「お嬢様が『良い』といえ、本来禁止されている事でも許されますから」

：すげえ

：王様みたいだな

「でも、お優しい方ですよ。その力の使い方もお嬢様らしい使い方をされています」

：ほーん

：例えばなんかある？話せばだけど

風香は私の方を確認しながら話し始める。

「そうですね……以前、お嬢様の給仕をしていたメイドに、その場で一週間の休暇を与え精密検査を受けるように指示したんです」

ん……？

そんな事をしただろうか？

そう思っている間に話は進む。

：ほうほう

：超絶ホワイト！

：お嬢やるやん！

「その後、彼女が病院に行った事で判明したのですが……彼女は病気でした。早期発見だったために治療は問題無く、現在はその彼女も復帰してはいますが『気が付くのが遅れていたら助からなかった』と医者から言われたそうです」

……思い出した。

以前、メイドの一人の様子に違和感を感じて体を調べた所、病魔に侵され始めているのを発見した事があつたな。

：マジかよ

：お嬢って医者なの？

：部下の命を救う、上司の鏡

彼女は私を確認しながら話を進める。

「医者は『自覚症状も全く無く、精密検査をしなければ発見出来ない物だった。発見出来たのは運が良い』と言っていたようですが……」
我が家の優秀なメイドを病氣程度で失いたくは無いらな。

：お嬢様が行けって言ったんだよな？

：お嬢様は医者がそう言った病氣を見ただけで察したの……？

：偶然？

「偶然でしょうかね？その一月ほど前にメイド達は通常健康診断をやっていたのですが……」

：おいおい……確信をもって指示したって事か？精密検査しないと分からない病氣を？見ただけで？

・聞けば聞くほどお嬢様が何者だか分からなくなるんだけど
・お嬢は今もなぎちやんの近くにいますよ？お嬢ってどんな感じなの？

「そうですね……」

私はこちらを見る風香に対し、頭を横に振る。

「お嬢様からNGが出ましたので、これ以上は話せません」

外見の特徴を言えば流石に思い当たる者もいるだろうからな。

・だめかー

・そら身バレしそうな話は駄目だよな

・まあ、お嬢が凄いつて事は分かった

「さて……この話はここまでにして、今からこれからの予定を少し話そうとおもいます」

・お、次は何すんのー？

・お嬢様と一緒にやれるゲームやって欲しい

「次はホラーゲームを考えています」

・ホラゲか

・なぎちやんは良い反応しそうだけど、お嬢様が驚く姿が想像出来ねえ……

・意外と怖がりで可愛い声を聞かせてくれるかも知れないぞw

「それと、ホラーゲームは次回の配信では無く、その次にやる予定です」

・あれ？そうなん？

・ん？じゃあ次回は何するの？

「最近は何日集中力を使うゲームをしていたので、雑談を挟もうかと思ひまして」

・なるほどね

・良いんじゃない？

・お嬢様は来るの？

・お嬢に質問コーナーとかある？

「お嬢様、どういたしますか？」

風香が私の判断を仰ぐ。

「答えたくない質問には答えませんが、それでも良いというのなら構わない」

・やったぜ！

・お嬢様の正体がついに分かる

・いや、正体がばれる事には答えないだろ

「お嬢様が了承して下さいだったので質問も受け付けますが……あまり変な質問をしない様にして下さいね？」

・ひえっ……

・トーンがガチで怖い……

・お嬢様を思うメイド魂が……

・ポンコツでもメイドはやはりメイドだった

・白狼クリアしたんだからもうポンコツじゃないだろ！

・そのプレイ中に結構やらかしてるんだよなあ……

「お嬢様なら正直平気そうですが……それでも駄目ですからね？皆さん」

その後、凧は最後の挨拶へと移り、配信を終わらせた。

午前中は千穂の家に行き、午後を娘達と過ごした私は、夕食後に風香の自宅を訪れた。

「いらつしやいませ、お嬢様」

私服のまま、風香がメイドとして迎えてくれた。

「今更だが、今はお前の自由時間だ。もつと言動を崩しても構わないぞ」

「私はこれが普通なので。ただ……風がかつての私である事は間違い無いですね」

そんな会話をしながら、配信を行う部屋へと移動する。

「配信の準備は出来ていますが、時間までもう少しお待ち下さいね」
部屋に入ると、彼女はそう言いながら紅茶を入れる。

「分かった。では紅茶を楽しませて貰おう」

私がゆつくり紅茶を飲んでいる内に、配信の時間がやって来た。

「こんばんはー！完璧メイドの天津 凧です！」

彼女がいつもの挨拶を行う。

：雑談来たー

：お嬢様、ご機嫌麗しゆう

：こんばんわ！

「お嬢様は現在紅茶を楽しんでおられますので、もうしばらくお待ちください」

：お嬢様だし、紅茶は飲むよな

：俺達だって紅茶は飲むだろw

：間違い無く値段が違う

：今お嬢様が飲んでるのついていくらするんだろ？

「現在、お嬢様が飲んでるのは英国製の『ウッド・ルーージュ』という品ですね。お値段は……大体ティーカップ一杯で2万円程でしようか」

凧はコメントを拾い、答えている。

：はあ!?一杯2万!?

：なんだその値段!?

：マジのお嬢様やん……

：そんな紅茶あるんか……

：口紅かと思った

「似たような名前の口紅もありますが別物です。それと、この紅茶は値段的に言えば最高という訳ではありません」

：まだ上があるのかよw

：お嬢様ならそつちを飲めるんじゃないの？

「一度お飲みになられましたか、こちらの方が好みだったようです」

：あー……好みか

：それは当然あるよな

：高ければ誰にでも美味しいって訳では無いか

：ちなみに一番高いのはいくらだったの？

「そうですね、お嬢様の好みに合った物がこれだったという訳です。値段は二千元ほどの差です」

：あんま変わんなくて草

：二千円はもう誤差だろ w

「どちらも最高級品である事は間違いありません。この紅茶は市販品ですが……物によってはお嬢様の為に専属のプロを雇って生産していますので、皆さんでは手に入らない物も間違い無く存在すると思います」

：は!?!お嬢様の為だけに作ってんの!?

：想像の万倍金持ちでそうでビビってる……

：お父さんは石油王かな？

：もしかして月下の親族？

：確かに月下の関係者ならそれぐらいやりそう w

内容から推察されているが、反応しなければ簡単に気付かれる事は無いだろう。

私は紅茶を飲み終え、風香の隣へと移動する。

「お嬢様が紅茶を飲み終わりましたね」

：お！

：二人への質問タイムだ！

：お嬢様もだけど、なぎちゃんにも聞きたい事が増えたぜ

「まずは事前に募集していた物を見て行き、その後コメントの質問を拾って答えて行きたいと思いますが……私が確認し、問題のある質問は読まれる事無くその場でゴミ箱行きとなります」

：やばい捨てられるかもしれん

：何書いたんだよ w

：センチティブな質問ですかね

：アウトー！

……センシティブ？

そのまま捉えれば敏感な質問、神経質な質問といった感じだろうが……どういう事だ？

「風、センシティブな質問とは何だ？」

「えっ!？」

私の質問を聞いた彼女が突然声を上げた。

：拾っちゃったよw

：何やってんだよお嬢!?

：メイドの努力を無にするお嬢様w

：えっちい質問やぞ

「……それはあまり大っぴらに口に出来ない様な内容の事を指す、ブイチュバー内での隠語の様な物です。具体的には性的な事柄や、それに類する物、そういった物を想像出来る様な内容の質問の事です」

：なぎちゃんも普通に説明したw

：いきなり不味い事になったぞ!?

：ほら、知らないと危ないかも知れないから……教育だよ、教育

：滅茶苦茶教育に良くない内容なんですがw

「つまり、人間が性的に興奮するような物をそう呼称し、出来るだけ無関係な者達に知られないようにしている訳か。なるほど、……確かに機密保持には有効だな」

全く関係の無い言葉に関係者だけにしか分からない別の意味を持たせる事は、人類の歴史でもよくある事だ。

：何かお嬢様が感心してるんだけど……

：全く恥じらいが感じられない声ですね

：実は結構年行ってる？

：声は若くて可愛いけど、声優も実年齢はアレでも声は可愛いもん

な

：アレって言うなよ！

「答えても構わないが、私はそういった事に一切興味が無い。たいした答えは返せないだろう」

：お嬢様はそういう事に興味が無いってマジ？

：恥ずかしがるお嬢の声が聞きたかったのに

「それはともかく……お嬢様が気にしておられないので今回は見逃しますが……皆さん、前回私が言った事を聞いていましたか？」

突然低い声を出す風香。

ふむ……多少怒っているな。

：やばいマジギレだ！

：すいませんでした！

：ごめんなさい！

：でもお嬢全然平気そう

：駄目な事でもお嬢様が良いと言えば良くなるからな

：なぎちゃん的には不安だったんだろうけど、全然平気そうだよね

「こちらでお嬢様の目に触れない様にしようと思っていたのですが……」

そう言っただけのため息を吐く彼女。

：何か疲れてるw

：お嬢様が拾っちゃったからw

：コメントは見えるから仕方ないね！

「では気を取り直してお嬢様への質問を読んでいきます……『好きな食べ物、好きな飲み物、嫌いな食べ物は何ですか？』だそうです」

：好き嫌いは基本

：当たり前障りが無いって言ったらこの辺りは当然だよな

「好きな食べ物は家族が作る料理、好きな飲み物は牛乳だ。嫌いな食べ物は特に無い」

味が悪くても、美味いと感じないだけで嫌いという程では無いからな。

：牛乳w

：最近牛乳好きな子供減ってるらしいけどお嬢は好きなんだな

：家族の料理が一番とか良い子過ぎやろ

：成長に必要なだから……色々とね？

：嫌いな物無いんか、健康的だな

「次は……『身長、体重を教えてください』との事です」

アイドルであった頃もこんな質問をされた覚えがあるな。

「身長は約130cmだ。体重は……そう言えば最近確認していないな、だが記憶では30kg程度だった筈だ」

変更する事も可能だが、言う気は無い。

：ロリお嬢様来たー!?

：本当だったら最高だな！

：お子様じゃねえか……良いね！

：超人強気ロリ美少女お嬢様……属性盛り過ぎじゃね？

「では次の質問に……」

そう言いかけて風香は一瞬動きを止め、何か作業をし始めた。そして再び口を開く。

「では次の質問に行きます」

：今の誰か捨てられただろ w
：無言で捨てられた w

『素晴らしい動体視力と反射神経をお持ちのお嬢様ですが、運動は得意なんですか?』という質問です」

「身体能力を使用する物であれば、スポーツ、ゲーム問わず得意だと言えるとと思う」

：能力によるごり押しだと……!?

：でも身長と体重から推測すると、お嬢まだ10歳前後でしょ? 同年代よりは多少上って感じかな?

：同年代より多少上程度であの白狼のプレイが出来るとは思えないんだよなあ……

：あつ……確かに

：じゃあ……どういう事……?

：超人なんだよ (白目)

：激ムズゲーで無双する美少女が居るらしい

：じゃあ苦手な事は何だろう?

「お嬢様、『苦手な事は何か』という質問がありますが……何かありますか?」

風香がコメントの質問を拾う。

「恋愛関係は苦手……と言うよりも理解出来ない。後、これは苦手とは少し違いかもしれないが……大きく運が絡んだり、システムに縛られている物に対しては基本的に実力が発揮出来ないと思う」

：娘に恋愛はまだ早い!

：パパは許さないぞ!

：お嬢様はメイドと結婚するんだろ?

：運か……ボードゲーム系かな?

：お父さんが湧いてて草

・百合なら構わないぜ！

・ゲームは全部システムに縛られてるよな？

・目に見えない物が苦手って事じゃない？システム上居る事が分かんかったり、透明だったり

・本人が早く気づいて早く動けたとしても、キャラの動くスピードとかは限界が決まってるじゃん？

・何となく分かった

・流石にお嬢もシステムには勝てないか

「さて次は……これは私に対する質問ですね」

「風に対する質問か、では私が読もう」

「ありがとうございます」

私は表示された質問へ目を向ける。

「読むぞ？『なぎちゃんには本当に本物のメイドなんでしょうか？』だそうだ」

「今まで誰も信じてくれませんでしたからね。最初から言っていますが、私は本物のメイドです」

「完璧では無いが、彼女が優秀なメイドである事は私が保証しよう」この環境で証明する事は難しいが、事実だからな。

・完璧をお嬢様に否定されたw

・でもお嬢様にお墨付きを貰う程に優秀なのか

・メイド（妄想）ではなかったというのか……？

・配信を見ているだけだとポンコツ風味だけど、本当は優秀だったのか……

「私が現在も此処に居る事が証拠と言えますね」

「そういう事だな」

・ん？どゆこと？

・あれだ、駄目だと解雇されるんじゃない？

：ああ、なるほど

：お嬢の所でメイドとして働いている事、それ自体が優秀である証
拠って事か

「コメントにありましたが、その通りです。この屋敷でメイドとして働くには相応の能力を求められますので、ここにいる時点でその基準以上の能力があるという証明になります」

流れるコメントに返事をする風香。

その後は質問コーナーを終了して、彼女が雑談を始める。

時々私も口を挟みつつ時間は過ぎ、約一時間半で配信は終了した。

私が風香の配信へ顔を出すようになってから約一か月が過ぎ、2037年の8月に入った。

最近の私の生活は日中に家族や友人と過ごし、夜は風香の部屋に向かう、という物になっている。

この一か月で彼女のチャンネルは登録者数が少しづつ増え続け、五千人程であつた登録者数は一万五千人程にまで増えた。

登録者が増えた理由だが「メイドの風とお嬢様のやり取りが何となく心地いい」という事らしい。

時々一緒にゲームをプレイしたり雑談をする事もあるが、基本的に話しているのは風香で、私は時々振られる話に答えながら見ている事が多い。

一度、風香にバーチャルニューチューバーとして上を狙うのかを聞いた所、登録者数を意図的に稼ぐ様な事はしないと答えた。

更に彼女は「配信はあくまでも趣味ですし、私はこのお屋敷のメイドです。本業に影響が無ければ色々とするのも良いと思いますが、もしも影響が出た場合は引退します」と言った。

私の「そうか」という言葉に、彼女は「はい」と答えて微笑んでいたな。

そして現在、いつもの様に夜の配信が始まろうとしている。

「こんばんは！完璧メイドの天津 風です！」

：こんばんわー

：こんなぎー

：以前、お嬢様に完璧を否定されましたよね？

「今回プレイするのはフリーのホラーゲーム『迷子』です」

：おお、結構怖い奴だ

：なぎちゃんはこれ駄目だろ

：前の中でも叫んでたしな

：お嬢様の恐怖耐性が高い事が分かった回だったな

：お嬢はホントに無反応だったね、感情が死んでる……？

：お嬢様が話してる途中で驚く所があったのに、なぎちゃんの悲鳴しか聞こえなかったからな……

：その上、お嬢様はなぎちゃんが悲鳴を上げてる時も普通に話し続けてたという……

：高性能お嬢様に恐怖など無いという事か……

視聴者がこういった反応をするのは、以前配信したホラーゲームの回が影響している。

質問配信を終えた翌日にホラーゲームの配信をしたのだが、私が反応する事は無かった。

その結果、風香だけがひたすら叫んで終わる、という配信になったのだ。

最初、視聴者達は「声を上げない様に気を付けているのでは？」と考えていた様だが、私が話している途中で驚くポイントに差し掛かった事で、私が本当に無反応である事が視聴者に伝わった。

「これならばお嬢様も驚いてくれる事でしよう」

：無理なんじゃないかなあ……

：前回のホラー回で学ばなかったのか、メイドよ

：自分がホラー苦手なのに無茶してんねえ！（歓喜）

：またお嬢様がプレイする事になりそう

「色々と言われていますが……やってきますよー」

その後ある程度耐えた風香だったが、結局恐怖でプレイ出来なくなり、私がプレイしてある程度進めた所で配信を終える事になった。

ある日、私は千穂の家にやって来たのだが、葉子と健太の様子がおかしい。

どうやら喧嘩をしている様だ。

二人は私の正面で距離を置いて座っている。

基本的には仲良くやっている様だが、こうして時々喧嘩する所は幼い頃から変わっていない。

「今回は何があったんだ？」

私がそう聞くと、健太が口を開いた。

「あー……俺がノックしないで葉子の部屋に入っちゃって……」

「そんな事か」

「そんな事じゃないよ！今まで何回も注意してるのになおらないんだから！」

私の言葉に声を荒らげる葉子。

なるほどな。

「反省はしてるよ……最近気を付けてるんだけどどうしても忘れる時があつてさ……」

「それでもなおらない所を見ると根が深そうだな」

「小さい頃からずっと気にせず葉子の部屋に入ってたから……それに今は恋人だし……」

健太はばつが悪そうな表情を浮かべながら言う。

「それでもノックをするのはマナーなの。将来、社会に出た時もしきなり部屋に入って行くつもりなの？」

葉子はそう言つて溜息を吐いた。

「それは無いって！葉子の部屋だから気が緩むというか……」

「まあ、少しずついきなり開けない様になつてきているから……もう少しかしらね」

そう言つて半目で見る葉子に、気まずそうな表情をする健太。

「ノックか……私はその辺りの事で友人に叱られた経験があるからな、健太も出来るだけ早くその癖はなおした方が良くと思う」

「えっ？姉貴もそんな事があつたのか？」

健太は意外だと言いたそうな表情を浮かべている。

「現在は出来るだけ突然行く事は控えるようにしている」
「……出来るだけなの？」

葉子が少し呆れたような声を出す。

「急いでいる時はそのような手順は踏まないからな」

「姉貴、叱られた時は何があつたんだ？」

私にそう尋ねる健太。

「気になるなら話しても良いが……」

「気になる」

すぐにそう答えた彼に、私は何があつたのかを話す事にした。

「では話そう。以前の私は思いついたように友人や知り合いの所へ
転移していたが、ある日転移すると友人二人が交尾をしていてな」

「うえっ!?!」

「お姉ちゃん!?!」

目に見えて動揺する二人。

「特に急ぐ用事では無かつたからな。固まっている二人に『終わる
まで待つ』と声をかけ、同じ部屋の椅子に座り本を読み始めたのだが
……二人は交尾を止めて私を叱り出した」

「お姉ちゃん……それは当然だよ」

顔を赤くした葉子が言う。

「俺も流石にそれは駄目だと思う……」

健太も顔を少し赤くしながら言った。

「私はその時の友人の言葉を聞き入れ、今でも気にするようになって
いる。健太も気を付けないと似た様な事になるかも知れない」

私の言葉を聞いた二人はお互いに顔を見合わせた後、横目でこちら
を窺うように見た。

「……昔のお姉ちゃんって結構アレだよな?」

「今でも所々怪しいけどな……」

小さな声で話しているが、私には聞こえている。

二人が私の耳が良い事も知っている筈だが、言わずにはいられな
かつたのだろう。

現在の私は人類の常識をそれなりに知っているが、その常識に従う

かは私の気分次第だ。

二人の言葉を聞き流しながら、私は用意された牛乳に口を付けた。

現在、私は風香の部屋に居る。

今日は配信をしないらしいが、次にプレイするゲームを一緒に決めたらしい。

向き合って椅子に座り、私がテーブルに用意されていた紅茶を一口飲むと、風香が話し出した。

「お嬢様は何かやってみたいゲームなどはありますか？」

「大半は風香がプレイするのだから、お前が好きな物を選ぶと良い」

「そうですか」

すると風香が考え始める。

「お嬢様でも楽しめる物が良いのですが……何か良い物は……」

そう呟き、しばらく考えていた彼女は私を見て口を開いた。

「お嬢様は以前アイドルとして活動していましたし……音楽は好きですよね？」

「様々な曲や歌を聞くのは嫌いでは無い。人間の様に感動したり涙を流したりする事は無いが、聞いていて好ましいと感じる物は確かに存在する」

「そうですか……でしたら音楽系のゲームはどうでしょうか？」

風香は私の「人間の様に」という言葉に少し引つかかった様だが、この屋敷に居るメイドは致命的な疑問を持たない。

外部の者の中にも私の言いまわしに反応する者が時々いるが「癖が強い話し方をする子」という考えに落ち着く様で、問題になった事は無い。

「それは演奏をするという事か？」

「いえ、演奏という程では無いですが……今まで音楽系のゲームをプレイされた事はありますか？」

「無いな。どういった物だ？」

「説明をするより、一度触れた方が早いと思います。可能であれば、お嬢様の完全初見プレイとして配信するのも良いかと……如何でしょうか？」

私の質問に、軽く微笑みながら話す風香。

「ではそうしよう。音楽系のゲームの中から何をやるかは任せる」

「かしこまりました」

私がそう言うと、風香は返事をして一礼した。

翌日の夜。

これから風香が用意した音楽ゲームを、私が完全初見でプレイするという配信を開始する。

「こんばんはー！完璧メイドの天津風です！」

…こんなぎー！

…会えてうれしいぜ

…こんばんはー！

「皆さんいつもの様に元気ですね。さて、今回はお嬢様に完全初見で音楽ゲームをやって貰いたいと思います」

…おお！

…でもお嬢様なら平気そう

…性能高すぎるからな

「いつもは私が先にプレイしているので完全所見という訳では無かったのですが…今回は音楽ゲームである事は話していますが何をやるかは教えていませんし、最初からお嬢様にプレイして頂きます」

…ほう…お嬢様の初めてか…

…お前消されるぞ

…今まで一回もやった事いの？

「お嬢様に聞いた所、他のジャンルは少し手を出していたそうです
が、音楽系はやっていないそうです」

…へえー

：一番やっってるのは何なのかな？

「一番多くプレイしているのはFPSだそうですよ」
風香は流れるコメントの質問に答えて行く。

：何か凄そう

：でも不意打ちとかは流石に無理だろね

：知らない間に一緒にやってたかも知れないのかあ……

「プレイしている理由ですが、状況によっては負ける可能性があつて面白いから、だそうです」

：敗北を知りたいと……？

：対等に戦えるゲームがやりたかったのか

：勝ってばかりじゃつまらないって事かね？

「では進めて行きますでしょうか……今日お嬢様にプレイして頂くゲームはこちら、『ソングラッシュ』です！」

：お、良いね！

：キャラが可愛くて良曲が多いから好き！

「配信でプレイしようと思い、買ってからプレイしていなかったのですが……取っておいて良かったです」

そう話す風香を横目に私はプレイを開始する。

「まずはチュートリアルですね」

風香の言葉を聞きながら、チュートリアルをプレイして一通り基本操作を覚えて行く。

少女のキャラクターをキーボードを使って操作し、音楽に合わせて流れて来る敵を殴り殺せば良い様だ。

ジャンプ、長押し、同時押し、連打、一通り操作方法を実践すると

チュートリアルが終わり、曲を選ぶ画面に変わる。

「ではお嬢様、お好きな曲をどうぞ」

：さて、お嬢様の最初の一曲は何かな

：チュートリアルから感じるお嬢様の強さ

：結構曲によって難易度に差があるけど……お嬢様なら平気か

曲はタブで分けられ、選択する為に曲を表示すると、曲の一部が流れてどのような曲か分かる様になっていた。

取り敢えず最初はどれでも良いな。

そう思い適当な曲を選ぶ。

：ブレインマジック来た！

：結構難しい方だけど難易度が凡人なら平気かな？

：達人はクソムズイよなこれ

普通を選ぶと早速曲が始まる、曲としては速い方だろうか？

リズムに合わせて流れてくる敵を次々と殴り殺して行き、終了した。

結果はS、内訳を見るとフルコンボで全てパーフェクトなので、これが最高なのだろう。

：知ってた（諦め）

：初見（フルコンボ、オールパーフェクト）

：初見じゃねえだろこれw

：白狼のアーカイブのパート1を見てくると良いよ、きつと納得するから

「……お見事ですお嬢様」

凧は冷静にそう言っているように見えるが、内心ではそれなりに動揺している様だ。

次に進めると、画面に「玄人が解放されました」と表示された。

「玄人か、難易度が上がる訳だな」

「はい。凡人を一定以上の成績でクリアする事で玄人が、玄人を一定以上の成績でクリアする事で達人が解放されます。基本的には徐々に難易度が上がりますが、曲によっては大きく難易度が変わる事もありますよ」

私の呟きに、風香が説明をしてくれる。

「なるほど、説明ありがとう」

：お礼言えて偉い

：お嬢初めてだし、視聴者にもこのゲーム知らない人居るだろうか
ら説明はした方が良いよね

「達人の難易度を確認してみる」

私はそう風香に告げると、達人を出すため玄人を開始した。

：達人やるのかw w

：でもきつとお嬢なら……

：知ってた（素振り）

玄人も同様にフルコンボ、オールパーフェクトで終了。

すぐに達人を開始したが、敵と障害物が更に増えただけで特に変わった事は無く、そのままクリアした。

結果はS。

他の難易度と同じくフルコンボ、オールパーフェクトだ。

：知ってた（本番）

：すげえ……ブレインマジックの達人はこのゲームの中でもかなり
難しい方なのに

：これ白狼見てない視聴者は初見だって信じないと思うぞ？なぎ
ちゃん

「証明する事は難しいと思いますが……お嬢様は間違い無く初見です。お嬢様がわざわざそのような嘘をつく理由はありませんし、そのような方でも無いですから」

ね
：確かに、初見って言ってこのプレイしたら疑われるって分かるよ

：そんな嘘つくんなら普通は初見っぽくやるもんな、少なくとも
スーパープレイはしない

：うん……筋は通ってるように感じるけど……凄すぎない？

：お嬢様が本物の完璧超人だと知った自称完璧メイド

「くっ……お嬢様が完璧なのは否定出来ません……」

風香はそう言うが、真に完璧な者など恐らく存在しないと思う。
探せば見つかるのだろうか。

：草

：メイドはお嬢様に弱かった

：仕える主だし当然なんだよなあ……

風香と視聴者のやり取りを横目に、私は次の曲を探す。

何か気になる曲は無いかと探していると「ヴァイオレンス」があった。

表示した事で私の歌声が流れ始める。

「これはクレリアのヴァイオレンスですね、有名ですし説明は不要でしょう。この様に、このゲームは過去の人気曲も数多く収録されていますが、その殆どは追加コンテンツです。勿論、私は今回配信するにあたって全て購入しています」

無関係な様に私の曲について語る風香。

：俺もこの曲好き

：伝説のアイドルだ！今でも人気あるから知ってる！

：本人の映像見た事あるけどビビったわ、凄く可愛いし綺麗だよな

：それな、生まれて初めて一目ぼれしたわ

：彼女の歌ならイモータルプリンセスも良いぞ！

：あれも良いよな今でも古さを感じないし。今のアーティストの曲も好きだけどやっぱり彼女の曲が一番好き

：ランキングとかだと殿堂入りとして出てるよな。後、音楽の歴史の話にも時々出て来る

：殿堂入りってああしないと今でも一位が彼女だからなの？

：期間を絞れば大丈夫なんじゃないかな？全体だと断トツで彼女だね。誰も記録抜いて無いから

：来年教科書に載るらしいね、授業でやるかは知らんけど

：……ん？

教科書に載る？

「風、彼女は教科書に載るのか？」

私は自分の曲をプレイしながら風香に尋ねる。

「……その様ですな」

どうやら彼女も知らなかった様だ。

：お嬢が興味を示した

：お嬢様もクレリアのファンなの？

：なるほど、お嬢が何となくクレリアっぽい言動なのはそういう事か

：音楽の教科書と歴史だったかな。世界に大きな影響を与えたって事で決まったのかなんとか

：そういや、お嬢って声がクレリアに結構似てる？お嬢様って部分も同じだし

：向こうは天下の月下グループだけだな

：確かに声似てる……って言うかクレリアが普通に話してる声を良

く知らないんだけど？素晴らしい歌声しか聞いた事無いわ

・教科書に載るってどんな気持ちなんだろうな……本人生きてるよね？

・死んだって話は聞いた事無いから生きてるとは思うけど、引退前も引退してから公式の場以外で一度も目撃報告が無いってウィクペディアに書いてあったよ

……確かにそういう報告見た事無いな

クレリアの話題でコメント欄の流れが速くなる。

私に何の報告も無く決まっているが、プロダクション側にはアイドルとしての私を引退後20年間は好きに使って良いと伝えてある。

勿論、行き過ぎれば娘が止めるが。

確か私が引退したのは……2020年だった筈。

つまり後三年程はフラワープロダクションは自由に私の姿や各種音声、映像などアイドルクレリア関連の物を自由に使える訳だな。

「彼女は人類の間でどう扱われようと全く気にしていないだろうな」

私がそう言うと、風香が軽く苦笑いを浮かべながらこちらを見た。

・あー……確かにそんな感じかもね

・お嬢もファンだったか

・一度でも目にしたら女の子は大抵憧れるでしょ、

・魔法少女になるとは思ってたなかった

・今の子は主人公のモデルが実在したアイドルだと知っているんだろうか

・似せてデザインされたアニメキャラよりも、本人の方が可愛いんだよな……

・二次元の美少女が現実には負けた初めての事例だって騒いでたな

・なお実年齢は……

・彼女は永遠の少女なんだよ！

・正直、見た目が若ければ実年齢なんてどうでもいい

初めて聞く情報だが特に興味は湧かない。

歌以外の方へも進んでいる様だが、プロダクション側が色々と動いているのだろう。

「お嬢様、ゲームの方は順調の様ですね」

そんな事を考えていると、風香がゲーム画面を見て言う。

私はこのやり取りの間もゲームをプレイし続けているが、この程度でミスなどしない。

それから私はプレイを続け、10曲全てフルコンボ、オールパーフェクトを出した後配信を終了した。

私が配信に参加するようになってから約二か月が過ぎた。あれから天津風のチャンネルの登録者数は10万人を越え、それに知名度が上がった。

現在、私は風香の部屋で配信を見ている。

「こんばんは！完璧メイドの天津 風です！」

…こんなぎー！

…こんなぎー

「まずは雑談をしましょうか」

いつもの様に風香は雑談をしていたが、その時収益化についての話が出た。

…なぎちゃんのチャンネルも人が増えたけど、収益化は出来ないの？スパ茶投げられんぞー

…そう言えば……条件知らんけどどうなんだろう？

この事に関して、私は風香から事前に話を聞いている。

「話の途中でしたが、収益化の質問が来たので答えておきますね。収益化の条件を満たしても、このチャンネルは収益化はしません」

…しないのか

…何でしないの？

「この配信はあくまでも趣味ですからね」

…趣味を仕事にすると……ってやつかな？

…副収入にはなりそうだけど

「私はお嬢様のメイドですから……それ以外を職業にする気はありません」

：なんだろう……なぎちゃんが本当に優秀なメイドに見える

：お嬢様に忠誠を誓うメイド……良いね！

「という訳で、このチャンネルは収益化はしませんので、お金は他の方に使って下さい」

：お前に使いたかったんだよ！

：まあ、本人次第だから俺達が何か言う事じゃないな……残念だけど

「収入に関しても私は満足していますから」

：へえ、流石に名家？のメイドとなると給料良いんだ

：流石に年収は言えないよな？

「恐らく問題は無いと思いますが……」

風香が私を見てくる。

「構わないぞ」

：お嬢の許可が出た！

：メイドの配信を見守るお嬢様

：お嬢様が良いと言えば良いんだ！

：正直な話、年収言った所で特定なんて無理だしな

：メイド喫茶以外のメイドの一般的な給料を知らないからなあ……

：家政婦で平均年収240から300万、コンシェルジュとかは平

均年収400万くらいか？

：良く知ってるな

・実力によつては時給数万とかもあるらしいぞ？
・すげえ……

・実力があればの話しだろ？普通はさっきのコメント位の給料だろうな

コメントではメイドの給料の話題が流れている。

「念の為、少しぼかした表現をしましょうか」

「その方が良いと思うのならそうすると良い。許可はした、どうするかはお前に任せる」

私は彼女に話し方を任せた。

・ワクワク……

・果たしておいくら万円なのか……

「このお屋敷で働いているメイドの平均年収は知らないのですが、去年の私の年収を少し濁して言う事にします」

・はよ！

・なんで俺達はこんなになぎちゃんさんの年収を気にしているのか
・何となく気になるじゃないか

「私の去年の年収は約7000万円ですね」

ふむ……個人差はあるが、大体はその程度だろう。

………は？

………え？

・結局ネタじゃないか！

・まあ、正直に答える訳無いかw

・もうちよつと現実的な金額にしないとバレバレだぞ！

「これは……困りましたね。一般的な金額と差があり過ぎて信じて

貰えません……」

風香は言葉通り、困った様な表情をしている。

「視聴者達、風は冗談を言った訳では無い。私の屋敷のメイド達の平均年収はその程度だ」

私がそう補足する。

…本気で言ってる？

…マジかよお嬢……

…お嬢はくだらない嘘つかないだろうし……え？じゃあマジで年収7000万なの!?

次々と驚きのコメントが流れて行く。

「彼女が優秀だという事が分かったか？」

…本当なのか……？

…そら収益化なんていらんよな

…どれだけ優秀なんだよ……

…メイドにそれだけの額を出すって………どれだけ優秀………そもそもそこまで優秀じゃなくても良いのでは………？

「私としては適切だと思っている」

この金額の主な部分は働きでは無く精神に影響を与えている事への補償だが。

彼女達は私達が人を越えた寿命を生きても気にする事無く対応し、引退後も違和感を抱く事は無く、他言しようとするれば意識をそらされる。

更に、多くの事に通常通り違和感や疑問を抱く事は出来ても、確信を得るには至らない。

以前、風香が他のメイドを配信に誘った時にメイド達が失言を恐れ話を断ったと言っていたが、そもそも彼女達は致命的な失言が出来ないのだ。

現在の配信でも風香は私に許可を求めているが、実際には全く意味が無い。

例えば私が「自由に話せ」と許可しても、彼女達にかけられた制限が解除されない限り、私達に深く関係する事は話せないからだ。

この魔法が彼女達に大きな害を及ぼす事は恐らく無いだろうが、それでも金銭面で優遇する事になっている。

確か……以前は現在とは違う方法でメイドを雇っていて、給料も今より低くしていた、と聞いた覚えがある。

だがその当時から一部の業界内でこの屋敷のメイドは羨望の的であつたらしい。

現在の方法については詳しく聞いていないが、各地に作られた養成所が関係している事は知っている。

他国の家にも時々滞在しているが、教育は行き届いていたので問題は無さそうだ。

当然他国のメイドも全員魔法処理されている為、祖母の代が世話していた「お嬢様」が孫の代である自分の目の前にやって来たとしても違和感を感じる事は無い。

私がそんな事を考えている間も、風香は話を続けている。

「さて……どうですか……ここまで明かせば、私が完璧メイドである事を信じて貰えると思えますが……」

：お嬢に完璧は否定されてるのに頑なに言い続ける w

：凄いの分かった！

：本当ならな w

全て設定だと思っている者も多い様だが、それでも構わない。

何を言っても「配信上の設定」だと受け取られるのなら、こちらとしても色々と都合が良いからな。

「お嬢様、このまま次に行くゲームを決めましようか」

風香がそう言っ私を見る。

「普段は配信が終わってから話をしているだろう、わざわざ配信中

に行うのか?」

「視聴者達の意見も聞いてみようかと思いましたが」

「なるほどな、分かった」

・俺達が決めて良いのか!?

・料理配信お願いします

・またホラーゲームやろうぜ

・他の個人勢とコラボとかはどう?

コメント欄には次々と要望が流れている。

「ふむふむ……皆さん色々と提案してくれていますが、まず料理配信は駄目ですね。こちらの実際の映像を見せる訳にはいきませんで」

・まあそうだな

・手元だけ映せば行けそうじゃない?

・うっかり何かが映ったら不味いだろ? リスクがある事はやめた方が良いよ

「後、ホラーゲームはしばらくやりません……私が怖いだけです」

・草

・お嬢様のメンタルが鋼を通り越してダイヤモンドだからな

・なぎちゃん怖がって手が止まったゲームをお嬢様が淡々と進める配信になったよね

「他の個人勢の方とのコラボも難しいですね、何処から情報が洩れるか分かりませんので」

・相手がね……

：まあ怖いよね

：裏での事をうっかり話されたら大変だしな

私達が相手に手を加えれば問題は無いのだが、今の所そこまでの
気は無いからな。

「今の所はお嬢様と二人でゲームをやって行く事になりますね」
そう言いながら凧はコメントを見ている。

：オンライン対戦は駄目なん？

：配信専用のアカ作れば問題無いと思う

：お嬢様のソングラツシユ高難度制覇プレイ見てみたいな

：それいいな、霸王の達人とか見てみたい

「ソングラツシユはお嬢様が引き受けて下さればすぐに出来ます
ね」

霸王……聞き覚えがあるな。

作曲者の名前は何という名だったか……。

「少し一人で続けていてくれ」

私が小さくそう言うと、彼女は頷いた。

『カミラ、今良いか？』

『どうしたの？』

カミラに念話すると、すぐに返事が返って来た。

『霸王という曲を覚えているか？』

『覚えているわよ。「無貌の少女」の盗作曲よね？』

『その曲の作曲者の名前を覚えているか？』

『ちよつと待ってね……』

僅かな沈黙の後、答えが返って来る。

『霸王の作曲者は「アロイ・メイユ」という人間らしいわ』

……聞いても思い出せないな。

『分かった、ありがとう』

『いえ、私は思い出せなかったわ。侍女の一人が覚えていたのよ』

『今度月に行った時に直接礼を言おう』

『喜ぶと思うわ』

その言葉を聞き、念話を切る。

その間、風香は視聴者と次のゲームについて話していた。

そこに私は声をかける。

「風……少し前のコメントで言われていた霸王は、アロイ・メイユが作曲した霸王の事か？」

そういわれた彼女は少し考え、口を開く。

「恐らく違うと思います。コメントで言われていた霸王は作者不明で、作者の名は無名とされていますので」

作者不明？

名前を憶えている娘が居るのだから、当時は名前を出していた筈だ。

後に名前を隠したのだろうか？

いや、単純に同名の別の曲というだけかも知れないな。

「お嬢様、気になるのですしたらやってみてはいかがでしょうか？」
考えていると、風香が私に声をかける。

「そうだな、その方が早い」

「準備はしていたので、すぐに出来ますよ」

：おお！突発ゲーム配信だ！

：お嬢の霸王が見れるぜ

：ソングラッシュ屈指の難易度を誇る霸王にお嬢が挑む……！

風香は慣れた様子で配信の準備を整え始めた。

風香は僅かな時間で配信の準備を整え、ソングラッシュを起動させた。

「霸王は『伝統』タブにあると思います」

彼女の言う通り伝統タブを選び、曲を切り替えていくと霸王があった。

……私の知っている霸王だな。

選択前に流れる曲を聞いた時点で分かった。

少しアレンジされているような気もするが、聞き覚えがある。

「お嬢様、プレイされないのですか？」

すぐに選ばない私に風香が声をかけて来る。

「始めよう」

彼女の言葉に答え、私はプレイを始めた。

私は初見で全難易度をフルコンボ、オールパーフェクトでクリアした。

…すげえー！

…ん……？これってもしかして全国で初めてこの曲をフルコンボ、オールパーフェクトでクリアしたんじゃない？

…今までフルコンボだけは出来てもフルコンボでオールパーフェクトは居なかったよな!?

…お嬢が世界初のフルコンオールパーフェクト達成者じゃん！

コメントには称賛と驚きが流れている。

それを目にしながら、私は曲の事を考えていた。

何故作曲者の名前が残されていないのかは分からない。

自ら望んだのか……それとも何かがあったのか。

会いに行った事は覚えているが、名前と顔は覚えていない相手の事を僅かな時間だけ考えた私は、すぐに興味を失いコメントへと目を向ける。

「このままお嬢様がプレイすると全ての曲の一位が私のアカウントになってしまいますね……」

彼女は少し困った様に言う。

「風の問題が起きるようなら新しくアカウントを作るが……どうする？」

その様子を見た私は彼女に尋ねた。

すると、彼女は少し考えてから言う。

「いえ……今のままなら特に問題はありません。しかし、お嬢様が個人的に配信を続けるのでしたら配信専用のアカウントは必要になると思います」

その答えを聞いて私は考える。

今の所、こうして配信をする事は悪く無いと感じている。

感じているが……個人的に続けるかと問われれば何とも言えない。

しばらくはこのままで良いか。

「そういう事ならば今の所は作る気は無い。ただ、風が必要だと感じた時は言つて欲しい」

その時は大人しく作ろう。

「かしこまりました」

…あの……お嬢？世界初の記録は……

…全く触れてなくて草生える

…このお嬢……強い……！

…俺らとお嬢様の温度差が酷いw

…マジで凄い記録なんだけど……

…世界初の記録より一人のメイドへの迷惑を優先するとはお嬢様の鏡だな！

…ゲームはゲームでしかないけど、メイドはリアルでこれからもお

嬢様を支える大切な存在だし、比喩物にならんだろ

「お前もやるか?」

私は彼女に聞く。

「では私もプレイさせて頂きます」

その後、交互にゲームをプレイし、配信終了時間を迎えた。

娘達、友人達と過ごし、配信にも顔を出す日々を過ごしていたある日。

「ん?……メールですか」

いつもの様に配信の準備をしている風香から呟きが聞こえた。

準備を一時中断しメールを見ていた風香だが、席を離れ私の所にやって来た。

「お嬢様、ブイライブから私とお嬢様に所属の打診が来ています」

「ブイライブ……以前風香からバーチャルニューチューバーの歴史を聞いた際に名前だけは出ていた覚えがあるな」

「もう少し詳しくお話しますと……ブイライブは日本の大手ブイチューバー事務所で、アバターにアクターの性格や外見の一部を反映させる事があるそうです」

私の言葉を聞いた風香が説明してくれる。

「お前は どうする?」

「私はお断りします」

風香は考える事無く即答した。

「そうか」

「お嬢様はどういたしますか?」

「私はやってみようと思う」

「かしこまりました。では私は辞退、お嬢様は受けるという旨を返信しておきます」

始めから嫌では無かったし、風香との配信も悪くは無かった。

誘いが来たのなら乗ってみよう。

私がアイドルであった事がバレるかも知れないが、恐らく大事にはならないだろう。

風香との配信が終了した後、私は月の談話室に移動してバーチャルニューチューバーについて考えていた。

私はニューチューブの動画を見ていた時、バーチャルニューチューバーと視聴者の関係はアイドルとファンの関係に近いと考えていたのだが……風香の配信に参加した事でその考えを改める事になった。アイドルとファンの関係、その事自体は恐らく間違っていないと思うのだが、雰囲気が違う様な気がする。

画面越しでは向けられている感情は分からないので断言は出来ないが、自宅で友人がプレイしているゲームを会話しながら見ている様な、そんな雰囲気に近い。

……少し違うか？

上手い例えが見つからないが、何となくその様な雰囲気を感じた。

「お母様、いつデビューするの？」

色々と考えていると、カミラがやって来た。

カミラには既にバーチャルニューチューバーとしてデビューするかも知れないと話してある。

「現時点ではデビューするかも知れない、という所だな」

「そうなの？」

「ああ、私と向こうの意見が合わなければこの話は消える事になる筈だ」

「確実に採用されると思うわよ？顔合わせでは認識阻害を使わないのよね？」

「これから世話になるかも知れないからな、偽らずに向かうつもりだ」

「人類最高とまで言われた元アイドルが来たら拒まないと思うけど

……」

彼女はそう言つて頬杖をついた。

「私が元アイドルである事に気がつくと思うか？」

そう言つと、カミラは呆れたような表情を浮かべた。

「間違い無く気が付くわ」

「そうか」

「そうよ」

そう答えた後、カミラは近くに居た侍女に飲み物を頼んでいる。

「しかし、元アイドルという事が確実に採用される根拠になるのか？」

「なるわよ。あれだけの人気があつた訳だし」

「私は関係者以外に自分から公開する気は無いぞ？」

アイドルをしていた事を知らなければ関係者の注目など浴びないだろうし、そもそもバレた所で大した話題にはならないだろう。

「それ以外にも、現在の人類社会特有の理由があるのよね」

「何だ？」

私はカミラに問う。

「ブイライブは月下グループの融資を受けているから」

「……なるほどな」

私の事を知っているのなら、私が月下グループの令嬢だということも知っているだろう。

「その辺りの関係で、ブイライブはお母様相手に強く出られないと思うわ」

「そういつた事を利用する気は無い」

場合によっては手段を選ばないが、今回はそんな事をするつもりは無い。

「向こうはそうは行かないのよ、今ならお母様も何となく分かるでしょう？」

「そうだな」

融資を受けている事もだが、月下グループとブイライブでは会社の規模が違い過ぎる。

月下がその気になればブイライブは簡単に潰されてしまうだろう。

「私が提示する条件を飲まない場合、契約する気は無いが……念の為、話が無くなったとしてもブイライブに影響が無い事は強調しておこう」

「んー……お母様がそういった口約束でも反故にしない事を知っていればそれなりに安心すると思うけれど、向こうはそんな事まで知らないだろうし……気休めにしかならないと思うわよ?」

少し考えたカミラは、私にそう言葉を返した。

ブイライブとの交渉時に認識障害を使用しないのは私の気分的な問題が最も大きい、それだけが理由ではない。

素性を隠す事が多いバーチャルニューチューバーの事務所であれば、個人情報の扱い方を心得ていると思ったからだ。

「どうなるかは行ってみれば分かるな」

「まあ、どうなってもお母様なら楽しむんでしょうね」

そう言って微笑むカミラ。

「お前達もああいった動画を見ているのか?」

ふと、思った事を聞いてみた。

「私達も時間がある時にお母様の配信は見てたわよ」

カミラも見ていた様だ。

そして交渉当日。

相手はアイドルのクレリアを知っていたのだが、私が認識障害を解除し本人だと気が付いた途端、驚喜した。

その声を聞きつけてやって来た社員がまた私に気がつき……という事をしばらく繰り返し、かなり社員が増えた所で話が進んだ。

誰かが連絡しているのか、更に増える社員達に囲まれたまま話を聞いた所、この会社に在籍している社員は私がアイドルとして活動していた時期に10代後半から30代前半だった者が多いらしい。

更に、その殆どがアイドルクレリアの大ファンだという。

その結果、交渉は交渉と言えない様な状況に変化して行った。

私は「ブイライブ側は配信内容に関して提案はしても強制はしない」という条件を付けたのだが「クレリアさんに強制などあり得ません」と即座に回答された。

それ所か、「自由に活動して下さい!」、「もう会えないと思っていたクレリアさんが所属するなんて夢みたいです!」、「サイン下さい!」などと騒がれ、イベントの様な状態になっていたな。

最終的に社長が現れた事で騒ぎは収まり話はまとまったのだが、ブイライブの社長も私の大ファンだった様で「貴女ならバーチャルニユウチューバーとしても間違い無く成功するでしょう」と言われた後に「機会があれば私や社員達と写真撮影をして頂きたい」と頼まれた。

家に帰り、ブイライブとの交渉で起きた事を娘達に話すと「お母さんの人気は凄い」と言っていたが、あの会社に特別ファンが多かっただけだと思う。

少し騒がれたが私の要求は全面的に受け入れられ、歓迎された。

こうして私は正式にブイライブに所属するバーチャルニユウチューバーとなった。

正式にバーチャルニューチューバーとしてデビューが決まった私だが、決めなくてはならない事があった。

配信時に私の分身となるキャラクターの外見と、その設定が必要だと言われたのだが……「演じる」事が出来ない私にとってこれは難しい問題だった。

その後、自分だけではどうにもならないと判断した私は、娘達に相談する事を決める。

月の談話室に時間の空いている娘達を集めて相談し、事前にブイライブから「キャラクターには演じる本人の特徴を一つは入れて欲しい」と言われている事を伝えるとすぐに方針は決まった。

それは「出来るだけ私に似せ、ゴスロリ服を着せる」という物だった。

実際に着るのであれば色々口を挟んだが、着るのはキャラクターなので私は特に何も言わずにそのまま決定とした。

残りは設定だが、「配信中は設定に沿った言動や対応をする事もある」と聞いていた私は、設定を決める前にその旨を娘達に説明する。

そして話し合った結果、娘達が一番適切だと判断したのは「本来の経歴をほぼそのまま設定として使用する」事だった。

「これが一番いいと思うわ」

カミラがそう言うのと、他の娘達も頷く。

「ほぼそのままとは具体的にはどういう事だ？」

そう尋ねると彼女は考える様子を見せ、話し始める。

「そうね……例えば……『人類が生まれる前から地球に存在し世界を見続けて来た超越者。人類とそれなりの時間を過ごして居たので感覚はある程度は人類に近い。時々自分を判断基準にする事があり、人類には理解出来ない事を言う』……とか、どうかしら」

それを聞いて、他の娘達が「おおー」と声を上げる。

「私はお前達から見るとこのような感じなのか？」

「結構合っているとと思うわよ？ 私達にも理解出来ない事もあるし、現在の人類が理解するのはほぼ不可能だと思うわ」

なるほど。

「それは魂の扱い方の事か？」

「他にもあるけれど、そうね」

確かに皆、良く分からないと言っていたな。

「まだお前達には難しいだろうな……いや、私の説明が悪いのか」

「そんな事は無いと思うわよ」

カミラはそう言うが、相手に存在しない感覚を言葉で説明するのは難しい。

……知識だけを送る事も出来るが、それだけでは理解は出来ても実行する事は出来ないし、何よりも危険を伴う。

いつか共感が可能か試してみるのも良いかも知れない。

ただし、始めの内は別の生物で試しておいた方が良さだろうな。

魂を扱う感覚を共有した場合、その相手がどうなるかが分からない。

狂う、自我が消える、といった問題が起きる可能性は十分にある。

それ以外にも突然体が爆散するかも知れないし、魂が消滅……は流石に無いと思うが、問題無く済む保証が無い。

もし行おうとしても、まずは安全性の確認からだな。

「お母様、また何か考えてるわね？」

カミラのその言葉で私は考えを中断する。

「上手く教える方法は無いかと思っただ」

「それはまた後にしたら？ まずは決める事を決めましょう」

「そうだな、話を戻そう。カミラが考えた設定にしておけば、確かに何を言っても設定上の言動に出来そうだ」

私は話を設定の事へと戻す。

「考えたというか、ほとんど事実なんだけど」

「そうですね」

「カミラお姉様の言う通りだと思います」

カミラの言葉に娘達から次々と肯定の意見が出る。

しかし、「ほとんど」という事は何処かは違うという事だ。

「捏造があるのか？」

私がそう問いかけると、彼女が答える。

「お母様は自分を超越者だなんて思っていないでしょ？本当は神でも良かったのだけど、お母様は嫌うと思つて別の言い方にしたのよ」

「なるほど、そういう事か。確かにそんな事は思っていないし、神は恐らく存在しないと考えているからな」

私が神だと感じる程の存在に実際に会う事があれば考えも変わるかも知れないが、今の所会つた事も感じた事も無い。

「超越者も神と同じような物らしいけど、神よりはいいでしょう？

……それにこの設定を加えておけば、何を言つても『超越者だから』で済むかも知れないわ」

微笑みながらそう話すカメラ。

「上手く行くかは分からないが、確かに無いよりは良いかも知れないな」

こうして配信に使用される分身の外見の方針と設定が決定し、私はその日の内に決定した内容をブイライブへ伝えた。

私は現在、風香と配信前の会話をしている。

「お嬢様のデビューは近そうですね」

「いや、もう少しかかる。設定はこちらが考えた物をそのまま使つて良いと言われたが、私に似せたアバターが出来上がるまで時間が必要らしい」

「なるほど……それはすぐには無理ですね」

「後は、今の内に色々と知識を付けて欲しいと言われたな」

「配信の方法などですか？」

「そうだ。とは言つてもあまり複雑では無いようだが」

少し前に支給されたスマートフォンに専用のアプリが入っていて、アプリ対応のカメラとそのスマートフォンをPCに接続するだけで

ほぼ準備は完了らしいからな。

「事務所に所属するとやはり違いますね」

私がアプリの事を伝えたと、風香は感心したように言って紅茶を飲んだ。

「これからは、また私一人の配信になるのですか……」

紅茶を見ながらそう言った彼女は少し寂しそうだったが、どうしてそう思ったのだろうか。

「もう私と配信はしないのか？」

「お嬢様はブイライブの所属になりますし、流石に……」

「私は好きなようにして良いと言われている。こちらでアバターを使用する事は出来ないと思うが、出る事は可能だ」

「本当ですか!?!よくブイライブが……いえ、お嬢様は伝説と言われているアイドルですし……本来許されないような事でも許されそうですね」

風香は声を上げた後、そう呟いて一人で納得している。

「社長を含め、ブイライブの社員の大半が私のファンだった」

私がそう言うと、風香は「流石です」と言って微笑みを浮かべた。

「こんばんは！完璧メイドの天津 凧です！」

配信が始まり、凧となった風香がいつもの挨拶を行う。

「こんばんはー」

「……こんなぎー！」

「今回はゲームをやる予定なんですけど、その前にご報告があります」

「……おん？」

「……どした？」

「先日、私とお嬢様にブイライブから所属しないかとオファーが来
ました」

：マジ!?

：大手じゃん!

：個人勢からブイライブ所属になるの？

コメント欄の速度が一気に加速する。

「風はメイドが生涯のお仕事ですのでお断りしましたが、お嬢様が
ブイライブに所属する事になりました」

彼女がそう報告するが、ブイライブからは話して構わないと言われ
ているので何の問題も無い。

：うおおー!

：マジか!

：お嬢様のお姿が見れるようになるのか!

：ん……? そうなるとこっちはどうなるんだ?

：そう言えばそうだな

：事務所に所属したらこっちはもう無理じゃないか?

「ご心配無く。姿は見せませませんが、引き続きこちらにも出られ
るようです」

：おお!

：そういうのってやっても良いの?

：普通は自分のチャンネルの登録者を増やすっていう目的があるか
ら、出来ても誰もしないんじゃないかね?

：ああ、お嬢はそんなの気にしなそう……

：契約内容が分からないからなー

「名前は『お嬢様』でデビューしますので、その時はよろしくお願
いします」

・任せろ！

・名前はそのままなのかw

・それは名前では無いのではw

・でも俺達の中ではお嬢様Ⅱなぎちゃんのお嬢様だからな

・それなw

・うんうん

・大丈夫なの？色々とばれないように慎重だったのに良くおkした
ね

「恐らく以前程お嬢様がいらつしやる事は無いと思います……後、
情報漏洩についてはお嬢様が良いと判断したのなら問題ありません」

・まあ、流石にな

・なぎちゃんとの絡みが減るのは残念だけど、お嬢様がやりたい事
をやる方が優先なんだろう？

・ブイライブならその辺りも上手くやってくれそうだけど、何より
本人が良いと言ってるんならいいんじゃないんちゃう？

「そうですね、お嬢様の意思が最優先です」

・そう言い切れるなぎちゃんが凄いわ

・これって洗脳……

・言うな！消されるぞ!?

「誤解されては困りますので言っておきますが、私達には拒否する
権利がありますし、今まで無茶な事を命じられた事ありませんよ」
人間のメイドに無理な事は娘達が行ってくれるからな、彼女達に頼
む機会は無い。

：聞いてると凄いホワイトに感じる

：休日とかあるの？

：休み無しだったらいくら給料良くても駄目だよな

いつの間にかメイドの話になっているが、伝える事は伝えたのでこのままで良いだろう。

「休日ですか……」

風香は私が何も言わない事を確認した後、話し始める。

「私達メイドの休日は年間150日ですね、更に身内の不幸や病気などの突然の出来事にも即座に対応して頂けます」

「そう言えば、人数に余裕を持って雇っていると報告を受けた覚えがあるな。突然の欠員に対応するために多く雇用しているのか」

一般的な会社や企業ではあまりそのような事はしないそうだが、私達は気にする必要が無いからな。

：超絶ホワイトやん!?

：金に物をいわせている

：俺も女に生まれたかった……

：高い能力が無いとなれない事を忘れてるぞ

・給料が良く休日も多く、突然の出来事にも対応してくれる上に、仕えるお嬢様は最高とか……

：羨ましいよなあ！

：私も目指したいのですが、どうすればなれますか？

驚くコメントや羨むコメントに混じり、自分も目指したいというコメントも多く確認出来るな。

「このお屋敷のメイドになる方法は二つあります」

：後輩に手を差し伸べる先輩メイド

：あんまり普通の方法じゃ無さそう

：そんな求人見た事無いしな

「一つは勧誘を受ける事、もう一つは三年以上お屋敷にいるメイドから推薦される事です」

：うはw

：キツツイw

：自分からアピールしても無駄なのか

：選ばれないといけないのかあ……

：推薦は知り合いじゃないと難しくないか？

「その辺りは私にも良く分かりませんね。『誰かから推薦された』という話は聞かないので、恐らく勧誘がほとんどだと思いますが……」
風香がそう言いながら私を見る。

「風が視線で尋ねているので答えるが、私もその辺りは把握していない」

「そのようなつもりは無かったです、申し訳ありません……お嬢様」

：お嬢様に視線で圧をかけるメイド

：答えてくれるお嬢は優しいなあ

：まあお嬢様にそんな事わざわざ知らせないよな、誰かが管理してるだろうし

「気にしなくて良い」

私は謝る風香に告げてから話し始める。

「回答の続きだが、私自身が興味を持っていないからな、聞いた事も無ければ報告された事も無い」

：正直な所、お嬢に話しても意味無さそうだもんな

：わざわざ伝える事じゃないよなあ……

「あと一つ、コメントの中に自分からアピールしても無駄だという物があったが、全くの無駄とは言えないかもしれない」

・そうなの？

・何となく分かったかも

「目立つ事で勧誘している者の目を引く可能性がある。見込みがあればその時点で声がかかるかも知れない」

・なるほど

・勧誘受けた人視聴者に居る？今まで学校でそれっぽい人見た覚え無いんだけど

・見た事ない

・分かん

・どこで勧誘してるんだ？

・誰にアピールすればいいんでしょうかね……？

・なぎちゃん教えて！

「私は母がここのメイドでしたので」

・え!?

・ま、まさか……

・そうだったのか

・なぎちゃん推薦だったの？

「はい、私は母の推薦でした。ですから勧誘を受けた事が無いんです」

「念の為に言っておくが、誰であろうと見込みが無ければ採用される事は無い」

：だよね

：コネとかそんな物で採用される事は無いだろ

：信用調査みたいな事されてそう

：結局どうすれば良いのかは分からないか

「大分話がそれてしまいましたね、お嬢様の事を話していたのです
が……」

「話しておく事は最初に話していたから問題は無いだろう」

この日は結局ゲームをする事は無く、そのまま雑談で終わる事になつた。

私にメールが来たのは、寝る為にPCをシャットダウンしようとした時だった。

「ん？……仕事の依頼だわ」

そう呟いて席に座る。

これは寝る前に読んでおいた方が良いわね。

私はメールを開き内容を確認する。

仕事の内容は、ブイライブからデビューする新しいバーチャルニコウチューバーのキャラクターデザインだった。

ブイライブさんにはお世話になってるし……あと一つくらいなら仕事を入れても余裕はある。

断るといふ選択肢は無いわね。

更に読んでいくと、デザインの要望が書いてある。

なるほど……私にこの依頼が来た理由が分かったわ

そこには「服装はゴスロリ風の服で、容姿はアイドルのクレリアに可能な限り似せて欲しい」と書いてあった。

……若い頃に色々とあつて引きこもっていた時は辛かったけど「ペンだ子」という名前で仕事を始めて、それなりに人気を得られた。

その切っ掛けになったのは彼女……クレリアさんだ。

彼女を知った事で私は立ち上がり、前を向く事が出来た。

彼女の魅力を絵にしてみたい。

私にとって彼女は自分を救ってくれた恩人で、私の書くキャラクター達の原点だ。

今の私にどれだけ出来るかは分からないけど、彼女に可能な限り似せると言うのなら……やってみよう。

「あ……」

やる気に燃えていた私だが、ふとある事が思い浮かんだ。

私が全力で描いた……彼女に似せたキャラクターを、どこの誰とも知らない相手に使わせる……？

……それは、駄目だ。

この仕事がそういう物である事は分かっているけど……それでも……駄目。

人に会うのはあまり好きでは無いけど……どんな人が使うのか知りたい。

場合によっては断る事も視野に入れ無くてはいけないかも……。

私はしばらく考えた後、ブイライブさんに「可能であれば、演者さんに会ってから判断させて欲しい」という旨のメールを送った。

数日後、「会えるそうです、場所はブイライブ本社でお願いします。お時間はペンだ子さんが決めて下さい」という返事が来た。

ブイライブにキャラクター案と設定を送ってから数日後、再びブイライブから連絡があった。

話を聞くと、私の使用するキャラクターデザインに一番向いているイラストレーターに仕事を依頼したのだが、そのイラストレーターが「自分がデザインしたキャラクターを誰が使うのか確認してから判断したい」と言ってきたそうだ。

「私は構わないが、ブイライブとしてはどうなんだ？」

今回の事に関わる人間にはアイドルをしていた事を隠さない気で居る。

会うという事はそのイラストレーターに知られるという事だ、

「こちらとしては問題ありません。長い付き合いのあるイラストレーターさんですし、そういった事を洩らすような人物では無いので」

「そうか、では会おう」

私のアバターをデザインしてくれる……かも知れない相手だ、一度くらいは挨拶しておこう。

「分かりました。きつと大喜びするでしょうね、下手をすると気絶するかもしれません」

「どういふ事だ？」

「そのイラストレーターさん、我々以上にクレリアさんの大ファンなんですよ」

「なるほど」

それから僅か二日後、私はそのイラストレーターに会う為にブイライブ本社にやって来た。

相手は大分前に到着しているらしく、既に部屋に居るという。ブイライブの社員に先導され、視線を浴びながら社内を進む。

「演者の方がいらっしやいました、入りますよ」

やがて扉の前に辿り着くと、ブイライブの社員がそうやって扉をノックする。

すると、中から返事が聞こえた。

「中へどうぞ、お話が終わったら連絡をして下さい」

そう言われ中に入ると……黒い短髪の、線が細かい印象を受ける男が座っていた。

入って来た私を見た彼は、目を大きく見開き、口を開けて固まっている。いる。

そういえば、クレリアの大ファンだと言っていたな。

固まっている彼を横目に、私は部屋の中を歩き対面のソファに座る。

「始めまして、私が演者を務めるクレリアだ」

まだ同じ姿で固まっている彼に声をかけるが……返事が無い。

そのまましばらく反応を待っていると、彼は深呼吸をしてから口を開いた。

「わ……僕は豊田 優希（とよだ ゆうき）と……も、申します……『ペンだ子』という名前でイラストを描いたり、キャラクターデザインを……し、しています」

「今回は実際に演者を見て引き受けるかを判断すると聞いている」

「う……あ、あの……」

彼は混乱していてまともに話せない様だ。

私はそんな彼の姿を見ながら、違和感を感じていた。彼からは私を目にした男の多くが向けて来る感情を全く感じない。それだけなら今までにも存在したし、珍しくはあっても違和感を感じる事は無かつただろう。

問題は、彼の動きに所々一般的な女性の動きが混じっている事だ。本人は隠そうとしているし、殆どの者は気が付かないだろうが……私には違いがよく分かる。

更に言えば、彼から感じる感情は男が女を見た時の物では無く、女性が憧れの女性に会った時の物と非常によく似ていた。

私は少しだけ深く彼を探る事にする。

……探ればすぐに分かった。

予想はしていたが彼の心は女性で、恋愛対象は男性だ。

しかし、体は間違い無く男性。

つまり彼はトランスジェンダー、という事だな。

現在はある程度割り切れている様だが、それでも私に知られたくは無いらしい。

否定される事を恐れているのだろうか？

体と心の性が異なる人類に会うのは初めてでは無いし、それで付き合い方を変える気も無いのだが……私がそう考えている事など彼には分からないからな。

彼が隠したいのなら、話題にするのはやめておこう。

それから私は彼が落ち着くまで会話を続けた。

落ち着いた後の彼は、控えめながらも興奮して私から受けた影響を語る。

ある事が理由でいじめられ引きこもっていた時、私に出会ったという。

勇気を貰い、以前より前向きになれたと話している彼からは、喜び

の感情が溢れている。

しばらく会話をしていた私だが、そろそろ本来の目的を終えておこうと話を切り出した。

「優希、先に仕事の話を終わらせておこう」

「あ……」

私がそう言うと、彼は思い出したように声を上げた。

実際、私に言われるまで彼の頭からは消えていたな。

「すみません！舞い上がってしまった……」

頭を下げて謝る彼に私は声をかける。

「気にしないで良い。さて、私のアバターとなるキャラクターのデザインは引き受けて貰えるのだろうか？」

「はい！絶対にやります！やらせてください！」

前のめりになりながら叫ぶ彼。

「では、頼んだ」

「私の全力を尽くします！」

話していた時は僕と言っていた筈だが……そこまで気が回らなくなっているのだろうか。

その後ブイライブの社員に連絡し、無事に引き受けて貰った事を伝えた。

彼はこのまま残ってブイライブ側と話し合いを行い、その後すぐにキャラクターデザインに取り掛かるらしい。

その話を聞いた私はブイライブ本社を後にし、そのまま帰宅した。

その後、私の初配信は12月12日に行われる事に決定した。

二か月近くある準備期間の間に、風香から助言を貰う事にする。

更にPCを配信に適した性能が高い物へと買い替え、必要な機器も揃える。

PC周りは多少物が増えるだろうが、元々十分な広さがあるので問題は無いだろう。

準備を整えたら配信テストも行わないとな。

特に大きな出来事も無く時は過ぎ、初配信まで後10日となった1月2日。

この日、私は自宅の配信部屋でこれから使う事になるアバターを改めて確認していた。

モニター内では、黒と赤が使用されたゴスロリ服を着た、長い黒髪の少女が私の上半身の動きに連動して動いている。

本来は表情も変わるらしいが、あまり私の表情が変わらないのでアバターである彼女は無表情だ。

こういった技術も進化しているようで、以前では不可能だった口の動きや瞬きなども連動させているという。

私はこれからこのアバターを使用し、バーチャルニューチューバー「お嬢様」として活動する事になる訳だが、他にも同じ日にデビューするブイチューバーが三人居るという話を聞いている。

同期と言われる者達だな。

今日、その同期三人の情報がブイライブから送られて来る事になっている。

……来たな。

予定の時間丁度に、ブイライブからメールが送られて来た。

私はすぐにメールを開き、ブイライブから送られて来た三人の情報に目を通し始める。

一人目は、猫目 ネム（ねこめ ねむ）。

演者の本名はナタリア・チエルニシヨワ。

19歳のロシア人女性。

アバターは女性の猫獣人だ。

髪は水色の短髪でパーカーとハーフパンツを着ている。猫に近い耳と尻尾があり、髪色と同じ水色の目の瞳孔は猫そのものだ。

何となく魔法人類の獣人を思い出す姿だな。

道端で寝ている所をスカウトされたという設定になっているようだ。

後は……言語か。

ロシア語はロシア人なので当然だが、日本語も分かるらしい。

絶対に必要とは言わないが、日本を拠点にしてバーチャルニユウチューバーを行うのなら話せた方が良さだろうな。

二人目は、白亜 テラノ（はくあ てらの）。

演者の本名はベティ・オCONNELL。

20歳のアメリカ人女性。

アバターは女性の恐竜人。

髪型は金髪の……ウルフカットロング、という髪型だと思う。

……違うかもしれないな。

彼女は腰のあたりから恐竜の様な太い尻尾が生え、目は金色で瞳孔は縦に割れている。

更に、口には鋭い歯が生えている事が分かる。

服装は黒の……これはボンテージというのだったか？

私が着る事は無いだろうな。

恐竜の遺伝子を組み込まれた女性、という設定らしいが、変わる可能性もあるようだ。

他にも、肉食で野菜が嫌い、という設定も書いてある。

彼女も日本語が話せる所を見ると、ブイライブ側が日本語を話せる者を選んだのかも知れないな。

三人目は、神鳥 フジミ（かんどり ふじみ）。

演者の本名は宮内 沙織（みやうち さおり）。

19歳の日本人女性。

アバターは赤髪のポブカットで、背中に羽、腰の辺りに炎の様な尾がある。

目は鮮やかな赤色で、服装は赤を基調としたゆったりとした着物の様な物を着ている。

ある古びた神社から信仰を得る為に表に出て来た、という設定らしい。

彼女が話せるのは日本語のみだが、全員日本語が話せるので問題は無いな。

私と同じブイライブ四期生となるこの三人とは、同期という事で色々に関わる事が多くなる予定らしい。

そう考えた時、ふと現在交流を持っている友人が日本人のみである事に気がついた。

日本の環境が気に入る、この国を中心に動いていたからだろうか。今まで色々な国の人間と友人になったが、日本人は他の国と比べると友人になりやすい気がする。

そこまで考えた私は、メールに意識を戻し続きを読む。

この三人は私と同じ日に配信を行う事になっているらしい。

デビュー時間は被らないようにずらされていて、ネム、テラノ、フジミ、私の順番で配信が行われると書いてあるな。

その他にも、三人との顔合わせはある程度音声通話や配信を通して仲を深めてから行う事など、細かな連絡も書かれていた。

その後メールを全て読み終わった私は、メールを閉じてPCをシャットダウンした。

準備を整え、時は過ぎ……2037年12月12日がやって来た。
現在の時刻は12時50分。

13時から一番手である猫目ネムの配信が始まる。

私は見ておこうと考え、待機中と表示されている画面を見ている。
これは待機所というらしく、予約配信をすると配信が始まる前
こうして待てる様になるという。

そして10分後。

……配信開始時間は過ぎているのだが始まらないな。

：開始時間過ぎてるよな？

：トラブルか？

：デビューからトラブルとは大物の予感……

待機している視聴者達のコメントが流れる中、突然画面が切り替わ
る。

「ごめんなさい……寝坊しましたー！」

声は大きい、何処か眠そうな、ゆったりとした声が聞こえて来る。

「えっと……音量とか大丈夫かな？」

：お、来た

：寝坊かよw

：音量おkー

「えっと……皆さん初めまして。猫目ネムです！猫の獣人です！こ
れから皆さんと色々なゲームや企画をやって行こうと思います！」
やる気はあるようだが、少し間延びした会話速度と眠そうな声でい
まいち緊張感が出ない。

「実はマネージャーにも『多分寝坊する』と話していたんですよ
……」

：草

：公認なのか？w

「それで……マネージャーに電話で起こされて……配信後にお話だそうです……」

：マネちゃんw

：いきなり説教w

：駄目じゃねえかw

四期生には女性のマネージャーが一人ついている。

話を聞いた際に一人で四人を管理して問題は無いのかと聞いたのだが、大丈夫だと答えていた。

「では、そろそろお時間なのでこれで配信は終わりにしますー。今日はありがとうございました、近い内にゲーム配信をしようと思うので是非見に来てくださーい」

：お疲れ様

：中々良かった

寝坊で配信開始時間を過ぎたがそれ以外に特に問題は起きず、彼女の配信はほぼ予定通りに終了した。

デビュー配信は一人一時間程で、次回から自由に行う事になっている。

配信時間に遅れたが、特に悪い印象を持たれる事は無く、視聴者からの反応も悪くはなかったな。

猫目ネムの配信後、10分程経ってから二人目の配信が始まった。

「こんにちは皆さん。私は白亜テラノ、恐竜人よ」

何となくカミラの様な雰囲気を感じるな。

「音量とか問題があったらコメントで教えてね」

：竜じゃなくて恐竜なのか

：攻めた服装……イイネ！

：色っぽい

：音量問題無いよ

「私の姿で少し興奮気味のようなね。少し刺激が強かったかしら？」

：エロい

：センチティブなお姿

彼女は一時間を危なげなくこなし、視聴者の反応も上々だった。

それから10分後、三人目の配信が開始された。

「こんにちは。私は神鳥フジミと言います、幻獣人です」

明るく、大人しそうな声だ。

「音量とかコメントして頂けると嬉しいです」

：幻獣ってなんの？

：見た目からすると鳳凰？

：少し小さいかも、音量

「鳳凰では無く不死鳥ですね。フェニックスでも良いので好きな

方でどうぞ……あ、音量調整しますね」

：ああ、だから名前がフジミなのね

：なるほど、不死身か

：音量良い感じになった

彼女も特に問題無く配信を終えた、落ち着いた柔らかい彼女の言動に好感を持った視聴者は多そうだな。

最後は私の時間だな。

私の配信が始まる前の10分間に再確認を終え、時間丁度に配信を開始する。

「こんにちはは人類達、お嬢様だ」

：はい人類です

：見に来たぜお嬢！

：ブイライブ所属おめでどう！

：ん？どういう事？

：どっかで活動してた？

風香の配信で私を知っている視聴者達のコメントに、初めての視聴者達が困惑している。

「知らない者達もいるから説明しておこう。私はブイライブに所属する前、天津凧というバーチャルニューチューバーと共に配信していた」

：そうそう！

：スーパープレイ期待してるよお嬢！

：音量大丈夫っすお嬢！

「気になった者は天津風のアーカイブを見てくれ。それで大体分かるだろう」

私はコメントを確認しながら話を進める。

：新人って訳じゃないのね

：コンビからソロになったのか

「風はブイライブ所属を断ったが配信は続けているし、私が向こうに出る事もあるだろう」

：まさかの掛け持ちw

：この配信終わったら見てみる

：二窓で見してみるわ

「まず私の設定を話しておこうか」

：設定言うなw

：確かに設定だけどw

：なんか淡々としてるけど、こんな感じの子も悪くないな

「私は人類が生まれる前から地球に存在し、この星を見続けて来た超越者だ」

：いきなり濃いw

：お嬢は中二病だったのか……

：こういう設定好きだよ俺

：挨拶が人類呼びなのは一步引いて見てるからか

「人類とそれなりの時間を過ごして居たので感覚はある程度人類に近いが、時々自分を判断基準にしてしまうので人類には理解出来ない

事を言うかも知れない、その辺りは理解してくれ」

：把握した

：他の同期が獣人やら幻獣やらで設定もふんわりしてる所にこの設定の濃厚さw

：でも凄い可愛いし、声もめっちゃ良い

：同意

：確かに可愛い、惚れる

：可愛いよお嬢様ー！

：いい声だよな

：これ、親は誰だろ？

アバターの容姿は好評だ。

優希がデザインしたキャラクターは人気があると聞いていたが、間違いではなかったらしい。

「このアバターのキャラクターデザインは、ペンだ子というイラストレーターが担当した」

：やっぱりそうか

：かなり気合入ってるな

：んー？なんかクレリアに似てる気がする？

：あー！なんか見覚えあると思ってた、そうだよクレリアに似てるんだ

：未だに人気あるからなあの人

：声も似てるような気がする

：だよな、俺も感じてたわ

：でも本人の方が上だという……

：この子をもってしても美しきで敵わないって……彼女は一体何だったんだ……

：アニメとかも彼女の方が上だって認めたからな、大事件だぞ

：アニメとか漫画業界じゃ「二次元のキャラが三次元の人物に負け

た最初で最後の出来事」とか言われてるし、宇宙にはまだまだ謎があるんだよ

：宇宙かよwいきなり壮大になったなw

私はコメントには反応せず、次へと話を進める。

「では、この配信のタグを決めようと思う。ブイライブからこれだけは決めて欲しいと頼まれているからな」

タグはツイッターに使用する為に必要らしい。

：指示じゃなくて頼まれたのかw

：流石超越者つすね

：お嬢チャンネル

：そのままお嬢様チャンネルでいいんじゃない？

：超越者の戯れ、とか？

：お嬢様の生放送

：お嬢チャンネルかなあ

色々な案がコメント欄を埋めて行く。

出来るだけ分かりやすく、言いやすい名前が良いだろうな。

「タグは『お嬢チャンネル』にしよう」

：決めるのはやつ！

：迷いが無いw

：即断即決お嬢様

：うおお!?!採用された！

「では事前に募集していたマンジュウの質問に答えるか」

この「マンジュウ」は、ツイッターの匿名メッセージサービスだ。マネージャーが事前に募集し、問題の無い物を選んで用意してくれている。

：マンジユウもぐもぐ

：マンジユウを食べて行きましょう

：俺の採用されてるかな

私は最初の質問を表示する。

「初めまして。」

お嬢様はどのようなゲームや企画をやりたいと考えていますか？

また、バーチャルニューチューバーとして挑戦してみたい事などはありますか？」

「私は普段FPSをよくやるのだが、この機会にしばらく手を出していなかった他のゲームにも手を出してみようと思う」

他のブイチューバー達は質問を読んでから答える事が多いらしいが、私は黙って読んで答えを返す。

：FPSゲーマーなのか

：それ以外にも面白いゲームは一杯あるから色々やろう

：企画は配信に慣れてからかな？

「企画は私の気が向けば行う。ブイライブ側が何を言おうとやる気にならなければ行う事は無い」

：めっちゃ強気w

：これは強い……

：超越者だからな！

：まあ実際は普通にやるんだろうけどw

早くも設定が生きているな。

何を語っても設定だと捉えられて問題になる気配が無い。

「では次に行こう」

【初めまして、こんにちは。

お嬢様は色々と能力が高そうですが、具体的にはどのような事が出来るのでしょうか？

差し支えなければ教えて頂けたら嬉しいです】

何が出来るか……か。

「人類に身近な物だと魂や肉体に関する事……分かりやすく言うと死者蘇生や不老不死などを与える事が出来るな」

：そういう事では無いのでは……

：死者蘇生や不老不死は現実では身近じゃないんだよなあ……

：人間の範囲での事を聞いたらぶつ飛んだ答えが帰って来て、この質問した本人は困惑してるんだろうな

：ありがちな超越者能力だけど基礎は大事

：漫画やアニメ、ライトノベルに山ほど居そうw

：まあ基本よな

：創作では身近だけど現実では……

：無理だw

「他には……魔法は勿論、単純な物理攻撃でも地球程度ならば簡単に破壊出来るし、時間の操作や別世界への移動も可能だ」

：中学生が考えた主人公みたいw

：全部盛り最強お嬢様！

：いいぞwもつとやれw

：何でこの設定にしたんだw

：淡々と語ってるのに言ってる事はめっちゃ中二で笑うw

：無表情とか冷静なキャラは二次元では定着してるけど、現実では難しいよな

：あの伝説のアイドルは上り詰めてるんだよなあ

「現在の人類が同じ事をするのは難しいだろう。しかし、人類の今後の進化次第で可能になるかも知れないな」

：超越者ムーブ w

：凄い演技力だな、本気で言ってるみたいだに聞こえる

：無表情だから感情がよく分からんけど……可愛いから良いか

「次だ」

私はそう言って次の質問を表示する。

【お嬢様の年齢はおいくつでしようか？】

「年齢は数えていないし、気にもしていないので覚えていないが……人類が調べた地球の歴史が正しければ、数十億年は経過している事になるな」

：桁が違って草

：他の作品だと長くても万なのに億に行っちゃったかー w

：ここまでやったならそれ位やっちゃまおうぜ！

「マンジュウは次で最後にする」

：終わりか

：もうちよつと見ていたかった w

：初配信だしこんなもんでしょ

「また読む機会はあるだろう、その時まで待て」

私はそう言いながら最後のマンジュウを表示した。

【お嬢様は男ですか？女ですか？男の娘ですか？】

：お嬢様だつて言ってるだろお!?

：お嬢様（性別不詳）

：草

：何故この質問を選んだw

「私に性別は存在しない」

やろうと思えば男性、女性は勿論、両性にもなれると思うが……やる気にはならないな。

：無いのか……

：超越者が性別に縛られる訳が無いw

：本当に性別不明だったw

：不明というか、無いw

：これは何ともキャラの濃いブイチューバーが現れたな……

その後、問題無く配信は終わり、バーチャルニユウチューバー「お嬢様」は他の三人と同様にそこそこの評価を得た。

特に問題無く初配信を終えた翌日。

プレイするゲームを決める為、事前にマンジユウにお勧めのゲームを送るように募集しておいたのだが、それなりの数が送られて来た。

私はその中からプレイするゲームを決め、朝から配信を始める。

「おはよう、人類達」

：おはようございますお嬢様

：昨日の今日で早いですね

：今日は雑談？

「今日はゲームをプレイする」

：おお！

：何するの？

「プレイするのは『ダウンフォール3』だ」

マンジユウで薦める者が多かったからな。

どのようなゲームかは調べていないが、マンジユウでの情報によると広大なオープンワールドで活動するゲームで、続編も出ているらしい。

そして、このゲームの最大の特徴は自由度で、各地で起こる様々な問題を解決する方法も一つでは無いという。

能力次第では全て暴力で解決する事も、話し合いで解決する事も可能なようだ。

更に、全く関わらないという選択も出来るらしい。

：良いね！

：4も面白いよ

：自由度の高いゲームだからお嬢の判断が楽しみ

「殆どの者は知っているようだが、一応私が知っている範囲で説明しておこう。ダウンフォール3はオープンワールドで、設定された最終クエストをそれなりに自由に活動しながら達成するゲームのようだ」

：説明が雑w

：でも大体あつてるw

「詳しく知りたい者は自分で調べると良い」

：確かに調べた方が早いかも知れないけどw

：配信見れば分かるやろ？

「では始めよう」

私はそう言つてゲームの画面を出す。

画面の構成は左下にアバターを置き、その上にコメントを表示、そして残りはゲーム画面にした。

ひとまずこれで進め、見にくいようならまた考えよう。

さて……最初はキャラ設定か。

色々と選べるようだがこのままで良いな。

：何も変えずに終わっただど!?

：キャラクリで一時間はかかると思つたのに……

：躊躇無くデフォ選びおつたw

：男キャラにしたのか

：ほら、設定上はお嬢様に性別は無いから……

ゲームが始まるとまず現在人類を取り巻く環境と世界観の説明が入り、それから自由に動けるようになった。

ふむ、シエルターの様な所で生活しているのか。
その後、しばらくうろついていたが何も起きない。

：お嬢様、メニユールのクエストを追跡にするとマップとミニマップに目的地が出るよ

：メニユールから追跡するんだぞ

コメントに多くの助言が寄せられる。

それらのコメントを見た後、メニユールからクエストを追跡に切り替えた。

「教えてくれてありがとう。しかし、このゲームは随分と親切だな」
以前触れたゲームにはあまりこういった機能は無かったような気がする。

私はマップに表示された目的地を確認しながら礼を言う。

：どういたしまして

：確かに最近のゲームは親切だよな

：昔はヒント無しで探し回ったもんだけど

：あれ？お嬢って俺達と同年代？

：数十億年生きてる超越者だから知ってて当然やろ？

：あつ……そつすね！

コメントは目に入っているが好きにさせておいてクエストを始める。

最初のクエストなだけに簡単だったが、最後に主人公に手を出して来た幼馴染の女をどうするか選択があった。

：早速選択肢だ！

：慰謝料を求めるのか、許すのか、殺すのか……さあどうする？

私は即座に「殺す」を選ぶ。

：全く迷わずに殺しおったw

：まあ、相手も殺す気で攻撃して来たし……

：ちなみに、金を貰った後に殺す事も出来るし、許した後に殺す事も出来る

：貰える金も死体から取れるから、殺すなら意味は無いけどな

：意味あるよ、貰った後でも死体に金や装備がまた入ってる事があるから

なるほど。

「そのような事も出来るのか、覚えておこう」

私はそう言いながら死体から金を漁る。

このゲームでは金が重要だとコメントに書いてあったからな。

：こわっw

：慈悲は無い！

：殺せば解決するだろ？

：クエストに出て来るNPCの大半が殺されたり……しないよね？

ゲームではあるが、それでも今の所は意味も無く殺す気は無いな。

ストーリーを進めると主人公はシエルターを追放され、町を探す事になった。

その後、マップのクエスト追跡マーカーの方へ歩いていると男のNPCが駆け寄って来て親し気に話しかけて来た。

：あっ……このイベントは……

：早いな

：うざい奴来たw

話しかけて来た男が話している所に、新しく3人の男が現れる。借金の取り立てに来たらしいが、主人公に話しかけて来た男は「俺に金は無いがこいつが払う」と言い始めた。

選択肢で「関係無い」と答えると、男達は持ち物を奪おうと襲い掛かって来た。

そのまま戦闘へ入り、私は拳銃などの戦利品を得た。

：ランダムイベントなんだよなこれ

：能力高いと説得出来たり相手がビビッて引いたりするけど、初期に来ると戦闘にしかならない

：逃げる事も出来るけどね

：どっちにしてもこいつらは弱い

：お嬢様を巻き込んだ男はどうなるのか……

さて、私を利用しようとした報いを受けて貰おうか。

私は武器を構えて男に近づく。

：武器構えて……あつ

：もうあいつの未来が見えたんだけど

：結構な数のプレイヤーが同じ事してるから普通だろ

私は言い訳をする男を一度許し、金を貰った後に殺して持ち物を漁る。

すると、その中に十分に借金を返せるだけの金があった。

「金があるのに普通に借金を返済しなかったのか」

そう言うと、コメントが流れる。

：返したら金が無くなるから……

：返さなくて平気になれば全部使えるし

：身代わりを探してたんだぞ

・お嬢様が奴隷にされればいったんは引くからな

「なるほど、それで私を利用しようとした訳だ」

・そういうこと

・こいつはかなりのプレイヤーが殺してる

「当然だな。私は私を利用する者を許す気は無い」

・まあ、利用されて許す人は少ないよね

・ちなみに、許すとまた出て来て同じ事繰り返すぞ

・やった事無いから知らないけど、マジかw

・殺さないと何度でも来るから、最終的に殆どのプレイヤーが殺してるNPC

「余計な事をする前に処理出来たな、では先に進むとしよう」
私は物資を全て回収すると、目的地に向かって移動を始めた。

野生動物を処理しながら町に到着した私はクエストをこなしながらストーリーを進めたのだが、ここで問題が起きる。

町に居る実力主義者達が現在の副町長を含む多くの人質を取り、町の最重要施設である浄化槽と小型核融合炉のアクセス権を要求して来たのだ。

クエストでそれなりに面識のあった町長から解決を頼まれた私は、交渉で報酬を少し増やしてから問題解決に向けて動き出した。

・これは悩んだな

・解決も出来るけど、こつそり向こうについて一緒に乗っ取る事も出来るよ

：これって無視するかどうかなるの？
：ランダムでどっちかが勝つ

全員同じ部屋に立てこもっている事を確認した私はすぐに方針を決めた。

このゲームがどれだけ自由に行動出来るか分からないが、駄目なら駄目なりに話が進むだろう。

そう考え、窓から複数の手榴弾を投げ込んだ。

：ふあっ!?

：やりおったw

直後に爆発音が響き犯人達と人質達は全滅。

クエストクリアとなった。

「数人残る事も想定していたが、上手く行ったな」

：クリアになって草

：超越者に人の心など無い

：これで良いのかw

：人の心は無いのかって言おうとしたけど人じゃなかったわ

「人質に友人が居れば慎重に考え行動したと思うが、知らない者達だったからな」

：気持ちは分かる

：知らん相手の為に命はかけないよな

：一応、クエストで一度話してる奴もいたぞ

：俺は助けた、ゲームの中でなら命を懸けられるぜ！

「この主人公の実力では即座に鎮圧する事も不可能だっただろう。町長も解決方法は問わないと言っていたし、この方法が一番安全で早

いと思う」

そう言いながら町長に報告すると、微妙な反応が返って来た。

・町長は「助ける方法」を問わなかったただけなんじゃないかなあ……

・犯人ごと爆破するとは思ってなかったやろな

・町長の失敗は……お嬢様が人質を助けると思っていた事だ

「問題無く解決したので次のクエストに向かうか」

・ソウデスネ

……問題無い！

・問題無いと言え、という圧を感じる

次の目的に進んでいると、武装した人間達が一組の男女を捕らえている現場に通りがかった。

中々良さそうな装備だ、出来れば貰っておきたい。

こちらにはハンドガンしか無いが、隠れながら弱点である頭部だけを狙えばどうにかなるだろう。

……まさか……

・やるのか？結構強いぞ

・お嬢様が人助けをなさるとは……感激でございます。

・誰だお前w

現実や一部のゲームでは距離があればあるほど弾丸が落下する。

しかし、このゲームの弾丸はどれだけ離れていようと落ちる事無く、照準した所に着弾しているようだ。

ならば命中させる事は自体は問題無い。

問題は頭に撃ち込んでも全く体力が減らなかった時だが、その時は

後退しながら削ってみよう。

私はスニーク状態で照準を頭部に合わせ、連射する。

……いけるな。

不意打ちで五発撃ちこみ一人殺した私は、相手に発見される前に物陰へと隠れた。

：一人やった！

：おい、あの距離で全弾頭に当てたぞw

：白狼見て能力高いのは知ってたけど、やっぱすげえな

警戒している相手を隠密状態を維持したまま一人ずつ殺して行き、やがて最後の一人が死んだ。

：プロかよw

：結局警戒はされたけど見つからずに全員やったなw

私は捕らえられた男女を放置し、死体から装備を回収して主人公の装備を整える。

：人助けかと思つたら装備が欲しいだけだった!?

：そんな事だろうと思つてたよw

：このままでは先代に申し訳が……。

：なんか執事っぽい奴が湧いてるぞw

装備を整えた私が捕らえられていた男女を開放すると感謝され「お礼をしたいからいつか来て欲しい」と主人公に家の場所を教えるから去って行った。

捕らえられていた男女が立ち去った後に装備を再確認し、私は再び移動を開始した。

：要らない装備品は修理に使うか分解しようぜ
：重量が限界になる前に自宅を手に入れて整理したいね
：持ち物減らせないとスムーズに探索出来ないし、家は取った方が
良いよ

ふむ……現実ならばどうにでもなる事だが、ゲームではそうは行かないか。

所持量が限界を迎えると色々と支障が出る様だからな、やっておい
た方が良さそうだ。

「まずは家の取得を目標にするか」
そう言って取得する方法を見つけようと考えていると、コメントが
目に入る。

：次の目的地の町でクエスト受ける
：今のクエストの目的地の町の物件を管理してるNPCから受ける
クエストの報酬だよ

「なるほどな……ありがとう、着いたら受けようと思う」
これも情報収集か。

流れるコメントから情報を得た私は、次の町で自宅を手に入れるク
エストを受ける事を決めた。

：何でも聞いてー
：頼る時は頼るべきだよね
：ちゃんとお礼を言える超越者お嬢

：何か可愛いな

それから特に問題無く主人公は目的の町へ到着した。

：自宅クエは町の東の階段を上った所にあるでかい建物の中に居る
「ボウズ・ムシユ」って男から受ける

：クエ内容は下水道の安全確保だけど敵多い上にこの時点では結構
強いから回復と武器弾薬忘れずに

町についた途端に次の情報が流れて行く。

「そうか、では先にクエストを受けておこう」

そう言っただけで私はクエストを受けに行く。

私はこういつた情報の提供……所謂ネタバレを禁止していない。
自由と言ってもゲームはゲームだ。

未来では現実のようなゲームが現れるかも知れないが、現時点では
決まっている解決方法の中から選ぶだけだからな。

そのようなゲームが生まれる迄はこのままで良いと思っている。
きつと、探せばこのゲームのような世界もあるのだろうか。

そんな事を思いながら、私はクエストを受けた。

それから約10時間後。

私は、恐らくメインストーリー最後と思われる戦いを行っている。

：配信二回目でききなり長時間配信になるとは誰が予想しただろう
か……

：もうすぐ終わりそうだけどこれからバイトなので最後だけアーカイブ
で見ます

：なお、お嬢様は全く平気な模様

死んだと思われていた両親が生きている事を知った主人公は、二人が居る研究所に突入し、最奥へ。

：遂にここまで来たな

：一回の配信でここまでくると思ってた

：休みが潰れたが後悔は無い

そこに居た両親は世界を復興させようとしており、主人公に対して「自分達の為に働け」と命令してくる。

私は断る選択を選ぶ。

すると、両親が襲い掛かってきた。

反撃したが主人公の両親は今までの敵と比べるとかなり弱く、すぐに死んだ。

「弱いな」

私は思わずそう呟いたが、マイクはしっかりと声を拾っていた様だ。

：探し求めていた両親を殺した感想がそれかw

：お嬢様の感想だから……

：襲って来たから仕方ないねw

：主人公君は悲しんでるよ……多分

誰も居なくなつた研究所の機材を破壊し、部屋から出ると画面が暗転しエンディングが流れ始める。

「終わりの様だな。少しストーリーが短いような気がするが……」

：メインストーリークリアおめでとー

：メインだけやるとこんなもんだね

：お嬢様自身のスキルが高い事もあつて戦闘とかも早かつたから終

わるのも早かった

：サブクエストとか見つけて無い場所が山ほどあるからまだまだ楽しめるよ

流れるエンディングを横目に、私はコメントを読んで行く。

「なるほど、サブクエストが全体の多くを占めているのか」

：サブクエストとかも配信するの？

：それもだけどそろそろ配信時間が不味い、12時間超えるとアークライブに残らなくなるぞ

：そうだね、一度終わった方がよいよ

配信時間を指摘され確認すると、配信時間は11時間を超えていた。

「今日の所はここで終わりにしておこうか」

：クリアもしたしね

：次何やるか楽しみ

：サブクエでも良いけどね

「では、また会おう人類達」

：またねー

：お疲れ様！

：楽しかったよー

私は流れる挨拶のコメントをしばらく眺めた後、配信を終了した。

ダウンフォール3の配信を終え、現在私は風香の配信に参加してい

る。

「今日はお嬢様が来ていますよ」

風香がそういうとコメントが加速する。

・朝からダウンフォール3を11時間以上やってたのにこっちにも出るのか……嬉しいけど平気なの？

・二回行動助かる

・これはブイライブ所属のお嬢様の行動に入るのだろうか？

・こつちだと声だけなのね

私の配信と風の配信でお互いの事を話した影響で、どちらの配信も少し人が増えている。

少し前まで、私がブイライブに所属した事で関係が悪くなるのではと考える者達が居たが、現在はそういった者達は居なくなっている。準備期間中にも私は風香の配信に度々出ており、関係が全く変わっていない事が伝わったからではないか……と風香が言っていた。

「正式なコラボならば姿も出せるが、そういう訳では無いからな」

・なるほど？

・まあ、事前にこうなるって聞いてるし

・最初からこつちでは声だけだったしな

私の説明に対してコメントが流れて行く。

「コメントにもありましたけど、無理はなさらない様にして下さい」
風香がそう言って私を見る。

「人間は限界が近い場合、どんなに隠そうとしても隠しきる事は難しい。風は私が疲れているように見えるか？」

「全く問題無いように見えます、いつものお嬢様ですね」

そうだろうな。

「心配している事は分かっている。もし、私に違和感を感じるようならまた声をかけてくれ」

「かしこまりました」

：主従てえてえいいぞ

：静かで淡白なやり取りに聞こえるけど何だろうな……何かこう

……何かだよ

：何かしか言ってなくて草

バーチャルニューチューバー情報交換所

372：無名の視聴者

そういやブイライブから新人が4人デビューしたらしいな

373：無名の視聴者

猫目 ネム

白亜 テラノ

神鳥 フジミ

お嬢様

この四人だろ？

374：無名の視聴者

何か一人だけ名前じゃないんだが

375：無名の視聴者

確かにお嬢様は名前じゃないな

376：無名の視聴者

なあ、そのお嬢様の事なんだけど……

377：無名の視聴者

ん?どしたん?

378 : 無名の視聴者
言うてみ?

379 : 無名の視聴者
今日初めて見たんだけどさ……この声クレリアじゃね?

380 : 無名の視聴者
フアツ!?

381 : 無名の視聴者
あのアイドルの!?

382 : 無名の視聴者
それ以外にオランダ炉!

383 : 無名の視聴者
誤字ってるぞ

384 : 無名の視聴者
聞き比べて見るよりリンク張ってやるから
クレリアの方はテレビ出演した時の声だけど
【お嬢様のダウンフォール3アーカイブ】
【クレリアテレビ出演】

385 : 無名の視聴者
確かに似てる、というか本人にしか聞こえねえ……
本当に本人?

386 : 無名の視聴者

似てるだけじゃない？

387：無名の視聴者

俺も聞いたけど、似てるね

388：無名の視聴者

似てると感じた奴はかなり居たと思うよ

配信のコメにも似てるって書いてあったし

389：無名の視聴者

でも本物とは決まって無いよな？

390：無名の視聴者

まあね

391：無名の視聴者

本物だったらやばいんじゃないか？ファンが押し寄せるぞ

392：無名の視聴者

違うでしょ、彼女がゲーム配信するかね？

393：無名の視聴者

本人って線は薄いと思ってる、声が似てる子を探して来たんだと思う

394：無名の視聴者

でもクレリアってバトルグラウンドのトッププレイヤーだったし、ゲームをやる可能性はあるじゃん

395：無名の視聴者

そうなん？

396：無名の視聴者

俺は本人じゃないと思う。あれだけ有名なんだから声でバレる事くらい分かる筈だろ？

普通ならボーイチェンとか使うんじゃないか？

本人じゃないから気にせず話してるんだと思う

要するにそっくりさんだよ、声だけで顔はアレだろうけど

397：無名の視聴者

なるほど……

398：無名の視聴者

声が似てるだけで勝ち組じゃね？

399：無名の視聴者

せやな

400：無名の視聴者

そっくりさんでもあの声でバーチャルニューチューバやったらまあまあ人気は出るんじゃないか？

401：無名の視聴者

これから期待

ダウンフォール3の配信と風香との配信を終えた私は、翌朝まで娘達と過ごした。

その後、朝食を終えた私が次の配信でプレイするゲームを決めようと調べていると、スマートフォンが震える。

私は相手を確認し、電話に出た。

「おはようございます。マネージャーの中里です」

電話をかけて来たのは私達4人のマネージャーである中里 瞳（なかざと ひとみ）だ。

「おはよう、用は何だ？」

「突然すいません。本社で今後の話をしたいのですが、都合の良い日を教えていただけませんか？」

「いつものように翌日でも問題無いし、急ぐのなら今からでも構わない」

「では……明日の13時頃で良いですか？」

私が即応出来る事を知っているブイライブは話が早いな。

「分かった」

「ではお待ちしております」

彼女の返事を聞き、私は通話を切った。

「わざわざ来ていただいてありがとうございます」
翌日、ブイライブ本社の応接室にやって来た私を瞳が迎えてくれた。

お互いに席に座ると、彼女が口を開く。

「早速ですが、『お嬢様はクレリアでは無いか?』という噂がネット上で少し話題になっているようです」

「風香の配信に出ていた時はそのような事は無かったが……今更何

故話題になったんだ」

私はそう言うと、彼女は考え込む仕草を見せた。

「……これは私の予想ですが、風さんの配信ではクレリアさんはあまり話していませんでしたよね？あちらの配信のアーカイブも見させていただきましたが、配信の殆どは風さんによるゲームに対する反応や視聴者達との会話で占められていて、クレリアさんはその合間に時々口を挟む程度でした。その辺りに今まで気がつかれなかった原因があるのではないのでしょうか？」

確かに風香のプレイを見たり手伝ったりしていたが……あまり話す事は無かった気がする。

「一人で配信する事で会話が増え、声に注目が集まりやすくなった……という事か？」

「はい。お嬢様の配信とアイドルのクレリアさんの声を比較して載せている所もあるので、十中八九声が原因でしょう。今の所はそっくりさんだと考えている者が多く、本当にクレリアさんだとは考えていないようです」

「別人だと思っているのならそのままにしておこう」

「現在でも世界的に有名な貴女が、ボイスチェンジャーを使わずに配信に出ている時点でいつかこうなる事は察していましたが……今はそっくりさんだと思われていますが、これからも配信を続ければ意外と早くバレると思いますよ？」

彼女は私の事が発覚した時の影響を考えているのだろう。

「予想よりかなり早いですが、問題は無いな」

予想外の出来事も楽しみの一つだ。

「バレた時に何が起こるか不安ですが、貴女がそう言うのならやめろとは言えませんね。……さて、こちらとしてはクレリアさんだとバレてもあくまでも彼女は『お嬢様』であると主張し、誰であるかは明らかにしない、という方針なのですが……良いのでしょうか？」

「構わない」

「……いいんですか？」

意外そうな表情をする彼女。

『中の人など居ない』のだろうか？」

「ぶっ……すいません、貴女からそんな言葉が出て来るとは思わなかった物で……」

私の言葉を聞いて俯き、軽く嘖き出した彼女は、すぐに謝った。

何かおかしな事を言っただろうか？

そう思いながら私は話を続ける。

「凧から演者は表に出ない物だと聞いているからな、隠すつもりは無いが名乗りもしない。何を言われても『演者は不明』で通せば良いだろう」

『演者は不明』ですと演者が居る事になりますので、『お嬢様はお嬢様である』という事にしようと思います」

……確かに。

「そうだな、その辺りはそちらの判断に任せよう」

「ありがとうございます。もし配信で視聴者達に尋ねられても、正直に答えない様にして下さいね？」

「分かった」

そこまで話すと瞳は私をじっと見つめる。

「どうした？」

私がそう問うと、彼女は少し沈黙した後で口を開いた。

「クレリアさんは凄いですよね……世界中から注目され、存命の内に教科書にまで載るなんて……普通ならばその重圧に潰されてしまうでしょう」

「そうか」

彼女は私に尊敬する様な眼差しを向けて言葉を続ける。

「並ぶ者のいない美貌、歌唱力、身体能力……そして精神力。私は今、二度と貴女のような女性が現れる事は無いと……本気で思っています」

「人類の歴史が続けばいつか同じような者が現れる可能性はある」
未来に現れるその「同じような者」がまた私である可能性も無いとは言えないが……どうなるかはその時の私次第だろう。

「それは一体いつになる事か……どちらにしても私が目にする事は

無いでしょうね」

微笑みを浮かべながら、何処か寂しそうに話す彼女。

「教科書に関してフラワープロダクション側の独断だが気にしてはいないし、契約違反という訳でも無い。そもそも、あれだけ世界中に顔と名前を売ってにおいて今更教科書に載る程度の事を気にすると思うか？」

「確かに……そうですね。それに、本当に駄目なら月下グループが動きますよね？」

彼女は納得した様な表情で頷き、こちらを見る。

「そうだな」

「世界中の多くの男子の初恋が貴女になるかも知れませんね」

軽い口調で言う瞳だが、かなり本気で言っている事が分かった。

「そういった事よりも先に落書きをされそうだ。友人が小、中学生の頃、よく教科書の人物写真に落書きをしていたからな」

特に、男子はかなりの確率で落書きをすると言っていた。

「親がファンだと怒られそうですね」

彼女はそう言って笑った後、仕切り直す様に真面目な表情を見せた。

「アイドルであったクレリアさんには今更言う事でも無いと思いますが……出来るだけ身の回りには気を付けて下さいね？」

「分かっている」

「行き過ぎたファンの中には、私達には理解出来ない理由で暴走する人達も居ますからね……過去には交際の噂が浮上したアイドルが殺された事件もありましたし」

「そのアイドルにとっては迷惑な話だな」

「加害者はそのアイドルの熱狂的なファンでした。噂もごく一部の掲示板での話で、そのような事実は無かったそうです……私はその話を聞いた時『ファン』とは一体何なのか考えてしまいましたよ……」

「特に気にした事は無いが、状況次第で敵になる事が分かっている問題は無いのではないか？」

「分かっているにもならない時の方が多い気がします。……」

クレリアさんは引退してかなり時間が経っていますが、それでもまだファンは世界中に居ます。重ねて言いますが、くれぐれも注意してくださいいね?」

「注意しておこう」

彼女は私の身を案じて繰り返し言ってくれている様だが、現在の人類の実力では襲った者が行方不明になるだけだと思う。

その後、活動についての話し合いをしてから私は部屋を出た。

「クレリアさんって確か50歳だったわよね? 本当にデビュー時と変わってない……美しいまま姿が変わらないのは……いえ、病気を羨ましいなんて不謹慎だわ」

去り際に瞳の独り言が聞こえる。

人類の女性の多くはいつまでも若く美しくありたいらしい。

年が明け、西暦2038年。

年末年始は毎年娘達と過ごす為、私は配信を行っていない。

娘達、そして友人達と過ごしている内に時は過ぎ、気が付けば一月も半ばに差し掛かっている。

そろそろ配信を再開しようかと考えていたある日、私はマネージャーから同期三人とクロスコードで会話をして欲しいと頼まれた。通話に使用しているクロスコードはゲーム向けのビデオ通話・音声通話フリーソフトウェアで、私も以前から使っている。

現在のゲームはこういうソフトウエアを使用する事が前提になっっている物も多くなっているようだ。

今回の話を受けた時、マネージャーから「同期の3人はお嬢様がクレリアだと思っていない」と言っていた。

ブイライブ側はバレない様に気を遣っているが、確か3人の年齢は20歳前後だった筈。

アイドルのクレリアは彼女達から見れば過去の話だろうな。

そんな事を考えながら、私は配信を再開する準備をし始めた。

マネージャーと電話で話してから数日後。

現在、私はPCの前で待機している。

時刻は13時55分になった所だ。

今日は14時から四期生によるクロスコード通話が行われる予定だ。

私が3人を呼ぶ事になっているので、そろそろ呼び出しを開始しよう。

「おはようございますー。猫目ネムをやっているナタリア・チェルニシヨワですー。ロシア人だけど日本語もこうして話せるよー」

「白亜テラノをやっているベティ・オコンネルよ。アメリカ出身だけど私も日本語を話せるわ、よろしくね」

「初めまして。神鳥フジミをやらせていただいています、宮内沙織と申します。日本人で、恥ずかしながら英語は苦手で日本語しか話せません……」

全員を呼び出した後、デビュー時の配信順に自己紹介するように頼むと、三人はそれぞれ自己紹介をしてくれた。

「お嬢様をやっているクレリアだ、生まれは日本では無いが日本人で、複数の言語を話せる」

最後に私も自己紹介をした。

「クレリアって……その名前だと色々と苦労したんじゃない?」

ベティが私の名前と声に反応し、尋ねて来る。

「面倒くさそうだよねー」

ナタリアも同様に名前に反応をした。

一応アイドルのクレリアの事は知っているようだ。

「当時を知っている世代は勿論、若い世代にも彼女のファンは居ますからね」

沙織も二人に続くようにアイドルのクレリアについて話す。

事前に聞いていた内容から若い世代にはあまり知られていないと思っていたのだが、現在でも多少は知られているらしい。

「特に問題は無かったな」

私はそう答えた。

「そうなの？」

「直接会えば違うってすぐ分かるし、一時的に話題になるだけかもねー」

「本当に本人だと判明したらもつと大騒ぎになるでしょうね。引退後に姿を見た人は一人も居ないんですから」

私の回答に対し、彼女達からそれぞれ反応が帰って来る。

「話が変わるけど……クレリアさんは複数の言語を話せるって言ったわよね？どれくらい話せるの？」

突然、ベティが私にそう尋ねて来た。

「恐らく、地球上に存在する人類の言語は全て話せると思う」

「あつはつは！それは凄いわね！」

笑いながら楽しそうに言うベティだが、何となく本気にしていないように感じる。

言い直しておくか。

「取り敢えず主要な言語は全て話せる」

☒……ねえねえクレリアさん、ロシア語は話せるの？☒

ベティと話していると、ナタリアがロシア語で私に問いかけて来る。

☒ロシア語はこの通り話せる、英語も勿論問題無い☒

私は前半をロシア語、後半を英語で答えた。

☒おお、やるねー！全く違和感が無いよ☒

☒本当に話せるのね。綺麗な発音で凄く聞き取りやすいわ☒

その答えを聞いたナタリアとベティはそれぞれの母国語で感心したように声を上げた。

「あの、私はロシア語が分かりませんし……英語もネイティブだと何を言っているか全く分からないので……仲間外れにしないで日本

語で話して欲しいです……」

私達の会話を聞いていた沙織が寂しそうな声を上げた。

「あ……ごめんね？彼女が本当に話せるか試したくなっちゃつてー」

「私もつい英語で答えちゃったわ」

そんな沙織に、ナタリアとベティが日本語で答える。

「私がある程度話せる事は分かっただろう？ここからは日本語で話そう」

私も日本語で二人にそう提案する。

「はい」

「そうしましょ」

「うう……もつと勉強しておくんです。いえ、今からでも遅くは……」

沙織はそう呟いていた。

その後、当たり障りの無い会話をしている内に、僅かだが彼女達の事が分かって来た。

三人の会話を聞きながら、私は今までの会話から感じた彼女達の印象について考える。

ナタリア・チエルニシヨワは少しのんびりとした女性の様だ。

初配信でも寝坊してマネージャーに起こされていたからな。

ベティ・オコンネルは少し大雑把で大胆な印象を受けた。

言葉使いがたまに荒くなる事や、その反応から強気な女性だと感じるが、所々私達を気遣う言葉を発していたので悪い印象は無いな。

宮内沙織は優しく穏やかな印象を受ける。

柔らかい声で話し、誰にでも丁寧語で話すのは癖だと語っていた。

私が三人の事を考えている間も会話は続いているが、雰囲気は悪くないと思う。

内心は実際に会わなければ分からないが、ある程度仲は深まったと

考えて良いだろう。

「その内コラボしたいねー」

「そうですね、是非ご一緒したいです」

「難しい事では無いみたいだし、その内やりましょうか」

これから先、バーチャルニューチューバーを続けるのなら間違い無く行いう事になるだろうな。

私はそう思いながら彼女達の会話を聞く。

「まずは収益化とメンバーシップ解禁を目標に頑張りましたよ」

「稼げるようになればこれだけで食べて行けるけど、なかなか大変そうだよー」

「これだけで食べて行くにはそれなりの数字を出さないと難しいでしょうね」

「これから人気を得るのは難しいかなあー?」

「ブイチューバーの市場は年々大きくなっていきますし、私の予想ですがまだまだ規模は拡大すると思います。上手く行くかは分かりませんが……私達はかなり良い時期に始めたと思いますよ?」

そうなのか。

その辺りの事は全く気にしていなかったな。

「取り敢えず……視聴者の皆から反感を買うような事や社会的に問題のある事は避けた方が良いわね」

「当然だよねー」

「そうですね……あれ?……クレリアさんいますよね?」

沙織が会話に参加していない私に気が付いたようだ。

「いるぞ」

「良かった……しばらく話していませんが、何か考え事ですか?」

「私は自分で何かをする事も嫌いでは無いが、何かをしている者達を見ているのが好きでな……今もお前達の会話を聞いて楽しんでいました」

娘達や友人達が遊んでいるのをただ見ている、という事もよくある。

「ああ、人間観察ってやつ?」

「あはは、観察されてたかー」
そうベティとナタリアが言うが、その声に嫌悪感は無い様に聞こえる。

「クレリアさん、あの……お聞きしたい事があるんですが、良いでしょうか?」

不意に沙織が私に声をかけて来た。

「何だ?」

「失礼を承知でお聞きするのですが……クレリアさんの御年齢が50歳というのは……?」

他の二人は口を挟む事無く沈黙を保っている。

「本当だ」

現在の人間としての年齢は50歳で間違い無い。

「……申し訳ありません。こういった活動に年齢など関係無いと分かっているのですが……その、声がとても若々しく美しいので、何かの間違いなのでは無いかと思ひまして……」

「少女みたいな声してるし、言われなきや信じられないよねー」

「……私も50歳は誤表記で、本当は年下だと思ってたわ。でも……少女の声と年齢による落ち着きが合わさったその声は、お嬢様の設定に合ってるんじゃないかしら」

「私は配信外ではクレリアさんに対して敬語を使うべきだと思ひますが……お二人はどうですか?」

沙織がそんな事を言うがその辺りはどうでもいいな。

「あー、その方が良いかあ……」

「私は敬語を使うべき相手は選ぶようにしてるけど」

これは言っておくか。

「話し方は好きにすると良い」

「そう?じゃあこのままで話させて貰うけど……後で何か言われても変えないわよ?」

そう言うベティに私は答える。

「敬語は私も使わないからな、他者に強制する気は無い」

「じゃあ私もこのままでお願いー」

「私は普段から敬語なので……申し訳ありませんが、このままで……」

「沙織、私は敬語で話される事を嫌っている訳では無く、ただ自由に話して貰いたいだけだ。気にする事は無い」

私は申し訳なさそうな声を出す彼女にそう言っておく。

実際、言葉よりも向けられている感情で判断する事が多いからな。

「そうですか、よかったです……」

「敬語で話されて嫌がる人はあまり居ないと思うわよ？」

「そうそう、沙織は気にしすぎだよー」

安堵した様に言う彼女に二人が声をかける。

「……ありがとうございます」

そんな二人に、沙織は少し恥ずかしそうな声で礼を言った。

三人との会話を終えた日の夜、マネージャーから電話がかかって来た。

「お疲れ様です、マネージャーの中里です」

「どうした？」

私は配信部屋のソファに座りながら返事をする。

「確認したい事がありました」

「今日の通話の事か？」

私がそう言うと少し間が空く。

「……分かりますか？」

「気にしている事は分かる」

相性が悪いと面倒な事になる可能性が高いからな。

後々関係がどうなるかは分からないが、最初の雰囲気を確認しておきたいのだろう。

「正解です……クレリアさんから見て皆さんの仲はどうでしたか？」

「話を聞いていた限りでは打ち解けていた」

「そうですか、安心しました」

「現時点で分かるのはその程度だが、直接会えば更に詳しく分かると思う」

会えばそれぞれが向けている感情を確認出来るからな。

「それはある程度コラボ配信を行ってから……と考えていますが、その前に誰かが会いたいと言い出した時はこちらも考えます。会いたがる程には仲が良いとも考えられますから」

「仲が良いと考える事も出来るが、中には悪意を押し殺してやって来る者も居る。よく見ておけよ？」

私がアイドルであった頃にもそういった事が目的の者達が居た事を覚えている。

「貴女が言うのと重みが違いますね……」

彼女の声が少し低くなる。

「そういつた事は何処でもよくあるらしいぞ?」

「……クレリアさんにすり寄って来る人は多かったですでしょうね」

静かに言う彼女。

「そのようだが、私が『人類史上最高のアイドル』と呼ばれ始める頃には無くなったらしい。プロデューサーとマネージャーがそう言っていた」

「篠原京介さんと高野綾子さんですね。あのお二人はクレリアさんを支えた名プロデューサーと敏腕マネージャーとして業界では有名ですよ。後、声優の水瀬彩さんも……噂ではクレリアさんの引退後に色々あったらしいですが」

「私の事で面倒にならないように月下グループが動いた事は確かだ」

引退した私の情報を聞き出そうとする連中から目を付けられていたからな。

「噂は本当だったんですか?」

「本当だ。あの三人は私の友人でもあるからな、すぐに対応した」

「何かあってからでは遅いですからね」

彼女は力強くそう言った。

「話がそれてしまったな。話を戻すが……同期の三人と直接会うのはまだ先になる訳だな?」

私がそう言うと、彼女はすぐに切り替えて話し始める。

「はい、もう少し知名度と人気を得てから……具体的に言うとならば収益化などが通った後になると思います。その際、配信する前に顔合わせもして頂くつもりです」

「そうか。では、同期以外とのコラボはどうなる?」

知名度と人気を得る為にコラボは有効だと聞いている。

私は気にしていないが彼女達には必要だろう。

「確かに有効ですが、あまりにも人気や登録者数に差があると問題が起こりやすいですね。売名などと叩かれる事もありますので、登録者数に差があり過ぎる相手とは行わない方が無難だと思います」

「なるほど」

「人気ブイチュバーの皆さんは基本的にコラボには慎重なんです
が、それには理由があるんです」

「そうなのか？」

「はい。『得にならない相手を見捨てている』などと言われる事もあるのですが……そういう訳では無く、下手に関わると相手が潰されて
しまう可能性があるので関わらないんですよ」

「以前に何かあったのか？」

そう言う少し間が空き、彼女が話し出す。

「……私は当事者では無いので詳しい経緯は分からないのですが、
人気ブイチュバーが新人に目をかけ過ぎ、目をかけられていた新人が
批判を受けて引退した事があったそうです」

「その程度の事はよくある事だろうか？」

「そうですね。それだけならよくある事でしたが、その新人が自殺
してしまった事が問題でした」

そういう事か。

珍しい事では無い筈だが、現代の人類社会ではこういった事は大き
く取り上げられるようだからな。

「それで色々と考えてようになったのか？」

「そうですね。でも……当時の記事を確認した限り、自殺するほど
追い詰められていたとは思えないのですが……」

「人類にも様々な者が居るからな。他者から見れば些細な問題で
も、一部の人間には死を選ぶほどの問題である場合もあるだろう」

「私は、死ぬ事は無かったのではないか……と思います」

「表に出ていないだけで、何かされていた可能性もある」

「……そうかも知れませんか」

彼女は静かにそう答えた。

今まで人類を見て感じていた事だが、彼等は問題が起きてから対策
をする事が多い。

その為、私の中では「被害を受けなければ動かない」という印象が
強くなっている。

だが、全てがそうという訳でも無く、中には事前に対策を進めている時もある。

あるのだが……大抵の場合、様々な問題が足を引っ張り思うように出来ない事が多いらしいな。

確か、魔法人類も初動や対策の遅れが滅びの一端を担っていたはずだ。

私は人類と共に過ごした事で、ある程度人類の事を理解している……筈だ。

現在の地球上で起きる多くの出来事は、人類でも取り返しがつく物が多い。

その為、恐らく危機対策に金や人員を割く事を「無駄」だと感じているのだろう。

そして、人類が無駄を省こうとする理由も察している。

多くの資源は地球から出ない限り限界が存在していて、彼等はその限られた資源の使い道を慎重に選ばなければならない。

起きる可能性が僅かしかない危機の対策に、限りある資源を使う訳にはいかないのだろう。

その結果ある程度の人間が死んだとしても、元々数が多い上にすぐに増える為、全体からすれば被害など無いに等しい。

以前も少し考えたと思うが、人類が魔素や魔力を知る事が出来れば新たな選択肢が多く生まれるはずだ。

しかし、人類がそれを知る日は遠いかも知れない。

何故なら、現在の人類は基本的にそういった物は空想の産物だと考えているからだ。

誰かが極僅かでも魔法を使用し、存在を知れば研究が始まると思う。

今の所はそのような事も無いようだが、出来れば魔力か魔素のどちらか、あるいは両方にたどり着いて欲しいと思っている。

それが叶わなくとも、せめて科学力を高め宇宙には進出して欲しい所だが……人類の未来もどうなるかは分からない。

多くの人類が気にする事の無い様々な小さな出来事の中に、人類で

は取り返しのつかない何かへの切っ掛けが混じっている可能性もある訳だからな。

どの程度の確率かは分からないが「無い」とは言い切れないだろう。その時、人類はどうするのだろうか。

気付くのか、気付かないのか、それともいつまでもその時が来る事無く過ごせるのか。

どうなるうとも人類の先が楽しみである事は変わらないな。

「もしもしクレリアさん……？聞こえていますか？もし誰かとコラボをする時は実行する前に必ず私に連絡してくださいよ？」

「分かった、その時は連絡しよう」

スマートフォン越しに聞こえる瞳の確認に、私は先程までの思考を中断して対応する。

「クレリアさんはアイドルでしたから心配していませんが……他の三人はかなり心配です」

他の三人の心配をする彼女、恐らくそういった経歴を持っていないのだろう。

「期待を裏切ることになるが、私は京介と綾子が居なければあれ程上手く活動出来ていなかったと思うぞ？」

人の世界に慣れていたとはいえ、私にはまだまだ知識が足りていなかった。

アイドルとして、歌手として、人間として世界で活動するための注点を教え、何かあった時に誤魔化してくれたのは京介と綾子だ。

あの二人が居なければ、私はアイドルを続けられなかっただろう。

「……え？」

私の言葉に彼女から少し不安そうな声が漏れる。

「不安そうな声を出すな。あの二人が教えてくれた注意事項を守っていればそう大きな問題は起こらない筈だ」

「それは……問題自体は起こすって事ですか？」

彼女はこちらをうかがう様な声色で問いかけて来た。

「私は超越者という設定だからな、多少人類の常識が無い方が良かったら？」

「全部それで許される訳じゃないですからね!?何か私、凄く不安になつて来たんですが……」

瞳は突然声を大きくし、その後小さい声で不安を口にした。

「当然、設定だからといって全てが許される訳では無いだろう。その辺りは分かっている」

「分かっているなかったら大問題ですからね?」

彼女の声は呆れを含んでいるような気がする。

「いざとなればこちらで何とかする、お前が気にする必要は無い」

「大事にならないようにして下さい」

真面目な声でしっかりと返事が返つて来た。

「私は意図的に問題を起こす気は無い」

「それならいいで……いいのかな?」

彼女は自問するように言う。

「しかし、場合によっては相手が誰であろうと相応の報いを受けて貰う」

大抵の事はどうでもいいが、実際に私の周囲に手を出したのなら話は別だからな。

私の言葉の後、少しだけ無言の時間が流れ……やがて短く息を吐く音が聞こえた。

「クレリアさんが本気になったら私達ではどうにも出来ないでしょうし……その時は諦めますよ……」

瞳は言葉通り、諦めを滲ませた声を出している。

「そうか」

「ただし、それ以外の事は守って下さい。いいですね?」

「出来る限りは守ろう」

「はあ……それでも良いです。お願いしますよ?」

ため息を吐いた彼女は疲れた様な声を出す。

先程「心配していない」と口にしていた彼女が、何度も念を押すように確認して来る。

恐らく今の話で不安を感じたのだろう。

「……様子を聞くだけのつもりが話し込んでしまいましたね。配信

は規約に反しない限りこれからも自由にどうぞ、また連絡しますので
よろしく願います」

彼女はそう言って話をまとめた。

「分かった」

「では、失礼します」

私は通話を終えたスマートフォンを持ったまま配信用PCへ移動し、明日の配信の準備を始めた。

瞳との会話の翌日。

私は遅延無く、2038年最初の配信を開始した。

今日は「フアランクス・アルファ」というゲームをプレイする予定だ。

このゲームはバトルロイヤルFPSと言われる物で、100人のプレイヤーがフィールドの物資を集めながら生き残るサバイバルゲームらしい。

「おはよう人類達、お嬢様だ。今日から配信を再開する」

：あけましておめでとうございます！

：今年最初の配信！

：待っていました！お嬢様！

：フアランクスだー！

：お嬢のFPSの腕はいかほどか

：上手いような気がする

：お嬢はスペック高いからな

視聴者達の反応は以前と全く変わらず、ネット上の噂に触れる者も居ないようだな。

「タイトルにある通り、今日はフアランクス・アルファを初見プレイする」

：良い武器を取れるかが鍵か？

：プレイヤースキルと立ち回りがかなりの比率を占めるゲームだから上手ければハンドガンでも行ける事がある

：威力は減衰するし弾も落ちるからハンドガンだと厳しいな

：アタツチメントの組み合わせも重要

：焦ると当たらないんだよなあ……

次々とゲームに関する情報がコメントされて行く。
その様子を見ながらゲームを開始すると、説明が始まった。

：これが入るって事は本当に初見だな

：一度でもやってると出ないからなこれ

「チュートリアルステージをプレイするから待っていてくれ」

視聴者達に向けてそう言いながらマップに移動し、ゲームの操作方法を実践する事になった。

ふむ……ジャンプ中にも自由に照準出来るのか。

別のプレイヤーからは垂直ジャンプ中に突然回転し始めている様子が見えているのではないだろうか。

：これやって一通り覚えとけば問題無いよ

：操作は今までのFPSと大して変わらないからな

私はコメントを確認しながらチュートリアルを行い、操作を把握して行く。

コメントにあった通り、基本的な部分は殆どがバトルグラウンドなどの他のFPSゲームと共通しているようだ。

チュートリアルを進めていると1人から4人のプレイモードがあると説明があった。

「4人迄なら好きな人数でチームを組めるのか」

私がそう口にするると、視聴者が反応する。

：お嬢様本当に完全所見だったんだなw

：チームを今知ったのかw

：事前にそれ位は調べてると思ってた

「今日は一人でやるが、後でボイスチャットを使ってチームプレイも行うかも知れない」

：お嬢とやりたいけどランダムだとマッチしないだろうな

：視聴者とやる配信して欲しい

：お嬢様がやるなら俺もまたやろうかな

：強い人が仲間に居ればある程度勝てるけど油断してるとそれでもあつさり負けるよね

：狙撃とか遠すぎて分からんからな

：見えない訳じゃないけどプレイ中に気付くのはかなり難しい

配信を見ている者達と共にプレイするのも悪くはないな。

「その内、視聴者のみが参加出来る配信を行うか」

私がそう言うと、コメントが一気に流れる。

：マジか!?

：やったー!

：リハビリしよ

：参加したいけど倍率高そう

：一瞬で埋まりそう

コメントを見ながらチュートリアルを終え、一人でのプレイを開始した。

航空機から降下地点を選び降下し、装備品を探すために近くのマンションに入る。

他のプレイヤーも多く付近に降下しているからな。
ハンドガンだけでも見つけておきたい所だ。

：いきなりナルカ地区行ったw

：初プレイで激戦区選ぶとかお嬢ついてねえな……

どうやら激戦区だったらしい。

そう思いながら入った部屋には、ハンドガンと弾薬が落ちていた。

そのハンドガンと弾薬を拾う途中、私は感度の調整を忘れていた事を思い出す。

すぐに設定画面を開き、コントロールオプション選んで調整する。
……よし、これで良いだろう。

全ての感度を最大に設定した私は、オプションを閉じてゲームに戻る。

：お嬢!? 感度最大はマズいよ!

：全部マックスで草

：プロでも全マックスは居ないと思うけど……? 大丈夫なのかお嬢様……

視聴者達から色々なコメントが来るが、最大でも遅いので問題は無い。

少し操作し、どの程度の反応と速度なのかを確かめる。

遅いが、こればかりは仕方の無い事だな。

バトルグラウンドでも全て最大値にしていたが、どのゲームも最大感度はあまり変わらないようだ。

調整を終え防具や回復キットなどを拾いながら探索するが、見つかった銃器はハンドガンのみ。

無いよりは良いだろう。

距離がある状況で銃器を持つ相手に近接武器で挑むのは避けたい。

現実ならともかく、ゲームでは無理な物は無理だ。

そう思いながら持ち物を整理していると、小さく足音が聞こえた。近づいてきているな……処理しておくか。

そう判断した私は、音を出さないように迎撃に向かう。

：ん? お嬢どうした?

：何を警戒してるんだ?

：誰か居るのかな? 聞こえなかったけど

：ヘッドホンだとかすかに聞こえるね

：ようやく聞こえた。こっち来てるな
：ハンドガンで行けるか？

しばらく進み階段に差し掛かった所で、階下から上って来た敵の頭が見えた。

私は即座に頭に照準を合わせ反動を制御しながら二発発砲し、処理する。

：うおおおお!!?

：すげえ!

：頭ちよつとしか出てなかったのにぶち込んだw

：凄すぎひん？

い
：他のゲームで見た反射神経と動体視力を考えたら納得するしかない

：超越者は伊達ではなかった……

：マジか

：全マックス設定であんな精密に動かせるもんなのか……？

コメントで視聴者達が騒いでいるな。

人類にはかなり早く見える筈なので、この反応は予想していた。

私は周囲を素早く確認し相手の持ち物を漁る。

発砲音を聞かれている可能性がある、手早く漁って離れた方が良いだろうな。

……ショットガンか、貰っておこう。

手に入れたショットガンを装備した後ハンドガンに持ち替え、マンシヨンを出る。

：何でハンドガン装備してるの？

：ショットガン使わないのか

「出会い頭に密着するような状況にでもならない限り、ランダムに

散ってしまう散弾よりハンドガンで頭を打ち抜いた方が確実に処理が速いと思う」

私はコメントの疑問に答える。

：あーそつか、あの反応速度とエイム力があつたらその方が良いよな……

：確かに至近距離ならショットガンで一発だけど自分が注意してれば早々そんな状況にはならないし確かにショットガンよりハンドガンの方が良いか？

：そんな事一部の上位者しか出来ないんじゃないですかねえ……

：大会でプロの試合見た事あるけどお嬢様の方が凄い気がする……公式戦とか出てみない？

：お嬢様は出来る、ただそれだけだ……

：チート扱いされそうじゃね？

：負けた奴等の誰かは絶対に言うと思う

：初見です。想像以上に凄いプレイで惚れました

何を言われようと構わないが疑いをかけられるのは面倒だな、この配信が終わったら対策しておこう。

「その辺りは話を通しておく」

そう言いながら周囲で争っている他のプレイヤーを見つけ出し、ハンドガンで処理して行く。

：何か対策するの？

：コメント読んで返事しながらどんどん他のプレイヤー殺してんの

草

：何でコメント読みながらあんな動き出来るんだよw

処理した相手からアサルトライフルを手に入れた。

これで更に戦いやすくなるな。

「そろそろ移動を始めるぞ」

行動範囲が狭くなる時間が迫っている為、私は放置されていた車で移動を始める。

少し走ると、範囲が指定された。

現在地が侵入禁止区域になったか、今の内に安全区域に移動しよう。

：今の所は順調か？

：アサルトライフルは手に入れたしアタッチメントが欲しいね

：狙われないように上手く安全地帯に行こう

移動中、遠くの山肌にスナイパーらしきプレイヤーを発見し、死角に入る様に車を走らせる。

しばらく走り、安全区域に近づいた私は車を降りて徒歩で移動を始めた。

：慎重なのは良い事だ

：車は目立つからな

：お嬢様ってプロゲーマーなの？

：初見だって言ってるだろお！

：そうかも知れないしそうじゃないかも知れない

：んなこたあどうでもいいんだよ！

：お嬢はお嬢やぞ

本当に初見だが、この動きでは疑われるか。

その後、順調に生き残った私は最後の五人の中に残っている。

：これは初見で優勝あるんじや？

：今までの腕を見たら負けると思えない

：他のFPSやってたのは間違い無いでしょ

：超越者ゲーマーかw

：能力が高すぎてヌルゲーに見える……本当は生き残るの大変なんだぞ……

私の反応速度や操作技術は千穂と初めて遊んだ時と変わっていない。

もしこれ以上の動きをするなら、ゲーム側の限界を引き上げなくてはならないだろうな。

そう考えている僅かな時間で二人が脱落し、残るは私を入れて三人になった。

：どこに居るんだろ？

：音した辺りからはもう移動してるかもな

草むらに伏せて隠れていると、画面の端にある木から僅かに銃の先端が見え……すぐに消える。

一人は見つけた。

が、もう一人は恐らく動かないだろう。

出来ればある程度把握しておきたかったが……。

：全然わからねえ……

：もう下手に動けないし、時間切れギリギリにかけるしか無いな

そのまま膠着状態が続き……やがて最後のエリア縮小が始まった。

：さあ行けるか……

：最後はあつという間に狭くなるから気を付けて！

他の二人の動きは無いが、私は動かなければエリア外で敗北するな。

私は限界だと判断し、草むらから飛び出した。

その直後、迫るエリア縮小に追いやられたのか一人がすぐ近くの岩陰から。

そしてもう一人が隠れていた木の陰から飛び出して来た。

二人共私を見ている。

どちらかだけでも別の相手を狙って欲しかったが、両方私が処理するしか無い。

私は即座に岩陰から出て来たプレイヤーから離れるようにジャンプし、空中で頭を狙う。

そして相手を仕留めた事を確認した後、空中でもう一人に方向転換し落下しながら最後の一人の頭部に発砲。

伏せるキーを押しっぱなしにして着地と同時に伏せた直後、最後の一人がダウンし私の優勝が決まった。

：勝ったああああ!?

：最後の動き過ぎすぎんだけど!?

：マジスゲエ……なんだよ最後の

：現役のプロゲーマーより凄くね?

：最後の反応とエイムが神がかった、本気で神業だわ……

：おめでとおおおお!

：これが超越者か……

勝った直後、様々なコメントが一気に流れ始める。

残っていた二人の力不足と、空中で回転出来る仕様に救われたな。

二人とも世界上位の実力者の場合、一人は処理出来ても最後の一人には勝てなかったかも知れない。

未だに流れ続けるコメントを横目に、私は次の試合を始めた。

気が向いた時にゲームの配信を行いながら日々を過ごし、2月に入ったある日。

「クレリアさん！収益化とメンバーシップ解禁ですよ！」
電話から瞳の明るい声が聞こえる。

いつの間にか基準を満たしてしていたようだ。

「そうか」

「もうちょっと喜んでくださいよ……」

私の返答に、彼女はがっかりしたような声を出す。

「特に気にしていないからな」

ブイライブに所属している以上ある程度の利益は出すつもりだが、私の目的は稼ぐ事では無い。

もし「お嬢様」が受け入れられず利益が出ない場合は私財で補う事も考えているので、私の人気が出なくてもブイライブに被害は無いだろう。

もし人類の通貨で解決出来ない問題が起きてしまった時は、こちらも独自の方法で解決すれば良い。

「まあ……クレリアさんは今更そんな事を気にしませんよね」

軽く息を吐いた後、彼女はそう言った。

「解禁した事は分かったが、私はその事に対して何かする必要があるのか？」

「そうですね……収益化のオンオフなど、少し覚える事はありますが、それ以外はこちらで行います。皆さんには活動に力を入れて頂きたいので」

「そうか、分かった」

「改めておめでとうございます。四期生で最初の解禁ですよ」

「ありがとう。他の皆はどんな具合だ？」

時々配信を見てはいるが、解禁までの詳しい状況は見ただけでは分からないからな。

「四期生の三人はほぼ横並びですね」

「厳しいか？」

「いえ、皆さん中々上手く行っていると思いますよ。この調子なら……恐らく後二か月前後で条件を満たせると思います」

私が早く達成したのは、恐らく風香の所に居た視聴者が「お嬢様」も登録して見ているからだろう。

「今の所は問題無いか」

「そうですね」

彼女達が解禁した時には祝いの言葉でも送る事にしよう。

そんな事を考えていると、瞳が更に話を続ける。

「それですね……お嬢様が解禁したという事で同期の皆さんから全員でお祝い配信をしたいと提案されているのですが……どうしますか？」

「断る理由は無い、参加しよう」

「そうですね！良かったです！」

彼女は嬉しそうな声を出す。

「予定はブイライブ側とも話し合うのか？」

「基本的には皆さんの話し合いに口を出しません、やる事を決めたら一度私に話して下さい。駄目な部分は変更をお願いしますので」
「分かった」

瞳から同期による解禁祝い配信の話聞いた後、私は同期の三人にメールを送り、話し合いの時間を決める事にする。

しばらく待つつもりだったが、全員からすぐに返事があり、その日の内に全員で配信の予定を話し合う事になった。

内容は早々に雑談配信に決まったが、念の為に皆で出来るゲームの準備もしておく。

配信は私のチャンネルで行う。

私の解禁祝いの配信なので、これは当然かも知れない。

コラボ配信のタイトルは「お嬢様収益化、メンバーシップ解禁！お

祝い四期生コラボ！」に決定したが、これは同期の三人が考えた物で私は殆ど関わっていない。

配信予定日は二日後の夜に決定。

こうして順調にすべての話し合いは終わったが、全てが決まった後も私達は雑談をして過ごした。

同期とのコラボを決定してから二日後。

私達は配信開始前の最後の確認をしている。

「全員問題は無いか？」

「はい、問題ありません」

「大丈夫よ」

「平気だよー」

私の確認にフジミ、テラノ、ネムが返事を返す。

「もうすぐ配信開始時間だ。説明した通り通話したまま開始するが、私が開始の挨拶をするまで音は出さないようにしてくれ」

「はい」

「オッケー」

「うん」

返事をした後、彼女達は静かになった。

それから約1分後、パーティー会場のような背景に私達四人が並んで表示される。

問題無く配信が開始されたのを確認し、私は口を開く。

「こんばんは人類達」

…きたー！

…こんばんは！

…【メンバーシップに参加しました】参加させて貰います！

…解禁おめでとう！

…祝いをどうぞ？100000

：【メンバーシップに参加しました】待つてたぜ？この時を……

私が挨拶すると、祝いの言葉とスーパーチャット、メンバーシップの加入報告が一気に流れ始める。

「祝いの言葉をありがとう。スーパーチャット、メンバーシップの加入は視聴者達の自由だが、身を滅ぼすような真似はするなよ」

：上納金でございます？500000

：お嬢はなんだかんだいつて優しいな。無理はしないから平気やで？10000

：ずっと金を払いたかったんだよ!?50000

勢いは止まる事無く続いているが、話を進めよう。

「今回は私の解禁祝いという事で、同期の三人が参加している。では、順番に自己紹介をしてくれ」

：初コラボがお祝い配信とは！

：これを機会にコラボが増えると良いな

様々なコメントが流れる中、同期達の挨拶が始まる。

「こんばんはー。バーチャル猫獣人の猫目ネムだよー」

：こんネムー

：流石にお嬢様のコラボに遅刻する事は出来なかった様ですねw

「恐竜人ライバーの白亜テラノよ。貴方達もしっかりお祝いしなさい」

：姉貴ー！今日も綺麗だぞ！

：分かりました姐御！

「皆さんこんばんは、幻獣人の神鳥フジミです。今日はお嬢様の解禁祝いに参加出来て嬉しいです」

：フジミちゃんは今日も清楚

：可愛い

「さて、自己紹介も終わった所で……お嬢様解禁おめでとう！」

「おめでとうー！」

「おめでとぅございますー！」

テラノの祝いの言葉に続いて残りの二人も祝いの言葉を口にした。裏では既に祝われているが、配信では今回が初めてだからな。

「ありがとう。それと、今回の配信を提案してくれたフジミに改めて感謝する」

話し合いの際、始めに皆に提案したのはフジミだと聞いたので配信の方でも礼を言っておく。

：考えたのは富士山なのか

：流石富士山w

……富士山？

私はコメントに山の名前が流れている事に気が付いた。

「コメントに時々流れている富士山とはどういう事だ？」

「あつ……それは……」

フジミが声を上げたが、私はコメントに流れた説明を見ていた。

：フジミちゃんの事

：フジミさん↓フジさん↓富士山

なるほど、隠語の様な物か。

「嫌では無いですけど……改めて説明されると恥ずかしいですね……」

「可愛いと思うよー？」

「日本の有名な山に例えられるのなら悪くないんじゃない？」
言葉通り恥ずかしそうな声を出すフジミに、ネムとテラノが声をかける。

：恥ずかしがるフジミちゃん可愛いw

：仲良さそうだなw良い事だw

「こうして四期生全員が集まって話すのはまだ二回目なのよね」
「そだねー。もっと一緒に何かやりたいよねー」

「私はこれからどんどんコラボ出来たら良いなと思っています」

三人はコラボ配信を積極的に行いたいと思っているのか。

「私は誘う事はあまり無いと思うが、誘われれば断る事は殆ど無いと思う」

「では、近い内にお誘いしますね？」

私の言葉にフジミが楽しそうに答える。

「私とも一緒に配信しようねー？」

ネムも明るい声でのんびりと言う。

「やりたくない事は断るが、それ以外なら構わない」

「我が儘なお嬢様って感じだー。本当にやらないのー？」

ネムが私に言う。

「そうだな。基本的にやりたくない事はやらない」

友人や家族に頼まれたり、その先に興味がある場合は行うかもしれないが。

：我が儘w

：その時の気分次第という事かw

「貴女らしい答えだけど、具体的に何か嫌な事とか嫌いな物はあるの？」

少し笑いながら言ったテラノの問いに、私は考える。

嫌な事、嫌いな物、か……。

その時の私の気分で変わる事が多いが、恐らくこの先も変わらないと感じる物が二つある。

「二つあるな」

「何ター？」

ネムが声を上げたが、他の二人は黙って聞いている。

：弱者とか？

：愚か者ですかねえ？

コメントも興味を持っていろいろ予想をしている。

そんな中、私は以前から変わらない自身の考えを口にした。

「二つは敵対した者を理由無く生かしておく事、もう一つは全てが自分の思い通りに動く事だ」

：超越者的な答えだったw

：敵は殺す、慈悲など無い！

：思い通りなるのはつまらんとか、俺も言ってみたい……

：言えば良いだろw

：俺は全てが自分の思い通りになって欲しいと思ってるよ？

「全然配信に関係ないじゃない」

テラノはそう言っただけ笑った。

「あはは！何か物騒な事言ってるー」

「お嬢様は何と戦ってるんでしょうか……」

ネムは何か気が入ったのか話しながら大きく笑い、フジミも小さく笑いながら話している。

今の私の答えは本心だが、彼女達も視聴者もキャラクターの設定を前提とした回答だと思っている気がする。

「これからもうこうして何かあった時は集まりたいですね」

まだ少し笑いながら、フジミがそう口にする。

「そうだねー。私達が収益化した時とか、登録者数が一定数になった時とか、そんな時はそれぞれのチャンネルでまた集まろうよー」

「良いわね、そういう時は皆で祝うようにしましょうか」

・四期生の仲が良さそうで何よりですw

・絡みが増えると良いな

それから私達は雑談をしながら過ごし、用意したゲームをする事無く配信を終えた。

「無事に配信が終わったな」

配信終了後、私達はそのまま会話を続けていた。

「上手く行って良かったね」

「そうね。視聴者も楽しんでくれていた様だし」

「クレリアさん」

ネムとテラノの話を聞いていると、フジミが私に話しかけて来た。

「何だ？」

「あの、本当に嫌な事はしつかり言って下さいね？」

「そうね。私達は配信で自分の嫌な事とかハッキリ言ってるけど、

貴女は何も言っていないでしょ？今日も設定寄りの事を言ってたし

……」

「無理せずに話してねー？私達にも出来る事があるかも知れないし」

沙織の言葉に続いてベティとナタリアが私を気遣う様な事を言う。

やはり本気にしていなかったか。

「配信で私が言った事は本心だ」

「え？？」

「そうなのー？」

「本当なんですか？」

私の言葉に困惑するような声を上げる三人。

「本当だ。私は敵を理由無く放置する気は無いし、何もかも思い通りになる事も好きでは無い」

僅かな沈黙が訪れたが、すぐに沙織が口を開く。

「そ、そうですね！友達思いなんですね！」

彼女の大声は初めて聞いたかもしれない。

「かなり強気な発言ね」

「大物だあ」

ベティとナタリアがそう言うが……通話では内心でどう感じているかは分からないな。

「癖が強くて、特徴があった方がニューチューバーとしては上手く行くかも知れないわね」

「そうだよー」

そう言うベティに、ナタリアが嬉しそうに同意する。

「まあ、それでも大事な初配信に寝坊するのはあまり良くないと思うけど」

「へー？そんな子いるんだー？」

ナタリアは知らないふりをしているが、それは無理があると思う。

「それはナタリアさんの事では無いでしょうか……？」

「私以外にもしてる人いるよお」

ついさつき知らないふりをしていたのに、寝坊を認める発言をするナタリア。

「え？そうなんですか？」

「いるよー……いるよね？」

「何で私達に聞くのよ」

「……知らないのに言ったんですか？」

騒ぐ三人の会話に時々混じりながら、その日は日を跨ぐまで話し続けた。

お嬢様の収益化とメンバーシップの解禁を祝う配信の翌日。

今日、私はベティとコラボ配信に関する打ち合わせをする事になっている。

配信後の会話中に同期の間でコラボ配信を行う事を決めた後、早速コラボに向けて話し合いたいと言われたからだ。

他の二人は「行動が早い」と驚いていたな。

待機したまま昨日の事を思い返していると、クロスコードの呼び出し音が鳴る。

「少し早いな」

「日本には五分行動っていう言葉があるでしょ？」

クロスコードを繋いで言った私に、ベティは楽しそうに答えた。

「時間に余裕を持つ事は悪くないな」

「ふふ……じゃあ打ち合わせを始めましょうか」

「そうしよう」

こうして私達は配信の打ち合わせを始めた。

「じゃあ早速聞くんけど、クレリアはコラボで何かやりたい事とかある？」

「特に無いな。ベティが何も考えつかないのなら私も考えるつもりだが、もし何か考えているのなら聞かせて欲しい」

「そう？じゃあ聞いて貰おうかしら……」

「考えがあるのか？」

「ええ、やろうと考えているゲームがあるのよ」

「そうか」

「マニオカートって言うレースゲームなんだけど、それで規定の回数レースをして総合得点が高い方が勝ち……と言うのはどうかしら？」

レースゲームか、ゲームをやり始めた頃にプレイしたが……それ以降はプレイしていないな。

「構わないぞ」

「あ、待つて。まだ続きがあるの」

「何だ？」

「負けた方は罰ゲームとして激辛焼きそばを食べる事にしたいんだけど……大丈夫？」

それは私に対しては罰ゲームにならないな。

現在の人類が行える行動で、私に被害を出す事は恐らく不可能だろう。

原子爆弾の際は念の為に確かめたが、それも結局私達に何の影響も及ぼさなかった。

「私は問題無いが、そちらは問題無いのか？」

「辛い物は平気な方だから大丈夫よ。それに……駄目ならそれはそれで視聴者は喜びそうだし」

「そうか。では配信はマニオカートで罰ゲームありの勝負、という事で決定だな？」

☒ええ、問題無いわ☒

私の確認に、テラノは良い発音の英語で答えた。

ゲームを購入して配信出来る様にしておかなければならないな、侍女に準備を頼んでおこう。

私はテラノと会話しながら念話でカミラに連絡しておく。

「あ、聞くの忘れてた。お嬢様はゲームは持つてる？」

彼女がそう聞いて来た。

「持つていないがすぐに準備する」

「そんなに急がなくても良いわよ。準備出来るまで待つから、出来たら教えてね？」

「早ければ今夜からでも可能になるはずだ」

「ホントに？ギリギリになって『駄目でした』は困るわよ？」
訝し気な声を上げる彼女。

「それほど長く待たせる事は無いと思う」

こうして話している間にも準備が進んでいるからな。

『主様、マニオカードの配信準備が完了いたしました』
10分程ベティと打ち合わせをしていると、ヒトハから念話が来た。

『ありがとう。月に帰った時に何か礼をしよう』

『かしこまりました。お待ちしております』

その言葉を最後に念話が切れる。

「ベティ」

「ん？何よ？」

「準備が出来た、今からでも配信出来るぞ」

「えーと……どういう事？」

戸惑う様な声を返された。

説明しておくか。

「ゲームが決まったと同時に私が侍女に配信の用意を頼んでおいた。そしてつい先ほど準備が終わった、という事だ」

「侍女!?侍女が居るの!？」

「居るな」

「……何でバーチャルニューチューバーになったの？そんな事しなくても食べて行けるんじゃない？」

理由を聞かれたが、答えは単純だ。

「やってみる気になったからだ」

「趣味みたいなもの？……まあ、生活に困って無いならそうよね」

「お前は違うのか？」

「私はお金を稼ぐためよ。勿論それだけじゃないけど仕事だもの、第一の理由はそれよ」

「ニューチューバーはある程度人気が出なければ稼げない仕事だと聞いているが、それは知っているのか？」

この仕事だけで食べて行くのは楽では無いからな、「普通に就職した方が遥かに安定する」という話も聞いている。

「そうね……普通に考えれば卒業後は就職した方が良いんでしょう」

ね。多分だけど、他の二人も分かっていると思う」

「それでもやりたかった、という事か」

「そうよ」

その声は、やる気に満ちているように感じる。

「そうか」

何かに挑戦したり、立ち向かう者は嫌いでは無い。

「まあ……楽しみながら成功して見せるわよ」

そう言い放つ彼女は、どこか楽しそうだ。

直接会わなければまだ分からないが、現時点で私は彼女に対して悪い印象を抱いていない。

「しかし、確実とは言えないだろうか？もし駄目だった時はどうする気だ？」

私は彼女にそう尋ねる。

それは十分あり得る事。

彼女は恐らく本気だろう。

だが、努力すれば誰もが成功する、という訳では無いのだからな。
「二応……駄目だった時の事も考えてるわ。だから大学に通ってしっかり勉強しているのよ……逃げ道を残しているみたいであまりいい気分じゃないけど、本気で将来の事を考えたらこうしておくべきだと思ったから。たぶん、ナタリアと沙織もそう考えて大学に通っているんだと思う」

彼女はぼつが悪そうにそう語るが、悪くない考え方だ。

「逃げ道を用意する事は間違いでは無いと思う。出来るだけ用意はしておくべきだ」

未来に、将来に不安を感じるのは人類として一般的な反応だ。

一つの道に全てを賭ける事を否定する気は無いが、私はしっかりと対策を行っている彼女を高く評価した。

「ありがとう」

「もし問題が起きた時は、多少手を貸そう」

「あら、それは心強いわね」

彼女はそう言って笑う。

「さて……行うゲームは決まり、こちらの準備も完了している。行
う日と時間はそちらに合わせるつもりだが、どうする？」

私は話を戻す事にした。

「いいの？」

「構わない、お前達には大学があるからな」

「じゃあ……明後日の20時はどう？」

「いいぞ」

「告知とか粹取りはしておくわね」

「いいのか？」

「ええ、これからも時間は合わせて貰う事が多くなると思うし、これ
位はね」

ふむ……学生である彼女達の時間は限られている為、確かに私が時
間を合わせる事が多くなるだろうな。

その事に対する詫びか、受け取っておこう。

「そうか、では任せよう」

「任せて」

「何かあったらいつでも連絡をしてくれ」

「分かったわ……それで、もう一度確認したいんだけど良い？」

「何だ？」

「本当に侍女が居るの？」

彼女がそう尋ねて来る。

「居る。侍女だけでは無く、メイドや女執事も居るぞ」

「……クレリアさんって何者なの？」

顔を合わせた後は彼女達にも協力して貰う事になるだろうが、現時
点で伝えるのは問題があるかも知れないな。

「実際に会った時に教えよう」

「……分かった。気になるけど会う時を待つわ」

その後、私達は軽く雑談をしてから通話を終えた。

ベティとコラボ配信の話し合いをした翌日。
私は彩に誘われ、彼女の自宅にやって来た。

彼女の夫は仕事でいないが、これは彩が狙って行っている事だ。

原因は彼女の夫が私の大ファンである事。

彼は私が来る事を知ると仕事を休もうとするので、夫が仕事でいない時間を狙って彩は私を誘っている。

「クレリアさん、『お嬢様』というバーチャルニューチューバーをご存知ですか？」

飲み物とデザートを用意し、落ち着いた彩が突然そう言った。

ライブとの話し合いの結果、友人達にもバーチャルニューチューバーをしている事を伏せている。

出来るだけ正体が漏れないようにするためだ。

私の判断で話しても良い事にはなっているが、聞かれない限り答える気は無い。

「知っている」

そう答えると、彼女が苦笑しながら言う。

「付き合いが長い皆さんは全員分かりますよ？お嬢様はクレリアさんですよね？」

……なるほど。

彩はお嬢様が私であると確信している。

彼女には話しておくか。

声優業界に長く身を置いている彼女なら問題無いだろう。

「彩の言う通り、お嬢様は私が使用しているキャラクターだ」

「やっぱり」

彩はそう言って微笑んだ。

彼女の言う通りなら、千穂達も気が付いているのだろうか。

私が訪れた時にそういつた事は聞かれなかったが……。

いや、お嬢様を知っているという前提で考えるのは間違いだな、彼

女達がお嬢様を知らない可能性もあるのだから。

見れば分かるとしても、その存在を知らなければ目にする機会はどう無いはずだ。

「私、お嬢様の配信にゲストとして出演したいのですが……良いでしょうか?」

そんな事を考えていると、彼女が私を見て言う。

「そういった事はブイライブ側に話を通してからの方がいいだろうな」

「そうですか、ではブイライブさんに話してみる事にしますね」
そう言って彼女は飲み物を一口飲む。

「彩がブイチューバーの配信や動画を見ていたとは知らなかった」
今までそんな事を聞いた覚えはないが……話題にしなかっただけなのだろうか。

「いえ、最近見始めたんです。お嬢様というブイチューバーがアイドルのクレリアでは無いか、という話を耳にしたので……」

なるほど、そういった話は出ているんだな。

「声が似ている別人だとは考えなかったのか?」

「勿論、最初はそうかも知れないと考えましたよ?でも、すぐにクレリアさんだと分かりましたから」

「そうか」

「ええ……声は勿論、反応も話し方もクレリアさんそのものでしたし、何よりもあんなプレイをする人はクレリアさん以外思い浮かびません」

ふむ……人に可能な範囲で行っているつもりなのだが、違和感があるのだろうか。

一応、彩から見た感想も聞いておこう。

「彩から見て、私のプレイは異常に見えるか?」

そう尋ねると、彼女は少し考える仕草をしてから話し始める。

「うーん……どうでしょう?私はゲームが上手い人がプレイしているのを見た事がありませんからね。クレリアさんのプレイを見てそう感じるのは、クレリアさんの凄さを知っているからかもしれないませ

ん」

「先入観があるという事か」

「そうですね」

私が見ている限り、私ほどでは無くても近いプレイをする者達は存在していた。

それらのプレイを思えば、私のプレイが飛び抜けている訳では無いはずだ。

ただ、それを延々と続けたら流石に視聴者達も「何かおかしい」と感じるかも知れない。

「お嬢様の方は準備良い？」

「問題無い、いつ始めても大丈夫だ」

コラボ当日、配信が始まる前に私達は最後の確認をする。

「私が進行をするから、お嬢様はリラックスしていつも通りで良いからね？」

「そうさせて貰う」

進行がテラノなのは、彼女のチャンネルで配信されるからだ。

このコラボ配信は私のチャンネルでは配信していない。

「じゃあ配信を開始するわ、そのまま調整もするわね。問題無い内容なら声出しちゃってもいいから」

「分かった」

私の返事の後、配信が開始された。

「みんな、こんばんは。白亜テラノよ」

：こんばんは姉御！

：コラボだー！

「始める前に色々と調整するわ、音量は大丈夫？」

彼女の配信は私も見ているが、私の画像だけでテラノが表示されて

いないな。

「テラノ、お前の画像が表示されていないぞ」

：あれ？姉御が居ない

：お嬢様の立ち絵はあるけどテラノ姉さんが表示されてないね

私の言葉とほぼ同時にコメントでも指摘されている。

「私が映ってない？……ちよつと待って」

彼女はそう言っただけで何か操作をしている。

：お嬢様にも言われてて草

：配信見ながら出てるんだなw

そんなコメントが流れている間にテラノの画像が表示され、位置が調節される。

「ごうかしら？…これで問題無いと思うけど」

：来たー

：大丈夫

：お帰り

「音量は平気よね？」

「問題無いと思う」

「配信を見てるお嬢様が言うなら平気そうね」

：俺達の出番は無かったw

：お嬢様優先！

：俺達を頼ってくれていいのよ？

「じゃあ、始めましょうか。改めてこんばんは、恐竜人の白亜テラノよ」

「こんばんは人類達。お嬢様だ」

：待ってたぜ姉御ー！

：コラボ嬉しい

：お嬢様！今日もお美しいです！

「さて、今日はお嬢様とのコラボでマニオカート対決をするわ」

：お嬢様ゲームめっちゃ強いぞ

：姉御大丈夫？

「やるからには勝つつもりでやるわよ。負ける気なんて無いわ」

：頑張って！

：さて、勝てるかなあ……

強気な発言をするテラノに、応援や不安を表すコメントが書き込まれて行く。

「ルールの説明をするわね、まずはこれを見て」

彼女はそう言っただけで画面に表を表示した。

グランプリモード（10レース、他キャラクターはNPC）を行い、得たポイントが多い方が勝ち。

得点は以下の通り。

順位・ 得られるポイント

1位・ 15ポイント

2位・ 12ポイント

3位・ 10ポイント

4位・ 9ポイント

5位・ 8ポイント

6位・ 7ポイント

- 7位・ 6ポイント
- 8位・ 5ポイント
- 9位・ 4ポイント
- 10位・ 3ポイント
- 11位・ 2ポイント
- 12位・ 1ポイント

同点であった場合はもう一度だけレースを行い、順位が上の方が勝ち。

負けた方は罰ゲームとして今日の配信から一か月以内に激辛焼きそばを食べる配信を行う。

※時間が余ったら視聴者参加で出来る限りレースを行う。

「見てくれた？この表のルールで勝負するわ」

「回線が落ちたレースは無効だな？」

私は表に載っていない部分を説明する。

「そうね、どちらかが落ちてしまった場合、そのレースは無効になるわ。問題無く終了したレースの順位のみで合計ポイントを競う、という事よ」

「分かった」

：罰ゲームの定番、激辛焼きそばw

：途中で回線落ちしたらレースがリセットされるの？

：回線悪かったら終わらなそうw

「回線落ちした場合、そのレースだけが無効になる。一から全てやり直す訳では無い」

上手く伝わっていない者がいるようなので追加で説明しておく。

「そういう事、捕捉ありがと」

：あーなるほど、合計レース数で終わるのか……ボケてたわ

：もし4レース目で落ちた時は、やり直して7レースした時点で終

わるって事だよね？

：そういう事か、勘違いしてた

「さて！説明は終わったし、早速ゲームを開始するわよ。お嬢様も準備は良いわよね？」

テラノが私に確認してくる。

「問題無い」

「オッケー！じゃあ画面出すわよー」

彼女がそう言った後、ゲーム画面が表示された。

「お嬢様はマニオカートは初めてなのよね？」

「他のレースゲームはプレイした事があるが、このゲームは初めてだな」

「じゃあ説明しながらやるわね」

：お嬢様初めてかよw

：初心者に罰ゲームありの対戦を申し込む経験者w

：汚いw

「良いのよ！お嬢様がゲーム上手いのは知ってるし、これ位は良いハンデよね？」

テラノがコメントに反応した後聞いて来るが、事前の話し合いで既に了承しているので断る理由はない。

「問題無い。テラノが教えてくれるようだしな、すぐに慣れるだろう」

：余裕の超越者！

：罰ゲームの激辛焼きそばはお嬢様に通用するのだろうか……w

：何か平気そうw

「さて、レース開始までささっと進めるわよ。あ……排気量を決めてなかったわね……お嬢様は初心者だし、一番下の50ccでいいかしら？」

「一番上で頼む」

「……大丈夫？かなり早いわよ？」

「気遣うような声を出すテラノ。」

：めっちゃ強気w

：超越者に初心者扱いなど不要！

「じゃあ……一回走ってみて、駄目そうだったら仕切り直ししようか」

テラノはそう言つて1000ccを選択した。

「次はコースだけど、これはランダムで……」

彼女は次々と設定を決めて行く。

「出来た！次は操作キャラクターの選択よ」

「キャラによつて何か違いはあるのか？」

「操作性や最高速度、他のキャラクターとぶつかった時の安定性などが違うわ。自分に合ったキャラを使うといいわよ」

：初プレイのお嬢様は合う合わないなんて分からないんだよなあ

……

：汚い！姐御汚い！

：これは草

：嵌める気満々w

「私は不利な事が分かった上で参加している。彼女も配信外で心配していたが、問題無い」

「あ……ちよつと!?言わないでよ！」

：優しいw

：裏では気遣う姐御最高っす！

：一生ついて行きます！

「掌返してんじゃないわよあんた達！じゃあ始めましょ……初心者
は軽量なキャラが扱いやすいわよ？」

：アドバイスを我慢出来ない姐御w

：面倒見の良さが隠せないw

「私はこの重量級のキャラを使おうと思う」

「初心者には難しいキャラだけど……まあ、いいわ」

：そしてアドバイスを聞かないお嬢様w

：人の話を聞かないw

コメントでは話を聞いていないと言われていたが、私は聞いた上で問題無いと判断している。

「そろそろ配信を見るのは止める。テラノのアイテムなどがバレるからな」

そう言つて、私は見ていた配信画面を消した。

「ん、了解」

第一レースが始まると、テラノのキャラがスタートと同時に突然速度を上げトップになった。

「む………どういう事だ？」

：説明も読んでないのかw

：お嬢様はゲームによつては最低限の下調べするけど、今回は完全に初見ぽいね

：スタートダッシュと言つて、特定のタイミングでアクセルを吹かすとスタートと同時に一気に加速出来る

私はコメントを読んで行く。

「お嬢様ごめん！他の説明を忘れてた……走りながら説明するから聞いて？」

そう言つてテラノが操作方法を説明してくれた。

：この慌て方は本気で説明忘れてたなw

：このレースは無効では？

：教えながらも走りは全力で草

……なるほどな。

スタートダッシュなどの細かい技とアイテムの効果を一通り聞いている間に第一レースはテラノが12位中1位、私は6位となった。

「このレースは無効ね」

「いや、このままで良い」

テラノは無効だと言ったが、私は否定した。

「流石に今のは駄目よ」

「大丈夫だ。恐らくもう負ける事は無いと思う」

アイテムの効果は把握したし、さっきのレースでスタートダッシュ以外のタイミングや挙動も把握したからな。

「……言ったわね？じゃあこのまま行くわよ？」

「良いぞ」

「やっぱり無効にしたいと言っても聞かないからね！」

少し言葉を荒らげる彼女。

恐らく私の言葉に乗って言っているのだろうが、少しは本当に怒っているかも知れない。

：流れるように姐御に喧嘩を売ったw

：あの1レースでお嬢様は熟練者となったのだ……

：流石に一回走っただけでテラノちゃんに勝つのは無理だよ

：でも、あのお嬢様だからなあ……

様々なコメントが流れる中、次のレースが始まる。

私はまずは適当なタイミングでアクセルを吹かす。

すると、スタートと同時にエンストし最下位になった。

ふむ……キャラごとにタイミングが違うと聞いたのでまずはテラノに合わせて見たが、失敗したようだ。

「アクセルが早いわね、そのキャラは確か2カウント目くらいから良かったはずよ」

テラノがアドバイスしてくれる。

「ありがとう、そうしてみる」

：優しい

：素直に聞く時は聞くお嬢様

：まあ、一方的じゃつまらないしお嬢様がかわいそうだろ

出遅れた私は教えられたテクニクを使いトップを走るテラノを追いかけた。

「待って！普通に上手いんだけど!?!」

テラノの焦った声が聞こえる。

最下位だった私はあれから差を縮め、約一周残った時点でトップを走る彼女の真後ろについていた。

：スタートダッシュは出来なかったけど他がスゲエ！

：ギリギリについて走るし、ドリフトのモニターボも上手く使ってる

：やはりお嬢様はお嬢様だった

「負けない!」

きつと彼女はアイテムを持っているだろう。

私は「頭蓋骨」を持っているが、今の状況なら使わずに持っていた方が良いかも知れない。

頭蓋骨は発射すると直進し、当たると相手を転倒させるが、自分のカートの後ろにおいて後方からの攻撃を防ぐ事も出来る。

抜いた後、高確率で彼女は攻撃して来るはず。

その攻撃を防ぐ事が出来るかも知れない。
防御不可能な物だったら無意味だが。

私はそのまま彼女の背後に張り付き、最後のコーナーで抜き去った。

「まだよー」

やはり仕掛けて来るか。

私はすぐにバックミラー視点に切り替える。

するとゴール前の僅かなストレートの途中で、彼女が「赤頭蓋骨」を
発射した。

この赤頭蓋骨は、一つ前の相手を追尾し当たった相手を転倒させる
アイテムだ。

このアイテムを温存しておいたのは間違いでは無かったな。

そう思いながら、私は頭蓋骨を自分の背後に設置する。

彼女が発射した赤頭蓋骨は、設置された頭蓋骨に当たり消滅した。

「あー！？」

彼女の叫び声を聞きながら、私は1位でゴールを通過する。

：最下位から勝ったぞおい

：これが超越者クオリティ

：お嬢様はマジで能力高いし上手いんだって……過去配信見てない
奴は見て来い w

「お嬢様って本当に初見よね？」

疑っているのだろうか？

「打ち合わせで言ったようにレースゲームはした事があるが、この
ゲームは今日が初めてだ」

：やったのはなんてゲーム？

：何をやってたのか気になる

「プレイしていたのは『グランドレーシング』だな」

私はコメントの問いに答える。

：あーあれか

：あれはリアル系だからマニオカートとは完全に別物だね

：レースゲームの中でもかなり難易度の高いゲームじゃねえか

：どんなゲームなん？

：あれ難しかったなあ

：変にクラッシュすると故障して失格になるゲーム

「初心者だと思っるのはやめとくわ、手加減無しよ」
テラノはそう宣言する。

：あれ慣れると面白いよね

：今度新作出るから皆でやって欲しいね

：マジで？買わなきゃ

「新作を同期の皆でやるのは良いかも知れないわね……あつ!？」

会話中に次のレースが始まったが、テラノはスタートダッシュを失敗し通常のスタートになった。

一方、私は教えて貰ったタイミングで問題無くスタートダッシュを行いつつになる。

「失敗しても問題無いわ、ここからよ」

：このゲーム順位が低いほどいいアイテム出るし、最後まで分からんからな

：実力は間違い無く必要だけど、腕に差があってもある程度いい勝負が出来るようになってる所が人気の理由だよ

確かに最下位の時は順位を上げやすいアイテムが出やすかったよ
うな気がする。

私は一位を維持したままそう考えていた。

「よし！『星の心』来た！」

彼女の嬉しそうな声が聞こえる。

：おお！運がいい！

：行け！姐御！

「どきなさい雑魚どもー！」

星の心の効果は一定時間無敵状態となり、加速力と最高速度が上昇する……だったな。

更にライバルに接触すると相手をクラッシュさせる他、一部の障害物を破壊し無効化出来る。

流石にコースアウトは避けられないが、ゲーム中で一位二位を争う程に強力なアイテムだと聞いている。

そう考えている間に彼女の順位はどんどん上がり、私に近づいている。

私は現在アイテムが無い、出来れば何かしら手に入れておきたい所だ。

そんな時、後ろに付けているNPCからの赤頭蓋骨を受けて私は3位に転落、順位を上げていた彼女は4位になった。

ふむ……防御出来るアイテムが無ければ、ゲームの仕様上避ける事はかなり難しいな。

「良いわよNPC！よくお嬢様を狙ってくれた！」

私の順位が落ちた事を喜ぶ彼女。

そしてその直後にテラノのアイテム効果は終了し、私はアイテムを取得した。

彼女の喜びの理由は何となく分かる。

勝負は私とテラノの総合ポイントだ、何位であろうと相手より上ならば差をつけられる。

例えば自分が11位であろうと、相手が12位なら問題は無い訳だ。

NPCがNPCを狙ってもお互いの差が大きく変わる事は無いが、私が狙われればそれは勝敗に大きな影響を及ぼす。

だから、彼女はNPCが私を狙った事を喜んでいるのだろう。

：少し前までの気遣いは何処に行ったのか……

：負けず嫌いだからしようがないねw

：初プレイのお嬢様に負けたくないんだらうなあ

「負ける気は無い」

私はそう言っただけで最短コースを攻めて行く。

「まだ十分逆転可能よー!」

もうゴールまで後僅か、そこで私は先程取得したアイテムの「なめこ」を使う事にした。

なめこはコース上に設置する事が出来る。

そして、接触した者はグリップを失い滑ってしまう妨害アイテムだ。

私は最後のカーブでドリフトしながら、テラノが真後ろに来た瞬間を狙いなめこを設置する。

「あつ!?!……うきやー!?!」

なめこを踏んだテラノは驚きの声を上げて真っ直ぐコース外に滑って行き、叫びながら転落して行った。

その間に私はゴールを通過し、3位が確定する。

：上手い!

：姉御がすげえ声出しながら落ちて行ったw

：一気に9位に落ちたなw

「何でよー!」

悔しそうに叫ぶテラノ。

「密着していれば避けられないだろう?」

彼女はコース復帰中に後続に抜かされ、最終的に10位でゴールした、これで点数に大きく差がついた事になる。

「最後に赤頭蓋骨当てて抜こうと思ってたのにー!」

「その時は恐らくなめで防いでいたぞ」

「くっ！それでも10位になるよりは4位の方がましだったわ……」

・どちらにしろ負けていた姐御w

・確かに10位より4位の方がましだったなw

「交差した時、私がなめこを置くよりも早く赤頭蓋骨を撃つていれば勝てたかも知れないな」

「あんな一瞬じゃ無理よ……よく出来るわね」

「私は反射神経が良いからな」

「配信見て知ってたけど……実際にやられると何とも言えない気分だわ」

・ボスの攻撃を全て弾いてパーフェクト勝利したポケモンだぞ

・初見の激ムズ音ゲーを世界で最初にオールパーフェクトでフルコンしたお嬢様

・バトロワ系FPSで複数を同時に相手して蹂躪した超越者

・並べてみるとマジで凄いなw

「本当に甘く見てたわ……あの動画の反応が出来るなら重なった一瞬を狙う事も出来るわよね」

そう言つて溜息を吐くテラノ。

「そうだな、特に難しい事では無い」

「どうなってるのよ貴女……」

「どうする？負けを認めるか？」

「負ける気は無いわよー」

私の言葉に、彼女は楽しそうにそう返した。

「くっ……私の負けよ」

テラノが悔しそうに言う。

あれから10レースを行い、テラノは全レースで良い順位に着けてはいたが、結局勝てたのは最初のレースだけだった。

：二人共お疲れ様！

：お嬢様いつ見ても凄くて笑うわ

：一位取りまくりw

：テラノの姐御も結構上手いのに初見で勝てるとは……

：いやいや、初見じゃなかっただけでしょ？

：白狼見て来い、もし初見じゃなくてもあれはおかしいから

：ソングラツシユも見えておくとお嬢様のヤバさに慣れる事が出来るぞ！

「みんなありがとう。お嬢様の上手さは知ってたんだけど、改めて思い知ったわ……」

「テラノはこのゲームが上手い方なのか？」

私はコメントを見て、彼女の実力が全体のどの辺りなのかを聞いてみる。

：煽ってるように聞こえるw

：ただ気になっただけなんだろうけどこのタイミングは草

「んー……真ん中辺りだと思うわ」

少し考えた後、彼女はそう答えた。

「なるほど、まだまだ上がいるんだな」

：嘘つきw

：姐御はランキングに入りかけてる実力者だぞw

「コメントではこういつているが、実際はどうなんだ？」

レースが終わったので、私は配信画面を見ている。

そこに流れるコメントを見て、私はテラノに聞いた。

「んー、下手だとは思ってないけどあんまり自覚無いのよね」

彼女は少し困った様な言い方で答えた。

「今までの経験から、どんなゲームでも上位の者達は中々良い動きをすると考えているのだが……マニオカートもそうなのか？」

私は彼女に問う。

「そうねえ……世界の上位に居る一握りの人達はお嬢様に近いかも。配信で世界5位……4位だったかな？その辺りの人と当たった事があるけど今日みたいな結果だったわ」

：あー……あの時か、確かに同じ位の差がついてるね

：あれ？ちよつと待って？俺がおかしいのかな……今日始めてやったお嬢様と世界5位、4位？の人が同じ位だって言ってるように聞こえる

：そっか、そうとも言えるのか

：どういう事なの……？

：俺にもそう聞こえた

：おかしいよね？

：お嬢様は超越者だから……

「初めてのマニオカートはどうだった？お嬢様？」

困惑するコメントを無視し、テラノが私に感想を求めて来る。

「中々楽しめた。このゲームはアイテム等のシステムを導入する事によって各プレイヤーの実力をある程度反映しつつ、実力差があってもある程度争う事が出来るようになってる、と感じたな」

私はプレイした感想を答える。

プレイ中、トップや先頭集団がある程度後続と差をつける事はあった。

だが後続のプレイヤー達……今回の場合は私達以外NPCだが、彼等が使用するアイテムの全体効果に巻き込まれたり、有効なアイテムが多く手に入る事で一定以上の差が付きにくい。

実際にトップを走る私は頻繁に全体効果に邪魔されたし、アイテムの引きも悪かった。

：大体お嬢様の言う通り

：元々は友達同士で集まって遊ぶパーティーゲームだしね

：上位が潰し合って下位が優勝する事もあるからなあ

「そうね、コメントにもあるけど大体お嬢様の言った通りだと思うわ。元々、上手い下手関係無く誰でも楽しめるように作られてるのが売りで、他のプレイヤーの動き次第ではあるけどかなりの実力差があつてもいい勝負が出来るみたい」

「確かに、全プレイヤーに影響のある攻撃などは基本的に避けられないし、他の攻撃も絶対に避けられない状況が存在しているようだからな。全員にある程度の勝ち目があるように作られているのは良い調整だと思う」

他プレイヤーからの攻撃はアイテムを防御に使う事で回避出来る物もあるが、防御に使用出来るアイテムを所持していなければ回避は難しい。

地形を利用する手もあるが、常出来る事では無いだろう。

そして一部の全体に効果を及ぼすアイテムは通常のアイテムでは防ぐ事が出来ず、防ぐには無敵になるアイテムを始めとしたいくつかの回避可能なアイテムが必要だ。

だが、それらは滅多に出現しない。

更に上位に行くほど強力なアイテムの出現率が下がり、下位になるほど出現率が上がる。

こうしてバランスを取る事で、実力差をある程度緩和する。

やり過ぎればゲーム自体がつまらなくなりそうな内容だが、このゲームは丁度良い調整がされていると感じる。

「配信向きのゲームよね」

「そうだな」

彼女の言葉に私は同意した。

：しかしテラノの姐御は負けてしまったのだ……

：罰ゲーム！罰ゲーム！

：激辛焼きそば配信決定w

「はいはい、分かってるわよ……そのうち激辛焼きそば配信やるわ」
罰ゲームを望むコメントに、彼女は少し悔しそうな声で返す。

：負けて機嫌悪いw

：初心者に負けたら悔しいよな

：お嬢様がおかしいだけだから元気出して？

：お嬢はあれが普通だぞ

「また別の何かで勝負しましょう？負けっぱなしなんて嫌だし」
強気な声でテラノが言う。

「いいぞ」

現在の人類では勝ち目がほぼ無いゲームもあると思うが、やりたい
と言うのなら断る気は無い。

：別ゲーで再戦決定か！

：また見るよ

：お嬢のプレイ見ると勝てる気しないんだよなあ……

「次はお嬢様が何やるか決める？」

テラノが私にそう聞いて来る。

「私はなんでも構わない、お前の得意なゲームを選ぶと良い」

「そう、じゃあやるときはまた私が決めるわね」

：姐御のリベンジ配信楽しみにしてる

：また負ける気がする

：テラノさん、運が大きく絡む物を選べば希望がありますよ

「さて、そろそろ終わりましたよ？」

「そうだな」

テラノの言葉に私が返事を返すと、彼女は最後の挨拶に入る。

「今日は見えてくれてありがとう。チャンネル登録と高評価はしていきなさいよ？お嬢様のチャンネルリンクは概要欄にあるからそっちもよろしくね」

：もう登録してますw

：お疲れ

：登録したよー

：お嬢の方も見てみるわ

：面白かった！またねー！

「お嬢様は最後に何かある？」

「無い」

テラノが私に聞いて来たが、特に言う事は無いのでそう答えておく。

：草

：無いのかw

：超越者は登録や高評価など気にしないのだ……

：なんか言えw

「じゃあ今日の配信はここまで！今度も見なさいよ？バイバイ！」

：バイバーイ！

：お嬢ホントに何も言わねえw

：お疲れ様ー！

：次も待つてる

こうして、テラノとお嬢様の初コラボは終了した。

配信を終了した私達は、ブイライブメンバー用のクロスコードで会話を続けている。

「お疲れ様、今日はありがとう」

通常の話し方に戻ったベティが言う。

「私も中々楽しめた、ありがとう」

「楽しかったわ、またやりましょ」

「という事は、配信で勝負するのは決定で良いのか？」

まずは確認をしておく。

「クレリアがいいならやりたいわね」

「問題無い、またやろう」

「良かった、次はどうする？」

「どうする、とは？」

「二人で決めるのかどちらかが決めるのか、今決めちゃうか後でまた話し合うのか、と言う話ね」

……ん？

「ベティが決める事になっていただろう？」

私は彼女に確認する。

「あれは、配信上の事だからね」

配信ではそう言ったが、本心では話し合っただけで決めたという事か？

「好きにしていざ」

「いいの？」

「報告さえしてくれればそれでも構わない。それと、私が必要な時は声をかけてくれ、押し付ける気は無いからな」

「ん、分かったわ。じゃあ私が決めるけど……何かあったら本当に連絡するわよ?」

「構わない」

彼女が念を押す様に聞いて来るのは、私が本当にそう思っている事が分からないからだろうな。

【クレリアの娘?】お嬢様について語ろうぜ【そっくりさん?】

493：無名の視聴者

実際どうなん?

494：無名の視聴者

俺は娘説あると思う

495：無名の視聴者

声はそっくり

というか本人にしか聞こえない

496：無名の視聴者

まあ子供だとして、子供ってそんなに声似るもんなの?

497：無名の視聴者

似る

昔親父の会社の同僚から家に電話かかって来た時俺が出たんだけど俺を親父と間違えて仕事の話された

498：無名の視聴者

マジかw

499：無名の視聴者

そんな似てるんかw

500：無名の視聴者

今更バーチャルニューチューバーになるか？本人はもう50歳超えてるよな？

501：無名の視聴者

年齢の事を言うのはヤメロ

502：無名の視聴者

あの感じはクレリア様っぽいんだよなあ……

503：無名の視聴者

だから娘なんじゃないかと考えてる

504：無名の視聴者

娘が居るなら幸せになったのかな
安心した

505：無名の視聴者

恋愛に興味無いつて言ってたよな
嘘ついているとは思えないんだけど

506：無名の視聴者

恋愛に興味は無いけど子供には興味あったとか？

507：無名の視聴者

相手は口リコンだな

というか羨ましすぎる

508：無名の視聴者

それな

相手を○したい

509：無名の視聴者

落ち着けよロリコン共

510：無名の視聴者

ロリコンじゃないだろ！もう50歳超えてんだぞ！

511：無名の視聴者

デビュー時の公開年齢が正しければな

あの見た目で成人って事がおかしい

512：無名の視聴者

子供が成長したら絶対子供の方が年上に見えるよな

513：無名の視聴者

絶対そうなるだろ

514：無名の視聴者

でも娘だったら応援しようかな

515：無名の視聴者

ファンなのはクレリアだけど、娘なら応援する

516：無名の視聴者

もし本人だったら？

517：無名の視聴者
世界中のファンが喜ぶ！

バーチャルニューチューバー情報交換スレ

239：名無しさん

おい！これ見ろ！

【お嬢様の正体】

240：名無しさん

ん？何があつた？

241：名無しさん

お嬢様がクレリアだった！

242：名無しさん

は？

243：名無しさん

マジ!?

244：名無しさん

これちよつと前にテレビで放送されたブイライブ特集の時の映像
だよな？

よくメールの内容に気が付いたな

245：名無しさん

声が似てると思ってたんだよ！

246：名無しさん

似てる所か本人じゃねーか!!

247：名無しさん

はつきり確認出来るし確定じゃん！

248：名無しさん

これどうなるん？

黙ってたって事は隠しておくつもりだったんじゃないの？

249：名無しさん

この動画の再生回数がえらい事になってるし、他のサイトでもきつと取り上げられてるよな

250：名無しさん

ヤバくね？

251：名無しさん

一度広まったらもう止まらないだろ……

引退してからずっと消息が分からなかった伝説のアイドルだし情報が入らないからみんな黙ってただけで絶対に気になってるはず

世界中のファンが食いつくだろうな

252：名無しさん

大丈夫なのかな？

253：名無しさん

正直不味いと思うよ？

今でも彼女のファンは多いし

254：名無しさん

これもしかするとお嬢様の活動が終わるぞ

255：名無しさん
え？何で!?

256：名無しさん
恐らくファンの多くがお嬢様チャンネルのメンバーになるだろうし配信を見る

俺も見るとお前らも見ると？

でも世界中に俺達を含め彼女のファンがどれだけいると思う？
それが一斉に動くんだぞ

257：名無しさん

ああ……そういう事か

258：名無しさん

どういう事？

259：名無しさん

集中するファンのアクセスにニューチューブが耐えられないんだよ

クレリアが所属してたフラワープロダクションの公式チャンネルは登録数が2億を超えてるけど、実際のファン数がその程度じゃないのは分かってるし

そんな数に対応出来ないだろ

260：名無しさん

おお……

261：名無しさん

やべえ……

262：名無しさん

住んでる地域や生活があるから同時に全員って訳じゃないだろうけど、それでもどれだけの数になるか……

公式チャンネルの1%だけだとしても二百万だけそんな数でおさまる訳が無いし、きつと争うようにアクセスする

無理だと思う

263：名無しさん

駄目じゃん……

264：名無しさん

これ投稿した奴もコメントからするとファンなんだろうけど彼女の事を考えるなら何もしない方が良かった

まあこいつがやらなくても他の誰かがやってたと思うけど

265：名無しさん

もうどうしようもないと思うけどブイライブにこの事を連絡する

266：名無しさん

手遅れかも知れないけどその方が良いね

267：名無しさん

私もメールした

268：名無しさん

頼む早く気づいてくれ

269：名無しさん

なあ……ライブみたい事前に別な所でチケットを購入して、その人だけが配信に入れるようにしたらどうかかな？

それでサーバーを1000万人まで耐えられるようにするとか

270：名無しさん

いけるかも知れないけどどれだけ手間がかかるか分からなくて後サーバーの増強は出来るだろうけど無駄が多すぎる

271：名無しさん

クレリアは月下グループの令嬢だし、やろうと思えば個人で出来そうじゃない？

お嬢様専用のサーバーとか

272：名無しさん

世界最大のグループだし本人も相当稼いでるし……意外と余裕なのでは？

273：名無しさん

あれ？なんか行ける気がして来たぞ？

274：名無しさん

彼女がバーチャルニューチューバーを続けたいと思っただけで多分引退して終わりだぞ……

ブイライブ社内にある自分のデスクで資料をまとめていると、大声で声がかけられた。

「瞳さんー！」

振り向くと、顔をこわばらせた後輩が息を切らしている。

「どうしたの？」

「不味い事になってます……これ見て下さい」

そう小声で言う彼女が、スマホを見せて来る。

「え……？何よこれ……」

彼女が見せて来たのはテレビのニュース速報だった、そこには「伝説のアイドルバーチャルニューチューバーへ！」というテロップが出ていた。

何で……何処から!?

いつかはバレると思っていたけど、これは……。

「瞳さん！どうしますか!？」

その声で我に返る。

……やれるだけの事はやらないと!

「各部署に連絡、緊急会議よ。社長にもすぐ伝えて!」

「はっ……はい!」

他の芸能人なら何も問題無かった。

だけど彼女は違う、人気の規模とファンの数が違い過ぎる。

昔「彼女に関する事は大抵大事になっていた」という説明を何処かで見たわね……。

私はそんな事を思い出しながら走った。

現在、私は千穂の家で千穂、美琴と共にくつろいでいる。

「クレリアちゃん、聞きたい事があるんだけど……」

テレビを見ていると、千穂が声をかけて来る。

「何だ?」

私は千穂の方へ振り返る。

「……クレリアちゃんってバーチャルニューチューバーやってるよね」

言い方からするともう分かっているようだな。

美琴はテレビに集中していて私達の会話を聞いていない。

「やっている」

私は千穂にそう答える。

「やっぱり。たまたま見たんだけどあの声と雰囲気で……」

「あっ!？」

千穂が話している途中で、突然美琴が声を上げる。

《番組の途中ですがここでニュースをお伝えします》

美琴とテレビの声に反応したのか、千穂が美琴へ視線を移す。

千穂と同様に私が彼女の方へ目を向けると、彼女はテレビを見つめている。

テレビはつい先ほどまで旅番組が放送されていたはずだが、ニュース番組に変わり私の事が報道されていた。

《元アイドルのクレリアさんがバーチャルニューチューバーとしてデビューしていた事が判明しました。クレリアさんは人類最高のアイドルと呼ばれ全世界に広く知られています。引退後から現在まで……》

こうして報道されているという事は……何か決定的な証拠が漏れたか？

噂程度でここまでするとは思えないからな。

「クレリアちゃん……これ」

千穂は少し不安そうな表情をしている。

「ねえ、これって本当？」

美琴が私の方を向いて言う。

「本当だ」

「やっぱり」

「美琴も気が付いていたのか」

「私が気が付いたのは最近だけだね」

美琴はそう答えながら頬杖をつく。

「今日は確認しようと思ってたんだけど、聞いた直後にこうなると思っただけな……」

千穂はそう言いながらニュースを見ている。

「大丈夫なのこれ？」

心配そうな表情を浮かべる美琴が聞いて来る。

「知られる事自体は問題無い」

「そう……それなら良いけど」

彼女は私の答えを聞いてほっとした表情を見せた。

「でも、ここで知られたのは意外だったんじゃない？」
千穂が私に尋ねて来る。

「そうだな。私はまだ知られる事は無いと思っていたが……恐らく何処かから決定的な証拠が漏れたのだろう」

故意かどうかは分からないが、恐らくブイライブ内だろうな。

そう考えながら会話を続ける。

「しかし、この程度の事がここまで大きく報道されるとは思っていなかったな」

引退した元アイドルがバーチャルニューチューバーになっただけで緊急放送を行うとは。

私の言葉を聞いた千穂と美琴が、驚いた表情でこちらを見た。

「クレリアちゃん？……貴女、自分がどれだけ影響力を持っているかを知らない訳じゃないわよね？」

美琴が少し責める様な口調で言ってきた。

「確かに活動中には有名になったが、引退してもう十数年経っている。人類にとつての十数年はかなりの時間だろう？」

今までも様々な流行があったが全て数年以内に廃れて行った、人気があったとはいえ十年以上経った私の影響もかなり減っている事だろう。

「はあ……クレリアちゃん慎重だし、頭も良い筈なのに……何で時々こうなるんだろう？」

千穂が頭に手を当て、溜息を吐いて言う。

「意外と力業で解決していた事も多かったと思うけど……まあそれは置いて。クレリアちゃん？貴女は全く気にしてなかったんだろうけど、まだまだ『アイドルクレリア』の人気は高いままなのよ？」
美琴が諭すように声をかけて来る。

「テレビで私の歌が取り上げられる回数は減っているし、様々なランキングからも消えているぞ？」

これは娘や友人と見ているから間違いないはずだ。

「テレビで取り上げられる回数が減っているのは今活動している人達をないがしろにしない為。後、ランキングに無いのは殿堂入りして

いるからよ」

美琴は私にそう断言した。

「正直、私はクレリアちゃんの歌を放送する必要は無いと思ってるけどね」

続いた千穂の言葉に美琴が頷いている。

放送する必要が無い、か。

「何故だか分かる？」

千穂が私に問いかける。

「現在も高い知名度があるからか」

恐らくこれが答えだろう。

二人の言った事が正しいのなら、私の歌は現在も多くの人類に聴かれていたという事だからな。

私の言葉を聞いて、美琴が話し始めた。

「その通りよ。ニユウチューブを始めとした色々な動画サイトにはクレリアちゃんの映像や歌を使った動画があるし、今も貴女の歌を聞いている人は多いの。そして、貴女の事を知らなかった世代からもそれに触れてファンになる子が出て来る。実際に健太と葉子ちゃんも私達が聞いていた歌を耳にして貴女のファンになったのよ？」

すると、今度は千穂が口を開く。

「後は……そうだ。音楽配信サービスにはクレリアちゃん専用コーナーがトップにあって今も売れ続けてるよ？」

「クレリアちゃん」

突然、美琴が真剣な表情で私を見て話し出す。

「……貴女、自分の人気の高さを甘く見過ぎてる。十数年で消えるような人気なら『人類史上最高のアイドル』なんて言われる訳が無いのよ。本当にクレリアちゃんが見向きもされなくなるには……人類から忘れられるにはまだまだ時間が必要だわ」

「そうか、私の考えが甘かったな」

美琴の話を聞き、私は自分の考えが甘かった事を認めた。

「前から分かってたけど、クレリアちゃんって考える時は必要以上に考えるけど気にしない時は本当に気にしないよね……」

千穂がそう言いながら私を見ている。

彼女達に対して必要以上に思考を読む気は無いので正確には分からないが……恐らく感心と呆れが半々、といった所だろうか。

恐らく、これからも私は守る対象には必要以上に手を回し、興味の無い事にはあまり関わらないのだろうか。

さて、考えを戻そう。

お嬢様がアイドルクレリアだと知られた訳だが、これからどうなるだろうか。

私はそう思いながら二人の会話を聞く。

「これ……また騒ぎになる気がするんだよね」

千穂が美琴を見て暗い声を出す。

「そうね、お嬢様があの『クレリア』だと知ってファンが……世間が黙っている訳が無いわ。クレリアちゃんがどうにかなるなんて事は絶対無いと思うけど、面倒な事にはなりそうよね」

そう言う美琴の声も少し暗い。

「お前達には何も問題は無いから気にするな」

アイドルとしてデビューした時や引退後に友人達には迷惑をかけたので、現在はそういった事に対する対策はしてある。

「その辺りはクレリアちゃんを信じてるから心配してないよ?」

「私達が気になっているのはお嬢様としての活動の方、ブイライブとニューチューブの事よ」

「うん……もう『お嬢様』として活動するのは難しいかも……」

二人からそう言われて私は考える。

……確かフラワープロダクションの公式チャンネルの登録者数は2億程だったはず。

私のファンがその登録者の1%だとすると約二百万人、その中の半数が実際に行動を起こさなかったとして約百万人。

更にその内の四分の一が睡眠、仕事、学業などでアクセスしないと考えてもまだ二十五万人ほどいる。

この数ならば問題無さそうだが、実際どうなるかは分からない。もつと多い可能性もあるからな。

もし騒ぎにならなかつたり、なつたとしてもニューチューブに問題が無いのならそのまま活動を続ければいい。

配信が不可能になる状態になった場合は引退して数百年程時間を空け、私の事が完全に忘れられている事を確認してから再開しよう。

その場合、バーチャルニューチューバーという文化自体が消えていく可能性もあるが……その時はまた別の何かがあるだろう。

そんな事を考えながら、私は二人と会話を続けた。

私の事が報道された翌日の朝。

配信をしようとニューチューブのトップを開く。

……ん？

いつもならば待ち時間など無くつながるのだが、今日は全くつながらない。

そのまま数分待ち続けたが、最終的にエラー画面に切り変わった。ふと、千穂と美琴が昨日言っていた事が頭をよぎる。

昨日の報道の影響かと思っていると、私のスマホが着信を知らせた。

相手は四期生マネージャーの瞳だ。

「どうした?」

「クレリアさん!今からこちらに来れますか!」

電話に出た途端、挨拶も無しに彼女が大きな声で言う。

その声からは明らかな焦りが感じられる。

「私の事がニュースに流れた事と関係しているか?」

そう確認すると彼女は一瞬言葉を詰まらせ、話し始めた。

「はい……既にブイライブには電話やメールが大量に押し寄せていて、問題になっています。色々とお話したいので来ていただけませんか?」

「今から行く」

「ありがとうございます!お待ちしています」

瞳の返事を聞いて通話を切ると、私はすぐにブイライブ本社に向かった。

ブイライブに到着した私は、待っていた社員に誘導され会議室へと通された。

部屋に入り席につくと、社長が口を開く。

「クレリアさん。突然の呼び出しにもかかわらず、来ていただいてありがとうございます」

「ブイライブの経営陣も揃っているな。」

「構わない。何処から漏れたかは分かっているのか？」

「……」説明します」

私が尋ねると、ブイライブから今回の事についての説明が始まる。事の発端は、テレビ局からブイライブに取材をしたいという話が来た事だという。

最近人気が出始めているバーチャルニューチューバーの特集を放送したいという事で、大手の一つであるブイライブに声をかけたようだ。

放送は深夜帯であったが、テレビに取り上げられる事はかなりの宣伝効果がある。

その為、この話をブイライブ側は喜んで受けた。

そして取材自体は問題無く進んだ、バーチャルニューチューバーの事だけでは無くブイライブの社内の様子なども撮影され、無事に放送される事になる。

本来ならばこのまま何の問題も無くバーチャルニューチューバーとブイライブの知名度が上がるはずだったが、視聴者の一部が社員のパソコンの画面を確認するために映像を解析したらしい。

ただ、これは想定内の出来事で、ブイライブ側は取材の間だけは何を見られても平気なように準備していたという。

だからこそ、事前にテレビ局側へ映像処理はせずにそのまま放送して構わない、と伝えていたらしいのだが……。

ここで一つだけ誤算が起きた、とある社員が社外秘のメールを表示したまま席を立っていたのだ。

単純なミスなのか故意なのかは分からないが、これが決め手となった。

現在は映像技術が進み、テレビ放送に限らずどのような画像や動画も解像度が高い。

そのため、気まぐれに社員のパソコンの画面を拡大解析した視聴者

達は、アイドルのクレリアが「お嬢様」である事が分かるメールをはつきりと目にする事になった。

引退後から全くその動向が分からなかった伝説のアイドルの情報と決定的な証拠だ、手に入れた者達は我慢する事が出来なかった。

彼等は、嬉々としてその情報を動画、掲示板、ネットニュース等に証拠を添えて流した。

その後、多くのファンが知りたがっていた伝説のアイドルの情報は一気に世界に拡散し、世界各国のテレビ局も食いつき動き出した……という事らしい。

「これは、間違い無く……こちらのミスです……申し訳ありません」その言葉の後、全員が一斉に立ち上がり頭を下げた。

皆、表情が硬く、強い後悔と不安を抱えている事が分かる。

彼等がここまでするのは、私が被害を受けた本人という事以外にも理由があると考えている。

私が月下グループの者である事は人類の中では有名だ。

そして月下グループはブイライブに資金を提供している……いや、していた……だったか？

その辺りはどちらでもいいか。

とにかく、関係者である私に迷惑をかければ、月下との関係が悪くなると考えているのだろう。

とは言え、彼等にずっと頭を下げさせていても意味は無い。

「私は気にしていない。いつか知られると考えていたからな」

これは本心だ、私達が本気で隠していない以上、いつかどこから漏れるだろう。

私の言葉を聞いた社長が頭を上げ、こちらを見た。

「そうだったとしても、今知られてしまったのはこちらの落ち度です」

「問題無い」

「しかし……」

「今するべき事は私に謝り続ける事か？」

私は彼等の言葉を遮って問う。

「謝罪したいのなら後で好きにだけするといい。今は全員座れ
そう言うのと、全員大人しく席に着いた。」

「これからブイライブとしてはどう対応する?」

私が問いかけると、彼等は更に表情を歪ませた。

「クレリアさんが来るまでも話し合いをしていたのですが……」

暫くの静寂の後、瞳が目を伏せながら話し始める。

「現在起きている事態を考えると……現時点では『お嬢様』に……活
動を休止して頂くしか無いと、判断しました……」

全員の後悔と不安が強いのはこの決定を下した事も関係してい
たのかも知れないな。

確かに、この状況が続けばニューチューブ全体とブイライブに大き
な被害が出る。

私としては、この決定に異議は無い。

「分かった。私は活動を休止する」

「本当に……申し訳ありません」

私の宣言の後、瞳の縛り出すような眩きが聞こえた。

「あまり思い詰める必要は無いぞ?」

活動を休止した事で私の周囲に危険が及ぶ訳では無いのだから。

大学での昼休み。

私が食堂でスマホを操作してニュースを手早く見ていると、ある記
事が目に入りました。

「嘘……」

私はそれを見て、思わずそう呟いてしまいました。

「沙織? どうしたの?」

「い、いえ……何でもありません」

動揺を押さえつけ、返事をする。

……今日はもう帰りましょう。

「どうなっているのか調べないと……」
体調が悪いと言い大学から帰った私は、そう呟きながらPCの電源を入れました。

……メールが来ているようですね。

「これは……」

メールはブイライブからでした。

内容はしばらく間活動を控えて欲しいという事と、後日詳しく説明をする、という物でした。

あのニュースにこのメール……まさか本当にクレリアさんは……。

そう考えて呆然としてみると、スマホが着信を知らせます。

「ナタリアさん」

「沙織！ニュース見た!？」

私が電話に出て名前を呼ぶと、ナタリアさんが普段の会話が嘘の様な速度で言いました。

「はい、一体どうなっているんですか？」

「分かんない……わかんないけどネットもテレビもクレリアの話題でいっぱいだ」

不安そうな声のナタリアさん、私もこれからどうなるのか分からず不安が募る。

「ブイライブからのメールは見ましたか？」

「うん……私は取りあえずベティと連絡取ろうと思ってる」

はっ……混乱して忘れていました。

「そうですね……ベティさんにも連絡しておきましょうか」

何があるか分かりませんから、連絡は取り合っておくべきでしょうね。

「話せた方が良くからクロスコードを使おう。ベティにも連絡しとくよ」

「分かりました」

「全員いるわね？」

「いるよー」

「はい」

私はベティさんの言葉に返事をする。

あれからすぐにクロスコードを使い、今回の事について話す事になりました。

「二人は何をどこまで知ってる？」

ベティさんに私は知ってる事を話す。

「知っている事は殆どないんです。ニュースを見て急いで大学から帰って来て、自宅で調べようとした所にナタリアさんから連絡を受けて……そこでベティさんと連絡を取ろうという話になったんです」

「私もそんな感じ。後、ニューチューブはもうつながらなくなってる」

「そう……」

「ベティもブイライブからメールは貰ってるんでしょ？」

「活動を控えて欲しい、説明は後でするってメールよね？」

「うん」

そこで無言の時間が生まれました、二人は何を思っているのでしょうか……？

「ふうー……これってつまり、クレリアさんがあのクレリアさんだったって事よね？」

「これだけ騒ぎになってるし……間違い無いでしょ」

「本当に本物のクレリアさんだったんですね……急に緊張してきました」

「まあ……気持ちは分かるわ。私マニオカートで勝負したし……」

私の言葉を聞いて静かに答えるベティさん。

……正直羨ましいです。

クレリアさんと会話してから私達はアイドルのクレリアさんの事を調べましたが、本当に凄い……いえ、凄いという言葉では収まらない

い方でした。

二人もクレリアさんの残した記録に驚愕したと話していましたし。その時の私達は本人だなんて全く思っていないませんでした……。

「もう、出来ないかもねー」

ナタリアさんが暗い声を出している。

「もしこうならなかったら、オフコラボで死ぬほど驚いていたんでしようね……」

私もそう思います、ベティさん。

ですが……。

「こうなってしまうては……難しいでしょうね」

私は今の状況を考えて、感じた事を口にしました。

「だよねえ……」

「世界中に広まつてるでしょうし、多分もう收拾がつかないと思うわ……」

「メールでは何も言ってなかったけど、多分ライブに問い合わせが来てるよね？」

「大量に来てるでしょうね。私達に活動を控えろと言ったのは、向こうがまともに動けないからかも知れないわ」

「お嬢様の正体はその辺の有名人程度なら、こんな事にはならなかったと思うけど……」

「確かに、彼女じゃ無ければ平気だったわよね」

二人は色々な事を話しています。

……この状況で私達に出来る事は何もありません。

難しい事だと思いますが……出来る事なら四人のまま活動を再開したいです……。

活動休止を了承した後、私はライブと今後の事を話し合う。

その結果、ライブ側が考えた方法を試す事にした。

まず「お嬢様」がアイドルのクレリアである事を正式に発表。

そして、現在起きている問題が解決するまで無期限の活動休止を決定した事を報告。

その後「問題が解決すれば復帰するが、長引くようなら引退も視野に入れている」といった事を話す私のインタビュ―映像を放送する。

これは世界中に「このままではクレリアの活動が終わる事になる」と伝える事が目的らしい。

彼等は「上手く行けばファンが周囲のファンを抑え始める状況を作り出せる」と言っていたが、そう上手く行くだろうか。

もし上手く行けば放っておくだけで効果があるので、取りあえずやってみる価値はあるだろう。

ただ、彼等が言うにはこの方法は一般的なアイドルや有名人では全く効果が無いらしい。

世界中に膨大な数のファンが存在し、絶大な人気を誇る私だからこそ実行に移す事を決めたそうだ。

この話を聞いた時、私は引退してから十数年が経っている事を話したのだが……返って来たのは千穂と美琴によく似た答えだった。

一通り話した後、彼等は苦笑いを浮かべ「貴女は例外ですよ」と言っていた。

私は何事にも例外があると考えているのだが……今回は私自身が例外になったようだ。

その後も彼等は話し合いを続けていたが私自身が行う事はほぼ無いので、自宅に帰り待機する事にした。

ブイライブでの話し合いからある程度の時が経ったが私はまだ復帰しておらず、現在はバーチャルニューチューバーになる前の生活に戻っている。

以前の話し合いによって決まった行動は速やかに実行に移されたが、それだけで問題が解決すると考えている者は一人も居なかった。私が日々を過ごしている間も各所が動き、騒動を治めようと奮闘している。

最近までテレビや雑誌、ネットなどに今回の事に対して語る私の姿が連日のように取り上げられ、それと同時に過去の私の映像やライブの様子なども繰り返し放送されていた。

友人からも、有料チャンネルで連日アイドルクレリアの特集が組まれ放送されている、と聞いている。

最初期に比べれば多少おさまって来ているものの、まだ落ち着いたと言えない状況だ。

私の情報が全世界に広がった後、京介からも連絡があった。

彼は現在フラワープロダクションの役員になっているのだが、フラワープロダクションも今回の騒動を治める為に動く事を決定したらしい。

礼を言う私に、彼は「フラワープロダクションがここまで大きくなったのはクレリアさんのおかげです。それに……個人的にも子供の命を救ってくれた恩を返しきれっていませんから」と答えた。

京介は私が引退した際に望みを言わず断っていたのだが、以前彼の子供が難病といわれる病を発病した際に望みを聞き、治療している。私の元にやって来た時、彼は一度断った事を気にしていたらしく、心中が穏やかでは無かった。

難しい表情をする彼に「生きている内に望みを言わない場合、お前が死んだ後にも聞きに行くつもりだった。これで安らかに眠れるな」と告げると、彼は突然涙を流し呆れたように笑った後、頭を下げしつ

かりとした口調で「お願いします。僕の子供を助けて下さい」と言っ
た。

どうやら彼はその時の恩を返したいらしい。

私が「貸し借りはあの時点で無くなっている」と言うと「友人を助
ける事にそれは関係無いですよ」と返された。

恩返しだという事は分かっていたが、友人である彼がやりたいと言
うのなら好きにさせる事にした。

そして、この事態に娘達が黙っている訳も無く、あの子達も色々と
動いている。

どうやら私をバーチャルニューチューバーとして復帰させたいら
しい。

ニューチューブ自体は数日で接続出来なくなっていた状態から回
復したようだが、そこから更に月下グループが手を貸して色々行っ
ているようだ。

今後は出来るだけ問題が起きないようにする、と言っていたな。

何かあれば報告するように言っている、連絡が来ないのなら任
せて問題無いだろう。

更に、今回の件で周囲にそれなりの影響が出た。

バーチャルニューチューバー自体の知名度が上がり、天津風とブイ
ライブ四期生達の周囲にも多少の騒ぎが起き……最終的にチャンネ
ル登録者数が急激に伸びた。

私はその報告が来た時、確かにそうであってもおかしくは無いな、と
納得していた。

一部の視聴者達は、お嬢様が天津風のチャンネルに出ていた事を
知っている。

その為「天津風はクレリアの自宅で働いているメイド」という話が
広がり視聴者が急激に増え、四期生達は私と同期であった事で話題と
なり、こちらにも急激に視聴者が増えた。

問題があればすぐに報告するように皆に伝えたが、風香も同期達も
手に負えないような問題は起こらなかった。

むしろ、知名度が上がった事を喜んでいたな。

「思わぬ出来事で名前はかなり売れたけど……維持するのが大変そうだなあー」

配信を終え、そう言いながら私はベッドに寝転がる。

同期のお嬢様であるクレリアさんがあのアイドルのクレリアさんであった事が公表されてそれなりの時間が経っている。

今回、私達も「あのクレリアの同期」という理由で注目され、知名度を得たけど……。

☒今の登録者数は維持出来ないだろうなあ☒

おっと、思わずロシア語が出ちゃった。

日本語にも慣れたけど、呟く時はつい母国語が出ちゃう。

うーん……どれだけ残ってくれるかなあ。

クレリアさんの同期だと言ってもそれだけだしなー。

ベッドで転がって考えていると、スマホが鳴る。

着信音は私の一番のお気に入り、クレリアさんの「イモータルプリンセス」だ。

「もしもしー」

「ナタリア、今クロスコード出来る？」

電話に出るとベティがそう聞いてきた。

「出来るよー」

「じゃあお願い」

「はいはい」

返事をしながらクロスコードを起動し、参加する。

「あ、こんばんはナタリアさん」

すると、気が付いた沙織が挨拶して来た。

「こんばんはー」

私も挨拶を返す。

「ベティさんに呼ばれたんですか？」

「うん」

「二人共、来てくれてありがとう」
ベティが私達に声をかけて来た。

「平気だよ」

「丁度時間が空いてましたから平気ですよ」
わざわざ呼ぶなんて何かあったのかな？

「今日は二人に相談があつて呼んだのよ」

「なんですか？」

沙織が聞いたから私は黙って居よう。

「配信でお嬢様にメッセージを送ろうと考えているんだけど……参
加しない？」

おっ！いいね！

「やるやるー！」

これから楽しくなると思つてたのにこんな事になつちやつたから
ね。

電話やクロスコードで話した事しかないけど、私はお嬢様の事を気
に入つてる。

あのクレリアさんだと知つちやつた今では緊張しちゃうけど、それ
は変わらない。

おっと……それはそうとして、皆に言いたい事があるんだつた。

「あのさ……テレビでとかでクレリアさんの声明つて言うか、今回
の事に対するコメントが放送されてるじゃない？」

「はい、そうですね」

「最初はどのチャンネル見ても同じ映像しか無かつたわね」

テレビも番組中止してずっとクレリアさんの特集してたからねえ。

「それでさ……クレリアさんって本当に50歳超えてるのかな？」

うん……私が言いたいのはこれだ。

世界中の女性に喧嘩を売るような変わらぬ美貌……と言うか、テレ
ビで過去の映像が流れてたけど、全く変わらないんだけど。

「……言いたい事は良く分かります」

「ウィクペディアに載つてる事だけど、世界でも珍しい奇病の影響
らしいわよっ」

「それは私も読んだけど……ちよつと羨ましくなったりしない？」
クレリアさんにはクレリアさんの苦労があるんだろうけど……
やっぱり羨ましいという気持ちはなくせないよー。

「まあ……正直ちよつと羨ましくはあるわね」

「気持ちは分かりますが、彼女から見れば老けて行くのは健康である証拠だと思うんです……だからあまり声を大にして言えないというか……」

「あー……そっか。そうともとれるのかあ……」

もしかしたら彼女自身は皆と一緒に老けて行きたいと願っているかも知れない。

……でもなあ。

私は、問題無く若く美しいと言われるのは基本的には10代、限界で20代までだと思ってる。

多分、30代に入ると「綺麗」と言われてもお世辞のように感じちゃうと思うんだよね。

確かに30代でも綺麗な人はいるけど、殆どは化粧で誤魔化している。

よく化粧品のCMで女優さんがすっぴんで綺麗な肌を見せてるけど……あれは違う。

あれは「すっぴんに見える化粧」をしているだけだからね。

「やっぱり羨ましいなー」

私がそう言うと、ベティと沙織の笑い声が聞こえた。

2人だって本当はそう思ってるでしょ！

バーチャルニューチューバーのお嬢様がアイドルのクレリアである事が世界に知られてから約半年が過ぎ、2038年の8月を迎えた。

私は談話室で用意された牛乳を飲む。

周囲では数人の娘達が話に花を咲かせている。

もうすぐ「お嬢様」としての配信が再開される予定だ。

この半年で同期達の応援配信などが行われ注目を集め、その後にも各人も動き出した。

その結果、騒動はこの半年でほぼ治まっている。

今回、国が動いたのは娘達の命では無く、国の方から申し出て来たという。

騒動の規模の大きさに危機感を感じたらしく、アメリカと日本、そして中華連合の三国が連絡を取って来たらしい。

カミラはあの三国が同時に申し出たのは偶然では無く、事前に話し合った結果だと言っていたな。

私が日本に多く滞在し活動の拠点としている事を理由に、日本の総理大臣が交渉役を押し付けられていた、という話も聞いた。

今回の出来事が落ち着いた後、ブイライブからも一度謝罪され、原因となったノートパソコンを放置した社員は降格、減給となった。

この社員は本来ならば解雇になる予定だったが、最終的に私が阻止している。

私は始めから原因となった社員をどうしようするつもりは無かった。元々ばれても構わないと考えていたからな。

ただ、わざわざ助ける気も無かったので、処分はブイライブ側に任せ放置していた。

しかし、ある時社員の中で動きが起きる。

瞳を始めとした多くの者達が私に彼の優秀さや、どれだけお嬢様の為に動いていたかを語り、解雇だけは許して欲しいと訴えて来るようになったのだ。

私は全ての話を聞いたが「なぜあのような単純なミスをしたのか疑問に感じる程に優秀」という印象を受けた。

その上かなり熱狂的なクレリアのファンで、あのまま解雇になってしまったら絶望し自殺するのではないか……と周囲から本気で心配されていたようだ。

私は一度だけ彼に会ったが、その時の彼は表情の抜け落ちた顔をして現れ「申し訳ありませんでした」とかすれた小さな声で謝罪し、ゆっ

くりとその場に土下座をしたまま動かなかった。

その時の彼の精神状態はかなり悪く、辛うじて自分を保っている状態だった。

周囲の者達が「あのまま解雇になってしまったら絶望し自殺する」と判断した事は、それほど間違っていないかと思う。

他者が聞けばまともな謝罪には聞こえなかっただろうが、私は彼が心から後悔し謝罪した事が分かる。

そのため、私は謝罪を受け入れて処分を延期させた。

処分を延期させた理由は、これまでの仕事の優秀さに対してあまりにも簡単なミスをした事に疑問を感じたからだ。

その後、私は今回の事について調べて貰ったが特に証拠は見つからず、本当に彼がミスをしただけ……という事が分かる。

何かあるかも知れないと考えていたが、こんな時もあるだろう。

私も時々娘や友人が呆れるようなミスをする事があるので何も言う事は無い。

最近、自身の人気に対する認識の甘さを指摘されたばかりだしな。

こうして彼自身のミスである事が確定した後、私は社員達の嘆願について考える事にした。

彼が優秀である事は分かっているし、故意でもない。

そして、人間間でどう判断されるかは知らないが……私の感覚では起こしたミス自体はここまで罰せられる物では無い、と考えている。

更に、デビュー前……私がバーチャルニューチューバーになる事が決定した時から私の活動を支えるために動いていた。

これらを加味し、彼の解雇は阻止する事にした。

色々と考えているが、そもそも私は知られてもかまわないと考えていた。

恐らく、例え故意であつても私が彼に何かを思う事は無かつただろう。

方針は決まった。

今後も彼の能力はブイライブの為に使って貰う。

そう決定した後、私はすぐにブイライブに話を通した。

その結果彼の処遇は降格、減給に落ち着き、ブイライブ内の問題は終了した。

ぬるくなった牛乳を魔法で冷やしなおし、口に運ぶ。

私は、自身が譲れないと感じる事は絶対に譲らないが、それに当てはまる事が非常に少ない。

そして、基本的にそれ以外の事はどうなろうと構わないし、起きた事を楽しんでいる。

だから私は引退という形でも構わなかったのだが……。

最終的に娘、友人、ファン、国が動き、私はバーチャルニューチューバーの世界へと戻れる事になった。

国は別な理由もあったようだが、とにかく多くの者達が「お嬢様」の為に動いてくれた今の世界も楽しく感じる。

この先、他の世界に足を延ばす事もあるかも知れないが、地球は最後まで楽しもう。

後日、私は動いてくれた親しい者達に礼を言いに行った。

その際に、友人の一人が「バーチャルニューチューバーを先にやった方が良かったかもね」と言っていたが、アイドルにスカウトされる前にバーチャルニューチューバーに誘われていたらどう反応していただろうか。

今回は単純なミスから問題が大きくなったが、人類社会に混じっていればこういった事はそれなりに目にする。

何がきっかけで大事になるかは分かりにくい物だな。

勿論、これは人類社会だけでは無く、宇宙規模でも起こり得る事だ。

広い宇宙を彷徨う大きな星が偶然地球に向かうかも知れないし、他の星系の知的生命体が訪れる事もあるかも知れない。

今までの事を考えると……私が居なかった場合、地球は高い確率で無くなっていたのではないだろうか。

私はPCに表示されている時刻を見た。

現在は2038年8月20日の13時50分を示している。

14時から私はバーチャルニューチューバー活動を再開する。

しかし今までと同様に、とはいかなかった。

「お嬢様がバーチャルニューチューバーとして今後も活動する事は、ブイチューバー業界に良くも悪くも大きく影響を与える事になるのではないか」と考えた関係者から、色々対策を施したいと頼まれ、私はそれを了承した。

その結果、私の配信には入場制限を始め、1配信中のスーパーチャットの個人、全体の総額制限、全ランキングからの除外、チャンネル登録の無効化など、様々な制限がかけられる事になった。

先日、娘達からも「色々対策しました」と連絡を受けている。

彼女達を信じていない訳では無いが、その辺りは実際に行ってみなければ分からないだろう。

私は好きなように配信するが、ブイライブ側の意見を無視せず守るべき所は守る気にいる。

だが、それでも場合によっては周囲がまた忙しくなるかもしれない。

「主様、準備は整っております」

そんな事を考えていると、ヒトハが私に声をかけて来た。

他にも三人の侍女が居る。

「ありがとうございます」

「お飲み物はどういたしますか？」

礼を言うと、彼女が微笑みながら聞いて来る。

「貰おう」

「かしこまりました」

私の言葉を聞いた彼女は、そう言って配信部屋に備え付けてある冷蔵庫へを向かった。

ヒトハ達がここに居るのは、配信に関わりたいと頼まれたからだ。特に問題は無いので好きにさせる事にしたのだが、順番に交代して補佐をする事にしたようだな。

侍女ではあっても少し立場が違うジャンヌも参加を望み、侍女隊に対して私に次ぐ影響力を持っているカミラは一度は参加すると答えた。

友人兼、たった一人の警備隊員である信長は辞退したらしい。

「主様、どうぞ」

その言葉と共に、私の前に飲み物が置かれる。

私はその飲み物を飲みながら配信開始まで過ごす。

「こんにちはは人類達。お嬢様だ」

：うおおおおおお!!? 500000

：クレリアー!! 結婚してくれー!!? 500000

：☒伝説再び!!☒? 25700

：お嬢様ー!!? 500000

：☒世界最高のアイドルだ!!!☒? 43800

配信を開始して最初の挨拶をした直後、一気にコメントとスーパーチャットが流れて行く。

演者が誰であるのか知られていない頃は日本人の視聴者が全体の9割以上を占めていたが、現在はかなり多くの言語が交じりあっているのが分かる。

ヒトハは問題が起きていないか確認しているようだ。

「問題はありません。そのままどうぞ」

ヒトハの言葉を聞き、私は口を開く。

「色々あったが、こうして活動を再開出来た」

：クレリアさん!!?10000

：またライブして下さい!待ってます!?!5000

：☒僕は子供ですがクレリアさんを見て惚れてしまいました、お付き合ひしてください☒

視聴人数が多いせいか、流れるコメントが止まらない。

「既に世界中に知られているかも知れないが、私はただのお嬢様という事になっている」

日本語の後、続けて英語、ロシア語、中華語などで同じような事を言っておく。

現在のニューチューブには自動で言語を翻訳し字幕表示する機能がついてるのであまり意味は無いかも知れないが、念の為だ。

自動翻訳は人類が開発し始めた技術の一つだが、まだ問題が多く残っているらしいな。

もつと開発が進めば、わざわざ他言語を学ばなくとも世界中の者と自由に会話出来る日が来るかも知れない。

：やっぱマルチリンガルってすげえな……

：☒分かりましたお嬢様!☒

：☒放送のお姿は現在のお姿ですか?☒

：お嬢様の言葉は絶対!

：全く姿が変わっていないなくて驚きました!本当に超越者みたいですね!

：☒お嬢様!お嬢様!☒

：テレビでお嬢様を見ました。お嬢様の美しさが変わっていないくしてしばらく放心してました

：若作りというレベルでは無いお嬢様の若々しさと勝る者の無い美しさに嫉妬する気も失せています!応援してます!

私の姿に関するコメントがかなりあるな。

彼等は50歳を超えても全く姿が変わらない私に驚いている様だ

が、こうして見ている限り私の事を「人外」と考えている者はいないようだ。

今回の事でアイドルとしての人気あまり衰えていないと分かったが、一部の医療関係者や研究者は私に別の魅力を感じていた、という話も聞いている。

不老不死を実現したい者達にとって、不老を実現しているとも言える私は何としても研究したい対象だったらしい。

娘達が全て潰したようだが。

私の病気を調べ、意図的に姿を維持出来る方法を確立しようと考えていたらしいが……許可した所で今の人類では恐らく何も分からなかったのではないだろうか。

これから人類自体が更に進化するか遺伝子学などの研究と技術が進めば、人類が不老不死になる事もあるかも知れないな。

そう思いながら私は話を続ける。

「これからの配信について少し話しておこうと思う」

：これからが楽しみ

：ライブ見たいです！

：☒やってなかった色々なゲームをして欲しい☒

：コラボもどんどんやって！

少し話すたびにコメントが加速するな。

「そうだ、言い忘れていた。私の配信にかけられた制限の詳細は専用ホームページを見てくれ」

そう言ってから私は以前と同様に不定期に活動する事と、コラボの配信時は基本的に私以外の配信で行う事を話し、雑談をしてから今回の配信を終了した。

【人類最高のアイドル】クレリアを応援しようぜ！総合 その36

369：無名の視聴者

お嬢様復活！

370：無名の視聴者

かなり大きな事になったからどうなるかと思ったけど良かった

371：無名の視聴者

しかし色々制限が入ったな

372：無名の視聴者

確認して来たけどあれ位しないと駄目だろ

373：無名の視聴者

それな。

総額の上限を決めとかないとみんな破産するまで投げるかも知れんし、入場制限もしておかないとまたサーバーが耐えられないかもしれん

374：無名の視聴者

稼げるだけ稼げばいいんじゃない？

375：無名の視聴者

まあ自己責任ではあるんだけど

多分他のバーチャルニューチューバーが潰れる事を危惧したんじゃないか？

それで色々制限してるんだと思う

376：無名の視聴者

あの程度で何とかなるのか？

377：無名の視聴者

大丈夫じゃない？

お嬢様だつてその辺は言われてるだろうし、複数の推しを持つ事も普通だし

まあ……最終的どうなるかは分からんけど……

378：無名の視聴者

お嬢様は間違い無くブイチューバー界でもトップにはなるだろうけど、だからつて俺達が他のブイチューバーのファンをやめる訳じゃないだろ？

379：無名の視聴者

せやな！

380：無名の視聴者

俺はお嬢様が居る四期生推しだぞ！

381：無名の視聴者

俺はバーチャルニユウチューバー全員だ！

……見る時間が足りない

382：無名の視聴者

全員は流石に草生えるw

383：無名の視聴者

どんだけいると思つてんだよw

384：無名の視聴者

何窓もして同時に見てる

385：無名の視聴者

それちゃんと見れてんの？

386：無名の視聴者

全体をぼんやりと見て把握する

387：無名の視聴者

武人みたいな事言うなw

388：無名の視聴者

突然だがお嬢様は中身でニューチューバーやらんのかね？

完全にバレてるんだし、わざわざバーチャルでやる必要無くない？

389：無名の視聴者

どうだろ？そんな気は無いように見えたけど

390：無名の視聴者

アイドルとしての知名度が無い状態でやりたかったんじゃないか

？

391：無名の視聴者

それこそもうバレてるし意味ないんじゃない？

392：無名の視聴者

ペンだ子がかawaiiそうだろ

393：無名の視聴者

ああそうか、こんなに早くやめたらキャラクターデザイナーを担当したペンだ子がブチ切れるな

394：無名の視聴者

というか絶望しそう

クレリアの大ファンだつて公言してるし、お嬢様のキャラデザの依頼来た時狂喜乱舞したんじゃない？

395：無名の視聴者

でも本人とブイライブは隠そうとしてたし、ペンだ子は中身知らなかった可能性もあるよな？

396：無名の視聴者

それならニュース見た時に狂喜乱舞してるなw

397：無名の視聴者

結局狂喜乱舞してて草

398：無名の視聴者

同期も知らなかったらしいからペンだ子も知らなかった可能性が高んじゃない？

399：無名の視聴者

四期生三人の応援配信は感動した

400：無名の視聴者

正体を知っちゃつたらやりにくくなりそうだよな

401：無名の視聴者

オフコラボで驚かす予定だったのかもね

402：無名の視聴者

まあ驚くやろなw

やらなくて良かったかも知れないぞ？

放送事故起きそうw

403：無名の視聴者

まずあの見た目に驚くだろw

404：無名の視聴者

何度話題になってもやっぱその話にはなるよな
若すぎるから

405：無名の視聴者

何回見ても凄いやなあ……

あれで50歳超えてんだぞ？

406：無名の視聴者

本気で人類の進化の一端が垣間見えたと思ってる。

彼女を見てるといつか不老不死が実現するって思える。

407：無名の視聴者

まあ、気持ちは分かる。

能力は総じて高いし、美しく若いまま……これで不死だったとしても納得してしまう

408：無名の視聴者

彼女が神だったら信仰する

409：無名の視聴者

それなw

410：無名の視聴者

世界中のファンが信徒に変わるのかw

411：無名の視聴者

そしたら今ある宗教をブチ抜いて最大勢力だなw

412：無名の視聴者

既に一部はそんな感じかも知れん

413：無名の視聴者

確かに神聖視してる奴は居そうだよな

414：無名の視聴者

大丈夫なのかそいつら……

415：無名の視聴者

近くにそんな感じの人居るけど……「余計な事をしたらクレリア様に迷惑がかかる上に活動を見守れなくなる!」とか言ってる大人しいよ?

下手な奴より安全そう

416：無名の視聴者

あ……そっかクレリアの事を思ってるからこそ違法な事はしないのか

417：無名の視聴者

当然だ!クレリア様に仕える事が出来なくなるだろ!?

あの方を貶めるならばこの身を捨てて報復するが、出来る事ならば何事も無く見守りたい……

418：無名の視聴者

ひえっ……

419：無名の視聴者

マジモンやんけ……

420：無名の視聴者

本当に安全なんですかね……？

421：無名の視聴者

クレリアの事を呼び捨てにする位じゃ怒らないし、ファンじゃなくても普通に接して来るし平気だぞ？

むしろ軽いクレリアのファンってだけでも凄く良くしてくれるし、彼女の悪口さえ言わなければ良い奴等だと思う

422：無名の視聴者

まあ10人集まれば彼女のファンが最低でも3人は居そうだし、ファンじゃない人は居ても嫌って人には会った事無いな

423：無名の視聴者

言ったら色々と危ないからでは……？

424：無名の視聴者

クレリアの事嫌いな奴なんてほとんど居ないと思うけどなあ

425：無名の視聴者

ほとんどいないけど、いない訳じゃないんだよなー

426：無名の視聴者

仕方ないね

よし……。

今日も問題無く終わりそうですね。

そう思いながら部屋で本を読んでいると、部屋のドアがノックされた。

「はい、どなたですか？」

私が返事をする、扉の向こう側から声がある。

「言った通り来たわよ」

……ああ、今日の昼に声をかけて来た新人達ですね。

「入ってかまいませんよ」

そう言っただけで私は二人を部屋に招き入れた。

「……私の話を聞きたい？」

夜の自由時間に部屋に来た新人候補生二人に、私は突然質問された。

「うん、どんな感じでここに来たの？」

「後、……この事とかも聞きたいわ！」

はあ……先輩に対して敬語を使う事も出来ないのね。

……まだ幼いし、来てから一月も経っていないのならこんな物かしら。

私も最初は偉そうにしていたけれど……当時の先輩から同じように思われていたのかも知れないわね。

この子供はまだこれから。

まあ、私もまだただけれど。

「話したくない訳じゃないから良いけれど……面白い話にはならないと思うわよ？」

「お願い、ね？」

「聞きたい！」

「分かったわ」

私は二人に語り始める。

私がメイドとしての教育を受けるために使用人養成所に来たのは11歳の時、12歳の誕生日を迎える丁度一か月前だったわ。

周囲からとても賢い子だと言われていて、実際に私は周囲の子供と少し違っていた。

ただ……あの頃の私は特に何かをする事も無く、普通に小学校に通っていたわ。

でもある日、私ที่บ้านに帰ると両親と見知らぬ女性が待っていたの。その女性は「全国の優秀な子供達を月下のメイドに勧誘する為に活動している」と話し、私を候補生として迎え入れたいと言った。

その時、私は彼女に様々な事を聞き、彼女がそれに真剣に答えてくれた事を覚えているわ。

今思えば子供らしくない質問ばかりだったけど……私にはそれが普通だったんだから仕方無いわね。

ええ、それを受けてここにやって来たのよ。

あれから五年が過ぎたけど、この道を選んだ事は間違っていないかったと思ってる。

何せ、かかる費用は無料。

更に、学ぶ身でありながらこの時点で一般的なサラリーマン程の給料が貰えるのよ。

最初は信じられなかったわ。

小学生に対しての待遇とは思えなかったもの。

規則もあるけどきつい縛りでは無いし、休日もあるわ。

そして、勉強はメイド候補生一人に教師が一人ついて教えてくれる。

その上、力及ばずメイドとして採用されなくても、実力に見合った

別の仕事が用意される事まで約束されていた。

あなた達もこれが普通ならあり得ない待遇だという事くらいは分かるでしょう？

まあ、その代わり一定期間評価が基準を下回ると使用人としての道は閉ざされるけれど。

ここは養成所という名前だけど……一般的な教育も行われているから使用人養成学校かも知れないわね。

ただ、ここでは通常の学校とは別の教育が行われている。

分かるわよね？

……そう。

「メイド学」ね。

このメイド学も専門の先生が一人に対して一人つき、基本的には卒業までその関係が続くわ。

ん？

……私の先生？

私のメイド学を担当しているのは嵐山 香織（あらしやま かおり）先生よ。

……出来るだけ早めに先生方の事は覚えておきなさい。

各地にある養成所のメイド学の先生は、引退したお嬢様のメイドの方々が行っているわ。

勿論、誰でもなれる訳では無いわよ？

教育者としても優秀な方だけが任されているのよ。

あなた達も敬意をもって接するようにね。

そしてそんな先生方の中でも、私の先生は「特別」と言える人なの。彼女は本来ならば長くても10年程の雇用期間である本邸のメイドを20年も続けた方よ。

関係者の間では有名な人で……なに？

……私も最初から知っていた訳じゃないわ。

私はその事を知ったのは、ここに来て……一年が過ぎてからよ。

……ええ。

だからあなた達には早く覚えるように言っているのよ。

……話の腰を折らないで。
続きを聞く気はあるの？
全く……。

……私が先生の事を知ったのは、養成所に集められた他の候補生達と競い合い、自分だけが特別では無いのだと自覚した頃ね。

そうそう、私の先生には娘さんが居るのだけれど、現在お嬢様にお仕えしている現役の使用人です。

……ええ、母娘共に優秀ですね。

私も早く一人前のメイドになって、お嬢様と先生の娘さんに会ってみたいわ。

あなた達もこれから頑張りなさい……応援しているわよ。

バーチャルニューチューバー活動を再開してから一週間後。

現在、私はクロスコードで三人からオフコラボを提案されていた。

「オフコラボか」

「ええ、もう『お嬢様』がクレリアさ……クレリアだという事も分かってるし。問題無いわよね？」

ベティがそう私に聞いて来る。

あの騒動で私がバーチャルニューチューバー活動をしている事は世界中に広まり、同期の三人も私がアイドルのクレリアだと知った。

彼女達はクレリアの大ファンという訳では無かったが、どういった事を行ったかは知っているため、改めて話した時は緊張しているのか敬語になっていた。

その際に私は以前のように話して欲しいと頼み、こうして出来るだけ以前の通りにしようとしてくれている。

多少ぎこちないが、すぐに慣れるだろう。

「無理強いはしませんが、いつかは行う事になるのですし……早い方が良いと思ひまして」

沙織の敬語も少し緊張が混じっているな。

「いいでしょー？なんだかんだ言って二人は伝説のアイドルに直接会ってみたいんだよー」

既に慣れた様子で話すのはナタリアだ。

二人と違つて、彼女の声はもう緊張していないように感じる。

「別にそういう訳では無いです！ただ同期として一緒に進んで行くよと……」

「本当にいいー？」

焦つたように反論する沙織に訝しげな声を上げるナタリア。

「はいはい、そういうのはもう終わったでしょ。今はオフコラボの話よ」

ベティはナタリアの言葉に反応せず、そうやって話を戻そうとする。

「そうだねー。ごめんね、沙織」

「平気ですよ。会ってみたいと思つていたのも事実ですし」

「もういいか？」

黙つて彼女達の会話を聞いていた私は、そう声をかけた。

「ええ……それで、どうかしら？」

「いいぞ」

「いいーい。決定だねー」

私の言葉に喜びの声を上げるナタリア。

「何をするかは考えているのか？」

「私は考えているけど、クレリアは何かある？」

「特に考えていない。まずそちらの考えを聞かせてくれ」

「……私は四人の内の誰かの自宅に集まつて『リングスポーツクエスト』をやろうと考えてるわ」

「それはどんな物だ？」

私はベティに尋ねる。

「フィットネスゲームよ」

フィットネス……体操のような物か。

「輪っかのコントローラーで実際に運動しながら進めるゲームだよー」

「楽しく体を鍛えたり、ダイエットが出来るゲームですね。他のプレイヤーさん達もよく配信していますよ」

ナタリアと沙織も説明してくれた。

「ふむ……実際に運動するという事は、ある程度の広さが必要だな？」

「ええ、ある程度は必要ね。四人で集まると少し狭いけど、配信するつもりでいたから私達も最低限プレイ出来るだけのスペースは用意してあるわよ」

彼女達の部屋では少し狭い、か。

「皆、私の家でコラボを行う気はあるか？」

自宅に配信用のスタジオが出来たので丁度良い。

複数の同時配信も可能だと言っていたので問題は無いだろう。

「お邪魔してよろしいのですか？」

「クレリアの家!?!行きたい!」

「良いわね、私も行きたいわ」

私の提案にそれぞれの反応を返す三人。

ベティとナタリアは問題無いようだ。

「沙織はどうだ？」

「えつと……行きたいです」

改めて聞かれ、返事をする彼女。

「では決まりだな」

こうして初のオフコラボは、私の家でのリングスポーツクエストプレイ配信となった。

三人でコラボ配信をする事が決まった後、私は雑談配信を行っている。

「こんにちは人類達。お嬢様だ」

：こんちわお嬢！

：今日もお美しいですね

：やっと配信に入れた記念!?!50000

オフコラボの告知も行う予定だが、それは最後だ。

他の事から始めよう。

「さて、今日は雑談配信だ。まずはマンジユウに寄せられた質問に答えていこうと思う」

：マンジユウもぐもぐ

：はい！お嬢様！

「まずはこれだ」

【こんにちは。

突然ですがお嬢様は人間なのでしょうか？
気になって毎日7時間しか眠れません。」

「人間では無いだろうな。私と人類とは色々違う所があるが……今の人類は長くても百年程しか生きないが、私は地球に現在の人類へ至る事になる生命が現れる以前から存在している。寿命がこれだけ違う私を、人間と同じだと判断するのは無理があると思う」

：よく眠れているようで何より

：今更な質問だなw

：超越者様やぞw

：似たような設定のキャラは他の作品で見られるけど、バーチャルニユウチューバーでこんな感じの設定は初めて見た

いつか人類は現在の常識を破るのだろうか。

「次に行こう」

【アイドル時代の裏話がありますか？

問題が無ければ教えて下さい。】

「私はバーチャルニユウチューバーの『お嬢様』だ。誰と勘違いしているのかは知らないが、アイドルとは無関係だな」

：バレてもその辺はしつかり守るのかw

：結構真面目な超越者w

：こういう質問は消えないねえ……

：こうやって答えるから消えないのでは……？

：もう世界中にばれてるしへーきへーき！次行こう次！

周囲の努力のおかげで、私をアイドルクレリアとして扱う視聴者はかなり減った。

話題にされたとしても軽く触れる程度で、周囲も流してくれている。

関係者の一人が「良く調教されています」と言っただけで笑っていたが、私がかかした覚えは無い。

「次だ」

【お嬢様は結婚願望はありますか？そしてもし子供をつくるとしたら男の子と女の子、それぞれ何人くらい欲しいですか？】

こういった質問に対する答えは一応考えてある。

「私は人類に対して親愛や友愛を感じる事はあるが、男女間に発生するような恋愛感情を持った事は一度も無い、だからそのような事は無いと思う。ただ、もしそういった感情があったとしても、病気が遺伝する事を避けるために子を作る事は無いだろうな」

恐らくこれで問題は無い……はずだ。

：子供に遺伝する物なの？

：お嬢様の遺伝子を後世に残さないのは人類最大の損失だと思う？
10000

：研究対象になりそうだけど声がかかったりしませんでした？

「これは家族から聞いた話だが……一時期、一部の研究機関が私に協力を求めようとしていたようだ」

目についたコメントに対し返答する。

：マジか!?

：協力……倫理に反した事をしないなら良いかもね？

：お嬢はそれに協力したの？

：協力を求める事自体は良いんじゃないか？強制したりしたらあれだけ

：話し方からすると協力して無いな、話は後から聞いたみたいだし

：寿命は延びないけど老けないようにはなれるかも……って事かな？

「予想がついている者もいるようだが、私はその事を聞いたのは全て終わった後だ」

研究機関や医療機関に協力した場合、流石に私が人ではない何かだと気づくはずだ。

実際に針が通らなかつたり、機器に反応しない所を見ればいくら常識から外れていようと恐らくすぐに受け入れるだろう。

知られたなら知られたでまた新しい動きがあるのだろうか……今の所は自分からわざわざ正体を明かすような真似をする気は無い。

「私が協力する事は無いと家族も分かっていたようだ」

：お嬢が知らない内に守ってくれてたんやな……

：良い家族じゃん

：金も権力もあって優しいとか理想の家庭だな

現在は緊急時以外で娘達が私に許可を取りに来る回数は減っている。

報告するべきかは娘達に任せているので、今までの経験で必要無いと判断しているのだろう。

勿論、報告や相談を禁止している訳では無いので、話したい者はいつでも言うように伝えている。

今の所は娘達から危険な感覚は伝わってこないの、少なくとも娘達が危機に陥るような問題は起きていないと思う。

いつか何か起きるかも知れないが……それはそれで楽しみでもある。

「もう一つ行くぞ」

【お嬢様は3D化する予定はありますか？】

「今の所、3D化するという話は聞いていないな」

ブイライブは人気が出ると3D化しているようだが、私と同期達はまだ対象外のようなのだ。

色々あつて知名度は爆発的に上がったが、これが一時的な物になるか継続するかは四期生の動き次第だと思う。

：して欲しいね

：お嬢の知名度ならしてない方がおかしくない？

：お嬢様は「新人」バーチャルニューチューバーだぞ

……ふむ。

「裏で話が進んでいてもおかしくはない……か？」
私はそう口にする。

ブイライブならばあり得る話だ。

…ある日いきなり「次の配信から3Dでお願いします」って言われるんだなw

…見てみたいなー

…3Dになったら可愛いんだろうな

…キャラより本人の方が上だという不具合が起きるんだよなあ……

…不具合じゃないだろうが！

…そつすねw

…二次元が負けたからなw

…おいおい、誰の事を言ってるんだよ？ここはお嬢様の配信だぞ……？

名前は出さないが、こうして誰の事を言っているのか分かるようなコメントもあるが、この程度は問題にしていない。

時々行き過ぎた行動をする者が処分されているようだが、それほど多くはないようだ。

…今ネムちゃんの配信も同時に見てるんだけど四期生全員でオフコラボするって本当!?

…フジミちゃんのツITTERでも見ました

それぞれ自由に告知しようと思ったからな、先に聞いた者が現れるのは当然か。

「オフコラボの告知はそれぞれ自由に行う事になっている。私は最後にするつもりだったが、話しておこう」

- ：最後にとっておこうとしてバレたw
- ：何か可愛いなこの超越者w
- ：意外とポンコツな超越者様w
- ：全員で自由に告知したらばれるでしょw

特に何か意味があった訳では無いのだが……まあ好きなように受け取らせておこう。

「配信日はまだ決まっていないが、行いう事は決定している。場所は私の自宅にある配信用のスタジオだ」

- ：フアツ!?
- ：ク……お嬢様の自宅!?
- ：家にスタジオあるのかよw
- ：お嬢様なら余裕で用意出来るでしょうね
- ：お嬢様ってちゃんと地球に住んでたんだなw
- ：俺も地球の外に住んでると思ってたわw

「地球以外にも住んでいる家はあるぞ」
これからは更に色々と話してみよう。

- ：マジすかお嬢!?
- ：やっぱりそうだよなw
- ：この超越者はただ地球で遊んでるだけだぞw
- ：月の裏に住んでるに違いないw
- ：これも何処かにありそうな設定だなw

当たっている者がいるな。

いつかこの話が真実であったと知る日が来るかも知れないが、今の配信を見ている者達が知る事は難しいかも知れない。

「伝えるべき事は伝えた。次の質問に答えて今回は終わりにしよう」

：終わりかー
：長時間配信とか耐久待ってます
：ゲーム上手いから結構早く終わるよな
：それでもクリアまでだとかなりあるぞ

「最後の質問はこれだ」

【歌配信をやる予定はありますか？】

：聞きたい！
：期待してます！
：ぜひやって欲しい！

やって欲しいというコメントが勢いよく流れ始めたな。

特に嫌な訳では無いので行っても良いのだが、ブイライブから「歌の配信を行う場合は告知前に必ず一度連絡を下さい」と強く言われているので今は明言を避けておこう。

「現時点では何とも言えない」

：待ってます！
：やらないとは言って無いから希望はある……あるよね？
：なんか問題があるんかね？
：そりやお嬢様だし……

流れるコメントをしばらく眺めた後、私は終わる事を告げて配信を終了した。

クレリアについて語るスレ パート48076

305：名無しのクレリアファン
騒ぎも収まったな

306：名無しのクレリアファン
バーチャルニューチューバーになってるとは思ってた

307：名無しのクレリアファン
そういうイメージ無かったから驚いたな
あんな中二臭い事を平気で出来る性格だとは思ってなかった
まあ、なんか妙に似合ってるんだけどさ

308：名無しのクレリアファン
彼女を見る度に今も思うんだけどやっぱ見た目がすげえ
若すぎるだろ

騒ぎの時に50越えてるのに……

309：名無しのクレリアファン
彼女の話が出てくる度に一度は触れる事になる話題だよな
……世の女共は研究協力して欲しいと思ってるんじゃないかな

310：名無しのクレリアファン
男もだけど……女は特に食いつくだろうな

311：名無しのクレリアファン
クレリアは引退してからバーチャルニューチューバーになるまで
何してたんだろ？

結構時間あいてるよな？

312：名無しのクレリアファン
不明らしい

313：名無しのクレリアファン
誰も知らんの？

314：名無しのクレリアファン
全く情報が無い

引退してからずっと目撃者すら居なくて、初めて顔出したのが中身
バレ事件

それまでは何してたのか誰も知らない

315：名無しのクレリアファン
どうなってるの？

クレリアちゃんはプライベートでは真正の引きこもりって話が
あったけどホントだった？

316：名無しのクレリアファン
家の敷地が広げりや外に出なくても普通に生活できるんじゃない？

317：名無しのクレリアファン
あー、家の敷地から出ないで普通に健康的な生活してたって事か

318：名無しのクレリアファン
それか誰にも見つからない方法で移動してるかだな

319：名無しのクレリアファン
例えば？

320：名無しのクレリアファン
瞬間移動とか認識阻害魔法とか？
超越者だしw

321：名無しのクレリアファン

おいw

無理に決まってるだろw

キャラの設定を中身にも適用するなw

322：名無しのクレリアファン

でも変わらない見た目とか、ダンスとかの凄まじい能力の高さを見てると出来ても特に驚かずに受け入れられる気がする……気がしない？

323：名無しのクレリアファン

まあ彼女の雰囲気的に「そんな気はしてた」で済むかもしれんw

324：名無しのクレリアファン

今でも飛び抜けた存在だけだな、突然変異で生まれた超レアキャラみたいな感じ

325：名無しのクレリアファン

こういうのはあれだけど……やっぱ死んだら色々されんのかな？

326：名無しのクレリアファン

それは家族が許さんだろ

かなり仲が良いみたいだし、圧力に負けるほど弱い立場じゃないし……手は出させないんじゃない？

327：名無しのクレリアファン

もし渡すとしても髪の毛とか切った爪とか……それ位じゃない？

解剖とかは絶対許さなそう

328：名無しのクレリアファン
話を変えちゃうけど

お嬢様がクレリアだと知らない時に見た時は「声がクレリアに似てるな」って思っただけだったけど、知ってから見るとクレリアとしか
思えなかったんだけど……

何故だ……？

329：名無しのクレリアファン
まあ、そういうもんじゃね？

330：名無しのクレリアファン
あれだけ有名でも意外と分からないものなんだな
これが先入観か……

331：名無しのクレリアファン
みんなゲームやるイメージ薄いみたいだけど……昔バトルグラウンドで世界ランク一位だったんだぞ彼女

332：名無しのクレリアファン
見た目と歌とダンスの印象が強すぎて忘れがち
特に見た目と歌

それはそうとバトルグラウンドも長いよね、今度6が出るんだっけ

333：名無しのクレリアファン

そーいや結構ゲームやってたな
天然ぽい感じもあるし、見た感じはちよつと冷たそうだけど意外と
そうでもないよ

昔のドッキリ番組での事は今も覚えてるし

334：名無しのクレリアファン
何それ？

335：名無しのクレリアファン
昔クレリアがテレビに出てた頃、番組の企画で彼女にドッキリを仕
掛けたんだよ

その仕掛け人の芸人に彼女は飲み物を薦めたんだけど……その状
況がね……

詳しく知りたかったら「クレリア ドッキリ」とかで検索してみ
ると良いよ

今も出て来るはず

336：名無しのクレリアファン

へえー

見てみるわ

859：名無しのクレリアファン
改めて見ると今回の騒ぎよくおさまったよな

860：名無しのクレリアファン
今までも何回か彼女関連で騒ぎは起きてたらしいけど今回は国
ま
で動いたからな……

それだけ大事だったのは分かる

861：名無しのクレリアファン
よく考えなくてもクレリアがヤバイのは分かる
影響力あり過ぎだろ……

862：名無しのクレリアファン

色んな所が動いてたらしいけど、まさか「よく訓練されたファン」が解決を早めるとはw

863：名無しのクレリアファン

あの声明の後すぐには変わらなかつたけど少ししてから世界中のファンがクレリアの為に自重し始めたからな……ファンがヤバいかそんなファンが出来るクレリアがヤバいのか……

864：名無しのクレリアファン

どう考えてもそんなファンが出来るクレリアがヤバいわ

俺もファンではあるけどあそこまでは行ってないぞw

宗教かと思つたわw

865：名無しのクレリアファン

アイドルは熱心なファンにとっては神みたいなものだから……

866：名無しのクレリアファン

クレリアが「世界が欲しい」とか言ったら本当にファンが世界を渡すために動きそうで怖いw

867：名無しのクレリアファン

シヤレにならないからやめろw

868：名無しのクレリアファン

クレリアが亡くなった時が怖いよな

869：名無しのクレリアファン

どゆこと？

870：名無しのクレリアファン

後追いで相当な数が自殺するんじゃないか？

過去にも多少あったらしいし、クレリアの影響力とファンの規模を考えると……

871：名無しのクレリアファン

あつ……

872：名無しのクレリアファン

アカン……

これはえらい事になるのでは……

873：名無しのクレリアファン

防ぐ方法を考えた

ファンに捏造でも良いから生きるように遺言を残すとかどうだろう？

よく訓練されたファンなら遺言を守って生きるだろ、多分

874：名無しのクレリアファン

意外といけそうw

875：名無しのクレリアファン

偽物ってばれたら凄い事になりそうだな

876：名無しのクレリアファン

流石にそこまでは無い……よな？

877：名無しのクレリアファン

彼女が死ななければ解決する

878：名無しのクレリアファン

無茶言うなよ、病気で見た目は若いだけでそれ以外は普通の……いや、あんまり普通じゃないけどそれでも人間なんだぞ

879：名無しのクレリアファン

今回の事で世界中にまだまだファンが居る事が分かったからなあ

……

880：名無しのクレリアファン

まあ、他のアーティストのファンになってもクレリアのファンをやめてる訳じゃないから……

881：名無しのクレリアファン

彼女が引退したから他の曲も聞くようになっただけで、今でもクレリアの曲は聞いているしファンだよ

でも誤解しないで欲しい、他のアーティストも好きだ
ただクレリアが一番好きだけなんだ

882：名無しのクレリアファン

→こんな感じになってる奴が世界中にかなりいたらしい

883：名無しのクレリアファン

今回よく正気でいられたなw

884：名無しのクレリアファン

そこがよく訓練されたファンなんだよな

彼女のファンであればあるほど、迷惑をかけないように自重してるんだと

騒いでるのはただ騒ぎたいだけの奴かアンチだろ

885：名無しのクレリアファン

彼女ほどのアイドルでもアンチがいるのか……

886：名無しのクレリアファン

完璧がいかにも難しいかよく分かるよね

887：名無しのクレリアファン

アンチ達も頑張ってるらしいけどすぐに大人しくなった
明らかな多勢に無勢

888：名無しのクレリアファン

話を戻すけど、つまりコアなファンであればあるほど彼女の事を
思ってマナーを守ってる訳？

889：名無しのクレリアファン

そういう事だね
私も自重してるよ

890：名無しのクレリアファン

コアなファンさんお疲れ様です
そこまでじゃないけど俺もクレリアが好きです

891：名無しのクレリアファン

少しでも彼女の事が好きで、彼女や周囲に迷惑をかけないのなら君
も仲間さ

892：名無しのクレリアファン

世界中がコアなファンになった方が平和になるんじゃないかな？

893：名無しのクレリアファン

俺も少しそう思ってしまった

894：名無しのクレリアファン

一人のアイドルに世界を掌握される方が不味いと思うけど……

895：名無しのクレリアファン
本気にするなよw
本当にそうなる訳無いだろw

896：名無しのクレリアファン
まあ無理よな
そうなる前に国が規制するだろうし

897：名無しのクレリアファン
クレリア関連作品が禁制品に……

898：名無しのクレリアファン
禁制品w

899：名無しのクレリアファン
暴動が起きそうw

ある雨の降る日の午後、私が自宅で本を読んでいるとスマホが着信を知らせる。

マネージャーの瞳からか。

「どうした？」

私が電話に出てそう言うと、瞳はすぐに本題へと入った。

「予定している四期生のオフコラボ配信の事でお話がありました」

「何だ？」

配信後、瞳にも話をしているが、その時は特に何も言われていない。何かあったのだろうか。

「こちらの準備が整うまで延期して頂きたいんです
何をするのだろうか。」

「配信日はまだ決まっていないから構わない、何かするのか？」

「せっかくの同期全員初オフコラボなので、全員3D化してから行いたいと思ひまして」

「3D化か、三人が喜ぶだろうな」

「元々皆さんを3D化させる予定はあったんです。なので、このタイミングで行う事になりました」

「分かった、待とう」

「ありがとうございます」

「他の三人にこの話はしたのか？」

「まだしていません。クレリアさんに納得して頂くのが最優先でしたから」

「そうか……そうだ、聞きたい事がある」

「3Dで配信するのなら確認しておかなくては。」

「何ですか？」

「オフコラボ配信は私の家で行う予定だが、3Dでの配信は可能なのか？」

「それは……機材と専門のスタッフが必要なので、ブイライブ本社

で行う事になってしまいましたね……」

申し訳なさそうな声を出す彼女。
なるほど……娘達に頼んでみるか。

「瞳、少しこのまま待っていてくれ」

「はい、構いませんが……」

私は瞳に一言告げ、念話を繋ぐ。

『カメラ、話せるか?』

『平気よ、どうしたのお母様』

『お嬢様と同期3人の3D化が決まったが、3D配信には機材と人員が必要らしい。自宅で私を除いた3人の3D配信をしたいのだが、用意出来るか?』

『……機材は市販しているの?』

『待ってくれ、瞳に確認する』

『分かったわ』

「瞳、3D配信に必要な機材は市販されているか?」

私は通話したまま待機している瞳にそう問いかけた。

「え?……えーと、誰でも買えると思います。個人で買う人はほとんど居ないと思いますが……」

「ありがとうございます」

彼女に礼を言い、私はカメラへ念話する。

『誰でも購入出来るようだ』

『それなら全く問題無いわね。人員は外部の者を使う気にはならないから……侍女隊から希望者を募って覚えさせれば良いでしょう』

『希望者が居なければブイライブ本社で行っても構わない、強制はしないようにな』

『分かっているけれど、そんな事を気にする必要は無いと思うわよ?みんなお母様の手伝いをしている時はいつもより嬉しそうだし……既に希望者が集まっているもの。いつもの事ながら反応が早いわ』
少し笑いながらカメラが言葉を伝えて来る。

『何か問題は?』

『無いわ。彼女達は人類機器の操作程度、簡単に覚えられるもの』

侍女達の能力は現在もゆっくりと成長しているからな。

『そうか、では3D配信が出来るように準備をしておいて欲しい。もし何か問題が起きた時は連絡してくれ』

『分かったわ』

カミラの返事を聞き、私は念話を切った。

「瞳、予定通りコラボ配信は私の家で行う」

「まさか……自宅に機材を導入する気ですか!？」

彼女は私が何をしようとしているか察したのか、大声を出した。

「そうだ」

「クレリアさんなら機材も安い買い物なんでしょうけど……ブイライプのスタッフがご自宅に行く事になりますよ?」

「人員もこちらで用意する、そうすれば後は通常の配信と変わらないだろう?」

「んー……」

何かを考えているのか、瞳は軽く唸り声をあげてから沈黙する。

「……当日は私も参加します、それが駄目なら許可は出来ません。後、クレリアさんの自宅に環境が整っても今後3Dコラボ配信をする際には基本的にブイライプ本社の方に来て貰う事になります。それでも良いですか?」

しばらく沈黙を続けた後、彼女ははっきりとそう言った。

やはり本社のスタジオの方が色々都合が良いのだろうな。

ふむ……彼女が家に来る事も、今後ブイライプ本社で3D配信をする事も特に問題無い。

自宅の機材は一人の時にも使えるから無駄にはならないだろう。

「それでいい、当日はよろしく頼む」

「そうですね……では四期生のオフコラボはクレリアさんの自宅で行いましょう」

「決まりだな」

「3Dモデルを用意するのは時間がかかると思います、しばらく待ってください」

「その辺りは任せる」

無いとは思うが、娘達が「3Dモデルを作る」と言い出したら既にブイライブが作っていると話そう。

あの後、瞳が同期の三人に話を伝えた所、全員大喜びだったという。初の同期全員とのオフコラボは3D化作業の終了待ちだ。

家の機材などの配信準備は行うが、それ以外の事はまだ早い。

少なくとも3D化作業の終了予定日が決まらなければ、配信予定日も決められないからな。

私達は今の所、いつも通りに活動を続けている。

「こんばんは。人類達」

：こんばんは！

：見に来たぜお嬢

：今回の上納金です？50000

：☒今日もお美しいです☒？10000

「今日は『ライフ・グロウ』をやるが、その前に一つ伝えておく事がある」

：おーあれか

：ライフ・グロウ好き

：ん？伝えておく事？

：長くなる予感

：何かあったのかな？

「以前行うと言った四期生オフコラボだが、延期となった」

：マジすか？

：☒中止じゃなくて延期？☒

：スケジュール調整かな？

「オフコラボ自体は行う予定だ。だが少し時間が必要になった」
細かい事は言わないように頼まれたからな、この程度にしておこう。

…ふむ…

：これは…まさか3D化なのでは？

：あり得る

：初の四期生全員コラボに合わせて…とかやりそうだな

かなりの人数が3D化を予想している。
簡単に予想出来る事だったようだ。

さて…伝える事は伝えた、ゲームを進めよう。

様々な予想が流れる中、私はゲームの説明を始める。

「さて…これからプレイするライフグロウは、地球の環境や生命を操作し人類に進化させ、最終的に宇宙に到達させる。というゲームだ」

：ゲームが始まるぜー！

：延期の事は他の三人の連絡を見よう

：お嬢はあんまり話さないからなw

：それがいいんじゃないか

「マンジュウでは、超越者である私に是非このゲームをやって欲しい、という意見が多く寄せられている」

：お嬢が人類を作ったのか…

：あなたが神かw

：俺達は超越者の戯れから生まれたんだぞw

「そして今回はネタバレ禁止だ。皆、注意するように」

：はい

：ネタバレ禁止来ましたか

：今回は生暖かく見守ろうと思いますw

「では始めよう……まずは難易度選択か。最初はノーマルにしておこう」

私はいくら時間がかかっても問題無いが、見ているのは人類だからな。

：難しくしてぐだってもあれだからね

：まあ難易度は好きにして良いんじゃないかな

：ぐだるよりはクリア出来る難易度がいいよ

こうして、私は人類を宇宙へと導くゲームを開始した。

「最初の単細胞生物は生まれたが、そこから増加も進化もしないか……」

そう私は呟く。

ゲームを開始してから約一時間程、私は生命を生み出す事には成功したが、そこから行き詰まっていた。

：ネタバレは出来ないから俺達は頑張れとしか言えないw

：これ位は平気かな？海中の成分の種類、割合、後温度が重要だよ

：結構難しいんだよなこれ

私は実際に単細胞生物が生まれてから人に至るまでを見て来たがずっと見ていた訳ではなく、これまでの生命の状態や環境など大雑把

にしか覚えていない。

記録する気も無かったので、そういった本や魔道具も存在しない。しかし、当時の環境を再現出来たとしても、このゲームが上手く行くとは限らない。

現在の人類は当時の環境を推測は出来るが、実際に確認する事は出来ないのだから。

全く役に立たない、という事は無いかも知れないが……可能な限り思い出しながらやってみるか。

「もう一度調整してみよう」

私は当時の記憶とコメントのヒントを元に再調整を始めた。

大気は……私達は全く影響が無いので気にしていなかったが、今は成分の割合がかなり違ったような気がする。

気温も今より高かったはずだ。

その影響で、あの頃の海は今と比べて全体的に暖かかった……と思う。

うる覚えな記憶をもとに、私は曖昧な調整を行い続ける。

私にとって生命は簡単に作れる物だが、自然に発生する事は稀であると思っている。

だがこのゲームをやっていると、生命が生まれ、進化していく事の難しさがよく分かるな。

魔法人類が減んだ後、再び生命が生まれるまで億を超える年月を必要としたのも頷ける。

そんな事を考えながら様子を見てみると、単細胞生物が増え始めた。

「増え始めたな」

：おめでとう！

：やった！

：俺達が生まれなくなる所だったぜ……

「まだまだここからだ、一つ先へ進めた。ブロックされる事を恐

れずにヒントをくれた者達に感謝する。ありがとう」
そう言っている間に、多細胞生物も生まれている。

：どういたしまして！

：警告は来てないしこの位なら平気なんだな

：警告来たらその配信の間は大人しくするから平気だよ

もしブロックされていたら解除するように言おうと思ったが問題無かったようだ。

あの騒ぎの後から私の配信は娘達がコメントを監視していて、問題があると判断された際は警告が送られる。

ただ、その一度でブロックされる訳では無く、その配信中にもう一度問題があると判断されるコメントを書き込まなければ次回の配信で警告が解除される。

なので、ある程度の問題発言ならば1配信に1回は可能な訳だ。

だが、間違い無く悪意があると判断された場合は即座にブロックされ、永久に解除される事は無い。

現在、ネットには匿名性がある。

実際は絶対という訳では無いらしいが、基本的に匿名性は非常に高いようだ。

ただ、それも娘達には意味が無い。

私が聞いたのは最近の事だが、彼女達は世界中に張り巡らされたネットワークを自由に扱えるようになっていて。

いつの間に行えるようになってたのかは分からないが「主様がアイドルであった時、余計な創作物が無かったのはこの対策があったからです」と言われたので、私がアイドルをしていた頃には既に行っていたようだ。

人類のパーソナルコンピュータは魔力的な物が使用されていない科学的な物だが、利用出来るらしい。

娘達の本体は元々魔動機だが……魂と人格を得たパーソナルコンピュータのような物になっているのだろうか？

予想以上に娘達が世界を掌握している事に気が付いた一件だったが、特に止める気は無い。

だが、そこまでやっている娘達も手の届かない所はあるという。手紙やネットワークが届いていない田舎などの、特定の方法や環境下で行われた事は把握出来ない、と言っていた。

ただ、完全にする気は無く、その辺りはそのままにするらしい。

ゲームを始めてから数時間後。
単細胞生物が多細胞生物に進化してからは順調に進化が進み、大型の海洋生物が現れるようになっていた。

：最初はどのような事かと思っただけどいい感じだね
：実際に発見された生物が出て来るから意外と勉強にもなるよなこれ

：俺もゲーム内の図鑑ちゃんと読んでたな

画面の中で何処かで見たとような気がする生物が大量に海を泳いでいる。

ゲーム内の説明も見てみるか。

そう思った私は、適当な生物にカーソルを合わせた。

図鑑は別にあるが「直接生物を選んで説明を読む事が出来ます」と説明があったからな。

ふむ……こいつは「ユピトルトシス」か。

読み進める中、ある一文が目に残る。

【全長5メートル程の細長い胴と長い五つの口を持ち、背中には前後に動く針状の背ビレが二列並んで生えている。】

そこにはそう書いてあった。

：これも実際に居たんだよな

：信じられんよね

：こんなのが沢山海を泳いでたんだもんなあ……

ふむ……。

表示されている姿に引っかけかきを感じた私は、画面をしばらく見つめた。

こいつは以前見た覚えがある……気がする。
しかし……。

「確か上下が逆だったような気がするな」
私はそう言いながら、自分の記憶を探る。

………ん？

…どゆこと？

…逆？

私の言葉を聞いた視聴者達の、疑問のコメントが流れて行く。
皆にも話しておくか。

「ゲーム中の説明では五つの口で海底の貝などを食べていた、と書いてあるのだが……実際は上下が逆で、海中を泳ぐ魚などを捕食していた筈だ」

そう……確かその時、私は「あまりにも効率が悪い」と感じたはず。
この説明のように貝を狙った方が良い、と考えた事をうっすらと思
い出した。

…あつこれは………w

…突然の超越者ムーブw

…実際に見ていたんですねw

私の言葉に反応し、更に多くのコメントが流れて行く。

今のように過去の事などを話すと視聴者達が喜ぶので、私は時々こ
うして思い出した事を話す。

勿論、誰も本気にしているようには見えない。

人類が研究を重ねているんだ、私が正しいと思う者などいないだろ
うな。

だが、私の記憶には背ヒレと説明されているあの針のようなヒレで
海底を歩いている姿がうっすらと残っているので、現在のこの説明は
間違いである可能性が高いと思う。

わざわざ訂正する気は無いが、私が訂正しなくともいつか気が付くだろう。

そこまで考えた所で私は意識を切り替え、ゲームを続ける事にした。

それから数回全滅の危機を乗り越えながらゲームを進めると、海中の生物が陸に上がり、昆虫なども生まれ始めた。

「説明によると、現在のゴキブリは大きさ以外、この時代からほとんど変わっていないらしい」

説明を読み上げながら、私はその姿を見つめる。

：でかいゴキブリが……

：苦手な俺には衝撃映像だよ……

：今のと比べてデカすぎない？襲われたら死ぬやん

：地球守らなきや……

ふむ……。

以前、陸を探索している時に襲って来たのはこいつだった気がするな。

その後は多少停滞しながらも進化が進み、やがて地球上に恐竜が現れ始める。

この時代の生物と誰かが遊んでいたような覚えがあるが……。

ヨツバだったか？

いや、他の娘達も居た記憶がある。

：恐竜になったー！

：この時代が一番好き

：寝て起きたらまだやってて草

そうだ、ヨツバが恐竜と戦い、他の娘達が見物していたんだ。

：この時代にはもう人類の先祖がいたはずだよね？

：ネズミみたいなやつだっけ？

：たしかそう

私がああ頃の事を思い出していると、人類達が自らの祖先について話し始めていた。

「当時、私はその生物にあまり目を向けていなかった。あ当時の小動物が知性を持ち、こうして私と意思の疎通をしている事に喜びを感じているぞ」

：その頃から知ってたらそりや感慨深くもなるよねw

：ネズミがこうしてお嬢と話せるようになりましたw

：小さかったあの子がこんなに立派になって……

：草

当時、存在には気が付いていたが特に注目はしていなかった生物。

それが時を経て人類となり、今地上を支配しつつある。

やはり進化には様々な可能性があるな。

魔素や魔力の影響が強くなり、更に時が流れた時……彼等は一体どう進化し、変化して行くのだろうか。

今後、あらゆる障害を自力で解決出来るようになれば、彼等が滅ぶ可能性は当然減って行くだろうが……それでも何が滅びのきっかけになるか分からない。

これからも油断せずに出来るだけ存在し続けて欲しい所だ。

：そういえば配信の時間は大丈夫？

：もう枠変えなくていいんじゃないかなかったっけ？
：アーカイブの事か？
：例の騒ぎの後に時間制限なくなったぞ

配信時間を気にする視聴者達が現れているが、問題無い。

以前は12時間を超えるとアーカイブに残らなかったようだが、現在はその制限が撤廃されているからだ。

枠の変更を行わなくても済むので、好評だと聞いている。

「人類が宇宙に進出するまで続けるぞ」

：マジすかw

：今恐竜だとまだ先が結構あるんですがw

：人間では超越者の耐久力について行けませんw

：もう行かないといけないのでアーカイブで見ます

：お嬢様はそここの長さのゲームだと一回でやり切るよなw

：前は30時間超えてたしな

：全部リアタイで見た奴いるのかな……w

：そこそこ(30時間超え)

：お嬢が大丈夫なのか心配になる

このままクリアする事を宣言すると、コメントの勢いが増す。

30時間を超えた時は瞳から心配された。

しかし、私は本当に問題が無い事を伝え説得し、ブイライブに長時間配信を行う事を認めさせている。

瞳は「少しでも違和感を感じたら無理やりにも止めますからね！」と言っていたが。

そういった事があり、基本的に私の配信は他の配信者よりも時間が長い。

「違和感を感じた者は無理せず休め。問題の無い者は好きにしろ」

私は念の為、無理をしないように注意しておく。

・なんか惚れそうになる言い方
・まだ10時間なのでついて行きます！
・私は限界なので寝ますー
・最初から最後までリアタイで見ようと思って事前に寝て来たからまだ行ける

それから約6時間後に人類が生まれ、それから更に4時間が過ぎた。

人類は順調に発展し、もう少しで宇宙に進出しようとしている。

・見始めてから20時間以上過ぎたか……
・もう少しで終わる！寝るな！寝たら死ぬぞ!?
・寝ない方が死ぬんだよなあ……
・まだやってるw
・これがお嬢様クオリティ……!

開始時から見ていた視聴者は脱落しかなり減ったが、それでもまだ居るようだな。

「この宇宙開発が順調に進めば、終わりは近そうだな」

・声から全然疲れを感じないんだけどw
・お嬢すげえよ……
・体力どうなってるんですかね……？
・途中からだから、後でアーカイブも見ときます！
・30時間超えた時も変わらなかつたから……20時間なんて余裕だろうさ……

途中から参加した者達も少し疲れているようだ。

「何度も言うが、無理はするなよ」

私はそう言って、大詰めに迎えているゲームの続きを始めた。

ゲームを始めてから約21時間後、人類は宇宙へ進出し、エンディングを迎えた。

：終わったー！

：お嬢様おめでどう！

：寝落ちする前に終わって良かった……

：お疲れ様ー！

「中々良く出来ているゲームだったな」

私は感想を口にする。

ゲーム内の進化の過程が正確かは……私の記憶が曖昧なので何とも言えないが「人類が生命の進化を観察する」という点では十分楽しめる内容だと思う。

「今の人類が実際に宇宙に進出するのはまだ難しいと思うが、お前達は宇宙に生存圏を広げたいと考えているか？」

私は視聴者達にそう問いかけた。

：行けるなら行ってみたいね

：夢が膨らむー！

：人類が宇宙に行くのはいつになるかなー

：一応今も宇宙には行ってるけど

：お嬢は生存圏って言うてるから、地球の衛星軌道上に滞在するとかの話じゃなくて、大勢が普通に地球の外で生活するって事でしょ

：難しいんじゃないかなあ……

：他の惑星の探査とかはしてるけど大勢が死ぬまで生活出来る環境となると……無理だね

流れるコメントを見ると、行きたいという気持ちはあるが実現は遠い、と考えているようだ。

「お前達ならいつか届くかも知れないな」

魔法人類には空の先を目指さなかった。

私が知らないだけで居た可能性もあるが、多くの者が目指さなければその先へは進めない。

だが今の人類には宇宙を目指す者が多く居るし、実際に私達の住む月まで来ている。

あまり今の人類に手を出す気は無いが……いつか手を貸す日が来るかも知れないな。

画面には、宇宙進出に関するコメントが次々と流れている。

私は少しだけ視聴者達と宇宙開発について語り合い、配信を終えた。

ライフ・グロウをクリアした後、私は5日ほど配信をせず、娘達や友人達と共に過ごした。

そして今日、私は再びゲームの配信を行う。

「おはよう人類達、お嬢様だ」

：おはー

：待つてました！

：数日ぶりですなお嬢

：今日は何やるの？

「今日の配信は『ガールズ&タンクス』というPCゲームをする」
そう言うと、すぐにゲームに対するコメントが多く流れ始めた。

：ガルトン！

：イイネ！

：美少女ゲーの皮を被ったガチ戦車ゲーじゃないか！

：リアル戦車ゲームに何故美少女を混ぜたのか……

「知っている者が多いようだが、まずはこのゲームの説明をする。
このゲームは過去に実在した戦車を世界中の少女が操り、世界一を目指す……という物で、紹介者達の説明によると中身はかなり作り込まれた出来の良い戦車対戦ゲームのようだ」

：戦車好きも納得の出来だけど、突っ込み所もあるゲーム

：飽きなければ長く遊べるゲームだね

：完成前に「出来は良いけど、あまりにも男臭いと売れないんじゃないか？」という話が出て「じゃあ流行の美少女も混ぜよう！」と方向が変わったらしいぞ

：流行の美少女w
：美少女はいつでも流行ってる
：結果的に人気になった訳だから正解だったんだろうな
：男臭いままでも行けたような気はする
：ちなみに、流行の美少女で検索するとアニメや漫画の美少女に混じって「世界最高の歌姫」が出て来ます
：知ってる
：知ってる
：知ってる

「この配信は自由にコメントして欲しい。もし使えそうな情報があつた場合は使わせて貰う」

：はい！
：色々と教えますね
：まかせろー

「ストーリー、ランダム戦、ランク戦があるが、まずはストーリーをやってみよう」

私はそう言いながらストーリーを選んだ。
ふむ……高校生か大学生のどちらかでプレイするかを選択し、所属する学校を選ぶのか。

：個人的なお勧めはやっぱり日本だね、高校なら坂宮陸軍付属女子高校、大学ならシキ重工女学院大学辺りがいい感じ

：海外だとミス・アリエラ・ハイスクールとかフロリア・ユニヴァーシティ辺りかなあ

：最終的には何処でも関係無くなるから最初は好きな所でいいと思うけど、まずは高校で

：坂宮女子はいいね、初期戦車とキャラのバランスが良い
：最初は高校がいいかもね

なるほど。

私はコメントを参考にし、高校を選択する事にした。

「今回は薦める者が多い高校にしよう」

：お嬢が俺達の意見を聞いてくれた！

：いや、結構聞いてくれるよ。特に前回はかなり俺達のヒントを見てくれた

：お嬢は聞かない時は全く聞かないけど、聞く時は素直に聞くからな

必要な時は使い、必要の無い時は使わない。

これは人類も同じだと思う。

流れるコメントを確認しながら高校を選ぶと、入学する学校を選ぶ画面に移る。

さて、何処を選ぶほう。

私は一通り学校を見た後に考える。

坂宮陸軍付属女子高校とミス・アリエラ・ハイスクールは良さそうだった。

薦める者が多いのも頷ける。

よし、日本の坂宮陸軍付属女子高校にしよう、一番長く滞在している国でもあるしな。

：おお、坂宮陸軍付属女子高校だ

：やったぜ

：薦めたかいがあった

薦められなくとも恐らく同じ結果だったと思うが、わざわざ言う必要は無いだろう。

次はキャラクター選択か。

：ストーリーでは固定されているされてるけど一度クリアした学校のキャラは他の学校でも自由に選べるようになるよ

：留学！

：オンライン対戦だと自分で用意した画像を使えるからお嬢様もやって欲しい

：乗員に表示されるだけで声は用意されている物から選ぶ事になるけどね

なるほど、アバターを用意して対戦出来る訳だな。

アバターは後で考えておくとして、今は適当にキャラを選んで先へ進もう。

《今日から私はここ……坂宮陸軍付属女子高校に通う。ここで私は頂点を目指すんだ！》

キャラを選ぶと、オープニング流れ……私が選んだキャラクターが意気込みを語る。

：ギヤルゲみたいw

：一応、ストーリーなんで……

：俺は結構好きだよ。長くは無いけど話の流れは分かるし

入学式の後、坂宮陸軍付属女子高校の戦車会に入会。

すぐに実力テストが行われるようだ。

「チュートリアルのような物か？」

私はそう言いながら実力テストを行う。

：ストーリークリアまでがチュートリアルだぞ

：オンライン対戦に向けて慣れるためのチュートリアルストーリーモード

ストーリーがチュートリアルなのか。

私はそう思いながらもゲームを進める。

「ふむ、操作は簡単だな」

移動はギアの変更と前後移動、車体の旋回のみで、砲塔の旋回はマウスに追従するようになってきているようだ。

：いくら作り込んでるといってもそこはゲームですから

：その辺りをリアルにしちゃうと難易度が……

：運転の完全再現は無理です……

私は戦車を動かし、チュートリアルにしたがって動く戦車を破壊する。

しかし……。

「動いているのだからあの戦車にも誰かが乗っているはずだが……あれだけ盛大に爆発して乗員は平気なのか？」

このゲームの戦車は、攻撃を受け限界を超えると大爆発を起こすらしい。

更に、条件によっては砲弾が乗員に直撃している事だろう。

私達ならともかく、現在の人類がモデルなら耐えられるとは思えないのだが……。

：そこは突っ込み所w

：謎。パワーで砲弾が直撃しても車体が爆発四散しても乗員は無傷なんですよw

：部位破壊で行動不能になったりはするけど怪我はしないね

：この戦車戦は「安全」なスポーツですw

どうやら皆も同様の疑問を抱いたらしく、次々とコメントが流れて行く。

「ふむ、このゲーム内の人類はあの程度ならば全く問題無いように進化している……という事か」

：進化w

- ：あれに耐えられるなら生身で戦った方が強そうだよ
- ：最初見た時あれが安全ならこの世界の兵器はどれだけ強いんだよって突っ込んだわw
- ：きつと科学の力だよ
- ：いずれ俺達も平気になるんだぞw
- ：無理だろw

問題無くテスト終わった後は再び会話シーンが入る。

《えっ!? 私がレギュラーに!? ……はい! やって見せます!!》

どうやら主人公はチュートリアルをこなしただけで実力を認められ、レギュラーとして試合に参加する事になったようだ。

- ：レギュラーはもう少し様子を見てから決めた方が……
- ：話の展開上必要だから仕方ないねw
- ：流れは分かるから……

その後、画面はガレージに切り替わる。

ここで使用戦車、装備、乗員などを管理、選択し、次の試合へと進むようだ。

どうやら、装備などを購入するための金は試合などを行わなければ貰えないらしい。

初期戦車は「阿雲（あぐも）三式」という名の中型戦車のようだ。人類の兵器で記憶しているのは核兵器程度で、他はほとんど覚えていないな。

「所持金は0か」

私は目に入った現在の資金を口にする。

- ：ゲームなのでw
- ：本来はある程度使えるお金はあるはずですよーw
- ：部活だって部費があるのになあ……
- ：ほら、通常弾薬とか燃料とかは無料だから……

：そーういや、このゲームロシアのゲームなのに公式の主人公が日本人なんだよな

：確か「美少女ゲームと言えば日本」みたいな感じで色々日本の美少女ゲームの製作会社に協力を得たからこうなったんだっけ？

：向こうが「日本が良い」って言ったらしい

コメントを横目に見ながら色々確認したが、資金が無くては何も出来ないようだ。

私はゲーム設定を再確認し、話を進める。

すると、下位高校との試合が始まった。

《行くよみんなー》

キャラクターの声が響き、戦闘が始まる。

：地形の把握も出来るだけしておくといいよ

：負けても少しはお金が手に入るから気軽にやってね

マップは建物が点在する森だ。

自チームの位置は青い点で確認出来るが、敵の位置は表示されていない。

：最初に軽戦車に指示して索敵をして貰うと良いかも

：先に敵を見つけた方が有利だね

：戦車性能と改造、乗員の能力で見つかったり見つけられたりする距離が変わるから慎重に

：停止していると相手から見つかりにくいから、先に有効な地点をとって待機すると良いかも

確かに索敵は大事だな

「情報をありがとう」

私は建物の陰に隠れながら敵が居そうな所へ軽戦車を送り、待機させる。

すると、すぐに敵軽戦車が発見された。
まっすぐこちらへ進んでいる。

：第一敵戦車だ！

：狙えるよ

初戦なので動きが単純なのだろうな。

私はすぐに射線を確保し、車体の全面中央に照準定め……砲撃する。

発射された弾丸は狙いよりやや左下に着弾し、軽戦車の動きが止まった。

：履帯に行つたな

：初期砲は仕方ない

車体には当たらなかつたが、足を止めたので次は当たるだろう。

私は次弾の装填を待っていたが、その間に味方の攻撃が2発着弾し軽戦車は爆散。

残骸となりその場に転がった。

：とられたw

：初撃破ならずw

コメントは撃破について話してるが、このゲームはチーム戦だ、誰が撃破したかはあまり関係無いだろう。

チームに貢献し、チームが勝てればそれで良いはず。

その後は私も敵を破壊し、最終的に私達は勝利した。

初戦を勝利で終えた坂宮陸軍付属女子高校戦車会。
その後も数回勝利を重ねストリーを進めていると、重戦車の登場と共に装甲厚、貫通力の説明が入った。

- ：これ重要
 - ：敵の装甲と砲を覚えなさいといけないんだよなあ
 - ：やっつければそこそ覚ええると思うよ
 - ：車体を斜めにして跳弾させるんだっけ？
 - ：避弾経始ですな
 - ：この世代の戦車は傾斜装甲じゃないからなー
- 確か、車体情報に装甲厚があつたな。

- ：薄いところ狙い撃ちされたら意味ないけどw
- ：砲の貫通力と装甲厚に差があり過ぎると意味が無いね
- ：車体情報で弱点を見ておいて、壁とかで上手く隠すと良いよ
- ：ゲーム内通貨か課金すれば貫通力の高い特殊弾が買える
- ：ストリーの方に課金は無いだろ

次々と新たな情報がコメントに流れていく。

「なるほどな、意識してみよう」

私がコメントを読んでそう言うと、若干流れが速くなる。

- ：お嬢様の為ならいくらでも！
- ：お嬢が遊んでるのを見てるのが楽しい
- ：悪戦苦闘しているのを見たい人はお嬢の配信は物足りないと思うけど、俺はサクサク進んでストレスなく見れるから好き

さて、試合に行こう。

高校を選んだからなのかチュートリアルだからなのかは分からないが、その後の試合も特に苦戦する事なく順調に進み、思っていたよりも早くクリアする事になった。

猫目ネム：お嬢様もガルトン始めたんだね。ストーリークリアおめでとうー

：!?

：ネムちゃんじゃないか！

：ネムちゃん見てた！

ストーリーをクリアした所で、ネムがコメントをして来た。

私の配信を見ていたのか。

「ありがとう、ネム」

私はそう言ってからこの後の事を考える。

思っていたよりも早く終わったが……今日はここまでにしておくか。

猫目ネム：お嬢様はオンラインマルチはやるの？もしやるならマルチデビューの時に一緒にやりたいなー

：おお

：デートのお誘い

：お嬢どうする？

ふむ……。

予想よりも早く終わったからな、オンラインでもう一度このゲーム

をやるのも悪くないか。

私はそう考え、口を開く。

「分かった。予定を決めてネムのチャンネルでコラボ配信をしよう」

猫目ネム：やったー！じゃあ後で連絡するね！

：突然コラボが決定したw

：やったああああ！

：ネムちゃんはガルトンプレイしてるのかw

：色々教えてあげて

「今日は短いがここまでにしておく。上手く予定が合えば次はネムとのコラボになるかも知れない」

：了解しました！

：はい

：長時間配信に慣れてると物足りないな……

：コラボ楽しみ！

配信終了から30分程過ぎた時、ナタリアから電話が来た。

「ナタリアか」

「おはようー……こんにちは、かな？」

電話に出ると、少し遅い話し方で話す彼女。

「どちらでもいいな」

「そうだねえ。それで……出来ればコラボのお話をしたいんだけど、クレリアは今時間ある？」

「大丈夫だ」

「良かったあ。じゃあ、いつやろうかー？」

「私は特に予定を決めていないからいつでも構わない。ナタリアの

好きな時間にしてくれ」

「いいの？ありがとー。じゃあ……三日後の夜の……19時頃がいかなあ」

「分かった」

「じゃあ決まりー。あ、それと……コラボする時に乗員を私達の姿に変えておこうと思うんだけど、どうかなー？」

「構わない」

「じゃあ今の内に変えとこー。私は結構やってるから出来るけど、クレリアは変更のやり方わかる？」

「調べればすぐに分かるだろう」

私がそう言うと、配信後にそのまま残っていた侍女隊の一人が動くとした。

「このまま私が教えるよー」

が、私はその言葉を聞いて侍女を止める。

「そうか、では頼む」

そう言つて侍女に目を向けると、彼女は微笑みを浮かべ頷く。

「任せてー。じゃあまず画像を用意しよう。ブイライブから使つていい画像は貰つてるよね？」

「貰っている」

「じゃあまず……」

こうして、私はナタリアにやり方を教わりながらコラボ配信の準備を進めて行つた。

準備を終えた後、私はコラボ配信が行われる日までの時間を娘や友人達との時間に当てた。

そして三日後の夜。

これから私達はコラボ配信を行う。

「お嬢様ー、準備は良いー？」

クロスコードから、いつもののんびりとした声が聞こえて来る。

「大丈夫だ」

「じゃあ始めるよー」

その言葉の後にナタリアが映像を配信に乗せる。

「こんばんはー。猫目ネムだよー」

：ネムちゃんこんばんはー

：猫とお嬢のコラボやー！

：待ってたぞ

「今日はお嬢様とのガルトンオンラインマルチプレイするよ。じゃあ、お嬢様どうぞー」

ネムに促され、私も挨拶を始める。

「こんばんは人類達、お嬢様だ。今日はネムのチャンネルでコラボを行う、コメントは自由にしてくれ」

：オンラインは地獄だぞ

：上手い人が沢山いるからお嬢でもきつそう

：お嬢様の性能が生かせないゲームなんだよなー

：どんなにお嬢の反応が早くても戦車の移動と砲塔の旋回速度が遅いから……

コメントにある通り、このゲームは他のFPSゲームなどと比べるとシステムの枷が大きいと思う。

このゲームに登場する戦車の移動速度や砲塔の旋回速度は、実際の速度を出来るだけ再現しているという話だが……それが私には大きな枷となる。

このゲームの戦車は私がどれだけ速く反応しようと、移動速度や砲塔の旋回速度が変わらない。

この設定がある為、私は人類とほぼ同じ条件で戦う事になる。

そして……私は戦略、戦術を考える事が苦手だ。

恐らく、このゲームでは本気で戦っても負ける可能性が高いと思

う。

最初に操作した時点で分かっていた事だが、これはこれで悪くない。

「じゃあ私とお嬢様でチーム組むよー」

「分かった」

ネムからの誘いを受け、私がネムのチームに組み込まれる。

：おお！二人共乗員画像が変わってる！

：画像変更したのか

：良いね

「これで私とお嬢様は必ず味方としてマッチングされるからね」

「敵にならない為に組んだ訳か」

「そういう事ー。後、私が使う戦車はお嬢様のティアに合わせてるからね」

これは事前に聞いているな。

このゲームにはティアという戦力のランク分けのような物がある。

これが高ければ高いほど強力な戦車となり、戦闘も激しくなっていくのだが……チームを組みマッチングする際、自動的にチーム内で一番高いティアに合わせてマッチングしてしまうらしい。

そうするとティアが低い者が全く戦力にならず、問題が起きる訳だ。

現在は「野良でチームを組んだ場合、そのチーム内で最もティアが低い者に周囲が合わせる」というルールがユーザー間で生まれているとネムから聞いた。

始めから設定で希望のティア限定にしておけば問題は無いらしいが。

：お嬢に合わせるといふ事は今日の配信はティア1の戦場だなw

：今日マルチデビューだから仕方ないねw

「今日の為にティア1の戦車買ったんだー」

「わざわざ買ったのか？」

「うん。下のティアの戦車で上のティア行ったらお嬢様でも勝てないからねえ」

：それはそうw

：ティア差があり過ぎたら勝負にならない

：どこに撃っても効かないし、撃たれたら即死だから……

相手が自滅でもしない限り勝つ事は不可能、という事か。

「最初は何も出来ないから、まずは試合をしてお金を稼ごー」
彼女がそう声をかけてくる。

確かに私のガレージで出来る事は無いようだ。

ストーリーの初期と同じだな。

「分かった」

私は返事をして、対戦を開始した。

開始前のロード画面には、味方と敵の表が表示されている。

このゲームのオンライン対戦人数は最大で20対20の40人だが、人数が少ない場合は最小で8対8にまで減るようだ。

「低ティアは初心者ばかりだけど、私みたいにフレンドに合わせてそれなりに慣れてる人が来る時もあるから気を付けてね」

「分かった」

そんな会話をしているとロードが終了し、開始カウントダウンが始まる。

私達は平原のようなマップの左下に並んで配置された。

東には丘があり、所々隠れられそうな岩や廃墟が点在している。

：初期からあるマップの一つだね

：丘の上を取ると有利だけど、ほぼ間違い無く誰か行くから自走砲によく狙われる場所でもある

：丘の取り合いが激しくなる事が多いけど、そこにこだわりすぎて集まると回り込まれて酷い目にあう

コメントを見ている内にカウントダウンが終わり「戦闘開始!」という少女の声が響いた。

「まずは好きにやってみてー。ついて行くよー」

「ではマップ西の廃墟まで移動してみよう」

のんびりとしたネムの言葉に私はそう返した。

「おっけー」

周囲を見ながらゆっくりと進む私達の横を、軽戦車が走り抜けて行った。

戦車の移動速度が遅いのでそこそこ移動時間がかかったが、私達は特に何事もなく廃墟に到達した。

マップの東側に向かった味方は既に戦闘を開始しているが、西側に敵の姿は無い。

：誰もいねえw

：これは全員東行ったか？

：ここまで来ていないなら西の皆で急いで裏取りした方が良さかもな、急がないと東が溶ける

「みんな東に行っちゃったのかもねー」

「このまま裏に回ってみるか」

「味方がついて来てくれるか分からないけど、どっちにしても行かないと負ける気がするー」

私達が西にいるぶん、戦力差が出ているはずだからな。

プレイヤーの実力にもよるが、味方側が不利である可能性は高い。

「裏を取るために前進する事を伝えて行ってみよう」

「そうしよっかー」

ネムはそう言うのとチャットで裏へ回ると事と、出来ればついて来て欲しい事を伝えた。

それから私達は廃墟から離れ、マップの北から相手の裏を取るよう移動する。

：テイアーから3くらいまでは初心者とあんまり変わらないからどちらかが一方的に負ける展開も多いね

：野良で初心者ならこんなもんだと思うよ

：まだ耐えてるけど東はきついかなー

ある程度私達が進むと、他の味方が移動を始めた。

「味方も動き始めたな」

「多分、私達が前に出ても攻撃されなかったからだね。このゲーム

は攻め側が結構不利だから気持ちは分かるけど、お互いに攻めないといつまでも試合が終わらないからねえ……」

「戦略や戦術、判断の難しさはある程度理解している」

私も僅かではあるが、過去に他者を率いて戦った事があるからな。

「私は苦手だなあ……」

隠さずに伝えておくべきだろうな。

「私も頭脳戦は苦手だ」

「え？そうなの？」

頭脳戦が苦手である事を伝えようと、ネムが驚いたような声を上げた。

…え？

…頭いい印象だけど、苦手なの？

…お嬢様は脳筋だったw

「私は大抵の事は自身の力で強引に解決出来るからな、戦略や戦術を必要とする機会はほぼ無い」

魔法人類と共に過ごしていた時は多少そうだった事もした。

しかし今、力で簡単に解決出来る問題にわざわざ戦略や戦術を使う事は無いと思う。

勿論、そうしたい時はそうするが、私の気分次第だ。

…なるほどw

…圧倒的な力の前には小細工など……w

…草

…超越者は策など必要としない！

「と言う訳で、作戦の立案などは私よりも能力のある者に任せた方が良いと思う」

「そうかなあ……私から見るとお嬢様も頭良いと思うんだけどー」

ネムは納得していないようだが、私は知覚出来る情報が人類より遥

かに多く、その範囲も広い。

その情報で上手く動けるだけだ。

「力は私に遠く及ばなかったが、そういった部分で私を超えていた者達は確かに存在していた。現代にもきつと居るだろう」

：色々と規格外だけど頭脳は人類並みなのかw

：適当にぶっ飛ばすだけで障害が全部消えるなら頭は使わんな

……

：半端な力は知恵に負けるが、突き抜ければ関係無いんだよ！

：力こそが全てだ！

コメントを見ながら移動していると、東側の味方が残り僅かになっている。

「あー、東が駄目かもー」

ネムも気が付いたのか、残念そうな声を上げた。

「間に合わなかったな」

「東の味方は突っ込みすぎたかもねー」

「そうか」

東側が足止めに力を入れていれば上手く行った……のかも知れない。

私も含めてほぼ全員が初心者のはずだ、そう上手く動く事は出来ないか。

その後、私達は東を殲滅した相手に立ち向かったが、数で囲まれ敗北した。

「負けちゃったねー」

「このゲームは問題無く負ける事が出来るな」

…ドンマイ！

：初心者の試合によくある現象だね

：「問題無く負ける事が出来る」ってw

：負けても全く平気そうw

：お嬢はあんまり手を抜かないけど、絶対勝てるゲームも好きじゃないからなw

「お嬢様は負けても悔しくないのー?」

ネムはそう問いかけて来る。

「そういつた感情は特に無いな」

「凄いなあ、私は少しモヤモヤするけど……」

ネムは私が我慢強く温厚、といった印象を受けているのかも知れないが……言葉通り「無い」と思う。

：対戦系のゲームの勝敗で怒ると疲れるだけよ?

：出来るだけ相手をたたえようとは思うけど、やっぱり負けるとちよつとイラつとするよね?

：負けるより勝つ方が良いのは普通だよなあ?

「もう何試合かやろうよー」

「いいぞ」

「次のマップは私が行くところ決めていい?」

「任せた」

「任せろー」

話している間に試合開始前のロードに入る。

次の試合は砂漠のようだ。

中央に大きな砂漠が広がり、北に町、南に岩場がある。

「マップを覚えなければまともに戦えないかも知れないな」

「そうだね、出来るだけ覚えた方が有利だよ」

：砂漠マップは丘陵を越えないようにするといいね

：丘陵の頂上付近を取って戦うと戦いやすい

：北と南も要注意

開始カウントダウンが始まった。

「みんなも言ってる通り、砂漠は丘陵を境に対する事が多いね。後は北の町と南の岩場も戦場になりやすいかなあ」

「なるほど」

「それで今回私達の動きだけど、最初は様子見をして手薄な所に行こうと思うんだ」

「戦力の偏りを出来るだけ無くすためか？」

「そういう事ー」

：まあいいんじゃないかな

：他に同じ事考えてる奴がいると味方の大半がしばらく動かなかつたりするけどなw

：まあ野良はしやあないw

《戦闘開始！》

カウントダウンが終わり試合が開始された。

私達は動かずに味方の動きを待つ。

……中央の砂漠と岩場に味方が多く移動しているな。

「お嬢様ー、北の町に行こー」

「分かった、移動しよう」

：今回は北の町か

：数が少なくてもやりようはあるけど出来る事ならバランスよく分散したいよな

北の町に向かって私達は移動を開始した。

町に来たのは私達を入れて6台、上手く分散したと思う。
中央砂漠では既に戦闘が始まっているが、まだ被害は出ていないよ
うだ。

建物に隠れながらゆっくりと進んでいると、複数の敵の姿が見え
た。

誰かが見つけて戦闘を開始したらしい。

：見えた！

：味方が見つけたんだな

「お嬢様、今見えてる敵狙える？」
近くに居るネムがそう聞いて来る。

隠れてはいるが車体の後ろが見え、射線も通っているので可能だろ
う。

「狙える」

「よし、向こうに気を取られてる間に攻撃しちゃおう」

「分かった。すぐに撃つていいのか？」

「ちよつと待ってねー。私の位置を少し変えるから」

そう言つてネムは少し位置を変えた。

「いいよー」

「では射撃するぞ」

：これは行ける

：撃てー！

私は狙いを定めて、射撃を開始する。

それに合わせてネムも射撃を始めた。

射撃を受けた相手は隠れようとするが、あの位置ではどう移動して

も私達が別の位置に待機している味方に狙われるだろう。

私が狙った敵は集中攻撃を受けてすぐに爆散したが、他の敵はこちらに気が付いていないようだ。

「撃ち放題だー！うりやうりやー！」

：ネムちゃんがはっちゃけてるw

：相手が付いて無いなこれw

：騒ぐネムちゃんと全く話さずに黙々と撃ち続けるお嬢の温度差が酷いw

ネムと私は動く事無く撃ち続けているが、こちらに気が付いている気配は無い。

最後の1台は今も私達の射線上である事に気が付かず、隠れている。

「イエーイー！」

ネムが最後の一台にとどめを刺し叫ぶが、やはり話し方が遅く勢いが無い。

町での戦闘は敵の気を引く事になり集中攻撃を受けた味方が1台犠牲になり、こちらは敵4台を破壊出来た。

：☒やったぜw☒

：お見事！

：これは勝てそう

マップを見る限り岩場はまだ持ち堪えているし、砂漠は優勢のようだ。

「砂漠の敵を横から狙うか？」

「そうしよっか」

そう私が問うと、ネムが同意する。

私達は砂漠の敵の横を突くために、残った味方と共に移動を開始した。

「あまり近寄らないで味方が発見した敵を横から撃って行こー」
「分かった」

私達は戦場にあまり近寄らず停止する。

残りの味方は先へと突き進んでいるが、見つけてくれれば援護は可能だ。

「おー。早速発見」

マップ上に敵が表示されるが、あまり長く持たずに消えてしまう。

「むう………すぐ消えちゃうな」

ふむ……。

敵は見えなくなるだけ。

つまり、見えなくなっただけからも見えていた時の行動を継続している可能性が高い。

私は短時間だけ見えた敵の移動先を予想し、射撃した。

射撃した弾は一見何も見えない所へ飛び命中、敵を撃破する。

「おお!?お嬢様凄い!」

私が撃破したのを見て、ネムが驚きの声を上げる。

…当てた!?

…☒やるじゃないかお嬢!☒

…上のティアだと結構みんな普通にやるけど初心者が2試合目でやるのは見た事無い

…一応ストーリーはやってるからな、お嬢ならちよつと練習すればこんな余裕だろ

そんなコメントが流れている間に、敵の姿が消えなくなる。

「あ、誰かが視界確保してくれたみたい。撃ち込めー!」

「分かった」

：いくぞー！

：わーいw

：みんなノリ良いなw

：撃ち放題だ！

「勝ったー！」

ネムの喜びの音が響く。

その後、側面から攻撃を受けた砂漠の相手チームは程なく全滅し、その勢いのまま味方が南の岩場に突撃。

岩場にいる相手のチームは北と中央に向かった仲間が既に倒されている事に気が付いていなかったようで、突然の増援と背後からの奇襲に驚き右往左往しているうちに全て撃破された。

：おめでとー！

：☒ないす！☒

：これで一つくらいは装備変更出来るかな？

ガレージに戻った私はコメントを見て装備購入画面に移る。

「いくつか購入出来るようになってるな」

「お勧めは砲かなあ。攻撃通らないとどうにもならないからね」

「なるほど」

私はアドバイスに従って、砲を一段階上の物へと変更した。

：無難な選択だね

：立ち回りで他はどうか出来るけど攻撃通らないのはどうにもならんしな……

：同格付近なら何処かに弱点はあるけど、調べないと初心者には厳しい

砲を変更後、再び試合を開始したが1試合の時間が長くなり、5戦した時点で今回の配信は終了。
戦績は2勝3敗となった。

「配信お疲れ様ー」

配信終了後、ネムが声をかけて来る。

「ありがとう。ネムもよくやってくれた」

「いきなりでごめんね?」

ネムが申し訳なきように言う。

「問題無い」

コラボの誘いは、余程の理由が無い限り断る気は無いからな。

「良かったー」

「駄目な時は断るだけだ。これからも好きな時に声をかけてくれ」

「ありがとうっ!」

嬉しそうな声で礼を言う彼女。

心なしか話す速度も速いような気がする。

「テラノちゃんとは私はコラボしたから、後はフジミちゃんだね」

「同期全員で行うオフコラボ前に、フジミとも一度一緒に配信しておくか」

「それが良いと思うよー、自分だけ一度もコラボしてないって気にしちゃうかもしれないし」

「そうか」

すぐに声をかけるか。

「そう言えば、お嬢の配信って海外の視聴者も多いよね。元からそうだった?」

そう思っていると、突然ネムが話題を変えた。

「色々バレたからな」

「やっぱりそれだよねー。やっぱりバレてから急に増えたの?」

私の答えを聞いて、ネムが軽く笑いながら言う。

「そうだ。以前は日本人が大半だったが、例の騒動の後に急増した」
「私達の配信にも結構増えたんだよね。それに合わせて登録数も増えたけど」

私の影響で彼女達のチャンネルにも海外の者達が増えたが、この先どうなるかは分からない。

「維持出来るかはお前達次第だな」

言語が違ってても、彼女達に魅力を感じれば残ってくれるはずだ。

「頑張るー」

騒ぎが起きる前から評判は悪くなかったようだし、海外の者達があまり残らなくても活動出来なくなる事は無いだろう。

「そうだ、話変わるけどー」

彼女はそう言って、再び口を開く。

「3Dモデルっていつ頃出来るか聞いてたりする？」

気になっているのか。

「いや、まだ聞いていないな」

「まだかかりそうかなー」

「聞けば答えてくれるかもしれないが、今聞いても意味は無いかも知れない。最終的な決定で無い限り、恐らく簡単に前後するはずだ」

「そっかー」

ネムは3Dモデルにかなり期待しているようだな。

「気になるか？」

私はそう聞いてみた。

「当たり前だよー！ホント楽しみにしてるんだー」

ネムは浮かれたように言い、更に言葉を続けた。

「お嬢様の家だよ!?めっちゃ楽しみー！」

「……ん？」

「楽しみなのは3Dモデルでは無く、私の家なのか？」

「勿論、3Dモデルも楽しみだよ？でもお嬢様の家が気になるー！」

「そうか」

彼女の言い方だと3Dモデルより私の家の方が楽しみになように聞こえるが、特に問題は無いか。

「正式に日付が決まったら前日から泊まりに来るか？」

「いいの!？」

「構わない。私の家にやって来ていきなり配信するよりも、落ち着いてから配信した方が良さだろう。勿論、皆の予定が空いていればの話だが」

「空ける空ける！絶対行くー！」

興奮したように騒ぐネム。

「他の二人にも伝えておこう」

私は彼女と話しながらベティと沙織にメールを送る。

この後、しばらくネムと会話を続けている間に二人から「行きたい」と返事があった。